平成17年度放送大学学部開設予定授業科目講義内容

平成16年11月発行

第　22　版

放送大学学園

教務部教務課

目　　次

番号	１．共通科目（一般科目）	頁	開設年次	メディア	単位
	（人文系）				
1	次世代育成を考える（’０３）	1	15	R	2
2	持続可能な消費と生活者（’０３）	4	15	R	2
3	心の科学（’０４）	7	16	TV	2
4	心理学初歩（’０２）	10	14	TV	2
5	人間科学の可能性（’０３）－情報・環境・時間からウオッチングする－	12	15	TV	2
6	発達と教育の心理学的基盤（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	15	17	R	2
7	教育の方法（’０４）	18	16	TV	2
8	哲学入門（’０４）	20	16	R	2
9	倫理思想の源流（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	22	17	R	2
10	近代哲学の射程（’０３）	25	15	R	2
11	生命と人生の倫理（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	27	17	TV	2
12	現代思想の地平（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	30	17	R	2
13	国語学概論（’０２）	33	14	R	2
14	国文学入門（’０４）	36	16	R	2
15	近代詩歌の歴史（’０４）	38	16	R	2
16	近代日本における外国文学の受容（’０３）	40	15	R	2
17	東アジアのなかの日本文化（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	43	17	R	2
18	人文地理学（’０４）	46	16	TV	2
	（社会系）				
19	法の世界（’０４）	49	16	R	2
20	日本国憲法（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	52	17	TV	2
21	政治学入門（’０３）	54	15	TV	2
22	経済学入門（’０４）	56	16	R	2
23	21世紀の社会学（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	58	17	TV	2
24	社会福祉入門（’０４）	61	16	TV	2
25	社会調査（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	64	17	TV	2
26	国際経営論（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	67	17	TV	2
27	問題解決の発送と表現（’０４）	70	16	TV	2
28	比較技術の文明論（’０２）	73	14	R	2
29	技術者倫理（’０４）	75	16	TV	2
30	現代社会と著作権（’０２）	79	14	TV	2
31	アーツ・マネジメント（’０２）	81	14	TV	2
32	統計学入門（’０４）	83	16	R	2
	（自然系）				
33	数学の歴史（’０３）	85	15	R	2
34	初等微分積分学（’０２）	87	14	TV	2
35	線型代数入門（’０３）	89	15	TV	2
36	確率・統計の基礎（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	91	17	R	2
37	物理の世界（’０３）	93	15	TV	2
38	科学・技術と社会（’０３）	96	15	R	2
39	物質の世界―化学入門（’０２）	99	14	TV	2

			開設年次	メディア	単位
	（自然系）				
40	基礎生物学（’０３）	101	15	TV	2
41	生物学の歴史（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	103	17	R	2
42	集団と環境の生物学（’０３）	106	15	TV	2
43	疾病の成立と回復促進（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	109	17	TV	2
44	人体の構造と機能（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	112	17	TV	2
45	変化する地球環境（’０４）	115	16	TV	2
46	宇宙とその歴史（’０４）	118	16	TV	2
47	宇宙像の変遷と科学（’０４）	120	16	TV	2
48	実験科学の方法（’０２）	122	14	TV	2
49	物質の科学と先端技術（’０４）	125	16	TV	2

２．共通科目（外国語科目）

	（英語）				
50	英語基礎Ａ（’０５）－Welcome to Japan－ （平成１７年度改訂開設科目）	128	17	R	2
51	英語Ⅱ（’０３）－The Book of Tea－	131	15	R	2
52	英語Ⅲ（’０２）	133	14	TV	2
53	英語Ⅳ（’０３）－Cultural Crossroads－	135	15	TV	2
54	英語総合Ａ（’０５）－歴史・文化・社会－ （平成１７年度改訂開設科目）	137	17	R	2
55	英語Ⅵ（’０３）	140	15	R	2
	（ドイツ語）				
56	ドイツ語Ⅰ（’０２）	142	14	TV	2
57	ドイツ語Ⅱ（’０２）	145	14	R	2
58	ドイツ語Ⅲ（’０２）	147	14	R	2
	（フランス語）				
59	フランス語Ⅰ（’０２）	149	14	TV	2
60	フランス語Ⅱ（’０２）	151	14	R	2
61	フランス語Ⅲ（’０２）	153	14	R	2
	（中国語）				
62	中国語入門Ⅰ（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	155	17	TV	2
63	中国語入門Ⅱ（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	158	17	R	2
64	中国語Ⅲ（’０４）	161	16	R	2
	（ロシア語）				
65	ロシア語入門Ⅰ（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	163	17	R	2
66	ロシア語入門Ⅱ（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	166	17	R	2

			開設年次	メディア	単位
	（スペイン語）				
67	スペイン語Ⅰ（’０３）	168	15	R	2
68	スペイン語Ⅱ（’０３）	171	15	R	2
	（韓国語）				
69	韓国語Ⅰ（’０２）	174	14	TV	2
70	韓国語Ⅱ（’０２）	176	14	R	2
	（日本語）				
71	日本語Ⅰ（’０２）－外国語としての－	178	14	TV	2
72	日本語Ⅱ（’０３）－外国語としての－	180	15	R	2

３．共通科目（保健体育）

73	保健体育（’０５）－健康志向と競技志向の運動－ ……（平成１７年度改訂開設科目）	183	17	TV	2

４．共通科目（基幹・主題科目）

	（基幹科目）				
74	日本法文化の形成（’０３）	186	15	TV	2
75	世界の産業再編成（’０４）	188	16	TV	2
76	計算科学（’０３）	191	15	TV	2
77	使える数理リテラシー（’０３）	194	15	R	2
	（主題科目）				
78	ゲノム生物学（’０３）－生命科学革命と２１世紀の社会－	197	15	TV	2
79	都市と人間（’０３）	199	15	TV	2
80	中小企業の挑戦（’０３）－グローバル化・ハイテク化・高齢化時代のもの造り－	201	15	TV	2
81	表象としての日本（’０４）－西洋人の見た日本文化－	204	16	TV	2
82	若者の科学離れを考える（’０４）	207	16	TV	2

５．専門科目

	生活と福祉		開設年次	メディア	単位
	（生活一般）				
83	生活の動態と経営（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目） 209	17	R	2
84	生活の経済（’０４）	212	16	R	2
85	現代社会におけるライフコース（’０３）	214	15	R	2
86	家族のストレスとサポート（’０４）	217	16	R	2
87	変動する社会と暮らし（’０２）	219	14	R	2
	（衣・食・住）				
88	衣生活の科学（’０２）	222	14	R	2
89	アジアの風土と服飾文化（’０４）	224	16	TV	2
90	服飾と心理（’０５）	227	17	TV	2
91	世界の食糧問題とフードシステム（’０３）	230	15	R	2
92	日本の食文化（’０４）	232	16	TV	2
93	食品の成分と機能（’０３）	235	15	TV	2
94	食品の安全性を考える（’０４）	238	16	R	2
95	住計画論（’０２）	241	14	TV	2
96	住まいの構造・構法（’０４）	243	16	TV	2
97	東アジア・東南アジアの住文化（’０３）	245	15	TV	2
	（健康科学）				
98	公衆衛生（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目） 247	17	R	2
99	国際共生と健康（’０４）	250	16	R	2
100	現代科学と医療（’０４）－疫病と検査－	253	16	R	2
101	患者からみた医療（’０３）	256	15	R	2
102	脳の健康科学（’０２）	258	14	TV	2
103	感染症と生体防御（’０４）	260	16	TV	2
104	リハビリテーション（’０３）	263	15	R	2
105	看護学概説（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目） 266	17	R	2
106	基礎看護学（’０４）	269	16	TV	2
107	在宅看護論（’０４）	272	16	TV	2
	（社会福祉）				
108	児童家庭福祉（’０３）	275	15	R	2
109	障害者福祉論（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目） 278	17	R	2
110	高齢者福祉論（’０３）	281	15	TV	2
111	身体福祉論（’０３）－自活できる能力の保持－	284	15	TV	2
112	地域福祉論（’０３）	287	15	R	2
113	公的扶助（’０２）－生存権のセーフティネット－	290	14	R	2
114	社会保険と市民生活（’０４）	292	16	R	2
115	社会福祉の国際比較（’０２）－利用者主体のシステムをめざして－	295	14	TV	2

	発達と教育		開設年次	メディア	単位
	（心理学）				
116	心理学研究法（’０３）	298	15	TV	2
117	心理学史（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	300	17	TV	2
118	学習科学（’０４）	304	16	TV	2
119	生涯発達心理学（’０２）	306	14	TV	2
120	現代の社会心理学（’０４）	308	16	R	2
121	乳幼児心理学（’０２）	310	14	TV	2
122	老年期の心理と病理（’０２）	313	14	R	2
123	応用心理学（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	315	17	TV	2
124	感情と認知（’０３）	318	15	R	2
125	人格心理学（’０４）	320	16	TV	2
	（教育学）				
126	教育の哲学（’０３）	323	15	R	2
127	近代の教育思想（’０３）	325	15	R	2
128	教育の社会文化史（’０４）	328	16	TV	2
129	教育社会学（’０３）	331	15	TV	2
130	岐路に立つ大学（’０４）	333	16	TV	2
131	道徳教育論（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	335	17	TV	2
132	家庭・学校と地域社会（’０４）	338	16	TV	2
133	国際化と教育（’０３）－異文化間教育学の視点から－	341	15	R	2
134	比較教育制度論（’０３）	344	15	R	2
135	学習科学とテクノロジ（’０３）	346	15	TV	2
136	生涯学習と自己実現（’０２）	349	14	R	2
137	障害児教育論（’０２）	351	14	R	2
138	障害児教育指導法（’０２）	353	14	TV	2
139	幼児の教育と保育（’０４）	356	16	R	2
140	生徒指導（’０３）	358	15	TV	2
141	教育評価（’０３）	361	15	R	2
	（臨床心理学）				
142	臨床心理学概説（’０３）	363	15	R	2
143	心理臨床の世界（’０３）	365	15	TV	2
144	児童の臨床心理（’０３）	367	15	R	2
145	心の健康と病理（’０４）	369	16	R	2
146	カウンセリング概説（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	371	17	R	2
147	スクールカウンセリング（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	374	17	TV	2
148	ユング心理学（’０３）－夢・神話・昔話・イメージと心理療法－	377	15	R	2
149	発達障害児の心と行動（’０２）	379	14	TV	2

	社会と経済		開設年次	メディア	単位
	（法律学）				
150	裁判の法と手続（’０４）	381	16	TV	2
151	紛争と民法（’０２）	383	14	TV	2
152	雇用・福祉・家族と法（’０３）	385	15	TV	2
153	商法（’０３）	387	15	R	2
154	市民生活と行政法（’０２）	389	14	R	2
155	刑法（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	391	17	R	2
156	経済法（’０４）	395	16	TV	2
157	国際関係法（’０２）	397	14	R	2
	（政治学）				
158	ヨーロッパ政治史（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	399	17	R	2
159	比較政治学（’０４）	401	16	R	2
160	第三世界の政治（’０５）－パレスチナ問題の展開－ （平成１７年度改訂開設科目）	404	17	R	2
161	国際政治（’０４）－９月１１日後の世界－	407	16	TV	2
162	日本政治思想史（’０５）－「自由」の観念を中心に－ （平成１７年度改訂開設科目）	409	17	R	2
163	西洋政治思想史（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	412	17	R	2
164	現代日本の政治（’０３）	414	15	TV	2
165	現代行政分析（’０４）	416	16	R	2
166	日本政治史－２０世紀の日本政治（’０３）	418	15	TV	2
167	現代東アジアの政治（’０４）	420	16	R	2
	（経済学）				
168	現代経済学（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	422	17	TV	2
169	産業社会と消費社会の現代（’０３）－貨幣経済と不確実な社会変動－	424	15	TV	2
170	金融論（’０４）	426	16	TV	2
171	国際経済学（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	428	17	R	2
172	日本経済史（’０３）	431	15	R	2
173	欧米経済史（’０４）	434	16	R	2
174	財政学（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	437	17	TV	2
	（社会学）				
175	コミュニティ論（’０２）	440	14	TV	2
176	ジェンダーの社会学（’０３）	443	15	R	2
177	自我の社会学（’０５） （平成１７年度改訂開設科目）	445	17	R	2
178	環境社会学（’０３）	448	15	TV	2
179	都市社会の人間関係（’０４）	451	16	R	2
180	フィールド社会心理学（’０４）	453	16	R	2
181	紛争の社会学（’０４）	456	16	R	2

			開設年次	メディア	単位
	（産業と技術）				
182	経営学（’０３）	458	15	TV	2
183	経営工学総論（’０４）	460	16	R	2
184	技術の分析と創造（’０２）	462	14	TV	2
185	イノベーション経営（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	464	17	TV	2
186	産業と労使（’０３）	467	15	TV	2
187	マーケティング論（’０４）	470	16	R	2
188	会計学（’０４）	472	16	TV	2
189	管理会計（’０３）	474	15	R	2
190	簿記入門（’０２）	476	14	R	2
191	企業ファイナンス入門（’０４）	478	16	R	2
	（産業論）				
192	日本の製造業の新展開（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	480	17	R	2
193	情報産業論（’０４）	483	16	R	2
194	ネットワーク産業論（’０４）	485	16	R	2
195	ベンチャー企業論（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	488	17	R	2
196	人間と自然（’０３）－食・農・環境の展望－	490	15	TV	2
197	アグリビジネス（’０２）	492	14	R	2
198	持続的発展と国際協力（’０３）	494	15	R	2
199	都市システム工学（’０３）	497	15	TV	2
200	建築意匠論（’０４）	499	16	TV	2
201	マスメディア論（’０３）	501	15	R	2
	（工学・技術）				
202	エネルギー工学と社会（’０３）	503	15	TV	2
203	物質・材料工学と社会（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	506	17	TV	2
204	バイオテクノロジーと社会（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	509	17	TV	2
205	情報技術と社会（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	512	17	TV	2
206	光電子技術とIT社会（’０４）	516	16	TV	2
207	計算力学（’０４）	519	16	TV	2
208	人工物と設計（’０４）	522	16	TV	2
209	人間活動の環境影響（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	524	17	TV	2

	人間の探究			開設年次	メディア	単位
	（哲学）					
210	ギリシャ哲学（’０３）		527	15	R	2
211	ドイツ観念論への招待（’０３）		529	15	R	2
212	ヘーゲルを読む（’０３）		531	15	TV	2
213	現象学の基礎（’０４）		533	16	R	2
214	自己を見つめる（’０２）		536	14	R	2
215	科学の哲学（’０４）		538	16	R	2
216	朱子学と陽明学（’０４）		540	16	R	2
217	仏教の思想（’０５）		542	17	R	2
218	自然と文化の記号論（’０２）		545	14	TV	2
	（文学）					
219	日本語の歴史（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	547	17	R	2
220	書誌学（’０３）		550	15	TV	2
221	日本の散文－古典編（’０３）		552	15	R	2
222	日本の古典－古代編（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	554	17	R	2
223	上代の日本文学（’０４）		557	16	R	2
224	近世の日本文学（’０３）		559	15	R	2
225	近代の日本文学（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	561	17	R	2
226	日本文学における住まい（’０４）		563	16	R	2
	（史学）					
227	考古学と歴史（’０４）		565	16	TV	2
228	日本の古代（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	567	17	TV	2
229	中世日本の歴史（’０３）		570	15	TV	2
230	近世日本の歴史（’０３）		572	15	R	2
231	近代日本と国際社会（’０４）		574	16	R	2
232	韓国朝鮮の歴史と社会（’０４）		576	16	TV	2
233	東アジアの中の中国史（’０３）		579	15	R	2
234	中央アジアの歴史・社会・文化（’０４）		581	16	R	2
235	東南アジアの歴史（’０２）		584	14	R	2
236	古代地中海世界の歴史（’０４）		586	16	TV	2
237	ヨーロッパの歴史（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	589	17	TV	2
238	近代ヨーロッパ史（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	591	17	TV	2
239	アメリカの歴史（’０４）		594	16	TV	2

			開設年次	メディア	単位
	（美学・芸術論）				
240	芸術の理論と歴史（’０２）	596	14	TV	2
241	芸術・文化・社会（’０３）	598	15	TV	2
242	中世日本の物語と絵画（’０４）	600	16	TV	2
243	西洋音楽の諸問題（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	603	17	TV	2
244	応用音楽学と民族音楽学（’０４）	605	16	R	2
245	現代における伝統演劇（’０２）	608	14	TV	2
	（比較文化・地域研究）				
246	文化人類学（’０４）	611	16	TV	2
247	博物館概論（’０３）	614	15	TV	2
248	博物館資料論（’０４）	616	16	TV	2
249	博物館経営・情報論（’０４）	618	16	R	2
	（外国の言語・文化・社会）				
250	イギリス文学（’０３）	621	15	R	2
251	ドイツ文学（’０３）	624	15	R	2
252	フランス文学（’０３）	626	15	R	2
253	20世紀の中国文学（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	629	17	R	2
254	ドイツの言語文化（’０２）－読んで、聴いて、感じて、考えるー	632	14	R	2
255	フランスの言語文化（’０２）－フランス語の文化誌－	634	14	R	2
256	中国の言語文化（’０２）－魯迅と荘子－	636	14	R	2

	自然の理解		開設年次	メディア	単位
	（数学）				
257	多変数の微積分（’０３）	638	15	TV	2
258	複素数と関数（’０４）	640	16	R	2
259	線型代数学（’０４）	642	16	TV	2
260	数学基礎論（’０３）	645	15	R	2
261	幾何入門（’０４）	647	16	R	2
262	現象の数理（’０３）	649	15	R	2
263	数理モデルとカオス（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	651	17	TV	2
264	数学とコンピュータ（’０３）	654	15	TV	2
265	統計学とその応用（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	656	17	R	2
	（物質科学）				
266	運動と力（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	659	17	TV	2
267	光と電磁場（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	661	17	TV	2
268	エネルギーと熱（’０３）	664	15	TV	2
269	相対論（’０４）	666	16	R	2
270	量子力学（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	669	17	TV	2
271	物性物理学入門（’０４）	672	16	TV	2
272	物質の科学・量子化学（’０３）	674	15	TV	2
273	物質の科学・反応と物性（’０４）	676	16	TV	2
274	物質の科学・有機高分子（’０２）	679	14	TV	2
275	物質の科学・有機構造解析（’０３）－有機化合物の構造とその解析法－	682	15	TV	2
276	生命と金属の世界（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	684	17	R	2
	（生物科学）				
277	植物の生理（’０４）	688	16	TV	2
278	分子生物学（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	690	17	TV	2
279	多様性の生物学（’０３）	693	15	TV	2
280	動物の行動と生態（’０４）	695	16	TV	2
281	細胞生物学（’０３）	698	15	TV	2
	（宇宙地球科学）				
282	進化する宇宙（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	701	17	TV	2
283	宇宙からの情報（’０５）（平成１７年度改訂開設科目）	704	17	TV	2
284	天体物理学入門（’０３）	707	15	R	2
285	日本列島の地球科学（’０３）	709	15	TV	2
286	流体的地球像（’０３）	711	15	TV	2

６．夏季集中科目

司書教諭資格取得に資する科目

				開設年次	メディア	単位
287	学校経営と学校図書館（’０４）		713	16	R	2
288	学校図書館メディアの構成（’０５）		716	17	R	2
289	学習指導と学校図書館（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	719	17	TV	2
290	読書と豊かな人間性（’０４）	（平成１７年度改訂開設科目）	721	16	TV	2
291	情報メディアの活用（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	724	17	TV	2

看護師資格取得に資する科目

				開設年次	メディア	単位
292	成人看護学（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	727	17	R	2
293	老年看護学（’０４）		730	16	R	2
294	小児看護学（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	733	17	TV	2
295	母性看護学（’０５）	（平成１７年度改訂開設科目）	736	17	TV	2
296	精神看護学（’０４）		739	16	R	2

＝次世代育成を考える（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

従来、「次世代育成」というと「後継者養成」とか「青少年の育成」が思いうかべられる場合が多かった。ところで、この授業では「次世代育成」という言葉を幅広く考え、年長者から年少者へ、同世代者から同世代者へ、年少者から年長者へ、上司から部下へ、同僚から同僚へ、部下から上司へ、といった幅広い育成過程について考える。さらに、人間と人間の間での学び合い・育ち合い・教え合いのみならず、自然と人間との間の交流やモノと人間との間の交流をも含めて、これからの人間生活を長期的展望にたって考察することを試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「次世代育成」とは	この授業の全体のねらいを説明する。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	「子育て」は母親だけの責任か	近代日本において女性に対しては「良妻賢母」、「働妻健母」となるような教育目標がたてられ、現代日本では「男は仕事、女は家庭」といわれ、それぞれの責任を果たすことが期待されてきた。つまり、男性は職場における「後継者養成」、女性は家庭責任としての「子育て」が期待されていた。その結果、近年、地域社会やＮＧＯを担う人々が育たない状況を招くなど、いくつかの問題が生じてきている。社会全体としてどのような「次世代育成」を考えるべきなのか、について日本における人間の状況を検討する。	同上	同上
3	個体間のコミュニケーションと世代間のコミュニケーション	生命は細胞内に閉じた遺伝物質に担われ、生体物質、細胞、個体を急速に廃棄しながら新しい生命体で生き続ける。一方、ヒトは生体外に大量の情報を蓄積し、知的体系である文化を創造した。ヒトの個体間、世代間のコミュニケーションの本質は何かをたずねる。	岩槻　邦男（放送大学教授）	岩槻　邦男（放送大学教授）
4	世代間の触れ合い	個体間の触れ合いを通じて学習が行われる。触れ合いは、細胞の生でも個体の生でも行われるが、生は個体で完結されるものではなくて、生命系としていきている側面をもつ。生命系の生にとって、次世代を育成することの意味を問う。	同上	同上
5	環境と学習	生き物はすべて環境との間に作用、反作用を及ぼしあっている。人は文化を創出してから自然に圧迫を与え続けている。人と自然の関係は、自然破壊・自然保護から、人と自然の共生に転換しつつある。次世代の育成は人と環境のかかわりにどう関わるかについて考察する。	同上	同上
6	たくましい青年に育てる	人間のかただは、誕生からの時間経過にしたがって、遺伝子に基づいて成長していく。この時間経過に合わせて、適度な働きかけ（教育）がなされることによって、からだを動かす諸機能は遺伝的上限にまで成長する。この働きかけについて、たくましい青年期を迎える世代（子ども）の育成を考えたい。	宮下　充正（放送大学教授）	宮下　充正（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	社会人としての人間形成	「生きていく力」を見につけることが人間育成の第一段階とすると、「うまく生きる力」すなわち、社会性を身につけることは人間育成の第二段階である。そして、「よりよく生きていく力」すなわち、文化を伝承し、創造する能力を身につけることは、人間育成の第三段階である。ここでは、無視されがちな第三段階について、社会人として自活する世代の育成に焦点を当てて考えたい。	宮下　充正	宮下　充正
8	家庭・職場・学校・地域	家庭・学校・地域において「次世代育成」がどのように位置づけられてきたかをふりかえり、この領域におけるこれからの課題を論ずる。	原　ひろ子	原　ひろ子
9	自立できる高齢者を目指す準備	20～30歳をピークとして、からだを動かす能力は、年１％の割合で低下していく。40歳代、50歳代では、その低下の気配は感じられるとしても、生活に支障をきたすほどではない。ところが、この年代でからだの衰えを意識した生活を送らなければ、60歳代以降要介助に早々と近づくことになる、自立できる能力を有して高齢期を迎える世代（中年）の育成について考えたい。	宮下　充正	宮下　充正
10	少子化と児童家庭福祉	我が国では家族や地域の変貌した高度経済成長期にあっても子どもの養育は親の責任であることが強調されてきたので、社会的支援の必要な子どもや家庭へ十分な対応がなされなかった。近年、少子化がクローズアップされ、保育の多様化や児童手当の拡充などに取り組まれているが社会の担い手としての過剰な期待のみが先行している。今、輝いて生きることと未来を拓く力をつけることを支援する児童家庭福祉のあり方を検討したい。	松村　祥子（放送大学教授）	松村　祥子（放送大学教授）
11	エイジレス時代の高齢者福祉	人生の長寿化と社会の高齢化によって、高齢者の生活は多様化している。高齢者全体の20%に満たない数とはいえ要介護高齢者への支援については介護保険制度の改善も含めて医療、福祉、住宅などの分野から総合的に取り組んで行かなければならない。また、健康な高齢者には雇用、ボランティアなど社会参加の機会の提供や余暇支援などの充実が必要であろう。高齢者福祉は福祉改革により揺らぎと縮小の兆しもあるが、幸せな高齢期が約束されることは他の世代への希望となるし、中年期の充実は社会的依存の少ない高齢者を生み出すのである。世代を越える合意の得られる高齢者福祉を編み出したい。	同　上	同　上
12	次世代市民の育成	ある政治システムを維持するに必要な政治的理念や態度を習得させることを政治的社会化と呼ぶが、次世代市民の育成も政治的社会化の一部である。ここでは自主的・主体的に判断し行動する市民を育成するために必要な政治的社会化のあり方を検討する。	阿部　齋（放送大学名誉教授）	阿部　齋（放送大学名誉教授）
13	次世代リーダーの育成	政治システムの安定性は、政治的リーダーの育成と供給が効果的におこなわれるか否かに依存してしる。これまで歴史的にみられた政治的リーダーの育成のパターンを検討しながら、民主社会における政治的リーダーの育成はいかにあるべきかを検討する。	同上	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	市民活動と国際活動	ＮＧＯやＮＰＯをふくむ市民活動との関わりをもちながら生活する人々や、地球規模で発想し生活する人々が育ち合う状況をどのように構築していくか、について考え、対談する。	阿部　齋 原　ひろ子	阿部　齋 原　ひろ子
15	「次世代育成」のこれから	全体をまとめる。	原　ひろ子	同上

＝持続可能な消費と生活者（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：原　ひろ子（放送大学教授）〕
〔主任講師：小澤 紀美子（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

持続可能な社会を創るためには消費形態の変革が重要な課題である。ライフスタイルの変革をエネルギー消費、衣生活、食生活、住生活、まちづくり、水、ごみ等の項目別の課題を分析・概説し、主体的な実践のための意思決定と情報、ＮＰＯ活動、社会の枠組みを変革する政治参加のあり方を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	持続可能な消費と生活者とは	この授業のねらいを説明する。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	地球温暖化問題とエネルギー消費	地球温暖化問題とエネルギー消費との関連について概説し、地球温暖化防止会議などの国際的取り組みから市民生活の問題点までを考察する。さらに、生活における様々なモノの消費をライフサイクル・エネルギー（生産から消費、廃棄に至るまでの全エネルギー消費）の観点から捉え直すことによって、現在の日本人のライススタイルの課題を明らかにし、その解決策を探る。	井元　りえ（山梨大学非常勤講師）	井元　りえ（山梨大学非常勤講師）
3	環境家計簿	日常の生活行動を環境の視点で評価する試みとして、環境家計簿について概説する。環境家計簿の成り立ち、内容、方法などを解説すると共に、実際に運動に取り組む住民の事例も挙げ、環境家計簿の今後のあり方を考察する。	同上	同上
4	ごみとリサイクル	生産、流通、消費によってもたらされるごみ問題の現状を概説し、ごみ問題解決のための３Ｒ（reduce,reuse,recycle）および循環型社会形成推進基本法や関連の法律の問題点の分析から持続可能な消費形態とライフスタイルについて考察していく。	小澤紀美子（東京学芸大学教授）	小澤紀美子（東京学芸大学教授）
5	生活と水	水をめぐる環境問題の現状として、生活の中で消費される大量の水（廃水）とその循環の問題、また、水汚染の問題として、主として様々な洗剤をめぐる議論をとりあげる。多様な議論の存在も踏まえた上で、問題解決につながる今後の方向性と解決策を考察する。	妹尾　理子（東京学芸大学非常勤講師）	妹尾　理子（東京学芸大学非常勤講師）
6	食と環境	季節を問わず、世界各地の大量の食品が出回っている。このような一見豊かに見える食生活も、安全性への不安、大量のエネルギー消費や環境汚染、南北問題等さまざまな問題と深く結びついている。その現状を概観し、身近なところでの問題解決に向けたさまざまな取り組み（産直や援農など）を探っていく。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	衣生活のマネジメント	衣料品の生産と消費のグローバル化に伴い、衣生活においても国際的・環境的視野が必要となってきている。製品を作るすべての過程で品質、原料の安全性、労働環境などをチェックする国際的なシステム普及の現状や、衣服をリサイクルする場合に必要なマネジメント、さらに焼却時の安全性などについて考察する。	井元　りえ	井元　りえ
8	住生活と化学物質	現代の便利で快適な生活を支えているものに大量の化学物質がある。住まいは人間の生活の器であり、最近では、素材への関心も強まってきている。これからの住まいに関わる消費行動は注目すべき領域である。ここでは、住生活において使用される化学物質に目を向け、その実態をふまえつつ問題点を整理し、今後の方向性を考察する。	妹尾　理子	妹尾　理子
9	環境共生型住まい	風土に根ざした日本の伝統的な住居デザインが自然との関係から生み出されていることを概説し、風土に適応した住まいは限られたエネルギーと資源を活用しているだけでなく、住文化を創出してきたことを概説し、住生活における生活の質を考察する。	小澤　紀美子	小澤　紀美子
10	環境保全型まちづくり	環境負荷の小さな都市システムを創るための環境デザインのあり方を欧米の実践例に学び、さらに住民参加によって環境への関心を高め、コミュニティを共創していく方策を日本の環境共生型団地づくりを通して学ぶ。	同　上	同　上
11	意思決定と情報	消費行動における意思決定の過程とその重要性を概説する。消費者の権利と責任、現代の消費生活の課題を明らかにし、「環境コミュニケーション」における生活者の情報収集とその利用、活動について考察する。	井元　りえ	井元　りえ
12	ＮＰＯの役割と可能性	持続可能な消費を促すために、各地で様々な草の根の活動が行われている。その要素としては、食に関わることに限らず、グリーン購入、フェアトレード、産直等がある。大きな組織としての生協の具体的取り組みや草の根の活動、さらにＮＰＯの動き等から今後の可能性を考察する。	妹尾　理子	妹尾　理子
13	環境政策策定と市民の関わり	食や環境などは、長い間政治課題と見なされていなかった。80 年代から首都圏を中心に主力メンバーが専業主婦の生活者・ネットワークという政治団体は、身近な生活の中の課題を地方自治体の政策として提案するために、自分達の仲間を議員にして、解決を試みている。その政治活動は「持続可能な消費」だけでなく、生産、流通、廃棄まで取り入れた生協運動が基盤にあり、「生活者」としての生き方の表現である。生活者ネットワークの活動を参考に、私たちの生活とを政治のあり方を考える。	大海　篤子（立教大学非常勤講師）	大海　篤子（立教大学非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	川をめぐる市民の活動と政策の変化	日本の政治は明治以来、生産中心型、発展型であった。そのような政治が21世紀の現在日本の経済、教育などに象徴される「希望の見えない」状況を生み出しているのではないだろうか。上から「構造改革」がはじまろうとしているが、日本の政治過程の中でおきている市民からの変革の兆し、例えば、介護保険をめぐっての中央対地方政府のあり方、情報公開、住民投票、女性の政治進出などを紹介し、持続可能型、共生型の政治の可能性を探っていきたい。	大海　篤子	大海　篤子
15	持続可能な社会をめざす地球市民	14回の授業を振り返り、今後の研究課題と実践課題について考え、対談する。	原　ひろ子 小澤　紀美子	原　ひろ子 小澤　紀美子

＝　心の科学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：西川　泰夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：波多野　誼余夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

心の科学（認知科学）の最先端で進められている「心の探求」の現状を紹介する。心をめぐる思索と思弁は、人類の精神文明史のはじめから多彩な議論が展開されてきた。しかし一方、その明確な実証的、科学的探究は、ようやく１９世紀半ばごろから開始されなお現状においても究明途中である。その最先端での探求の様子を、基本的な基盤を提供した個別科学の成果とともに示し、今後への展望を試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
		Ⅰ　心の科学の成立背景－心をめぐる思弁と思索－		
1	デカルトの心身二元論。	心の科学（認知科学）の成立背景、起源を、人類文明史の上に求め、現在の心の科学（認知科学）の直接の源流となる哲学的・論理学的思索と思考実験をもとに紹介する。その基本論点となる項目を挙げる。 はじめに。機械。反射。 デカルトの心身二元論。心とは。思惟。身体とは。心身問題。言葉と自由意志。物理過程への還元。人間機械論。	西川　泰夫（放送大学教授）	西川　泰夫（放送大学教授） 波多野誼余夫（放送大学教授）
2	ホッブスの心身一元論	はじめに。 ホッブスの心身一元論。心は推理（リーズン）する。 数学的論理関係と論理構造、計算。 心の記号論、計算論。人工知能研究。 心はいかに物から生成されるか。	同　上	西川　泰夫
3	思惟（思考）とは	はじめに。 考えることとは。アリストテレス論理学（三段論法）。三段論法の基本構造。 人間知性の数学。命題論理学。 結合規則の論理構造。知性の源。 述語論理学入門。知性による認識の限界？	同　上	同　上
4	考える機械を作る（人工知能研究）	はじめに。 コンピュータ小史。コンピュータと心。記号計算の機械化。 はたして機械は考えているのかーチューリング・テストー。 オートマトン（受機）。 オートマトンと言語。フレーム問題。	同　上	同　上
		Ⅱ　心の科学の成立－心の実証と検証－		
5	不可視な対象の可視化と計測・計量化	はじめに。 心の科学は可能か。 心身問題への取り組み、動物霊気の正体。 観測機器・実験装置の開発と計測・計量化。みえざる心をいかにとらえるか。 心的処理時間の計測。 ドンダースの反応時間減算法。スタンバーグ・パラダイム。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	精神物理学と精神物理学的関数。	はじめに。 感覚・知覚現象とは。物質からいかに心や意識は生成されるか。心身の間の相互関係－ウエーバーの触2点弁別閾実験－。ウエーバーの法則。フェヒナーの精神物理学。新精神物理学（スティーブンスのベキ関数）。計量心理学。	西川　泰夫	西川　泰夫
7	心の物質的基盤－脳のモデル－	はじめに。 精神的分泌。パヴロフの条件反射学。脳のモデル。 一次信号系・二次信号系（高次信号系）。 脳神経細胞の構造と機能情報処理量。	同　上	同　上
Ⅲ　心の科学の広がり－認知科学のフロンティア－				
8	形式的ニューロン、形式的ニューラル・ネットワーク	はじめに。 パーセプトロンの構成単位。 単純パーセプトロン－形式的ニューラル・ネットワーク・モデル－。単純パーセプトロンのできること。 誤り訂正学習法。 脳のモデルに求められる要因。 パターンの空間表現。	同　上	同　上
9	パラダイムの移行－認知革命－	はじめに。 情報をめぐって。 心とは情報処理システムである。 情報と情報量。 負のエントロピー概念。 情報伝達容量の限界をいかに乗り越えるか。	同　上	同　上
10	心の科学の基盤を問う－認知科学の成立経緯－	はじめに。 カントの呪縛からの解放。 心の科学の基本パラダイム。 ダートマス夏季人工知能研究計画。 情報科学のシンポジウム。認知科学の成立。 認知科学会。反記号論・反計算論。	同　上	同　上
Ⅳ　心の科学と隣接分野との境界領域				
11	ヒト知性における進化と文化	（進化）人類学を取り上げる。ヒトの心ないし知性は言うまでもなく進化の産物であり、その少なからぬ側面が進化の過程における生態的環境への適応として理解しうる。しかし同時に、ヒトは、過去の世代の活動の所産を文化すなわち人工物の体系として受け継ぎ、これをないかすることによりその知性を発達させる、特殊な動物でもある。この両面をどのように統一的に理解すべきかを論じる。	内田　亮子（千葉大学助教授）	波多野誼余夫 内田　亮子（千葉大学助教授）
12	コミュニケーション動物としてのヒト	言語科学、特に語用論との接点を扱う。ヒトが対話や文章を通じて微妙な意味の世界を表現、理解、共有しうるのはなぜだろうか。ヒトの心は、与えられる情報を効率的、効果的に処理しながら、外界についての理解を改定していく。この過程で生得的傾向、先行知識、さまざまな推論などが重要な役割を果たす。	今井　邦彦（学習院大学教授）	今井　邦彦（学習院大学教授） 波多野誼余夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	ヒトの心、ロボットの「心」	ロボティックス、人工知能との接点。人の心ないし知性を理解する一つの接近法は、その重要な側面を、人工的に再現してみる、というものである。コンピュータの出現により、ヒトと同様な言語的応答をするプログラムが作られるようになったが、最近ではそれにとどまらず、ヒトに似た身体を持って移動し、それと同様な行動を行うロボットを設計することが試みられるようになってきた。	開　一夫（東京大学大学院助教授）	開　一夫（東京大学大学院助教授） 波多野誼余夫
14	認知科学と神経科学	脳と心の関連についての関心が高まるなか、ヒトの高次な知性の理解にも、認知神経科学からの寄与が期待されるようになった。サルなどの脳の生理学的な知見の集積に加え、生きて働いているヒトの脳を画像化する手法の発展により急速に進展しつつあるヒト知性の認知神経科学からの情報のうちで、認知科学にとって見落とせないのはどんなことか、今後期待されるのはどんな発展かを論じる。	入来　篤史（東京医科歯科大学大学院教授）	入来　篤史（東京医科歯科大学大学院教授） 波多野誼余夫
15	知性と感情：「無情な」心の科学からの脱却	心の科学といっても、その圧倒的に多くの研究は、知的な側面に向けられてきた。しかし、９０年代に入るころから、認知と感情の関連が注目されるようになる。また、ヒトの相互交渉が、「心の理論」により媒介されていることも明らかになってきた。さらに、ヒトの心では、自己と呼ばれる部分が特に重要であることも広く認識されるようになってきた。	高橋　恵子（聖心女子大学教授）	波多野誼余夫 西川　泰夫 高橋　恵子（聖心女子大学教授）

＝心理学初歩（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　辻　敬一郎（中京大学教授）〕
〔主任講師：　星　　薫　　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

初めて心理学に接する受講者に、心理学が対象とする「心」および「心理」を探る方法を解説した後、意識・行動・個性・社会の諸側面について現代心理学が明らかにしている知見を紹介する。

昨今、心理学に対する社会的関心が高まっている反面、心理学の実像が必ずしも把握されていないように見受けられるので、その点に特に配慮し、心理学及び隣接科学の基礎教育として位置づけられるように授業を構成する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	導入－現代心理学とは？－	心理学が対象とする「心」をどう捉え、その法則性としての「心理」をどのように解き明かそうとするのかを脳科学との関連にも触れながら解説する。また、現代心理学の広範な研究分野についても概観する。	辻　敬一郎（中京大学教授） 星　薫（放送大学助教授）	辻　敬一郎（中京大学教授） 星　薫（放送大学助教授）
2	基本的意識過程（1）－感覚器官とその働き－	私たちは周囲の世界（外部環境）や自身の内部（内部環境）からの刺激を受けている。それらがどのように受容され、どのような感覚が生じるのか。最も基本的な意識と考えられる感覚の生理的・心理的過程を解説する。	相場　覚（北海道大学名誉教授）	相場　覚（北海道大学名誉教授）
3	基本的意識過程（2）－知覚世界の現象特性－	感覚過程で収集された情報は、時間的・空間的に統合されて知覚世界を構成する。私たちの行動や高次の意識の展開を支える知覚世界がどのような現象特性をもつかを、主として視覚的事実に基づいて解説する。	同　上	同　上
4	高次意識機能（1）－記憶作用の特性－	私たちは時々の状況において、記憶された事物や事象を再現し、それを利用している。時間的な連続の中に生きることを可能にする記憶の働きについて、実験心理学及び認知科学の成果に基づいて解説する。	星　薫	星　薫
5	高次意識機能（2）－言語の運用と思考の展開－	推論や理解などの思考活動、それと密接に関わる言語の習得と運用の問題を取り上げ、人間において格段に進化したこれらの高次の意識機能について、その特徴を明らかにした近年の研究を紹介しながら解説する。	同　上	同　上
6	高次意識機能（3）－感情の喚起とその表出－	人の認知には常に多かれ少なかれ感情的要素が混ざっていると言えるだろう。また感情は、行動を動機づけ、その表出は言語によるコミュニケーションを補完する社会的信号としての重要な機能をもつ。このような感情の働きを解説する。	同　上	同　上
7	行動的対処（1）－行動の発生と進化－	適応は、多くが環境への働きかけによって達成される。このような行動的対処には、生得的なプログラムとして具わっているものが少なくない。比較心理学を紹介しながら、行動の発生や進化の問題について解説する。	辻　敬一郎	辻　敬一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行動的対処（2） －行動習得の基礎－	人間の場合、行動的対処の様式は、主として生活史の中で経験に基づいて形成される。そのような学習性行動の形成や変容の基礎にある慣れ(ハビチュエイション）や条件づけの過程について解説する。	辻　敬一郎	辻　敬一郎
9	個性（1）－知性の誕生と働き－	心理学は、個人を越える「心理」の一般性を明らかにする一方、個人間の差異についても検討してきた。パーソナリティ（人格）の側面の一つである知性について、その発生と規定因、知能の測定などの問題を解説する。	上里　一郎 （広島国際大学学長）	上里　一郎 （広島国際大学学長）
10	個性（2）－性格の形成と差異－	パーソナリティのもう一つ別の側面が性格である。性格についての関心は古くからみられる。ここでは、その形成と変容、性格検査の信頼性と妥当性、性格の理論化などの問題について解説する。	同　上	同　上
11	個性（3）－人格と心理的適応－	知能や性格の統合体としての人格が個人の心理的適応とどのような関係にあるかを、フラストレーション(要求阻止)に対する耐性やコンフリクト（葛藤）への対処などに焦点を当てて解説する。	同　上	同　上
12	社会と文化（1）－社会的知覚と他者認知－	対人的行動は集団やその成員(他者)についての認知に強く規定される。また、非社会的な事象の認知に社会的経験や社会的要求が影響する場合も多くみられる。印象形成や力動的知覚など、認知に現われる社会的側面について解説する。	山岸　俊男 （北海道大学教授）	山岸　俊男 （北海道大学教授）
13	社会と文化（2）－集団力動と社会現象－	集団の成員が相互に影響しあうことによって、そこに社会現象が発生する。小集団から大規模社会までを対象に、環境破壊や災害事故などのマクロな問題の解決に欠かせない基礎的な知見について解説する。	同　上	同　上
14	社会と文化（3）－文化的基盤の影響－	グローバリゼーションの進展に伴い、文化的基盤が私たちの意識や行動に及ぼす影響が注目されるようになった。近年の「文化心理学」の成果に基づいて、異文化接触や国際交流をめぐる心理的問題を解説する。	同　上	同　上
15	まとめ－再び心理学とは？－	現代心理学の扱う諸問題とその研究方法の理解を踏まえ、改めて心理学の特徴、他の学問との関連、社会的貢献の可能性などについて解説する。	辻　敬一郎 星　薫	辻　敬一郎 星　薫

＝人間科学の可能性（‘０３）＝（TV）

―情報・環境・時間からウオッチングする―

〔主任講師：　中島　義明（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：　太田　裕彦（関西国際大学教授）〕

全体のねらい

人間科学という学際的ディシプリンが，現代社会に生起するさまざまな問題の解決に向けて有する学問的可能性についてウオッチングする。その際に，「情報」・「環境」・「時間」という３つの視点をアプローチのための「のぞき窓」として用いる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに・方法論	本講義全体のねらいと構成について説明する。また，人間科学という学際的ディシプリンが用いているさまざまな方法論についてウオッチングする。	中島　義明（早稲田大学教授） 太田　裕彦（関西国際大学教授）	中島　義明（早稲田大学教授） 太田　裕彦（関西国際大学教授）
	第１部	「情報」からウオッチングする		
2	人間が認知する「情報」	人間はさまざまな情報を処理することにより行動を生起させている。この情報処理過程に見られる諸特性についてウオッチングする。	中島　義明	中島　義明
3	人間が維持する「記憶」	人間に見られる情報処理の中で記憶の果たす役割は非常に大きい。この記憶過程に見られるいくつかの特性についてウオッチングする。	同　上	同　上
4	人間が感じる「美しさ」	人間は自然や芸術をはじめとしてさまざまな世界において美を感じる。美しさに関する感情や評価の問題を取り上げ，人間にとって美とは何かをウオッチングする。	太田　裕彦	太田　裕彦
5	人間が好む「デザイン」	人間の情報処理をスムーズに行わせるために，インプットされる刺激に対し何らかの工夫が施される場合がある。この種のデザインについてウオッチングする。	日比野　治雄（千葉大学教授）	日比野　治雄（千葉大学教授）
6	人間が見る「映像」	現代社会において人間はテレビや映画をはじめさまざまな映像情報を処理している。この映像情報処理過程に見られる諸特性についてウオッチングする	中島　義明	中島　義明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
	第2部	「環境」からウオッチングする		
7	人間が信じる「宗教」	人間を取り巻く社会環境の中で宗教の果たす役割は大である。人間と宗教との関わりについて社会学的視点からウオッチングする。	大村　英昭（関西学院大学教授）	大村　英昭（関西学院大学教授）
8	人間が巻き込まれる「流行」	人間を取り巻く社会環境の中で流行の果たす役割は大である。人間と流行との関わりについて哲学的視点からウオッチングする。	鷲田　清一（大阪大学教授）	鷲田　清一（大阪大学教授）
9	人間が住む「都市」	人間はさまざまな人工的環境を構築することで地球上に生活圏を広げてきた。人工的環境として都市を中心的に取り上げ，人間と都市との関わりについて環境心理学的視点からウオッチングする。	太田　裕彦	太田　裕彦
10	人間が被る「災害」	われわれの生活は災害と隣り合わせで営まれている。災害時や災害後の人間行動についてウオッチングする。	廣井　脩（東京大学教授）	廣井　脩（東京大学教授）
11	人間が生存する「自然」	生物としての人間はその生存を自然に依存している。人間を取り巻く最も広範な環境としての自然を取り上げ，人間と自然との関係性について環境心理学的視点からウオッチングする。	太田　裕彦	太田　裕彦
	第3部	「時間」からウオッチングする		
12	人間が備える「順応性」	人間は，程度の問題ではあるが，時間の経過と共に環境に順応できる「柔らかさ」を備えている。特異環境を例にこの点やその限界についてウオッチングする。	中島　義明	中島　義明
13	人間が歩む「発達」	ヒトは，産声をあげたときは同一の無地の存在である。それが大人になるまでにこれほどの個人差が生じてくる。その間の発達はどのようにして進むのか，自らの育ちを省みながらウオッチングする。	清水　將之（関西国際大学教授）	清水　將之（関西国際大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	人間が受容する「死」	人間は生涯において必ず家族や自分自身の死に直面する。死と向き合う時間的経過の中で生み出される人間心理の特性についてウオッチングする。	柏木　哲夫（金城学院大学教授）	柏木　哲夫（金城学院大学教授）
15	人間がたどる「進化」・おわりに	霊長類の一種であるヒトがどのような進化の過程をたどり，その結果どのような特異な存在となったのかをウオッチングする。あわせて本講義全体について簡単な締めくくりをする。	太田　裕彦 中島　義明	太田　裕彦 中島　義明

＝　発達と教育の心理学的基盤　（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　波多野　誼余夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　稲垣　　佳世子（千葉大学教授）〕

全体のねらい

子どもがおとなへと変化をとげる、ある領域で熟達していく――人間におけるこのような「発達」（あるいは長期にわたる学習）を支えているのは生まれつきの仕組みと教育を含む社会的・文化的要因であることを心理学の理論や研究からの知見をもとに明らかにするとともに、現在の発達や教育における問題点を再考する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	発達・学習・教育とは	「発達」「学習」「教育」についての心理学における概念を解説するとともに、学ぶ「動物」としてのヒト、文化を取り入れ発達する存在としてのヒト、学ぶヒトを助けるために教育する存在としてのヒトの特徴を明らかにする。	波多野誼余夫（放送大学教授） 稲垣佳世子（千葉大学教授）	波多野誼余夫（放送大学教授） 稲垣佳世子（千葉大学教授）
2	人はどのような時に学ぶのか？	人は現実的必要があるときに学ぶだけでなく、それを超えて学ぶことができること、人は誰でもが比較的容易に学べる領域と長期にわたる意図的な努力がないと学べない領域とがあるように生まれついていることを示す。	稲垣佳世子	稲垣　佳世子 波多野誼余夫
3	言語発達における生得的制約と経験の役割	生後数年という極めて短い時間で、人が比較的容易に言語を獲得できるのは、種としてのヒトにそれを可能にするような仕組みが備わっているからであるとともに、親密な周囲のおとなとの集中的な相互作用によることを示す。	小椋　たみ子（神戸大学教授）	小椋　たみ子（神戸大学教授）
4	概念的発達と変化	子どもはかなり早い時期から特別教えられないにもかかわらず、世界の重要な諸側面を切り分け、それぞれに異なる因果的説明を適用できるが、それだけでなく、情報を取り入れるたびに少しずつ自分のもつ知識の組替えもしているという点で、知的発達が構成活動を伴う能動的な変化であることを明らかにする。	稲垣　佳世子	稲垣　佳世子
5	初心者から熟達者へ	初心者と熟達者はどこがどうちがうのか。スポーツや芸術、趣味や職業場面での熟達者を例にしながら、初心者と熟達者の知識の構造や運用のちがいを明らかにするとともに、ある領域での熟達者になるためにはどのようなことが必要かについての知見を紹介する。	野島　久雄（NTT MI 研究所主幹研究員）	野島　久雄（NTT MI 研究所主幹研究員）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	熟達化の社会・文化的基盤	初心者が熟達者になっていく過程は、初心者が熟達者のコミュニティに実践活動を通じて参加していくことである。そこでは文化がつくり出した道具とともに、親方や兄弟子などを含む他の人々によって助けられている。さらに時代の変化とともに熟達の目標も変化しうることを示す。	大浦　容子（新潟大学教授）	大浦　容子（新潟大学教授）
7	表記法の発達	発達において内化される文化的道具のなかでもとくに重要なのが、読み書き、数量化などに関わる能力である。これらの習得がどのように文化的に準備・援助されるのか、それにより認知能力がいかに変化するかを明らかにする。	秋田　喜代美（東京大学大学院教授）	秋田　喜代美（東京大学大学院教授）
8	IT技能の熟達	今や新しいリテラシィであるIT技能の獲得には、階層差や性差が大きく、それがまた社会的不平等を再生産するといわれている。このような主張を吟味するとともに獲得の障害を克服する方途を探る。	野島　久雄	野島　久雄
9	発達の最近接領域	より成熟した他者との相互交渉を行うなかで、発達主体が外界を代表する情報を取り込み、洗練し、構造化していくという「発達の最近接領域」の考えに沿って、足場かけ、学習者の教師による再言語化の効果などをみていく。	當眞　千賀子（東京女子大学非常勤講師）	當眞　千賀子（東京女子大学非常勤講師）
10	学習における共同性	従来の学習・発達研究では、個体の知識獲得がもっぱら論じられてきたが、ヒトの学習は、ほとんどの場合、共同で行われる。学習において同輩の果たす役割を見ていく。	當眞　千賀子	當眞　千賀子
11	学校の役割：日常的認知を超える	日常生活での学びの限界を克服するための役割を担うものとしての学校の長所を明らかにするとともに、現行の学校での学びがもつ弱点にも光をあてる。さらにそうした弱点を克服するために、学校のなかでの学びをどのようにすればよいかを探る。	稲垣 佳世子	稲垣 佳世子
12	学校的でない「学校」での学び	伝統的な学校必要論と脱学校論ないし学校不要論との中間に、学校的でない学びを学校に求めるという選択肢がありうる。もう一つの学校としてのオープンスクール、教科の枠にとらわれない、学習者の能動性を引き出す活動の実践例をいくつか紹介する。	大浦　容子	大浦　容子 波多野誼余夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	障害と発達	障害とは何か、障害の種類、障害の発生原因について理解を深め、障害を発達心理学的観点から考えることの重要性を概説する。有機体がもつ生得的要因と環境要因の力動的なインタラクションにより領域固有な能力が形成されていく。ことばの獲得の障害を中心に発達のメカニズムに基づいた援助の方法を提案する。	小椋　たみ子	小椋　たみ子
14	学習のデザイナーとしての教え手の役割	ヒトの学習においては、教え手が重要な役割を果たすが、なかでもプロの教え手としての教師の影響は大きい。教え手としての熟達とはどんな変化なのか、そうした教え手はなぜ不可欠なのかを論ずる。	秋田　喜代美	秋田　喜代美
15	発達観・教育観と心理学理論	これまでの講義をふまえ、発達と教育をどのようにみるかを理論的に考えてみる。一般の人がもっている素朴な発達観・教育観を、心理学理論はどのように支持・批判・発展させることができるのだろうか。ピアジェの構成主義、ガードナーの多元的知能、などを例にとって心理学理論を学ぶ意義を論ずる	波多野誼余夫 稲垣　佳世子	波多野誼余夫 稲垣　佳世子

＝教育の方法（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：佐　藤　　学（東京大学大学院教授〕

全体のねらい

この講義では、近年、急激に変貌する学校教育の内容と方法の現実とその変動を促進している理論の概要を後述し、教育方法学の研究領域の最新の知識と授業改革の主要な論点について受講生の理解を深めたい。講義においては、前回の講義と同様、テレビの特性を生かして、教室の風景、教師へのインタビュー、授業と学習のプロセス、新しい授業改革の試み、諸外国の授業の様子、学校改革の実例のドキュメントなどの映像メディアを活用し、学校と教室の観察を踏まえた講義にしたい。

１５回の講義の展開は、まず今日の教室の変化をとりあげ、その変化が活動的な学び、協同的な学び、反省的な学びへと発展している状況を示したい。次に、この授業改革の歴史的な背景を欧米における教授理論の展開と日本における授業改革の歩みにおいて概観する。その上で、今日の教授理論とカリキュラム理論の基礎知識、および授業研究の方法論とカリキュラム研究の論点を示し、最後に、授業改革の多様な挑戦を紹介しつつ、「学びの共同体」と称される学校改革の潮流とその可能性について講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	授業と学びの世界	・教室の思い出 ・教室の風景 ・授業の世界、学びの世界	佐藤　学（東京大学大学院教授）	佐藤　学（東京大学大学院教授）
2	変貌する教室	・教室という場所 ・世界の教室・日本の教室 ・学力問題の諸相	同　上	同　上
3	授業の様式	・模倣的様式と変容的様式 ・模倣的様式の実例 ・変容的様式の実例 ・二つの様式の対比	同　上	同　上
4	授業の歴史（１）欧米	・コメニウスの「大教授学」 ・一斉授業の成立 ・国民教育の授業形態 ・新教育の伝統と現在	同　上	同　上
5	授業の歴史（２）日本	・近代学校の成立と授業の展開 ・新教育の展開と学びの改革 ・戦後新教育と授業の変容 ・学びの創造と授業の改革	同　上	同　上
6	学びの創造	・行動主義の学びと認知主義の学び ・対話的実践としての学び ・学びの理論の新展開	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	協同的な学び	・発達の最近接領域 ・協同としての学び ・互恵的な学び ・コミュニケーションとしての学び	佐藤　学	佐藤　学
8	教室のジレンマ	・教室で経験する三つのジレンマ ・教師のジレンマ・子どものジレンマ ・マネージングとコーピング	同　上	同　上
9	授業のデザイン	・プランとデザイン ・目標と課題 ・授業をデザインする	同　上	同　上
10	授業の評価	・目標による評価と目標によらない評価 ・工学的接近と羅生門的接近 ・反省的実践としての授業 ・授業の批評と検討	同　上	同　上
11	授業の研究（1）分析の方法	・授業研究のパラダイム転換 ・「過程ー出産」モデルの研究 ・コミュニケーション分析 ・教室のディスコース研究	同　上	同　上
12	授業の評価（2）言語と社会	・教室の出来事の意味と価値 ・教室の言語と学力 ・教室のエスノメソドロジー	同　上	同　上
13	カリキュラムと単元の構成	・学びの経験としてのカリキュラム ・単元の多様な様式 ・教科学習と総合学習 ・カリキュラムの開発と批評	同　上	同　上
14	専門家としての教師	・専門家としての教師 ・技術的熟達者から反省的実践家へ ・教師文化の研究 ・学校における同僚性の構築	同　上	同　上
15	改革の展望	・２１世紀の学校像 ・学びの共同体の構想と実践 ・学校改革の展望	同　上	同　上

＝　哲学入門（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　柏原　啓一（放送大学教授）〕

全体のねらい

人間と世界について全体的かつ根本的に問いたてる哲学の主題や方法を理解するために、認識論、価値論、存在論の各分野にわたる諸問題をできるかぎり平明に叙述して、学問としての哲学への概略の見通しをつける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	愛知の学	哲学を意味するギリシア語のフィロソフィアの語源である「知を愛すること」の意味について考える。そして、その知が、人間についての知であれ世界についての知であれ、包括的かつ根源的なものであることを学ぶ。	柏原　啓一（放送大学教授）	柏原　啓一（放送大学教授）
2	人間学	先ずは、人間が人間自身について知ることにまつわる諸課題を検討する。ここでは、哲学的人間学と呼ばれる考え方に手懸りを求めて、人間の知・情・意にわたる精神諸作用のそれぞれの働きの特徴について考察する。	同　上	同　上
3	認識論	知の根拠を検討する認識論（知識論）を主題にする。認識論は近代哲学において強く意識されるようになったもので、近代の合理論と経験論、さらにはカントの批判哲学やプラグマティズムなどを例として取り上げる。	同　上	同　上
4	主観と客観	近代認識論において基本的な枠組となっている「主観－客観の図式」について、その成立過程を追いながら、批判的に考え直してみる。その結果、この図式に替わる新たな枠組が求められていることを明らかにする。	同　上	同　上
5	解釈学	旧来の知の枠組を超える新たな認識論として、最近になって注目されている解釈学と呼ばれる方法を取り上げ、この解釈学的認識論について、解釈学的循環や理解の歴史性などいくつかの特徴を挙げながら説明する。	同　上	同　上
6	倫理学	生命倫理や環境倫理、また政治倫理や企業倫理など、現今は諸分野で倫理が話題になるが、人間の精神機能の特に意志の働きに基づく行為の場面を、規範の世界として取り出して語る倫理学についてここで概観する。	同　上	同　上
7	美学	人間は美的感情をもち、これによって、絵画、彫刻、音楽、演劇、文芸、作法などの芸術文化を営む。このような芸術を通して人間が求める美という価値についての哲学的な究明を行う美学の役割の概略を説明する。	同　上	同　上
8	宗教哲学	人間には、自己の有限性に根差して超越的絶対へと依存しようとする宗教的な感情がある。また、哲学はキリスト教思想から大きな影響を受けてもきた。そこで、哲学の一領域としての宗教哲学について考えてみる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	存在論	人間についてさまざまな考究をしてきたが、ここからは、世界の側に目を向ける。世界に存在する諸事象について、哲学がどのような見方をするのかを学びながら、本質と現象や存在と生成などの問題を取り上げる。	柏原　啓一	柏原　啓一
10	宇宙論	古代ギリシアにおいて哲学が開始された当初は、宇宙という自然の世界が想定され、その根拠を求めることが、話題の中心であった。その後の哲学の世界観にも影響を与えたこの古代ギリシアの宇宙論の特徴を探る。	同　上	同　上
11	自然哲学	哲学では、考察の対象となる世界を、おおむね自然と理解してきた。したがって、世界を扱う哲学は、一般に自然哲学という形をとる。そして、このことが特に近代の自然科学を育てることとなったその経緯を述べる。	同　上	同　上
12	終末論	哲学は、ヘレニズム文化に平行してヘブライズム文化の強い影響下にある。そして、ユダヤ教や原始キリスト教の思想には、終末論と呼ばれる信仰上の世界観が基底にあるので、この終末論について若干の言及をする。	同　上	同　上
13	歴史哲学	近代中期の啓蒙主義哲学のもとで、世界を歴史として考察する歴史哲学が生まれる。歴史哲学の成立と展開をたどり、その特質を進歩史観と捉えて、近代の歴史哲学のはらむ問題点を指摘し、終末論との関係を考える。	同　上	同　上
14	自然と歴史	近代哲学の流れのもとに、世界観が自然から歴史へと転回していくことになったが、この流れの中で近代歴史哲学が取り上げた進歩史という歴史が、果たして本当に歴史の名に価するものかどうかを検討してみたい。	同　上	同　上
15	人間と存在	存在論を、世界のあり方としての存在に関して述べてきたが、最後に、人間のあり方としての存在について言及する。日本人のもつ存在観をも参照しながら、人間存在の歴史性に触れて、講義のしめくくりとする。	同　上	同　上

＝　倫理思想の源流（'05）＝（R）

〔主任講師：　関根　清三（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

西洋の倫理思想史の様々な潮流がそこに発する、ギリシアとヘブライの２つの源流に遡って、基本テクストを読解し、多様な思索に学びつつ、そこで何が問題となり、それが倫理学的にどのような意味を持つのか、について考察する。そのことを通して特に、愛・正義・超越・犠牲等、現代人の思索に挑む問題系の射程を見定め、特に「驚き」を基底に据えた倫理学の可能性について、何某かの展望を開くことを目指したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	序論 ―「驚き」―	プラトン、アリストテレスが哲学の始めに「驚き」があることを指摘しているが、実践哲学としてのギリシアの倫理学もここに起点を持つだろうことを、様々なテクストを引きつつ、確認する。ヘブライの宗教倫理においても、「驚き」が鍵語となることについては、現代のユダヤ教哲学者ヘッシェルが、正当にも注目しているが、これについても、本論を先取りして、主要テクストを参照する。	関根　清三（東京大学大学院教授）	関根　清三（東京大学大学院教授）
	第Ⅰ部　古典ギリシアの実践哲学① ソクラテス前の哲学者たち（1）　―イオニア学派	紀元前６世紀、ギリシアの植民地イオニアに、澎湃として出現した哲学者たち、タレス、アナクシマンドロス、アナクシメネスは、万物の無限な原理を探り、さらにはクセノファネスはその原理を擬人神観的に捉えることを批判し、ヘラクレイトスは万物を操る叡慮について思索した。それらは哲学の嚆矢であると同時に、超越への驚きに基づく知的探求を善とする倫理学の誕生を告げるものである。		
2	② ソクラテス前の哲学者たち （2）―イタリア・トラキア学派	前５世紀のイタリア・トラキア学派では、憎しみが惹起する争いによる罪の意識とそれを償おうとする意志、更には愛の調和への復帰を語ったエンペドクレス、上機嫌や中庸の徳、さらには畏怖の重要性を指摘したデモクリトスが、倫理思想の上からは注目される。しかし両者に影響を与え、現代のハイデッガーに至るまで広汎な影響力を有する、パルメニデスの独創的な存在論も刮目に値する。	同　上	同　上
3	③ ソクラテスとプラトン （1）―ソクラテスからプラトンへ	プラトンの初期対話篇の主人公であるソクラテスと、中期・後期対話篇のプラトン自身の思想を分けて、それぞれを比較する。徳が幸福のために十分と考え、徳を知と同一視し、また霊魂不滅を信じたソクラテスに対し、徳は幸福に至る手段ではなく、また知識以上のものと考えたプラトンは、独自の正義論・愛論を展開する。また彼は霊魂不滅の信仰を論証しようと試みた。両者の比較を通して、倫理的な問答の真髄を探る。	同　上	同　上
4	④ ソクラテスとプラトン （2）―プラトンを中心に	プラトンにおける徳と正義、愛と快楽、霊魂とイデアといった中心問題を、中期の『国家』篇の読解を通し、適宜、中期の『パイドン』『パイドロス』『メノン』『饗宴』、後期の『テアイテトス』『フィレボス』その他の対話篇も参照しつつ、論ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	⑤ アリストテレス（1）－幸福と倫理的卓越性	以下3回にわたって、アリストテレス『ニコマコス倫理学』を読み解きつつ、ギリシア倫理学の到達点を見定める。先ずこの書の位置付けと構成を押さえた上で、プラトン倫理学との相違点を整理する。特にアリストテレスの視点からするプラトンのイデア論批判の妥当性を検討する。次に、善と幸福とは何か、から説き始め、最高善の指摘をもって結ばれる、『ニコマコス倫理学』全体の結構を俯瞰する。続いて倫理的卓越性（徳）論を整理する。	関根　清三	関根　清三
6	⑥ アリストテレス（2）－中庸と徳論	徳論の中心である中庸論とそれへの後世の批判、それらの評価について論じた後、勇気、正義、愛の三つの徳に絞って、その意味について考える。配分的・矯正的・相補的正義の解釈、自愛は総じて非か否かをめぐる議論等をめぐって、考察する。	同　上	同　上
7	⑦ アリストテレス（3）－知的卓越性と観照	まず倫理的卓越性に対する知的卓越性の諸相を、思慮（実践知）に焦点を合わせて論ずる。行為と責任、放埒と抑制といった問題圏から、独自の快楽論とその位置付けについて考察する。最後に、幸福としての観照をめぐるアリストテレスの結論部を分析し、プラトンとの比較、政治論への移り行きについて押さえる。またその理性尊重の基本姿勢とその包含する問題性、ギリシア的自由民の倫理からヘブライ的捕囚民への展望を開いて、第Ⅰ部の結びとする。	同　上	同　上
8	第Ⅱ部　古代ヘブライの宗教倫理 ⑧ 十戒（1） －第六戒から第九戒を中心に	第Ⅱ部の宗教倫理としてのヘブライ倫理についての論じ方をめぐって注意点を押さえた上で、旧約の第一部分「律法」から先ず十戒を取り上げる。殺人・姦淫・偸盗・偽証を禁ずる第六戒から第九戒をめぐって、ヘブライ語に遡った広狭二つの解釈の可能性を確認し、更にそれらが禁ぜられる根拠を探る。カントの定言命法からの根拠付けとヘーゲル以降の批判、和辻哲郎の信頼理解からの根拠付けとその当否について論ずる。	同　上	同　上
9	⑨ 十戒（2） －第一戒を中心に	前回見た和辻の第六戒以降の根拠付けは、第一戒から四戒、すなわち神関係の戒めを無視するところに、十戒解釈としては瑕疵が存することを指摘した上で、論者自身神関係の戒めを哲学的に解釈する可能性を模索する。それを踏まえて、和辻に代わる、十戒の根拠付けを試みる。倫理が突き詰めたところ、何らかの超越的原理と関わらざるを得ないことを、現代の象徴論などを考慮しつつ論じ、そこから古代の倫理に通底する「驚き」へと論じ進む。	同　上	同　上
10	⑩ 法集成 ―「契約の書」「申命記法」「神聖法典」	「律法」中唯一の断言法たる十戒に対し、決疑法の代表的集成である、「契約の書」「申命記法」「神聖法典」の三つについて、倫理思想上の落穂拾いをする。捕囚民・社会的弱者へのアガペーの思想、愛敵の思想が、新約に先駆けて語られることに、注目する。	同　上	同　上
11	⑪ 知恵文書（1） －『箴言』	旧約聖書の第三の部分「諸書」中、倫理思想の上から逸することができないのは、所謂「知恵文書」である。その代表的三著『箴言』『ヨブ記』『コーヘレス書』について、以下三回にわたって学ぶ。『箴言』については、これを徳目表として読むというのが、論者の視点となる。しかもその錯綜した叙述を、ギリシアの『ニコマコス倫理学』の徳論との比較の視座を導入して、哲学的に整理しつつ読むというのが、ここでの方法である。そこから、ギリシア・ヘブライそれぞれの徳論に共通するものと独自のものの別も見えて来るはずである。なお『箴言』中にも愛敵の思想が顕著であることを、パウロと比較して付言する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	⑫ 知恵文書（2） －『ヨブ記』	『箴言』では基本的に応報信仰が保たれていたが、義人が苦しむ現実を前に、応報思想の破れを問題にした後期知恵文書が、『ヨブ記』である。キルケゴール、ユングなど後世の解釈を批判的に紹介した上で、『ヨブ記』作者のこの問題に対する独自の答えを読み解いて行く。	関根　清三	関根　清三
13	第Ⅲ部　ギリシア・ヘブライ倫理の帰趨 ⑬ ヘブライ宗教における応報倫理 －『コーヘレス書』を中心に	『ヨブ記』は例外的な義人の苦難を問題にしていたが、より一般的に応報の破れた現実を剔抉し、伝統的な信仰の革新を試みた最後期の知恵文書が、『コーヘレス書』である。全てを空、と断ずるその思想を、語の十全の意味でニヒリズムと規定すべきことを、ニーチェ・ハイデッガーのニヒリズム定義を参看しつつ論じた後、現代の哲学的に整理されたニヒリズム理解との比較において、『コーヘレス書』の迷路のようなテクストを読み解くことを試みる。特に倫理思想の観点から重要なのは、応報倫理の破れたニヒリズムを、個人のささやかな愉悦を楽しむことによって超克しようとする、コーヘレス独自の思想だが、そこには終始他者が忘れられていることも、他方限界として指摘せなばならない。	同　上	同　上
14	⑭ ヘブライの宗教倫理と贖罪思想 －預言者を中心に	応報の破れを率直に認めつつ、コーヘレスのようにエゴイズムに閉じこもることなく、他者関係に開いた新しい神の模索を、旧約の他のテクストに探って行くことが、ヘブライズムについての最終回である14回の課題となる。旧約中第二の部分「預言者」から先ずイザヤを取り上げ、彼の義の神とその限界、また歴史書と文学書からダビデのバテシェバ事件における愛の神の発見とその問題性を読み解いた後、義だけでも愛だけでもなく、両者の統合を贖罪思想において発見した、捕囚期の預言者第二イザヤに注目する。ヴェーバーの古代ユダヤ教理解を批判的に援用しつつ、第二イザヤこそ、応報倫理の破れを逆手に取って、却ってそこにこそ顕れる新しい神の働きを見出したことを確認する。それを踏まえて更には新約のイエスの十字架理解の系譜へと論じ進む。しかしこの贖罪思想の系譜こそ、カント、若きヘーゲル、またニーチェ、レヴィナスなどの諸家が激越な批判の対象とした、思想史上の争点でもあった。最後にそれぞれの視点からの批判と、贖罪思想からの応答の可能性を探る。	同　上	同　上
15	⑮ 愛と義をめぐるギリシア哲学の省察 －アリストテレスに即しつつ	ヘブライの倫理思想の根本問題は、応報倫理の破れをどう解するか、という点に収斂したが、これに対するユダヤ・キリスト教の贖罪信仰からする解答を、より一般的な哲学の理性の言葉で敷衍するとどうなるであろうか。最終回は、『ニコマコス倫理学』に戻って、その行間にまで分け入りつつ、愛が贖罪にまで至り得、また至らざるを得ない事情について、何某かの展望を開き、あわせ哲学と宗教の相補的緊張関係について確認して、結びとする。	同　上	同　上
	結語と展望 －再び「驚き」をめぐって－	ギリシア・ヘブライの倫理思想に底流するものとして、序論で確認し、本論でも適宜注意を喚起して来た「驚き」をめぐって、その現代的意義について省察するのが、最後の課題となる。謙虚、謎解き、愛、超越など現代人に挑む問題系を包含する驚きという概念の、倫理思想にとっての豊かな可能性を示唆し、聴講者の思索への誘い水とする。		

＝近代哲学の射程（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　円谷　裕二(九州大学大学院教授)〕

全体のねらい

西洋哲学は古来から自然・神・人間という三つのテーマをめぐって展開されてきたが、そのうち、古代哲学は自然、中世哲学は神、そして近代哲学は人間を、それぞれの中心に据えてきた。講義では、近代哲学のうち、特にデカルトとカントの哲学を取り上げながら、近代哲学の特徴を吟味し、その限界と現代哲学に対する可能性について考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	近代哲学の特徴	近代哲学と一口に言っても一様ではない。デカルトは自我を哲学の原理に据えたが、スピノザやライプニッツは自我の根底に絶えず感覚経験を越えた神を置き、逆にヒュームは感覚経験を徹底化した。しかし近代哲学全般に共通することは、数学や数学的自然科学に対する信頼であった。ここに近代哲学の特徴とその限界の一端を見届けることができるし、またこの限界の自覚が現代哲学の推進力にもなっている。	円谷　裕二（九州大学大学院教授）	円谷　裕二（九州大学大学院教授）
2	方法的懐疑――デカルト(1)	デカルトは一切を疑うことから彼の哲学を始める。しかし彼にとって懐疑は哲学の終点ではなく、逆に、疑いえない第一原理を確立し、この原理に基づいて彼の一切の哲学が展開された。哲学にとっての懐疑のもつ意味と確実性の関係について、デカルト哲学に即しながら考えてみる。	同　上	同　上
3	「私は思惟する、ゆえに私はある」――デカルト(2)	思惟するものとしての私(=精神)をデカルトは不可疑の原理に据えた。この思惟する私に基づいてデカルトは、近代以前の目的論的自然観を批判し、同時に近代の機械論的自然観を基礎づけている。デカルトの「私」の意味とその問題点について考える。	同　上	同　上
4	神と自己――デカルト(3)	第一原理としての思惟する私は、存在論的には決して第一のものではない。というのも、私を超越する神こそが私の根底に存し、私を支えているからである。自己と自己を超越するものとの関係について考える。	同　上	同　上
5	世界と自己――デカルト（４）	思惟する私は物体的自然を〈認識〉する第一原理ではあるが、その私は物体的自然の〈存在〉を構成するものではない。私は無限ではなく、有限な存在であるが、その有限な私と物体的自然との関係はどのようになっているのであろうか。	同　上	同　上
6	心身問題とデカルト哲学の意義――デカルト(5)	デカルトは精神と身体を区別することによって思惟する私を第一原理と見なしたが、はたして、精神と身体を区別することができるのであろうか。デカルト哲学、延いては、近代哲学の限界と新たな可能性を探る。	同　上	同　上
7	経験の可能性――カントの理論哲学(1)	カントによれば、経験の成立には自発的な悟性の働きだけではなく、感性の受容性も必要である。経験はいかにして可能であるのかという哲学の根本問題を、カントの理論哲学のうちに探る。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	理性と経験――カントの理論哲学(2)	経験的認識が感性と悟性の共働によるものだとしても、人間は客観的な経験によって限界づけられるものではなく、自己を超越した経験不可能なものとの関係を求め、またそれを基盤として生きている。人間の自己超越の可能性について考える。	円谷　裕二	円谷　裕二
9	存在と経験――カントの理論哲学(3)	人間が世界を認識することと、自己や他人や諸事物などの世界が存在することとは、どのように関係しているのであろうか。カントの理論哲学を、認識論的に理解しようとする従来の解釈の誤りを批判し、存在論的なカント像を提起する。	同　上	同　上
10	道徳の原理――カントの実践哲学(1)	どのような行為が道徳的に正しい行為なのであろうか。快を求めて不快を避ける行為が正しい行為なのであろうか、それとも、快不快の感情は行為の道徳性の基準ではないのであろうか。この問題をカントの実践哲学に即して考える。	同　上	同　上
11	カント倫理学の特徴と問題点――カントの実践哲学(2)	カントは、理性によって厳格に律せられた行為を道徳的に正しい行為と見なすが、一見すると反論しようのないカントのこの実践哲学について、その意義と問題点を考察することによって、行為の正しさについて改めて考えてみる。	同　上	同　上
12	自然と自由の統一――『判断力批判』(1)	古来から真・善・美という三つの価値が最高の価値とされてきたが、これらの価値の関係はどのようになっているのであろうか。カントは『判断力批判』において、この問題を、認識の真と行為の善とを統一する問題として理解した。それではその際に、美はどのような役割を果たすのであろうか。	同　上	同　上
13	美の分析論――『判断力批判』(2)	自然とは何であろうか。科学は自然を機械論的に捉えるが、自然の多様性と差異性は科学のうちに解消されるものではない。自然は、美しいもの、崇高なもの、生命を有したものなど、科学を超えた豊かさに満ちている。それではこのような変化に富む自然を理解する方法とは何であろうか。	同　上	同　上
14	美・芸術・道徳――『判断力批判』(3)	美には自然の美と人工の美(芸術美)があるが、両者の関係と相違について考える。また、美は、一方では、善とは独立の価値でありながら、他方では、美への関心は深いところで道徳と結びついている。美のこのような両義性についても考える。	同　上	同　上
15	近代哲学の射程と反省的判断力	実証性を重んじる近代の数学的自然科学を認識論的に基礎づけ、それによって、神中心の中世哲学から解放されたかに見えた近代哲学は、その実、超経験的なもの、或いは経験を全体として統一づけるものなしには哲学としての存立を保ちえなかった。人間中心を標榜する近代哲学の問題点を考察し、現代の私たちにとって問いに値する問題が何であるのかを考える。	同　上	同　上

＝生命と人生の倫理（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　清水　哲郎（東北大学大学院教授）〕
〔主任講師：　伊坂　青司（神奈川大学教授）〕

全体のねらい

生命操作技術の発展に伴って新たに生じた倫理的諸問題を対象とする生命倫理学と、人生全体の中で医療を位置づけつつその倫理を考える方向（ここでは「人生の倫理」と呼ぶ）との間を架橋しつつ、医療者と患者・家族とが出会う医療現場における倫理の方向付けを目指す。生物学的生命と物語られるいのち（人生）の間、また高度化した技術と日常的生活の間を行き来しつつ、諸問題を考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物学的生命と物語られるいのち	私たちが《いのち》について考え、語る際に、二つの観点がある。身体に注目しつつ「生きている」という時に、注目している生命は、「生活し」「人生を送って」いる私たちのいのちを支えている。この二つの見方を説明し、本授業のタイトルの意味を提示するとともに、以下の授業内容を説明する。	清水　哲郎（東北大学大学院教授）	清水　哲郎（東北大学大学院教授）
2	生命操作の技術と倫理(1) 生命の誕生をめぐって	今回から４回に亙って、生命操作技術の高度化に伴って、新たなタイプの倫理的問題が起きてきた状況と、それに対処すべく成立した生命倫理学について概観する。今回はまず、人工授精や体外受精などの生殖補助技術、およびクローン技術をめぐる倫理的問題を考える。	伊坂　青司（神奈川大学教授）	伊坂　青司（神奈川大学教授）
3	生命操作の技術と倫理(2) 遺伝子の情報と操作	最先端の生命操作技術と目される遺伝子情報と操作をテーマとして、それが医療に有効に使われる可能性とともに、プライバシーについての新たな問題や、出生前診断による妊娠中絶の問題などを、倫理的側面から考える。	同　上	同　上
4	生命操作の技術と倫理(3) 脳死と臓器移植	脳死と臓器移植についての現状を理解し、倫理的諸側面を検討する。「脳死をもってヒトの死とする」という理解の妥当性、臓器移植をめぐる提供側（ドナー）、受け手側（レシピエント）のあり方等を検討し、人間全体を見る立場から問題にアプローチする。	同　上	同　上
5	生命操作の技術と倫理(4) 終末期と死の選択	耐え難い苦痛や人間としての尊厳を理由に、自らの死を選択する自己決定権の主張がされている。生死のコントロール技術が進んだことによって、問題は複雑になっている。そうした諸状況を概観し、終末期における安楽死や尊厳死の選択を考える手掛かりを探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	個体としての人間	今回から3回に亘って、前回までに見てきた生命倫理の典型的諸問題の根本にある、《人間》をどう捉えるかという問題を考える。今回は、《個体・個人》がテーマであり「個体はどのようにして個体か？」を、生物学的視点から、および個体史の視点から考える。	清水　哲郎	清水　哲郎
7	人間とその尊厳	《人間》について、価値という面から考える。人格と尊厳、人権、自律、QOL（quality of life；生の質）、生命の価値、人生の価値等々について理解した上で、「（いろいろなことが）できないよりできたほうが良い」と「できなくても良い」という価値観が並存する可能性を探る	同　上	同　上
8	個人はどこまで自由か	生物学的生命体としての個々人は互いに独立している。が、人生の物語を生きる者同士の生は互いに絡み合い、浸透しあっている。そこで個人はできる限り自由であるべきだとはいえ、「私の身体なんだから、どうしようと私の勝手だ！」と言い切れない事情が生じる。この点を考える。	同　上	同　上
9	規範倫理学の諸理論	今回から3回に亘って、生命と人生の倫理を考える基礎となる諸理論を学ぶ。まず今回は、規範倫理学のさまざまな概念や立場（義務論、目的論、結果主義、功利主義、選好功利主義、状況倫理、徳倫理等々）を概観する。	同　上	同　上
10	倫理原則	「いかにすべきか？」を考えるにあたって、倫理規範を参照しながら考えるのが通常である。諸規範の中でももっとも基礎となり、他の諸規範を支えているようなものを《倫理原則》と呼ぶ。今回は倫理原則について、医療現場で医療従事者に課せられたものを中心に考える。	同　上	同　上
11	社会の中の個人	《社会倫理》をテーマとする。構成員それぞれの福祉のために、社会としてどのような体制をとるべきであるかといった問題の医療・福祉に関連する側面を探る。人権、正義、共同体、自己決定、個人主義、自由主義、共同体主義等の概念をとりあげる。	同　上	同　上
12	ケアという活動	今回以降は、人間同士が共同で進める活動としての医療や福祉のあり方について、倫理面からの考察をする。まず、《ケア》という活動への哲学的アプローチを試み、そこから医療・看護・福祉などに共通して倫理的に押さえておくべき点について基礎的なことを検討する	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	相手の最善を目指す	医療・福祉の活動においては、何をするかという意思決定のプロセスが倫理的に重要である。今回はそのプロセスの要の一つである「相手の最善を目指す」検討について考え、利害のアセスメント（一般的および個別化した）、益と害の双方が見込まれる時にどうするか（二重結果論、均衡性論）といった問題を検討する。	清水　哲郎	清水　哲郎
14	合意を目指すコミュニケーション	医療等の現場における意思決定のプロセスにおけるもう一つの要となる、当事者たちが合意を目指すコミュニケーションのあり方について考える。パターナリズムを脱して共同の決定を目指す場合、インフォームド・コンセント、事前指示、リビングウィルといった事柄をどう理解したらよいかを検討する。	同　上	同　上
15	全体のまとめ 医療現場の個別事例に臨む	最終回は、全体のまとめとして、最後の３回で検討したような倫理的視点から、生命操作技術を駆使した医療における決定について振り返って考える。いくつかの事例を提示して、これまでの検討を活かした検討を試みる。	同　上	同　上

＝　現代思想の地平（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　石田　英敬（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

私たち現代人の人間としての存在の条件、社会の在り方、文化や環境の成り立ちについて、今日の知はどのような問いを立てているのか？現代世界は、思想にとってどのような問題圏として立ち現れてくるのか？現代思想の代表的な思想家の仕事を紹介しつつ、かれらの理論が現代世界の何を理解させるのかを、日常世界の具体的なテーマに取材しつつ明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「現代思想の問いとは何か」	― イントロダクション ― 今日の世界の根本的な思想状況を、1. ポスト・モダン、2. ポスト・グーテンベルク、3.ポスト・ナショナル、4.ポスト・ヒューマン、という四つの「ポスト」状況と定義して、「現代思想の問い」への導入を行う。	石田　英敬（東京大学大学院教授）	石田　英敬（東京大学大学院教授）
2	「ことばの世紀」をめぐって	― フェルディナン・ド・ソシュールの『一般言語学講義』 ― ソシュールが20世紀の始まりに提唱した「一般記号学」の計画を検討し、「言語」を中心に人間の文化と社会を考えることの現代的意義、そして、「メディアとコミュニケーション」が全面化した20世紀以後の世界の条件を考える。	同　上	同　上
3	「記号とイメージ」の時代	― チャールズ・サンダース・パースと現代記号論 ― 20世紀に進行した「メディア革命」を考える理論としてパースの記号論を紹介し、「記号過程」や「記号分類」の概念を手がかりに人間の意味解釈や推論のプロセス、情報の処理について考える。	同　上	同　上
4	「無意識」をめぐって	― 「フロイトの発見」以後 ― フロイトによる「無意識」の発見がもたらした「理性批判」の射程とはどのようなものか。フロイトに始まる「無意識」の概念が現代思想にもたらした問いを、フーコーやサイード、そしてドブレを参照しつつ検討する。	同　上	同　上
5	「文化の意味」	― 「構造主義革命」以後 ― 言語や記号をモデルに、人間の文化を意味の観点から理解しようとした「構造主義」の認識革命をレヴィ＝ストロースやバルトを手がかりに捉え返し、私たちの日常世界を構成する意味作用の原理にせまる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	「欲望とは何か」	― 欲望の主体 ― ラカンの精神分析理論を手がかりに、人間はいかにして「欲望の主体」となるのか、身体イメージと自己、ことばと他者、欲動と無意識など、人間の主体のシンボリックな成り立ちについて考える。	石田 英敬	石田 英敬
7	「権力と身体」	― 権力と主体化 ― 私たちはどのようにして国家や会社やその他の団体組織の成員となり、社会的身体の部分となっているのか。学校や軍隊や工場における集団生活の組織原理とはどのようなものか。ミシェル・フーコーの「規律社会」論を手がかりに、私たちの社会の編成原理について考える。	同 上	同 上
8	「社会とは何か」	― 象徴闘争と社会場 ― ピエール・ブルデューの社会学を参照しつつ、「趣味」や「好み」といった個人的と思われる現象にもあらわれる社会的な意味作用を理解する方法を理解し、象徴闘争の場としての社会の成り立ちについて考える。	同 上	同 上
9	「情報とメディア」の思想	― マクルーハン「メディアはメッセージ」 ― 映画、ラジオ、テレビからインターネットまで、過去1世紀は人類がかつて経験したことのない「メディア革命」の時代だった。マーシャル・マクルーハンの「メディア理解」を参照しつつ、情報とメディアの問題圏を提示する。	同 上	同 上
10	「文化産業と想像力」	― 想像の未来 ― TVドラマやアニメ、ゲームなどの「文化産業」に人びとの想像力が支配される時代に私たちは生きている。いま「想像すること」にどのような意味があるのか、ジョン・レノンの「イマジン」を題材に、アドルノ、ホルクハイマーの「文化産業批判」、フッサールの現象学、スティグレールの「象徴的貧困」論を参照しつつ考える。	同 上	同 上
11	「戦争について」	― 戦争はなぜ終わらないのか ― 人類が経験したことのない世界戦争の世紀ののち、21世紀は新たな戦争の世紀として開始された。なぜ戦争が現代人の根元的な「存在の問い」と結びついているのか、ハイデガーの存在論を参照しつつ、現代の戦争を考える。	西谷 修（東京外国語大学教授） 石田 英敬	西谷 修（東京外国語大学教授） 石田 英敬
12	「宗教について」	― 「宗教の回帰」を問う ― なぜ現代生活において「宗教」が回帰するのか、フランスの法理論家ピエール・ルジャンドルの「ドグマ人類学」や、チュニジアの精神分析家フェティ・ベンスラマの著作を参照しつつ、「宗教の回帰」を問う。	西谷 修 石田 英敬	西谷 修 石田 英敬

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	「ナショナリズムと国家」	― 「ナショナリズム」を克服する ― グローバル化する世界と同時にせり上がってくるナショナリズム、ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』以後のナショナリズム論を視野に収めたうえでナショナリズムの克服を考える。	小森 陽一（東京大学大学院教授） 石田 英敬	小森 陽一（東京大学大学院教授） 石田 英敬
14	「ジェンダーとマイノリティ」	― 「差異と同一性」の共生原理 ― 現代思想の諸理論は、文化差、性差、アイデンティティをどのように考えてきたか、それらの思想的パラダイムによってどのような共生の新しい原理を考えることが実践的に可能になったのか、現代思想の具体的成果を、ジェンダーとマイノリティの問題を手がかりに検証する。	石田 英敬	石田 英敬
15	「現代思想の地平：総括と展望」	― 総括セッション「現代世界の思想的展望」― 講義で扱った現代思想の問題圏を振り返り、２１世紀の私たちの世界の思想課題を展望する。	同 上	同 上

＝国語学概論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　白藤　禮幸（二松学舎大学教授）〕
〔主任講師：　杉浦　克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

世界各国との接触が日常的となった今日、私たちの「国語」は従来とは違った視点で見直し、より意識的になる必要があるのではないだろうか。そのような視点で国語の諸分野を概観し、我々の言語を対照的に捉えることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国語と日本語、国語学の諸分野	我々は私たちの言葉を国語と呼ぶことがあるが、この語は近代になってから、当時の中央集権的な国家を目指してきた動きの中で作られた。欧米から、新しい学問として言語学が導入され、それに伴って国語学という学問が生まれた。私たちが、じぶんの言葉を見詰め直し、その特質について自覚的に意識することの意義について考える。	白藤　禮幸（二松学舎大学教授）	白藤　禮幸（二松学舎大学教授）
2	世界の中の日本語	近時、外国語としての日本語などと、我々の国語を客観的に対照的に捉えようとする態度が必要とされる。国際化の進んだ今日、相互理解のためにも、私たちの国語が、他の言語と比べて、どのような性格を持つのか、世界の諸言語の中での日本語の位置を相対的に考え、言語構造の上で、どのような違いをもっているのかを、音韻、文法、語彙形態などについて考える。	同　上	同　上
3	国語の音韻	言語の最も基本的な単位は、言葉を話す人の声である。国語のそれにはどのような種類があり、それがどのような仕組み、体系をなしているか、直音・拗音・清音・濁音・半濁音・連濁・連声など、国語の音韻独特の諸概念について、その持つ意義に留意しながら考察し、あわせて、他言語との違いが齎らす問題点をも見る。	同　上	同　上
4	漢字音	わが国は古代から、中国から漢字を借りて書くという言語活動を始め、多くの漢語をも導入して我々の語彙を増やしてきた。そのなかで中国音は国語に大きな影響を与えた。日本漢字音としての呉音・漢音などが、何時、どのようにして国語の中に定着したか、漢字音が定着する過程で国語に対してどのような影響を与えたか、漢字音の表記法（字音仮名遣い）にはどのような問題があるか、などについて考える。	沼本　克明（広島大学教授）	沼本　克明（広島大学教授）
5	国語の文字	国語の文字は、世界の諸言語と比較しても、文字に関して極めて特異な特色を持っている。表意文字の漢字、表音文字の片仮名・平仮名、その他、アルファベットやローマ数字など多種の文字を使っている。その背景と問題点を考える。	白藤　禮幸	白藤　禮幸
6	国語の表記	多種の文字を用いる国語の表記には、それ故の問題点がある。その表記の歴史的な変遷を概観し、仮名遣い、漢字制限、漢字仮名交じり、片仮名・平仮名の使い分け、句読点その他の記号の用法など、現代語の表記に関する問題点を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	国語の文法の構造	日本語と英語の代名詞を比較すると、英語では、"they their them" と変化するが、日本語では、「彼らが、彼らの、彼らを」のように変化する。このように、格的意味の違いを、英語では単語の一部を取り替える手続きによって表すのに対して、日本語では「を、に、と」などの異なる助詞を付けることによって表す。文法的な意味を表す形を作る際の日本語の語形を作る手続きには、英語やその他の言語と較べてどのような特徴があるかを、名詞、動詞、形容詞を中心に考えてみたい。	鈴木　泰（東京大学大学院教授）	鈴木　泰（東京大学大学院教授）
8	文語と口語	日本語において、活用は、何のために、どのようにして生まれたか。そして、活用体系は古代語から近代語に移り変わる中でいかなる変遷を辿ったか。そうした変遷の中で変わらなかったものは何か。また、それによって日本語の表現はいかなる変化を蒙ったかを考える。	同上	同上
9	文章・文体	文章研究の概要を実際の文例で示し、また国語の文体について、近現代の文例から、その特色をになう要素を考える。さらに歴史的な観点で主に表記面から、漢文とその訓読に由来する類と、和歌や女流日記等の平仮名文に由来する類に整理して、文体の成立と発達を概説する。	杉浦　克己（放送大学助教授）	杉浦　克己（放送大学助教授）
10	敬語	敬意に基づく待遇表現としての敬語の基本的な役割の観点から敬語を分類整理し、その発達・変化を概説し、さらに現代では身内他人敬語・荘重語のように人への敬意ではなく場への配慮として用いられる敬語へと変化しつつあることを述べる。	同上	同上
11	国語の語彙	意味を表す最小単位として単語をとらえ、単語とその意味はどのようにとらえることができるかを、考え方の実例を挙げて概説し、単語はどのように習得され、どのように頭の中で整理されて用いられているかを考える。	同上	同上
12	和語・漢語・外来語	国語で用いられる語彙は、その由来によって大きくいくつかのグループに大別できることを述べ、それは単に由来のみでなく表記や文体等とも関係して、国語の実用上に大きな影響を与えていることを、実例を挙げながら概説する。	同上	同上
13	方言	日本には、そのせまい国土のわりには、土地によって言葉が違うという方言の差が著しく認められる。その方言の姿を音韻・語法・語彙について、いくつかの事例に基づき、土地・所による言葉の形の差を大きな視点で概観する。	小林　隆（東北大学助教授）	小林　隆（東北大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	国語研究の歴史	国語について、どのような研究がなされてきたか、我々の先人は、国語のどのような面に問題を感じてきたかを、中古以降の音韻・文字・語法の研究書を取り上げ、そこで論じられたことを概観し、あわせて国語の性質を考える。	白藤　禮幸	白藤　禮幸
15	国語の将来	国語の抱える問題点とその歴史的な背景を概観し、現代社会の多様化や情報化等と関連づけて概観し、具体的な国語政策、特に国語科教育との関わりを一つの例として、現状と今後の方向を考える。	杉浦　克己	杉浦　克己

＝　国文学入門（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　野山　嘉正（放送大学教授）〕
〔主任講師：　林　　達也（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

国文学全般について広い視野から展望するとともに基本的な教養に必要な事項や定説とされる知見に関する情報を提供する。また、学問の基礎作業について注意を喚起する。さらに、先進的な問題をも紹介しつつ概説を超えて研究のスタイルについても参考となるように全体を歴史的に通観する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	本講義の目的と方法について述べる。時代別の構成をとらずに、韻文・散文・漢詩文の三分野を柱として講義を展開していることの理由を説くことからはじめて、全体の配置・構成を紹介する。そして、特に、日本古典文学における韻文の問題点がどのあたりにあるのかについて、基本的な考えを示す。	林　達也（駒澤大学教授）	林　達也（駒澤大学教授）
2	歌謡と和歌	韻文の初発に位置付けられる上代歌謡についてその特質を叙述し、万葉集和歌との連続と不連続について考察する中から、和歌原初の形質、万葉集和歌について考察する。さらに、平安から近世までの歌謡についても概観し、歌謡の特質と時代性について言及する。	同　上	同　上
3	八代集の和歌	古今集から新古今集までの勅撰集の和歌に即しながら、平安から鎌倉初期に至る時代の和歌について、歌詞や和歌表現の形成、和歌と物語の関わり、和歌の詠まれる場、和歌と評論（歌論）等の諸問題を取り上げ、和歌の定着と展開、その価値について考える。	同　上	同　上
4	和歌の諸相	勅撰集では新勅撰集・玉葉集・風雅集を取り上げ、中世の自然詠・恋歌を概観する。さらに、応仁の乱以降の和歌について、貴族・連歌師・武人・地方歌人相互の関わりを通して考察し、近世の和歌については、堂上と地下との関連、儒学や国学との交渉の過程からいかなる状況が生じていたのかに言及し、幕末の和歌に及ぶ。	同　上	同　上
5	連歌と誹諧	平安末期の勅撰集『金葉集』にはすでに連歌が収録されているが、慰み物のであった連歌が、中世中期に至って文芸として盛行する過程を追いながら、連歌の文芸としての価値を見定める。また、連歌から派生し、江戸期に入って文芸の主流となった俳諧については、主要な俳諧師の活動を把握し、俳諧の文芸性、俳諧盛行の意味を考察する。	同　上	同　上
6	王朝の漢文学	日本文学において漢文学の果たした役割を概観した上で、平安時代を中心に、奈良時代から鎌倉時代前期に至る、主に貴族が担い手となった漢文学について、ジャンルとの交流をも視野に入れつつ考える。	堀川　貴司（鶴見大学教授）	堀川　貴司（鶴見大学教授）
7	禅林の文学	鎌倉時代中期になって新たに漢文学の担い手として登場した禅僧たちの文学について、禅宗寺院という場と社会・政治、特に武家政権との関わりに注意しながら、その変遷をたどっていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近世の漢文学	儒学者たちによって担われた江戸時代の漢文学について、禅林の文学の継承と否定、同時代の中国の学芸との関わり、学問と文学の分離、漢詩の大衆化など、様々な視点から考え、近代文学との接点についても触れる。	堀川　貴司	堀川　貴司
9	古伝承の時代から物語の時代へ	『古事記』や「風土記」の中に語られている種々の伝承に触れることからこの講義を始める。伝承世界が文学的な特質を得て徐々に成熟し、やがて平安時代の『竹取物語』の如き物語作品を創造するに至るありようを考察する。	高橋　文二（駒澤大学教授）	高橋　文二（駒澤大学教授）
10	物語の盛期	仮名の出現は物語を生み、その表現と内容の豊かさの誕生に大きく寄与する。ここでは『源氏物語』をはじめとする平安時代の物語諸作品の表現の特質と意義を探り、後の時代への影響なども考察する。	同　上	同　上
11	日記と随筆	自己省察の表れとして独特の思念を展開させた平安時代・鎌倉時代の日記や随筆の諸作品に触れ、それらの表現の特質について考え、物語とは違った散文表現の特質について考察する。	同　上	同　上
12	説話と軍記	『今昔物語集』のような豊富な話題に満ちた説話集や『平家物語』のような合戦の物語を対象にして、王朝女流の文学世界とは趣を大きく異にした、庶民や武者や僧侶の世界に密着した作品の表現の特質と意義を探る。	同　上	同　上
13	三都の文学	京・大坂・江戸という三都に展開した文学世界の特質を考える。話題は御伽草子や仮名草子から始まり、浮世草子や読本の諸作品に及び、それらの表現の特質や内容の多様さにふれ、その意義を考察する。	同　上	同　上
14	詩歌の近代	西洋詩に触発されて新体詩が生まれたことから開始して、古典詩歌がその影響をうけ、明治以後の社会との複雑な関係を維持しつつ変容していった様相を要約して示す。併せて文学の近代化への展望について考察する。	野山　嘉正（放送大学教授）	野山　嘉正（放送大学教授）
15	近代の小説	明治以降、西洋の「ノベル」の概念が導入されたことによって、「小説」が近代のジャンルとして成立し、変容を遂げていった過程、また、言文一致が進む中で小説の文体や方法意識がさまざまに変化していった様相を、「小説」概念の変容の歴史として概観する。	安藤　宏（東京大学大学院助教授）	安藤　宏（東京大学大学院助教授）

＝　近代詩歌の歴史（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代社会において詩歌の変革が不可避の大きい問題であったことを歴史的に明らかにするのが目標。前代からの連続としての短詩形文学と西洋詩に由来する新体詩の関連に注目して、内部から近代詩歌の本質を解明する。さらに、散文・小説との関連にから近代詩歌を分析する。('99) で引用又は分析の対象とした詩歌作品のかなりの部分を('04)では差し替え、脚注を細かくつけて読みやすくする等の改訂を施す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	－はじめに－近代詩歌とは何か	ことばの定義と全体の構成、詩歌の内外を総体として考える。明治期に全領域の基本構造を見定め、さらに散文・小説まで視野に組み込んで考察する。	野山　嘉正（放送大学教授）	野山　嘉正（放送大学教授）
2	詩歌の変革　正岡子規１	正岡子規１　第２回から６回まで子規を視点に据えて考える。前代の韻文・詩歌の状況と、そこから出発した子規のありかた、及び変革の不可避であったことを述べる。	同　上	同　上
3	文学としての詩歌　正岡子規２	正岡子規２　明治二十年代文学を概観し、そのなかで詩歌が占めていた位置を考えながら子規の存在意義を見定める。	同　上	同　上
4	俳句の変革　正岡子規３	正岡子規３　子規の最も重要な成果である俳句革新の具体的な様相を追跡する。	同　上	同　上
5	俳句革新から短歌革新へ　正岡子規４	正岡子規４　子規のもう一つの大切な仕事であった短歌革新について概説する。	同　上	同　上
6	歌俳の系譜　正岡子規没後	子規の理想がどの程度実現したか、または挫折したか、をできるだけ細かく観察し、併せて結社の展開の姿を略述する。	同　上	同　上
7	新体詩と短歌　明星派１	明星派１　初期明星派が結成される過程と結社に対する考えかたを略述する。主な対象は与謝野鉄幹・晶子。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	新体詩と短歌　明星派２―白秋と啄木	明星派２　詩歌の全領域を自分の個性として構想した北原白秋と石川啄木とについて考える。	野山　嘉正	野山　嘉正
9	新体詩と短歌　明星派３―白秋の全領域	明星派３　第８回に引き続き白秋の後半生に集中して詩歌の全領域への展開の具体的な事実を追跡する。	同　上	同　上
10	詩歌と小説１―近世から近代へ―	近世から近代へ　詩歌と小説の歴史的な位置関係の変化を観察する。併せて小説偏重の文学史を見直す。　取り上げる主たる対象は坪内逍遙と北村透谷。	同　上	同　上
11	詩歌と小説２　島崎藤村	島崎藤村　　いわゆる〈詩から散文へ〉という図式を再検討する。詩歌と小説に対する考えかたを考察する。	同　上	同　上
12	詩歌と小説３　―『抒情詩』の詩人たち―	柳田国男と国木田独歩　柳田の散文の背景、独歩の内部の詩歌などを考え、詩歌と韻文の関連を論ずる。	同　上	同　上
13	詩歌と小説４　森鷗外	森鷗外について　「啓蒙家」の姿を見せながら、他の追随を許さぬバランス感覚を持っている鷗外が、文学史で果した役割を詩歌を通じて考える。	同　上	同　上
14	詩歌と小説５　夏目漱石	夏目漱石について　第一級の俳人、漢詩人であった面を強調することで漱石の本質を再検討する。	同　上	同　上
15	結びに代えて芥川龍之介	芥川龍之介を転回点に、明治大正期以後の詩歌について、本書の立場から展望する。	同　上	同　上

＝近代日本における外国文学の受容（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　山内　久明（放送大学教授）〕
〔主任講師：　川本　皓嗣（大手前大学教授）〕

全体のねらい

日本の近代化のなかで文学が果たした役割は大きく、特に、「近代的人間」の形成には、時として決定的な役割を果たしてきた。明治以降の日本において、どのような外国文学がどのように受け入れられ、あるいは受けいれられなかったか。読者、翻訳、創作、外国文学研究との関わりや、比較文学研究、文学研究の重要な領域である「受容論」の観点などから、日本の近代化にさいして外国文学の果たした役割を再検証し、現代の文化に及ぼした作用を分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	外国文学の受容と比較文学	近代日本における外国文学の受容には、一般読者、翻訳家、創作家、研究者などさまざまのレベルがあるが、いずれも自己と他者との危機的な対峙であり、さまざまの劇が展開された。問題の所在を予備的に考察する。	山内　久明（放送大学教授） 川本　皓嗣（大手前大学教授）	山内　久明（放送大学教授） 川本　皓嗣（大手前大学教授）
2	近代日本文学とイギリス文学 (1)：1880-1900	－逍遙の小説理論と実践、『新體詩抄』の訳詩、透谷とロマン主義－ イギリスの小説論を参照した坪内逍遥の『小説神髄』と実作『當世書生氣質』との乖離、グレイの「エレジー」と矢田部良吉訳「墳上感懐の詩」とのずれ、イギリス・ロマン主義と向き合う北村透谷の苦闘などを追う。	山内　久明（放送大学教授）	山内　久明（放送大学教授）
3	近代日本文学とイギリス文学 (2)：1900-1930	－英文学者漱石から作家漱石へ、逍遙とシェイクスピア－ 学生時代から早熟性を示し、ロンドンでの「尤も不愉快の二年」を経て帝国大学講師となるが、辞して作家へと転身する夏目漱石にとってイギリス文学・文化とは何であったのか。シェイクスピア全訳をなす坪内逍遙と併せて考察。	同　上	同　上
4	ドイツ文学の受容	明治初期に翻訳されたドイツ文学の作品の中から、シラー『ヴィルヘルム・テル』、ゲーテ『若きヴェルテルの悩み』、グリム兄弟の童話『灰かぶり（シンデレラ）』、ハイネの詩「ローレライ」、ブッセの詩「山のあなた」等を例に、それらの翻訳の特質・魅力を考える。	中　直一（大阪大学大学院教授	中　直一（大阪大学大学院教授
5	ドイツ文学と近代文学	ドイツ文学から影響を受けた日本の作家・詩人を取り挙げる。まず森鷗外がドイツ文学をどのように翻訳したのかを、詩および『ファウスト』訳から考える。つづいて薄田泣菫、田山花袋、久保栄がドイツ文学から影響を受けて書いた作品を取り挙げ、彼らの創作活動の背景をさぐってみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	上田敏『海潮音』とフランス象徴派の詩	フランス近代詩の導入に決定的な役割を果たした上田敏の訳詩集『海潮音』（明治38年）を取り上げて、いわゆる「象徴詩」が当時の日本でどう受け止められ、どう受け入れられたかを考える。	川本　皓嗣	川本　皓嗣
7	ヴェルレーヌ、マラルメから有明、白秋へ	『海潮音』を代表する訳詩、ヴェルレーヌの「落葉」とマラルメの「嗟嘆」を読み、そうした僅かな見本をもとに独自のみごとな「象徴詩」を生み出した、蒲原有明と北原白秋の作品（「月しろ」と「月の出」）を読む。	同　上	同　上
8	ロシア正教と日本―ドストエフスキー文学の背景	ロシア文化の基底にはロシア正教があり、ドストエフスキーの文学も核心にこの前近代的宗教を含んでいる。そのことを、宣教師ニコライを手がかりに語る。	中村　健之助（大妻女子大学教授）	中村　健之助（大妻女子大学教授）
9	昭和のドストエフスキー解釈―小林秀雄と埴谷雄高	日本のドストエフスキー論者の代表ともいうべき小林と埴谷のドストエフスキー理解の特徴を明らかにし、それがロシアの作家ドストエフスキーからは遠く、きわめて日本的であることを示す。	同　上	同　上
10	スペイン文学の受容―明治の『ドン・キホーテ』	明治期におけるスペイン文学の翻訳紹介は、セルバンテスから始まった。フランス人 の書いたものとして、結婚詐欺の話や陵辱された娘の数奇な運命が紹介される一方で、セルバンテスの代表作『ドン・キホーテ』の最初の翻訳は、道徳的観点から徹底的な書き直しが行われた。こうした異なる受容の背景を検証する。	斎藤　文子（東京大学大学院助教授）	斎藤　文子（東京大学大学院助教授）
11	ラテンアメリカ文学の受容	ラテンアメリカ文学の存在が日本で広く認められるようになったのは、わずか最近３０年ほどのことである。紹介がはじまったのは、何が契機だったのか、どのように紹介されていったのか、日本の文学者たちはそれをどう受け止めたのか、などを探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	佐藤春夫と台湾	佐藤春夫は大正９年に台湾を訪れ、古都台南を背景とした「女誡扇奇譚」、台湾のさまざまの知識人の類型を点描した「殖民地の旅」などを書いている。「殖民地の旅」には、抗日運動の指導者林献堂、清朝の遺民として日本人とは会わなかった詩人洪棄生のことなどが出てくるが、春夫は洪棄生に面会を申し入れて断られ、かえってそのことに感心し、その詩を紹介している。この旅は春夫の「からもの」趣味に触れるところがあったと同時に、植民地支配の実態について考えさせるものでもあったようだ。こうした作品を通して春夫が台湾で何を見たのかを考えてみる。	松永　正義（一ツ橋大学大学院教授）	松永　正義（一ツ橋大学大学院教授）
13	台湾の日本語文学	『台湾万葉集』は、戦後台湾の人たちが日本語で作った短歌集である。作者たちの世代は李登輝などと同じ日本語世代の人たちであり、戦後日本語から中国語への言語の切替に苦しんだ世代でもある。彼らにとっては日本語はむしろ「自分たちの言語」として感じられていて、こうした日本語に対する彼らの位相は、金石範、金時鐘などの在日朝鮮人作家のそれとは大きく異なっており、その違いの背景には台湾の戦後社会の独自の問題構造がある。そうした問題構造を説明しながら、彼らにとって日本語で自己表現をすることがどのような意味を持つものなのかを考えてみる。	同　上	同　上
14	『アラビアン・ナイト』と日本人	『アラビアン・ナイト』は『ルバイヤート』と並んで、日本人にも馴染みのある数少ない中東文学の一つである。明治以来、それが翻訳を通じてどのように受容され、諸文藝にいかなる影響を与えたかを概観する。	杉田　英明（東京大学大学院教授）	杉田　英明（東京大学大学院教授）
15	世界の文学と日本の文学	全十五回のまとめとして、近代日本における外国文学の受容の諸相ー翻訳、創作、研究などーを振り返るとともに、日本の文学が外に向かって自らを発信し、世界の文学に参入する可能性はあるのかを問う。	山内　久明 川本　皓嗣	山本　久明 川本　皓嗣

＝東アジアのなかの日本文化（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：村井　章介（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

東アジアとの交流のなかで歩んできた日本文化の姿を、さまざまなレベルでの「異文化接触」という視点から、エピソード中心に描く。とくに、その接触を支えた貿易船の往来に注目する。とりあげる時代は、おおよそ奈良時代から江戸時代初期までとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	遣唐使と中国文化の輸入	日本古代の律令体制は、遣唐使により唐の統治制度を輸入し、それを日本の実情に合わせて修正することによって作られた。717 年に遣唐留学生として渡海した阿倍仲麻呂と吉備真備の２人の事跡を通じて、文化面を中心に遣唐使の意味を考える。	村井　章介（東京大学大学院教授）	村井　章介（東京大学大学院教授）
2	破綻する「小中華帝国」	古代の日本は、朝鮮半島の諸国からの朝貢を受けることで「小中華」を自認していたが、統一新羅が対等の関係を求めるようになると、842 年に帰化を認めない政策に転じる。以後、日本を「神国」とし、中国と対等、朝鮮より上位という建前に固執することが、貴族層の対外姿勢の基本となる。	同　上	同　上
3	渤海使節と詩を競う	日本海の対岸に栄えた渤海王国は、９世紀半ば以降は日本と国交のあった唯一の国だった。渤海使節は日本海を越えて北陸の諸港に到着し、京都に来て菅原道真ら文人貴族と漢詩の贈答を行った。その詩の会は、両国が文化的能力を競いあう場となった。	同　上	同　上
4	生身の釈迦、海を渡る	東大寺の僧奝然は、建国後まもない宋に渡航し、印刷された大蔵経と釈迦の生前の姿を写したとされる仏像を携えて帰国した。嵯峨の清涼寺に現存する釈迦像は「生身の釈迦」として絶大な信仰を集め、鎌倉時代を中心におびただしい模写像が造られた。	同　上	同　上
5	刀伊の入寇、被害者の証言	1019 年に女真人の海賊が北九州を襲った「刀伊の入寇」に際し、賊に捕われたが高麗軍に救出され、生還した二女性がいた。京都の貴族の日記に見える彼女らの目撃談から、女真海賊の行動、高麗政府の対応、日本の支配層の関心、日本国内の情報伝達ルートなどを考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	海に開かれた窓、博多と寧波	日本と中国が互いに相手に開いた窓であった博多と寧波という２つの港町をとりあげ、外交や貿易上の機能を見る。とくに近年の発掘成果に基づく中世都市博多の研究を紹介し、国家への帰属を超えた貿易商人の居住や営業の形態を復元する。	村井　章介	村井　章介
7	朝鮮渡来の海洋性陶器、カムィヤキの世界	11～13 世紀に奄美群島徳之島で大規模に生産され、九州島南部から先島までの広範囲に流通したカムィヤキという須恵器がある。その技術の系統、関与した人間集団や流通組織など、文字史料からは解明不可能な問題に、考古学研究がどこまで迫っているだろうか。	同　上	同　上
8	宋へ渡ろうとした鎌倉将軍	鎌倉幕府第３代将軍源実朝は、東大寺再建を指揮した中国人技術者陳和卿から医王山の高僧の再誕だと言われたことを契機に、宋への渡航を思い立ち、和卿に大船を造らせたが、進水させることができず挫折した。この事例から、造作技術や仏教信仰などの国境を超えた広がりを観察する。	同　上	同　上
9	蒙古襲来と異文化接触	博多湾岸における蒙古軍と鎌倉武士との戦いは、武器や戦法においてきわめて対照的で、家単位の軍団による個人戦で望んだ武士たちは苦戦を強いられた。異文化接触とそれが日本人の意識に残した刻印という観点から、蒙古襲来の意味を考える。	同　上	同　上
10	看板としての寺社造営料唐船	14 世紀前半を特徴づける寺社造営料唐船は、従来日本の支配層が特派した貿易船と見られてきた。この通説を、新安沈船という考古遺物や禅僧の伝記史料から見直し、中国人商人の経営する貿易船に日本の公権力が与えた看板にすぎなかったことを提示する。	同　上	同　上
11	輸入文化としての禅宗	わび、さび、幽玄などの言葉で象徴され、日本文化の枠とされることの多い禅宗文化は、実はその初期においては典型的な輸入文化であった。その日本定着は、13～14 世紀に東シナ海をひんぱんに往来した貿易船に便乗した禅僧たちによって担われた。	同　上	同　上
12	文化史上の「日本国王源道義」	15 世紀初頭に足利義満が明皇帝の册封を受け入れて「日本国王」に封じられたことは、日本が 900 年ぶりに中国と正式の国交を結ぶという画期的事件であった。それは、倭寇という新たな質の人的接触がもたらしたものであり、朝幕の対外観を大きく揺さぶるできごとであった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	対馬のサバイバルゲーム	朝鮮半島へのゲートウェイに位置する対馬は、政治的には日本に帰属しつつも経済的には朝鮮半島に頼って生きてきた島である。その対馬が、16世紀末の文禄・慶長の役で侵略軍の先鋒役を担わされた結果、江戸初期には生き残りを賭けて朝鮮外交を展開することになる。	村井　章介	村井　章介
14	東アジア知識人の共有文化	中国周辺において文明の証は中国文化の保持であり、とくに儒学と漢詩は民族の異なる知識人がつきあう際の必須の教養となった。一方で中世の日本は東アジアでもっとも仏教が栄えた地域であった。江戸幕府が儒学を正統としたことで状況にどのような変化が生じたか。	同　上	同　上
15	明清交代を見すえる朝鮮と日本	「華夷変態」という言葉で要約される17世紀半ばの明清交代は周辺に波紋を広げ、朝鮮は正統的儒教の継承者として自己を規定し、江戸幕府は武力で明の復興を援助することを検討した。東アジア全体に世界観をめぐる深刻な動揺が拡がっていく状況を観察する。	同　上	同　上

＝人文地理学　（‘０４）＝（TV）

〔主任講師　：小林　　茂　(大阪大学大学院教授)　〕
〔主任講師　：杉浦　芳夫　(東京都立大学大学院教授)　〕

全体のねらい

グローバル化がすすむ今日、多様な人間社会はますます複雑に変動し、これをどう認識するかが大きな課題となっている。大学レベルの人文地理学初学者のための入門として、まずその古典的視角の理解をはかるとともに、現代における発展を追跡し、さらにそれを基礎として今日の多彩な問題の理解にむけた課題を検討する。あわせて、高等学校までの地理のイメージのリニューアルをはかりたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	多様な世界へのアプローチ―人文地理学とはどんな学問か―	グローバル化がすすむ今日、地球上の多様な人間社会はますます複雑に変動し、これをどう認識するかは私たちの大きな課題となっている。多様な世界とその変動へのアプローチのひとつとして人文地理学を位置づけ、その主要テーマを解説する。	小林　茂 (大阪大学大学院教授)	小林　茂 (大阪大学大学院教授)
2	地理的知識の発展と地図	世界の人びとは、自分たちの居住地に関する地理的知識を蓄積し、それをさまざまな手段で表現してきた。地図はそれらを視覚的に統合する媒体として大きな役割をはたし、正確さをましながら多彩に発展してきた。地理的知識の発展について、その地図的表現の歴史をみながら概観したい。	久武　哲也 (甲南大学教授)	久武　哲也 (甲南大学教授)
3	人文地理学の先駆者と古典理論	人文地理学の確立期であった19世紀には、今日につながる、3つの大きな課題に関心が展開した。その第1は、人類による環境に対する適応および環境の改変の問題であり、アレクサンダー・フォン・フンボルトらによって展開された。第2は「地域の個性」の認識で、カール・リッターやヴィダル・ド・ラ・ブラーシュによって推進された。第3は「空間と立地」の問題で、フォン・チューネンの『孤立国』以降、立地論として進歩する。こうした近代人文地理学の発展過程を、その時代的背景と結びつけながら概観する。	同　上	同　上
4	環境への適応	人びとの環境への適応が、さまざまな戦略や方法で実現されることを、具体例(ネパールの中間山地農村におけるマラリアに対する文化的適応と生物学的適応)を紹介しつつ解説する。また、環境と生活様式、民族分布との関係など、世界の多様性が形成される背景のひとつに環境への適応があることを示す。	小林　茂	小林　茂
5	資源利用と景観	環境への適応の一局面である資源利用が、景観の形成に密接にむすびついていることを、具体例(福岡県太宰府市の農業水利と里山利用)を紹介しながら解説する。また資源利用の変化が景観をどのように変化させるかについても具体例に即して示し、景観のもつ意味について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	農村・定期市・都市—中心地理論からみた地理空間—	農村空間を背景に都市的集落が成立するプロセスを中心地理論的に説明する。まず経済発展の低い段階では定期市システムが成立することを、J.H.スタインのモデルを用いて説明する。ついで、定期市システムを克服して都市的集落の階層的配置(中心地システム)が成立することを、W.クリスタラーのモデルを用いて説明する。	石原　潤(奈良大学教授)	石原　潤(奈良大学教授)
7	計量革命	1950 年代中葉のアメリカ地理学界で起こった計量革命(地理学の理論化・数量化の動き)は、世界の地理学の学問内容を刷新した。計量革命の背景を当時のアメリカの社会や地理学界の現況と関係づけて説明するとともに、計量革命がめざした新しい地理学(「空間の科学」としての地理学)について概説する。	杉浦　芳夫(東京都立大学大学院教授)	杉浦　芳夫(東京都立大学大学院教授)
8	都市システム	都市をシステム論的に記述・分析する視点は、1960 年代から人文地理学にとりこまれる。そこでは、個々の都市をシステムの構成要素とみなし、複数の都市間の機能的な関係を特定する都市群システムの視点と、都市内部の部門間の関係から1つの都市をシステムとみなす都市内部システムの視点から研究が推進された。これらにより、時空間的な都市システムが、どのように記述され、説明され、さらには予測されているかを述べる。	矢野　桂司(立命館大学教授)	矢野　桂司(立命館大学教授)
9	都市空間と人間行動	現代都市における都市化・郊外化の進行は、都市空間の拡大とともに、都市内部の機能地域分化や居住地域分化をもたらす。こうした都市空間の構造変容を検討するとともに、そこで繰り広げられる都市住民の日常的な活動(就業や通勤など)の空間的な展開を考察する。	岡本　耕平(名古屋大学大学院教授)	岡本　耕平(名古屋大学大学院教授)
10	GIS 革命	1980 年代後半に欧米で始まる地理情報システム（GIS: Geographic Information Systems）革命は、紙地図からデジタル地図への単なる IT 技術の地理学の導入にとどまらず、地理情報システム（GISystems）を地理情報科学（GIScience）へと展開させた。この革命がどのように進展したのか、そして、膨大な地理情報と高速コンピュータの出現によって、どのような新しい地理学的研究分野が拓かれたのかを紹介する。また、バーチャル空間などの新しい空間概念の地理学への影響などに関しても、言及する。	矢野　桂司	矢野　桂司
11	地理情報科学	1960・70 年代に構築された地理学における様々な理論モデルは、GIS 革命を経て、膨大なデジタル地理情報の創出や、それらを処理するための高性能コンピュータや AI を始めとする新しい分析手法の出現によって、現実世界に適用されるようになった。ここでは、大型店舗の進出によるインパクト分析などのモデリング研究、GIS を活用した住民参加型の地域計画手法を紹介する。	同　上	同　上
12	現代空間と人間	情報技術の革新は、人々の生活空間に産業革命期に匹敵するほどの大きな影響を与える可能性がある。情報化の進展は空間的制約を取り除く一方で、新たな空間的差異を生み出しつつある。同時進行する経済のグローバル化と絡めてこの問題を検討する。	岡本　耕平	岡本　耕平

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	発展途上国の都市生活	郊外化・情報化のすすむ先進国の都市に対して、発展途上国では、農村から都市への人びとの移動が継続している。その結果発生してきた都市のスコッター地区の生活の実態を紹介し、住民の構成や移動性の高さを検討する。また住民のコミュニティーと行政の緊張関係のなかで、施設やサービスが徐々に向上していることも示す。	池谷　和信(国立民族学博物館助教授)	池谷　和信(国立民族学博物館助教授)
14	発展途上国の環境問題	熱帯林の破壊、稀少動物の絶滅など、発展途上国の環境問題がひろく報告されえいる。ここではそうした問題のひとつとして野生動物の保護をとりあげ、その住民との関係を検討する。保護区での住民の資源利用がみとめられているアマゾン上流と、保護区外への住民の移住がすすめられているカラハリ砂漠を対比しつつ、その外部世界からの影響にも注目する。	同　上	同　上
15	人文地理学と現代社会	現代社会における人文地理学研究の役割の例示にむけて、多摩ニュータウンを対象に、前章までに示された手法を援用して分析し、その人々の居住との関係を検討する。ベッドルーム・タウンとして開発されたニュータウンが、高齢者や既婚女性にとってはかならずしも住みやすくないことを示し、場所の理解にいたる人文地理学研究の道を示す。	杉浦　芳夫	杉浦　芳夫

＝　法の世界（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　六本　佳平（放送大学特任教授）〕

全体のねらい

「法」は、高度に専門的な世界であるが、個人――企業も法の重要な利用者であるが――の日常生活上の問題解決に関係が深い。その意味で医療と似ている。病気が誰にも起きるように、法問題も全体社会・部分社会の至るところで起きる。しかし、法は医療と違って、人々から疎んじられ、またしばしば誤用・悪用される。それには、人間の身体の病理については、親から子に伝えられる常識知の蓄積があるのに対して、一般人に対する法教育は無きに等しいことが一因となっていると思われる。法についても、一般人も知っておくべき基本部分があるのである。この授業番組では、法の世界への案内として、法に特有の性質、法の長所と限界、法のとる形態の多様性、実定法と生きた法、日本の法システムの基本的仕組み、法システムの働き方、法思考、法正義論、市民の法にたいする姿勢などについて論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序	序論として、この授業番組全体の趣旨、構成について説明し、内容を予告する。「法」という現象、ないし秩序装置の特性、法の専門性、法の日常生活にとって法がどのように現れるか、法的体験、法の改善、法との付き合い方など。	六本　佳平（放送大学特任教授）	六本　佳平（放送大学特任教授）
2	法とは何か	「法とは何か」をめぐって蓄積されてきた法哲学および法社会学の論議を回顧し、いろいろな見方を紹介する。未開・古代社会や国際社会など諸種の社会の「法」のあり方、「法」ということばの定義をめぐる論議、その実際的・規範的意味、「法」という現象の経験的性質、法と道徳、法と実力、形式と実質、「法」の中心的な要素などについて説明する。	同　上	同　上
3	法のしくみ	現代の法理論に従って、「法」を拘束力ある公式の（実定的な）規範体系にもとづいて秩序を維持運営するシステムとして理解し、その原理的性質、法規範と裁判を中心とするシステムの構成要素、その特有の社会的機能、道徳・習俗との違い、（実力）強制装置との関係役割などについて説明する。また、形式と実質、実体法・手続法・組織法・議事ルールにも触れる。	同　上	同　上
4	法のはたらき	社会の秩序装置の一つとしての現代の実定法システムが果たしうる固有の機能について、公式的・明示的規範の定立、解釈、規範体系の統合、法に内在する正義（公平と衡平）、紛争処理、社会統制、規範教育、社会変化に即した規範変更、法代替手段などについて説明する。	同　上	同　上
5	法と社会	法と権力、法と道徳などの古典的問題を、法システムと社会システムとの関連として説明する。法と政治・立法・司法・行政との関係、経済と法、科学・教育と法、文化と法、法と慣習・道徳等の社会規範や生きた法との関係、法の変化などがテーマとなる。	同　上	同　上
6	法と文化	現代の法システムは、基本的に西洋近代型のものであり、形式的で合理的な類型に属する。この類型の中にも、コモンロー系、大陸法系などいくつかの法系が区別され、法文化がある。中国やイスラーム法系もある。それら法系・法文化間の相互影響や継受の現象もある。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	日本の法	日本は、明治維新以後、西洋法の移入によって近代法システムを形成し、発展させてきた。当時の支配的な法観、それ以後の発展、およびそれ以前の法秩序のあり方について振り返り、日本社会の近代化の課題との関連、東西法文化の交錯についても触れる。	六本　佳平	六本　佳平
8	実定法	現代日本の法システムを基準として、その存在形態について説明する。立法・司法・行政の機構をはじめ、種々の存在形式（憲法、法律、規則、条令、判例、慣習など）による法規範の階統構造に触れる。また、刑事と民事、法実現の諸手段、法的制裁の意味などについても説明する。	同　上	同　上
9	法律家	法は高度な専門分野として、裁判官・弁護士・検察官などの法律プロフェッションによって担われる。法律家の歴史的発展、法律家の固有技能、養成や社会組織、高度分化社会におけるプロフェッション化の不可避性と派生問題、法役務や法コミュニケーションなど、専門世界と一般人とのインターフェースの問題について、医師と比較を交えて説明する。	同　上	同　上
10	法思考	法は、一般的規範の個別ケースへの適用というメカニズムを通して働く。それは、法規範の性質によっても異なる。そこで駆使される法律家に固有の技能としての法の解釈と適用の技術、そこで用いられる論理と修辞について説明する。体系的一貫性の要請と具体的・実質的妥当性の要請との関係、法適用と事実認定、規範の種類と裁量などに触れる。	同　上	同　上
11	法の発展	今日では、法規範は、社会的目的に即して作られ、解釈・適用され、また変更され発展する。法は裁判を通しても細密化され、補完されるが、主としては、立法過程を通して発展する。学者の研究も重要な役割を果たす。社会の要求がどのようにして認知され、法システムにインプットされ、法的形式を与えられ、法規範として実現するか、その社会過程について説明する。	同　上	同　上
12	法の正しさ	国民に拘束力を持つ実定法規範の内容がどうあるべきかに関わる正義論は、法や法を含む統治体制の正当性をどのような価値や論理で弁証するかをめぐる政治・道徳哲学的な論議である。イデオロギーと言ってもよい。自然法論や法実証主義論、日本国憲法が前提とする国民主権、基本的人権や法の支配などの基本原理についても触れる。	同　上	同　上
13	法的正義論	ミル、ベンサム、マルクシズム、ケルゼン、ハート、ロールズ、などの、現代欧米の正義論を中心に紹介する。	同　上	同　上
14	法と国民	国会や地方議会の法（条例）案審議に至る立法の政治過程や裁判過程のほか、行政による規制、計画、指導、さらに契約書や学校規則など、日常生活の中で法がとるさまざまな姿について説明する。その中で、国民が法に対して受動的な遵守者としてのみではなく、法役務や法的手段の利用者として、また告発者や苦情申し立て者として能動的に関わることを説明する。法の専門世界と素人の世界を結ぶアクセスと助言サービスの問題にも触れる。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	法学の諸分野	公法・私法・国際法など法の諸分野、および実定法学・基礎法学など法学の諸分野について説明し、最後に全体のまとめを述べる。	六本　佳平	六本　佳平

＝日本国憲法（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　大石　眞（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

比較憲法史や憲法の一般理論などの成果を踏まえつつ（１～３）、現行の日本国憲法が定めている統治構造（４～９）と権利保障（１０～15）について、主要な論点を取り上げながら検討を加えることを通して、憲法に対する理解をより深めることができるよう努めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	憲法と憲法附属法	憲法の意味やそのあり方について概説する。すなわち、憲法の概念（実質的意味の憲法・形式的意味の憲法・立憲的意味の憲法）、その法源（憲法典・憲法附属法・憲法判例）、そして憲法解釈の方法などについて説明する。	大石　眞（京都大学大学院教授）	大石　眞（京都大学大学院教授）
2	明治立憲制の成立と運用	かつて公式に帝国憲法と略称され、今日一般に明治憲法といわれる大日本帝国憲法は、東洋で初めて制定された憲法典である。明治立憲制はこれを中心に成立するが、ここではその制定経緯や特色を明らかにし、実際の運用における問題点なども検討する。	同　上	同　上
3	現行憲法の制定と基本原理	ポツダム宣言の受諾に始まり、占領管理体制の下で進められた現行の日本国憲法の制定経過をたどり、その特色を浮き彫りにするとともに、基本原理といわれるものと憲法改正問題との関係などを検討する。	同　上	同　上
4	半直接民主制	日本国憲法の第一の特色を「半直接民主制」とみる立場から、国民と国会との関係を明らかにする。そのため、国民主権や参政権の内容をみた後、公民団（有権者団）の構成原理、国民発案・国民表決などの意義、具体的な国政選挙のあり方、政党の位置づけなどを検討する。	同　上	同　上
5	議院内閣制１（国　会）	現行憲法の第二の特色を「合理化された議院内閣制」とみる立場から、国会と政府との関係を明らかにする。まず、両議院の組織や両院制のあり方について検討を加えるとともに、その立法・財政・政府統制などの権能や国会両議院の手続などを取り扱う。	同　上	同　上
6	議院内閣制２（天皇・内閣）	政府を形づくる天皇と内閣の地位・権能・手続を概観する。具体的に言えば、皇位継承法や天皇の国事行為をめぐる問題点を探るとともに、内閣の構成（内閣総理大臣と閣僚）と権限（行政組織統轄権・総合調整機能など）について検討を加える。	同　上	同　上
7	司法審査制	現行憲法の第三の特色を「アメリカ型法の支配」とみる立場から、国会・内閣などの政治部門と司法裁判所との関係を明らかにする。そのため、司法組織の概要を説明した後、司法権の意味と限界、合憲性審査制度のあり方などを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	財政民主主義	財政立憲主義ともいわれる財政民主主義の原則を形づくる憲法規定の内容を概説する。ここでは、租税制度・予算制度をめぐる問題点を中心的に取り上げるが、財政作用に対する憲法上の制約などについても検討する。	大石　眞	大石　眞
9	地方自治	地方自治の原理と構造について検討する。すなわち、地方分権の理念、地方自治体の組織と機関、国の法令と条例との関係といった伝統的な論点に加えて、自治事務と法定受託事務、地歩自治体に対する国の関与のあり方といった最近の論点を検討する。	同　上	同　上
10	人権と権利保障	人権・基本権・基本的人権といったさまざまな観念を整理した後、権利主体、権利保障の方法・関係・限界といった権利保障に関する通則を検討するとともに、国際人権保障のしくみや人権条約などについて概説する。	同　上	同　上
11	包括的権利	現行憲法13条が包括的に定めている幸福追求権及び適正手続保障の具体的内容について検討するとともに、いろいろな場面で問題となる憲法14条が定めている平等原則のもつ意味や効果について、最高裁判所の主要な憲法判例を紹介しつつ、考察する。	同　上	同　上
12	人身の自由と私生活の保護	いろいろな権利や自由の中で、最も基本的な権利に位置づけられる人身の自由を確保するための基本原理と人身拘束の典型的な場面に対する制約を意味する「憲法的刑事手続」の考え方を検討するとともに、私的生活を形づくる居住の自由と住居の不可侵、通信の秘密などについて検討を加える。	同　上	同　上
13	精神的自由	学問・教育といった人格形成に関する自由、宗教的自由、表現や放送といった情報に関する自由、そして集会・結社といった集団行動に関する自由について、主要な論点に着目し、最高裁の憲法判例を踏まえつつ、検討する。	同　上	同　上
14	経済的自由	職業の選択、財産権の行使、契約といった生活営為のための諸活動を検討するとともに、こうした経済活動に対する制約を予定している憲法規定（労働三権など）のもつ意味についても吟味する。	同　上	同　上
15	国務請求権	ここでは、国民が国家の不作為を求める自由権の保障とは異なって、国家の積極的な作為を求める場面を対象とする。すなわち、裁判請求権のような伝統的な国務請求権や、生存権などのように比較的新しい請求権などの概要について検討する。	同　上	同　上

＝政治学入門（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　久保　文明（東京大学教授）〕
〔主任講師：　山岡　龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治学の基礎概念とその相互の関連を明らかにすることで、政治学のより専門的な領域を学習するための出発点を提供したい。同時に、政治学の入門講義として、他の分野を専攻する受講者にも、政治学のアウトラインがつかめるようにしたい。政治の世界に起こりつつある最近の変化にも留意する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	政治と権力	具体的な事例を通じて、政治とは何かを明らかにし、政治の機能、自治と統治の区別、政府の役割などを論ずる。ついで権力の特性、権威と権力の対比、権力の正統性などについて考える。	阿部　斉（放送大学名誉教授）	阿部　斉（放送大学名誉教授）
2	代表制・議会・国会	民主主義国家と議会、代表制とその発達、地域代表と国民代表、二院制、議会の役割、議会と行政府、立法過程、議会の問題と課題などの諸テーマについて論ずる。	久保　文明（東京大学大学院教授）	久保　文明（東京大学大学院教授）
3	行政府・内閣・官僚制	行政府の活動、首相と内閣、官僚制の概念、公務員制度、立法国家の行政国家への転換、官僚制の統制、「大きな政府」と「小さな政府」などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
4	選挙と選挙制度	政治参加と選挙、議治の大衆化とその意義、投票することの意味、選挙制度の諸類型、日本の選挙制度改革などの諸テーマについて考える。	同　上	同　上
5	政党と政党制	政党の定義、名望家政党と大衆政党、政党の機能、政党制の諸類型、日本の政党政治などの諸テーマについて考える。	同　上	同　上
6	利益団体その活動	政策過程の意義、現代の政策過程と利益団体、利益団体の活動用式、利益団体の政治的資源、公共利益団体、利益団体と政治体制などの諸テーマについて論ずる。	同　上	同　上
7	政治家と政治指導	政治的リーダーシップ、政治家の資質、治者と被治者の分化、政治的リーダーシップの諸類型、マス・メディアの役割、日本の政治的リーダーシップ、平等主義社会のリーダーシップなどの諸テーマについて論ずる。	阿部　斉	阿部　斉

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地方自治と市民参加	地方分権と地方自治、団体自治と住民自治、日本の地方分権改革、首長と議会、住民運動と住民参加、住民提案と住民投票、地方自治と直接民主制といったテーマについて論ずる。	阿部　齊	阿部　齊
9	社会福祉	夜警国家から福祉国家への転換を転換を明らかにした後、社会問題と社会政策、社会保障制度の発展、高齢化社会の福祉政策、福祉政策と財政危機、福祉国家と民主政治などの諸テーマについて考える。	同上	同上
10	民主主義の理想と現実	民主主義という政治原理が西欧政治思想史のなかに登場してきた諸モデル（参加民主制、共和制など）を検討し、この原理が歴史的に蓄積してきた様々な思想を紹介する。その上で、幾つかの民主主義批判を検討し、民主政治の現状と未来を考える。	山岡　龍一（放送大学助教授）	山岡　龍一（放送大学助教授）
11	自由主義	自由主義思想の諸類型を検討し、自律概念の解釈を中心にして、その整理を試みる。さらに、Ｊ．ロールズを中心とする現代政治理論の展開を、自由主義の原理をめぐる論争として再構成し、現代自由民主主義のあり方について考える。	同上	同上
12	現代のイデオロギー	イデオロギーとは何かということを、歴史的・概念的に検討し、その上で、現代における様々なイデオロギーを概説する。社会主義、保守主義、フェミニズム、エコロジズム、原理主義などが取り上げられる。	同上	同上
13	国家と市民社会	近代国民国家の生成と構造について検討し、この国家概念がいかに近代の「政治」概念を構成する上で重要であったかを明らかにする。その上で、近年の経済のグローバリゼーションがいかにしてこの国家の役割を相対化しているかを考察する。国家と対比される市民社会の現代的な意味についても考えたい。	同上	同上
14	国際政治	国際政治と国内政治との対比から始めて、国際法の役割、勢力均衡論、ナショナリズムの大衆化、集団安全保障、相互依存の増大、冷戦の終焉、地球環境問題、同時多発テロ以後の安全保障といった問題を検討する。	阿部　齊	阿部　齊
15	日本の政治	明治国家の近代性と前近代性、戦後の民主化改革、保守政党の統治体制、一党優位体制の崩壊と再生、政治改革と構造改革、日本政治の現状といった問題を検討し、日本の政治変動の方向を見定めたい。	同上	同上

＝経済学入門（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　林　　敏彦　（放送大学教授）〕

全体のねらい

経済学は生まれて２３０年の比較的若い学問ですが、一方で社会科学の女王と呼ばれるほどの論理的厳密性を追究すると同時に、他方で実社会の問題解決という要請に応えようとしてきました。この講義では現代経済学の基本的な考え方と、その応用の仕方について考えてみましょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	経済学の考え方	私たちは皆乏しさの中に生きています。お金がありあまっている人でも、許された人生は７０万時間にすぎません。経済学はその乏しさの問題を解決しようとして誕生した学問です。では経済学を極めれば実社会で成功するでしょうか。経済学の頭脳とハートについても考えてみましょう。	林　敏彦（放送大学教授）	林　敏彦（放送大学教授）
2	消費と消費者	経済の主役は消費者です。究極的に消費者を満足させられない経済活動は、消滅する運命にあります。では、消費者は何を求めて、どう行動するのでしょうか。消費者行動には法則性があるのでしょうか。また、大勢の消費者の動きは、市場にどのような情報をもたらすのでしょうか。	同　上	同　上
3	生産と企業	消費と並んで大切な経済活動は生産です。今の日本では毎日何億種類もの商品が生産され、消費されています。生産活動の担い手は企業ですが、企業は何を求めて、どのような技術を用い、何をどれだけ生産しようとするのでしょうか。企業ではどのようなコストの概念が重要なのでしょうか。	同　上	同　上
4	市場の役割	多数の売り手と買い手が相まみえるのが市場です。市場の重要な役割は価格を決めることです。買い手と売り手、あるいは需要と供給の間で、市場価格はどう決まるのでしょうか。単にものの値段を決めるだけの仕組みが、どうして世界中の国が採用する経済システムとなったのでしょうか。	同　上	同　上
5	政府の役割	すべてを市場取引にゆだねるだけでは真の豊かさは実現されません。現代の社会では、政府の役割が高まっています。市場の失敗と呼ばれる現象はどのようなものでしょうか。政府はどこまで市場に介入し、あるいは市場に代わって人々のニーズに応えなければならないのでしょうか。	同　上	同　上
6	マクロ経済	個別の登場人物の動きを観察して社会全体を理解しようとするミクロ経済学に対して、国全体の総生産や所得水準の動きに法則性を見いだして社会全体を理解しようとするのがマクロ経済学です。ＧＤＰ、失業率、国際収支、成長率など、マクロ経済学の考え方を見てみましょう。	同　上	同　上
7	お金と金融	お金はものの生産、流通、消費の流れの逆方向に動いています。誰でも知っているはずのお金ですが、それはいったい何なのでしょうか。お金の流れをコントロールする仕組みはどのようなもので、銀行などの金融機関はどのような役割を果たしているのでしょうか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	物価の話	さまざまなものの値段の平均値を物価といいます。物価が持続的に上がることはインフレーション、下がることはデフレーションと呼ばれます。なぜ、物価は変動し、物価が変動するとどのような問題が起こるのでしょうか。日本銀行が物価の番人と呼ばれるのはなぜでしょうか。	林　敏彦	林　敏彦
9	景気の話	経済活動が活発になれば好景気、沈滞すれば不景気と呼ばれます。なぜ景気は変動するのでしょうか。景気の動きをなだらかにするために、政府や日本銀行はどのようなことができるのでしょうか。経済活動が国境を越えて広がった今日、景気対策には何か難しい問題が起こっているのでしょうか。	同　上	同　上
10	日本の経済成長	長期にわたって経済活動が拡大していくことが経済成長です。１９６０年代から８０年代はじめまでの日本の高度成長はなぜ起こったのでしょうか。高成長を可能にした社会的メカニズムの解明と、なぜ私たちは成長したかったのかという成長の社会心理についても考えてみましょう。	同　上	同　上
11	バブルと恐慌	経済の累積過程はときにバブルと呼ばれる過熱現象を生みます。有名な１９２０年代のアメリカのバブルと３０年代の大恐慌の顛末について振り返っておきましょう。同じ現象が日本の８０年代から９０年代以降についても、９０年代から２０００年代のアメリカ経済にも見られるのでしょうか。	同　上	同　上
12	大震災の教訓	１９８５年の阪神・淡路大震災は、高度に発達した都市経済を直撃しました。市場経済の機能が部分的に麻痺したとき、どのような経済活動が人々の暮らしを支えたのでしょうか。災害後の経済復興について、何が問題で、何が解決され、何が課題として残ったのでしょうか。	同　上	同　上
13	世界の中の日本経済	今日企業活動は国境を超えて相互に入り組み、私たちは世界中のものを消費して暮らしています。ＧＤＰでは中国は日本を追い越して世界第２位の経済大国になりました。アジア諸国でも高度成長が始まりました。そうした中で、私たちの生活水準を維持するためにはどうすればよいのでしょうか。	同　上	同　上
14	持続可能な開発	水、大気、種の多様性など、地球環境が成長の制約条件になってきました。これまで農業生産や資源の限界を乗り越えてきた人類は、これからも技術進歩によって唯一の地球の制約を乗り越えられるでしょうか。それとも池のメダカから鯨に成長した人類には、新しい考え方が必要なのでしょうか。	同　上	同　上
15	幸せの経済学	経済学は乏しさを解消し、物質的に豊になることが個人にとっても社会にとっても幸せの前提条件だと考えてきました。それでは、所得が上昇すれば人々は幸せになるのでしょうか。実は、そうではないようです。経済学入門の最後に、究極の社会生活の目的である幸せの問題を考えてみましょう。	同　上	同　上

＝２１世紀の社会学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　船津　　衛（東洋大学教授）〕
〔主任講師：　山田真茂留（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：　浅川　達人（放送大学助教授）〕

全体のねらい

社会学とはどのような学問なのかを知るために、自我・自己　都市、集団・組織、集合行動、ジェンダー、宗教、情報、災害、高齢者、病い、死などの新しい社会現象について具体的に考察し、そこから、21世紀の社会学の課題を明らかにして、社会学への理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	21世紀の社会学のために	21世紀を迎えた現代社会はグローバル化、地球規模の環境破壊、家族の少人数化・高齢化、情報化、また人々の自我の変容など、変化・変動がきわめて著しいものとなっている。このような中での21世紀の社会学の新しいあり方について考察する。	船津　衛（東洋大学教授）	船津　衛（東洋大学教授）
2	現代社会における自己の諸相	社会学自己論の潮流を、他者の視点を束ねて問題を解決してゆくミードの自己論、脱中心化され状況次第で流動するポストモダンの自己論、そして、流動性を持ちながらも状況を越えた行為を展開しようとする物語自己論などに整理し、その特徴を論じる。	伊藤　智樹（富山大学助教授）	伊藤　智樹（富山大学助教授）
3	都市空間の社会学	現代大都市が経験している社会変動の多くは手で触れ、直接目で見ることもできないが、人々の日常生活に及ぼした影響は痕跡として空間構造に刻み込まれている。都市の空間構造とその変化を可視化する道具として社会地図を用いて、都市社会の構造の変動を考えていく。	浅川　達人（放送大学助教授）	浅川　達人（放送大学助教授）
4	集団・組織と新しい関係性	集団・組織の役割は個人主義化が進行している現代社会においても、なお重要性を増している。他方、ネットワークや集合的アイデンティティなど、既存の集団や組織の枠を超え出た現象も見られるようになってきている。このような新しい動きを見据えながら、集団・組織現象の最前線に迫っていく。	山田真茂留（早稲田大学教授）	山田真茂留（早稲田大学教授）
5	集合行動へのアプローチ	パニック、流言、流行、リンチ、都市暴動、反戦運動や環境運動などの集合行動について、集合行動と日常行動との異同、集合行動の生成と進展を規定する社会構造、個人の信念や相互作用と集合行動のダイナミズムという観点から考察していく。	田中　淳（東洋大学教授）	田中　淳（東洋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	共同性と公共性	19世紀から20世紀にかけての近代社会の成立期において、個人化の進展に直面して、「共に同じである」という意味での「共同性」をいかに再び確保するかが問題とされてきた。20世紀から21世紀にかけての近代社会の成熟期においては、個人化を前提としたうえで、「公を共にする」という意味での「公共性」をいかに新たに構築するかが問題となってきている。これから2つの概念を軸として、近代社会の変動にともなう社会編成のあり方について考察する。	澤井　敦（慶應義塾大学助教授）	澤井　敦（慶應義塾大学助教授）
7	ジェンダーと現代	まず、1970年代にジェンダーという言葉が登場したことの意味を論じ、次いで、ジェンダーには個人にとって違和感のあるものとそうでないものがあることを指摘する。そして、身近な事例を通して、潜在化しているジェンダーの問題を論じ、現代においてジェンダーが揺らぎの中にあることを明らかにする。	早川　洋行（滋賀大学助教授）	早川　洋行（滋賀大学助教授）
8	身体感覚とリアリティ	今日の癒やしブームに共通する点は人々の五感に働きかけ、希薄化した身体感覚のリアリティを快適さとともに回復することにある。このような観点からすると、現代はあらゆる活動が視覚中心に編制されている。本章では、近代における視覚による身体管理の系譜を辿りつつ、癒やしブームの意味について明らかにする。	出口　剛司（立命館大学助教授）	出口　剛司（立命館大学助教授）
9	世俗化と現代宗教	本章では宗教社会学の根本をおさえ、現代宗教がどのような様相を呈しているかについて考察する。世俗化のイメージとして宗教の衰退と見る視角と宗教の変容と見る視角の2通りがあるが、今日の状況を見たときどちらが妥当なのだろうか。伝統的に制度化された宗教だけでなく、新宗教運動の展開も射程におさめ、宗教と社会の関係性の今日的な位相を見定めていく。	山田真茂留	山田真茂留
10	情報とコミュニケーション	従来、パーソナル・コミュニケーションとマス・コミュニケーションが区別されてきたが、インターネットの普及によって、この区別が再検討されるべき段階に至っている。情報の過剰がもたらす弊害とコミュニケーション不全の問題に言及し、人が生きていく上で、情報とコミュニケーションがもつ意味を考える。	早川　洋行	早川　洋行
11	災害と社会	都市化や高齢化といった社会構造の変化が被害の大きさや形態に与える影響、地域構造や組織構造が対応行動に与える影響、社会が内包する災害文化が事前の準備度や避難に与える影響という側面から、災害の被害軽減に社会学が果たしてきた貢献と今後期待される領域について論じていく。	田中　淳	田中　淳

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	高齢者の社会関係	社会的に孤独な高齢者というステレオタイプが人々の意識の中に根強く埋め込まれているが、実証研究はそれはきわめてまれなことを明らかにしている。高齢者が他者との間に有意味な関係を維持していることを前提に、他者との関係を支配しているメカニズムや他者との関係が高齢者に及ぼす影響を考察する。	浅川　達人	浅川　達人
13	健全さと病いの物語	医療の発展によって、われわれは多くの恩恵を被る一方で、健全さと病気に関する偏った見方を抱くようにもなった。21世紀の社会において、近代社会に流通する回復の物語に生きがたさを感じる人々が、自分にあった物語を探っていくことを問題とする。	伊藤　智樹	伊藤　智樹
14	〈死〉の受容と〈生〉の技法	近代社会は死を合理的に身体的＝精神的活動の絶対的終焉とし、死にまつわる事柄をすべてタブーとし、身近な生活から死の痕跡を排除してきた。本章では、近代が成し遂げた死の無意味化について解明し、そこから現代における生の意味について考察する。	出口　剛司	出口　剛司
15	２１世紀社会のゆくえ―モダニティとポストモダニティ	社会学においては、近代社会の編成を「モダニティ」として整理し、モダニティを離脱、再編成しようとする動きを「ポストモダニティ」として把握する試みがなされている。本章では、モダニティとポストモダニティのせめぎあいを概観し、２１世紀社会の様相を展望する。	澤井　敦	澤井　敦

＝　社会福祉入門（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：岡本民夫　（同志社大学教授）〕
〔主任講師：永岡正己　（梅花女子大学教授）〕
〔主任講師：奈倉道隆　（四天王寺国際仏教大学教授）〕

全体のねらい

近年における社会経済の激変に加えて急速な少子高齢化は私たちの生活に色々な衝撃を与えている。こうした情勢の中で従来の社会福祉施策では、人々の福祉ニーズに対応できなくなり、基礎構造変革が断行された。本講座は新しい社会福祉を考えていく上で、基本となる概念、理念、歴史、構造、主体、対象、施策内容及び展開場面、機能、方法・技術、福祉教育、専門家の養成・教育・訓練、関連施策との協力、連携、そして今後の社会福祉の課題と展望等について講述する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	私たちの暮らしと社会福祉	社会福祉を総合的、俯瞰図的に捉えるための基本的枠組みを設定し、私たちを取り巻く社会環境の変化や暮らしをめぐる課題と社会福祉がどのようにかかわっているのかを理解する。そのための学習方法と講義計画及び内容に関する全体像を示し、併せて社会福祉の研究方法についても言及する。	岡本　民夫（同志社大学教授）	岡本　民夫（同志社大学教授） 大曽根　寛（放送大学教授）
2	現代社会と社会福祉	私たちを取り巻く社会経済現象と社会生活上の諸困難との関連を人口動態、家族規模及び機能の変化、地域社会の変容、価値観や生活スタイル。暮らしと労働のあり方等の視点を通じて、新しい時代にふさわしい社会福祉のあり方とは何かを模索する。	同　上	岡本　民夫
3	社会福祉の理念と概念	社会福祉の法的根拠としての憲法第25条、第13条、第14条等に加えて社会福祉基礎構造改革の基本的方向と基本理念を明らかにする。そして日常的に展開されている「補完性の原則」と言われている自助、互助、共助及び公助との関連で自立支援の考え方、ノーマリゼーションの思想、QOLの向上、自己実現や生きがい等福祉のあり方等について言及する。	同　上	同　上
4	社会福祉の歴史 西洋の場合	社会福祉は長い歴史の中で様々な試行錯誤を繰り返しながら生成、発展してきたものであり、その根底にある思想、理念、価値観、制度・政策、実践、活動、運動、方法技術等の諸側面を学ぶことが大切である。こうした歴史的認識を深めることによって現状を正確にかつ深く理解することができる。ここでは福祉をめぐる史実を基礎にしての全体像を把握し、海外の社会福祉の歴史を学習する。	永岡　正己（梅花女子大学教授）	永岡　正己（梅花女子大学教授）
5	社会福祉の歴史 日本の場合	日本の社会福祉は諸外国の強い影響を受けているが、日本の歴史的な歩みの中から築かれてきた独自の思想やしくみが存在する。その背景、要因、人物、援助活動、施策・制度等の史実を通じて、日本における社会福祉の実態と特質を歴史的に分析し、そこから福祉の本質を学ぶとともに内在する課題を把握し、今後の社会福祉の発展に役立つ知識と考え方を身につける。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	社会福祉の構造と機能	社会福祉はその基本となる法制度、行財政、運用・管理及び経営組織などハードウエアの部分とこれらを運用し、機能させるソフトウエアが必要であるが、加えて、これらを利用者に価値あるものにしていくためのヒューマンウエアとしての専門家が不可欠であり、これらの諸条件が有機的に連関し、機能して社会福祉の本領が発揮できる。	大曽根　寛（放送大学教授）	大曽根　寛
7	児童家庭福祉	少子高齢社会の到来のなかで子育て、保育問題、健全育成が大きな社会問題となっている。他方、いじめ、虐待、非行、引きこもり等子どもの病理現象も深刻化している。その基盤となる家族の規模と機能も変わり、家庭のあり方、個々の構成員の価値観や生活スタイル等の変化も福祉にとって大きな課題となっている。ここでは児童福祉の視点からこれらをめぐる諸問題についても言及する。	山縣　文治（大阪市立大学助教授）	山縣　文治（大阪市立大学助教授）
8	障害者福祉	ノーマライゼーション、バリアフリが日常語になりつつあるが、ここでは身体・知的・精神のいわゆる三障害対策の歴史を振り返るとともにその実態と施策の現状を分析吟味して、そこに存在する問題点を抽出するとともに、今後に向けての施策のあり方と具体的施策の方向を展望する。	三ツ木　任一（創造学園大学教授）	三ツ木　任一（創造学園大学教授）
9	高齢者福祉	高齢社会の到来とともに高齢者が抱える問題は益々多様でかつ深刻化の様相を呈している。この事態に対応策の基本となる理念、目標、内容、展開、実践等を取り上げながら、生活の質的向上、生きがい、自己実現の達成等21世紀の高齢者福祉のあり方を展望する。	奈倉　道隆（四天王寺国際仏教大学教授）	岡本　民夫 奈倉　道隆（四天王寺国際仏教大学教授）
10	社会福祉援助技術1	福祉施策の実践や具体化過程には多彩な方法技術が用いられている。ここでは社会福祉の実践現場で有効かつ適切に援助技術を活用する必要がある。本章ではその概念、構造、目的、機能、過程、役割、評価のあり方等社会福祉援助技術全般について概観する。	岡本　民夫	黒木　保博（同志社大学教授）
11	社会福祉援助技術2	本章では援助の基本となる個別援助技術（ケースワーク）、集団援助技術（グループワーク）を中心にその概念、原理、機能、過程等の内容を具体的事例や実践援助活動を通して、敷衍するとともに実践力に基礎となる知識、方法、技能等についても言及する。	同　上	同　上
12	社会福祉援助技術3	ノーマライゼーションの考え方や利用者本位の理念を受けて利用者が家庭や地域において自由な生活を営みながら、必要なサービスを受給できる体制が求められている。地域福祉施策の進展とともにそれらを具体的に展開する地域援助技術（コミュニティーワーク）が注目されている。この内容と構造、過程、機能、手法等について具体的な実践例を踏まえながら、論述する。	同　上	岡本　民夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	社会福祉教育	今日社会福祉は日常生活上の諸問題を解決するための施策として重要な位置を占めている。これを具体化するには国民一人ひとりの福祉に関する正しい考え方や意識がなくてはならない。一方、複合化し、深刻化する福祉問題に対処するためには、より高度な知識と技術をもった専門家が必要である。ここでは基礎的な教育から高度専門職の教育にいたる広範囲の福祉教育について取り上げる。	岡本　民夫	岡本　民夫
14	関連領域との協力・連携	今日の社会福祉は国民の安心と安定を目標にしながら利用者本位の理念を具象化していくための努力がなされている。そのためには保健、医療、看護、福祉、心理、教育等の援助専門職がいかに相互に有機的な協力と密接な連携を保ちながら、ティームワークやネットワークをどのように展開するかについて言及する。	同　上	同　上
15	社会福祉の課題と展望	社会福祉が当面する諸課題を抽出、整理して今後の日本の社会福祉のあり方を展望するとともにグローバル化が進む中、国際舞台で日本の社会福祉はどのような使命と役割をもって活動を展開するべきか等について受講者とともに考えてみたい。	同　上	岡本　民夫 大曽根　寛

＝　社会調査（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：原　　純輔（東北大学大学院教授）〕
〔主任講師：浅川　達人（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代社会を特徴づける人間活動の１つである社会調査について、その進め方（調査内容の決定、調査対象の決定、調査の実施方法、調査結果の分析方法とまとめ方）を知るとともに、その歴史と成果について学習する。個人が身の回りからさまざまな情報を得る場合と社会調査との違いに着目しながら、細かい技法よりも、基本的な考え方を修得することを目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代社会と社会調査	人びとがさまざまな形で目にする社会調査結果が、おおよそどのような手順で得られたものであるかを知る。また、社会調査が備えるべき性格と今後の授業における基本的な視点について述べる。	原　純輔（東北大学大学院教授）	原　純輔（東北大学大学院教授） 浅川達人（放送大学助教授）
2	社会調査の用途と歴史	社会調査をその用途によって行政調査、福祉調査、世論調査、市場調査、学術調査の５つに類別し、それぞれの歴史と相互の系譜関係について述べる。また、心理学実験との関係についても述べる。	同　上	原　純輔
3	調査内容の決定(1)	社会調査の方法は、基本的に調査票調査と聴取調査（非調査票調査）にわけられ、それぞれに長所と短所がある。調査票調査を中心にテーマ、調査項目の選び方について述べる。	同　上	同　上
4	調査内容の決定(2)	調査票を作成する場合の考え方と注意点について述べる。また、ワーディングの違いがどのような調査結果の違いをもたらしたか、実例を紹介する。	同　上	同　上
5	調査対象の決定(1)	統計調査の中での全数調査と標本調査、事例調査などの特徴と関係を知る。とくに、標本調査における標本抽出の考え方と具体的方法、無作為抽出の考え方を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	調査対象の決定(2)	標本分布と統計的推測の考え方を把握し、いくつかの統計的推定や統計的検定に適用してみる。それを通して標本調査の特質を知る。	原　純輔	原　純輔
7	調査の実施と処理(1)	社会調査実施の具体的手順と、訪問面接調査、留置調査、郵送調査、電話調査、集合調査など、さまざまな実査方法を紹介する。とくに訪問面接調査の実際を知り、調査員の役割について考える。	同　上	同　上
8	調査の実施と処理(2)	調査終了後の点検（エディティング）、コーディング、データ・ファイルの作成、データ・クリーニング作業における留意点を知る。また、これらの作業や集計・分析において重要な役割を果たす、コンピュータ・ソフトについて紹介する。	浅川　達人	浅川　達人
9	結果の集計と分析(1)	量的データと質的データのそれぞれについて、集計の方法、基本統計量（代表値、分散、相関係数）について解説する。また、実例を示しながら、さまざまな基本統計量とデータのタイプとの適合性について考える。	原　純輔	原　純輔
10	結果の集計と分析(2)	クロス集計表のエラボレーションを例に、因果分析の方法と問題点について解説する。また、多変量解析法の考え方と実例も紹介する。	同　上	同　上
11	聴取調査の方法	調査票を用いない聴取調査の方法を紹介し、問題点、留意点について解説する。また、調査者と被調査者の人間関係のあり方について考える。	同　上	同　上
12	調査報告をまとめる	「調査結果を受けとる側」の視点から、表やグラフ、そして調査報告はどのようなものであるべきかについて、実例に即しながら考える。	原　純輔	原　純輔

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	さまざまな社会調査(1)	国勢調査をはじめとする行政調査とその役割について知るとともに、問題点について考える。また、代表的な大規模調査、継続調査、国際比較調査の例と成果を紹介する。	原　純輔	原　純輔
14	さまざまな社会調査(2)	さまざまな社会問題の告発と解明は、社会調査の起源の１つであったが、その役割は現代社会においても失われていない。社会問題についての代表的な調査研究の例と成果を紹介し、社会調査の社会的責務について考える。	浅川　達人	浅川　達人
15	調査者と被調査者	社会調査における被調査者は、単なる情報提供者ではない。調査という行為や調査結果は、被調査者に対してさまざまな影響を与える。「調査をされる側」からみた社会調査の意味と、調査に求められる社会的責任について考える。	原　純輔	原　純輔

＝　国際経営論（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　吉原　英樹（神戸大学教授）〕

全体のねらい

輸出、輸入、海外生産、海外研究開発など、一国の国境をこえて行なわれる国際経営は、いまや日本企業ではめずらしいことではない。その日本企業の国際経営をテーマにして、歴史、現状、課題、今後の動向などを、具体例をまじえて明らかにしていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	国際経営とは	わたくしたちの身の回りにある国際経営の具体例をみたあと、国際経営とはいかなるものであるかを定義したい。そして、ひとつの企業のなかに多くの経済・政治・文化をかかえながら経営するのが国際経営の特徴であることを説明したい。	吉原　英樹（神戸大学教授）	吉原　英樹（神戸大学教授）
2	多国籍企業	国際経営を行なう代表的な企業は、多国籍企業である。多国籍企業とは、親会社と海外子会社から成る企業である。日本の多国籍企業とは具体的にどの企業であるかをみたうえで、親会社と海外子会社の特徴などを明らかにしたい。	同　上	同　上
3	国際経営戦略	国際経営の基本方針である国際経営戦略について、歴史的な発展を跡づけつつ、基本的なことを明らかにしたい。国内経営で蓄積される技術や経営ノウハウなどが国際経営の基盤であることを説明したい。国際化の理念の重要性についてものべたい。	同　上	同　上
4	国際マーケティングと国際調達	製造企業の輸出マーケティングがどのように発展して現在に至っているかを、日本独特の企業である総合商社の役割に関連づけながら明らかにしたい。最近、重要性を増している製品輸入および部品材料の輸入（国際調達という）もとりあげたい。	同　上	同　上
5	海外生産	海外生産の初期（1970年代ごろまで）には、海外工場は国内工場と比較して小規模なものだったが、現在では国内工場をこえる大規模な工場がみられるようになっている。なぜ海外生産が行なわれるかを歴史的に明らかにしたうえで、海外工場で実施されている日本的生産の特徴をみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	技術移転と海外研究開発	海外子会社の多くでは、日本の親会社で開発された製品を、日本の親会社から移転される生産技術を使って生産する。最近になると、海外子会社で研究開発が行なわれ、新しい製品や技術が開発されるようになっており、その一部は日本親会社に逆移転される。国際経営のいちばん新しい動きである海外研究開発の基本的なことを明らかにしたい。	吉原　英樹	吉原　英樹
7	国際経営組織と所有政策	輸出から海外生産へと国際経営活動の重点がシフトするにつれて、国際経営の組織は輸出部門、海外事業部、グローバル事業部制へと発展してきている。また、海外子会社の資本所有形態は、1970年代までは、合弁とくに総合商社がパートナーに加わる商社参加型合弁が多かったが、最近では完全所有子会社が多くなっている。	同　上	同　上
8	海外子会社の経営	海外子会社では、日本人の経営者や管理者が中心になって、親会社の経営戦略の枠組みのなかで、親会社から移転される技術や経営ノウハウを使って経営している。工場では日本的生産のもとで現地人が高いモラールで仕事をしているのにたいして、オフィスでは状況はよくない。海外の日本企業の明暗である。	同　上	同　上
9	国際経営と言語	親会社と海外子会社のあいだの、また、親会社や海外子会社で現地人が加わるコミュニケーションでは、英語がよく使われる。しかし、重要な事柄についてのコミュニケーションでは、日本語が中心的な言語になっている。日本語が使われるときには、現地人は情報のやりとりや意思決定に参加しにくい。	同　上	同　上
10	北米・欧州のなかの日本企業	日本企業の北米への進出は、当初は輸出のための販売子会社が多かったが、保護主義を克服する目的で輸出から現地生産への転換が行なわれ、製造子会社が増加した。最近では、市場内で生産することのメリットやコスト面の有利性を理由に、現地生産がなされるようになった。欧州への進出は、地域経済統合によって影響をうけている。	同　上	同　上
11	アジアのなかの日本企業	日本企業にとって、1980年代までは極東と東南アジアが主要な舞台だったが、1990年代からは中国の重要性が急激に高まっている。極東・東南アジア・中国の重点の置き方および分業と相互関連をどのようにするかが、アジア戦略のポイントになっている。	同　上	同　上
12	国際経営と国内空洞化	最近の海外生産の本格的な推進によって国内空洞化がはじまっている。この空洞化は、国内生産はふえているが海外生産の成長のほうが高い、国内生産が減少する、生産技術やノウハウが国内から海外に移っていく、この3種類にわけることができる。この空洞化は、企業と国家のあいだに緊張関係を生む。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	外資系企業	日本企業の海外進出に比較すると外国企業の日本進出はすくない。外国企業の日本子会社である外資系企業には、現地人（日本人）社長、現地的（日本的）経営、好業績、イノベーション・センターなどの特徴がみられる。これらの特徴は、日本企業の海外子会社の経営にひとつのモデルを提供しているといえる。	吉原　英樹	吉原　英樹
14	国際経営戦略の今後の展開	海外生産のいっそうの推進が国際経営戦略のひとつの課題である。海外研究開発の本格化によって、新製品や新技術を生み出す海外子会社を育てることも必要である。また、日本親会社から技術など経営資源が一方的に海外子会社に移転する日本中心のワンウェイを、日本親会社と海外子会社のあいだに逆移転や水平移転もみられるネットワーク経営に変えていくことも課題になろう。	同　上	同　上
15	国際経営マネジメントの革新	世界中にある販売・生産・研究開発の海外子会社で国際経営活動が行なわれている。その国際経営活動は日本人が中心になって日本語によってマネジメントされている。日本人と現地人が英語で国際経営活動をマネジメントするように変えていくことが必要であり、そのためには日本親会社の国際化（内なる国際化）にも取り組まなければならない。	同　上	同　上

＝問題解決の発想と表現（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　東　　千秋（放送大学助教授）〕
〔主任講師：　柴山　盛生（国立情報学研究所助教授）〕
〔主任講師：　遠山　紘司（神奈川工科大学教授）〕

全体のねらい

問題とは何か、どのような捕らえ方が適切か、そしてどのようにして発想を広げ、必要な情報を収集・整理し、解決策を見出していくのか、そこにおける一連の科学的技法を学ぶ。それは、経営コンサルティング、商品開発などの専門的な業務に限らずビジネス全般や個人の生活におけるさまざまな問題解決の基本的フレームワークである。

また、それらの過程で思考や発想などを目的に応じて伝達するための基本的な表現技術を収得する。そして、ここでの学習が実際に応用できることをねらいとして、問題解決の具体的な例をさまざまな分野に求めて展開する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	問題解決とは	はじめに仕事や生活の場面から実際の事例として、大分県湯布院町の地域の発展過程で生じたさまざまな問題に対する解決法を取り上げ、問題解決とはどのようなものであるか、その概要や流れを学ぶ。そして、この事例を参考にして本講義で取り扱う問題解決についての枠組みを知る。	遠山　紘司（神奈川工科大学教授） 柴山　盛生（国立情報学研究所助教授）	遠山　紘司（神奈川工科大学教授） 柴山　盛生（国立情報学研究所助教授）
2	問題解決の第一歩	問題の意味を解釈する上で、ゲーム的、言語的、心理的、科学技術的、社会的などさまざまなものが考えられるが、それらがどのような背景の下で成立しているのかを考える。また、解法が決まっていない場合の問題解決の進め方として、これまでさまざまな方法が試みられたことを学ぶ。	柴山　盛生 遠山　紘司	柴山　盛生 遠山　紘司
3	問題解決の過程	ここでは、問題解決の過程として、思考モデルにおける流れと問題を提起する段階や解答する段階における考え方について考察を行う。問題提起では問題と解との関係や制約条件などを、問題解答では手順や方略の選択の方法について学習する。さらに、実際の場面に見られる幾つかの問題解決の例をあげてこれらの流れについて考える。	柴山　盛生 遠山　紘司	柴山　盛生 遠山　紘司
4	問題解決の思考法	解を導く上で、物事を発散的に考えたり、論理的に考えたりするなど多様な思考をすることが有効である。発散的に考える例として、言葉の比喩、ものとものとの関係性を考える思考、知識マップなどを取り上げる。論理的に考える例として、演繹的推論、帰納的推論、クリティカルな思考、因果関係、確率判断などについて説明する。	柴山　盛生 川井　頼能（横浜国立大学非常勤講師）	柴山　盛生 川井　頼能（横浜国立大学非常勤講師）
5	情報の収集と整理	問題解決に向けて、必要な情報を集めそれらを整理・分析する。情報収集では、実地調査、文献調査、コンピュータ検索などの概要について述べる。整理では、収集した情報の整理に関する考え方や方法について説明する。あわせて、実際の例を紹介する。	柴山　盛生 遠山　紘司	柴山　盛生 遠山　紘司

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	発想と整理の技法	問題解決を効率的に行うために様々な技法が活用されている。発想の技法の例として、辞書や事典などの資料を利用した発想法、キーワードを展開する発想法、集団的な発想法などを取り扱う。整理の技法として、カードや表を利用した方法、図表にまとめる技法を紹介する。	柴山　盛生 川井　頼能	柴山　盛生 川井　頼能
7	日常的数量表現と統計	私たちは、日常さまざまな情報に接している。この情報は、文字、記号、数値、画像などさまざまな形でもたらされる。これをどのように取り扱い、処理し解釈して、問題解決に役立てるかを考えるのがここでのテーマである。そこで、その代表として日常的な数量表現の特徴と統計の基礎や分析を学ぶ。	東　千秋（放送大学助教授） 柴山　盛生	東　千秋（放送大学助教授） 柴山　盛生
8	図解表現	全体像を分かりやすく示す図解表現について学ぶ。主な内容として、箇条書き、表、グラフ、物理図解、論理図解などについて説明する。 また、実際にこれらを活用している事例について紹介する。	遠山　紘司	遠山　紘司
9	文章表現	あらゆる情報伝達の基本となっている文章表現において、基礎から応用にわたる実際的な知識を学習する。文章表現の基礎として、文章表現の意義、種類や文章作成の過程、また日本語表記の基礎として、文字の表記、文や段落の表現、さらに文書構成として、論法、文書の例、文章の着眼点について考える。	柴山　盛生 遠山　紘司	柴山　盛生 遠山　紘司
10	プレゼンテーション	問題解決において最後の決め手になるのがプレゼンテーションである。いかにすばらしい解決法を見つけ、解決策が得られたとしても、その結果を他人に理解し、納得してもらうには適切なプレゼンテーションが必要である。プレゼンテーションは解決の発想を実現できるかどうかの鍵を握る重要なものである。他人を納得させるプレゼンテーションについて考えてみる。	遠山　紘司	遠山　紘司
11	交渉と説得	実際の問題解決の場面では、いかに適切に自分の意思を決め相手と効果的に交渉できるかが成否の鍵となる。意思決定論、ゲーム理論など現代的な経営学の視点に基づいたアプローチによる、問題解決に向けての意志決定、方略の分析、交渉や説得の考え方について学習する。	柴山　盛生 東　千秋	柴山　盛生 東　千秋
12	評価	問題解決では、解決に当たってどのような方策を選択するのか、実行後において、目的は達成できたのか、どの程度の成果が得られたのかなどを判定する必要がある。このための評価の方法について考える。ここでは、評価の観点、対象、評価方法など理論的なことについて学習した後、数値的な評価方法や実際の評価の例について検討する。	柴山　盛生 遠山　紘司	柴山　盛生 遠山　紘司
13	総合事例1	総合的な問題解決の実践として、企業のグローバル化による生産や経営の革新に関する実例を取り上げて、その現状、目標、方法、効果などについて検討する。	遠山　紘司	遠山　紘司
14	総合事例2，3	総合事例2として、会議の活性化ツールの開発と活用について、総合事例3として、医療の現場における問題解決の事例を取り上げて、それらの概要や背景とともに検討する。	東　千秋 川井　頼能	東　千秋 川井　頼能

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	問題解決の展望	本講義のまとめとして、問題解決の発想の奥にあるものについて考える。さらに、問題解決の発想が創造的発想でもあることをふまえ創成教育の視点に立ってこの知的技法の将来を展望する。	東　千秋 遠山　紘司 柴山　盛生 川井　頼能	東　千秋 遠山　紘司 柴山　盛生 川井　頼能

＝比較技術の文明論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

技術と産業の発展は、21 世紀においていっそう大きくなる、先進工業国にアジア諸国が加わって、競合はますます激しくなるのは確かでせよ、その各国ごとの発展を比較技術の調査から分析し、さらに全体としての発展が、いかに望ましいものであるかどうか、文明論として考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代技術の諸相	20 世紀に技術は大きく進展し、経済、社会を発達させたが同時にさまざまな社会問題も生じている。21 世紀に技術はいかに進んでいくのか、それは文明論として考察しなければならない。	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
2	技術と文明	技術は文明を大きく発達させた。その技術文明には、都市文明と道具文明の二つがあるが、それぞれいかに発達したか、現状はどうであるのかを考えて、技術と文明の関係を明らかにする。	同　上	同　上
3	比較技術とは	各国の技術は、国民性、風土などによって大きく変わるが、それを比較技術として考察することができる。この新しい研究の意義を明らかにして研究の概要を体系的に示す。	同　上	同　上
4	技術の発展	近代技術を産業革命によって生かされたが、それが現代までいかに大きく発展してきたか、その内容はいかに変わってきたか、どのような国が担ってきたのかの概略を示す。	同　上	同　上
5	産業革命を担った英国	産業革命を生んだのは英国であるが、なぜ英国に生まれたのか、英国がいかなる役割を果たしたのかを明らかにする。さらに、英国の技術の現状を見る。	同　上	同　上
6	近代工業を発展させたドイツ	英国の後を次いで近代工業に発展させたのはドイツであるが、その技術の特質を明らかにする。また、現代において、ドイツの技術の強さと弱点を示す。	同　上	同　上
7	大量生産を創始した米国	米国は 19 世紀後半から大量生産の産業を興したが、その必然性を示す、20 世紀に入ってからも技術と経済の大国として世界をリードしてきたが、その米国の技術の変遷を示す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ハイテク大量生産の日本	日本はアジアでただ一国だけ、先進工業国の仲間入りををしたが、そのその理由を明らかにする。さらに、第二次大戦後、ハイテクを生かした大量生産によって経済大国に発展した現状を明らかにする。	森谷　正規	森谷　正規
9	先進工業国の攻防	米国、欧州、日本の先進工業国の技術力の発揮が、それぞれに大きく変ろうとしている。各国が激しく攻防しながら、いかに世界の技術進展をリードしていくかを、文明論から見ていく。	同　上	同　上
10	アジア諸国の台頭	大量生産において、アジア諸国が急速に伸びてきている。そのアジアの技術はどこまで進展していくのか、望ましい方向に進むのかどうか、文明にかかわる問題として見よ。	同　上	同　上
11	先進国を追う韓国・台湾	韓国、台湾は、先端的なハイテク分野において大量生産で躍進しており、先進国を追いあげてる。なぜ、急速に発展したのか、その状況を明らかにし、今後を展望する。	同　上	同　上
12	工業大国に進む中国	中国は、いくつかの難題を抱えながらも、工業大国に着実に発展していくと予想される。その実状を示し、また、大国であるから他への影響が大きく、その点について考察する。	同　上	同　上
13	競い合う東南アジア	東南アジアは、日本の工場進出によって工業を発展させてきたが、発展段階の異なる多くの国があって、これから激しく競い合う、その状況を明らかにする。	同　上	同　上
14	インドはいかに発展するか	インドはやがて人口で中国を抜く大国になる、工業発展は後れているが、そのインドの特質を明らかにして、これからいかに発展するか、他にいかなる影響を及ぼすかを考えよ。	同　上	同　上
15	将来展望と日本の役割	先進工業国とアジア諸国の技術と産業の発展をまとめて、その文明にかかわるありようについて考える。そして、その中で日本が果たすべき役割を示す。	同　上	同　上

＝　技術者倫理（‘０４）＝（TV）

〔主 任 講 師：　札野　　順（金沢工業大学教授）〕

全体のねらい　：本科目を修了した履修生は以下の行動目標を達成できることをねらいとする。

1．科学技術の発展に伴い、人間の「行為」の領域が拡大した。したがって、技術を実践する「行為者」である技術者には、新しい「倫理」が必要であることを理解できる。
2．技術的解決の結果が、社会や環境に与える影響の範囲と大きさを理解できる。
3．技術に関する意思決定を行う際に、考慮すべき種々の「価値」について認識できる。
4．技術者が担う特別の責任について、その歴史的背景を含めて、理解できる。
5．技術を実践する上で、発生し、技術者が直面する可能性のある倫理的問題を認識できる。
6．倫理問題を分析する手法について理解すると共に、それらの手法を種々の事例に適用できる。
7．倫理問題に唯一絶対的な解はなく、複数の視点が存在し得る事を理解する。（そのため、事例の解説などは複数の講師やゲストが担当する。）

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	**技術者倫理とは何か** 学習目標： 1. 科目概要：技術者倫理を学ぶ目的 2. 科目の学習・教育目標の理解 3. 技術者倫理の定義の理解	1. ハイアット、スリーマイル、チャレンジャー、チェルノブイリ、ボパール、JCO、などのフラッシュ映像の提示 2. ミニケースの提示 3. 科目概要、科目の学習・教育目標の提示 4. 技術者倫理の定義の説明 5. 技術者倫理の必要性に関する解説	札野　順（金沢工業大学教授） 事例担当：安藤　恭子（金沢工業大学研究員）	札野　順（金沢工業大学教授） 事例担当：安藤　恭子（金沢工業大学研究員）
2	**なぜ技術者が特別の責任を負うのか** 1. 「技術者」の歴史と特徴 2. 技術者が特別の責任を負う理由 3. プロフェッション概念の理解	1. ミニケース１の解説（倫理的問題点の提示） 2. エンジニアリングの歴史、特質に関する解説 3. 技術者の責任に関する議論 4. プロフェッション概念の解説と日本における状況の議論 5. 事例研究（シティコープビル危機に関する解説と映像提示）	同　上	同　上
3	**行為の拡大と新しい倫理の必要性：環境倫理・生命倫理・情報倫理** 1. 科学技術と価値の関係に関する理解 2. 環境倫理、生命倫理、情報倫理に関する理解 3. 環境に対する技術者の責任に関する理解	1. 科学技術の進展による行為の拡大と新しい倫理の必要性 2. 科学技術に関連する「価値」に関する議論 3. 環境倫理学、生命倫理学、情報倫理などが明らかにした事柄に関する議論 4. 環境などに対する配慮の事例解説 5. 環境倫理に関連する事例紹介（レイチェル・カーソンの紹介、フロン問題、京都議定書など）	札野　順	山本　涼市（金沢工業大学教授） 西村　秀雄（金沢工業大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
4	**技術者としていかに行動すべきか (1)** 1. 倫理的思考の特徴や倫理理論（義務論、功利主義など）に関する理解 2. 倫理的考察の視点に関する理解	1. ジレンマ問題を手がかりに 2. 倫理的思考の特徴 3. 倫理的考察の視点(1)：社会全体の幸福 4. 倫理的考察の視点(2)：人間性の尊厳 5. 市民工学の視点	新田　孝彦（北海道大学大学院教授）	新田　孝彦（北海道大学大学院教授）
5	**技術者としていかに行動すべきか (2)** 1. 技術者の行動規範としての倫理綱領とその有効性および限界に関する理解 2. 倫理綱領に含まれる価値や規範（パブリック・ミッション、利害の相反、情報の開示、守秘義務など）の理解 3. 諸外国の倫理綱領と日本の倫理綱領の違いに関する理解	1. 倫理綱領の歴史と機能に関する解説 2. 倫理綱領に含まれる種々の「価値」や規範に関する解説 3. 日本および諸外国の倫理綱領に関する解説 4. 事例研究	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子
6	**技術者としていかに行動すべきか (3)** 1. 倫理的問題を解決するための諸手法（倫理テスト、決疑法、セブンステップなど）を理解し、応用できる。 2. 倫理的判断を妨げる要因について理解する	1. 黄金律テスト、普遍化可能性テスト、テキサス・インスツルメンツ社の倫理テストなどに関する解説 2. セブンステップの解説と応用 3. 倫理的判断を妨げる要因と促進する要因 4. 事例研究	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子
7	**技術者にとって法律とは何か** 1. 法律と倫理の関係に関する理解 2. 技術者に関連する法律（知的所有権、特許法、PL 法など）に関する理解	1. 企業と法律 2. 技術者として知っておきたい法律（製造物責任法、独占禁止法などに関する解説） 3. 技術者が管理職になったとき	飯野　弘之（金沢工業大学教授）	飯野　弘之（金沢工業大学教授） 事例担当（質問）： 西村　秀雄（金沢工業大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	**企業における技術者の責任と権利とは何か** 1. 企業における技術者の責任と権利に関する理解 2. 企業倫理の現状に関する理解	1. 日本の技術者の歴史 2. 企業理念、企業倫理と技術者の働く環境 3. 技術者の責任とその範囲 4. 米国での企業倫理 5. 社会の中での企業 6. 企業倫理の実際 7. 技術者の義務と権利	飯野　弘之	飯野　弘之 事例担当（質問）： 西村　秀雄
9	**企業倫理と技術者倫理（事例解説1）** 1. 企業の論理と技術者の倫理が対立する可能性のあることを理解する 2. 内部告発に関わる状況について理解する 3. 内部告発が倫理的に正当化される条件について理解する	1. 内部告発に関する内外の状況に関する解説 2. 企業倫理に関する解説 3. 企業倫理と技術者倫理の整合性に関する解説 4. 事例研究（内部告発によって明らかになった事例の紹介） ゲスト：梅津光弘（慶應義塾大学・助教授）	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子
10	**技術者にとって安全性とは何か（事例解説2）** 1. 技術者倫理における事例研究の重要性に関する理解 2. パブリック・ミッションの重要性について具体的に理解する 3. チャレンジャー号事件について理解する	1. 技術者倫理の学習・教育において事例研究が重要であることの解説 2. 事例研究（スペースシャトル・チャレンジャー号に関する解説） 3. 現場の技術者の視点（ロジャー・ボジョリー氏に聞く） 4. 技術者にとって「公衆の安全・健康・福利」とは何か。	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子
11	**技術とリスク（事例解説3）** 1. 原子力、遺伝子組み換えなどの技術の持つ特殊性に関する理解 2. 原子力関連の事故における倫理問題を理解する。	1. リスクとは何か 2. 原子力技術に関する検討 3. 遺伝子組み換えなどに関する検討 ゲスト：班目春樹（東京大学・教授）/小林傳司（南山大学・教授）	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	**優れた意思決定がもたらすもの（事例解説4）** 1. 技術者の倫理的な意思決定が良い結果をもたらした事例に関する理解	1. 技術者は倫理的か 2. 事例研究（ホンダ CVCC エンジンの開発） 3. 事例研究（シティコープタワービルの危機） 4. 二人の技術者の比較	札野　順 事例担当： 安藤　恭子	札野　順 事例担当（質問）： 安藤　恭子
13	**国際社会における技術者の倫理とは何か（1）** 1. 日米欧など世界各国の技術者の社会的役割の相違点に関する理解 2. 各国の技術者資格制度の違いに関する理解	1. 技術者倫理を国際的な視点に立って考える 2. 営利活動と技術者倫理 3. 価値と倫理の問題について 4. 事例研究（ブリヂストンーファイアーストーン事件）	ハインツ・ルーゲンビール（金沢工大・招聘教授/ローズ・ハルマン工科大学教授） 翻訳 札野　順	ハインツ・ルーゲンビール（金沢工大・招聘教授/ローズ・ハルマン工科大学教授） 通訳及び進行 札野　順
14	**国際社会における技術者の倫理とは何か（2）** 1. 国際的な技術者倫理綱領の必要性およびそこに含まれる項目・概念の理解	1. グローバルな技術者倫理綱領の必要性とそこに含まれるべき項目・概念の解説 2. 事例研究（日本の原子力問題、JCO 事故、東京電力問題など）を通じて、倫理綱領の検討 3. 未来の技術者の権利と責任	ハインツ・ルーゲンビール 翻訳 札野　順	ハインツ・ルーゲンビール 通訳および進行 札野　順
15	**Philosopher-Engineer を目指して** 1. 本科目で学んだ事柄を整理し、理解する。 2. 技術者倫理にマクロな視点の重要なことを理解する。	1. 技術／技術者倫理の諸相 2. ミクロからマクロへ：宇宙の歴史を1年にたとえると 3. ビル・ジョイの批判に対して 4. 高度技術社会における技術者倫理の重要性の解説（How の知識から、what と why の知恵へ；総合的な問題解決能力としての、「技術者倫理」の重要性） 5. Philosopher-Engineer を目指して	札野　順 質問事項： 安藤　恭子	札野　順 （質問）： 安藤　恭子

＝現代社会と著作権（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　齊藤　博（専修大学教授）〕
〔主任講師：　作花　文雄（内閣法制局参事官）〕
〔主任講師：　吉田　大輔（文化庁長官官房政策課長）〕

全体のねらい

情報の蓄積や送信の技術が次々と開発されるなか、情報の利用形態も多様化してきた。その情報の多くは、言語や音楽、映像などの著作物や実演等、著作権法制の関与するものであり、現代社会における著作権法制の在り様が問われることになる。そのような視点から、本講義は、まず、「著作物」「著作者」など、基本的な概念を学びつつ、新しい課題をも考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	有体物と無体物	開講に際して講義の概要、日常の生活と著作物や実演等の関わり、著作物などの無体物と有体物の関係、無体物の特性、すなわち、無体物は媒体を変えて偏在することを実例に触れながら学ぶ。	齊藤　博（専修大学教授）	齊藤　博（専修大学教授）
2	テクノロジーと著作権	人類が情報にアクセスしてきた歴史を概観した後、印刷術をはじめ、録音、録画、放送、宇宙衛星、コンピュータ、デジタルネットなど、それぞれの時代を画するテクノロジーが著作権法制にどう関わってきたかを考える。	同上	同上
3	著作物	著作権法の保護対象である著作物の要件や、著作物の種類について説明する。また、複数人が関与して作成する共同著作物や特殊な形態の著作物である編集著作物、データベースの著作物について説明する。	作花　文雄（内閣法制局参事官）	作花　文雄（内閣法制局参事官）
4	著作者	著作権法上の権利の享有主体となる著作者とは誰であるのかについて説明する。また、職務上著作される著作物については、誰が著作者になるのか、法人が著作者になる場合の要件について説明する。	同上	同上
5	著作者人格権	精神的創作物としての著作物は、著作者の人格の発露でもあるところから、著作者は人格権を保有する。この著作者人格権につき、公表権、氏名表示権、同一性保持権を述べ、その他の人格権との関係についても概説する。	齊藤　博	齊藤　博
6	著作権	著作権は著作物の利用形態に応じてその内容を変えてきた。今回と次回の２回にわたり、複製権をはじめ、上演権、演奏権、上映権、公衆送信権、伝達権、口述権、展示権、頒布権、譲渡権、貸与権、翻訳権、翻案権等の、著作権の内容を学ぶ。	吉田　大輔（文化庁長官官房政策課長）	吉田　大輔（文化庁長官官房政策課長）
7	著作権	同上	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	権利の制限（その1）	著作者の権利が及び得るような著作物の利用をする場合でも、一定の場合には権利者の許諾を得ることなく自由に利用できる場合があり、これを権利の制限（規定）と呼んでいる。権利が制限される様々なケースについて説明する。	作花　文雄	作花　文雄
9	権利の制限（その2）	同上	同上	同上
10	保護期間等	著作権等がどのように発生し、いつまで保護されるのか、無名・変名著作物や団体名義の著作物、映画の著作物についての特例、外国の著作物の保護期間の留意事項、さらに登録の制度について述べる。	吉田　大輔	吉田　大輔
11	他人の著作物の利用	他人の著作物を複製、送信するなどに際してどのような制度があるか。著作権の譲渡、著作物の利用許諾、出版権の設定などを学んだ後、著作権を集中的に管理する団体の状況、著作権の管理に関する新たな立法に言及する。	同上	同上
12	著作隣接権	著作権に隣接する権利について、その性格、著作権との違いを学んだ後、実演家の権利、レコード製作者の権利、放送事業者の権利、有線放送事業者の権利を述べ、デジタル時代に対応した立法の動きにも言及する。	同上	同上
13	権利侵害に対する救済	著作者の権利が侵害された場合における、差止請求や損害賠償請求などの民事上の救済や刑事上の制裁について説明する。	作花　文雄	作花　文雄
14	国際的な動き	著作権に関するベルヌ条約等を概観した後、国際的な動き、とりわけサイバー時代を迎え世界知的所有権機関（WIPO）等で繰り広げられる討論、法律思潮の違いと調和への模索の過程を探る。	齊藤　博	齊藤　博
15	電子的権利処理システム等	デジタル環境下、電子商取引の延長上に行われはじめた、音楽、映像、テキストのネット配信を視野に入れつつ、著作権等の電子的処理・管理システム構築の可能性を探り、著作権法制の未来像に迫る。	同上	同上

＝アーツ・マネジメント（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　川崎　賢一（駒澤大学教授）〕
〔主任講師：　佐々木　雅幸（大阪市立大学大学院教授）〕
〔主任講師：　河島　伸子（同志社大学助教授）〕

全体のねらい

本講義では、芸術文化活動を生み出すマネジメントの仕組みを探る。映画のような商業的文化も対象とし、グローバルな視点から講義を進める。文化運営の単なる実践的ガイドではなく、経済学・社会学・政策学などによる学際的アプローチに基づく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	イントロダクション：目的・定義・アプローチ	全体の俯瞰。講義の目的（アーツ・マネジメントの基本とその社会科学的背景の理解）、視点の設定（グローバルな観点の採用）、アプローチの仕方（学際的アプローチ）、基本概念の定義（アート、アーツ・マネジメントの定義）。	川崎　賢一（駒澤大学教授）	川崎　賢一（駒澤大学教授）
2	アーツ・マネジメント史	アーツの制度とアーツ・マネジメントの歴史を概括する。その際、進化論的立場の重要性と西欧中心の歴史を紹介する。同時に、日本的視点・アジア的視点の今日的意義を明らかにする。	同　上	同　上
3	日本におけるアーツ・マネジメントの始まり	1990 年頃より我が国において、アーツ・マネジメントへの関心が急速に高まった。この背景である社会・経済的要因を、1960 年代のアメリカと対照しつつ探り、アーツ・マネジメントの現状と今後の課題を整理する。	河島　伸子（同志社大学助教授）	河島　伸子（同志社大学助教授）
4	文化の経済学	文化の市場構造、文化団体の収支構造の特徴を文化の「外部経済効果」をキーワードに説明する。市場的収入のみに依存する商業的文化団体と、非市場的収入をも併せ持つ非商業的文化団体には、どのような行動の違いがあるのだろうか。	佐々木雅幸（大阪市立大学大学院教授）	佐々木雅幸（大阪市立大学大学院教授）
5	都市文化政策とアーツ・マネジメント	都市再生の切り札としての都市文化政策の流行と定着、創造的な芸術産業を生み出すための文化的投資と文化的インキュベータの重要性に触れ、その一方で、文化事業や文化支出に対する行政評価システム導入の背景を追う。	同　上	同　上
6	文化産業の経済と非営利文化マネジメント	文化を生産・流通させていくためには、他の経済活動同様に、資源を確保していくことが重要である。非営利的な文化活動においては、資源調達先とサービス提供先が合致しないことがあるが、これはマネジメントにとってどのような意味を持つのだろうか。	河島　伸子	河島　伸子
7	芸術創造のマネジメント	「芸術文化の生産を担う組織」を取り巻く環境、戦略的計画、意志決定とリーダーシップのあり方を一般企業のマネジメントと比較しつつ明らかにし、経営学におけるナレッジ・マネジメントのアート分野への適用を考察する。また、文化生産組織の構成要素、組織のデザイン、スタッフ構成、グループダイナミクスなどを一般企業のマネジメントと比較しつつ明らかにする。	佐々木雅幸	佐々木雅幸

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ポピュラー文化のマネジメント（1）：映画産業	映画などのポピュラー文化は、グローバルな社会に浸透しているが、メジャー系映画会社は、近年その市場支配力を更に強化している。その背後にある産業の経営戦略、それに対抗するヨーロッパの映画振興政策、そして近年の技術革新の影響などを探る。	河島　伸子	河島　伸子
9	文化におけるマーケティング・マネジメント	非営利の文化団体であっても、事業収入をいかに増やしていくか、ということ、すなわちマーケティング活動は重要な課題である。マーケティングはさらに観客・社会一般との関係づくりにとっても大切な考え方である。今回はこのようなマネジメントの基本を理解する。	同　上	同　上
10	アーツ・マネジメントと鑑賞者開発	前回に続き、観客との関係作りを基礎にするマネジメントを探る。既に観客となっている人々を超え、観客となる可能性を秘めた人々を掘り起こしていく「鑑賞者開発」について明らかにする。	同　上	同　上
11	視覚芸術とマネジメント	行政・美術館・商業ギャラリーが、美術館・マネジメントに果たす役割を、比較社会的（欧米型とアジア型）に明らかにする。その際、アーティストの関係や空間的インスタレーション・コラボレーションなどの意義も考察する。	川崎　賢一	川崎　賢一
12	舞台芸術とマネジメント	オペラ・クラシック音楽・演劇などの舞台芸術の特殊性とそれに起因するマネジメントの特性、プログラミングにおけるリスクとその回避のあり方、専門家の養成システムなど財政面での社会的支援システムについて国際比較を通じて検討する。	佐々木雅幸	佐々木雅幸
13	ポピュラー文化のマネジメント（2）：音楽産業	ＣＤや放送で聞かれる録音音楽の生産・流通における産業の構造、市場の特徴を探り、音楽における革新との関係を明らかにする。またインターネットの発展にともなう音楽流通の変革が、マネジメントに与える影響を探る。	河島　伸子	河島　伸子
14	新しいメディア文化とアーツ・マネジメント	CGやコンピュータ技術を用いたアートについて、そのボーダーレスな実態とその対応を分析する。メディアビジネス・マイクロビジネスとしてのアート。その際、知的所有権・知識マネジメントのあり方などを検討する。	川崎　賢一 佐々木雅幸	川崎　賢一 佐々木雅幸
15	グローバルな文脈におけるアーツ・マネジメント：まとめと展望	グローバルな文脈でアーツ・マネジメントを捉える必要性を述べる。その普遍的性格の一方で、非欧米文化の抱える問題や対応を紹介する（ディアスポラ・ジェンダー・エスニシティなど）。また、日本社会の今日的問題も指摘し、今後を展望する。	川崎　賢一	川崎　賢一

＝統計学入門（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：盛山　和夫（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

現代社会の中でさまざまに使われている統計データと統計学知識とについて、一般教養レベルで知っておくことが望ましいと思われる事柄を、分かり易く、具体例をあげながら解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	統計とは何か	統計の具体例を示しながら、統計というものの基本的な性質と特性を明らかにする。また、統計学の発達史を簡単にふりかえりながら、統計学が目指してきたものと、それが社会に対して持つ意義とについて概説する。	盛山　和夫(東京大学大学院教授)	盛山　和夫(東京大学大学院教授)
2	量的データと質的データ	統計データは基本的に量的データであるが、経験的データの中には質的なものも少なくない。経験的現象の探求にとって、量的データと質的データとがそれぞれはたす役割について解説する。	同　上	同　上
3	分布を読む	具体例を挙げながら平均、比率、中央値、分散などの統計データの基本指標を解説し、それぞれの特性を説明する。	同　上	同　上
4	関連を測定する	具体例を挙げながら、２変数のあいだの関連の仕方を測定するさまざまな指標を紹介する。カテゴリカル変数と量的変数の両方を含む。	同　上	同　上
5	データはどう収集されるか	統計データは実際にはどうやって収集されるのか。官庁統計、世論調査、学術的調査、保健データなどを中心に紹介し、物理－化学的データについても言及する。	同　上	同　上
6	確率で考える	確率に関する基本的な諸概念を説明し、統計データからなる現象を確立という概念によって理解することの基本的な意味を考察する。	同　上	同　上
7	確率変数とその分布	統計データの分析において頻繁に用いられる主要な確率変数とその分布および用いられ方について解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	検定という考え方	統計的検定の基本的原理を解説し、平均と比率についての検定法を述べる。	盛山　和夫	盛山　和夫
9	クロス表の読み方と検定	クロス表はどのように読まれるか。また、どのように提示すべきか。関連の仕方はどのように検定されるか。	同　上	同　上
10	回帰分析	多変量解析の基本をなす回帰分析について、その考え方、適用のしかた、結果の読み方を解説する。	同　上	同　上
11	計量モデルの意味	統計データを分析する手法としてさまざまに発展させられている計量モデルについて、その基本的意味を解説し、使用法の注意点と有効性とについて具体例を用いながら説明する。	同　上	同　上
12	生存時間分析	生存時間分析は時間的な流れの中で生起する現象を分析する手法として、計量モデルの中でもユニークな意義を担っており、社会学、人口学、医学、生物学などで重要な役割を果たしている。このモデルを解説し、使用法を説明する。	同　上	同　上
13	因果関係を考える	データの構造とメカニズムの構造との違いに注意しながら、統計的データから現象世界における因果関係についてはどのように接近することができるかについて解説する。	同　上	同　上
14	統計のウソにだまされない	統計データはしばしば誤って表示されたり理解されたりする。その実例をあげながら、統計のウソにだまされないためのいくつかの注意点を解説する。	同　上	同　上
15	社会における統計	統計データは今日の社会にとって、なくてはならない存在になっている。プライバシー問題や無駄なデータ集めなどに注意しながら、統計データを社会の中で有意義に利用することの重要性を述べる。	同　上	同　上

＝数学の歴史（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数学は、往古の昔より、人間の不思議な知的領域であり続けてきた。抽象的な概念を論じ、ときには「目に見えないもの」や「常識では理解でいないもの」さえ扱いながら、「不可謬の論理」に基づいているがゆえに絶対的な厳密性と普遍的妥当性をもち、それでいて、現実の生活にも深い関わりをもってきた。

このような数学を、完成された学問体系として学ぶのは、能率の良い学習方法ではあるが、しばしば、受動的な姿勢を強いられ、数学の技術的側面にしか注意が行かなくなる憾みがないとはいえない。本講では、ギリシャ時代から近現代までの数学の形成の過程を、それぞれの文化情況において見ることで、数学の立場から、認識の歴史を考察していく。現代の科学文明を支える数学的思考の意味を再考する機会にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「数学の歴史」序論	数学を歴史的過程において考えることの意義と問題点について、やや広い視野で考察する。また、講義全体の計画を（「幾何学時代」「代数学時代」「解析学時代」「算術学時代」という分類の意味と合わせ）述べる。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授）
2	幾何学時代の数学(1)	ギリシャ数学の特質を、ユークリッドの『原論』の第一巻を中心に論ずる。議論の素材は、今日「初等幾何」という名前で親しまれている図形に関する厳密な論証であるので、高等数学に経験のない人にも身近な話題であろう。	同　上	同　上
3	幾何学時代の数学(2)	ユークリッドの『原論』の第五巻の「比例論」に焦点を当て、ギリシャ数学が、通約不能量（無理量）のパラドクスを克服して連続体をどのように扱ったかを論ずる。	同　上	同　上
4	幾何学時代の数学(3)	アルキメデスの『放物線の求積につい』と『方法』を取り上げユークリッド『原論』の対照的な彼の数学（近世の微積分法的なアイデアと現代数学にも通ずる厳密な論証）を紹介する。	同　上	同　上
5	代数学時代の数学(1)	中世末期にスコラ学者の間で行われてギリシャ古典（特にアリストテレース『自然学』）の研究（ルネッサンス）における近代科学＝近代数学的特性の萌芽を見る。	同　上	同　上
6	代数学時代の数学(2)	中世アラビアにおける数学研究（特に方程式研究）を紹介する。	同　上	同　上
7	代数学時代の数学(3)	代数的記号法の発明と発達の歴史を紹介する。あわせて、近世イタリアにおける方程式の研究を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	代数学時代の数学（4）	近代合理主義哲学の祖デカルトの数学と哲学を述べる。「我思う故に我在り」と、彼の数学との不可分の結びつきを考察する。	長岡　亮介	長岡　亮介
9	解析学時代の数学（1）	フェルマーによる新しい数学の開拓の様子を紹介する。カヴァリエリやケプラーの業績を素材に初期の無限小解析の方法論的特質を探る。また、ガリレオ・ガリレイの数学と力学を中心に新しい科学と新しい数学の結び付きを考える。	同　上	同　上
10	解析学時代の数学（2）	ニュートンの業績を中心に初期の微積分法の内容を紹介する。	同　上	同　上
11	解析学時代の数学（3）	微積分法が、自在に応用されて、新しい分野を切り開いていった様子を、オイラーの業績を中心に紹介する。	同　上	同　上
12	解析学時代の数学（4）	解析学時代の数学のパラダイムの変更が迫られる事件（振動弦論争）を紹介する。またフーリエによって導入された新しい手法（今日フーリエ級数と呼ばれているもの）を紹介する。	同　上	同　上
13	算術時代の数学（1）	ラグランジュ、コーシ等、フランスのエコル・ポリテクニークの「数学教授」による数学の改革運動（解析学の厳密化）を紹介する。	同　上	同　上
14	算術時代の数学（2）	ディリクレ、リーマンによるフーリエ級数の研究を中心に、19世紀中葉における数学の研究の方向転換を紹介する。	同　上	同　上
15	算術時代の数学（3）	ワイヤシュトラースを中心とする「解析学の算術化」運動を紹介、あわせてカントルによる集合論の形成を歴史的な視野のもとで論ずる。	同　上	同　上

＝初等微分積分学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　熊原　啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

１変数の微分積分学の入門をわかり易さに重点をおいて解説する。微分と積分を平行して説明する。高等学校において微積分の導入と基礎を学習していることが望ましいが、まったくの初心者も理解できるようていねいに述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	関数と変動	写像と関数、数と座標、極限値、関数の連続性	熊原　啓作（放送大学教授）	熊原　啓作（放送大学教授）
2	導関数	微分係数、接線、導関数、微分、無限小	同上	同上
3	不定積分と導関数の計算	合成関数の微分、置換積分、単調関数、逆関数、原始関数、不定積分、部分積分	同上	同上
4	指数関数と対数関数	指数関数、対数関数、自然対数、対数微分法、双曲線関数	同上	同上
5	三角関数と逆三角関数	三角関数、三角関数の加法定理、三角関数の微積分、逆三角関数	同上	同上
6	有理関数の不定積分	有理関数、部分分数分解、有理関数の不定積分に帰着される積分	同上	同上
7	定積分	定積分、区分求積法、リーマン和、微分積分学の基本定理、積分の平均値の定理	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	平均値の定理	平均値の定理、ロルの定理、コーシーの平均値の定理、不定形の極限	熊原　啓作	熊原　啓作
9	テイラーの定理	高階導関数、ライプニッツの公式、テイラーの定理、剰余項	同　上	同　上
10	関数の増加と減少、極値	増加、減少、極大、極小、凸凹、変曲点	同　上	同　上
11	積分の拡張	非有界関数の積分、無限区間における積分、ガンマ関数、ベータ関数	同　上	同　上
12	面積と体積	平面図形の面積、曲線の長さ、回転体の体積・表面積	同　上	同　上
13	平面曲線	パラメター表示、長さ、曲率、伸開線、縮閉線	同　上	同　上
14	級数	無限級数、整級数、マクローリン級数	同　上	同　上
15	簡単な微分方程式	１階微分方程式、２階線形微分方程式	同　上	同　上

付録．極限と連続

＝線型代数入門（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数理科学諸分野の勉強を志す人に必要な線型代数の基本部分の確実な理解を主目標におきつつ、必ずしも技術的な知識にこだわらず、むしろ現代数学の方法論的特徴が実感できるような講義を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	線型代数入門入門	線型代数における基本的な問題意識と手法の基礎にある考え方を、歴史的な視座と大学以前に学んだ数学との対比を使って解説する。さらに講義の流れと目標について触れる講義全体の鳥瞰図的な把握を目標とする。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授）
2	現代数学入門（1）	次の 2 回と会わせ、線型代数を理解する上で必須の現代数学の基礎概念について実用的観点と方法論的観点を両睨みにして入門的な解説を行う。今回は主として集合の基礎概念について述べる。	同　上	同　上
3	現代数学入門（2）	前回に引き続き、線型代数を理解する上で必須の現代数学の基礎概念について実用的観点と方法論的観点を両睨みにして入門的な解説を行う。今回は主として、写像と述語論理の基礎概念について述べる。	同　上	同　上
4	現代数学入門（3）	前回に引き続き、線型代数を理解する上で必須の現代数学の基礎概念について実用的観点と方法論的観点を両睨みにして入門的な解説を行う。今回は主として、代数構造の基礎概念について述べる。	同　上	同　上
5	ベクトルの基礎概念	解析幾何の必須基礎概念である座標の概念を反省的に捉え返し、これによって、線型代数の基本にあるベクトルの概念を導入する。また、規範的なベクトルとして、数ベクトルとその演算を学ぶ。線型従属、線型独立、次元という線型代数でもっとも重要な基礎概念はここで直感的に理解される。	同　上	同　上
6	行列の基本概念	ベクトルの演算を介して行列とその演算を導入する。行列の演算の``非日常的"な代数的構造を理解する。	同　上	同　上
7	逆行列の概念、正則行列の概念	現代代数学的な立場から逆行列を導入し、連立一次方程式を逆行列の立場から見る。また、正則性の概念の重要性を理解する。	同　上	同　上
8	連立一次方程式	掃き出し法と呼ばれる連立一次方程式の解法を通じて行列の基本変形を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	階数 rank の概念	連立一次方程式の方程式の解法を通じて、解の自由度、さらには、階数の概念を講ずる。	長岡　亮介	長岡　亮介
10	行列式に向けて	置換の概念、対称式・交代式の概念をやや抽象的な立場も含めて講ずる。	同　上	同　上
11	行列式の概念	置換を用いた行列式の定義と、それと同値な行列式の多重線型性に基づく定義を与える。行列式の幾何学的な意味と具体的な行列式の計算を学ぶ。	同　上	同　上
12	行列式の計算	煩雑な行列式の計算を実際に行うための様々な工夫について述べる。	同　上	同　上
13	余因子行列の概念、Cramer の公式	逆行列に対する行列式の立場からのアプローチを紹介する。その副産物として、古来有名な連立一次方程式の解の公式を導出する。	同　上	同　上
14	線型写像と基底	線型空間の元や線型写像が基底を通じて数ベクトルや行列として“河蝕的に”捉えられることを学ぶ。	同　上	同　上
15	今後の課題と展望	本講義で未解決の問題を提起し、更なる発展の道筋を展望する。	同　上	同　上

＝ 確率・統計の基礎（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：釜江　哲朗（大阪市立大学大学院教授）〕

全体のねらい

確率とは何かを考え、それが世の中でどのように用いられているかを参照しながら、基本概念や計算方法に習熟して行くことを目的とする。さらに、統計の考え方を学び、検定・推定の意味を理解しつつ、現実のデータの統計解析を試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	確率の考え方と歴史	確率とは何かについての考察を行う。パスカル以来のさまざまな考え方が紹介されるとともに、現在どういうところで確率が用いられているかを学ぶ。	釜江　哲朗（大阪市立大学大学院教授）	釜江　哲朗（大阪市立大学大学院教授）
2	場合の数と確率	配列の数、組合せ数を用いた場合の数の計算と、それに基づく確率の計算を例題を解く形で学ぶ。組合せ数に関する基本性質の復習も行う。	同　上	同　上
3	確率事象とその計算法則	確率事象とは何かを学び、それらの確率をもとにそれらの和や共通部分、排反事象の確率の導き方を学ぶ。確率事象の間の関係が集合の場合と同様に、ベン図式で表されることと、確率と面積の類似性を用いて、確率の加法性を導く。また、条件付確率が導入される。	同　上	同　上
4	確率変数とその期待値、確率変数列の独立性	確率変数の概念が導入される。実数値確率変数の和や積、期待値・分散について学ぶ。期待値の線形性や独立確率変数の積の期待値が期待値の積であることなどを学ぶ。	同　上	同　上
5	離散型確率変数の分布	２項分布、ポアソン分布、幾何分布、超幾何分布が導入され、それらの実例、平均と分散について学ぶ。	同　上	同　上
6	連続型確率変数の分布	一様分布、指数分布、正規分布が導入され、それらの実例、平均と分散について学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	大数の法則と中心極限定理	独立確率変数列についての大数の法則が導かれる。また、中心極限定理について学び、その意味を具体例とともに理解する。	釜江　哲朗	釜江　哲朗
8	ランダム・ウォークとブラウン運動	ランダム・ウォークに関する確率の計算や鏡像の原理を学ぶ。また、その極限としてブラウン運動が導かれ、ブラウン運動の応用として熱伝導方程式が論じられる。	同　上	同　上
9	統計の考え方と意味	統計学の歴史と統計についてのさまざまな考え方が紹介されるとともに、今日統計学がどのように用いられているかを学ぶ。また、母集団、母数、標本、統計量といった基礎概念を理解する。	同　上	同　上
10	仮説検定の考え方とその意味	統計的検定の定式化とその背後にある考え方、仮説、対立仮説、第１種過誤、第２種過誤、有意水準、検出力関数の意味や検定の良さの基準が具体例とともに論じられる。	同　上	同　上
11	推定の考え方とその意味	区間推定と点推定が論じられる。不偏性、一致性、最小分散性等の推定の良さの基準が導入される。また、具体例をもとにこれらの意味について学ぶ。	同　上	同　上
12	正規母集団に関する検定・推定	正規母集団における分散既知の場合の平均の検定・推定、分散未知の場合の平均の検定・推定、平均未知あるいは既知の場合の分散に関する検定・推定が論じられる。これに関係して、t-分布、χ^2-分布、F-分布が導入される。	同　上	同　上
13	適合度検定	χ^2-分布を用いた適合度検定を学び、具体例に対して適合度検定を行う。	同　上	同　上
14	分散分析	F-分布を用いた分散分析が導入され、母集団の同一性等の検定を行う。	同　上	同　上
15	最小２乗法	最小２乗法の意味を学び、その解としての正規方程式が導かれる。これによる未知母数の決定と回帰分析を行う。	同　上	同　上

＝物理の世界（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　生井澤　寛（帝京平成大学教授）〕
〔主任講師：　波田野　彰（帝京平成大学教授）〕

全体のねらい

ここ数年の傾向として、高等学校における科目選択や大学入試において、自然科学、特に物理学は嫌われているらしい。その主な理由は、難しい、具体的なイメージがつかめない、訳の分からない数式や概念ばかり出てくる、等だと言う。世の中には、物理以外にも面白いことはいっぱいあるし、物理を知らなくとも困ることはない、と思う人は多い。だが、物理を初めから好きだという人は別としても、物理にあこがれたり、その深淵に触れてみたいという人は相変わらず多い。こういう人達を捉えることがうまくできないとしたら、教える側にも責任はあるにちがいない。
ここでは、物理の嫌いな人には、物理が身近になったなあと、物理を好きだという人にはより好きになった、と思ってもらえるような「物語」として話を進めていこうと思う。だからあえて、物理学とは言わない。また、物理を身近に感ずるためには、体験が要る。身の回りのものでやれる実験を用意するので、自分でやってほしい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物理とは何だろう	物理は、自然科学の基礎と言われる。では、物理は一体何を相手にする科学なのだろうか。自然を相手にするとき、色々な切り口があるが、この講では、大きさ、言い換えると長さの尺度を中心に見ていって、物理の相手が何かを見ていこう。もっとも小さい相手（素粒子）ともっとも大きい相手（宇宙）を比べると、10の後に60個以上もの0がつくほどの違いがあることがわかる。物理は、こんなに広い世界を相手にするのである。	生井澤　寛（帝京平成大学教授）	生井澤　寛（帝京平成大学教授）
2	力って何だろう	あの人は力持ちだとか、政界に力があるなどと、私たちは日常的に力という言葉を使っている。では、物理で言う力とは何だろう。実は、物理の最も重要な目標は、自然界に存在する力が何かを探りその力の原因を追究することだと言ってよい。だから物理では、力についの定義は、きっちり定められている。この講では、力について、もっとも基本的なことを、力が物体の運動の何と結びつくかを追及しながら学んで行こう。	同　上	同　上
3	力は何を産み出すか：運動と仕事	力は、物を結合させたり、動かしたり、仕事をする。前の講に続いて、力が運動の何と結びつくかをさらにつきとめる。そうすると、運動に関する基本法則がわかるとともに、力のきちんとした定義が見えてくる。つぎに、力のする仕事について考える。仕事を物理的にきっちり定めると、エネルギーとその保存則という、物理でもっとも大切な概念に到達する。	同　上	同　上
4	熱とはなんだろう	今日は風邪で熱があるとか、熱のこもった演説とか言う。では、熱とは何だろう。「熱」には形容詞としての「熱い」と名詞としての「熱」という意味の二通りの使い方がある。つまり、程度と量としての使い方である。前者からは「温度」という概念が生まれ、後者からは第３講で学んだ仕事と同じ、エネルギーの一形態としての「熱」という物理量であることがわかる。この関係を追求すると、温度と熱についてふだんから知っている当たり前のことから、きわめて基本的な法則が見えてくる。	波田野　彰（元東京大学大学院教授）	波田野　彰（元東京大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	熱は全部仕事に変えられるか	第4講で熱は仕事と等価であることを知った。仕事は全部熱に変えられる。では、熱は全部仕事に変えられるのだろうか。実は、この答えは誰でも知っている。環境にやさしい、燃費効率の良いエンジンを開発しようという努力は、実は、燃料の持つエネルギーの全てを仕事に変えることが出来ないためにやむを得ずする努力なのである。熱を仕事に変える効率をより良くしようという努力が、熱についてのもう一つの重要な基本法則を導いた。	波田野　彰	波田野　彰
6	水の不思議	水は生命を育んだ。水なしには生物は存在できない。物理だけで、水のこの役割を全てときあかすことは出来ないが、第4講から第5講にかけて学んだことをもとにして、水の基本的な性質を考えよう。まず、水に限らず、全てのものが置かれた条件の違いで示す姿（相）と相の間の変化の様子について見ていく。つぎに、水の特異性について探り、なぜ水が生命を生み出し、どのように現在、私たちの住む生命圏を作り維持しているかを見る。	生井澤　寛	生井澤　寛
7	波は場だ	バネに重りをつけ、引いてから放すと振動する（調和振動）。では、沢山の重りの間をバネでつないでいったら全体ではどういう運動をするだろうか。答えは波であることを見る。この重りとバネの系は、実は、物質のごく単純化された模型とみなすことができるだけでなく、波を場という概念で捉えることを可能にする。そして、振動や波は、物理に限らず、自然界で安定な状態を少し乱したときに必ず表れる普遍的な運動（励起）状態であることを見ていく。	同　上	同　上
8	光も波	音と光を例にとって、前講で見た振動と波の基本的な性質を探る。特に光は、レーザーのペンライトで見るように、まっすぐ進み、鏡にあたれば反射し、水に入ると曲がる（屈折）ので、ニュートンですら小さな粒だと考えた。一方、シャボン玉は虹色に輝き、水面の油の膜もやはり虹色に見える。これらは光を小さな粒とすると説明できない。では、光は何か。詳しく調べると、光は波長の短い波であり、後で学ぶ電磁波の一種であることがわかる。さらに、波長の異なる波をたくさん重ね合わせると、粒子のように動く魂を作ることが出来る。これは、第１１講と１２講で見るミクロの世界の理解への橋渡しとなる。	同　上	同　上
9	電気無しでは生きられない	電気が無ければ、ふだんの生活も生産活動も情報交換も麻痺状態になるだけでなく、私たちも、原子も分子も存在できない。では、電気とは何か。電気の正体を探っていくと、電荷とその運動に行き着く。さらに、磁気ができる原因も分かってくる。そして、電荷の間の力が物を作り上げる基本的な力の一つであることもわかる。電磁気の現象の理解は、ミクロの世界の理解が無くては完結しないのである。ここでは第７講で学んだ場の概念が不可欠となる。電磁気を場（電磁場）ととらえることで理解が深まるとともに、ミクロの世界が見えてくるであろう。	同　上	同　上
10	電気を作る	電気を作るにはどうしたらよいのだろうか。また、電気によって、モーターはどうして動くのだろうか。前の構でわかったことから、簡単な発電器とモーターを作って動かしてみよう。こうして電気は、仕事と互いに変換し合うことがわかる。他にも電気は、照明（光）や、電話（音）、ヒーター（熱）の例のように、他の形のエネルギーと容易に変換しあえることも見ていこう。さらに、光も実は、電磁場の振動＝電（磁）波の一部であることを第８講より詳しく見て行こう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	量子って何	これまでの講に出てきた物理は、その骨格がすでに19世紀の末までできあがっていて、古典物理と言われる。20世紀になると、この古典物理では理解できない現象が次々に見つかり、現代物理の世界に入ることになった。その代表的な例として、高温物体から出る光の色と温度の関係（黒体輻射）、光を当てたとき金属から出る電子と光の波長の関係（光電子効果）、温度の低いときの比熱と温度の関係（低温比熱）、放射能を取り上げて、量子が何かを突き詰めていく。また、電子と原子核から原子がどうできるかにも触れよう。	生井澤　寛	生井澤　寛
12	電子無しでは生きられない	前の講で学んだ量子的な性質を持ち、原子や分子の主役で、また、私たちの日常生活に欠かせない色々な電子機器の働きを担っているのが、電子である。電子はマイナスの電荷を持った軽い粒子であると同時に、量子の世界では、光と同様の波として振る舞い、磁気も持つ。電子は原子や分子で主役として振る舞うこと、私たちの身の回りの物は電子が形を作っていること、色々な日常の変化も電子が主役であることを学ぶ。また、電子の働きを私たちは目的にかなうように制御する技術を持っている。この技術は電子工学と呼ばれているが、そこでは電子がどのような役割を演じているのだろうか。真空管の中での電子の振る舞い、半導体という物体での電子の振る舞いを通じて、その制御の仕組みを学ぶ。	波田野　彰	波田野　彰
13	素粒子の世界	電子を通じて、ミクロの世界の一端を見た。電子は軽いが、物の質量のほとんどを担う原子核とともに、原子や分子を作り、その性質や、私たちが目にする物質を作る際の基本的な役割を果たすことを見る。では、原子核は何で出来ているか。そして、この世界の究極の構成要素は何であり、どうやって、この世界が出来るのか。これらを突き詰めるのが素粒子の研究であり、これからの物理の大きな課題でもある。	生井澤　寛	生井澤　寛
14	光に追いつくか	20世紀に、量子とともに現代物理を作ったもう一つの物理が、相対論である。相対論は、光の速度に近い高速で運動する物体の振る舞いを理解することから始まった。そして、古典物理の世界では互いに独立と考えられていた時間と空間が、互いに離れがたい関係にあることを示してくれた。さらに時間と空間を、統一した場の入れ物と考えると、素粒子のみならず重さのある物の間に働く重力の起源が理解できそうである。宇宙規模での世界の理解がどこまで進んだかを見ていこう。	同　上	同　上
15	環境と物理	物理をはじめとする自然科学と、それをもとに生まれた技術の進歩は私たちの生活を豊かにしたが、その半面、様々な形で公害を産み出し、地球の生命圏自体を脅かすほどになっている。なぜこうなったかは、特に第5講と第6講とで学んだ事柄によって、地球規模の安定性が大きく乱されようとしていることをみる。では、この事態をどう解決するか。それはまた、自然科学や技術を生んだ物理を初めとする科学の役割でもある。物理の立場から、環境問題の解決策を探り、私たちにできる工夫を産み出すための提言をともにしていきたい。	波田野　彰	波田野　彰

＝科学・技術と社会（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　池内　了（名古屋大学教授）〕

全体のねらい

20 世紀に入って、科学・技術は異様な勢いで発展した。それによって、人々の生活は便利で快適で健康的なものとなり、生産力が上がって多くの人々が飢えから解放され、医学の進歩によって人々の平均寿命は飛躍的に延びた。しかし、科学・技術は、戦争に動員されて多くの人々を殺傷し、環境破壊の一端を担い、災害に脆弱な都市構造を現出させることにもなった。このような、科学・技術のさまざまな負の側面が多く指摘されるようになった現在、私たちは科学・技術とどのように付き合っていくべきかを真剣に考えねばならない。本講義では、科学・技術と社会を巡るさまざまな問題を取り上げつつ、科学者・技術者の倫理規範や２１世紀のあるべき科学・技術と社会の関係について考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	科学・技術と社会の関係	20 世紀における科学・技術と社会の緊密な結びつきと、それによって生じているさまざまな問題を見ながら、人類の未来を考えていく上で、社会は科学・技術とどのような関係を築くべきかについて本講義の概論を述べる。	池内　了（名古屋大学教授）	池内　了（名古屋大学教授）
2	科学・技術の起源と社会における役割	ホモ・サピエンスから古代の科学にいたるまでの人類の知の獲得の歴史と、その過程における技術の獲得と科学の萌芽についてまとめる。科学的思考は観察から始まり、野生動物の家畜化や植物の栽培などの試行錯誤を繰り返し、星や太陽や月の運行を観察することにより時間や季節の概念を確立してきた。これらについての西の科学と東の科学の比較も試みる。	同　上	同　上
3	近代科学の成立と技術との結びつき	17 世紀に起こった科学革命、18 世紀の産業革命、19 世紀の発明家の時代を、科学・技術の成立と相互関係の変遷の歴史として整理する。科学と技術は別々の歩みをしつつ、ルネサンス、大航海時代、宗教改革などの時代背景と影響し合ってきた。また、市民と科学者との関係などにも触れる。	同　上	同　上
4	科学者の登場と技術者の勃興	19 世紀後半から工場生産が進展し始めると同時に、scientist と呼ばれる自立した科学者が本格的に登場する。科学の成果が技術を通じて製品化され、社会や人々の生活に入り込むようになったのである。その典型が電気で、電磁気学の完成から電気の利用まで大した時間がかからなかった。20 世紀に入って、分業による大量生産方式が導入されるにおよんで、科学・技術・社会の関係が急速に強められていった。	同　上	同　上
5	戦争と科学・技術	ギリシャのアルキメデス以来、科学者の戦争への協力はあったが、それが組織的になり、科学者・技術者の動員が大々的に行われたのが第１次世界大戦であった。科学は国家の重要な１部門となり、国家が科学研究のスポンサーとなった。さらに第２次世界大戦では、マンハッタン計画で象徴されるビッグサイエンスが国家の手で遂行されるようになり、科学が国家の威信を表すようになった。軍事技術と民生技術の比較など、技術開発の在り方も考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	２０世紀後半の科学・技術と社会	20 世紀後半には、科学の国家による制度化がいっそう進行し、科学の技術化の時間もいっそう加速されるようになった。同時に、企業が技術開発の主体となるにつれ、市場（経済）の論理が科学・技術にも大きく影響するようになった。また、石油化学工業や原子力工業などによる環境問題が生じてくるとともに、他方ではマイクロ・エレクトロニクスによる情報化が急速に進展した。	池内　了	池内　了
7	科学・技術と社会を巡る問題（１）エネルギー・資源問題	工業化社会の根幹は、エネルギーや資源をいかに確保するかが国家安全保障と結びついたことであった。それがさまざまな国家間紛争の根源であったが、石炭から石油へのエネルギー源の転換は、国際政治の枠組みに大きな影響を与えた。やがて、ローマクラブによる「宇宙船地球号」というキャッチフレーズが有限の資源と環境を想起させることになったが、高度成長時代を迎えてその警告は無視されてしまった。しかし、21 世紀半ばには確実に当面する問題である。	同　上	同　上
8	科学・技術と社会を巡る問題（２）地球環境問題	かつて、環境は無限の容量と浄化力を持つと考えられ、大量廃棄を前提とする生産システムが常であった。ときどきには悲惨な公害があったが、それらはローカルな問題として処理されてきた。しかし、生産活動が地球規模となり、その影響も地球規模で発現するようになった。また、オゾン層の破壊や環境ホルモンのような、化学物質による地球の汚染は、地球上の人間誰もが加害者にも被害者にもなるという事態となってきた。ここにおよんで、１国に閉じず、地球全体で環境問題に対処しなければならなくなっている。京都議定書の実行のように、まだその取り組みは不十分であり、21 世紀に持ち越された問題である。	同　上	同　上
9	科学・技術と社会を巡る問題（３）人類と核	マンハッタン計画で開発された核兵器は世界中に拡散し、今や人類を３回も皆殺しできるほど過剰蓄積されている。これまで、さまざまな核兵器の禁止条約の取り決めがあったが、まだ不十分なままである。また、原子力発電所は、世界中で 500 台近くも稼働する状態になっており、放射性廃棄物問題や廃炉問題、プルトニウムの密輸やそれによる核兵器開発の危険性が懸念される。さらに、原子力発電所の事故による核汚染の危険性とともに、原子炉へのミサイル攻撃の可能性も否定できず、21 世紀は依然として核と向き合わねばならない。	同　上	同　上
10	科学・技術と社会を巡る問題（４）神を演じる	分子生物学の急速な発展とその医薬・農業・畜産への応用は、止まることなく拡大している。特に、遺伝子組み換え作物の普及は農業に大きな影響を与え、遺伝子操作によるクローン動物の作成は次世代の人間に適用される可能性を孕んでいる。ゲノムの解読によって遺伝子治療がいっそう進み、胚幹細胞の利用によって臓器作成も可能になるかもしれない。21 世紀はバイオの時代と呼ばれるように、さまざまな形での生と死の操作が盛んになるだろう。しかし、それらがどのような影響をもたらすかについては、まだまだわかってはいない。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	科学・技術と社会を巡る問題（5）情報化社会の行方	IT革命という言葉が流行しているが、ITを用いた情報流通や企業活動の能率化を直接意味しているだけでなく、学校や図書館、議会や裁判所など、現在機能しているあらゆるシステムが大きく変化する可能性も考えておかねばならない。さらに、ロボット社会の到来や人口知能の普及など、社会のさまざまな局面にコンピューターが入り込み、それとの協調の上で社会が成り立っていく、という側面も考えておかねばならない。むろん、情報化社会になったからといって生産活動がなくなるわけではないから、それとの格差や矛盾も生じてくる可能性もある。より大きな視点で情報化時代を迎える21世紀を俯瞰する必要がある。	池内　了	池内　了
12	科学者・技術者を巡る問題	科学・技術の影の部分がクローズアップされるにつれ、それに携わった科学者・技術者の倫理が問われるようになっている。科学は単に好奇心だけで進めて良いのか、技術がもたらした厄災に技術者はどのような責任が求められるのか、科学者・技術者のプロフェッショナル・ディシプリンとは何か、など社会との関係を念頭においた科学者・技術者の倫理規範を検討すべきではないだろうか。さらに、サイエンス・ウォーズで象徴される科学と哲学の関係、科学におけるジェンダー構造など、科学・技術をより広い社会的視点で見直すことも求められている。	同　上	同　上
13	２１世紀の科学・技術と社会	これまで述べてきたような問題は、２１世紀においていっそう深刻化するとともに、科学や技術の在りようも異なってくる可能性がある。例えば、科学の分野では、環境問題のようなさまざまな要素が複雑に絡み合った複雑系の科学や文系・理系の壁を取り払った学問の総合化が大きな目標となるだろう。また、技術分野では、これまでの大型化・集中化・一様化の技術体系から、小型化・分散化・多様化の技術が重要視されるようになるだろう。それによる資源の有効利用・循環型社会・自立した地域社会の実現が目標とされることになるだろう。そのような科学・技術の転換の中で新しく社会との関係を構想する必要がある。	同　上	同　上
14	科学・技術を転換させる原動力	現代は、科学者・技術者と市民の間の連携が途切れている。それを回復し、市民社会の中で科学・技術の中身が語られ、市民自身の選択によって、その将来が決まっていく、そんな仕組みを早く作る必要がある。そのためには、市民と科学者・技術者の対話が重ねられ、相互信頼を確立することが先決である。その条件として、情報が公開されること、環境や公衆の安全を第１とする予防原則を確立すること、アセスメント会議など市民と科学者・技術者の協力の上で政策を立案してゆくこと、などを真剣に考えねばならない。	同　上	同　上
15	グローバル化時代の私たち	21世紀は、よりいっそうグローバル化が進展するだろう。資源獲得競争が激しくなり、第３世界の経済発展が進み、世界的規模の分業が進み、そして何より環境問題のような地球規模で対処しなければならない問題が深刻化すると予想される。世界全体が敵対し合うのか協調し合うのかの大きな岐路に立たされることになる。この困難を乗り切っていくためには、私たち自身が真にグローバルな発想を持ち、科学・技術の有効な利用とその健全な発展を正面に据えた取り組みをしなければならない。循環型地球社会の建設という大きな目標を掲げて２１世紀を希望ある時代としたいものである。	同　上	同　上

＝物質の世界－化学入門（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　平川　暁子（放送大学名誉教授）〕
〔主任講師：　濱田　嘉昭（放送大学教授）〕

全体のねらい

自然界は物質で構成されており、私たちの身のまわりで起こる現象は物質の性質と変化によるものである。現在と未来の生活の安全と豊かさについて考えるとき、物質についての基礎知識は不可欠である。本科目では物質の世界の基本的な事項を化学の体系としてわかりやすく解説し、自然環境と技術開発の問題についても考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の世界	一般に「物質は原子や分子からできている」と説明されているが、実際に手に触れる物質と原子・分子との関係は自明ではない。それが解明されるに至った過程を説明し、生活の中で、物質について正しい理解をもつことの大切さを示す。	平川　暁子（放送大学名誉教授） 濱田　嘉昭（放送大学教授）	平川　暁子（放送大学名誉教授） 濱田　嘉昭（放送大学教授）
2	原子と分子	物質を理解するには、その構成要素である原子・分子の特性と、それらを正確に記述する科学の言葉を知ることが必要である。この回では、原子・分子の基本的事項を解説し、その化学的表現に慣れることによって、物質の理解が深まるように平易に説明する。	同　上	同　上
3	化学結合と分子の構造	自然界にある多種類の物質は原子間の化学結合によってできる。化学結合の種類と、各結合によってできた物質の特徴を説明する。また、分子の形や性質と化学結合との関係を、模型やＣＧを使ってわかりやすく説明する。	同　上	同　上
4	物質の変化（１）：状態変化	物質の多様性は、分子の種類の多様性だけでなく物質が変化することによって現れる。この回では、状態変化を日常の経験と関連させて説明し、物質により状態変化に違いがあること、その理由は分子の運動や分子間力の違いによることを示して、物質の多様性の統一的な理解をはかる。	同　上	同　上
5	物質の変化（２）：化学変化	化学変化について日常の経験と関連させて説明し、化学反応の本質とその法則を理解する。化学反応が起こるときの、物質の量の関係・熱量の関係などを理解することが、生活の中でも重要であることを示し、物質の定量的な取り扱いについて説明する。	同　上	同　上
6	物質の混合	自然界が多様性を示す原因の一つは混合である。物質は原子・分子の集団であり、組成の種類・数・混合状態によって新たな性質が現れること、混合の不可逆性などを実例によって示す。濃度の正しい取り扱いは日常でも重要であり、それに慣れるように説明する。	同　上	同　上
7	水溶液と酸・塩基	自然界で最も多い混合物は水溶液である。水溶液の特性は生物の生存にも重要な役割をしている。水素イオン濃度（ｐＨ）・酸・塩基など日常でもよく使われる言葉の意味を、化学的に正しく理解できるように、わかりやすく説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	酸化と還元	化学反応は結合の組み替えであり、その際には、電子の授受が起こる。見かけが違っていてもほとんどすべての反応は、酸化反応と還元反応として説明される。有機物の燃焼も、金属の酸による溶解も、電池の電圧も、電子の動きで統一的に説明できることを示す。	平川　暁子 濱田　嘉昭	平川　暁子 濱田　嘉昭
9	有機化合物	有機化合物は種類も多く、生命に関係する物質として重要である。この回では、有機化合物の特徴を総合的に説明し、多種類の有機化合物が存在する理由・特異な機能を示す理由を化学結合の視点から説明して、身近な有機物質の理解を深めることをめざす。	同　上	同　上
10	化合物の反応	化学変化にはどのような種類があるか、反応はどのように起こるか、どのように進むか、どのような条件でどこまで進むか、どのくらいの速さで進むか等、反応には多くの要素が関係していることを説明し、生活・産業の中での反応の工夫を、具体例をあげて説明する。	同　上	同　上
11	物質とエネルギー	熱・光・電気など各種のエネルギーに応じて物質は独自の性質を示し変化する。反応による熱の放出・吸収、物質の色、光による分解、電気分解などは、エネルギーを伴う物質の現象である。物質とエネルギーとの関係を、実例をあげながらその本質について説明する。	同　上	同　上
12	材料の化学－ 新しい物質をつくる	古来、エネルギーと化学反応の利用が人間の暮らし方を変えてきた。動力機関の発明、色素の合成、肥料の合成、高分子物質の合成など、近代だけでも多くの例がある。現代では優れた機能を持つ物質を予測し作り出す試みが行われており、その実例を紹介する。	同　上	同　上
13	生命と化学	生命現象は、生物体を構成しているタンパク質・核酸・脂質・炭化水素等の生体分子の有機的な相互作用である。この回では、生体分子の性質や反応の特徴について紹介し、生命の営みの不思議について考えてみる。	同　上	同　上
14	物質循環と地球環境	地球上の物質は、空間的にも時間的にも絶えず変化と循環を繰り返している。物質と人間とのかかわりにおいては、物質が資源として存在するか、環境破壊物質として存在するかが重要な問題であることを示し、物質への関心を深める。	同　上	同　上
15	物質の不思議	物質の世界は科学的に解き明かされてきたが、ミクロの原子分子が集まってマクロの物質ができる際の現象には、まだ不明な点も多い。この回では、本科目で学んだ物質の科学について復習しながら、未解決の課題と将来の展望について考えることとする。	同　上	同　上

＝基礎生物学（‘０３）＝（TV）

〔主 任 講 師： 岩槻 邦男（放送大学教授）〕
〔主 任 講 師： 石川 統（放送大学教授）〕

全体のねらい

20世紀の後半，生物が共通にもつしくみについての私たちの理解は大きく進んだ。その一方で，近年，共通のしくみを知るだけでは生物の全体像を知ったことにはならないという認識も高まってきた。本講義では基礎的な生物現象の解説を通じて，共通のしくみをもちながら生物はなぜこれほど多様であるのかを考えることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命の特質	生き物には細胞のうちにDNAなど遺伝子担荷体を収めて生命現象を発現する普遍性と、膨大な数の種やさまざまな形質に進化した多様性が共存する。生きているとはどういうことかを、生命の普遍性、多様性の両面から学ぶ。	岩槻 邦男（放送大学教授）	岩槻 邦男（放送大学教授）
2	生体を構成する分子	細菌でも，動植物でも構成成分の約７０％は水であり，その他の成分が水を介して反応し合うことで生物は成り立っている。タンパク質と核酸を中心に，それら生体を構成する分子のあらましを紹介する。	石川 統（放送大学教授）	石川 統（放送大学教授）
3	細胞－生物の基本単位	生物の基本単位は細胞は，大きく原核細胞と真核細胞に分けられる。２つの共通点，相違点についてのべ，次に真核細胞を構成しているさまざまな細胞小器官について解説する。細胞分裂についてもあらましを学ぶ。	同上	同上
4	遺伝と遺伝子	遺伝子の化学的本体であるDNAと遺伝との関係をのべ，遺伝子がはたらくとは，正確にはどのようなことかを考える。また，この分野の新しい知見についても簡単に紹介する。	同上	同上
5	生殖と発生	生物は１個の卵から一定の形を持った個体へと発生し、成長して行くが、その過程はとてもドラマチックである。本章では、卵、精子の形成、受精、初期発生などについて述べる。また、最近の発生生物学の発展についてもふれる。	森澤 正昭（東京大学名誉教授）	森澤 正昭（東京大学名誉教授）
6	植物と菌類のからだのつくり	植物や菌類と動物は進化の結果さまざまな違いを示すようになった。これらの細胞に見る違いを整理し、植物や菌類のからだのつくり、はたらきについて、動物の生とどのような共通性を示し、差を示すかを学習する。	岩槻 邦男	岩槻 邦男
7	代謝	生物のいとなみを支えているのは化学反応である。酵素のはたらきとエネルギーの出入りに焦点を絞り，糖の分解と生成を例として，生体の化学反応のもつ意味を概観する。	石川 統	石川 統

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生体の運動	生き物は周囲の変化に反応して生きており、全ての生物が動くといって過言でない。この生物の運動“生体運動”の機構は多様である。本章では、細菌、原生動物、動植物の精子、筋肉の運動メカニズムのいくつかについて解説する。	森澤　正昭	森澤　正昭
9	脳のはたらき	動物体内で最も複雑な組織をもつ脳の構造を学んだ上で、外界あるいは体内からの刺激を感じ、その感覚の意味を分析して、最も適切な反応あるいは行動を動物に起こさせる脳の働きを解説する。	守　隆夫（帝京平成大学教授）	守　隆夫（帝京平成大学教授）
10	ホメオスタシス	動物は生命を維持するため体内の環境を一定に保つ性質があり、これをホメオスタシスという。ホメオスタシスの維持に活躍している神経系、ホルモン系、免疫系の働きについて、具体的な生理活動を例にして解説する。	同　上	同　上
11	生物の集団とその生活	生物は細胞や個体として生きると同時に、他の個体や他の種と共に集団の中で生活している。ある生物と無機的環境や生物的環境との関係について理解を深め、集団レベルで見た生物の生活を適応と関連づけて学ぶ。	可知　直毅（東京都立大学教授）	可知　直毅（東京都立大学教授）
12	種の進化	生物多様性は種の違いによって認識される。しかし、種とは何かという問いに満足できる答はまだ準備されていない。種の進化について、何が分かっているかを学習し、生物の多様性の起源と現状を追究する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
13	生物の系統	すべての生物は地球上に生命が発生した３０数億年前から一貫して生き続けている。膨大な数に分化した種の間に見られる階層性を生命の歴史として整理し、生物間の類縁を追究する。	同　上	同　上
14	ヒトの生物学	多様に分化した生き物のうち、私たち自身であるヒトという生物は、特殊化した哺乳動物の１種である。ヒトの起源と進化について紹介し、ヒト化というのはどういうことだったかを考える。	長谷川政美（統数研教授）	長谷川政美（統数研教授）
15	生物学の課題	科学の進歩は社会生活に深いかかわりをもつ。最近の生物学における社会とのかかわりを、医療、資源、環境などの例について取り上げ、文明の進歩によって何が変わっているかを紹介する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男

＝生物学の歴史（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　溝口　　元（立正大学教授）　〕
〔主任講師：　松永　俊男（桃山学院大学教授〕　〕

全体のねらい：

この講義では、とくに予備知識を必要とせず、人類の生物や生命についての思索や理解を古代から現代に至まで、通史的に辿りながら学習していく。また、生物学やその関連諸科目を学ぶ際の考え方や基礎知識、さらに現代の先端医療技術や自然保護問題を自ら検討する素材の提供も目指している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	アリストテレスの生物学と近代の生物学 － 目的論的自然観と機械論的自然観	万学の祖アリストテレス、目的論的自然観、アリストテレスの生物学、アリストテレスの後継者たち、科学革命と機械論的自然観、生物学の特徴	松永　俊男（桃山学院大教授）	松永　俊男（桃山学院大教授）
2	近代科学成立時の生物学－生命単位の探求と生理学の誕生	顕微鏡の発明とレオナルドの活躍、近代科学の言と生と肉眼観察、顕微鏡学者の登場、フックの「ミクログラフィア」と細胞の命名、ハーヴィと近代生理学の誕生、人間機械論、生理学の展開	溝口　元（立正大学教授）	溝口　元（立正大学教授）
3	リンネの分類学－自然史研究の系譜	自然史と自然哲学、自然史と博物学、リンネの生涯、二名法、種と属、ビュフォンの自然史、分類学の発展、原型論から進化論へ	松永　俊男	松永　俊男
4	ラマルクとダーウィン－生物学の革新を目指して	ラマルクの生涯、「生物学」の提唱、ダーウィン以前の進化論、ダーウィンの生涯、ダーウィン進化論の意義、進化論とキリスト教	松永　俊男	松永　俊男
5	発生現象の探求－観察・実験と論争	発生現象に対する肉眼観察から顕微鏡観察へ、発生の理論を巡る論争：精子論（精原説）と卵子論（卵原説）、前成説と後成説、論争の決着としての単為生殖や再生現象の発見、受精と自然発生、後成説の定着と胚葉説の確立	溝口　元	溝口　元

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	19世紀の生物学－1 ダーウィン進化論とその後	ハックスリー「自然における人間の位置」と人類の起源、生物進化論への批判、突然変異の発見、総合説の誕生	溝口　元	溝口　元
7	19世紀の生物学－2 社会ダーウィニズム	社会ダーヴィニズムと優生学、アメリカ、ドイツ、日本、北欧の優生思想とその具体的方策	溝口　元	溝口　元
8	19世紀の生物学－3 メンデルと遺伝の法則の発見	メンデル以前の遺伝研究、メンデルの略歴、メンデル遺伝の法則の特徴、病気の遺伝ワイズマン「生殖質連続説」	溝口　元	溝口　元
9	20世紀初頭前後の生物学－1 メンデル以降の遺伝研究	メンデル遺伝の法則の再発見、メンデル遺伝の法則の普及－ベーツソンとヨハンゼン、モーガンの遺伝子説、モーガン門下の遺伝学者たち、集団遺伝学、核酸研究	溝口　元	溝口　元
10	20世紀初頭前後の生物学－2 細胞学、生化学、生態学	細胞説の確立とそれ以降の細胞研究、発酵の原因を巡る論争、酵素概念の形成、生化学の成立、免疫学・細菌学の成立、生物集団への関心、生態学の成立	溝口　元	溝口　元
11	20世紀初頭前後の生物学－3 実験研究の確立	実験室の誕生－ギーセン体制、ベルナール「実験医学序説」、研究機関の活動（ナポリ臨海実験所、ウッズホール臨海実験所、ロックフェラー国学研究所）実験発生学の誕生	溝口　元	溝口　元
12	日本の生物学－1 古代から幕末まで	本草学とは、中国本草書の伝来、日本の本草学の自立と小野蘭山「本草綱目啓蒙」、ツンベルクの来日と西洋植物学の導入、蘭学の誕生と展開	溝口　元	溝口　元

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	日本の生物学－2 明治期以降	お雇い外国人生物学教師の活躍－モースとホイットマン、初期の動物学者たち－箕作佳吉、石川千代松、谷津直秀、初期の植物学者たち－伊藤圭介、矢田部良吉、三好学、日本の実験生物学、世界的発見	溝口　元	溝口　元
14	20世紀後半の生物学－分子生物学からバイオテクノロジーへ	分子生物学の源流、二重らせん構造の発見－ワトソン、クリック、ウィルキンズ、フランクリン、 遺伝暗号の解読、遺伝子組み替え技術、バイオテクノロジーと環境保全、ヒトゲノム計画	溝口　元	溝口　元
15	現代の生物学－生物学の多様な拡がりと将来の方向	生物学と社会－アシロマ会議、エイズ研究、クローン生物、先端医療技術と生命倫理、がん研究脳科学の展開、	溝口　元	溝口　元

＝集団と環境の生物学（‘０３）＝（TV）

〔主 任 講 師： 松本 忠夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

自然界における生物は、家族、群れ、群体、群落、混群、種個体群、群集などのさまざまなレベルの集団としてとらえることができる。いかなる環境のもとでは、いかなる生物集団が成立しているであろうか。本講義では無機的環境および生物的環境と生物集団の成立との関係における論理性を説明するとともに、人間の活動がそれらの集団に与える影響についても説明する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物集団の成り立ちと環境	生物の集団は、家族、群れ、群落、種個体群、群集などといったさまざまな大きさのレベルでとらえることができる。また、群集には食物連鎖構造をみることができる。現実的にはそのような種々の集団は無機的および生物的環境との関係でさまざまな変異性をあらわしている。ここでは生物集団が成立する過程において環境からどのような影響を受け、また逆に環境にどのように影響するかを総覧する。	松本 忠夫（東京大学教授）	松本 忠夫（東京大学教授）
2	動物の繁殖と社会	通常の動物の個体は、植物と異なり大きく動けるので、繁殖活動において個体どうしの離合集散が見られる。また、親による子への投資の様相も多様である。そのような動物個体の繁殖活動を説明すると同時に、個体間の関係が統合された状態を社会としてみることができることを説明する。そして、個体行動と社会性の発達の関係を考察する。	同 上	同 上
3	生態系の成り立ちの基礎	生態系の基礎となる植物による物質生産（基礎生産、一次生産）および植物の生理生態を説明する。そしてそのことの理解が地球上の（陸域）生態系レベルでの炭素蓄積・収支の理解に役立つことを述べる。また、なぜ森林のような炭素蓄積系ができたのかについても，受光競争の観点から理解してもらう。	甲山 隆司（北海道大学教授）	甲山 隆司（北海道大学教授）
4	植物の繁殖と個体群過程	植物における受粉、種子散布、密度効果、種間競争などの個体群過程について説明する。また、種間競争に留まらず，群集（多種系）について、また、生物多様性の維持機構の生態学的側面、あるいは遷移についても触れる。	同 上	同 上
5	生物の地理的分布	地球上における生物の地理的分布は、水平分布および垂直分布としてとらえることができる。そのような分布は気候条件に強く支配され、また地形や地質も関係している。そればかりでなく、大きくは大陸の動きなど地史の影響も強く受けている。また、数万年間以前からのヒトの活動の増大とともに、世界各地の生物相が著しく変化してきたことも最近分かってきている。（屋久島での現地ロケを含む。）	松本 忠夫	松本 忠夫
6	熱帯環境と生物	１年中、高温多湿な熱帯の陸地環境には熱帯林が成立し、そこには膨大な種数の生物が生息している。熱帯の生物の様相を説明するとともに、熱帯においてなぜ生物相が著しく多様なのか、その理由について考察する。また、生物間の共生関係が著しく発達していることを説明する。	松本 忠夫	松本 忠夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	高山、極地環境と生物	標高の高い高山に生育する高山植物は低温、強風、積雪などの極限環境下に生育している。日本の高山植物は長い間に高山の環境に適応したものであり、それらは日本列島で独自に進化したものもあれば、北極域から氷河期に移動してきたものもある。ここでは極限環境に生育している植物の形態学的及び生理学的性質について説明し、環境適応について考える。また北極や南極に生育する植物について説明し、日本の高山植物との関係を考察する。	増沢　武弘（静岡大学教授）	増沢　武弘（静岡大学教授）
8	砂漠と生物	地球上に広くひろがる砂漠について、分布および各々の特徴を図示する。その中でも植物の乾燥条件に対する形態学的および生理学的適応現象を「水の利用」という側面から説明する。具体的には南米のアタカマ砂漠とペルー砂漠の植物群落についてスライド、映像を用いて述べ、どのようにして乾燥条件下で生育しているかを、ともに考える。砂漠の季節草原ロマスについては「水の利用」という観点から大変わかりやすい群落であるため、特に強調したい。	同上	同上
9	海洋環境と生物	生物にとっての海洋環境の特徴について、「水」という媒質のもつ性質を解説し、それを踏まえて海洋での光、栄養、水温などの環境要因の特徴を紹介する。ついで、海洋の生物について、植物・動物・微生物の全般にわたり、海洋を生活場所にする生物とそれらの特徴を紹介し、それらの生物によって作られている海洋生態系の構造と機能を外洋、沿岸、湧昇域について説明する。その他、最近注目されている熱水生態系についてもその存在と特徴を簡単に紹介する。漁業活動による生態系影響にも触れる。	高橋　正征（高知大学教授）	高橋　正征（高知大学教授）
10	湖、河川、湿地環境と生物	陸域の水域環境として、湖・河川・湿地・地下水を取り上げてそれらの環境の特徴と相互のつながりなどを解説する。ついで、それらの水域環境を生活場所としている生物、ならびにそれらがつくりだす生態系の構造と機能を概説する。陸域の水域環境と生物によって影響される地球環境の部分についても触れる。	同上	同上
11	島における生物	周囲の環境から孤立した島における生物相は、そこへの生物の移住と絶滅のバランスの上に成立している。また、大陸とは異なった固有の生物が進化しやすいことを説明する。このような島の生物相の成り立ちを理解することは、生息地が分断化された生物群集の保全に役たつ知識が得られることを考察する。（奄美大島での現地ロケを含む）	松本　忠夫	松本　忠夫
12	地球環境問題1（地球温暖化および砂漠化と生物）	二酸化炭素などの温室効果ガスの増加と地球温暖化傾向との因果関係について述べるとともに、地球温暖化に伴う海面上昇と砂漠化促進の可能性、熱帯病や熱帯害虫の分布が拡大する可能性、逆に高山や北方の生物が絶滅する可能性、について講義する。	東　正剛（北海道大学教授）	東　正剛（北海道大学教授）
13	地球環境問題2（オゾン層破壊および内分泌攪乱物質と生物）	日本の南極観測隊によって世界ではじめてオゾンホールが発見された経緯、オゾンホールができるメカニズムを紹介するとともに、紫外線量の増加が生物集団と地球環境に及ぼす影響について考察する。また、もう一つの地球環境問題である内分泌攪乱物質がヒトや生物集団に及ぼす影響について講義する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	生物環境の保全と回復	種の絶滅の危機の現状とその要因を明らかにするための科学的なアプローチと、それにもとづいて生物環境、すなわち、生物多様性と健全な生態系を保全し回復するための方策、すでに始まっている取り組みなどを紹介する。（一部、霞ヶ浦でロケ）	鷲谷　いづみ（東京大学教授）	鷲谷　いづみ（東京大学教授）
15	外来生物の移入とその影響	生物多様性の保全にとってもっとも大きな脅威と考えられている外来生物の侵入の問題とは何か、侵入がもたらす生態系や社会への影響、外来種を対象とした生態系管理のあり方などについて述べる。　（一部、奄美大島でロケ。マングースほかの深刻な影響と駆除の事業、森林総研の山田文雄さんにゲスト出演していただく）	同　上	同　上

＝　疾病の成立と回復促進（‘０５）＝（ TV ）

〔主任講師：　北村　　聖（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　仙波　　純一（放送大学教授）〕
〔主任講師：　松尾　ミヨ子（鳥取大学教授）〕

全体のねらい

疾病の成立と回復の促進では、疾病のある状態を全人的にとらえ体内の環境変化から、生活過程の変化まで大きくとらえて理解する。その上で、病的状態からの回復に向けての生活調整の視点から、疾病を予防し回復を促進する要素を理解する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	概論：何を学ぶのか	疾病の成立と回復促進のコースのオリエンテーションとなっている。疾病は臓器別の理解や病理的理解ではなく、全人的な理解に基づいてとらえられなければならない。全人的理解によって初めて有効な回復を促すことができる。これがコースを貫く軸である。意欲を持って、自ら問題解決をするような学習を要望する。	松尾ミヨ子（鳥取大学教授） 北村　聖（東京大学大学院教授） 仙波　純一（放送大学教授）	松尾ミヨ子（鳥取大学教授） 北村　聖（東京大学大学院教授） 仙波　純一（放送大学教授）
2	疾病の成り立ち看護の立場から	健康から疾病にいたる変化のなかで、生体の反応、疾病からの回復、個人の反応について、生活との関連で述べる。疾病の誘引と日常生活への影響、生体の回復力と身体心理社会的因子、疾病の個人とその生活への影響に焦点を当てる。	松尾ミヨ子	松尾ミヨ子
3	疾病の成り立ち医師の立場から	医師と看護師は車の両輪となって医療を行う。医師の立場から、医学的視点で健康から疾病への変化をどのように考えるかを述べる。看護の視点からの理解と比較しながら学んで欲しい。	北村　聖	北村　聖
4	異常状態の特徴	健康状態と比較した疾病のある状態の特徴について述べる。急性の疾病と慢性の疾病の違いなど、異常のある状態に共通の特徴、個別の特徴、異常状態に適応する作用などについて学ぶ。	佐伯　由香（福岡県立大学教授）	佐伯　由香（福岡県立大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	疾病に対する診断および治療とそれに伴う変化	身体機能の異常をどのように検査し診断するか、それらをどのような方法によって治療するかについて看護の視点から述べる。治療法としては、薬物・手術・放射線などによるものがある。これらの効果と有害な作用などについてのべる。	仙波　純一	仙波　純一
6	感染と人体防御機構：看護の視点	人は微生物から多くの恩恵を受けており、人に感染症をおこすものはごく一部に過ぎない。このような人と微生物のかかわりを正しく理解した上で、人に備わった微生物に対する防御のしくみと微生物がこれを突破して感染症をおこすメカニズム、さらに感染症を防ぐための手段について学ぶ	岡田　忍（千葉大学助教授）	岡田　忍（千葉大学助教授）
7	中枢神経機能の障害	脳機能の障害を引きおこすいろいろな疾患（循環障害・変性疾患・脳腫瘍・痴呆・脳炎・外傷など）をあげて解説する。これらの脳機能の障害は視覚・聴覚・知覚などの機能障害として表れる。	仙波　純一	仙波　純一
8	生命の危機・呼吸機能の障害	生命維持機能の障害を引き起こす生命の危機状態（ショック、多臓器不全、損傷など）について述べる。また生命維持への呼吸の関与と呼吸機能の障害（気道・肺の炎症、急性および慢性の呼吸不全など）を取り上げる。	松尾ミヨ子	松尾ミヨ子
9	循環機能の障害・造血機能の障害	体内の隅々に栄養や酸素を運び、末梢から老廃物を肝臓や腎臓に運ぶ血液。この血液と、血液を循環させるシステムとその障害について学ぶ。また、造血細胞の機能と障害についても学ぶ。	北村　聖	北村　聖
10	栄養摂取・吸収・代謝・排泄機能の障害1	消化管を通した食物の消化と吸収のしくみと消化吸収における肝臓の役割を説明す･span >驕Ｂ摂取エネルギーの過不足や必須栄養素の不足の身体に与える影響、咀嚼・嚥下障害、代表的な消化管の器質的疾患の病態を説明する。	竹田津文俊（自治医科大学教授）	竹田津文俊（自治医科大学教授）
11	栄養摂取・吸収・代謝・排泄機能の障害2	消化、吸収、代謝に関与する肝臓、胆嚢、膵臓の器質的疾患を説明する。糖代謝異･span >塡フ代表例である糖尿病を説明する。排泄器官である腎臓の器質的疾患を説明し、最後に排便障害を説明する。	竹田津文俊	竹田津文俊

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	内部環境調節機能の障害	人体の内的環境は、微妙な変化を伴いながら維持されている。この変化は様々なメカ ニズムによってコントロールされている。この恒常性の維持という仕組みを司る内分泌機能と自律神経機能とそれらの障害について学ぶ。	山内　豊明（名古屋大学教授）	山内　豊明（名古屋大学教授）
13	運動機能および皮膚の障害	人体は四肢や体幹を動かすことで生命を維持し、活動をしている。骨や筋肉を中心として、運動のメカニズムとその障害について学ぶ。また、体を覆っている皮膚は最大の臓器ともよばれ、外科医と内的環境を隔てる重要な働きをしている。皮膚の働きと障害について学ぶ	太田　節子（千葉大学教授）	太田　節子（千葉大学教授）
14	生殖機能をつかさどる器官の障害	生命の連続性をつくりだすために用意されている仕組み、すなわち生殖という機能を 成り立たせている条件と、それらの障害によりこれらの機能が十分に果たせなくなる 場合のメカニズムについて学ぶ。	山内　豊明	山内　豊明
15	まとめ：持続的な学習のために	１４回の講義による学びを基盤に、学生は自主的な学習を行う段階へと向かうであろう。本回は持続的な学習のための方法と留意点などついて概説する。	松尾ミヨ子 北村　聖 仙波　純一	松尾ミヨ子 北村　聖 仙波　純一

＝人体の構造と機能（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　菱沼　典子（聖路加看護大学教授）　〕
〔主任講師：　北村　　聖（東京大学大学院教授）　〕

全体のねらい

毎日の生活の中で普通に行っている様々な生活行動は何のために、どのような仕組みで行われているのかの視点から、人体の構造と機能を学ぶ。からだに興味を持ち、理解を深めていく基礎力をつけることをねらいとするが、さらにからだの機能に適した生活を工夫し、病気を理解する土台になることを期待する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	生命と日常生活行動のつながり	一個の受精卵から人間が誕生する過程を含め、個体が外部環境と関係を保ちながら、内部環境を整え生命を維持していることを解説する。日々の生活行動と生命維持の関わりを理解してもらいたい。	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）	菱沼　典子（聖路加看護大学教授）
2	食べる（1）摂食	生命維持のために外界から食物を取り入れる営みについて解説する。空腹感や食欲、摂食の過程（咀嚼、味覚、嚥下を含む）、消化・吸収について、消化器管・消化腺の名称、構造を含めて解説する。	菱沼　典子	菱沼　典子
3	食べる（2）消化・吸収と排泄	消化管の運動と消化腺の分泌活動、消化液の作用について、自律神経系とホルモンによる調節を含めて解説する。また便の排泄について、便意から排便行為までを解説する。	佐伯　由香（福岡県立大学教授）	佐伯　由香（福岡県立大学教授）
4	食べる（3）栄養分の代謝	吸収された栄養分の代謝について、肝臓と膵臓の機能を中心に解説する。肝機能障害や糖尿病など身近な疾患を例にして、病態から正常な機能の理解を深められるようにする。	谷亀　光則（東海大学助教授）	谷亀　光則（東海大学助教授）
5	体内の流通システム（1）心臓と血管	多くの器官、細胞から成り立っている人体内部の物質の流通路である血管系を解説する。心臓と血管系の構造と役割、心臓収縮のメカニズムとその調節機構を解説する。	山本真千子（宮城大学教授）	山本真千子（宮城大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	体内の流通システム（2） 血圧	生体内の流通を確保するのに必要な血圧について、その意味、血圧の決定因子と調節機構を解説する。今日血圧は一般的な生体情報となっており、高血圧の意味と対策についても言及する。	沓沢　智子 （東海大学教授）	沓沢　智子 （東海大学教授）
7	体内の流通システム（3） 血液	血液の組成および働きを解説する。細胞成分である赤血球・白血球・血小板について、骨髄における幹細胞からの分化を解説し、その機能および障害について言及する。	北村　聖 （東京大学教授）	北村　聖 （東京大学教授）
8	身を守る	免疫反応は細菌やウィルスなど外敵から体を守るだけでなく、移植片の拒絶反応や自己免疫疾患でも重要な働きを演じている。細胞の自己認識、他者排除の機構、細胞性免疫と液性免疫の機序を解説し、自己免疫疾患や免疫不全症候群などにも言及する。	北村　聖	北村　聖
9	息をする	換気・ガス交換に関わる呼吸器の構造と機能について解説する。また血液の酸塩基平衡にかかわる呼吸の役割を解説する。様々な呼吸器疾患が呼吸機能のどこに障害を起こすのかにも言及する。	沓沢　智子	沓沢　智子
10	トイレに行く	腎臓での尿の生成過程を、生体内の体液の調節の意義を含めて解説する。次いで尿の排泄について、尿意を感じ、排泄に至までの尿路の構造と機能を解説する。	谷亀　光則	谷亀　光則
11	見る・聞く・感じる	神経系が外部環境からの刺激に対し、即時的に反応し、適応する過程を解説する。主に視覚、聴覚、体性感覚について、感覚器の構造と機能と神経系の反応を取りあげる。	深井喜代子 （岡山大学教授）	深井喜代子 （岡山大学教授）
12	考える	神経系の概要ならびに中枢神経系の構造と機能を解説し、中枢神経系における情報処理過程から、「考える」ことを意識付ける。睡眠の生理や脳死にも言及する。	深井喜代子	深井喜代子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	動く	骨格筋の運動における骨格と筋、関節の働き、ならびに筋の構造と収縮のメカニズムについて解説する。さらに運動に伴う心肺系の反応と調節機構を解説する。	山本真千子	山本真千子
14	ホルモン調節とストレス反応	内部環境の調節にホルモンがどのように関わっているかを、内分泌器官の構造を含めて解説する。また、常に個体が受けている刺激（ストレッサー）に対する反応について概説する。	佐伯　由香	佐伯　由香
15	ケアへの応用	1～14回までに学習した内容が、日常生活に結びついたかどうかを問いかけ、各人の健康生活や子ども、高齢者、病者の世話にどのように役立たすことができるか、例を挙げて解説する。	菱沼典子	菱沼典子

＝変化する地球環境（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：木村龍治（放送大学教授）〕

全体のねらい

グローバルな視点から地球の自然環境の仕組みを学習する。特に、自然環境の変化に着目して、変化のメカニズム、時間スケールに対する理解を深める。単に大気環境だけでなく、宇宙、海洋、地球内部、生物の作用など、大気環境を取り巻く世界にも目を向け、宇宙スケールから人間スケールまで、自然界の構造とその変化に関わる全体像を示す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	地球科学の視点	1988年以来、地球環境問題が大きな社会問題になった。特に「地球温暖化」に対しては、さまざまな議論を生み、地球環境と調和する社会体制はどうあるべきか、というような政治的な問題に発展している。しかし、「地球温暖化」が気候の変化である以上、地球科学的な視点が欠かせない。地球科学的な視点で環境の変化の意味を検討し、この講義全体のパースペクティブを示す。	木村　龍治（放送大学教授）	木村　龍治（放送大学教授）
2	惑星の大気環境	太陽系の惑星は、ほとんど大気をもち、それぞれ、独自の気象の営みがある。地球はそのひとつに過ぎない。比較惑星気象学の視点から、火星、金星、木星の大気環境と地球の大気環境の違いを考察する。	同　上	同　上
3	宇宙から見た地球環境	地球環境は、非常に複雑な構造をもつが、地球から遠く離れて地球を見ると、意外に簡単な物理環境にあり、地球環境は安定な状態に保たれている。地球が吸収する太陽放射エネルギーと、地球からの放射される赤外線のエネルギーのバランスで宇宙から見たときの地球の温度が決まる。また、大気に温室効果気体が含まれるために、宇宙から見た地球の温度と地表面温度との間に違いが生じる。これが温室効果である。	同　上	同　上
4	大気循環	大気と海水の循環によって、太陽放射による加熱の地域差が再分配され、地球が受ける太陽放射に大きな地域差があるにもかかわらず、気温は平滑化されている。このような熱の再配分に重要な役割を果たしている大気循環の構造を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	海水の循環	大気は地球全体を覆い、かつ、グローバルによく攪拌されている。一方、海洋は大陸によって仕切られているので、地域的な循環が卓越する。一方、全体の海水はひとつながりになっているので、長期的には、グローバルに海水が混合されている。海洋は、地球表層の貯熱槽として、気候の形成に大きな役割を果たしているのと同時に、エルニーニョ現象を発生させて、異常気象をもたらす。このような海水循環の構造を学ぶ。	木村　龍治	木村　龍治
6	水の循環	地球環境の最大の特徴は、水が大気中で気相から液相、固相に変化することであろう。そして、大気循環から分離して、地上にもどる。すなわち、降水現象が生じる。これに伴い、潜熱が解放され、大気が加熱される。また、地球の大気層の半分は、常に、雲に覆われ、太陽放射を反射するのと同時に、地球から宇宙に逃げる赤外線を吸収する。雲と降水の特徴は、きわめてゆらぎが大きいということである。そのメカニズムを学ぶ。	同　上	同　上
7	気候の形成	気候は地域によって大きく異なる。また、気候の変化にも地域性がある。気候の地域性は、降水量と気温に支配される。世界の気候区分は、主に植生によって分類されるが、植生は降水量と気温による所が大きい。気温は緯度と高度によって変化する。降水量は大陸の配置や大気循環の構造に支配される。また、都市域には、都市独特の局地的な気候がある。	同　上	同　上
8	地球環境のライフサイクル	生物の生活には、日変化、年変化などの環境の周期的な変化に対応したリズムがある。一方で、誕生、成長、成熟、死というような一過性のライフサイクルがある。地球環境も、生物と同じように、周期的な変化と一過性の変化が重なっている。ここでは、特に、約10万年周期の氷期と間氷期の交代を取り上げ、そのメカニズムについて考察する。	同　上	同　上
9	生物のいる惑星	地球の最大の特色は、生物が発生し、多様に進化してきたことである。過去の生物相は、従来、化石を基に再現されてきたが、DNAの発見以来、DNAの塩基配列の置換数を基に、生物の進化を論じられるようになった。生物に進化に関する最近の考え方を紹介する。	同　上	同　上
10	環境変化と生態系	生物の生存は環境の状態と密接に関連している。生物は進化の過程で、ある程度、環境に適応できる能力を獲得したが、限度を超えて環境が変化すると生物は絶滅する。ここでは、深海熱水系、エルニーニョなどの環境適応を例にして、環境変化と生態系の応答との関係を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	地球内部の変動	長い時間スケールでみると、地球内部も常に変化している。過去の変化を調べるためには、過去の時間を計ることが必要である。地質学は、地層の積み重なりや化石の種類によって過去の年代を決定してきた。それに対して、地球物理学的な手法で過去の年代を決定する方法が開発され、地球内部の変動の様子がよく分かるようになった。同位体年代測定法や古地磁気学に基づいた絶対年代のデータが蓄積された結果、プレートテクトニクスの概念が生まれたことを学ぶ。	木村　龍治	木村　龍治
12	地震と火山	日本列島は、プレートの沈み込み帯に形成された弧状列島で、地震帯と火山帯の真上にある。日本列島の地表面の環境は、地震と火山が作ったといっても過言ではないであろう。一方、地震と火山噴火は大きな自然災害を生むので、その予測が強く望まれるが、現在では、成功していない。日本では避けることのできない地震と火山のメカニズムを学ぶ。	同　上	同　上
13	日本の気象	日本列島は、中緯度帯（温帯）に存在するが、英国やフランスに比較すれば低緯度にあり、亜熱帯気候と亜寒帯気候の影響を受ける。また、ユーラシア大陸の東の端に位置しているために、アジアモンスーンの影響も大きい。そのため、四季によって気象の支配要因が交代し、四季の変化が顕著に現れる。このような日本の気象を特徴つける気象のメカニズムを学ぶ。	同　上	同　上
14	大規模な気候の変化	太陽活動はきわめて安定しているので、地球上には大規模な気候の変化は起こらないようにみえる。しかし、地球表層には、過去に大きな気候の変化があったことがわかっている。その原因は何だろうか。地球が吸収する太陽放射量を変化させる要因としては、雲が重要である。また、大規模な火山噴火によって、大量の火山灰が成層圏まで吹き上げられ、日射を遮る。もうひとつの要因として、海水の深層循環の変動がある。このような大規模な気候変化を起こす要因について考察する。	同　上	同　上
15	人為的な環境変化	人口が増加し、人類の活動が活発になるにつれて、人類の存在が自然環境に与えるインパクトが次第に増加している。具体的には、２つの問題がある。ひとつは、地表面の性状を人為的に変えることによって、自然の営みに影響を与えることである。都市、水田、砂漠の灌漑、ダムなどがその例である。もうひとつは、工業生産や日常生活に伴う廃棄物を自然界に捨てることによって、大気環境や水環境に影響を与えることである。一方で、人工降雨など、人為的な気象の制御が試みられている。このような人間社会と自然環境の関係について学ぶ。	同　上	同　上

＝　宇宙とその歴史（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：　吉岡　　一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙がどのように始まり、その中に天体が生まれ、天体や宇宙がどのように進化して現在われわれが見る物質世界が形成されたかが、中心的テーマである。その進化は物理法則に支配されて起こったものであり、実証的自然科学の対象として論じなければならない。この講義は自然科学の予備知識なしでも理解出来るようにするために、宇宙の始まりから現在までの時間的経過に沿ってではなく、理解のしやすさの順序に沿って話を展開する。この講義では、具体的な個々の天体の現象についての解説よりも、そのようなことを探求することの意義と科学上の意味について考える。個々の天体や現象に関する最新の詳しい情報については、対応する専門科目の講義を参照されたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地動説がもたらした科学	天動説でも惑星の運行は十分に正しく記述できた。それではコペルニクスからニュートンに至る地動説がもたらしたものは何か。それは天体（惑星）が有限の距離に存在する実体だということである。この天文学への距離概念の導入は、ニュートンによる万有引力の発見と近代科学への道を開いた。地上の力学法則と天上の法則が統一されたとも言える。	杉本　大一郎（放送大学教授）	杉本　大一郎（放送大学教授）
2	宇宙の広がりと天体の階層構造	遠くの天体までの距離が測られるようになって、宇宙の天体は階層構造をなして存在することが分かった。それらは、小さいほうから言うと、惑星・恒星・星団・銀河・銀河団・超銀河団・宇宙である。それらの間には、銀河系内のガス雲、銀河間ガスが瀰漫している。	同　上	同　上
3	宇宙の物質	分光学の進歩によって、原子の種類を観測的に決めることが出来るようになった。こうして天上の物質と地上の物質は同じものであることが分かった。さらに恒星の大気内で光のスペクトル吸収線などが形成される様子の研究から、宇宙における各元素の存在量が定量的に分かるようになった。こうして天上の物質と地上の物質も統一された。	同　上	同　上
4	宇宙からの情報の取得	宇宙の構造やそれぞれの天体についての情報は、それらからの光、赤外線、電波、X 線などの電磁波によってもたらされる。それらを受けてどのようにして情報を解読することが出来るかについて、基本法則に戻って論ずる。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
5	星はなぜ光る	殆どの恒星の中心部では原子核反応が起こっており、それによって解放されるエネルギーによって恒星は光り続ける。そのことは恒星の内部構造論と原子核物理学とを結合することによって解明された。	杉本　大一郎	杉本　大一郎
6	進化する恒星	恒星のもつ原子核エネルギーは有限だから、恒星は有限の寿命を持つことになる。その寿命は殆どの恒星では宇宙の年齢よりも短いから、恒星は常に誕生し、進化して、死んでいくことになる。恒星の内部で原子核反応が起こると、元素は異なる種類のものに転換される。こうして、宇宙における元素の起源が説明され、物質世界の歴史が元素のレベルから天体のレベルまで解明される。	同　上	同　上
7	銀河の世界	星団の中の恒星と個々の恒星が千億個ほど集まって１つの銀河を構成する。宇宙の歴史においては、宇宙の中で銀河が誕生し、銀河の内部でそのような星団と恒星が誕生した。銀河どうしが衝突して合体したり、星が爆発的に誕生したり、巨大ブラックホールが形成されたりして、銀河は進化した。そして激しい活動をする銀河も観測される。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	銀河で探る宇宙の膨張	遠くの銀河のスペクトルを調べると、銀河はわれわれからの距離に比例する速さで遠ざかっていることが分かる。宇宙という空間が膨張していて、銀河がその空間に乗っているのである。光の速さで銀河が遠ざかるところが、宇宙の果てに対応する。	杉本　大一郎	杉本　大一郎
9	宇宙と相対性理論	宇宙全体というか、大局的な宇宙を論ずる物理学は一般相対性理論である。それによって、光の速さに近い運動や、重力（万有引力）による空間の曲がりとそこを伝播する光などを論ずることができる。こうして、無限に広がっているかのごとくに思われる宇宙全体も、きちんとした物理学の形式にのせて取扱うことができる。	同　上	同　上
10	宇宙の始まりと進化	宇宙が膨張しているのなら、それを過去に向かって遡れば、宇宙の物質=エネルギーが狭い空間に閉じ込められていた時代、すなわち宇宙の始まりの時期があったはずである。そのような時期の存在は、どのようにして実証科学の対象として論ずることができるのであろうか。宇宙背景放射や宇宙の大規模構造と関連させて考える。	同　上	同　上
11	光と赤外線による宇宙の観測	前回までに述べた宇宙の構造と進化は、観測と物理法則に基づいて論じられる。光と赤外線による観測は精密な情報を与え、すべての観測の基本となるだけでなく、豊富な情報を与える。現代の精密科学的観測の到達点を見る。	吉岡　一男	吉岡　一男
12	電波による宇宙の観測	電波で観測すると、天体は光で見たのとは異なる側面を見せる。それは宇宙の低温の部分であったり、逆に高エネルギー電子の関わる激しく活動する部分であったりする。電波干渉計の方法によって、光による観測を凌駕する高分解能が達成され、宇宙の果てに近い銀河の構造も分かる。	同　上	同　上
13	X線やガンマ線による宇宙の観測	X線で観測すると、天体の 100 万度を超える超高温の現象が観測される。そのような超高温は中性子星やブラックホールなど、重力が一般相対性理論で扱わなければならないほど極めて強い天体と共にある。また超銀河団の空間にある高温ガスも観測され、宇宙論にもつながる。	同　上	同　上
14	電磁波以外の手段による宇宙の観測	宇宙の観測は、電波からガンマ線までの電磁波によるもの以外の手段を用いてもなされている。たとえば宇宙線は、陽子等の素粒子が、超新星残骸や活動銀河核などで高エネルギーに加速されたものである。また、透過力の強いニュートリノは、太陽や超新星の中心部の情報を直接与えてくれる。まだ検出されてはいないが、さらに透過力の強い重力波は、宇宙の奥深くの情報を与えてくれるものと期待されている。	同　上	同　上
15	天文学の理論	天文学では物理パラメターが実験室の範囲を大きく超えた極限的な状況が現れるので、理論の果たす役割は大きい。そこで重要なのは、自分自身の重力による非線形相互作用で、それによって天体の形態や構造が自発的に形成され、進化という現象が起こる。天文学の範囲内では、相互作用が重力(万有引力)という数学的に単純な数式で記述されるので、そのようなシステムでも、コンピュータを用いて定量的に解くことができる。このような視点は、より複雑な非線形システムへと理解を進めていくための模範になりうるであろう。	杉本　大一郎	杉本　大一郎

＝　宇宙像の変遷と科学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　二間瀬　敏史（東北大学大学院教授）〕
〔主任講師：　中村　　士（国立天文台助教授）〕

全体のねらい

宇宙に対する見方を体系化した学問である天文学、宇宙論は人類文明の発祥と共に生まれ発達した最も古い学問の１つである。その歴史には現代科学の方法や思考の基礎となっている様々なアイデアがちりばめられている。また近年は宇宙論が他の科学へ影響を及ぼすことも少なくない。本講座ではそれらを時代を追って説明すると共に、現代の天文学・宇宙観にどう連なっているかを見てゆく予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古代の宇宙観(1) エジプト・メソポタミア・中国・インド	人類史上において、世界観・宇宙観がどのようにして誕生したかについてまず概観する。ついで、最も古く天文学が発達したエジプト、メソポタミアの天文学について紹介し、中国、インドの古代宇宙観の特質にも触れる。	中村　士（国立天文台助教授）	中村　士（国立天文台助教授）
2	古代の宇宙観(2) ギリシアと天動説	現代の天文学、宇宙論の源は古代ギリシアにある。そしてそれはアレキサンドリアで精密科学としての基本的性格を発展させた。古代ギリシアの自由な学問的伝統の中で、天動説・地動説などさまざまな理論が展開された。それらの理論の特徴を比較し、現代天文学との関係について述べる。	同　上	同　上
3	中世の宇宙観からルネサンスへ	ギリシア・ローマ世界が没落して後、ヨーロッパの中世ラテン世界ではキリスト教会の権威とアリストテレス思想が世の中を支配し、古代の華々しい天文学の成果は西欧では忘れ去られた。しかし、アラビア・イスラムの人々は古代ギリシア語の文献をアラビア語に翻訳し、ギリシア天文学の伝統を発展・継承させた。この２つの世界を対比させて紹介する。	同　上	同　上
4	コペルニクス革命と地動説	やがてヨーロッパの人々は、優れたアラビア天文学はギリシア科学が元になっていたことを知った。中世アリストテレス思想の呪縛から人々を解き放って、近代科学発展の糸口を示したのがコペルニクスの太陽中心説であり、自転する大地という考え方である。しかしコペルニクス説が皆に受け入れられるまでには半世紀近い年月が必要だった。	同　上	同　上
5	精密観測と熟考の成果：ティコとケプラー	ティコとケプラーという２人の巨人が協力して明らかにした惑星運動の統一的解明は、近世天文学誕生の出発点となった。改良した観測装置で精密なデータを取得し、それを体系化して法則を見つけるという近代科学の方法論は既に明確に現れている。この過程とティコや観測装置を関連させて見てゆこう。	同　上	同　上
6	宇宙像の拡大：望遠鏡の発明と万有引力の法則の発見	17 世紀に入ると、私達の宇宙像はそれまでに比べ２つの面で大幅に拡大した。1 つは望遠鏡の発明で、肉眼で見ることのできなかった遠方の世界を調べることを可能にした。もう 1 つは、ニュートンによる運動法則及び万有引力の法則の発見である。これによって、宇宙の万物の振舞いは重力の法則で解釈できるという、ニュートン力学的宇宙観が広まった。	同　上	同　上
7	地動説の検証から恒星天文学の誕生へ	地動説を確かめる最も重要な証拠は、星の年周視差を検出することであると考えられた。そして年周視差検出の努力の過程で、天文学者の関心は太陽系を離れて恒星の世界まで拡大してゆき、星は太陽と同じ天体であるとする考えが一般化した。恒星天文学の誕生はまた、望遠鏡、天文時計、天文台建設、写真術の発達とも関係が深い点について述べよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	星の世界から銀河の世界へ	20 世紀に入って銀河系の大きさやアンドロメダ銀河など他の銀河までの距離が測定できるようになった結果、それまでの考えていた宇宙の広がりが一変した。この状況を当時の時代背景とともに述べる。	二間瀬　敏史（東北大学大学院教授）	二間瀬　敏史（東北大学大学院教授）
9	宇宙膨張の発見	現代宇宙論の最も重要な観測的な基礎の一つである宇宙膨張の発見と、アインシュタインに一般相対性理論にもとづいてアインシュタインが考えた宇宙のモデルについて述べる。	同　上	同　上
10	ビッグバン宇宙論の誕生	宇宙が超高温度、超高密度の状態から爆発的始まったというビッグバン宇宙論の誕生と、それにかかわった科学者たち観測による検証について述べる。	同　上	同　上
11	暗黒物質と暗黒エネルギーが握る宇宙の未来	宇宙には暗黒物質、暗黒エネルギーと呼ばれる正体不明の物質やエネルギーが存在する。そしてこれらは宇宙の未来の姿の鍵を握っている。これについての観測的証拠と現在の観測結果について述べる。	同　上	同　上
12	宇宙背景輻射とその揺らぎ	星の光がなくても宇宙は光で満ちている。この光は宇宙の初期から存在していて宇宙背景輻射と呼ばれる。この宇宙背景輻射は宇宙の歴史を解明する鍵である。この観測と銀河、銀河の集団である銀河団などの構造の形成について述べる。	同　上	同　上
13	ミクロの物理とマクロの宇宙の関係	宇宙背景輻射の存在は宇宙初期について様々のことを教えてくれる。とくに初期宇宙では一見無関係に見える宇宙とミクロな物理学である素粒子物理学との関係が重要になる。これについて述べる。	同　上	同　上
14	宇宙論が突きつける物理学の破綻	宇宙膨張と宇宙背景輻射の存在は宇宙の初めが特異な状態であったことを意味する。この状態では現在の物理学の破綻する。この破綻を救う新たな物理学は時間、空間、物質の創造をも記述できると考えられている。これについて述べる。	同　上	同　上
15	宇宙と時間	時間は未来にしか進まない。この常識は一見何の関係もない宇宙の膨張と実は深い関係にある。これについて延べる。タイムマシンの研究についても述べる。	同　上	同　上

＝実験科学の方法（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　濱田　嘉昭（放送大学教授）〕
〔主任講師：　菊山　宗弘（新潟大学教授）〕

全体のねらい

自然科学では自然界に起こる様々な現象を分類・整理し、これらの現象を支配する法則を明らかにしようとすると共に、現象を予測し、場合によれば新たな現象を作り上げようとする。このためには、実験と観察、論理が必要である。自然科学には物理学、化学、生物学など様々な分野があるが、自然科学としての基本的な考え方などは共通している。この講義では、様々な自然科学に共通する考え方、手法を学ぶと共に、自然科学の学習の進め方に役立てようとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	自然科学の構造	自然科学はどのようにして発展して来たのか、現状はどうであるかなどを概観する。次に自然現象の現れ方の特徴とそれに見合う探求の方法についてまとめる。最後に自然科学の諸分野とそれらの相互関係を検討し、自然科学の学び方についても言及する。	濱田　嘉昭（放送大学教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）	濱田　嘉昭（放送大学教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）
2	自然科学における観察と実験	自然科学は自然現象を観察や実験をとおして理解しようとするものである。正しい観察や実験を行うにはどのような手順を踏むべきかを考える。事実としての自然現象、理解するための観察や実験結果との関連、一般化としての概念や法則について考えてみる。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
3	自然科学の言葉と表現：単位と標準	様々な分野の研究結果を伝達し、知識を共有するためには「共通語」が必要となる。このため各種の物理量には、その物理量の意味や基準が厳密に定義されている。この章では定義や基準・標準について解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
4	自然科学の戦略：分析と統合	様々な現象に対する実験や観察によって得られた結果を分類・整理することによって、その結果の中に含まれる意味を汲み取り、現象を引き起こす原因を抽出することができる。さらにその原因を、その実験だけに固有のものとするのではなく、可能な限り一般的な法則としてまとめることが大切である。分析と統合の関係、そのプロセスを解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
5	目に見える現象	力学的現象、生物の織り成す世界などは目に見える形で観察できるものが多い。したがって伝統的に蓄積されてきた知識の体系を作っている。これらの分野の現象の特徴と観察・実験の組み方、結果のまとめ方、法則化に至る過程を可能なかぎり具体的な例を挙げて解説する。目に見える現象の裏に目に見えないミクロの過程があることを同時に理解する。	同　上	同　上
6	目に見えない現象	素粒子、原子や分子などのミクロの物質は目で見ることはできない。これらの物質が関係する現象の特徴と観察・実験の組み方、結果のまとめ方、法則化に至る過程を可能なかぎり具体的な例を挙げて解説する。目に見えないミクロの過程は、マクロの物質の現象として現れる場合があることを同時に理解する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	自然現象に働きかける	われわれは自然現象の起こる原因を知るために観察や実験を行う。実験に際しては、何らかの形で対象に働きかけその応答を見る。このとき、対象に及ぼす影響を可能な限り小さくするという方法と、激しく働きかけることによって現象の裏に潜んでいた実体を顕わにする方法がある。それぞれの意味と実例を解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
8	自然現象を見る目を研ぎ澄ます	自然現象が発する信号を謙虚に見つめることは必要であるが、信号を受け止める感度と範囲を広げる努力も重要である。また測定の方法によっては、同一の現象も異なった様相を示す場合がある。この章では実際に測定をするときの技術的な問題とともに、何を観測しているのかを熟知しておくことの重要性を解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
9	自然現象の美しさを知る	自然現象に関する実験や観察による事実をそのままメモや文章として記述しただけでは、分析や考察の対象とはならない。実験・観察データの中に含まれる規則性や原因を抽出するにはグラフ化とか統計処理などが必要となる場合がある。どのような処理の方法があって、どの処理法を適用すればよいのか。その注意点は何かなどについて解説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
10	自然現象の裏に潜む姿を暴く	実験や観察によって得たデータは、自然現象の表す一つの事実であるが、その事実に隠された“真実”をデータの解析を通じて明らかにすることができる。一過性の現象、厳密な数値を再現性よく入手することが難しい分野などの研究を支える基礎は何か、そのような領域のデータはどのように扱えばよいかを解説する。	濱田　嘉昭 菊山　宗弘	濱田　嘉昭 菊山　宗弘
11	自然現象の秩序と法則の表現	一見雑多で複雑に見える自然法則を整然と定量的・論理的に記述し、観察や実験の結果と比較し判断を下すには、それにふさわしい表現法が必要である。それが数学である。この章では、数式で表現するということの意義を解説する。	同　上	同　上
12	自然科学における評価と判断	実験や観察によってある結論を引き出す場合に必要なことは、関連する現象やこれまで蓄積されてきた知識や法則との整合性である。独断を排し、結論の妥当性を謙虚に検討する必要がある。それには自分のデータや結果の解析や評価だけでなく、他の研究者の成果との間の比較検討が重要である。この過程を実際に即して解説する。	同　上	同　上
13	情報の収集	自然科学の知識や技術には膨大な蓄積がある。何がどこまで明らかになっているか、あるいは何が未解決の問題であるか、どのような考えが提出されているかの検討は、実験計画の段階から、成果の発表の段階まで、常に必要とされる。この章では情報の収集、特に文献の検索について解説する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	研究成果の発表と討論	自然科学の研究で得られた新事実や法則を人類共通の財産にするためには一定のルールにしたがって結果を整理し、適切な方法や媒体を用いて発表する必要がある。報告書（レポート）の作成、論文のまとめ方、発表のしかたについて説明する。また学習段階での報告書、実習レポートのまとめ方などについても概説する。	菊山　宗弘 濱田　嘉昭	菊山　宗弘 濱田　嘉昭
15	自然科学の今後の発展	２０世紀に自然科学は巨大な発展をした。各分野では今後どのような発展が期待されているのか。２１世紀の近未来の姿を予測する。　　１４回までの内容のうちいくつかの重要と思われる話題を取り上げることにより、全体としてのまとめとする。	同　上	同　上

＝ 物質の科学と先端技術（‘０４）＝（TV）

〔主任講師： 岩村 秀 (放 送 大 学 教 授)〕
〔主任講師： 東 千秋 (放 送 大 学 助 教 授)〕
〔主任講師： 飯田 汎 (東レ経営研究所特別研究員)〕

全体のねらい

21 世紀社会のキーワードは、新知識の創造、環境調和、生活文化の創造で表現される。20 世紀の科学技術の進歩発展のあと、21 世紀社会がさらに発展を遂げるには、環境保全・資源エネルギー制約の中で、これまでの科学技術知識を土台にしながら、新な知識を探求せねばならない。一方、成熟した社会にあって、高度な先端技術が支える安全で安心のできる豊かな文化社会の構築が求められている。新たな文明を形成する要素となるさまざまな先端技術開発の最前線から、その基盤となる物質と材料がもつ機能と科学について学習する。最初の２回を現代社会と物質観の学習にあて、3ー5 回を新知識創造の要素である情報技術に、6ー11 回を環境調和の視点で、また 12ー15 回を新文化の創造を軸に学習し、最後に全体を総括する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	21 世紀の社会と先端技術	新知識の創造、環境調和、生活文化を支える科学技術の役割を明らかにし、そのキーを握る技術要素が物質・材料であることを知る	岩村 秀（放送大学教授）	岩村 秀（放送大学教授）
2	先端技術の要素と物質	現在の先端技術を支える物質・材料の科学のフロンティアを紹介する	同 上	同 上
3	情報量の増大を支える記憶・記録材料とデバイス技術	情報化社会のキーとなる記憶・記録材料に焦点をあて、その増大するニーズに応える LSI,磁気メモリー、光メモリーなど各種材料を取り巻く物質の科学を概観し、記憶・記録材料の未来を展望する。	飯田 汎（東レ経営研究所 特別研究員）	飯田 汎（東レ経営研究所 特別研究員）
4	情報通信技術を支える材料の科学	ネット社会の基盤を形成する情報通信技術の最前線を理解するとともに、同技術のキーファクターとなる材料の科学を概観する。	雀部 博之（千歳科学技術大学学長）	雀部 博之（千歳科学技術大学学長）
5	電子ディスプレイデバイスの発展と材料の科学	マン・マシンインターフェイスの情報交換に不可欠なキーデバイス電子ディスプレイである液晶、プラズマ、有機ＥＬ各ディスプレイそれぞれの特徴とともに、表示材料としての原理と物質の持つ機能を理解し、未来の表示素子のあり方を学習する。	飯田 汎	飯田 汎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	鉄鋼材料の発展と先端技術	構造材料として長い歴史を有する鉄鋼はいま、超高強力鋼として新たな期待を担っており、鉄鋼の歴史と材料としての科学を学習し、鉄鋼材料研究の最前線から、構造材料の将来を知る。	飯田　汎	飯田　汎
7	有機高分子材料の発展と環境への適合	合成高分子誕生の歴史と特徴を知り、ポリプロピレン製造技術の発展とともにプラスチック材料と環境・資源問題の意義を学ぶ。また工業用プラスチックの寿命延長と耐熱性向上の課題について学習し、次世代高分子材料のパラダイムを明らかにする。	同　上	同　上
8	材料の製造とプロセスイノベーション	社会が必要とするイノベーションにはさまざまな型があるが、ここでは革新的なプロセス開発に焦点をあてて、その意義を学習する。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
9	物質の分離と先端技術の開発	資源から純物質の分離、高純度物質の機能の利用、機能分離膜と超純水など先端技術に密接不可分となっている分離技術は、資源循環型社会においての重要性が大きいことを学習する。	飯田　汎	飯田　汎
10	エネルギー技術と物質	技術三要素の一であるエネルギー技術の変遷と現代の石油資源依存から次世代へのエネルギーシステムにむけた新エネルギー開発の意義を各種クリーンエネルギーである太陽電池、燃料電池，メタノールなどを通じて学習する。	東　千秋	東　千秋
11	センサ技術と物質	さまざまな先端技術を工業化するうえでセンサーの役割と重要性は欠かせない。物理、化学、生物センサーなど刺激量の区分に応じて呼称されるセンサーはまた、物質・材料面からも区分されるなど、その多様性の多さと意義について学習する。	雀部　博之	雀部　博之
12	ゲノム科学と社会生活	20 世紀半ば以降になって明らかにされた遺伝子の本質 DNA の構造解明や遺伝子操作の開発によるバイオテクノロジーの発展の様子を理解する。 20 世紀末になって急速に進展したゲノム解析の意義を学習し、21 世紀の今ポストゲノムとして進行するさまざまな先端科学技術の進歩の様子を物質としてのゲノムの本質とともに学習する。	飯田　汎	飯田　汎
13	先端医療を支える組織工学最前線	細胞は生命の基本単位を担う構成物質である。その細胞を培養し、組織化して、病気やケガで損傷した人間の体を再生して修復する組織工学の最前線を展望する。	東　千秋	東　千秋

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	産業の扉を開くナノテクノロジーと材料革命	21世紀の基幹科学技術ナノテクノロジーの全貌を電子、化学、機械、バイオなど分野横断的な視点から概観し、ナノマテリアルの展開を通じて、それをめぐる科学技術の理解と産業への展開の可能性を知る。	飯田　汎	飯田　汎
15	21世紀社会をリードするグリーンケミストリーと新科学のフロンティア	21世紀環境調和社会をめぐって物質の製造プロセスのあり方が問われる。環境負荷を低減するグリーンケミストリーの意義を理解するとともに、21世紀型の物質観を新化学のフロンティアから学ぶ。	岩村　秀	岩村　秀

＝英語基礎Ａ（‘０５）＝（Ｒ）
～Welcome to Japan

〔主任講師：大石　和欣（放送大学助教授）〕
〔主任講師：大橋　理枝（放送大学助教授）〕

全体のねらい

聞く、読む、話すなどを中心に、初歩的な英語の学習を目的とする。日本人の女性がイギリス人男性とアメリカ人女性をホームステイで受け入れる、という設定のもと、まずは初対面時の挨拶からはじめ、その後の流れに合わせて段階的に英語を学習する。毎回、その回に出てきた文法項目を説明するコーナー、本編で出てきた表現を取り上げて特集するコーナー、主シナリオと類似しているが状況が異なる「裏シナリオ」で学習した表現を応用させていくコーナーなどを設けて、様々な角度から英語力の向上を図る。日本・アメリカ・イギリスの文化事象なども織り込みながら話題を展開させ、文化的差異から生ずるコミュニケーションの際の問題なども紹介することで英語の深い理解を促す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	Departure from the Arrival Gate（到着ロビーからの出発）	初対面のときの挨拶などを通して、自己紹介の仕方などを扱い、初めて会う人間とのコミュニケーションのはかり方を学ぶ。	大石　和欣（放送大学助教授） 大橋　理枝（放送大学助教授） ジョン・ブロウカリング（法政大学教授）	大石　和欣（放送大学助教授） 大橋　理枝（放送大学助教授） ジョン・ブロウカリング（法政大学教授）
2	Stuck on Japan（日本で足止め）	日本に興味を持った理由や、来日の目的を聞くことなどを通して、個人的なことを質問する表現などを扱う。	同　上	同　上
3	Home away from Home（住めば都）	自分の家族の説明などを通して、親族名称などを扱う。	同　上	同　上
4	A Taste of Japan（日本の味わい）	好きな食べ物や飲み物の話などを通して、何かを注文するときの表現などを扱うことで、基礎的な自己主張の仕方やマナーを学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	Good Morning, Bad Morning（おはよう、だめよう）	健康に関する表現や、体調が悪いときに使う表現などを学ぶ。	大石　和欣 大橋　理枝 ジョン・ブロウカリング	大石　和欣 大橋　理枝 ジョン・ブロウカリング
6	Beautiful Words for Beautiful Words（美言に美言）	趣味に関する表現などを通じて、芸術作品を紹介する際の表現方法などを学習する。	同　上	同　上
7	All Work and No Play（良く働き、よく遊べ）	日本・イギリス・アメリカでの一般的なライフスタイルや余暇についての考え方などに言及しながら、それらを説明するための表現などを扱う。	同　上	同　上
8	Prom and Proper（おすまし、おめかし）	服装や服飾文化などを話題にしながら、パーティーの場での会話などを取り上げる。	同　上	同　上
9	The Modern Taste of Roppongi（現代風の六本木）	好き、嫌いなどの好みを文化的な文脈で表現する方法を扱う。	同　上	同　上
10	The Historic Charm of Kamakura（鎌倉の歴史的魅力）	日本の伝統文化や歴史について説明するような場面で使える表現などを扱う。	同　上	同　上
11	Celebrating with a Bang（どどんと祝祭）	盆、彼岸、正月や節句など祝祭日に関する表現を手がかりにして、その背後にある宗教的な背景や問題を考える。	同上	同上
12	Political Campaigns（選挙事情あれこれ）	日本・イギリス・アメリカの選挙運動の違いなどの話を通して、政治や行政に関する表現や、英語における政治的な言語文化性を話題に取り上げる。	同上	同上
13	Words and Ironies（皮肉に本音）	イギリス英語とアメリカ英語の違いをとり上げながら、言葉の使い方や婉曲表現に関する注意点を学ぶ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	Exam Examined （入試の問題）	日本・イギリス・アメリカの大学生の生活や学習態度の違いなどの話を通して、大学や学校、教育に関する表現を扱う。	大石　和欣 大橋　理枝 ジョン・ブロウカリング	大石　和欣 大橋　理枝 ジョン・ブロウカリング
15	Manners in Japanese Harmony （和の個人主義）	現代日本の側面に関する話を通して、何かを批判する際の表現などを学びながら初歩的な英語の完成を目指す。	同上	同上

＝英語Ⅱ（‘０３）＝（Ｒ）
—The Book of Tea—

〔主任講師：　大橋　理枝（放送大学助教授）〕

全体のねらい

岡倉天心が書いた"The Book of Tea"を読む。この本は日本人が英語で日本の文化を紹介した本であり、書かれた当時から今に至るまで、西欧の人々が日本を理解する上で貴重な鍵を提供し続けてきた。この文章を読むことを通じて、日本文化は英語では説明できないという思い込みを打破すると共に、学習者の為に書かれた文章ではなく英語話者に向けて書かれた文章を読むことで英語を学んだ達成感を実感してほしい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	A Medicine that Became a Beverage	第１章（The Cup of Humanity）からの抜粋を読み、天心が「茶」をどう紹介したかを考える。	大橋　理枝（放送大学助教授） Cyrus Rolbin（英語講師）	大橋　理枝（放送大学助教授） Cyrus Rolbin（英語講師）
2	Humanity has Met in the Teacup	引き続き第１章（The Cup of Humanity）からの抜粋を読み、天心が東洋と西洋の関係をどう捉えていたかを考える。	同　上	同　上
3	A Work of Art	第２章（The Schools of Tea）からの抜粋を読み、天心が「茶」について述べていることを考える。	同　上	同　上
4	The Art of Life	引き続き第２章（The Schools of Tea）からの抜粋を読み、天心が茶会をどう捉えていたかを考える。	同　上	同　上
5	Success in the Mundane Drama	第３章（Taoism and Zennism）からの抜粋を読み、天心が「道」をどのように解説したかを考える。	同　上	同　上
6	Only in Vacuum	引き続き第３章（Taoism and Zennism）からの抜粋を読みながら、天心が「禅」をどのように解説したかを考える。	同　上	同　上
7	Subtle Beauty	第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心が茶室をどう解説したかを考える。	同　上	同　上
8	Care and Precision	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心が茶室の美について何を伝えようとしたのかを考える。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	Above Ordinary Thoughts	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、いかにして茶室に禅の精神が生かされているかを天心がどう説明したかを考える。	大橋　理枝 Cyrus Rolbin	大橋　理枝 Cyrus Rolbin
10	A House of Peace	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心が茶席の心得をどう描写したのかを考える。	同　上	同　上
11	Art in Cleaning	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心が伝えようとしている「清め」とはどういうことかを考える。	同　上	同　上
12	Frequent Change	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心から見て日本と欧米との家がどのように違うのかを考える。	同　上	同　上
13	Freshness of Imagination	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心が「非対称」についてどのような解説をしたのかを考える。	同　上	同　上
14	Useless Repetition	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心の目から見た西欧の家をどのように表現したのかを考える。	同　上	同　上
15	Truly a Sanctuary	引き続き第４章（The Tea-Room）からの抜粋を読みながら、天心がこの章で何を伝えようとしていたのかを考える。	同　上	同　上

＝英語Ⅲ　（’０２）＝（TV）

〔主任講師：　霜崎　實（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

アメリカのさまざまな地域を舞台とする３本の映画を取り上げて、学習を進める。それぞれの映画は、大学進学を控えた青年、失業中の中年男性、1950 年代に初めて白人の学校へ通うことになった黒人少女を主人公として展開する。英語表現を学ぶことに留まることなく、出来事の背景を充分に踏まえたうえで、映画の核心に迫っていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	August Roads (1)	第１回から第５回に渡って、Joshua Moss 監督の"August Roads"を取り上げる。アメリカのバーモント州の農場で、仕事を手伝いながら大学進学をえる Jimmy の苦悩と決断の物語である。物語は、Jimmy がプリンストン大学から入学許可の手紙を受け取ることから始まる。	霜崎　實（慶應義塾大学教授） Sarah Teasley	霜崎　實（慶應義塾大学教授） Sarah Teasley
2	August Roads (2)	Jimmy の叔父の Philip が突然農場を訪れる。１年前に父親を亡くした Jimmy の相談相手であるが、母親の Catherine からは歓迎されない。何か不協和音が存在する。	同　上	同　上
3	August Roads (3)	Philip は Jimmy に進学を諦めるよう説得する。大学進学のことを知った母親は、Jimmy の言うことを聞こうとしない。しかし、ある小さな事件をきっかけに Jimmy は進学の決意を固める。	同　上	同　上
4	August Roads (4)	大学の授業登録のために農場を去ろうとする Jimmy に、母親がやっと心を開いて Jimmy の進学を認める。農場には、幼い Jimmy の弟 Charlie と母親が残される。	同　上	同　上
5	August Roads (5)	第５回は、これまで断片的に見てきた"August Roads" を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上
6	Routed (1)	第６回から第10回に渡って、David Ullendorff監督の"Routed"を取り上げる。ある日突然解雇された中年男性 Clark は、風邪を引いた息子 Stevie の代わりに新聞配達を始めるが、配達の途中で、彼を解雇した元上司 Spivak の家を偶然発見する。Clark のとった行動は？	同　上	同　上
7	Routed (2)	配達先の家で、Mrs. Grove という不思議な女性に出会う。Mrs. Grove によれば、この世の中の出来事は、すべて原因と結果の糸で結ばれているという。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Routed (3)	Clark は Mrs. Grove から「糸」に注意するように忠告を受けるが、相変わらず Spivak に対して嫌がらせを続ける。彼の新聞から漫画のページを破ってしまうのである。	霜崎　實 Sarah Teasley	霜崎　實 Sarah Teasley
9	Routed (4)	新聞破りの様子を写真にとった Spivak は Clark の上司に連絡、その結果 Clark は再び解雇されるが、新しい仕事を見つけようともせず、家で玩具の鉄道遊びに興ずる。	同　上	同　上
10	Routed (5)	第 10 回は、これまで断片的に見てきた"Routed"を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上
11	The Last Breeze of Summer (1)	第 11 回から第 15 回に渡って、Marilyn Kay Webber 作の"The Last Breeze of Summer"を取り上げる。黒人少女 Lizzy を主人公として、人種差別の残る 1950 年代のテキサス州を舞台に繰り広げられる物語である。差別撤廃政策によって、白人の学校へ転入する候補生に決まった Lizzy は有頂天になるが、母親の心境は複雑である。	同　上	同　上
12	The Last Breeze of Summer (2)	父親の Will は、Lizzy と Samuel をピクニックに連れ出すが、そこで白人警官から屈辱的な扱いを受ける。Lizzy の転入を認める父親と認めようとしない母親の間で激しい口論が起きる。	同　上	同　上
13	The Last Breeze of Summer (3)	Lizzy は住みなれた自分の町を出て、バスで初めて白人の学校へ登校する。差別撤廃政策に反対する群集に出迎えられた Lizzy は何とか授業に出るが、そこでも屈辱を味わう。	同　上	同　上
14	The Last Breeze of Summer (4)	学校でショックを受けた Lizzy は、登校への意欲を失いかける。しかし、父親の話を聞き、また弟 Samuel の小さな成功をきっかけに立ち直り、翌日、登校していく。	同　上	同　上
15	The Last Breeze of Summer (5)	第 10 回は、これまで断片的に見てきた"The Last Breeze of Summer" を通して鑑賞する。作品のテーマ、背景、主人公の葛藤などさまざまな問題を取り上げたい。	同　上	同　上

＝英語Ⅳ（‘０３）＝（TV）

— Cultural Crossroads —

〔主任講師：　斎藤　兆史（東京大学大学院助教授）〕
〔主任講師：　大橋　理枝（放送大学助教授）〕

全体のねらい

この授業は、従来の英語の授業のように英語と同時にその背景となる英語文化をそのまま教授しようとするものでなく、日本語と英語のそれぞれが背景とする文化の理解に基づき、日本人の文化的自己表現を可能ならしめるような発信型の英語運用能力の育成を目的とする。それぞれの回には、「花」、「色」、「音」など一つの文化概念や文化事象をテーマとして選び、それぞれに関する spoken English や written English による議論を比較・研究することによって、異文化理解における英語の効果的な用い方を考察すると同時に、日本人がそのような文化概念・事象を異文化コミュニケーションの文脈においてどのような英語で表現すればいいかを具体例を通して学習する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序 (Introduction)	授業の趣旨、レベル設定、勉強の仕方などを概観し、さらに「文化を紹介するとはどういうことか」という、授業全体に通じる問題を中心に導入的な解説を行う。	斎藤　兆史（東京大学大学院助教授）	斎藤　兆史（東京大学大学院助教授） 大橋　理枝（放送大学助教授）
2	色 (Colors)	日本語と英語における色のイメージの違いや共通点を考察し、色を用いた言い回しや、色彩表現に用いられる英語などを勉強する。	大橋　理枝（放送大学助教授）	同　上
3	音 (Sounds)	日本語と英語における音の表現（擬音語など）、自然界の音のイメージ、音と文化との関係、記号としての音楽の役割などを勉強する。教材としては、ジャズ・ピアニストでもあるコミュニケーション学者との対談などを用いる。	斎藤　兆史	同　上
4	香 (Scent)	日本と西洋との香りに対する考え方の違いや共通点を英語で議論し、「香」を通じて文化的差異を論じるための英語表現や論理を勉強する。	大橋　理枝	同　上
5	武 (Martial Arts)	日本の武道と martial arts との違い、弓道・剣道と archery/fencing との違い、武士道と騎士道の類似点・相違点などを論じる。題材としては、武道についての英語の文献や、現代において武道を実践している人たちの英語による談話を用いる。	斎藤　兆史	斎藤　兆史 大石　和欣
6	山 (Mountains)	日本の山岳信仰とイギリス・ロマン主義の自然崇拝との共通点や違いを、文学作品や登山家の談話などを通じて考察し、自然を語る英語表現を勉強する。教材としては、山に関するロマン派の文学作品や登山家へのインタビューなどを用いる。	同　上	斎藤　兆史 大橋　理枝
7	花 (Flowers)	日本における桜、梅、菊などの意味と西洋における薔薇、百合、水仙などの意味の違い、また生け花とフラワー・アレンジメントの考え方の違いや共通点などを英語で議論することにより、花を通じて文化的差異を論じるための英語表現や論理を勉強する。	大橋　理枝	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	茶 (Tea)	日本の茶道とイギリスの afternoon tea（あるいは high tea）の共通点や違いを認識するための英語表現を覚える。資料としては、日本とイギリスそれぞれのお茶席の映像や、実際にそれぞれについてなされた英語での会話などを用いる。	斎藤　兆史	同　上
9	職 (Profession)	「職業」をめぐる文献や談話を通して、仕事に対する考え方を論じるときの英語を勉強する。教材としてはカズオ・イシグロの『日の名残り』や、イギリスにおいて特定の仕事に従事している人たちの職業意識に関する談話などを用いる。	同　上	同　上
10	礼 (Courtesy)	礼儀に対する考え方や、何が「礼儀正しい」とされるの か、どのような行為が「礼儀」に当たるのか、などを踏まえた上で、意外に知られていない英語の丁寧表現、謙譲表現、宴曲表現などを勉強する。	同　上	同　上
11	名 (Names)	日本語の「名は体を表す」という発想と英語の `What's in a name?'という発想の違いを論じると共に、名前に対する意味づけなどを考える。	大橋　理枝	同　上
12	政 (Politics)	イギリスとアメリカの政治は、基本的に二大政党の対立を原動力として動いていくのに、なぜ日本は一党の圧倒的な支配の下に多くの政党が林立しているのか。言語の違いと政治的な思考形態の違いとの関係を考え、英米政治に反映されている英語の二項対立的論理を具体的な英語表現に即して勉強する。	大石　和欣	斎藤　兆史 大石　和欣
13	教 (Education)	日本の学習指導要領とイギリスの National Curriculum などを比較しながら日英の教育制度の違いや、「しつけ(discipline)」に関する考え方の違いを議論する。さらに、日本とイギリスでは英語の考え方がどう違うかを勉強する。	斎藤　兆史	斎藤　兆史 大橋　理枝
14	心 (Spirit)	日英それぞれの言語において、心や精神といったものがどのように捉えられているかを、禅の考え方に言及しながら比較分析し、日本的な精神を理解してもらうためにはどのような英語表現を用いればいいかを勉強する。	同　上	同　上
15	伝 (Communication)	最終回として、英語文化と日本文化を互いとの比較において捉えなおすという発想を改めて確認し、いままで学んできたことを踏まえ、ただの挨拶や日常会話だけではなく、文化的な発信、相互理解を可能ならしめる高度な国際コミュニケーションのあり方を提示する。	同　上	同　上

＝　英語総合Ａ（‘０５）＝（Ｒ）
～ 歴史・文化・社会 ～

〔主任講師：　草光　俊雄（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　大石　和欣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

「英語総合Ａ（‘０５）：歴史・文化・社会」は、中級から上級レベルの学生を対象に、英語の歴史的・文化的な背景を理解しながら、英語を実際に運用することを学び、論理的な思考方法と議論の仕方を習得することを目標としています。講義では、英語の歴史、近世・近代の社会経済や思想哲学、ニュートンやダーウィンなどの自然科学思想、労働問題、都市と田園、英国紳士・、女性像の変遷など、歴史・文化・社会に関するさまざまなテーマについてのテクストを読み、専門家へのインタビューを聞きながら、自由に問題を考え、意見を表現する方法を身につけることをねらいとしています。卒業研究や大学院進学を目指す学生にとっても有益な講義のはずです。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	英語と歴史	英語を支えている歴史的・文化的な土台を探究する。英語は複雑な過去と背景をもった生き物のような言語であり、その発展と変化と多様性について考えてみる。	草光　俊雄（東京大学大学院教授） 大石　和欣（放送大学助教授）	草光　俊雄（東京大学大学院教授） 大石　和欣（放送大学助教授）
2	革命と進化	革命と進化という問題は歴史意識として重要である。本章では、エドマンド・バークの革命論やダーウィンの進化論などを読みながら、革命と進化の意味を探求する。	大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
3	パックス・ブリタニカ	大英帝国は１７世紀から１９世紀にかけて全世界を股にかけ７つの海を支配した。財政軍事国家と呼ばれる国家構造の構築を経済史の視点を組み入れながら世界的視野で考える。	草光　俊雄	草光　俊雄 大石　和欣
4	消費と産業	消費革命と技術革新は20世紀だけではなく18世紀にも起こっていたのだろうか？商工業や消費についていろいろな問題を取り上げてみる。それは現代のビジネスの場面にも重要な知識であろう。	草光　俊雄	草光　俊雄 大石　和欣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	都市と田園	近代英国は都市と田園という対比的環境を人為的に作り出した。現在でもその対比は国民生活意識において重要である。都市問題や西欧社会における田舎の歴史的・文化的・社会的意義を再考する。	草光　俊雄 大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
6	慈善と福祉	世界に先駆けて福祉国家を築いたイギリスにおいては、現在でも慈善と福祉が重要な歴史的・文化的・社会的要素となっている。それは貧困問題などの社会問題とも不即離である。イギリスの慈善と福祉の実態を古今合わせて俯瞰しながら、その現代的意味を問う。	大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
7	労働と社会	19世紀以降、労働の社会経済的比重は加速度的に高まっていく。一方、労働組合の創設や労働運動などはイギリスにおいて特有の社会主義を生み出していくことになる。労働に関する様々な問題を取り上げて考えてみる。	草光　俊雄 大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
8	思想と哲学	経験主義が生まれたイギリスではさまざまな思想と哲学が展開した。経験主義とは何か、またその思想的系譜をスコットランドを中心とした啓蒙主義や道徳論に認めることができるか？そもそも英語でいう Philosophy とは何か？そうした問題を議論していく。	大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
9	科学と技術	産業革命が起きた背景には科学技術への関心の高まりがあった。ベーコン、ニュートンやハンフリー・デイビーといった科学者からＳＦ小説家H.G.ウェルズまでをとりあげながら、科学と技術の歴史的・文化的位置づけを確認する。	草光　俊雄 大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
10	宗教と歴史	イギリスの歴史と文化の中で宗教はさまざまな対立をみた。ヘンリー８世の国教会設立からはじまった国教徒と非国教徒との対立は近代社会形成にとって不可避の過程であった。現代イギリス社会における宗教の意味まで追究する。	大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
11	スポーツの母国	イギリスは近代スポーツの母国である。それだけにスポーツに関する語彙や表現は多い。競馬、狩猟、フットボール、ボート、テニス、クリケット等が生まれた歴史的・文化的背景とその意義を、現代の視点を含んで考える。	草光　俊雄	草光　俊雄 大石　和欣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	騎士と紳士	イギリスは紳士の国として有名であるが、一体「紳士」とは何者なのか？中世の騎士の時代からさまざまに変遷してきた紳士像を俯瞰することで、それぞれの時代の価値基準と人間観を明らかにし、近現代における紳士の意味を問う。	草光　俊雄	草光　俊雄 大石　和欣
13	女性とフェミニズム	紳士と同様、いやそれ以上に女性像は時代ごとの歴史的また社会的制約を受けてきた。中世、近代において女性はどのような生活をしていたのか、女性は社会的にどう位置づけられていたのか？フェミニスト的な議論を紹介しながら、古今のイギリスの女性像を追う。	大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
14	教育政策	イギリスの国家政策における教育の比重は高い。それだけに歴史的にも教育の問題は常に問題になってきた。本章では特に英語教育、現在施行されているナショナル・カリキュラムに焦点を当てて、イギリスにおける教育の歴史的･文化的意味を再考する。	草光　俊雄 大石　和欣	草光　俊雄 大石　和欣
15	戦争の悲哀	イギリスの歴史は戦争の歴史でもある。しかし、その裏には幾百万の人々の命が犠牲になってきたことも事実である。戦争に関する記述とそれへの民衆の反応、ウィルフレッド・オーウェンなどの戦争詩人の作品を読みながら、イギリス人の歴史的運命感、歴史意識を振り返って議論することで本講座の締めくくりとする。	草光　俊雄	草光　俊雄 大石　和欣

＝英語Ⅵ（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　成田　篤彦（埼玉工業大学教授）〕
〔主任講師：　高田　康成（東京大学教授）〕

全体のねらい

このコースは二人の講師が担当し、小説と論説という二つの異なるタイプの英文を読むが、二人に共通しているのは、いまいちど基本文法に立ち返って、正確に英文を把握しようという態度である。このコースでは、まず文法的に正確に英文を把握し、その上でより深いテキストの理解を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	このコースの８回目までの授業のテキストとして用いるのは、現代イギリスを代表する小説家のひとり Graham Swift の *A Short History of Coronation Ale* である。この作品は映画化もされた傑作 *Waterland* を織りなすいくつかの物語のひとつでもある。初回には、作品について解説を加え、また授業の方針について説明をしたのち、さっそく作品の冒頭部分「フェンズについて（1）」を読む。	成田　篤彦（埼玉工業大学教授）	成田　篤彦（埼玉工業大学教授） ウィリアムズ・ニコラス（埼玉工業大学教授）
2	「フェンズについて（2）」	学生の皆さんにとって難しい、あるいは誤解しやすいと思われる部分を取り上げて、構文、語法等について解説を加えながら読む。テキストの分量が多いのですべてを細かく解説することはしないが、必ず話の展開について短い説明を加えてから該当部分の説明を行う。	同　上	同　上
3	「フェンズについて（3）」	同　上	同　上	同　上
4	「フェンズについて（4）」	同　上	同　上	同　上
5	「フェンズについて（5）」	同　上	同　上	同　上
6	「祖父について」	同　上	同　上	同　上
7	「戴冠記念エールについて（1）」	同　上	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「戴冠記念エール」について（2）」	学生の皆さんにとって難しい、あるいは誤解しやすいと思われる部分を取り上げて、構文、語法等について解説を加えながら読む。テキストの分量が多いのですべてを細かく解説することはしないが、必ず話の展開について短い説明を加えてから該当部分の説明を行う。	成田　篤彦（埼玉工業大学教授）	成田　篤彦（埼玉工業大学教授） ウィリアムズ・ニコラス（埼玉工業大学教授）
9	「問題の所在と段取り」	成田教授の後を引き継いで、これから7回にわたって論説文を読む。原著者もイギリス人小説家からインド系のシンガポール人の外交官へと代わる。もちろんその英語は彼にとって母国語であり、英文も巧みで洗練されている。「アジア人は思考することができるか？」という挑戦的な表題が示すように、近代の西欧中心主義にたいして真っ向から議論を展開する。論理的作文の手本となるような明晰無比な論理の展開にも注目されたい。	高田　康成（東京大学教授）	ロシター・ポール（東京大学教授）
10	「アジア人は思考することができない」	同　上	同　上	同　上
11	「アジア人は思考することができる」(I)	同　上	同　上	同　上
12	「アジア人は思考することができる」(II)	同　上	同　上	同　上
13	「多分アジア人は思考することができる」(I)	同　上	同　上	同　上
14	「多分アジア人は思考することができる」(II)	同　上	同　上	同　上
15	結び：「アジア的価値」	同　上	同　上	同　上

＝ドイツ語Ⅰ（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　新田　春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語の基礎を学びます。水は容器の形によってさまざまな姿をとるのと同じように、同じ事柄を表現するにも言語や文化によって表現形式が異なります。ドイツ語の形式、すなわち、文法を学ぶことはドイツの社会や文化を理解する有効な鍵です。また、放送の中のスケッチでは日常的な場面における実際的な表現の運用を学びます。さらに、発音練習のためにドイツリートを聴き、また、スケッチの内容と関連するドイツ、オーストリア、スイスの都市やお祭りなどの映像も紹介します。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	音（おん）と文字（1）	ドイツ語のアルファベットから始めて、発音と文字によるその表記を学びます。ここでは母音を中心に練習します。ドイツ語の発音や文字による表記は英語より簡単です。日常よく見られる略語の読み方も練習します。また、耳を慣らすためドイツリートを聴きます。今回はシューマンの「君は花のよう」です。	新田　春夫（武蔵大学教授） S. グレープ・ケネカー（DAAD研究員）	新田　春夫（武蔵大学教授） M. フェルト（立教大学教授）
2	音（おん）と文字（2）	子音の発音を中心に学びます。言語を習得する上で正しい発音は最も大切です。繰り返し練習して美しいドイツ語を身につけましょう。また、ドイツリートを聴きます。今回はシューベルトのセレナーデです。発音の練習に役立ててください。	同　上	同　上
3	動詞の現在人称変化（1）	ドイツ語では主語（人称）によって動詞の語尾が変化します。ここでは基本的な動詞の現在時称における変化を学び、簡単な文を作る練習をします。人称変化はさまざまなレベルの変化に共通した現象ですから、しっかり理解しておきましょう。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの旧市街をご紹介します。	同　上	同　上
4	名詞の性と格変化	ドイツ語の名詞には性、数、格の区別があります。中でも重要なのは格の区別です。格は主語や目的語といった、名詞が文の中で果たす役割を示しています。これは主に冠詞によって表されます。ここでは疑問文を作る練習もします。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの街中のアルスター湖などをお見せします。	同　上	同　上
5	不規則動詞 sein, haben	大部分の動詞は規則的な変化をします。しかし、重要な動詞ほどよく使われるために特別な形があったり、語形が縮約されたりして不規則な変化をします。ここでは sein「…である」、haben「持っている」を使った重要な表現の練習をします。また、スケッチに関連して、今回はハンブルクの港の映像をお見せします。	同　上	同　上
6	名詞の複数形	名詞の複数形の作り方を学びます。ドイツ語では複数形の作り方には 5 種類あり、どの語がどのような複数形になるのか個別的に覚えなくてはなりません。また、数詞の勉強をし、値段、時刻の表現練習をします。さらに、ドイツリートも聴きます。今回はモーツァルトの「すみれ」です。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	動詞の現在人称変化（2）	一部の動詞は現在人称変化で語尾だけでなく、語幹の母音が変化するものがあります。これらの動詞は日常的によく使われる重要な動詞です。ここではこれらの動詞を使った基本的な表現を練習します。また、前回のインタビューに関連して、今回はウィーンの街をご紹介します。	新田　春夫 S．グレープ・ケネカー	新田　春夫 M.フェルト
8	前置詞	前置詞は名詞、代名詞などに付いて他の語との空間、時間、理由などの関係を表します。日本語の格助詞と似た点があります。しかし、前置詞の使い分けは慣用的な部分が多いのです。ここでは基本的な前置詞を使った表現の練習します。また、今回はスケッチに出てくる聖マルティンの提灯行列の様子をご紹介します。	同上	同上
9	否定冠詞、所有冠詞	否定を表すkeinや所有を表すmein「私の」，dein「君の」などの語は名詞の前に置かれ、不定冠詞 ein と同じ語尾変化をして名詞の格を示す役割を担っています。ここではこれらの不定冠詞類の語を使った表現の練習をします。今回はスケッチに出てくる、ズュルト島などのリゾート島がいろいろある北海の映像をお見せします。	同上	同上
10	人称代名詞	「私」、「君」、「それ」などを表す人称代名詞も名詞の仲間です。ですから、性、数、格の区別があります。しかし、これらは語尾変化ではなく、語形そのものが変化します。ここでは人称代名詞と疑問詞を使って人にものを尋ねる表現を練習します。また、今回はスケッチに関連して、ドイツのケーキやケーキ屋さんをご紹介します。	同上	同上
11	命令・要求表現	親しい相手への要求は命令形を使います。しかし、親しくない相手には接続法Ⅰによる別の形を使わなくてはなりません。ここではそのような命令表現や要求表現を作り方を学び、具体例によって練習します。また、今回はスケッチでも言及されているリューベックの街をご紹介します。	同上	同上
12	語順	ドイツ語の語順は英語に似ている部分と日本語に似ている部分とがあります。ここではドイツ語の語順はどのように考えたらいいのかを検討し、ドイツ語の語順の特徴を明らかにします。また、それを踏まえてドイツ語の文を作る練習をします。また、今回はスケッチに出てくるカーニヴァルの様子をご紹介します。	同上	同上
13	分離動詞	言語の習得には文法や単語を覚えるだけではなく、熟語を使いこなすことが重要です。ドイツ語ではとくに副詞＋動詞の形をした熟語はひとつの動詞のようにみなされて分離動詞と呼ばれています。ここではそれらを使った表現の練習をします。また、ドイツリートも聴きます。今回はシューベルトの「鱒」です。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	形容詞：付加語的用法	ドイツ語の形容詞は名詞の前に置かれたときに語尾変化をします。それは冠詞と同様に名詞の性、数、格の表示をする役割を担っています。この語尾変化は少々厄介ですが、形容詞の名詞化などとともにドイツ語の表現の可能性を広げることができます。また、今回は、前回のインタビューに関連して、スイスのルツェルンの街をご紹介します。	新田　春夫 S．グレープ・ケネカー	新田　春夫 M．フェルト
15	話法の助動詞	話法の助動詞は、本動詞が表す出来事や行為に関して、能力、意志、義務、また、許可、禁止、などを表すだけでなく、伝聞、推量、命令などといった話者の判断や相手への働きかけも表します。ここでは話法の助動詞を使ったそのような表現を学びます。また、スケッチに関連して、最近のベルリンの映像をご紹介します。	同　上	同　上

＝ドイツ語Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　新田　春夫（武蔵大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語Ⅰに引き続き、ドイツ語の基礎を固めます。また、ケネカーさん書下しのテクストは、長崎、徳島、神戸、長野、東京、仙台、札幌など、日本におけるドイツゆかりの地を尋ね、例えば、日本における第九交響曲初演の経緯、キリスト教の伝道、ナウマン象の発見といった、日独文化交流の歴史をふりかえります。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	動詞の３基本形	不定詞、過去、過去分詞を動詞の３基本形と言います。不定詞は現在人称変化の原形であり、過去は過去人称変化の原形ですし、過去分詞は助動詞と共に完了時称の文や受身文を作るからです。ここでは３基本形の作り方を学びます。	新田　春夫（武蔵大学教授） S. グレープ・ケネカー（ＤＡＡＤ研究員）	新田　春夫（武蔵大学教授） M. フェルト（立教大学教授）
2	時称（１）：過去	過去時称は、物語などにおけるように、一連の出来事を描写するのに使われます。ここでは過去基本形からの過去人称変化を学び、報告文などを作る練習をします。また、物や事柄が主語になるような、日本語とは発想の異なった表現について考察します。	同　上	同　上
3	時称（２）：現在完了、過去完了	現在完了時称や過去完了時称は現在や過去の時点から見てある出来事や行為がすでに完了していることを表します。特に現在完了は日常の会話の中で過去の出来事を言うのによく使われます。ここではそのような完了表現を練習します。	同　上	同　上
4	動詞の格支配	動詞がとる目的語が何格になるかは論理ではなく、言語習慣的に決まっています。目的語の格は動詞ごとに違います。ここでは個々の動詞がどのような目的語の取り方をするかを学び、重要な動詞を使った表現の練習をします。	同　上	同　上
5	現在分詞、過去分詞	現在分詞や過去分詞は形容詞のように使われますが、動詞としての性質も残していて、目的語や副詞などもとることができます。目的語や副詞などを伴った分詞は長い修飾句を作ることができます。ここではそのような分詞の使い方を学びます。	同　上	同　上
6	形容詞：比較変化	ドイツ語の形容詞・副詞は、英語などと同じように、比較変化をします。ここでは比較級、最上級などの語形変化の練習をし、また、さまざまな比較表現を学びます。	同　上	同　上
7	再帰表現	他動詞の目的語が主語と同じ人称の代名詞である文を再帰表現と言います。日本語には再帰表現はありませんので、つい再帰代名詞を忘れてしまいがちですが、どうして再帰代名詞が必要なのかを考え、さまざまな再帰表現を練習します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	推量表現	普通の文は話者の断定的な主張を表しますが、話法の助動詞やwerdenを使った文は話者の推量を表すことができます。ここではそれらの助動詞を使って話者のさまざまな確信度を表す表現を練習します。	新田　春夫 S. グレープ・ケネカー	新田　春夫 M. フェルト
9	構文	manを使った表現やhaben+zu不定詞、sein+zu不定詞、非人称表現など、いくつかのよく使われる構文があります。これらはしばしば日本語と発想のパターンが異なるという点で熟語と並んで重要なものです。ここではそのような基本的な構文を練習します。	同上	同上
10	受動文	動詞の表す行為を受け手の側から表現するのが受身文です。ここでは受身文の作り方を学び、受身文を作る練習をします。また、能動文との使い分けについても考えて見ましょう。	同上	同上
11	接続詞（1）	wenn. weil. damitなどの接続詞は一つの文をもう一つの別の文に埋め込んで複合的な文を作る働きをします。これらに導かれた文はもう一つの別の文における時、理由、目的などを表しています。ここではそのような複合的な文を作る練習をします。	同上	同上
12	接続詞（2）	dassという接続詞はそれに導かれた文に名詞のステータスを与え、もう一つの別の文における主語や目的語とする働きをします。ここでは接続詞dassを使った複合文を作る練習をします。また、疑問文を埋め込んだ複合文も学びます。	同上	同上
13	関係文	先行する文の中の名詞（先行詞）を受けた語（関係代名詞）によって新しく始められた文を関係文といいます。関係文は「そしてそれは…だが」という意味の挿入句と考えることができます。ここでは関係代名詞について学び、関係文を作る練習をします。	同上	同上
14	接続法（1）	接続法は、話者が事柄の事実性に関して中立であったり、非事実として捉えているときの形です。接続法にはIとIIの2つの形態がありますが、ここでは接続法Iの形態を学び、それを使った要求表現と間接引用を練習します。	同上	同上
15	接続法（2）	接続法IIは非現実の事態を仮定するときに使われます。また、これの派生的用法として丁寧な要請や控えめな主張などの表現に使われます。ここでは日常的によく使われる非現実の願望文や丁寧な表現の練習をします。	同上	同上

＝ドイツ語Ⅲ（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　幸田　薫（東京大学教授）〕

全体のねらい

初級文法を学び終えた直後の学習者にも無理のないように、重要な文法事項を復習しながら、やさしい文章からやや難しい文章へと読み進めて行く。童話、民族、環境、欧州統合のテーマを扱うことで、ドイツ語圏の民族と文化の理解も深めたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	童話の世界（１）	Brüder Grimm: Frau Holle(前半) 文法: 動詞の判別 (1) 本動詞のみの構文	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）	幸田　薫（東京大学教授） Gabriele Stumpp（東京大学外国人教師）
2	童話の世界（２）	Brüder Grimm: Frau Holle(後半) 文法: 動詞の判別 (2) 助動詞＋本動詞の構文	同　上	同　上
3	童話の世界（３）	Eugen Drewermann: tiefenpsychologische Interpretation 文法: ドイツ語の文型 (1)	同　上	同　上
4	ドイツ語圏の国々 (1)	Wilhelm Tell 文法: ドイツ語の文型 (2)	同　上	同　上
5	ドイツ語圏の国々 (2)	Geschichte der Schweiz 文法: 単語の整理: 派生と複合	同　上	同　上
6	ドイツ語圏の国々 (3)	Arthur Schnitzler: Die grüne Krawatte 文法: 副文 (1)、接続法 II	同　上	同　上
7	ドイツ語圏の国々 (4)	Peter Giacomuzzi: Der Traum der großen Kleinheit 文法: 副文 (2)	幸田　薫 Peter Giacomuzzi（東京大学外国人教師）	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ドイツの環境保護 (1)	Immermann と Raabe の環境意識 文法: 形容詞と分詞	幸田　薫 Gabriele Stumpp	幸田　薫 Gabriele Stumpp
9	ドイツの環境保護 (1)	Interview mit Prof. Wolfgang Krohn(前半) 文法: zu 不定詞句	幸田　薫	幸田　薫 Prof. Wolfgang Krohn (Universität Bielefeld)
10	ドイツの環境保護 (2)	Interview mit Prof. Wolfgang Krohn(後半) 文法: 受動態	同　上	同　上
11	ドイツの環境保護 (3)	Gabrielle Stumpp: Das Umweltbewusstsein der Deutschen 文法: 副詞句と語順 (1)	幸田　薫 Gabriele Stumpp	幸田　薫 Gabriele Stumpp
12	ヨーロッパ（1）	Goethe と Nietzsche のヨーロッパ 文法: 副詞句と語順 (2)	同　上	同　上
13	ヨーロッパ（2）	Der Spiegel の記事から(後半) 文法: テクストの構造 (1)	同　上	同　上
14	ヨーロッパ（3）	Der Spiegel の記事から(後半) 文法: テクストの構造 (2)	同　上	同　上
15	ヨーロッパ（4）	ドイツ語圏 3 カ国からヨーロッパを見る 文法: 総まとめ	同　上	幸田　薫 Peter Giacomuzzi Gabriele Stumpp 他

＝フランス語Ⅰ（‘０２）＝（TV）

〔主 任 講 師：　鈴木　啓二（東京大学教授）〕
〔主 任 講 師：　増田　一夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

毎回短いスキットを見ながら、そこで用いられている表現を中心にフランス語の基礎を身につける。文法はフランス語Ⅰ、フランス語Ⅱ全体で完結させる。反復練習などを通じて、実際に応用可能な実践的なフランス語能力の習得を目指す。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Une rencontre ある出会い	アルファベ、名詞の性と数、不定冠詞、定冠詞	増田　一夫（東京大学教授）	増田　一夫（東京大学教授）
2	Un rendez-vous デート	主語人称代名詞、動詞 être、疑問文、	同　上	同　上
3	Trou de mémoire 記憶ちがい	動詞 avoir、否定文、部分冠詞、縮約形	同　上	同　上
4	Des goûts et des couleurs 好みの問題	第１群(-er)動詞、形容詞、名詞の女性形・複数形、否定疑問への答え	同　上	同　上
5	Une invitation généreuse 気前のよい招待	第２群(-ir)動詞、動詞 aller, venir、近接過去、近接未来	同　上	同　上
6	La résidence d'été 夏の別荘	不規則動詞 pouvoir,vouloir,partir, sortir など、非人称動詞 il faut、quel を使った感嘆文	同　上	同　上
7	Peine perdue 骨折り損	動詞 faire, devoir, savoir, connaître, mettre,prendre、ni...ni	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Réservation 予約	疑問副詞　où, quand, pourquoi, comment, combien	鈴木　啓二（東京大学教授）	鈴木　啓二（東京大学教授）
9	Notre écrivain préféré お気に入りの作家	指示形容詞 ce, cette, ces　所有形容詞　mon, ma, mes 等	同　上	同　上
10	Loto ロト	疑問代名詞　qui, qui est-ce qui, qu'est-ce qui, qu'est-ce que, 等	同　上	同　上
11	Quel jour sommes-nous aujourd'hui? 今日の曜日は？	疑問形容詞 quel 非人称の il 時刻の表現	同　上	同　上
12	La place Furstenberg フュルスタンベール広場	関係代名詞　qui, que, où	同　上	同　上
13	Ce qui n'est pas le plus facile à faire 最も簡単ではない事柄	形容詞・副詞の比較級・最上級	同　上	同　上
14	Le photographe 写真家	動詞の肯定命令形・否定命令形	同　上	同　上
15	Souvenir d'un été ある夏の思い出	複合過去形(肯定・否定形)	同　上	同　上

＝フランス語Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　鈴木　啓二（東京大学教授）〕
〔主任講師：　増田　一夫（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス語Ⅰにひきつづき、フランス語の基礎を学ぶ。文法はフランス語Ⅰ、フランス語Ⅱ全体で完結させる。抽象的な文法理解を越えて、実践的なフランス語運用能力の習得を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Le football サッカー	動詞の受動態	鈴木　啓二（東京大学教授）	鈴木　啓二（東京大学教授）
2	L d'un Belge あるベルギー人の物語	現在分詞とジェロンディフ	同　上	同　上
3	Ceci et cela これもあれも	指示代名詞 (ceci, cela, ça, ce)　疑問代名詞(lequel, laquelle, lesquels、etc)	同　上	同　上
4	Quiz 21 クイズ 21	dont, 前置詞＋関係代名詞(lequel, laquelle, lesquels, lesuqelles)	同　上	同　上
5	Vernissage ヴェルニサージュ	代名詞(me,te, le, la les, etc)	同　上	同　上
6	L'aéroport 空港にて	命令法と代名詞	同　上	同　上
7	Un petit détail 些細なディテール	代名動詞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	Embouteillage 渋滞	動詞の直説法半過去、直説法大過去	増田　一夫 （東京大学教授）	増田　一夫 （東京大学教授）
9	Que de souvenirs! たくさんのお土産	動詞の直説法単純未来、直説法前未来	同　上	同　上
10	Mission inaccomplie 任務未完了	中性代名詞 le, en, y、所有代名詞	同　上	同　上
11	Un choix difficile むずかしい選択	Faire を使った使役の表現、laisser を使った放任の表現、知覚動詞 voir, entendre を使った表現	同　上	同　上
12	Un dimanche de pluie 雨の日曜日	動詞の条件法現在、条件法過去	同　上	同　上
13	Cherche remplaçant 求む、代役	動詞の接続法現在、接続法過去、接続法の用法（1）	同　上	同　上
14	La malade imaginaire 病は気から	接続法の用法（2）副詞節における接続法、直接話法、間接話法（1）	同　上	同　上
15	Apprenti roller ローラー族入門	直接話法・間接話法(2)時制の一致	同　上	同　上

＝フランス語Ⅲ（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　三浦　信孝（中央大学教授）〕

全体のねらい

中級から上級への橋渡しになるような総合的フランス語力の養成をめざす。素材としては、世界各地のフランス語作家の作品抜粋16篇を選び、詳しく読む。フランス語はフランス人の植民活動や植民地支配を通してヨーロッパ外に広まった結果、今日では文化的にきわめて多様な人々が表現伝達手段として使用する国際語であることを理解する。

ネイティヴスピーカーの分担協力者は、レユニオンやアフリカで育った経験をもつすぐれた研究者であり、受験生のヒアリング能力向上をねらい、テキストの朗読だけでなく、フランス語で作品を解説してもらう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヨーロッパのフランス語文学（1）	アゴタ・クリストフ『悪童日記』『昨日』	三浦　信孝（中央大学教授） ミカエル・フェリエ（中央大学教授）	三浦　信孝（中央大学教授） ミカエル・フェリエ（中央大学教授）
2	ヨーロッパのフランス語文学（2）	ミラン・クンデラ『裏切られた遺書』	同　上	同　上
3	カリブ海のフランス語文学（1）	エメ・セゼール『帰郷ノート』	同　上	同　上
4	カリブ海のフランス語文学（2）	ラファエル・コンフイアン『コーヒーの水』	同　上	同　上
5	カリブ海のフランス語文学（3）	マリーズ・コンデ『生命の樹』	同　上	同　上
6	カナダのフランス語文学（1）	アントニーヌ・メイエ『荷車引きのペラシー』	同　上	同　上
7	カナダのフランス語文学（2）	ケベックの詩人歌手たち	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	カナダのフランス語文学（3）	エミール・オリヴイエ『千の水』	三浦　信孝 ミカエル・フエリエ	三浦　信孝 ミカエル・フエリエ
9	アラブ世界のフランス語文学（1）	カテブ・ヤシーヌ『ネジュマ』	同　上	同　上
10	アラブ世界のフランス語文学（2）	アルベール・メンミ『地の塩』	同　上	同　上
11	アラブ世界のフランス語文学（3）	タハール・ベンジェルーン『狂人モハ、賢人モハ』	同　上	同　上
12	アラブ世界のフランス語文学（4）	アミン・マルーフ『アラブ人がみた十字軍』	同　上	同　上
13	アフリカのフランス語文学（1）	レオポール・セダール・サンゴール	同　上	同　上
14	アフリカのフランス語文学（2）	チカヤ・ウタムシ	同　上	同　上
15	アフリカのフランス語文学（3）	アマドウ・クルマ	同　上	同　上

＝　中国語入門Ｉ（‘０５）　＝（TV）

〔主任講師：　木村　英樹（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　宮本　　徹（放送大学助教授）〕

全体のねらい

平易な会話文を読みながら、中国語の発音と最も基本的な文法項目を学習する。文法項目が単なる項目の羅列に終わらないよう、折に触れて復習を行い、体系的に把握できるように努めたい。

なお、この「入門Ｉ」では、初修中国語で身につけるべき内容のおおよそ半分を学習したことになる。本科目を学習し終えた皆さんには、ぜひとも引き続き「中国語入門Ⅱ」を学習していただきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「オーバーコートを買いますか？」	1.1　ピンインと声調記号 1.2　簡体字 1.3　声調（*tone*） 1.4　第３声の変調 1.5　単母音 1.6　人称代名詞(1)――単数 1.7　動詞述語文 1.8　否定の副詞“不” 1.9　疑問文(1) ――語気助詞を用いる当否疑問文	木村　英樹（東京大学大学院教授） 宮本　徹（放送大学助教授） 張　麗群（日本大学専任講師）	宮本　徹（放送大学助教授）
2	「革靴は一階にありますか？」	2.1　二重母音 2.2　疑問文(2)――“呢”を用いる省略疑問文 2.3　副詞“也” 2.4　“不”の変調 2.5　所在動詞“在” 2.6　疑問文(3)――正反疑問文 2.7　数詞(1)――1から10まで	同　上	同　上
3	「スカーフは高いでしょ？」	3.1　三重母音 3.2　子音(1) 3.3　存在動詞“有” 3.4　形容詞述語文 3.5　語気助詞“吧”(1)――推量・確認を表す“吧” 3.6　数量詞からなる名詞句 3.7　“一”yiの変調	同　上	同　上
4	「これは何ですか？」	4.1　子音(2) 4.2　人称代名詞(2)――複数 4.3　指示詞(1)――場所を指し示す指示詞 4.4　“是”を用いる動詞述語文 4.5　指示詞(2) ――人や事物を指す指示詞 4.6　“的”を用いる名詞句(1)――「動詞＋“的”＋名詞」 4.7　疑問文(4)――疑問詞疑問文	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	「夕方六時半でどうですか？」	5.1 鼻音を伴う母音 5.2 “的”を用いる名詞句(2)——「名詞／代名詞＋“的”＋名詞」 5.3 受給者・受益者を表す前置詞 5.4 語気助詞“吧”(2)——勧誘・提案を表す“吧” 5.5 語気助詞“哇”⇒語気助詞“啊” 5.6 語気助詞“啊 a”——増幅機能を果たす“啊” 5.7 疑問数詞“几” 5.8 前置詞“在”	木村 英樹 宮本 徹 張 麗群	宮本 徹
6	「彼は本を返しに図書館へ行きました」	6.1 新事態の出現を表す“了” 6.2 連動文 6.3 “一会儿” 6.4 “的”構文 6.5 副詞“就”(1)	同 上	同 上
7	「本は返しましたか？」	7.1 主題化構文 7.2 完了を表す“了” 7.3 数詞「2」 7.4 疑問文(5)——選択疑問文 7.5 名詞連接による名詞句(1)——「種類/属性＋人/事物」 7.6 結果補語 7.7 禁止を表す副詞“别” 7.8 能願動詞“想”	同 上	同 上
8	「今日は土曜日です」	8.1 名詞連接による名詞句(2)——「人/事物＋空間」 8.2 指示詞からなる名詞句——「指示詞＋数詞＋量詞＋名詞」 8.3 経験を表す動詞接尾辞“-guo” 8.4 副詞“很” 8.5 名詞述語文 8.6 “～するとき；～したとき” 8.7 動作量と回数の表現 8.8 動作の方式を問う疑問副詞	同 上	同 上
9	「味はどうですか？」	9.1 指示詞(3)——程度・度合いを指す指示詞 9.2 前置詞“比” 9.3 比較差の強調する“～多了” 9.4 “又～又…” 9.5 疑問詞“多少” 9.6 単価(価格)の表現 9.7 数詞 (2) —— 11 以上の数字	同 上	木村 英樹（東京大学大学院教授）
10	「作るのはあまり得意ではありません」	10.1 経過時間の表現 10.2 概数を表す“～多” 10.3 “的”を用いる名詞句 (3) ——「形容詞＋“的”＋名詞」 10.4 語気助詞“呢” 10.5 “～じゃないか；～ではないですか” 10.6 譲歩的認定を表す“～是～” 10.7 様態補語 ——「動詞＋“得”＋形容詞(句)」 10.8 能願動詞“会” 10.9 未知・不明の事物を問う疑問名詞	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	「私は田中と申します」	11.1 積極性を表す“来” 11.2 動作の起点を表す前置詞 11.3 姓名の尋ね方、名乗り方 11.4 接続詞“和” 11.5 時間詞 11.6 方位詞 11.7 動詞の重ね型	木村 英樹 宮本 徹 張 麗群	木村 英樹
12	「東京は上海ほど蒸し暑くありません」	12.1 副詞“挺” 12.2 “没有”を用いる比較表現 12.3 感情等が向かう対象を表す前置詞 12.4 能願動詞“可以” 12.5 二重目的語構文 12.6 語気助詞“嘛”	同 上	同 上
13	「もう1時だよ」	13.1 近接未来“了” 13.2 能願動詞“得” 13.3 副詞“再” 13.4 副詞“就”(2) 13.5 持続を表す“着”	同 上	同 上
14	「今後何かあれば遠慮なく言ってください」	14.1 “有”を用いる連動文 14.2 疑問詞の不定称用法 14.3 副詞“太” 14.4 兼語文 14.5 「なにをする？；どうする？」という意味を表す疑問動詞	同 上	同 上
15	「どうしてちっとも聞いたことがないんだろう！」	15.1 能願動詞“能” 15.2 “把”構文 15.3 “的”を用いる名詞句（4）――「名詞/代名詞/動詞/形容詞＋“的”」 15.4 事物や情報の受け手を表す結果補語 15.5 前置詞“跟” 15.6 代名詞からなる名詞句――「代名詞＋親族名称/所属先」 15.7 理由・原因を問う疑問副詞 15.8 “一点儿＋都” 15.9 否定の副詞“没(有)” 15.10 副詞“可”	同 上	同 上

＝　中国語入門Ⅱ（‘０５）　＝（Ｒ）

〔主任講師：　木村　英樹（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　宮本　　徹（放送大学助教授）〕

全体のねらい

「中国語入門Ⅰ」に引き続き、文法項目・語彙・表現の更なる習得を目指す。初修中国語として学ぶべき内容は、「入門Ⅱ」まで学ぶことによって初めて完結する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「準備はできたのかい？」	1.1　結果補語の“好” 1.2　副詞“都” 1.3　結果補語の“在” 1.4　語気助詞の融合	木村　英樹（東京大学大学院教授） 宮本　徹（放送大学助教授）	木村　英樹（東京大学大学院教授）
2	「もう時間だわ！」	2.1　“別～了” 2.2　仮定を表す接続詞“如果” 2.3　能願動詞“会” 2.4　前置詞“到” 2.5　強意断定の“是” 2.6　様態・性質・内容等を指し示す指示詞 2.7　疑問文に用いる“呢” 2.8　能願動詞“～すべきである”	同　上	同　上
3	「あの子、飛行機を乗り間違えないかしら」	3.1　集合体を表す接尾辞“-men” 3.2　能願動詞“要”(1) 3.3　結果補語の“到”(1) 3.4　副詞“有点儿” 3.5　〈完了済み〉を表す動詞接尾辞“-guo” 3.6　僅差を示す“（一）点儿”	同　上	同　上
4	「わしらの所は全て順調じゃ」	4.1　程度強調の“了” 4.2　二重主語文 4.3　使役構文 4.4　方向動詞 4.5　切迫表現の“了”	同　上	同　上
5	「二三センチ伸びただけだよ」	5.1　副詞“只” 5.2　量詞の重ね型	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	「私たちはそれでもまだ幸せな方だわ」	6.1 方向補語 6.2 受身を表す接頭辞“被” 6.3 方向補語“下来”の派生用法 6.4 指示詞がつなぐ名詞句	木村 英樹 宮本 徹	木村 英樹
7	「どうしようもないわ」	7.1 動作・行為の目的を表す前置詞 7.2 副詞“在” 7.3 存現文	同 上	同 上
8	「本当に懐かしくなるわ」	8.1 指示詞“每” 8.2 列挙に用いる“啦” 8.3 比喩・比況を表す“像～似的” 8.4 否定強調に用いる“再也” 8.5 可能／不可能を表す動詞句構造	同 上	同 上
9	「一つ良い知らせをもってきたよ」	9.1 不定・匿名の“有人～” 9.2 副詞“都” 9.3 確認要求の“是不是” 9.4 原因を示す前置詞	同 上	宮本 徹（放送大学助教授）
10	「これほど嬉しいことはないわい！」	10.1 “一”の省略 10.2 方位詞“上”の派生用法 10.3 方向補語“出”の派生用法 10.4 方向補語“下去”の派生用法 10.5 疑問詞疑問文＋“好呢”	同 上	同 上
11	「数えてご覧なさい！」	11.1 状態詞“黄澄澄” 11.2 前置詞“从” 11.3 能願動詞“要”(2) 11.4 連用修飾語に用いる助詞“地” 11.5 直接引用の“～道” 11.6 伝聞の表現 11.7 試行を表す“～看”	同 上	同 上
12	「突然子供の泣き声が聞こえた」	12.1 方向補語“起来”の派生用法 12.2 「動詞＋“啊”」の重ね型 12.3 結果補語の“到”(2) 12.4 副詞“原来” 12.5 能願動詞“敢”	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	「まあお待ちなさい」	13.1 結果補語“着” 13.2 前置詞“往” 13.3 部分否定に用いる“不大”	木村 英樹 宮本 徹	宮本 徹
14	「果物はみんなで食べてこそおいしいんだよ」	14.1 「“一”＋臨時量詞」 14.2 動詞＋“了”＋二音節方向補語 14.3 副詞“才” 14.4 能願動詞“要”(3)	同 上	同 上
15	「今年の杏もまた熟した」	文法の総まとめ	同 上	同 上

＝中国語Ⅲ（‘０４）＝（ Ｒ ）

〔 主 任 講 師 ： 伊藤 徳也（東京大学大学院助教授）〕

全体のねらい

現代中国語の基礎を終えた方向けの中級中国語講座です。中国語の童話を細かく読んでいきます。その過程で「読む」「書く」「話す」「聞く」の四技能をバランスよく修得できるよう練習を積んでいきます。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	大禹治水（1）	洪水に悩む古代中国。多くの神の中でただ一人鯀だけが治水事業にたちあがります。	伊藤 徳也（東京大学大学院助教授）	伊藤 徳也（東京大学大学院助教授）
2	大禹治水（2）	天上から魔法の土を盗み出した鯀は、玉皇大帝の怒りを買い、刺客に殺されますが、鯀の死体は腐乱せず、その死体から子の禹が生まれ出ます。	同 上	同 上
3	大禹治水（3）	禹は助手の応竜の助けを借りて着々と治水事業をすすめます。途中で洪水を起こした水の神と戦い、禹はそれを一蹴します。	同 上	同 上
4	大禹治水（4）	禹は妻を迎えますが、家に妻を一人残し治水に集中します。治水が最終的な局面を迎えると、巨大な熊に変身してある山の開拓に力を尽くします。	同 上	同 上
5	大禹治水（5）	妻は禹が変身した巨大な熊に驚いて、必死に逃げたあげく、石になってしまいます。石から子の啓が生まれ、治水も完全に終わります。平穏な生活を得た人々は禹の恩徳に感謝するのでした。	同 上	同 上
6	槃瓠和公主（1）	王妃の耳から出てきた黄金色の虫は、瓢箪の中で飼われますが、ある日瓢箪から飛び出ると、きれいな斑紋のある大きな犬に変身し、槃瓠と名づけられて国王に寵愛されます。	同 上	同 上
7	槃瓠和公主（2）	国王は、叛乱を起こした戎呉の首を取ってきた者に娘をやると宣言します。誰一人反乱軍に立ち向かおうとしない中、槃瓠は戎呉の陣営に乗り込み、戎呉の首を取って、国王の下に戻ってきます。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	槃瓠和公主（3）	槃瓠は、金の鐘の中に７日７晩の間入っていれば人間になる、それまで鐘の中を見るな、と言います。姫が６日目に中を見たので、槃瓠は体は人間、頭は犬という姿になります。二人は結婚して人里離れた場所で質素で幸せな生活を送るのでした。	伊藤　徳也	伊藤　徳也
9	東郭先生与狼（1）	東郭という老先生がロバに乗って道を急いでいると、ある狼を追っている趙簡子という将軍の軍隊と出会います。しばらくしてその狼が老先生に助けを求めに来ます。	同　上	同　上
10	東郭先生与狼（2）	東郭先生は狼を助けようと、袋の中に狼を隠します。趙将軍に出会い、狼など知らないと申し出ます。	同　上	同　上
11	東郭先生与狼（3）	東郭先生の必死の弁解を聞いて趙将軍は軍隊を率いて戻っていきます。将軍が去ったあと東郭先生に袋から出してもらった狼は、飢え死にしそうだから、お前を食わせろと東郭先生に迫ってきます。	同　上	同　上
12	東郭先生与狼（4）	逃げ回る東郭先生は、狼に身を食わせるべきかそうでないかを、三人に聞いてみようと提案し、狼もそれを了承します。まず杏の老木に聞いてみると、杏の老木は身の上話を始めます。	同　上	同　上
13	東郭先生与狼（5）	杏の老木は、狼に食べられるべきだ、と結論します。次にたずねた牛は、身の上話を始めます。	同　上	同　上
14	東郭先生与狼（6）	牛も結局東郭先生が狼に食べられるべきだと結論し、東郭先生は、三人目の白髪の老人に必死にたずねます。一方狼は、東郭先生は狼を袋の中に詰め込んでひどい目にあわせたから、食べられるべきだと訴えます。	同　上	同　上
15	東郭先生与狼（7）	白髪の老人は、どちらの言い分も信じられないので、実際に再現してみては、と提案、まんまと狼を袋の中に詰め込みます。東郭先生は、老人の勧め通り、狼を殺します。東郭先生は老人に感謝のことばを言って去っていくのでした。	同　上	同　上

＝ロシア語入門Ⅰ（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　安岡　治子（東京大学大学院助教授）〕
〔主任講師：　西中村　浩（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

ロシア語文法の基礎を勉強し、「読み、書き、話す」といった基本的な能力の獲得を目指す。文字と発音を覚え、それに慣れることからはじめ、その後ロシア語文法の要である格変化や動詞の変化を習得し、辞典を活用しながら簡単なテクストを読めるようになることを目指す。また、簡単な日常会話表現を身につける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	文字と発音（1）	文字と発音の第１回目。日本語話者にとって比較的発音しやすい音価をもつ文字からはじめる。文法事項では、「これは～だ」、「～はここにある／いる」という表現を学ぶ。	安岡　治子（東京大学大学院助教授） 西中村　浩（東京大学大学院教授）	安岡　治子（東京大学大学院助教授）
2	文字と発音（2）	文字と発音の第２回目として、特にロシア語特有の硬音と軟音について説明する。文法事項では、否定文、疑問文について、そのイントネーションを含めて学習する。	同　上	同　上
3	文字と発音（3）名詞の性	文字と発音の最終回として、日本語話者にとって発音しにくい、あるいは聞き取りにくい発音をもつ文字を学ぶ。また、文字と発音のまとめを行い、ロシア語のアルファベットを学ぶ。文法事項としては、名詞の文法的な性について、「私の、あなたの」という表現、「では～は？」というタイプの疑問文のイントネーションなど学ぶ。	同　上	同　上
4	人称代名詞と動詞の現在変化（1）	人称代名詞と動詞の不定形、および現在変化（第１変化）について学ぶ。さらに疑問文のさまざまなイントネーションの差を確認する。また、ロシア人の名前について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	名詞の複数形 動詞の現在変化（2）	名詞の複数形、所有代名詞、指示代名詞の性数変化について学ぶ。動詞に関しては、現在変化（第２変化）を覚える。	安岡　治子 西中村　浩	安岡　治子
6	形容詞（長語尾形）の性数変化 感嘆文 格変化	形容詞（長語尾形）の性数変化を学ぶ。また、какойを使った疑問文と感嘆文のイントネーションの差を覚える。最後に格変化について、それがどんなものであるか概説する。	同　上	同　上
7	名詞単数の前置格ся動詞	名詞単数の前置格の形を学び、前置格とともに用いられる前置詞о，ь，наの用法を説明する。動詞лежать，стоятьの用法、житьの現在人称変化を覚える。最後にся動詞と呼ばれている一群の動詞の発音、現在変化、意味について説明する。	同　上	同　上
8	動詞の過去形 名詞の生格	動詞の過去形および、名詞と人称代名詞の生格形を学び、生格の用法として、「～の」という意味や、所有の表現、否定生格について学ぶ。	同　上	同　上
9	名詞の対格 移動の動詞と表現	名詞と人称代名詞の対格とその用法を学ぶ。また、ロシア語独特の移動を表わす動詞の特性と、行き先の表わし方など、移動の動詞を用いたさまざまな表現を覚える。	同　上	同　上
10	動詞の未来形 名詞の与格	бытьの未来形、その他の動詞の未来形（合成未来）について学ぶ、また、名詞の格については、与格の形と用法を学習する。さらに、動詞の特殊な現在人称変化形としてдаватьの変化を覚える。	同　上	同　上
11	定動詞と不定動詞 形容詞短語尾形	ロシア語の移動の動詞には定動詞と不定動詞の区別があるが、その区別を理解する。また、形容詞の短語尾形の作り方とその基本的な用法について学ぶ。さらに、動詞の特殊な現在人称変化形としてрисоватьの変化を覚える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	名詞の造格 人称代名詞と形容詞の格変化 無人称文	名詞の単数格変化の最後として造格について学び、さらに人称代名詞と形容詞の格変化について整理する。無人称文について学び、動詞については、第２変化動詞の歯音変化、唇音変化、動詞の命令法について学ぶ。	安岡　治子 西中村　浩	安岡　治子
13	不完了体と完了体	ロシア語の動詞には完了体と不完了体という体（アスペクト）の区別があるが、第１３回は体の基本的な考え方、および体と時制について学ぶ。	同上	西中村　浩（東京大学大学院教授）
14	形容詞の比較級と最上級 関係代名詞	形容詞の比較級と最上級の作り方、およびその用法について学ぶ。さらに、基本的な関係代名詞について理解する。	同上	同上
15	数詞 仮定法	最終回は数詞と数詞を用いた表現（値段、時間、年齢など）、そして仮定法について学ぶ。	同上	同上

＝ロシア語入門Ⅱ（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　西中村　浩（東京大学大学院教授）　〕
〔主任講師：　安岡　治子（東京大学大学院助教授）　〕

全体のねらい

ロシア語の初歩的な知識をもっていることを前提とし、ロシア語の基礎的な理解・表現能力の向上を目指す。毎回ある程度まとまった内容の文章を読みながら、文法の知識と語彙力を伸ばし、ロシア語運用能力を高める。最後の６回は比較的長めの文章を用いて読解力の向上も目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	名詞の格変化のまとめ 生格の用法	ロシア語Ⅰで学んだ基本的な名詞の格変化を復習し、さらに複数の格変化、мяで終わる中性名詞、ьで終わる女性名詞の格変化を学び、やや不規則な格変化も習得する。また、最初の３回で重要な格の用法を学ぶが、この回はまず生格の用法を習得する。	西中村　浩（東京大学大学院教授） 安岡　治子（東京大学大学院助教授）	西中村　浩（東京大学大学院教授）
2	代名詞の格変化のまとめ 与格と対格の用法	人称代名詞の格変化の復習をし、さらにいくつかの基本的な代名詞の格変化について学ぶ。 格の用法については、与格と対格の主要な用法を習得する。	同　上	同　上
3	形容詞の格変化のまとめ 造格の用法	形容詞の格変化を復習する。 格の用法については、造格の主要な用法を習得する。	同　上	同　上
4	定動詞・不定動詞と体	ロシア語Ⅰでは３つのペアの定動詞と不定動詞について学んだが、ここではその他の基本的な定動詞と不定動詞を学び、さらに不定動詞・定動詞と不完了体・完了体の関連について理解する。	同　上	同　上
5	順序数詞と時間に関する表現	個数詞と順序数詞の復習をし、数詞を用いた表現のなかでもとりわけ時間に関する基本的な表現を学ぶ。	同　上	同　上
6	比較級と最上級	ロシア語Ⅰでは主として形容詞長語尾形の比較級と最上級について学んだが、ここではさらに短語尾形の比較級・最上級についても学び、比較級・最上級を用いたさまざまな表現を習得する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	無人称文 不定人称文 普遍人称文	ロシア語でよく用いられる不定人称文、無人称文の基本を復習した後、その他のよく用いられる不定人称文、無人称文について学び、さらに普遍人称文の基本を理解する。	西中村　浩 安岡　治子	西中村　浩
8	関係代名詞と関係副詞	基本的な関係代名詞、関係副詞、およびчтоを用いた構文について学ぶ。	同　上	同　上
9	仮定法と否定代名詞	仮定法と接続詞чтобыを用いた重要な構文と否定代名詞の基本を学ぶ。	同　上	同　上
10	不定代名詞	チェーホフの初期の短編をやさしく書き直したものを3回に分けて読み、文法の復習をしながら、かつさらに新しいものを学ぶ。この課では不定代名詞について学ぶ。	同　上	同　上
11	副動詞	ロシア語の文章を読むのに不可欠な副詞の働きをする分詞（副動詞）について学ぶ。	同　上	同　上
12	さまざまな従属節	ロシア語のさまざまな従属節について整理する。	同　上	同　上
13	形動詞	形動詞とは何かを理解し、まず能動の分詞の働きをする能動形動詞について学ぶ。	同　上	安岡　治子 （東京大学大学院助教授）
14	被動形動詞と受動の表現	被動形動詞動詞やся動詞を用いたロシア語のさまざまな受動の表現について学ぶ。 初級ロシア語文法の知識を生かして、まとまったテクストを読む。	同　上	同　上
15	まとめ	今まで習った文法事項の総復習をしながら、引き続きまとまったテクストを読む。	同　上	同　上

＝スペイン語Ⅰ（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：上田　博人（東京大学教授）〕

全体のねらい

やさしい文に慣れながら，少しずつ日常会話の練習をします。
１５回の講義で文法の基本を学びます。
スペイン語の発音や文法をよく理解し，使えるようにしましょう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	①亜美はマドリードに到着します ②これがあなたの部屋です.	①AR 動詞の活用と定冠詞を扱います. ②「～は～です」という意味の ser と estar という動詞を学びます. estar は「～は～にあります」という意味でも使われます. 数詞も少し覚えましょう. 母音の発音についても学びます.	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
2	①君は箸で食べるの？ ②私たちは学期中はマドリードに住んでいます.	①ER 動詞を学びます. 母音がつながって二重母音となることを確かめましょう. ②IR 動詞と動詞 ver を学びます. また，子音の発音についても扱います.	同　上	同　上
3	①何か悪いことがあったの？ ②今日の午後何をするつもり？	①形容詞の変化と目的語の代名詞を学びます. 子音の発音についてもしっかりと理解しましょう. ②不規則動詞を扱います. はじめに語根の母音が変化するタイプの不規則動詞を見ましょう. それから子音のつながりについて学びます. 数詞は 11 から 20 まで覚えましょう.	同　上	同　上
4	①私はまだキケのことをよく知らない. ②私たちは買い物に行ってきます.	①「私」の活用形に-zco がつく動詞と-go がつく動詞を扱います. 不定冠詞の形と機能も学びます. 音節についても勉強します. ②動詞の ir と saber を扱います. アクセントの位置についても学びます.	同　上	同　上
5	①このひどい騒音聞こえるでしょう？ ②ひどいもんだ！	①動詞の oír, dar, caer, huir を学びます. ②「ある・いる」を表す動詞 haber の活用形は，特殊な hay を使います. 所有語についても学びます.	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	①子供のときは何になりたかった？ ②小さかったころ，私たちはそんなにテレビを見ませんでした.	①動詞の線過去形を学びます. 規則動詞からはじめましょう. 数詞は 21 から 30 まで学びます. ②不規則動詞の線過去形を学びます. 数詞は 31 から 100 まで学びましょう.	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
7	①君のお父さんはいつ着いたの？ ②君はどこでスペイン語を勉強したの？	①このユニットから，動詞の点過去の活用形を学んでいきます. まずはじめは規則動詞です. ②ER 動詞と IR 動詞の点過去形を学びます.	同　上	同　上
8	①私の父は来られませんでした. ②父はマドリードを見物したいと言いました.	①不規則動詞の点過去形を学びます. いずれもよく使われる重要な動詞です. ②不規則動詞の点過去形の続きです. ここでは動詞 decir を扱います.	同　上	同　上
9	①昨晩はよく眠れましたか？ ②マヨール広場で切手を交換しています.	①不規則動詞の点過去形の３回目です. 語根の母音が変化するタイプの不規則動詞と dar を扱います. ②動詞の不定詞、現在分詞、過去分詞を学びます.	同　上	同　上
10	①私たちはとても興味深い場所を見ることができました. ②トマトが入った冷たいスープは何と言うんですか？	①動詞の現在完了形と再帰動詞を学びます. ②動詞の過去完了形とその意味を学びます. また再帰動詞をもう少し続けて学びます.	同　上	同　上
11	①私たちは日本から送られたサンプルでテストをしているところです. ②私たちはもっとひんぱんに連絡しあいましょう.	①関係代名詞の使い方を学びます. ②規則動詞の未来形を学びます.	同　上	同　上
12	①私たちはクエンカへ遠足に行きます. ②少なくとも 40 度ぐらいはあったんじゃないかな.	①不規則動詞の未来形を学びます. 未来完了形も扱います. ②動詞の過去未来形を学びます.	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	①エキスポがなければ，夏に行くことはなかったでしょう． ②財布を忘れたはずはないんだけど．	①動詞の過去未来形のつづきです．過去未来完了形についても学びます． ②このユニットからは「接続法」を学びます．はじめは規則動詞です．接続法の現在完了形も扱います．	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
14	①たぶん僕の友人たちはみんな来るよ． ②そんなに質問ばかりしないで一緒に来いよ．	①接続法の続きです．不規則動詞の接続法を学びます． ②動詞の命令形を扱います．肯定の命令と否定の命令のちがいに注意しましょう．	同　上	同　上
15	①今日はどのチームに勝たせたい？ ②こちらに来なければ，この目で見る機会はなかったことでしょう．	①動詞の接続法の過去形を学びます． ②最後に接続法の過去完了を学びます．仮定文は少し難しいかもしれませんが，よく理解してください．	同　上	同　上

＝スペイン語II（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：上田博人（東京大学教授）〕

全体のねらい

少し難しい文に挑戦しながら，スペイン語の上達を目指す。
文法の復習をしながら，多数の練習をする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	文字と発音（1）	1．アルファベート 2．母音 3．二重母音と三重母音 4．母音の分立	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
2	文字と発音（2）	1．子音 2．二重子音 3．音節の切り方 4．アクセントの位置 5．綴り字の規則 6．数詞．1 から 10 まで	同　上	同　上
3	Llego a Madrid	1．現在．規則変化 2．ser と estar 3．主語人称代名詞 4．名詞の性 5．名詞の数 6．冠詞 7．数詞．11 から 20 まで	同　上	同　上
4	Valencia	1．現在．不規則変化 2．形容詞 3．a＋「人」を示す直接目的語	同　上	同　上
5	Nostalgia	1．線過去．規則変化 2．線過去．不規則変化 3．人称代名詞． 直接目的語と間接目的語 4．前置詞＋人称代名詞 5．gustar 型動詞の用法 6．数詞．21 から 40 まで	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	**Fiestas nacionales**	1．点過去．規則変化 2．所有形容詞 3．指示形容詞と指示代名詞 4．否定語	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
7	**El diario de Tomoko**	1．点過去．不規則変化 2．不定詞 3．数詞．41 から 199 まで	同　上	同　上
8	**Un cuento de Granada**	1．現在完了 2．過去完了 3．関係詞 4．-mente の副詞 5．序数詞	同　上	同　上
9	**Teatro**	1．未来．規則変化 2．未来完了 3．現在分詞 4．進行形 5．比較	同　上	同　上
10	**El Espíritu de la Navidad**	1．未来．不規則変化 2．感覚・使役動詞 3．無主語文 4．数詞．200 から 1000 まで	同　上	同　上
11	**¿Qué haría yo sin ti?**	1．過去未来．規則変化 2．過去未来．不規則変化 3．過去未来完了 4．再帰動詞 5．Ser を使う受動態	同　上	同　上
12	**La Plaza Mayor**	1．接続法現在．規則変化 2．接続法現在．不規則変化 3．接続法現在完了	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	Tauromaquia	1．肯定の命令文 2．肯定の命令形．不規則変化 3．否定の命令文 4．数詞．1001 から 100 万まで	上田　博人（東京大学教授）	上田　博人（東京大学教授）
14	Carta de Tomoko	1．接続法過去．規則変化 2．接続法過去．不規則変化 3．接続法過去完了 4．接続法過去 se 形 5．条件文 6．願望文	同　上	同　上
15	補講	ラテンアメリカのスペイン語	同　上	同　上

＝韓国語Ⅰ（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　生越　直樹（東京大学教授）〕
〔主任講師：　根本　理恵（東京大学非常勤講師）〕

全体のねらい

簡単な会話によって韓国の人とコミュニケーションができるようになること、掲示や簡単な説明文を読めるようになることをめざす。まず、発音・文字（ハングル）の練習を十分に行ったのち、基本的な表現を使って簡単な文章を作る練習を行っていく。あわせて、スキットなどを通して韓国の文化・習慣についても紹介していく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	母音１、あいさつ１	基本的な単母音６つと半母音 y を含む重母音の発音、およびそれを表す文字の練習を行う。さらに、出会ったときなどに使うあいさつを練習する。	生越　直樹（東京大学教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）	生越　直樹（東京大学教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）
2	子音１、あいさつ２	子音（平音、激音）の発音とそれを表す文字の練習を行う。さらに、感謝などの簡単なあいさつ表現の練習を行う。	同　上	生越　直樹
3	子音２・母音２、あいさつ３	子音（濃音）および半母音 w を含む重母音の発音、それを表す文字の練習を行う。さらに、謝罪などのあいさつの練習を行う。	同　上	同　上
4	終声・連音化、あいさつ４	音節末の子音（終声）の発音、および終声に関わる連音化の練習を行う。さらに、「はい」「いいえ」などの表現を練習する。	同　上	同　上
5	～です、ですか	「～です、ですか」「～でいらっしゃいますか」にあたる名詞文の叙述形・疑問形・尊敬形と「は」にあたる助詞を取り上げ、それらの表現を使った文の練習を行う。	同　上	同　上
6	います、あります	「ある、いる」「ない、いない」にあたる存在詞、「この、その、あの」にあたる指示詞を取り上げ、それらの表現を使った文を練習する。	同　上	同　上
7	～します、しますか	動詞・形容詞について、語幹と語尾の違いと母音語幹、子音語幹の違いを説明した後、「～します(か)、～です(か)」にあたる用言文の叙述形・疑問形についての練習を行う。さらに、漢語系の数詞とそれとともに使う助数詞の練習も行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	～しません、～ではありません	「～しません」にあたる用言文の否定形、「～ではありません」にあたる名詞文の否定形について練習する。さらに、固有語系の数詞とそれとともに使う助数詞の練習も行う。	生越　直樹 根本　理恵	生越　直樹
9	～なさいますか	用言の尊敬形の作り方と使い方、特殊な尊敬形の使い方を練習する。	同　上	根本　理恵
10	～してください	陽母音、陰母音の別を説明した後、用言の連用形の作り方を練習する。さらに連用形の縮約形の説明も加える。「～してください」にあたる依頼表現を使って、連用形の使い方を練習する。	同　上	同　上
11	～　し　ま　す	「～します」にあたる文末の丁寧な形 hayyo 体の練習を行う。また、残りの連用形の縮約形の練習もする。	同　上	同　上
12	～なさいますか	hayyo 体の縮約形の練習を行う。さらに、hayyo 体の尊敬形の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
13	～　し　ま　し　た	過去形の作り方と使い方を練習する。さらに過去形の縮約形、尊敬の過去形の練習もする。	同　上	同　上
14	～　し　ま　す	話し手の意志や推測を表す未来・意志形の使い方を練習する。さらに、「～している」にあたる進行形の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
15	まとめと復習	ここまで練習した表現をまとめるとともに、練習問題をしながら復習を行う。	同　上	同　上

＝韓国語Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　生越　直樹（東京大学教授）〕
〔主任講師：　根本　理恵（東京大学非常勤講師）〕

全体のねらい

韓国語Ⅰを終了した程度の実力を持つ学習者を対象とする。いろいろな表現を使って韓国の人とコミュニケーションができるようになること、新聞記事などを読めるようになることをめざす。基本的な表現のうち、韓国語Ⅰで学習しなかった事項について練習するとともに、より複雑な文を作文する練習も行う。スキットなどを通して、引き続き韓国の文化・習慣の紹介を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	～する～、～した～	用言の後ろに名詞が続くときの形、連体形の練習をする。この課ではまず動詞、存在詞の連体形のうち、現在連体形、過去連体形の作り方と使い方の練習を行う。	生越　直樹（東京大学教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）	生越　直樹（東京大学教授） 根本　理恵（東京大学非常勤講師）
2	～する～、～していた～	動詞、存在詞の連体形のうち、未来連体形、回想連体形の作り方と使い方を練習する。	同　上	生越　直樹
3	～な～	形容詞、指定詞の連体形(現在、未来、過去)の作り方と使い方を練習する。	同　上	同　上
4	ｒ語幹の用言１	特殊な活用をするｒ語幹の用言について、その特徴と活用の仕方について説明し、練習を行う。さらに接続語尾・慣用表現をいくつか取り上げその使い方を練習する。	同　上	同　上
5	ｒ語幹の用言２	ｒ語幹の用言を使って文を作る練習をする。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
6	ｓ変則用言	変則用言の一つ、ｓ変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
7	ｔ変則用言	ｔ変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	p変則用言	p変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	生越　直樹 根本　理恵	生越　直樹
9	h変則用言	h変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	根本　理恵
10	rwu変則用言	rwu 変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
11	wu変則用言	wu 変則用言の活用と使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
12	rwu 変則用言と wu 変則用言	まず re 変則用言の活用と使い方を練習し、さらに rwu 変則用言、wu 変則用言、re 変則用言の使い方をまとめながら練習を行う。また、接続語尾・慣用表現をいくつか取り上げその使い方を練習する。	同　上	同　上
13	話し言葉で使う表現	話し言葉で使う表現、特に様々な縮約形を取り上げ、その使い方の練習をする。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
14	ぞんざいな表現	文末の形式のうち、ぞんざいな表現である hay 体、hanta 体の叙述・疑問などの形を取り上げ、その使い方を練習する。引き続き接続語尾・慣用表現も取り上げ練習する。	同　上	同　上
15	まとめと復習	ここまで練習した表現をまとめるとともに、練習問題をしながら復習を行う。	同　上	同　上

＝日本語Ⅰ（‘０２）＝（TV）

－外国語としての－

〔主任講師：　姫野　昌子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　吉岡　英幸（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：　伊東　祐郎（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

現代日本の社会と文化の理解、日本語の運用能力（大学１年生程度）の養成を図る。ＮＨＫや放送大学の番組を素材とし初級後半から中級にかけての文法事項と語彙を中心に日本語力をのばす。番組ごとにテーマを決め、外国人留学生と日本人学生を交えたトークや日本人有識者へのインタビューを通して書きことばと話しことばのスタイルの違いも学ぶ。日本の歌や有名文化人のことばと書画なども紹介し、楽しみながら学べるように、マルチメディアの特色を生かした、番組をめざす。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本の風土	日本列島の地理的条件と自然環境の特色を取り上げる。四季を通じての風景の変化、地方の多様性などを紹介する。外国人日本語学習者による「私の国の紹介」スピーチも扱う。	姫野　昌子（放送大学教授） 藤村　知子（東京外国語大学助教授）	姫野　昌子（放送大学教授） 吉岡　英幸（早稲田大学教授） 伊東　祐郎（東京外国語大学教授）
2	ごみ処理問題と資源化－分別収集と処理－	経済の発展とともに様々な環境問題が生じているが、中でもごみ処理は大きな問題である。鎌倉市の、ごみ収集と分別、再利用への取り組みを見る。外国人留学生を交えた「ごみ問題」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子	姫野　昌子（放送大学教授） 伊東　祐郎（東京外国語大学教授）
3	ごみ処理問題と資源化－プラスチックの再利用－	鉄鋼メーカーのプラスティック製品リサイクルの成功例を取り上げる。放送大学教授への中国人留学生インタビュー「ごみ問題」も扱う。	同上	同上
4	日本の防災－消火と救急活動－	人々の生命と財産を守る、防災システムを、具体的に埼玉県消防本部の消火と救急活動を中心に見る。外国人留学生を交えた「防災問題」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 荒川　洋平（東京外国語大学助教授）	同上
5	日本の防災－訓練と防災活動－	地域住民への広報活動も消防署の重要な仕事である。様々な行事や訓練の様子を通して地域社会に密着した危機管理のあり方を取り上げる。埼玉県消防本部現場の責任者へのネパール人留学生のインタビュー「日本の防災」も扱う。	同上	同上
6	ロボットとの共存－ロボットの開発－	早稲田大学理工学部の長年にわたるロボット開発への道のりと現状を取り上げる。外国人留学生による「私たちの生活とロボット」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 吉岡　英幸（早稲田大学教授）	姫野　昌子 吉岡　英幸
7	ロボットとの共存－未来のロボット－	早稲田大学理工学部の新しい技術開発の成果を取り上げる。早稲田大学教授への韓国人留学生のインタビュー「ロボットの開発」も扱う。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	男女共同参画 －少子化社会と男女共同参画－	現在日本では少子化が進んでいるが、男女共同参画社会の実現が問題解決の一つのカギとなる。子育てへの父親の参加を通して男女共同参画の現状を見る。外国人留学生を交えた「男女共同参画」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 小林　幸江 （東京外国語大学教授）	姫野　昌子 伊東　祐郎
9	男女共同参画 －地域社会への男女共同参画－	千葉県習志野市における小学校と地域住民の協力の現状を紹介し、子どもを中心にした男女共同参画の現状を取り上げる。内閣府局長へのセネガル人留学生のインタビュー「日本の男女共同参画」も扱う。	同　上	同　上
10	ＩＴ時代のビジネス －製造－	20 世紀後半、日本経済発展の原動力の一つは技術水準の高い製造業であった。熟練工にしかできないと言われてきた技術が、IT 時代に入り、コンピュータで処理されるようになった。その現状を見る。外国人留学生による「IT 時代の社会」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 柏崎　雅世 （東京外国語大学教授）	姫野　昌子 吉岡　英幸
11	ＩＴ時代のビジネス －商取引－	従来の商取引と違って、インターネット上で市場を開き、全国の業者と自由に取引する会社が現れた。その現状を見る。ネット上の取引リスクを回避する方法も見る。NTT 研究所長に対するアメリカ人留学生のインタビュー「IT 時代の社会」も扱う。	同　上	同　上
12	子どもたちの読書離れ －原因と対応－	最近、児童書の売り上げが減ってきた。また、本を読まない子どもも増加している。読書離れの傾向に対する、出版社、教師、親たちの努力の現状を見る。外国人留学生を交えた「読書と教育」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 伊東　祐郎 （東京外国語大学教授）	姫野　昌子 伊東　祐郎
13	子どもたちの読書離れ －学校の取り組みと効果－	子どもたちの読書の機会を増やすために、図書室を改善した学校や、全体で読書に取り組んだ学校などがある。子どもたちは読書のおもしろさを 知り、学校が大きく変わってきている。その現状を見る。児童文学評論家に対する韓国人留学生のインタビュー「子どもと読書」も扱う。	同　上	同　上
14	メディアと社会 －メディア技術と情報の共有化－	近代に入ってメディア技術はコンピュータの出現により飛躍的な進歩をとげた。デジタル技術により古い文化財の保存も可能になり、情報の共有が実現できるようになった。その現状を見る。外国人留学生を交えた「メディアと社会」についての話し合いも扱う。	姫野　昌子 鈴木　美加 （東京外国語大学助教授）	姫野　昌子 吉岡　英幸
15	メディアと社会 －インターネットによる教育－	教育でも新しいメディア技術を取り入れた活動が行われている。インターネットを利用した教室の活動状況を沖縄の学校を例に、見る。ニュースキャスターに対する韓国人留学生のインタビュー「メディアと社会」も扱う。	同　上	姫野　昌子 吉岡　英幸 伊東　祐郎

＝日本語Ⅱ（‘０３）＝（Ｒ）

－外国語としての－

〔主任講師：　姫野　昌子　（放送大学教授）〕
〔主任講師：　伊東　祐郎　（東京外国語大学教授）〕

全体のねらい

ラジオというメデイアを通して、楽しく聞ける日本語講座を制作した。話し言葉と書き言葉のスタイルや男女の言葉遣いの相違への理解、語彙力と聞き取る力、要旨を把握する力の養成を図り同時に現代日本社会と日本文化の理解も目指す。そのため、短編ドラマ、ミニ解説、街角インタビュー、独話の方言・会話などさまざまな人物の音声や話し方のスタイルに慣れる訓練も行う。レベルとしては中級後半から上級前半を目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	昔話「桃太郎」	昔話「桃太郎」の短編ドラマを教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 丁寧体と普通体、男女の言葉遣い、終助詞、倒置の形、縮約形、敬語など。 漢字同音異義語の聞き取り練習① 音当てクイズ①（鳥類について） 異文化体験談①（日本人） ふるさとの言葉①（関東地方）	姫野　昌子（放送大学教授） 伊東祐郎（東京外国語大学教授） 村田　年（慶應義塾大学教授） 藤森弘子（東京外国語大学助教授）	姫野昌子（放送大学教授） 伊東祐郎（東京外国語大学教授）
2	昔話「浦島太郎」	昔話「浦島太郎」の短編ドラマを教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習② 音当てクイズ②（虫類について） 異文化体験談②（日本人） ふるさとの言葉②（中部地方）	同　上	同　上
3	昔話「鶴の恩返し」	昔話「鶴の恩返し」の短編ドラマを教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習③ 音当てクイズ③（気象について） 異文化体験談③（日本人） ふるさとの言葉③（中部地方）	同　上	同　上
4	昔話「わらしべ長者」	昔話「わらしべ長者」の短編ドラマを教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習④ 音当てクイズ④（自然について） 異文化体験談④（日本人） ふるさとの言葉④（中部地方）	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	昔話「かぐや姫」	昔話「かぐや姫」の短編ドラマを教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑤ 音当てクイズ⑤（植物について） 異文化体験談⑤（日本人） ふるさとの言葉⑤（中国地方）	姫野　昌子 伊東祐郎 村田　年 藤森弘子	姫野昌子 伊東祐郎
6	短編ドラマ「キャベツ」	短編ドラマ「キャベツ」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑥ 音当てクイズ⑥（人体について） 異文化体験談⑥（外国人） ふるさとの言葉⑥（四国地方）	同上	同上
7	短編ドラマ「桜、舞う」	短編ドラマ「桜、舞う」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑦ 音当てクイズ⑦（通信機器について） 異文化体験談⑦（外国人） ふるさとの言葉⑦（九州地方）	同上	同上
8	短編ドラマ「症候群」	短編ドラマ「症候群」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑧ 音当てクイズ⑧（鳥類について） 街角インタビュー① ふるさとの言葉⑧（九州地方）	同上	同上
9	短編ドラマ「大人免許」	短編ドラマ「大人免許」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑨ 音当てクイズ⑨（楽器について） 街角インタビュー② ふるさとの言葉⑨（沖縄地方）	同上	同上
10	短編ドラマ「最終面接」	短編ドラマ「最終面接」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑩ 音当てクイズ⑩（電波について） 街角インタビュー③ ふるさとの言葉⑩（東北地方）	同上	同上
11	短編ドラマ「仲間たち」	短編ドラマ「仲間たち」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑪ 音当てクイズ⑪（火薬類について） 街角インタビュー④ ふるさとの言葉⑪（東北地方）	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	短編ドラマ「お父さん」	短編ドラマ「お父さん」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑫ 音当てクイズ⑫（哺乳類について） 街角インタビュー⑤ ふるさとの言葉⑫（関西地方）	姫野　昌子 伊東祐郎 村田　年 藤森弘子	姫野　昌子 伊東祐郎
13	短編ドラマ「子どもの電話相談室」	短編ドラマ「子どもの電話相談室」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑬ 音当てクイズ⑬（乗り物について） 街角インタビュー⑥ ふるさとの言葉⑬（関西地方）	同上	同上
14	短編ドラマ「夫の秘密」	短編ドラマ「夫の秘密」を教材として話し言葉特有の表現を学ぶ。 漢字同音異義語の聞き取り練習⑭ 音当てクイズ⑭（自然エネルギーについて） 街角インタビュー⑦ ふるさとの言葉⑭（四国地方）	同上	同上
15	まとめ	総復習 会話表現のまとめ 文法事項のまとめ	同上	姫野昌子 伊東祐郎 村田　年 藤森弘子

＝保健体育（'０５）＝（TV）
－健康志向と競技志向の運動－

〔主任講師：　宮下　充正（放送大学教授）〕
〔主任講師：　臼井　永男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

アメリカの大学における教養課程のカリキュラムの必須科目としてあった Health and Physical Education が「保健体育」という科目として、わが国の新制大学に導入されて以来、半世紀が経過した。その間、わが国では知育、徳育、体育といわれた中国語の“体育”に代わって、ヨーロッパ語の“スポーツ”という言葉が生活の中に広く定着し始めてしまった。

この講義では、そのような“スポーツ”という言葉の普及という現状を踏まえ、「保健体育」に「健康志向と競技志向の運動」という副題をつけて、身体運動にかかわる現代的問題を幅広く取り上げ解説することにした。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名	放送担当講師名
1	「健康志向型運動」と「競技志向型運動」	スポーツという言葉が普及されるにつれ、健康スポーツ、生涯スポーツ、障害者（アダプテッド）スポーツ、軽スポーツ、レクリエーショナルスポーツなど、さまざまな言葉がかぶせられて使われるようになった。本章では、例えば“歩く”という身体運動でも、散歩を“健康志向型運動”とみなし、競歩を“競技志向型運動”とはっきり区分するという立場に立って、両者のあるべき姿を解説するとともに、本講義の概要を紹介する。	宮下　充正（放送大学教授）	宮下　充正（放送大学教授）
2	欧米諸国でのスポーツの歴史	それぞれの民族には、身体的能力を競い合う独自の伝統があった。これらの伝統的催事を紹介するとともに、古代オリンピックで行われたスポーツ、近代スポーツが発祥したヨーロッパのスポーツ、アメリカに渡って変貌したスポーツ、そして、巨大化した現代オリンピックに包含されるスポーツを、文化人類学的に解説する。	寒川　恒夫（早稲田大学教授）	寒川　恒夫（早稲田大学教授）
3	わが国でのスポーツの歴史	明治維新以前のわが国においても、スポーツとは呼ばれなかったが技を競う身体運動が存在してきた。それらの特徴を紹介するとともに、その後明治時代に導入された欧米のスポーツが独自の形でわが国に定着してきた過程を解説し、それらがもたらした問題点を指摘する。	寒川　恒夫（早稲田大学教授）	寒川　恒夫（早稲田大学教授）
4	運動するからだのエナジェティックス	身体運動は、神経・筋系および筋・骨格系の働きによって発現される。その筋活動発現の機構と、筋活動を一定時間保持するためのエネルギー補給（呼吸循環系および代謝系）の仕組みについて解説する。	田畑　泉（国立健康栄養研究所部長）	田畑　泉（国立健康栄養研究所部長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名	放送担当講師名
5	体力向上の条件－トレーニングの原理－	体力とは、からだが外部に働きかける能力であり、継続時間が長いときに発揮される“ねばり強さ”と瞬発的に発揮される“力強さ”とに大別される。トレーニングとは、運動するという生理的負荷をからだにかけて、体力を向上させることを意味する。“ねばり強さ”は、エアロビック・エクササイズとアネロビック・エクササイズとによって、“力強さ”はレジスタンス・エクササイズによって向上がはかられる。これらの生理学的背景と具体的方法を解説する。	臼井　永男(放送大学助教授)	臼井　永男(放送大学助教授)
6	運動するからだのバイオメカニクス	バイオメカニクスとは、生命を意味する bio と、力学を意味する mechanics とが合成された言葉である。身体運動の遂行に当たって、からだの大きさ、重さ、あるいはまた、使用する用具（ボール、ラケットなど）の大きさ、重さとの力学的関係が合目的的であることが望ましい。ここでは代表的身体運動をいくつか取り上げ、力学的にみて合理的な働きについて解説する。	平野　裕一（東京大学大学院助教授）	平野　裕一（東京大学大学院助教授）
7	運動技能向上の条件－練習の原理－	脳・神経系のネットワークの働きによって調節される身体運動は、反射動作、自動動作、随意動作とに分けられる。そして、反射動作を除いて、脳・神経系のネットワークは練習によって変化し、運動技能が向上する。その変化がパフォーマンス(運動成果)として、どのような形で表出されるかを解説する。	平野　裕一（東京大学大学院助教授）	平野　裕一（東京大学大学院助教授）
8	運動実践とこころとの関連	“あがり”と呼ばれることがあるように、身体運動の遂行にあたって、こころの状態はそのパフォーマンスに大きく影響を与える。また、定期的な運動実践が認知能力など高次神経活動に好ましい影響をもたらすことが明らかにされつつある。身体運動は、脳・神経系のさまざまなネットワークを動員して外部へ働きかけ、同時平行して脳・神経系は外部からの情報を受容し活性化される。これら身体運動と高次神経活動との関連を、さまざまな研究成果を紹介しながら解説する。	宮下　充正（放送大学教授）	宮下　充正（放送大学教授）
9	成長を促進させる運動実践	スポーツに熱中する子どもでは、運動のやり過ぎによって引き起こされる障害が多く見られ警告が発せられている。この点について、いくつかの事例を紹介する。他方で、一般の子どもに見られる運動不足が、からだの成長を阻害していることは明らかである。“たくみさ”、“ねばり強さ”、“力強さ”の発達を促がすために、年齢に応じた適切な運動実践が必要であることを解説する。	臼井　永男(放送大学助教授)	臼井　永男(放送大学助教授)
10	運動不足を解消する運動実践	生活習慣病と呼ばれる異常は、機械化、省力化によってもたらされた運動不足が主たる原因の１つと考えられる。すでに、多くの中年はそのことを知って運動を実践し始めているが、必ずしも適正でない場合が見られる。ここでは、いくつかの縦断的研究を紹介しながら、中年にとっての好ましい運動実践の方法を提示する。	田畑　泉（国立健康栄養研究所部長）	田畑　泉（国立健康栄養研究所部長）
11	社会的弱者と運動（スポーツ）実践	社会的弱者と呼ばれる子ども、女性、高齢者、障害者は、ともすれば運動・スポーツとは疎遠な存在であった。しかし、運動の科学がもたらした知見は、女性の更年期障害を軽減し、高齢者の老化を抑制し、安全な用具や施設の開発を促進させた。また、ベテランズ、マスターズ、パラリンピックなどの競技会は、社会的弱者に対する従来の社会的偏見を消失させた。ここでは、社会的弱者との融合を踏まえ、それぞれに適した運動実践の方法を提示する。	海老原　修（横浜国立大学教授）	海老原　修（横浜国立大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名	放送担当講師名
12	スポーツ用具と運動施設	スポーツが盛んになると、それぞれに必要とされる用具の開発が要求される。スポーツの用具メーカーは、その要求に応じられるように用具に改良を加える。いくつかのスポーツ用具を選び、製造と販売という観点から解説を加える。他方でわが国の運動施設の整備が進行しているが、「健康志向型運動」用なのか、「競技志向用型運動」用なのか明確でないため、結果的に双方が使いづらく、余分な経費がかかる場合が多くみられる。運動施設の構造とその運営のあり方を解説する。	間野　義之（早稲田大学助教授）	間野　義之（早稲田大学助教授）
13	スポーツ・運動関連公益法人	わが国では、「健康志向型運動」は厚生労働省が、「競技志向型運動」は文部科学省がそれぞれ主導するという、縦割り行政が続いている。そして、それぞれの省が認可する公益法人が両省の外郭団体として細かい行政指導の役割をはたしている。本章では、代表的な公益法人である（財）健康体力づくり事業財団、（財）日本体育協会、（財）日本オリンピック委員会を取り上げ、その活動状況を紹介するとともに、問題点を指摘する。	間野　義之（早稲田大学助教授）	間野　義之（早稲田大学助教授）
14	総合型地域スポーツクラブ	わが国の学校に所属するスポーツクラブ、そして企業が支援するスポーツチームは、これまでのような機能を果せなくなって、文部科学省は“総合型地域スポーツクラブ”という名称の下に、スポーツクラブのあり方を、根本的に見直す施策を提案した。すでに、いくつかのモデルクラブが指定され、活動が始まっている。それらの事例を紹介しながら、地域に根ざした総合型スポーツクラブのあり方を論じる。	海老原　修（横浜国立大学教授）	海老原　修（横浜国立大学教授）
15	望まれる運動実践－米国を参考にして－	人工物に取り囲まれて生活する21世紀は、多くの人たちにとってからだとこころの健康の保持増進のための適当な運動実践は不可欠である。歴史的背景と運動生理学的知見に基づき、スポーツの先進国である米国の実体を参考にして、わが国での望まれる運動実践について提案する。	宮下　充正（放送大学教授）	宮下　充正（放送大学教授）

＝日本法文化の形成（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　六本　佳平　（放送大学特任教授）〕

全体のねらい

「法」を実定法学の各分野に細分化された専門知識としてとらえるのではなく、政治・経済・文化など社会統合の主要な構造部門のひとつとして社会科学的認識の対象として捉え、日本の法システムの特徴と機能を歴史的に考察する。内容としては、法の概念や法機構の基本構造の理論的な説明を行った後、まず日本の近代の法文化が、近代国民国家の構築という政治的な優先課題に深く刻印されつつ形成されてきた歴史的経緯をたどり、ついで近年その到達点からの更なる構造変容を期した司法制度改革の努力が、ルール志向性という普遍的な課題と日本的な特徴とを交錯して追求される様を明らかにし、法システムの日本的なあり方とは果たして何かを探究する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	*[序――]*法と歴史と文化	「法」を「法システム」としてとらえること、そのあり方が文化によって基底的な影響をうけると同時に、政治・経済・社会さらに文化自体とも相互に影響しあうこと、さらにその社会の歴史的な背景が制度の慣性として基本的な意義をもつことを概説し、日本の法文化を固定視することなく可塑視すべきことを述べる。	六本　佳平（放送大学特任教授）	六本　佳平（放送大学特任教授）
2	歴史的与件	２章ないし６章は、近代日本法文化の形成過程を扱う。近代日本法文化の歴史的前提となった、明治法システムの特色について、また、幕末の法体制、法状況、開国をめぐる法的な必要などについて触れ、日本の法的遺産としてどのような歴史的与件が明治維新の前後の政治過程で動員されたかを見る。	同　上	同　上
3	開国の政治と法	明治維新の政治過程および新政府による近代国家構造の新たな設計において、法体制の構築がどのようになされたか、特に司法制度の構築がどのような政治過程のなかで行われ、国家的統一優先の政治課題によってどのような影響を受けることになったかを見る。	同　上	同　上
4	明治統治機構の形成	維新政府による統治体制の構築とその中で生まれた自由民権運動、およびそれに対抗して制定された明治憲法の制定過程、さらに法典編纂と私的所有制度の導入について述べる。	同　上	同　上
5	法律家の形成	明治法システムの形成において要のひとつとなる法律家制度の導入と司法官（裁判官と検察官）を中心とする法律家養成制度の構築、そして対抗勢力と見なされた代言人・弁護士の発達にふれる。さらに、国立大学および私立学校における法学教育の始まりにもふれる。	同　上	同　上
6	産業社会化と法システム	司法の独立の観念に影響を与えた大津事件にふれた後、第一次大戦後の国内の政治・経済構造の変化と法システムへの影響、小作争議という政治的・法的に大きなインパクトを持つ出来事が法の変動を要求したのに対して法学や法実務が対応した過程からどうような法文化的特色が強化されたかを探る。	同　上	同　上
7	日本国憲法と法システム	７章ないし 11 章では、近代法文化の変容を扱う。第二次大戦後の戦後改革が、法律革命による生きた法文化の変革を生むことが期待されたのに対して、50 年経過後にその成果が問われることなり、再び根本的な構造変革が要求されるに至った様相を法文化の変容という視点からに焦点を合わせて描く。この章では、日本国憲法の成立過程を顧み、新たな司法制度を見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	法文化論	伝統的法文化が権利意識の欠如として捉えられたが、ルール志向の欠如とし見るべきであったこと、およびそのことの社会生活上および法制度上の含意を、第二次大戦後の法と社会に関する思惟を支配した川島武宜の法文化論を中心に検討する。	六本　佳平	六本　佳平
9	法律家と法文化	法システムにおける法律家の役割について概観した後、法学教育、司法試験、法曹三者、準法律家について日本法システムの他国に対する特徴について検討し、その形成や改革にも法文化的な面を探る。	同　上	同　上
10	紛争処理と法文化	諸種の法的・法外的紛争の処理方法や、一般の個人や組織の処理行動に日本的特色が、どのようなかたちでのこり、また変容を遂げてきたかを探求する。	同　上	同　上
11	司法過程と法文化	社会の構成員を社会の要求する行為パターンに従わせる社会統制の諸手段のうちで法システムが占める位置、両者の関係、民事および刑事司法の日本的特色とされるものの社会的条件、その有効性、近年の変化などについて述べる。	同　上	同　上
12	家族をめぐる法文化――離婚と相続	12章ないし14章は、「法政策と法文化」をテーマとして、いくつかの法領域からいくつかの法制度を例としてとりあげ、その法文化的特色を明らかにする。この章では、家族観念、親子関係、相続慣行、婚姻における男女平等などを取り上げる。	同　上	同　上
13	土地利用と法文化――借地権と入会権	近代法秩序の根幹をなすもう一つの制度である土地の所有とその利用の法制度について、明治政府によって近代的私的土地所有制度が導入された経緯を説明し、ついで、より具体的に借地権と入会権について伝統的な法文化とその近代法システムの下での機能変化について述べる。	同　上	同　上
14	企業と雇用の法文化	日本の企業の形成を明治初期に遡って顧みた後に、日本の企業の構造および雇用慣行の特徴、それへの法システムの対応、経済変動によるその近年の流動化、それへの法システムの対応、その将来について論ずる。	同　上	同　上
15	総括と展望	明治以来築き上げられてきた日本の法システムが、その第一段階の任務をある程度果たしたとして、次の段階で、国民により開かれ、社会により応答的なシステムとして、流動化する社会の要求に応えていけるか、そして新たな活力ある日本法文化を形成していけるかという観点から総括する。	同　上	同　上

＝世界の産業再編成（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　森谷　正規（放送大学教授）〕

全体のねらい

米国の産業活性化、ＥＵの統合による産業発展、中国などアジアの工業国としての台頭によって、産業列国の競合が激しくなり、世界の産業は激動の時代に入っている。自動車、電機、鉄鋼などの産業において、国境を越えた合併や提携が急速に進んでいる。海外の他企業への生産委託も広がっている。世界の産業構造は大変革して再編成されていくが、そのなかで日本企業はいかなるグローバルな経営戦略を立てるべきかがきわめて重要な課題になっている。この産業構造の再編成について、現状を把握し将来を展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	産業列国の激しい競合	米国のITやバイオ、ナノテクノロジーなど技術革新への挑戦、EUの統合と中欧（ハンガリー、チェコ、ポーランド）の工業発展、アジア諸国の先端産業への参入、中国の急速な工業化の躍進など、世界の産業が激動している状況を明らかにし、将来を見通す。	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
2	日本の産業の厳しい状況	国内需要の不振、輸出競争力の低下、経済、社会の低迷など、日本の産業を巡る状況はたいへん厳しい。１９７０－８０年代の大発展の時代といかに変わったのかを明らかにして、将来のありかたを探る。	同　上	同　上
3	国際経営戦略の方向	国際的な企業合併、技術開発、生産、販売における提携、他企業への生産委託、中国、中欧などの新たな地域への工場進出など、各国の企業において急速に進んでいる新しい国際戦略の展開について、現状を把握し、将来の方向を見定める。	同　上	同　上
4	コンピュータ・情報機器産業の再編成	IBMの堅調な発展、米国のパソコン企業の大合併、パソコンの生産委託の急増と台湾から中国への急激な移転、携帯情報機器における日米の激烈な競争などを基に、情報化とともに急速に展開するこの産業のこれからの変革と再編成の方向を探る。	同　上	同　上
5	家電製品産業の再編成	三洋電機と中国の家電企業海爾との提携は、世界の家電王国日本に激動をもたらす。日本は超大画面テレビなど革新技術でのリードを目指すが、韓国の追い上げは激しい。アジアにおいて家電産業がいかに展開するかを見通して、変革と再編成の方向を探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	電子部品産業の再編成	超 LSI、液晶で韓国、台湾がリードしているが、日本は次世代半導体での復権を目指す。これから各国の間での連携と競争が交錯する。中国に対して、日本、米国、EU、韓国、台湾がいかに連携を働きかけて組むようになるのかが戦略のカギになる。	森谷　正規	森谷　正規
7	ソフト・サービス産業の再編成	ソフトはマイクロソフトとインテルの“ウィンテル”王国が崩れ始めて、激動が生じている。インドに続いて中国がソフトの供給国として急速に伸びる。ソフトに後れている日本は中国といかに連携出来るのか。 “携帯電話では、サービス企業が国際的に展開していて、その合従連衡が進んでいる。	同　上	同　上
8	自動車産業の開発における再編成	自動車は、環境破壊を防ぐためのハイブリッドカー、燃料電池自動車の開発、実用化によって大きく変わろうとしている。技術開発において国境を超えた提携が見られており、その新型車の開発、生産がいかに進むかを見通す。	同　上	同　上
9	自動車産業の生産における再編成	アジアが乗用車の生産と需要の拡大で、自動車産業に参入してくる。タイは東南アジアでの自動車生産のセンターになってきた。中国では、巨大な潜在市場を求めて日、米、欧が提携を争っている。その自動車の生産における激変の行方を明らかにする。	同　上	同　上
10	造船、航空、宇宙産業の再編成	造船業は、韓国との競争が激しく、日本は企業統合を進めている。その競合に中国が参入してくる。航空は、欧州のエアバスが勢力を伸ばしているが、日本も欧米の開発、生産に加わっている。宇宙では、欧州が衛星打ち上げでリードしており、日本も参入する。	同　上	同　上
11	生産機械産業の再編成	工作機械は日本がトップだが、欧州勢が復権している。中国もこれから生産を拡大する。金型では、電機、自動車メーカーの中国への生産移転とともに、中国が着実に力を伸ばす。半導体・FDP 製造装置では日本がリードしているが、競争は激化していく。	同　上	同　上
12	エネルギー産業の再編成	環境破壊防止のため、エネルギー産業は電力、ガス、石油の境界を超えて、国境を超えて、提携を進めている。日本のエネルギー産業にも海外からの進出が、見られるようになり、また電力、ガスの提携が生じている。その再編成の状況を明らかにする。	佐々木　弘（放送大学教授）	佐々木　弘（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	鉄鋼産業の再編成	中国、韓国などの後発国が生産設備を増強して、世界全体で大きな設備過剰に陥っている。日本では、競争力を確保するため二つのグループへの統合が進んでいる。米国の鉄鋼業への支援は進めて来たが、これから中国、韓国との提携が必須となる。	森谷　正規	森谷　正規
14	化学産業の再編成	米国、EU の化学産業は、バイオ、医薬品へ展開しているが、膨大な研究開発投資が必要であるため、国境を超えた提携が模索されている。劣勢である日本は、合併による規模拡大を進め、技術開発に成果を上げて、国際的な競争力を高めることが出来るのか。	東　千秋（放送大学助教授）	東　千秋（放送大学助教授）
15	新しい国際的な産業構造へ	産業全体の大きな変革と再編成を総括して、世界の新しい産業構造の将来の姿を描き、企業の国際経営戦略のありかたを探る。その中で日本の産業、企業がいかに発展していくのかを見通す。	森谷　正規	森谷　正規

＝計算科学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

理論と実験というこれまでの科学の方法に加えて、新しく台頭し、今や主要な方法の一つに成長したものに計算科学がある。計算科学 (computational science) はしばしば計算機科学 (computer science) と混同されるが、後者が計算や通信をする機械そのものと計算のアルゴリズム（手順）を問題にするのに対し、前者は計算という手法をとおして現実の世界を探求し技術を展開していく営みである。それは、これまでの数学によって解析的に扱うことは不可能であった諸問題にまで人類の活動範囲を広げ、非線形的に強く相互作用し合っているシステムの振舞を解明しつつある。この科目では、計算科学によって初めて解明することが可能になったものをとりあげ、計算科学が近未来的に持つ意義を探り、どのようなパラダイム転換に通じるかを考える。計算科学の現状については、諸分野における数 10 名の研究者にロケ取材等をとおして協力を得ながら紹介する。計算科学は計算機そのものではなく科学が目的であるが、それを遂行するためには既存の計算機を超える超高速の計算機も、科学者自らが開発しなければならない。そのような営みも紹介する。この講義では、計算科学の詳細よりも、それがもたらしつつあるパラダイム・シフトとその意味に重点をおく。文科系の履修者には、その意義を感じ取ってもらいたい。何段もの階層にわたって相互作用のある複雑な非線形システムが解明出来るようになることや、そこで培われるシステムの理解のしかたの進歩は、社会や人間を科学的に理解する方法論にもつながっていくと思われるからである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	計算科学とは	この科目の目的を述べ、計算科学と計算機科学の違いを考え、全体の導入とする。先ずは、直感にもっとも訴えやすい航空機や列車などの数値流体力学を例にして、計算科学で何が出来るかを理解してもらう。	杉本　大一郎（放送大学教授）	杉本　大一郎（放送大学教授）
2	要素的問題と大自由度問題	もう１つの分かりやすい例として、技術と工学の例を考える。近年の計算機の発達によって、個々の要素については比較的簡単に実用的な設計をすることが可能になった。それに対し大規模なシステムでは、それを要素に分けていっても何千万個の変数（自由度）によらないと記述したり解析したりすることが出来ないものがある。大規模計算力学の例で論ずる。	同　上	同　上
3	計算科学と非線形の世界	計算科学の最も基本的な特徴は非線形問題を扱えるということである。要素間の相互作用が本質的なシステムは数理的には非線形になるが、そのような数学的構造を持つものは、解析的に（数式だけで）解明する数学がないからである。計算科学でそのような問題が扱えるようになって、どのように新しいパラダイムが開けることになったかを、歴史的な経過も含めて考える。	同　上	同　上
4	超大型計算機による地球のシミュレーション	汎用計算計算機では世界最大・最高速の計算機システムが日本で構築された。地球シミュレーターである。主な応用は気象、海洋とそれらの長期的変動に関わる気候の問題である。地球という回転している球の表面で、しかも高さの方向に物理状態が大きく変化している問題であるうえに、局地的な渦から地球全域の流れまでが相互に作用し合っている問題への取り組みである。	同　上	同　上
5	計算機で素粒子と宇宙を探る	陽子や中性子などの素粒子もそれより細かい構造を持っており、クォークによって記述される。しかしクォークは実験によって単独で取り出すことが出来ないので、その研究は計算科学と実験の併用によるしかない。格子 QCD (Quantum Chromo-Dynamics)によるそのような研究は、相対性理論の効果もあって大自由度の計算になる。そのために設計された計算機は、宇宙の比較的初期や物性物理学の研究にも使われている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	科学研究のために作る計算機	筑波大学計算物理学研究センターは、前回に述べた格子QCDの計算のために調整された計算機QCDPAXを、企業と協力しながら製作した。それは連続体用の超高速並列計算機である。いっぽう、東京大学は多数の天体が互いに重力で相互作用しているシステムで形態形成が起こり、進化する様子を研究するために、多粒子系用の超並列計算機GRAPEを開発した。後者は特定目的用の計算機ではあるが、この講義を製作している2002年現在、世界最高速の計算機になっている。	杉本　大一郎	杉本　大一郎
7	異なる対象と共通の論理	一見、異なるもののように見えるシステムどうし、またスケールが全く異なる現象どうしでも、数理構造的に見ると共通のものだという場合がある。ここでは、核融合プラズマ、太陽表面の活動現象、天体の誕生と進化の研究を比較する。また、前回に述べた天体用計算機GRAPEの論理構造も、第9回に述べるたんぱく質などの分子動力学の問題に移し変えることができる。	同　上	同　上
8	ミクロとマクロの橋渡し	われわれの見るマクロな物質の性質は、それを構成する原子分子レベルの物理的性質の反映である。しかし10の23乗個という、無限個と言ってもいいほどの分子による総合的性質をどのようにして計算して、マクロな性質につなげればよいのであろうか。モンテカルロ法などに言及しながら考える。実際に計算出来るのは要素の数が有限のものなのだが、それが現実のものにどのようにスケーリングされ得るかについても考える。	堂寺　知成（京都大学大学院助教授）	堂寺　知成（京都大学大学院助教授）
9	たんぱく質の立体構造の探求	たんぱく質はアミノ酸が鎖状につながったものであるが、その鎖が自分自身の内部の相互作用によって折り畳まれ、ある種の立体構造を持つようになる。そして、その立体構造がたんぱく質の生命科学的な機能を規定する。その様子は分子動力学や（変形された）モンテカルロ法によって求められる。この問題は、極めて複雑なエネルギー地形(landscape)をもつシステムで、エネルギー最小値とその状態を求めるという意味で、一般性をもつ。	杉本　大一郎	杉本　大一郎
10	量子力学の世界と物性	原子・分子のミクロの世界は量子力学によって記述され、位置と運動量が同時に正確には定まらないという不確定性原理が主役を演ずる。そのような不確定性を含む現象はどのようにシミュレーションされるであろうか。典型的な例として、量子効果が強く現われる液体や固体の水素の問題と、相互作用が本質的な強相関電子系において古い秩序の競合が新しい秩序へ転移する問題を考える。	同　上	同　上
11	計算科学国際学会	日本学術振興会が行って来た未来開拓学術研究推進事業のなかで、その1つのテーマとして「計算科学」の分野が取り上げられた。その成果に関連して開催された国際学会の出席者から、計算科学に関する成果と見解を伺う。	同　上	同　上
12	計算機とデータのグリッド	各研究所等にある計算機と、実験やそこで得られるデータを世界規模でグリッド（格子）状に結合し、計算機科学と共に計算科学を進めるというプロジェクトが進行しつつある。それによって何が出来るか、どのような新しいパラダイムが開けるかについて考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	外国での取り組み	計算科学に新しい手法とその組織的実行を導入するのに、高エネルギー物理学の貢献は大きい。格子 QCD の研究を中心にこの問題を取り上げ、紹介する。	杉本　大一郎	杉本　大一郎
14	計算科学のポリシー	計算科学によって、今後の科学研究にどのような新しい局面が開かれるであろうか。またそのためには、どのようなポリシーが必要であろうか。この問題について、自由に考える。	同　上	同　上
15	まとめと計算科学の将来	計算科学の将来と夢について、自由に語るパネル・ディスカッション。	同　上	同　上

＝使える数理リテラシー（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

ふつうの数学の講義では、きちんとした体系を作ること、それを証明することに重点がおかれる。それは数学の精神を理解させる教育になっているとしても、現実の問題に数理論理を使えるようにする教育とは異なっているようである。この講義は、数理を言語として活用する、すなわち物事を表現し、情報を伝え、論理操作を行えるようになること、まとめて言うとリテラシーとして使えるようになることを目指す。そのためには、数式等の証明よりも、意味を読み取り表現することのほうが大切になる。われわれが日常使っている自然言語のリテラシーに数理リテラシーが加わることによって、文化的・知的営為の領域が倍加されるであろう。この意味で、数理リテラシーを必ずしも日常的に使っていない文科系の学生にこそ学んで欲しい。これは新しいタイプの講義を拓く試みのひとつである。内容的には、誰にも分かる中等教育レベルから始めて、講義終了時点では、リテラシーの大筋としては大学前期課程修了程度に至るまで、この科目だけでマスター出来るようにすることを試みる。理科系の大学院生にとっても、常日頃使っている数理論理に新しい理解を付け加えることになるだろう。言い換えると、受講者それぞれの予備知識に応じて、それなりの理解が得られるような構成にしたつもりである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	加え合わすことの出来るものと出来ないもの	自然言語と数理言語 ― この科目のねらい ― 数学と数理リテラシーの違い 数と量	杉本　大一郎（放送大学教授）	杉本　大一郎（放送大学教授）
2	数と量の表現	数量の表現 量どうしの掛け算 量どうしの割算から生み出される多様な概念の世界	同　上	同　上
3	数の数え方の２とおり	足し算的数え方と掛け算的数え方 掛け算を足し算に変換する 対数とその意味 掛け算を足し算で実行する計算尺	同　上	同　上
4	差が大切な事柄と比が大切な事柄	比と差のどちらが大切かは問題と文脈による 比を考えるときのゼロ点の意味 差が大切なときのグラフによる表現 縦軸・横軸には適切な概念を 比が大切なときのグラフによる表現	同　上	同　上
5	大きいと小さい	大小は基準との比較できまる 対数で表すときの大小 無限に大きいとか小さいの意味と意義 大きさの程度の推定	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	関数と変化の速さ	数量の間の関係を表す関数 1次関数と数理言語による意味の表現 比例を超える依存性を持つ関数 べき関数 指数関数	杉本　大一郎	杉本　大一郎
7	平均変化率と微分変化率	平均速度と瞬間速度 微分と経済学の限界効用理論 関数の微分 関数のテーラー展開 役に立つ微分の考え方	同　上	同　上
8	細かく分けて足し合わせる積分	部分の和としての全体 積分と微分の関係 積の微分と積分 三角関数の微分と積分 複素数平面による表現	同　上	同　上
9	微分と積分の使われ方	物事を最適化する 効果を寄せ集める 局所的なものから全体を解く 境界条件が物事を決める	同　上	同　上
10	指数関数とべき関数	指数関数とべき関数の本質的な違い 具体例における指数関数とべき関数の意味の違い 指数関数とフィードバック 安定・不安定・振動	同　上	同　上
11	重ね合わせの出来るものと出来ないもの	波とその表現 波の重ね合わせ 線形性と重ね合わせ 重ね合わせの出来ない問題 数学的取扱いについて	同　上	同　上
12	物事を見るアスペクト	実在と座標系 座標系の回転と行列による表現 長円の方程式を適切な座標系で見る 連立1次方程式の解を求めることの意味	同　上	同　上
13	相関という概念	統計データの間の相関係数 相関という概念とその意味 いろいろな相関	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	原因と結果の葛藤	相関の表し方 非線形の摂動論的取扱い 原因への反作用が大きい非線形問題	杉本　大一郎	杉本　大一郎
15	数学と数理リテラシー	数学の精神か数理リテラシーか ゲーデルの完全性定理と不完全性定理 公理という証明のできないもの １つの事柄の２つの側面 無限大ということ 数学者と科学者の違いはどう緩和される	同　上	同　上

＝ゲノム生物学（‘０３）＝（TV）

－生命科学革命と２１世紀の社会－

〔主任講師：　岩槻　　邦男（放送大学教授）〕
〔主任講師：　近藤　喜代太郎（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

ヒトゲノムに関する話題は人々のゲノムへの関心を惹いている。ヒトのゲノムが読み取られたとはどういうことか、何が分かり、何が分かっていないのか、多様な生物のゲノムの差や共通性は何を意味するかなど、生物学の最先端の話題と問題点を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	メンデルからゲノム生物学へ	遺伝学の歴史を簡単に紹介し、生命科学における遺伝学、ゲノム生物学の現在像を描き出す。20世紀になって、遺伝学が生命科学の中心を占めるようになったのはなぜか、生命を考える際ゲノムがその中核の課題となるのはなぜかを説明する。	岩槻　邦男（放送大学教授）	岩槻　邦男（放送大学教授）
2	親から子への生命の伝達	遺伝子、染色体などが細胞という構造に閉じられた系のうちで、生命は世代をこえてどのように伝達され、子の世代でどのように発現するかを紹介する。生物も物質の集合体であるが、生きていないものと何が違うかを説明する。	星　元紀（慶應義塾大学教授）	星　元紀（慶應義塾大学教授）
3	疾病の成立と遺伝	外傷などを除いて、ほとんどの疾病は遺伝と環境の要因群の交絡のなかでおきる。本章では単因子遺伝、染色体異常、外的要因への遺伝的素因、外因子遺伝など、若干の場合に分けて、疾病の成立における遺伝の役割を述べる。	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
4	遺伝子診断と遺伝子治療	疾病の機序が遺伝子レベルまで解明できた場合、診断もDNAの分析で行われ、ある年令で起きる疾病でも誕生時に診断でき、遺伝子の組み合わせを用いて生活習慣病への素因遺伝子、性格、才能などもある程度の確率で予測ができる。また遺伝性の疾病では、分子レベルで罹患の過程に拮抗する操作を加えて治療することもできる。これらは医療の新分野であるが、倫理的に問題も多い。	羽田　明（千葉大学教授）	羽田　明（千葉大学教授）
5	生殖医療	遺伝子、細胞技術の進歩にともなって、それまで自然の摂理だった妊娠・出産が人の意志と技術の分野となった。このことは不妊医療を革新したが、一方では従来の価値観との衝突を起こしている。	鈴森　薫（名古屋市立大学大学院教授）	鈴森　薫（名古屋市立大学大学院教授）
6	カウンセリングと予知医学への応用	本章では遺伝の問題に悩む個人の求めに応ずる遺伝カウンセリング、遺伝学の技術・知識・予防的応用などについて述べ、遺伝学の医学的応用の将来を展望する。	羽田　明	羽田　明
7	微生物学の生殖と遺伝	20世紀の後半、生物科学は大腸菌の分子遺伝学をバネにして飛躍的に発展したと言える。遺伝学の発展によって何がわかり、何が分かっていないかを紹介する。	東江　昭夫（東京大学大学院教授）	東江　昭夫（東京大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	植物の生殖と遺伝	木原均らのコムギの先祖の探索以来、ゲノム解析は生物多様性の研究にも適用されたし、資源植物の探索の武器でもあった。クローンは植物の基本的な生き方の一様式であり、ヒツジやウシのクローンと植物のクローンはどう違うかも整理する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
9	多細胞体の形成	多細胞生物では、親から引き継いだ遺伝子はどうやって正確に子供を作り出すか、ゲノム生物学が知っている遺伝子のはたらきを紹介する。	星　元紀	星　元紀
10	生物の進化とゲノム生物学	30数億年生きている間に、生命体はずいぶんすがたを変え、進化してきた。本章では生物にとって進化とはどういうことか、ゲノム生物学の立場から進化はどこまで説明できるかを紹介する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
11	バイオインフォーマティクス	ゲノムの解読にあわせて、プロテオミクスや脳科学の分野で、生物科学と情報科学を融合した新しい研究分野が発展しつつある。生物の進化もこのような手法でさらに深く追究されることが期待されており、生命現象に関する既存の情報の集成にも意が注がれている。	星　元紀 岩槻　邦男	星　元紀 岩槻　邦男
12	ポストゲノムの科学	ヒトの全ゲノムが解読された。それで、生命はどこまで解明されたか。分かったこと、分かっていないことを整理し、21世紀の生命科学を考えたい。脳の科学の進歩によって、文明は遺伝学でどこまで解けるか、ホットな話題になっている。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
13	産業とゲノム技術	ゲノム技術は生物学・医学を改革しただけでなく、他の分野でも大きな進歩の可能性を秘めている。一方、技術の進歩が、新しい危険をもたらすことも危惧される。主に薬学、農学について、ゲノム技術の応用について、さらにゲノムに関する特許の問題を論じる。	位田　隆一（京都大学大学院教授）	位田　隆一（京都大学大学院教授）
14	ゲノム技術と倫理・法・社会	ゲノム技術によって開かれた分野は、時に伝統的な価値観に抵触し、多岐にわたる懸念、紛争を生じている。進歩は大きな恩恵をもたらすにせよ、技術と社会との接点にあるこのような問題の解決も大切であり、臓器移植、不妊医療など個別の問題だけでなく、生命技術全体に対する倫理基準の確率が急がれている。	同　上	同　上
15	21世紀社会とゲノム	21世紀はITとバイオの時代ともいわれる。これらの広範囲に及ぶ応用から、21世紀の生活、社会、国家、国際関係のあり方に深い影響を与えるといわれる。前章までの知見に基づいて、ゲノムの科学と技術が21世紀の人類にどのようなインパクトを与え、何をもたらすかを考える。	同　上	同　上

＝都市と人間（‘０３）＝（TV）

〔主任講師（現職名）：倉沢　進　（東京都立大学名誉教授）〕
〔主任講師（現職名）：香山　壽夫（放送大学教授）〕
〔主任講師（現職名）：伊藤　貞夫（放送大学名誉教授）〕

全体のねらい

都市は人類文明の所産であるとともに、人間活動の舞台－制約条件と文化創造の場を形作ってきた。都市と人間のかかわりの諸形態を考察するとともに、その光と影に注目して都市の問題点とその克服のための人間の努力にも目を向ける。各回固有の特徴を持つ一つの都市に焦点を当て、史学、社会学、文学、政治学、建築学、都市計画学など多様な視点から迫る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	都市と文明	四大文明と都市　思考実験　大都市の本質 知識・情報・サービス	倉沢　進 （東京都立大学名誉教授）	倉沢　進 （東京都立大学名誉教授） 伊藤　貞夫 （放送大学名誉教授）
2	アテネ－都市国家と市民	都市国家ポリス　自然環境と領域　住民の身分構成 市民団　学芸の都	伊藤　貞夫 （放送大学名誉教授）	伊藤　貞夫
3	リューベック－ハンザの女王と庶民の暮らし	ハンザの女王　市民自治都市　都市の内部構造 ゲンゲとブーデン　今日に生きる中世の遺産	倉沢　進	倉沢　進
4	シェナー祝祭と地域住民組織	南欧の中世都市　パリオ　コントラーダの変遷 コントラーダと地域社会的結合	同　上	同　上
5	シカゴ－近代大都市の光と影	大都市の衝撃　大都市の異端と典型　社会調査と都市問題 同心円構造とアーバニズム　スラムからネーバーフッドへ	倉沢　進 松本　康 （東京都立大学教授）	倉沢　進 松本　康 （東京都立大学教授）
6	レッチワース－庭園都市の誕生	ハワードの庭園都市の理念とは、どのようなものであったか。それはどのように実現され、今日に至っているか。	香山　壽夫 （放送大学教授） 片木　篤 （名古屋大学教授）	香山　壽夫 （放送大学教授） 片木　篤 （名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	ハムステッド－庭園郊外の理想	庭園郊外の理想と言替えられているロンドン郊外のハムステッドはどのような設計手法でつくられているか。	香山　壽夫 片木　篤	香山　壽夫 片木　篤
8	フィラデルフィア－格子状街区とロウハウス	アメリカの計画都市の原型といわれているフィラデルフィアは、伝統を生かしつつ、大胆な再開発を実行してきた。そして又、21世紀に入って、大学を中心にした新しい開発で注目を集めている。	香山　壽夫	香山　壽夫
9	ナーバス－アメリカの伝統的な近隣住区	アメリカの伝統的な地域共同体はどのように形成され、今日にいたっているか。そこで行われている活発な市民活動の内に、これからの「コンパクト・シティ」のあり方を探る。	同　上	同　上
10	エルサレム－聖地と政治	歴史の重層構造　聖地の中の聖地　政治と聖地 人類の未来形	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
11	北京－皇帝の都城	都城の成立　権威と権力の装置　胡同と四合院　変動する北京と社区建設	倉　沢　進	倉　沢　進
12	京都－都城・平安京	都城の歴史　平安京の構造と特質　羅生門「鬼」	杉森　哲也（放送大学助教授）	杉森　哲也（放送大学助教授）
13	金沢－加賀藩の城下町	城下町の成立　城下町金沢　描かれた金沢　金沢と用水	杉森　哲也	杉森　哲也
14	東京－下町と近代文学	近代化の論理と心情　長谷川時雨の文学的自律 芥川竜之介と大川端　堀辰雄の文学空間	野山　嘉正（放送大学教授）	野山　嘉正（放送大学教授）
15	グローバル化と都市	21世紀都市　グローバル化と世界都市 新しい都市空間	倉沢　進 香山　壽夫	倉沢　進 香山　壽夫

＝中小企業の挑戦（‘０３）＝（TV）

－グローバル化・ハイテク化・高齢化時代のもの造り－

〔主任講師：神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）〕
〔主任講師：中島　尚正（放送大学副学長）〕

全体のねらい

バブル経済の崩壊後、我が国は未曾有の経済的困難に直面しているが、その中でも電機、自動車、機械産業などの金属加工工業は、目覚ましい技術革新を続け、なお強い国際競争力を維持している。それは、組み立てメーカーの優れた技術力と経営能力によるばかりでなく、鋳物、鍛造、金型、切削などの基盤技術を支えてきた多数の優れた中小企業の技術・技能によるところが大きい。しかし、持続的な円高が進むなかで、東南アジア・中国・ベトナムなどの低賃金との競争、先進諸国との貿易摩擦などを克服するために、多くの企業が生産拠点の海外移転と国際調達を、急速に進めざるを得なくなった。その結果、国内産業、特に基盤技術を支えてきた裾野産業の空洞化が進んでいる。さらに、これらの中小企業は、生き残りをかけて、ハイテク技術を導入し、新製品・新製法の開発を進めているが、同時に少子・高齢化による後継者難にも直面している。

この講義では、１９９５年の超円高の進行以来、６年間にわたって神代が続けてきた実態調査研究の成果を集約し、グローバル競争、ハイテク化、少子・高齢化の荒波に挑戦する裾野産業中小企業の技術革新と経営革新の実態を紹介、経済学的・経営学的分析を加えると同時に、塑性工学・機械工学・情報技術分野における中島の専門的技術的知見をも加えて、２１世紀における日本産業生き残りの方向と可能性を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	空洞化の進む鋳物業	イントロ：産業空洞化が進んでいる。とくにこれまでの日本のもの造りを支えてきた中小企業が、グローバル競争、長期不況、高齢化の中で廃業が進んでいる。とくに鋳物など素形財分野で問題が深刻。果たして生き残れるのか。生き残るにはどうしたらよいのか。 川口鋳物業の衰退『キューポラのある町』幕末から続いてきた御鋳物師の廃業、中国に進出した鋳物企業、鋳物の総生産量の減少、近代的大量生産鋳物工場の生産増加：フルモールド工法による大型鋳物の生産、木型を組まずに発泡スチロールで鋳物の模型作り。川口の須崎鋳造の銀川工場（中国寧河回族自治区）ヤマザキマザックの進出	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）
2	中国との貿易と投資	自己革新へ挑戦するものづくり　　アジア太平洋枠組の変動 日中経済関係の拡大発展　　世界の工場・虚像と実像 開国近代化努力の足取り　　日本製造業空洞化の実相	鮫島　敬治（日本経済研究センター研究顧問）	鮫島　敬治（日本経済研究センター研究顧問）
3	日中分業体制の構築	ものづくりの蓄積を近隣の共生へ　開国近代化への資金構造 官僚統制から市場経済へ　日本企業の対中投資の実相　中国の試練と日本の対応	同　上	同　上
4	製造技術の現状と課題	私たちの日常生活や社会活動は、人工物で満たされた環境の中で営まれている。現在の人工物の大半は、工場で大量につくられた工業製品である。製造技術はこの工業製品を作るための技術である。工業製品に囲まれて生活していながら、私たちがその製造のプロセスを知る機会は乏しい。今回は、製造技術の全体的な特色を概観したのち、中小企業の観点からこの技術の現状と課題について説明する。	中島　尚正（放送大学副学長）	中島　尚正（放送大学副学長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	日本の金型技術	日本の金型産業　ものづくりにおける金型の役割　金型の制作法　金型制作における新技術　日本の金型産業の課題　金型産業の生き残り	中川　威雄（東京大学名誉教授）	中川　威雄（東京大学名誉教授）
6	金型のエキスパートシステム	技能と技術　金型磨き作業の特性解析　金型磨き作業支援エキスパートシステム　技能の体系化	三好　隆志（大阪大学教授）	三好　隆志（大阪大学教授）
7	中小企業再生のためのＣＡＤ／ＣＡＭ／CAE	CAD／CAM／CAE の現状を知る　中小企業活性化の可能性　企業再生へのアプローチ　技術開発支援ソフトウエア	大須賀　節雄（東京大学名誉教授）	大須賀　節雄（東京大学名誉教授）
8	熟練技能に頼らない製造技術	熟練技能に大きく依存していたものつくりを、熟練技能に頼らなくても済むものつくりにするためにはどうすればよいか。このことは、中小企業の活性化にどのように寄与するのか。今回は、熟練技能に依存しないものつくりの試みとして、次の２つを取り上げて説明する。 １）金型加工を対象として熟練技能者が保有する技能を客観化して誰でも使える技術にする試み。 ２）体にぴったり合った製品をつくるための技術開発の試み。	中島　尚正（放送大学副学長）	中島　尚正（放送大学副学長）
9	岐路に立つ金型産業	わが国金型産業の動向　国内で健闘する金型企業 オギハラはどこへ行く　冷間鍛造金型のアカマツフォーシス 多角化をはかる	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）
10	生き残りをかける地場産業	新潟県新潟、燕三条の地場産業衰退の実態：洋食器から形状記憶プラスチック will への転換を図った青芳製作所。マグネシューム合金の深絞りプレス加工で地元企業との共生「この指止まれ」を目指すモリテック。ペンキ屋から絶縁・導電特殊塗料メーカーへ脱皮したナミックスなど。	同　上	同　上
11	中小企業の IT 化	いまなぜ IT が必要か　IT は開発、生産、販売を変える　IT によって顧客に結びつく	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
12	商取引の電子化	もの造り情報の電子化　川口の金型企業　販売業務の電子化　XML　中国ソフトエンジニアとの提携	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	発展する中国の金属加工業	珠江デルタ工業地帯に進出する日系企業　発展する地元企業　中国機械工業の将来性と問題点	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）
14	東南アジアに移植される日本の加工技術	ベトナムの二輪車部品産業、タイでサッカーボールを生産するモルテンなど。	同　上	同　上
15	新しい国際分業体制を目指して	空洞化はどこまで進んだか　生産の海外移転、海外調達の増加　中国のキャッチアップ　日本の製造業にはまだ強い面が少なくない　空洞化を越えられるか　新国際分業体制を目指して	同　上	同　上

＝表象としての日本（‘０４）＝（TV）

― 西 洋 人 の 見 た 日 本 文 化 ―

〔主任講師：山内　久明（放送大学教授）〕
〔主任講師：柏倉　康夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

明治以来、西洋人が見て読み解いた日本文化の表象は、同時代の政治的・経済的な力関係と、西洋世界にとっての文化的「外部」が発散する幻惑とが複雑に入り混じって、従来の日本人が自らの文化について抱いてきた表象とは大いに異なる表象を、しばしば新しい価値として打ち出してもきた。わかりやすい例で言えば、江戸時代の美の一つの凝縮でもあった日光を貶めて、桂離宮のみを日本美の精髄とする視線である。

こうして、西洋人の「眼差し」を通して形作られてきた「近代と伝統との文化的重ね絵」は、現代の日本人論にもさまざまなレベルでその痕跡を残している。「表象としての日本」を分析することは、日本人論の歴史的な系譜学としても、また現代の日本人がみずからについて抱く表象を批判的に捉え返すためにも、きわめて有効な作業であり、また、学際的なチームワークによって始めてその成果を挙げうる研究であって、本学の主題科目として相応しいと考えられる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	表象としての日本	本主題の意味。比較文学・比較文化、異文化交流、国際社会論、表象文化論、諸外国における日本研究の系譜学等、「表象としての日本」がどのようなものであり、どのように形成され受容されたか。研究史と現在における問題提起。	山内　久明（放送大学教授） 柏倉　康夫（放送大学教授） 阿部　齊（放送大学名誉教授）	山内　久明（放送大学教授） 柏倉　康夫（放送大学教授） 阿部　齊（放送大学名誉教授） 司会 渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家）
2	先駆的まなざし（1）－アーネスト・サトウ	幕末から明治にかけて外交官としても足跡を残した欧米日本学の先駆者アーネスト・サトウの日本像。	山内　久明	山内　久明
3	先駆的まなざし（2）－ルイ・クレットマン	明治９年に創設間もない士官学校の教師として赴任したフランス人は理工科大学校を卒業した俊英であったが、２年間の滞在中に多くの写真、書簡、文書を残し、かつそれが近年発見されるという、世界に向かって開かれようとしていた明治日本の貴重な証人である。フランス人の目が読み解いた日本とはどのようなものだったのか。	柏倉　康夫	柏倉　康夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
4	先駆的まなざし（3）ーラフカディオ・ハーン	近代日本を知った欧米人の中でも、ラフカディオ・ハーンは特権的な位置を占める。アイルランドとギリシャという二重の文化的記憶を担って日本を固有の表象世界として書き表したからである。それらの言説は、ある意味では近代ヨーロッパにおける日本論のパラダイムを提供しているとも言える。(日本語字幕対応)	ジョージ・ヒューズ（東京大学元客員教授）	ジョージ・ヒューズ（東京大学元客員教授）
5	１９世紀における東洋と日本ーオリエンタリズムからジャポニズムへ	日本とその文化が西洋世界の地平に出現したのは、１９世紀という西洋世界の文化にとっても大きな変革期に当たっていた。近年サイードの名著「オリエンタリズム」によって開かれた新しい文化研究の視座と手法は、「表象としての日本」を読み解く上でも基本文献である。 単なる「美的趣味」のトポスを越えて、近代西洋世界における「日本の表象」の系譜学を企てる。	稲賀　繁美（国際日本文化センター助教授）	稲賀　繁美（国際日本文化センター助教授） ゲスト 渡邊　守章
6	表象としての日本音楽	19 世紀後半以降、日本の音楽が西洋社会でどのように表象されてきたかを、学術的な記述を出発点にして考える。また、箏・三味線・尺八の演奏家の協力を得て、1901 年以降に録音された音楽と五線譜に採譜された音楽を、表象の具体例としてふたたび音にする。	徳丸　吉彦（放送大学教授）	徳丸　吉彦（放送大学教授）
7	ハナコと貞奴の日本ー身体の表象	絵画・骨董や音楽とならんで、いや場合によってはそれ以上に、西洋人の視線を捉えたのは日本人の「身体」であった。観光客の性的幻想の焦点としての肉体とは別のトポスで、演技する身体が西洋人に及ぼした幻惑とその結果を、ロダンを捉えた「ハナコ」と、日本の舞台表象として始めて認識された貞奴の場合に焦点を当てて分析する。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
8	アーサー・ウェイリーあるいは理想化された平安朝文化	日本文学の紹介と翻訳の始まりを、イギリス人のアーサー・ウェイリーに焦点を当てて考察する。そこには、原典に忠実な翻訳か、一般読者にも受け入れられる翻訳かという古くて新しい「翻訳論」もたちはだかるだろう。謡曲の翻訳としては、ほぼ同時代にフランス語のノエル・ペリーの金字塔的訳業があるわけだから、これは外国文学を受容する側の文化や文学の記憶とも関わるだろう。	山内　久明	山内　久明
9	ブルーノ・タウトという視線	「日光 vs 桂」という美術史と美学のパラダイムを発明したブルーノ・タウトは、欧米人が日本文化について抱く表象だけでなく、何よりも近代の日本人が日本の伝統美について抱く表象を決定してしまった。ブルーノ・タウトの研究者では世界的に第一人者であり、数年前の「ブルーノ・タウト展」の監修者でもあったマンフレッド・シュパイデル教授に講義をして頂く。（日本語字幕対応）	マンフレッド・シュパイデル（アーヘン工科大学教授）	マンフレッド・シュパイデル（アーヘン工科大学教授）
10	ポール・クローデルー詩人大使の日本文化論	大正年間に大使として東京に滞在した詩人・劇作家ポール・クローデルは、現在から見ても、日本文化の理解において、独創的であるとともに普遍的な視座を提出している。特に中国に１４年間滞在した経験の上に立って日本文化を読み解く作業は、この授業にとっても重要な鍵を提出するだろう。ほぼ同世代の考古学者セガレンとの対比や、後のバルトとの対照も必要である。	柏倉　康夫	柏倉　康夫 ゲスト 渡邊　守章

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	アンドレ・マルローの日本	１９５８年に文化大臣として来日したマルローは、既に戦前の１９３１年に日本を訪れている。かつての革命の戦士である小説家は、第二次大戦後はド・ゴール政権の文化政策の担い手として、その美術論や芸術観を制度の領域にまで押し進めた特権的な知識人である。中国文化との対比で「空想の美術館」の批評家が読み解く日本の表象を論じる。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
12	アメリカにおける日本論の系譜	異文化や外国語の研究は、無償の知的な探究に従って行われるとは限らない。というのか、実に１９世紀末のヨーロッパがアジアに関心を抱くようになったのも、その植民地帝国としての戦略と無縁ではなかったのだ。第二次大戦中からのアメリカ合衆国における「日本研究」は、その意味で文字通りに「戦略的な」ベクトルに貫かれていた。アメリカの軍部は、対日軍事戦略立案のため、あるいは戦後の占領管理のために、文化人類学者などに日本研究を委託していた。ルース・ベネディクトの「菊と刀」がその嚆矢であったが、その後知日派知識人による日本論が相次ぎ、アメリカの対日政策にも強い影響を与えた。ライシャワーの「日本人」（１９７９）や「今日の日本人」（１９８８）などがその代表であろう。アメリカにおける日本論の多様化とそれらを貫く共通性とを共に論じる。	阿部　齊	阿部　齊
13	共和国から見た天皇制	日本とアメリカのもっとも大きな相違点は、アメリカが純粋な共和国であるのに対して、日本が伝統的な天皇制の影響を強く受け続けていることである。昭和天皇の没後、天皇制そのものを対象とした労作が相次いで出版された。ノーマ・フィールド、ジョン・W・ダワー、ハーバート・P・ビックス等の最近の天皇制論を取り上げて、共和主義者の描く天皇像に迫る。	同　上	同　上
14	ロラン・バルトあるいは「虚構としての日本」	１９６０年代から７０年代にかけて、フランスを中心に大きな影響力を持った思想的潮流に「構造主義」があった。文芸批評におけるその代表者、ロラン・バルトは、１９６６年に始めて来日して、日本文化の虜となった。みずから「虚構としての日本」を論じたと言う。「表徴の帝国」を始めとする晩年の著作は、幻想の日本を自らの「言説生成」の戦略拠点としつつ、同時に、多くの読者に日本文化解読の鍵を与えてきた。バルトの日本文化論の系譜学を企てることで、「西洋における日本の表象」の生成装置を分析する。	稲賀　繁美	稲賀　繁美
15	欧米における日本研究の系譜と現在	欧米における日本研究は、既に１世紀以上の歴史を持つ。日本を研究対象とする専門家の研究が、どのような領域を特権視し、どのような手法に基づいているのか、他の文化研究との対比において現状を明らかにする。	山内　久明 柏倉　康夫 阿部　齊	山内　久明 柏倉　康夫 阿部　齊 司会 渡邊　守章

＝　若者の科学離れを考える（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　岩　村　　秀（放送大学教授）〕
〔主任講師：　中　島　　尚　正（放送大学副学長）〕
〔主任講師：　波多野　誼余夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

「若者の科学離れ」は、今やグローバルな問題となっている。何が若者の科学への関心を希薄にしているのか。「科学」そのものに問題はないのか。科学教育の当事者や関係者はどのように対応しているのか、実態と問題点を明らかにする。最後に、若者に科学の心を呼び戻すために科学および科学教育関係者は何を目指し、何をなし得るか、またそのしくみを考察する。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	科学離れの現象	科学に対する若者の関心の希薄化、教育動機と学習動機の乖離、基礎学力の低下、科学雑誌の相次ぐ廃刊等の現状を調査資料に基づいて紹介し、本主題科目の視点・構成について説明する。	岩村　秀（放送大学教授） 中島　尚正（放送大学副学長） 波多野誼余夫（放送大学教授）	岩村　秀（放送大学教授） 中島　尚正（放送大学副学長） 波多野誼余夫（放送大学教授）
2	ヒトの知性の中での科学の位置	「科学」という言葉が最近では輝かしく豊かなイメージを失ってきた。これは長い間「科学」を代表してきた物理学の持つ繰り返し実験の可能性に対し個別性や１回性を特徴とする生命や環境に時代の関心が移ってきたこと、カオス・複雑系研究によって法則の理解に基づく予知と制御という世界観が崩れ始めたこと、理論が主でありテクノロジが従であるという優位関係が逆転したこと、などによる。	波多野誼余夫 黒崎　政男（東京女子大学教授）	波多野誼余夫 黒崎　政男（東京女子大学教授）
3	「科学」は必要とされているか	20世紀をリードした物理学は、時空と物質の世界観を一新させて、自然科学の世界に「物理帝国」を築いた。しかし、現代の自然科学の関心事と、私たちにとって最も未知なるものとの間に乖離が生じていないだろうか。吉川 弘之（前日本学術会議会長）、佐藤文隆（元日本物理学会会長の話を核にしてこの問題を考える。	中島　尚正	中島　尚正
4	豊かさの源としての科学	科学はものの見方や理解の仕方に多大な影響を与えることだけでなく、豊かさへの夢の実現にも深くかかわっている。豊かさの享受に多大な影響を与えている製品や生産の技術に関わる工学に注目して、若者への動機付けの観点から工学について発展の経緯、産業や社会との関係を考える。	同　上	同　上
5	科学と社会Ⅰ科学・技術と社会の結びつき	今日、科学・技術と社会の結びつきは、ますます密接にまた複雑になってきている。このため、科学・技術の理念、方法論、枠組み、政策、倫理、経済効果、社会論などを扱うには、科学史、科学哲学といった伝統的な学問の枠組みを超える必要が生じてきている。この問題がどう扱われるべきで、現状がどうなっているかを、ゲスト池内　了（名古屋大学大学院教授）及び、科学技術社会論学会の初代会長小林 傳司（南山大学教授）に聞く。	岩村　秀	岩村　秀
6	科学と社会Ⅱ社会の持続的発展のために	科学とその技術は、人類に測り知れない恩恵をもたらしたが、同時に成層圏から海洋に至る地球環境に少なからぬ影響を及ぼしている。環境保全・安全問題に対して、科学はどのような役割を果たすことができるか、OECDの言う持続可能な開発・発展とそれに対する化学の役割について、御園生 誠（工学院大学環境化学工学科教授）に聞く。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	科学教育の出発点	教育を受ける以前の乳幼児や、いわゆる義務教育の普及していない社会に住む人々が、世界のいくつかの側面について因果的説明を可能にする知識を持つことが最近の認知科学的研究により明らかにされつつある。また、乳幼児といえども予期されないできごとにたいして「驚き」を示す、という証拠もある。こうした有能さは、科学教育の出発点として無視し得ない。	波多野誼余夫	波多野誼余夫
8	科学教育の体系	我が国における初中等教育、高等教育、生涯教育の実態の一端を教室訪問で示し、課題ならびに、教育行政の姿勢について考える。日本学術会議も教育体系の再構築を積極的に考えている。	岩村　秀 小林　啓二（城西大学大学院教授）	岩村　秀 小林　啓二（城西大学大学院教授）
9	海外の科学教育	先進諸国の大学における理工系離れを統計でみる。数学／自然科学が文化の一つになっているフランスでの教育の実態を、ゲスト中谷圭太郎（ENS de Cachan 教授）に聞く。理工系離れを食い止める策が功を奏し始めている国もある。数学・理科教育到達度に関する国際比較調査の結果と受け止め方に触れる。	岩村　秀	岩村　秀
10	科学教育のための教員養成と生涯教育	教員養成システムと教育行政、指導要領と教科書、教育委員会の役割と実態、生涯教育に向けた放送大学の取り組みなどの諸問題について、麻生誠（放送大学副学長）をゲストに迎えて聞く。	岩村　秀 小林　啓二	岩村　秀 小林　啓二
11	産業界が期待する科学教育	産業界の執行役員や技術の指導者が期待する科学教育とは。また彼らの後継者に期待される科学教育とは。意識改革、科学リテラシー、リカレント教育をキーワードにして、産業界の提唱を、ゲスト：舘　紘（鐘淵化学工業（株）相談役）に聞く。	岩村秀	岩村秀
12	科学教育と学会	学会は、自らの会員の研究発表・討論の場を整備することを目的とする傍ら、専門家集団として、科学と社会の関わり、科学教育にも深い関心を示している。日本化学会、日本物理学会等における科学教育への取り組みを、ゲスト細矢治夫（化学会）、兵頭俊夫（物理学会）に語ってもらう。	岩村　秀 小林　啓二	岩村　秀 小林　啓二
13	マスメディア・科学博物館と科学教育	先進諸外国に比べて科学雑誌の部数の伸び悩みがあり、その結果としての相次ぐ廃刊等が目に付く。放送メディア、新聞、出版等のマスメディアや科学博物館における科学教育の取り組みと課題を紹介し、編集者、博物館員等と一緒に考える。	岩村　秀	岩村　秀
14	学校科学教育の刷新	学習者の知的探究とそれを通じての知識の構成をめざす、科学教育の刷新的な試みのいくつかを、我が国と米国を中心に紹介し、いわゆる「注入型」の教育との違いを検討した研究結果にもとづきその効果と可能性を考察する。	三宅　なほみ（中京大学教授）	波多野誼余夫 三宅　なほみ（中京大学教授）
15	21 世紀の科学教育	今日の科学・技術の姿、これらと社会との関わり、及びこれらの教育がどう行われているかという前章までに見て来た分析を整理し、若者に科学の心を呼び戻すための提言・提案を取りまとめる。若者と成人の科学離れを同時に考えるべきであり、多様な教育機会を活用することにより、様々な可能性が開けてきている。しかしながら、「若者の科学離れ」の治癒には、5年、10年と言う地道な努力が必要である。	岩村　秀 中島　尚正 波多野誼余夫	岩村　秀 中島　尚正 波多野誼余夫

＝　生活の動態と経営（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：奈良　由美子（放送大学助教授）〕
〔主任講師：石川　　實（放送大学奈良学習センター所長）〕

全体のねらい

この授業では、社会の枠組みの変化が、生活の枠組み（＝生活システム）をどのように変容させ、ひいては個人にどのような影響を与えるか、そして個人は生活を通じて社会をどのように変容させるかをおさえながら、生活システムの構築としての生活経営について考える。全体として、大きな社会のなかの部分として位置づくひとりひとりの生活主体が、全体への影響を勘案しつつ個性豊かな生活を創るための手がかりとできるような内容にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	生活とは、生活経営とは	人間は誰しも生活する主体（＝生活者）である。生活者は個人として、家族の一員として、地域社会の一員として、さらにより大きな社会単位の構成員として生活を構築している。ここでは、人間にとっての生活の意味、生活の構成要素、生活経営の意義と方法について、その基本的概念をおさえる。	奈良由美子（放送大学助教授）	奈良由美子（放送大学助教授）
2	生活と文化・価値	文化や価値は、われわれの生活において、あたかも最初からそこにあったかのように意識されることが多いだろう。しかし、こうしたものは、実はわれわれが 生活していく中で常に創出・再生産・改訂されている。ここでは、そのプロセスがどうなっているかについての社会学的説明をふまえながら、個人と文化の関係について考えていく。	伊勢田哲治（名古屋大学助教授）	伊勢田哲治（名古屋大学助教授）
3	生活と倫理	倫理もまた生活の中で創出・再生産・改訂されていくが、社会を運営するための基本ルールとしての側面は時代や社会をこえて共通する。ここでは倫理学の知見をふまえながら、基本的な倫理原則としてどういうものがあると考えられているのか、それを生活の中で生かし、より豊かなものにしていくにはどうしたらよいか、ということについて考えていく。	伊勢田哲治	伊勢田哲治
4	生活の経済と生活設計	自己決定・自己責任が求められる現代社会。個人が限りある生涯に主体的に生活設計をし、個性的な自分の可能性を表現しつつ、交換という市場経済システム以外の贈与・贈答など共助に価値をおく生活選択により、新しい共同を形成する可能性を探る。	上村協子（東京家政学院大学助教授）	上村協子（東京家政学院大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	生活と情報	個人が家族、地域、社会と関わる過程では、つねに情報のやりとりが発生している。情報は重要な生活資源となると同時に、生活者の価値観を形成する。生活者は、個々の具体的生活のなかで、多種多様な情報をどのように利用し生活を構築しているのか、その実態と課題について考える。	奈良由美子	奈良由美子
6	生活と時間	細切れに分断されていく個々の時間を繋ぎ合わせ、過去・現在・未来と継続し一貫性のある個人の歴史として蓄積し、また、他者との共時性により、生活の時間に広がりと重層性が創造され、さらには次世代へと繋がる生活システムを考える。	上村　協子	上村　協子
7	職業・労働・余暇と生活	「仕事か遊びか」、「労働か余暇か」といった２分法により狭く押し込められた生活選択から脱却し、生活の糧を生産する新しい職業のあり方や、自発的な人と人の支えあいにより、確実な生活の拠点が形成され、また生活の場の境界線が緩やかに広がる生活の枠組みを探求する。	上村　協子	上村　協子
8	生活と安全行動	人間生活の営みは、安全を脅かすリスクを伴うものでもある。生活経営の安定を阻害する生活リスクについて、その本質や発生のメカニズムおよび現代生活のリスクの特徴を示すとともに、生活リスクを管理することの意義と手法を考える。	奈良由美子	奈良由美子
9	生活の基本単位の変化：個人・世帯・家族	生活の基本単位としての世帯・家族について考える。次いで家族の本質を考え、親族のなかにおける家族の位置づけと家族そのものの変化について眺める。さらに家族の形態変化や現代における多様性とその背景についても考える。	石川　實（放送大学奈良学習センター所長）	石川　實（放送大学奈良学習センター所長）
10	生活の共同（その１）：家族の機能とその変化	家族員や社会から家族というまとまりに期待されるのは、どのような働きか。伝統的家族の機能と現代家族の機能的縮小状況を眺め、生活の基本単位としての家族の機能縮小と潜在的機能ストレスを考察し、現代家族の脆弱性について考える。	石川　實	石川　實
11	生活の共同（その２）：家族メンバーの果たす役割と家族の関係	「機能」と「役割」の概念の違いを考えたうえで、家族内の地位と役割分担とその変化を眺め、家族内における意思決定の仕方の変化を考える。次いで、夫婦の関係、親子の関係の特性と現代的変化について考える。	石川　實	石川　實

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	家族・家族員の生活：個人と家族の発達の視点から	個人と家族の双方の発達過程を追究する視点に立ち、個人の発達過程に現れた現代的ステージ（「中年期」）とその課題、家族の発達過程に現れた現代的ステージ（「エンプティ・ネスト」）とその課題について考え、個人としてのおとなの課題と家族の発達上の課題を考える。	石川　實	石川　實
13	家族生活と少子化・高齢化	わが国における少子化と高齢化が現代の社会と家族にどのような影響を与え、家族生活や個人の生活がどのように変化しているかを考え、個々の家族的課題と社会的課題を考える。	石川　實	石川　實
14	環境創造と生活経営	様々な生活課題の遂行の過程にあっては、自助・公助・互助・共助の体系が深く関わる。生活者は、それらの受益者であると同時に、生活資源環境を創造する主体でもある。国際的視点や地域社会のありかた、NGO・ボランティア活動等にも触れながらここでは生活の空間的な拡がりのなかでの持続可能な生活経営の展開を探る。	奈良由美子	奈良由美子
15	次世代の生活主体の育成と生活経営	生活経営のありようは、当該生活主体およびその時点での相互作用の相手だけに関係するのではない。次世代、次々世代の生活にも深く影響を及ぼす。生活の時間的な拡がりのなかで持続可能な生活経営の展開を探る。	奈良由美子	奈良由美子

＝　生活の経済（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師（現職名）：重川　純子（埼玉大学助教授）　　〕

全体のねらい

生活の中で生じる欲求は貨幣を媒介として充たされることも多い。本講においては貨幣経済社会と生活の関係について考えるとともに、貨幣以外をも含む生活の経済的側面を経済社会のしくみとの関わりから検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活の経済－経済社会と「お金」	日々の生活の営みの中で行っている経済活動について考える。経済社会におけるお金とその他の資源の関係、位置づけを検討する。	重川　純子（埼玉大学助教授）	重川　純子（埼玉大学助教授）
2	家計の変化	家庭の経済活動の中で貨幣が直接かかわる部分である家計とその変化を概観する。収入と支出、貯蓄と負債、フローとストック等の家計に関する基本概念、家計における貨幣の流れについて概説する。	同　上	同　上
3	職業・失業と家計	収入を得るための経済活動として職業に就いて働くことが多い。職業の有無、職業の種類による家計状況を比較する。また、職業の種類や様態による報酬の相違、世帯の所得の格差についても考える。	高梨　千恵（お茶の水女子大学非常勤講師）	高梨　千恵（お茶の水女子大学非常勤講師）
4	家計にみる地域差（1）－日本の地域比較	家計のありようは、家計主体の価値観、ライフステージ、構成員の属性などの他、生活環境の影響をうける。狭いと言われる日本においても、地域により産物、制度等が異なる。本章では、日本国内の地域比較から居住環境や就業が家計に及ぼす影響を検討する。	重川　純子	重川　純子
5	家計にみる地域差（2）－日本と外国の比較	家計にみる地域差（2）として、日本と外国の比較を行う。ここでは、ニュージーランドを取り上げる。ニュージーランドは社会保障先進国として知られていたが、近年は行政改革を推進した国として有名である。制度等の相違が家計に及ぼす影響を比較検討する。	同　上	同　上
6	消費社会と家計	様々な生活の欲求を充足する手段の１つとして、ものやサービスの購入という方法が用いられている。消費支出額により消費行動の現状と変化を整理するとともに、消費行動への影響要因等について検討を行う。	同　上	同　上
7	消費社会と家計問題	消費社会を支える仕組みの１つに消費者信用がある。家計の消費者信用の実態と家計問題の動向を概観する。雇用環境や経済環境の変化と家計問題発生の関係、家計問題に関する制度についての検討を行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	妻と夫の経済関係	妻と夫は共同して生活を営むことが多く、経済についても一体化して考えられることが多い。同一世帯内の妻と夫の生活水準は等しいのだろうか。夫妻間の経済関係について、ニュージーランドとの対比から、現状とその背景を検討する。	重川　純子	重川　純子
9	親と子の経済関係－教育・介護・相続	親と子の間には有形、無形の経済関係が存在する。親による子の教育、養育の費用負担、子育てに時間を費やすこと、子が親の介護、看護をする、その費用を負担すること、財産の遺贈、相続など。ライフサイクル上の親と子の経済関係の変化と課題を検討する。	同　上	同　上
10	子どもとお金	現代社会の中では、子どもも早くから消費者－商品の購入者－として社会の中で位置づけられている。その背景には、６ポケットとも称されるお金の提供者の存在がある。子どもをとりまくお金に関する環境を概観し、課題を検討する。	御船　美智子（お茶の水女子大学教授）	御船　美智子（お茶の水女子大学教授）
11	若者の自立と経済	大人になる前段階である若者期の重要な発達課題の１つが自立である。自立は様々な側面から構成されているが、特に経済的な側面から若者の自立を取り上げる。若者の経済状況を概観するとともに、自立に必要な方策について考える。	重川　純子	重川　純子
12	高齢期の生活と経済保障	長寿化により高齢期が長期化している。高齢期の経済生活は、生活設計上の最重要課題の１つとなっている。高齢期の経済生活の実態を概観し、外国との比較により、高齢者の生活実態・意識と制度の関わりについて検討する。	同　上	同　上
13	生活経済と地域通貨	国家により発行された通貨の他に、特定地域でのみ通用する地域通貨導入の動きが各地でみられる。導入の背景、導入が利用者に及ぼす影響を検討するとともに、個々人によって身近な生活の場である地域社会が持つ意味を考える。	同　上	同　上
14	生活経済と環境	sustainable－持続可能な－であることは、地球全体的なキーワードである。環境問題を人々の生活、経済活動との関わりから検討する。様々な主体との相互的関係、制度等の点から持続可能な生活のあり様について考える。	同　上	同　上
15	生活をつくる	個々人の生活における貨幣以外の部分も含む生活の経済的側面の捉え方について検討し、生活のゆたかさについて考える。	同　上	同　上

＝現代社会におけるライフコース（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　安藤　由美　（琉球大学教授）〕

全体のねらい

現代社会において、人の一生の道筋はどのように展開するか。本講義ではこの問題を、人生の軌道と移行に着目し、それらを文化、社会構造、意識世界（パーソナリティ）およびそれらの変動と関連づけて考察する視点と方法を紹介し、それらをもとに、現代社会におけるライフコースのあり方を実証的にあとづける。講義では、はじめの３回でライフコース論の理論、方法、研究法について紹介したあと、ライフコースパラダイムの４つの基本的要素にかんして第４回から第８回まで考察する。第９回以降では、実証的なデータに依拠しつつ、現代社会におけるライフコースの諸相およびその変化についてみていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代社会における人生過程への視座	「ライフコース」とは、「個人が一生のあいだにたどる道筋」のことを意味している。第１回では、ライフコースについての、ごく基本的な関心のもちかたについて、まず考える。つぎに、もう一つのキーワードでもある「現代社会」における一生の道筋のあり方についての、予備的な考察をおこなう。	安藤　由美（琉球大学教授）	安藤　由美（琉球大学教授）
2	ライフコース研究の理論と方法	第２回では、まず、ライフコースの展開過程をとらえるための基本的概念を提示する。つぎに、ライフコースを規定する諸要因について概説し、最後に、ライフコース研究における時間の扱い方、および、個人の生涯時間を歴史時間・社会変動にリンクさせる方法としてのコーホート分析の考え方について述べる。	同　上	同　上
3	ライフコース研究法	個々人のライフコースを時間の流れのなかで調査し、データを構築していくとき、そこには考慮しなければならないさまざまな問題に直面する。ここでは、それをデータ収集の方法、収集するデータの種類、データの分析という３つの局面に分けて考えていく。	同　上	同　上
4	人間の発達と歴史的社会的文脈	本章では、人生がどのように、歴史的出来事や時代背景によって影響を受けて展開するかについて考えてみる。まず、心理学や行動科学が、人の一生の心理社会的発達とその文脈について、どのように論じてきたかを振り返りながら、その問題点を指摘した上で、つぎに、社会科学においては、人生過程とその文脈との関係は、どのように考えられてきたのかを検討する。最後に、大恐慌下の家族と子どもの変化についての実証研究を例にあげながら、歴史的文脈の違いがライフコースにどのような経験の違いをもたらすかについて考察する。	同　上	同　上
5	人生相互の結びあいと別れ	人生とは、他者との出会いや別れの連続であるといえる。他者との結びつき方という観点から、その出会い方・別れ方を類別するなら、一つは組織や集団に所属することによる他者との結びあいがあり、もう一つは組織や集団に必ずしもとらわれない結びあいがあると考えられる。ここでは、こうした問題を、役割・ネットワーク・コンボイといった概念からおさえていきたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	人生変化における人間行為力と知覚	ライフコースの主観的な側面を、個人が発達や変化に対してどのように働きかけるかという人間行為力（ヒューマン・エージェンシー）の諸特徴と、自分が経験した変化をどのように主観的に受け止めるかという転機の知覚といった、２つの観点から考える。	安藤　由美	安藤　由美
7	タイミングの意味と諸相	歴史的条件、人生の連結、主体的構築が作用しあって人生過程を形づくっている交差点としてのタイミングの意味とその諸相について考える。まず、ライフコースのタイミングの理論的背景について論じる。後半では、そうしたタイミング現象が観察される具体的な実相をみていく。	同　上	同　上
8	経験の累積過程としてのライフコース	人生過程における累積という考え方の意義は、ある時点の分布状態を理解するのに、過去の状態と関連づけることが必要だという、素朴な問題意識からきている。第８回では、まず、その問題意識のアウトラインについて提示する。つぎに、先行する経験が後続する軌道や移行におよぼす影響をあつかった、いくつかの研究をレビューする。さいごに、累積過程も含めた、ライフコースと人間発達の過程のパースペクティブについて整理する。	同　上	同　上
9	成人期への移行	ここから以下第１５回までは、おもに最近のライフコース調査データに依拠しながら、現代日本社会におけるライフコースの態様について紹介する。第９回では、前半で現代社会における「大人になること」の意味を考察し、後半でライフコース・アプローチによる成人期への移行の実相を対象とした実証研究を紹介する。	同　上	同　上
10	家族変動とライフコース	個人が経験する家族生活を人生上で追跡することを通して、現代社会における家族の変化について考察する。ライフコースの枠組は、個人の人生過程そのものの理解に資するが、それだけでなく、個人のライフコースを通して家族過程を理解するねらいがある。ライフコース・アプローチによる家族軌道と移行の研究は、家族研究の１つの革新的な方法論であることを目指している。	同　上	同　上
11	職業キャリアと現代社会	本章では、現代における職業キャリアの特質について考察する。前半では雇用職業が一般化した労働市場における職業のあり方について、後半では生涯にわたる職業キャリア過程について、男性の場合を念頭において、それぞれ論じる。	同　上	同　上
12	女性の職業キャリア	女性にとっての職業キャリアは、男性とはかなり違った問題を含んでいる。それは、多くの成人女性にとって、母親および主婦役割が、ライフコース上で大きな位置を占めるからである。ここでは、女性の職業キャリアの現状とその歴史的変化を、人生上での就労の有無とその家族的要因という観点から考察していく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	歴史変動とライフコース（その1）：戦争とライフコース	歴史的な事件や状況が人生過程にどのような変形をもたらすかについて、とりわけ戦争や軍隊に関係する経験に注目して考える。近代になって出現した、国家をあげての戦争や軍事体制の維持は、そこに参加させられる人びとの生活やライフコースに多大な痕跡を残してきた。ここでは、男性の軍隊動員経験および、それがその後の人生移行に及ぼした影響を考察する。	安藤　由美	安藤　由美
14	歴史変動とライフコース（その2）：沖縄の経験	本章では、前回に引き続いて、現代の歴史的社会的文脈における人生経験の諸相をみていくが、ここではその続編として、沖縄の経験をとりあげる。激動の昭和期を生きた沖縄の人びとのライフコースに、こうした社会変動の痕跡がどのように刻まれているかについてみていきたい。	同　上	同　上
15	ハイ・モダニティ時代のライフコース	私たちが生きる現代社会は、モダニティの価値原理が浸透していく変動の時代である。第15回では、まず、そうした近代化とライフコースとの関係について考える。それをふまえて、つぎに、成熟したモダニティ（ハイ・モダニティ）におけるライフコースのあり様についての見方を提示する。	同　上	同　上

＝　家族のストレスとサポート（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　石原　邦雄（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

今日の家族の問題を、ストレスという観点から捉えなおし、家族の抱える困難や、直面する危機状況への対処の過程を検討するとともに、困難の克服あるいは危機の予防に働く各種のサポートのあり方を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	家族への着目と社会学からの接近	長びく不況と国民的目標の拡散の中で、新しい世紀は不安な幕開けとなっている。人々は、家族を拠り所としようとするが、家族自体も変化し多様化しており、これもまた人々の不安材料になっている。家族の問題性を、社会学ではどのように捉えようとするのか。	石原　邦雄（東京都立大学教授）	石原　邦雄（東京都立大学教授）
2	ミクロ社会システムとしての家族	家族は、制度として、集団として、二者関係の複合として、さらには個人の意識や認知の次元など、様々なレベルで捉えられる。またこれを、動態的に捉える場合でも、社会全体の中での家族のあり方の変化、家族が示すある種の発達的・規則的な変化、さらには困難を抱えた家族が個別のケースとしてたどる変化過程など、様々な捉え方が錯綜することになる。これらを整理しておこう。	同　上	同　上
3	ストレス研究の諸概念	ストレス研究の諸概念（ストレッサー、ストレス、ディストレス、資源、対処など）を説明する。ディストレスの社会的パターンについて論じ、ストレッサーとしての家族、サポート源としての家族について説明する。	稲葉　昭英（東京都立大学助教授）	稲葉　昭英（東京都立大学助教授）
4	ネットワーク論からみた家族関係	ネットワーク論の基本的考え方を示し、家族関係とそれ以外の人間関係ネットワークとの関連を論じる。とくに、サポート資源とストレス源、あるいは機会と拘束というネットワークの二面性に焦点をあてる。	野沢　慎司（明治学院大学教授）	野沢　慎司（明治学院大学教授）
5	ネットワークとサポート	育児する母親や父子家庭の父親などを対象にした研究例を紹介しながら、ネットワーク構造が個人の心理的な安寧にどのような効果を及ぼすかを検討する。最近のインターネット普及の社会的意義についても触れる。	同　上	同　上
6	家族ストレス論の形成	ストレスモデルの家族への適応としての家族ストレス論とはどのようなものであり、そのような背景の中で成立してきたのか。Ｒ．ヒルを中心とした、理論の形成を辿る。	石原　邦雄	石原　邦雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	家族ストレス論の展開	ヒルの家族ストレス論を継承発展させた、H.I.マッカバンの2重ABC・Xモデルを中心に解説し、併せて、これと異なる理論化の方向にも注目する。	石原　邦雄	石原　邦雄
8	自然災害の被災者家族	家族ストレス研究で早くから取り組まれ、日本でも各種の研究が行われている自然災害の例を中心に、多くの家族を巻き込む地域的な環境の急変にさらされた事態における家族の様相と対応形態について検討する。	同　上	同　上
9	難病・障害と家族の危機	家族メンバーの一人が回復の困難な難病や障害を持つことになった場合、家族は最も身近かな援助者、扶養者としてどのようにしてその困難に対処していくか。多くの研究例を見ながら考える。	同　上	同　上
10	経済的危機と家族	これも家族ストレス論の成立に関連の大きかった、世界大恐慌のもとでの家族生活の困難と、それへの対応過程について、G.H.エルダーの研究例を紹介するとともに、今日の不況とも重ね合わせながら見ていく。	同　上	同　上
11	結婚とディストレス	・婚姻上の地位とディストレスの関連を検討することで夫婦関係が男性にとって持つ意味と女性にとって持つ意味の差異を論じる。 ・配偶者からのサポートの性別非対称的な構造について論じる。	稲葉　昭英	稲葉　昭英
12	仕事と家庭の葛藤と調整	・育児期の女性のディストレス、学齢期の子を持つ時期の女性のディストレスに着目することで家族と職業の関連を考える。 ・crossover effect, spill over effectに関するアメリカの研究を紹介し、職業生活と家族生活がどのような関連にあるのかを考える。	同　上	同　上
13	ステップファミリーのストレスとサポート	継親子関係を含む再婚家族（ステップファミリー）が日本でも増加していると推測される。血縁関係のない継親子関係、継きょうだい関係を意識的に構築しながら家族をつくることの困難とサポートの意義を探る。	野沢　慎司	野沢　慎司
14	親子関係のライフコースとストレス	家族規範が揺らぐなかで、なお多くの家族が高齢者の扶養を実際に担っており、世代間の扶養関係は、親族関係も巻き込んで家族生活上の困難を生じさせる大きな問題であり続けている。他方、初期の親子関係や青年期・中期の親子関係にも新たな問題が生じている。	石原　邦雄	石原　邦雄
15	家族する困難と家族の将来	家族が大きく変化しつつあり、家族の捉え方も多様化しているなかで、ストレス論による家族分析をふまえて、これからの家族像をどのように描けるだろうか。	同　上	同　上

＝変動する社会と暮らし（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　本間　博文（放送大学教授）〕
〔主任講師：　今井　悦子（聖徳大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は産業革命に次ぐ第二の大きな変革の波にさらされ、その波は我々の生活のあらゆる部分に浸透しつつある。情報処理技術を中心として、この技術の応用によって、医学や食糧問題までに技術革新の波は押し寄せてきている。もはや旧来の生活スタイルを守ってこれまでのような暮らしを続けることは難しく、変革に対応できないことを許さない過酷な状況を迎えつつある。暮らしを便利にそして快適にするための変革であるにもかかわらず、それに対応できない人々はきわめて不利な状況に置き去りにされ、様々な事故に巻き込まれるという危険性さえ想定される。
本講義では、このような生活のあらゆる側面に及ぶ変革について、①それがいかなるものか、その内容を正しく理解し、且つその実態を明らかにする。②我々の暮らしにどのような影響（プラス、マイナス）を及ぼすのかを探り、③急激な変革の下でどのような生活設計が可能なのか、について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	変動する社会	現代社会について、様々な統計データーを活用しその変動の様子を明らかにする。いかなる技術が実用の段階にあるのか。そしてそれらの技術が我々の生活にどのように関わろうとしているのか、そしてそれによってどのような変化が起こりつつあるのか、２章以下で解説する内容について概説する。	本間　博文（放送大学教授）	本間　博文（放送大学教授）
2	生活技術変化と暮らしの「便利さ」	暮らしの「便利さ」とはなにか。経済的効率性と使いやすさ。具体的には、情報家電あるいは携帯電話の例をあげながら、家計通信費の増大などの問題を考察する。	坂井　素思（放送大学助教授）	坂井　素思（放送大学助教授）
3	産業構造の変化と「働きがい」	暮らしのなかの「働きがい」とはなにか。情報化などの産業高度化のなかでの産業構造の変化、サーヴィス経済化・情報経済化のなかの労働、家事労働と市場労働の境界問題、非営利活動などの問題点をめぐって、労働がどのように変質するかについて考える。	同　上	同　上
4	生活の金融化と暮らしのなかの「リスク」	暮らしのなかの「リスクと安全」。電子マネー、ネットバンキング、地域貨幣などの例を取り上げながら、金融資産の増大、貨幣と情報の親和性、不確実性の増大と信頼の重要性などの問題について考えていく。	同　上	同　上
5	患者からのみた医療	先端医療は、臓器移植・生殖医療・遺伝子診断・遺伝子治療などの面で大きな進歩を遂げている。これにともない、われわれはこれらの先端医療を受けるか否かにかかわらず、人の生や死のあり方について自分なりの考えを持たなければならなくなっている。現代社会全体からみても、医学の技術や論理が一方的に進行していかないために、社会の価値観や倫理観を明らかにすることが求められている。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	心身の自立と医療保健	医療と公衆衛生の進歩によって制御可能な原因、特に環境側の病因による疾病が減じ、保健先進国での疾病は生物メカニズムに内在する異常に限られ、幼少期の遺伝的異常、先天奇形などと、生命の有限性を反映する高齢期の諸疾病に２分極化しつつある。少子高齢化はその結果であり、政治、経済、個人に大きな影響を及ぼしている。 現在、死亡の大半は８０歳前後におき、それに先立って平均１年程度、生活動作ＡＤＬを人手に依存するようになる。痴呆も半分程度に見られる。「心身の自立」は自己実現の必須の前提であるが、それを保つためには保健医療に加えて、生涯にわたる本人のセルフケアが大切である。本章では最近の日本の疾病動向の変貌と個人の心身の自立と「暮らし」とのかかわりなどを中心に、医療保障の現況とその賢明な利用についてのべる。	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
7	家庭生活とスポーツ	少子高齢化社会社会を迎え、生活慣習病の予防や体力の保持増進を目的としたスポーツの普及には目覚しいものがある。一方で、生活の質の向上、あるいは心の豊かさを求めてスポーツに関わる例も増えており、身体的･精神的な健康に果たすスポーツの役割は、今後一層高まるものと思われる。本性では、日常生活の中にスポーツがどのように位置付けられ、それが健康な生活とどのように関わっていくのか、という問題について考えてみたい。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
8	21 世紀の食品事情	20 世紀には様々な食品が作り出された。電子レンジ食品、冷凍食品のような調理加工食品やいわゆる健康食品の他、かつて存在しなかった全く新しい食品、遺伝子組み換え食品も出現した。 現代および近未来の食品事情を探るとともに、消費者はどう考えどう行動していったらよいのか考える。	今井　悦子（聖徳大学教授）	今井　悦子（聖徳大学教授）
9	変化する食事習慣	社会の大きな変動は食品事情を変えただけではない。食に対する考え方や食べ方---何を、いつ、どこで、誰と、どのように食べるか---なども大きく変えた。これらの変化は、家族関係やさらには人間性形成にも影響をおよぼしているという意見がある。何が、どこが問題なのか正しくとらえ、新しい食事習慣を考える。	同　上	同　上
10	居住環境を巡る諸問題	近年、世帯類型が多様化し、それに呼応するようにライフスタイルの多様化も著しい。当然器としての住居のあり方も大きな変化が起こりつつある。画一化から多様化へ、郊外型から市街地型、スクラップアンドビルト方式からストック更新型へ、環境と共生する省エネルギー住宅への変化である。このような変化はバブル崩壊によって住宅の評価が不動産としての財産価値から利用価値へと変換せざるを得なくなったという事情もある。品質保証制度が新たに制定され、消費者保護の観点からも新しい動きがスタートしようとしている。やっと本来の住まいのあり方が問われる状況になりつつあるといえよう。しかし一方で「ミニ戸建て住宅」が急増し、新たな居住環境上の問題として顕在化しつつある。高齢社会を迎え解決しなければいけない問題が山積している。	本間　博文	本間　博文

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	消費者責任の時代	循環型社会形成促進法の成立を受けて、消費者意識・行動も、消費者権利から消費者責任へと、いっそうの転換がもとめられる。新しい消費者視点に基づく企業評価の試みなどの中に、その潮流を探る。	酒井　豊子（放送大学名誉教授）	酒井　豊子（放送大学名誉教授）
12	家族文化と情報	伝統工芸の育成にとりくむ越前の和紙づくりの町、北海道における SOHO(テレワーク)－子育てをしながらソフトウエアをつくる主婦のネットワークなどを事例として、情報革命の中で何が変わり、何が守られ、何を発展させてきているかを家族・家庭を軸として探る。	赤木　昭夫（元放送大学教授）	赤木　昭夫（元放送大学教授）
13	地域文化・経済と情報	西陣の織物、金沢の工芸、東京の大田区の機械加工、荒川区の鉛筆製造などを事例として、地域の産業と経済の活性化が、自転車とファックスとインターネットによる情報交流によって進められている実状を紹介する。技術と経済の変動の中で、守るべき文化と依るべき核は何か、それは家庭・家族そして横丁、地域というクラスターである。	同　上	同　上
14	男女の共生する社会	近年「男女の共生」がなぜ一つの領域として学問、行政、社会生活の諸分野において取り上げられるようになったかをまず概観する。次に地球規模の視点から日本社会の位置づけを眺める。そして男女共生を可能にする社会は、障害者、外国人、その他さまざまないわゆる少数者の共存を可能にする社会であることを考える。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
15	まとめ－21 世紀の生活設計	14 回にわたって個々の視点（専門）からこれからの生活を素描してきた。本章では 14 回の講義のまとめとして、2 つのテーマ、1. 21 世紀における健康生活（健康科学、食物学、スポーツ学）、2. 消費者の立場からの生活設計（生活学、家庭経済、衣と住）を取り上げ、それぞれの分野の教員が相互にそれぞれの立場から生活の将来像について討議し合うことで、個々の専門分野だけでは指摘できない問題点、あるいは解決の糸口などを明らかにしてこの講義のまとめとする。	本間　博文	本間　博文

＝衣生活の科学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　酒井　豊子（放送大学名誉教授）〕
〔主任講師：　牛腸　ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授）〕

全体のねらい

衣服はファッションを表現する代表的な手段である。しばしば時代の風潮に左右されやすく、生理的に快適で、文化的、個性的な衣生活を経営・維持するには、衣服や衣生活行動に関する科学的知識と洞察を必要とする。この科目では、衣服・衣生活にかかわる諸事象について、主として自然科学的基礎に立って理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	衣生活の科学的考察	衣服が果たす役割には、寒さや雨、風からの防護、快適環境の保持、審美的・社会的欲求の満足などがある。これらのために衣服が備えるべき機能と、衣服を効果的に利用する上での諸問題を概観する。	牛腸ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授）	牛腸ヒロミ（聖徳栄養短期大学教授） 酒井　豊子（放送大学名誉教授）
2	被服材料の熱と物質の移動特性	衣服が身体から蒸散される水分を外部へ散させることは、体温調節等の面から極めて重要である。衣服素材の吸湿，透湿、吸水などの現象を、繊維の化学構造、高次構造、形態特性、布の構造などとの関係で理解する。	同　上	同　上
3	着衣における熱と水分移動	着衣を通しての熱や水分の移動は着衣を構成する布素材の性質だけでなくデザイン、着方等着衣の構成要因および環境要因からも影響される。諸要因が組み合わさったシステムとしての着衣の熱・水分移動性が、布素材のそれとは必ずしも一致しないことをいくつかの例を挙げて解説する。	薩本　弥生（横浜国立大学助教授）	薩本　弥生（横浜国立大学助教授） 牛腸ヒロミ
4	人体の動きと被服の運動機能性	衣服の運動機能性は着心地と関連し、スポーツウエアなど運動量の多い衣服だけだなく、衣服全般に要求され性能である。運動機能性の劣る衣服を用いて作業をすると、身体は疲労し作業能率が下がる。ここでは、人体の動きと衣服の運動適合性，身体拘束による衣服圧等、人体への影響に関して述べる。	同　上	同　上
5	寝衣，寝具の快適性	快適な睡眠のために、寝衣・寝具に要求される性能には、温熱的、力学的特性が挙げられる。寝心地に影響する寝衣・寝具の熱や水分の移動特性は、単に素材だけでなくシステムとして快適な寝床環境を工夫する必要がある。力学特性の面からは、敷き布団や枕の最適な堅さについて考察する。	同　上	同　上
6	被服材料の構造特性	被服材料としての繊維や糸、さらにそれらで構成される布の性質のうち、主として物理的、力学的性質を、繊維の化学構造、糸や布の構造特性との関係から取り上げる。また、繊維、糸、布の性質・性能の相互関連性に関し体系的理解を深める。	酒井豊子（放送大学名誉教授）	酒井豊子 牛腸ヒロミ
7	衣服の形と色の心理効果	衣服は流行を具現化する最も代表的な手段となっている。人々はなぜ、衣服のデザイン、色などに”新しい”、”古い”などを感じるのか。また、そのような感じ方は、年齢や性別などでどのように異なるのか。ここでは衣服のデザインや色が人の感性にどのように影響するかをいくつかの事例から考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	皮膚と毛髪の科学	装いには衣服のみならず、髪型や化粧も大きな影響を及ぼす。ここでは皮膚と毛髪に関しその構造や生理を理解するとともに、化粧品、整髪料などの成分・作用などと、どのような研究に基づいて製品開発がなされているかを紹介する。	牛腸ヒロミ	牛腸ヒロミ 酒井　豊子
9	衣服の寸法変化と形くずれ	衣服はつり下げておくだけでも変形することがある。洗濯などでは収縮や伸び、型くずれ、しわなどを生じやすい。これら寸法変化や形くずれの要因を、素材側および取り扱い方法の側面から考察する。	三ツ井紀子（昭和女子大学短期大学部教授）	三ツ井紀子（昭和女子大学短期大学部教授） 酒井　豊子
10	光と衣服	衣服のファッション性に密接に関係する衣服の色は、光により演出される。繊維・布による光の反射・吸収・透過現象、布の紫外線遮蔽効果、紫外線による繊維の劣化・変色など、光と繊維との関わりについて科学的理解を深める。UV カット繊維製品の原理等についても考察する。	同上	同上
11	染色と変退色	繊維が衣服に用いられるためには、染色でできることは重要な条件である。染色性、発色性、染色物の変退色、色の堅牢性などは、繊維と染料の組み合わせによりさまざまである。これらに関する原理について理解する。	同上	同上
12	洗濯の科学（１）	衣服の着用による汚れは衣服の機能を低下させる。汚れを除去してその機能を回復させるために洗濯が行われる。まず、衣服に付着する汚れについて、次に基本的な洗浄プロセス、洗濯用洗剤、洗剤の働き、洗浄のメカニズムなどについて科学的理解を深める。	多賀谷久子（滋賀大学教授）	多賀谷久子（滋賀大学教授） 酒井　豊子
13	洗濯の科学（２）	省資源・省エネルギーのもとで、衣類のライフサイクルを可能な限り長期化していくことが重要である。実際の洗濯における洗浄力評価、洗濯条件、漂白・増白、溶剤洗浄などの基本的事項を理解し、資源・環境に配慮した洗濯のあり方について考察する。	同上	同上
14	洗濯と環境	洗濯は衣類の損傷、水・洗剤・電力の消費、洗濯排水、溶剤などによる環境負荷を伴う。環境負荷削減にはそれらを正確に評価し、正しく認識することが重要である。それらの環境影響評価の研究事例をいくつか紹介し、洗濯のあり方について考察する。	同上	同上
15	繊維資源と衣生活	日本で消費される衣服の実情と衣服の廃棄について、種々の統計資料に基づき分析し、現在の衣生活と繊維資源とのかかわりを、環境保全、生活の平準化などの視点から考察する。	酒井　豊子	酒井　豊子 牛腸ヒロミ

＝アジアの風土と服飾文化（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　道明三保子（文化女子大学教授）〕
〔主任講師：　田村　照子（文化女子大学教授）〕

全体のねらい

アジアの服飾文化は、気候風土・生活様式・風習・宗教・文化交流などを反映し、アジア各地の民族や地域ごとに独特のものを生み出してきた。服飾文化はとりわけ風土と密接な関係がある。本講では、アジアの服飾を取り上げ、自然環境と文化環境の背景と関連させながら、各地域の服飾の素材・形態・縫製・装飾技法・装飾文様・付属品・装身具などの観点から特色をさぐり、いくつかのテーマを選びアジア全体を比較する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「序論　風土と服飾文化」	アジアの服飾文化は、気候風土・生活様式・風習・宗教・文化交流などを反映し、アジア各地の民族や地域ごとに独特のものを生み出してきた。服飾文化はとりわけ風土と密接な関係がある。本講では、自然環境と文化環境の背景と関連させながら、各地域の服飾について資源・形態・縫製・装飾技法・装飾文様・付属品・装身具などの観点から特色をさぐり、いくつかのテーマを選びアジア全体を比較し、アジアの服飾の過去・現在を検証し、未来を展望する。	道明　三保子（文化女子大学教授） 田村　照子（文化女子大学教授）	道明　三保子（文化女子大学教授） 田村　照子（文化女子大学教授）
2	「東アジア」	温帯に属し四季に恵まれた東アジアでは、袷、単、綿入れなど季節により衣服が変わり、重ね着に適した前開き型衣服が多い。その代表格である日本のきものや中国の袍、韓国のチマ・チョゴリなどを取り上げ、四季の文様や吉祥文様など東アジア独特の表現や身分階級の標識として服飾の果たした役割などについて述べる。また旗袍からチャイナドレスへの変遷、チマ・チョゴリの現代生活における位置などについて考察する。	道明　三保子 田村　照子	道明　三保子 田村　照子
3	「東南アジア」	タイ・ラオス・カンボジア・ミャンマー・マレーシア・インドネシア・フィリピンなど、東南アジアは気候的にはアジアモンスーン気候に属し、高温多湿の気候風土にあって、体熱放散型の腰巻衣を基本とする服飾を特徴とする。素材は綿、麻などを中心とする織物で、その染織技法は地域によりきわめて多彩である。腰巻衣の形式、染織の差別化・宗教等との関係について考察する。服飾文化の伝播と変容を、気候と風土、政治・宗教など周辺条件との関係において論じる。	同　上	同　上
4	「南アジア」	高温多湿地帯のインドでは、女性のサリーや男性のドーティなど一枚の布を巻付ける衣服が発達した。風が通りやすくゆったりとしていて体を締め付けず、発汗と蒸発を促す衣服型式といえる。またインドの人々は、裁断したり縫ったりしない布こそ清浄であるとみなしている。服飾に使われたインド各地の特色ある染織とその技術を紹介するとともに、パキスタン、ネパール、ブータンの風土と服飾文化を取り上げる。	同　上	同　上
5	「西アジア」	砂漠と草原、オアシス地域からなる乾燥地帯では遊牧生活をおくる人々が多い。かれらは風通しがよく動きやすいゆったりした貫頭型の衣服を着る。イスラム世界とも重なり、女性のヴェールは必需品だ。また財産、お守り、装飾として特に既婚女性に欠かせないのが装身具である。ここでは地方ごとの特色を示すパレスチナ地域の服飾と、部族ごとの特色を示すアフガニスタンの服飾を取り上げてみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	「中央アジア・北アジア」	中央アジアと北アジアは、ウラル山脈とカスピ海を結ぶ線の東から、シベリアにいたる広大な地域であるが地続きであるだけに、文化的・民族的に密接な交流がなされてきた。また、東西南北の文化交流の重要な交通路にあたり，生活文化にさまざまな要素が取り入れられた。砂漠や草原、オアシスが連なり過酷な自然条件のもとでシルクロード文化が開花させた中央アジアの服飾、極寒のシベリアにおける生活と服飾などを、それぞれの気候風土のもとに、過去の歴史と関連させつつ現代の状況を取り上げ、諸民族がどの様に交流し影響を与えてきたかをさぐる。	田村　照子	田村　照子 ゲスト 加藤　定子
7	「伝統服飾にみる機能性」	アジアの服飾文化の多様性を生み出す要因、特にその生活様式の相違が、服飾の機能性にどのような変化をもたらしているかを探る。たとえば下半身を覆うパンツにはさまざまなバリエーションが見られる。気候はもとより、日常の起居動作、床座、椅子座、騎馬生活、などとの関係、あるいは布幅との関連から来る裁断の合理性、上衣との関係から来る装飾性などである。同様に袖や上衣のパターンから、その運動機能性についても触れたい。	同　上	田村　照子
8	「被り物・履物」	見る・聞く・嗅ぐ・食べるそしてあらゆる感覚を制御統括する脳を含む、人体の部分でもっとも重要な頭部、この重要な頭部は服飾の中でいかに扱われてきたのだろうか。被り物を取り上げ、帽子・ヴェール・スカーフ・チャドル・ターバンなどを、防護機能・装飾性・象徴性などの観点から考察する。さらに、頭部と反対の足元に着目し、履物の機能性・装飾性についても分類整理し、アジア各地の気候風土との関係を検討する。	道明　三保子 田村　照子	道明　三保子 田村　照子
9	「装身具」	装身具は身を美しく飾るだけでなく、身分階級の標識、招福や護符、魔よけとして使われる。日本人はあまり装身具を身に付けないが、他のアジアの地域では特に既婚女性にとって一揃いの装身具が欠かせない所が多く、結婚の際に調える。装身具にはさまざまな種類や素材が見られるが、圧倒的に多いのが銀製品で、遊牧民は財産として装身具を身に付けて移動する。アジア各地の装身具の特色を示すとともに、それらの基本的な製作技術について取り上げる。	道明　三保子	道明　三保子
10	「服飾文様と装飾技法」	アジアの服飾において文様は重要な要素である。一枚の布の衣服や平面的な構成の衣服が多いので、文様を効果的に表現することができるのである。文様の果たす役割として、民族や身分階級の標識、招福、お守り、魔よけなどが、装飾効果とともにあげられる。風土や生活を反映し、地域によって独特の文様があり、深い象徴的意味を持つものも少なくない。またペイズリー文様のように、時代によって変容をとげ他地域まで広く伝播するものもある。服飾に文様を表現するために、絣、絞り、綴れ織り、ろうけつ染め、型染め、刺繍などさまざまな技術が駆使されてきた。中でもどの地域どの民族にも見られるのが刺繍で、その特性についても考察する。	同　上	同　上
11	「色」	アジアでは、中国の五行説における白・赤・黒・青・黄の用いられ方など民族の宇宙観がこめられたり、色ごとに特定の意味や象徴性が与えられたり、階級の識別にも色が重視された。それらは服飾の上にも反映されてきた。そうした例を挙げながら、各地域の特徴となる色は何か、を考察したい。さらに、それらアジアの色がシルクロードを通って集積され、日本の伝統模様の色のオリジンとなっていること、それらの色を作り出すアジアの天然染料についても述べる。	道明　三保子 田村　照子	道明　三保子 田村　照子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	「資源と服飾」	服装の原材料は繊維である。現在も使用される代表的な天然繊維、麻、絹、羊毛、綿はそれぞれ世界の４大文明の発祥地であるエジプト、中国、メソポタミア、インドで発見され、いずれも繊維から糸、織物、衣服へと構成されている。本章ではまず、現代の合成繊維にまで継続するこの繊維という服飾素材の持つ意味を考え、さらに、各地域の気候とそこで入手できる素材、服飾文化との関係について検討してみたい。さらに骨や角、毛皮や貝などの動物素材や金属やガラスなど、繊維以外の素材の使われ方についても触れたい。	田村　照子	田村　照子
13	「生活の洋風化がもたらしたもの」	アジアの伝統的な服飾文化は、欧米文化を取り入れ生活が洋風化につれて少しづつ消えようとしている。アジア各地の現代社会において伝統服飾はどのような変遷を経てきたか、どのように位置づけられているか、洋服とどのような関わりをもってきたか、具体例に触れながら考察する。	道明　三保子	道明　三保子
14	「アジアの服飾と政治経済」	服飾文化は時代と共に変化し続けている。その外的要因はさまざま考えられるが、本章では松本由香子氏をゲストに迎え、インドネシアの現代モードがインドネシアの国家としての新しい枠組みにいかに位置づけられ、国民の民族的アイデンティティの創造につながっているか、いわば服飾文化の政治性について紹介していただく。一方、もう一人のゲスト樫永真佐夫氏には、ベトナム少数民族の生活における、市場経済化の波がもたらす変化について紹介していただき、政治や経済と服飾文化の変容について考えたい。	田村　照子	田村　照子 ゲスト 松本　由香 （高知女子大学助教授） 樫永　真佐夫 （国立民族学博物館助手）
15	「服飾文化の継承」	現代社会・未来社会において民族の伝統服飾文化はどのような価値を持っているか。生活文化・生活資材のグローバル化の中で伝統的服飾文化はどのように生き延びていくか、民族の誇りを確立し女性の自立を目指す中で、伝統的な服飾文化はどのような役割を果たしているか、アジア各地での様々な例を紹介する。	道明　三保子 田村　照子	道明　三保子 田村　照子

＝　服飾と心理（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　藤原　康晴（放送大学教授）〕
〔主任講師：　中川　早苗（広島国際学院大学教授）〕
〔主任講師：　伊藤　紀之（共立女子大学教授）〕

全体のねらい

私たちは毎日ごく当たり前のように衣服を着用し，髪を整えたり，髭をそったり，化粧をしたりという行為を繰り返している。本稿ではこのような着る・装うという行為が，人間にとってどのような意味をもっているのか，社会の中でどのような役割を果たしているのか，人間と服飾と社会との関わりを心理的，社会的，文化的な視点から考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	服飾の心理的作用	衣服をはじめ手袋や靴下，帽子や靴，アクセサリーなど身体につけるものを被服と称している。ここでは，被服とともに髪型や化粧，身体加工などを含めて服飾と定義し，服飾と当人とのかかわり，服飾と他者とのかかわりなど服飾の多様な心理的作用について具体例をあげて考える。	藤原　康晴（放送大学教授）	藤原　康晴（放送大学教授）
2	服飾への欲求・動機	被服には多くの機能があるが，「被服は人間の身体以上に人間の心を保護している」といわれているように，社会的・心理的機能が重視されている。今日，服装の個性化が進行しているとはいえ，実際の個々人の服装では，当人の個性だけでなく，他者の評価を推し量って決められることが多い。この視点から，いくつかの服装に関する規範を取りあげ，それに作用する要因を考えることをとおして服飾への欲求・動機について理解を深めたい。	同　上	同　上
3	服飾の知覚と心理	私たちはいつも服飾を介して他者とのコミュニケーションを図っている。つまり服飾を介してお互いに見る・見られる関係にあるために，服飾が知覚に及ぼす心理的効果について知ることは，自己表現や印象形成などについて考える上でも重要な手かがりとなる。ここでは，形態や色彩が知覚に及ぼす心理的効果について錯視の問題も含めて述べるとともに，服飾の構成要素である形態と色彩が知覚に及ぼす心理的効果について考える。	中川早苗（広島国際学院大学教授） 伊藤紀之（共立女子大学教授）	藤原　康晴（放送大学教授） 中川早苗（広島国際学院大学教授） 伊藤紀之（共立女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
4	服飾が感情におよぼす効果	視覚によって知覚された形態や色彩は，それまでの経験や知識などの記憶とともに見る人の感情に強く働きかける作用がある。ここでは，形態や色彩が感情におよぼす効果について述べるとともに，服飾の形態，色彩，テクスチャーが感情におよぼす効果とそれによって形成されるイメージについて考える。	中川　早苗（広島国際学院大学教授）	中川　早苗（広島国際学院大学教授）
5	服飾の着装と心理	私たちはその日の服装や化粧，髪型などによって，気分がうきうきと華やいだり，リフレッシュしたり，引き締まったり，安らいだりといったことを経験する。ここでは着装する服飾によってどのような感情や気分が生起するのか，また着装する服飾によって感情や気分がどのように変化するのかについて考える。	同　上	同　上
6	化粧の心理的効果	肌の色や瞳の色、口元や目鼻立ちなど顔の構造は、容易には変えることができないために，古くから化粧が用いられてきた。化粧による心理的効用には，対人魅力の向上，変身願望の充足，気分の高揚，自己満足など計り知れないものがある。ここではこのような化粧の心理的効果について考える。	大坊　郁夫（大阪大学教授）	大坊　郁夫（大阪大学教授）
7	服飾に対する認知	情報伝達には，主に言語が用いられるが，表情や身振り，服飾なども性や年齢，社会的役割，状況などに関連した情報を伝達する。ここでは，対象者の服飾の評価およびその服飾を手がかりとして認知される事柄を対象者と観察者の関係の既知，未知別にまとめ，それぞれの事柄について実験室的研究を基に，日常生活における服飾に対する認知の実際を加えて考察する。	藤原　康晴（放送大学教授）	藤原　康晴（放送大学教授）
8	服飾の流行と心理	服飾の歴史は流行の歴史といっても過言ではない。つまりかっては流行といえば服飾の流行をさすほど流行は服飾の世界において顕著に見られた現象である。ここでは，流行がなぜ服飾の分野において顕著にみられるのか，その要因について心理的な面を中心に紹介するとともに，戦後の日本における服飾の流行について，色彩と素材の面から考察する。	中川　早苗（広島国際学院大学教授）	中川　早苗（広島国際学院大学教授）
9	戦後ファッションにみる世相と心理	ファッションは時代を映す鏡であると同時に心を映す鏡でもある。私たちは服装史に登場する数々のファッションにその時代の社会や文化の状況をみることができるが，同時にその時代の人々の服飾に求める心理をうかがい知ることができる。ここでは，真の洋装時代が始まったわが国における戦後の服飾の変遷をファッションの視点から概観し，それぞれの時代のファッションが表現する心理的，社会的，文化的な意味について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
10	パッチワークキルト―開拓時代の心―	アメリカのパッチワークキルトは使い古された衣服の残り裂を利用して作られたベッドカバーである。そこには家族の歴史，地域社会とのつながり，生活の姿が読み取れる。また，切り継ぎされた布は過去の繊維と染料の実物であり，貴重な服飾資料である。キルトから開拓時代の諸相を考える。	伊藤　紀之（共立女子大学教授）	伊藤　紀之（共立女子大学教授）
11	寄せ裂と刺し縫い―古布，古裂にみる心情―	生前愛用した着物を解き，供養のために縫い合わされた打敷，生まれた子どもの成育を願い，端裂を集めて作られた百徳着物，端裂で作られた盆踊りの衣裳や五穀袋。厳しい生活から生まれたこぎんや刺子，刺しで補強された粋な火事羽織。それらをとおして人々の願い，心情を考える。	同　上	同　上
12	小袖ときもの―反映された女性の心―	江戸時代の武家女性の小袖・帷子，町人女性が着用したと考えられる打掛，公家女性の小袖・帷子，明治時代のきものへの移り変わり，それらの服飾資料をもとに，当時の女性の心を考える。	長崎　巌（共立女子大学教授）	長崎　巌（共立女子大学教授）
13	ファッションプレート―憧れと伝播―	豊かな衣への憧れが，繊維を中心とした産業革命を発展させた。技術の向上と生産の拡大に歩調を合わせるように，流行を予想し，伝えるファッションプレートが生まれた。18 世紀末からファッションが大衆化する 20 世紀初頭まで継続したファッションプレートをとおして，服飾への憧れ，思いを考える。	伊藤　紀之（共立女子大学教授）	伊藤　紀之（共立女子大学教授）
14	浮世絵―定点からみた服飾変遷と心情―	浮世絵は庶民の生活をさまざまな視点で描いている。春信によって多色摺り木版画が完成されて以降，大量の作品が作られ，江戸の姿を今日に伝えている。明治になっても継続され，新たな視点から描かれた。浮世絵に描かれ続けた地域を定点観測地として，服飾の変遷と心情を考える。	同　上	同　上
15	服飾の心理学的研究の社会への応用	服飾と心理に関してさまざまな視点から学習してきた。これらの内容の社会的意義として，被服の製造，販売，購入への応用がある。最近，体型測定機器や被服を仮想的に着用できる技術の進歩が著しく，個々人の体型や好みにマッチしたオーダーメイドの被服を容易に入手できる環境が整いつつある。この現状と課題について解説する。	藤原　康晴（放送大学教授）	藤原　康晴（放送大学教授）

＝世界の食糧問題とフードシステム（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師　：時子山　ひろみ（日本女子大学教授）〕
〔主任講師　：荏開津　典　生（千葉経済大学教授）〕

全体のねらい

世界の人口は、1900 年の約 16 億人から 2000 年の 60 億人へと、爆発的に増加した。人口の増加と平行して、食料生産も急速に増加した。しかし、21 世紀を迎えた現在も、世界の食料経済にはいろいろな問題がある。貧しい国の飢餓と、豊かな国の飽食とにひそむ問題を、広く経済学的に考察する。とりわけ、フードシステムと呼ばれるようになった豊かな国の食料システムについては、日本を対象として詳しく考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食料経済の光と影	激増する世界人口を養うために、20 世紀の食料生産は驚異的な収量の増加を達成した。しかし現在も、世界には数億人の栄養不足に苦しむ人々がいる。また、豊かな国々の成熟した食生活の内にも、いろいろな問題がひそんでいる。	荏開津　典生（千葉経済大学教授）	荏開津　典生（千葉経済大学教授）
2	人口爆発	世界の人口は、1900 年の約 16 億人から 2000 年の 60 億人へと、驚くべき速度で増加した。その原因は何か、そしてその爆発的な増加トレンドはいつまで続くと予想されるのだろうか。	同　上	同　上
3	緑の革命	食料の基本は穀物である。20 世紀の人口爆発を支えたのは、穀物生産の画期的な増加であった。とりわけ「緑の革命」と呼ばれる米や小麦の高収量品種の開発によって、東南アジアの穀物生産は飛躍的に増加した。	同　上	同　上
4	世界の食料市場と食糧政策	食料も基本的には商品として生産され販売されている。しかし食料は絶対的必需品であると同時に、その生産は現在でも自然条件によって大きく左右されるので、世界の食料経済に対しては、様々な政策的介入が行われている。豊かな国における国内農業の保護や、飢餓に苦しむ国に対する食料援助などは、食料市場の重要な特色である。	同　上	同　上
5	戦後日本の食糧問題	1945 年、戦争による荒廃に悪天候が重なって、日本の食糧事情は飢餓に近いどん底に陥った。しかしその後、アメリカによる食料援助と、農地改革や土地改良等の自助努力をかさねて、1955 年には米は史上最高の豊作となり、食生活はほぼ安定した。	同　上	同　上
6	食生活の成熟とフードシステム	日本の食生活は、1960 年代以降急速に成熟し豊かになった。伝統的な「米と魚と野菜」中心から畜産物消費が進み、70 年代にはバランスのとれた「日本型食生活」が成立し、これと平行して従来の農業中心の食料経済は、食品産業に重点をおくフードシステムに移行した。	時子山ひろみ（日本女子大学教授）	時子山ひろみ（日本女子大学教授）
7	食料消費パターンの変化	食生活の変化を消費する食品の変化として見てゆくと、食生活は、高級化、多様化、簡便化、健康安全指向の４つの明確な方向へ変化している。特に食生活の簡便化は生活のあらゆる面に大きな影響を持っている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	家族の変化と食生活	高度成長を期に日本の人口構成と家族構成は大きく変化している。食生活は、フードシステムの変化と家族の変化との両面に影響されるが、逆に食生活の外部化が家族のあり方に深い影響を及ぼしてゆく面もある。	時子山ひろみ	時子山ひろみ
9	日本のフードシステム	フードシステムとは、原材料である農水産物の生産から、最終的に食品が消費者に届くまでの全ての経済活動である。全課程を一つのシステムとしてとらえるとともに、特に消費者と食品産業の相互関係に注目する。	同　上	同　上
10	日本の農水産業の変化	すべての食料の源泉は、農業と水産業である。ここでは水産業は省略し、日本農業の現状と問題点について述べる。日本は世界でも一人当たり農地面積が最も小さい国のひとつであり、そのために食糧自給率の低下、国際競争力の弱さなどいろいろの問題を抱えている。	荏開津　典生	荏開津　典生
11	食品加工業とイノベーション	食品加工業は、少数の大規模企業と多数の小規模企業から構成されるという特徴を持っている。市場での激しい競争が、消費者の求める新しい製品開発につながると同時に、食品の安価で毎日消費する経験財という性質から食品加工業では多額の広告費が使われる。	時子山ひろみ	時子山ひろみ
12	食品流通業と流通革命	食料の生産者と消費者を結ぶ食品流通業では、従来の食品専門店から大規模なチェーン店に代わっている。情報技術に支えられたこの流通革命は食品産業と消費者の双方に様々な影響をもたらしている。	同　上	同　上
13	外食産業とファーストフード	食生活の中で最大の変化である簡便化によって、家庭内調理が減り、調理は大幅に外部化されている。外食産業や惣菜や持ち帰り弁当などを供給する中食産業による便利な食生活の問題点も指摘されている。	同　上	同　上
14	飽食の内にひそむ問題	フードシステムの最終目的は消費者の望む食生活の実現である。豊かな食生活を実現した日本では、実際に消費者は望ましい食生活を送っているのだろうか。肥満、生活習慣病、食品の安全性、資源・環境問題など多くの問題が残されている。	同　上	同　上
15	21 世紀の食糧問題－市場と政府	21 世紀を迎えた現在、人類社会はなおその食糧問題を解決したとはいえない。農産物の過剰や肥満に悩む少数の豊かな国の陰には、慢性的な栄養不足に悩む貧しい国々がある。食糧問題の解決には、市場経済と賢明な政策との協力が必要である。	荏開津　典生	荏開津　典生

＝日本の食文化（‘０４）＝（ＴＶ）

〔主任講師：　原田　信男（国士舘大学教授）〕

全体のねらい

日本における食文化の在り方を、世界的な視野で見直すとともに、その歴史的な背景を学ぶことで、我々の生活文化にどのような特色があるのかを理解する。食文化は、単なる民族の嗜好ではなく、むしろ日本社会の長い歴史のなかで形成されたものである。本講義では、食物の獲得と生産、食事作法、料理文化さらには地域差など、食文化のさまざまな位相について、日本のおける実態と特色を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	食文化の日本的特質	食を抜きにして、人間の生活や社会は存在しえないが、その実態と特質は余り知られていない。まず世界史的な視野から、東西の食文化の違いを認識し、その上で、日本が属する東アジアの風土と食文化の特色を考える。日本の食文化が、その地形・気候と幅広い文化交流のなかで成立したことを理解する。	原田　信男（国士舘大学教授）	原田　信男（国士舘大学教授）
2	食文化史Ⅰ・先史	日本列島における食文化の原像を考える。旧石器時代の食べ物や食料獲得の実態を押さえ、それが縄文土器の登場によってどのように変化したのか。また狩猟や漁撈の発展、さらには弥生における水田稲作の本格的展開、古墳時代の大陸文化の伝来によって、どのような食文化が展開したのかを理解する。	松井　章（奈良国立文化財研究所主任研究員・京都大学助教授）	松井　章（奈良国立文化財研究所主任研究員・京都大学助教授）
3	食文化史Ⅱ・古代	中国文化の影響を受けて成立した古代律令国家が、どのような食糧政策を採ったかを、法令や神話・祭祀などを通じて、米と肉の問題を中心に考える。また日本料理の成立について、どのような特色があったかを、大膳職・内膳司の問題や、平安貴族の饗宴である大饗料理の在り方などから検討する。	原田　信男	原田　信男
4	食文化史Ⅲ・中世	古代に成立した米を至上とし、肉を穢れたものとする価値観が、中世を通じて、どのように社会に浸透していくのかを明らかにする。また公家・武家・寺社家の料理文化を考えるため、庖丁流派の形成や茶の湯の発達、食品の全国流通などの問題を踏まえ、精進料理・本膳料理・懐石料理の特色を検討する。	同　上	同　上
5	食文化史Ⅳ・近世	近世における食生活の実態を考えるとともに、幕府法令などによって、どのような規制を受けていたのかを理解する。また、中世後期にほぼ完成した日本の料理文化が、近世にどのような展開を遂げるのかを、茶の湯・料理書・料理屋の問題を中心に検討した上で、化政期における盛況の実態を明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	食文化史Ⅴ・近代	西洋文明の流入によって、それまでの食生活がどのような変貌を遂げていくのかを明らかにする。西洋料理がどのような形で、日本に入り、肉食の問題を含めて、どのように人々の間に受容されていくのかを、日本の近代化という視点から、軍隊生活や学校教育・工場労働などの問題に触れつつ考える。	高田　公理（武庫川女子大学教授）	高田　公理（武庫川女子大学教授）
7	食文化史Ⅵ・現代	戦後日本の食文化について、食糧難の時代から、高度成長を経て、今日の飽食・グルメ時代に至る過程を振り返る。食糧統制や闇市の問題をはじめ、アメリカの食料援助、台所の近代化、インスタント食品・チルド食品の登場、グルメ番組などのメディア情報、ファミレスやコンビニ等々の問題を取り上げる。	同　上	同　上
8	北海道の食文化	日本のなかでも、長く異域としての位置にあった北海道では、アイヌの人々が狩猟・漁撈や採取による食生活を営み、一部では農耕も行っていた。その食文化の特色を、和人の食文化と比較しつつ検討し、北方に暮らす人々独自の生活の知恵を学ぶ。また近代以降に移住した和人の食文化についても触れる。	原田　信男	原田　信男
9	沖縄の食文化	沖縄もまた、日本からは長く異国として扱われ、独自に中国との交流を行ってきた地域である。このため沖縄では、中国料理や日本料理の影響を受けつつ、独自の食文化が形成された。日本のなかでは、北海道と同様に肉食文化が栄えた点が注目される。その食文化の形成と特色を、ヤマトとの比較で論じる。	同　上	同　上
10	考古遺物と食文化	これまで食文化の研究は、主に文献史料によって行われてきたが、近年発達が目覚ましい考古学の立場から、文献では抜け落ちてしまう問題を扱う。眼に見えにくい花粉や種子、少数ながら残存する動物の骨、トイレの糞に混じった食物の残滓などから、今まで知られなかった食文化の位相を明らかにする。	松井　章	松井　章
11	民俗慣行と食文化	日本の食生活では、四季折々に食べ物の変化があり、しばしば共同飲食が催される。また家々の年中行事や人生儀礼の場でも、さまざまな食べ物が用意されたり、村々の祭りにおいても、村人が寄り合って、芸能などとともに食を楽しむ風景が見られる。こうした食の民俗や、食事作法の問題についても論じる。	神崎　宣武（旅の文化研究所所長）	神崎　宣武（旅の文化研究所所長）
12	食器と食文化	食事をするための器は、単なる用具ではなく、彩りや盛付けに心を配って、食の美学の演出に重要な役割を果たしてきた。食事用具を構成する箸や膳、皿や椀などの機能と役割のほか、木器・土器・陶磁器・漆器など、材質による使い分けも、食文化を考える上で、重要な問題となる。それらの意義を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	調理具と台所の文化	食べ物を調理する調理具もまた、食文化の重要な構成要素で、その系譜や歴史についても理解しておく必要がある。また調理の空間である台所も、時代や地域によって大きく異なり、それぞれの食文化の在り方と密接に関係している。ここでは日本における調理具と台所の文化を、世界各地との比較で論ずる。	山口　昌伴（GK 道具学研究所所長）	山口　昌伴（GK 道具学研究所所長）
14	アジアと日本の食文化	日本は、大きく見れば、やはりアジアの一部で、食文化についても、全く個別的に独自な発展を遂げたわけではない。あくまでもアジアの食文化圏のなかで考える必要があるが、その際に、アジア全体に共通するものと、地域的な限定を持つものとを比較検討し、アジアと日本の食文化の特質について論ずる。	森枝　卓士（札幌大学非常勤講師）	森枝　卓士（札幌大学非常勤講師）
15	和食と日本文化	これまでの講義を踏まえた上で、いわゆる和食と呼ばれるもの実態と本質を検討し、日本の食文化全体について考える。さらには食文化を中心に据えつつも、衣や住を含む生活文化の日本的な特質について、外来文化との関係から、その形成と展開を跡づける。和食から見た日本文化の特質について論じたい。	原田　信男	原田　信男

＝食品の成分と機能（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　上野川　修一（日本大学教授）〕
〔主任講師：　今井　悦子（聖徳大学教授）〕

全体のねらい

食品の成分は、からだを構成している細胞の材料となったり、あるいはエネルギー源となる。しかし最近になり、それればかりではなく免疫系、内分泌系、神経系などのからだの調節系に作用し、健康の維持に貢献することが明らかとなっている。本講義ではこのような食品の新しい機能性成分について、その構造、その作用機構、そしてこれらの成分を含む機能性食品を通じての疾病の予防などについて述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	食と健康	日本人の平均寿命は世界で最も長くなっている。その背景には日本人の食生活において、植物性食品と動物性食品、両者の食品・栄養学的なバランスがとれたことがある。しかしながら、最近になって生活習慣病といわれるがん、血液系疾患などが増加しつつあることも事実であり、そのほとんどが食生活の偏りに原因している。したがって、食生活に充分に配慮することが健康の維持に必要なことである。	上野川　修一（日本大学教授）	上野川　修一（日本大学教授） 今井　悦子（聖徳大学教授）
2	タンパク質	人は体タンパク質合成のため、またエネルギー源として食品タンパク質を摂取しているが、注目される機能性成分にはタンパク質由来物質が多い。それらがどのようなものであるのか、基本特性を概説する。食品タンパク質の構造とその変化、分解によって生成するペプチドなど。	今井　悦子（聖徳大学教授）	今井　悦子（聖徳大学教授）
3	炭水化物	人が摂取する栄養素のうちもっとも摂取量が多いのが炭水化物である。炭水化物はエネルギー源として主たる成分であると同時に、難消化性炭水化物は機能性成分として重要である。ここでは炭水化物の種類と構造の他、難消化性オリゴ糖について詳しく解説する。	同上	同上
4	脂質	日本人の資質の過剰摂取傾向に警笛鐘がなり始めてから久しい。生体内での過酸化脂質とさまざまな疾患、老化との関係が取り上げられており、食品においても生体においても脂質の酸化を可能な限り防ぐことが重要である。ここでは脂質の構造や酸化の機構の基礎などを概説する。	同上	同上
5	微量成分	ビタミンとミネラルを中心に、栄養素以外の様々な微量成分も含めてその構造など基本的な性質を概説する。これらの中からも多くの機能性が見い出されている。近年特に注目されている成分にポリフェノールがある。ポリフェノールとはどのようなものをさすのか、その定義、種類構造などについても解説する。	同上	同上
6	免疫系を調節する成分	食品成分、そして病原細菌などは時に同時に経口的に体内に入り、腸管に達する。病原細菌はそこで繁殖し、からだに傷害を与えることがある。そのため、腸管にはからだのなかで最大の免疫システムが備わっており、このシステムは病原菌は排除するが、食物等がからだによいものは排除しないと特別な機能を持っている。また一方で、食品成分のなかには、この腸管の免疫系や全身の免疫系の働きを高める多くのものがある。	上野川　修一	上野川　修一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	食品アレルギー	アレルギーとは、免疫系のバランスが崩れ、本来自分を攻撃することのない免疫系が自らを傷つけてしまう疾病である。食品アレルギーは食品成分を原因物質とするもので、乳幼児に多く発症し、卵、エビ、カニなどによって発症することが多い。現在、その発症する頻度は乳幼児の場合、10%近くになる。一方、食品成分の中には、プロバイオテックスなど、アレルギーを抑制する成分がある。	上野川　修一	上野川　修一
8	抗がん、抗感染に役立つ成分	がんの発症と食品成分の間には極めて密接な関係がある。また、がんの予防にも多くの食品成分が関与している。がんはイニシエーション、プロモーションの段階を経て発症する。これらそれぞれの段階に抑制的に作用して発がんを抑える植物性食品由来の成分が多く知られている。またビタミンやミネラルなどを中心とした、免疫系を賦活し、病原細菌による感染を抑える抗感染食品成分についても述べる。	同　上	同　上
9	循環系・内分泌系を調節する成分	動脈硬化は、脂質代謝異常や不適切な食事に起因する血清脂質濃度の上昇ー血管壁での細胞機能亢進等が原因でおこる。コレステロール等の吸収抑制活性を持つタンパク質やペプチド、食物繊維等がその予防に有用と期待されている。高血圧の成因は複雑だが、血圧上昇を導く酵素の阻害活性を持つ食品由来ペプチドが牛乳や魚肉中に見出された。また、糖尿病予防を目指し食品による糖の腸管吸収やインスリン分泌の調節が検討されている。	清水　誠（東京大学教授）	清水　誠（東京大学教授）
10	消化吸収・促進と整腸に役立つ成分	カルシウム等の無機栄養素の腸管吸収を高める食品成分として、牛乳由来ペプチドやオリゴ糖が知られている。一方、便秘や下痢の予防をはじめ、食中毒菌による腸管感染や発ガンを予防するものとして腸内微生物の存在が注目されている。腸内微生物のバランスを改善するための生きた乳酸菌など（プロバイオティックス）や、有用菌の増殖を促進する難消化性食品成分（プレバイオティックス）の研究が進み、一部は商品化されている。	同　上	同　上
11	酸化傷害を抑える成分Ⅰ	呼吸により1日に500リットル以上も体内に取り込まれる酸素は、われわれ人間の生命活動に必須である反面、過剰に生じた活性酸素・フリーラジカルはタンパク質や脂質、核酸など生体構成物質を攻撃し、酸化傷害の原因となる、いわゆる諸刃の剣である。過酸化脂質や酸化修飾タンパク質・核酸などの構造と機能、酸化傷害のメカニズムについて概説する。	大澤　俊彦（名古屋大学教授）	大澤　俊彦（名古屋大学教授）
12	酸化傷害を抑える成分Ⅱ	「がん」をはじめ「生活習慣病」と呼ばれる疾病の予防に関する食品抗酸化成分は、特に植物性食品素材に多く含まれている。香辛料やスパイス、穀類や豆、ナッツ類、野菜や果物、お茶やココア、赤ワインなどの嗜好品や大豆発酵食品など多種多様な素材から、リグナンやフラボノイド、アントシアニンをはじめとするポリフェノール、また、カロテノイドなどの抗酸化成分の化学と機能性について解説し、臨床試験や介入研究の最近の動向についても併せて考える。	同　上	同　上
13	機能性食品科学の誕生と発展	機能性食品、または機能性食品科学は、日本から世界に向けて発信された。これらが誕生するに至った背景、どのような形で誕生したか、その後どう発展し、将来的に何を目ざすのか等を解説する。世界的にはどのように受け入れられ、今どのような状況にあるのかもあわせて概説する。	荒井　綜一（東京農業大学教授）	荒井　綜一（東京農業大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	特定保健用食品と保健機能食品の制度化	2001 年にこれまで制度化されていた特定保健用食品に新しく栄養機能食品を加えて、保健機能食品制度が発足した。特定保健用食品とは、その成分として保健機能をもつものを有し、摂取することにより栄養を補給、補充し、生活の質の向上、健康の保持増進に役立たせることができる。その保健機能を表示できるものである。栄養機能食品は、栄養成分の機能を表示できるものである。	上野川　修一	上野川　修一
15	未来の食品	これからの食品について、どのような特性が望まれるのか、消費者はどのような観点から食品を選んでいったらよいかなどを考察する。それらに多くの示唆を与えてくれると考える沖縄の、長寿の秘密と現状も紹介する。	今井　悦子	上野川　修一 今井　悦子 清水　誠 大澤　俊彦

＝食品の安全性を考える（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：嘉田　良平（UFJ 総合研究所顧問）〕

全体のねらい

BSE 事件を直接の契機として、私たちの食の安全・安心が大きく揺らいでいる。そもそも食の安全とは何であり、世界一の食料輸入大国である日本に求められる制度や社会システムはいかにあるべきか。この講義では、欧米先進国での動向を踏まえつつ、食品リスクの現状と課題、食品安全基準や表示のあり方、政府の役割、そして身近な食卓からの食の安全確保の道筋について考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	なぜ今、食品安全を問うのか	BSE 事件を契機として、食品安全問題に国民的関心が高まっている。それは食品衛生上の科学的問題にとどまらず、消費者の安全意識や社会経済システムとも深くかかわっている。世界経済の国際化と規制緩和の中で食品安全は一体どうなるのか、そしてどうあるべきかについて考える。	嘉田　良平（UFJ 総合研究所顧問）	嘉田　良平（UFJ 総合研究所顧問）
2	食品事故の歴史に学ぶ	食品事故は古くて新しい問題である。わが国で起きた森永砒素ミルク事件、カネミ油症事件、　O157 などの主要な食品事故について、その経緯と背景、原因と対策などをたどりつつ、また、諸外国の経験を通して、食品安全問題の歴史から私たちが何を学べるのかについて考える。	同　上	同　上
3	わが国の食品安全行政の構図	わが国の食品安全対策は主に食品衛生法（厚生労働省）と農薬取締法（農林水産省と環境省）によっており、それらに基づいて残留基準や安全使用基準などが定められている。日本の食品安全にかかわるこれまでの制度的枠組みとその特徴や変遷、そして今日的な課題について論じる。	同　上	同　上
4	食品安全の国際基準	世界共通の食品安全基準として、国連の FAO と WHO 合同の食品規格委員会により定められるコーデックス基準（規格）がある。科学的データの分析に基づいて食品添加物や汚染物質の許容摂取量が示されるのであるが、国際貿易上のさまざまな対立も根深い。食品安全の国際基準のあり方を問う。	同　上	同　上
5	遺伝子組換え食品の安全性を考える	輸出入をめぐる国際間の競争と対立が激化する中で、バイオテクノロジー技術の進歩による新しい問題も浮上してきた。そこで牛成長ホルモンの使用の是非および遺伝子組換え食品の安全性評価をめぐる諸問題を取り上げ、そこから浮かび上がってくる問題の構図とわが国のあり方について考えたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	HACCP と ISO による安全管理への取り組み	食品安全の確保のための国際的なハーモニゼション（整合化）にむけて、民間企業が自発的に取り組むＨＡＣＣＰという安全管理の手法、そしてＩＳＯにおける品質管理面や環境管理面での国際標準の取り組みが注目されている。本章ではこれらの現状と課題について述べる。	嘉田　良平	嘉田　良平
7	欧州における BSE 対策と新たな食品安全政策	BSE 事件は欧州全体を巻き込む一大パニックとなったが、その教訓から欧州連合（EU）は 2002 年１月、画期的な食品安全法を制定した。消費者保護を第一の目的とし、リスク評価を行う食品安全機関を新たに設置したのである。EU の食品安全に向けた新たな挑戦について検証する	同　上	同　上
8	BSE 事件とわが国食品安全政策の新たな展開	2001 年９月に起きた BSE 事件の後、食品安全への不信と大混乱が日本列島を覆った。安全管理体制の欠如、消費者軽視の姿勢などの反省から、政府は食の安全・安心づくりに向けて法制度と行政組織の抜本的な見直しをおこなった。わが国の食品安全管理はいかにあるべきかについて考える。	同　上	同　上
9	食品表示問題と有機農産物について考える	BSE 問題とともに、食品の不正・偽装表示も一大社会問題となり、企業のモラルの低下と行政の責任が問われるに至った。消費者の商品選択に役立つ適正な表示はいかにあるべきか、有機農産物の規格と表示の問題について JAS 法の改正とともに論じる。	同　上	同　上
10	トレーサビリティー・システムの導入と課題	食品安全をより確かなものにするためには「農場から食卓まで」の顔の見える関係を構築することがきわめて重要である。そこで、わが国政府が検討を進めているトレーサビリティーや原産地表示の新たなシステムの意義と問題点、さらには食品表示の信頼性回復の実効性について論じる。	同　上	同　上
11	リスクコミュニケーションと企業・消費者の責務	食品安全政策においては、科学的分析に基づくリスク評価、食品衛生・表示等を実施するリスク管理に加えて、消費者や企業とのリスクコミュニケーションがきわめて重要である。リスクの評価・管理主体と消費者・企業との対話をどう円滑に進めるべきか、情報公開はいかにあるべきかについて考える。	同　上	同　上
12	食品安全の経済学	交通事故などと同様に、絶対に安全な（ゼロリスクの）食品はありえない。実際，消費者は限られた情報のもとで、安全の質や程度とコスト（費用）とのバランスの中で選択行動を行っている。なぜ食品安全では「市場の失敗」が起きるのか、効率的・効果的な食品安全政策とは何かについて論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	食卓からの安全・安心―スローフードのすすめ―	ファストフードが世界の食卓を変えつつある中、スローフードと呼ばれるイタリア発の食文化運動が国際的に注目されている。地域食材と伝統食を見直し、現代食のもつひずみを栄養・健康面、安全面、そして環境面から見直そうという「地産地消」運動である。その背景と意義、今後の展望を探る。	嘉田　良平	嘉田　良平
14	国産か輸入か―日本農業への期待―	世界有数の食料輸入大国であるわが国にとって、輸入食料の水際でのチェックは食品安全の重要ポイントであるが、国産農産物の安全検査と環境負荷面からの農法の見直しも不可欠である。より確かな安全・安心を得るためにも、日本農業を環境保全型へと転換せねばならない。その道筋を検討する。	同　上	同　上
15	食の安全をより確かなものとするために	生命の基礎をなす自然環境の悪化が地球規模で進む中、食品や食卓を取り巻くリスクもますます増大している。食品安全は、単に制度や政策を改めれば解決できるものではなく、市場システムや私たちのライフスタイルの転換をも求めている。食は生命と健康の基礎という原点に立って、今後を展望する。	同　上	同　上

＝住計画論（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　本間　博文（放送大学教授）〕
〔主任講師：　初見　　学（東京理科大学教授）〕

全体のねらい

私達の日常生活において、住まいのありようは生活の質を左右する重要な要件である。しかし社会の仕組みが多様化し、急速に変化しつつある現代社会において、自分達の家族生活に相応しい住まいを見つけることは簡単なことではない。それに加え、住宅に取り入れられる技術や使用される素材が次々と変化しており、問題解決を一層難しくしている。だからといって専門家に任せればよいというものではない。住まい手として基本的な知見を持って住まいにかかわるさまざまな問題解決に積極的に取り組んでいかなければならない。このようなねらいのもとに、本講義では前半で住まいに関わる基本的な知見を学習し、後半で具体的な事例をもとに安全、快適な、そして利便性に富み、健康な住まいのあり方を検証する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化・風土と住まい（1）	さまざまな国の住まいについて概説し、住まいが作り出す形態の多様性は、それぞれの地域の生活文化、慣習、気候、風土などの条件と密接にかかわり、必然性を持つことを述べる。	藤井　明（東京大学教授）	藤井　明（東京大学教授）
2	文化・風土と住まい（2）	韓国や中国の住まいを紹介して東アジア文化圏の中での日本の住まいの特性を明らかにする。	同　上	同　上
3	日本の住まいの変遷（1）	寝殿造から書院造への変遷過程をたどることにより和風の住まいは、どのような空間構成原理のもとに形成されているかを明らかにする。	本間　博文（放送大学教授）	本間　博文（放送大学教授）
4	日本の住まいの変遷（2）	明治以後、洋風の住まいが和風の住まいにどのような影響を与え、今日の日本の住まいとして定着することになるのかその過程をたどる。あわせて現代の住まいにおける和風の住まいの意味を考える。	同　上	同　上
5	環境にやさしい快適な住まい（1）	地球環境や都市環境と住まいの関係を考える。これからの都市づくり、街づくりの観点から生活の場としての建築外部空間を考える。	梅干野　晃（東京工業大学教授）	梅干野　晃（東京工業大学教授）
6	環境にやさしい快適な住まい（2）	わが国の気候風土のもとで環境と共生する住まいのあり方を考える。自然のポテンシャルを広くまんべんなく使うさまざまな手法を紹介しつつ、快適な室内環境を造りだすための条件を提案する。	同　上	同　上
7	住まいの構造と性能	なんと言っても住まいの基本的な性能は、住まいの構造（骨組み）に規定され、それを包み込む部材で構成された物としての建物による。住宅の構造や構法を概説し、住宅の安全性、快適性、機能性を考える。	上野　武（千葉大学助教授）	上野　武（千葉大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	住まいの空間構成とデザイン	現代住宅のデザインを考え、生活と空間構成、空間をつなぐ手法などについて概説する。	上野　武	上野　武
9	家族と住まい	家族の変容とさまざまな住まい方について考える。高齢化、世帯構成とライフスタイルの多様化などのキーワードをもとに、グループ居住、マルチハビテーション、SOHO やネットワーク居住の現状を探る。	横山　俊祐（熊本大学助手）	横山　俊祐（熊本大学助手）
10	集まって住む（1）－都市居住の形態	高密度化への対応（密度と集合形式）、都市集住の形態（超高層と中庭型）、都心回帰、複合化などの実態を解説し、新たな都市集住形態の創出を提起する。	初見　学（東京理科大学教授）	初見　学（東京理科大学教授）
11	住まいの集合（2）－コミュニティの形成	住まいの社会性、コミュニティの形成について考える。住宅団地における住棟とアクセス形式（リビングアクセスの実例）などを通じて住まいを開くことの意味を考える。	同　上	同　上
12	住まいの集合（3）－ライフスタイルの実現	住戸の計画を通して個別のライフスタイルと変化への対応を考える。スケルトンインフィル（SI）方式などの集合住宅の新しい空間構成手法によって可能になるフレキシブルな計画、居場所の創造など、居住者自身による生活空間創造の実態を報告する。	同　上	同　上
13	住まいづくりへの参加	住み手自らが計画に参画する。住まいに普段に働きかける。住みこなす。住み続ける。そして建て替えるといった、住まい自体のライフサイクルの各場面での住まい手の主体的なかかわり方を、いくつかの先端的な事例をもとに考える。	横山　俊祐	横山　俊祐
14	地域の中の住まい	住まいは、それが建つ地域の環境のもとで、その地域の資源を活用し、地域性を生かして造られる。あるいは住まいが地域を作る役割を担うこともある。先端的な事例を検証し、地域と住まいの関係性を報告する。	同　上	同　上
15	これからの住まい	あるべき住まいの形は決して一通りではない。さまざまな解決の仕方があり、そしてその答えは単に各要素を足し算したことによって得られるものではない。14 回の講義を通して得られた住まいの諸条件を総体として検討し、21 世紀の住まいが向かうべき方向を提案する。	本間　博文	本間　博文

＝住まいの構造・構法（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　深尾　精一　（東京都立大学大学院教授）〕

全体のねらい

住宅建築の構造・構法、すなわち、すまいの造り方について、視覚的な教材を多用し、解り易く解説する。講義は、戸建住宅と集合住宅の双方を取り上げ、共通点と相違点を理解できるようにする。
前半では、主として構造躯体について、多様な構造とその特徴の理解を目指す。後半は、屋根・壁・床・天井といった部位の構法について、性能と造られ方の関係を把握することを狙う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	空間を構築する技術・架構法	・住宅の造り方の種類・構造に関する各種の分類 ・木造・鉄骨造・鉄筋コンクリート造の概要 ・力の流れ方による構造の分類と荷重・外力 ・各種の構造の歴史	深尾　精一（東京都立大学大学院教授）	深尾　精一（東京都立大学大学院教授）
2	躯体の材料とその性質	・構造躯体に作用する各種の力と構造材料の強度 ・鉄筋コンクリートの原理・柱と梁の断面形状 ・鉄筋コンクリート造・鉄骨造の工事の進め方	同　上	同　上
3	日本の構法と欧米の構法	・日本の住宅の構造・構法とその多様性 ・欧米の住宅との比較 ・住宅の構造・構法の歴史	同　上	同　上
4	戸建住宅の構造・構法	・戸建住宅の構造・構法の考え方 ・住宅の形状と構造・構法 ・戸建住宅の様々な構造方式	同　上	同　上
5	木造住宅の構造・構法―1	・木材の性質・樹種と特徴 ・木造在来構法の特徴 ・地盤と基礎・布基礎とべた基礎 ・木造住宅の構成要素・柱と横架材	同　上	同　上
6	木造住宅の構造・構法―2	・小屋組と床組･伝統的な構法と新しい構法 ・筋かいと耐力壁・貫構造 ・木造部材の加工・木造住宅の工事の進め方 ・新しい木造住宅と木質材料	同　上	同　上
7	枠組壁工法と工業化住宅	・枠組壁工法 ・工業化住宅 ・工業化住宅の種類と特徴	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	集合住宅の構造・構法	・日本における集合住宅の歴史と構造 ・集合住宅の設備と構造 ・集合住宅の内装と構造	深尾　精一	深尾　精一
9	ＳＩ住宅と超高層集合住宅の構造	・集合住宅の設備計画と構造計画 ・ＳＩ住宅の考え方 ・超高層住宅の平面計画と構造	同　上	同　上
10	屋根の構法	・屋根の形状・勾配屋根と陸屋根 ・屋根の葺き方・各種の葺き材と原理 ・瓦屋根の特徴・桟瓦葺きの考え方 ・陸屋根の防水・各部の納まり	同　上	同　上
11	壁の構法	・壁の位置による種類・壁の機能と性能 ・壁の種類・真壁と大壁 ・伝統的な壁の構法・小舞壁と板壁 ・様々な壁の構法・通気構法・断熱材	同　上	同　上
12	開口部の構法	・開口部の機能と性能・窓の歴史 ・開口部の開閉方式とその特徴 ・開口部の防水性能・雨仕舞の考え方 ・建具と建具枠・ガラス・建具金物	同　上	同　上
13	床の構法・天井の構法	・床の機能と性能・床の構成方法 ・各種の床の構法 ・天井の構法	同　上	同　上
14	階段と和風造作	・階段の形状と各部の名称 ・階段の勾配と寸法・階段の構成方法 ・伝統的な和風住宅の造作・内法まわり	同　上	同　上
15	まとめ	・住宅の性能 ・新しい集合住宅の試み ・新しい軸組構法の試み ・まとめ	同　上	同　上

＝東アジア・東南アジアの住文化（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　藤井　明（東京大学教授）〕
〔主任講師：　畑　聰一（芝浦工業大学教授）〕

全体のねらい

東アジア・東南アジアは、世界的に見てもアフリカと並ぶ住居の多様性が観察される地域である。これは民族や部族の多様性に由来するものであるが、住居形式、素材、構法等に加えて、その造形や装飾等の面においても独自の工夫が見られる。様々な住まい方を紹介することで、伝統的な共同体が如何に機能してきたかを考える契機にする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	伝統的集落・住居に関する概説	東アジア・東南アジア地域の各民族、部族は独自の住様式を持っているが、それらを総論的に紹介しながら、なぜ、かくも多様な住居形式を考案する必要であったのか、その理由について、風土と共同体の在り方から考える。	藤井　明（東京大学教授）	藤井　明（東京大学教授）
2	韓国 両班住宅・河回	世界的に見て、住宅に入るときに履き替えを行う地域はそれほど多くないが、朝鮮半島はわが国と同様に履き替えを行う。歴史的なつながりや地理的条件を考え合わせて、住居も同じようなものと思い込みがちであるが、韓国の住まいはわが国とは全くといってよいほど異なる。伝統的な民家集落として有名な韓国慶尚北道、河回里を取り上げ、集落の構造、建物の配置、その中に建つ両班住宅などの観察を通して、韓国独特の居住空間の構成原理とそこに暮らす人々の住居観を紹介する。	本間　博文（放送大学教授）	本間　博文（放送大学教授）
3	中国 黄土高原の穴居・窰洞	中国北部の黄河中流域は夏は４０℃を越え、冬には－２０℃まで下がる乾燥した大地－黄土高原が広がっている。この過酷な大地に、約７０００万の人々が＜窰洞＞と呼ばれる穴居に住んでいる。森を失った大地に適応した住まいの工夫を論じる。	月舘　敏栄（八戸工業大学教授）	月舘　敏栄（八戸工業大学教授）
4	中国 中庭型住居・四合院／三合院	漢族は建物＜房＞を中庭を囲んでロの字状に配置した＜四合院＞、あるいはコの字状に並べた＜三合院＞に住んでいる。この漢族の住居形式の空間構成と架構技術の特徴について、漢族の影響を受けた少数民族の多様な中庭型の住まいを含めて解説する。	同上	同上
5	中国 巨大な集住体・客家の土楼	客家の土楼は、巨大な住居であり集落でもある。その特異な形態をつくり出した背景として、数世同堂の大家族制度や、移住者としての歴史等があげられる。客家独自の家族観や自然観を明らかにすることで、集住形態のメカニズムを探る。	井上　えり子（京都女子大学助教授）	井上　えり子（京都女子大学助教授）
6	中国 空間構成と共生のしくみ・タイ族	中国雲南には多くの少数民族が居住しており、独自の集住文化を形成している。これらの民族は共に豊かに暮らすことを目的とした共生のしくみを持ち、それらの多くは共通点がある。タイ族を中心にその住居と集落の空間構成と多様な共生のしくみについて解説する。	岡田　知子（西日本工業大学助教授）	岡田　知子（西日本工業大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	中国 社会制度と住まい方・永寧ナシ族（モソ人）	中国雲南省西北部に居住する永寧ナシ族は、母系社会で妻問婚（通い婚）を採用している。「家族」は妻と子供と妻側親族で構成されている。社会制度や家族の概念が異なると、住まいの形態やその使われ方はどのように異なるのかということについて、事例をもとに考える。	井上　えり子	井上　えり子
8	台湾 季節による住み分け・ヤミ族	台湾とルソン島の間に連なる島々の最北に位置する島、蘭嶼のヤミ（タオ）族は、半地下式の地床と高床、風を通す高床の涼み台といった複数の住棟で自然に対処する住まいかたを生み出した。扇状地に段状につくられたその住まいの特徴をみていく。	乾　尚彦（学習院女子大学教授）	乾　尚彦（学習院女子大学教授）
9	フィリピン 高床と地床・ルソン島北部山地民	ルソン島北部山地のボントック族は、地床居住でありながら住居内部に高床の架構をつくる。近隣のイフガオ、カリンガ、アパヤオ族などがそれぞれ特徴ある高床住居をつくることと比較して、どうしてこのような一見不合理な住まいが生まれたかを考察する。	同上	同上
10	タイ 焼畑移動民の住まい・アカ族	焼畑移動民としてのアカ族が、バンドとして移動しながら集落や住居をつくり、共同社会を維持する方法について解説する。また、男と女の空間の使い方について述べる。アニミズム、生産暦、家づくりのシステムがどのようにかかわっているかを論じる。	畑　聰一（芝浦工業大学教授）	畑　聰一（芝浦工業大学教授）
11	マレーシア サラワク州の長大住居・ロングハウス	サラワクの２種族（ビダユ、イバン）の事例を対象にして、共用空間を一列につなげて村落をつくるロングハウスと呼ばれる独特な居住様式とその集合の仕組みについて解説する。精神世界、共用通路、集合規則、共同社会、増改築手法等について論じる。	同上	同上
12	インドネシア 住まいと集落の規律・ニアス族	熱帯のジャングルをきり開いてつくられた南ニアスの集落。それは、列状に民家が整然と並ぶばかりでなく、中央に巨大な首長の家を配置し、それを中心としたヒエラルキーを持つことで知られている。こうした規律のある集落の生まれる理由を考察する。	乾　尚彦	乾　尚彦
13	インドネシア バリ・ヒンドゥーの住まい・バリ族	自然との共生をめざすバリ・ヒンドゥーの世界観を具現させる住居と集落の空間構成法と住まい方について解説する。方位・方角にかかわるバリ独特の考え方、人体寸法と空間との関係、生活面のヒエラルキー等について論じる。	畑　聰一	畑　聰一
14	インドネシア 小スンダ列島の住まい・スンバ族	小スンダ列島には極めて個性的な造形の高床式住居が多い。それらを紹介することにより、住居形式と住民の宗教観、宇宙観等との対応関係や、郷土材料の巧みな使用方法について考える。	藤井　明	藤井　明
15	東アジア・東南アジア地域の住文化の特性	東アジア・東南アジア地域の住まい方について、その特性や問題点について、担当講師が座談会形式で論じ、本講座のまとめとする。	畑　聰一	藤井　明 畑　聰一

＝公衆衛生　（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：多田羅　浩三（放送大学教授）〕
〔主任講師：瀧澤　　利行（茨城大学教授）〕

全体のねらい

公衆衛生制度は、産業革命が進む中で都市への人口集中を背景として生まれた、不衛生と疾病、貧困の悪循環という状況に対し、人間の健康を守るという観点から求められた、社会の関与の方式として生まれたものである。結果として、公衆衛生制度はカバーする領域は極めて広いものとなっている。各領域について、発展の過程、仕組み、現状、方法などを骨子として講義する

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	公衆衛生制度の誕生	公衆衛生制度は、不衛生と疾病と貧困という、社会環境の中にある人間の健康を守るという理解の上に、自治体の機能を中核として多様な役割を果している。公衆衛生制度の母国であるイギリスにおけるあゆみをもとに、フランクの社会による防衛、チャドウイックの予防、ラムゼイの福祉からの独立、シモンの衛生の規則と地方当局の規則などの点から、人類の公衆衛生制度の成立、発展の系譜について考えてみたい。	多田羅浩三（放送大学教授）	多田羅浩三（放送大学教授）
2	わが国の公衆衛生	わが国の公衆衛生は、ヨーロッパ諸国の例にならい、非常に優れた制度を有している。そのことが平均寿命世界一や世界一低い乳児死亡率の記録に現われている。そのような輝かしい記録を達成してきたわが国の公衆衛生のあゆみについて平均寿命世界一という状況に直面するなかで、わが国は新しい課題に直面しているといえる。そのような推移をふまえ、医制の発布、医療保険制度と保健所体制、自治体が担う体制、国民健康づくり計画、公衆衛生制度の展開などの項目を中心にアプローチしたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
3	健康の指標	公衆衛生を学ぶ者の基礎知識として、人口、死亡率、平均寿命、将来人口、有病率、罹患率、国際疾病分類、国民の健康に関わる主要調査報告、疫学統計などについて学びたい。	瀧澤　利行（茨城大学教授）	瀧澤　利行（茨城大学教授）
4	母子保健	わが国は今日、深刻な少子高齢化時代を迎えている。その中で働く女性の母性の保護をどのように確保していくか、子どもの健やかな成長をどのように保証していくか、重大な課題に直面している。それらの点をふまえ、母性の保護、乳幼児の保健、母子保健事業、エンゼル計画、健やか親子21などの項目をもとに検討したい。	瀧澤　利行	瀧澤　利行

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	成人・老人保健	わが国は平均寿命世界一の記録を達成しているが、結果として後期高齢者人口が向こう 20 年間に 1100 万人の増加が予想されている。また生活習慣病による死亡が激増している。そのような動向をふまえ、悪性新生物、循環器疾患、糖尿病、難病、こころの健康、歯科保健などの現状と推移、またがん対策、循環器疾患対策の痘女房生活習慣病、循環器病対策、がん対策の推移、市町村の保健事業などの項目をもとに考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
6	感染症	多数の人々の生命をあっという間に奪う感染症に対する闘いのの中で示された、スノーやパスツール、コッホの功績について、最初に確認したい。今日の激動する国際情勢の中で、感染症対策は、新興・再興感染症の国内への侵入対策は、SARS の例に明確なように、極めて重要な、社会防衛上の課題になっている。結核、性感染症についても、その対策の強化が望まれている。これらの動向をふまえ感染症の基礎知識、感染症の予防対策、感染症法などの項目について考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
7	学校保健	近年、次代を担う、学童の健康状態や就学状況について、肥満、あるいはやせ願望、情緒不安、暴力など、深刻な課題に直面していることは周知のとおりである。これらの課題を念頭におきつつ、学校保健の仕組み、学童の健康状態、学童の心理、学校医、学校安全、学校体育、学校給食の面から考えてみたい。	瀧澤　利行	瀧澤　利行
8	産業保健	厳しい経済環境、日進月歩の技術開発、市場競争の激化の中で、働く人たちの健康状態について、とくにメンタルヘルス面における課題は、年々深刻になっている。これらの認識に立って、産業保健対策のあゆみ、産業保健の仕組み、働く人たちの健康状態、THP とメンタルヘルス対策、産業医、産業保健施設などの点を中心に検討を加えたい。	瀧澤　利行	瀧澤　利行
9	環境保健	温暖化の進行、都市開発、住宅造成、公共事業の強行など環境破壊につながる状況が続く中で、環境保健の確保は、極めて深刻な課題となっている。これらの点を認識し、地球環境、大気汚染、水質汚濁、騒音・振動、放射線、環境基本計画、環境アセスメントなどの面から考えてみたい。	瀧澤　利行	瀧澤　利行
10	生活環境	食品の外国産材料への全面依存、ファーストフード、外食産業への依存、多様な建材の使用、甚大な生活廃棄物の発生など、国民の生活は厳しい環境に取り巻かれている。より良い生活環境の確保は、公衆衛生の原点であり、生活衛生と健康、衣服の改良、食品の安全、住居の安全、生活廃棄物を中心に検討を加えたい。	瀧澤　利行	瀧澤　利行

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	医療制度	医療制度を担う専門職の中で、最も古い歴史を有しているのは医師であり、医師職の発展の系譜と各国の医療制度のあり方は深い関連を有している。わが国では、医薬分業が行われてこなかったことが、わが国の医療制度を国際的にも、非常にユニークなものにしてきたという経過がある。これらの点をふまえ、わが国の医療制度について、改正の推移、医療保険制度、医療施設、医療関係者、老人医療などの面から検討を加えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
12	地域保健体制	プライマリケア体制の構築という位置づけのもとに、最も古く、教訓に満ちた取り組みをすすめてきたのはイギリスである。この国でのあゆみから、何を学ぶことができるか、そのことを最初に考えたい。そしてわが国の地域保健体制について、中核を担ってきた保健所の推移と現状、保健センターを拠点とした市町村の保健事業の動向、健康増進法の制定をふまえ、わが国の地域保健体制の特徴、その課題、展望について考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
13	介護保険制度	産業革命を背景にイギリスに生まれた、人類の福祉制度が、公費を財源として「劣等処遇」を原則として推進されてきたのに対し、高齢人口の急増に対し、高齢者を対象とした制度として、高齢者介護を福祉制度から独立させ、保険制度による運営に転換すべく制定されたのが介護保険制度である。制度制定の意義、制度の特徴、制度の仕組み、介護保険事業計画の事例などの面から、本制度のあり方、将来の展望などについて考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
14	健康日本２１	平均寿命世界一の社会は、最も多様な健康状態の人たちが生活している社会であるが、人々の多様な健康状態、とくに生活習慣病による罹患、死亡の激増ということに対し、従来の制度依存型の対策では十分な成果をあげることが困難であることが明らかになってきた。そこで、「国民の責務」を問う、施策として実施されているのが、健康日本21である。その推進には、大きな期待が寄せられていると思われる。この運動の意義を中心に考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三
15	国際保健	国際交流の激増、開発途上国における政情不安、新興・再興感染症侵入の危険などの状況がある中で、WHO、平均寿命の国際比較、死亡率の国際比較、国際保健上注目すべき疾病、AIDSの現状、大都市の保健事情、医療費の国際比較などについて検討し、国際保健のあり方について考えたい。	多田羅浩三	多田羅浩三

＝国際共生と健康（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：新　福　　尚　隆（神戸大学教授）〕
〔主任講師：近　藤　喜代太郎（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

地球レベルの環境問題は人類が運命共同体であることをつよく示した。地球のエコシステムを守り、人類と環境が地球で共生していくためには、どのような方策が可能であるか考える。先進国における高度の医療技術の発展にもかかわらず、健康における南北間の格差は依然として狭まらない。本科目では開発途上国の感染症、母子保健、女性の健康の現状と問題点、医療システムの問題、対策としてのプライマリーヘルスケア等について理解を深める。一方、移民、難民の増加が世界的規模でおきるなど、国を越えた人と物の動きの活発化は止まる所を知らない。病気には国境はない。病気に対する対策には国際協力がますます求められる。世界保健機関の活動、日本の国際医療協力、災害医療援助、NGO、難民に対する保健医療援助などについての基礎的な知識を得る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	地球環境と共生	人類と環境がどのように共生していけるのかが 21 世紀の課題である。人口の増大、地球の温暖化、環境破壊のもたらす影響について述べる。また、技術の進歩に反して、南北の格差は広がるばかりで、医療に典型的に現れている。地球環境と共存しながら、南北格差を、小さくするためには何が可能か考えたい。	新福　尚隆（神戸大学教授） 近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	新福　尚隆（神戸大学教授） 近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
2	人口、栄養、健康	地球の人口は 60 億人を突破した。人口増加率はピーク時から減少しているが人口増加は今後も続く。それにともなった食糧や水など基本ニーズの枯渇と質の劣化、環境汚染が世界的な問題となっている。人口移動と都市への集中は人類、ことに途上国の人々の健康に負のインパクトを与えている。現実の脅威となったこれらの問題への早急な対応が迫られる。	川端　眞人（神戸大学教授）	川端　眞人（神戸大学教授）
3	地球規模で見た健康の問題	地球的規模で見た健康の問題を、死亡、有病、発生、障害などの観点から検討し、どのような危険因子、社会経済状況と関連があるのか概観する。感染症は発展途上国ではいまだに大きな健康問題である。感染症のみでなく、タバコ、アルコール、肥満を含めて、生活習慣に関係した健康問題が世界的に増加している。	新福　尚隆	新福　尚隆
4	世界の感染症	世界の病気負担の 30%は感染症が占め、途上国の子どもたちなど社会的弱者が犠牲となる。感染症の予防や治療に必要な、安価で、有効な対策法が開発されている。感染症対策の効果を高めるには、それぞれの地域社会に適した方策を構築しなくてはならない。	川端　眞人	川端　眞人

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	開発途上国の子どもの健康	子どもの健康問題は、単に保健医療分野にとどまらず、貧困、環境、人口などの地球規模でのグローバルな課題と密接に関連している。今回の講義では、途上国の子どもの健康を脅かしている感染症や栄養問題、WHOやユニセフによる世界的な取り組みの現状を概説する。また、インドネシアを例にとり、農村部における住民ボランティアの具体的な活動を取り上げてみたい。	中村　安秀（大阪大学大学院教授）	中村　安秀（大阪大学大学院教授）
6	開発途上国の女性の健康	女性の代表的な健康問題として、妊産婦死亡があり、現在でも世界で51万人の女性が妊娠・出産の結果死亡しており、その大半は開発途上国の女性に起きている。2001年の国連事務局長報告では女性の健康の目標として、妊産婦死亡、家族計画、出産関連のケア、貧血症を取り上げている。開発途上国の女性の健康問題と対策の現状について具体例を取り上げて解説する。また「女性の健康と開発」についてのアプローチについてもふれ、男女間の教育・情報・所得・保健等の不平等を減らし女性が生涯を通じて健康を保持増進できることについて考えてみたい。	森口　育子（兵庫県立看護大学教授）	森口　育子（兵庫県立看護大学教授）
7	開発途上国の地域保健医療システム	財源、要員などに大きな制約がある開発途上国では、地域の保健医療ニーズの優先度判断と適正な戦略に基ずく資源の効率的活用が求められ、システム・アプローチが不可欠である。地域保健医療システム(DHS)の現状と課題、及びシステム強化に向けて現在、取り組まれている種々の試みを紹介する。	上原　鳴夫（東北大学大学院教授）	上原　鳴夫（東北大学大学院教授）
8	プライマリー・ヘルスケア	先進国と開発途上国には著しい健康水準の格差がある。1978年にWHOとUNICEFがこの格差を是正し『2000年までに全ての人々に健康を』を目標にプライマリー・ヘルスケアPHCを提唱して以来、PHCは国際的に保健活動の共通理念となった。多くの国ではPHCを中核とした保健政策を基盤として、その国または地域の健康問題や住民のニーズに対応した保健活動が行われている。 本章では、PHCの歴史的背景、PHCの概念と原則、開発途上国の地域における健康問題とPHCの活動、PHCの先駆的活動が行われた我が国の経験より開発途上国のPHCに対して何が提起できるかなどについても考えてみたい。	森口　育子	森口　育子
9	世界保健機関の役割と活動	世界保健機関WHOは、1948年に設立され、半世紀に亘り、世界の人々の健康の増進、疾病の予防を目的として活動を行ってきた。その間、開発途上国の感染症の予防、天然痘の撲滅、プライマリー・ヘルスケアの向上などに大きな貢献を果たした。本章ではWHOの歴史、役割、機構、課題、などについての講義を行う。	新福　尚隆	新福　尚隆
10	日本政府レベルの国際医療協力	我が国が行っている国際保健医療協力のうち、主に政府レベルで行われている開発援助分野の国際交流、国際協力について、その仕組みや現状を解説する。また国際機関への協力や支援の現状などを解説する。	中園　直樹（神戸大学教授）	中園　直樹（神戸大学教授）
11	日本が主導する保健医療NGO	いわゆる民間非営利団体（NGO）による数多くの国際保健医療協力活動の中から、代表的な活動組織とその協力内容についていくつかを紹介する。その協力内容は非常に多岐に亘るが、主に保健分野、医療分野、環境分野、環境教育活動の事例を紹介したい。	中園　直樹	中園　直樹

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	災害の疫学と保健医療の災害対策	繰り返される自然災害は途上国の発展と人々の健康を阻害する重要な要因となっている。災害疫学の知見をもとに、災害に対する保健医療の備え、災害時の保健医療問題の推移と対応、医療救援活動のニーズ、課題について概観する。	上原　鳴夫	上原　鳴夫
13	難民に対する保健医療	世界中で、現在も約 2，200 万人にのぼる難民が祖国を追われ、また内戦や政治的混乱などにより国内避難民となる人びとも少なくない。国連機関やボランティア団体の活動、長期にわたる心理的支援が必要なＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）など難民をめぐる国際社会の問題を、フィールドの視点から講義を行う。とくに、12 年前にパキスタンのアフガン難民キャンプで活動した講師の体験を交え、難民に対する保健医療支援のあり方について考えてみたい。	中村　安秀	中村　安秀
14	国際保健と精神保健	西暦 2001 年の世界保健報告は精神保健を特集して、精神保健が先進国の問題のみでなく、開発途上国を含む世界的な課題である事を示した。うつ病、精神発達障害、アルコール、麻薬、自殺、暴力など心の健康の問題を国際的視点から考えたい。	新福　尚隆	新福　尚隆
15	国際基準と研究協力	生物としてのヒトを侵す疫病に国境はない。社会的存在としてのヒトには国境があるが、医学・医療はもともと国際的である。医療をはじめ、健康と命を守る公私のしくみは、本科目の多くの章でのべられたように、国際共生のテーマとしてもっとも適切なもののひとつである。本章ではやや視点を変え、健康事象にかかわる研究開発と、種々の国際基準に触れる。後者では、高血圧の定義と診断基準など、今日の医療に不可欠な基準、ガイドラインなどがふくまれ、医学者の国際協力の許で策定され、一種の国際公共財となり、医学研究と医療における国際共生の基盤となっている。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎

＝　現代科学と医療（‘０４）＝（Ｒ）
－疾病と検査－

〔主任講師：佐藤　健次（東京医科歯科大学大学院教授）〕
〔主任講師：大久保　善朗（日本医科大学教授）〕

全体のねらい

現代医療において、個々の患者の生体情報を抽出する臨床検査は、疾病の診断、治療方針の決定、治療効果の判定の際に必須の方法論となっている。現代科学の進歩により、臨床検査の数と種類は飛躍的に増大しつつあり、臨床検査は形態、機能情報から遺伝子情報までさまざまな生体情報を捉えることによって、疾病の診断と治療にますます多大な貢献を果たしている。本講義では、

A.　このような臨床検査法を概説したうえで、
B.　最新の臨床検査法を主要な疾病をどのように検査するかという観点から説明する。
C.　さらに、21世紀医療における臨床検査の新たな動向についても紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	A.　臨床検査法の進歩 ①　検体検査	人間の体内に存在する消化液、血液、髄液や、排泄された尿、便、分泌物、さらには病気に伴って体内に駐留する喀痰、膿、腹水、胸水等の材料を体外に取り出し検査する方法で、検査の対象とするものを検体と呼びます。 検査材料により、一般検査、血液検査、臨床科学（生化学）検査、免疫血清検査、細菌（微生物）検査等に区別されますが、これらの各種検体検査法の中で、特に、尿・便・血液の一般検査に関する最近の進歩について学ぼう。	佐藤　健次（東京医科歯科大学大学院教授）	佐藤　健次（東京医科歯科大学大学院教授）
2	A.　臨床検査法の進歩 ②　生体検査	生体検査とは、検査用機器を用いてさまざまな生体情報を取得・解析し、得られた情報を疾病の診断に役立てるものである。生体検査法としては、心電図などの循環器検査や脳波などの生体の電気信号を捉えて評価する生理検査や、超音波、核磁気共鳴画像（MRI）、核医学検査などの画像検査がある。生体検査法の概要とともに最近の進歩を学ぼう。	大久保　善朗（日本医科大学教授）	大久保　善朗（日本医科大学教授）
3	A.　臨床検査法の進歩 ③　病理検査	検体検査の一種である病理学的検査は、病理組織学的検査（組織診）、細胞学的検査（細胞診）と病理解剖学的検査（剖検）に大別され、疾病の診断、病期、治療方針、予後などに具体的、直接的に関与し、貢献している。病理学的検査の現況と新たな動向、課題について考えてみよう。	神山　隆一（国際医療福祉大学教授）	神山　隆一（国際医療福祉大学教授）
4	B.　疾病をいかに検査するか ④　生活習慣病を検査する	食生活の欧米化と運動不足による肥満と高脂血症、サイレントキラーと呼ばれるように目立った症状がなく忍びよってくる高血圧症は、生活習慣病と呼ばれている。 生活習慣病を判断する検査について理解するとともに、その変動の読み方について学んでみよう。	芝　紀代子（東京医科歯科大学大学院教授）	芝　紀代子（東京医科歯科大学大学院教授）
5	B.　疾病をいかに検査するか ⑤　糖尿病を検査する	糖尿病の増加は我が国だけの問題ではなく、WHO の推計によると、20 歳以上の糖尿病の頻度は 1995 年には 4%であったのに対し、30 年後の 2025 年には 5.4%に上昇すると推定されている。 糖尿病はまさに地球規模での問題となってきた。糖尿病の発症する要因、糖尿病の病態把握に必要な検査を学んでみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	B. 疾病をいかに検査するか ⑥ 動脈硬化を検査する	日本人の心臓病の大半は狭心症、心筋梗塞といった虚血性心臓病が占め、その原因として動脈硬化があげられます。動脈硬化とは動脈壁が病的に硬化したり、肥厚して，弾性を失った状態をいい、動脈本来の機能が障害された状態を動脈硬化症と呼んでいます。動脈硬化の多数の促進因子を含めて、動脈硬化症の病態把握に必要な検査について学ぼう。	佐藤 健次	佐藤 健次
7	B. 疾病をいかに検査するか ⑦ 痴呆を検査する	脳や身体の病気を原因として、記憶・判断力などの障害がおこり、通常の社会生活がおくれなくなった状態を痴呆という。その原因としては「アルツハイマー型痴呆」と「血管性痴呆」が多く、そのほかにも頭蓋内の病気によるもの、身体の病気によるものなどがある。本講義では、痴呆が疑われる場合、痴呆か否かの診断、さらに痴呆のタイプの診断が、どのような問診、心理テスト、検査によって行われるかを学ぼう。	大久保 善朗	大久保 善朗
8	B. 疾病をいかに検査するか ⑧ 消化器癌を検査する	悪性新生物は死因の第1位を占め、その約6割を消化器癌が占めています。部位別に見ると、胃癌、肝・肝内胆管癌、結腸癌、膵臓癌、食道癌、直腸・S 状結腸癌です。これら消化器癌の病態把握と診断のための検査法について学ぼう。	佐藤 健次	佐藤 健次
9	B. 疾病をいかに検査するか ⑨ 血液疾患を検査する	造血器疾患は血液および骨髄、リンパ節、脾臓、単核貪食細細胞系、胸腺などにそれぞれ病変の主座がある疾患に分けられる。主な造血器疾患を対象に、その病因・病態の解明や診断に有用な血液学的検査法の現況と将来の展望について考えてみよう。	小山 高敏 (東京医科歯科大学大学院助教授)	小山 高敏 (東京医科歯科大学大学院助教授)
10	B. 疾病をいかに検査するか ⑩ 肝疾患を検査する	肝炎にはA型、B型、C型ウイルス肝炎があるが、A型は経口感染で1～3ヶ月で軽快し完全に回復する。B型、C型肝炎は血液を介して感染する病気である。特にC型肝炎は感染者は200万人と推定される。悪化して肝硬変や肝癌になる。自覚症状に乏しいため感染に気付かない人も多い。 肝炎に対する正しい知識を学んでみよう。	芝 紀代子	芝 紀代子
11	C. 21世紀の臨床検査の動向 ⑪ EBMと検査	近年、医療の実践の際に、あやふやな経験や直感に頼らず、科学的evidence（証拠）に基づいて最適な医療を行う、Evidence Based Medicine（EBM）の重要性が指摘されている。臨床検査は疾病の病態評価や治療効果の判定に客観的な指標を与えるという意味でEBMの礎となるものである。また、多様な臨床検査を最も効率的に診療に利用することは、患者に対する必要以上の苦痛と経済的負担を避け、しかも限られた医療資源を最大限に生かすために極めて重要である。こうした観点から、ＥＢＭに基づいて検査法の有用性を系統的な再検討が進んでいる。このような動向について展望しよう。	大久保 善朗	大久保 善朗
12	C. 21世紀の臨床検査の動向 ⑫ 在宅医療と検査	患者の通院負担が軽くなる他、入院費などの医療費削減にも繋がるとして在宅医療が急速な勢いで伸びている。潜在需要1兆円とも言われ、在宅医療事業に企業が続々参入している。 医療従事者以外の人も十分在宅医療の果たす役目を理解し、在宅医療器具の性能や正しい使い方を学んでみよう。	芝 紀代子	芝 紀代子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	C. 21 世紀の臨床検査の動向 ⑬ 遺伝子検査の現況と将来	分子生物学的解析技術の進歩により、感染症、癌、遺伝性疾患の診療に必要な病因遺伝子を検出する遺伝子検査が可能となった。遺伝子検査は、感染症や白血病を中心に日常検査としても定着している。一方、各疾患の原因や感受性を規定している遺伝子を解明して、個人に最適の予防や治療を行うオーダーメードの医療が現実になろうとしている。また、疾患の原因となる標的部位を狙いうちする分子標的療法も行われるようになってきた。遺伝子検査の現況と将来について展望しよう。	小山 高敏	小山 高敏
14	C. 21 世紀の臨床検査の動向 ⑭ 高次能機能と検査	近年の画像診断技術は著しいの進歩を遂げ、現在では各種の方法を用いて脳の血流、代謝から神経伝達機能などさまざまな高次脳機能を評価することが可能になっている。その中で、BOLD効果を利用した fMRI は急速に普及し、局所脳機能検査法として定着しつつある。また核医学的検査法は標識する物質の選択によって、局所脳血流、酸素代謝、糖代謝、酵素活性、神経伝達物質受容体、トランスポーターなど、多用な生体機能を測定することが可能で、他の検査法では測定不能な情報が得られるという絶対的な利点をもつ。このような高次脳機能検査法の最近の進歩を展望しよう。	大久保 善朗	大久保 善朗
15	C. 21 世紀の臨床検査の動向 ⑮予防医学と検診	予防医学には、健康増進・特異的予防の一次予防、早期発見・早期治療の二次予防、能力障害防止・リハビリテーションの三次予防といった段階がある。超高齢化を迎える 21 世紀においては、一次予防を中心とした対策が重要視され、各種検診特に総合検診に対する期待は極めて大きいものがある。各種臨床検査の検診への導入について学ぼう。	佐藤 健次	佐藤 健次

＝患者からみた医療（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　高柳　和江（日本医科大学助教授）〕
〔主任講師：　仙波　純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

個としての患者と社会の一員としての患者という，患者および患者予備軍の立場から医療を見直してみる。医療のすべての面について，患者や社会の視点から見ていきたい。このうち患者学はいままで存在しなかった新しい学問体系であるので，学生とともに考えていくような授業の進め方としたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	一般目的　GIO 患者学のための基本的な事項が理解できる。 行動目的　SBOs 1．健康と病気の定義ができる 2．医療と医療提供の違いが説明できる 3．患者の意味が説明できる	高柳　和江（日本医科大学助教授）	高柳　和江（日本医科大学助教授）
2	患者学（1）	一般目的　GIO 患者中心の医療のための基本的な患者の心理、医師患者関係が理解できる。 行動目的　SBOs 1．患者の心理が説明できる 2．医師と患者の病気に対する心理の違いが説明できる 3．患者の医療への対処が理解できる	同上	同上
3	患者学（2）－患者からみた臨床試験－	一般目的　GIO 患者にとって臨床試験とはなにかが理解できる。 行動目的　SBOs 1．薬の開発の段階を説明できる 2．ランダム化比較対照試験を理解できる 3．根拠に基づく医療（EBM）の意義を説明できる 4．臨床試験を行う上での基準を理解できる	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）
4	患者満足医療システムと企業原理	一般目的　GIO 行動目的　SBOs	和田ちひろ（ＮＰＯ法人「楽患ねっと」理事長）	和田ちひろ（ＮＰＯ法人「楽患ねっと」理事長）
5	医療サービス	一般目的　GIO 医療サービスの中で医療消費者が知っているべきことを知ることができる 行動目的　SBOs 1．医療についての基礎知識がわかる 2．医療制度の基本がわかる 3．医療制度の問題点を考えることができる	高柳　和江	高柳　和江
6	医療の質	一般目的　GIO 医療の質の重要性を考えることができる 行動目的　SBOs 1．医療の質を概観する 2．品質管理方法の基本がわかる 3．医療の質の重要性について考えることができる	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	医療の評価	一般目的　GIO 医療の質の評価についての基本を理解できる 行動目的　SBOs 1．医療評価の対象をあげることができる 2．評価者を説明できる 3．評価のアプローチ方法を説明できる	高柳　和江	高柳　和江
8	高齢者の自立に向けて	一般目的　GIO 高齢者とこころの自立についての理解をふかめる 行動目的　SBOs 1．健康な高齢者について理解することができる 2．高齢者の孤独と孤立を理解できる 3．高齢者の生活の自立について考えることができる 4．介護の場所と痴呆老人から見た介護について考えることができる	高柳　和江	高柳　和江
9	医学教育	一般目的　GIO 社会と患者にとっての医学教育のあり方を考えることができる 行動目的　SBOs 1．医学教育の概念を知る 2．医学教育の問題点を知る 3．患者としての対応を考えることができる 4．医療消費者として必要な医学教育教育を考えることができる	同　上	同　上
10	医療の倫理	一般目的　GIO 医療の現場における倫理を理解できる 行動目的　SBOs 1．患者の自立性や自己決定権を理解できる 2．インフォームドコンセントとその前提条件を理解できる 3．カルテ開示の流れや利点がわかる	仙波　純一	仙波　純一
11	患者安全管理（医療事故）	一般目的　GIO 患者安全管理の概念が理解できる。 行動目的　SBOs 1．患者安全管理の原則が理解できる 2．患者安全管理のための患者が果たす役割がわかる	高柳　和江	高柳　和江
12	患者治癒力の向上	一般目的　GIO 患者の自然治癒力を知り、試みることができる	同　上	同　上
13	生殖補助医療・遺伝子治療	現在，生殖補助医療，遺伝子治療などの細胞レベルでバイオエシックス(生命倫理)に抵触する問題が多くなっている。また最近，延命治療のための医療から，QOL を高めるための医療に変わりつつある。倫理的な問題の認知と分析，その調査検討，さらに具体的対応について述べる。	同　上	同　上
14	高度先進医療と今後の治療	証拠に基づいた医療(evidence-based medicine)はこれからの医療の方向である。高度無侵襲医療として，ロボット手術など高度な技術が発展してきた。社会価値観の変換と医療経済の問題も考えなければならなくなっている。	同　上	同　上
15	健康と経済－医療経済－	社会の人々の健康を保つには，高価格で効果のある医療（臓器移植など），高価格で効果のない医療（いわゆる延命治療），効果があり安価な医療（ワクチンなどによる予防）などの特性を考えながら行うことが必要である。	同　上	同　上

＝脳の健康科学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　小川　紀雄（岡山大学教授）〕
〔主任講師：　仙波　純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

脳は生体のすべての機能をつかさどる中枢である。この脳を理解するには、異なった次元からの多角的なアプローチが必要である。この講義のねらいは、さまざまな分野での脳研究の現状を理解し、脳の機能を学ぶだけでなく、われわれが健康な生活を営むための知識を豊かにしようとするものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	脳の構造と働き	脳についての講義を開始するにあたって、脳の構造・発生・進化などについて概説する。この講義の序説となる部分である。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）
2	脳における情報伝達－１	神経細胞内では情報は電気的に伝わる。電気的活動が伝導される仕組みと、それを担う細胞膜・イオンチャンネル・活動電位などを学ぶ。神経細胞の電気的活動の総和として現れる脳波や脳磁図についても言及する。	同　上	同　上
3	脳における情報伝達－２	神経細胞から放出される神経伝達物質がレセプターに作用する化学的情報伝達現象の総和が脳の機能であり、またレセプターは中枢神経作用薬の作用部位でもある。これら脳機能の基盤となる化学的情報伝達について学ぶ。	小川　紀雄（岡山大学教授）	小川　紀雄（岡山大学教授）
4	脳の可塑性	学習や環境などの外的因子によって神経ネットワークが柔軟に変化することを脳の可塑性といい、ネットワークが固定されているコンピュータとの根本的な違いである。リハビリテーションによる脳機能の回復にも不可欠な可塑性について学ぶ。	同　上	同　上
5	脳の血液循環と栄養	脳の活動は血液からの酸素やブドウ糖などの栄養によって支えられている。脳の血流は精緻な仕組みで調整されている。最近脳の血流は脳画像解析によって定量化できるようになり、脳の活動の指標としても使われている。	仙波　純一	仙波　純一
6	知覚と認知	ヒトの大脳は外界から様々な感覚情報を受容しているが、意識にのぼり認知されるものと、意識されずに終わるものとがある。意識にのぼる感覚情報の受容は知覚と呼ばれる。この章では、大脳における様々な知覚のメカニズムにつき学ぶ。	岩田　誠（東京女子医科大学教授）	岩田　誠（東京女子医科大学教授）
7	記憶と学習	記憶は事柄や事実を覚える陳述的（宣言的）記憶と、技術や方法を覚える手続き的記憶の２種類に分けられる。個人ならびに社会の知的財産の維持発展を支える重要な高次機能である記憶・学習機能ついて学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遺伝子と知能・行動・性格	特定の遺伝子を働かなくさせたノックアウト動物などで行動の変化が観察されることから、ヒトのいろいろな行動にも遺伝的な要素があることは否定できない。最近の遺伝研究からは、以前のような単純な「氏か育ちか」というような対立的な考えではなく、どちらがどれくらいどのように影響を与えているのかということに視点が移っている。ここではヒトの知能、行動や性格などについての最近の遺伝子研究を紹介する。	仙波　純一	仙波　純一
9	脳と運動機能	運動機能には自分の意志で行う随意運動と、無意識的に行われる不随意運動の２種類があり、運動が円滑に行われるためには両者の協調が必要である。これら２種類の運動の機序とそれらの障害について学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄
10	情動と行動	情動や感情はヒトの行動に大きな影響を与える。不安や恐怖もこの情動に含まれる。この章では主に不安について、その仕組みや身体との関連について学ぶ。	仙波　純一	仙波　純一
11	脳の外傷・腫瘍・血管障害	脳神経外科は手術により脳の各種病変を治療しており、20世紀後半に著しく進歩した領域である。ここでは脳の外傷、脳腫瘍、もやもや病や脳動脈瘤などを例として現在の脳神経外科治療の現況を概説するとともに、遺伝子診断や治療など最新のトピックスについても解説する。	山田　和雄（名古屋市立大学教授）	山田　和雄（名古屋市立大学教授）
12	脳の分子生物学	脳の疾患のうちには、遺伝的要因が関与する疾患が数多く存在している。最近の分子生物学の進歩から、このような疾患の病態や発症への理解が進んでいる。ここでは、遺伝子レベルで脳を理解する。	辻　省次（東京大学教授）	辻　省次（東京大学教授）
13	脳の老化	加齢に伴って神経細胞の数は減少し、老廃物が神経細胞に沈着物し、神経伝達物質やレセプター、脳血流や脳の代謝機能が減少し、脳の機能もゆっくりと変化してくる。高齢化社会に備えて老化脳の特徴を学ぶ。	小川　紀雄	小川　紀雄
14	脳と薬	脳に働く薬は、治療薬として働く一方、乱用されることもある。脳に働く薬の作用機序や治療目的などについて学ぶ。	仙波　純一	仙波　純一
15	脳研究の将来	脳研究には長い歴史があり、最近の科学技術の進歩により、一段と脳の理解が増した。一方で、心とは何か、脳移植は可能か、コンピュータは脳を越えられるかなどの課題が生まれている。この章では、これらの問題について考えていく。	小川　紀雄 仙波　純一	小川　紀雄 仙波　純一

＝　感染症と生体防御（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　笹月　　健彦（国立国際医療センター総長）〕
〔主任講師：　岩本　　愛吉（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　近藤　喜代太郎（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

感染症はヒトの体内・体表にすみかを求め、増殖しようとする微生物・寄生虫によるヒトの罹患である。それらの生物とヒトの防御機能との間には複雑な干渉があり、なかでも免疫のしくみは、高等動物への進化の過程で、生存を脅かした微生物などとの永い闘いの末に得られた進化の産物である。本講義では、はじめの６章で免疫システムについて体系的に学び、アレルギー、移植、癌、免疫不全などの臨床的問題にも触れる。７、８章はそれぞれウイルスと細菌・真菌感染の総論、９～13 章では主な感染症について罹患臓器別に学ぶ。また、14、15 章は主として公衆衛生の立場から感染症対策について体系的に学ぶ。感染症はかつては人口の１/３～２/３を脅かす重大な脅威であったが、日本などの保健先進国ではほぼ制圧されている。しかし新興・再興感染症の問題もあり、人類と微生物との闘いはまだ終わったわけではない。15 章では世界的視野に立ち、発展途上国の感染症がなおかつてのような脅威を振るっている実態と、国際的なとり組みについてのべる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	免疫システムの成り立ち	免疫システムはウイルス、細菌、寄生虫などの外来侵入者に対する防御機構として進化してきた。これら感染源が保有する高度の多様性に鑑み、免疫システムも 10 の 15 乗に達する多様性を獲得している。ここでは、多様性の獲得、自己反応性の除去、免疫応答の制御に関して免疫システムのフレームワークについて学ぶ。	笹月　健彦（国立国際医療センター総長）	笹月　健彦（国立国際医療センター総長）
2	免疫システムの多様性と多型性	免疫システムは外来侵入物に対する必須の防御機構として機能する一方、免疫応答を行ったために生体が障害されることもまた事実である。そしてこの免疫応答には個体差が存在する。ここでは、免疫応答の個体差（多型性）について学ぶ。	同　上	同　上
3	自然免疫	自然免疫とは、感染に対する初期防御においては細菌のリポ多糖やウイルスの二重鎖 RNA のような、宿主が本来持たない構造体を認識して誘導される反応である。本講義では自然免疫系を理解するとともにその後の獲得免疫系との関連について学ぶ。	小安　重夫（慶應義塾大学教授）	小安　重夫（慶應義塾大学教授）
4	獲得免疫	個々の感染体に特異的な反応は、抗原特異的な受容体を持つＴ細胞やＢ細胞などのリンパ球が関与する。本講義では抗原特異的なリンパ球の抗原認識と機能発現、ならびに特異的な抗原を見つけ出すためのリンパシステムに関して学ぶ。	同　上	同　上
5	自己免疫	自己免疫は、抗体またはＴ細胞が自己の抗原と反応する現象である。自己の抗原に対する免疫学的寛容（トレランス）が破綻して、自己免疫応答が惹起され、それにより自己免疫疾患が引き起こされると考えられている。	山本　一彦（東京大学大学院教授）	山本　一彦（東京大学大学院教授）
6	免疫が関与する疾病-アレルギー、移植、癌、免疫不全など	免疫が関与する疾患は多い。免疫不全のように多くの抗原に対して免疫力の低下が見られるものから、特定の抗原に対する免疫応答が強すぎて起こる疾患や免疫応答が弱いために起こる疾患もある。これらの疾患に対して行われる現在の非特異的療法には種々の限界があり、より理想的な治療法を目指す必要がある。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	ウィルス感染症	形態や核酸の種類に基づくウィルスの分類と具体的なウィルスの種類、惹起する疾患の症状や診断等につき学ぶ。国内的、国際的に問題となっているウィルス疾患を取り上げ、その動向、対策等の現状についての知識を得る。	岩本　愛吉（東京大学大学院教授）	岩本　愛吉（東京大学大学院教授）
8	細菌・真菌感染症	形態とグラム染色に基づく一般細菌について、その種類や惹起される疾患、治療法等を学ぶ。リケッティア、クラミジア、マイコプラズマ等についての基本的な知識を得る。重要な真菌感染症についての基本的な知識を得る。	山口　恵三（東邦大学教授） 河野　茂（長崎大学大学院教授）	山口　恵三（東邦大学教授） 河野　茂（長崎大学大学院教授）
9	呼吸器感染症	呼吸器の基本的な解剖学を学び、健康な人に起りうる呼吸器感染症の症候、病態、診断法、治療法等につき学ぶ。病院に入院している人に起りやすい呼吸器疾患につき基本的な知識を得る。結核やインフルエンザなど重要な呼吸器疾患について概説する。	河野　茂	河野　茂
10	消化器感染症	消化器感染症を起こす代表的な微生物に関して学ぶ。国内で重要な消化器感染症、海外旅行中に注意すべき消化器感染症を、病原微生物、予防、治療、診断等の観点から概説する。O-157、サルモネラ症など、話題の消化器感染症につき重点的に解説する。	山口　恵三	山口　恵三
11	エイズ	エイズを起こすHIVというウィルスについての基礎知識を得る。HIVに感染後の病態とエイズという重症の免疫不全に伴なう日和見感染症につき解説する。抗HIV薬によるHIV感染症の治療の現状につき解説する。国内、世界でのHIV感染の現状につき知識を得る。	岩本　愛吉	岩本　愛吉
12	その他の性感染症	性はヒトの根元的活動のひとつであり、それに関連して伝播される疾病 sexually tranmitted disease(STD)はヒトの歴史とともにある古い問題であるが、新しいヒトの行動パターンとともに新しい問題点をつねに提供している。新興STDであるエイズについては11、15章でのべるが、本章では古くからのSTDである梅毒、淋病、そけい肉芽腫、尖圭コンジローマに加え、近年注目されているクラミジア症、ヘルペス症などについても、臨床、疫学、対策の概要についてのべる。	塚本　泰司（札幌医科大学教授）	塚本　泰司（札幌医科大学教授）
13	神経系の感染症とプリオン病	種々のウィルス、細菌による急性脳炎・脳髄膜炎・脊髄炎などの中枢神経系の炎症は幸いに減少したが、重い後遺症を残す疾患である点、なお重要である。近年、医療の場などで免疫不全者に真菌性髄膜炎が起きている。プリオンは微生物ではなく、感染蛋白であり、ヒトのプリオン病であるクロイツフェルト・ヤコブ病CJDの多くは初老期に孤発性に生ずるが、遺伝性の症例、汚染硬膜の移植などを介した伝播性の症例が知られ、英国ではBSE汚染牛の喫食を介して発症したとされる若年性CJDが報じられ、世界的パニックを生じた。	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	感染症対策と公衆衛生	1～13 章は生体防御のしくみ、種々の感染症の臨床について学んだので、本章ではそれらを前提として、感染症対策のため、国家・社会が構築したしくみについて学ぶ。衛生・公衆衛生のもっとも重要な起源は感染症対策であり、本章ではヒトがはじめて手にした武器である種痘以来の歴史と、明治以降の日本の発展の跡を簡潔に顧み、現行制度のあらましをのべる。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
15	感染症と国際保健	感染症は有史以前からヒトの最大の敵であり、ヒトが集まって住むようになってからは、伝染病の流行によって人口の大半が失われるようなことも、しばしば起きた。しかし、先進国ではこの状況は克服され、絶滅したわけではないが、ほとんどの感染症は国家・社会の保健システムの制御下におかれている。しかし、発展途上国では感染症・寄生虫症はなお重大問題であり、ときには国家・社会の存亡にかかわる事態になっている。G7 サミット（1997）は世界の総死因の 1/3 が感染症であることに懸念を示し、共同の対策を支援することとした。本章では世界的視野に立って、主な感染症の状況と対策についてのべ、日本の役割を考える。	同　上	同　上

＝リハビリテーション（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：眞野　行　　生（北海道大学教授）〕
〔主任講師：近藤　喜代太郎（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

リハビリテーション(リハ)とは「回復」を意味し、障害をもちながら社会復帰する人々を支援する学理であり技術である。リハビリテーションが分野として成立したのは医療と看護よりずっと新しく、第3の医療とよばれた。従来は、対象と手段が限られていたが、近年 きわめて広範な問題について、多くの新しい方法が試みられ、高令社会を迎えて、質的にも変化を遂げ、地域リハビリテーションの分野が拡大されつつある。本科目はリハビリテーションの主な概念、目的、方法、分野とそれぞれの問題点を展望する。本科目はラジオ科目であるので、手技などの視覚的な部分を抑え、概念に重点をおく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	リハビリテーション総論	リハビリテーション医学は障害者を対象とし、医学的管理を行い、社会的復帰をいかに援助するかを命題とする。本章ではリハビリテーションの歴史、方法、目的、主な領域などについてのべ、全体への序章とする。	眞野　行生（北海道大学教授） 近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	眞野　行生（北海道大学教授） 近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
2	リハビリテーションにおける評価とQOL	リハビリテーションは、評価に始まり評価に終わるといわれる。評価は、疾患により発生した障害を、客観的な手法でできるだけ定量的にとらえ、これにより効果的なリハビリテーションアプローチをする。従来延命(量)が医療の目的であったが、近年の医療・特にリハビリテーション医療の目的はQOL(生活の質)の改善である。リハビリテーション診療に用いられるQOL評価法についても概説する。	渡部　一郎（北海道大学助教授）	渡部　一郎（北海道大学助教授）
3	リハビリテーションにおける治療	リハビリテーション医学では、障害者の有する障害を軽減するための特有な治療が行われる。その中には、理学療法、作業療法、言語聴覚療法、ソーシャルワーク、リハビリテーション看護が含まれる。これらの内容について概説する。	間嶋　満（埼玉医科大学教授）	間嶋　満（埼玉医科大学教授）
4	神経再生と脳の機能再構築	神経系が障害されれば、臓器レベルの機能障害を生じ、さらにヒトとしてもさまざまの能力障害が発生する。障害からの回復には神経の再生と機能の再構築が必要である。末梢神経は再生力が高く、また中枢神経細胞も一部の神経細胞が死滅しても芽生によって神経回路網が新生される。早期リハビリテーションが有効なのはこれらの機序による可逆性が侵害の直後ほど大きいためである。本章ではリハビリテーションの基礎となる神経科学の原理について学ぶ。	眞野　行生（北海道大学教授）	眞野　行生（北海道大学教授）
5	脳性麻痺	かつて脳性小児麻痺 CP とよばれた児の悲劇は、妊娠から周産期に至る医療看護の進歩で大きく減ったが、本章では脳性麻痺をふくむ種々の幼児期疾患のリハビリテーションを論ずる。小児の障害を扱うとき、成人と違うのは成長するということである。従って小児のリハビリテーションではこのことをふまえた治療計画やゴールを設定しなければならない。	三上　眞弘（帝京大学教授）	三上　眞弘（帝京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	脳卒中	脳卒中は、リハビリテーション医学の最も主要な対象疾患の1つである。脳卒中の分類、脳卒中によって生じる機能障害・能力障害・社会的不利、ならびにそれらに対するリハビリテーションの過程を、急性期・回復期・維持期に分けて概説する。	間嶋　満（埼玉医科大学教授）	間嶋　満（埼玉医科大学教授）
7	失語・失行・失認	失語・失行・失認は大脳皮質の特定の部位の傷害が特有の認知・表出の障害を呈するものである。これらを生ずる基礎疾患でもっとも多いのは脳卒中であり、病巣部位によっては運動・知覚麻痺とともにこれらを生じ、患者のQOLをいちじるしく低下させる。本章ではこれらを中心とする局在性の大脳高次機能の障害とその対策について学ぶ。	蜂須賀　研二（産業医科大学教授）	蜂須賀　研二（産業医科大学教授）
8	頭部外傷後遺症での高次脳機能障害	頭部外傷では身体障害に加えて、注意力低下、記憶障害、判断力の低下、コミュニケーション障害などの認知障害や、行動異常がみられる。認知リハビリテーションが注目されている。	眞野　行生（北海道大学教授）	眞野　行生（北海道大学教授）
9	老年期痴呆	高令社会のなかで老年期痴呆とそれに至る種々の程度の認知障害はきわめて多くなり、本人・家族・社会・国家にとって大きな問題となっている。本章は高令者における認知障害の対策として、デイケアなどのグループ活動、脳活性訓練などについてのべる。	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
10	脊髄損傷	脊椎・脊髄疾患は両下肢の対麻痺、膀胱直腸機能、性機能などを障害する。本症は頭部外傷とともに労働災害、交通事故を特徴づける障害である。本章ではリハビリテーションの視点から脊損の現状を展望する。	三上　眞弘（帝京大学教授）	三上　眞弘（帝京大学教授）
11	糖尿病など内科疾患	糖尿病は代謝異常による代表的な疾患で、その病状は栄養量、運動量との相対的な関係で決定される。薬物療法のみでは治療は困難である。患者により適正な運動強度の有酸素運動療法を行う必要がある。	渡部　一郎（北海道大学助教授）	渡部　一郎（北海道大学助教授）
12	心肺疾患	心肺疾患の中で、リハビリテーションの対象とされるのは、急性心筋梗塞と慢性閉塞肺疾患である。これらに対するリハビリテーションは、心機能や呼吸機能の改善のみならず、QOLの改善をも目的とした包括的リハビリテーションが主流となっており、それについて概説する。	間嶋　満（埼玉医科大学教授）	間嶋　満（埼玉医科大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	物理療法の進歩	物理療法とは各種のエネルギーを生体に作用させ障害の軽減・機能改善をはかるものである。温熱・光線・電気・音波・機械力などが利用され、疼痛性疾患、拘縮、循環障害に有用である。わが国では温泉療法が古くから行われているが、温熱療法・水中運動療法として運用することにより十分な効果が期待される。	渡部　一郎(北海道大学助教授)	渡部　一郎(北海道大学助教授)
14	装具・補助具およびITの活用	補装具(義肢・器具)は四肢・体幹の形態と機能の代償および保護を目的として、障害の特徴や個々のニーズに応じて個別に処方・作製される。本章ではそれらを概括し、補助具の概要と、携帯電話を用いた動画電送の試みについても紹介する。	眞野　行生(北海道大学教授) 堀　享一(北海道大学技師長)	眞野　行生(北海道大学教授) 堀　享一(北海道大学技師長)
15	介護と地域リハビリテーション	「地域リハビリテーション」とは「地域・在宅で生活している障害者を対象に、その生活の場を中心に展開されるリハビリテーション」である。WHO(1958)の提唱するcommunity-based rehabilitationの概念が各国の実情のなかで実用化したもので、我国でも在宅介護の重要な手段となりつつある。	蜂須賀研二(産業医科大学教授)	蜂須賀研二(産業医科大学教授)

＝　看護学概説（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　佐藤　禮子（放送大学教授）〕

全体のねらい

学習者が、看護学の主たる概念や諸理論に関わる先進的知識を幅広く獲得し、実践の科学である看護に対する理解を深め、自らの看護観を確かなものにしていくことを意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	看護の本質となるもの	看護は、人が幸せにして健康な生活を営むことができることを目指す、生物－心理－社会的存在としての人間の健康生活に焦点を当てた働きをなす実践の科学である。このような科学的看護の本質について理解を深めるために、看護のｋｅｙ概念についてと看護実践とその基盤について詳述する。	佐藤　禮子（放送大学教授）	佐藤　禮子（放送大学教授）
2	看護学の発展とその方向性	看護学の専門分化が進んだ一方、看護学各分野の知見を共有することが困難になりつつある。今後の方向性を考える基盤として、医療の高度化と機能分化、人々の健康水準ともとめる健康の質、社会経済状況からの要請に対応しつつ、看護学が発展してきた過程について述べる。	吉本　照子（千葉大学大学院教授）	吉本　照子（千葉大学大学院教授）
3	生涯発達過程にある個人と看護	人間はこの世に生を受けてから死に至るまで生涯発達の過程にある。看護は、人生のさまざまな局面にある人々に関わりながら、人々の健康や発達を支えることを目標としている。ここでは、看護の対象となる人々の健康との関連から、発達と看護について述べる。	岩﨑　弥生（千葉大学教授）	岩﨑　弥生（千葉大学教授）
4	健康を保つメカニズムと看護	健康とは何か、そして健康を保つために看護はどのような役割を果たしうるのかについて解説する。これにより健康のあらゆるレベルに対する看護の役割、機能について考察する。	宮﨑美砂子（千葉大学教授）	宮﨑美砂子（千葉大学教授）
5	環境との相互作用がもたらす健康問題	健康を支えるための環境づくりが地域、国、地球レベルで進みつつある。そうした活動の基盤となる概念として、物理化学生物的・社会的な外部環境と個人の内部環境、環境と人間の相互作用による適応、適応困難としての健康問題について述べ、看護職者の役割について述べる。	吉本　照子	吉本　照子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	看護情報と看護過程の展開	看護過程は、看護情報に基づく問題解決のための分析的アプローチ法である。その中で、看護する人がどのような判断をし、何を問題として捉え、どのような活動を行っているのかについて解説する。	齋藤やよい（群馬大学教授）	齋藤やよい（群馬大学教授）
7	看護技術の意味	看護実践は対象との関わりの中で発展させていくものであり、対象にもっとも適した看護実践には、看護する者のしっかりした看護観とともに科学的根拠に基づいた看護技術が要求される。具体例とともに看護技術の意味と看護の実践力について説明する。	同　上	同　上
8	関わりと看護技術	看護は人と人との関わりの中で実現され、看護する人もされる人も関わりの中で変容する。看護する者が全体的存在として患者と共にあることの意味を述べ、看護における援助関係の構築や展開に関する看護技術も含め、関わりの看護技術について紹介する。	岩﨑　弥生	岩﨑　弥生
9	セルフケアを育てる看護	健康問題を解決し、健康を増進するために、人はさまざまな社会資源を活用し、セルフケア能力を育み、実践している。慢性疾患患者のセルフケアを例に、セルフケアを遂行するために必要な要件と、それを支える看護活動について説明する。	齋藤やよい	齋藤やよい
10	患者を含む一単位としての家族への看護	患者を含めた家族全体を一つの単位として看護の対象とする意義を概説し、個人の健康の回復と維持における家族の役割および家族成員の病気が家族全体に及ぼす影響について述べる。また家族全体を対象とした看護方法の概要を簡単に紹介する。	岩﨑　弥生	岩﨑　弥生
11	在宅療養を支える看護	在宅療養者及びその家族を支えるために、地域社会で機能している看護の諸活動の現状について説明する。また在宅療養を支える看護をさらに充実・発展させるための課題について述べる。	宮﨑美砂子	宮﨑美砂子
12	他職種との連携・協働と看護の継続	保健医療福祉における対象の多様なニーズに効率的に対応するために、多機関・多職種の連携・協働および看護の継続が重要になっている。各々の場の看護職者が調整的役割を遂行しながら、ケアシステムを発展させるための基盤として、連携・協働に関する概念と考え方について述べる。	吉本　照子	吉本　照子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	地域住民と共働する看護	人々は、地域生活共同体の一員として、多様な人とつながりを持ちながら生活している。人々の健康や生活の豊かさを追究するために、看護が創出してきた、地域住民と共働する看護活動の方法及び意義について説明する。	宮﨑美砂子	宮﨑美砂子
14	人の死と看護	人の死とはについて、生物学的な死の概念から導入し、人の死と死に行くことについて理解を深め、特に、人が人生途上において、突然に死に直面せざるをえない事態に陥った時の苦悩する人々および死に逝く人々にかかわる看護の働きについて説明する。	佐藤　禮子	佐藤　禮子
15	看護における倫理	倫理とは何かという基本的な意味について、および専門職としての看護実践を導く判断の基盤であり道徳的な意思決定を行う時の行動の指針ともなる、倫理的な原則について説明する。また日々の看護実践における倫理的問題を理解するための講義展開を行う。	同　上	同　上

＝　基礎看護学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師　：佐藤　禮子（放送大学教授）　〕
〔主任講師　：三上　れつ（慶應義塾大学教授）　〕

全体のねらい

看護実践に必要な主要な知識・技術について理解を深め、専門職者として活動するための基盤並びに考え方を拡大することを意図している。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	専門職として求められる看護の機能と役割	看護が自律した専門職として、人々の健康や幸福に貢献するには、看護サービス利用者や他職種者と協働して、ケア技術や保健医療福祉におけるケアシステムを変革していくことが必要である。看護の歴史を振り返り、人々のＱＯＬの向上をめざして、対象のもつ力を強める看護の機能と役割について説明する。	佐藤　禮子（放送大学教授）	佐藤　禮子（放送大学教授）
2	患者の権利を擁護する方法	看護職者は、患者がもつ基本的な人権を尊重し、患者が自らの意思に基づき自己決定できるよう支え守る重要な役割を担っている。看護実践の場における患者の人権擁護に対しての多様な倫理的課題と看護職員としてのその対応方法について説明する。	大島　弓子（愛知県立看護大学教授）	大島　弓子（愛知県立看護大学教授）
3	看護行為と法の関係	看護は人の生命に関わる職業であり、法によって責任の在り方が問われる。どのような法令に基づき看護行為を遂行するのか、特に医事、薬事に関する法律を概説し、責任を問われる意味について述べる。また、看護行為の法的責任、看護師の医療行為の法的責任について具体的に説明する。	石井　範子（秋田大学教授）	石井　範子（秋田大学教授）
4	患者となった人の対象理解とは	看護における対象理解は、対象を全体的に統合された人間として理解することである。病気によって患者は新たな役割が付与され、制限された生活を余儀なくされるが、身体的・心理的・社会的・霊的存在として変化しつづける。人間の生命・生活・健康に関わる人間理解について、具体的な事例を通して説明する。	小松　万喜子（愛知県立看護大学教授）	小松　万喜子（愛知県立看護大学教授）
5	専門的援助関係を発展させるコミュニケーション技法	患者と看護師の関係は確かな意思によって結ばれる専門的援助関係である。このプロセスを通して看護師は自己理解と他者理解を深め、専門職者としての能力を高めていく。対人関係理論を概説し、患者との効果的なコミュニケーション技法を具体的に説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	看護判断の基盤となる身体的・心理社会的アセスメント	身体的・心理社会的アセスメントは、看護ケアの根拠と成果の測定、評価の指針となる情報を得るために欠かすことができない。身体的・心理社会的アセスメントの方法を概説し、特に身体的アセスメントの具体的方法について述べる。	三上　れつ（慶應義塾大学教授）	三上　れつ（慶應義塾大学教授）
7	エビデンスに基づく看護過程	看護過程は、看護師が対象の健康回復・維持・増進をめざして、意図的・系統的に行われる問題解決方法である。看護過程の6段階について説明し、エビデンス（根拠）に基づく看護ケアを実践するために、正確な診断・評価を方向づける患者情報の重要性と活用法について述べる。	同　上	同　上
8	セルフケアを促進させる教育指導方法	対象が健康的な日常生活を維持していくためには、看護師が一方的に援助するのではなく、患者・家族のセルフケア能力を高めていくことが不可欠である。セルフケア能力を促進するために必要な教育指導方法の実際について説明する。	佐藤　みつ子（山梨大学大学院教授）	佐藤　みつ子（山梨大学大学院教授）
9	看護基本技術：「食事」を支える口腔・嚥下ケア	口腔内汚染や誤嚥は、致命的な肺炎を引き起こす。 口腔の機能と嚥下のメカニズムから、体力の低下した高齢者や麻痺のある患者に対する「食事」を支える看護技術として、口腔ケアと嚥下ケアについて具体的に説明する。	三上　れつ	三上　れつ
10	看護基本技術：「自尊心」を守る失禁ケア	尿失禁には様々な種類があるが、そのメカニズムを知ることで、人々の排尿を適切にコントロールする介入が可能になる。これらの尿失禁のケアとして重要な「自尊心」を守る看護技術を中心に、トータルケアであるコンチネンスケアについて具体的に説明する。	大島　弓子	大島　弓子
11	看護基本技術：「自然治癒力」を促がす褥瘡ケア	新しい褥瘡ケアは、除圧、栄養、閉鎖式ドレッシング法、創の湿潤環境、デブリードメント法である。予防ケアの他、褥瘡の進行段階に応じた創の「自然治癒力」を増進するための看護技術として、創傷ケアについて具体的に説明する。	石井　範子	石井　範子
12	看護基本技術：「生命の危険」を回避する感染予防方法	医療・保健施設における院内感染に関する状況は厳しさを増しており、正しい知識の提供や予防手段を推進することが急務となっている。院内感染の現況と新しい感染管理の考え方について説明し、「生命の危険」を回避する看護技術として、具体的な感染予防方法について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	看護の情報化から電子カルテまで	身近な存在となった医療情報のコンピュータ化社会を概観する。看護情報の意味、活用法について確認し、情報をどのように管理し保護するかについて説明する。さらに、電子カルテの本質と実際を紹介する。	大島　弓子	大島　弓子
14	チーム医療を発展させるリーダーシップのとり方	対象のニーズや疾病状況の変化に伴い、医療が専門分化し、看護師は他の専門職者とチームを組んでケアを提供している。チーム医療におけるリーダーシップについて概説し、看護独自の機能と看護師に期待される役割を説明する。	佐藤みつ子	佐藤みつ子
15	看護の質を保証するリスクマネジメントのあり方	看護が専門職として発展するために、提供する看護の質を保証し、組織全体のマネジメントの見直しを図ることについて概説する。また、臨床における看護のリスクマネジャーの活動を通して、看護管理として必須のリスクマネジメントのあり方を説明する。	佐藤　禮子	佐藤　禮子

＝在宅看護論（‘０４）＝（TV）

〔 主 任 講 師：川村佐和子（東京都立保健科学大学教授〕

全体のねらい

疾病や障害および虚弱なために看護ニーズを持つ居宅生活者とその家族を理解し、ＱＯＬを向上させる目的にそって、問題を解決するための方策をたて、その実施に必要な知識と看護技術を学習する

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
第一部 訪問看護の概要				
1	訪問看護の必要性と制度の概要	人々が居宅で医療を受けながら生活し、その生活の質を向上させられるように支援することが、在宅医療・看護の提供理念である。訪問看護は1992年から制度化され、診療報酬制度も整備されつつある。本回は、訪問看護の役割、訪問看護提供施設、問題の所在と解決策の考え方について概説する。	川村 佐和子（東京都立保健科学大学教授）	川村 佐和子（東京都立保健科学大学教授）
2	訪問看護提供の考え方と業務	訪問看護の提供は、利用者との契約に基ずいて、主治医の指示を得て開始される。また、利用者の居宅に出向いて単独で看護を提供するものであるから、利用者やその家族との関係や、主治医との関係、ケア提供チームメンバーとの関係を信頼性の高いものにしておくことがが重要であり、看護の提供においては倫理的な行動が求めれている。これら 従来の医療施設内における看護提供法や技術提供の相違と留意点について概説する。	同 上	同 上
3	訪問看護過程と必要な技術	訪問看護では、利用者の居宅で看護を提供するために より利用者の立場に立った看護を提供する必要がある。そこで、医師から受ける指示や報告について、考慮すべき諸点やそこで用いるツールについて概説する。あわせて、施設内基準（プロトコール）の作成や活用についても概説する。	同 上	同 上
第二部 基本的な訪問看護の技法				
4	訪問看護過程の展開：生活のニーズを中心に	在宅療養には、基礎となる生活の整備を必要とする。近年は少人数家族や子供の介護に依存しない在宅生活を希望する高齢者が多くなり、基礎的な生活の支援が重要となっている。そこで、在宅生活の実態を紹介し、そこから生じる支援課題について述べ、さらに、訪問看護師としての課題解決のための方策つまり、家族や福祉関係職員、ボランティア等との連携や共同活動について概説する。	近藤 紀子（日本赤十字武蔵野短期大学助教授）	近藤 紀子（日本赤十字武蔵野短期大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	基本的な生活を支える	近年の医療技術の発達、社会環境の変化にともなって、がんを病む人々やＡＬＳなどにより人工呼吸器を装着するなど高度な医療技術を用いて療養する人々も在宅療養するようになってきている。これらの人々が安全で安楽な療養生活を送るためには、在宅で医療を継続することが欠かせない。在宅療養生活の実態にふれ、医療継続上のニーズとそれに対応する支援法について概説する。	近藤　紀子	近藤　紀子
6	療養環境の整備を支える	介護保険、その他身体障害者福祉の適応となる各種サービス（住宅改修、介護福祉機器の導入、訪問サービス、通所サービス、給食サービス等）その他民間サービスについて、さらに医療資材・器材の調達方法について概説する。さらに、本人・家族に在宅療養環境整備のための情報提供・と導入向けた支援、緊急時対応の必要性と具体的な方法について概説する、	同　上	同　上
7	家族を支える	在宅医療を受けている人々の傍らに常時いる家族介護者の役割は大きい。しかし、家族介護者に介護・看護を大きく依存してしまうと、家族はその負担に耐えかねて健康や生活に破綻をきたしてしまう。訪問看護師が家族介護者に対して行うべき、健康や生活上の問題の考慮の仕方や支援方法について概説する。	川村　佐和子	川村　佐和子
第三部　医療を必要とする人々に対する訪問看護技法				
8	医療継続を支える	在宅ターミナルケアとは何か概念について説明し、地域における在宅ターミナルケアの実際を紹介する。また在宅ターミナルケアにおける家族支援・チームケア・死の看取り・グリーフケアについて具体的に概説する。	川越　博美（聖路加看護大学教授）	川越　博美（聖路加看護大学教授）
9	在宅ターミナルケア	在宅ターミナルケアでは、症状のコントロールが重要なケアであり、在宅における症状コントロール、特に疼痛管理に焦点をあて、訪問看護師に必要な知識と技術について学ぶ。疼痛管理の原則・薬剤による疼痛管理・代替療法・モルヒネの使い方と管理・チームによる疼痛管理について概説する。	同　上	同　上
10	症状をコントロールする	訪問看護は療養者の自立を支援する。そのためにはまず、日常生活動作（歩行、食事、保清、会話）が維持できるよう支援する。さらには、生命維持機能（循環、排泄、神経系、呼吸）が保たれるよう支援する。生活の中で療養者・家族が継続して実行可能な訪問看護技術について実演をまじえて概説する。	近藤　紀子	近藤　紀子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	入退院を支える	療養生活中には本人の病状変化、家族の介護疲れ、時には支援者の再調整のために入院が必要となる。入院時には在宅での療養状況を引き継ぐ。退院時は病院に出向き病状の確認、本人家族の在宅療養の意思確認、在宅に向けて療養環境整備など入退院時の支援について概説する。	近藤　紀子	近藤　紀子
12	充実した日々を支える	在宅療養は、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、保健師、ホームヘルパー、理学療法士、作業療法士、栄養士、介護支援専門員など多くの機関に所属する多くの職種からなるチームで支援することになる。訪問看護は療養者本人・家族が混乱しないよう、他職種と連携し、チームの一員として機能する。そのために他職種の機能を理解でき、個別のケアプランの中で、療養者自身の思いが反映されるよう調整する。これらの方法をいくつかの事例で具体的に概説する。	同　上	同　上
第四部　訪問看護師の地域社会活動				
13	在宅チームの一員として機能する	生活の質（Quality Of Life:QOL）とは何か？について概説する。また、訪問看護師がQOL向上のためにできることは何か？について概説し、利用者のさまざまな努力や工夫について紹介する。	川村　佐和子	川村　佐和子
14	地域看護と訪問看護	地域や集団を対象とする地域看護の考え方および、地域看護と訪問看護の関連について概説する。	同　上	同　上
15	在宅看護のこれから	今後　わが国で訪問看護が発展していくために直面している課題、例えば、問題報酬制度の複雑性、保険適用の限界、ケアの高度化への対応、訪問看護提供施設の経営問題など、について討論し、今後の展望について討論する。	同　上	同　上

＝児童家庭福祉（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：庄司　洋子（立教大学教授）〕
〔主任講師：松原　康雄（明治学院大学教授）〕

全体のねらい

子ども・家庭・地域社会をめぐる大きな変容のなかで、児童福祉の施策・制度・援助活動は再構築をはかる段階にきている。５０年ぶりに改正された児童福祉法の課題の根底には子どもをめぐる現状への深刻な認識があり、特に家庭の変容がもたらす子育ての諸困難の拡大があった。この講義では、子どもの生活に大きな影響を与えている現代家族の状況をふまえて、児童家庭福祉のありかたを検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	児童家庭福祉の視座	子どもの問題は、家族のありようと深く結びついていることに目を向け、現代の児童福祉が児童家庭福祉という視点に立って再構築されてきている動きを概観する。	庄司　洋子（立教大学教授）	庄司　洋子（立教大学教授）
2	児童家庭福祉の歴史	児童福祉という領域の成立過程とその展開を、主に近代社会における人々（とくに子どもとその家族）の生活の変化を通して整理する。その上で、現代における児童福祉の特徴を明らかにし、それがどのような課題を持っているかを考える。	寺脇　隆夫（長野大学教授）	寺脇　隆夫（長野大学教授）
3	現代の養育環境	子どもの養育環境の大きな変化を全体社会のなかで捉えていく。とくに、家族と地域社会の変容が、子どもの発達に及ぼす影響、親にとっての子育ての困難の現状を中心に検討する。	庄司　洋子	庄司　洋子
4	子どもの権利保障	子どもが一人の人間として、（同時に、社会の成員として）、権利主体として存在することの意味を考える。とくに子どもの権利をめぐる歴史的考察、および近年の国際的動向の上に立って、児童福祉領域での課題について明らかにする。	寺脇　隆夫	寺脇　隆夫
5	児童家庭福祉の法制	児童福祉にかかわる法律とそれに基づく諸制度を概観する。児童福祉法とその周辺の関係法との関連および児童福祉法の構成と内容、その特徴を明らかにする。また近年における改正の意味や児童福祉の実現のための現代的課題について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	児童家庭福祉サービスの体系	児童家庭福祉の領域では、具体的にいかなるサービスが提供され、利用されているのか、児童家庭福祉の機関・施設の構成とサービス内容、利用のしくみについて児童相談所を中心に理解する。	松原　康雄（明治学院大学教授）	松原　康雄（明治学院大学教授）
7	児童家庭支援の方法	子どもとその家庭がかかえる現代的ニーズへの対応について、相談、子どものケア（入所・通所）、障害児への援助、ケースマネジメントとネットワーク、ファシリティという区分から学ぶ。	同　上	同　上
8	共働きと保育	共働き家庭とその子どもにとって不可欠な保育の制度について、その歴史や現状を学ぶ。とくに、共働きの拡大や親の働き方の多様化を背景とする現代的な保育問題に対して展開されつつある新しい諸制度とそれをめぐる課題を、「仕事と子育て」の両立支援の視点から検討する。	桜井　慶一（文教大学教授）	桜井　慶一（文教大学教授）
9	地域における子育て支援	現代の親がかかえる子育ての困難に着目し、地域社会において多様な子育て支援のとりくみがすすめられている。少子社会の育児力の低下に対応した地域子育て支援の現状と課題を理解する。	同　上	同　上
10	家族の養育力と子どもの育ち	現代社会のさまざまな要因によって、子どもの育つ力がゆがめられている現実、とりわけ、子どもの成長を支えきれなくなっている家族の実態について、要養護問題・非行問題を中心に考察し、施策の現状と課題を検討する。	湯澤　直美（立教大学助教授）	湯澤　直美（立教大学助教授）
11	障害児とその家族への支援	子どもの障害の早期発見や早期療育の重要性に着目し、障害のある子どもが地域社会のなかでどのように育っていくのか、その施策と取り組みの現状を理解し、課題を明らかにする。	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）
12	ひとり親家庭の子育て	離婚等による母子家庭・父子家庭の増加に目を向け、これらのひとり親家庭が抱える子育ての困難とその背景、ひとり親家庭を支える諸制度の現状と課題を考察する。	湯澤　直美	湯澤　直美

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	児童虐待への取り組み	家庭内の、とりわけ親による子どもの虐待が社会問題化している。その要因を明らかにするとともに、子どもの虐待の発見や予防のためにいかなる取り組みがすすめられているかを理解する。	松原　康雄	松原　康雄
14	不登校・引きこもりへの取り組み	不登校や引きこもりの動向・現状、及び福祉制度上での対応について概観する。 あわせて、ソーシャルワークの視点について簡単に紹介しながら、子どもの権利保障を促進するような社会的サービスのあり方について考える機会とする。	渋谷　昌史（日本子ども家庭総合研究所研究員）	渋谷　昌史（日本子ども家庭総合研究所研究員）
15	児童家庭福祉の課題と展望	社会の変化とともに複雑化・多様化しつつある児童家庭福祉のニーズを再点検し、現在の施策や制度がそれらにどう応えているのか、今後に何が求められているのかを検討する。	庄司　洋子 松原　康雄	庄司　洋子 松原　康雄

障害者福祉論（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　大曽根　寛（放送大学教授）〕
〔主任講師：　小澤　　温（東洋大学教授）〕

全体のねらい

今日、障害者福祉は、国内的にも、国際的にも大きな変化が生じてきている。「障害者福祉論」の講義では、障害者福祉の歴史、理念、障害の概念と定義、障害者福祉の制度とサービスの体系、障害者をめぐる環境、障害者の権利、障害者自身の運動などのテーマを通して、障害者福祉の現状について学び、今後の課題と展望について理解を深めることを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	障害者福祉の歴史的展開	１回目の講義では、歴史を通して、障害者福祉の全体像を理解することを目的とする。第２次世界大戦以降から現在にいたるまでの障害者福祉の歴史を、貧困対策制度から障害者福祉制度へ、障害種別の対策期、施設設置促進期、地域福祉重視期、措置から契約制度へ、の５つの時代区分に分けて理解する。	小澤　温（東洋大学教授）	小澤　温（東洋大学教授）
2	障害者運動の歴史的展開	２回目の講義では、障害者自身がどのような運動や社会的な活動を行い、障害者福祉の歴史を築いてきたのかを理解することを目的とする。これまで障害者福祉の歴史は、法・制度の歴史に焦点をあてたものが多く、障害者自身の運動や社会的活動を通して、障害者福祉の歴史のより深い理解をすすめる。	小澤　温	小澤　温
3	障害者福祉の思想と理念	３回目の講義「障害者福祉の思想と理念」では、障害者福祉について考える際のよりどころとなる思想や理念について、現代の問題状況をふまえながら検討する。近代社会における「障害」および「障害者」概念の位置を確認しながら基本的人権の理念が障害者福祉の原理になっていることを理解する。	大曽根　寛（放送大学教授）	大曽根　寛（放送大学教授）
4	障害の概念と国際生活機能分類	４回目の講義では、障害についての見方、考え方を理解することを目的とする。特に、国際障害分類から国際生活機能分類に改定された経過や背景を理解することによって、障害をどのように考え、障害によってもたらされる問題をどのように克服すべきかについて理解を深める。	小澤　温	小澤　温
5	障害者福祉の対象	５回目の講義では、障害者福祉制度の対象として、障害児、身体障害者、知的障害者、精神障害者、難病患者、を取り上げて、法・制度における対象の規定について理解することを目的とする。あわせて、法・制度における対象の規定の問題点や課題についても検討する。	坂本　洋一（和洋女子大学教授）	坂本　洋一（和洋女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	障害者福祉の制度体系	6回目の講義では、障害者福祉サービスの根拠となる障害児、身体障害者、知的障害者、精神障害者に関わる法律・制度体系を理解することを目的とする。あわせて、障害者の自立と社会参加を促進するための関連する多様な障害者施策についても理解を深める。	坂本　洋一	坂本　洋一
7	障害者福祉に関わるマンパワー	7回目の講義では、障害者福祉に関する「マンパワー」とはどのような種類のものであり、どのような特徴をもっているのかについて理解することを目的とする。また、「マンパワー」の教育や養成のあり方についても理解を深める。	坂本　洋一	坂本　洋一
8	施設福祉の現状と論点	8回目の講義では、障害者施設が誰の、どのようなニーズに応えようとしてきたのかという歴史的系譜をたどりながら、「生活保障としての意義と市民生活からの遊離」という観点から、施設福祉の現状と論点を整理し、「施設福祉」の有り様を考える契機とする。	加瀬　進（東京学芸大学助教授）	加瀬　進（東京学芸大学助教授）
9	地域福祉の現状と論点	9回目の講義では、地域住民としての暮らしを構成する諸要素を読み解き、それを充足する社会資源と「施設」を含めた福祉資源の関連を整理しながら、障害者の「地域福祉」および「地域生活」の現状と論点を整理し、目指すべき地域ケアシステムの理解を深める。	加瀬　進	加瀬　進
10	障害児の療育と教育	10回目の講義では、出生前から成人にいたるまでの「子どもの豊かな育ち」を軸に、療育と教育の現状と課題を理解することを目的とする。また、「特別支援教育」という新たな枠組みにおける障害者福祉との連携についても理解を深めることとしたい。	加瀬　進	加瀬　進
11	障害者の雇用・就労の現状と課題	11回目の講義では、職業と生活との関係を検討する。まず、現実の経済社会との関わりの中で、障害者の雇用・就労がどのような現状にあるかを把握する。その上で法的なシステムの仕組みと機能をふまえながら職業リハビリテーションの課題について学習する。	大曽根　寛	大曽根　寛
12	障害者をめぐる移動交通環境	12回目の講義では、障害者を取り巻く移動、交通環境の状況とその課題について、内外のさまざまな具体的な事例を示しながら、考察を深めることを目的とする。また、交通バリアフリー法の意義とその課題についても検討し、よりよい交通、移動環境のあり方について理解を深める。	秋山　哲男（東京都立大学大学院教授）	秋山　哲男（東京都立大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	障害者をめぐるまちづくり	13回目の講義では、移動、交通環境からさらに視野を広げて、都市、地域環境の整備を含んだ「まちづくり」の現状と課題について、さまざまな地域事例を紹介しながら理解を深めることを目的とする。あわせて、「まちづくり」の評価視点について何が必要であるのかを考察する。	秋山　哲男	秋山　哲男
14	障害者の居住環境	14回目の講義では、障害者の居住環境に焦点を当て、具体的な住宅状況にふれながら、住宅改造のあり方について理解を深めることを目的にする。また、住宅改造のあり方を通して、障害者にとってのよりよい住環境とそれを実現する住宅政策のあり方について理解を進める。	秋山　哲男	秋山　哲男
15	障害者福祉の課題と展望	15回目の講義では、これまで学んできた講義をふまえて、今後、日本の障害者福祉はどうあるべきか、どのような方向で改革を進めるべきなのかについて理解することを目的とする。特に、障害者差別禁止の国際的な動向や利用者中心の福祉改革の動向について考察を深める。	小澤　温	小澤　温

＝高齢者福祉論（‘０３）＝（ TV ）

〔主 任 講 師：　浅野　　仁　（関西学院大学教授）〕
〔主 任 講 師：　栃本　一三郎（上 智 大 学 教 授）〕

全体のねらい

21 世紀を迎えたわが国の高齢者福祉の構想が世界とのつながりの中でイメージできるような内容とすると共に、20 世紀後半から人生を始めた中年世代にとっての高齢者福祉という視点と、それよりも若い世代にとってのこれからの高齢者福祉のあり方を政策、実態、サービス現場という３つの視点を分けながら論じていく。また、常に国際的視点から、政策・生活・意識の実情を説明していく。

高齢者福祉を社会老齢学という観点から説明すると共に、従来の老人福祉の視点だけでなく、社会政策の観点から整理し、理解を深める。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	少子・高齢社会の展望	コース全体のねらいを論じると共に、高齢社会とはどのような社会なのかについてマクロな視点から検討する。先進諸国はおしなべて高齢社会であり合計特殊出生率の低い社会に移行している。少子・高齢社会の人口論的な特質、社会構造、経済構造、財政などについて、現状、今後、国際比較をおこない明るい展望を示唆	栃本　一三郎（上智大学教授）	栃本　一三郎（上智大学教授）
2	高齢者に対する知識と意識	高齢者や高齢社会をマイナスイメージで捉えている人が多いが、それは高齢者や高齢社会を過って理解していることがひとつの理由である。それらの「誤解」はまた、「偏見」を生じる要因ともなっている。高齢者や高齢社会に対する正しい理解を持つことの重要性を認識するための、具体的質問項目と通じて自己チェック	浅野　仁（関西学院大学教授）	浅野　仁（関西学院大学教授）
3	身体的機能の加齢変化と自立	身体的機能の加齢変化は、明らかに機能低下をもたらす。高齢期の身体機能の特質を解説するとともに、日常生活における高齢者の「自立」のあり方をリハビリテーションの立場から講義する。	竹内　孝仁（日本医科大学教授）	竹内　孝仁（日本医科大学教授）
4	心理、精神的機能の加齢変化とその対応	高齢期の心理、精神機能の正常な加齢変化は複雑なメカニズムを有している。最近の研究成果を基にその特性を説明する。さらに、現状において大きな課題となっている「老年痴呆」の原因、症状、対処法についても講義	長嶋　紀一（日本大学教授）	長嶋　紀一（日本大学教授）
5	高齢者の生活の質（QOL）	高齢者の「暦年齢」とは異なる「認知年齢」は、その人の思考方法と行動様式により強く影響を及ぼすと考えられる。今回は、「認知年齢」の持つ意義について個人と社会の両面から考察する。また、福祉サービスの理念、目標であるＱＯＬ（生活の質）の概念、測定尺度などについて学ぶ	浅野　仁	浅野　仁
6	高齢社会と高齢者社会政策	社会保障制度が高齢者にどのように対応しようとしているのか、基礎的データを含めその全体像を示すと共に、高齢者社会政策という視点から、その展開と今後を政策場面から紹介する。分権化、規制緩和、地域主義、市場化、複合化などについても検討。福祉資本主義の３類型（ｿｼｵﾃﾞﾓｸﾗﾃｨｯｸ・ｺｰﾎﾟﾗﾃｨｽﾞﾑ・ﾘﾍﾞﾗﾙ型）と比較しながら論じ、ポジティブ社会政策の必要性を解説。	栃本　一三郎	栃本　一三郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	家族と扶養	家族の持つ意味を歴史的に見ていくと共に、近年の仮説を紹介しながら、人類にとっての家族、親世代との連続性の重要性について論じる。また、人口論から見た世帯についても論じる。個族というものがあり得るのか、都市と世帯、家族とジェンダー等についても論じ、あわせて社会保障との関連で家族と扶養を考察。	栃本　一三郎	栃本　一三郎
8	所得保障の課題と今後の方向	高齢者のおかれた経済的な状況（収入・資産・支出）の変化と現状を踏まえた上で、所得保障制度と資産形成について、各国との比較で論じる。年金制度以外の公的な生計維持のための手段や各種の現金給付についても論じるが、負担や支出についても分析。	同　上	同　上
9	医療保障の課題と今後の方向	高齢者の疾病の特徴、高齢者医療保障制度の現状、問題点とともに、今後の医療保障の方向を地域医療、病院機能、医療サービスに関連サービス、医療サービスの質、健康の質、ターミナルケア、財源調達、支払い方式、高齢者負担等に言及しながら論じる。医療政策の考え方についても各国に触れながら論考	川渕　孝一（東京医科歯科大学大学院教授）	川渕　孝一（東京医科歯科大学大学院教授）
10	高齢者と住居	高齢者の住居と住まい方について、多様な観点から、そして特に将来のあり方という視点から考察していく。単にバリアフリーやユニバーサル・デザインの住居についてだけでなく、地域の環境、都市空間などの「まちづくり」や公的な住宅政策や民間事業者の動向についても海外情報を含めて論じる。	白石　真澄（東洋大学助教授）	白石　真澄（東洋大学助教授）
11	高齢者福祉サービスⅠ－在宅福祉サービス－	高齢者の生活の質を高める条件のひとつは、高齢者が住み慣れた家庭や地域においてできるかぎり長期にわたって生活することである。そのために、種々の在宅福祉サービスの拡充はますます重要となっている。ここでは、国内外の在宅福祉サービスの実際を紹介し、これからの方向について解説する。	浅野　仁	浅野　仁
12	高齢者福祉サービスⅡ－施設福祉サービス－	家庭において家族の支援が困難となった要介護高齢者は、施設福祉サービスを利用する。施設サービスにおける新しい取り組み、ターミナルケアやグループホームなどを紹介しながら、入所施設が抱える課題と解決の方向について講義	同　上	同　上
13	介護保険制度のあり方	わが国の介護保険制度の実施体制と現場における現状と課題、それに対する対応策について、政策、実態、現場の３局面から論じていく。またオランダ、ドイツ、オーストリアの介護保険制度およびその運用との比較もおこないわが国の特質を明らかとする。介護保険制度と関連施策や経済・社会・産業への影響も考察。	栃本　一三郎	栃本　一三郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	高齢者の社会参加	一定の自立生活が可能な大方の高齢者にとって、「生きがい」や「介護予防」のための社会参加は極めて重要である。ここでは、高齢者のボランティア活動と生涯学習の意義、活動の実情、課題と今後のあり方について具体的事例を通じて学習する。	浅野　仁	浅野　仁
15	これからの高齢者福祉	14講を総括し、主任講師である浅野仁、栃本一三郎とともにゲストを迎え、これからの高齢者福祉の方向、行政、福祉関係者、市民がそれぞれ取り組むべきテーマを提言するとともに、高齢者福祉の研究の方向性について論じる	浅野　仁 栃本　一三郎、他	浅野　仁 栃本　一三郎、他

＝身体福祉論（‘０３）＝（TV）

－自活できる能力の保持－

〔主任講師：　宮下　充正（放送大学教授）〕
〔主任講師：　臼井　永男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

福祉という言葉は、幸福な状態を意味する。近年、身体福祉論はからだに幸せをもたらす道筋を解き明かす領域として使われ始めた。少子高齢社会のさらなる進行が予想されるこれからの 20 年間は、介護される人の増加と対照的に介護する人の減少が確実視される。このような時代に生活する人びとが互いに幸福であるためには、各自が自立して活動できる身体的能力を保持することがあげられる。この点に関して、スポーツ科学、体力科学、トレーニング科学などの分野において、有用な知見が蓄積されてきた。それらを総括し具体的な運動の方法を、解説、提示する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	福祉に欠けている視点	介護に疲れて病に伏す例は、度々耳にする話である。また、介護者のアンケート調査によると、身体的負担が大きいことを訴える人が多い。介護の仕事が負担となるかどうかは、介護者の体力水準との相対的な問題である。トレーニングによって体力水準を高めることと、適切な休養をとって体力の回復をはかることは介護者にとって有利な条件となる。これらについて，調査、研究結果を踏まえて解説する。	宮下　充正（放送大学教授）	宮下　充正（放送大学教授）
2	からだを動かす能力の運動生理学的理解	からだを動かす神経・筋系およびエネルギー供給機構についての運動生理学的知見を理解することは、自立して活動できる能力の保持にとって欠かせない。からだを動かす能力の運動生理学的基礎について解説する。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
3	からだを動かす能力の成長にともなう発達	からだを動かす能力は，成長とともに向上するが、すべての器官、機能が年齢とともに同じ割合で向上するとは限らない。この点に関してよく理解しておかないと、運動実践が健全な成長を阻害するばかりか、障害をもたらすことがある。これら注意すべき諸点を解説する。	平野　裕一（東京大学大学院助教授）	平野　裕一（東京大学大学院助教授）
4	からだを動かす能力の加齢にともなう衰え	からだを動かす能力、例えば、筋力、筋持久力、全身持久力などは、20 歳から 30 歳をピークに、加齢とともに約１%/年の割合で低下していく。この低下率は、運動不足の状態が続くと急激に増大する。これらの現象について解説する。	福永　哲夫（早稲田大学教授）	福永　哲夫（早稲田大学教授）
5	肥満解消と予防への運動の効果	肥満は生活習慣病の危険因子の一つであるが、その成因としてエネルギー摂取量が消費量を上回る状態が続くことがあげられる。したがって、肥満の解消は、これまで以上にエネルギー摂取量を減少させるか、エネルギー消費量を増加させるかによってもたらされる。ここでは肥満の判定基準とその考え方、減量のための運動と、その適否についてまとめる。	北川　薫（中京大学教授）	北川　薫（中京大学教授）
6	運動実践とからだを動かす能力の改善	まず運動をすることの心構え、運動と体力との関係、について述べる。運動の効果は継続することにより明確に現れる。ここではトレーニングについての基本的考え方をまとめ、トレーニングによって筋系（筋持久力、筋力）、酸素運搬系（呼吸、循環）、脳・神経系が如何に改善されるかについて解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	方法１： いろいろな目的があるストレッチング・エクササイズ	ストレッチングには、からだを目覚めさせる、運動によるケガを予防する、血行をよくする、運動後の疲労を取り除く、関節の可動域を広げるという目的がある。その目的に合わせた方法について解説する。	水村　真由美（お茶の水女子大学大学院助教授）	水村　真由美（お茶の水女子大学大学院助教授）
8	方法２： 力強さを増すレジスタンス・エクササイズ	運動不足や加齢による筋力の低下は、いろいろなところの関節に障害をもたらすことがある。また、バランスを崩したときに筋力が弱いために転倒することがある。筋力の低下を防ぎ、さらに、増強させるためには、筋肉に適度な抵抗をあたえて活動させることが必要である。その方法と実際のトレーニングの効果について解説する。	平野　裕一	平野　裕一
9	方法３：手軽にできるウオーキング	だれにでも手軽にできるウオーキングは、気分のリフレッシュを目的とした散歩から、脚力の強化を目的とした階段上りや山登り、呼吸循環系能力の改善を目的としたエクササイズ・ウオーキングまである。それらの目的に応じたウオーキングの方法について解説する。	水村　真由美	水村　真由美
10	方法４：ややハードなジョギング	ジョギングはランニングに比べ、スピードが遅く、脚の各関節に対しての負荷が弱い。したがって、ふつうの人たちが全身持久力向上のために実施する運動としては適切といえる。しかし、走り方やスピードについてはそれぞれの個人に適した方法があるので、その点について解説する。	臼井　永男	臼井　永男
11	方法５：だれにでもできる水泳・水中運動	水中運動には、水泳のほかに、水中ウオーキング、水中ランニング、アクアビックスなど、全身持久力の向上を目的とした種目がある。さらに、水中でのストレッチング、水中でのレジスタンス・エクササイズがある。水中で行われる運動の特徴とその方法と効果について解説する。	宮下　充正	宮下　充正
12	方法６：楽しいダンス・エクササイズ	体力の保持増進を目的として行われているダンスには、エアロビックダンス、ハワイアンダンス、ソシアルダンスなどがあり、多くの人たちが参加している。これらのダンスでは、音楽に合わせてからだを動かすために、知らず知らずにやりすぎになってしまう人たちがいる。注意すべき諸点とともにその方法について解説する。	水村　真由美	水村　真由美
13	方法７：テニス・ゴルフ	テニスは、仲間とともに楽しめる運動種目であり、青年から高齢者まで幅広い年齢層の人たちが実施している。そして運動技能が高い方が楽しめるという特徴を有しているので、体力的な面の注意をおろそかにしがちである。また、ラケットを力いっぱい振るので、障害が発生しやすい運動種目である。それらについての注意事項と方法について解説する。 ゴルフは広々とした野外で行うので、精神的にも好影響が期待される。しかし、ボールをクラブの中心でとらえ打つには、かなりの練習が不可欠である。ボールを打つ技術と１８ホールを歩くといった体力について、これまでの研究成果を踏まえて解説する。	福永　哲夫	福永　哲夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	方法8：室内でできるマシン・エクササイズ	自治体の運動施設や民間のスポーツ（フィットネス）クラブに、室内用の運動機器が設置されるようになった。これらの機器は、筋力の向上を目的としたウエイトマシン、全身持久力の向上を目的としたトレッドミル、自転車エルゴメーター、ステアクライマーなどがある。これらの特徴と使用法について解説する。	平野　裕一	平野　裕一
15	少子高齢社会構成員に望まれること	子どもの体力の低下が指摘されているにもかかわらず、学校体育の時間は短縮される。働きざかりの人たちは高度情報化社会の下で、これまでにないほどの精神的ストレスを受けることになる。加えて高齢者は増え続ける。このような時代に、各自が自立して生活できる能力を保持できるための方策について概説する。	宮下　充正	宮下　充正

＝地域福祉論（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　牧里　毎治（関西学院大学教授）〕

全体のねらい

地域福祉が住民主体を基本とする地域社会をベースにしたサービスとケアのシステムであることを理解する。この場合、地域住民は、サービスの受け手であるとともにサービスを創出する担い手でもあることを学ぶ。国から地方への中央集権的，上意下達的な縦割り型の法令や補助金に拘束された官僚的福祉行政ではなく、生活者である住民の目線から自治体を含む様々な専門職団体や住民団体とともに多様な生活支援サービスや市民活動を横につないでいく取り組みであることを理解する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域福祉の理念と概念	地域福祉とはなにか。その概念を説明します。 地域福祉の範囲と構成をアプローチの仕方によって説明します。大きくは社会構造の一つとしてとらえ、もう一つは社会的機能としてとらえるアプローチです。あわせてこれらの地域福祉システムを支えている理念、たとえばﾉｰﾏﾗｲｾﾞｰｼｮﾝやｴﾝﾊﾟﾜｰﾒﾝﾄ、あるいはｺﾐｭﾆﾃｨｹｱなどについても述べます。	牧里　毎治（関西学院大学教授）	牧里　毎治（関西学院大学教授）
2	地域福祉の源流	歴史的にみると、地域福祉なるものはどのように進展してきたか。西欧での歴史的展開を含めて、特に戦前日本の地域福祉の源流をたどります。地域福祉ではなじみの深いセツルメント運動や慈善事業協会、地方改良運動など日本的取り組みと欧米での歴史的展開を対比させながら説明をします。	永岡　正己（梅花女子大学教授）	永岡　正己（梅花女子大学教授）
3	戦後日本の地域福祉	戦後日本の社会福祉の歩みをみると、戦後復興から今日の地方分権まで、社会福祉体制の整備とともに地方自治体を中心とする地域福祉政策への指向が高まってきています。福祉政策の地域指向がどのように生じてきたのか、その変化と歩みおよび社会的背景を述べます。それとともになぜ地域福祉が台頭してきたのか理由をさぐります。	同　上	同　上
4	地域福祉の構成と範囲	地域福祉とは具体的にはどのような範囲と内容をもつシステムなのか、また、どのように構成されているのかを体系的に説明します。サービス体系としの在宅福祉サービスと施設福祉サービス、運営要件としての住民組織化活動、計画化機能などについて言及します。さらに地域福祉システムを支える自治体運営と住民参加の重要性につても述べます。	野口　定久（日本福祉大学教授）	野口　定久（日本福祉大学教授）
5	地域福祉におけるサービス供給組織	在宅福祉サービスおよび施設福祉サービスともに、これらのサービスは、様々な供給組織によって提供されている。この多元的なサービス供給の実態と課題について説明します。また、これらの多様なサービス供給組織の連携や統合の必要性についても言及します。特に介護保険の制度化にともなう地域福祉のあらたな政策・実践の課題についても述べます。	同　上	同　上
6	福祉施設と地域社会	施設福祉から在宅福祉へのシフトが地域福祉の主要な潮流とも言われてきましたが、施設建設反対運動のようなコンフリクトも起こっています。 地域福祉を実体として形づくっていくには、福祉施設が地域社会の福祉拠点にならなければならないことを述べます。福祉施設の社会化などをふりかえりながら今日的課題について説明します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	社会福祉協議会 NPO	地域福祉推進の中核的機関である社会福祉協議会の特質および戦後50年の実践を振り返りながら民間組織としての役割と課題について説明します。福祉施設などの社会福祉法人とは異なる市民参加型の法人としての展望にも言及します。NPOなどの新しいタイプの公益法人との連携や社会福祉協議会のNPO的運営についても述べます。	藤井　博志（大阪府立大学講師）	藤井　博志（大阪府立大学講師）
8	ボランティア活動と福祉教育	福祉コミュニティの形成にはボランティア活動や地域での助け合い活動など市民参加型のまちづくりを欠かせません。福祉社会を構成する主体者としての住民やボランティアの成長が望まれています。地域福祉に密接に結びついている福祉教育や福祉学習について住民の主体形成を促進する視点からこれらの実態と課題について述べます。	同　上	同　上
9	民生委員・児童委員の現状と課題	民生委員・児童委員は歴史的にも日本的地域福祉の原点でもあり、今日の地域福祉の主要な担い手でもあります。これら民生委員・児童委員の地域福祉に果たしてきた役割や活動実績について評価するとともに、あわせて地域社会で独自に制度化されている福祉委員の実態についても現状を説明します。	同　上	同　上
10	住民主体形成と当事者組織	地域福祉の主体者として住民がサービスの受け手でもあり担い手でもあることを説明します。住民が福祉における住民自治の主役にならなければならないことの重要性について述べます。住民の主体形成だけでなく、福祉問題を抱える様々な当事者についても受益者でもあり担い手でもある主体者としての成長の必要性を述べます。	同　上	同　上
11	福祉の情報提供相談・苦情解決のシステム化	生活圏としての地域社会にねざした地域ケアシステムは、サービス供給の仕組みづくりだけでなく福祉情報の提供や情報公開、ニーズ把握の実態調査や継続的な相談体制づくり、苦情解決などのシステム化が必要です。ニーズ発見、問題把握から苦情解決などまで市民参加による取り組みが求められていることにも言及します。	牧里　毎治	牧里　毎治
12	コミュニティワークと福祉のまちづくり	住民参加は、地域福祉にとって重要な本質的要素です。その参加・参画を促進するには専門職であるコミュニティワーカーによる支援が必要となります。住民福祉活動や福祉のまちづくり活動を支援する専門的方法をコミュニティワークといいますが、その現状と課題を説明します。コミュニティワークは、地域福祉の方法といえます。	同　上	同　上
13	地方自治体の地域福祉財政	地域ケアシステムの構築であれ、住民の福祉活動支援であれ、これらの諸活動を支える人材や組織を確保するには公的な財源がなければ成り立ちません。これらの地域福祉にかかわる地方自治体の財源がどうなっているかを説明します。あわせてこれらの地方自治体における財政状況や課題についても地域福祉にかかわる範囲で言及します。	山本　隆（立命館大学教授）	山本　隆（立命館大学教授）
14	地域福祉の民間財源	税金以外の地域福祉を支える民間財源について現状と課題について説明します。伝統的で代表的な民間財源としては共同募金と福祉基金などがありますが、これらの寄付による方法以外の財源調達の方法、たとえば利用料(料金)方式やあバザーなどのイベント型資金獲得などについても現状と課題を述べます。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	地域福祉計画の策定と公私協働 ・官民協力	最後にまとめにかえて、これまでの社会福祉計画をふまえて新しい地域福祉計画の策定の意義と展望について説明します。地方分権時代の地域福祉にとっては地方自治をどのように発展させるかが重要な論点になりますが、その具体化には地域福祉計画をどう策定するかが大きな試金石になることを述べます。	牧里　毎治	牧里　毎治

＝公的扶助（‘０２）＝（Ｒ）

－生存権のセーフティネット－

〔主任講師：　杉村　宏（法政大学教授）〕

全体のねらい

人々の「人間らしく暮したい」という願いを根底で支える制度として、公的扶助制度がある。本講座では、「生存権のセーフティネット」をキーワードにして、わが国の公的扶助制度である生活保護を中心にして、その理念の形成、役割と現状を国民生活と関連させながら考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会保障 －社会的セーフティネット－	公的扶助を含む社会保障がなぜ社会的セーフティネットとよばれるのか，また現在進行中の社会保障改革がセーフティネットをどのように捉えているかを検討する。	杉村　宏（法政大学教授）	杉村　宏（法政大学教授）
2	公的扶助 －生存権セーフティネット－	公的扶助制度の社会保障における位置と役割を検討し，生存権のセーフティネットといわれる理由について考える。また公的扶助が所得保障の制度であると同時に，社会福祉の機能も併せ持っていることについても検討する。	同　上	同　上
3	公的扶助の形成と展開 －貧困，貧困観の変化と救済制度－	公的扶助制度の前身である救貧制度の成立と展開を，主にイギリスの救貧法を例に，その時代の貧困の実態と人々の貧困に対する見方と関わらせて述べる。	同　上	同　上
4	戦争と社会保障 －社会的セーフティネットの理念形成－	社会的セーフティネットとしての社会保障の形成を，20 世紀前半の世界大戦との関係で考える。とくに生存権が，人々の生存の危機が現実のものとなる中で確立したものであることを［戦争国家］の人間観と関連して検討する。	同　上	同　上
5	戦前わが国の救貧制度 －特殊なセーフティネット－	戦前わが国の救貧制度を、日本の，近代化の特徴と関連させて概観し、その特質と問題点について考える。	同　上	同　上
6	生活保護制度 －わが国における生存権セーフティネット－	戦後の国民生活の再建に向けて，社会保障の中核を担った生活保護制度について，その成立過程と制度の目的，基本原理について述べる。とくに生活保護の基本原理は生存権のセーフティネットとして機能する上で，原動力となったものであることを確認する。	同　上	同　上
7	生活保護の実施原則	生活保護制度は柔軟な構造によって実施されるよう組みたてられているが、その原則と方法を概観し、これを解釈し運用する福祉行政の役割と責任について述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生存権セーフティネットの保障水準	生活保護の要否と程度を測定するための生活保護基準の成り立ちと、国民生活に直結する賃金所得や社会保障給付との関連について検討する。	杉村　宏	杉村　宏
9	生活保護行政の展開	生活保護行政の動向は、社会経済の動向と相互に関連しながら展開してきた。また被保護層は生活保護周辺層の動向とも当然影響しあうが、被保護者・世帯の推移と保護行政の展開を、保護適正化政策を基軸にしながら検討し、その課題と問題点を考察する。	同　上	同　上
10	公的扶助ケースワーカーの仕事 －生活再建への支援－	生活保護法の目的は最低生活の保障とともにその自立の助長にあるが、被保護者の社会的自立にとって必要なソーシャルケースワークの専門性とは何かを考える。	同　上	同　上
11	生存権セーフティネットの担い手 －公的扶助研究活動をめぐって－	生活保護制度を生存権のセーフティネットとして機能させる担い手としての公的扶助ケースワーカーは、専門性とともにその組織的な研究活動を必要とする。いわばセーフティネットのネットワーキングの必要性と現状を、公的扶助研究活動をとりあげて考える	同　上	同　上
12	国民生活と社会的セーフティネット －生活の不安定化をめぐって－	雇用不安や経済状況の不安定化を背景にして、セーフティネット論がさまざまな分野で語られるようになってきているが、生活不安・将来不安の現実に立ち戻って、今求められているセーフティネットの再構築の方向を考える。	同　上	同　上
13	生存権セーフティネットの危機 －「ホームレス」問題をめぐって－	国民的最低限保障のセーフティネットとしての生活保護制度があるにもかかわらず、今日では大都市を中心にして、路上で生活をする人々－いわゆるホームレスが無視できない数で存在している。これらの人達が提起している問題を、わが国のセーフティネットとの関係で検討する。	同　上	同　上
14	セーフティネット再構築のために －生活保護裁判で問われていること－	生活保護行政をめぐる裁判が、目に見えて増加しているが、そこで問われている問題を通して、生活保護制度のあり方を検討する。	同　上	同　上
15	まとめにかえて －生存権セーフティネットの課題と展望－	公的扶助論のまとめにあったて、社会福祉構造改革の一環としての生活保護改革を取り上げ、その課題と展望を検討し、生存権セーフティネットの再構築のあり方を考える。	同　上	同　上

社会保険と市民生活（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　久塚　純一（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：　大曽根　寛（放送大学教授）〕

全体のねらい

今日の日本社会においては、ほとんどすべての市民が社会保険と何らかのかかわりを持ちながら生活を送るようになっている。「社会保険と市民生活」というタイトルのこの講義は、私たちの生活にとって切り離すことができなくなっている社会保険の成立の背景、その仕組み、活用方法と課題について考察し、就労形態が多様化している現代の状況もふまえて職業生活とのかかわりについても理解することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「社会保険と市民生活」への招待	講義全体のねらいと進め方について理解する。第１回目の講義「社会保険と市民生活（‘０４）への招待」は、社会保険が私たちの生活と密接な関係を持っていることを踏まえて、講義全体を通じて考えることになる諸テーマについて概括的に考察し、理解することを目的とする。	大曽根　寛（放送大学教授）	大曽根　寛（放送大学教授） 久塚　純一（早稲田大学教授）
2	労働者保険から今日の社会保険へ	労働者に限定されていた社会保険の対象が、市民レベルに拡大・普遍化してゆく過程について具体的に理解する。第２回目の講義「労働者保険から今日の社会保険へ」は、労働者のための社会保険の登場から、全国民を対象とする制度へと発展してきた道のりをたどり、国家・社会・経済にとって不可欠のものとなっていることを学習することを目的とする。	品田　充儀（神戸市外国語大学教授）	品田　充儀（神戸市外国語大学教授）
3	市民生活における社会保険	現代社会における社会保険の概要を把握した上で、実際的機能を確認する。第３回目の講義「市民生活における社会保険」は、私たちの日常生活と社会保険がどのようにかかわっているかを、保険給付のメニュー、保険料の支払い、担当する行政組織など実際的な側面から、具体的に理解することを目的とする。	大曽根　寛	大曽根　寛
4	社会保障における所得保障と年金保険	社会保障は様々な形で私たちの生活とかかわっている。喪失・減少した所得を保障することも社会保障の重要な役割の一つである。第４回目の講義「社会保障における所得保障と年金保険」は、社会保障の中で所得保障が占めている位置について、理論的側面と現状について理解するとともに、実際の年金保険制度が社会保障の中でどのような位置を占めているかを考察することを目的とする。	山田　晋（明治学院大学教授）	山田　晋（明治学院大学教授）
5	年金保険の構造と体系	年金保険を広く捉えれば、公的なものと私的なものの両者が含まれることとなる。とはいえ、公私の年金保険の間には、大きな相異点が存在している。それらの異同性をどのように捉えるかによって、議論の展開も異なってくることになる。第５回目の講義「年金保険の構造と体系」は、公的年金と私的年金の構造的異同性に関して、理論面と実際面の両側面から考察し、理解することを目的とする。	久塚　純一（早稲田大学教授）	久塚　純一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	社会保険としての年金	所得保障の中心的役割を果たしているものは年金保険である。しかし、少子化・高齢化社会の到来により、社会保険としての年金保険には数多くの課題が突きつけられている。第6回目の講義「社会保険としての年金保険」は、所得保障の中心的役割を果たしている年金保険の意義・体系・仕組みについて概括的に考察し、理解することを目的とする。	久塚　純一	久塚　純一
7	企業年金の意義と仕組み	社会保障についての理解を深めるためには、社会保障における公私の役割と位置づけについての考察は不可避である。その意味では、企業年金は恰好の題材を提供してくれるものといえる。第7回目の講義「企業年金の意義と仕組み」は、社会保障における公私の役割と位置づけをベースとして、企業年金について考察し、理解することを目的とする。	同　上	同　上
8	社会保障における医療保障と医療保険	私たちの生活にとって、「傷病」は様々な問題を引き起こすこととなる。医療保障という形で「傷病」に対応することは社会保障の重要な役割の一つである。第8回目の講義「社会保障における医療保障と医療保険」は、社会保障の中で医療保障が占めている位置について、理論的側面と現状について理解するとともに、その中心的役割を担っている医療保険の基本的仕組みについて概括的に考察し、理解することを目的とする。	同　上	同　上
9	社会保険としての医療保険	社会保険の制度では、「傷病」は「保険事故」として位置づけされることとなる。保険の給付という形で「傷病」に対応することは社会保険の基本的な役割の一つである。第9回目の講義「社会保険としての医療保険」では、社会保険の制度としての医療保険の意義・体系・具体的仕組みについて考察し、理解することを目的とする。	同　上	同　上
10	高齢者の医療保障と医療保険	高齢者にとって、「傷病」は独得の位置を占めることとなる。また、社会保障の財政という観点からも高齢者の医療保障については議論が積み重ねられ、制度的改変も繰り返し行われている。第10回目の講義「高齢者の医療保障と医療保険」では、高齢者の医療保障が形成される過程と揺れ動いている現状について、高齢者にとっての医療という観点から考察し、理解することを目的とする。	同　上	同　上
11	社会保険としての介護保険	高齢者介護を社会化することを目指した介護保険の仕組みと現状を理解する。第11回目の講義「社会保険としての介護保険」は、介護保険が医療保険の一部とあわせて老人福祉の一部を取り込みながら、独自の社会保険として成立した事情と現実に果たしている機能ついて学習することを目的とする。	品田　充儀	品田　充儀
12	変容する職業生活と社会保険	職業生活のあり方と社会保険は大きく関わっている。とりわけ、雇用労働者層の増大や雇用形態の変化が社会保険に大きな影響を与えている。第12回目の講義「変容する職業生活と社会保険」は、資本主義社会において労働保険が登場してきた背景を基礎におきながらも、現代の多様な働き方との関係について学習することを目的とする。	山田　晋	山田　晋

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	労働者災害補償保険の仕組みと機能	雇用されて働く者が業務活動との関連で災害にあった場合、労働者の生活をどのように支えるかを考える。第13回目の講義「労働者災害補償保険の仕組みと機能」は、労働災害に備えるものとして用意されている「労働者災害補償保険」について、歴史的背景、制度の仕組み、現実的な機能などを理解することを目的とする。	品田　充儀	品田　充儀
14	雇用保険の仕組みと機能	雇用されて働く者が失業の危機にさらされた場合、彼らの生活をどのように支えるかを考える。第14回目の講義「雇用保険の仕組みと機能」は、失業という労働者の危機に備えるものとして用意された基本的な制度である「雇用保険」について、歴史的背景、制度の仕組み、現実的な機能などを理解することを目的とする。	山田　晋	山田　晋
15	社会保険をめぐる市民の権利と義務	社会保険の諸制度にみられる各種の給付を確かなものとするためには、権利と義務に関する考察が不可欠である。第15回目の講義「社会保険をめぐる市民の権利と義務」は、各種の社会保険にかかわる市民の権利と義務について考察し、理解することを目的とする。また、これからの社会保険のあり方を展望し、将来の方向性についても検討する。	久塚　純一	久塚　純一 大曽根　寛

＝社会福祉の国際比較（‘０２）＝（TV）

－利用者主体のシステムをめざして－

〔主 任 講 師：　松村　祥子（放送大学教授）〕

全体のねらい

「福祉国家から福祉社会へ」というスローガンの下で先進諸国の社会福祉の理念や方法は大きな変化を遂げている。特に地方分権化や民営化が進む中で、公的社会福祉サービスと民間社会福祉サービスの役割変化、関連分野（医療、教育、住宅）との連携及び専門職とボランティアの関係なども変わってきている。

本講義では、変革期にある各国の社会福祉の課題と方法を示したい。特に、利用者主体の制度をめざす我が国の社会福祉に必要なことを世界の事例から学びたい。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	世界の社会福祉を学ぶ視点	経済、社会、文化の国際化の進展の中で、各国の社会福祉は大きな変革を迫られている。先進工業国では、少子高齢化や家族規模の縮小に伴う生活変化に対応するために、社会福祉の行財政と方法技術の改編、革新が行われている。他方、開発途上国では、一国内の貧困や生活格差との闘いだけでなく、雇用、生活環境の国際化による生活問題も深刻であり、従来とは異なる社会福祉の方法が求められている。相互依存の高まる国際社会の中で、世界の社会福祉を学ぶ視点を明らかにする。	松村　祥子（放送大学教授）	松村　祥子（放送大学教授）
2	世界の社会福祉の歩み	長い歴史の中で積み重ねられてきた社会的生活支援の為の実践活動は、一般的には選別的で治安維持的なものから普遍的で権利擁護的なものに変化してきている。19 世紀末から 20 世紀初頭の欧米諸国から広がった「近代的社会福祉」の理念、対象、方法等が何故、どんな経路で、どのような変容を伴いながら世界中に広がったのか。社会福祉の世界史年表から検討してみたい。	同　上	同　上
3	アメリカの社会福祉	自立援助型といわれるアメリカの社会福祉の特色を次の観点より考察する。1）地方分権の原理に立った社会福祉政策、制度　2）公的社会福祉サービスと民間社会福祉サービスの関係と財政　3）社会福祉サービスの中心的思考。4）専門職とボランティアの関連と役割　5）社会福祉サービスの将来への展望	平山　尚（東京福祉大学教授）	平山　尚（東京福祉大学教授）
4	スウェーデンの社会福祉	社会福祉の世界的最前衛としてのこの国では、どのようなプロセスで高い質量の社会福祉活動が生み出されてきたのか。スウェーデン社会の構造とそこに暮らす人々の生活文化等も含めて検討したい。高福祉高負担型の福祉施策は、福祉サービスに対する社会的責任と個人の権利意識に支えられ、社会福祉の内実を豊かにしてきたが、EU に加盟した現在では、EU 他諸国とどう調整をつけていくかの課題解決も不可避となってきている。	外山　義（元京都大学教授）	外山　義（元京都大学教授）
5	イギリスの社会福祉	最低所得保障に重点をおく所得保障制度と、無料の国営医療を基礎とする医療保障制度とを中核とする福祉国家体制を確立してきたイギリスは、また、民間社会福祉の伝統を生かしつつ、独自の特色をもった社会福祉サービスの実施体制を築いてきた。ここでは、イギリスの社会福祉の特色について、コミュニティケアの推進、専門職制度、民間社会福祉の役割などを中心に分析するとともに、「コミュニティケア改革」の実施など近年の新たな政策の展開についても検討する。	平岡　公一（お茶の水女子大学教授）	平岡　公一（お茶の水女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	フランスの社会福祉	フランスの社会福祉活動の実働はアソシアシオンと言われる非営利組織によって担われている。年金、医療、家族手当の運営機関である社会保障金庫や行政組織とともにユニークな体系の中で多元的で柔軟性のある社会福祉が実現されている。「社会的連帯」をキーワードとするフランスの状況を、20 世紀初頭からの高齢化の進展や第二次大戦後のヨーロッパの国際的地位の変化をも視野に入れながら示してみたい。	松村　祥子	松村　祥子
7	タイの社会福祉	貧困問題がアジア太平洋地域の開発途上国の社会開発問題の根底にあると言われているが、タイも例外ではない。1997 年のタイバーツの暴落に端を発したアジアの経済危機は、全ての階層の経済生活に多大な影響を与えた。社会の低所得者層、特に、低所得の労働者層は、企業経営の建て直しの中で、多くの失業者を生み出した。タイの経済が緩やかに回復に向かう中でも、まだ、低所得者層の生活苦は続いている。このような中で、都会と農村部の格差はますます拡大している。農村部では過疎化が進み、都市部では、経済的な貧窮だけでなく、棄児や児童虐待、児童労働の問題、また売春や海外出稼ぎなどに絡んだ女性問題などが山積している。また、高齢者問題も家庭の崩壊の中で表面化している。福祉サービスがまだ十分に行き渡っていない中で、障害者の当事者運動は盛んで、タイの福祉施策の今後のあるべき姿を示唆している。開発途上国を代表するタイの社会福祉の現状と課題を考究する。	高嶺　豊（琉球大学教授）	高嶺　豊（琉球大学教授）
8	日本の社会福祉	少子高齢化の進展に対応して介護保険の導入や児童手当の拡充等、我が国の社会福祉は大きな変化の渦中にある。行政処分の措置制度から利用者主体の契約的選択的制度への移行をめざす中で社会福祉の運営上の地方分権化、民営化、住民参加が切り札とされている。しかし、実際には福祉サービスの基盤は不十分で、専門職員は不足し、国民の福祉意識も高まっていない。どのような方向と方法で新しい社会福祉体制を構築できるのか。国内の事例を取り上げながら検討していきたい。	松村　祥子	松村　祥子
9	地域環境と社会福祉	住民が享受する社会福祉の質にとって、福祉インフラとしての地域環境が果たす役割は大きい。乳幼児期から青年期、壮年期を経て老年期に至るまで、それぞれのライフステージにおける住まいから地域、さらに広域的な生活行動圏域内の点的、線的、面的インフラのあり方を、各国の事例を紹介しながら考えてみたい。キーワードは「自立」「参画」「予防」などである。	外山　義	外山　義
10	在宅福祉と施設福祉	我が国では介護保険が導入され、在宅での居住継続を支える仕組みの普及、強化が急がれている。「住み慣れた住まい、地域で暮らし続けたい」という願いは万人のものであるが、現実には８割を大きく越える日本人が施設において人生を閉じている。人生の最終ステージの生活の場として施設をも視野に入れざるを得ない状況の中で、在宅における生活と施設における生活の極端な落差によって、みすみす高齢者の残存能力が失われ、生命力が萎んでしまうという問題は、スウェーデンをはじめとする他の高齢化先行社会も経験してきたテーマである。そうした国々に学びながら、今後の施設ケアの在り方、さらには在宅福祉と施設福祉のあるべき関係を展望してみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	医療と福祉の連携	すべての人の「健康で文化的な生活」を目的にする社会福祉活動にとって、医療保健の充実は基礎的条件である、また、病気の予防、早期回復、慢性病管理のためには適正な医療と社会福祉の連携が不可欠である。人々の生活の中では車の両輪ともいえる医療と福祉が縦割り行政や関連職間の連携不足のために、サービスの欠落、重複、過剰等の種々の問題を発生させている。何故連携が必要なのか、どのような形の連携が望ましいのかについてアメリカと日本の事例を参考にして述べる。	平山　尚	平山　尚
12	社会福祉の専門職	日本を含め欧米諸国のように高度に発達した社会にとって、高度の知識と技術の備わった有能なソーシャル・ワーカー（社会福祉専門職者）を養成することは急務を要することである。しかし、日本は欧米諸国と比較をするとソーシャル・ワーカーの養成に質と量の両面で遅れをとってしまっている。ソーシャル・ワーカーの業務とは何か、ソーシャル・ワークの知識、技術とは何か、また、ソーシャル・ワーカーの訓練はどのように行わなければならないかを日本とアメリカの事例を見ながら学ぶ。	同　上	同　上
13	社会福祉の多元化と市場化	近年の（日本を含む）先進諸国における社会福祉政策の展開の一つの特徴として、サービス供給における民間営利・非営利部門の比重を高める「多元化」と、サービス供給に市場メカニズムを導入する「市場化」の進展をあげることができる。この講義では、1990 年代初頭に多元化・市場化に向けての制度改革を実施したイギリスの例も紹介しながら、多元化と市場化についてどのような観点から分析し、評価していけばよいのかを考えてみたい。	平岡　公一	平岡　公一
14	アジア太平洋地域の障害を持つ当事者運動	1981 年の国際障害者年および国連障害者の 10 年（1983 年—1992 年）を境に、障害者の当事者国際団体が結成され、国連の政策決定の場での障害者の影響力が増大した。1993 年から始まったアジア太平洋障害者の 10 年は、障害当事者団体のイニシャティブにより域内の政府に働きかけて実現されたと言われている。障害当事者団体には、障害種別の組織と、障害の種別を超えた団体に大別される。また、農村の十数人で構成される自助団体から、全国の障害者を網羅した団体まで、さまざまな規模で存在する。これらの当事者団体の国の政策決定への影響力は確実に増大している。アジア太平洋地域の障害当事者団体の結成の過程および目的、権利擁護運動、独自のサービス提供、メンバーのエンパワメント、域内のネットワーク作りなど数カ国の実例を紹介しながら、障害当事者運動の意義を明らかにしていきたい。	高嶺　豊	高嶺　豊
15	今後の社会福祉の課題	公助、共助、自助のそれぞれの機能の充実と効果的な連携によって拡大する生活問題を緩和し、安心社会を築くことが多くの国で目標とされている。世界各国でこれからの社会福祉発展の鍵となるNPO（非営利組織）の活動等を取り上げながら、国際社会と我が国の社会福祉の今後の課題を示したい。	松村　祥子	松村　祥子

＝心理学研究法（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　南風原　朝和（東京大学教授）〕
〔主任講師：　市川　伸一（東京大学教授）〕
〔主任講師：　下山　晴彦（東京大学助教授）〕

全体のねらい

心理学は人の心や行動について、単に頭の中であれこれ考えるだけでなく、調査や実験、あるいは実践を通して現実のデータとつき合わせながら、実証的に知識を構築していく学問である。この講義では、研究者を志す学生だけでなく、自分自身や他者の心や行動について、より客観的に、より深く理解したいという思いをもつ幅広い層の学生を対象に、心理学研究法の基本的な考え方と具体的な方法に関する入門的解説を行う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学の研究とは	心理学の研究とは何をすることなのかについて、まず概論的説明を行う。心理学が文学や哲学と異なるのは、実証的方法をとるということである。行動的データを収集し、それを説明する構成概念として「こころ」を考えるという方法論をとることによって、心理学はその対象を大きく広げてきたことを、いくつかの研究例を通じて示す。	市川　伸一（東京大学教授）	市川　伸一（東京大学教授）
2	心理学の歴史と研究法の分類	現在、心理学は、多様な領域に分化し、発展している。心理学の歴史を概観することを通して、研究法を調査、実験、実践の３つのタイプに分類する意義を解説し、多様な心理学を整理して理解する枠組みを提示する。	下山　晴彦（東京大学助教授）	下山　晴彦（東京大学助教授）
3	質的調査の考え方とデータ収集技法	叙述形式の質的データを収集し、その分析を通して現実を理解するための概念や仮説を産出する質的調査の理論と技法を解説する。また、質的調査法の導入として、データ収集のための面接法や観察法の解説も行う。	同　上	同　上
4	質的データの分析	質的データの分析方法に関して、より手続き的なところに焦点をあてていく。様々な分析法が提案されているが、ここでは、データを読み、選択し、概念化し、さらにそれをまとめ、統合するという基礎的な分析の段階をとりあげ、各段階における留意点について具体例を交えながら解説を行う。	能智　正博（東京女子大学助教授）	能智　正博（東京女子大学助教授）
5	質的調査の実際と研究評価	質的調査では、目的に応じてさまざまな技法を用いることになる。そこで、さまざまな質的調査の方法を整理し、それが実際にどのように使われるのかをエスノグラフィーの研究論文を例に説明する。また、質的研究の評価基準についても解説する。	下山　晴彦	下山　晴彦
6	量的調査による仮説検証	量的調査とはどのようなものか、量的調査によって検証される仮説にはどのようなタイプのものがあるかを述べ、具体例を用いて量的調査による仮説検証の流れを解説する。また、量的調査で必要となる統計的指標について、相関係数を中心に解説する。	南風原　朝和（東京大学教授）	南風原　朝和（東京大学教授）
7	質問紙による研究	量的調査におけるデータ収集の代表的方法である質問紙（調査や検査など）を取り上げ、その特徴を紹介する。また、これらの測定道具を実際に作成する手順について解説するとともに、実施および利用上の留意点についても具体的に述べる。	平井　洋子（東京都立大学助教授）	平井　洋子（東京都立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	信頼性と妥当性	質問紙や検査によって収集されたデータに基づいて、個人の能力や性格特性などを推測したり、心理学的な研究仮説を検証したりするためには、その測定データが良質なものでなければならない。ここでは、測定の「質」をあらわす信頼性と妥当性という概念を取り上げ、その意味および評価の方法について解説する。	平井　洋子	平井　洋子
9	サンプリングと統計的推測	データから計算される相関係数などの指標は、実際にデータを提供したサンプルに依存する値であり、サンプルが変わればその値は変わってくる。一方、量的調査研究の主眼は個々のサンプルではなく、その背後に想定される母集団にあるのが普通である。ここでは統計的検定など、サンプルにおける結果から母集団の性質を推測する方法について解説する。	南風原　朝和	南風原　朝和
10	実験の考え方	実験は、特定の要因の効果を明らかにするために、研究者が意図的に場を設けることである。実験を行うときの基本的な枠組みとして、知覚実験を例に、独立変数、従属変数という概念に触れる。さらに、干渉変数とその統制という考え方から被験者の割り当ての問題、心理学的概念をデータとして取り出すための操作的定義について解説する。	市川　伸一	市川　伸一
11	実験のデザインと結果の分析	実験的研究では、独立変数の効果を歪みなく、高い精度で検出できるようにデザインが工夫される。そして、異なるデザインに応じて適切なデータ分析の方法が用意されている。ここでは、独立変数（要因）が1個および2個の場合について、基本的なデザインとデータ分析の方法について解説する。	南風原　朝和	南風原　朝和
12	心理実験の問題点とその対策	心理実験は、実験室のなかで繰り広げられる実験者と被験者とのあいだの相互作用である。つまり、実験はそれ自体がひとつの人工的な社会的状況であり、そのなかで実験者も被験者もそれぞれの役割を演じながら相互作用をする。この章では、実験状況の人工性と、その状況のなかで実験者と被験者が演じる役割に焦点をあて、これらの相互作用によってどのようなバイアスが研究の結果に持ち込まれるかを解説する。研究者が責任をもって被験者の安全と福祉を保証しなければならないことにも言及する。	岡　隆（東京大学助教授）	岡　隆（東京大学助教授）
13	実践研究の基本技能とその実習	実践研究には、「実践を通しての研究」と「実践に関する研究」がある。前者では、研究者が同時に実践者として対象と関わりながら、研究を進める。そのため、対象と関わる人間関係技能、自己モニタリング技能、体験記述技能が必要となる。そこで、そのような実践研究の基本技能と、その習得のための実習方法を解説する。	下山　晴彦	下山　晴彦
14	実践研究の発展ーアクションリサーチ	実践研究を発展させるためには、「実践を通しての研究」と「実践に関する研究」の統合が重要となる。この統合の一形態として実践の中での問題解決や改善をはかりながら、その実践を研究していく方法にアクションリサーチと呼ばれる方法がある。ここでは、アクションリサーチの理論と方法や教育の領域におけるその事例を中心に紹介し解説する。	秋田　喜代美（東京大学助教授）	秋田　喜代美（東京大学助教授）
15	実践に関する研究と倫理	実践研究は社会的専門活動であるので、社会に対するアカウンタビリティとして、その有効性を実証的に示していく必要がある。ここでは、そのための効果研究などを紹介する。また、社会に対する責任として研究の倫理も必要となる。そこで、心理学研究の倫理についても併せて解説する。	下山　晴彦	下山　晴彦

＝　心理学史（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　西川　泰夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　高砂　美樹（東京国際大学教授）〕

全体のねらい

今あるような心理学はなぜそのようにあるのか。広く周知されている心理学であるがそもそも心理学とは何であり何でないのか。その起源をはじめどのような背景と経過の中で形成されてきたのか。またその立ち上げに直接間接にかかわる先達たちはどのような人物か。日本の心理学史に焦点を合わせ、その移入と定着、拡大展開の過程を世界の心理学の動向に重ね各役割を担った人物を通して紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
		Ⅰ　日本の心理学の起源（ルーツ）－幕末から明治期－		
1	「心理学史」への導入	主任講師、分担講師紹介。当科目受講に当たっての手引き。心理学史の位置づけ。全体の講義項目・概要紹介。 心理学成立前夜。哲学的心理学から新心理学（科学的心理学・実験心理学）へ。自然科学の興隆。擬人論から機械論へ。ものから生命へ、生命から心（意識・精神）へ。心をめぐって一二元論から一元論へ一。 日本の心理学の黎明期・前夜。幕末から明治初頭の海外留学生。西周の略歴（生育環境（島根県津和野）や森鴎外との関係）。西周の果たした役割。育英舎。百学連環。近代西洋科学の分類体系化。「心理学」という学名の起源と語源。その他の訳語。性理学と心理学。ジョセフ・ヘブンとその著作。大学教育制度の中の心理学。外山正一。お雇い外国人教師。哲学的心理学から科学的心理学へ。	西川　泰夫（放送大学教授）	西川　泰夫（放送大学教授） 高砂　美樹（東京国際大学教授） 佐藤　達哉（立命館大学助教授）
2	心理学のわが国への移入と定着過程	哲学的心理学から科学的心理学への移行を担った人々。デカルトの心身二元論と心身問題への取り組み。ホッブスの一元論。ウエーバーの触２点弁別実験。フェヒナーの精神物理学と対数法則。ヘルムホルツの神経伝導速度の計測。アニマル・スピリッツの正体。ドンダースの反応時間減算法による心的構成要素の解明。 新心理学（科学的心理学、実験心理学）の開祖。W.ヴント、W.ジェームズ。新心理学をわが国へもたらした日本の心理学の開祖、元良勇次郎。クラーク大学総長に就任したG.S.ホールとその下で学んだ日本人たち。新心理学のわが国における定着と拡大に大きな役割を担った大学教育制度。東京大学（帝国大学、東京帝国大学）と私学（同志社、東京英学校・東京英和学校（青山学院）、慶応義塾など）。 ヴント、ジェームズ、ホール、元良略歴紹介。	西川　泰夫	西川　泰夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
3	元良勇次郎―わが国最初の心理学者―	元良勇次郎の人物像と心理学への貢献。略歴（兵庫県三田市生まれ。生家跡と記念碑。幼少期の知的環境。キリスト者としての勇次郎）。同志社進学からアメリカ留学まで。アメリカ留学。ボストン大学からジョンズ・ホプキンズ大学へ。G．S．ホール。 元良の学位論文。留学中の交友関係（一葉の写真、佐藤昌介、新渡戸稲造、長瀬鳳輔、元良勇次郎）。 帰国後の活躍について（前期・中期・後期）。帝国大学講師に就任。精神物理学の担当。帝国大学教授就任。著作と研究紹介。心理学の制度化。 注意の研究。禅の研究。 「精神物理学実験場（実験室）」開設。建物の概観。 二度目の外遊。晩年の研究。心理学者としての位置づけと弟子の育成。	佐藤　達哉	佐藤　達哉
4	松本亦太郎と千葉胤成―心理学の定着と広がり―	松本亦太郎経歴。千葉胤成経歴。日本で二番目の京都帝国大学の設置と松本亦太郎による心理学実験室の開設。心理学出身者の増大と社会的な認識の広がり。応用心理学。 世界の心理学との接点。ヴント。ヴント文庫（東北大学ヴント文庫）。スクリプチュアー。ラッド。	高砂　美樹	高砂　美樹
Ⅱ　大正期から昭和期前半―第二次世界大戦の戦中・戦後期まで―				
5	日本の心理学の広がり	大学心理学（アカデミック・サイコロジー）の確立から日本心理学会設立（１９２７（昭和２）年）のころまで。アカデミック・サイコロジーとフォーク・サイコロジー。帝国大学の拡充と整備。大学令（旧制、１９１８年公布）と私立大学の成立。心理学研究室（心理学実験室）開設拡大と整備。 大学制度の整備拡充に伴う心理学の拡大と担い手。 帝国大学制度の変遷と心理学。元良の弟子たち。松本亦太郎の略歴。東京大学文学部卒業生名簿から。 その他の海外留学生の役割。 日本心理学会設立の背景。機関誌の発行と研究大会（年次大会）の開催、会務の遂行。 名称としての「心理学会」などの変遷。「心理学会」、「心理学通俗講話会」（雑誌、心理学通俗講和）、「心理学研究会」（雑誌、心理研究）、「日本心理学会」（雑誌、日本心理学雑誌（京都大学版、東京大学版））、日本心理学会（雑誌、心理学研究。日本心理学雑誌と心理研究を廃止）。 「全日本心理学大会発起人有志者代表、松本亦太郎」 の呼びかけによる「全日本心理学大会」を改めて「日本心理学会」とする。 第１回日本心理学会大会の発表プログラム構成。 以後の簡単な変遷史。	西川　泰夫	西川　泰夫
6	久保良英、田中寛一、鈴木治太郎	知能検査の日本への導入をめぐって。知能の操作的定義。知能検査法。知能指数。 ビネー。シュテルン。ターマンなど海外での知能研究を追い、その日本への導入者である久保良英、田中寛一、鈴木治太郎の経歴と考え方を追う。 発達心理学、教育心理学などの展開についても扱う。	佐藤　達哉	佐藤　達哉

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	森田正馬、中村古峡、内田勇三郎	当時変態心理学と呼ばれていた臨床心理学の動向について。精神分析学、分析心理学、深層心理学など。クレペリン、フロイド、ユングなど海外の動向。 森田正馬、中村古峡、内田勇三郎の経歴と考え方を検討。内田・クレペリン・テストなどの検査法の開発。	佐藤　達哉	佐藤　達哉
8	黒田亮、増田惟茂	比較心理学。学習心理学。行動の心理学的研究。日本における動物心理学の発展。東京帝国大学心理学研究室。京城帝国大学心理学研究室。動物心理学会。 ダーウイン。ロマニーズ。パヴロフ。ワトソン。 増田惟茂経歴。黒田亮経歴。	高砂　美樹	高砂　美樹
9	佐久間鼎、小野島右左雄	ゲシタルト心理学とは。グラーツ学派。ベルリン学派。C.シュトュンプ。ヴェルトハイマー。仮現限運動。プレグナンツの法則。ケーラー。洞察学習。レヴィン。トポロギー心理学、グループ・ダイナミックス。日本におけるゲシタルト心理学の導入。 高木貞二。佐久間鼎経歴。小野島右左雄経歴。 九州帝国大学心理学研究室。建物の構造と概観。 レヴィン来日。	高砂　美樹	高砂　美樹
10	中島泰蔵、堀梅天、横山松三郎	クラーク大学で学位を取得した日本人たち。その他の海外留学生たち。 私立大学の心理学研究室（実験室）の創設者たち（その１）。実験心理学。実験機器。 早稲田大学の場合。中島泰蔵経歴。ミュンスターバーグ。ティチェナー。反応時間。情動反応の計測。 慶応義塾大学の場合。堀梅天経歴。横山松三郎経歴。 ホール。ボーリング。	西川　泰夫	西川　泰夫
11	城戸幡太郎、渡辺徹、今田恵	私立大学の心理学研究室創設者たち（その２）。そうした研究者が取り組んでいた応用領域、特に教育心理学、および障害とリハビリテーションの心理学の展開についても検討する。城戸幡太郎、渡辺徹、今田恵の経歴。また、戦争と心理学の関係についても考察を加える。	佐藤　達哉	佐藤　達哉
Ⅲ　第二次世界大戦後の心理学の復興と新たな展開―				
12	概要	日本心理学会の変遷。設立以降から、戦前、戦中、戦後の復興、そして現在へ。「日本心理学会」から「心理学会」へ。「心理学会」の組織形態。役員。第二次世界大戦後の日本の心理学の復興。「心理学会」から「日本心理学会」へ。 日本心理学会大会の変遷。機関誌「心理学研究」の中断と復活へ。京都アメリカ研究セミナー。 グレアム教授（コーネル大学）による京都実験心理学セミナー（１９５７）。日程、参加者リスト、セミナーのテーマ、ならびに文献リスト。セミナーの戦後の日本心理学へ果たした役割。一心理学徒のルーツ。日本心理学会以外の多彩な学会の設立と活動。	西川　泰夫	西川　泰夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
Ⅳ 補遺				
13	日本の女性心理学者	戦前における女性の高等教育。 日本の教育制度の中の女子高等教育。 原口鶴子の場合。その経歴。高良富の場合。その経歴。女子教育と松本亦太郎。 海外での受け入れ教員となったソーンダイクなどアメリカ心理学者について。 その他の女性心理学者。実生すぎ。久保（黒瀬）艶子。波多野（畠山）勤子。	高砂　美樹	高砂　美樹
14	日本の心理学の境界設定	血液型と性格、念写・透視、心霊現象、妖怪、超感覚現象などにチャレンジした心理学者たちを追う。彼らは何を目指しどのような研究を行ったのか。そしてその帰結はどうであったのか。井上円了、古川竹二、福来友吉の経歴と考え方を扱う。クレッチマー、ジェームズなどの当時の世界の心理学者についても検討する。	佐藤　達哉	佐藤　達哉
Ⅴ 日本の心理学の位置づけ				
15	１５　心理学史からのまとめと課題	世界の心理学の潮流からみた日本の心理学。 さまざまな心理学派。機能主義と構成主義。戦後の日本における心理学教育。心理学の資格をめぐる問題。心理学史の資料収集と保存。心理学史アーカイヴズ。心理学史の教育をめぐって。	高砂　美樹	西川　泰夫 高砂　美樹 佐藤　達哉

＝　学習科学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　波多野　誼余夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　大浦　　容子（新潟大学教授）〕
〔主任講師：　大島　　純（静岡大学助教授）〕

全体のねらい

ヒトという種は、単に生物として進化してきたばかりでなく、文化という人工物の体系を作り上げ、それを各個体が学習により内化することで有能さを増大させてきた。その意味で広義の学習ないしそれを援助する教育がヒトの生活や知性にとって決定的に重要なことは確かだし、子どもの側には成人の行動様式を真似ようとする傾向、おとなの側には子どもに教えようとする傾向が元々備わっていると想定される。この科目では、こうした広義の教育＝学習の援助の過程について考えるところから始め、それにもとづいて学校の独自の役割が何か、それはいかにしてよく実現されるかを吟味していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	熟達化としての発達	ヒトは実践活動に参加することを通して知識・技能、価値体系、信念を獲得する。獲得された価値体系・信念は、更なる学習へと学習者を方向付け、新しい知識の生成を可能にする。こうした発達のモデルを、熟達化の観点から示す。	大浦　容子（新潟大学教授）	大浦　容子（新潟大学教授）
2	「心の理論」の発達	他者とのコミュニケーションや共同作業が可能なのは、それぞれが相手の心の働きについての理論（心の理論）を持っており、それが有効に機能していることによる。「心の理論」の発達について、認知神経科学分野の研究成果を踏まえて検討する。	梅田　聡（慶應義塾大学助手）	梅田　聡（慶應義塾大学助手）
3	リテラシーの発達	乳児期に獲得した能力を基に、幼児・児童は読み書きの能力を急速に発達させていく。文章の理解・産出能力の発達、文章からの知識の獲得、などについて、これまでの研究成果を総覧する。	秋田　喜代美（東京大学大学院教授）	秋田　喜代美（東京大学大学院教授）
4	数の理解	子どもの数概念の理解はどのように進むのか、算数・数学が苦手な子どもはどこで躓いているのか、どのような援助や介入が重要か、などについて述べる。	吉田　甫（立命館大学教授）	吉田　甫（立命館大学教授）
5	音楽的発達	特別な訓練が無くとも、私たちは歌を覚えることができ、歌うことで気持ちを伝えることができる。音楽を聴いて楽しんでもいる。日常的に音楽に接することでどのような能力が獲得されていくか、特別な音楽経験はどのような能力を育てるのかについて述べる。	大浦　容子	大浦　容子
6	ヒトの学習の特徴：生物学的基盤	ヒトにもっとも近い種である、チンパンジイの社会的知能、認知的知能、心の理論、「言語」などについての報告をはじめ、異なる種の動物の思考や学習についての比較認知科学的知見から、人間の学習がいかなる特徴をもっているか、その生物学的基盤を考える。	藤田　和生（京都大学大学院教授）	藤田　和生（京都大学大学院教授）
7	記憶と知識	学習は単なる記憶ではないが、それに基づいていることは間違いない。また、学習の所産である知識も、一種の記憶ないしそれを圧縮して表象したものと見なし得る。記憶に関するぼう大な研究のうちから、学習科学にとってとくに重要な知見を見ていく。	大浦　容子	波多野誼余夫（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	推論：演繹と帰納	認知においては、持っている知識がそのままで利用しうる場合は少なく、多くはそれを変換しなければならない。得られた結論ができるだけ妥当であるよう、目標に応じて段階的な変換を行うのが推論である。ここでは学習者がどのように演繹や（類推を含む）帰納を行うかを検討する。	波多野誼余夫（放送大学教授）	波多野誼余夫
9	思考における言語、イメージ、ジェスチャー	思考は推論を含むが、その容易さや有効性は、情報がどのような形式で表象されているかに大いに依存する。情報を言語的に表示することのメリット、デメリットを中心に、異なる表象の長短を論ずる。	大浦　容子	同　上
10	問題解決と理解	構成主義の学習観では、知識は伝達されるのではなく、問題解決や理解活動の過程で、次第に構成、洗練、改定されると考える。この意味で教育活動の中心となる問題解決や理解活動に関し、これまで行われてきた研究成果を総覧する。	同　上	同　上
11	新しい学習理論と教室への応用	これまでの日常場面、また実験室場面における学習や発達の研究から、本来人が持っている知識の特性、またそれらが獲得されるべき環境の在り方が明らかになってきた。こうした特性を再度まとめ、教育現場に応用するための指針をまとめる。	大島　純（静岡大学助教授）	大島　純（静岡大学助教授）
12	知識を活性化する教材作成	学習の最終的な目標の一つは、知識の転移である。学習した内容がそれを適用すべき場面で利用されなければ、学習が成功したとはいえない。日常の知識獲得がそうした場面に依存しているように、教室場面における学習にも知識を利用すべき場面での活用に重点を置いて設計されるべきであろう。学習科学の知見に基づいて利用可能な知識を獲得させるための教材開発について具体例を交えて話す。	同　上	同　上
13	学習環境を総合的にデザインする	学習者中心でかつ理解を深めていくことに焦点をおいた学習カリキュラムは実現することができるか？そこでは、学習者自身が自らの進展度を評価し、お互いから学びあいながら教室全体の知識を構築できていることが望ましい。このような学習環境を実現するためには、ネットワーク・テクノロジーの活用が重要な位置を占める。総合的な学習の時間における授業設計を具体例に、現場の教師との対話を通じて学習環境を総合的にデザインする過程を示す。	同　上	同　上
14	新たな学びに則した教師教育	新しい知識観にそった学習環境のデザインが現場に定着するためには、そこで子どもと接している教師の認識の変化なくしてはありえない。こうした意味で、教師教育は学習科学の根幹に関わる問題の一つである。教える側の認識をいかに変化させることができるか。教師自身を学習者、あるいは問題解決者と捉え、新しい知識観に添った学習環境のデザインに参加させ教授者として自己意識を改革するプログラムについて示す。	同　上	同　上
15	新しい学びにおける評価のあり方	知識観の変化に伴って、学習者の変化をどのように捉えていけば良いのか、評価の問題が大きくクローズアップされてきている。以前から形成的な評価の重要性については注目されてきていたが、知識自体がより環境との相互交渉の中にあらわれる transactional なものとして考えられるようになった今、新しい学習理論に基づいた適切な手法の開発は急務であるといえよう。学習者の活動の観察から、その認知的な変化をどのように捉え、更なる学習のための処方箋をどう描くかについて検討する。	三宅　なほみ（中京大学教授）	三宅　なほみ（中京大学教授）

＝生涯発達心理学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　小　嶋　秀　夫（京都学園大学教授）〕
〔主任講師：　やまだ　ようこ（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

乳幼児期から老年期を含む生涯にわたる人間の心理学的発達の主要な問題を学ぶことにより、生涯発達の視点を理解することを目指す。個体の発達的変化の姿、それにかかわる個体側と環境側の条件間の相互調整的変化を重視する。それぞれの発達の道を辿る違った世代の人々が日常生活の中で形成し展開する対人関係と、その背後にある社会・文化の働きに目を向ける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯発達心理学とは	生涯発達の視点・考え方とその歴史を概観し、全15回への導入を行う。発達的視点そして生涯発達の視点の特徴、年齢的変化への関心をもたらす社会的・文化的諸条件、そして生涯発達心理学の役割とは何かを論じる。	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）	小嶋　秀夫（京都学園大学教授）
2	生涯発達の心理学的研究の課題と方法	発達心理学研究の中心的問いと、それに答えるための主要な研究方法を説明する。その上で生涯発達を扱おうとする際に生じる問題を提示して、発達研究の結果を理解・解釈・評価するために必要な視点・考え方を提起する。	同　上	同　上
3	人生の出発：発達の基礎としての愛着	子どもは誕生直後から他者との関係の中に生きている。特に親との愛着関係は、人の心身発達の基礎となる。愛着の成立に絡む諸要因およびそれが個人の生涯発達過程に対して持つ意味について親子双方の視点から考える。	遠藤　利彦（京都大学大学院助教授）	遠藤　利彦（京都大学大学院助教授）
4	乳幼児期の認知とことばの発達	乳幼児期のわずか数年の間に子どもは実に多くのことを学習する。そして、その基盤になるのがことばや象徴機能の発達であり、また心というものに対する気づきである。認知能力の発達を中心に、人の心の成り立ちを探る。	同　上	同　上
5	乳幼児期における社会的世界の広がり	子どもは徐々に親以外の様々な他者と関係を深め、またその中で自分の欲求や感情を調節し、他者に対して思いやりを示すことができるようになる。乳幼児期の自己や他者の理解および感情制御や共感性の発達を概観する。	同　上	同　上
6	子ども時代の環境世界	子どもを理解することは、子ども達が生きている環境世界を理解することでもある。子どもの生活が展開する家、となり近所、学校といった生活空間において、世界をとらえる枠組みが形成される過程を見ていく。	南　博文（九州大学大学院教授）	南　博文（九州大学大学院教授）
7	児童期の学びと仲間世界	学習面での概念的思考や仲間との集団関係が重要になる児童期の認知発達と社会的発達を、自己中心性からの脱却、ルールの発生、公平感・道徳性などの観点を含めて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	思春期：子どもからの脱皮と揺れ動く心	思春期への移行に伴う諸問題として、身体成熟と身体意識の変化、親に対する依存と独立の葛藤、親子間の相互調整的変化、中等教育への移行と学校環境への適応、おとなと子どもの世代間の意識のずれ等を解説する。	平石　賢二（名古屋大学大学院助教授）	平石　賢二（名古屋大学大学院助教授）
9	青年期：アイデンティティの探求と社会的関係	青年の自我意識の高まりとアイデンティティ探求のプロセスを中心に扱い、その発達の背景にある認知発達過程、親子関係、同世代の友人関係、教師－生徒関係等が果たしている役割について解説する。	同　上	同　上
10	成人前期：おとなとしての意思決定と親密性	青年期後期から成人前期の発達課題として、時間的展望の発達と進路選択・職業決定のプロセス、異性との親密な関係の形成と性役割観の発達、結婚や子育てなど親密な人間関係をつくる問題について解説する。	同　上	同　上
11	人生なかば：危機と成熟	中年期は、社会的にも家庭的にも責任が大きく、世代間ギャップの矛盾にもさらされ、人生前半から後半への移行期として危機的な時期でもある。中年期の捉え方と人生後半の再編について考える。	やまだようこ（京都大学大学院教授）	やまだようこ（京都大学大学院教授）
12	成人後期：世代を育み伝える	成人後期のテーマとして、生成継承性、心理的成熟、世代間伝達、病や死の看取りの問題をとりあげる。とくにエリクソンの発達理論と人生の物語研究をもとに、次世代への連関としてのライフサイクルを考える。	同　上	同　上
13	中高年期の心理的機能変化をもたらす要因	これまでの研究の成果を踏まえ、中高年期に起こる心理的変化の特徴を把握する。その上で、エイジングの個人差を生む生物学的・環境的要因、そして生活史を含めた個人側の要因を探り、さらに時代的変化にも言及する。	小嶋　秀夫	小嶋　秀夫
14	老年期の生活の諸相	人生を舞台（ステージ）として見ていく立場から、老年期の生活構造に生じる変化と、それが個人の住まい方、ライフ・スタイルや対人世界とどのように関わっているかを、人生移行という側面から考えていく。	南　博文	南　博文
15	生涯発達心理学の課題と未来	高齢化、情報化社会を迎えて、「進歩」概念から脱却し、文化・歴史的分脈のなかでの変化を重視した新たな生涯発達理論と方法論への転換が求められる。人の生き方の多様性と柔軟性を視野に入れて未来を展望する。	やまだようこ	やまだようこ

＝　現代の社会心理学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　亀田　達也（北海道大学大学院教授）〕
〔主任講師：　村田　光二（一橋大学大学院教授）〕

全体のねらい

適応・進化の観点から、人間の社会行動の諸相を検討する。私たちの認知や感情のメカニズム、社会行動のパターン、さまざまな社会規範・制度などが、人間を取り巻く文化・生態学的環境への見事な適応を実現している可能性を、理論と実証的な知見によりながら論考する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「人間の社会性」をどう捉えるか？	人間はしばしば「社会的動物」と称される。人間の社会性をどのような観点から検討できるか、本講義の基本的な視点を解説する。	亀田　達也（北海道大学大学院教授）	亀田　達也（北海道大学大学院教授）
2	社会的影響過程	社会的な影響プロセスについての社会心理学の知見を概観する。社会的促進、規範的影響・情報的影響、社会的影響が集団全体に及ぼすマクロ的な帰結などの話題を取り上げる。	同　上	同　上
3	社会的交換（1）	他者との資源のやり取りを「社会的交換」と呼ぶ。集団内ではどのような交換パターンが安定して成立しやすいか、二者間の互恵性をめぐる問題などを中心に検討する。	同　上	同　上
4	社会的交換（2）	第３回に引き続き、社会的交換について論考する。ここでは、二者関係を超えた安定的な交換関係は成立可能か、社会的ジレンマ、社会規範などの話題を取り上げ検討する。	同　上	同　上
5	進化と社会行動	ヒトのような社会は動物界に広く見られる現象ではない。ヒト以外の動物社会との比較を通じて、ヒト社会の成り立ちを考える。	平石　界（東京大学大学院助手）	平石　界（東京大学大学院助手）
6	グループとしての協調行為（1）	人々が集団で行なう協調行為の特徴を論考する。ここでは、集団による協調的な問題解決の話題を取り上げる。	亀田　達也	亀田　達也
7	グループとしての協調行為（2）	第６回に引き続き、集団による協調行為の特徴を論考する。ここでは、集団による意思決定、情報処理などの話題を取り上げる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	社会環境と適応行動	適応の視点を、社会・文化の問題に拡張する。私たちの“文化”が、生態学的環境への見事な適応である可能性を論考する。	亀田　達也	亀田　達也
9	文化と認識	人の認識様式は生得的に決められたものではない。むしろ当該の文化における規範や慣習の日常的な実践を反映した文化相対的なものであると考えられる。ここでは、いくつかの比較文化的研究を紹介し、人の認識様式が文化相対的であることの妥当性を検討する。	石井　敬子（北海道大学大学院助手）	石井　敬子（北海道大学大学院助手）
10	適応を支える認知（1）	「社会的認知」と呼ばれる領域では、私たちの行動の背後に潜む心理メカニズムが探られている。これらのメカニズムも社会的環境への適応を増すために進化してきたと考えられるが、ここではまず「原初的情報処理としての感情」の問題を中心に説明する。	村田　光二（一橋大学大学院教授）	村田　光二（一橋大学大学院教授
11	適応を支える認知（2）	第10回に引き続き、適応を支える認知に関して、「社会的認知と行動の自動性」の問題を説明する。私たちが、意識せずに自動的化された情報処理を行って、認知の負担を少なくして効率を高めていることの実態とそれに伴う問題を検討する。	同　上	同　上
12	社会的認知の過程	私たちは他者の行動から内面の特性を推測することで対人認知を行う。この過程には自動性が認められる一方、行動の生じた環境を考慮するといった意識的な修正も働く。「対応推論」の問題を中心にこの過程について検討する。	同　上	同　上
13	自己	私たち自身は認知の主体であると同時に、認知の対象でもある。どのように自分自身を知り、理解するのか、そのメカニズムを検討する。特に、他者との関係における自分に焦点を当てる。	工藤　恵理子（青山学院女子短期大学助教授）	工藤　恵理子（青山学院女子短期大学助教授）
14	集団間認知とステレオタイプ	社会集団間での対人認知では、ある集団に関して共通性のある単純化したイメージ（ステレオタイプ）の存在が指摘されている。ステレオタイプは認知の効率化に寄与し、社会的アイデンティティの源泉となると同時に、多くの社会的問題を引き起こす源泉となることを説明する。	村田　光二	村田　光二
15	ステレオタイプ化と意識的コントロール	ステレオタイプが特定の集団成員に適用されることを「ステレオタイプ化」と呼ぶ。偏見や差別につながるステレオタイプ化は自動的に生じやすい。ステレオタイプ化は、どの程度、意識的にコントロールできるのか検討する。	同　上	同　上

＝乳幼児心理学（‘０２）＝（TV）

〔主 任 講 師：　内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

近年、乳幼児期を対象にした研究がますます隆盛になり、生得性をめぐる議論も白熱している。前著『乳幼児心理学』と同様、乳幼児の発達を全般的に扱うという方針のもとに新しい知見が蓄積されつつある発達初期の問題を多角的にとりあげ、この時 期の発達がこれに続く児童期以降の発達にとって重要な意義をもつものであることを理解していただくことをねらいとする。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間発達の可塑性ー乳幼児期の発達の重要性ー	ヒトは生物学的要因を土台に、文化・社会的要因の影響を受けながら「人間化」への歩みを進める。現代の日本には、十分な養育を受けられない環境下で発達遅滞を起こしている子ども、虐待やその逆の過保護により偏った社会・文化的要因に曝されることになり、子どもの心とからだに発達の遅滞がもたらされる事例が多く見られる。子どものその後の発達過程に影響を与えるという点からみると乳幼児期の発達は全生涯のうち最も重要である。しかし、いかに生育環境が劣悪であろうとも、人的環境の改善により子どもは見事に立ち直っていく。乳幼児初期の問題を克服して発達していく子どもの姿は人間発達の可塑性がいかに大きいものであるかを私たちに知らせてくれるのである。	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
2	乳幼児期の認識能	最近の発達心理学は、これまで考えられていたのよりもずっと高い能力を乳児が身に つけていることを明らかにしている。一見、何もわかっていないような乳児だ が、彼 らは自分を取り巻く世界がどのようであるかについての、ごく基礎的な知識や枠組み を持って生まれてくる。そうした知識や枠組みがあるがゆえに、乳児は、自分の周りにいる人やもの、出来事について、驚くほど速く学習することができる のである。ここでは、発達初期の乳児の様々な能力について見てゆく。	江尻　桂子（茨城キリスト教短期大学部講師）	江尻　桂子（茨城キリスト教短期大学部講師）
3	発達初期の気質と行動	いろいろな子どもたちと接してみて驚くのは、いかにひとりひとりの子どもの気質が違っているかということであろう。活発な子どももいれば、のんびりした子どももいる。我々が子どもの行動発達について考える時、その子の気質がどうであるかということも考慮してゆかねばならない。ここでは、気質にはどのようなタイプがあるか、また、気質は、母子関係とどのように関係しているのかといったことを中心に見てゆく。	同　上	同　上
4	情動の機能と発達	情動についての考え方が大きく変わってきた。乳幼児の情動は、文脈的・関係的に理解される。乳幼児は、情動を発達させると同時に、養育者や環境との関わりを通じて、情動制御を発達させる。情動制御は、文化の影響を受ける。最近の研究を中心 に、これらの問題を考察する。	氏家　達夫（名古屋大学教授）	氏家　達夫（名古屋大学教授）
5	養育者-子システムと愛着の発達	およそ生後 1 年間で、養育者と子どもは互いに相手に適応し、子どもは愛着と呼ばれる情緒的絆を発達させる。愛着の発達プロセスには、子どもの特徴や養育者の特 徴、文化的社会的要因が複雑に絡まりあっている。愛着の発達を切り口に、養育者と子どもの相互適応プロセスを跡づける。	氏家　達夫	氏家　達夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	世界を捉えるしくみ －象徴機能の発生と認知機能の発達－	誕生時から子どもは感覚器官をフル回転させて環境と活発にやり取りしている。人を含めた回りの環境との感覚的運動的なやり取りを通じて子どもは外界についての認識を形成していく。乳児期の終わりには「三項関係」が成立して内面世界が出現し「象徴機能」が発生する。感覚運動的段階から表象の段階で世界や自己を捉える概念が成立し、想像力も発達する。幼児期の終わりには自己を自分の意志で制御できるようになる。また、外界の規則性を直観的に把握する直観的思考段階にいたる。	内田　伸子	内田　伸子
7	ことばの生まれる道筋 －言語機能の発達－	言語は象徴機能の成立を基盤にして外界認識の手段として成立する。ことば（発話行為）が認識過程に深くかかわるようになるのとほぼ同時に、人とやり取りする手段として人との関係を作る働きをも担うようになる。ことばは人と社会的やり取りを通して、意志や情動、認識と絡み合い、表象（イメージ）の形成や認識を深める手段となり幼児期の終わりまでには、自己や世界を表現するためのディスコース（談話）が成立するようになる。	同　上	同　上
8	対人関係-家族と地域社会の影響	赤ちゃんの誕生にともない夫婦という２者関係から３者関係へと変化する。このことは、夫婦関係に加えて父子関係と母子関係の新たな関係のシステムができることを意味する。また、下に弟や妹が生まれるときょうだい関係も成立する。そして、この家族のメンバーの発達にともない相互の役割や関係のシステムそれ自体も変化する。乳幼児にとって家族が最も重要な影響要因であることは異論の余地がないが、家族の外の人間関係の影響力も大きく、それは私たちが考えるよりも早い時期から認められている。さらに、両親の子育てに対する地域社会の子育て支援のネットワークやサポートシステムの影響についても考えてみたい。	臼井　博（北海道教育大学教授）	臼井　博（北海道教育大学教授）
9	自他についての理解の発達	自他についての理解の発達について、乳児期終わり頃からの意図の理解や共同注意、振り・見立ての成立、心の理論の成立、幼児の自己概念の特徴、他者の人格の理解、などの視点から考察する。	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）
10	幼児の遊びと仲間関係	幼児の遊びの発達について、象徴遊び、ごっこ遊びを取り上げて考察する。さらに、仲間関係の発達について１・２歳児の仲間関係の始まり、仲間とのやり取りの能力の個人差の観点から論考を進める。	無藤　隆	無藤　隆
11	自律性の発達-自己主張と自己制御	自律性の発達は、自己主張と自己制御の両面からなっている。自律性の発達は、社会化方略と子どもの特徴との相互作用として発達する。子どもの自己主張の意味づけや取り扱い、自己制御を要求する度合いや文脈は文化によって異なっている。最近の研究を中心に、これらの問題を考察する。	氏家　達夫	氏家　達夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	日本の幼児教育実践者の信念と教育方法	今日就学前の幼児にとって幼児教育は誰もが経験する普遍的な経験である。だが、義務教育の小中学校に比べると幼児教育を担う幼稚園や保育園はその大半が私立であり、教育の目標やその実践の方法も公立学校に比べるとずっと多様性が大きい。にもかかわらず教師たちの教育の目標、子ども観、指導観などの信念や具体的な実践方法についてはかなりの共通性がある。それは教師たちの間でこうした教育についての知識や技能についての文化的なプールを共有しているからに他ならない。ここでは、比較文化の視点から日本の幼児教育を支える実践者の信念と具体的な教育方法の特徴について考えてみたい。	臼井　博	臼井　博
13	読み書き能力の獲得 －　一次的ことばから二次的ことばへ－	幼児期の終わり頃までには、子どもは一次的ことば（生活言語）から二次的ことば、すなわち、読み書きの世界への第一歩を踏み出す。読み書きを媒介にして子どもの世界は時間・空間を隔てた伝達を可能にし、子どもの意識は「今」「ここ」を超えて広がるようになる。また、文字はことばについてメタ的に捉えることを可能にする。考える手段としてのことばは一層確実なものになる。個人的なやり取りの中で育まれた「一次的ことば（生活言語）は読み書きの習得に伴い質的に改変され、公共性の高い二次的ことばに移行する。	内田　伸子	内田　伸子
14	発達のリスクと臨床への基礎	乳幼児期の発達におけるリスクを取り上げ臨床への応用の方途を探る。そのために、親子関係のリスク、子ども自身のリスク、環境のリスク（含む、メディアや早期教育など）、仲間関係の問題、情動制御の発達と育成、家族への援助と介入の諸点から考察する。	無藤　隆	無藤　隆
15	乳幼児期から児童期へ：発達的な移行期を生きる	これまでの１章から１４章までで、乳児期から小学校の入学前の時期までの発達のさまざまな側面とそれらに影響を及ぼす諸要因について多面的に、かつダイナミックに描いてきた。ここでは、これらを受けて幼稚園の年長から小学校の１年生にかけての発達的移行期に焦点を当てて、この時期に起こる重要な発達的な変化について考えてみたい。	臼井　博	臼井　博

＝老年期の心理と病理（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　竹中　星郎（元大正大学教授）〕
〔主任講師：　星　　薫　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

高齢社会の今日、80歳90歳をどのように生きるかということは人類にとってもっとも新しいテーマである。しかし老人問題の多くは介護システムや医療福祉についてであり、高齢者以外の世代にとっての問題である。高齢者が厳しい状況をいかに生きているかをみつめ、彼らの思索や悩みや不安、そして心の病の背景を考えることなどをとおして理解を深め、高齢期の課題をみつめる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「高齢社会」の問題点－高齢者の視点から	わが国は1994年に高齢社会になったが、欧州先進諸国より約20年遅れて到達し、高齢化社会からの移行は異常に早い。そのような高齢者を取り巻く社会的な状況をとおして、「いかに生きるか」という人生の最終段階である高齢期の課題を考える。	竹中　星郎（元大正大学教授）	竹中　星郎（元大正大学教授）
2	老いとパーソナリティの発達－真の個性化	高齢期をいかに生きるかは、それまでの人生における蓄積を反映している。人生ではそれぞれの段階に応じた課題に直面する（ライフサイクル理論）が、中年期・初老期はそれ以降の生き方を規定する。「真の個性化」と完結なき発達の課題を考える。	同　上	同　上
3	老年期の喪失体験	新しい創造が難しくなった老年期では、過去が現在の心の拠り所となっている。かつての仕事や立場、役割だけでなく、家や大切な持ち物も自分の歴史が刻み込まれた精神的な財産としての意味をもっている。老年期の喪失体験を鳥瞰する。	同　上	同　上
4	老いの孤独と孤立	老年期は身近な人が身辺からいなくなるという状況に置かれるという意味で真の孤独である。しかしそれは自分の老いをみつめ、ものごとに対する深い思索をもたらすポジティブな側面ももつ。それに対して関係をカットオフされる孤立は精神的に重い状況である。	同　上	同　上
5	老いと死・適応	老年期は死が現前化するが、高齢者は必ずしもそれに恐れおののいているわけではない。しかし末期ガンの患者における死とは異なる問題を多く含んでいる。また、老年期は適応の力がもっとも衰えている一方で、もっとも厳しい適応を求められる。	同　上	同　上
6	老年期の認知・記憶・知能	一般に、精神活動の基盤である認知機能や記憶、知能は老化にともない衰えるとみなされているが、結晶性知能と流動性知能に分けてその変化を見ると前者が減衰するのに対して後者は増加するように一律でなく、個人差も大きいのが老年期の特徴である。	星　薫（放送大学助教授）	星　薫（放送大学助教授）
7	老年心理学の課題	パーソナリティの発達は老年期にどのような課題を担うのか、心身の老化はどれにどのように作用するのか。それは家族関係の変化や社会構造の変化とも無縁ではない。とりわけ厳しい生に向き合う80、90代の心理を理解することは今日的な課題である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	老年期の妄想 1	老年期は思春期・青年期とならんで妄想が多く見られるが、なかでも「盗られ妄想」は老年期心性を象徴する問題である。老年期の異常心理を考えるには「脳か心か」という二分法でなく、「脳も心も」という複眼的な視点の重要性を示している。	竹中　星郎	竹中　星郎
9	老年期の妄想 2	高齢者には他の年代に見られない特有の妄想が生じることが多いが、そのほとんどは老年期の生活や不安、異常心理を映し出しているものである。接触欠損妄想、「幻の同居人」、共同体被害妄想、人物誤認などの事例について考察する。	同　上	同　上
10	老年期の抑うつとうつ病 1	気が重い、憂うつといった気分は誰にもある変動の範囲内から、うつ病にいたる広いスペクトルムをもっている。またうつ病の病前性格として注目されるメランコリー親和型性格は、発症状況をどのように受け止めるかというその個人の意味の理解につながる。	同　上	同　上
11	老年期の抑うつとうつ病 2	うつ病の臨床症状をふまえて、老年期の特徴を見ていく。そしてうつ病と痴呆の鑑別、身体症状を前景にする仮面うつ病、奇妙な心気妄想と不死観念などを呈するコタール症状群について事例に則して問題把握のポイントを考える。	同　上	同　上
12	神経症圏・人格障害	一般的に老年期は神経症は減少するとみなされているが、身体病や孤独などにより心気症状や強迫症状を呈するものは少なくない。また、一人では暮らせなくなったために周囲の人びとがかかわるようになって若いころからの人格の偏りが顕在化する場合もある。	同　上	同　上
13	痴呆 1	80 歳以降での痴呆発現率は約 20%とも言われ、高齢社会の大きな問題である。しかし妄想やうつ病もボケといわれるように、痴呆についての知識は不十分である。なかでもせん妄は痴呆や精神症状を理解するうえでの鍵概念にあたるテーマである。	同　上	同　上
14	痴呆 2	老年期痴呆性疾患はアルツハイマー病と血管性痴呆で約 90%を占める。それぞれの臨床症状の特徴、病因、治療などをふまえて、かかわりのポイントを考える。痴呆に伴う精神症状や異常行動を人間関係や環境変化などとの関連でとらえることが大切である。	同　上	同　上
15	老いを生きる	人生の最終段階をそれまでにふさわしく生きるとは、自分らしく主体的に生きることである。ボケ予防や要介護予防といった「身体」へのとらわれから自由になることが大切である。そのためには高齢者の生を支える社会のあり方もふくめて考える必要がある。	同　上	同　上

＝応用心理学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　神作　博　（中京大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学･相談心理学･教育心理学･人間工学･看護･被服等他の科目で既に開講されているものを除いた応用心理学のうちから、生活に直結した主要なテーマを選び、その内容、現在のトピックス、応用心理学的にみた問題点などを解説し、受講生の視野の拡大と知見の充実に資する。
（特に、産業心理学、交通心理学については現今の生活の動きを考慮し、重視した。）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属･職名)	放送担当講師名(所属･職名)
1	応用心理学総論1	1　応用心理学とは 2　応用心理学の歴史 3　応用心理学の分野 4　応用心理学の社会的貢献	神作　博（中京大学教授）	神作　博（中京大学教授） 星　薫（放送大学助教授）
2	応用心理学総論2	1　この科目で扱う応用心理学の範囲 2　他の諸科目との関連 3　この科目の狙いと特徴 4　本章の内容	同　上	同　上
3	産業活動に関する心理学1	1　産業心理学の誕生 2　作業研究の方法 3　作業負担と作業パフォーマンスの評価	向井　希宏（中京大学教授） 神作　博	向井　希宏（中京大学教授） 神作　博 星　薫
4	産業活動に関する心理学2	1　現代社会における生活と産業活動 2　組織における人間活動 3　作業意欲（モラール）と活動の評価 4　リーダーシップと人間行動 5　快適な作業環境を求めて	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	販売・消費に関する心理学	1 現代社会と消費 2 情報化社会の進展と販売・消費 3 消費者行動における心理学的アプローチの重要性 4 消費者行動の具体例	向井 希宏 神作 博	向井 希宏 神作 博 星 薫
6	安全に関する心理学	1 事故防止と安全 2 事故生起の現状 3 人的要因事故 4 安全対策	神作 博	神作 博 星 薫
7	交通に関する心理	1 交通安全とは 2 交通心理学の歴史 3 交通状況の構成要因 4 運転行動・走行 5 運転行動モデル 6 運転者・歩行者の不安全特性 7 交通心理学における諸検討の方法 8 望ましい運転者像 9 事故多発運転者	同 上	同 上
8	交通に関する心理学2―交通事故の追究および人的要因事故―	1 交通事故の発生 2 交通事故の発生状況 3 人的要因事故の現況 4 人的要因事故の特徴 5 人的要因事故発生状況の具体例 6 人的要因事故の諸要因 7 事故の直接要因と間接要因	同 上	同 上
9	交通に関する心理学3―安全対策―	1 特性管理と助言指導 2 組織・職場へのアプローチ 3 安全教育 4 シミュレータ・トレーナなどの機器による体験・教育・訓練 5 人間工学的安全対策 6 環境の安全対策 7 運転者の心理的対策 8 法的強制・規制 9 交通文化の構築	同 上	同 上
10	生活に関する心理	1 職場・住環境に関するもの 2 建物内外の色彩の活用 3 チェックリストによるアセスメント 4 生活ネットワーク作り 5 心豊かな生活	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	生活支援に関する心理学	1 自立支援 2 介護・看護 3 生活支援に関係する人材育成の主眼点 4 社会における生活支援態勢の諸問題	神作　博	神作　博 星　薫
12	生活の安全・保証に関する心理学	1 犯罪不安の心理 2 緊急事態における心理と行動 3 防犯に関する心理学 4 災害に対する心理学	同　上	同　上
13	環境に関する心理学1	1 環境と人間 2 作業環境のあり方 3 生活環境のあり方 4 景観 5 地下の環境 6 宇宙における環境	同　上	同　上
14	環境に関する心理学2―色彩・照明心理学―	1 照明環境と人間行動・心理 2 照明と色彩の関係 3 照明の明視性に及ぼす環境 4 色彩環境と人間行動・心理 5 色彩の機能	同　上	同　上
15	まとめ	1 再び応用心理学について 2 時系列的に見た応用心理学 3 人間中心の応用科学としての応用心理学 4 本講座をふりかえって	同　上	同　上

＝感情と認知（‘０３）＝（R）

〔主任講師：　波多野　誼余夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　高橋　　惠子（聖心女子大学教授）〕

全体のねらい

感情と認知は心の働きとして切り離すことができない。しかし、心理学はこのふたつを別々に研究してきた。認知心理学者は感情やそれと密接に関わる自己、人間関係、文化などを「棚上げ」し、心を情報処理系として扱ってきたし、感情研究者は認知過程のモデルを感情の理解にとって無関係なものとみなしてきた。1990 年代に入って、感情と認知の相互作用は心理学研究の焦点の一つになりつつある。この科目では、感情と認知の相互作用についての知見を心理学のさまざまな分野から紹介し、新しい研究分野への知的関心を高めることを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	感情と認知：総覧	感情と認知は本来心の働きの切り離すことのできない両面であるにもかかわらず、心理学のなかでは別々に研究されてきた。感情を無視した認知の研究は本質的に不完全であり、また認知過程を考慮せずに感情の高度な研究をすすめることは不可能だ、という認識が広く共有されるようになったのは、ようやく1990 年代に入ってのことである。研究の歴史と問題を概観する。	高橋　惠子（聖心女子大学教授）	高橋　惠子（聖心女子大学教授） 波多野誼余夫（放送大学教授）
2	感情の系統発生的起源	ヒトの認知的特性や行動特性の一側面は進化の産物である。感情もその例にもれない。比較認知科学の視点から、感情におけるヒトとヒト以外の霊長類との類似性と差異を探ることにより、感情がどのように進化してきたのか、ヒトにおける感情の特殊性はいかなるものであるのか、を検討する。	板倉　昭二（京都大学助教授）	板倉　昭二（京都大学助教授）
3	表情模倣と感情のコレギュレーション	表情模倣は乳児期の極めて早い時期から出現することが知られている。ところが、この表情を真似するという行為は、乳児が物理的に表情をマッチさせるだけでなく、他者の感情を体験するのではないかとの報告もある。こうした感情のコレギュレーションについて概説する。	同　上	同　上
4	感情の認知神経モデル	感情の認知メカニズムを知る上で、感情の神経基盤、すなわち感情と脳の関係を調べることは必要不可欠である。近年の神経科学の進歩に伴い、それらの謎が徐々に明らかにされつつある。ここでは、感情の中枢とされる扁桃体の機能について述べる。	梅田　聡（慶應義塾大学助手）	梅田　聡（慶應義塾大学助手）
5	感情処理における扁桃体と前頭葉の役割	感情と認知の神経メカニズムは複雑であり、感情中枢とされる部位の機能を明らかにするだけでは、その全体像を把握するには至らない。ここでは、高次認知機能を担う前頭葉の役割に焦点を当て、感情と認知の神経ネットワークについて述べる。	同　上	同　上
6	感情の理解の発達	感情の理解の発達は、もっぱら素朴心理学あるいは心の理論の枠組みで扱われてきた。自他の感情の理解は、信念、願望、行為、感情などの関係を制御している機構についての知識に依存するから、その発達はこうした知識がより詳細な、正確なものになっていく過程にほかならない。	波多野誼余夫（放送大学教授） 高橋　惠子	波多野誼余夫
7	談話における感情理解	我々は物語などを読んだり聞いたりするさい、なかば自動的にその主人公の心的状態を推測する。とくに主人公の感情にたいしては共感的にこれを把握している、という実験的証拠が得られている。読み手の知識や経験、あるいは深い読みを導こうとする働きかけなどにより主人公の感情理解がどのように影響されるかを論ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	感情と記憶の実験的研究	感情と記憶の実験的研究は、その方法論に注目すると、実験的な感情誘導と感情の個人差による分類の２種類に分けることができる。ここでは、これら感情と記憶に関する２種類の実験的研究について明らかにされてきたさまざまな知見を理解する。	高橋　雅延（聖心女子大学助教授）	高橋　雅延（聖心女子大学助教授）
9	感情と自伝的記憶	自伝的記憶とは個人の過去に起こった出来事や経験にかかわる記憶のことである。これらの自伝的記憶の大きな特徴は、その多くが感情に色づけられているという点である。そこで、ここでは、感情と自伝的記憶とのさまざまな関係について明らかにしていく。	同　上	同　上
10	目撃証言	感情と認知の関わりは、犯罪の被害に遭遇したり、事故を目撃したりといった現実のフィールドの中で実感されることが多い。ここでは、事故や事件はどのように記憶されるのか、また、記憶にもとづく証言は信頼できるものなのかを、フィールド実験を挙げつつ紹介する。	仲　眞紀子（北海道大学大学院教授）	仲　眞紀子（北海道大学大学院教授）
11	感情と人間関係	人間には他者と情緒的に強く結びつきたいという感情が備わっている。そして、やがて数人の重要な他者で構成される人間関係の枠組み、つまり、人間関係についての表象を持つようになる。この表象がいかなるもので、年齢とともにいかに変容していくかを述べる。	高橋　惠子	高橋　惠子
12	感情と自己	自己が深くかかわって喚起される感情を自己意識感情と呼ぶ。恥、罪、誇り、驕り、自尊心などがその代表的なものである。自己がどのような認知的過程によってこれらの感情をひきおこすか、感情と認知がいかに関連するかについて論じる。	同　上	同　上
13	感情と社会行動	欧米人は感情的発話を提示された場合、語調情報ではなく内容情報を自動的に取込みやすいが、東洋人の場合は逆に、内容情報ではなく語調情報を自動的に取込みがちである、などの実験結果をもとに、感情的発話処理の文化差を論ずる。	北山　忍（ミシガン大学教授）	北山　忍（ミシガン大学教授）
14	自己と感情	東洋で優勢な相互協調的自己観の下では、自分自身のなかに確固とした属性をみいだし、それを外に表現することは、明示的には奨励されないが、だからといって自己に対する肯定的な感情が重要でないわけではない。このことを巧妙な社会心理学的実験により示す。	同　上	同　上
15	「感情と認知」研究の課題	14回の講義をとおして、これまでの心理学は感情-認知の相互作用について何を明らかにしてきたといえるかをまとめる。そしてさらに、この分野でのこれからの興味ある課題は何かについて、研究の最先端の動向を紹介しながら論じる。	高橋　惠子	波多野誼余夫 高橋　惠子

＝　人格心理学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　榎本　博明（名城大学教授）〕
〔主任講師：　桑原　知子（京都大学大学院助教授）〕

全体のねらい

私たちのパーソナリティは、どこまでが遺伝で決まるのか。パーソナリティ形成に影響する文化・環境的要因にはどのようなものがあるのか。人生の流れのなかで、パーソナリティはどのように発達していくのか。私たちの自分らしさというのは、どのように保たれるのか。パーソナリティはどのようにとらえることができるのか。パーソナリティの病理にはどのようなものがあり、どんな対処が必要なのか。このような疑問を解明すべく、パーソナリティについてさまざまな角度から考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	パーソナリティ概念の問題	心理学で広く使用されているパーソナリティ（人格・性格・気質）の概念について、詳しく考察する。パーソナリティ概念は、本来「構成概念」であるが、使用される研究領域によっては、実体概念のようにも扱われており、研究上の混乱の一因にもなっている。そこで、従来の代表的な研究を通じて、パーソナリティ関連概念について整理し検討する。	若林　明雄（千葉大学助教授）	若林　明雄（千葉大学助教授）
2	パーソナリティの類型論と特性論	パーソナリティの理解の仕方として代表的な類型論と特性論について、代表的な理論を紹介しながら、その考え方の基本理念を検討するとともに、現在の動向を解説する。特に、ビッグファイブ理論から導かれた最近のタイプ理論についても、紹介する。	同　上	同　上
3	対人関係にあらわれるパーソナリティ	個人のパーソナリティの特徴は、対人関係の中に端的にあらわれる。対人的な開放性や他者のパーソナリティの認知、他者の目に映る自分と自己呈示など、対人関係場面におけるパーソナリティの問題を取り上げて解説する。	榎本　博明（名城大学教授）	榎本　博明（名城大学教授）
4	パーソナリティ発達の諸要因	パーソナリティの発達を規定する遺伝的要因および環境的要因については多くの研究が行われてきている。その中から代表的な研究例や議論を紹介し、また遺伝とも環境とも言いがたい自己形成的要因についても解説する。	同　上	同　上
5	親子関係とパーソナリティの発達	人のパーソナリティの発達にとって親子関係は大きな影響を持つと考えられている。発達初期の段階はもちろんのこと，青年期においても，親からの自立を含め青年自身のあり方が問われることになる。本講義では，これらの点について代表的な理論を紹介したい。	岡田　努（金沢大学助教授）	岡田　努（金沢大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	友人関係とパーソナリティの発達	親子関係とならんでパーソナリティの発達と関わりの深い友人関係について取り上げる。児童期から青年期にかけて，友人関係の質的な変容と，パーソナリティの関連についての理論を紹介する。	岡田　努	岡田　努
7	ライフサイクルとパーソナリティの発達	人生の各ステージによって社会的に求められる発達課題が異なってくる。私たちは、そうした社会的要請や期待に応えるかたちで自己を形成していく。とくに問題となる移行期に求められるパーソナリティの再編に焦点を絞って解説する。	榎本　博明	榎本　博明
8	想起される自己と自己物語	私たちは過去のさまざまな経験を抱えつつ現在を生きている。時間軸上で拡張される自己は、記憶機能によって同一性が保証されている。そうした自己の同一性の問題を自己物語という観点から検討し、人生を導く自己物語の文脈というものについて解説する。	同　上	同　上
9	自己の変容における語りの役割	私たちは他者との関わりを通して自己を社会につないでいく。私たちの自己の社会性の基盤は、聞き手の存在にある。自己の変革も他者に自己を語ることを通して行われていく。そのような自己物語の心理学の立場から、自己物語法についての解説を行う。	同　上	同　上
10	文化とパーソナリティ	パーソナリティ形成に及ぼす文化の影響は、さまざまな地域における異なった文化が研究対象となるにつれて、重要な要因であることが明らかになってきている。この講義では、文化とパーソナリティについての理論の変遷と、現代における文化的要因の意味について紹介する。	堀　正（群馬大学助教授）	堀　正（群馬大学助教授）
11	精神分析的心理療法への誘い	こころの悩みを抱えてセラピストのもとに訪れるクライエントが、一回の面接、数回の認知療法で良くなる場合もあるが、より深い理解・洞察を必要とする場合も少なくない。それを可能にする、無意識、転移、抵抗などの概念を軸とする精神分析的心理療法を紹介する。	滝口　俊子（放送大学教授） 丸田　俊彦（メイヨクリニック教授・慶応義塾大学客員教授）	滝口　俊子（放送大学教授） 丸田　俊彦（メイヨクリニック教授・慶応義塾大学客員教授）
12	精神分析的心理療法の最先端ーこころの量子論ー	心理療法において、いかに努力しようと、いかに訓練を積もうと、完全に相手の身になって感じ、考え、理解することはできない。可能なのは、「限りなく相手の視点に近づこうと努力すること」であり、その努力が治療的に働く。	丸田　俊彦	丸田　俊彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	ユングの人格理論	ユングはフロイトといったんは意気投合したのだが、その後考え方の違いを無視できなくなり、独自の理論を構築していく。ユングの人格についての考え方を、「元型」や、「普遍的無意識」といった概念をとり上げながら紹介する。	桑原　知子（京都大学大学院助教授）	桑原　知子（京都大学大学院助教授）
14	心理アセスメント1	自分を知るために心理テストなるものが存在する。心理テストにはどのようなものがあり、また、どこまで人格理解を助けるのであろうか？この回では質問紙法とよばれる心理テストを中心に紹介し、その扱い方についても解説する。	同　上	同　上
15	心理アセスメント2	この回では「投影法」とよばれる心理テストについて主に紹介する。心理テストにおいて重要だと考えられる、「妥当性」「信頼性」の概念、及び、心理療法の中でどのように心理テストが使われていくのかという点についても述べたい。	同　上	同　上

＝教育の哲学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　小笠原　道雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講座は教育問題を哲学的態度で探究することによって、「教育問題」を全体的、根源的に把握し、今日の教育の混迷から抜け出す方向を探る。教育の混迷の諸相を追求するとともに、教育に対する批判的・反省的思考としての哲学が求められる。第一部では「未決の『問い』としての教育」として、教育の哲学の原理論が展開される。第二部では「問い直される教育」のタイトルで教育問題の諸前提が問われる。第三部で、具体的な学校、および教育空間の問題を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
（第一部　未決の「問い」としての教育－原理的考察－）				
1	教育の哲学とは	「教育の哲学」とは何か。教育問題の何を、どのように問題とするのか。本講座全体の導入的なかつ原理論的な考察をおこなう。基本的には、教育問題の哲学的探究の特徴として、問題の根本的、全体的、統一的な認識の獲得こそが求められる。あわせて、教育的事実（現実）、教育的行為の成立やその内実、意味を示し、その課題を提示している。	小笠原　道雄（放送大学教授）	小笠原　道雄（放送大学教授）
2	教育学の成立と発展	教育問題を対象とする学問（科学）としての教育学が何を問題として、どのように成立し、発展してきたのかを体系的かつ歴史的に考察する。当時の諸学問の発達と輻輳しながら、教育学がいかに独自性や固有性を確保しようとしたかが解明される。	同　上	同　上
3	教育学の展開	教育学の展開として、ドイツ語圏における教育学研究の方法論を中心にその動向を考察し、現代教育学の諸傾向を鳥瞰する。今日、教育学研究はきわめて複雑、見えにくいものになり困難な状況に置かれている。それに答える所に「教育の哲学」の今日的課題がある。	同　上	同　上
（第二部　問い直される教育）				
4	「人間の教育必要性」のフィクション	近年、教育に対する懐疑主義的な見方が広がり、教育の不要性も議論されている。教育という活動は、人間に本当に必要なのか、不要なのか。教育は人間にとっていかなる意味があるのかを考えておこう。	田代　尚弘（茨城大学教授）	田代　尚弘（茨城大学教授）
5	「子ども中心主義」の＜意味論＞	教育という言葉には多様な意味と多様な内容が込められている。「教育」の概念が拡散し、多様になっていることをふまえ、いま一度「教育」という言葉の自明性を検討しておこう。	同　上	同　上
6	進歩観と教育の問題	教育は進歩の観念にもとづき、人間性の進歩あるいは人間的な善を追求してきたが、人間性の進歩とはなんであり、人間的な善とはどういうことなのか。進歩の観念と人間性の進歩について検討してみよう。	坂越　正樹（広島大学教授）	山名　淳（東京学芸大学助教授）
7	啓蒙と教育（1）－教育の脆弱さ－	近代には「教育的理性」と呼べるような、理想主義な教育の考え方が展開され、それが現代まで受け継がれてきた。しかし歴史的、現実的には、「教育的理性」はその脆さも露呈してきた。このことが今日の教育の再検討の要件であることにも注目してみよう。	坂越　正樹	山名　淳

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	啓蒙と教育（2） －教育のシニシズムをこえて－	教育は学校制度として具体化されている。しかし今日、学校が批判され、学校自体の存在意識が問われているが、学校がなぜ問題で、なにが問題とされるのか。学校問題の所在を探り、学校システムのあり方を構想してみよう。	田代　尚弘	田代　尚弘
9	教育における自己と他者	他者をいかに認識するか、他者のあり方をどのように問うのかという視点を無視しては教育という営みは成り立たない。他者を認識するということは自己を認識するということでもある。自己と他者の認識のありようとしての教育を問うてみよう。	坂越　正樹	山名　淳
10	教育と反教育－ある絵本に映し出された近代教育の構図－	一冊の絵本の具体的な分析を通じて、教育に関わる思考パターンを「教育と反教育」のテーマで吟味する。それはそのまま近代教育批判となる。	山名　淳	同上
（第三部　問い直される教育空間）				
11	学校と教師の「自閉の回路」	学校を一つの職能的な組織と考えるなら、そこには学校の日常に大きな影響を及ぼす教師の人間関係と教師文化と教師の職業倫理がある。教師文化と教師の職業倫理にはどのような特質と問題があるのだろう。	田代　尚弘	田代　尚弘
12	教師と子どもの教育関係	学校の日常は、一方で児童・生徒どうしの人間関係を軸とし、他方で教師との教育関係を軸として成り立っている。ここでは児童・生徒と教師とのあいだの教育的関係の諸相を明らかにし、その教育関係の意味を探る。	坂越　正樹	山名　淳
13	学校空間の教育哲学（1）－閉じていく教育の空間－	学校は大きな社会の一つの組織でもあるが、学校を取り巻く今日の社会の特徴を「許容社会」ととらえ、その社会の特徴を呼吸する子どもの「心」と「行動」の問題を検討してみよう。	山名　淳	同上
14	学校空間の教育哲学（2）－学校における「閉鎖性」と「開放性」のあいだ－	「許容社会」はメディアによる価値観の多様性を拡張する社会でもあり、子どもの欲望刺激し、子どもを消費市場の主体者に駆り立てている社会でもある。そうした現状が子どもの教育にどのような影響を及ぼしているかに注目してみよう。	同上	同上
15	都市空間の教育哲学	子どもや学校を取り巻く社会「教育空間」と考えるならば、それはどのような「空間」であり、どのような「空間」であるべきなのか。この問題をとくに都市空間と教育の問題としてとらえてみるなら、子どもと教育空間をどのように構想できるだろうか。	山名　淳	山名　淳

＝近代の教育思想（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　宮澤　康人（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代日本の教育制度や教育理論の基本的枠組が作られるうえで、西洋近代の教育と教育学は大きな役割を果した。その背景にある西洋近代の教育思想に含まれる基本的概念や理論を、近代に生きた思想家の個性から切り離さずに学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育思想とは何か	全体の序論として、教育思想をどのようにとらえるか、教育思想なるものが成立する条件は何か。西洋近代において、教育思想が社会思想、政治思想などから独立してくることなどを説明する。	宮澤　康人（東京大学名誉教授）	宮澤　康人（東京大学名誉教授）
2	近代の教育の思想の特徴	３章以下の個々の思想家の思想に入るまえに近代の教育思想のきわだった一般的特徴にふれ、それが近代の社会と文化の独自性によって作られた、教育主体と学習主体、大人と子供の間の葛藤を克服しようとする課題を負っていることを明らかにする。	同　上	同　上
3	モ　ア －ユートピアと教育－	近代の教育思想の特徴の一つに、そのユートピア性がある。といっても、（暗黙の裡にであれ）思い描かれるユートピアと教育の関連は、さまざまなものがあり得る。ここでは、「ユートピア」という造語の発祥の場トマス・モア『ユートピア』（1516年）の中で、教育がどのような位置を占めたかを明らかにしようとする。ユートピアは教育社会として構想されざるを得ず、教育はユートピアであり続けることを課せられる。	寺崎　弘昭（山梨大学教授）	寺崎　弘昭（山梨大学教授）
4	コメニウス －人間と社会の改造のための術－	近代教育学、とりわけ教授学の祖ともいわれるコメニウスの思想を次の項目に従って説明する。コメニウスへの関心、コメニウスをめぐる時代状況、教育の役割と教育可能性、教授学と汎知学。	金子　茂（中央大学教授）	金子　茂（中央大学教授）
5	ロック －習慣形成と近代社会－	近代教育思想は当然にも、フィクションとしての近代社会と相伴ってその姿を現す。それらの関連を体現したものとして、市民社会理論家であると同時に教育論者であったジョン・ロック（1632～1703年）があげられる。その教育論は、習慣形成を通じて生涯学習主体のエートスを育むことに向けられるものであったが、その基底に「懲治」を捉えることによって、近代市民社会の周縁を不断に中心へと還流させることを保証しようとするものであった。	寺崎　弘昭	寺崎　弘昭
6	ルソー －子どもの発見－	ルソーの『エミール』の主題は、彼自身の言うところによれば「大人になる前の子どもというものはどのような存在であるか」を明らかにし、それにふさわしい教育のあり方を考察することであった。この主題の意味を、ルソーの時代認識とそこから導かれた人間観を分析することによって明らかにする。	森田　伸子（日本女子大学教授）	森田　伸子（日本女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	コンドルセ －進歩の思想と教育－	コンドルセの公教育思想は、フランス啓蒙思想の特徴をそなえつつ、革命の動乱のなかであらわとなったブルジョワ社会の矛盾に対して応えようとする実践的な問題意識に貫かれたものであった。彼の公教育思想の歴史的意味を、こうした背景と彼の進歩思想と関係づけつつ考察する。	森田　伸子	森田　伸子
8	ペスタロッチ －「技術」としての教育と教授－	成人として生活していくうえで必要なことを、子どもたちが子どもなりに大人の社会生活に参加するなかで、自然に、みようみまねで学んでいく。これが教育のもっとも素朴な形だろう。しかし近代の教育思想はそのような素朴な教育がもはやなりたたなくなったときに誕生したのだった。何をどのように教えるのか。それは自覚的に取り組まなければならない課題となったのである。近代教授学の創始者として知られるペスタロッチが、この問題をどう考えたのか。それをここではたどってみたい。	鳥光　美緒子（広島大学大学院教授）	鳥光　美緒子（広島大学大学院教授）
9	ヘルバルト －教授による教育	「学者」としてのヘルバルト、「教育」と「教授」、教育的教授、学問しての教育学、『一般教育学』の構造、人格の客体的部分と主体的部分、といった事柄について説明する。	金子　茂	金子　茂
10	フレーベル －幼児教育の意味と方法－	幼児教育の重要性は、今日しばしば指摘されている。早期からの知的教育が推進される一方では、幼児期にこそ、知識中心主義的な学校教育とはちがった自由な「本当」の教育が必要だし可能なのだという声もある。幼児教育理念の創始者であるフレーベルは、幼児期とその教育の意味をどのように考えていたのだろうか。彼は子どもたちに何を、どのような方法で教えようとしたのかという問題を中心に、彼にとっての幼児教育の意味について考えてみたい。	鳥光　美緒子	鳥光　美緒子
11	ミル －父と子の葛藤と自立の教育学－	近代社会は、近代情愛家族を析出することによって、思春期の子どもと親の葛藤を顕在化させた。こうした父子間葛藤をくぐり抜け、現実化した近代社会との対峙の中で社会論・教育論を紡ぎ出したのが、ジョン・スチュアート・ミル（1806～1873年）である。父ジェイムス・ミルによる被教育体験を経て、自由教育論・＜公衆(the public)＞形成論へと子ミルが自立してゆくプロセスを追う。	寺崎　弘昭	寺崎　弘昭
12	マン －コモン・スクールの思想－	19世紀のアメリカ合衆国において公教育制度の確立に貢献したホーレス・マンの思想を中心として、コモン・スクール運動の背景にある学校教育の「義務」「無償」「中立」の諸原則に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦　良充（明治学院大学教授）	松浦　良充（明治学院大学教授）
13	ライン －国民教育の理論化の試み－	明治中期の日本の教育界に圧倒的な影響を与えたヘルバルト派を代表するラインの理論は、ヘルバルトの「教育的教授」の理論を国民的規模での学校制度が普及する状況において具体化することであった。そこに至る経過を略述する。	金子　茂	金子　茂

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	デ ュ ー イ －成長そのものとしての教育－	20世紀のアメリカ合衆国における進歩主義教育運動に関して、ジョン・デューイの思想を中心に、進歩主義批判の思想も含めて、この磁気の教育論争に関して、その近代教育思想史における意味を解説・検討する。	松浦　良充	松浦　良充
15	教育思想の近代から現代へ	結びの章として、20世紀以降の現代教育思想に対して近代の教育思想をどう位置づけたらよいかを次のごとく展望する。近代の帰結としての現代、現代という時代区分とその特徴、教育と教育思想における近代と現代、現代と教育思想への視点。	宮澤　康人	宮澤　康人

＝教育の社会文化史（‘０４）＝（ TV ）

〔主任講師：辻　本　雅　史（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

「教育」を学校教育に限らず、歴史の社会に埋め込まれた文化システムの一環ととらえる立場から、近世以後の日本の教育の歴史をたどる。それによって、教育を過度に独占したいまの学校の歴史的位置を確認し、近代教育の歴史的特質を提示したい。さらに日系移民の教育や植民地下の教育をみることで、近代教育が一国内に限ることができない問題を抱えていることにも理解を深め、グローバル化時代の教育が直面する諸問題を考える方向を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「文字社会」の成立	はじめに、歴史の視点から教育を考えることの意味を提示する。ついで日本の教育の歴史において、近世以前とそれ以後を画する指標を、社会生活のうちに文字が組み込まれた「文字社会」の成立ととらえ、近世に文文字社会が成立した要因とその意義について考える。さらにこの列島内において、文字の書体や文書の様式にいたるまで文字に関わる文化が比較的共通したかたちで成立したことを指摘し、近世の教育文化の特質をさぐりたい。	辻本　雅史（京都大学大学院教授）	辻本　雅史（京都大学大学院教授）
2	近世社会における人間形成	子どもが大人の保護を受けつつも、やがては自立して一人前になっていく過程の歴史的変容について講ずる。子どもが一人前になっていく過程は、いつの時代にも変わらない繰り返しのようも思われるが、人間の場合には、この一人前になる過程そのものが、歴史的な変容を来しながら今日に至っている。本講義では、子どもが一人前になる過程について、近世における「家」や職業のありかたと関わらせて考察する。	八鍬　友広（新潟大学助教授）	八鍬　友広（新潟大学助教授）
3	近世民衆における文字学びの広がり	文字を学ぶという行為が、いかにして民衆の間に広まっていったのかということについて講ずる。文字を学ぶ行為は、言語の獲得と異なり、生活の過程とは独自の特別な習得の過程を構成している。近世という時代は、このような特別な習得の過程が民衆の間に広まっていくうえでひとつの画期となっている。本講義では、近世における民衆の文字学びの広がりと、その特質について考察する。	同　上	同　上
4	出版文化と教育	近世は商業出版が成立した時代である。出版は知を伝達するひとつのメディアである。出版の普及は、文字文化の定型化と大衆化を進展させ、学ぶべき共通のテキストや今に続く日本の「古典」を成立させて、近世人の「教養」を形づくった。近世の教育を出版文化の視点からとらえてみることで、近世人の文字を通した学びの諸相を考える。	辻本　雅史	辻本　雅史
5	近世の学びの文化とその思想ー貝原益軒から考えるー	貝原益軒を近世人通有の思想を儒学の言葉で表現した儒家知識人ととらえ、子どもの教育を論じた『和俗童子訓』を素材に、近世教育の文化的特質をさぐる。それは、子ども自身が身体を通じて為す「模倣」と「習熟」による人間形成にモデル化できる。そのモデルは、文字や学問の学びにとどまらず、文化伝承に関わる全域に内在していることに気づかされる。そこでの「学びの文化」の特質を近代の学習や教育と対比しながら考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	民衆教化と教育の諸相―政治の教化と心学運動―	１８世紀以後の幕藩政治は積極的に民衆教化にとりくんだ。それは幕藩政治が民衆への「教育」を「発見」していった過程とみることができる。それが日本近代につながっていくその特質について考える。その一方、民衆世界においても、社会を生き抜く困難を克服するために、さまざまな自己教育的な教化運動をおこしていった。ここではその特質を、石門心学をひとつの素材にして考えてみる。	辻本　雅史	辻本　雅史
7	近代教育の進路をめぐって	「学制」（1872年）をもって、本格的に日本の近代教育制度は出発する。しかしそれはひとつの出発にすぎず、「学制」頒布後、近代教育の理念と進路をめぐって議論が始まる。欧米を実地調査した田中不二麻呂の国民教育論と元田永孚の教学論を対比しながら、近代教育めぐる多様な構想について考える。	森川　輝紀（埼玉大学教授）	森川　輝紀（埼玉大学教授）
8	教育勅語の成立と教育体制の整備	近代化＝欧米化と伝統文化＝国民（臣民）道徳の相克の中で、教育勅語が作成される。教育勅語成立の意味と国民教育への影響について説明する。また、1900年代初頭に整備されていく国民教育のシステム（教科書制度、学校行事、学校儀式、等）と、近代の身体、近代の時間、国語の形成について考える。	同　上	同　上
9	大衆化する社会と教育	日露戦後の都市化の進行にともない、二つの相反する教育論が展開する。都市的文化を背景とする新教育論と個の自立と競争を抑制する国民道徳論について説明する。とくに、井上哲次郎の言説に即して国民道徳論の問題性と学問と教育の区別という日本的学校論の特質について考える。また、教員社会の成立とその動向についても説明する。	同　上	同　上
10	経済恐慌と戦時下の教育	1929年に始まる経済恐慌は産業構造に即した「役に立つ教育」論を生み出していく。この教育論は、「滅私奉公」の国家主義と生活に必要な学力主義へと分化していく。そのプロセスを地域社会の動向に即して説明する。次に「近代教育」批判をめぐって展開される教学刷新運動、戦時下教育のキーワードとなる「皇国ノ道」「錬成」教育とは何であったのかを考える。	森川　輝紀（埼玉大学教授）	森川　輝紀（埼玉大学教授）
11	移民教育と異文化理解（1）	近代初頭の日本の民衆にとって、外国像は、ごく少数の例外を除いてそのほとんどが渡航体験を持つ知識人や国家の文化装置をろ過して形成されてきたものに他ならない。しかし、この時代に外国にわたり生活を通して異なる文化と接触し、自文化との葛藤をへながら新しい文化を模索した一団の人々がいた。移民と呼ばれるこれらの人々の子弟教育の実際と、移民教育に対する日本人の期待を明らかにする。それいよって、近代日本の教育が果たせなかった「もう一つ」の近代教育像を考えてみたい。	沖田　行司（同志社大学教授）	沖田　行司（同志社大学教授）
12	移民教育と異文化理解（2）	1868（明治元）年に始まるハワイへの日本人移民は、その子弟教育のために日本人学校を創設した。しかし、ハワイがアメリカ合衆国に併合され、アメリカの市民教育が義務づけられると、日本人学校との間で大きな摩擦を生じるようになった。アメリカ市民の養成と日本国民の創出という両国の教育方針の狭間で、日本人学校の歴史を辿ることにより、日系アメリカ人の苦悩と葛藤が何を意味するのか、そしてそれらが日本の近代教育史にとってどのような問題を提示しているのかを明らかにしたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	植民地支配と教育（1）	日本はかつて台湾・朝鮮などの地域を植民地としていた。日本人の多くはその事実を忘却しているが、植民地とされた地域には日本の支配の痕跡がさまざまな形で残り、今日でも人々は支配の痕跡に直面しながら生活している。そのギャップを少しでも埋めるために、「植民地」とは何なのか、植民地における教育は日本内地の教育とどのように異なり、どのような特徴を持っていたのか、総論的に考察する。	駒込　武（京都大学大学院助教授）	駒込　武（京都大学大学院助教授）
14	植民地支配と教育（2）	植民地における教育は、はたして「教育の近代化」に貢献したのだろうか？この問いに対する答えは、教育における「近代」をどのように捉えるかによって変わってくる。イギリス人宣教師が台湾に設立したミッション・スクールの歴史を事例としながら、欧米人や日本人が「恩恵」としてもたらそうとした「近代」と、植民地化された人々の求めた「近代」の重なりとズレについて考える。	同　上	同　上
15	歴史から教育を考える	日本における近世と近代の教育の歴史的特質を大きく整理してとらえ、その意義について考え、講義のまとめとする。歴史の側から教育をとらえることは、こんにち直面する諸問題を、遠くからの視点から、根元的かつ批判的に考えることを可能にするだろう。たとえば教育を過度に抱え込んでしまう学校が２０世紀に固有の歴史現象だと気づいたときに、学校だけにとらわれない教育のあり方や、生涯にわたる「学習社会」への方向性もみえてくるに違いない。メディア史の視点も入れて、２１世紀の新たな教育の方向も示唆したい。	辻本　雅史	辻本　雅史

＝教育社会学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　岩永　雅也（放送大学教授）〕
〔主任講師：　稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）〕

全体のねらい

人は生まれながらにして人間であるわけではない。家族という基礎的な小集団の中に生まれ、親密な人間関係を通じて自我を形成し、やがて一般化された人間関係が縦横に展開する社会との接触を通してその社会の文化と規範を身に付けることにより、一個の自律的な人間となるのである。その意味で人間はすぐれて社会的な存在であるといえる。本講義は、人々が生まれ、育ち、学び、働き、さらに自らの子ども達を育て、自己を実現していくというプロセスを縦糸とし、人々がそのプロセスの各段階で関わっていくさまざまな教育の在りようを横糸として、社会的な営みとしての教育の意味と本質を理解していくことを目的としている。あわせて最近の教育状況とそれを巡る環境の変化に関しても検討を進める。

回	テーマ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育社会学の視座	教育社会学とはどんな学問領域なのか、どのような方法を用い、何を研究対象として研究を進めるのかといった、教育社会学をめぐる基本概念について考察する。あわせてこれまでの研究史のにも概略的に言及する。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授） 稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）
2	自我の形成と変容	人は生まれながらにして自分自身、つまり自我を持っているわけではない。人の成長の核となる自我は何を要素としてどのような背景と条件のもとに形成されるのか、I と me の概念などを手掛かりに自我の形成について考える。	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）
3	家族文化と社会化	子ども達がまず最初に出会う基礎的集団である家族がどのように彼らの自我を変容させ、社会化していくか、家族とはどのような機能を持ち、いかなる文化を伝達していく存在なのか、社会化の基礎概念とあわせて検討する。	同　上	同　上
4	幼児教育の意味	家族から学校への移行期には、ほとんどの子ども達が就学前教育を体験する。ここでは、現代社会において幼時に対する教育が持っている社会的意味を検討した上で、その現状と問題点を考察する。	森　　繁男（京都女子大学教授）	森　　繁男（京都女子大学教授）
5	学校教育への参加	近代化の進んだ社会において、すべての子どもが同質性の高い学校教育に参加していくということの意味を考える。特に初等段階の学校が持つ社会化機能の本質や内面化される規範の性格などについて詳しく検討する。	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）
6	教師・生徒・カリキュラム	教室の中で展開される教授ー学習過程の諸相を、教師、生徒(児童)、カリキュラムという三つの観点から立体的に検討し、教室という場が持つ社会化力の本質について理解を深める。あわせて現下の問題にも言及する。	同　上	同　上
7	分岐点としての中等教育	近代社会における中等教育機関は、社会化機能の上からも発達段階に関しても、また社会的階層分化という点から考えても、あらゆる意味で「分岐点」というに相応しい存在である。ここではその構造と機能を体系的に考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也

回	テーマ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教育の病理現象	思春期と重なる中等教育段階では、さまざまな形の逸脱現象が見られる。その中には恒常的に繰り返される「通常の」逸脱も、特殊な時代的背景を持つ現象もある。それを類型的に整理しつつ、今日の教育的病理現象を考える。	滝　充（国立教育政策研究所室長）	滝　充（国立教育政策研究所室長） 岩永　雅也
9	教育におけるジェンダー	「社会や文化がつくりあげる性」としての「ジェンダー」は、男女平等を旨とする学校教育にあっても「隠れたカリキュラム」という形をとって入り込んでしまう。ここではそのように「ジェンダー化」された学校教育と、これを克服しようとする試みを社会学的に考察してゆきたい。	森　繁男（京都女子大学教授）	森　繁男（京都女子大学教授） 稲垣　恭子
10	学校の選別機能	近代社会におけるフォーマルな学校教育は、能力による選別と職業的階層社会への人材の配分を主要な機能の一つにしている。学校の持つ選別と人材配分機能のあらましと社会的意味、およびその結果が社会的に正当なものとして受け入れられている根拠について考察する。	荒井　克弘（東北大学教授）	荒井　克弘（東北大学教授） 岩永　雅也
11	高等教育の多様性	高等教育は初等・中等の学校システムとは異なる背景のもとに、職業的専門性に接合する形で形成されてきた。そのことが高等教育機関を多様なものにする大きな要因となっている。ここでは、近代社会において多様に展開する高等教育の実態とその基本的な社会的機能について検討する。	米澤　彰純（大学評価・学位授与機構助教授）	岩永　雅也 米澤　彰純（大学評価・学位授与機構助教授）
12	学歴と社会階層	多くの近代社会は、家柄や身分等の属性原理を廃し、学歴を指標とした業績原理を採用することで、学校を産業社会における人材配分の最も重要なデバイスに位置づけた。ここでは、学歴と社会階層との関わりを理解した上で、学歴主義と学歴社会の本質を探る。	岩永　雅也	岩永　雅也
13	メディア社会の教育	現代社会を解く鍵の一つがメディアである。教育という領域もその例外ではない。メディアと学校教育は現在どのように関わっているのか、それが現代の教育のあり方にどのような影響を与えているのか、また、今後その関係はどう変化していくのか、といった点について実証的に論じる	吉田　文（メディア教育開発センター教授）	吉田　文（メディア教育開発センター教授） 岩永　雅也
14	生涯学習社会の展望	生涯学習社会は、あらゆる学習機会を統合し、有機的に結合することによって実現することができる。生涯学習社会における教育はどのようになるのか、またそこに至るまでにはどのような問題点や課題を解決する必要があるのか、総体的な視点から議論を進める。	岩永　雅也	岩永　雅也
15	教育の現代的課題	今日の学校および教育そのものが直面する具体的な問題を実態に即して取り上げながら、その背景と解決への糸口を探る。あわせて今後わが国の教育がどのように展開していくのか、その近未来像を展望する。	同　上	岩永　雅也 稲垣　恭子

＝　岐路に立つ大学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　舘　　昭（桜美林大学教授）〕
〔主任講師：　岩永　雅也（放　送　大　学　教　授）〕

全体のねらい

世界の大学は、近代大学形成期以来の変革の時代を迎えている。わが国の大学もその例外ではない。これは明治期の近代大学導入以来の変革であり、知識社会化、グローバル化、情報化、少子高齢化などの社会変化とも深く結びついている。この講義では、こうした事態を教育政策論的及び教育社会学的な視点から把握し理解することを学ぶとともに、特に詳細な検討が必要なテーマについては、それらを各々取り上げ、実態に即した学習を進めていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	岐路に立つ大学	日本の大学が岐路に立つという意味を具体例とともに考察し、この授業科目全体の構成と視点を提示する。	舘　昭（桜美林大学教授）	舘　昭（桜美林大学教授） 岩永　雅也（放送大学教授）
2	社会変化と大学	知識社会化、グローバル化、情報化、少子高齢化など現在の社会変化と大学の関係、そこから提起される、改革課題について、教育、研究、社会サービスの諸機能、学部、大学院さらに短期課程の諸段階に即して考察する。	同　上	舘　昭
3	教養と自由学芸	日本で教養教育と理学、文学等の基礎学術とされる分野の展開を、世界的なリベラルアーツ（自由学芸）ととらえなおし、その展望を示す。	同　上	同　上
4	専門職教育	日本の大学で基礎的あるいは消費的学術との関係で曖昧な位置かれてきた職業教育の意義を、職業社会のプロ化の動向のもとで、法科大学院の構築など具体例とともに再確認する。	同　上	同　上
5	組織変革と評価	直面する課題に対応するための組織改革、改革を支援する評価システムのあり方について、国立大学の法人化や第三者評価システムの展開等の具体例に即して考察する。	同　上	同　上
6	大学の運営と財政	現代の大学は、ただ単に研究や教育の場の集積というだけにとどまらず、巨大な総合的組織体としての側面も有している。多くの雇用者と多額の資金を適正に配分しつつその事業を効果的に遂行するため、大学はどのような構造と機能を持っているのか、また、その管理運営と財政のあり方に、近年どのような変化が生じつつあるのかを検証する。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也
7	人材養成と労働市場	大学の持つ重要な社会的機能の一つに、高度かつ専門的な職業人の養成とその供給がある。そうした人材供給システムのあり方が大学教育の内容そのものを大きく規定している側面は否定できない。現在は、しかし大学による人材の養成と供給の意味も大きく変化しつつある。ここではその変動の内容と意義を明らかにしていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会への貢献	大学の使命は一般に「教育・研究・社会への貢献」の三者とされることが多い。このうち、社会への貢献については、とりわけわが国の場合、前二者に比して軽視される傾向が強かった。しかし、今日の日本社会は、社会と離れて存在する大学というものをもはや許さない状況にある。大学にとってますます重要なファクターとなりつつある社会への貢献を多角的に検討する。	岩永　雅也	岩永　雅也
9	変貌する大学教員	大学の変化に対応して、そこで教育・研究の活動を行う教員も大きな転換期に直面しているといえる。大学教員をめぐる社会的環境はどのように変化しつつあるのか。その変動を受けて、大学教員自身にはどういった変化が生じているのか、さまざまな視点からそれを検証していく。	同　上	同　上
10	授業評価とＦＤ	わが国の大学授業は、これまでほとんど評価の対象とされることがなく、したがってその結果をもとに授業の改善をはかるということも、組織的には行われてこなかった。しかし、大学の社会に対するアカウンタビリティや学生消費者主義の議論が活発になっていく中で、大学授業を聖域としたままでいることへの批判も高まってきている。次第に広まりつつある学生による授業評価と、その結果をもとに教員の授業力の開発（FD）を行おうという動きを検証する。	井下　理（慶應義塾大学教授）	井下　理（慶應義塾大学教授）
11	学生サービスと一年次教育	学生消費者主義という視点、つまり学生は師に教えを請うためでなく、そこで提供されるさまざまな教育サービスを享受するために大学へ来るのだという見方は近年ますます強まってきている。そのような視点からすれば、今日の大学教育の総体は学生サービスとして捉え直すことができる。ここでは特に初年次教育に注目しつつ、学生サービスの実際を詳細に見ていく。	山田　礼子（同志社大学教授）	山田　礼子（同志社大学教授）
12	入試と入学政策	限られた入学定員をめぐって志願者が互いに競争し、大学は彼らの中から合格者を一方的に選抜するという従来の状況は、18歳人口の減少と大学の増加によって大きく変化している。 そうした変化の中で、大学入試のあり方もこれまでとは異なったものとなっている。大学入試をめぐって、何がどう変わったのか、そして今後どうなっていくのかを検討する。	田中　義郎（玉川大学教授）	田中　義郎（玉川大学教授）
13	研究と大学	伝統的に大学の基本的な機能の一つとされてきた「研究」は、現在の大学でも特に重要な活動と見られている。とりわけ、1990 年代に進展したわが国の大学院重点化の動きは、大学における研究の重要性を再認識させる機会ともなった。ここでは、研究活動が持つ今日的な意味を検討し、その今後を展望する。	小林　信一（筑波大学助教授）	小林　信一（筑波大学助教授）
14	ＩＴと大学	今日、IT(情報通信技術)の発達にはめざましいものがある。そしてその効果は社会のあらゆる分野に及んでいる。大学教育ももちろんその例外ではない。大学では現在どのような IT 利用が行われているのか、また、そのことにいかなる社会的な意味があるのかといった諸点について考察する。	吉田　文（メディア教育開発センター教授）	吉田　文（メディア教育開発センター教授）
15	大学変革の課題	本講義で検討されてきたような大学をめぐる社会的環境の変化とそれに対応した大学自身の変化を踏まえ、現代の大学が向かうべき変革の目的とその方向、そして変革にともなって生じるであろうさまざまな問題について検討する。その上で、今後の大学改革の課題がどのようなものであるかを明らかにしていく。	岩永　雅也	岩永　雅也 舘　昭

＝　道徳教育論（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：新井郁男（放送大学教授）〕
〔主任講師：犬塚文雄（横浜国立大学教授）〕
〔主任講師：林　泰成（上越教育大学助教授）〕

全体のねらい

道徳性を身に付けることは、人間の発達における重要な課題の一つである。特に、青少年時代における道徳性を身に付けるための教育は、生涯学習の土台を形成するという意味において極めて重要である。この科目では、このような観点から、学校、家庭、地域という環境における道徳教育の実態、在り方、課題などについて考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	道徳教育の意義	道徳教育が現代社会において、どのような意味で重要であるのか、青少年の人間形成および社会の存続といった観点から考える。	新井　郁男（放送大学教授）	新井　郁男（放送大学教授） 犬塚　文雄（横浜国立大学教授） 林　泰成（上越教育大学助教授）
2	道徳教育の歴史	明治時代に近代的な学校制度が始まってから現在にいたるまで、日本の道徳教育はどのように変遷してきたのか。制度論や思想史などさまざまな観点から検討する。	林　泰成	林　泰成
3	学習指導要領と道徳教育	学校における道徳教育は、法的拘束力をもつと考えられる学習指導要領によってその目標や内容が定められている。その歴史的変遷と現行の学習指導要領の規定について考える。	同　上	同　上
4	道徳的社会化	社会が望ましいと考える価値観、態度などを個々人が内面化する過程としての社会化のメカニズムについて、社会学的な観点から検討する。	新井　郁男	新井　郁男
5	道徳性の発達	道徳性とは何か。また、それはどのように発達するのだろうか。ピアジェやコールバーグらの心理学的な研究に依拠して、そのメカニズムを検討する。	林　泰成	林　泰成

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	理性の道徳教育	学校において道徳の授業はどのように行われているのだろうか。具体的な道徳授業のやり方として、まず、道徳的判断力の育成を目指すモラルジレンマ授業を取り上げる。	林　泰成	林　泰成
7	感性の道徳教育	道徳授業でめざすべきものは判断力の育成だけではない。感性を育むこともまた重要視されなければならない。そこで、感情を育む方法として、感動資料を用いた道徳授業と、価値明確化による授業を検討する。	同　上	同　上
8	行動の道徳教育	道徳性は内面的なものであるととらえられるが、それを実践に結びつけるにはどうしたらよいのだろうか。具体的に行動のしかたを学ばせる必要はないだろうか。そうした指導法のひとつとして、モラル・スキル・トレーニングと、そこで用いられる技法としてのロール・プレイングについて検討する。	同　上	同　上
9	道徳教育と教育臨床	「始めにペーシング（子どもたちのペースに寄り添う）ありき」の観点から、思いやり行動を発揮することが困難な子どもたちの状況とその背景を明らかにし、道徳教育の目指す方向を具体的に提示する。	犬塚　文雄	犬塚　文雄
10	道徳教育と生徒指導	学校における道徳教育の主体である教師のマルトリートメント（不適切な関わり）が子どもたちの思いやり行動を育成する上で阻害要因となっている諸相と背景を明らかにし、その問題の解決策ともなるカウンセリングを基盤としたガイダンスの在り方を具体的に提示する。	同　上	同　上
11	道徳教育と特別活動	教師の不適切な関わりとならんで、子どもたちの思いやり行動を育成する上で阻害要因となっているピアプレッシャー（仲間関係における同調圧力）の諸相とその背景を明らかにし、特別活動において、ピアプレッシャーの緩和と思いやり行動育成を目指した集団行動として行われている実践の具体例を提示する。	同　上	同　上
12	道徳教育と教科・総合的な学習	道徳教育は道徳の時間だけに行われているものではない。教科の学習を行っているときにも、また、総合的な学習の時間にも、道徳教育的な働きかけは存在する。そのかかわりについて検討する。	林　泰成	林　泰成
13	道徳性と社会・文化	道徳性が社会や文化によってことなることを、日本の文化を「恥の文化」であるとしたルース・ベネディクトの『菊と刀』などを取り上げて、考える。	新井　郁男	新井　郁男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	地域・家庭における道徳教育	子どもたちは、学校においてだけでなく、家庭、地域において、また、テレビなどを通して、道徳性を身に付けたり、反道徳的、非道徳的な態度や行動を身につけたりしている。そのような様相を明らかにし、地域や家庭の道徳的教育力について考える。	新井　郁男	新井　郁男
15	道徳教育の課題と展望	第1回から第14回までの考察・検討などを踏まえて、道徳教育の課題を考え、これからの時代・社会における道徳教育を展望する。	新井　郁男	新井　郁男 犬塚　文雄 林　泰成

＝家庭・学校と地域社会（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　岡崎　友典（放送大学助教授）〕

全体のねらい

人間の成長・発達といった社会的な作用（教育）を中心的に担う学校と家庭そして人間の共同生活の場面としての「地域社会」との関係を、生涯学習・教育の視点から明らかにする。特に学校・家庭が地域の諸組織・機関との連携協力により、どのような形で地域社会形成の担い手（主体）を生み出しているかについて、地域の教育を社会学の手法を用いて研究してきた「地域教育社会学」の研究成果をもとに考察する。なお、放送教材（TV）では「学習テーマ」を出来るだけ具体的な事例に即して考察しているので、印刷教材と放送教材を並行させて学習してほしい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	地域社会の変動と教育（導入）～教育環境としての地域社会～	第二次世界大戦後の我が国の地域社会の変動と教育の関係について、地域開発政策の展開過程に即して、その特徴と教育上の課題を提示する。 教育環境としての地域と「家庭・学校」との関係について、研究上の枠組みを提示し、また具体的な事例を通して全体の構成を紹介する。	岡崎　友典（放送大学助教授）	岡崎　友典（放送大学助教授）
2	ライフステージによる学習・教育～ゆりかごから墓場まで～	産業構造の転換により、人々の生活様式（ライフスタイル）が大きく変容するなかで、ライフステージに即した学習・教育の課題は何かについて考察する。家族周期と個人のライフコースの視点から、就学前の教育・保育から高齢者学級などの生涯教育・学習まで、具体的な事例に即して考察する	同　上	同　上
3	家族・親子関係と世代の交代～地域間・世代間の交流～	家族規模の縮小と形態の変化に伴い、家庭のもつ養育・教育機能に変化が見られる。次世代を育てるために地域社会が果たす役割について、山村留学の実践と郷土芸能の伝承形態の事例を通して検討する	同　上	同　上
4	家庭の福祉と教育の役割～福祉施設と教育～	地域の福祉と教育の関係について、家族のもつ教育機能の視点から考察する。とくに児童養護施設、母子生活支援施設、介護施設などの具体的な場面・実践に即し分析し、教育と福祉と境界領域におけるを課題を探る。	同　上	同　上
5	学校の統合・新設と学区　～教育の機会をめぐって～	人口の分布変動に伴う学校の統合と新設の問題を通して、地域社会にとって学校が果たす役割と機能について考察する。統廃合と小規模校、僻地・複式学級の学習形態についても検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	地域教育の創造～開かれた学校と地域づくり～	近代の公教育の学校の成立と発展の歴史をたどるとともに、学校教育の目標を達成するための教育実践が、地域どのような形で連携・協力できるかについてについて「地域教育」の概念を用いて明らかにする。	岡崎　友典	岡崎　友典
7	PTAと地域住民組織～学校と地域を結ぶ役割～	教職員と保護者によって組織されるPTAを、子どもを媒介に成立する成人の学習組織と捉え、さらに保護者が地域社会の中堅世代として地域社会形成に主要な役割を担うといった視点から、大人の教育責任について検討する。	同　上	同　上
8	教育内容と地域社会　～地域社会に生きる子ども～	公教育の学校のだけでなく、社会教育・生涯学習をも含め、地域社会の担い手を養成するためにどのような教育内容・教育課程（カリキュラム）が求められているかについて考察する。	同　上	同　上
9	人材の養成と移動～職能形成の過程～	社会人としての能力とくに職業人としての能力（職能）形成が、学校教育を土台としてどのような過程を経てなされるかについて、義務教育学校終了後の個人のライフコースに沿って具体的な形態・内容について検討する。	同　上	同　上
10	地域社会の活性化と教育事業～観光と産業～	地域社会がその社会的・自然的条件を生かして「自治体」としての活性化を目指して、全国各地で貴重な実践がなされている。その（1）では、都市と農村の交流事業が、地域社会の教育機能を最大限に利用して行われている事例を分析する。定住人口と交流人口を確保することにより、地域の産業を活性化させうえで、教育の果たす役割について検討する。	同　上	同　上
11	地域社会の国際化と教育	教育の国際化が地域社会レベルでどのような形で進行しているか。西欧の学校をモデルとした学校、フリースクール、国際交流事業を通して考察する。	同　上	同　上
12	地域社会の再編と住民の交流　～郷土芸能・祭りの果たす役割～	急激な人口の分布変動にともなって、地域住民の構成が大きく変化している。地域社会のもつ人間形成機能（教育）は、住民の人間関係を基盤として発揮されるといった視点から、住民の交流・融和がどのような形で図られているかについて考察する	同　上	同　上
13	地域文化の創造と継承（1）　～文学と教育～	地域社会の人々の生活文化がどのような形で創造され、また継承されるかを考察する。生活文化の概念を明示し、地方自治体レベルでどのような施策・態勢が考えられるかについて、2回に分けて考察する。 （1）　文学記念館と郷土詩の事例を通して検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	地域文化の創造と継承（2） ～地場産業と教育～	（2） 地域の「産業」としての家具製造業と伝統工芸の事例を通して検討する。	岡崎 友典	岡崎 友典
15	学習社会の成立と教育の課題（まとめ）	全体のまとめ。現代社会を学習社会といった社会類型として捉えるとき、地域社会でなされる教育がどのような形態をとるかについて、各回で提示した市町村レベルでの事例を要約し、今後の研究上の課題を提起する。	同 上	同 上

＝国際化と教育（‘０３）＝（Ｒ）

－異文化間教育学の視点から

〔主任講師：　佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

本書は、国際化の進展とともに必然化する異文化間教育を主題にする。異文化間教育とは、２つ以上の相異なる文化の狭間で展開する教育ないし人間形成の過程・活動を意味している。本書では、日本の異文化間教育の具体的な事例の考察をふまえて異文化間教育の研究と実践の課題について多角的に明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	国際化と教育	国際化、とりわけグローバリゼーションの進化とともに教育研究の枠組みの再考が求められていることを示す。特に、文化間移動に伴う人間発達の過程や諸相をとらえていくためには、異文化間教育研究が必要なことを明らかにする。	佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）	佐藤　郡衛（東京学芸大学教授）
2	異文化理解の教育	文化のグローバル化がもたらす状況、文化間の対立などを考察しつつ、同時に文化間の相互理解が可能かについて検討する。その上で、異文化間教育研究における文化概念について考察する。	同　上	同　上
3	日本の異文化間教育とその視点	異文化間教育のキー概念である異文化接触を取り上げる。ついで、具体的な事例をもとに日本の異文化間教育の概要を説明するとともに、異文化間教育の枠組みやその視点を明らかにする。	同　上	同　上
4	異文化体験と教育	異文化接触や異文化適応を客観的にとらえるだけでなく、異文化を経験する主体としてそこに参加している個人の側からとらえる。海外で生活する日本の子ども、帰国した子ども、さらに日本に在住する外国人の子どもの異文化体験と成人の異文化体験を取り上げその具体的な過程と特質を明らかにする。	同　上	同　上
5	学校における多文化共生	日本の学校の多国籍化、多民族化、多文化化について触れ、日本の学校で展開している多文化共生の取り組みについて考察する。その上で、学校における多文化共生の実現に向けた問題点と課題を提示する。	同　上	同　上
6	教育国際交流	教育の国際交流活動を取り上げる。特に、学校における国際交流活動、教員の国際交流、大学の国際交流に焦点化し、現状と問題点、今後の課題を考察する。大学の国際交流については、留学生を対象にして、留学生の受け入れが大学の国際化に結びつくか、そして留学生の支援のあり方などについて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	地域における国際化	地域の国際化に焦点をあてる。地域コミュニティを基盤にして、異文化をもつ人との接触をどのように地域コミュニティの課題に取り込み、それがまちづくりや地域住民の意識の変容にどのように転化していくかについて考察する。	佐藤　郡衛	佐藤　郡衛
8	多文化共生の教育	日本における国際理解教育の発展の軌跡を跡づけながら、国際理解教育の転換が迫られていることを示す。それは、「国際」から「文化際」や「人間際」の教育への転換といえる。その上で、多文化共生に向けた教育の課題について考察する。	同　上	同　上
9	グローバルな教育の取り組み	国際共同教育事業としての開発途上国への教育援助・協力の問題を南北問題との関連で考察する。ついで、今後、ますます重要視されるグローバルな教育の取り組みについてもその必要性と課題について、教育の NGO、NPO などの事例をもとに検討する。	同　上	同　上
10	異文化間教育とアイデンティティ	異文化間教育においてなぜアイデンティティが問題になるかを考察する。具体的には、アイデンティティ形成に及ぼす異文化接触の影響、文化とアイデンティティなどの問題について考察する。 そして、固定的で複合的なアイデンティティから、多元的なアイデンティティへり流れを検証する。	同　上	同　上
11	異文化間コミュニケーション	異文化間コミュニケーションが異文化への適応過程や異文化間教育における相互作用過程の中心的テーマであることを示す。ついで、「異文化間リテラシー」という概念を提案し、今後の共生社会においてどのような資質が必要かを考察する。	同　上	同　上
12	異文化間教育と第二言語	異文化接触と言語について取り上げる。異文化間教育では、第二言語の習得が大きな課題になるがその教育の実情と問題点について考察する。特に、第二言語としての日本語教育に焦点をあててその現状と課題について検討する。	同　上	同　上
13	異文化間教育と地域ネットワーキング	ネットワーク論を基礎にして、生活の場である地域社会における多文化共生の取り組みについて取り上げる。具体的には、多文化共生を可能にするネットワーキングのあり方について、現実に展開されている外国籍の人に対する日本語ボランティアを事例に考察する。	同　上	同　上
14	異文化間教育の研究方法	異文化間教育の研究方法を検討する。国際化に関わる教育事象をどのような方法でとらえていくかを具体的な事例にそくして概説する。特に、異文化間教育研究の研究方法として、構築主義とエスノグラフィを中心に検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	異文化間教育の課題	講義のまとめとして、これからの異文化間教育の課題を理論と実践の両面から総合的に検討する。とりわけ、異文化間教育が普及・拡散してきた現状の中で、異文化間教育の独自性をどこに求めるかが課題になってきた。このことを踏まえ、異文化間教育の「学」としての自立化について検討する。	佐藤　郡衛	佐藤　郡衛

＝比較教育制度論（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　新井　郁男（放送大学教授）〕
〔主任講師：　二宮　　皓（広島大学教授）〕

全体のねらい

世界各国の学校教育を中心にした制度一法的制度だけでなく慣行的な制度も含めて一の特色を、我が国との比較を念頭に置いて、歴史的、社会的、文化的背景の文脈に位置づけながら考察する。特に、義務教育の在り方、学校段階間の接続関係（選抜の問題）、地域との関係などの視点を重視する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総論１ わが国の学校改革にみる外国教育受容の特質と課題	明治時代以降、わが国が欧米の教育制度からいかに学んできたかを考察し、今後の課題を考える。	新井　郁男（放送大学教授）	新井　郁男（放送大学教授）
2	総論２ 比較教育学の歴史と現状	比較教育の意義について、その歴史と現状について述べる。	二宮　皓（広島大学教授）	二宮　皓（広島大学教授）
3	アメリカの教育制度１	アメリカの初等・中等教育制度が児童生徒の発達に対応する柔軟なシステムを発達させていることを考察する。	新井　郁男（放送大学教授）	新井　郁男（放送大学教授）
4	アメリカの教育制度２	アメリカの高等教育制度が社会人にどのように開かれているかを考察する。	二宮　皓（広島大学教授）	二宮　皓（広島大学教授）
5	イギリスの教育制度１	イギリスの初等・中等教育制度が児童生徒の能力・適性などにどのように対応しているかについて考察する。	宮腰　英一（東北大学教授）	宮腰　英一（東北大学教授）
6	イギリスの教育制度２	イギリスの高等教育の制度を大学拡張の面にも注目して考察する。また、継続教育についてもふれる。	宮腰　英一（東北大学教授）	宮腰　英一（東北大学教授）
7	ドイツの教育制度１	ドイツの初等・中等教育制度が児童生徒の能力・適性にどのように対応しているかについて考察する。	長島　啓記（早稲田大学助教授）	長島　啓記（早稲田大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ドイツの教育制度2	ドイツの高等教育制度の動向を社会人への開放という面にも注目して考察する。	長島　啓記（早稲田大学助教授）	長島　啓記（早稲田大学助教授）
9	フランスの教育制度1	フランスの初等・中等教育制度が児童生徒の能力・適性にどのように対応しているかについて考察する。	藤井　佐和子（宇都宮大学教授）	藤井　佐和子（宇都宮大学教授）
10	フランスの教育制度2	フランスの高等教育制度の動向を社会人への開放という面にも注目して考察する。	同　上	同　上
11	ロシアの教育制度1	ロシアの初等・中等教育制度が児童生徒のキャリアとどのように結びついているかについて考察する。	澤野由紀子（国立教育政策研究所総括研究官）	澤野由紀子（国立教育政策研究所総括研究官）
12	ロシアの教育制度2	ロシアの高等教育制度が労働世界とどのように結びついているかについて考察する。	同　上	同　上
13	韓国の教育制度1	韓国の初等・中等教育制度が児童生徒の能力・適性とどのように対応しているかについて考察する。	朴　聖雨（プール学院大学教授）	朴　聖雨（プール学院大学教授）
14	韓国の教育制度2	韓国の高等教育制度について、社会人への開放という面にも注目して考察する。	朴　聖雨（プール学院大学教授）	朴　聖雨（プール学院大学教授）
15	脱学校制度論	現代の学校制度を解体すべきだとする脱学校制度論について考察する。	新井　郁男（放送大学教授）	新井　郁男（放送大学教授）

＝学習科学とテクノロジ（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　三宅　なほみ（中京大学教授）〕

全体のねらい

学習科学（Learning sciences）は、人々が互いに理解を深め合う協調的な学習環境をテクノロジを駆使してデザインし、実践的に学習理論作りを進める新しい学問分野である。先進的な研究・開発に取り組んでいる研究者たちの考え方やカリキュラム構成の実際を現地に取材した生の声から紹介し、それらを検討しながらそこに含まれる学びの理論の本質に迫る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学びを見直す	「人は生きてゆくために問題を解決しながら経験を積み社会的に知識を精錬させてゆく」とする協調的な学習観を基に、学習とは何か、学習の転移はどのように起きるか、学習はどう動機付けられているかなど、学習科学の基礎を紹介しつつ，学習科学の先導的な研究者たちが何を目指して実践的な研究を進めているのか、１５回で取り上げる内容を概観する。	三宅　なほみ（中京大学教授） 白水　始（中京大学講師）	三宅　なほみ（中京大学教授） 白水　始（中京大学講師）
2	協調学習という考え方	協調的な学習観では，人は互いに自分たちの考えていることや分かったことを他人に説明し、自分と他人の考えを比較しながら各々自分の知識を作り変えることによって賢くなると考える。人の学習過程についてのどんな研究からこのような学習観が支持されるのか、協調学習の基礎とそれを支援するテクノロジの役割を検討する。	同　上	同　上
3	掲示板による協調学習	電子掲示板は協調的な学習を展開するための基本的な機能を備えている。互いの考え方を確かめ合い、自分たちが何を学ぶべきかを確認しながら学ぶCSILE/KF（コンピュータによる意図的学習支援環境／知識フォーラム）を利用した実践を紹介し、協調学習過程の基本的な学習過程を検討する。	同　上	同　上
4	マイクロワールドの利用	マルチメディア技術を駆使してマイクロワールドを設定しその中に答えが一つではない問題を用意して、学習者が協調的に問題を解くことによって学習する環境を作ることができる。その典型例 としてJasper プロジェクトを紹介し、学習への動機付け、自己学習管理能力の育成について考察する。	同　上	同　上
5	デザイン研究	学習科学ではデザイン研究と呼ばれる新しい実践的な研究方法が重視される。効果の期待できる新しい学習環境を作り授業を実践して、何がうまくいったのかを分析し、その経験を活かしてさらに実践と評価を繰返す。３回、４回で取り上げた実践研究を振返りながらデザイン研究の実態を検討し、６回目以降の着目点を整理する。	同　上	同　上
6	科学的な考え方を日常化する	科学教育に成果を上げている WISE（ウェブ統合型科学教育）プロジェクトについて、背景理念とカリキュラム構成を追う。生徒がどのように情報を整理して現実社会に役立つ理解につなげる工夫がなされているのかを分析し、情報の編集や吟味の学習にテクノロジが果たす役割を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	パートナーシップという考え方	WISE では web を、情報源としてだけでなく、学習者が学んだ結果を確かめる吟味の場として、また教員が自らの授業のために教材を共有し作り変える支援の場として活用している。学習環境を広く開放して科学者－研究者－教師－学習者をつなごうとする WISE の「パートナーシップ」という考え方を検討する。	三宅　なほみ 白水　始	三宅　なほみ 白水　始
8	科学する技術を身につける	「動くもの」や「考えをはっきりさせるための模型」を作ることを通して物理や地学を学ぶ LBD(デザインによる学習)プロジェクトでは、ものを作る過程に内在する外化や再吟味のチャンスをうまく生かして学習者間の学び合いや理解深化を促している。LBD について、科学的内容だけでなく、科学する技術を習得させる様々な工夫に焦点を当てて紹介する。	同　上	同　上
9	協調学習への足場掛け	LBD には、協調学習そのものに対する積極的な態度を涵養する準備活動（Launcher project）が設けられている。その過程を詳しく追い、協調学習の原理そのものを学習者に理解させようとする長期にわたる足場掛けや協調的な吟味のためのコミュニティ作りに向けた学習科学の新しい方向を検討する。	同　上	同　上
10	科学的な問いを問う	シカゴやデトロイトの公立中学校を対象に科学教育のレベルアップを狙った LeTUS プロジェクトでは、科学教育の究極の目的を「科学的問いを学生が自分たちで作り出し、データを駆使して自分たちなりの答えを求められること」に据える。LeTUS のカリキュラムを紹介し、その可能性を検討する。	同　上	同　上
11	世界のモデルを作る	LeTUS の学習目標は、学生が自分たちで世界のモデルを作ることでもある。LeTUS が提供する学習支援ソフトには、モデルつくりを支援するためのさまざまな仕掛けが組み込まれている。モデルつくりに関する認知科学的な研究例にも触れながら、６回から１１回を振返り、科学教育の目標を再検討する。	同　上	同　上
12	学習コミュニティの形成へ	CSILE、Jasper、WISE、LBD、LeTUS とここで取り上げてきたプロジェクトは、個々の学習者の理解だけでなく、それぞれ少しずつ強調点は異なるものの、いずれも学習者を取り巻く大人社会全体が知的に創造的であるような学習コミュニティの形成を目指している。それらを概観しつつ、「持続性の高いコミュニティ」について考察する。	同　上	同　上
13	共有、再吟味のためのテクノロジ	様々な協調的な学習環境で、テクノロジは、学習者一人一人の考えていることを外界にうまく表現し、他人の考え方と比較吟味して自分の考えを作り直す過程を支援していた。研究の現場ではさらに新しい技術の利用が検討されている。将来を見越して学習科学にテクノロジが果たす役割をまとめる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	学習の評価	人が一生学び続けるためには、必要な情報を的確に探しそれらを統合して自分の考えを作り、他人と協調的に深化させるための知力が必要になる。学習科学研究の成果としては、そのような将来にわたって有効な知力がどこまで育成されたかが評価されるべきだろう。学習科学に必要な新しい学習評価のあり方を、取り上げたプロジェクトを参考に考察する。	三宅　なほみ 白　水　　始	三宅　なほみ 白　水　　始
15	これからの課題	１４回を振返って学習科学が見出してきた知見と研究テーマを整理し、これからの課題を展望する。学習科学は、実践をデータに学習の理論作りを目指している。学習の目標をどう設定するか、学習環境をデザインするための指針にはどのようなものがあり得るか、学習についての一般的なモデルをどう立てるかなど、これからの研究テーマを検討する。	同　上	三宅　なほみ 白　水　　始 波多野　誼余夫（放送大学教授）

＝生涯学習と自己実現（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　麻生　誠（東京女学館大学学長）〕
〔主任講師：　堀　薫夫（大阪教育大学教授）〕

全体のねらい

生涯学習はライフによって統合された学習である。ライフには生涯・生活とともに生命という意味がある。そして人間の生命が躍動する状態を自己実現ということがある。

では、生涯学習の問題を、人間の自己実現という視点からながめるとどのように見えてくるのであろうか。自己実現論からみた生涯学習論を生涯学習論のかかえる今日的諸課題の検討とともに考えていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯学習の理念	生涯学習がどのような学習観や教育観にささえられてきたのかを、ラングランやジェルピの説などを参照しつつ考えていこう。	麻生　誠（東京女学館大学学長）	麻生　誠（東京女学館大学学長）
2	人間の成長と生涯学習の原理：生涯学習の生物的側面	人間の成長の本質と生涯学習の原理を、生物としての人間が環境に適応していく営みにまでさかのぼって考えてみる。生物的に見ても、生涯学習は人間にとって本質的な営みであるということを述べていきたい。	堀　薫夫（大阪教育大学教授）	堀　薫夫（大阪教育大学教授）
3	人間の経験と生涯学習	生涯学習、とくに成人期以降の人たちにとっては、人間の経験がその貴重な資源となる。では、生涯学習論においてはこの人間の経験の問題はどう位置づけられているのであろうか。デューイや森有正らの経験論からこの問題にこだわってみよう。	同　上	同　上
4	生涯発達とエイジング	経験の変容からの学習は、生涯にわたる成長・発達をめざすものである。ここでは、生涯発達の概念を、エイジングの問題と重ね合わせて考えていく。そして、自己実現としての生涯発達の考え方に注目していく。	同　上	同　上
5	知的能力の変化をめぐって	生涯発達と生涯学習を結ぶひとつの視点は「成人期以降の学習能力の変化」の問題である。「流動性知力と結晶性知力」「知力のメカニクスとプラグマティクス」といった考え方をもとに、成人期以降の学習能力の変化に目を向けてみる。あわせて自己実現に近い概念でもある「知恵」の問題も考えていく。	同　上	同　上
6	高齢者の学習の成立条件	生涯学習と生涯発達の完成期である高齢期の学習のあり方を考えていく。高齢期における学習が、人生の他の時期における学習とどう違うのであろうか。その特徴をいくつかのデータをもとに議論していく。	同　上	同　上
7	死への準備教育	生涯学習の問題をデス・エデュケーション（死への準備教育）の観点からとらえてみよう。人間の死は、「老いや病と結びついた死」と「社会や文化と結びついた死（事故死、他殺など）」とに大きく分けられる。それぞれの視点と教育の視点を結びつけるとどうなるか、考えてみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生きがいと自己実現（1）人間的欲求の解放	本放送のひとつの柱である自己実現の問題を「人間的欲求の解放」という点を軸にして考えていこう。マズローやフロムらの古典的人間観にさかのぼりつつ、人間的欲求とは何かについて考えていく。	堀　薫夫	堀　薫夫
9	生きがいと自己実現（2）意味への意志	ここでは自己実現の問題を「意味への意思」という概念から考えていく。この言葉は、ヴィクトール・フランクルの提唱した概念であるが、カールソンやカーネギーらの啓蒙的な著作のなかにもこの視点がうかがわれるように思う。人生の意味づけとしての自己実現の問題を考えていきたい。	同　上	同　上
10	成人の特性を活かした学習援助論	生涯学習の中核を占めるのは成人教育であろう。ここでは、成人教育を成人の特性を活かした教育＝アンドラゴジーととらえたうえで、アメリカにおいてこの理論が指摘したことと、その発展可能性を考えてみよう。	同　上	同　上
11	生涯学習における学習者像	生涯学習論においては、1980 年代からは学習者や参加者の視点に立つ生涯学習という考え方が普及してきた。クラントンやアーノルドらの説をふまえつつ、参加型生涯学習の可能性を考えていきたい。	三輪　建二（お茶の水女子大学教授）	三輪　建二（お茶の水女子大学教授）
12	欧米諸国の生涯学習	ユネスコなどの国際機関、アメリカ、ヨーロッパにおける生涯学習論の特徴と動向を整理し、そこからわが国の生涯学習論への示唆を考えていこう。	同　上	同　上
13	生涯学習の日本的ルーツ	ややもすると看過されがちなわが国の「学び」の原型、および成人が生涯にわたって学び続けるという日本の伝統に関して、それらのプロトタイプとしての先人達の足跡をたどりながら、理解を深めていく。さらに、いわゆる「学ぶ心」といった精神についても考察を深める。	麻生　誠	麻生　誠
14	補償としての生涯学習	成人教育は、今日でも生涯学習の重要な要素の一つである。かつて成人教育の中心的課題であった「過去に剥奪された学習機会の補償」という側面は、確かに近年は後退の傾向にあるものの、現在なお各地で意欲的な取り組みを見ることができる。関西地区における夜間中学の教育実践を通してその現状を知り、さらにその背景や課題についても理解を深める。	麻生　誠 梅田　幸二（奈良市立春日中学校教諭）	麻生　誠 梅田　幸二（奈良市立春日中学校教諭）
15	生涯学習社会の近未来	近年の生涯学習関連の政策や実践の動向のなかには、生涯学習社会への展望を示す重要な問題が示されているであろう。人びとの自己実現を保障する生涯学習社会はありうるのか、近未来を展望してみよう。	麻生　誠 堀　薫夫 三輪　建二	麻生　誠 堀　薫夫 三輪　建二

＝障害児教育論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　大南　英明　（帝京大学教授）〕
〔主任講師：　緒方　明子　（明治学院大学教授）〕

全体のねらい

我が国の特別支援教育－特殊教育（障害児教育）－について、制度、歴史、教育の実際、目指すもの等を知的障害教育を中心に解説、説明する。障害児者の社会参加・自立を支援し、共生の考えを十分に身に付けるようにする。そのため、障害児及びその教育に対する理解と認識を深めるようにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	我が国の学校教育制度における特別支援教育－特殊教育－	我が国の特別支援教育－特殊教育（障害児教育）－は、盲学校、聾学校、養護学校及び小学校、中学校に設置されている特殊学級、通級による指導等により行われている。特殊教育の制度、現状等について解説する。	大南　英明（帝京大学教授）	大南　英明（帝京大学教授）
2	知的障害教育の歴史	1945 年以降の知的障害教育を中心に紹介する。知的障害教育は、特殊学級における教育からスタートしている。1979 年（昭和 54 年）養護学校教育の義務制の実施前後より、養護学校における教育、とくに高等部における教育が充実されてきている。	同　上	同　上
3	知的障害教育が目指しているもの	国際障害者年（1981）前後より障害者の完全参加と平等が、強く叫ばれ、障害者の社会参加・自立に向けた様々な取り組みが行われている。知的障害教育においては、一人一人の児童生徒が、「生きる力」を身に付けることを長年にわたり目指している。	同　上	同　上
4	障害児の理解Ⅰ	教育課程を編成し、指導計画を作成し、授業を展開するには、障害のある児童生徒を正しく理解することが大切である。 児童生徒と相対しながら、児童生徒理解を進める観点、方法などについて説明する。	緒方　明子（明治学院大学教授）	緒方　明子（明治学院大学教授）
5	障害児の理解Ⅱ	障害のない児童生徒と障害のある児童生徒とを理解する観点、内容、方法等について、共通点、障害のある児童生徒を理解するための配慮などについて、具体例をあげながら説明する。	同　上	同　上
6	障害児の理解Ⅲ	知能検査、発達検査、心理的アセスメントにより得た情報、資料を障害児の理解にどのように活用し、授業、具体的な指導、支援にいかしていくか等について説明する。	同　上	同　上
7	個別の指導計画の作成Ⅰ	海外からの情報等により、我が国においても個別の指導計画について関心が高まっている。盲学校、聾学校及び養護学校の学習指導要領においては、重複障害児の指導、自立活動の指導について、個別の指導計画による指導を求めている。その意義、ねらいを解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	個別の指導計画の作成Ⅱ	個別の指導計画を作成し、指導することは必ずしも１対１の指導だけを意味するものではない。指導の個別化と集団での指導との関係についても説明する。	緒方　明子	緒方　明子
9	交流教育	障害のある児童生徒との交流は、障害のない児童生徒が、障害のある児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深める絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場である。	同上	同上
10	養護学校における教育Ⅰ	知的障害養護学校小学部・中学部の教育の実際を紹介しながら、教育課程編成の基本的な考え方、指導計画の作成等について説明する。 教材・教具の開発、工夫、指導体制等についてもふれる。	大南　英明	大南　英明
11	養護学校における教育Ⅱ	知的障害養護学校高等部の教育について、具体例を紹介する。 職業教育、進路指導（進路支援）等、学校と地域社会、関係機関との連携について説明する。	同上	同上
12	特殊学級における教育Ⅰ	知的障害特殊学級の教育の実際を紹介し、教育課程の編成、指導計画の作成、通常の学級との交流、他校の学級との合同学習等について説明する。	同上	同上
13	特殊学級における教育Ⅱ	学校経営における特殊学級の位置づけ、教職員の連携、協力、設置校における「総合的な学習の時間」の活動等について、具体例を紹介しながら説明する。	同上	同上
14	諸外国における知的障害教育	我が国の知的障害教育に影響を及ぼしている海外の知的障害教育の現状を紹介する。	緒方　明子	緒方　明子
15	知的障害教育の今日的課題	教育課程の編成、個別の指導計画の作成、施設・設備、教員の採用・研修、養護学校と特殊学級との連携、協力等、知的障害教育の今日的課題について解説する。	大南　英明	大南　英明

＝障害児教育指導法（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　太田　俊己（千葉大学教授）〕
〔主任講師：　宮﨑　英憲（東洋大学教授）〕
〔主任講師：　中坪　晃一（植草学園短期大学教授）〕

全体のねらい

知的障害へのさまざまな教育指導法を中心に、教育課程、進路指導、また自閉症および学習障害、重複障害への対応について幅広くふれ、障害児教育指導のための理論と実践を学ぶ。養護学校、小学校特殊学級での実際の映像を多く紹介し、実践的に学習することができる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	知的障害教育の教育課程　①	知的障害養護学校における教育課程編成の特色と考え方などについて、映像や実際の例を交えて解説する。	宮﨑　英憲（東洋大学教授）	宮﨑　英憲（東洋大学教授）
2	知的障害教育の教育課程　②	知的障害養護学校や知的障害特殊学級における教育課程の編成と指導計画立案などについて、映像や実際の例を交え解説する。	同　上	同　上
3	知的障害の特徴と指導のあり方	知的障害の障害特徴と指導についての考え方、その具体としての実際の生活に即した対応の重要性、教科等の内容に分けずに指導する授業（領域・教科を合わせた指導）の意義や実際などについて解説する。	太田　俊己（千葉大学教授）	太田　俊己（千葉大学教授）
4	生活単元学習　①－特色と指導計画	知的障害教育で広く行われている「合わせた指導」の代表的な指導形態である生活単元学習を取り上げる。その意義特色および指導計画例などについて実際の映像をまじえ述べる。	同　上	同　上
5	生活単元学習　②－実践の方法	生活単元学習に取り組む際の実践方法、および実践上の要点などについて、実践例を映像等で紹介しながら説明する。	同　上	同　上
6	作業学習　①－特色と指導計画	知的障害養護学校中学部・高等部や中学校知的障害特殊学級で一般的に行われている、「合わせた指導」の一つである作業学習を取り上げる。その特色および指導計画例などについて映像での紹介もまじえ述べる。	中坪　晃一（植草学園短期大学教授）	中坪　晃一（植草学園短期大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	作業学習　② ー実践の方法	作業学習に取り組む際の実践方法、および実践上の要点などについて、映像で実践例を紹介しながら説明する。	中坪　晃一	中坪　晃一
8	遊びの指導	知的障害養護学校小学部で主に行われる、「領域・教科を合わせた指導」の一つである遊びの指導を取り上げる。ここでは実践例の紹介を含め、その意義特色および実践方法などについて映像をまじえて述べる。	太田　俊己	太田　俊己
9	日常生活の指導	日常生活習慣への対応も含む日常生活の指導は、「領域・教科を合わせた指導」の一つとして、知的障害養護学校、知的障害特殊学級で広く取り組まれている。ここでは実践例の紹介も含め、その特色および実践方法などについて映像をまじえ述べる。	石塚　謙二（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特殊教育調査官）	石塚　謙二（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課特殊教育調査官）
10	教科別の指導　①	知的障害教育の中で、時間を特設して教科の内容を指導する教科別の指導を取り上げる。実践例の紹介も含め、望ましい指導のあり方、指導計画、実践する上での要点などについて映像も入れながら解説する。	大南　英明（帝京大学教授）	大南　英明（帝京大学教授）
11	教科別の指導　②	教科別の指導の実践例を紹介し、知的障害教育で教科別の指導を行う際の実践方法、工夫、教材例、授業づくりなどについて映像も入れながら解説する。	同　上	同　上
12	進路への指導	知的障害の子どもの学齢期ならびに卒業後の進路についての考え方、および進路指導のあり方と実際などについて具体例や資料をあげながら取り上げる。	宮﨑　英憲	宮﨑　英憲
13	自閉症への対応	養護学校や特殊学級に多く在籍する自閉症の子どもへの対応を取り上げる。その障害の状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて映像をまじえて具体的に解説する。	肥後　祥治（熊本大学助教授）	肥後　祥治（熊本大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	学習障害等への対応	近年、教育現場で話題となっている学習障害（LD）、注意欠陥多動性障害(ADHD)などの子どもへの対応を取り上げる。これらの状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて映像をまじえながら解説する。	柘植　雅義（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官）	柘植　雅義（文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 特別支援教育調査官）
15	重複障害への対応	養護学校を中心にその数が増している重複障害の子どもへの対応について、その障害の状態、指導に関する考え方、および実際の対応方法などについて映像をまじえながら解説する。	川住　隆一（東北大学教授）	川住　隆一（東北大学教授）

＝幼児の教育と保育（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　林　　信二郎（埼玉大学教授）〕
〔主任講師：　岡崎　友典　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

すべての子どもは、家庭に生まれ、地域との接触をもちつつ、その多くが保育所か幼稚園をも生活の場として幼児期を過ごす。未成熟という発達的特徴をもつ幼児期には、養護と教育が一体となって進められなければならない。それらの場がそこで生活し育つ幼児自身にとって望ましい生育環境としてあるためにはどのような発達条件が整なうことが必要かを考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	幼児を育てること	まず、幼児を育てることにかかわる用語としての保育と教育についての概念を整理する。次いで、幼児期には何を育てるべきかをめぐっての様々な立場からの願いを、育つ主体である幼児の立場をも視点において取り上げる。	林　信二郎（埼玉大学教授） 岡崎　友典（放送大学助教授）	林　信二郎（埼玉大学教授） 岡崎　友典（放送大学助教授）
2	幼児期の発達的特徴と保育	幼児期の教育・保育のあり方を特色づけるものは、その発達的特徴によるところが大きい。発達とは何か、幼児期の発達的特徴をいかにとらえるべきか、幼児期の発達の課題と保育、幼児教育の方法的特質などを取り上げる。	林　信二郎	林　信二郎
3	家庭での生活とそこでの育ち	現代の家族はその構造、機能の両面にわたって大きな変化を経験している。母親の役割、父親の役割、しつけ、育児不安と過保護、母親による管理など、家庭における子育ての現状と課題、望まれる在り方などを取り上げる。	岡崎　友典	岡崎　友典
4	幼稚園教育の特質	意図的教育の場としての幼稚園が幼児に対してどのような生活の場として用意されているのかを、その目的、内容、方法から明らかにする。合わせて、幼稚園教育の現状が多様な姿で存在していることの実態を明らかにし、その問題点をも取り上げる。	林　信二郎	林　信二郎
5	保育所保育の特質	児童福祉施設としての保育所が乳幼児に対してどのような生活の場として用意されているのかを、その目的、内容、方法から明らかにする。合わせて、保育所の源流と課題、社会事象としての保育所の役割についても取り上げる。	同　上	同　上
6	地域と幼児の生活	幼児の生活の場の一つである地域社会が変容してきた姿を明らかにし、現在子どもたちがそこでどのような育ちをしているのかを、子どもたちの遊び環境の様子から、プレーパークなどの具体的事例などを取り上げる。	岡崎　友典	岡崎　友典
7	環境を通しての教育	幼児教育の基本とされている「環境を通して」行うという間接教育の原理の意味するものを明らかにし、幼児を取り巻く環境の変化を捉え、保育における環境構成のあり方を、物的、人的、空間的、雰囲気的などから取り上げ考察する。	林　信二郎	林　信二郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	遊びを通しての教育	幼児の生活の極めて大きな部分を占める遊びのもつ意味を、遊びをめぐる諸理論や実際の姿から、子どもはなぜ遊ぶのか、遊びを成立させるものは何か、遊びを豊かにし、成長発達的意味をもつものとするにはどのような配慮が必要かなどを取り上げる。	林　信二郎	林　信二郎
9	幼児教育の遺産(西欧、日本)	幼児期の教育・保育を考えるに当たって、その歴史から学べるものが少なくない。幼児期の教育のあり方を系統的に論じ、その基礎付けをした先駆者と、そのもつ教育思想を実践し、幼児教育施設を開設した先駆者たちを取り上げる。	同　上	同　上
10	幼児を理解するということ	指導にあたって、幼児理解が不可欠であるにとどまらず、真の理解はすでに優れた指導である。どのような幼児観、子ども理解をもつかは、その保育のあり方を大きく左右する。良さを見取る目を大切にしつつ幼児理解のあり方を取り上げる。	同　上	同　上
11	望ましい保育者の資質とは	保育者の役割の取り方をめぐっては、その指導性を強く求める立場と、それを控えて見守るべきとする立場とがある。保育をする者に求められるものとは何か、保育者論とその専門性などについて、特性的側面と状況的側面から取り上げる。	同　上	同　上
12	幼稚園・保育所と小学校の連携	家庭、幼稚園 or 保育所を経験した全ての幼児が小学校へと進んでいく。入学を境とするその前後の生活環境がそこを通過する幼児(児童)にとって充実した意味のあるものであるにはどうあるべきか、その現状と望ましい連携のあり方について取り上げる。	同　上	同　上
13	地域における子育て支援	育児支援が必要とされるにいたっている諸要因を探るとともに、国や地方公共団体の子育て支援計画、幼稚園や保育所における相談援助活動、地域で自主的に活動を展開している子育て相談ネットワークなどを取り上げる。	同　上	同　上
14	多文化化と教育・保育	国際化の進展の中で、文化的背景を異にする様々な人々が私たちの身のまわりに生活するようになっている。自国の文化、価値観への同化を求めるのではなく、相互理解、相互依存性の育成が求められている。	岡崎　友典	岡崎　友典
15	幼児の教育と保育をめぐる現状と課題	幼児期の保育・教育をめぐっては様々な期待や困難が制度上、立場上存在している。具体的には知的教育をめぐってもその一つであるが、保育における様々な両義性ともいえるものをめぐっての現代的課題を取り上げる。	林　信二郎 岡崎　友典	林　信二郎 岡崎　友典

＝生徒指導（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：秦　政春（大阪大学大学院教授）〕

全体のねらい

いま学校のなかで、もっとも困難をきわめているものが生徒指導である。そうした生徒指導に関する実態を明らかにするとともに、現実に子どもたちがどんな非行・問題行動をおこしているのか、そしてその背景にどんな事情があるのか検討する。こうした検討をふまえて、生徒指導の今後のありかたを探っていくことにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	〔Ⅰ〕 生徒指導の実際 生徒指導の理念と実際	生徒指導の理念が、子どもたちのよりよい人間形成をはかるものであることはいうまでもない。しかし、実際には非行防止、非行対策の名のもとに「管理的」な色彩がますます強まってきている。こうした生徒指導のありかたに関する問題状況を明らかにする。	秦　政春 （大阪大学大学院教授）	秦　政春 （大阪大学大学院教授）
2	体罰に依存する教師	「管理的」生徒指導の典型的なものが体罰である。教師の体罰は学校教育法で禁止されているにもかかわらず、現実にはこれがかなり多い。ここでは、教師の体罰に関する実態を明らかにするとともに、これによってもたらされる悪循環について検討を加える。	同　上	同　上
3	校則（生徒心得）による管理	体罰と並んで校則（生徒心得）も、「管理的」生徒指導の１つである。これについてはよく「校則問題」というかたちで話題になる。ここでは、これの実態、とくに規定の内容や具体的にこれがどう運用されているのかという点を中心にして検討を加える。	同　上	同　上
4	校則（生徒心得）の曖昧性	校則が「管理的」生徒指導の１つとはいっても、これ自体に教育的意味がないわけではない。むしろ、これが運用されるときに、これの性格の曖昧さのなかで問題が生じる場合が多い。簡単にいえば、「心得か規則か」といった問題である。この点を明らかにする。	同　上	同　上
5	〔Ⅱ〕 非行・問題行動の実態 非行・問題行動に関する推移	昭和５０年前後の「戦後第３のピーク」と呼ばれた少年非行の急増した時期以降、現在にいたるまでつぎつぎと子どもたちの問題行動が多発している。いじめ、不登校、校内暴力といった具合である。こうした推移を明らかにするとともに、その背景を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	いじめ問題と子ども	昭和６１年頃に急速に「鎮静化」したと思われていたいじめ問題は、実際にはその後も継続している。そして、かつてより悪質な行為もめだってきている。ここしばらくのいじめ行為の推移を明らかにするとともに、どんな背景からいじめが生じているのか検討する。	秦　政春（大阪大学大学院教授）	秦　政春（大阪大学大学院教授）
7	子どもたちのいじめ行為の特質	最近の子どもたちのいじめ行為に関する特質をひとことでいえば、「集団による弱者いじめ」ということになる。ここでは、いじめという行為のもつ特質を考えるとともに、いかなるパターンや形態のなかでこの行為が成立しているのか検討を加える。	同　上	同　上
8	学級・授業の「荒れ」と子どもたち	いじめと並行して、学校のなかで子どもたちのさまざまな「荒れ」がめだってきている。一般に「学級崩壊」と呼ばれる現象は、その典型的なケースである。しかも、こうした「荒れ」は小学生段階にまで、確実に低年齢化してきている。これに加えて、不登校問題についても、あわせて検討を加える。	同　上	同　上
9	〔Ⅲ〕　子どもたちの状況 子どもたちのストレス	いまの子どもたちは、とても疲労している。そして、ストレスがたまっている。しかも、これによってさまざまな症状が生じている。なかには、極端な身体的不調や異常行動をとるケースも少なくない。この実態を明らかにするとともに、これの影響について考える。	同　上	同　上
10	ストレスと非行・問題行動	子どもたちのストレスは、たんに症状がでているというだけではない。これによって、さまざまな非行・問題行動に結びついていくことも少なくない。たとえば、ストレスはいじめ行為にも密接に関連している。原因⇒ストレス⇒非行・問題行動の関係を検討する。	同　上	同　上
11	子どもたちの規範意識	子どもたちの規範意識は、確実に崩れてきている。些細な校則違反、服装違反ならともかく、明らかな反社会的行動、逸脱的行動に対しても「絶対にしてはいけない」という割合が低下してきている。こうした規範意識の崩れの背景を探ることにしたい。	同　上	同　上
12	〔Ⅳ〕　生徒指導を阻害するもの 教師のストレス	いま学校では、子どもたちにストレスがたまっているというだけではない。教師にも厳しいストレスがある。まるで学校が「ストレスの温床」になっているかのようである。ここでは、教師の日常性を中心にして、ストレスの原因、実態、影響について明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	教師のストレスによる悪影響	教師のストレスは、子どもたちに対して確実に悪影響をおよぼしている。子どもたちに「やつあたり」をしたり、「対話がなくなってしまう」といった具合である。これに子どもたちはストレスを感じ、反抗するといった悪循環がある。こうした構造を明らかにする。	秦　政春 (大阪大学大学院教授)	秦　政春 (大阪大学大学院教授)
14	教師集団の人間関係の崩れ	生徒指導は、１人ひとりの教師が個別的に行なうのでは限界がある。教師集団の連携や協力体制が不可欠の条件である。ところが、実際にはあまり連携や協力体制がとれていない。ここでは、こうした教師集団の組織化を阻害する要因がどこにあるのか明らかにする。	同　上	同　上
15	〔V〕　生徒指導の今後 組織的でゆるやかな生徒指導	今後、どのような生徒指導のありかたを求めていけばよいのか。１つは、教師集団の連携や協力体制を基本にした組織的な生徒指導である。いま１つは、「管理」を脱却したゆるやかな生徒指導である。こうした生徒指導の実現に関する可能性を探っていく。	同　上	同　上

＝教育評価（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学学長）〕

全体のねらい

教育における評価の問題について、いくつかの基本的な視点から考えてみる。とくに、学校での日常的な見とりや見きわめ、テストや成績づけなどのあり方を、子どもの学習や成長とのかかわりで原理的な地点から検討してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育評価のはたらき	評価は、学校といった組織的な教育形態において、古今東西を問わず行われてきた。教育においてなぜ評価が必要となるのか、学ぶ側、教える側、管理運営する側それぞれにとっての意義を考えてみる。	梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学学長）	梶田　叡一（京都ノートルダム女子大学学長）
2	測定から評価へ	評価は客観的科学的ではなくてはならないという発想がある。しかしこれを押し進めていくと本当に大事な面が見落とされ、表面的なつまらない面ばかりが重視され評価されるという落とし穴に落ちる。この意味で1930年代のタイラー等の主張を振り返り、現代の評価論の大前提を考えてみる。	同　上	同　上
3	教育の目標と評価	教育に当たっては目標が体系的に設定されるが、その目標がまた評価の視点や基準となる。目標の明確化のためには、ブルーム等の『教育目標のタキソノミー（分類体系）』が有名であるが、こうした仕事の意義について考えてみる。	同　上	同　上
4	行動目標論の克服	子どもの学びや育ちを外的客観的に見ていくため、行動目標の考え方が提唱されてきた。しかし今や行動目標論は原理的に乗り越えられている。子どもの学びや育ちを本当に問題にするためには、内面を見落とすことはできないのである。こうした視点に立って、達成目標・向上目標・体験目標の考え方を述べる。	同　上	同　上
5	内面の育ちの把握	学びや育ちの現実を見てとるためには、関心や意欲や理解の状況など内面世界の読み取りが必要となるにしても、これは非常に困難な課題である。内面を洞察する上での手がかりを学校で具体的にどのように得られるか、授業とのかかわりを中心に考えてみる。	同　上	同　上
6	相対評価・絶対評価	子どもの学びや育ちを評価する際、他の子どもと比べて見る（相対評価）か、教える側の内的基準による判断に任せる（絶対評価）か、何らかの到達基準に達しているかどうかを見る（到達度評価）か、といった違いがある。それぞれの意義と問題点について考えてみる。	同　上	同　上
7	形成的な評価	得点や成績は、学びや育ちの「結論」であるかのように受け止められがちである。しかし本来それは、長い道のりの中でのラップタイム（途中計時）でしかない。教育におけるあらゆる評価は中間的かつ一時的なものであって、次の段階に役立って初めて意味を持つ、という形成的評価の考え方について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自己評価	学びと育ちは、最終的にはその人自身によって評価され、その人自身の次の段階に向けての努力を引き出し、支えるものでなくてはならない。自己教育を基礎づけるものとしての自己評価でなくてはならないのである。こうした自己評価の具体的あり方について考えてみる。	梶田　叡一	梶田　叡一
9	学習指導と評価	学習指導を有効かつ適切なものにするため、具体的にどのような場で、どのような評価活動を行い、それをどのように生かしていけばいいのか、さまざまな場合を例にとって考えてみる。	同　上	同　上
10	学力テストの論理と問題点	学力を客観的な形で測定するために工夫されてきたテストの構成と結果処理の考え方について検討する。特に旧来の集団標準にもとずくテスト（ＮＲＴ）と最近の到達基準にもとずくテスト（ＣＲＴ）とを比較する。さらに、高次の知的能力を測定するための工夫を見る。	同　上	同　上
11	知能検査を考える	20 世紀初頭ビネによって考案されて以来、長い間にわたって「頭の良さ」を測る道具として用いられてきた知能検査はどのような論理に立つものであろうか。またその検査結果の表示法として用いられてきたＩＱ（知能指数）が今日なぜ信頼されなくなってしまったのであろうか。ＩＱ神話の成立と崩壊について考えてみる。	同　上	同　上
12	指導要録と通知表	学校での成績は、指導要録（学籍簿）と通知表に記入され、当人や親に対して権威を持ってきた。現在それはどのような形式・内容であるのか。その背後にある基本的な評価観は何であるのか。これまでの様式・記入法の変遷を見ながら検討する。	梶田　叡一	梶田　叡一
13	入学試験と進路指導	現在の入学試験や進路指導のあり方に偏差値教育と呼ばれるようなゆがみが生じているという指摘がある。過熱した受験準備体制の中では子供の発達そのものにもゆがみが現れざるをえない。これを是正するため、どのような入学者選抜方法を用いるか、どのような進路指導をしていくか、大きな課題である。この問題についていくつかの方向から考えてみる。	同　上	同　上
14	評価する側の眼	評価する側も人間である。固定観念を持って見てしまったり、背光効果や寛容効果などのゆがみが忍び込んでしまったりしがちである。しかし、自分の眼にどのようなゆがみの可能性があるかを認識することによって、そのゆがみに振り回されて非教育的な態度や決定を取ってしまうことも少なくなる。この問題について特に主要な点を検討する。	同　上	同　上
15	評価される側の心理	テスト不安など評価される場に身を置くことによって生じる心理的な効果についても考えておかねばならない。また、誉められたり叱られたりすることの効果の問題もある。評価される側がその評価によってどのような心理的影響を受けるか、いくつかの点から考えてみる。	同　上	同　上

＝臨床心理学概説（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　馬場　禮子（東亜大学大学院教授）〕

全体のねらい

まず臨床心理学の広い領域を概観することが第一のねらいである。次にその中で主要な項目を選び、それぞれについての基礎的理論、技法、学習の方法などについて解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは何か	①臨床心理学の定義をめぐって論じることを通して「臨床心理学とは何か」について考える。②理論と方法、実践の領域と課題という視点から総括する。③臨床心理学の歴史を概観する。	馬場　禮子（東亜大学大学院教授）	馬場　禮子（東亜大学大学院教授）
2	臨床心理学の理論的背景（1） 心理臨床の基礎となる心理学	第２章では、心理臨床実践に貢献している、心理学諸領域における様々な基礎理論や研究知見を紹介する。これによって、臨床心理学と他の心理学との深い関わりが見えてくるはずである。	青木　紀久代（お茶水女子大学大学院助教授）	青木　紀久代（お茶水女子大学大学院助教授）
3	臨床心理学の理論的背景（2） 精神医学	精神分裂病、気分障害、不安障害、解離性障害、摂食障害、痴呆などの認知障害、人格障害など成人期に認められる精神疾患の特徴と治療について心理療法的視点を加えながら解説する。	大野　裕（慶応義塾大学教授）	大野　裕（慶応義塾大学教授）
4	臨床心理学の理論的背景（3） 精神分析と分析心理学	この章では、精神分析と分析心理学の、それぞれの理論の創設者であるフロイトとユングが、どのような実践的な体験から、それぞれの理論を生み出していったか検討するとともに、その骨子となる人格理論に関する基本的な考えについて述べる。	永井　撤（東京都立大学教授）	永井　撤（東京都立大学教授）
5	臨床心理アセスメント（1） 総論	臨床心理アセスメントとは何か、について論じる。方法としての面接法、心理検査法を全般的に紹介して、６章７章での各論につなぐ。アセスメント結果のまとめ方と伝え方について概説する。	馬場　禮子	馬場　禮子
6	臨床心理アセスメント（2） 知能検査と質問紙法・作業検査	まずどのような心理検査があるかを概観し、その原理について簡単に触れる。知能検査ではビネー式とウェクスラー式の両方に触れる。質問紙では、目的の異なるＹＧ性格検査とＭＭＰＩを選び、放送授業に備えて検査用紙を提示しておく。	黒田　浩司（茨城大学助教授）	黒田　浩司（茨城大学助教授）
7	臨床心理アセスメント（3） 投映法	まず投映法の原理について触れ、代表的なものについて概説する。次に投映法を被検者の反応の性質という観点からの分類を示し、代表的な投映法であるロールシャツハ・テストについてその実際の用いられ方を解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心理療法（1） 総論	心理学的援助の全領域について概観し、その中での心理療法の位置づけを示す。さらに心理療法のさまざまな学派について概説する。	馬場　禮子	馬場　禮子
9	心理療法（2） 精神分析的心理療法	主としてフロイト派に属する心理療法について概説する。心理療法過程で生じる主要な現象と、それに対処して心理療法を展開させる技法についての解説を中心とする。	同　上	同　上
10	心理療法（3） ユング派の心理療法	ユング派の心理療法の場合、我々の心の内面に存在する無意識領域に、その個人の問題を治癒させ成長させる力が存在するという考え方が基本的にある。そのような無意識領域に取り組む基本的な方法や姿勢について述べる。	永井　撤	永井　撤
11	心理療法（4） クライエント中心療法	ロジャーズ派とも呼ばれる、ロジャースによって創始された学派の心理療法について、その原理、中心概念、具体的な方法、歴史的変遷などについて概説する。	馬場　禮子	馬場　禮子
12	心理療法（5） 認知療法	心理療法のなかでもうつ病や精神症性障害に効果があるとされる認知療法について、歴史的背景や理論を紹介し、認知の修正技法を中心に臨床場面で役立つ面接技法についても具体的に解説する。	大野　裕	大野　裕
13	コミュニティ援助（1） 危機介入とコンサルテーション	コミュニティ援助の発想、理念および原理を概説し、その活動領域について触れる。コミュニティ援助の代表的な活動である「危機介入」「コンサルテーション」「社会的支援づくり、啓蒙・教育活動」について解説する。	黒田　浩司	黒田　浩司
14	コミュニティ援助（2） 心理臨床と子育て支援	育児をめぐる親子への心理的援助について、コミュニティ援助の視点から紹介する。心理的臨床家が直接相談活動を行う場合に加え、育児を支える地域の専門機関との協同の可能性と、その際の留意点などについて、最近の事例を交えながら概説していく。	青木　紀久代	青木　紀久代
15	臨床心理学研究の進め方	臨床心理学の研究を他の心理学の研究と比較しつつ、共通点と独自な点について検討していく。さらに、卒業論文などで臨床心理学に関連するテーマで研究を実施する場合を想定し、論文執筆において重要と思われる事柄を具体的にいくつか取り上げる。	同　上	同　上

＝心理臨床の世界（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：滝口　俊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：桑原　知子（京都大学大学院助教授）〕

全体のねらい

心理臨床の実践活動は、スクールカウンセリングや心理教育相談室・学生相談室などの教育領域、企業内の相談などの産業領域、病院や保健所などの医療・保健領域、福祉の領域、家庭裁判所や警察などの司法・矯正領域、開業心理臨床等などにおいて、活発に行われている。本講座では、これらの活動の基盤である理論と技法の解説と、心理臨床の実際を紹介したいと思う。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理臨床の本質	日本心理臨床学会理事長・日本臨床心理士会会長の河合隼雄先生をゲストスピーカーに迎え、長年にわたる心理臨床実践、諸外国との活発な交流、臨床心理学以外の世界との対話など、豊かな経験に基づいて想い至られた、心理臨床の本質について語っていただく。	滝口　俊子（放送大学教授）	滝口　俊子（放送大学教授）
2	箱庭療法の理論と実際	日本箱庭療法学会創設者河合隼雄先生がカルフ、D. から砂遊び（Sandspiel）を学び、1965 年に日本に導入以来、著しい発展を遂げている箱庭療法について、河合隼雄先生をゲストスピーカーに迎え、理論の特徴や治療機序、作品の展開について、具体的にお話しいただく。	同上	同上
3	行動療法の理論と実際	行動療法の理論の中から、オペラントコントロール、社会的学習、認知論を取り上げて解説する。次いで、行動療法の適応とされる不登校、摂食障害、強迫性障害、ソーシャル・スキル等を取り上げ、具体的に治療の進め方、治療の経過、治療の効果について検討する。	上里　一郎（広島国際大学学長）	上里　一郎（広島国際大学学長）
4	クライエント中心療法／パーソンセンタード・アプローチの理論と実際	ロジャース、C.R.（1902～1987）が創始した療法／人間への接近法は、基本的な態度・考えは変化していないが、その実践・対象は発展・展開し、変化してきている。理論の誕生から発展へ、基本的概念について、具体的に触れてみることを目標とする。	田畑　治（愛知学院大学大学院教授）	田畑　治（愛知学院大学大学院教授）
5	精神分析の理論と実際	心理臨床の実践を支える基礎的学問は幾つかあるが、その中で重要な基本的認識を与えているのがフロイト、S．によって創始された精神分析であろう。本講義では、精神分析の基礎的考え方とその実際について紹介したい。	乾　吉佑（専修大学教授）	乾　吉佑（専修大学教授）
6	トランスパーソナル心理療法	心理学の新たな潮流であるトランスパーソナル心理学の立場に立つ心理療法の基本的な姿勢および代表的アプローチのいくつかを紹介する。特に、プロセス指向心理学の実際について、青木聡氏をゲストに迎え、実践する。	諸富　祥彦（明治大学助教授）	諸富　祥彦（明治大学助教授）
7	グループアプローチの実際　―出会いから別れまで―	見知らぬ者同士が出会い、一緒に課題に取り組むグループワークの映像を通じて、「出会い」「関係の深まり」そして「別れ」といった、基本的な人間関係のプロセスと、それにまつわる感情を共有することを目的とする。	高石　浩一（京都文教大学教授）	高石　浩一（京都文教大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	現代を生きる男性・女性	現代は、様々な価値観が錯綜する時代である。その中に生きる人間は、自らの価値観、生き方を改めて明確にしていく必要に迫られる。就職、結婚、出産といった人生の中での大きな出来事についても、様々な変化が生じている。現代を生きる「人間」について、心理学的な観点からアプローチしてみたい。	桑原　知子（京都大学大学院助教授）	桑原　知子（京都大学大学院助教授）
9	教室で生かす心理臨床	学校現場で心理臨床的アプローチの必要性が高まっている。しかし、学校現場では、必ずしも心理療法をそのまま適用することは難しいことがある。現場でおこってくる事例をもとに、教育における心理臨床的アプローチについて、わかりやすく提示したい。	同　上	同　上
10	少年問題と家族の心理臨床	家庭裁判所調査官の扱う少年事件や家事事件の事例を通して、現代の非行少年や家庭の深層にせまる。（可能な方法で）事例を再現し、少年や家族の心理についての理解を深めるとともに、調査官の仕事の実際、事件の取り扱いの流れについても紹介できるようにしたい。	同　上	同　上
11	「もう一人の私」	「自分」を理解する上で、「もう一人の私」という視点は大きな意義をもつ。多重人格や二重身といった症状は心の不思議を教え、「影」というとらえ方は心の深みを垣間見せる。事例、映画、文学作品、演劇、絵画などの中に「不思議」や「深み」を探ってみたい。	同　上	同　上
12	学生相談にみる現代の若者	複数の大学において学生相談において数多くの学生たちの相談に携わる平野学氏をゲストスピーカーに迎えて、現代の学生たちの姿を追求する。若者の心理を通して、現代社会の諸問題を考えたい。	滝口　俊子	滝口　俊子
13	子育て支援の心理臨床	子どもの数が減少し、子どもと親しく接する機会なく親になって子育てに戸惑っている親たちへの、支援活動について紹介する。ゲストスピーカーに東山弘子氏を迎え、子育て支援研修会の様子を紹介しながら、現代社会における子育てについて考える。	同　上	同　上
14	こころの傷の克服に向けて	心理臨床における今日的な活動である、災害・犯罪・虐待・事件などの被害にあった人々のこころの傷の克服に向けての援助について、ゲストスピーカーに支援活動の経験豊かな倉光修氏を迎えて、その実際と課題を紹介する。	同　上	同　上
15	高齢者に学ぶ	高齢者の増加に伴い、社会の様相も変化している。高齢者支援を構想する際に、人生の先輩である高齢者に学ぶことを考えたい。お年よりが生活される場に心理臨床に携わる大学院生と共に訪問し、人間が生きる課題を考え合う。	同　上	同　上

＝児童の臨床心理（’０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　松村　茂治（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

今、わが国の子どもたちの心と行動のあり方に、多くの関心が寄せられている。取り分け、勉強への取り組み、人との関係の持ち方、自分の心との向き合い方などに、多くの問題点が指摘されている。本講義では、子どもの心と行動の問題に対するアプローチの仕方と個々の問題の特徴及び対応の仕方などについて学んでいく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	児童の臨床心理とは	子どもたちの心と行動の問題に対応するには、大人の問題に対するのとは異なった配慮が必要になる。その１つの理由は、子どもが発達しつつある存在だからである。ここでは、発達と問題行動、臨床的アプローチの理論などについて解説をする。	松村　茂治（東京学芸大学教授）	松村　茂治（東京学芸大学教授）
2	児童の発達と環境	児童の心理的発達の基礎理論について説明し、児童の発達にかかわる環境の役割について、古典的な研究を含めながら考察する。児童の生物的な側面や、対人関係例えば親子関係の持つ役割、子どもの社会化について述べる。	佐野　秀樹（東京学芸大学教授）	佐野　秀樹（東京学芸大学教授）
3	行動の理解とアプローチ	子どもの問題行動を、場に即した適応的な行動を学んでこなかった、あるいは不適切に学んできたと考える理論がある。これを学習理論と呼ぶ。この学習理論を解説するとともに、子どもの問題行動や不適応行動の心理的なメカニズムについて考える。	小林　正幸（東京学芸大学教授）	小林　正幸（東京学芸大学教授）
4	児童援助とカウンセリング	子どもの話を聞きながら、また遊びながら、大人が子どもの心理を察知し、子どもにふさわしい環境を整えていったり、子どもと適切な人間関係を作っていったりする方法としてのカウンセリングについて述べる。	佐野　秀樹	佐野　秀樹
5	臨床アセスメントⅠ－発達と能力の測定－	発達や能力に関する問題の把握には心理アセスメントが必要となる。ここではそうしたアセスメントについての基本的な考え方とその発展の歴史、現状、これからの動向、重要ないくつかの心理検査などついて述べる。	上野　一彦（東京学芸大学教授）	上野　一彦（東京学芸大学教授）
6	臨床アセスメントⅡ－行動・パーソナリティーの測定－	子どもの性格や行動の測定について検討すべき点について述べる。測定の種類や方法について説明し、基本的な測定についての特徴を示す。また、結果の解釈や使用法について述べ、その注意点やについて述べる。	佐野　秀樹	佐野　秀樹
7	スクールカウンセリング	1990年代の後半から、日本においても本格的なスクールカウンセリング活動が展開されている。学校におけるカウンセリング活動は、子どもの心理的問題の予防、援助において重要な役割を果たす。スクールカウンセリングの特徴と課題を解説する。	松尾　直博（東京学芸大学講師）	松尾　直博（東京学芸大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	子どもの問題行動Ⅰ－対人関係の問題を中心に－	「人」の「間」で生きていく「人間」は、人との関係で育ち、人との関係で傷つき、人との関係で癒される。子どもの心理的問題の原因として、あるいは結果として、対人関係の問題は重要なテーマである。子どもの対人関係の問題の特質と援助法について解説する。	松尾　直博	松尾　直博
9	子どもの問題行動Ⅱ－神経症の問題を中心に－	子どもの問題行動として、神経症のほか、子どもの心理的な問題として多く見られる心身症、神経性習癖を取り上げる。それらの心理的な問題のメカニズムを明らかにした上で、このような問題に対するアプローチについて解説をする。	小林　正幸	小林　正幸
10	不登校	現代の教育問題で注目をされる不登校の問題を取り上げ、この問題が示す今日的な意味を考える。その上で不登校の問題が起きてくる形成要因を考え、さらに不登校の維持要因も考える。そして、不登校の問題にどのように対応していくと良いのかを考える。	同上	同上
11	いじめ	「いじめ」の問題は、被害者と加害者の二者間の問題にとどまらず、その問題が現れている集団の問題でもある。ここでは、この問題の定義や特徴、対応の仕方などとともに、この問題の生ずる集団の特徴や社会的な背景についても併せて考えていく。	松村　茂治	松村　茂治
12	校内暴力・学級崩壊	子どもたちが教師に対して暴力を振るったり学校内の器物を破損したりする現象、学級の秩序が乱れ、授業が成立しないような混乱した状態に陥ってしまう現象が多数報告されてきている。低年齢化も指摘されるこうした問題の特徴や背景について学んでいく。	同上	同上
13	非行	非行は古くて新しい問題である。日本においては、戦後非行は3つの波があったと言われ、1990年代の終わりから第4の波に入ったと言われる。非行のメカニズムや対応について、心理学的観点から解説する。	松尾　直博	松尾　直博
14	知的障害、情緒障害等	14回と15回では、障害者への対応について学んでいく。 14回では、障害の問題の全般について解説したあと、知的障害、自閉症、情緒障害等について詳しく学んでいく。特に、ここにきて、障害児教育に関して新しい方針が打ち出されてきており、それらについても学んでいく。	松村　茂治	松村　茂治
15	ＬＤ，ＡＤＨＤ高機能自閉症	15回では、最近、注目されている学習障害（ＬＤ）、注意欠落／多動性障害（ＡＤＨＤ）、高機能自閉症など、いわゆる軽度の発達障害について学んでいく。軽度ということは、決して扱い易いということでなく、それぞれが独自の難しさを持っている。それぞれの特徴と対応の仕方について学んでいく。	上野　一彦	上野　一彦

＝心の健康と病理（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　馬場　謙一（中部大学教授）〕

全体のねらい

心の健康とは、どのようなものか。また、心の病いはどのようにして起るか。代表的な緒家の考えを紹介しながら、心の病理を考え、そこから健康な精神生活がどのように実現できるかを明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心の健康と異常	健康な心とはどのようなものか、また、心の異常とは何か、その境いはどうやって定めるのか。などについて考える。	馬場　謙一（中部大学教授）	馬場　謙一（中部大学教授）
2	心をみる視点	心はそれを眺める視点によって、さまざまな様相を示す。現在、私たちはどのような視点から心を見ているか。また歴史的にはどうであったかを考えてみたい。	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
3	発達論的な理解	心の病いを、その人の発達過程における心理的体験と関連させて考えることの重要性について述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一
4	不安の病理	人間にとって、不安はどのような意味があるか。また、心の病とどのような関連性をもつかを考えてみたい。	同　上	同　上
5	幻覚の病理	幻覚とはどのようなものであり、何故生じるのか。生理学的、心理学的な見地から述べる。	同　上	同　上
6	妄想の病理	妄想はなぜ生じるのか。その発生のメカニズムは、心理学的にどのように理解されるかを述べる。	同　上	同　上
7	心的外傷と心の病	心的外傷と心の病の関係についてＰＴＳＤの問題も含めて考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	フロイトの人間理解と疾病論	フロイトは、人間の心をどのように考えていたか。また疾病が生ずる機制についてどう考えていたかについて述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一
9	自我心理学への転回	フロイト以後、精神分析は自我心理学へと転回するが、その背景、理論的特徴、などについて述べる。	鍋田　恭孝（大正大学教授）	鍋田　恭孝（大正大学教授）
10	対象関係論の展開	英国を中心に発展した対象関係論について、理論的特徴をあげ、その発展の跡をたどる。	同　上	同　上
11	ロジャースの人間理解と治療論	フロイトに対立して独自の理論を樹立したロジャースの人間観と、治療の特徴について述べる。	橘　玲子	橘　玲子
12	ユングの人間観と治療論	ユングの人間観と治療技法について、日本人として最初にユング派分析家の資格を取得した河合隼雄氏をゲストに迎えて、対談する。	滝口　俊子（放送大学教授）	滝口　俊子（放送大学教授）
13	自己愛の病理①	独得の自己愛理論を提唱したコフートについて、その人間観と理論内容を概説する。	伊藤　洸（田宮病院院長）	伊藤　洸（田宮病院院長）
14	自己愛の病理②	コフートの治療技法について、実際の症例をあげながら、分り易く解説する。	同　上	同　上
15	現代人の病理	拒食症、家庭内暴力、境界例その他現代に特有の疾病が多発しているが、それは現代社会とどう関わりがあるのかを考えてみたい。	馬場　謙一	馬場　謙一

＝カウンセリング概説（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　馬場　謙一（中部大学教授）〕
〔主任講師：　橘　　玲子（放送大学教授）〕

全体のねらい

カウンセリングについて方法や理論、効果などについて概説する。カウンセリングの基本であるクライエント・カウンセラー関係を重視し、ここで起こる心の動きや成長の過程を考える。この講義では特定の学派に立つものではないが、しかし重要な理論については紹介する。なお個人カウンセリングだけではなく、児童の心理療法、グループカウンセリングやコミュニティにいかされるカウンセリングについても若干ふれたいと考えている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	カウンセリングの歴史と定義	カウンセリングの成立に至る歴史を述べ、次いでフロイトの精神分析とロジャーズの理論がいかに生まれたかを述べる。	馬場　謙一（中部大学教授）	馬場　謙一（中部大学教授）
2	カウンセリングの適用と倫理	カウンセリングがおこなわれている領域、言葉の問題やクライエントの復原力について述べる。さらにカウンセラーの倫理についてもふれる。	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
3	カウンセリングの方法	カウンセリングの方法、カウンセリングの学派について述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一
4	カウンセラーの態度	フロイト、ロジャーズによって提案されているカウンセラーの態度、さらにカウンセラーが目指すものについても述べる。	馬場　謙一 橘　玲子	馬場　謙一 橘　玲子
5	カウンセリングの準備	カウンセリングを始めるまでに、カウンセラーはどのような準備を整えるべきか、カウンセリング開始前のインテーク面接はどのようになされるべきかを述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	カウンセリングにおける見立て	クライエントの病状、病態について把握し、疾病の契機や経過について理解をもって、カウンセリングをおこなうことの大切さを述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一
7	カウンセリングの約束	カウンセリングの開始にあたって、時間や料金、場所、期間などの具体的な取り決めをしなくてはいけない。この約束を取り交わすことの重要性について述べる。	滝口　俊子（放送大学教授）	滝口　俊子（放送大学教授）
8	カウンセリングの実際（1）	力動的な立場から見た場合、カウンセリングの過程はどのように展開するかを述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一
9	カウンセリングの実際（2）	ロジャーズのクライエント中心療法から見た場合、カウンセリングの過程はどのように展開するかを述べる。	橘　　玲子	橘　　玲子
10	カウンセリングの実際（3）	カウンセリングを進めていると、クライエントの間にいろいろなことが起きてくる。これらの具体的な事柄とその対応について考える。	同　上	同　上
11	カウンセリングの理論（1）	フロイト、ユング、ロジャーズについてパーソナリティ、無意識の考え方などを述べる。	同　上	同　上
12	カウンセリングの理論（2）	認知・行動療法についての考え方や方法について述べる。	神村　栄一（新潟大学助教授）	神村　栄一（新潟大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	児童の心理療法	児童には言葉でカウンセリングをおこなうことは難しいので、遊びや絵画などの言語によらない心理療法をおこなうが、児童の心理療法の歴史や方法について述べる。	橘　玲子 佐藤　仁美（放送大学助教授）	橘　玲子 佐藤　仁美（放送大学助教授）
14	グループ・カウンセリングについて	カウンセリングは個人に対しておこなうだけではなく集団でおこなうこともある。集団でおこなわれる場合の特徴や方法について述べる。	橘　玲子	橘　玲子
15	コミュニティ・アプローチ	学校臨床、ＨＩＶ患者への支援、被害者へのサポートなど、地域での支援とカウンセリングの関係について述べる。	神村　栄一	神村　栄一

＝スクールカウンセリング（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　滝口　俊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　倉光　　修（大阪大学大学院教授）〕

全体のねらい

学校において行われている、カウンセリングの実際を紹介する。公立の全中学校に配置されたスクールカウンセラーは、教師・親・地域と密接に連携しつつ、子どもたちの健やかな成長に取り組んでいる。スクールカウンセリングは決して密室のカウンセリングのみではなく、学校教育の中での児童・生徒に適する方法を模索しているのである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	カウンセリングと教育	京都大学名誉教授（文化庁長官）河合隼雄先生をゲストにお迎えして、教育とカウンセリングの共通点と差異点をお話いただき、教師とカウンセラーと親と社会との協働について考える。	滝口　俊子（放送大学教授）	滝口　俊子（放送大学教授）
2	個と集団	教育におけるカウンセリングを考えるに当たって重要な視点である「個と集団」について、河合隼雄先生にお話いただき、スクールカウンセリングの意義を明確にする。	滝口　俊子	滝口　俊子
3	不登校	すでに紹介されたケース、あるいはモデルとして提示されたケースを素材にして、カウンセリングの技法を説明する。ボランティアによるロールプレイを交える予定である。ゲストに西井恵子氏を迎え、不登校の事例を検討する。	倉光　修（大阪大学大学院教授）	倉光　修（大阪大学大学院教授） ゲスト 西井　恵子（谷町こどもセンターセラピスト）
4	問題行動	すでに発表されているケース、あるいはモデルとして提示されるケースを教材にして、カウンセリングの技法を説明する。俳優によるロールプレイを交える予定である。ゲストに三船直子氏を迎え、問題行動の事例を検討する。	倉光　修	倉光　修 ゲスト 三船　直子（山口県立大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	発達障害	すでに発表されたケース、あるいはモデルとして提示されたケースを教材にして、カウンセリングの技法を説明する。ボランティアによるロールプレイを交える予定である。ゲストに大島剛氏を迎え、PTSDの事例を検討する。	倉光　修	倉光　修 ゲスト 大島　剛 (神戸親和女子大学助教授)
6	保護者のカウンセリング	すでに発表されているケース、あるいはモデルとして提示されるケースを教材にして、カウンセリングの技法を説明する。俳優やボランティアによるロールプレイを交える予定である。ゲストに鵜養啓子氏を迎え、保護者とのかかわりを検討する。	倉光　修	倉光　修 ゲスト 鵜養　啓子 (昭和女子大学教授)
7	教師のコンサルテーション	すでに発表されたケース、あるいはモデルとして提示されたケースを教材にして、カウンセリングの技法を説明する。ボランティアによるロールプレイを交える予定である。藪添隆一氏をゲストに迎え、教師に対するコンサルテーションを検討する。	倉光　修	倉光　修 ゲスト 藪添　隆一 (和歌山県立教育研究センター教育相談室長)
8	危機対応	学校の集団の中では、さまざまな危機が発生する。鹿児島大学教授久留一郎氏をゲストにお迎えして、学校におけるさまざまな危機への支援やPTSDについてとりあげ、スクールカウンセラーの役割について考える。	岡本　淳子 (立正大学助教授)	岡本　淳子 (立正大学助教授)
9	スクールカウンセラー配置の実際	東京都教育委員会への取材を通して、文部科学省によるスクールカウンセラー配置事業を地方自治体がどのように進めているのか、行政はスクールカウンセラーにどのようなことを期待しているのかなどについて明らかにする。また、臨床心理士会によるスクールカウンセラーへのサポートシステムについても紹介する。	岡本　淳子	岡本　淳子
10	外部関係機関の機能と連携	スクールカウンセラーの活動は、学校内部だけではなく、他の関係専門機関との連携を必要とする。児童相談所・子ども教育支援財団・スクーリングサポートセンター・こども心身医療研究所・少年鑑別所の元技官などをゲストに迎えて、連携のあり方を考え合う。	馬殿　禮子 (兵庫県立但馬やまびこの郷所長)	馬殿　禮子 (兵庫県立但馬やまびこの郷所長)
11	スクールカウンセラーのバックアップ体制	スクールカウンセラーが第一線の学校現場で十分に機能するには、後方におけるカウンセラーの教育と支援が不可欠である。スクールカウンセラーに対する研修会、スーパーヴィジョン、カンファレンス、サポートグループなどで、スクールカウンセラーの指導にあたってきた経験をもとに、バックアップ体制の必要性、その実際、その問題と課題のどについて知見を紹介する。	野島　一彦 (九州大学大学院教授)	野島　一彦 (九州大学大学院教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	学級担任との連携	教師とスクールカウンセラーが互いに専門家として認め合い話し合うことが、連携の基本である。よりよい連携を築いてゆくために、スクールカウンセラーの活用、その内容や基本的態度、教師による教育相談、生徒指導における立場と基本的態度、善人・悪人を投影されることなどについて考えたい。	山下　一夫（鳴門教育大学教授）	山下　一夫（鳴門教育大学教授）
13	スクールカウンセラーの体験	スクールカウンセラーとして活動しておられる方々とその任務のやり甲斐や楽しさ、話し合う。子どもたちの成長に貢献できるスクールカウンセラーの任務を、明らかにすることを目ざす。	滝口　俊子	滝口　俊子
14	幼稚園（保育所）でのカウンセリング	幼稚園・保育園において子育て支援の一環として行われているカウンセラーの活動を取り上げ、その役割とこれからの可能性について、スクールカウンセリングと比較しながら紹介する。	菅野　信夫（天理大学教授）	菅野　信夫（天理大学教授）
15	今後の課題と展望	平成7年度以来、スクールカウンセリング事業を推進してきた三団体（日本臨床心理士資格認定協会・日本臨床心理士会・日本心理臨床学会）スクールカウンセラー（学校臨床心理士）ワーキンググループ代表村山正治先生をゲストに迎えて、これまでの活動を振り返り、スクールカウンセリングの意義と課題について話し合う。	滝口　俊子	滝口　俊子

＝ユング心理学（‘０３）＝（Ｒ）
－夢・神話・昔話・イメージと心理療法

〔主任講師：大場　登（放送大学教授）〕

全体のねらい

ユング（Jung, C. G.）の創始した分析心理学（ユング心理学）は、人間のこころに現われる「イメージ」の世界に大きな注目をあてた。現代人の心理療法過程で出会う豊かな、あるいはおどろおどろしい夢イメージ・箱庭やコラージュ・イメージは、不思議にも古今東西の神話や昔話、すなわち人類のこころのイメージと驚くほどの類似性を見せるものである。本講義では、ユング心理学の基礎を具体的なイメージの世界を通して紹介・検討してゆくことにしてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ユングとイメージの世界（1）	ユングの心の世界にはイメージが圧倒していた。とりわけフロイトとの訣別をきっかけに陥った数年間に及ぶ「方向喪失」の時期、ユングはすさまじい内的イメージの嵐に襲われる。ユングはこの「イメージの嵐」に対してどのように対処したのであろうか？	大場　登（放送大学教授）	大場　登（放送大学教授）
2	ユングとイメージの世界（2）	ユング自身が実に30年以上の歳月をかけて絶えず増改築していったボリンゲンの「家（塔）」は、ユング自身の「個性化の過程」のイメージ表現と理解することもできる。そして、ユングの人生のイニシャル・ドリームは？	同　上	同　上
3	コンプレックスと元形（＝人類のコンプレックス）	意識と無意識の関係は？　意識・無意識とイメージとの関係は？　コンプレックスという考え方の真の意味は？　人間とコンプレックスとは？　元型という言葉で表現されるものは？	同　上	同　上
4	ペルソナとゼーレ（ソウル）	ペルソナとは「個における外界への心理的構え・姿勢」、そしてゼーレとは「個における内界への心理的構え・姿勢」と表現できる。ペルソナやゼーレは夢や昔話においてどのようなイメージとして現われているのだろうか？	同　上	同　上
5	エディプス神話	フロイトは「エディプス・コンプレックス」という表現を用いて、人類に共通のひとつの典型的な心の「葛藤・心理的『渦』」と生涯をかけて取りくんだ。エディプス・コンプレックスをユング心理学から見てみると？	同　上	同　上
6	カインとアベル　－兄と弟	聖書から現代に至るまで、愛情をめぐっての兄弟葛藤は殺意・殺害を伴う強烈なイメージに満ちている。	同　上	同　上
7	ウラノス・クロノス・ゼウス　－父と権威	「父なるもの」は両義的な意味での「権威像」の象徴である。「下なるもの」「子なるもの」を押しつぶし、殺害するほどの暗い「面」と、「課題・難題」を与え、「挑戦」を受けて立つ偉大な「面」をあわせ持つ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	山姥と魔女 －「母なるもの」の二つの「顔」	「山姥」や「魔女」は人々を呑み込むほどの恐ろしい顔と、人々に知恵と救いをもたらす福神の顔という二つの「面」を持っている。	大場　登	大場　登
9	蛇女房 －男と女	男性と女性の出会い・かかわり方には、様々なイメージがある。分離→結合、分離→結合→分離、そして分離→結合→分離→時々再会？	同上	同上
10	老人と子ども	児童文学には「老人と子ども」のペアが織りなす物語がとてもたくさんある。「老人と子ども」にはどのような意味があるのだろうか？	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
11	道化	「道化」は硬直した人生や文化に活力を与えてくれるものと考えられている。児童文学においても、「道化」は主人公にはならないけれども、主人公の傍らに大切な役割を担って登場している。「指輪物語」「ジョコンダ夫人の肖像」「ミセス・タッカーと小人ニムビン」などを取り上げて検討してみたい。	同上	同上
12	心理療法とイメージ	様々の心理的問題・課題を抱えたクライアント（相談に見える方）とお会いして、話を伺っているうちに、不思議なことに、クライアントの心が動き出し、そのプロセスの中から、イメージとしての夢や絵・箱庭・コラージュ表現が生まれてくる。	大場　登	大場　登
13	コラージュ療法 －その1	ユング心理学による心理療法として、「箱庭療法」は多くの方々の知るところとなったし、大学院臨床心理プログラム「臨床心理面接特論　－心理療法の世界」においても一章が設けられて紹介されている。これに対してコラージュ療法は、まだあまり知られていないと言ってよいであろう。本章では、まずコラージュそのものを見て、感じていただくところからはじめてみたい。	佐藤　仁美（放送大学助教授）	佐藤　仁美（放送大学助教授）
14	コラージュ療法 －その2	コラージュ療法といっても実は様々のスタイルがある。本章では、その中から、いくつかをとりあげて紹介してみることにしたい。	同上	同上
15	心理療法と夢	「禁じられた小部屋」「異界訪問」「異類婚」といった神話的イメージは、いわば特別の人々にだけ与えられたものではない。いわゆる「普通」の人々も、「夢」の世界に少し関心を向けてみると、人間の心・世界は、日常の秩序や合理性からだけ成立しているものではないことがよく理解される。人間の心・小宇宙は影や妖怪、非合理と圧倒的なイメージに満ちたものである。	大場　登	大場　登

＝発達障害児の心と行動（‘０２）＝（TV）

〔主 任 講 師：　太田　昌孝　（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

発達障害は人生の早い時期に社会的諸関係のなかで現れ、その原因は脳機能障害にあり、知的障害、言語と学習障害、自閉症、多動症候群等がある。本講座では発達障害を持つ子どもの心と行動を理解するために、発達的観点と学際的観点を基本に置き、心理・生理・病理を解説し、教育的支援の実践的基礎となることをねらった。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発達障害とはなにか	発達障害は人生の早い時期に社会的諸関係のなかで現れ、その原因は脳機能障害にある。知的障害、言語と学習障害は認知機能に、自閉症、多動症候群は行動に基づいて診断される。発達障害の概念、診断、支援についての概論を述べる。	太田　昌孝（東京学芸大学教授）	太田　昌孝（東京学芸大学教授）
2	アセスメント１心と行動の理解	発達障害児の心と行動は、子ども側の要因と環境的要因の相互作用として現れる。子どもの認知発達段階と固有の不均衡さ、それに相応する情緒などの把握の仕方、さらに働きかけとの関連で如何に心と行動を客観的に理解するかについて述べる。	永井　洋子（静岡県立大学教授）	永井　洋子（静岡県立大学教授）
3	アセスメント２心理機能と発達アセスメント	発達アセスメントをおこなう上で，心理機能の測定は不可欠である。知能、言語などの心理機能について、代表的な測定方法について論じる。	小池　敏英（東京学芸大学教授）	小池　敏英（東京学芸大学教授）
4	アセスメント３脳の機能と生理	脳機能は、入力系、情報処理系、出力系に区分される。人の脳機能を無侵襲で評価可能な方法が、近年、種々開発されてきた。脳波、MRI などの人の脳機能計測について触れ、発達障害に関する所見との関連で論ずる。	同　上	同　上
5	学習理論と発達支援	学習理論は、教育的働きかけの組み立てを考える上で、その枠組みを与えてくれる。学習理論は、行動主義的立場と認知論的立場に大きく分かれるが、障害の程度や内容を考慮した働きかけを行うためには、各理論の主張を理解することが求められる。	同　上	同　上
6	発達障害の早期発見と対応	出生時のマススクリーニングは、精神遅滞の予防に貢献している。発達障害については本態的な医学的治療が可能でないことが多いが、早期発見と早期からの適切な親に対するガイダンスと子ども自身に対する発達援助の意義は大きい。	太田　昌孝	太田　昌孝
7	行動障害の理解と支援	自閉症、多動症候群などは、とりわけ多くの行動障害を持ちやすく、その対処に苦慮することが多い。子どもの認知や情緒の特徴を捉えた上で、人間的な成長を促す中での基本的な対処の考え方、さらに個々の行動障害への直接的な対処法などについて述べる。	永井　洋子	永井　洋子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	知的障害（精神遅滞）児の理解と支援 その1	知的障害（精神遅滞）の定義，診断と分類，原因と病理について説明する。	太田　昌孝	太田　昌孝
9	知的障害（精神遅滞）の理解と支援 その2	知的障害（精神遅滞）の心理（認知・言語など）と行動について説明する．取り上げる領域は，発達特性，言語，認知，運動，社会性などである。	奥住　秀之（東京学芸大学助教授）	奥住　秀之（東京学芸大学助教授）
10	重症心身障害児の理解と支援	重症心身障害児は、重度運動障害とともに重度知的障害を伴う。指導に際しては、視覚機能と聴覚機能の他覚的評価が大切である。また、働きかけに対する期待反応を理解し、さらに期待反応を促進する働きかけの中で、コミュニケーション活動を形成することが重要な課題となる。	小池　敏英	小池　敏英
11	自閉症の理解と支援	自閉症は、対人関係の障害、相互的意思伝達の障害、興味や活動範囲の狭さと常同性の３つで診断される。その背後にある特有な認知の歪みと発達段階の観点から、自閉症の状態像と療育目標や課題、留意点など、理解と対応の仕方について述べる。	永井　洋子	永井　洋子
12	注意欠陥/多動性障害(ADHD)の理解と支援	ADHD とは不注意と多動と衝動性の３組の行動症状からなる症候群である。ADHD の特徴、検査と評価について述べ、それにもとづいた働きかけを学際的な観点も含めて述べる。	太田　昌孝	太田　昌孝
13	学習障害の理解と支援	学習障害児は、聞く、話す、読む、書く、計算する、推論するなどの特徴を持つ。また、言語性 LD、非言語性 LD、包括性 LD、注意・記憶性 LD などの分類があげられる。ここでは，定義、特徴，教育的配慮などについて述べる。	奥住　秀之	奥住　秀之
14	医学的治療 1 精神医学的状態と薬物療法	発達障害の薬物療法の目的は、①本態的治療の為の薬物、②情緒障害、異常行動の改善を目的にする薬物　③経過で出現しやすい精神医学的状態に対する薬物に分けられる。行動の障害にしばしば使われる向精神薬について主として解説する。	太田　昌孝	太田　昌孝
15	医学的治療 2 てんかんと関連する状態	発達障害にはしばしばてんかんが合併する。てんかんとその治療・対処法についての正しい理解は、発達障害児の教育的支援上不可欠である。	小林　繁一（静岡県立子ども病院）	小林　繁一（静岡県立子ども病院）

＝裁判の法と手続（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：酒巻　匡（京都大学大学院教授）〕
〔主任講師：山本　和彦（一橋大学大学院教授）〕

全体のねらい

法と裁判、とくに司法制度に関する現代的な課題を中心にとりあげ、現在何が問題とされ、どのような改革の課題が提出されているか、これに対して、現在進行形の制度改革の動きを取り入れながら、その将来を展望する。新しい問題を扱う場合が多いが、その前提として、法と裁判制度の現状や歴史的な背景をも説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	法の解釈・適用と裁判	裁判はいわゆる法的三段論法によって行われるものであるが、その内容を理解するとともに、現代的訴訟等で特に明らかになるその限界を考える。	山本　和彦（一橋大学大学院教授）	山本　和彦（一橋大学大学院教授）
2	司法権の範囲と機能	国家三権の１つである司法権の他の国家権力及び自治的団体等との関係を、いわゆる審判権の範囲に関する判例や違憲法令審査権等を中心に考える。	同　上	同　上
3	裁判の歴史と日本の司法制度の近代化	現代日本の裁判制度は、西欧近代の裁判制度を移植しこれを発展させてきたものである。その過程を跡付けると共に、母法とされた西欧諸国の裁判の歴史についても概観する。	酒巻　匡（京都大学大学院教授）	酒巻　匡（京都大学大学院教授）
4	裁判を受ける権利と民事裁判 民事訴訟におけるコスト	憲法 32 条が保障している裁判を受ける権利の意義について、特に欧州諸国における戦後の発展などを受けて、公開原則等とも関連づけながら考える。 民事訴訟制度に要するコストとその負担の問題について、司法予算のあり方、法律扶助、弁護士費用の敗訴者負担などの個別の論点にふれながら考える。	山本　和彦	山本　和彦
5	裁判所の種類と機能	最高裁判所・高等裁判所・地方裁判所・家庭裁判所・簡易裁判所それぞれの役割と現代的な意義について、上告受理制度・人事訴訟の家裁移管・少額訴訟制度等の問題にふれながら考える。	同　上	同　上
6	裁判外紛争解決（ADR）	仲裁・調停などADRと言われる制度の現状・課題を検討し、民事訴訟の機能との関係でその充実・活性化の必要について、立法化の動き等とともに考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	民事訴訟制度の現代的機能	民事訴訟の目的について従来の議論を紹介するとともに、行政改革・規制緩和が進む新たな日本社会において民事訴訟に期待されている役割について考える。	山本　和彦	山本　和彦
8	民事訴訟制度の改革と現代的課題	民事訴訟制度について、司法制度改革の中でも言及された様々な課題について、その迅速化・国際化・専門化などの要請に応える方策について考える。	同　上	同　上
9	刑事司法制度(1) 刑事法の機能と司法制度	刑事司法制度全体の仕組みと流れを解説すると共に、そこで適用実現されることになる刑法の基本的な原則と働きについても触れる。合わせて少年非行に対する少年法の扱いについても言及する	酒巻　匡	酒巻　匡
10	刑事司法制度(2) 犯罪と捜査	犯罪捜査に関する基本的な手続の概要を解説すると共に、とくに新しい捜査手法とその法的な統制に関する立法や議論について検討する。	同　上	同　上
11	刑事司法制度(3) 犯罪と裁判	刑事裁判手続の基本的な流れについて解説すると共に証拠に基づく事実の認定や証拠法の基本原則と犯罪捜査手続との関連についても解説する。	同　上	同　上
12	刑事司法制度の改革と現代的課題	司法制度改革の中心の一つである「裁判員制度」構想の概要について説明すると共に、これに伴う刑事司法制度改革案の全体像について説明する。 合わせて諸外国の国民の司法参加制度についても紹介する。	同　上	同　上
13	法律家の種類と機能	裁判官・検察官・弁護士のそれぞれの役割と現代的な意義について、司法制度改革における様々な制度改革にふれながら考えるとともに、その他の法律関係職種にもふれる。	山本　和彦	山本　和彦
14	法学教育の改革と法曹養成制度	司法制度改革の中で最大の争点の１つとされた法曹養成制度について、歴史的な経緯や諸外国の動向などにもふれながら、新たな法科大学院・司法試験・司法修習等の意義について考える。	同　上	同　上
15	司法制度の将来展望	講義の全体を踏まえて、司法制度改革と将来のあるべき司法の姿について、両主任講師で座談会を行う。 可能であれば、司法制度改革審議会委員であった方の参加を求める。	同　上	酒巻　匡 山本　和彦

＝紛争と民法（‘０２）＝（TV）

〔主 任 講 師：　淡路　剛久（立教大学教授）〕

全体のねらい

民法の財産法の部分を講義する。対象の学生が、教養学部生であること、時間数が圧倒的に少ないことなどを考慮して、法典の体系や理論の体系から演繹的に説明する仕方をとらず、私的な争い（民事紛争）から始めて、それが民法ではどのように解決されるかの説明を通じてやや一般化し、民法を理解してもらう。以下は、テンタティブな講義概要。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	民法とはなにか（1） －私的な争いとその解決	具体例。争いには国と国、国と私人、私人間などいろいろあり、その解決の仕方も、実力行使、権威ある第三者の仲介、かつての経験、予め存在する基準などがあることを説明して、民事紛争とその近代的な解決方式としての裁判制度について述べ、民法の存在理由を明らかにし、民法が私法の原則法だといわれるゆえんであるその特徴、民法の要素（私的所有権、契約、法的人格）を説明する。	淡路　剛久（立教大学教授）	淡路　剛久（立教大学教授）
2	民法とはなにか（2） －民法と民法典	民法的な解決の基準となる制定法（民法典、特別法）、慣習法、判例、条理などを説明した上で、民法典の成立史、民法典の構成を説明する。	同　上	同　上
3	民法の主体と客体 －権利と義務、人と法人	具体例。民法的な法律関係が権利と義務によって構成されること、権利の行使と義務の履行は信義誠実にしなければならないこと、権利濫用はしてはならないこと、財産法上の権利には物権と債権があること、権利義務の主体となる資格が権利能力であることを明らかにし、人（自然人）に関する制限能力制度、法人制度について説明する。	同　上	同　上
4	加害をめぐる争い（1） －不法行為・不法行為法・過失損害賠償責任	具体例をあげて、不法行為とはなにか、不法行為法とはなにかを説明した上で、過失損害賠償責任についての 709 条の要件を説明する。因果関係、過失、権利侵害と違法性。	同　上	同　上
5	加害をめぐる争い（2） －無過失損害賠償責任と中間的責任	争いの具体例をあげつつ、中間的責任の意味を明らかにし、使用者責任、工作物責任、無過失責任に近い自動車運行供用者責任を説明し、無過失責任としては、原子力損害賠償責任、製造物責任などを説明する。	同　上	同　上
6	加害をめぐる争い（3）－不法行為責任の効果	具体例をあげて損害賠償、原状回復と差止について説明した後、損害賠償請求権の主体、損害賠償の内容を説明する。	同　上	同　上
7	契約をめぐる争い（1） －契約の成立および効果とその障害	具体例をあげて、契約はどのようにして成立するかを説明する。当事者の意思の合致、代理人による場合、無権代理と表見代理など。その効果が妨げられる場合として、公序良俗違反による無効、錯誤による無効、詐欺（・強迫）による取消を説明する。契約の種類。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	契約をめぐる争い（2） －契約の履行と不履行	具体例をあげて、契約が約束どおり履行されて（信義則を含む）契約にもとづく債権、債務が消滅する過程を説明した上で、契約が約束どおり履行されない場合に、債権者が取ることができる現実的履行の強制、債務不履行に基づく契約の解除、損害賠償について説明する。なお、消滅時効にふれる。	淡路　剛久	淡路　剛久
9	契約をめぐる争い（3） －売買	具体例をあげて、一時的債権契約の典型例としての売買についてその成立要件と効果を説明した上で、売買契約が履行されなかった場合の債務不履行について振り返り、売買の目的物に瑕疵があった場合の担保責任について説明する。	同　上	同　上
10	契約をめぐる争い（4） －賃貸借	具体例をあげて、継続的債権契約の典型例としての賃貸借についてその成立要件と効果を説明した上で、借地借家関係の争い、その解決を借地借家法を中心に説明する。	同　上	同　上
11	契約をめぐる争い（5） －消費者契約	具体例をあげて、現代的な問題である消費者問題を説明し、割賦販売法、訪問販売法、消費者契約法による解決について説明する。	同　上	同　上
12	不動産をめぐる争い（1） －物権と物権法	具体例をあげて、物権と物権法について説明した上で、物権の基本型である所有権について説明する。相隣関係、所有権の取得（取得時効を含む）、共有（マンションの法律関係を含む）、物権の妨害に対する物権的請求権など。権利濫用が適用される一場面。	同　上	同　上
13	不動産をめぐる争い（2） －土地と家屋の権利関係	具体例で不動産の権利関係をめぐる争いを示した上で、その解決、とくに不動産の対抗要件としての登記による解決を説明する。	同　上	同　上
14	担保をめぐる争い（1） －担保物権と抵当権	具体例をあげて、担保物権の概略を説明した上で、抵当権とはなにか、成立要件と効果の原則を説明し、抵当権の効力が及ぶ範囲、法定地上権、短期賃借権の保護、根抵当権制度の概略を説明する。	同　上	同　上
15	担保をめぐる争い（2） －保証	具体例をあげて、人的担保の概略を示した上で、保証の成立要件と効果を説明する。保証債務の範囲、保証債務の付従性、保証人の抗弁権、保証人の求償権など。普通の保証と連帯保証、根保証など。	同　上	同　上

＝雇用・福祉・家族と法（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　山口　浩一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：　大村　敦志（東京大学教授）〕
〔主任講師：　菊池　馨実（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

雇用・福祉・家族という３つのテーマを人間の生活関係の展開という視角からとりあげ、そこにはどのような問題があるか、法律の制度は問題の解決にどう寄与しているか、残された今後の課題はなにかといった点について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	雇用・福祉・家族―開講の辞	雇用・福祉・家族という３つのテーマをあわせてとりあげたのはなぜか、そのねらいはどこにあるのか、この講義で注目してほしいのはどういう点か、これらを開講の辞として３人の主任講師が話し合う。	山口　浩一郎（放送大学教授）	山口　浩一郎（放送大学教授） 大村　敦志（東京大学教授） 菊池　馨実（早稲田大学教授）
2	雇用と就業形態	現在はさまざまの就業形態がある時代であり、正規従業員のほかに有期契約者、パートタイマー、派遣労働者があり、外国人労働者もいる。雇用や就業形態の多様化を概観する。	同　上	山口　浩一郎
3	労働条件の決定・変更	労働条件というのは、賃金、労働時間、作業環境等働く際の中心的な条件のことである。これらがどのようにして決定されるのか、またどのようにして変更されるのか、決定と変更のプロセスを考えてみる。	同　上	同　上
4	賃金・賞与・退職金	これらはいずれも労働の対価で、労働者の日々の生活の経済的基盤をなす重要な労働条件である。法律がこれをどう取り扱っているのかを考えてみる。	同　上	同　上
5	労働時間・休日・休暇	これらはいずれも労働の長さ（量）を規制するもので、賃金等とならぶ重要な労働条件である。法律はかなり詳しい規定をおいているので、それを概観する。	同　上	同　上
6	災害と失業	雇用中でも労働者は災害や事故にあうことがあるし、企業が倒産して失職することがある。このような事態に対処するのが社会保険であり、ここでは労災保険と雇用保険についてみてみる。	同　上	同　上
7	雇用の終了	倒産や解雇がなくても、雇用はいつか終了する。定年や期間満了はその代表的な場合であるが、それ以外にもいろんな場合がある。ここではそれらを概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生きがい就労とボランティア	退職後も生きがいのために働いたりボランティアをする高齢者が多くなった。これらは雇用と同じなのか違うのか、違うとしたらどう位置づけしたらよいのか。シルバー人材センターの活動などをみながら、これらの問題を考えたい。	山口　浩一郎	山口　浩一郎
9	所得保障	国民の所得保障を目的とする社会保障制度を、年金と社会手当を中心に概観する。企業年金などにも視点を広げることにより、公私を合わせた老後所得保障法制の課題を明らかにしたい。	菊池　馨実（早稲田大学教授）	菊池　馨実（早稲田大学教授）
10	医療保障	国民の生命・健康に直接かかわる医療保障制度（医療保険など）を中心に概観する。医療費問題をめぐる複雑な問題状況の一端などを明らかにしたい。	同　上	同　上
11	介護・福祉サービス保障	最近、社会的に注目を集めている介護保険を中心とした介護・福祉サービス保障法制を概観する。障害者福祉分野における支援費支給制度などの新しい動向もフォローしたい。	同　上	同　上
12	少子高齢社会と社会保障	社会保障制度の下支えともなっている生活保護制度を概観した後、少子高齢社会におけるわが国社会保障法制の法的基盤、特徴、今後の課題などにつき考えてみたい。	同　上	同　上
13	子供の養育	子供の養育に関する親の権限・義務を中心に検討するが、学校・児童相談所などこれを補完する制度との関係にもふれたい。また、前提となる親子関係の成立についても簡単に説明する。	大村　敦志（東京大学教授）	大村　敦志（東京大学教授）
14	高齢者の扶養・援助	自律の困難な高齢者に対して家族が行う扶養・援助について検討するが、あわせてこれと密接な関連を有する相続についてもふれる。また、公的な制度との関連についても言及したい。	同　上	同　上
15	カップルの共同生活	伝統的な婚姻（結婚）のほか、「事実婚」や近年外国で立法が相次いでいる「同姓婚」など成年カップルが営む共同生活にかかわる問題をとりあげる。同時に最近の晩婚化・非婚化傾向に注目し、「家族」の意味についても考えたい。	同　上	同　上

＝商法（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　落合　誠一（東京大学教授）〕

全体のねらい

商法は、企業に関する法であり、企業組織法と企業取引法とから構成される。企業組織法の代表は、株式会社法であるから、それを中心に検討する。企業取引法では、重要な企業取引の中から伝統的なものと現代的なものの代表をいくつかピックアップしてそのダイナミックな展開を明らかにしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	商法の概観	これから勉強する商法の全体を概観する。商法の森に分け入る前に森全体を鳥瞰しておこうというわけである。商法と民法との違いを明らかにし、商法という学問分野の全体的な構成を概観する。	落合　誠一（東京大学教授）	落合　誠一（東京大学教授）
2	企業をめぐる利害関係者と会社形態	わが国の会社種類・現状を確認したうえで、企業形態としての会社の意義をほかの形態である個人企業と比較・検討し、企業をめぐる所有者、債権者、従業員などの利害関係者の利害状況を明らかにする。	同　上	同　上
3	株式会社の基本的特色	会社の中でも圧倒的な重要性をもっている株式会社の基本的な特色（株主利益最大化原則、株主有限責任、コーポレートガバナンス、資金調達・資本等）について概観する。	同　上	同　上
4	コーポレート・ガバナンス－経営の決定と責任（1）－	取締役会、その構成員としての取締役、業務執行を行う代表取締役あるいは委員会等設置会社において執行役を対象にして、会社の経営は、誰がいかにして行うのか、その場合の問題点はなにか等を２回かけて検討する。	同　上	同　上
5	コーポレート・ガバナンス－経営の決定と責任（2）－	前回から引き続いての検討を行うが、取締役・執行役等の責任が中心となる。	同　上	同　上
6	コーポレート・ガバナンス－経営監督－	会社経営が効率的・公正に行われるための監視の仕組みについて検討する。具体的には、監査役又は委員会等設置会社の各種委員会、会計監査人、検査役をとりあげる。	同　上	同　上
7	コーポレート・ガバナンス－株主の役割－	会社の出資者である株主の地位・権利・義務をみたうえで、株主総会、株主代表訴訟等コーポレートガバナンスにおいて株主がいかなる役割を果たしているか、また果たすべきかを検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	会社の資金調達	会社の資金調達における資本市場の意義をみたうえで、新株発行、社債について検討する。この関係で会社法と密接な関係にある証券取引法の開示規制・不公正取引規制についてもふれる。	落合　誠一	落合　誠一
9	会社の財務・利益分配	会社の財務規制としての企業会計法の意義をみたうえで、資本・資産・負債、計算書類、利益分配、損失処理の規制を検討する。	同　上	同　上
10	会社組織の変動	会社の設立、企業再編（合併・買収、分割、株式交換）、定款変更、組織変更、解散・清算などの会社組織の変動を検討する。	同　上	同　上
11	会社グループ	現代の会社は、単独ではなくグループとして活動する場合が多いが、会社グループの規制の現状と将来の規制のあり方を検討する。	同　上	同　上
12	企業取引法の概観	企業取引について商法は、どのような規制をしているかを概観し、その規制のあり方の問題点を検討し、次回以降の代表的な企業取引をピックアップしての具体的検討の導入とする。	同　上	同　上
13	伝統的企業取引（1）	伝統的な取引の代表として、国際売買取引、運送取引、保険取引、荷為替信用状取引を２回にわたってとりあげる。この４つの取引は、国際売買を中心に展開される有機的な連関性をもつ。	同　上	同　上
14	伝統的企業取引（2）	前回に引き続きこの４つの取引を検討するが、この検討を通じて国際的な企業取引のダイナミックな展開を理解する。	同　上	同　上
15	現代的企業取引	最終回は、現代的企業取引の代表として、資産の証券化（セキュリタイゼーション）等の問題をとりあげて検討する。	同　上	同　上

＝市民生活と行政法（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　芝池　義一（京都大学教授）〕

全体のねらい

私たち市民の生活上の関係は、一般の個人を相手方とすることもあれば、企業を相手方とすることもあるが、さらに、行政を相手方とすることがある。私たち市民にとって、行政との関係はかなり大きな比重をもっている。そして、この市民と行政との関係は、法律・条例などの法によって規律された関係である。この市民と行政との法的な関係の有り様（ありよう）を描き出すことが、本講義の課題である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	行政法と行政活動	まず、行政法とはどのような性格の法か、どのような形で存在するか（存在形式）、どのような種類があるか、といったことを説明することによって、行政法についてのイメージを形成する。そのあと、行政法が規律の対象とする行政活動の主体（国・地方自治体など）および行政活動の種類について説明する。	芝池　義一（京都大学教授）	芝池　義一（京都大学教授）
2	法治主義・違法性・行政裁量	まず、行政法における最も基本的な原則である法治主義の原則について説明する。そのあと、違法性の問題に入り、それとの関連で、とくに行政に裁量が認められている場合のその限界について説明する。	同　上	同　上
3	行政処分の成立と効力	この週から、行政活動の説明にはいるが、最初に取り上げるのは、行政活動のうちでも最も重要な役割を果たしている行政処分である。この週では、行政処分の成立、それに関連する行政庁の審査応答義務、成立した行政処分に認められる効力について説明する。	同　上	同　上
4	行政処分の職権取消しと撤回	この週も引き続き、行政処分の法理について説明する。具体的には、違法に行われた行政処分の取消し（行政庁による取消し）、および適法に行われた行政処分の撤回について説明する。	同　上	同　上
5	行政による強制と制裁	国民が行政法令や行政の命令に従わなかった場合、１つには、行政による強制執行が行われる。また、国民に対して、制裁が加えられる場合がある。第５週では、これらについて説明する。	同　上	同　上
6	行政指導	行政の活動のうちの最も重要なものは、第２週から第４週で説明する行政処分であるが、わが国では、行政指導も大きな役割を果たしている。行政指導とは、通例指導・勧告・助言などと呼ばれるものである。行政指導については、行政手続法に規定があるので、それに即して説明する。	同　上	同　上
7	行政手続法	行政手続とは、行政の意思決定に先立ち行われる手続であるが、その種別についてまず述べ、そのあと、行政手続法などの法律に即して行政手続の制度について説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報公開法	情報公開は、近年とくに重視されるようになってきている法的価値である。この情報公開については、まず地方自治体で情報公開条例が制定されたが、1999 年、国において情報公開法が制定されたので、これに即して情報公開制度について説明する。	芝池　義一	芝池　義一
9	行政訴訟法総説	この第 9 週から最後の第 15 週まで行政救済法について説明する。行政救済法とは、行政の活動により国民が権利や利益を侵害された場合の救済に関する法である。第 9 週では、まず、行政救済法全般について簡単に説明したあと、行政訴訟の形式について概観する。	同　上	同　上
10	取消訴訟の機能と訴訟要件	行政訴訟のうち最も重要な訴訟は取消訴訟であり、取消訴訟において裁判実務上大きな問題になっているのはその訴訟要件である。そこで、取消訴訟の機能について述べたあと、訴訟要件の問題に入り、取消訴訟の対象（行政処分）、原告適格および訴えの客観的利益について説明する。これらは、取消訴訟を適法にするための要件であるが、今日のわが国では大きな論点になっているものである。	同　上	同　上
11	取消訴訟の判決	取消訴訟が訴訟要件を備え、適法である場合、裁判所は訴えの中身（本案）について審理し、判決を下すことになる。この判決にはどのようなものがあり、どのような効力を有するかが説明される。	同　上	同　上
12	取消訴訟における仮の権利保護	一般に訴訟が判決によって決着がつくまでには、長い年月を要することが少なくない。このために、民事訴訟の世界では、仮処分などの制度がある。行政訴訟の世界では、仮処分は大幅に制限され、執行停止の制度が設けられているので、これについて説明する。	同　上	同　上
13	公権力の行使と国家賠償責任	この第 13 週と第 14 週には、行政救済のうちの金銭による救済である損害賠償について説明する。行政の世界では、民法の損害賠償についての規定が適用されることもあるが、民法とは別に、国家賠償法という法律が制定されている。第 13 週では、この国家賠償法が定めている公権力の行使に対する賠償責任の制度（国家賠償法 1 条）について説明する。	同　上	同　上
14	営造物の設置管理と国家賠償責任	第 13 週に引き続いて、国家賠償責任の制度について説明するが、今回取り上げるのは、いわゆる営造物（道路や河川など）の設置・管理に瑕疵があった場合の損害賠償責任すなわち営造物管理責任の制度（国家賠償法 2 条）である。	同　上	同　上
15	損失補償法	国・公共団体が適法な活動により国民の権利や利益を侵害した場合に、国・公共団体が行う損失の補填を損失補償といい、これについて説明する。この損失補償については、国家賠償法のような一般的な法律がないので、一方では、憲法 29 条 3 項の解釈、他方で、個別法律における補償規定の解釈が問題になる。	同　上	同　上

＝刑法（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　川端　博（明治大学教授）〕

全体のねらい

犯罪と刑罰に関する法律である刑法は、私達の日常生活に密接にかかわる法典である。それゆえ、刑法は、市民に理解され行為規範として機能すべきであるにもかかわらず、刑法学は難解であるとの印象を与えている。そこで、本講義では、犯罪の理論的把握、刑罰の根拠や刑法の機能などの基本的問題について分かりやすく説明して、刑法学が誰にも理解できる身近な法律学であることを明らかにしていきたい。刑法典を中心に講義を進めていくが、経済刑法やコンピュータ犯罪法など社会生活上、重要な意義を有する特別刑法についても触れることとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	刑法とは何か	本講においては、刑法の意義について法規範としての特徴の観点から説明して、刑法の全体像を明らかにする。刑法の種類を説明した上で、基本法たる刑法典の歴史とその内容を明らかにする。犯罪の法的効果である刑罰についても概説する。 1　刑法とは何か 2　刑法の種類 3　刑法典の歴史 4　刑罰の種類と内容	川端　博（明治大学教授）	川端　博（明治大学教授）
2	刑法はいかにして実現されるか	本講においては、実体法としての刑法が現実にどのような手続きによって「適用」されるのかについて説明する。まず、近代刑法における刑事裁判の基礎理論を講述した上で、刑事手続の概要を明らかにする。 1　刑事裁判の基礎理論 2　刑事手続の概要 3　刑法の基本原則	同　上	同　上
3	刑法の基本原則	本講においては、刑法の基本原則を説明する。まず近代刑法の大原則である罪刑法定主義の意義と思想的背景を明らかにした上で、その論理的必然的結果として認められる派生的原則について講述する。 1　罪刑法定主義の意義と思想的背景 2　慣習刑法の排斥 3　刑法の効力の不遡及 4　類推解釈の禁止 5　明確性の原則 6　刑罰法規の適正	同　上	同　上
4	刑法の機能と適用範囲	本講においては、まず刑法の機能について説明する。制裁の手段として刑罰を用いる刑法が有する３つの機能とその相互関係を明らかにする。その後に、刑法の適用範囲について講述する。刑法の適用範囲は、刑法の効力の問題にほかならないから、その観点からも説明する。 1　規制的機能 2　秩序維持機能 3　自由保障機能 4　時間的適用範囲 5　場所的適用範囲 6　人的適用範囲	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	犯罪論の体系	刑法は犯罪論と刑罰論とから成る。本講においては、なぜ犯罪論が必要となるか、犯罪論にはどういうものがあるのかについて説明する。そして犯罪論の概要を講述して、本講以降の理解に役立てるようにする。 1　犯罪論とは何か 2　犯罪論の概要	川端　博	川端　博
6	構成要件該当性	本講においては、犯罪の第1の成立要件である構成要件該当性について詳しく説明する。まず構成要件の概念と機能について述べた後、構成要件の重要な諸要素について説明する。すなわち、行為、主観的要素たる故意及び過失、錯誤、不作為について詳しく講述する。 1　構成要件の理論 2　行為論 3　構成要件的故意 4　構成要件的事実の錯誤 5　構成要件的過失 5　不作為犯論	同　上	同　上
7	違法性	本講においては、犯罪の第2の成立要件である違法性について説明する。まず違法性の実質を明らかにした上で、違法性に関する基本概念について概説する。違法性を阻却すべきか否かが検討されるが、それは観点を変えて言えば、構成要件に該当する行為の正当化の可否の問題にほかならない。代表的な正当化事由の種類と根拠を明らかにする。 1　違法性の基本概念 2　正当化事由の意義と種類 3　一般的正当行為 4　正当防衛 5　緊急避難 6　自救行為 7　正当化事情の錯誤	同　上	同　上
8	有責性	本講においては、犯罪の第3の成立要件である有責性・責任について詳しく説明する。まず責任に関する基本概念について概説した上で、責任の前提である責任能力、責任の要素である違法性の認識とそれを阻却する違法性の錯誤、責任を限界づける期待不可能性について詳細に講述する。 1　責任の基本概念 2　責任能力 3　違法性の認識と違法性の錯誤 4　期待可能性	同　上	同　上
9	未遂と共犯	犯罪遂行の態様ないし構成要件の修正形式としての未遂及び共犯について詳しく述べる。まず犯罪を完全に実現する形態である既遂犯に対して、未遂犯は、犯罪を不完全に実現する形態であるから、その処罰根拠と要件が問題となる。また共犯は、複数の者が犯罪の遂行に関与する形態であるから、単独犯とは異なる取扱いがなされる。そこで共犯原理を明らかにする必要があるのである。 1　未遂犯 2　共犯	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
10	罪数と刑罰	本講においては、犯罪の成立要件を具備して犯罪の成立が認められた後、その個数を問題にする罪数論と犯罪の法律効果である刑罰に関する本質を問題にする刑罰論について詳しく説明する。また刑の適用についても講述する。 1　罪数論 2　刑罰論 3　刑の適用	川端　博	川端　博
11	個人的法益に対する罪（1）――生命・身体に対する罪	本講においては、まず刑法各論の意義と特徴を明らかにする。その後、個人的法益に対する罪として、生命・身体に対する罪について、各種犯罪類型の特徴と内容を講述する。 1　刑法各論の意義 2　生命に対する罪 3　身体に対する罪	同　上	同　上
12	個人的法益に対する罪（2）――自由・名誉等に対する罪	本講においては、個人的法益に対する罪のうち、自由に対する罪、住居侵入罪、名誉に対する罪、信用・業務に対する罪、秘密に対する罪について、各犯罪類型の特徴と内容を講述する。 1　自由に対する罪 2　性的自由に対する罪 3　住居侵入罪 4　名誉に対する罪 5　信用及び業務に対する罪 6　秘密に対する罪	同　上	同　上
13	個人的法益に対する罪（3）――財産に対する罪	本講においては、個人的法益に対する罪のうち財産犯について詳しく説明する。まず財産犯一般について総論的に概説した上で、各犯罪類型の特徴と内容を明らかにする。財産犯は、古い犯罪類型から非常に新しい犯罪類型まで包含しており、財産犯論においてはきわめて精緻な解釈論が展開されているので、各論点の相互関係についても講述する。 1　刑法における財産の保護 2　財産犯の分類 3　窃盗の罪 4　強盗の罪 5　詐欺及び恐喝の罪 6　横領罪及び背任罪 7　盗品等に関する罪 8　毀棄及び隠匿の罪	同　上	同　上
14	社会的法益・国家的法益に対する罪	本講においては、社会的法益に対する罪及び国家的法益に対する罪について概説する。社会的法益に対する罪として、公共危険罪、各種偽造罪及び風俗犯の犯罪類型と内容を明らかにする。国家的法益に対する罪として、特に国家の作用に対する罪について詳しく講述する。 1　公共の安全に対する罪 2　公共の信用に対する罪 3　風俗に対する罪 4　国家の作用に対する罪	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	コンピュータ犯罪と経済犯罪	本講においては、コンピュータ犯罪と経済犯罪について説明する。コンピュータの普及には目覚しいものがあり、現在社会はまさにコンピュータ社会といえる状況にある。コンピュータ・システムは重要な役割を果たしており、それに対する侵害行為は放置されるべきではない。そこで刑法典の中にもコンピュータ犯罪が新設されており、さらにコンピュータ犯罪に関する特別刑法もある。コンピュータ犯罪の特徴及び各種犯罪類型について講述する。 ところで、経済取引に関して刑法典は、一定の観点から規制を加えている。特に財産犯として規定されている犯罪類型も、経済刑法の視点から捉え直すと、新たな様相を見せる。その点を明らかにした上で、特別刑法としての経済刑法について概説し、各種の犯罪類型とその内容について講述する。 1　コンピュータ犯罪の特徴 2　電磁的記録不正作出罪 3　電子計算機損壊等業務妨害罪 4　電子計算機使用詐欺罪 5　支払用カードの偽造・変造 6　不正アクセス禁止法の成立 7　経済刑法 8　自由で公正な競争秩序を侵害する罪 9　證券取引法における罰則 10　商法罰則の罪 11　倒産犯罪	川端　博	川端　博

＝　経済法（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　厚谷　襄児（北海道大学名誉教授）　〕

全体のねらい

①経済法の生成と変遷から、現在の経済法の基本法が独禁法であることを明らかにする。
②独禁法の目的、規制の対象等その概要を解説する。
③独禁法を広く理解するため、その補完法、独禁法と知的財産権・政府規制制度との関連、海外諸国（アメリカ、EU、韓国）の独禁法について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	経済法の生成	経済法の意義、経済社会の仕組み、経済社会の法的・制度的枠組み、経済法の生成と変遷、日本への経済法の導入とその発展	厚谷　襄児（北海道大学名誉教授）	厚谷　襄児（北海道大学名誉教授）
2	独占禁止法の制定	財閥の組織とその解体、経済法の意義、独禁法を支える考え方、　市場構造の変容、市場機能と法規制	同　上	同　上
3	独占禁止法の目的、構成および沿革	独禁法の目的、構成、沿革	同　上	同　上
4	カルテルの規制（１）-不当な取引制限の禁止	カルテルとは、不当な取引制限の禁止、	同　上	同　上
5	カルテルの規制（２）-事業者団体によるカルテルの規制と規制の手法	事業者団体によるカルテルの規制、カルテルの規制の手法	同　上	同　上
6	私的独占の禁止	私的独占の意義、成立要件、規制の手法	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	不公正な取引方法の禁止（1）	不公正な取引方法の意義と規制の体系、差別的取扱い（取引拒絶、差別価格、不当な差別取扱い）、不当な対価取引（不当廉売、不当高価買い入れ）、不当な顧客誘引・取引強制（ぎまん的顧客誘引、不当な利益による顧客誘引、抱合せ販売・取引強制）	厚谷　襄児	厚谷　襄児
8	不公正な取引方法の禁止（2）	事業活動の不当な拘束（不当な排他条件付き取引、再販売価格維持行為、不当な拘束条件付き取引）、取引上の地位の不当利用、取引上の優越した地位の濫用）、 取引妨害・内部干渉（競争者への取引妨害、競争会社への内部干渉）、 規制の手法	同　上	同　上
9	経済力集中の規制	市場集中と一般集中、市場集中規制（会社の合併、会社分割、営業の譲受け等、 株式の取得・所有、独占的状態）、一般集中規制（市場支配力過度集中会社、 銀行・保険会社の議決権保有）	同　上	同　上
10	独占禁止法の国際的側面	国際カルテルへの参加の禁止、国際的契約と不公正な取引方法、独占禁止法の域外適用、独占禁止法の国際協力、世界の独占禁止法（概観、アメリカ、EU、韓国の独占禁止法）	同　上	同　上
11	表示・景品類および下請取引の規制	景品表示法の目的、不当表示の規制、不当景品類の提供の規制、公正競争規約制度、規制手続、下請法の目的、規制の対象、規制の仕組み	同　上	同　上
12	独占禁止法の運用－運用機関・権限および手続	運用機関－公正取引委員会（組織・構成・権限、事務総局）、違反事件処理手続 、審決の司法審査、刑事罰、無過失損害賠償責任、私的差止請求制度	同　上	同　上
13	知的財産権と独占禁止法	知的財産権法（特許権、ノウハウ、商標権、著作権）と独占禁止法	同　上	同　上
14	規制産業と独占禁止法	市場の失敗と政府の失敗、政府規制の緩和、個別規制産業と独占禁止法（電力事業、電気通信事業）	同　上	同　上
15	競争法としての独占禁止法の展望と課題	自由経済社会の性格、 グローバリゼーションと市場経済、経済社会における自由と公正、誌上討論（慶應義塾大学経済学部教授中澤敏明先生、北海道大学大学院法学研究科教授長谷川晃先生）	同　上	同　上

＝国際関係法（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　横田　洋三（中央大学教授）〕

全体のねらい

今日の国際関係は、かつてのように国家間関係のみを対象とするだけではすまなくなった。人も物も情報も国境を越えて移動することが日常的になった結果、この動きを規律する法関係も複雑になり、従来の国家間国際法だけでは捉えきれなくなった。国際関係法というより広い枠組みで現実の国際問題を捉える必要が生じてきている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際関係法の枠組み	国際関係を規律する法の総体を国際関係法として見ると、それには国家間関係を原則として扱う国際法、それぞれの国家の内部の法関係を扱う国内法、それに国連を始めとする国際機構の法体系がある。それがどのように今日の国際関係を規律しているかを考察する。	横田　洋三（中央大学教授）	横田　洋三（中央大学教授）
2	国際法の成立	国際関係法の中核をなす国際法の成立の経緯を16、7世紀のヨーロッパの政治的、経済的、社会的状況を踏まえて検討する。とりわけ、初期の国際法の成立に貢献したスアレス、ゲンチリス、グロティウスなどの学者の考え方を中心に検討する。	同　上	同　上
3	国際法の発展	18、9世紀の国際法は産業革命や市民革命の影響を受けて、大きく発展する。この時期の国際法はヨーロッパの国際法から世界の国際法へ、自然法から実定法へ、そして君主間の法から国民間の法へと発展を遂げる。この変化をバッテルらの学説を中心に検討する。	同　上	同　上
4	国際社会の組織化と法	20世紀に入ると国際社会は国際連盟、国際労働機関、国際連合、ユネスコなどの国際機構を設立し、諸国に共通の問題に組織的に対応するようになる。この国際社会の組織化の中で、国際法がどういう役割を果たし、どのような変容を遂げてきたかを考察する。	同　上	同　上
5	国際法と国内法の関係	近年の国際関係は、人、物、カネ、サービス、情報などが国境を越えてひんぱんに行き来するようになり、その法的規律も複雑化した。そこには、国際法と国内法が微妙にからみあう複合構造が見られる。この二つの法体系の関係を理論的、実際的に検討する。	同　上	同　上
6	国際機構法の意義と役割	国際機構の発達によって今日の国際関係は国際法、国内法に加えて、国際機構が定立する国際機構法によっても規律されるようになった。これまで国際法と国内法の二分論のもとで軽視されてきた国際機構法の意義と役割を正面から扱う。	同　上	同　上
7	戦争と法	国際法は戦争をなくし平和な諸国家間の関係を創出する目的で作られた。しかし実際は戦争そのものは禁止できず、戦争の仕方や攻撃目標を限定する規則ができた。国際連合成立後戦争は原則禁止されたが、戦争はなくなっていない。この戦争と法の関係を論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	平和維持活動と法	世界平和実現のための国連の体制は、元来は侵略者を力で押さえ付ける方式であった。ところが冷戦期には5大国の対立によってこの方式は機能せず、それに代わる平和維持活動が考案され各地に展開された。この平和維持活動の可能性と限界を法的に分析する。	横田　洋三	横田　洋三
9	開発援助と法	1960年代以降に植民地地域が独立を果たし、これらの新興独立国に対する開発援助の問題が国際社会の重要な課題となった。開発途上国に対する二国間および多数国間機関による資金援助、技術援助を規律する法を論じ、その問題点について考察する。	秋月　弘子（亜細亜大学助教授）	秋月　弘子（亜細亜大学助教授）
10	国際企業活動と法	経済のグローバル化に伴って企業活動を規律する法関係も複雑化した。一国の租税法や独占禁止法が領域を越えて適用され、また貿易や金融に関する国際法が国内の企業活動に影響を及ぼすようになった。国際化時代の企業活動と法の関係を具体例をあげて検討する。	横田　洋三	横田　洋三
11	人権の国際法的保護	国家と国家の関係を主に規律してきた国際関係法は、私たち個人の人権をも規律する法へと展開している。第二次世界大戦後に急速に拡大・発展した人権に関する国際法について、普遍的レベルおよび地域的レベルに分けて検討し、さらに国際機構による保障の現状と課題を考察する。	滝澤美佐子（中部大学助教授）	滝澤美佐子（中部大学助教授）
12	人道的支援と法	地震などの自然災害や内戦などの紛争による犠牲者は、身体の安全や保護のための支援を最も必要とする。他国の犠牲者に対して日本あるいは国際機構が行う支援に関して、内政不干渉原則や根拠となる法律との関係でさまざまな法的検討課題があることを論ずる。	同　上	同　上
13	国際犯罪と法	交通手段の発達によって犯罪も国際化した。海賊は国際犯罪として古くから取り締まられてきたが、近年はハイジャック、テロ、集団殺害、大規模な人権侵害などが国際犯罪として国際法、国内法、国際機構法のそれぞれによって取り締られるようになった。	横田　洋三	横田　洋三
14	地球環境と法	地球環境問題はオゾン層破壊や地球温暖化の事例に代表されるように、各国内の産業活動の影響が地球環境全体に及ぶ点に特徴がある。地球環境問題に取り組むための国際的な環境基準の定立、各国内での履行、および、国際的な履行監視などの問題を考察する。	秋月　弘子	秋月　弘子
15	国際社会の将来と法	国際社会の組織化は今後ますます進展する。また個人、企業、非政府機構（NGO）の国際場面での重要性も一層増すと思われる。この中で国家主権を中心に形成されてきた国際社会の法秩序は今後いかに変容するかを考察する。	横田　洋三	横田　洋三

＝ヨーロッパ政治史（'０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：平島　健司(東京大学大学院教授)〕
〔主任講師：飯田　芳弘(学習院大学教授)〕

全体のねらい

近代から現在に至る西欧の政治発展を、国家の観点から考える。西欧における国家は、民主政治を実現する上での枠組みであると同時に、経済的繁栄と社会的公正を確立するための装置でもあった。しかし、第２次大戦後に開始され、グローバル化とともに加速された国家統合は、それを推進した国家を逆説的に相対化しつつある。西欧諸国家がたどった多様な歴史的発展と、グローバル化と国家統合の中で変容するその姿をたどる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	問題の設定と全体の構成	まず、講義全体の構成を時間軸に沿って確認する。民主化や産業化の過程において変化した国家と社会の関係の観点から、フランス革命から第１次大戦前後、戦間期、大恐慌とファシズム、第２次大戦後の復興と高度成長、70年代、80年代以降の時期に区分する。	平島　健司（東京大学大学院教授）	平島　健司（東京大学大学院教授） 飯田　芳弘（学習院大学教授）
2	ヨーロッパにおける国家建設と近代初期の国家	近代化開始までのヨーロッパにおける国家形成を概観する。ヨーロッパが一定の領域を支配する国家によって分割されていく過程を、国家構造の特徴（集権性や連邦制的性格）に注目しながら考察したのち、各国家に成立した政治体制を、議会や官僚制の地位・役割に着目して比較する。	飯田　芳弘（学習院大学教授）	飯田　芳弘
3	フランス革命と産業革命	フランス革命・ナポレオン改革と産業革命を、19世紀の国家と社会の関係を形作る二つの重要な要因ととらえ、それらの各国への影響－体制の議会化・国家官僚制による社会改革・ナショナリズムの動員や、産業化の時期に応じて異なった各地の国家の役割－を比較考察する。	同　上	同　上
4	ブルジョワと自由主義の時代	国家と社会を改革する19世紀最大のプロジェクトとしての「市民社会」の理念が、「二重の革命」の影響下におかれた各国において、誰によって、またどの程度まで実現したのかを比較考察する。とくに、その最も重要な推進勢力となった、国ごとに多様な自由主義の台頭と変質に注目する。	同　上	同　上
5	「国民国家」の時代	19世紀後半にショナリズムによって正統化されるようになった国家について、とくにナショナリズムと結びついた自由主義者が求めたドイツとイタリアの統一国家の性格を比較しながら考察する。両国の市場統合と国家統一の関係、国家構造と政治体制の連関、「国境」や「市民権」の概念の特徴に注目する。	同　上	同　上
6	自由主義国家の変質－保護主義と初期社会政策	19世紀後半の自由主義的国家の変容を考察する。1870年代の大不況にともなう保護主義・干渉国家への転換、産業化の進展や労働者階級の台頭を背景とする福祉政策の開始などにみられた各国の対応を比較したのち、この時期の対応がその後の各国における国家と社会の関係に与えた影響を検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	政治社会の変容と議院内閣制化	世紀転換期以降に急速に進捗した、政治の大衆化による国家と社会の関係の変化について考察する。各国における古典的議会政治の変容や議院内閣制化問題を比較検討したのち、市民社会における軍事的価値や急進的なナショナリズムの広がりに注目し、総力戦を準備した各国社会の変容について考える。	飯田　芳弘	飯田　芳弘
8	第一次世界大戦と戦後体制	第一次大戦後、ほぼすべてのヨーロッパの国は民主体制をもつようになった。大戦下の国家の社会への介入体制を概観したのち、戦後に生まれた各地の民主体制の特徴を、総動員体制の遺産、社会集団間の「同権」、「民意」と議会との関係、大統領制への期待、団体と議会との関係などに注目して検討する。	同　上	同　上
9	経済危機と政治	世界大恐慌への各国の対応を検討する。両大戦間期の各国の民主体制の命運を整理したのち、民主体制を維持しえた国々でみられたプラニスムやケインズ主義的政策による国家介入を検討する。また、農民や労働者を統合した連合体制が、戦後の民主体制を準備した事例を検討する。	同　上	同　上
10	戦後復興、高度成長と福祉国家の建設	戦争による破壊を克服した各国は、政治体制と政治経済の安定の上に、さまざまなタイプの福祉国家の建設を進めた。その類型に注目しつつ、さまざまな福祉国家体制の安定を可能にした共通の条件（冷戦やアメリカを基軸とする国際通貨、自由貿易体制など）について考える。	平島　健司	同　上
11	ローマ条約への道	ドイツやフランスなど西欧六カ国は、福祉国家体制を築く一方で、石炭鉄鋼の一セクターから経済統合そのもののへと共同体の建設に着手した。統合の条件、構想、制度について説明する。	同　上	同　上
12	1970 年代の国家と社会－オイルショックへの対応	1973 年の第 1 次オイルショックに直面した各国は、物価と雇用の安定を維持するための対応をせまられた。その対応の成否と、国家と社会団体の間に築かれたコーポラティズム的枠組みとの連関を比較検討する。また、低成長時代に入った各国で生じた、国家に対する社会の意識変化について考える。	飯田　芳弘	同　上
13	1980 年代の国家と社会－新自由主義の台頭	80 年代のイギリスのサッチャー政権下の新自由主義的改革は戦後福祉国家に対する最も大胆な挑戦であったが、大陸の右派政権は市場原理主義をイギリスほどに貫徹できなかった。この相違を、非社民陣営のイデオロギー的性格や政権の政策的行動半径を制約する制度的要因の違いに注目して検討する。	同　上	同　上
14	1990 年代の国家と社会－グローバル化と統合の中の福祉国家	進展する統合・冷戦の終焉・グローバル化という大きな変化の中でヨーロッパの国家・民主体制が経た変容について考察する。市場統合とその後の統合過程を概観したのち、各国の議会・政党政治の変容（それを補完するリンケージの模索の動き）と福祉国家の構造的な変容について考える。	同　上	同　上
15	総括と展望－国家とEU	西欧諸国は、少子高齢化やポスト産業社会への移行という長期的問題に加え、安全保障などの新たな問題にも直面している。その上、東欧を初めとする周辺諸国の加盟によって、EU も質的転換を遂げようとしている。近代以降の長期的歴史過程の中で形成されてきた国家の将来を展望して総括とする。	平島　健司	平島　健司 飯田　芳弘

＝比較政治学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　眞柄　秀子（早稲田大学教授）〕
〔主任講師：　井戸　正伸（駒澤大学教授）〕

全体のねらい

本コースの目標は、比較政治学の基本的枠組みを理解することです。理解を深めるために、先進諸国を中心とした世界各国の政治を、特に政治制度と最近20年間の政治変容に焦点を当てて考察します。また同時に各国政治経済のグローバル化に関しても検討します。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	比較政治学とは何か	比較政治学とは、政府と社会の関係について理論化し，各国政治の現実を検討する学問です。古典的なイーストンの「システム理論」を紹介し，比較政治学の研究方法である「比較メソッド」および変数中心アプローチについて述べたうえで，最新の研究テーマとアプローチを概観します。	井戸　正伸（駒澤大学教授） 眞柄　秀子（早稲田大学教授）	眞柄　秀子（早稲田大学教授）
2	政治制度	民主主義の基本的タイプである議会制と大統領制，そして両者の折衷タイプである半大統領制のそれぞれについて，その特色および長所，短所を検討します。さらに，民主主義諸国の政治制度の根幹をなす議会について，その構成，特色について検討します。	井戸　正伸	井戸　正伸
3	政治文化	冷戦終結以後，政治文化のあり方が各国政治に与えるインパクトが注目されています。ここでは，アーモンド＝ヴァーバの市民文化に関する古典的研究から始まり，近年におけるソーシャル・キャピタル論や宗教，アイデンティティー形成と民族紛争との関連性をめぐる論争などを紹介します。	同　上	同　上
4	政治体制（1）――非民主的体制	今日の世界においても，多くの人々は非民主的体制の下で暮らさざるを得ない状況にある。ここでは，非民主的体制にもいくつかの変種があり，それぞれ異なる政治力学が働いていることを概観します。	同　上	同　上
5	政治体制（2）――現代民主政	現代におけるデモクラシーとは何か？現代における民主主義諸国が，合意と対決の二つの軸をめぐり大きく異なる二つのシステムに分類されることを説明し，これら二つのデモクラシーのあり方がそれぞれ有する長所，短所について考えていきます。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	民主化理論（1）――移行の力学	世界的な民主化の潮流について理論的に検討します。各国は非民主的体制から民主政へ，どのような経路をたどって移行したのか。その力学に関する主要な理論枠組みを検討します。	眞柄　秀子	眞柄　秀子
7	民主化理論（2）――経済発展とデモクラシーの質	政治体制の違いは経済にどのような影響を与えているのか，また，各国経済の豊かさは政治体制にいかなるインパクトを与えているのかを検討します。さらに移行後の各国のデモクラシーは，いかなる条件を満たせば確立されたとみることができるのかを探ります。	同　上	同　上
8	政党と政党システム	政党とは何か。社会学的アプローチから最近の経済学的アプローチへの変化を概観します。さらに，西ヨーロッパを中心に，各国政党システム形成の歴史的背景を学びます。また，比較政治学では政党間のイデオロギー上の違いがどのように測定されているのかを検討します。	同　上	同　上
9	政治経済（1）――政府・市場関係	政治構造が経済にいかなる影響を与えているかを，北欧，大陸小国にみられるコーポラティズム型政治経済システム，先進諸国における金融レジームと団体交渉構造の相互作用に関する最新の研究を紹介する中で，検討します。	井戸　正伸	井戸　正伸
10	政治経済（2）――さまざまな資本主義	調整型市場経済と自由主義的市場経済はどのように異なるのか。どちらがより優れた資本主義なのか。グローバリゼーションのもと，これら二つのタイプの資本主義は将来どうなるのか。最近の生産レジーム論を中心に，これらの問題を検討します。	同　上	同　上
11	政治経済（3）――政権党と経済政策	政権交代が各国政府の経済政策にどのような違いをもたらすのかを検討します。また，先進各国の戦後から1970年代までの主要政策理念と，1980年代以降の主要政策理念の変化とその意味についても概観します。	眞柄　秀子	眞柄　秀子
12	福祉国家（1）――発展過程	戦後の先進諸国において，福祉国家がいかに発展してきたのか，また現在どのような問題に直面しているのかを，福祉国家分析の主要枠組みを検討することによって考えます。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	福祉国家（2）――再建の模索	福祉削減の政治とはいかなるものだったのか。福祉国家の危機に直面した政府の対応の違いは，いかなる要因によってもたらされているのか。新しい主要議論を紹介し，アメリカ，イタリア，イギリスなどの具体的事例を参考にしながら考えます。	眞柄　秀子	眞柄　秀子
14	選挙と民主的アカウンタビリティ	現代政治学では政府のアカウンタビリティをどのように定義しているのかを学びます。また，重要な政策転換がなぜ起こらないのか，選挙時の公約はなぜ破られるのか，選挙民は十分な情報のもとに適切な選択をしているのか，といった問題に関して最新の理論に沿って検討します。	同　上	同　上
15	グローバリゼーションと新しい潮流	グローバリゼーションは国家の役割を減少させていくのか，あるいは逆に増大させるのか？現在，大きな議論の対象となっているこの問いについて考えていきます。また先進各国における脱工業化の潮流のなかで，自己実現・自治の要求・ジェンダー・エコロジーなどの新しい争点や，女性・若者・外国人などの新しいアクターがいかなるインパクトを与えているのかも検討します。	眞柄　秀子 井戸　正伸	井戸　正伸

＝第三世界の政治（‘０５）＝（Ｒ）
－　パレスチナ問題の展開　－

〔主任講師：　高橋　和夫（放送大学助教授）　〕

全体のねらい

パレスチナ問題という発展途上世界を代表する地域紛争の歴史的な展開を振り返りつつ、その将来を展望する。その過程を通して、大国の関与、様々なイデオロギーの興亡、民族主義の相克、人権思想の広がりなど現在の第三世界の政治を特徴付ける要因を現実の政治の中に位置づける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	パレスチナへ	ヨーロッパにおけるユダヤ人迫害の歴史を踏まえつつシオニズムの発生と発展を振り返る。その焦点はパレスチナという土地を巡るシオニストとパレスチナ人の対立である。	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
2	戦うユダヤ人国家	イスラエルの成立から 1956 年のスエズ動乱を経て 1967 年戦争に至る時期の情勢の展開を論じる。キーワードを並べれば、ナセル、アラブ民族主義、スエズ運河国有化、6 日戦争である。	同　上	同　上
3	アラブ世界の反撃	第三次から第四次中東戦争の時期を振り返る。1967 年の敗戦後に歴史の中央舞台に登場したパレスチナ解放運動の動向が、そのポイントである。さらに、第四次中東戦争と石油危機を、もう一つの焦点としよう。	同　上	同　上
4	イスラエル社会の変貌	イスラエルは、中東社会からの移民の受け入れによって大きな社会変動を経験してきた。それが、第四次中東戦争の以降に政治に反映されるようになった。シオニズムの主流を占めて来た労働党に代わってリクードが台頭してきたからだ。イスラエル社会の変容とその政治的意味を考える。	同　上	同　上
5	キャンプ・デービッド合意とレバノン戦争	カーター大統領に仲介によって成立したキャンプ・デービッドの合意がイスラエルとエジプトの平和条約を生んだ。そしてエジプトの圧力から解放されたイスラエルは、レバノンに侵攻した。キャンプ・デービッド合意とレバノン戦争の関連を跡付ける。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	ペレストロイカの影で	ゴルバチョフの新思考外交が中東政治の枠組みを変えた。その過程とパレスチナ問題への影響を考える。	高橋　和夫	高橋　和夫
7	インティファーダ	1987年末に自然発生的に起こった占領地でのパレスチナ人の一斉蜂起は、インティファーダとして知られ、イスラエルの占領政策を揺さぶった。このインティファーダこそ、その後のオスロ合意への伏線となった。	同　上	同　上
8	湾岸戦争とPLO	パレスチナ情勢は、周辺諸国の動向に常に影響を受けてきた。1990年代の湾岸危機、と湾岸戦争はPLOへ大きな打撃を与えた。そのメカニズムと意味を論ずる。	同　上	同　上
9	和平プロセスの構図	湾岸戦争の勝利で威信を高めたアメリカはマドリッドに中東和平国際会議を招集して中東和平に乗り出した。その背景にあったアメリカとイスラエルの間での激しい外交面でのせめぎあいを描写する。	同　上	同　上
10	ラビン/その栄光と暗殺	参謀総長としてイスラエルを1967年戦争で歴史的な勝利に導いたラビンが、1990年代には首相としてPLOとの和平に取り組んだ。ラビンという人物の生涯を通じて中東の現代史を語る。	同　上	同　上
11	ネタニヤフとバラク	ラビン暗殺後の選挙で首相となったネタニヤフとはいかなる人物なのだろうか。そしてラビンの子飼いであり、ネタニヤフを次の選挙で破って首相となったバラクとは。二人の人物像を通じて、ラビン以降のパレスチナ問題の展開を振り返る。	同　上	同　上
12	スフィンクスの謎/シリアの故アサド大統領	イスラエルと対立路線を堅持するシリアは特殊な国である。30年にわたる長期政権を維持したアサド大統領の政治を外交と内政の両面から照射する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	革命はビートルに乗って/ヤセル・アラファト	PLOの指導者として君臨するアラファトの人物像を語りながら、パレスチナ解放運動の歴史を振り返る。	高橋　和夫	高橋　和夫
14	アメリカ/中東で一番重要な国	第一に中東の政治を規定する最大の力であるアメリカの中東政策を紹介する。第二にアメリカの中東政策の決定のメカニズムを考える。第三にその将来に影響を与える要因を考える。	同　上	同　上
15	アル・アクサ・インティファーダ	クリントン大統領の最終和平への仲介の失敗の後の情勢の展開を論じる。ポイントはシャロン政権の誕生と、その占領地政策である。	同　上	同　上

＝国際政治（‘０４）＝（TV）
－9月11日後の世界－

〔主任講師：　高橋　和夫（放送大学助教授）〕

全体のねらい

2001年9月11日のアメリカでの同時多発テロは、その後の国際政治の動向を規定する事件であった。本講座では、この事件への、唯一の超大国アメリカの外交的な軍事的な対応に視点を合わせ、21世紀初頭の国際政治の全体像を鳥瞰する。しかし世界は、アメリカだけで動いているのではない。世界がアメリカに向ける目にも配慮しつつ、双方の視線を交差させて立体的な世界像を指示したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	テレビと国際政治／もう騙されない為に	湾岸戦争の報道で劇的な形で示されたように、テレビの映像は国際政治で大きな役割りを果たす。しかしながら、映像とは客観の顔をした主観に過ぎない。映像は、それを創り出し送り出す側の意図に左右されるからである。そうした視点から、テレビが国際政治に影響を与えるメカニズムの幾つかを提示する。	高橋　和夫（放送大学助教授）	高橋　和夫（放送大学助教授）
2	アメリカの世界戦略	世界の国々はアメリカとその他に分類できる。そのアメリカの世界戦略を歴史的な視野から振り返る。また、その外交の特徴を紹介する。つまり冷戦後の唯一の超大国の外交の流れを太いタッチで描写する。	同　上	同　上
3	アフガニスタン（1）／大国のはざまで	1979年のソ連軍の侵攻、そして2001年のアメリカのターレバン攻撃など戦争の際に一瞬だけ光を浴びては、また忘れられる。現代史におけるアフガニスタンは、そのような運命を甘受してきた。光を浴びていない時期を含めたアフガニスタンの近現代史を解説する。	同　上	同　上
4	アフガニスタン（2）II／対ターレバン戦争	アフガニスタンの隣国パキスタンの置かれた位置は微妙である。アメリカの同盟者であると同時にかつてはターレバンの保護者でもあったパキスタンは、カシミールを巡ってインドと対立している。また同じようにアフガニスタンに隣接するイランは、この戦争においてアメリカに協力したにもかかわらず、「悪の枢軸」の一員とされた。2001年のアメリカの対ターレバン戦争を振り返り、こうした周辺諸国の動向を紹介する。	同　上	同　上
5	イラク（1）同盟者サダム・フセイン	アメリカの対イラク政策は、フセイン政権の利用に始まり、その封じ込めに転じ、そして転覆へと帰結した。その1970年代から1990年代までの展開を振り返る。	同　上	同　上
6	イラク（2）湾岸戦争からイラク戦争へ	2003年のアメリカによるイラク攻撃は、フセイン政権の終わりではあってもイラク情勢の安定の始まりではなかった。1990年代以降のアメリカのイラク政策を跡付け、その対イラク戦争への道を検証し、その将来を展望する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	イラン／岐路に立つイスラム体制	「悪の枢軸」の一員としてアメリカが名指しにしたイランでは、1979 年に成立したイスラム体制が大きな危機に直面している。それは国内的には増大する若年人口の改革への期待に経済的にも政治的にも体制が応えていないからである。また対外的にもイランが核兵器を開発しているのではないかとの嫌疑を受けているからである。イランが国内問題にどう対応するのか。国際社会の懸念にどう応えるのか。危機の構造を分析する。	高橋　和夫	高橋　和夫
8	朝鮮半島と台湾海峡／危機のシナリオ	東アジアの不安定要因は、朝鮮半島と台湾海峡の情勢である。朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の核開発に世界が注目している。また、中国が領有を主張する台湾で、独立を宣言しようとの動きがある。中国は、その独立宣言は許容しないとの立場である。朝鮮半島と台湾海峡を巡る幾つかのシナリオを検討し、その将来を展望する。	同　上	同　上
9	アメリカのイスラム（1）／ブラック・ムスリム	アメリカでイスラム教徒が急増している。その流れの一つは、黒人の間に広まった教えを広めたネーション・オブ・イスラムという組織である。そのメンバーはブラック・ムスリムと呼ばれる。1960 年代に活躍したカリスマ的な説教師の一人であるマルコム X に焦点を当てる。	同　上	同　上
10	アメリカのイスラム（2）／文明の衝突を越えて	アメリカのイスラム教徒の多数派は、イスラム諸国からの移民とその子孫である。その人口の急増は、いかなる意味を持つのだろうか。アメリカの外交に影響を与えるようになるのだろうか。アメリカにおけるイスラムの拡大の現状を紹介する。	同　上	同　上
11	ヨーロッパのパラドックス／拡大と分離	EU（欧州連合）の拡大が続いている。しかし同時にスコットランドや北イタリアなどでは、現在の国家の枠組から離脱しようとの運動がある。一方で国家の単位を超えた統合の流れが強まる中で、そうした他方では分裂の流れもあるのだろうか。ヨーロッパに典型的に観察される矛盾する二つの流れの背景を探る。	同　上	同　上
12	環境保護の政治力学	環境問題のエッセンスは、環境保全の費用を誰が、いつ、どのような形で負担するかにある。環境問題の難しさは、科学的な不確定さを背景として議論される点にある。環境問題の特徴は、NGO の果たす役割の大きさである。	同　上	同　上
13	エネルギー	ペルシア湾岸は世界の心臓である。世界経済の血液に当たる石油を各国に輸出しているからである。しかし、この地域が構造的な問題に直面している。人口爆発、石油価格の変動、指導者の世代交代などである。問題の意味を考え、この地域のエネルギーに依存する日本の選択を考える。	同　上	同　上
14	冷たい国の熱い夢／アイスランドの新エネルギー開発	クリーン・エネルギーを求めての北大西洋の島国アイスランドの試みが世界の注目を集めている。アイスランドのエネルギー政策は、まず水力発電に力を入れ、次に地熱発電に軸足を移してきた。そして最近では水素エネルギーの導入にも果敢に取り組んでいる。アイスランドの熱いエネルギー政策を紹介する。	同　上	同　上
15	国際政治の新しい風景	外交は国家が外務省を通じて行うとの通念が壊れて来た。「国内官庁」、自治体、企業、ＮＧＯさらには個人まで外交に関与する時代が到来している。国際政治の新しい風景である。	同　上	同　上

＝日本政治思想史（‘０５）＝（Ｒ）
－「自由」の観念を中心に－

〔主任講師：宮村　治雄（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

日本に於ける「自由」という観念は、西欧思想との出会いをきっかけにして、〈liberty〉や〈freedom〉という西欧語の訳語を通して受け入れられ、流布し、定着していった、とされる。たしかに、そうした経緯が重要な意味を持っていることは否定できない。しかし、その訳語となった「自由」や「自在」といった言葉は、それ自身の長い歴史をもっていたことも見逃されてはならない。それは、肯定的な意味においても、否定的な意味においても、多様な内包を持ち、またそれぞれの意味についてもさまざまの議論が積み重ねられてきた。そうした言葉と観念の歴史をふりかえり、視野に入れることで、西欧思想との出会い以降の「自由」の歴史にも、また新たな展望と示唆とを引き出すことができると思われる。講義では、そうした見通しの下に、古代から近世までの「自由」や「自在」をめぐるさまざまの局面を検討し、あわせて明治期以降の議論を見直していきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	講義の意図と意義	「自由」の観念史をめぐるこれまでの経緯と、これからの展望	宮村　治雄（東京都立大学教授）	宮村　治雄（東京都立大学教授）
2	古代日本での「自由」	若干の用例と、典拠としての中国での「自由」	同　上	同　上
3	中世における「自由」	法令と仏典	同　上	同　上
4	キリシタン思想の挑戦	「真理が汝を自由にする」	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	儒教と「自由」	近世儒者のジレンマ	宮村　治雄	宮村　治雄
6	「自由」の観念史における徂徠学の位置	兵学と儒学の間	同　上	同　上
7	都市と「自由」	近世における「自由」の成長	同　上	同　上
8	幕末維新期における「自由」の受容	「自由」の多様性への驚き	同　上	同　上
9	「自由」の解読Ⅰ	福沢諭吉の場合	同　上	同　上
10	「自由」の解読Ⅱ	植木枝盛の場合	同　上	同　上
11	「自由」の解読Ⅲ	中江兆民の場合	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	「戦後」と「自由」論の新たな展開－「配給された自由」の逆説を巡ってⅠ	「戦後」状況とマルクス主義者	宮村　治雄	宮村　治雄
13	「戦後」と「自由」論の新たな展開－「配給された自由」の逆説を巡ってⅡ	「自由主義者」の分極	同　上	同　上
14	「戦後」と「自由」論の新たな展開－「配給された自由」の逆説を巡ってⅢ	「天皇制」と「自由」	同　上	同　上
15	「自由」をめぐる思想史的構図	「自由」の語義および観念についての回顧と展望	同　上	同　上

＝西洋政治思想史（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　川出　良枝（東京都立大学教授）〕
〔主任講師：　山岡　龍一（放送大学助教授）〕

全体のねらい

政治とは何か、特に、より善き政治とは何であり、それはどうすれば実現可能なのか、といった問いを、西洋政治思想の歴史を振り返ることで検討する。本講は思想の歴史的継承や文脈に留意しつつも、むしろいくつかの重要な論点を選び、その理解を通じて、西洋政治思想史の現代的な意義を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	西洋政治思想史とは何か	西洋政治思想史という学問の全体像を簡単に示し、その学習と研究の方法と意義を考える。	川出　良枝（東京都立大学教授） 山岡　龍一（放送大学助教授	川出　良枝（東京都立大学教授） 山岡　龍一（放送大学助教授
2	統治の諸形態	いかなる統治の形態が理想であり、また、現実に建設可能であるかという問題は、政治学という学問をギリシアに成立させた最も本質的な原動力であった。当時において展開された政体論を紹介し、さらにそれが近代においてどのように受け継がれ、変貌を遂げたかをみていく。	川出　良枝	川出　良枝
3	法の支配Ｉ－古代・中世	政治を規制し指導する原理としての法に訴えるという姿勢は、政治思想史の起源にまで遡れる。この法の支配という思想を、古代ギリシアと古代ローマを中心に論じ、その展開を、自然法思想、立憲主義等に留意しつつ、中世まで素描する。	山岡　龍一	山岡　龍一
4	キリスト教の衝撃	政治と宗教の関係は根源的な問題の一つである。ここではキリスト教思想の政治思想への影響を、人間観、権力論、共同体のイメージ等を中心に概観する。	山岡　龍一	山岡　龍一
5	権力	政治秩序はデ・ファクトな物理的強制力によって維持されるという発想が前面に押し出されたとき、近代の政治思想は離陸したと言われる。代表的な権力国家論をマキャヴェリやボダンの思想に探るとともに、ホッブズの登場により、個々人の合意によって国家に権力を委譲するという社会契約説の論理が成立したことの意味を探る。	川出　良枝	川出　良枝
6	富と所有	富と所有をめぐって、政治的なものと経済的なものの関係がいかにして論じられてきたかを古代ギリシアから近代まで概観する。その上で、特に近代社会において私的所有が正当化されたり批判されたりする論理を明らかにする。	山岡　龍一	山岡　龍一
7	迫害と寛容	宗教的寛容の要求を端緒に、異質な価値との共存を肯定するという寛容思想がいかにして発展してきたのかを、特に近代国家が成立・発展していく次期に焦点を絞りながら、考察する。	山岡　龍一	山岡　龍一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	権力批判の論理	近代国家による権力の独占が進むにつれ、強大化した国家権力をいかにすれば制限できるか、という問題が立てられる。それは、一方では、支配の正統性を問い、正統性なき権力には抵抗すべきであるという抵抗権の議論として展開される。他方で、いかなる権力も必然的に堕落するという認識の下で、権力相互の均衡と抑制によって、権力の暴走を抑制すべきであるという権力分立の発想も生み出される。	川出　良枝	川出　良枝
9	公共の利益	私的欲望の追求は、必然的に公共精神の衰退を招くのか。個人の利益と結びつかない公徳心や愛国心はありうるのか。政治に関わる市民（公民）の徳性をめぐる議論は、政治学にとって重要な問題であり続けた。市民の徳を高く評価する共和主義の伝統を概観するとともに、ある意味ではそれと真っ向から対立する18世紀の文明社会論を検討する。	川出　良枝	川出　良枝
10	政治とレトリック	政治を構成する要素として、「言語」は重要な意味をもつ。政治的な影響力は、単なる物理的強制力のみによってではなく、さまざまなシンボルを駆使したレトリックによっても行使される。レトリックが政治的教養の中心にあった古典古代からルネッサンス期の議論を概観し、その語の政治的レトリック論の展開も検討する。	山岡　龍一	山岡　龍一
11	法の支配Ⅱ－近代・現代	法の支配、または立憲主義は、近代憲法の根幹をなす原理である。近代的な「法の支配」の原理は、どのような経緯で成立したのだろうか。また、そもそもそこで問題とされる「法」とは何なのか。中世的な「法の支配」が、近代的な立憲主義へと変貌していった過程を、グロティウス、プーフェンドルフ、ロック、モンテスキューらの「法」をめぐる理論に探る。また、法実証主義の成立による「法の支配」の原理そのものの変質という問題にも考察をくわえる。	川出　良枝	川出　良枝
12	参加と統合	近代デモクラシーの成立過程で大きな画期となったのは、ルソーの一般意志論（人民主権論）の登場である。それにより、すべての人民の政治への直接参加が、政治的統合にとって不可欠であることが示される。しかし、ルソーの構想がそのまま実現することはなく、実際には、間接参加型（代表制）民主制が定着する。	川出　良枝	川出　良枝
13	社会的連帯の基礎	資本主義の急速な発展がもたらした貧困や搾取、地域共同体や家族の変貌、男女や民族の間の差別といった社会問題がクローズアップされるにつれ、国家の役割の見直しがさまざまなかたちで訴えられるようになる。	川出　良枝	川出　良枝
14	政治と教育	善き政体には善き市民が不可欠であるが、善き市民の形成には善き政体が必要である。この根本的な問題をめぐってどのような議論が展開されてきたのかを、政治思想史のなかに探っていく。	山岡　龍一	山岡　龍一
15	正義と善	正義とは何か。正義と善（利益）の関係はいかなるものであるべきか。正義はどのようにしたら発見できるのか。こうした問いは政治の考察において根本的なものである。ここでは特に「公正／権利」と「効用／善」という観点に留意しつつ、正義論の展開を古代ギリシアから現代にまで概観する。	山岡　龍一	山岡　龍一

＝現代日本の政治（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　山口　二郎（北海道大学教授）〕
〔主任講師：　杉田　　敦（法政大学教授）〕

全体のねらい

1990 年代における様々な改革の結果を分析し、21 世紀初頭の日本政治の課題について考える。また、現代日本政治を理解するために不可欠な基本的な政治理念や分析枠組についても考察を深める。その上で、21 世紀の日本の民主政治がどのように発展すべきか、市民のあり方を中心に考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	失われた１０年の政治	バブル崩壊以後、90 年代の経済と政治を振り返り、経済的な政策課題に対して政治がどのような対応をしてきたのかを検証する。また、政治改革、行政改革など様々な改革の全体像を明らかにして、改革の意義と限界について考える。そして、21 世紀に引き継がれた政治の課題を明らかにする。	山口　二郎（北海道大学教授）	山口　二郎（北海道大学教授）
2	政党政治の模索	20 世紀型の政党とは何だったかを検討し、日本や欧米に共通する政党の限界を考察する。さらに、日本の 90 年代における自民党や野党の再編成の動きを素材として、現代の民主政治における政党の役割を考える。	同　上	同　上
3	国会の役割	90 年代後半の国会改革によって、国会における政党間の関係はどう変わったのかを明らかにする。そして、国会の立法や行政権に対するチェックの機能の現状を検討する。さらに、これからの民主政治における国会の果たすべき役割を考える。	同　上	同　上
4	官僚支配の終わり？	90 年代後半の橋本政権時代の行政改革は、日本の行政をどう変えたのかを考える。特に、情報公開法の制定の影響を検証する。また、政策決定における官僚支配を是正し、政治主導にむけた改革の意義についても検討し、現代日本における政策決定システムの変容を明らかにする。	同　上	同　上
5	政治意識の変化と選挙	選挙制度改革以降の国政選挙に現れた民意を読み解く。特に投票率の低下、政党支持の低下の原因を探り、国民の政治意識の変化を明らかにする。政党政治と国民との関係について考える。	同　上	同　上
6	メディアと政治	大衆民主政治（マスデモクラシー）におけるマスメディアの役割に関する理論を紹介し、健全な民主主義の実現のためにマスメディアが果たすべき機能、マスメディアの陥りやすい危険性について考える。また、近年特に顕著になったテレビと政治の関係について考察する。	同　上	同　上
7	構造改革と政治	戦後日本の政治経済システムの限界を考察し、小泉政権の登場とともに最大の政策課題となった構造改革について、その意味を明らかにする。さらに、改革課題についての有効な政策を進めるための条件について考察する。また、構造改革が政党政治に与える影響について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地方政治の活性化	都道府県、市町村における政治の変化を概観し、新しい政策課題に対する様々な取り組みを紹介する。特に、無党派層に支えられた新しいタイプのリーダーによる地方レベルの改革の実態を紹介する。また、市民参加の展開についても重視する。	山口　二郎	山口　二郎
9	司法制度改革と政治	社会、経済構造の変化の中でなぜ司法制度改革が必要とされたかを明らかにした上で、司法制度改革の展開について紹介し、それが日本の社会に与える影響について考える。また、司法の役割を拡大することが日本の政治にどのような変化を引き起こすかについて考える。	同　上	同　上
10	日本政治のキーワード（1） 市民と民主主義	日本でもNPOなどの市民活動が活発化し、各地で住民投票運動が広がるなど、政治参加の形態も多様化してきた。日本における市民社会の変化を検証し、中央、地方の様々なレベルにおける多様な民主主義の形の可能性を考える。	杉田　敦（法政大学教授）	杉田　敦（法政大学教授）
11	日本政治のキーワード（2） 平等と政治	経済のグローバル化に伴う市場化の趨勢の中で、小さな政府が唱えられ、日本社会が平等志向的だったことが批判されるようになった。日本社会の平等をめぐる神話を検証し、これからの政治の中で平等という価値がどのような意味を持つか考察する。	同　上	同　上
12	日本政治のキーワード（3） 憲法と政治	1990年代末から、憲法改正をめぐる議論が高まってきた。戦後日本における憲法をめぐる政治対立の構図を振り返った上で、今なぜ憲法論議が行われるのか、これから実りある憲法論議を行うためには何が必要かを考える。	同　上	同　上
13	日本政治のキーワード（4） ナショナリズムと政治	1990年代後半、歴史教科書問題、靖国神社問題などを争点として、ナショナリズムをめぐる論争が行われるようになった。若い世代の一部におけるナショナリズムの高まりの背景を分析し、21世紀の日本政治とナショナリズムの関係について考える。	同　上	同　上
14	日本政治のキーワード（5） 政治と公共性	戦後日本の利益配分型政治が行き詰まるとともに、様々な立場の論者が公共性という観念の重要性をとくようになった。民主主義の歴史の中で公共性という言葉がどのようにして生まれたのかを明らかにした上で、21世紀の民主主義にとっての公共性という言葉の意味を考える。	同　上	同　上
15	21世紀の民主政治	経済面でのグローバリゼーションの進行、地球環境問題の深刻化など新しい政策課題の登場に対して、民主政治は何が出来るのかを考察し、21世紀日本の民主政治のあるべき姿について考える。	山口　二郎（北海道大学教授）	山口　二郎（北海道大学教授）

＝現代行政分析（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：真　渕　　勝（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

日本の行政に仕組みを概観すると同時に、それがどのように作動しているかを経験的な分析に基づいて明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	社会科学としての行政学	行政学は行政を研究対象とする社会科学である。それでは、どのようにアプローチすればよいのか。社会科学の研究の方法および行政学への適用の仕方について具体的な例を挙げながら検討する。	真渕　勝（京都大学大学院教授）	真渕　勝（京都大学大学院教授） 久米　郁男（神戸大学大学院教授）
2	国家公務員制度１－採用と昇進	「国家公務員制度」では採用から退職にいたるプロセスを追う。 ２では、国家公務員の採用と昇進のプロセスを概観することを通じて、日本の国家公務員制度の特徴を明らかにする。キャリアとノンキャリア、事務官と技官、男性と女性などを対比させて論じる。	同　上	真渕　勝 稲継　裕昭（大阪市立大学大学院教授）
3	国家公務員制度２－退職と再就職	天下りの実態を記述した後に、天下りがどのような機能を果たしているのかを分析する。批判されることの多い慣行であるが、一定のポジティブな機能を果たしていたことも明らかにする。	同　上	同　上
4	国家行政機構１－議院内閣制と省庁制	「国家行政機構」では狭義の行政機構だけでなく、民間との関係をも視野に入れた講義の行政機構について講義する。 ４では、２００１年の中央省庁再編の前後を比較して、何を変えようとしたのか、そして何が変わったのか、何が変わらなかったのかを検討する。首相のリーダーシップの限界、縦割り行政などが焦点になる。	同　上	真渕　勝
5	国家行政機構２－行政ネットワーク	国家行政機構と特殊法人や民間団体との関係を明らかにすることによって、日本の行政のダイナミズムを明らかにする。特殊法人改革とエージェンシー化、官民関係の変容など最近の動きをどのように理解するかについても触れる。	同　上	同　上
6	行政改革１－行政改革と行政管理	行政改革」では、その意味や効果を、経験的側面ならびに理論的側面から検討する。 ６では、行政管理はどのように行われているのかを記述した後に、これと行政改革の関係を経験的に分析する。行政改革は行政の実態にどのような影響を及ぼしているのかを明らかにするのが目的である。	同　上	同　上
7	行政改革２－改革の理論	行政改革を含む政治の仕組みの改革はどのような理由やタイミングで行われるのかを合理的選択論の視点から説明する。地方制度改革についても射程にいれる予定である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	政策過程１－議題設定と政策決定	「政策過程」では議題設定から評価にいたる流れを理論的に概観すると同時に、予算編成を素材にその実態を明らかにする。 ８では、政策過程の理論の前半部分に関する諸理論を紹介する。ある潜在的な問題が政府の取り上げるところになるのはどのようなプロセスを経てであるか、なぜある問題は放置され続けるのかについて、マスメディアの役割に言及しながら、解明する。	真渕　勝	真渕　勝 久米　郁男
9	政策過程２－実施と評価	政策過程の理論の後半部分に関する諸理論を紹介する。政策が期待された効果を発揮しないことがあるが、それはなぜか、それに対してどのような策が講じられているのかについて検討する。	同　上	真渕　勝 秋月　謙悟（京都大学大学院教授）
10	政策過程３－予算編成過程	現実の政策過程のあり様を予算編成過程を概観することによって描く。政策の優先順位はどのようにつけられているのか、政治家や国民は予算編成にどのように係わっているのかを見る。	同　上	真渕　勝
11	官僚論１－国民、政治家、官僚	「官僚論」では、官僚の役割を、官僚と国民・政治家との関係、上級及び下級官僚の行動様式という３つの観点から検討する。 １１では、行政官の役割をいわゆる本人代理人論の観点から整理する。一方で官僚にその能力を十分に発揮させ、他方で官僚の行動を監視するにはどのような方法があるのかについて考えたい。	同　上	真渕　勝 久米　郁男
12	官僚論２－上級官僚の機能と役割	キャリアの官僚に焦点をあてて、彼らの役割意識と行動様式について検討する。	同　上	真渕　勝
13	官僚論３－第一線公務員の行動様式	ノンキャリアの官僚に焦点をあてて、彼らの役割意識と行動様式について検討する。	同　上	真渕　勝 北山　俊哉（関西学院大学教授）
14	中央地方関係１－法的関係	「中央地方関係」では、中央政府と地方政府との関係を法的関係、財政的関係、人的関係の３つの側面から検討する。 １４では主に法的関係について検討する。中央政府はどのように地方政府を法的に統制しているのか、地方はどのように独自性を発揮しようとしているのかが焦点である。	同　上	真渕　勝 秋月　謙悟
15	中央地方関係２－財政的関係と人的関係	中央地方関係の残る２つの側面を見る。中央政府はどのように地方政府を財政的、人的に統制しているのか、地方はどのように独自性を発揮しようとしているのかが焦点である。市町村合併についても言及する。	同　上	真渕　勝 北山　俊哉

＝日本政治史－２０世紀の日本政治（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　天川　晃（放送大学教授）〕
〔主任講師：　御厨　貴（東京大学教授）〕

全体のねらい

20世紀の日本の前半は戦争の半世紀であり、後半は経済発展の半世紀であった。対照的な軌跡を描いた20世紀の日本の政治を、国際環境、憲法体制、政党と官僚、政治指導者と人々の意識などさまざまな角度からできるだけ立体的に明らかにしたい。20世紀の日本政治の成功と失敗の経験から、21世紀の日本の政治の糧になるものを学んでみたい。また日本の歴史に対する多様な見方を紹介するために、代表的なアメリカの日本研究者のインタビューを行い、専門とする時期に関するアメリカ国民の対日観や研究の一端を紹介してもらう予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	２０世紀の開幕	人々は20世紀をどのような期待を持って迎えたのであろうか。明治新政府が発足して30年余を経た当時の社会と、10年余の経験を経た明治憲法の運用状況を検討しつつ、20世紀の日本政治にあり得た可能性を含めて再検証する。	御厨　貴（東京大学教授）	御厨　貴（東京大学教授）
2	日露戦争と戦後経営	日露戦争は国際社会における日本の存在を大きく印象づけるものであった。その戦争指導は軍事と外交の統合において明治国家の頂点をなすものであった。しかし、日露戦争後は外交上の課題に加えて国内でも戦後の新たな課題が登場してきた。明治国家の転換点としての日露戦争を検討する。	同　上	同　上
3	帝国主義の時代	日露戦争後の日本は対外的膨張に力を注いだ。日韓併合で朝鮮半島を支配下に収めた後は満州の権益の維持と強化が主たる目標となった。しかし、この政策は中国のナショナリズムによる反発とアメリカを始めとする他の列強の警戒を引き起こさざるを得なかった。国際社会と帝国日本の歩みを検討する。	同　上	同　上
4	政党政治と国際協調	国内では藩閥政治から政党政治への動きが曲折を経ながらも進んでいった。政治指導者の世代交代や第一次大戦後の世界的な民主化への動きがこれを加速した。さらにアメリカを中心とした作られたするワシントン体制と日本の関わりを検討する。	同　上	同　上
5	軍部と政治	世界恐慌は各国の政治を大きく変えた。日本では政党政治とワシントン体制の打破を目指す軍部の勢力が台頭してきた。満州事変から国際連盟脱退、5・15事件と2・26事件を経て、日本の政治は軍部の政治に転換してゆく過程を検討する。	同　上	同　上
6	官僚の新世代	明治国家の支柱の一つは高等文官試験制度によって選抜された官僚である。30年代になると政党政治不信が唱え社会改良を指向する新しい世代の官僚が登場する。新官僚さらには革新官僚と呼ばれたこれらの官僚たちの、戦争と戦後の復興への関わりを検討する。	同　上	同　上
7	日米開戦と総力戦体制	日中戦争は日本の運命を変えて行った。近衛内閣の東亜新秩序声明はアメリカの反発を招き日米対決の構図が鮮明になってきた。東条内閣の日米開戦決定、45年の終戦に至るまでの迷走する外交と軍部との関わりを検討する。戦争はまた国内の政治経済体制をも大きく変えた。戦後につながる変化の側面を見てみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	占領と改革	1945 年の敗戦によって帝国日本に代わる新日本の模索が始まった。アメリカの占領政策と戦争の体験を経た日本人の復興への努力とが相まってさまざまな改革が進められた。新憲法の制定をはじめとするさまざまな改革の過程を検討する。	天川　晃（放送大学教授）	天川　晃（放送大学教授）
9	エリートと教育	教育は国家百年の計といわれる。近代日本のエリートは、学校教育の体系を通じて試験による業績主義による選抜によって補充されてきた。戦後の改革によって学校教育の体系は大きく変化した。このことがエリートの補充にとって持った意味はどのようなものだったのか。	御厨　貴	御厨　貴
10	冷戦と講和	第二次大戦後の世界は米ソの冷戦として再編されていった。冷戦は日本の国際社会への復帰にいかなる影響をあたえたのであろうか。講和と安保条約の締結を指導した吉田茂の外交とそれが残したものを検討する。	天川　晃	天川　晃
11	政党の変貌	自由民権運動から始まった日本の政党の歴史は戦時には大政翼賛会ですべて解党した。戦後に再出発した政党は「55 年体制」として再編成された。政党と派閥、政治とカネ、政党の人材など政党の「近代化」をめぐるさまざまな問題を検討する。	同　上	同　上
12	高度成長期の政治	60 年の安保改訂を経て日本の政治は経済を中心として展開する。国内の経済開発と福祉が国内政治の大きな問題となった。自民党政治による福祉国家への道を検討する。	同　上	同　上
13	沖縄返還と日中国交正常化	高度成長をとげた 70 年代の日本外交はどのようなものだったのか。日米協調を基軸とする佐藤内閣は沖縄返還交渉を実現させたが、日中国交正常化は田中内閣の手に委ねた。石油危機を経てアジアに目を向ける国際関係を検討する。	同　上	同　上
14	「経済大国」の動揺	低成長時代を迎えた「経済大国」の国内の課題は財政の再建であった。行政改革から消費税の導入、そしてリクルート・スキャンダルの中で「昭和」の終焉を迎える。昭和末期から平成につながる時期の内政を検討する。	同　上	同　上
15	20 世紀の閉幕	冷戦の終結から湾岸戦争を経て自民党一党支配が終わり、日本政治は再編成の時期を迎える。外国の日本研究者とのインタビュー等を含めて 20 世紀の日本政治の遺産を総括し、21 世紀への課題を展望する。	天川　晃 御厨　貴	天川　晃 御厨　貴

＝　現代東アジアの政治（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　山田　　辰雄（放送大学教授）〕
〔主任講師：　小島　　朋之（慶應義塾大学教授）〕
〔主任講師：　小此木　政夫（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

第二次世界大戦終結後の東アジアの政治発展の軌跡、現状、およびその構造的特徴を講義する。ここでは東アジアを狭義に定義し、中国、台湾、香港、韓国、北朝鮮を中心とする。それは、いわば日本にとっても最も関係の深い近隣諸国・地域の政治の理解を目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	現代東アジアの政治を学ぶ	現代東アジアの政治は常に大きく変動している。この講義が目指すのは、変動を捉えるとともに、目前の変化にとらわれない東アジア政治理解の基本的枠組を提示することである。歴史・構造・比較・関係の 4 つの視角から東アジアの政治を見る。	山田　辰雄（放送大学教授）	山田　辰雄（放送大学教授）
2	中国（1） 中華人民共和国の成立	中華人民共和国成立当初の最大の課題は、政治・経済体制の確立であった。政治制度の樹立と正統性の確保、憲法の公布、共産党権力の浸透、反革命勢力の排除、経済の復興、社会主義経済への改造、国際的地位の確立などがそれである。	同　上	同　上
3	中国（2） 毛沢東の時代	1958 年以来毛沢東は人民公社・大躍進・社会主義総路線からなる急進的「三面紅旗」を展開した。この政策の失敗を是正すべく劉少奇らは「調整政策」をとったが、権力の喪失を恐れる毛は 66 年からプロレタリア文化大革命を発動した。	小島　朋之（慶應義塾大学教授）	小島　朋之（慶應義塾大学教授）
4	中国（3） 鄧小平の時代	1978 年 12 月中共 11 期 3 中全会は鄧小平の指導下に文革から現代化への路線転換を行った。改革は計画経済から市場経済への移行を、開放は先進諸国からの資金と技術の導入を意味した。しかし、経済は改革したものの政治的には党の指導は放棄されず、89 年の天安門事件はその現れであった。	同　上	同　上
5	中国（4） 江沢民の時代	天安門事件直後党総書記に抜擢された江沢民は国家と軍の最高のポストも独占し、鄧小平の路線を継承した。彼は経済発展に伴う社会の多元化に直面し、2000 年に「三個代表」を提起、私営企業家まで取り込み、中華民族の偉大な復興をも鼓吹した。	同　上	同　上
6	韓国・北朝鮮（1） 朝鮮解放と分断体制の成立	太平洋戦争終結後、日本の統治から解放された朝鮮は、即時独立ではなく、38 度線を境とする米ソの分割占領下に置かれた。冷戦の勃興につれ 1948 年朝鮮半島の南北に大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国が誕生、50 年には朝鮮戦争を招来した。	小此木　政夫（慶應義塾大学教授）	小此木　政夫（慶應義塾大学教授）
7	韓国・北朝鮮（2） 分断国家の二つの道	朝鮮戦争終結後南北朝鮮間で熾烈な建国競争、そして体制間の生存闘争が展開された。朴正熙将軍のクーデター後韓国では開発独裁体制下で輸出主導型の工業化が進展したが、社会主義の北朝鮮では「南朝鮮革命」を通じた朝鮮統一が追求された。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	韓国・北朝鮮（3） 韓国の民主化と冷戦の終結	南北朝鮮の体制間競争は、冷戦が終結する1980年代末までに決着をみた。重化学工業化を達成した韓国が民主化に成功したのに対し、北朝鮮は経済的に破綻し、政治的にもますます硬直化した。ソ連・東欧諸国と中国は韓国と国交を樹立した。	小此木　政夫	小此木　政夫
9	台湾（1） 国民党一党独裁体制の成立と強化	中共との内戦に敗れた国民党は、冷戦の展開と米国の支援によって台湾で復活した。国民党は蒋介石の個人的権力を極端に強化し、党組織を社会の隅々まで浸透させ、市民を抑圧し、台湾本省人の政治的地位を低く抑えた一党独裁体制を実現した。	松田　康博（防衛研究所主任研究官）	松田　康博（防衛研究所主任研究官）
10	台湾（2） 民主化・台湾化と台湾問題の国際化	米中国交正常化の中で蒋経国政権は国際的孤独と民主化運動への対処に悩まされた。後の李登輝政権は台湾化、新大陸政策、民主的改革を推進した。以後内外政策における台湾独自路線が定着したため、中国の反発を招き台湾問題は国際問題化した。	同　上	同　上
11	香港－返還をめぐる政治	英領植民地香港が1997年中国に返還された。これを契機に香港の内政と外交は大きく変化した。返還を望まぬ香港、「一国二制度」の背景、イギリスの返還戦略、香港の民主化運動、中国の香港管理、中国式民主主義などの問題を取り上げる。	戸張　東夫（産能大学教授）	戸張　東夫（産能大学教授）
12	東アジアにおける日本	20世紀の東アジアと日本との関わりは1945年までの戦争期、冷戦期、冷戦後に分けられる。東アジアの経済発展における日本モデルの意味も比較の観点から重要である。近年の日本の対東アジア政策はグローバル化の中で重要性を増しつつある。	国分　良成（慶應義塾大学教授）	国分　良成（慶應義塾大学教授）
13	東アジアの国際関係とアメリカ	20世紀東アジア国際関係では日米中三国の関係が重要な要素であった。冷戦後のアメリカの東アジア戦略は、クリントン政権とブッシュ政権とで異なるところが目立つが、共通した部分はないのか。朝鮮半島・中台関係などを考える時アメリカの要素を抜きに考えることはできない。	同　上	同　上
14	東アジアの地域主義と日本	第二次世界大戦後の冷戦期にあって、1960年代ＡＳＥＡＮの誕生は地域主義の萌芽であった。冷戦後ＡＰＥＣ，ＡＲＦ、地域経済圏構想が注目されたが、最近ではＡＳＥＡＮ10カ国と日中韓3カ国の去就が今後のＦＴＡ（自由貿易協定）と絡んで重要である。	同　上	同　上
15	中国共産党第16回全国代表大会	放送期間における東アジアの主要な政治変動について述べる。今回は、中国ならびにアジアの政治に大きな影響を与える、2002年11月に開催された中国共産党第16回全国代表大会を取り上げて論じる。	山田　辰雄	山田　辰雄

＝　現代経済学　（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　賀川　昭夫（東京経済大学教授）〕

全体のねらい

私達の欲望に限りはないが、資源には限りがある。その限られた資源を様々な欲望を充足するために配分しなければならないが、私達は市場経済という経済体制を用いることで、それを無意識のうちに行っている。市場経済とは多くのお金を支払う人が多くを消費できるという経済システムであり、ミクロ経済学とマクロ経済学という２つの分析手法を用いて、市場経済の果たす資源配分について考えていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	資源配分と市場経済	どのような社会にも「誰がどの資源を使ってどのような生産手段で何をいくら生産し、誰が何をいくら消費するか」という問題がある。市場経済では、価格を媒介にした市場取引を通じてその問題を解決している。このような市場経済の基本的性質について説明する。	賀川　昭夫（東京経済大学教授）	賀川　昭夫（東京経済大学教授）
2	需要・供給・市場均衡	簡単な例を用いて、需要曲線と供給曲線を導出する。需給がバランスするとき、市場は均衡しているというが、そこでは社会的余剰が最大になっている。これらについて説明する。	同　上	同　上
3	消費者の合理的行動	消費者は、限られた予算の範囲内で、効用を最大にするように財の購入量を決定する。これが消費者の合理的行動仮説であり、これからどのような結論が得られ、それらが現実の観察結果と整合的かどうかについて説明する。	同　上	同　上
4	企業の合理的行動	企業は、保有する生産技術の下で、利潤を最大にするように生産計画を立てる。これが企業の合理的行動仮説である。この仮説の下では、企業の生産要素に対する需要と生産物に対する供給がどのように決まるのかについて説明する。	同　上	同　上
5	競争市場の均衡と効率性	財・サービスについての需要と供給が出会う市場で、需給のバランスした状況を均衡とよぶ。競争経済における市場均衡では、資源が効率的に配分されていて、市場経済が効率的であることを説明する。	同　上	同　上
6	不完全競争市場	価格をコントロールする経済主体がいれば、市場は独占、寡占、独占的競争など不完全競争市場となる。そこでは、資源配分の効率性が実現しないことなどを説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	市場の失敗	市場経済で資源が効率的に配分されないとき、市場が失敗するという。外部性、公共財、情報の偏在などは、市場の失敗を引き起こすので、それらを是正するために、政府は何らかの政策をとる。これらについて説明する。	賀川　昭夫	賀川　昭夫
8	経済循環と国内総生産	国内総生産（GDP）や失業率は、一国全体の経済活動を集約して表す変数である。マクロ経済学は、これらがどのような水準に定まるのかを明らかにする分野であるが、まずはGDPという基本概念を説明する。	同　上	同　上
9	GDP水準の決定	現代マクロ経済学の創始者であるケインズは、生産水準は需要の大きさから定まると考えた。この考え方の下ではGDPがどのような水準に定まるのか、そのとき失業が存在するのかどうか、などを説明する。	同　上	同　上
10	投資関数	企業が将来の生産能力を拡大するためにを行う設備投資で、たとえば、ある機械を購入するかしないかを、どのように判断するのか、そしてまた一国全体の投資量がどのように定まるのか、を説明する。	同　上	同　上
11	貨幣への需要と供給	貨幣とは何か、現金を保有していても、それから収益を得ることはないもかかわらず、人々が現金を保有しようとするのは何故かなど、貨幣に関する基本的なことについて説明する。	同　上	同　上
12	財政政策と金融政策	財市場と貨幣市場の2市場が同時に均衡する状況を考える。財政政策や金融政策の結果、その均衡はどう変化するのか、それらの比較から政策の有効性を説明する。	同　上	同　上
13	インフレーションと失業	財市場、貨幣市場、労働市場の3市場を考え、物価水準がどのように決まるのかを考える。そして、どのような状況にあるときに失業が存在するのか、どのような状況の時にインフレーションが生じるのか、などについて説明する。	同　上	同　上
14	開放経済のマクロ分析	外国との取引を考えた開放経済を考える。外国通貨との交換比率である為替レートはどのように決まるのか、あるいは、開放経済における財政政策と金融政策の有効性などについて、説明する。	同　上	同　上
15	経済変動と経済成長	時間と共に経済は変化している。経済動学は、時間の経過につれて経済がどのように変化していくかを分析するものである。この章では、経済変動や経済成長の代表的な考え方について説明する。	同　上	同　上

＝産業社会と消費社会の現代（‘０３）＝（TV）

－貨幣経済と不確実な社会変動－

〔主任講師：　坂井　素思　（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現代の産業社会・消費社会では、財や貨幣を通じて、多くの人びとが相互依存関係を結んできている。生産を通じて財を造り出し販売する過程で「産業社会」を生成し、この販売された財を購入して使用する過程で「消費社会」を形成する。これらの社会では、共通に「貨幣」を媒介とする経済社会を営んでいる。この講義では、変動激しい経済社会が貨幣経済を媒介として、どのような人間関係を形成し変化していくのかについて考えていくことにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	産業社会と消費社会の起源	この章では、人と物とを媒介する経済社会がどのようにして誕生したのかについて、その原点を考える。経済社会のひとつの原型である「交換」作用に注目して、経済がいかに社会を形成するかを見る。産業社会から消費社会へ転換する現実を取材しながら考察する。	坂井　素思（放送大学助教授）	坂井　素思（放送大学助教授）
2	貨幣 －貨幣はいかに社会を結ぶか	貨幣は、人と人、人と物の間を媒介する基本的なメディアである。現代社会では、このような貨幣がどのようにして生成され、またどのような役割を担っているのか。産業社会と消費社会の中で、「貨幣」とは何かということについて、この章では考えてみる。	同　上	同　上
3	労働 －労働はどのような人間関係を生産するか	手を使って労働を行うことは、人間にとって本源的な活動である。このような労働の本質について、職人経済のなかの手仕事を見ながら考えていく。また、労働の持つ分業の意味についても見ていく。	同　上	同　上
4	市場と組織 －市場経済のなかになぜ企業が形成されるか	産業社会のなかで、市場経済のもつ利点は何か。また、企業組織はなぜ組織を形成するのか。これらの比較を通じて、企業制度の組織上の特質を考えていく。	同　上	同　上
5	生産と規模 －なぜ企業は規模拡大を行うか	産業社会の発展の中で、企業経済は「規模の経済」を追求し、生産性を向上させ、大量生産のシステムを形成してきている。このような大量生産体制がいかにして形成されてきたのかについて考えていく。	同　上	同　上
6	管理と経営 －なぜマネジメントは必要か	産業社会のなかでも、とりわけ企業家の仕事は特別のものと考えられている。企業家の機能とは何か、また企業でのマネジメントの働きについて見ていく。	同　上	同　上
7	ビジネスと産業－なぜビジネスは生まれるのか	産業社会では、産業精神とビジネス精神とが分かちがたく存在している。この章では、産業社会に対する金融・商業の影響について見ていく。ビジネスによる産業社会への影響を見ながら、貨幣社会のなかの金融・商業の意味について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	所有 －なぜ財産の意味は変化するのか	現代のストック経済のもとでは、所有の考え方が変化してきている。人びとの財産制が、現代において、どのように変化してきたのかについて見ていく。	坂井　素思	坂井　素思
9	消費と所得 －消費社会はいかに成立してきたか	戦後の大衆消費社会進展について考える。所得水準の上昇とともに、消費も増大する。これらは、日本の勤労者層のライフスタイルを反映してきた。耐久消費財を事例にとりながら、現代日本の消費社会の特徴を見る。	同　上	同　上
10	サーヴィス －なぜサーヴィス消費は増大するのか	経済社会のサーヴィス経済化が進んでいる。なぜサーヴィス消費が増大し、サーヴィス産業が増加するのか、その要因について考える。	同　上	同　上
11	広告 －ブランド広告はなぜ必要か	広告の持つ消費者と生産者の媒介機能について見ていく。消費者の信頼を維持し、企業価値を高めることが、現代企業では重要になってきている。経済社会のなかでの広告の意味について考える。	同　上	同　上
12	流行 －文化消費はなぜ生ずるのか	経済活動が文化として定着する場合がある。流行現象や趣味現象を取り上げながら、消費社会のなかの文化現象を探る。	同　上	同　上
13	余暇 －産業社会と消費社会の間の矛盾はなぜ生ずるか	産業社会と消費社会の接点には、一方では生産活動を行ううえで「勤労」を奨励する考え方があり、他方では消費活動を行ううえで「怠惰」を奨励する考え方がある。このような現代経済社会の矛盾点について考える。	同　上	同　上
14	環境 －経済社会の公共問題はいかに解決されるか	「市場の失敗」と「政府の失敗」とが同時に生起するのが、今日の経済社会の現実である。この章では産業社会と消費社会における外部経済の問題を取り上げる。経済社会の外部経済を内省的な問題として考え、このようななかで、経済社会の公共性はいかにあるべきかについて考える。	同　上	同　上
15	産業社会と消費社会のゆくえ	現代の経済社会は、貨幣経済・金融経済によって大きな影響を受けている。現代資本主義も変化して、かつての貨幣のフロー・ストックとは異なる傾向を見せている。このようななかで産業社会と消費社会は、どのような変化を遂げていくのか、展望を試みる。	同　上	同　上

＝　金融論（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　岩　田　規久男（学習院大学教授）〕

全体のねらい

金融は私たちに預金をはじめとする貯蓄手段を提供するとともに、企業等に対しては資金を調達する手段を提供している。これらの金融活動は、国内総生産や雇用量や物価などのマクロ的な経済変数への影響を通じて、私たちの生活に大きな影響を及ぼす。この講義では日本の金融制度の仕組みを解説しつつ、金融活動をめぐる諸問題を説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	貨幣と決済システム	私たちの経済では、お金（貨幣）が様々な取引の決済手段として用いられている。貨幣が決済手段として機能するためには緻密、かつ安定した決済システムが存在しなければならない。第１回は日本の決済システムの仕組みについて説明する。	岩田　規久男（学習院大学教授）	岩田　規久男（学習院大学教授）
2	貨幣の貸借と金融	個人や企業の中には、一方に貨幣が余っているものが存在し、他方に貨幣が不足しているものが存在する。第２回は貨幣の貸借の仕組みと貯蓄・投資との関係について説明する。	同　上	同　上
3	資金の調達・運用と金融機関	資金不足主体は資金をどのような方法で調達し、資金余剰主体はどのような方法で資金を運用するかを説明した上で、資金不足主体と資金余剰主体とを結びつける金融の仕組みを、直接金融と間接金融に分けて説明する。	同　上	同　上
4	金融市場の仕組みと機能	資金余剰主体と資金不足主体及び金融機関等によって構成される金融市場を、取引形態、資金調達の期間の長短、債務の発行とその流通などの観点から説明する。	同　上	同　上
5	不確実性と金融制度	現実の世界は不確実性に満ちている。第５回は、不確実性に対処する仕組みである株式会社制度と保険及び先物取引について説明する。	同　上	同　上
6	情報の非対称性と金融仲介機関	貨幣の貸借には様々な取引費用がかかる。この取引費用をできるだけ小さくして貨幣が貸し手から借り手にスムーズに流れるようにするのが、各種の金融機関の役割である。第６回は金融機関の役割を情報の非対称性の観点から説明する。	同　上	同　上
7	銀行と貨幣の供給	決済手段である貨幣は日本銀行と民間銀行とによって供給されること、及び、両者の関係について説明する。特に、民間銀行による預金創造の仕組みを詳しく説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	金融規制と金融システムの安定	経済の安定にとっては、貨幣による決済システムを中心とする金融システムが安定していることが重要である。金融システムの安定を図る手段としての金融規制や預金保険機構等の仕組みについて説明する。	岩田　規久男	岩田　規久男
9	不良債権と金融システム	日本の銀行は１９９０年代初頭のバブル崩壊後、大量の不良債権を抱えて、金融システム不安の大きな要因になった。第９回では、巨額な不良債権が発生した原因と不良債権の処理のあり方について検討する。	同　上	同　上
10	スワップとオプション	1980 年代半ば以降から、金融先物、オプション、金融スワップなどのデリバティブと呼ばれる新しい金融取引が盛んになった。第 10 回では、これらの新しい金融取引のうち、スワップとオプションの仕組みとその機能を説明する。	同　上	同　上
11	貨幣の需要・供給と利子率の決定	利子率とは何かを説明した後に、貨幣の需要と供給及び利子率の決定メカニズムを説明する。	同　上	同　上
12	利子率と投資	利子率は、企業の在庫投資や設備投資及び個人等による住宅投資に大きな影響を及ぼす。第 12 回はこれらの投資がどのようなメカニズムを通じて利子率に依存するかを説明する。	同　上	同　上
13	金融政策の手段	日本銀行による金融政策は貨幣の供給量や利子率に影響を及ぼし、利子率は企業等の設備投資に影響を与える。第 13 回は金融政策の手段にはどのようなものがあるかを説明する。	同　上	同　上
14	不況とインフレ対策としての金融政策	標準的なマクロ経済モデルを用いて、不況対策とインフレ対策としての金融政策の効果について説明する。	同　上	同　上
15	デフレ対策としての金融政策	戦後１９８０年代までは、物価安定政策といえば、インフレを抑制することであったが、９０年代半ば以降、日本経済においてデフレが定着すると、デフレから脱出するための金融政策が論議されるようになった。第１５回は、これらの問題を考えるために、インフレ目標政策や非伝統的金融政策について説明する。	同　上	同　上

＝国際経済学（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　大山　道広（東洋大学教授）〕

全体のねらい

現在世界の大学で教えられている国際経済理論の主要内容を、基礎的な経済理論を習得した初学者を対象として平明に解説する。まず国際貿易理論と国際金融理論について述べ、その理解に基づいて貿易政策、財政・金融政策、地域経済統合、国際貿易・金融体制などの国際経済の重要な問題を論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	国際経済学の課題と方法	国際経済学は国家間の経済取引を分析する学問である。グローバリゼーションの時代にあっても、国際経済の最小単位としての国民経済の意義は失われていない。国際貿易論はその実物的側面に、国際金融論はその金融的側面に光をあてる。その概要について述べる。	大山　道広（東洋大学教授）	大山　道広（東洋大学教授）
2	国際貿易の均衡	国際貿易理論の基本的なモデルとして、２国２財の一般均衡モデルの仕組みを明らかにする。生産フロンティア、社会的無差別曲線、各財の供給曲線、需要曲線、各国の孤立状態の均衡、さらには自由貿易均衡について順次説明する。特殊ケースとして、よく用いられる部分均衡モデルと余剰分析も解説する。	同　上	同　上
3	国際分業と労働生産性	国際貿易とは何か。その内容を例示し、現実に行われている国際貿易の特徴を概観する。ここでは、気候・風土、生産技術による労働生産性の国際的差異に注目して国際分業を説明するリカード・ミルの比較生産費説をとりあげ、比較優位、貿易利益の概念を明らかにする。	同　上	同　上
4	国際分業と要素賦存	労働、資本などの生産要素の賦存状況は国ごとに異なっており、このこともまた国際分業の重要な根拠となる。ここでは、要素賦存に注目するヘクシャー・オリーンの国際貿易モデルによって、国際分業，国内所得分配がいかに決定されるかを見る。また、レオンティエフの逆説的な実証結果を紹介し、解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	国際分業と収穫逓増	産業に収穫逓増の現象が見られるとき、比較優位の差異がなくても国際分業が行われ、貿易利益が得られる。（アダム・スミスの分業理論の復活）。製品差別化の概念を導入して、現代の国際貿易に重要な地位を占める産業内貿易を説明する。	大山　道広	大山　道広
6	経済成長とトランスファー問題	これまで学んできた国際貿易のモデルは、現実の国際経済の理解に役立てることができる。そのための重要な分析用具として、比較静学がある。その方法を用いて、先進国から途上国への経済援助や一国の経済成長が国際貿易にいかなる影響を及ぼすかについて考える。	同　上	同　上
7	国際投資と技術移転	国際貿易はいわゆる商品貿易に限られるものではない。資本や労働のサービスも貿易の対象となる。ここでは、国際資本移動を間接投資と直接投資に大別して、その要因と効果を検討する。特に、近年盛んに行われている直接投資について、その技術移転効果に注目し費用削減型と品質改善型という２つのケースに分けて考察する。	同　上	同　上
8	貿易政策の理論	政府が実施する経済政策を国内政策と貿易政策に分類し、その政策手段を説明する。貿易政策の代表的な手段である関税政策をとりあげ、国際交易条件、国内価格などに及ぼす効果を明らかにする。さらに、貿易政策のもうひとつの手段である輸入数量割り当てについて、関税と比較しながら検討する。	同　上	同　上
9	資源配分と保護貿易	自由貿易論はいっさいの保護貿易政策の撤廃を主張する。その経済学的な根拠は、一定の条件のもとで自由貿易が世界の希少資源の最も効率的な利用を保障するという命題によって与えられる。これに対する保護貿易論の反論を紹介し、批判的に検討する。関連して、政策目的が与えられたとき、その実現のために最適な政策手段は何かを論じる。	同　上	同　上
10	保護貿易の政治経済学	自由貿易論にしても保護貿易論にしても、単純に経済学的な根拠だけで理解できるものではない。そこには、国内の所得分配に関わるさまざまな政治的要因が絡んでいる。保護貿易の政治経済学的分析を紹介し、例解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	国際金融と国際収支	実物的な財・サービスの国際移動が実現するためには、代金の受け払い（決済）が必要である。国際金融を含む国際経済取引の総合的記録体系としての国際収支表の見方を解説する。最後に、国際収支の均衡とは何かを明らかにし、不均衡の調整メカニズムに触れる。	大山　道広	大山　道広
12	為替レートの理論	国際的な経済取引の決済には異なる通貨の交換が必要とされる。通貨の交換比率、すなわち為替レートはどうのように決められるのであろうか。多くの諸国が採用している変動レート制度のもとで為替レートがどう決定されるかについて、購買力平価説、フロー理論とストック理論などの諸学説を解説する。	同　上	同　上
13	国際マクロ経済と財政金融政策	国際的なマクロ経済の連関を解明するためには、為替レートを組み込んだ国際経済のマクロモデルが必要である。ここでは、その代表的なモデルを解説し、財政金融政策が為替レートや内外経済に及ぼす効果と国際収支の調整過程を考察する。	同　上	同　上
14	地域経済統合	近年、地域経済統合の動きが活発になった。その動向を概観し、経済効果について考える。地域経済統合は、自由貿易地域、関税同盟、経済同盟など種々の形態、段階のものがある。地域経済統合の理論的理解の基礎となる関税同盟の理論を解説する。	同　上	同　上
15	世界の貿易・金融体制	現代の世界では、国際経済関係が緊密になり、さまざまなレベルで国際的な政策協調が必要とされるようになった。国際経済協調の基本的な理念を明らかにし、世界の貿易・金融体制について考察する。具体的には、貿易体制としての GATT/WTO、金融体制としての IMF・IBRD の成り立ちと経済的意義を論じ、その将来を展望する。	同　上	同　上

＝日本経済史（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師（現職名）：山　崎　志　郎（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

本講義では幕末から1980年代にいたる近現代日本の社会経済の変容を概説する。資本主義経済は、社会的生産・交換・消費を市場機能によって実現するシステムであるが、そこにはさまざまな伝統的秩序による規制や政府の介入があり、市場そのものも産業・金融の発展段階に応じて変容した。こうした市場の特性に注目しながら、経済発展の推移を論じる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	幕末の経済発展段階と開港の影響	単婚小家族の農業経営、身分秩序、武士団の都市集住、鎖国制など幕藩体制の基本骨格が18世紀以降次第に解体し始め、幕末段階では広範な小商品生産が浸透しつつあったこと、海港によって世界市場と結びつくことによって、綿製品市場、輸出商品市場に劇的変化が起こったことと、そしてその歴史的意味を解説する。	山崎　志郎（東京都立大学教授）	山崎　志郎（東京都立大学教授）
2	明治維新 －封建的諸制度の解体－	国家的自立を目指す明治政府によって、集権的国家諸制度の構築と封建的諸制度の解体が進められ、伝統的身分的規制が外された市場経済が本格的に始動したこと、その一方で農民に対しては重い公租が課され、世界市場の規制を受けるなかで、小商品生産者の多面的発展は困難であったことなど、近代日本の出発点が抱えた世界史的規定性を解説する。	同　上	同　上
3	殖産興業政策 －政府主導から民間支援へ－	明治政府が目指した近代化政策の試行錯誤を政府の財政事情とあわせて概観し、官営方式の失敗の原因を検討する。そして政策基調が金融機関の整備と金融手段を通じた民間支援へと推移することを解説する。また政策に協力形で突出した成長に成功した財閥の特異な成長についても触れる。	同　上	同　上
4	諸産業の発達	1880年代に始まる本格的工業化の進展について、近代技術を移植した民間および国営の諸産業、在来的技術の基礎の上に発達した産業、それぞれに概観し、「産業革命」のもたらしたさまざまな影響を説明する。	同　上	同　上
5	２０世紀初頭の日本経済	近代国家の諸制度を整え、税制・通貨制度の整備、国際競争力の部分的達成など経済諸制度の一応の完成をみた時期の日本経済特質を、国際分業・植民地帝国・都市と農村などの観点から概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	第1次世界大戦のインパクトと日本経済	世界経済における後発国的地位を脱し、産業の高度化のスプリング・ボードとなった、第1次体制のインパクトを、その波及経路に沿って説明し、空前の好景気、長期の金融緩慢、重化学工業化の飛躍的進展を概観する。	山崎　志郎（東京都立大学教授）	山崎　志郎（東京都立大学教授）
7	1920年代重化学工業化と産業組織の変容 －市場の組織化－	産業構造の重化学工業化の進展とともに、重化学工業製品市場の組織化が急速に進むこと、金融機関の巨大化と系列化や証券市場の形成などによって巨大な資金市場とネットワークが形成されるようになったこと、大経営の増加を基に労働者組織が形成されはじめたことなど、市場が組織されるようすを概観する。	同　上	同　上
8	第1次大戦ブームの金融問題 －金本位制下のバブルの形成と崩壊－	安定的な通貨・金融システムと考えられていた、金本位制の下で第1次大戦ブーム期にバブル経済が発生し、20年恐慌が発生したメカニズムを解説し、その際の金融機関救済や関東大震災時の前後処理の問題点を指摘し、1927年金融恐慌に至る過程を説明する。	同　上	同　上
9	世界恐慌とその回復過程	1920年不況の解決策として緊縮的財政・金融政策と種々の産業合理化政策が選択されたこと、世界恐慌のなかでこれが結果的に昭和恐慌に至ったことを説明した上で、農業関連部門の打撃の大きさに比して、工業部門について見れば、世界的には短期的短期的な恐慌であったことを概観する。	同　上	同　上
10	昭和恐慌と経済政策の現代化	恐慌回復期の諸政策には1970年代頃まで継続された現代経済政策の原型が見られた。積極的財政・金融、組織化を進める産業組織政策などについて、その後の変容にも触れながら解説する。	同　上	同　上
11	戦時統制経済の運営メカニズム	世界経済との関係を次第に切り離されながら、限られた資源を戦略的に重点利用するための経済総動員体制が構築される経緯を概観し、原材料資料、製品市場、金融市場、労働市場の組織化・計画化とそれがどのように資本主義的に機能したのかを解説する。	同　上	同　上
12	経済復興と戦後経済改革	戦時同様に世界経済と接点を制約されながら、復興のための統制経済が実施されたこと、経済の非軍事化・民主化の名目の下で、資本・証券所有構造、産業組織、政府の市場介入方式、労働者の地位などに大きな変化がもたらされたことを説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	戦後高度経済成長と経済政策体系	安定した世界経済秩序の下で、時代状況に応じた税制・金融政策、産業支援措置が取られ、高度成長がスタートしたこと、また資本自由化・貿易自由化の課題にそって政府による市場介入の方式にも種々の変化が生じたことを説明する。	山崎　志郎（東京都立大学教授）	山崎　志郎（東京都立大学教授）
14	高度経済成長	産業構造の高度化、地域開発と農村社会の変容、就業構造の変化、企業間取引関係、世界経済での地位の上昇など、さまざまな視点から高度成長による市場の変化を概観する。	同　上	同　上
15	激動の幕開け	ニクソン・ショック、オイル・ショックを経て低成長期に移行するとともに、素材産業の大型設備投資と安価で大量な製品供給を起点とする成長が行き詰まり、先進諸国ではハイテク高付加価値産業へのシフト、諸産業の情報化が成長を支える時代となったことを概観する。これとともに業界による市場組織化、企業間や銀行企業間の相対（あいたい）的関係や政府による市場介入なども情報化時代の市場に適合しない面が指摘されるようになったことを説明する。	同　上	同　上

＝　欧米経済史（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　藤瀬　浩司（愛知淑徳大学教授）〕

全体のねらい

現代社会は資本主義という社会システムから成り立っていますが、この講義では資本主義発展の歴史を、イギリス産業革命から現在までの約２世紀間を中心に考察します。資本主義の発展に見られる大きな枠組みや流れに重点を置き、とくに資本主義を構成する国民国家と世界経済という二つの要素に注目したいと考えています。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
Ⅰ．歴史社会としての資本主義				
1	共同体社会と資本主義	資本主義は16世紀に登場し、イギリス産業革命によって成立した歴史社会です。まず資本主義以前に存在した共同体社会はどのような社会かを考察し、次いで、資本主義の特徴を、市場、企業、成長、世界経済、経済変動などについて、簡単に整理しておきます。	藤瀬　浩司（愛知淑徳大学教授）	藤瀬　浩司（愛知淑徳大学教授）
2	西ヨーロッパにおける資本主義社会の誕生	近代資本主義は、西ヨーロッパを母胎として誕生しました。西ヨーロッパ封建社会の解体の中で生まれた資本主義的要素は、地理上の発見で開花し世界経済を生み出します。オランダ、イギリス、フランスなどの国民国家は重商主義政策によって世界を舞台に経済力を強化しようと競合します。	同　上	同　上
Ⅱ．19世紀資本主義				
3	イギリス産業革命	イギリス産業革命は世界経済の大きな転換に導きました。まず産業革命概念をめぐる議論をみたうえで、最初の産業革命はどのような特徴を持っていたか、イギリス産業社会はどのようにして形作られてかを検討し、さらに他の欧米社会が政治変革などを通じてどのように対応したかを考察します。	同　上	同　上
4	イギリス資本主義の成熟	19世紀はイギリスの時代です。まず19世紀の資本主義発展の段階と特徴を概観します。次いでイギリス資本主義を強大化した自由貿易政策への転換と労働・企業組織・金融面の制度改革を検討し、さらに19世紀半ば以降のイギリス経済成長、産業組織、金融の特徴を考察します。	同　上	同　上
5	世界経済の拡張 西欧とアメリカの工業化	運輸革命と自由貿易体制は19世紀第３四半期の世界経済の大拡張を支えました。この時期にフランス、ドイツなど西ヨーロッパやアメリカで工業化が達成されました。こうした工業化を、国家、投資銀行、鉄道建設に焦点をすえて、イギリスとの差異とそれぞれの特徴を明らかにします。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	周辺経済の分極化	中心諸国の経済的政治的拡張は、地球上の広範な地域を世界経済の中に組み込み、新しい国際分業体制を創り出します。一連の周辺諸国は、欧米中心諸国に対抗して工業化を実現しようとし、他の地域は開発によって、世界市場向けにもっぱら原料や食料を供給する地域に転化されます。	藤瀬　浩司	藤瀬　浩司
7	19世紀末大不況	1873年の世界恐慌を起点として、約四半世紀は大不況と呼ばれている時期です。しかし通常の景気循環の「不況」ではありません。大不況期は技術、生産方法、企業組織や世界経済が大きく変わる時期であり、19世紀資本主義の最終局面といえます。各国の政治社会的動向とともに考察します。	同　上	同　上
Ⅲ．20世紀資本主義				
8	20世紀経済発展の概観	20世紀の経済発展の長期的趨勢を考察します。まず人口構成（地域別、職業別）などの経済指標の推移を検討し、最後に世界経済の構造変化の特徴に注目します。次いで中心諸国の経済成長を２つの段階、４つの局面に分けて考察します。アメリカの主導的な地位が明らかになります。	同　上	同　上
9	20世紀資本主義の源流（１） 企業と社会	１９世紀末から一連の大型企業体が出現します。大型企業体は大量生産・流通によって、巨大な市場を創出し、２０世紀経済の牽引力となります。他方で同じ時期に中心諸国で社会保険の導入など、社会改革が始まります。それは１９世紀型の階級国家から20世紀型の「福祉国家」への移行を進めます。	同　上	同　上
10	20世紀資本主義の源流（２） 世界経済	１９世紀末に地球的規模の世界経済が成立します。この時期に中心機能は、金融の中心（英仏）と工業の中心(米独)に分化するとともに、周辺工業国が成立し、世界的規模で原料食料供給地が形成されます。こうした世界経済の上に、多角的決済の世界システムと国際金本位制が構築されます。	同　上	同　上
11	帝国主義と戦争	20世紀は二つの世界大戦を経験しています。世界大戦は列強間の帝国主義的対立から発生しました。まず帝国主義の原因と脱却の方向について検討し、次に戦争の結果として、資本主義に組織性と計画性が導入されたこと、さらに社会主義革命や民族解放運動が起こったことを考察します。	同　上	同　上
12	戦間期経済と大不況	ヴェルサイユ条約は戦前国際秩序を変革せず、賠償など戦後処理で大きな問題を残しました。国際金本位制は再建されたが、世界経済は相対的安定期においても深刻な不均衡を抱えていました。1929年恐慌を起点として大不況が始まります。大不況の発生原因、長期性、世界性などを検討します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	アメリカ体制の成立	大不況を国際協調によって解決する試みが挫折し、またアメリカのニューディールやドイツのナチズムのような政策の限界を考察し、第2次大戦の戦中戦後を通じて、どのような国内社会経済政策が創出され、またアメリカを中心とした国際秩序がいかに構築されたかを検討します。	藤瀬　浩司	藤瀬　浩司
14	資本主義の黄金時代	20世紀第3四半期に中心諸国は高水準の経済成長を達成します。アメリカ型生産方式が西欧や日本に広がり、同時に国家目標として経済成長が設定されます。中心諸国に牽引されて、世界経済は拡大しますが、発展途上国経済は多くの問題を抱え、また社会主義経済の行き詰まりも明瞭になってきます。	同　上	同　上
15	成長国家の終焉と新しい時代の始まり	1970年代に悪性インフレーションと国際通貨危機が発生します。戦後成長政策の限界が明瞭となり、新しい政策が模索されます。世界経済は、日米関係、ヨーロッパ統合、社会主義の崩壊、アジアの工業化により大きく変化しました。終わりに情報革命とグローバリゼーションから21世紀を展望します。	同　上	同　上

＝　財政学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　井堀　利宏（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

本科目では財政学を初めて学ぶ人を対象として、財政学の基礎的な概念を説明する。また、単なる財政学の講義にとどまらず、今後の財政構造改革、税制改革上の重要な諸問題について、少子化対策、官と民の役割分担、民営化や地方分権、社会保障制度改革のあり方など、幅広い視点からわが国の現状をふまえながら政策的な議論することで、日本財政の基本的な解説も試みる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	財政学とは何か	財政学ではどのような内容の講義をするのか、実例を取り上げながら、これからの講義の構成を説明する。	井堀　利宏（東京大学大学院教授）	井堀　利宏（東京大学大学院教授）
2	予算の制度	財政制度の中心的な役割をもっている予算について、日本の制度を念頭に置きながら説明する。また、予算ができるプロセスについてもふれる。	同　上	同　上
3	政府支出の現状	政府の経済活動の役割を、支出面から説明する。財政の果たすべき機能を取り上げるとともに、日本の政府支出の概要を説明する。	同　上	同　上
4	財政運営のマクロ理論	財政運営のマクロ理論の考え方を、マクロ経済の安定化政策を中心として説明する。また、政府支出が経済成長の与える効果についてもふれる。	同　上	同　上
5	公共財の理論	市場では必ずしも適切に供給されない公共サービスである公共財の理論を説明するとともに、市場経済における政府の役割をまとめる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	民営化と財政	民営化がどのような経済的意味を持つのかについて、市場と政府を比較しながら、検討する。民営化が財政に与える影響も考える。	井堀　利宏	井堀　利宏
7	所得税	わが国の所得税の仕組みを説明するとともに、労働所得税、利子所得税の経済的な効果や、そのあるべき姿を検討する。	同　上	同　上
8	法人税	わが国における法人税の現状を説明するとともに、その経済的な効果を検討する。また、企業課税の役割にいても取り上げる。	同　上	同　上
9	消費税	個別消費税の負担と転嫁を説明するとともに、一般的な消費税の経済的な効果を検討する。	同　上	同　上
10	税制改革	わが国の税制改革の流れを説明するとともに、消費税と所得税の相対的なメリットとデメリットを比較検討する。	同　上	同　上
11	公債発行とその負担	公債発行がマクロ経済にどのような影響を与えるかを説明する。また、公債発行と世代間の負担の関係についてもふれる。	同　上	同　上
12	財政赤字と財政破綻	わが国における財政赤字の動向を説明するとともに、財政破綻を招かない財政運営のあり方を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	社会保障	財政支出に占める社会保障の比重は大きい。日本の公的年金の概要を説明するとともに、高齢化社会での社会保障の問題点にふれる	井堀　利宏	井堀　利宏
14	地方財政	日本の地方財政制度の概要を説明する。地方交付税の役割や地方税の構成などもふれる。また、地方分権のあり方も取り上げる。	同　上	同　上
15	財政の課題と展望	２１世紀を展望したときの日本の財政問題を説明する。公共部門の規模と役割、公債発行の大きさ、社会資本整備のあり方、国際化、高齢化社会の財政問題などを論ずる。	同　上	同　上

＝コミュニティ論（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　倉沢　進（東京都立大学名誉教授）〕

全体のねらい

コミュニティは、欧米における社会的現実であると共に、日本社会では 60 年代以降、地域社会の現実を変えて行く一種の社会目標として、理念化された概念である。この科目では、この多義的な概念を整理すると共に、日本の地域社会の現実とその問題点を、海外のコミュニティのあり方との対比の中で明らかにして行く。特に日本独自の地域集団とされる町内会の組織原理と、欧米のヴォランタリ・アソシエーションの比較。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	コミュニティとは何か	コミュニティ概念の系譜　牧歌的コミュニティと現代的コミュニティ　地域性と共同性相互扶助システムと専門処理システム　両者の最適統合としてのコミュニティ	倉沢　進（東京都立大学名誉教授）	倉沢　進（東京都立大学名誉教授） 江上　渉（立教大学教授）
2	コミュニティ問題と施策	都市化と地域社会の変容　コミュニティ問題の登場　コミュニティ答申　コミュニティ施策の展開とその矮小化	江上　渉（立教大学教授）	同上
3	伝統的地域集団～町内会	日本独自とされる地域集団～町内会　＜町内原理＞　町内会は封建的か　町内会はボランティア組織か　地域管理システムとしての町内会	倉沢　進	同上
4	コミュニティと住民活動	親和的コミュニティと自治的コミュニティ　コミュニティ活動の３類型　自己充実型活動奉仕型活動　問題解決型活動	江上　渉	同上
5	祭礼とコミュニティ：日本	伝統的地域社会と祭礼　町内会と祭礼　島田市の帯祭　それを支える社会構造　地域社会の変動要因　清水市飯田地区の弥生祭　中核集団と地域社会	倉沢　進	倉沢　進
6	祭礼とコミュニティ：海外	イタリア、シエナのパリオ（裸馬競技）　これを支える 17 のコントラーダ(地区)　祭礼の会場となるカンポ広場　コントラーダ単位の宴会　コントラーダと町内会	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	スポーツとコミュニティ：日本	日本にはスポーツ文化がなぜ育たないか　愛知県成岩地区のスポーツクラブ　習志野市秋津小学校の試み　学校と地域社会	倉沢　進	倉沢　進
8	スポーツとコミュニティ：海外	スポーツフォアオールとドイツの breiten sport　ニュールンベルク市ヴォルゼンドルフ地区のスポーツクラブ　地域社会の機能とスポーツクラブの機能	同上	同上
9	環境とコミュニティ：日本	環境問題とコミュニティ　古都保存と市民運動　小樽の運河保全　ゴミとコミュニティ	江上　渉 堀川　三郎（法政大学助教授）	倉沢　進 江上　渉
10	環境とコミュニティ：海外	アメニティの概念　イギリスのアメニティ集団　フィンチレイ・ソサイアティの活動　地域のアメニティ集団と援助組織　行政の支援	倉沢　進	倉沢　進
11	住民自治とコミュニティ：日本	町内会型住民自治　行政末端機構としての町内会　明治の町内と平成の町内　問題の自己処理　けやきコミュニティセンター　コミュニティ型住民自治	江上　渉	倉沢　進 江上　渉
12	住民自治とコミュニティ：海外	ピッツバークのネーバーフッド・インヴォルヴメント　ボランタリー集団と行政組織　フィリピン　メトロ・マニラのバランガイ～ガダルーペヌエボ　町内会型のバランガイ　相互扶助システムとしてのバランガイ　行政末端としてのバランガイ	倉沢　進	同上
13	コミュニティと地域組織：日本	町内会の多機能性　青年団・婦人会・老人会・子供会　目黒区の町内会と住区住民協議会	江上　渉	同上
14	コミュニティと地域組織：海外	アメリカ・メーバーフッド連盟（NUSA）　その組織と活動　イギリスのアメニティ・グループの単独性 フィリピンのバランガイの全国組織　行政との関係	倉沢　進	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	21 世紀のコミュニティ	コミュニティ概念の拡大　地域性は必要条件か　共同性の契機	倉沢　進	倉沢　進 江上　渉

＝ジェンダーの社会学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　江原　由美子（東京都立大学教授）〕
〔主任講師：　山田　　昌弘（東京学芸大学教授）〕

全体のねらい

現代日本社会の様々な社会現象や社会問題を、性別や性差についての社会通念を意味するジェンダーとの関連性において読みとくことをねらいとする。特に、現代日本社会において生じている家族変動や人口動態、雇用慣行の変動、人権意識の変化、生殖技術の進展など、新たな事象に焦点をあて、ありうべき社会を構想したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ジェンダーとは？	ジェンダー概念の歴史やジェンダーの社会学の意義等について解説する。	江原　由美子（東京都立大学教授）	江原　由美子（東京都立大学教授） 山田　昌弘（東京学芸大学教授）
2	性別とは？	性別とは何かを、社会学その他の最近の知見から検討する。同性愛、性転換が社会問題になっていることや生物学的性別の多様性などの論点から、私たちが性別と考えている内容を相対化することを目的とする。	山田　昌弘（東京学芸大学教授）	同　上
3	「女」とは何か？	従来「女」「女らしさ」と考えられてきたことがどのような構成要素から成立しているのか、また、従来の「女性観」はどのような問題を含むのかを考察する。	江原　由美子	同　上
4	「男」とは何か？	同様に、従来考えられてきた「男」「男らしさ」などに関する社会通念が、どのような異議申し立てにさらされ、どのような問題を含むのかを、男性学等の知見をふまえて考察する。	山田　昌弘	同　上
5	「専業主婦」という存在	男は仕事、女は家事という性役割分業は、近代社会になってできたものである。仕事と家事との性格のちがい、特に、家事労働の特徴を学び、専業主婦が誕生した歴史的経緯と問題点について考察する。	同　上	同　上
6	ゆらぐライフコース	職場進出する女性が増え、家庭における夫婦の性役割分業の見直しが迫られている。しかし、なかなか「男性の収入に頼る」「家事好きの妻が好かれる」という意識はなくならない。現代日本の恋愛や結婚のあり方を考察することで、未婚化現象の原因をさぐる。	同　上	同　上
7	変わる出産、変わる生殖医療	近年の生殖医療の変化・発展にはめざましいものがある。変わる生殖医療に焦点あてながら、それが親子や血縁などの社会関係に与える影響を考える。	江原　由美子	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	男の子育て・女の子育て	子育ては、母親の役割という意識は今だに強いが、男性の育児参加も増えいている。変わる育児の様相について考察する。	江原　由美子	江原　由美子
9	ゆらぐ日本型雇用	現代のジェンダー関係をつくってきた重要な構造の一つとしての職場の意味を論じるとともに、グローバリゼーションのもとの日本型雇用慣行の変動と、女性労働者の非正規化、有期雇用化、低賃金化について考察する。	江原　由美子 山田　昌弘	江原　由美子
10	親密性とセクシュアリティ	男女の関係と言われるように、異性間の親密関係は、ジェンダー論の一つの焦点である。現代日本社会における夫婦や恋人などのカップル関係におけるセクシャアリティーや親密性の問題を、ジェンダー的差異に注目して論じる。	山田　昌弘	同　上
11	ジェンダー・セクシュアリティと暴力	近年問題になっている「女性への暴力」をとりあげる。なぜ「女性への暴力」は「暴力」として認識されにくいのかを、ジェンダー・セクシュアリティという切り口から論じる。	江原　由美子	同　上
12	性の商品化	「性の解放」と「性の商品化」が同時に進行した２０世紀後半の社会史をふまえ、グローバリゼーションの中で人身買売が横行している一方で、「表現の自由」論「性的自己決定権」論、「セックス・ワーク」論などが噴出している現状について論じる。	同　上	同　上
13	ケアとジェンダー	近代社会において、看護や介護などケアは女性性と結びついてきた。その結果、女性にケア負担が大きくなるという現実があった。ケアと女性の関係を考察することによって、男性のケアの可能性を探る。	山田　昌弘	同　上
14	セラピーとジェンダー	従来の心理療法（セラピー）が含んでいたジャンダー・バイアスを問題として取り上げると共に、フェミニスト・セラピーの成立やその意義について論じる。 更に、感情産業展開や、セラピーに依存する社会の問題点を取り上げ、今後の社会生活において、セラピーの果たす役割をジェンダーの観点から論じる。	同　上	同　上
15	ジェンダーと社会政策	男女共同参画社会基本法成立以降の、国や地方自治体の政策（条例化をふくむ）をとりあげ、それが何をめざしているのかを論じる。又、年金問題や税制などの社会政策についても論じる。	江原　由美子	同　上

＝自我の社会学（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　船津　衛（東洋大学教授）〕

全体のねらい

現代人の自我について社会学的に考察する。人間の自我が孤立的ではなく、他者とのかかわりにおいて社会的に形成されることを「鏡に映った自我」、「役割取得」、「一般化された他者」などの概念を用いて明らかにし、「役割コンフリクト」、「役割距離」、「役割形成」などの現象を通じて現代人の自我の変容の様相について具体的に問題としていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	「自我の社会学」とは	現代の若者において「自分が何であるのかわからない」という「アイデンティティの喪失」を訴える人が少なくない。このような自我のあり方について、従来のイメージである孤立的な「近代的自我」では十分に捉えられなくなってきている。自我は他者とのかかわりにおいて社会的に形成され、展開していくことを明らかにすることが「自我の社会学」である。	船津　衛（東洋大学教授）	船津　衛（東洋大学教授）
2	鏡に映った自我	アメリカの社会学者であるC・H・クーリーによると、人間の自我は他者を鏡として、鏡としての他者を通じて知ることができる。自我は「鏡に映った自我」として、①他の人がどのように認識しているかについての想像、②他の人がどのように評価しているかについての想像、③それらに対して自分がもつ感情から成り立っている。	同　上	同　上
3	自我の社会性	日本人の自我のあり方について、「柔らかい個人主義」（山崎正和）、「人と人との間」（木村　敏）、「間人主義」（浜口恵俊）などの概念によって特徴づけがなされてきている。いずれも、自我が他者の存在を前提として、自他の関係において自我を捉えているといえる。つまり、そこでは自我の社会性が強調されている。	同　上	同　上
4	親密な他者、疎遠な他者	自我にかかわる他者には親密な他者だけではなく、疎遠な他者も存在している。M・ブーバーによれば、他者には「汝」と「ソレ」が存在し、自他の関係は「ワレと汝」関係と「ワレとソレ」関係からなっている。したがって、自我は「ワレ一汝」的ワレと「ワレーソレ」的ワレの２つが存在することになる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	一般化された他者	アメリカの哲学者であり、社会心理学者であるG・H・ミードは自我の孤立説を否定して、自我の社会説を主張した。そして、人間の自我は他者の「役割取得」を通じて社会的に形成されることを明らかにした。とりわけ、子どもの自我は「プレイ」と「ゲーム」の段階を経て形成され、「ゲーム」段階において、複数の他者の期待が組織化された「一般化された他者」とのかかわりにおいて自我が最もよく発達することを主張している。	船津　衛	船津　衛
6	ホモ・ソシオロジクス	ドイツの社会学者 R・ダーレンドルフによると、現代社会学の人間のイメージは「ホモ・ソシオロジクス」である。それは社会の期待に外から拘束されて、自己の行為を受け身的に行う人間を指している。しかし、それはあまりにも社会化過剰の人間観である。人間は社会的存在ではあるが、完全に社会化されてしまった存在ではないといえる。	同　上	同　上
7	役割コンフリクト	相異なる複数の、両立不可能な期待に直面して悩み、苦しむことを「役割コンフリクト」という。「役割コンフリクト」には役割内コンフリクト、役割間コンフリクト、パーソン・ロール・コンフリクトとの3つのタイプが存在する。このような「役割コンフリクト」の解決法として、①主要役割の選択、②役割調整、③役割コンパートメント化などが存在している。	同　上	同　上
8	ラベルされる自我	ひとが「犯罪者」や「逸脱者」などとレッテルを貼られることを「ラベリング」という。もともとは犯罪に関する事柄であったが、他者や社会によるレッテルによって人々の自我が大きく左右されることを表している。「ツッパリ」、「落ちこぼれ」、「優等生」などのマイナスやプラスのレッテルが自我に影響を与えている。	同　上	同　上
9	自己表現	自己表現は自分の意見、気持、また職業や地位を表現し、そのメディアとして言葉、身振り、手振り、顔の表情などがある。そして、自己表現は一定の表現形式に従う必要がある。また、こんにち、表現様式の学習や新しい表現形式の形成が必要とされてきている。	同　上	同　上
10	外見による表現	身振り、顔の表情、髪型、装飾品、携帯品など、言葉以外の外見は他者の視覚に訴えて、自己を意識的に表現することを可能とする。外見は言葉では十分表現できないときや言葉では不適切の場合に多く用いられ、言葉以上のものを表現し、言葉に代わる自己表現メディアとなりつつある。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	印象操作	アメリカの社会学者 E・ゴフマンによると、人間の行為は演技である。人間の行為は他の人間を意識してなされ、また、他の人間によい印象を与えるように行われる。印象操作には他者に対してよい印象を与える積極的・攻撃的タイプと悪い印象を回避する消極的・防衛的タイプとが存在する。	船津 衛	船津 衛
12	役割距離	人間は他者の期待に完全に同調し、それに全面的に従うわけではない。他者の期待から少しずれた形で行為することを役割距離という。そこに本当の自分を示そうとする気持が示される。役割距離行動は人間が他者の期待から相対的に自由であり、受け身的、消極的ではなく積極的、主体的存在であることを表している。	同 上	同 上
13	役割形成	従来、「全能のマスコミ、無力の大衆」といわれたように、人々は受け身的存在として考えられてきた。しかし、こんにち、マスコミに対して積極的にかかわり、情報を発信する積極的な送り手・作り手となっている。このように、既存の役割期待の枠を越えて新たに人間行為が展開することを「役割形成」（R・H・ターナー）という。	同 上	同 上
14	自我のコンストラクション	人間の自我は社会的に構築される。とりわけ言語的に構築される。そう主張するのが「構築主義」である。そして、自我は物語論的に捉え、自我の変容や再構成を行うのが「ナラティブ・セラピー」である。いずれも自我がコンストラクトされることを問題としている。その際、受け身的ではなく、自我の積極的コンストラクションを考えていく必要がある。	同 上	同 上
15	自我の社会学の課題	自我は社会的に形成され、同時に人間は主体的に行為を形成する。ミードは自我が「客我」と「主我」からなると考えた。「客我」は他者の期待をそのまま取り入れた自我の側面を表し、「主我」はそれに対する反応であるとした。この「主我」の解釈として、本能・能動説、残余説、行動的反応説、そして創発的内省説などが存在している。	同 上	同 上

＝環境社会学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　舩橋　晴俊（法政大学教授）〕
〔主任講師：　宮内　泰介（北海道大学大学院助教授）〕

全体のねらい

環境社会学とは、環境問題の解明と解決の道の探究を志向する社会学の一領域であり、この10年にめざましい発展を示してきた。本講義では、わが国の環境社会学の到達点を反映する形で、環境社会学の基本的課題と視点を体系的に提示する。講義の内容としては、第1に、豊富な具体的事例を提示することによりそれに立脚してわかりやすい内容とすること、第2に、日本における環境社会学の代表的な理論枠組みを提示すること、第3に、国際比較と国際関係への視点を持つこと、第4に、環境問題の歴史的展開の中で過去の教訓と現代の位置を自覚させるようなものとすることを、重視したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境社会学の課題と視点	環境問題は21世紀においてますます重要な問題となることが予想される。社会と環境の相互作用の焦点に生起する環境問題を、社会の側に視点を置きつつ把握する環境社会学の課題と視点について全体的展望を提示する。環境社会学とはどのような学問であり、どのような問題群を探究するのかについて、加害論・原因論、被害論、解決論という視点から説明する。	舩橋　晴俊（法政大学教授）	舩橋　晴俊（法政大学教授）
2	環境問題の諸段階	産業化以後の環境問題の歴史的段階は、大きくは、「公害・開発問題期」と「環境問題の普遍化期」とに分けることができる。それぞれの時期にどのような問題が生起して来たのか、これらの二つの時期で、環境問題の性格がどのように変化してきたのか、逆に、どのような面では、連続しているのかを検討する。	同　上	同　上
3	公害の原点としての水俣病	水俣病が公害の原点と言われる最大の理由は人類初の環境汚染、食物連鎖による大規模中毒であること、人類初の胎盤を経由した胎児の中毒発生が確認されたことであった。したがって、その被害の構造（影響）は単に健康被害が重症者から軽症者におよぶという単純なものでなかったはずである。しかし、医学をはじめ各分野の研究が対応に戸惑い、政治的状況も絡んで未だ実態の全貌を十分に明らかにし得ていない。そのために教訓が十分に活かし切れていない。	原田　正純（熊本学園大学教授）	原田　正純（熊本学園大学教授）
4	新幹線公害問題ー日本とフランスの比較	民間企業のみならず、社会資本建設にかかわる公共事業も公害を引き起こす。日本の新幹線は、高速輸送という便益を提供する一方、深刻な各種の公害（騒音・振動・電波障害など）を引き起こした。他方、フランスの新幹線は優れた計画手法に裏打ちされて通過地域との共存を実現している。 新幹線公害対策の教訓を国際比較によって明らかにする。	舩橋　晴俊	舩橋　晴俊

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	廃棄物問題を考える	廃棄物問題は今日の様々な環境問題の中で重要な課題となっている。それは、単に廃棄物の量の問題だけではなく、その有害性が生物に「生殖異常」をもたらすという、廃棄物の質の問題が大きくクローズアップされてきたことによると考えられる。そこで、この講義では、そうした廃棄物の有害性を生み出す、処理方法の問題と処理施設の立地条件の社会的側面を明らかにする。また、この廃棄物問題とかつての公害問題との関連を重視し、その関連性の考察と両者の比較を行う。 その上で、廃棄物処理行政史を考察し、問題点を指摘する。それとともに、今日の廃棄物問題解決に向けた取り組みに欠けている点を指摘する。	鵜飼　照喜（信州大学教授）	鵜飼　照喜（信州大学教授）
6	自然環境と社会の相互作用	人間社会と自然環境とは、相互に影響しあっており、またそのかかわりあいは多様である。人間社会が自然環境の方に適応しつつ、自然環境もまた人間がかかわった形になっていくという原理的な相互作用、そしてそのための人間社会の側のしくみを、ソロモン諸島を事例に見ていく。	宮内　泰介（北海道大学大学院助教授）	宮内　泰介（北海道大学大学院助教授）
7	農山村と環境問題――有機農業を中心として	農産物・木材の輸入自由化により、日本の農林業は壊滅に瀕しているといわれる。農山村（田畑、森林）が果たす公益的機能を見直すためにも、構造的諸問題に対処する実践が人々に求められている。有機農業や山村再生の実践を通して環境問題を考えてみよう。	松村　和則（筑波大学）	松村　和則（筑波大学）
8	コモンズ―自然環境と担い手	自然環境の利用や保全を誰が担うべきなのか、という古くて新しい問題を、「コモンズ」をキーワードに考える。コモンズとは地域の自然環境を地域の人間が共同で所有・利用・管理していくしくみのことである。	宮内　泰介	宮内　泰介
9	発展途上国と環境問題	ソロモン諸島の森林伐採、インドネシア・マレーシアのアブラヤシ・プランテーション開発を事例に、発展途上国における環境破壊がどういうしくみをもっているか、それを克服するための手立ては何かを考える。	同　上	同　上
10	社会的ジレンマ論	これまでの諸事例をふりかえりながら、理論的な検討を試みる。環境破壊の基本的メカニズムとして、「集合財」をめぐる社会的ジレンマの基本的論理がどのようなものかを説明する。北海道えりも岬における森林破壊と森林の回復の事例をとりあげ、社会的ジレンマを通しての環境破壊とその克服について、説明する。	船橋　晴俊（法政大学教授）	船橋　晴俊（法政大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	環境負荷の外部転嫁と社会的ジレンマの諸類型	環境破壊のもう一つの社会的メカニズムとしての、「環境負荷の外部転嫁」について説明する。開発途上国と日本との関係においても、日本国内においても、このメカニズムが、作用している。青森県への放射性廃棄物の集中を事例としてとりあげ検討する。また「環境負荷の外部転嫁」という視点を使って社会的ジレンマの７類型を提示する。	舩橋　晴俊	舩橋　晴俊
12	環境制御システム論	環境問題の解決努力の歴史的進展は、環境制御システムが形成され、経済システムへの介入を 4 段階にわたって深化させてきた過程である。その 4 段階とは、A介入の欠如、B制約条件の設定、C副次的経営課題としての内部化、D中枢的経営課題としての内部化、の諸段階であり、現代社会は全体として、D段階への移行が必要になっている。	同　上	同　上
13	自然エネルギーと地域振興	90 年代後半、一部西欧諸国の脱原発・グリーン電力導入の趨勢を追うような形で、日本でも風力発電をはじめとする自然エネルギー発電施設が増えている。それを促進する政治的社会的条件に注目し、エネルギー政策における市民参加、環境負荷が少ない新産業の導入による過疎地域の活性化などの問題を考える。	田窪　祐子（富士常葉大学専任講師）	田窪　祐子（富士常葉大学専任講師）
14	環境基本条例と環境基本計画－自治体総合的環境行政の推進	環境問題の広がりと普遍化に伴い、自治体の環境政策においても「総合化」がキーワードになり、総合的環境行政の展開が志向されている。本講では、こうした問題意識のもとに、自治体政策において総合的環境行政の中核的システムとなる環境基本計画の意義、構成と展開を紹介した上で、持続可能な社会の実現に向けて環境基本計画を中心に地域環境を総合的に管理していく「環境マネジメント」の発想について検討する。	田中　充（法政大学教授）	田中　充（法政大学教授）
15	環境問題の解決のために	環境社会学の立場から“環境問題の解決”を考えると、何が見えてくるか？“環境問題の解決はひとりひとりの心がけから”と一般的に語られるが、環境社会学の立場からは、それと違ういくつかの方向――調査、市民自治、協働、情報共有、社会的しくみを変える――などが見えてくる。	宮内　泰介（北海道大学大学院助教授）	宮内　泰介（北海道大学大学院助教授）

＝　都市社会の人間関係（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　森岡　清志（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、都市社会が人間関係にどのような影響を与えているかという点を中心に、都市社会学、家族社会学、階層研究にまたがる諸知識を提供し、パーソナルネットワークに関する理解を深めることにある。現代社会を理解する時にも、身近な人と人とのつながりを理解することが重要なことを伝えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市集落・都市生活の特質と人間関係	都市という集落の特質、そこから生ずる共同生活の営み方（都市的生活様式）がどのような人間関係をつくりだすか、この点に関するこれまでの学説を整理しつつ紹介し、人間関係に注目することがどのような意味をもつかについて講義する。	森岡　清志（東京都立大学教授）	森岡　清志（東京都立大学教授）
2	社会的ネットワークとパーソナルネットワークの研究視角	人間関係に注目する先行研究の中から社会的ネットワークという概念が誕生し、さらにその中から人と人とのつながりに着目するパーソナルネットワーク研究が盛んになってきた過程と、これらの研究における基本的な説明論理について講義する。	同　上	同　上
3	アーバニズムと社会的ネットワーク	都市は人間関係をどのように変えるのか。ワースのアーバニズム理論とフィッシャーの下位文化理論を対比させて、都市に住むことが社会的ネットワークをどのように変えるのかについて考える。 アーバニズム理論、ネットワーク構築における構造的制約と生態学的（地理的）制約	松本　康（東京都立大学教授）	松本　康（東京都立大学教授）
4	北カリフォルニアにおけるパーソナルネットワーク研究の成果	大都市の社会生活が、郊外や小さな町の社会生活とどのように異なるのか。フィッシャーの北カリフォルニアでの調査結果を参考に、アメリカ合衆国における親族・近隣・仕事仲間・友人関係などについて検討する。 ネットワークに関する下位文化理論の仮説と北カリフォルニア調査の知見	同　上	同　上
5	日本の大都市におけるパーソナルネットワーク	現代日本の大都市圏では、どこにどのような人が住んでいるのか。そこでの社会生活の特徴はどのようなものか。またその要因は何か。日本都市におけるパーソナル・ネットワーク研究の成果を踏まえて考える。 都市の社会空間構造、都心居住と郊外居住、性別・年齢・職業・移動歴とパーソナル・ネットワーク	同　上	同　上
6	都市化に伴う日本の親族関係の変容	パーソナルネットワークの中で近親者の親族ネットワークは都市化が進展しても依然として重要である。日本の親族関係の特質と、都市化に伴う変容について講義し、パーソナルネットワークと社会とのつながり、個人の生活とのつながりを理解させる。	森岡　清志	森岡　清志
7	現代都市の家族関係	現代都市家族の特徴について、ワースのアーバニズム論やパーソンズの孤立核家族論を紹介し、それに対するサスマンやリトワック（修正拡大家族論）などの反論を検討する。日本の都市家族研究にも触れる。	野沢　慎司（明治学院大学教授）	野沢　慎司（明治学院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市家族とパーソナルネットワーク	家族内部の人間関係は家族外の関係のネットワークの構造と関連しているとみるボットと後続の研究を取り上げ、その意義と問題点を論じる。コミュニティ解放論に依拠する新しい見解と比較する。	野沢　慎司	野沢　慎司
9	大都市郊外と地方都市にみる家族とネットワーク	家族に対するネットワークの構造的影響について、調査事例を取り上げ、親族、職場、地域社会などにおけるネットワークが連帯性を帯び、現代日本の夫婦関係に影響を及ぼす傾向を論じる。	同　上	同　上
10	都市社会と家族・ネットワークの構造変動	ネットワークが空間的、構造的に解放化すると、家族が意識的にネットワークを維持・管理・動員する主体となる傾向を増す。それが家族のライフスタイル化や個人化とも関連することを論じる。	同　上	同　上
11	社会階層とパーソナルネットワーク	職業、収入、教育程度などを規準とする社会階層の違いによって、個人の持つパーソナルネットワークの特性には様々な違いがみられる。それらを説明する個人属性的要因および社会構造的要因に言及する。	中尾　啓子（東京都立大学助教授）	中尾　啓子（東京都立大学助教授）
12	ジェンダーとパーソナルネットワーク	社会的文化的性差を意味するジェンダーによって、パーソナルネットワークはどのように異なるのか、この点を中心に男と女のパーソナルネットワークの差異に焦点をあてながら、これまでの実証研究を例にとって、ジェンダー効果について論ずる。	同　上	同　上
13	社会的資源としてのパーソナルネットワーク	個人が社会的地位を達成する過程で、パーソナルネットワークは社会的資源としていろいろな機能を果たしている。ここでは主に、職業的地位達成において知人や友人が与える影響を、理論的に考察し、実証研究を紹介しながら探求する。	同　上	同　上
14	高齢者像の変容とパーソナルネットワーク	高齢者の生きがいを支えているものは何か。生きがいの一つとして主観的幸福感をとりあげ、これを規定する要因の一つに友人関係があることを述べ、高齢者の生きがいと友人関係の関連について考察する。また友人関係の特質についても講ずる。	森岡　清志	森岡　清志
15	パーソナルネットワーク研究の課題	パーソナルネットワーク研究の成果を整理するとともに、今後の研究課題について説明する。親しい人びとに限定されたネットワーク研究の問題点や、ライフコースとネットワークの変化の関連を追求する必要などについて講ずる。	同　上	同　上

＝　フィールド社会心理学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　大橋　英寿（放送大学副学長）〕

全体のねらい

社会心理学は、パーソナリティ・社会・文化の３視点を統合して人間生活を理解しようとする人間科学である。社会心理学の方法の一つは、人々が生活している現場（フィールド）へ出向き参与観察やインタビューによって得たデータを分析・解釈していくフィールドワークである。本講義では、担当講師がそれぞれに実践してきたフィールドワークの概要を順次紹介していく。取り上げるテーマは、病気と治療をめぐる人々の対応行動、動物やロボットを用いた介護活動、大震災後の復興での住民の合意形成過程、被災者による記憶の語り、都市の再開発をめぐるコンフリクトとその解決、漁村の過疎化・高齢化から派生する問題、南米の日本人移住地での文化変容、アフリカの牧畜民にみられる独特の生活論理や感情の処理法などである。人間生活が営まれている現場に密着していくフィールド社会心理学。そこで扱われるテーマの多様性と研究法の柔軟性を理解することに本講義のねらいがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会心理学の課題と方法	境界科学である社会心理学は発展をとげながらも、方法や技法をめぐって多様な立場が併存しており、いまなお流動的である。人間諸科学の中で社会心理学という学問分野がどのような位置にあり、何を固有の課題とするのかを確認し、取り扱われている研究テーマ、研究のデザイン、データの収集法について整理する。	大橋　英寿（放送大学副学長）	大橋　英寿（放送大学副学長）
2	フィールドワークの実践	フィールドワークとは人々が実際に生活している現場（フィールド）に出向き、参与観察やインタビューを主たる技法にして、テーマに即したデータを収集し、それを分析し解釈していく方法であり、近年多くの学問分野で用いられている。社会心理学におけるフィールドワークの特徴、手順、留意点について概説する。	同　上	同　上
3	地域住民の保健行動 —現代医療と民間療法—	心身の不調にたいし、人々は一般的にその状態を自己判断し、主体的に治療法を選択している。たとえば些細な心身不調の場合、家庭のなかだけで対処することが多いが、より重篤な疾病の場合には医療を利用するとともに、さまざまな民間療法にも依存する。このような心身不調への対処の諸相を調査データにもとづいて解説する。	安保　英勇（東北大学大学院助教授）	安保　英勇（東北大学大学院助教授）
4	野のカウンセラー —シャーマンと地域社会—	トランスとよばれる変性意識状態や霊感を駆使してカミや死者霊と交流しながら占いや予言、病気治しができる特異能力者とみなされているシャーマンが世界各地で活動している。地域社会におけるシャーマンの実態を沖縄の「ユタ」とそのクライエントの相互作用の事例研究を通して明らかにし、シャーマンが伝統文化にそくしてカウンセラーの役割をはたしている事実に注目する。	大橋　英寿（放送大学副学長）	大橋　英寿（放送大学副学長）
5	医療化社会の病気対処—「アトピー」をめぐってー	高度医療化社会とは健康第一主義が普及し、医療資源や保険制度が整備された豊かな社会である。そこではマスメディアの情報や多様な治療者のもとで、病者は主体的な病気対処が求められる。アトピーを例にとって、新聞記事や母親の「語り」から、高度医療化社会の病気対処の一面を明らかにする。	作道　信介（弘前大学教授）	作道　信介（弘前大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	動物・ロボット介在活動 —新しいヒューマンケアの可能性 —	現在、医療・教育・福祉の分野で、動物介在活動、ロボット介在活動が注目を集めている。ここでは、ある自律運動型ロボット(AIBO)を、高齢者福祉施設におけるレクリエーション活動に利用したケースを紹介しよう。とくに、ロボット単体の効果ではなく、ロボットの導入により、AIBOの操作者、福祉施設スタッフ、高齢者からなる場（フィールド全体）が変容する様子に注目したい。	矢守　克也（京都大学助教授）	矢守　克也（京都大学助教授）
7	都市再開発をめぐるコンフリクト—京都駅ビルの高層化—	近年、地域計画や都市再開発事業をめぐって、当事者間で様々な利害対立（コンフリクト）が頻発し、その解決が重要課題となっている。ここでは、京都駅ビルの高層化をフィールドにし、そのコンフリクトの「対立の構図」を「コンフリクト解析」というゲーム理論に基づいて分析する。	永田　素彦（三重大学助教授）	永田　素彦（三重大学助教授）
8	住民の合意形成過程 — 阪神大震災後のマンション復興 —	大災害が発生した後は、生活環境を復興し、日常生活を再構築することが急務となる。そのためには、住民の合意形成が必要となる場面も多い。合意形成がうまくいかなければ、それだけ復興が立ち遅れるからである。ここでは、阪神大震災後の分譲マンション復興をフィールドにし、住民の合意形成過程の特徴を「診断」する方法を考える。	同　上	同　上
9	被災者の語り—阪神大震災の記憶—	「グループ 117」は阪神・淡路大震災（1995 年）の被災者が、震災の記憶を語り継ごうと結成した市民団体である。筆者が数年間にわたって本団体のメンバーとして活動する過程で感じとったこと — 第1に、過去の出来事を後世に伝達することの意味、第2に、研究者が一般の人々とともに実践的な活動に参加することの意味 — を紹介し、フィールド社会心理学の意義について検討しよう。	矢守　克也	矢守　克也
10	地域社会の変容—漁村の過疎・高齢化—	高度経済成長下の人口流出がもたらした農山漁村地域の過疎化、その後の著しい過疎高齢化の問題にたいしては、地域構造論、農業・水産経済論、地域活性化運動論などの立場から多様なアプローチがこころみられている。ここでは、こうした現象の典型事例ともなる地域輪郭の明瞭な離島漁村をモデルとしてとりあげ、伝統的社会化システムの変容と解体という視点から話をすすめていく。	大江　篤志（東北学院大学教授）	大江　篤志（東北学院大学教授）
11	伝統漁労の再編—アワビ漁の現在—	各地の漁村で昔から営まれてきた漁労活動の多くが深刻な過疎・高齢化のもとで危機的事態に直面している。ここでは、このような事態に至る経緯を伝統的な存続システムの失調過程からみていき、次いで後継者不在のなかで、心身機能の衰えをさまざまな技能を編み出し補完しながら伝統漁労を支えている年老いた漁師たちの漁場での姿を追っていく。	同　上	同　上
12	異文化への適応過程—南米の日本人移住地—	高度経済成長を機に日本は移民の送出国から外国人労働者の受け入れ国へと変わった。南米ボリビアのオキナワ移住地はそうした送出時代にアマゾン最源流に入植した移住地のひとつである。開拓から40年を経て、世代交代と文化変容が進行している。同移住地で行ったフィールドワークをもとに、移住者の言語や宗教など生活の諸側面の現状を紹介しながら異文化への適応を考える。	安保　英勇	安保　英勇
13	牧畜民の生活論理 — 北西ケニア・トゥルカナの“ねだり”—	私たちは「もらったらお返しをする」という互酬性を前提とした社会に暮らしている。ケニアの牧畜社会、トゥルカナでは、要求することから始まる交渉が生活の中心にある。私たちからみると、彼らの生活は”ねだり”が中心で、”お返し”という観念にとぼしい。この独特の生活論理は調査者にとって大きなストレスをもたらす。フィールドワークの過程で、この“ねだり”がどのように理解されていったかを示す。	作道　信介	作道　信介

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	「怒り」の民族心理―トゥルカナのサンダル占いから―	アフリカの牧畜民、トゥルカナの人びとは、病気など対処できない問題に出会うと、家族・親族など身近な人の「怒り」を疑い、占い師のもとにおもむく。他者の「怒り」は人を殺すといわれる。占いでは誰がなぜ怒ったのかが問われ日常生活の再検討がおこなわれる。トゥルカナ社会における「怒り」のはたす役割を考える。	作道　信介	作道　信介
15	社会心理学とエスノグラフィー	フィールドワークで集めたデータを分析し解釈した最終報告書がエスノグラフィー（民族誌）である。社会心理学でのエスノグラフィーの意義を明らかにし、テキストで取り上げた１２のエスノグラフィーを通してフィールド社会心理学の特徴と有効性を確認する。	大橋　英寿	大橋　英寿

＝紛争の社会学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　長谷川　公一（東北大学大学院教授）〕

全体のねらい

21世紀になって、家族や地域生活、国際社会に至るさまざまのレベルで紛争が増大し、深刻化している。共通の前提や利益・価値観が見えにくくなっており、個人化が顕著になっている。社会統合、共同性の再生は、どうすれば可能なのだろうか。紛争の背景、原因、展開過程、構造、帰結、紛争処理のあり方、信頼などの考察をとおして、現代社会の特質を検討したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代社会と紛争	冷戦の終焉・高度産業化・グローバル化など現代のマクロ的な社会変動とそれにかかわる社会問題・環境問題・リスク問題に焦点をあてて、現代社会の対立と紛争の特質を概観化する。	長谷川　公一（東北大学大学院教授）	長谷川　公一（東北大学大学院教授）
2	紛争と秩序	「紛争モデル対秩序モデル」という古典的な図式を批判し、紛争と秩序を連続にとらえて、マクロレベルでの秩序に対するミクロレベルでの紛争と紛争処理の影響を論じる。	同　上	同　上
3	紛争の社会的機能	紛争は、1つのコミュニケーションのタイプでもあり、再統合の契機ともなり、外部との対立・紛争が内部的な統合を高めることもしばしば見られる。社会問題の開示や制度形成の機能もある。紛争の多様な機能を考察する。	同　上	同　上
4	紛争と文化	紛争の社会的背景として文化・社会意識に着目する。日本は「和の文化」が支配的で、裁判を忌避する傾向が強かったが、近年伝統的な意識には大きな変化が見られ、自己決定性の重視など、個人化が顕著である。	同　上	同　上
5	紛争研究の社会科学	紛争は学際的な研究領域であり、政治学・国際関係論・法学・経済学・経営学・心理学・文化人類学・歴史学などとの関係が深い。各学問分野での近年の研究成果を整理する。	同　上	同　上
6	紛争処理の歴史と原理	紛争をいたずらに拡大せず、また長期化させないように、社会は紛争処理のルールを発展させてきた。紛争処理に関して、前近代と近代を対比し、近代的な紛争処理の特質を考察する。	同　上	同　上
7	法と裁判	近代法は裁判規範であり、裁判制度は、もっとも洗練され・形式化された紛争処理制度である。裁判の特質、「現代型裁判」「政策志向型訴訟」の提起する課題を中心に、現代的課題を考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	紛争と社会運動	欧米諸国では、「集団訴訟」という、社会運動組織などが原告となる、社会運動の戦略として提訴される裁判がある。公民権運動は、訴訟によって大きな成果をあげてきた。紛争における社会運動の役割を検討する。	長谷川　公一	長谷川　公一
9	社会問題と紛争処理過程	産業公害・高速交通公害・生活公害・地球環境問題という環境問題のタイプごとに、どのように紛争化され、紛争処理がすすめられてきたのか、を考察し、裁判や公害調停、国際会議の役割などを検討する。	同　上	同　上
10	NGO・NPOの役割	告発批判型の住民運動・市民運動に対して、国際的にも国内的にも、政策志向的で専門性の高いNGO・NPOの役割が増大している。政策形成にはたすNGO・NPOの多様な役割を考察する。	同　上	同　上
11	合意形成と信頼の基礎	ゲーム理論の知見や心理学的な実験結果をもとに、合意形成と信頼関係構築の基礎としての、報酬の確実性やリスク・コスト、規範のはたす意義、ゲーム理論的な戦略決定、意思決定論の課題などを考察する。	同　上	同　上
12	ネットワークとコラボレーション	メディア環境の発達にともなって、官僚制的なピラミッド型の組織原理に代わって、ゆるやかな横のつながりとしてのネットワークの重要性が増しつつある。領域横断的な共同作業としてコラボレーションのもつ意義も高まっている。紛争抑止という観点から、ネットワークとコラボレーションに着目する。	同　上	同　上
13	パブリックと公共性	西欧的なパブリックと日本の「公共性」の観念を対比し、社会統合と共同性、合意形成を創出する原理として、新しい公共概念が求められていることを論じる。	同　上	同　上
14	ポリシーミックスと政策原理	市場原理と計画原理を統合した、自主規制と排出枠取引、租税などを組み合わせたポリシーミックスという手法が温暖化対策などで注目されている。紛争化社会における政策のあり方を考察する。	同　上	同　上
15	紛争と社会統合	紛争を抑え込むのではなく、紛争処理の制度化をとおして社会は成熟していく。〈他者性〉の意識化と他者に対する説明責任、情報公開によって、紛争は抑止でき、紛争処理も容易になる。紛争処理をとおして成熟する新しい社会像を提示する。	同　上	同　上

＝経営学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師　：　佐々木　弘（放送大学教授）〕
〔主任講師　：　奥林　康司（神戸大学大学院教授）〕

全体のねらい

日本企業の経営のあり方は、第二次世界大戦後の経済状況とその歴史的変化に対応して、良くも悪くも評価されて来た。では、日本的経営の特徴は何に求められており、それはどのように変化してきたか。日本的経営の競争優位はどこにあったのか。今後はどのような点で競争優位を発揮できるのか。このような経営学の基本問題を第二次世界大戦後の高度成長期（‘60～‘70）、安定成長期（‘80）、グローバル競争期（‘90～）に分けて検討し、日本的経営の将来方向を探ることをめざしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日本的経営の諸特徴	経営学は主として、企業の行動とその経営のあり方を研究対象にしてきた。その中で日本企業の経営の特徴を何に求めるかは経営学の基本的研究課題の一つであり、多くの学者がその研究に関与してきている。ここでは、高度経済成長期（60年70年代）、安定成長期（80年代）、グローバル競争期（90年代以後）において、どのような議論が展開されたかを概観し、その流れを明らかにする。	奥林　康司（神戸大学大学院教授）	奥林　康司（神戸大学大学院教授）
2	終身雇用制	日本的経営の「三種の神器」と言われた終身雇用制について、その基本的特徴を明らかにする。それが労使双方に長く受け入れられたことからして、企業及び勤労者の双方の視点から、その長所、短所を明らかにし、同時にそれが高度経済成長期に何故有効性を発揮したかを検討する。	同　上	同　上
3	年功賃金	「三種の神器」の一つとしての年功賃金について、その本質的特徴を明らかにする。年功に伴って何故賃金が上昇するかについて、年功的熟練説、職場秩序説、生活保障説を詳しく説明する。	同　上	同　上
4	企業別組合	企業別組合の下で、労使が激しく、対立した歴史的事実を明らかにする。その後、労使協議制の定着に従って労使の意思疎通がよくなり、労使の合意が得られやすくなった現実を、労働組合の指導者にインタビューすることにより明らかにしていく。	同　上	同　上
5	系列・下請け	「護送船団方式」と言われた系列・下請け関係の特徴を自動車産業の事例によって明らかにする。下請け企業の経営努力により技術水準の向上やノウハウの蓄積、コストダウンが企業の競争力をつけた過程を明らかにする。下請け企業へのインタビューで現実性をもった内容にする。	同　上	同　上
6	ME技術革新と新しい組織構造	‘80年代に入り、労働力不足の中で、企業は産業用ロボットやコンピューター導入によりコストダウンと品質の向上に努力し、日本製品の国際競争力を高めていった。ME技術の普及は企業の組織構造、生産方式の技術的な変革をもたらし、新しいパラダイムをもたらした。これらの事実を奥林をリーダーとした実態調査により明らかにする。	同　上	同　上
7	チーム作業方式	ME技術の普及に伴う新しい組織構造の下で、作業組織はベルトコンベアを利用した職場においても、チーム作業組織になっていることを示す。このチーム作業の実態と特徴を実態調査と工場へのインタビューを通じて明らかにしていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	フラット型管理組織	「柔構造組織プロジェクトチーム」による実態調査に基づき、管理組織がフラット化している現実を明らかにする。それにより中間管理者の役割が変わっていることをトヨタ自動車へのインタビューにより具体的に例示する。	奥林　康司	奥林　康司
9	雇用制度のフラット化	企業の組織構造がピラミッド型からフラット型にシフトするとき、終身雇用制は変化する。その一つとして、年功による昇進機会は少なくなり、雇用形態は多様化する。また長期雇用を必ずしも期待しない若者が増大してくる。この実態を、流通企業へのインタビューを通じて明らかにする。	同　上	同　上
10	成果主義賃金	賃金制度も年功によって決められる部分が少なくなり、個人の能力や業績によって決められる部分が増大する。その典型は年俸制となる。成果主義型の賃金形態や年俸制の仕組みを事例や統計を用いて説明する。年俸制の実態について企業にインタビューする。	同　上	同　上
11	ネットワーク型企業間関係	IT 技術の発達や市場構造の変化に伴い、従来の下請関係はネットワーク型企業間関係に変化している。この企業間関係の変化を東大阪の中小企業へのインタビューにより明らかにする。	同　上	同　上
12	規制と規制緩和の諸問題	日本企業の経営の展開を学ぶとき、広く「企業と政府との関係」の中で企業をみることも不可欠である。特に、経済的規制を中心にとりあげ、政府規制の概要と規制対象分野、規制緩和・規制改革の意義と必要性、規制緩和の効果と評価等を取り扱う。	佐々木　弘（放送大学教授）	佐々木　弘（放送大学教授）
13	公的サービスの供給方式の多様化	近時、公的サービスの供給方式は、かつての直営方式を中心とする画一的な考え方をやめて、きわめて多様化の傾向をとりつつある。特に、競争的要素の導入を図る、いくつかの新しい考え方は注目に値する。ここでは、このような一連の新しい動きを体系的に説明する。	同　上	同　上
14	アメリカにおける日本的経営	日本企業のグローバル化に伴い、海外に進出した製造業が国内での日本的経営の特徴をどの程度実施しているかを明らかにする必要がある。特にアメリカに進出した製造企業は現地アメリカの製造業に大きな影響を与えた。その代表としてNUMMI（トヨタとGMの合併会社）をとりあげ、インタビューにより、その特徴を明らかにする。	奥林　康司	奥林　康司
15	中国における日本的経営	中国への日本企業の展開はアメリカの場合と根本的に異なっている。特に電機産業企業の進出は、日本的経営の移植可能性を示す試金石でもある。10 年間でどの程度日本的経営を定着させているか、在中日系企業へのインタビューを通じて明らかにする。	同　上	同　上

＝　経営工学総論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師：　辻 正重（青山学院大学教授）〕

全体のねらい

経営工学は、目的を持った組織の経営問題を対象として、意思決定や計画そしてシステム開発などを合理的におこなうための問題解決技術学であります。特に総合的なシステムアプローチによって問題を解決する立場であります。この観点に立って「産業と技術」専攻の教育目標である「これらの技術とその発展動向や経営管理のあり方」について一般的な知識が得られるように、また経営工学をなるべくやさしく、そして全体を概観出来るように講義する。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経営工学入門	経営工学は，どのような問題を，どのように解決していくかを理解してもらうために、分析、予測、資源配分計画、スケジュール，コントロールなどの簡単な問題を挙げ、その解決手法を具体的に説明する。	辻　正重（青山学院大学教授）	辻　正重（青山学院大学教授）
2	経営工学における問題解決	1章を踏まえて、経営工学的な問題解決で重要なモデル、解決のいろいろなアプローチについて説明する。これらを踏まえて「問題とはどう定義するか」、そして「問題解決の一般的なプロセス」をいかに理解するかを考察する。	同　上	同　上
3	経営工学の発展	テーラー・システム、フォード・システム、行動科学，生産管理、人間工学、OR、経営情報システム、システム工学、TQC、JIT、TPM．など経営工学の歴史的展開と発展動向を探る。そして「経営工学とはいかなる工学」かを考察する。	同　上	同　上
4	経営の成り立ち	経営工学の対象である「目的を持った組織」の経営の成り立ちを、その代表である企業組織を中心に据えて解説する。企業経営の目的（利潤目的，社会目的）、企業の活動（階層的な多重サイクル活動）、経営システム（組織構造、制度、情報システム）などについて考察する。	同　上	同　上
5	経営構造サイクル	企業経営の構造を決める活動についてここで概観する。長期的ビジョン、企業理念、事業コンセプト、企業分析、環境分析、事業展開戦略、技術戦略などの戦略策定の手順と方法を説明する。	同　上	同　上
6	経営情報システム	経営構造を支える中心の一つである経営情報システムの展開と動向を探る。MIS（経営情報システム）、DSS（意思決定支援システム）、ESS（経営トップ支援システム）、SIS（戦略的情報システム）、ERP（基幹業務統合システム）などを具体的に説明する。	同　上	同　上
7	マーケティングと製品開発	企業経営の構造的な枠組みの下、企業環境分析、市場ニーズの把握をしながら、技術開発、製品開発を行うが、そのプロセスにおける課題、問題解決の考え方、解決の手法を解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	工程計画と作業計画	調達、製造、在庫、販売の日常ルーチンな活動が行われる前段階として、拠点戦略、生産方式、工場計画、生産準備、物流システム設計が行われる。ここではそれらの工場設計・生産準備の課題と解決方法を解説する。	玉木　欣也（青山学院大学教授）	玉木　欣也（青山学院大学教授）
9	生産管理における工程管理と在庫管理	作業管理、そして調達、生産、在庫、販売を行う生産管理の目的、生産計画と統制、在庫管理、統合的生産管理システムの狙い、JIT、MRP、生販物統合化管理システムなど生産管理の課題と解決方法を解説する。	同　上	同　上
10	品質管理	経営管理基準の一つである品質の管理における、顧客や品質の基本的な考え方と最近の品質管理の動向について概説する。その上で品質管理における問題解決の方法としてQCストーリーを説明し，そこでの利用される手法を解説する。	石津　昌平（青山学院大学助教授）	石津　昌平（青山学院大学助教授）
11	価値的管理	経営管理基準の中心的な管理基準である価値による管理を、全社的管理と価値的管理、日常業務活動と価値的管理（経営分析、利益計画、予算管理、原価管理）、製品開発と価値的管理（VA）、企業経営構造決定と価値的管理（投資決定法）という枠組みで説明する。	辻　正重	辻　正重
12	信頼性工学	管理は達成機能と保全機能のバランスが重要であるが、ここでは経営資源の「もの」の管理を、設備を対象としながら信頼性工学として一般的に解説する。信頼性の3大要素である耐久性、保全性、設計信頼性についてその考え方と設計方法を考察する。	鈴木　和幸（東京電気通信大学教授）	鈴木　和幸（東京電気通信大学教授）
13	情報システム開発法	一つの問題解決として「経営情報システム開発の一般的手順」を概観し、開発の基本的な考え方、および基本計画、ヒューマンインターフェイスの設計、データベースの設計などで利用されるDFD、HIPOなどの手法について解説する。	斎藤　正武（中央大学専任講師）	斎藤　正武（中央大学専任講師）
14	数理的解決法	経営問題を解決する数理・統計的方法について一般的に概観する。そして確定モデルの代表として線形計画法、不確定モデルの代表として待ち行列理論、多目標問題を扱うAHPなどを取り上げ解説する。	大野　勝久（名古屋工業大学教授）	大野　勝久（名古屋工業大学教授）
15	プロジェクト管理法	システム開発、研究開発、戦略策定など経営の革新機能を担う「プロジェクト・マネジメント」の目的、課題、組織編成の方法、プランニングの方法（WBS,PERT）、コントロールの方法などについて一般的に説明する。	辻　正重	辻　正重

＝技術の分析と創造（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　赤木　昭夫（元放送大学教授）〕
〔主任講師：　槌屋　治紀（システム技術研究所所長）〕

全体のねらい

経験の蓄積と交流（クロスファータライゼーション）と、発想（あるものを別なものに読み替える）と、予測のための計量（アカウンティングとシミュレーション）の３つの側面から、技術の変革の過程でエンジニアリング・センスはいかに発揮されてきたか、またいかに発揮されるべきか、具体的事例によって学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	鉛筆ができるまで	黒鉛と粘土の混合物を焼成してつくる芯を木片ではさみ、それに塗装をほどこすことで鉛筆は生産される。その過程を追いかけながら、蓄積された経験と発想を浮き彫りにし、筆記具としていかに優れた性能をもっているか、そして技能と技術への着眼点は何かをつかむ。	赤木　昭夫（元放送大学教授）	赤木　昭夫（元放送大学教授）
2	金型の設計	身辺のどんな道具をとってみても、材料が金属でもプラスティクでも、それが大量生産品であるかぎり、型に材料をプレスすることによって作られている。その型が金型（かながた）で、大量生産を支える重要な役割をになっている。その仕組みを知る。	同　上	同　上
3	金型の製作	ひとつの金型で何百万個という製品をプレスするため、金型は固い特殊鋼を機械で削ってつくる。この回では放電加工機を中心に、許容誤差をミクロン単位におさめるには、機械によってどこまでが可能で、最後にどんな人の手が必要かを見る。	同　上	同　上
4	工作機械の精度と効率	加工対象よりも加工する機械のほうが、より精密につくられていなければならない。たとえば面を削りだすフライス盤の水平度はどれほどか。それを高めるため設計にどんな配慮がされているか。それをどうやって実際の工作機械につくりこむか。機械の限界を克服するソフトウエアの役割は？	同　上	同　上
5	熟練の変容と保存	４回にわたって見てきた物作りの過程をふりかえりつつ、熟練がどこまで自動機械によって置き換えられてきたか、それにともなって求められる熟練の中身がどのように変わってきたか、伝統工芸の熟練と共通な点があるのか、熟練をどう保存するかなどを考察する。	同　上	同　上
6	システム：時計	「物作り」の第一部につづいて、第二部では、技術を「エレメントとシステム」の観点から見る。この回では、歯車式の機械時計が発明された過程を推定するため、そのメカニズムを分析し、時計というシステムを構成するエレメントの源をたどることを試みる。	同　上	同　上
7	システム：コンピュータ	技術の進歩を分析すると,革命的な原理の発明と原理を活かすための部分的改良、この二つの過程のからみあいであることがわかる。意外かもしれないが、最初に実用化された電子計算機ＥＮＩＡＣは、17世紀のパスカルの計算機や20世紀前半の微分解析機に共通の原理を活かし、改良したものだった。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	飛行翼の発明	飛行機の翼は、鳥の翼にヒントを得て発明されたのか。それとも凧（たこ）を発展させる形で発明されたのか。実用的な翼の発明となると、後者のほうを重視しなければならない。翼が空中に浮かぶ原理をもとに、ライト兄弟の凧の実験の意義を知る。	赤木　昭夫	赤木　昭夫
9	ライト兄弟の成功	凧による実験のあと、無人そして有人のグライダーによる実験をかさねたライト兄弟は、翼によって生ずる揚力と抗力の測定データに誤りがあることに気づき、正しいデータを得るため風洞実験に取り組んだ。その測定方法は、実に目覚ましいものであった。それによって彼らは大きく前進することができた。	同　上	同　上
10	飛行性能と制御	主翼と尾翼とガソリンエンジンを組み合わせて初めて彼らが有人動力飛行に成功した。その理由は、エレメントの機能を分析した上で、それらを組み合わせたときシステム全体としてどのように働くのかを徹底的に実験し、飛行機を安定させる制御方法を発明したからである。	同　上	同　上
11	電子出版：情報化と環境	この回から始まる第三部では、「エネルギーと環境を念頭においた技術の未来像」を探る。手始めとして、郵便とファックス、紙による印刷と電子出版、これらのエネルギー消費を比較して、環境への影響に配慮した情報化のあり方を検討する。	槌屋　治紀（システム技術研究所所長）	槌屋　治紀（システム技術研究所所長）
12	太陽電池の可能性	学習の過程は、最初伸びがゆるやかだが、やがて急速な進歩を示し、一般に累積生産量とコストの関係で表される。それを太陽電池の技術予測に応用し、研究開発と大量生産により、いつごろどれくらいコストが安くなるかを推定し、エネルギー政策の立案に役立てることができる。	同　上	同　上
13	車のライフサイクル	生産、使用、廃棄まで車の一生（ライフサイクル）に必要なエネルギーの総量を計算して、ガソリン車、電気自動車、ハイブリッド車、燃料電池車のなかで、未来の車にふさわしい形式はどれか、また車体の軽量化はどこまで可能かなどを分析する。	同　上	同　上
14	世界の資源収支表	人類はどれほどの資源とエネルギーを消費し、どれほどの廃棄物を出しているか、それが人口の増加と生活水準の向上によってどのような規模になるか。それを収支表にまとめて、将来の資源と環境について、シミュレーションを試みる。	同　上	同　上
15	エンジニアリング・センス	シリーズのまとめ。技術にとって個々の発明と改良も重要であるが、それを活かす上で、ますます重要になってくるのがテクノロジー・アセスメント（技術評価）である。技術がもたらす影響をどう評価するのかのプロセスを紹介し、これからのエンジニアリングに必要なセンスと市民の役割は何かを検討する。	赤木　昭夫 槌屋　治紀	赤木　昭夫 槌屋　治紀

＝イノベーション経営（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：亀岡　秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）〕
〔主任講師：古川　公成（中村学園大学教授）〕

全体のねらい

如何にしてイノベーションを促進し、新産業・新技術を創出するかが現代日本にとって最大の課題である。この課題の解決には、創造的な目標を構想し、イノベーションを起動させ、これを積極的に推進する技術マネジメントが不可欠である。本講座の目標は、技術イノベーションを促進するプロデューサーの養成にある。画期的な技術を開発し、これを事業化し、世界経済の発展に寄与する新産業の創出につなげるという、重要な役割を担うプロデューサーに求められる基本的な知識や考え方を指摘し、イノベーションの推進にチャレンジする意欲の高揚をはかることに本講座の狙いがある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
I. イノベーション概論				
1	「イノベーション経営」序論	技術立国日本の産業にとって、技術的なイノベーションを推進する人材の育成が急務である。この章では、技術的なイノベーションが小さく芽生え、徐々に開花して大きな産業に発展するまでのプロセスの全容を概観し、この科目の構成を鳥瞰する。	亀岡　秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）	亀岡　秋男（北陸先端科学技術大学院大学教授）
2	イノベーションと科学技術－その歴史的展望－	産業革命以降、今日に至まで、世界経済の発展は産業技術の進歩に依存するところが多かった。新しい技術が新たな産業の創出につながった歴史上の具体例をいくつか分析しながら、イノベーション推進の条件を考察する。	原　陽一郎（東レ経営研究所顧問）	原　陽一郎（東レ経営研究所顧問）
3	イノベーションのプロセス－最近のイノベーション理論とマネジメントの意義－	新たな技術が大きな産業に発展するまでの長期的かつ広範囲にわたるプロセスを代表的な幾種かの実例について分析し、イノベーションを促進する要因、阻害する要因を指摘し、望ましいマネジメントのあり方を考察する。	原　陽一郎	原　陽一郎
4	イノベーションと新産業の創出	イノベーションの創生から新産業創出・発展のプロセスを分析する。繊維・鉄鋼・自動車・化学産業からデジタルＡＶ・携帯電話・ロボット、時計・液晶・プリンタさらには、医療産業など標準化も含めて産業のライフサイクルとして生成過程を捉える。	原　陽一郎	原　陽一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
		Ⅱ　企業のイノベーション・マネジメント		
5	イノベーター人材の創出 －イノベーションを先導する目標創設型のリーダーシップ人材育成－	技術と社会、経済、文化等、広い視野から将来のあるべき姿を構想し、これを実現する具体的に目標コンセプトを創出し、かつ現実的なアプローチの方法論を提示し、これを実践する「テクノプロデユーサー」の育成と活動環境について考察する。	亀岡　秋男	亀岡　秋男
6	技術・市場の予測と新コンセプト創出 －イノベーションは市場発見とその需要表現が鍵－	産業の基盤技術、需要構造、企業間競争などに変化の潮流を察知し、画期的な新製品や新産業のコンセプトを提示してみせる、ビジョナリー・リーダーがいる。そうしたリーダーの発想と新産業創出のプロセスを分析する。	亀岡　秋男	亀岡　秋男
7	新製品の創出 －需要開拓から製品・技術競合、企業競争を経て成長－	画期的な新製品には、忍耐強く、その需要をゼロから開拓する努力が必要になる。新製品が新事業を支える主力製品に成長するまでには、既存製品との競合があり、代替技術との競争があり、新規参入企業との競争もある。	古川　公成（中村学園大学教授）	古川　公成（中村学園大学教授）
8	経営戦略と技術戦略 －戦略ドメインとコアテクノロジー－	自社が得意とする技術力をどのようにして効果的に企業経営に活かすかについて、事業戦略ドメイン、コア・コンピタンス、コア・テクノロジー、および事業活動の組み合わせ（ポートフォリオ）などの視点から考察する。	許斐　義信（慶應義塾大学教授）	許斐　義信（慶應義塾大学教授）
9	技術戦略推進のプロセス－画期的新技術と既存製品・技術との抗争過程と新技術の地位確立－	画期的な産業技術が出現すると、新技術に置きかえられる恐れおそれがある既存製品や既存技術の市場地位を守る努力が始まる。市場での、変化への抵抗に対処しながら、新技術の市場地位を確立する方策の選択肢を考察する。	古川　公成	古川　公成
10	研究開発投資とリターン －Ｒ＆Ｄ生産性の向上－	R&D 投資の経済効果や、投資リスクはどんな基準で評価できるかについて、定性的および定量的な考え方を比較検討する。さらにＲ＆Ｄ投資の効果を高める工夫と、Ｒ＆Ｄ活動を管理運営する際の幾通りかの考え方を探る。	許斐　義信	許斐　義信

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	知的財産の戦略 －世界戦略の主軸に－	技術的な知的財産にかかわる蓄積と管理の仕方は、技術立脚型企業の存続と発展に直接の影響を与える。知的財産権の確立に伴う国境を越えた熾烈な競争と、画期的新産業技術を巡る国際標準化の競争の代表例を分析する。	許斐　義信	許斐　義信
12	知識創造経営－個人・グループ・組織の知の創造－	知識創造(Knowledge creation)がイノベーションの源泉である。科学技術にも経営にもナレッジマネジメントが重要となる。知識創造理論を中心に、個人、グループ、組織の知の創造、特に暗黙知と形式知との転換プロセスとその場を理解し実践に生かす方法論を示す。	野中郁次郎（一橋大学大学院教授）	野中郁次郎（一橋大学大学院教授）
Ⅲ　国レベルのイノベーション				
13	製品アーキテクチャと組織能力	設計思想としてのアーキテクチャという概念を説明し、組織能力とアーキテクチャの相性が現場の競争力を左右する、という仮説を、実例を説明し検討する。中国の産業競争力に関するアーキテクチャ分析も試みる。また、現場の競争力が収益に結びつきにくい日本企業の特徴を踏まえ、アーキテクチャの位置取り戦略も紹介する。	藤本　隆宏（東京大学大学院教授）	藤本　隆宏（東京大学大学院教授）
14	ナショナル・イノベーションシステムーイノベーション促進への産学官・社会の役割	経済のグローバル化が進む中で、競争力のある企業の立地には、極端な偏りがある。この状況をナショナル・イノベーション・システムという考え方に添って分析し、技術革新の促進に政府が果たす役割を考察する。	霍見　芳浩（ニューヨーク市立大学教授）	霍見　芳浩（ニューヨーク市立大学教授）
Ⅲ　イノベーション経営：まとめ				
15	イノベーションのマネジメント－総集編	グローバルに展開する技術イノベーションを効果的に推進するイノベーターに求められる考え方や知識、資質や能力、発想や行動パターンを概観する。そうした技術プロデューサーに期待される発想・思考形態や意思決定・行動様式を総括し、この科目の目的を整理する。	古川　公成	古川　公成

＝産業と労使（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）〕

全体のねらい

この講義は、「産業と労使の関係（‘99）」の改定版である。基本的な構成には大きな変化はないが、最後の第15章は21世紀を展望して大幅に書き改めた。また、各章の叙述にかかわる統計資料、法令改正などの改定、新たな研究成果等については、参考文献を追加して叙述を改め、その知見を付け加えた。なお、放送教材の各回のインタビューは、全面的に改定してある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	企業の発展と雇用社会	Ⅰ．サラリーマン社会の概観　労働力人口、就業者、雇用者、労働力率、失業率などの基礎的説明 Ⅱ．「使用者」とは誰か　労働者派遣事業、使用者概念の多様化、持株会社、会社分割。 Ⅲ．離職・発言・我慢　契約の自由、職業選択の自由、離職・転職の自由、労働条件の最低限規制、発言、我慢、忠誠。	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）	神代　和欣（横浜国立大学名誉教授）
2	工業社会から情報社会へ	Ⅰ．産業革命とペテイ法則　工業化、需要の所得弾力性、就業構造の変化、就業構造の国際比較、工業社会から情報社会へ。 Ⅱ．ホワイトカラー化　プロレタリアート、創造的破壊の理論、ホワイトカラー、工・職身分差別撤廃、民主化、進学率の上昇と作業長制度、人事制度の一元化、製造業の情報化。 Ⅲ．報通信革命と労力のオンライン化　コンピューターの発達、インターネットと通信革命、労働のオンライン化、オンライン労働者の権利。テレワーク。	同　上	同　上
3	もの造りのシステム	Ⅰ．テーラー・システムとフオード・システム　資本と経営の分離、科学的管理法、フオード・システム。 Ⅱ．ホーソン実験と人間関係論 Ⅲ．トヨタ生産方式　「自働化」　ジャスト・イン・タイム、大競争時代のものづくり。 Ⅳ．日本的経営	同　上	同　上
4	雇用関係	Ⅰ．職業選択と採用の自由　採用の自由　思想信条の自由公民権法 Ⅱ．雇用形態の多様化「終身雇用」、解雇権濫用の法理、長期雇用、人的資本、非正規雇用の拡大、期間雇用、パート、派遣、変更解約告知、労働条件の不利益変更 Ⅲ．飴と鞭　就業規則、インセンテイブ	同　上	同　上
5	生産性の向上と成果配分	Ⅰ．付加価値を生み出す 生産の技術的な関係式（生産関数）粗付加価値と純付加価値　生産と分配、付加価値を増やす方法 Ⅱ．技術革新　技術進歩の意義、生産性向上の方法、第二次大戦後の主な技術革新 Ⅲ．成長成果の配分　「合理化反対」争議　生産性向上運動、生産性基準原理、労働分配率、成果主義賃金、労働時間短縮 Ⅳ．ケース・スタディ：武田薬品の成果主義賃金制度	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	キャリア形成	Ⅰ．採用と新規入職者　新規就業者　新規学卒就業者 Ⅱ．教育投資　中途採用者 Ⅲ．企業内教育訓練と技能形成、企業内技能養成と内部昇進、ホワイトカラーのキャリア、出向・転籍 Ⅳ．査定と昇進　万人平等主義から能力主義へ　査定幅の拡大はどこまで進んだか	神代　和欣	神代　和欣
7	労働と余暇	Ⅰ．労働時間短縮の歴史～週 40 時間労働制　標準労働日労働時間の最高限度規制の意義 Ⅱ．労働時間短縮の経済学　所得・余暇選好理論～家計の労働供給　効用関数 Ⅲ．労働時間短縮の推移　労働時間の国際比較　残業時間　年次有給休暇 Ⅳ．多様な労働時間制度　フレックスタイム変形労働時間制　みなし労働と裁量労働　富士通の SPIRIT 勤務制度	同　上	同　上
8	報酬の体系	Ⅰ．賃金とは何か　労働の需要　労働の供給　均衡賃金率 Ⅱ．賃金制度　賃金形態　賃金体系　年功賃金の修正　年俸制の導入　定昇廃止　本田技研の成果主義 Ⅲ．退職金・企業年金　法定福利　法定外福利　退職一時金　企業年金　厚生年金基金　確定給付年金　確定拠出年金	同　上	同　上
9	労働組合との関係	Ⅰ．民主的労使関係の枠組み　市民法と団結禁止　市民法から労働法へ　産業民主主義　労働組合の法的保護　正当な争議行為　争議行為の制限　不当労働行為制度 Ⅱ．対立と協調　労働運動とイデオロギー　労使協調　労働組合組織率の低下 Ⅲ．職場の労使関係　企業別組合の特色　個別労働契約の増加　個別労紛争処理	同　上	同　上
10	団体交渉の経済的効果	Ⅰ．労働組合の交渉力　労働供給の制限　労働需要曲線の位置　需要の価格弾力性　労働需要の弾力性　マーシャルの 4 条件 Ⅱ．春闘方式　ベースアップと定期昇給　春闘相場　生産性基準原理　賃金関数 Ⅲ．人員整理・合理化その他の交渉事項　団体交渉事項　労使交渉の焦点の変遷　21 世紀の労使課題	同　上	同　上
11	日本的雇用慣行	Ⅰ．日本的雇用慣行とは何か　語源　起源　その経済合理性と限界 Ⅱ．日本的雇用慣行修正の方向　長期雇用のメリットとデメリット　日本の雇用調整　流動化し始めた労働市場　解雇権濫用法理の修正　変更解約告知　労働条件変更法理 Ⅲ．賃金処遇システムの変化　年功賃金の修正　退職金・企業年金の見直し　松下電器の退職金前払い制度	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	男女雇用機会の均等	Ⅰ．男女雇用機会均等法の成立　女性の職場進出と性差別　欧米の女性解放　女性労働力参加率の上昇 Ⅱ．女性労働者の保護と平等　戦後改革とその限界　判例の積み上げ　均等法の概要　改正均等法の概要 Ⅲ．男女賃金格差 Ⅳ．女性パートタイマーの処遇問題　パートの賃金　女性と年金	神代　和欣	神代　和欣
13	高齢化社会の労使課題～再雇用、年金、医療、介護～	Ⅰ．人生80年時代の生き方・働き方　少子・高齢化の進展　労働力人口の減少　経済成長の鈍化 Ⅱ．老後の所得保障　老後の所得源泉　所得代替率　わが国の公的年金制度　社会保険方式と保険料負担　年金改革の争点　年金の給付水準　厚生年金民営化論の危うさ　問題の多い基礎年金目的消費税論　年金支給開始年齢と高齢者雇用問題 Ⅲ．高齢者医療と介護　医療保険制度　老人医療　介護保険	同　上	同　上
14	大競争時代の労使のあり方	Ⅰ．貿易自由化と海外現地生産の拡大　貿易・資本の自由化　変動相場制への移行　貿易摩擦の激化　輸出品目の構成変化　円高　共産圏の崩壊　グローバル競争の激化　海外現地生産の拡大 Ⅱ．国際調達の増加 Ⅲ．雇用機会の海外流出　海外直接投資の雇用効果 Ⅳ．産業空洞化は避けられるか　空洞化の定義とその要因　モノづくりの人材育成　エンジニアリング・ソフトウエアの活用　マクロ経済の回復と成長	同　上	同　上
15	21世紀雇用社会	Ⅰ．バブル時代の人手不足　最初の引き金　改正入管法　外国人 Ⅱ．到来する若年労働力不足時代　労働者の就労実態 Ⅲ．増加する国際労力移動とその対応　規制を強化するアメリカ　苦悩する西ドイツ　アジアの人口圧力　外国人集住都市会議 Ⅳ．２１世紀産業社会の展望　持続可能な経済成長を目指して　迫り来る「地球の限界」　地球温暖化防止条約京都議定書　エコデザイン　地球環境の保護と経済成長の両立	同　上	同　上

＝　マーケティング論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　恩藏　直人（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

今日のビジネス活動を考える上で、マーケティングは欠くことの出来ないものとなっている。さらに、営利企業だけではなく、大学や病院や自治体など非営利組織においても、マーケティングの考え方やフレームワークは注目され始めている。マーケティングとは何か。マーケティングの要素にはどのようなものがあるのか。そしてマーケティングはどのように展開されるのか。この講義では、マーケティングに係わる様々な課題について、わかりやすく解説する予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	マーケティングとは何か	マーケティングは、生産や販売とどのように異なるのか。どのような課題を担って生まれてきたのか。マーケティングでしばしば議論される、ミックスの考え方とは何か。まず最初に、マーケティングの本質について解説する。	恩藏　直人（早稲田大学教授）	恩藏　直人（早稲田大学教授）
2	顧客価値と顧客満足	有利な競争を展開するためには、競合他社よりも優れた価値を消費者に提供しなければならない。そして、消費者が大きな満足感を抱けば、当該企業の製品を支持し、強いロイヤルティへと結びつく。今日、競争を展開する上で鍵となっている顧客価値と顧客満足について考察する。	同　上	同　上
3	市場志向型戦略計画	マーケティングの課題は、個々の製品に結びついたものだけではない。全社的なマーケティングの課題として、我々はミッションやドメインについて検討しなければならない。さらに、各事業部への資源配分やＳＷＯＴについても検討する。	同　上	同　上
4	戦略的マーケティング	市場の成長が見込めない成熟市場においては、常に競合他社へ目を向けなければならない。自社が成長するためには、他社のパイを奪わなければならないからである。ここでは、特に競争を意識した戦略的マーケティングについて解説する。	同　上	同　上
5	消費者行動	マーケティングの基本は消費者の理解にある。消費者が購買決定に至るまでのプロセスはどのようになっているのか。消費者は様々な情報をどのように処理しているのか。さらに、知覚の問題などについて考察する。	同　上	同　上
6	マーケティング・リサーチ	消費者を理解するために、企業は様々なリサーチを実施している。まず、データの種類について説明する。その上で、リサーチに用いられる測定尺度、サンプリング、集計方法などについて解説する。	同　上	同　上
7	セグメンテーション、ターゲティング、ポジショニング	マーケティングのＳＴＰについて解説をする。マーケティングでは、４つのＰとともにＳＴＰという骨子が知られている。とりわけＳＴＰは、具体的な製品や価格や流通や広告を展開する前に検討しておくべき「マーケティングの宿題」として重視されている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	製品戦略	製品はマーケティングにおける４つのＰの一つである。マーケティングで考える製品とは何か。新製品開発はどのように進められるのか。製品ミックスの考え方や製品ライフサイクルの概念についても解説する。	恩蔵　直人	恩蔵　直人
9	ブランド・エクイティとブランド戦略	今日のマーケティングにおける重要課題としてブランド戦略がある。ブランド論の火付け役ともいえるブランド・エクイティ概念について整理し、ブランド拡張やブランド変更など、ブランド戦略の主要な課題について考察する。	同　上	同　上
10	価格戦略	価格はマーケティングにおける４つのＰの一つであるとともに、企業に利益をもたらす重要な要素である。まず、価格設定の基本方針について整理する。その上で、消費者心理や製品ミックスを考慮した価格戦略について説明する。	同　上	同　上
11	流通チャネル戦略	流通チャネルはマーケティングにおける４つのＰの一つである。まず、流通チャネルの存在理由やチャネルの段階数について整理する。そして、チャネル設計やチャネル管理について探る。	同　上	同　上
12	統合型マーケティング・コミュニケーション戦略	いくら優れた製品であっても、その価値や存在を顧客に知ってもらわなければ売上げには結びつかない。統合型マーケティング・コミュニケーションの考え方とその実践について検討する。	同　上	同　上
13	広告、販売促進	マーケティングにおける４つのＰの一つである。広告といっても様々な種類があるので、まず広告の種類について整理し、効果測定や予算の考え方を紹介する。また販売促進についても、その種類や目的について解説する。	同　上	同　上
14	営業管理と営業革新	我が国における営業は属人的性格が強く、これまで科学的な視点で議論されることがなかった。ところが今日では、営業にも科学のメスを入れ、マーケティングという大きな枠組みの中での検討が進められている。営業管理や営業革新について考察する。	同　上	同　上
15	サービス・マーケティング	マーケティングの枠組みの多くは製造業を前提として議論されてきた。ところが、今日ではサービス産業が大きな役割を演じるようになっている。有形の製品と比較した場合のサービスの特性、サービス産業のマーケティング課題について検討する。	同　上	同　上

＝　会計学（‘０４）＝（TV）

〔主 任 講 師：　三代澤　経人（立命館大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、企業の会計を中心に、会計とはどのようなものであるか、その基本的な性格を整理するとともに、とくに財務会計領域に関して、近年急速に世界標準化が進められているわが国の会計諸基準を検討する。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	会計の基本的な体系と会計学の課題	会計学の対象である会計はその担い手である人間の社会的な行為であることを明らかにし、その基本的な機能内容と、とくに企業会計について、会計過程の全体的な仕組みと課題を検討する。	三代澤　経人（立命館大学教授）	三代澤　経人（立命館大学教授）
2	企業の管理と会計	会計は何よりもまず企業の管理＝運営上行われる。そこで、これを直接な課題とする管理会計に関してその機能内容を再検討し、経営管理との関係を明らかにするとともに、会計が企業目的との密接な関係にあることを示す。	同　上	同　上
3	財務会計と管理会計	外部報告会計として意義づけられている財務会計の実務とその機能内容を再検討し、管理会計との関係を考察するとともに、本来全体として１つのものである会計の基礎的な過程と、その基本性格を明らかにする。	同　上	同　上
4	わが国会計制度と世界標準化の展開	会計は商法、税法をはじめとする法的規範の規制の下に展開している。世界標準化が進められているわが国の会計規範、会計基準の全体像、その仕組みと、国際会計基準と会計基準の国際的調和化の動向について検討する。	同　上	同　上
5	企業会計原則とその論理	わが国の企業会計原則について、会計規範としての性格と、その基本的な会計思考ないし会計の論理を明らかにするとともに、アメリカの会計原則（「一般に認められた会計原則」）の性格について考える。	同　上	同　上
6	貸借対照表と会計規制(１)	企業の財政状態を表示する貸借対照表をめぐって、その仕組み・構成内容と、資産、負債を中心に、その計算・表示の考え方を、会計法規、会計基準とのかかわりでより詳しく説明し、検討を行う。	同　上	同　上
7	貸借対照表と会計規制(２)	第６回につづいて貸借対照表のとくに資本の部を中心に考察し、商法改正にともなう問題点等の検討を行うとともに、リース会計、減損会計、退職給付会計などの基本的な考え方と、その問題点について検討を行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	損益計算書と税効果会計	企業の経営成績を表示する損益計算書の仕組みとその計算原理、分析方法を明らかにするとともに、税効果会計とその方法、ならびに問題点を検討し、あわせて利益処分計算書について説明する。	三代澤　経人	三代澤　経人
9	キャッシュフロー計算書	2000年3月期から、基本財務諸表の1つとしてその作成、提出が義務づけられたキャッシュフロー計算書について、その仕組みと基本的な作成方法ならびに、これを重視する経営・会計上の問題点について考える。	同　上	同　上
10	連結財務諸表制度（1）	今日の会計制度において中心におかれている財務諸表は、企業集団の財政状態・経営成績を表示する連結財務諸表である。連結会計の基本問題と、連結の方法を中心に説明し、問題点に言及する。	同　上	同　上
11	連結財務諸表制度（2）	第10回に続いて、連結財務諸表の作成方法を検討するとともに、あわせて、これにかかわる外貨換算会計とその方法、セグメント情報の開示、連結納税制度などとその問題点について検討する。	同　上	同　上
12	企業の買収・合併と企業結合会計	今日、国内に限らず、世界的な規模で進められている企業の買収・合併とその会計問題を中心に検討を行う。わが国の従来の合併会計と米国における方法を紹介するとともに、分社化など、企業組織再編の会計問題を検討する。	同　上	同　上
13	金融商品の会計	資産や負債の価格、金利、為替の相場変動のリスクを回避（リスク・ヘッジ）するためのデリバティブ（金融派生商品）取引を中心に説明を行い、ヘッジ会計とその基本的な方法について検討を行う。	同　上	同　上
14	会計の監査と公認会計士制度	企業における会計監査の意義と形態、大企業に対して証券取引法および商法（商法特例法）が義務づけている公認会計士または監査法人による監査の意義と方法について検討し、その問題点に言及する。	同　上	同　上
15	現代会計の変容と社会関連会計	企業の社会的責任が問われるなかで、環境会計をはじめとするいわゆる社会責任会計の展開がみられる。講義のむすびとして、そうした会計の展開がもつ意味とのかかわりにおいて、現代会計の動向と問題点を考える。	同　上	同　上

＝管理会計（‘０３）＝（Ｒ）

〔主　任　講　師：佐藤　紘光（早稲田大学教授）〕
〔主　任　講　師：齋藤　正章（放送大学助教授）〕

全体のねらい

管理会計の目的は、企業で行われる様々な経営意思決定と業績管理に有効な会計情報を提供することにある。本講義では管理会計の役割を意思決定を支援する役割と業績を測定、評価して企業価値を高める行動を動機づけるコントロールの役割に分けて、それぞれの理論を解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	管理会計概論（1）－管理会計とは－	①管理会計の意義と目的 ②企業の目的とエイジェンシー問題 ③経営管理プロセスと管理会計の実践主体 ④意思決定プロセスと管理会計の体系 ⑤会計情報基準 ⑥財務会計との相違点	佐藤　紘光（早稲田大学教授）	佐藤　紘光（早稲田大学教授）
2	管理会計概論（2）－意思決定とコントロール維識－	①意思決定モデルと予測情報の価値 ②意思決定権限の配分とコントロール・システム ③デシジョン・マネジメントとデシジョン・コントロール	同　上	同　上
3	原価とキャッシュ・フローの諸概念	①原価計算の目的と原価の諸概念 ②原価の分類 ③ＣＶＰ分析 ④原価の予測 ⑤機会原価と埋没原価 ⑥キャッシュ・フローの測定	同　上	同　上
4	資本予算（1）投資決定ルール	①資本予算の意義と目的 ②貨幣の時間価値 ③将来価値と現在価値 ④現在価値法と内部利益率法 ⑤投資案の順位づけ ⑥その他の投資決定ルール　他	齋藤　正章（放送大学助教授）	齋藤　正章（放送大学助教授）
5	資本予算（2）資本コスト	①資本コストの意義 ②源泉別資本コスト ③加重平均資本コスト ④資本構成と企業価値 ⑤多角化企業の資本コスト	齋藤　正章	齋藤　正章
6	株主価値と長期経営計画	①企業価値に適合する業績指標 ②長期計画による株主価値の創造 ③SVA モデルと FCF モデルによる分析 ④EVA モデルによる分析	佐藤　紘光	佐藤　紘光
7	株主価値を高める事業戦略	①EVA を増加させる４つの類型 ②M＆Aの経済分析 ③リストラの経済分析	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	原価計算システム（1） 実際原価計算	①　原価計算の種類と形態 ②　全部原価計算 ③　直接原価計算 ④　活動基準原価計算	齋藤　正章	齋藤　正章
9	原価計算システム（2） 標準原価計算	①標準原価計算の意義 ②標準原価計算の目的 ③標準原価計算の手続き ④標準原価の分類 ⑤原価差異の算定と分析	同　上	同　上
10	予算管理システム	①予算の意義と体系 ②予算編成のプロセス ③予算システムと組織設計 ④予算と実績の差異分析 ⑤予算の反機能とエイジェンシー・コスト	佐藤　紘光	佐藤　紘光
11	責任会計（1） 管理可能性原則	①　責任会計と責任センター ②　コスト・センターの業績管理 ③　収益センターの業績管理 ④　プロフィット・センターの業績管理 ⑤　インベストメント・センターの業績管理 ⑥　管理可能性原則と情報有用性原則	齋藤　正章	齋藤　正章
12	責任会計（2） 振替価格と原価配分	①事業部間取引と振替価格 ②振替価格の実務的ルール ③原価配分（本社費・共通費） ④原価配分（結合原価）	佐藤　紘光	佐藤　紘光
13	リスク・シェアリング	①リスクに対する態度と効用関数 ②リスク分担の効果 ③業績情報の価値	同　上	同　上
14	インセンティブ・システム（1）	①分析の枠組み ②プリンシパル・エイジェント・モデル ②線型報酬関数	同　上	同　上
15	インセンティブ・システム（2）	①予算参加の意義 ②部門業績評価と全社業績評価 ③業績の期間比較	同　上	同　上

＝簿記入門（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　齋藤　正章（放送大学助教授）〕

全体のねらい

簿記はおよそ500年前から存在し、「ビジネスの言語」ともいわれ、今日の企業社会においても欠かせないものとなっている。本講義では全体を商業簿記編と工業簿記編に分け、簿記に関する知識・技術の網羅的な習得を目標としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	簿記の目的と基本概念	簿記の意義や役割、またその種類について解説する。併せて、簿記の基本構造を構成する資産・負債・資本、収益・費用について説明する。また、貸借対照表（財産法）と損益計算書（損益法）の関係についても簡単に触れる。	齋藤　正章（放送大学助教授）	齋藤　正章（放送大学助教授）
2	複式簿記の基礎	簿記における取引の定義を示し、勘定および勘定記入のルールについて述べる。さらに具体的な取引の記録方法である仕訳と転記について解説する。	同　上	同　上
3	現金・預金に関する記帳処理	今回より具体的な勘定科目の記帳処理方法に関する解説を行う。まず、貸借対照表の資産項目である現金・預金の定義およびその記帳処理について説明する。	同　上	同　上
4	商品売買に関する記帳処理	貸借対照表の資産項目である商品の記帳処理方法である分記法、三分法、総記法について各方法の短所と長所の比較を行いながら説明する。	同　上	同　上
5	債権・債務に関する記帳処理	貸借対照表の資産の部に記載される債権と同じく負債の部に記載される債務の記帳処理について解説する。具体的には商品売買に関する売掛金と買掛金、営業外取引に関する未収金と未払金等についてである。	同　上	同　上
6	手形に関する記帳処理	まず、手形について説明し、貸借対照表の資産の部に記載される受取手形と負債の部に記載される支払手形の記帳処理について解説する。その他、営業外手形や金融手形、手形の決済や不渡時の処理等についても言及する。	同　上	同　上
7	有価証券および固定資産に関する記帳処理	貸借対照表の資産項目である有価証券について、その分類、取得価額と評価方法、評価基準等について解説し、有価証券売買の記帳処理について説明する。また、固定資産の取得、減価償却、売却についても併せて解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	資本および収益・費用に関する記帳処理	貸借対照表を構成する資本に関する諸取引の記帳処理について解説する。また、損益計算書を構成する収益・費用の認識・測定についても説明する。	齋藤　正章	齋藤　正章
9	決算の簿記（1）	決算予備手続である合計試算表や残高試算表といった試算表の作成方法と棚卸表の作成方法について解説する。	同　上	同　上
10	決算の簿記（2）	精算表の作成方法について述べ、一連の決算予備手続に関する説明を完了し、決算本手続（決算仕訳と帳簿締切）について解説する。併せて財務諸表の作成についても言及する。	同　上	同　上
11	帳簿組織	帳簿システムの意義について触れ、補助記入帳、補助元帳、伝票会計について解説する。	同　上	同　上
12	工業簿記の目的と原価概念	今回から工業簿記編である。今までの商業簿記における議論と工業簿記の目的を対比させながら工業簿記の特徴を浮き彫りにする。また、各種原価概念ならびに工業簿記の手続について解説する。	同　上	同　上
13	原価の費目別計算	工業簿記の第1段階である費目別計算について解説を行う。	同　上	同　上
14	原価の部門別計算と個別原価計算	工業簿記の第2段階である部門別計算と第3段階である製品別計算の1つである個別原価計算について解説する。また、製品の完成と販売に関する議論も併せて行う。	同　上	同　上
15	総合原価計算	工業簿記の第3段階である製品別計算の1つである総合原価計算について解説する。	同　上	同　上

＝企業ファイナンス入門 （‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　菊井　　高昭（上智大学教授）〕
〔主任講師：　宮本　　順二朗（帝塚山大学教授）〕

全体のねらい

企業経営には、人・物・金という三つの要素が必要であると言われている。本講座では、これらの要素のうち「金（カネ）」、より厳密には「資金」に着目し、これをいかに調達し運用するかという側面に焦点を当てる。企業ファイナンスの基礎理論のほか、今日的な課題をも取り上げる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	企業ファイナンスの意義と領域	企業ファイナンスとは何かについて述べ、2回目以降15回目までの当講座の進め方について述べる。	菊井　高昭（上智大学教授）	菊井　高昭（上智大学教授）
2	企業ファイナンスと財務諸表の役割・活用	企業ファイナンスの情報源としての財務諸表のみかたを説明し、“実数分析”・“比率分析”について述べる。	宮本　順二朗（帝塚山大学教授）	宮本　順二朗（帝塚山大学教授）
3	財務諸表分析の展開	“損益分岐分析”・“付加価値分析”など財務諸表分析の展開について述べ、その問題点・限界を探る。	同　上	同　上
4	資金調達	資金調達の形態を企業金融の観点から体系化し、個々の形態（株式発行、社債発行、銀行借入れ等について解説する。	菊井　高昭	菊井　高昭
5	資本コスト	資本コストの意味、個別資本コスト、加重平均資本コストの求め方について述べる。	同　上	同　上
6	資本構成と企業評価	資本構成と企業評価、財務レバレッジについて述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	配当政策と企業成長	配当政策と企業成長の関係について述べ、同時に配当政策の種類、わが国の実態等について述べる。	菊井　高昭	菊井　高昭
8	キャッシュフロー・マネジメント	キャッシュフローの意味、キャッシュ・フロー計算書の読み方、運転資本管理等について述べる。株主価値という観点から、フリー・キャッシュ・フローの意味・重要性についても述べる。	同　上	同　上
9	投資決定（1）	現在（割引）価値を説明した後で，確実性下における投資決定の方法について述べる。	宮本　順二朗	宮本　順二朗
10	投資決定（2）	とくに内部収益率法と現在価値法を比較し、実際的な問題点を探り、さらに不確実性下での投資決定問題にも触れる。	同　上	同　上
11	ポートフォリオ理論	主として金融資産への投資面について、ポートフォリオ理論の基本的な考え方を説明する。	同　上	同　上
12	資本資産価格決定モデル	資本資産のリスクとリターンの関係を表す資本資産価格決定モデル（CAPM）について述べる。	同　上	同　上
13	デリバティブと財務戦略	先物取引、スワップ、オプションなどのデリバティブについて財務戦略の観点から述べる。	菊井　高昭	菊井　高昭
14	株主重視の財務政策	IR活動、ストック・オプション等の意味、意義、実態等について、株主重視の企業経営という観点から述べる。	同　上	同　上
15	企業ファイナンスとリストラクチャリング	現代的トピックスのM&A（合併･買収）、ダイベスチャーなどリストラクチャリングと企業ファイナンスとの関連について述べる。	宮本　順二朗	宮本　順二朗

＝　日本の製造業の新展開（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　森谷　　正規（放送大学教授）〕
〔主任講師：　小田切　宏之（一橋大学大学院教授）〕

全体のねらい

日本の製造業は、第二次世界大戦後にまず生産技術力を向上し、次いで技術開発力を高めて大きく発展してきた。しかし、１９９０年代に入るころから、経済が不振を続けるのに伴って、多くの製造業がかつての強さを失っているように見える。それは、革新技術が生まれがたい技術状況とともに、中国、韓国などアジア諸国が工業国として力を強めてきていることが影響している。そこで、日本の製造業は、蓄積してきた技術力を活かして、新たな方向での展開を目指さねばならない。それがいかなる展開であるかを、産業ごとに歴史的な発展と現在の状況を踏まえて、国際的な視野から展望する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	国際的な視野から見た日本の製造業の現状	経済不振による国内需要の減退、アジアの登場による輸出競争力の低下によって、多くの製造業が厳しい状況にある。しかし、日本企業の技術力は高いはずであり、それを活かした新たな発展が期待できる。いまの日本の製造業の全体について、国際的な競争に目を向け、各産業の特性の違いを考慮しながら現状を把握する。	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
2	サイエンスにもとづいた新産業の発展	科学研究の進歩による技術革新は、天文学の農業への応用、冶金学の金属生産への応用など、古くから行われてきたが、近年におけるエレクトロニクス、ナノテクノロジー、ライフサイエンスなどの急速な発展は、それらを応用した各種産業の爆発的な生成と拡大をもたらした。そうした「サイエンス型産業」の発展を概観し、知的財産権制度、産学連携、ベンチャー企業など、関連する諸問題を説く。	小田切　宏之（一橋大学大学院教授）	小田切　宏之（一橋大学大学院教授）
3	電子機器産業の世界市場形成と日本のアジア生産展開	世界の電子機器産業は、PC、携帯電話、デジタル家電などによって高い成長を示し、今後もブロードバンド、ユビキタス化でさらに成長していく。デジタル技術革新を背景とした製品多様化や市場構造変化の中で、日本企業は、標準化が支配した情報通信分野で競争力を低下させたが、デジタル家電の研究開発、積極的なアジア生産展開を図り、世界市場での復権を目指している。日本企業のアジア生産による競争力確保を中心としたグローバル展開を示す。	御手洗　久巳（野村総合研究所上席コンサルタント）	御手洗　久巳（野村総合研究所上席コンサルタント）
4	電子機器産業の競争力とアジアに対峙する日本の課題	80年代には圧倒的な国際競争力を誇った日本の電子機器産業も近年地盤沈下が著しい。電子機器産業における競争力要因（製品技術特性、生産・流通システム、経営意志決定システムなど）を分野毎に分析し、SCM、EMS など新たなビジネスモデルの普及進展や韓国、中国などアジア新興勢力との競合関係を踏まえながら、トップマネジメントの役割、研究開発活動の振興、アジアとの国際分業化など、今後の日本企業の展開方向と課題を示す。	御手洗　久巳	御手洗　久巳

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	次世代技術で復権を目指す電子デバイス産業	DRAM で世界を制した日本の半導体は、90 年代に技術・製品開発や投資判断のミスが重なり国際競争力を低下させたが、DRAM 偏重から脱し、新ビジネスモデルやアライアンスを軸に、デジタル家電に必要なシステム LSI で競争力を確保しつつある。液晶でも競争力が低下し、生産のアジア移管が進んでいる。世界の半導体、液晶産業の需給構造や業界構造の変化、次世代技術開発に向けた国家プロジェクトなどから日本の電子デバイス産業の発展方向と課題を示す。	御手洗　久巳	御手洗　久巳
6	バイオテクノロジー関連産業の展開	この産業は、発酵技術を用いたみそ・醤油醸造の伝統的産業から、高度な機械設備とコンピュータを駆使した遺伝子やタンパク質解析に基づく医薬開発まで、広範にわたっている。このため、食品、医薬品、機械メーカーからソフトウェア会社、総合商社まで、幅広い企業が単独で、あるいは提携しながら事業展開している。こうしたバイオテクノロジー関連産業について、その現状と問題点を概説する。	小田切　宏之	小田切　宏之
7	国際的研究開発競争の中での日本の医薬品産業	研究開発費の売上高に占める比率は、製造業全体では４％未満だが、医薬品産業は８％を超えていて、飛び抜けて研究開発集約的な産業である。しかも新薬の製品化には膨大な費用の臨床試験が必要で、逆に製造費用は比較的小さく、安全性確認のための事後調査が欠かせないなど、特異な産業である。その医薬品産業の特性を概説し、バイオテクノロジー技術の発展や国際競争の激化が日本の医薬品産業をどのように変えてきたかを示す。	同　上	同　上
8	物づくりの競争力は揺るがない自動車産業	日本の産業の競争力が低迷している中で、自動車産業の競争力は健在である。なぜ自動車は強かったのか。その鍵は、組織能力と設計思想（アーキテクチャ）にある。日本企業はものづくりの組織能力に関して絶えず切磋琢磨する「能力構築競争」を続けたこと、また自動車という製品の設計思想が日本企業の得意とする「擦り合わせ型」であったことが、日本企業の強さが続いた理由である。	藤本　隆宏（東京大学大学院教授）	藤本　隆宏（東京大学大学院教授）
9	自動車産業の将来、進化か革命か	２１世紀の前半に、自動車産業はどのように変化するのだろうか。組織能力の累積的な進化が続くのか。あるいは、これまで蓄積した組織能力が通用しなくなるような革命的な変化が来るのだろうか。エンジン等の製品技術、設計思想、生産システムなどに関して将来を展望する。しばらくは累積進化の時代が続くと予想し、その中で「バランス」の良い企業を目指すことの重要性を指摘する。	同　上	同　上
10	トップの座を守る工作機械産業	工作機械産業は２０年連続で世界一の座を維持し、工作機械大国としての確固たる地位を築いている。しかし、近年はドイツ勢が日本が得意とする汎用機市場に攻勢をかけており、アジアではコスト競争力のある台湾、中国メーカーが低級機市場を押さえにかかっている。ＩＴを活かしたソリューションビジネスに力を入れる日本メーカーの動向とマザーマシンの将来展望を描く	吉本　陽子（ＵＦＪ総合研究所主任研究員）	吉本　陽子（ＵＦＪ総合研究所主任研究員）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	総合力を活かす半導体製造装置産業	半導体製造装置は光学、物理、化学、機械、電気、材料、ＩＴなどの総合技術の塊であり、８０年代には半導体産業の発展に伴い、装置産業も特定分野では独占的な地位を占めるに至った。９０年代に入ってからは、モジュール化への対応が後手に回り国際競争力の低下が懸念されているが、産学官連携によるイノベーションや要素技術を活かした発展が期待されている。	吉本　陽子	吉本　陽子
12	多様に展開するする大型機械システム産業	総合力を持つ大型機械システム産業は、量産製品産業に代わって日本の技術の強さを示しうる有力な分野である。造船は再編成で競争力を確保し、航空機ではいよいよ小型ジェット機の開発に取り組む。宇宙開発でも、ロケットで国際市場に乗り出していく。エネルギーの分野においてもさまざまな新技術を開発して実用化に進んでいる。	森谷　正規	森谷　正規
13	社会からの要請に応える社会機器システム産業	環境破壊、廃棄物処理、防災、介護などの社会問題が激しくなっていて、各産業が機械・システムの創出によって対応することが求められている。その市場は非常に多様であり、新たな有力な産業分野になってきている。もっとも、市場の形成がスムーズにいかない場合も多く、企業は技術開発に努力しながら、政策などによる市場の拡大に期待をかけている。	同　上	同　上
14	再編成で競争力を高める鉄鋼産業	鉄鋼産業は、技術力は世界で最高水準にあるが、世界的に供給過剰の状況であり、国際的な競争が激烈で、経営は厳しい。そこで、５大企業は大きな再編成に進んだが、それがどのような成果を上げ、競争力を強め得るか。これからアジア諸国との競合および提携の関係が複雑に展開していくと予想されるが、そうした国際的な状況を踏まえて将来を見通す。	同　上	同　上
15	日本の製造業の新たな発展	２０世紀の後半に、日本の製造業は大きく発展したが、日本をめぐる環境が大きく変わる２１世紀には、製造業も大きな改革に進まねばならない。それは、より高級な高度な製品を目指す、核となる部品や材料に力を注ぐ、社会に新たな市場を創っていく、国際的な連携を深めていくなどであり、日本の製造業が進んでいく新たな方向を示す。	同　上	同　上

＝　情報産業論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　西村 吉雄（大阪大学フロンティア研究機構特任教授）〕

全体のねらい

情報産業という概念の整理から始め、前半では情報産業におけるタテからヨコへの構造転換に伴うネットワーク分業について述べる。関連してネットワーク外部性を活用する「この指とまれ」型開発モデルを提案する。次に情報産業の時代の研究開発のあり方を考える。自前主義から連携・協力へ、中央研究所から産学連携へ、が時代の方向であることを明らかにする。最後に工業社会から情報社会への転換を、産業構造の転換との関連において議論する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報産業論の系譜	第１回目では、情報産業という概念の誕生と、産業の情報化という考え方との関係、脱工業化やサービス化、ソフト化、ネットワークなど、関連概念との関係を整理し、本講義の方針や予定を述べる。	西村　吉雄（大阪大学フロンティア研究機構特任教授）	西村　吉雄（大阪大学フロンティア研究機構特任教授）
2	タテからヨコへ（１）―自律分散した小集団が水平に結びつく	自律分散した比較的小さな集団が、情報通信ネットワークを介して水平に結びつく。これが情報産業の時代である。産業構造は、１社が部品から最終製品までとりしきるタテ型から複数企業の連携によるヨコ型に変わる。	同　上	同　上
3	タテからヨコへ（２）―設計と製造の分業	設計と製造の分業は、「タテからヨコへ」の変化より早い。物質処理に対する情報処理の自立を実現した分業でもある。半導体産業におけるシリコン・ファウンドリなど、1990 年代には設計と製造の分業が進展した。	同　上	同　上
4	タテからヨコへ（３）―生産システムと自動車産業の場合	ネットワークを介したヨコ型のオープンな分業は、製造業の生産システムにも及ぶ。ただし、この分業は万能ではない。製品アーキテクチャと望ましい分業のあり方を、自動車産業を例にして考える。	同　上	同　上
5	タテからヨコへ（４）―メディア産業の構造転換	タテからヨコへの転換はあらゆる情報産業に及びつつある。この回にはメディア産業の構造もタテからヨコに変わりつつあることを示し、ディジタル化やインターネットのメディアへの影響を考える。	同　上	同　上
6	ネットワーク外部性と「この指とまれ」モデル	ヨコ型分業にはインタフェースが不可欠である。そこでは参加者多くなるほど、そのネットワークに参加している価値が高まる（ネットワーク外部性）。これを活用する「この指とまれ」型開発モデルを提案する。	同　上	同　上
7	情報産業の時代の研究開発（１）―営利企業にとっての研究開発とは何か	経済的発展にとっての研究開発の意味をシュムペーターに戻って再考する。未来の価値を知る「知」と、それを現在価値市場に媒介する「アントルプルヌールシップ」、この両者が研究と開発に相当することを示す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報産業の時代の研究開発（２）―中央研究所の時代の終焉	中央研究所の基礎に研究開発におけるリニア・モデルがある。これらは自前主義の時代の産物である。自前主義から連携の時代へ、という産業構造の転換は、中央研究所の時代から産学連携の時代へ、と対応する。	西村　吉雄	西村　吉雄
9	情報産業の時代の研究開発（３）―大学の役割の変化	情報産業の時代には、産業・経済における「知」の役割が高まる。大学への期待は大きい。大学の「知」と「アントルプルヌールシップ」の新結合、すなわち新しい形の産学連携が、新産業、新雇用を生み出す。	同　上	同　上
10	1970 年代の転換（１）―工業の時代から情報産業の時代へ	日本の産業構造は1970年代に大きく転換した。鉄の生産量や原油の輸入量が漸減に転じるなか、半導体の生産は急増する。製造業人口比率の減少も始まる。この構造転換から、ポスト工業化、情報化を考える。	同　上	同　上
11	1970 年代の転換（２）―階層格差の拡大	工業化から情報化への転換と同期して貧富の差の拡大が日本でも始まったことを指摘する。米国のデータとも比較しながら、その原因が、情報化・ポスト工業化への転換と連動していることを示す。	同　上	同　上
12	1970 年代の転換（３）―女性の時代とポスト・モダニズム	工業化の時代には働く女性の数が減り、情報化の進展とともに、それが増えていることを、長期的な歴史データから明らかにする。またトップレスやポスト・モダニズムなどの文化現象と産業変化との関係にも触れる。	同　上	同　上
13	高齢化と人口減少―ネットワーク社会のワークスタイル	21 世紀の日本は急速に高齢化しながら人口減少に向かう。核家族のなかの成人男性だけを雇用という工業社会型から、高齢者を含む拡大家族がネットワークを介して共働するというワークスタイルへの転換が起こり得る。	同　上	同　上
14	メディア・ルネサンス―ネットワーク社会のライフスタイル	メディアのヨコ型化はメディア秩序の解体と再構築をもたらす。隣の人と同じ番組を観たかった工業社会人に対して、隣の人とは違う番組を観たい情報社会人向けのメディアではネットワークが最適なインフラとなろう。	同　上	同　上
15	大異を認め合いながら小同で協力しよう―ネットワーク社会の協力スタイル	自立分散した小集団がネットワークを介して協力するのが、産業・仕事・暮らしのこれからのスタイルだ。目的は違っても協力することが双方に有益となるように「大異を認め合いながら小同で協力」しよう。	同　上	同　上

＝ネットワーク産業論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　直江　重彦（中央大学教授）〕

全体のねらい

ネットワーク産業論は、高度に発展した今日の経済社会における諸活動の基盤となっている様々な産業で構成され、日常の生活や経済活動にとって不可欠なサービスを提供している。そのため、ネットワーク産業の生産性が低い場合、その結果、生活水準が低下し、経済活動の生産性も低下してしまうことになる。さらに、ネットワーク産業はもう一つの特性である規模と範囲に経済が存在するため、自由経済体制においても独占的な産業構造が形成されやすい。そのため、通常、様々な公共規制を課すことで効率と公正を確保する必要があるとされている。この講座は、様々なネットワーク産業の経済的特性と公共規制について議論し、公共経済政策の理論と実態の理解を深めることを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ネットワーク産業とは－産業の構造と特性	今日の経済活動や社会生活の共通基盤的役割を果たしている産業の中に、従来、公益事業と呼ばれてきた産業群が存在している。その多くは、それぞれ独自のネットワーク施設を持ち、それを利用して様々なサービスを提供している。ここでは、公益事業の中でも特にネットワーク設備への依存度の高い産業にはどの様なものがあるかを紹介するとともに、その産業のサービス生産と消費の経済的特性を紹介する。	直江　重彦（中央大学教授）	直江　重彦（中央大学教授）
2	ネットワーク産業と公共規制－公益事業規制改革と公正競争条件の整備	ネットワーク産業と呼ばれる産業が成立してきた１９世紀から２０世紀にかけて、これらの産業が必ずしも市場メカニズムだけでは効率的なサービスの生産が望めず、また、消費者の保護が図れないなどの観点から、特に独占の弊害を除去するための公共政策が適用されてきた。この章では、公益事業規制と称されるそれらの公共規制の構造とその問題点と、近年世界的に進められている公共規制改革の課題について紹介する。	同　上	同　上
3	ネットワーク産業の改革－民営化と競争導入	ネットワーク産業は、従来、その公益性や外部経済が大きいことから、国や地方公共団体による直接的な運営がなされてきた。１９７０年代に入ってそれらの国営企業公営企業の非効率性が問題となり、民営化を柱とする改革が始まった。また、独占を前提として運営されてきた民間の公益事業でも同様の非効率の克服が課題とされ、その改革のために市場メカニズムを利用した新しい公益事業規制の導入が進められている。ここでは、世界の主要国におけるネットワーク産業の民営化と競争導入政策の課題について紹介し、ネットワーク産業の本質とは何かについて議論する。	同　上	同　上
4	各論１　電気通信事業－電話事業の成熟と電気通信産業の改革	グラハム・ベルが発明した電話は、世界規模での高度なネットワークを形成し、何処でも誰でもが自由に利用できる通信サービスとして発展し、今日の情報化社会の基盤となっている。近年、携帯電話の急速な発展で音声通信としての有線による電話の役割は多少とも小さくなっているが、そのユニバーサルサービスとしての役割やあらゆる電気通信サービスのネットワークインフラとしての地位はますます重要となっている。この章では、最もネットワーク産業の特性を持つ電話事業と近年の規制改革を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	各論2　インターネット産業－ブロードバンドとインターネット	インターネット産業はまだ発展の初期段階にあるため、産業構造もまだ流動的で、今後の発展の余地も大きい。今日のインターネット産業は、ネットインフラ・プラットフォーム・アプリケーションサービス・コンテンツと言った産業で構成されているが、ネットインフラのブロードバンド化の進展で電話や放送をも取り込む新しいネットワーク産業への変身が始まっている。この章では、インターネットとは何かを紹介し、その産業特性と政策課題について議論する。	直江　重彦	直江　重彦
6	各論3　電力事業－電力事業改革と環境問題	現代社会を支える電力事業も、その重要性はますます高まってはいるものの、環境問題や経営の効率性問題、エネルギー源の多様化と分散型発電の登場など様々な課題を抱えている。そのため、従来地域独占を前提に形成されてきた電力産業も、消費者利益の増進を目的として競争政策の導入が検討されている。電力産業は、エネルギー産業の一つであり、ガス産業や石油産業と競合関係にあり、エネルギー関連技術の革新によるエネルギー間の競合はますます厳しくなってきている。この章では、変革が始まった電力産業の規制改革と環境問題を議論する。	山谷　修作（東洋大学教授）	山谷　修作（東洋大学教授）
7	各論4　ガス事業－ガス事業の改革と規制緩和	電力と並ぶ重要なエネルギー産業であるガス事業は、都市部を中心とした都市ガスとそれ以外の地域を中心とする液化プロパンガス（LPG）で構成されている。公益事業としての制約を受ける都市ガス事業は、原料の天然ガスへの転換とパイプラインの建設によるネットワーク化による新しい経営環境が形成され、加えて規制緩和によるLPG事業や電力事業との競争の激化が始まっている。この章では、ガス事業の課題となっている内外価格差の縮小や規制緩和などガス事業の課題について紹介する。	同　上	同　上
8	各論5　交通インフラストラクチャー（高速道路事業）－高速道路事業と道路公団の民営化	我が国の高速道路網は、鉄道の新幹線網と並ぶ今日の陸上交通インフラストラクチャーを構成する重要な基盤であり、全国をくまなく結ぶべく今日もなお建設が続けられている。この高速道路の建設と運営は、国営の日本道路公団やその他のいくつかの地域別に設立された高速道路公団によって行われている。この高速道路の建設と運営をどの様に改革するかが政策課題となっており、その改革の一環としてそれらの道路公団の民営化が進められている。この章では、わが国の高速道路整備問題とその中核となっている道路公団改革について紹介する。	山内　弘隆（一橋大学教授）	山内　弘隆（一橋大学教授）
9	各論6　航空事業－航空事業の成熟と産業改革	交通産業の一つである航空事業では、米国においていち早く自由化が行われ、この競争政策の結果多くの新規事業者が参入した。この自由化を契機に航空路線もハブアンドスポーク構造への転換が行われ、厳しい競争が始まった。その結果、航空会社の再編が進み、今日では再び自由化以前と同様の市場の寡占化が形成されつつある。我が国でも自由化による新規参入が認められ、競争が激化している。この章では、航空事業特有の問題と、そこで明らかになったネットワーク産業共通の公共規制改革の問題点について議論する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	各論７　鉄道事業－鉄道産業の成熟と改革	鉄道事業は２０世紀後半に始まったモータリゼーションと航空事業の発展によって交通産業の脇役に退いたが、鉄道は今日もなお都市の近距離交通の中核であり、新幹線などの高速鉄道の登場によって中距離交通においても航空サービスと競合する様になってきている。鉄道は自動車の便利さや航空機の速さに対し大量輸送とエネルギー負荷の少なさと言うメリットを持つため、鉄道事業の再生に向けた様々な試みが世界で行われている。この章では、地域分割と新幹線と言う政策を展開した日本と、鉄道路線と運行サービスを分離した英国や米国、全国一体のままでの再生を模索するフランスやドイツなどの改革を紹介するとともに、その問題点と課題を議論する。	石井　晴夫（作新学院大学教授）	石井　晴夫（作新学院大学教授）
11	各論８　通運と宅配－宅配便サービスの発展と通運事業の変革	運輸サービスは物の輸送を行うことであるが、物の輸送にはそれぞれの輸送される物の種類によって様々な運輸業が形成されている。その中でも今日最も注目されているのが宅配便サービスである。この章では、宅配便事業を、情報通信ネットワークを活用した運輸事業の側面から、競合する小口の荷物を集配する郵便の小包サービスと比較しつつ、その産業特性と今後課題を紹介する。	同　上	同　上
12	各論９　放送産業－放送産業の変革と課題	情報コンテンツを中波やＵＨＦの地上波や同軸ケーブル、もしくは衛星通信を利用して国民に届けている放送産業は、従来のアナログ技術からデジタル技術を使った新しい時代に入ろうとしている。加えて、通信ネットワークでのブロードバンドの普及によって、これまでとは違った双方向通信による放送番組の送信も可能になりつつあり、２０世紀前半に確立された放送産業のビジネスモデルは大きな転換期を迎えている。この章では放送産業の構造と放送産業政策の変貌について紹介する。	直江　重彦	直江　重彦
13	各論１０　水道事業と下水事業－上下水道事業経営と課題	近代的で健康な生活に不可欠とされる上下水道は、これまで地方公営企業が運営する事業として発展してきた。上水道は水源問題を、下水道は環境問題をその中核に据えて事業の展開を図ってきたが、基盤整備が進むにつれて地域的な条件による水不足や料金の地域間格差などの課題が顕著となってきている。この章では２１世紀の課題としての水問題を踏まえつつ、上下水道事業経営の課題を解説する。	山谷　修作	山谷　修作
14	ネットワーク産業の課題と経済理論－ネットワークの外部経済・相互接続・ユニバーサルサービス	ネットワーク産業は、今日の経済社会活動に不可欠なサービスを提供している。そのため、ネットワーク産業は他の産業に見られない経済的特性と公共性を課せられている。特に、その中でもネットワークの外部経済性と言われる特性を発揮させるための競合するネットワーク間の相互接続問題や社会全体にサービスを行き渡らせるためのユニバーサルサービス問題がネットワーク産業に対する公共政策の重要な課題となっている。この章ではネットワーク産業のその様な特性についての経済理論を紹介する。	直江　重彦	直江　重彦
15	まとめ－新しいネットワーク産業の勃興と政策課題	ネットワーク産業は、近年、技術革新や経済の発展によって新しい産業へと変化しつつあり、伝統的な公益事業の構造改革や勃興する新しいネットワーク産業に対する公共政策もまた変革の時代を迎えている。しかしながら、ネットワーク産業政策の変革には、技術革新の可能性や市場の不透明さなどの不確実要素も多く、政策の展開も試行錯誤を余儀なくされている。この章では、国民の生活にとって重要な役割を果たしているネットワーク産業の抱える課題から、その将来像を展望する。	同　上	同　上

＝ベンチャー企業論（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：柳　孝一（早稲田大学大学院教授）〕
〔主任講師：長谷川博和（グローバルベンチャーキャピタル株式会社社長）〕

全体のねらい

２１世紀はベンチャー企業の時代であると期待されている。ベンチャー企業とは何かから始まり、ベンチャー企業の現状を日米の比較をしながら明らかにする。さらにベンチャー企業を支援するベンチャーキャピタル等についてもふれながら、ベンチャー企業について体系的な理論、知識、見識を身に付けてもらうことがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ベンチャー企業の時代へ	ベンチャー企業の定義を示し、中小企業との違いを明らかにする。産業構造が大変革する中でなぜベンチャー企業が注目されるのかを明らかにする。さらに既存の大企業や中小企業が、新規事業への多角化のために起こす、企業革新型ベンチャーについても言及する。	柳　孝一（早稲田大学大学院教授）	柳　孝一（早稲田大学大学院教授）
2	日本のベンチャー企業の歴史	戦後生まれたソニーや本田技研もベンチャー企業から出発した。今まで日本では、3 回のベンチャーブームがあった。今回は 95 年に制定された「中小企業創造法」が契機となっている。今までの歴史をふりかえりながら、今後の展開方向を探りたい。99 年の中小企業基本法の改正後の状況についても言及する。	柳　孝一	柳　孝一
3	ベンチャー企業経営論（Ⅰ）（構造的アプローチ）	ベンチャー企業は、新規事業への挑戦を行うためリスクが高い。リスクを下げるためには成功したケースから、体系化された経営理論を構築し、それを学ぶ必要がある。まず成功時点に立って、当該企業の主要成功要因を抽出し一般化して「四面体理論」を形成した。	柳　孝一	柳　孝一
4	ベンチャー企業経営論（Ⅱ）（成長ステージ別アプローチ）	ベンチャー企業は、昆虫の“変態”に例えられるほど、成長ステージごとにマネジメントを変革する必要がある。成長ステージ別に変革するには、経営要素の内容を変えると共にウエイトも変化させなければならない。その変革の力は、経営資源の自己回転力による。また「矛盾のマネジメント」のエネルギーによる“変態”について明らかにする。	柳　孝一	柳　孝一
5	米国のベンチャー企業の歴史・活躍の現状	第二次大戦後、米国に輩出したベンチャー企業の代表例を紹介しながら、ベンチャー企業の活躍の歴史を西海岸、東海岸の違いを中心に述べる。また、米国でベンチャー企業の産業に与えた役割の大きさについても分析する。	長谷川　博和（グローバルベンチャーキャピタル株式会社　社長）	長谷川　博和（グローバルベンチャーキャピタル株式会社　社長）
6	米国のベンチャーキャピタル	ベンチャー企業の発展を支えたベンチャーキャピタルの歴史、仕組みとともに、ベンチャーキャピタル業界の好不調のサイクルにてついても説明する。	長谷川　博和	長谷川　博和

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	日本のベンチャーキャピタル	日本のベンチャーキャピタルの歴史を振り返るとともに、現状の業界の動向、特徴について概観する。また、独立系VCの設立やコンサルティング型VCなど、最近の新しい変化についても述べる。	長谷川　博和	長谷川　博和
8	技術開発型ベンチャー企業の動向と支援戦略の変化	最近増加している技術開発型ベンチャー企業は従来型のベンチャー企業と事業構造や成長の仕組みが大きく異なり，また、このようなハイテク企業を支援する戦略・方法も従来より進化したものである。技術開発型ベンチャー企業の事業領域、リスクの増大、技術開発型ベンチャー支援型キャピタルの新しい取り組みを紹介したい。	長谷川　博和	長谷川　博和
9	ベンチャー企業の現状	ベンチャー企業が期待されるにしたがって、多くのベンチャー企業が生み出されてくる。全体として、どのような事業や業種、業態が多いのか。又支援制度との関係や問題点なども明らかにしたい。またインターネット関連等最先端の働きも紹介してみたい。最近の大学発ベンチャーの動向なども紹介したい。	柳　孝一	柳　孝一
10	ベンチャー企業の経営者	ベンチャー企業の成功要因で最も重要なことは、起業家の能力、すなわち「起業力」ということになる。ここでは、ベンチャー企業で成功した経営者の能力を分析し、これからの起業家に役立つ内容としたい。起業力を身につけるにはどうするかについても含めたい。「起業力」をアンケート調査により検証した内容を明らかにする。	柳　孝一	柳　孝一
11	ベンチャー企業と株式公開	ベンチャー企業にとっての株式公開の意味を考える。株式公開市場の新設と（ナスダックジャパンの）撤退、株式公開後の株価低迷・業績の低迷などを触れながら、株式公開の光と影について考える。	長谷川　博和	長谷川　博和
12	ベンチャー支援策・制度	ベンチャー企業の成長を支援する政策・制度が充実してきている。昨今増加する公的支援制度の概要、産学官連携体制の充実、大学発ベンチャー１０００社構想、専門大学院・社会人大学院、MOT教育の増加などについても紹介したい。	長谷川　博和	長谷川　博和
13	日本のベンチャー企業のケーススタディ	最近注目されているベンチャー企業について業種等を考えながら3社ほど取り上げ、ケーススタディを行う。起業の動機、成功要因、起業力の自己評価、経営的な危機、支援制度の活用等について明らかにし、成功要因、課題などを深く分析する。	柳　孝一	柳　孝一
14	米国のベンチャー企業のケーススタディ	米国で活躍しているベンチャー企業として、アマゾンドットコム、ヤフー、イーベイ、デル、グーグルなどをとりあげ、その起業から公開、成長の要因などを分析する。	長谷川　博和	長谷川　博和
15	ベンチャー企業の将来	21世紀の日本経済の突破口は、相変わらず見えていない。突破口のひとつがベンチャー企業の輩出である。政府、地方自治体、大学、民間等の支援制度も整って来た。大企業の人員削減から起業家になる人や、大学生の意識も変わって来ている。現在の課題と将来への展望を述べる。	柳　孝一	柳　孝一 長谷川　博和

＝人間と自然（‘０３）＝（TV）

－食・農・環境の展望

〔主任講師：　祖田　修（福井県立大学学長）〕
〔主任講師：　八木　宏典（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在人類の存亡をかけて、人間と自然の関係のあり方が問われている 農業・農村および農学は、衣食住にわたり自然を利用し保全し、かつしばしば環境に負荷を与えながら、文明・文化の展開に関わってきた。人間と自然の共生に向けて動き出した食・農・環境の、新たな潮流を具体的な事実を紹介しつつ展望する

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境の世紀における食と農	人類は今、人口爆発と肉食の増大によって、それに必要となる農地の急増に迫られている。他方地球環境問題は、日に日に厳しさを増している。果たして人類は飢えずに環境を守れるのか。人間と自然の共生が叫ばれているが、どうすれば可能なのかを考える。	祖田　修（福井県立大学学長）	祖田　修（福井県立大学学長）
2	文明史から見た食生活の現状	飽食の時代などといわれるが、日本における食生活の状況はどうなっているのか。また世界の各国や地域の人々は、何をどのように食べているのか。食べないでは一日も生きられない、「食べる存在」としての人間の、食をめぐる現状と問題を明らかにする。	古沢　広祐（國學院大學教授）	古沢　広祐（國學院大學教授）
3	健康な食を目指す世界の潮流	健康を維持するための安全な食品への欲求から始まり、生産者と連携しながら、持続的農業の形成、さらには自然に学び、環境問題へと活動を広げていく消費者の動きがある。そうした動きを国内、国外の具体的事例によって提示し、その意義を探る。	同　上	同　上
4	循環型社会を目指す新潮流	今後の食・農・環境の問題を考えたとき、食と農、農と工、都市と農村、地域と地域等の間で、望ましいリサイクルシステムを作っていかなければならない。足元から力強くそれを目指す、町や村の動きを中心に方向を探る。	同　上	同　上
5	食料・環境と自由貿易をめぐって	WTOにおいて、農産物貿易をめぐる新たな交渉と調整が始まろうとしている。大農圏輸出国グループと中農圏、小農圏の間には、種々の意見の対立がある。それは何に由来するのか。21世紀の食と農のために、貿易政策は如何にあるべきか。	同　上	同　上
6	意欲的に新時代の農業に取り組む農業者群	ひるがえって生産の側を見ると、消費者の求める「安全・安心・良質」な食品の生産に、意欲的に取り組む農家群がある。日本農業の担い手不足ということが言われるが、経営感覚に優れ、新たな時代の要請を担う農業者も、確実に生まれていることを具体的事例の中で追う。	八木　宏典（東京大学教授）	八木　宏典（東京大学教授）
7	国民的要請に応え総合化を目指す農業者群	農業を、単に農産物を生産するだけでなく、総合化によって社会の要請に応え、将来展望を切り開こうとする生産者群がある。その具体的事例を三重県モクモク手づくりファームなどに見る。それは人間と自然の新たな関係をも見据えた、思想豊かな取り組みである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地域に根ざし未来を開く農業者群	日本農業の展開には、さまざまな地域的条件が絡んでいる。困難な環境条件を、地域の他の農業者や消費者、関係団体との協力関係を通じて乗り越えようとする動きがある。地域に根差した農業者の力強い動きを探る。	八木　宏典	八木　宏典
9	形成均衡の世界ー人間と動物の新たな関係ー	森は遠く、見渡す限りの農地の拡がるアメリカのような大農圏と違い、日本農業は森に近く、川筋、谷筋に展開する。そのため猿、猪、鹿等の鳥獣害問題に悩まされる。人間の権利、動物の権利がそこで激突する。人間と自然の共生とは、一体何を意味するのか。	祖田　修	祖田　修
10	欧米農業・農村の新たな動き	人類は今、環境、人間らしい真に豊かな生活、安全な食べ物と健康等をめぐる大きな課題を抱えている。そのような中で、欧米農業、農村は何を目指し、どこに行こうとしているのか その農業・農村・農政の動きを探る	河合　明宣（放送大学助教授）	河合　明宣（放送大学助教授）
11	発展途上国の農業・農村の新たな動き	発展途上国の人口比率は80%である。これらの諸国は、先進諸国の生活水準を目指し、急激な工業化、都市化の段階にある。これらの動きは、人口爆発、環境問題などとどう絡んでくるのか 希望と苦悩の中に浮き沈みする途上国農業・農村の現実を追う。	同　上	同　上
12	自然・農業体験と子供達の成長	工業化とともに拡大・発展した都市も、今や多くの問題を抱えるに至り、自然や農業・農村的なものを求めている。農村も都市的なものを求めている。とりわけ子供達への農業の教育力も注目されている。子供達の人間的成長と農業体験教育を中心にしながら、全国各地に生まれている都市・農村の交流を見る。	祖田　修	祖田　修
13	現代文明と都市・農村	近代社会において、工業発展は人類に物的豊かさをもたらし、都市は人間的自由を与えるものとして展開した。そこでは、ともすれば農業・農村は見過ごされ、衰弱した 現代文明社会にとって都市・農村とは何なのか、どのような関係を築くべきなのか。	木村　尚三郎（東京大学名誉教授）	木村　尚三郎（東京大学名誉教授）
14	水と緑の国、日本	日本は中央に山脈が走り、河川は急流で、国土は火山灰土に広く覆われ崩れやすい。そこにしばしば大雨を伴う台風が襲来する こうした条件の中で農業・農村は独自の展開を遂げ地域社会、地域の文化を形成した。日本文化の底流にあるものを提示する。	富山　和子（立正大学教授）	富山　和子（立正大学教授）
15	食・農・環境の展望	現代文明は、ひたすら人間の物心両面にわたる満足に力を注ぎ、自然に大きな負荷を与えてきた。今や人間には、自己抑制も要求されるであろう。東洋的自然観・倫理観の根底に流れる「少欲知足」の思想こそ、改めて注目される。その流れを中国から日本へと探る。	祖田　修	祖田　修

＝アグリビジネス（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　稲本　志良（龍谷大学教授）〕
〔主任講師：　河合　明宣（放送大学助教授）〕

全体のねらい

現在の食料（食品）供給産業は、従来の農業・漁業を中心とした産業構造を大きく変化させ、資材産業、食品加工産業、流通・サービス産業などの関連産業との結びつきを強めたアグリビジネスといわれる産業構造へ転換してきている。アグリビジネスの発展によって、消費者は豊かな食生活が可能になってきているが、新たな課題も生じてきている。本講義では、上記の動向を国際的な視点も交えて体系的にのべる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	アグリビジネスの範囲と役割	アグリビジネスは、農業と商工業（企業）との関連が強まるなかで、関連する産業ないし企業を総称する用語として定着してきているが、先ず、その背景をのべる。次いで、わが国の食料が海外への依存を強めるようになった現実からも、アグリビジネスという領域として扱うことが必要になつたことをのべる。	西村　博行（京都大学名誉教授）	西村　博行（京都大学名誉教授）
2	農業の生産と投入	経済的にみると、農業・食料関連産業は国内で農業と食料関連の生産物を生み出し、その生産のために必要とされる肥料・飼料などが投入され、機械が利用されている。統計として利用できる 1960 年（昭和 35 年）以降における生産と投入の年次的な推移を知り、それらの相対的構成の変化を眺める。	同　上	同　上
3	広がるアグリビジネス	食料市場においては、かつての生鮮農産物だけでなく、各種の付加価値のついた加工食品が消費者に提供されてきた。そして、消費の内容は多様化し、外食と内食から、中食といわれる分野が別れるようになってきた。それは、生産や製造・加工から販売の段階で、輸送や取引の形態を変えてきつつある。しかし、こういった食品産業の拡大と多様な消費の到来による、廃棄物が無視できなくなっている。この間の経緯について説明する。	同　上	同　上
4	アグリビジネスのなかの農業経営	わが国の農業経営は多様な変化を遂げてきている。このような農業経営の多様な変化は急速な発展を遂げている「川上」、「川下」の関連産業と密接な関連を有している。その関連のあり方は、稲作農業、園芸作農業、畜産業において異なっている。ここでは以下の３つの章に先立って、農業経営と関連産業の関連について概説する。	稲本　志良（龍谷大学教授）	稲本　志良（龍谷大学教授）
5	稲作農業の発展と技術革新・流通革新	米の消費量が減退するなかで、稲作の生産力は技術革新によって大きく上昇してきた。特に、単収の向上と安定、省力化が進み、最近では良食味米の生産が重要になってきた。また、米消費拡大に向けた米加工も進んだ。この間の稲作農業の動向を政策・制度の変化、輸入自由化などの環境変化、関連産業との関連に注目してのべる。	同　上	同　上
6	園芸作農業の発展と技術革新・流通革新	野菜・果実の消費構造と食生活が大きく変化するなかで、生産技術の革新、流通技術の革新の進展によって、生産構造、流通構造が大きく変化した。また、品目によっては加工が増加すると共に、輸入も大きく増加した。この間の園芸作農業の動向を、関連産業との関連に注目してのべる。	小田　滋晃（京都大学助教授） 稲本　志良	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	畜産の発展と技術革新・流通革新	消費構造や輸入増加などの大きな環境変化のなかで、畜産は急速な技術革新、流通革新によって規模拡大と生産性の向上を実現してきた。この間の畜産の発展の過程を関連産業との関連に注目しながらのべる。	稲本　志良	稲本　志良
8	食品製造業の発展と食品の多様化・高付加価値化	食品製造業は、品目により大企業寡占と多数小企業の原子的な競争構造にわかれ、技術の状態も異なる。このような産業組織下での、製品の多様化や高付加価値化、衛生・安全性などの品質問題、原料生産者との取引、輸入原料依存構造についてのべる。	新山　陽子（京都大学教授） 清原　昭子（中国学園大学講師）	新山　陽子（京都大学教授）
9	食品流通業の発展と流通の多様化	食品の流通は卸売と小売の 2 つの階段からなる。卸売段階では、生鮮農作物の卸売業と卸売市場の制度・機能、加工食品に関しては製造企業と問屋が担う卸元機能について、小売段階では、量販店の発展と食品小売機能についてのべる。	新山　陽子	同　上
10	外食産業の発展と食生活の変化	一大産業となった外食産業には、寿司など伝統食部門と、ハンバーガーなどアメリカ資本とそのノウハウによって発展した外来食部門とがあり、近年は弁当・惣菜業の伸長が著しい。このような部門や業態の拡大と食生活の変化、食材原料の調達にみる農業とのつながりについてのべる。	新山　陽子 清原　昭子	同　上
11	漁業の持続的生産と養殖の展開	水産資源の持続的利用が世界的関心事で、養殖業が漁業生産を捉えるようになるか否か課題とされる。秩序ある漁業法制度の仕組みや経営システムあるいは技術進歩が資源増減のあり方にどのように影響するかについてのべる。	倉田　亨（近畿大学名誉教授）	倉田　亨（近畿大学名誉教授）
12	水産加工の伝統と技術革新	水産加工品は生鮮のままとは異なる味覚を持ち、消費の仕方も違う。伝統的な加工・調整技術が現代にもいかされているものが多い。他方、欧風加工・製造も増えている。水産加工品の商品特性と技術的特徴およびその加工の産業的特徴や盛衰についてのべる。	同　上	同　上
13	水産物流通の多様化とグローバル化	わが国で使用する魚介は 700 とも 1500 種ともいわれ、流通の仕方や価格形成も様々である。産地市場から中央卸売市場を経て小売業者へ届くのが主要ルート、これに輸入品が続々と加わる。各ルートでの取引システムと価格形成についてのべる。	同　上	同　上
14	アグリビジネスの展開と国際化 －欧米諸国との関連で－	わが国のアグリビジネスが発展する過程で、欧米諸国のアグリビジネス、特に多国籍企業との間で、一方では競争関係の激化、他方では、業務の連携関係の強化が進んでいる。この間の動向について、欧米諸国との関連を中心にのべる。	河合　明宣（放送大学助教授）	河合　明宣（放送大学助教授）
15	アグリビジネスの展開と国際化 －アジア諸国との関連で－	わが国のアグリビジネスが発展する過程で、アジア諸国への直接投資や製品市場の拡大が進んでおり、現地諸国の農業や食品産業との競争や連携が強まってきている。この間の動向について、アジア諸国との関連を中心にのべる。	同　上	同　上

＝持続的発展と国際協力（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　河合　明宣（放送大学助教授）〕
〔主任講師：　浜口　恒夫（大阪外国語大学教授）〕

全体のねらい

南アジア７か国（インド、パキスタン、バングラデシュ、スリランカ、ネパール、ブータン、マールディーヴ）を対象として、持続的発展と国際協力の問題を考える。まず第二次世界大戦後における各国の経済開発の歴史と現状を把握する。現状の分析からどのような問題が開発のネックになっているか、その問題を行政と国民がどう解決していこうとするのか、また問題を解決しようとする主体の動き（努力）等を具体的に理解する。こうした理解を基に望ましい援助のあり方や私達が可能な援助を考えることができる。これは南アジアと日本との新しい関係を探る材料となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南アジア諸国の開発戦略	南アジア地域の歴史的、地理的概略を理解した上で、第二次大戦後の経済開発の展開を主にインドの５か年計画を中心にして概説する。	河合　明宣（放送大学助教授）	河合　明宣（放送大学助教授）
2	農業・農村の開発戦略	工業化が外国資本や援助により推進された場合は、短期に産業構造の高度化が達成されるが農工間及び貧富の格差が急速に拡大する。また、自然環境や生活環境が短期に悪化する傾向が強い。南アジアを事例として、経済開発と農業・農村開発の関係及び経済開発の今日の問題点を考える。	同　上	同　上
3	雁行形態的経済発展と南アジア諸国	日本は明治維新後西欧から技術を導入し、消費財の生産から工業化を開始した。その後、消費財から資本財へと基幹産業を移行させてきた。このような工業化のもとで大きな問題であった二重構造を解消することができた。韓国や台湾地域もこのような形態で経済発展を遂げてきた。東アジア・モデルとインド、パキスタン、バングラデシュを比較する。	内川　秀二（日本貿易振興機構・アジア経済研究所　南アジア研究グループ長代理）	内川　秀二（日本貿易振興機構・アジア経済研究所　南アジア研究グループ長代理）
4	インドの工業化	インドは1950年代に国内市場向けの工業化を開始した。しかし、東アジア諸国が1970年代に高度経済成長を遂げる一方で、インドの経済成長は1960年代半ば以降停滞した。インドは1990年に外貨危機が発生したのを契機に経済政策の転換を図った。インドの工業化の過程を説明するとともにその問題点を明らかにする。	同　上	同　上
5	軍部・官僚支配の開発戦略 －パキスタン(1)－	パキスタンは1958-69年、69-71年、77-88年に直接的・間接的軍政を経験し、99年からは4度目の軍政に入っている。他の民政期も国政は軍部・官僚層によって動かされてきたので、開発戦略の枠組みも社会経済発展の実績も、軍部・官僚支配の特徴を色濃く示している。その結果、90年代のパキスタン経済は危機的状況に陥ってしまったが、はたして脱却の道はあるのだろうか。	浜口　恒夫（大阪外国語大学教授）	浜口　恒夫（大阪外国語大学教授）
6	対外依存の経済開発と構造的不均衡 －パキスタン(2)－	パキスタンは、1960年代と80年代に訪れた工業化の波に乗って、それぞれ6.8%と6.5%という高度成長を果たし、独立直後の植民地的停滞経済から大きな変貌をとげた。しかしこの高度成長はいずれも軍政下に対外依存の開発戦略の実施によって達成されたため、多くの構造的不均衡を抱え込んでしまった。工業化を中心にして経済開発の実態を捉え、国内・対外の不均衡を分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	開発援助と自立の課題 －バングラデシュ－	1971 年に独立したバングラデシュは、軍部による政権運営後も、政権交代が続いている。縫製品工業が牽引した製造業発展にも政情不安が影響している。一国の経済開発と国民統合のための物的及び人的資本の蓄積が乏しいという歴史的制約を概説した上で、農業・農村開発を通して地域経済の確立、そのための住民参加による地方行政の効率化が重要であることを述べる。	河合　明宣	河合　明宣
8	ヒマラヤ山間地域における持続的発展の課題 －ネパール－	1950 年代以降、ネパールは混合経済体制下で 5 ヵ年計画を中心とした開発戦略を進めた。しかし、約 8 割の農業人口比率は減少せず、農業が占める国内総生産比率は低下傾向にある。主産業である農業の停滞を打破できない。そこで住民の組織化による参加型森林資源利用の事例考察を通じて、持続可能で環境適応型農業の推進について検討し、適切なハード、ソフトの整備を目的とする国際協力について考える。	ｹｼｬﾌﾞ・ﾗﾙ・ﾏﾊﾗｼﾞｬﾝ（広島大学助教授）	ｹｼｬﾌﾞ・ﾗﾙ・ﾏﾊﾗｼﾞｬﾝ（広島大学助教授）
9	森林保全重視の開発 －ブータン－	最も遅れて工業化過程に入ったブータンは、手着かずの森林が持つ砂防・水源涵養、生物多様性保全機能を自国の優位な資源賦存と捉え、持続的発展を目指した開発戦略を推進している。ブータンの持続的発展の枠組みを理解すると同時に自然環境保全を最優先させた開発戦略が多くの国民の支持を受けている理由を地方分権化と関連させて考える。	河合　明宣	河合　明宣
10	域内社会開発先進国の経済的課題 －スリランカ、マールディーヴ－	インド洋上の海洋国スリランカとマールディーヴは、国連開発計画の人間開発指数(2000 年)が 0.741 と 0.743 で、世界 173 ヵ国中それぞれ 89 位、84 位で中進国に位置している。南アジアでは、続くインドが 0.577 で 124 位であるから、両国とも突出して高く、域内では社会開発先進国である。このような実績がどのようにして達成されたか、直面する経済的課題は何なのかを探る。	浜口　恒夫	浜口　恒夫
11	農村開発における持続的発展とは －バングラデシュでの在地化をめざした農村開発援助プロジェクトに参加して－	バングラデシュで行なわれているJICAの農村開発に関する研究協力プロジェクトへの実践的な参加経験からつかむことができた、「在地化をめざした」農村開発と援助のあり方をお話ししたい。農村開発における持続的発展にとってなにがキーワードとなってゆくのかについて、皆さんが考える時の一つの材料を提供できたらと願っている。	安藤　和雄（京都大学助教授）	安藤　和雄（京都大学助教授）
12	洪水対策と住民参加 －バングラデシュ－	バングラデシュの洪水の概要と人々との関わりについて述べるとともに、パキスタン時代から現在に至る洪水対策の歴史的展開について概観する。とくに 1990 年代に実施された大規模な洪水対策事業ＦＡＰでの住民参加のあり方に焦点を当て、その問題点を明らかにする。さらに、農民が「在地の技術」をもちいて洪水に適応してきた姿を明らかにしながら、「洪水と共生」の可能性についても言及する。	内田　晴夫（農業技術研究機構主任研究官）	内田　晴夫（農業技術研究機構主任研究官）
13	住民参加と地方行政改革	1990 年代には南アジアでは地方分権化が進展した。この歴史的背景や地方行政改革によりどのようにして住民参加が可能となったのか述べる。また、集落組織、地域住民組織が農村開発や持続的発展においてどのような役割を担うのかについて考察する。	河合　明宣	河合　明宣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	社会開発におけるNGOの役割	近年、国際協力の重点が経済開発から社会開発に移ってきている。NGOは、経済開発から取り残された人々の組織作りを通して、所得向上、食生活改善、女性や子供の地位向上、識字教育等の社会開発において多くの成果をあげてきている。南アジアで長い活動経験を持つNGOの活動を紹介し、NGOによる国際協力の固有の役割を理解し、今後の課題を展望する。	斎藤　千宏（日本福祉大学教授）	斎藤　千宏（日本福祉大学教授）
15	日本と南アジア―新しい協力関係を求めて―	政府開発援助や経済開放政策下での外国資本投資、貿易の一層の拡大は、当該国の経済開発戦略に大きな影響を与える。南アジア諸国における経済開発の概要の理解を前提に、グローバル化が進む中での日本と南アジアとの国際協力関係を探り、深めることの重要性を述べる。	河合　明宣	河合　明宣

＝都市システム工学（‘０３）＝（ＴＶ）

〔主任講師：林　亜夫（明海大学教授）〕

〔主任講師：阪本一郎（明海大学教授）〕

【全体のねらい】

戦後発展してきた日本の都市は、今までにない大きな変貌を迫られている。これらの変貌の実態と要因を正しく理解し、また変貌に伴う問題をいかに解決していくかを考察することが目的である。このためには、単一の学問体系だけでなく学際的で広範な知識体系と技術、すなわち社会工学的なアプローチが必要となる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	都市社会の構造的変化に対する社会工学的アプローチ	戦後発展してきた日本の都市は大きな変貌を迫られている。これらの変貌の要因を理解し、また変貌に伴い出現した問題を解決していくためには、単一の学問体系だけでなく学際的で広範な知識体系と技術が必要であることを認識し、変貌の実態と要因を考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）阪本一郎（明海大学教授）
2	持続可能な都市のかたち	都市を持続可能ならしめることは、地球環境の面ばかりでなく、歴史の尊重と経済効率の観点からもきわめて重要である。持続可能な都市形態を、コンパクトシティなどこれまでの提案の検討を通じて考察する。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
3	都市空間形成のルール	都市の郊外及び内部の空間を良好な姿に維持するためのルールにはさまざまなものがあり、国によっても異なる。ルールの役割や効果を、社会的背景とあわせて考察する。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
4	都市空間形成における公的部門の役割	都市の公的部門は、都市空間の質を維持し改善するために様々な関与をしているが、その手段として、公共事業ならびに民間部門の規制と誘導の方法が採用されてきた。これらの実績と限界を検討し、公的部門の関与のあり方を考察する	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
5	都市の公共財と公企業の役割	基盤施設整備や公共サービスの供給において、地方公社や第三セクターといった準公共部門が重要な役割を担ってきた。しかし、これら部門の財政的破綻や効率性が問題になり、新しい制度や技術が導入されつつあり、これらについて考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）
6	都市の新しい公共サービスの供給体制 －　ＰＦＩ　－	快適な都市生活や高度の生産活動には都市の基盤施設が必須である。そのような基盤施設の公共財としての性格を理解し、さらには日本の都市における基盤施設整備水準や整備内容の問題について考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）
7	連携・協力に伴う費用負担問題	現在の都市開発や公共財・サービス供給は、様々な主体の連携協力によって行われる。このとき各主体間の利益の配分と費用負担はどうあるべきか考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）
8	中心市街地の活性化	都市構造と消費者行動の変化は従来の商業集積地に大きな影響を与え、中心市街地の不振をもたらしている。これへの対応策と再活性化を担う人と組織のありかたについて、英国等の経験を紹介しながら考察する。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
9	都市の産業と空間構造の変化	時代とともに都市を支える産業は交代する。新しい産業が都市で如何に生成し成長するか、またその受け皿となる地域が都市内部のどこに用意されるか。これらの現象の分析を通じて、都市が活力を維持するメカニズムを考察する。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
１０	都市地域の基礎的理論分析 －ゲーム理論の応用－	都市地域の発展、衰退さらには都市の空間構成、人口や産業の分布がどのような要因で決定されていくかを、簡単な数学モデルで考察する。さらに、ある目的をもった都市地域政策の意味をこれらモデル上で考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）
１１	地域の計量的分析の手法と有効性	都市の様々な活動を数量的データとして捉え、それら活動主体の構造および主体間の関係を定量的に捉え、都市政策の評価や予測を行う方法論の一つとしての地域計量モデルについて、その理論と実例について学ぶ。	山口誠（豊橋技術科学大学教授）	山口誠（豊橋技術科学大学教授）
１２	都市の管理と情報技術の進歩 － ＧＩＳ －	計算機とネットワークの普及は、電子自治体といった言葉の出現にあるように、都市自治体の行政事務だけでなく公共サービスの質やそのサービス領域をも変えつつある。現状の普及実態と評価、そして問題点を考察する。	表明榮（明海大学助教授）	林亜夫（明海大学教授）表明榮（明海大学助教授）
１３	既成市街地の機能と環境の改善	都市内には市街地としての歴史的変遷の結果、種々の問題を抱えながら容易には改善できない袋小路に落ち込んだ地区が多数存在する。地区の歴史を尊重しながら再生を図るためには、これまでの地方自治体主導から住民主導型に計画づくりの主体を切り替えていく必要があるといわれており、その意味や問題点について考察する。	阪本一郎（明海大学教授）	阪本一郎（明海大学教授）
１４	都市の広域化と連携・協力 － 広域行政のしくみと実態 －	都市の活動は広域化し都市間の相互依存、さらに住民からは高度で多様な公共サービスが求められてきている。このような状況にあって都市間の連携／協力は不可欠なものになってきている。その制度すなわち広域行政の実態を知り、その意義と問題を考察する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）
１５	都市の連携・協力と市町村合併　－理論的、制度的分析－	広域行政の意義を理論的・実証的に考察し、その重要性を考察する。さらに市町村合併を広域行政の代替的制度あるいは補完する制度と考え、市町村合併の問題と展望について考察し、今後の地方自治制度のあり方を検討する。	林亜夫（明海大学教授）	林亜夫（明海大学教授）

＝　建築意匠論（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　香山　壽夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

建築は人間にとって、最も身近にありそして最も古くからある芸術であり技術である。人間は何のために建築を建てるのか。人は建築に何を求め（＝意）それをどのようなかたちを与える（＝匠）のか。古今東西の多様な例を参照しながら考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	建築とは何か	建築は、空間の芸術といわれる。建築空間とは何か。 人が生きるために、又社会をつくるために、建築はどのようなはたらきをしているのか。 　そしてその多様なかたちの内に共通している本質とはどのようなものか。	香山　壽夫（放送大学教授）	香山　壽夫（放送大学教授）
2	場所について	建築は、固有の場所に建てられる。従って地形は建築に先立って、空間を規定している。地形の特質は、建築によってどのように見出され、歴史の積み重ねの上で強められ、場所性を獲得していくか。	同　上	同　上
3	光について	建築空間は、光の造形として見ることができる。 そのような観点から見ると、古典ギリシャ・ローマ、中世ロマネスク・ゴシック、あるいはルネサンス・バロック、そして日本の空間の特質はどのようにとらえられるか。	同　上	同　上
4	部屋について	建築空間の最小単位を「部屋（room）」と規定することができる。部屋の本質とは何か。部屋をつくり出す基本的要素は何か。そして部屋が集合して建築をつくり出す時、どのようなかたちをとるか。	同　上	同　上
5	部屋の要素１） ―門について―	建築空間は、全て、開かれ同時にまた閉じられるものである。その本質を担っている最も主要な要素は門である。人が出入りするとはどういうことか。それを問い直し、その様々なかたちとはたらきについて考察する。	同　上	同　上
6	部屋の要素２） ―窓について―	建築空間を開きかつ閉じるための、もうひとつの主要な要素は窓である。窓は、光、風、視線等の出入りを制御するための空間の要素と言うことができる。窓の様々なかたちと、そのはたらきについて考察する。	同　上	同　上
7	部屋の要素３） -中心について-	部屋となるためには、必ず空間に中心がなければならない。中心は、たとえば、炉端によって示される。 しかし、中心は、はっきり見える場合もあれば、そうでない時もある。炉端はどのようなかたちと意味を持つのか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	建築において表現とは何か	建築は、内において住まわれると共に、外に向かって表わされる。住まわれること、すなわち実用という建築芸術特有の条件は、建築の表現にとってどういう意味を持つか。それは制約なのか、可能性なのか。	香山　壽夫	香山　壽夫
9	支えることと囲うこと	建築芸術特有の共通モティフは何か。他の造形芸術と比較してみると「支えること」と「囲うこと」と言うことができる。このふたつは、どのような建築表現を生み出す力を持っているか。またその関係のうちにどのように様々な様式を作り出してきたか。	同　上	同　上
10	抽象と自然	建築の創作は、他の芸術に比し、極めて抽象的であり、又同時に極めて経験なものといえる。抽象的思考と経験的思考、あるいは幾何学と自然は、建築の創作の過程でどのように働いているか。又どのような建築表現を生み出してきたか。	同　上	同　上
11	建築の要素１） ―柱について―	柱の主要なはたらきは、支えることにある。柱が何を支え、何によって支えられるかが、建築様式を規定する第一の条件となる。支える要素である柱は、どのようにして空間を囲む力を獲得するか。	同　上	同　上
12	建築の要素２） ―壁について―	壁は、空間を囲む。その空間の大きさと、閉鎖の程度によって、様々な壁がつくり出される。又壁は、重なりあって空間を囲んでいる。壁によって、どのような内部空間と外部空間、そして周縁空間がつくり出されるか。	同　上	同　上
13	建築の要素３） ―床について―	床は、地面の一部を特化することによって空間を規定する。その特化の方法によって、様々な床がつくられる。階段は、上下の床をつなぐ。水平の運動に上下の運動が加わることが、階段の特別な意味をつくり出す。	同　上	同　上
14	建築の要素４） -屋根について-	屋根は、空間をその上部において包む。その大きさ、高さ、そして包み方の程度が、様々な屋根の意匠をつくり出す。屋根は、空間の上方への動きを誘い、あるいは又抑制することによって、特別な意味を建築に与える。	同　上	同　上
15	秩序について	建築は空間を秩序づけ、空間は人間に秩序を与える。 建築のつくり出す秩序とはいかなるものであり、どのように人に働きかけているのか。建築家はその創作において、いかにして秩序を把えることが可能なのか。	同　上	同　上

＝マスメディア論＝（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　柏　倉　康　夫（放　送　大　学　教　授）〕
〔主任講師：　萩　野　弘　巳（元県立長崎シーボルト大学教授）〕
〔主任講師：　小　室　広佐子（東京国際大学助教授）〕

全体のねらい

マスコミは人々の「知りたい」という欲求とともに発達し、いまや固有の産業として強大な力を示すまでになった。新たな技術の登場とともに、新聞、出版、放送、広告といった分野で膨大な情報が伝達され、それが社会の行方に決定的な影響を及ぼしてきた。講義では各々のマスメディア固有の歴史を辿りつつ、課題を検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報は世界を制す	19世紀半ばから21世紀はじめの100年間は、コミュニケーション手段の発展の歴史として位置づけることができる。19世紀に発達した郵便、電報、電話、20世紀になって出現したラジオは人びとの生活に影響をあたえた。第1回では、情報伝達の歴史と社会の関係を展望する。	柏倉　康夫（放送大学教授）	柏倉　康夫（放送大学教授）
2	メディア革命と政治	第2回はメディアの変革が政治に及ぼした影響を考える。政治はときにマスメディアを抑制し、またあるときは政策実行の手段として、これを促進させた。マクルーハンの「メディア論」を読み直しつつ、政治とメディアの緊張関係を歴史的に展望し、今日の課題を探る。	萩野　弘巳（元県立長崎シーボルト大学教授）	萩野　弘巳（元県立長崎シーボルト大学教授）
3	書物の革命	電子出版が盛んになる今日、「グーテンベルクの銀河系」の終焉という言葉が言われる。手写本から活字本へとドラスティックに推移してきた書物、人類の知の宝庫と考えられてきた書物とは何か。テクスト、モノ（本）、読書行為の接点である書物の本質と変遷を考える。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
4	出版社の抬頭	B・アンダーソンは、16世紀の各国近代語の普及と印刷出版物の普及がナショナリズム流行の前提であり、さらに19世紀の読書革命が大衆の国民化を支えた。こうした事態の背景には出版産業の隆盛があった。近代社会における巨大出版社の出現の意味をフランスを中心に論じる。	同　上	同　上
5	作家の誕生・読者の拡大	今日でいう作家が誕生したのは19世紀になってからのことである。それまでの文学者は王や貴族に頼って作品を創作してきた。そしてその背景には市民階級の抬頭による読者層の拡大があった。こうして雑誌は多くの読者を獲得するために多彩な読み物を掲載するようになる。	同　上	同　上
6	新聞メディアの現在	ヨーロッパ大陸で最初に刊行された日刊紙はドイツ・ライプチヒの「アインコメンデ・ツァイトゥング」紙で、18世紀には各地で日刊紙が登場し、それ以後新聞は各時代を通じて主要なマスメディアであり続けた。政治体制の関係を中心に、社会における新聞の機能について考える。	同　上	同　上
7	映画、イメージの文化	映画は1895年12月のある夜、パリのレストラン「グラン・カフェ」で上映されたリュミエール兄弟のシネマトグラフによって始まった。このときから「動く映像」はその魅力で世界中の人たちを虜にすることになる。この回ではハリウッド映画の変遷を論じつつ映画と大衆の関係を見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	テレビ時代のラジオ	20世紀後半のマスメディアの代表はテレビであった。これはテレビが映像（動画）と音声を一体化したメディアであることによる。しかし現在のテレビ放送のほとんどは過去のラジオの経験の上にたつものであり、なおかつラジオは現在でも存在意義を失っていない。ラジオの特性を考える。	萩原　弘巳（元県立長崎シーボルト大学教授）	萩原　弘巳（元県立長崎シーボルト大学教授）
9	テレビ、魅惑のメディア	テレビは1936年のベルリン・オリンピックの中継放送や翌37年のパリ万博で多くの人々の関心を集めた。そして1940年代の末に、テレビ放送が各国で本格化すると、一つの画面からニュース、娯楽、海外情報が飛び出すテレビは日常不可欠の道具になった。テレビの功罪を検討する。	小室　広佐子（東京国際大学助教授）	小室　広佐子（東京国際大学助教授）
10	テレビ番組はどうつくられるか	マス・コミュニケーションは、新聞、雑誌の活字メディア隆盛の時代から、テレビに代表される画像メディアへと主役の座を変えつつある。はたしてテレビのニュースや番組はいかに制作されるのか。その具体的な制作プロセスを解明し、受け手はそれにどう対処すべきかを考える。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
11	デジタル時代の情報戦略	1990年代半ばに登場したクリントン政権は「情報スーパー・ハイウェイ構想」を政策の柱として、情報環境の整備と経済の活性化をはかった。パソナル・コンピュータがインターネットでむすばれるシステムは生活様式を変えつつある。アメリカとシンガポールを例に情報戦略を考える。	同　上	同　上
12	デジタル技術と文化	デジタル技術は文化の質に大きな影響をあたえつつある。京都では中世以来、長年にわたって蓄積されてきた文化遺産を、新たな資産としてデータ・ベース化し、それを活用して新しい産業を起こそうとしている。ヴァーチャル・リアリティーの意味を含め、この構想の意義を検証する。	同　上	同　上
13	電子メディアと知の変容	テレビ以降「電子メディア」と総称される情報媒体が登場し、情報の伝わり方と知のありようは大きく変化した。そしてそれは多様で多面的なエピステーメー（学問的知識）と芸術的感性を花咲かせた。第13回では、こした情報伝達手段の発達と知の変容について具体的に考察する。	萩野　弘巳	萩野　弘巳
14	メディア・リテラシー	第13回までたどってきたマス・メディアの歴史的歩みと現状にたいして、私たちはどのように対処すればよいのか。それぞれのメディアが抱える利点と欠点を正確に把握する必要があるが、それこそがメディアリテラシー（メディアを読み解く能力）である。その必要性を考える。	小室　広佐子	小室　広佐子
15	マスメディアの倫理	最終回はマスメディアに働く人々、そして組織体としてのマスコミが守るべき倫理を考える。それは同時に、メディア環境の変化によって、情報の発信手段を多くの人たちが個人的に獲得しつつある今日では、単にマスコミだけでなく、個々人が厳守すべき倫理になりつつある。	柏倉　康夫	柏倉　康夫 萩野　弘巳 小室　広佐子

＝エネルギー工学と社会（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　内山　洋司（筑波大学教授）〕

全体のねらい

産業活動と人々の生活を支えているエネルギー。私たちは、普段、エネルギーを空気や水のように無意識に使っている。世界のエネルギー消費は20世紀に入って急増し、過去100年間で15倍以上にまで増大している。そのエネルギーの大半は化石燃料で供給されており、将来の資源枯渇と燃焼による大気汚染や地球温暖化が懸念されている。増加の勢いが止まらない経済発展と世界人口、21世紀の世界が持続可能な発展を遂げていくには、原子力や再生可能エネルギーといった代替エネルギーの開発、それにエネルギーの供給と消費において無駄のない工夫が求められている。本講義は、エネルギーに関心のある人々を対象にエネルギー工学の立場から社会のエネルギー問題について理解を深めてもらうことを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人類とエネルギー	エネルギーは、社会の産業活動と人々の生活に不可欠となっている。産業革命以降の経済発展はエネルギーの大量消費に依存している。21世紀は開発途上国の経済発展と人口増加が予想されており、「経済発展」、「エネルギー安定供給」、「環境保全」の関係は一方を立てれば他方が立たないジレンマが重なったトリレンマの状態にある。ここでは人類がエネルギーをどのように利用して社会を発展してきたか、エネルギーの歴史について述べる。また増加し続けるエネルギー消費によって現代社会が直面しているトリレンマ問題について解説する。	内山　洋司（筑波大学教授）	内山　洋司（筑波大学教授）
2	社会のエネルギー消費	エネルギーは現代社会の物質的豊かさと快適さを維持する源となっている。機械化、自動化、情報化など省力化が進む工場や事務所、車、ジェット機など高速化が進む輸送機関、冷蔵庫、エアコン、テレビなど電気製品の普及・・・。現代社会の発展のほとんどが、エネルギーに依存している。今日の経済活動は、こういった技術や製品の進歩によって営まれており、経済の発展は社会のエネルギー消費の増大につながっている。ここでは私たちの生活の身近なところでエネルギーがどのように使われているか、そしてわが国のエネルギー消費の実態について説明する。	同　上	同　上
3	エネルギー消費構造と省エネルギー	第２回目の講義に引き続き、わが国のエネルギー消費構造を産業、民生、運輸の部門について詳しく解説する。省エネルギー社会の構築には、省エネ型の社会基盤施設の整備、高効率機器の普及、そして人々のライフスタイルへ変化が必要になる。産業、運輸、民生の各部門でどのような省エネルギー対策があるのか、またその達成の可能性について検討する。	同　上	同　上
4	エネルギー供給の基本要件	年々増加し続けている世界のエネルギー消費。ここでは、石油、天然ガス、石炭について世界のエネルギー消費動向を調べ、生産と貿易の現状を理解する。また、日本のエネルギー供給の実態と石油供給問題について解説する。さらに化石燃料、原子力、再生可能エネルギーについて、エネルギーの基本要件である「入手しやすさ」、「使いやすさ」、「受入れやすさ」からそれぞれの特徴を述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	エネルギー資源：資源分類と化石燃料	エネルギーは資源面から化石燃料、核燃料、再生可能エネルギーに大別できる。化石燃料と核燃料は枯渇性資源であるが、再生可能エネルギーは非枯渇性資源である。エネルギー資源の中で、化石燃料は現在、主要なエネルギー供給源となっており、その資源の分布や埋蔵量、あるいは可採年数などを理解することが大切である。ここでは、エネルギー資源の分類方法を説明するとともに、枯渇性資源である化石燃料の埋蔵量と枯渇問題について解説する。	内山　洋司	内山　洋司
6	エネルギー資源：再生可能エネルギーと原子力	地球は太陽が発しているエネルギーのわずか 22 億分の 1 を受けているにすぎないが、そのエネルギー量は現在、世界が消費しているエネルギー消費量の約１万倍にもなる。太陽エネルギーは、水力、風力、太陽光などの形でエネルギー源として利用されているがその利用量はまだわずかである。一方で、太陽エネルギーを地上で自ら造りだそうと、核反応を制御する原子力技術が開発されている。ここでは、再生可能エネルギーと核融合を含めた原子力についてそれぞれの特徴と資源量を述べる。	同　上	同　上
7	エネルギー変換とシステム分析	エネルギー資源の多くは、熱、動力、電気など二次エネルギーに変換して利用されている。ここでは、エネルギー変換の基礎的な物理法則と熱力学を学び、各種熱機関の熱サイクルと熱効率の求め方を理解する。また、エネルギー生産技術である発電技術について、設備の建設と維持保守に投入されるエネルギー量と生産されるエネルギー量を比較するエネルギー収支分析について説明する。	同　上	同　上
8	化石燃料技術	世界のエネルギー消費補の約９割は石炭、石油、天然ガスなどの化石燃料によって供給されている。ここでは、化石燃料の変換・転換技術について、特徴と開発動向を説明する。また、脱硫、脱硝など環境対策技術について解説し、エネルギー効率の向上を図る具体的な技術開発について展望する。	同　上	同　上
9	原子力発電技術	原子力発電はわが国の電力量の約３割を供給する主要電源である。ここでは、最初に核分裂について簡単な基本原理を学ぶ。軽水炉、高温ガス炉、高速増殖炉など各種原子力発電技術を紹介し、原子力発電の安全対策がどのように行われているかを説明する。また、社会における様々なリスクについて調べ、リスク評価やリスクコミュニケーションのあり方について考えてみる。	同　上	同　上
10	核燃料サイクルと放射線	天然ウランの 99.3%を占めるウラン(238)を有効に使っていくためにはプルトニウムの利用が不可欠となる。ここではプルトニウムを有効に使うための再処理技術を含めて核燃料サイクルの仕組みと開発動向について解説する。また放射線とその取り扱い方法についても解説する。	同　上	同　上
11	再生可能エネルギー技術	環境問題から太陽光、風力、水力、地熱、バイオマスなど再生可能エネルギーの利用に関心が高まっている。ここでは、再生可能エネルギーの発電技術について、技術特性と開発状況、それに普及方策と将来の展望を解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	エネルギー輸送と貯蔵	石炭、石油、ガス、電気、熱といったエネルギーについて輸送と貯蔵の役割を考えてみる。電力貯蔵については、揚水発電、圧縮空気貯蔵、蓄電池、フライホイール、超電導の特徴と開発動向を説明するとともに、貯蔵効率や経済性について解説する。	内山　洋司	内山　洋司
13	分散型技術の役割	物質的に成熟化段階に入った先進国においては、将来、エネルギー需要が大きく伸びていくことは考えられない。エネルギー供給において「規模の経済」から「範囲の経済」へ移行することで、新たなエネルギー産業の創出が望まれている。分散型技術は、新産業の創出に役立つ新技術としてその普及が期待されている。ここでは分散型技術についてその種類と特徴を紹介し、どのような導入方法が望ましいかについて解説する。	同　上	同　上
14	地球環境問題と温暖化対策	化石燃料の大量消費によって二酸化炭素の排出量が増大し、地球温暖化が問題となっている。ここでは、地球温暖化の現象と、その防止に向けて制定された京都議定書と京都メカニズムについて解説する。また政府の温暖化対策やライフサイクル分析から対策技術のあり方について説明する。	同　上	同　上
15	エネルギーと持続可能な発展	２１世紀は、開発途上国、特にアジア地域の経済成長と人口増加によってエネルギー消費が急増すると予測されている。世界のエネルギー消費の増加によって、酸性雨や温暖化など地球環境問題が深刻になっていくことが懸念されている。ここでは、世界のエネルギー需給を展望し、世界が「経済成長」、「エネルギーセキュリティ」、「環境保全」を同時に達成していくには、今後どのような対策が必要になるのか、日本が果たす役割は何かについて考えてみる。	同　上	同　上

＝物質・材料工学と社会（‘０５）＝（TV）

〔主任講師　：　岸　　輝雄（独立行政法人　物質・材料研究機構・理事長）〕
〔主任講師　：　小口　信行（独立行政法人　物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所副所長）〕
〔主任講師　：　塙　　隆夫（東京医科歯科大学教授）〕

全体のねらい

材料は身の周りのあらゆる所で利用され、今日の豊かな社会生活を築く上での基盤となっている。しかしながら、通常、人が実生活の中で材料の価値を意識することは殆どないのが現状であろう。本科目では、材料がどのようなところでどのように使用され、役立っているかを知ることで、材料の重要性と面白さを認識することを目指す。

全１５回講義のうち、前半では、材料を金属、セラミックス、高分子、半導体、複合材料の５つに大別し、材料の基礎的事項を学ぶ。後半では、材料を情報通信、環境、資源・エネルギー、安心・安全などの用途に分け、材料の機能と利用方法について学ぶ。特に、次世代の究極の材料技術として注目されているナノテクノロジーなど、最先端の材料研究開発の現状も知る。講義全体を通じ、社会の中での材料の役割について考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	材料開発と人類の歴史、持続的社会との関わり	人類文明の歴史は材料開発の歴史とも言える。人類は材料を自在に加工し役立てることで、今日の豊かな社会生活を築いてきた。人類が将来に渡り、持続的に発展するには、新しい材料の高度利用が不可欠である。材料開発の歴史を振り返り、今日のナノテクノロジーに辿り着くまでの道のりを概説する。	岸　輝雄（物質・材料研究機構・理事長）	岸　輝雄（物質・材料研究機構・理事長）
2	物質の構造、材料の特性と信頼性	物質は多数の原子と電子から構成されている。そして、物質の性質（物性）は、元素種、原子の結合様式、結晶構造、高次構造の違い、さらには、その結果として生じる電子状態の違いなどにより決定される。材料の特性と信頼性を、物質の微視的な構造と性質に立ち返り、解説する。	同　上	同　上
3	金属材料、セラミックス材料	金属材料とセラミックス材料は社会のさまざまなところで広く使われている代表的な工業材料である。金属やセラミックスの製造方法やその性質を学習し、巨大な建造物から身近にある品物まで、多様な工業生産物が金属やセラミックスの持つ特徴を上手に利用して製造され、使われていることや、リサイクルされることを学ぶ。	吉原　一紘（物質・材料研究機構・理事）	吉原　一紘（物質・材料研究機構・理事）
4	高分子材料、複合材料	身近な繊維・プラスチック・ゴムから半導体集積回路を作製するためのフォトレジストまで、高分子材料の範疇は極めて広い。蛋白質や核酸も高分子の一種である。本講義では、低分子化合物とは異なる高分子物質の特徴や性質を解説する。さらに、高分子をベースとした同種・異種材料との複合化による多彩な機能についても触れる。	岸　輝雄	岸　輝雄 及川　英俊（物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所ナノ電子光学材料グループ・主席研究員）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	半導体材料	半導体材料は、現在の高度情報化社会を支えている重要な材料である。本講義では、シリコン、ゲルマニウム等の単元素半導体、およびガリウムヒ素、窒化ガリウム等の化合物半導体を中心に、これらの材料の特徴や性質を説明し、半導体を用いる基本的な各種電子デバイスの構造、動作原理について概説する。	小口　信行（物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所副所長）	小口　信行（物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所副所長）
6	セメント、コンクリート、木材	コンクリートとは、骨材と呼ばれる岩石・砂などをセメントで固めた材料である。任意の形状に作ることができ、硬化に水のみを用いる安定性の高い材料で、古くから使用されてきた。木材は日本史を代表する建設材で、大規模建造物や橋梁などへの適用で再び注目を浴びている。いずれも社会資本の整備に不可欠な材料として使用され、環境との共生や維持管理への取り組みも行われている。これらの歴史と現状を紹介する。	岸　輝雄	岸　輝雄 大津　政康（熊本大学大学院教授）
7	情報化社会を支える材料技術	シリコンを基盤とした半導体デバイスとそれを用いたコンピュータの発展は、２０世紀における社会の変革に多大な役割を果たしてきた。しかし、これらの性能をさらに向上させていくことは、既に限界に近づいているとも言われている。本講義では、高度情報化社会を支える材料技術の歴史と現状、および今後の展望について概説する。	小口　信行	小口　信行
8	ナノ材料と原子・分子レベル加工	物質・材料はナノメートル（10億分の１メートル）まで寸法を小さくすると一変して新規な性質を見せ始めるが、それは何故だろうか。それらの新規な性質を積極的に利用すると、どのようなナノテクノロジーの未来が拓けるだろうか。これらについて述べると共に、ナノメートル寸法の構造を原子・分子レベルの精度で構築する最近の先端技術について解説する。	青野　正和（物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所・所長）	青野　正和（物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所・所長）
9	地球環境と資源循環	物質や材料は人間社会を支えてきたが、逆に地球環境にはどれほどの影響を与えてきたのか、また、その影響を低減させながら持続可能な社会を支えるために材料技術に何ができるかについて概説する。特に、わが国の目指している循環型社会を、自然との物質の循環の観点からいかにとらえ、いかに進めていくべきかについて考察する。	原田　幸明（物質・材料研究機構エコマテリアル研究センター・センター長）	原田　幸明（物質・材料研究機構エコマテリアル研究センター・センター長）
10	環境とエネルギー材料　ー光触媒、電池材料ー	社会にとって道具やエネルギーは不可欠である。しかし、それらを作り出すことが地球環境に負担を掛け、我々生き物の安全への脅威となりつつある。本項では我々の最も身近なところで、環境浄化やクリーンエネルギー創出に貢献している光触媒や電池材料の開発とそれらの具体的応用について説明する。	渡辺　遵（物質・材料研究機構物質研究所・所長）	渡辺　遵（物質・材料研究機構物質研究所・所長）
11	未来のエネルギー材料　ー超伝導材料ー	超伝導材料を一定の温度以下に冷却すると、電気抵抗が完全に消失し、ロスなしで大電流を流すことが可能になる。このような特異な性質ゆえに、超伝導材料は２１世紀のエネルギー関連技術において重要な役割を果たすものと期待されている。超伝導の基礎を踏まえた上で、超伝導材料の具体的応用について説明する。	室町　英治（物質・材料研究機構超伝導材料研究センター・センター長）	室町　英治（物質・材料研究機構超伝導材料研究センター・センター長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	安心な生活空間のための材料 －構造材料－	生活空間に安心をもたらすために構造材料に必要な性質と技術をまとめる。わが国は、地震、台風、高温多湿など、欧米と比べて厳しい地理的条件にある。また、乗り物には、軽量化、衝突安全性が要求される。材料の強さと寿命を延ばす技術、材料を成形する技術、部材同士を接合する技術などの基本と応用例を述べる。	岸　輝雄	岸　輝雄 長井　寿（物質・材料研究機構超鉄鋼研究センター・センター長）
13	医療診断・治療と材料工学	DNA、タンパク質などの人体の中にある分子を診断に利用するバイオセンサーやドラッグ・デリバリー・システム（DDS）による遺伝子治療など、ナノテクノロジーと材料の進歩によって可能になった医療技術について考える。	塙　隆夫（東京医科歯科大学教授）	塙　隆夫（東京医科歯科大学教授）
14	人工臓器・再生医学と材料工学	加齢、事故、疾病などによって失われた身体機能を回復させるための治療や臓器を再生させる技術には、多くの材料が貢献している。これらの材料の問題点を学び将来を展望する。	同　上	同　上
15	材料・環境・社会、これからの材料開発の方向	前回までの講義で、材料を理解する上での基礎的事項と材料の用途・機能を学んだ。最終回では、今後の材料開発はどうあるべきかについて考える。特に、環境や資源、安全など、地球規模での問題の解決には新規材料の開発と利用が不可欠であろう。２１世紀社会における材料の果たすべき役割について考える。	岸　輝雄	岸　輝雄

＝バイオテクノロジーと社会（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　軽部　征夫（東京工科大学教授）〕

全体のねらい

バイオテクノロジーのいろいろな分野への応用が注目されている。この基礎となる技術について解説し、これらの医療・福祉、生活、産業、農林水産業などへの応用の具体例やこの技術のもつ倫理的問題について述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ＤＮＡ,遺伝子と染色体	遺伝子の本体がＤＮＡであることがわかり、ＤＮＡの化学構造、遺伝子と染色体との関係が明らかになった。これらの遺伝子情報に基づいてタンパク質が合成される（遺伝子機能の発現）。そして、ヒトゲノムの解析が終了し約３万個の遺伝子があることがわかった。	軽部　征夫（東京工科大学教授）	軽部　征夫（東京工科大学教授）
2	組換えＤＮＡ技術	生物は共通の遺伝子の本体として DNA を用いている。これらのＤＮＡを組み換えて、異種の生物にそのＤＮＡを導入し、発現させる技術が開発された。この技術を応用すると全く新しい医薬品等の製造ができる。	同　上	同　上
3	細胞と組織の操作	細胞を培養する技術やその細胞の中に遺伝子を導入する技術、またその細胞の集合体である胚の培養技術や組織の再生技術など、細胞と胚の操作技術やその応用分野が著しく広がっている。	同　上	同　上
4	クローン・キメラ動物	クローン羊「ドーリー」の誕生によってクローン動物が世界中の注目を集めた。この問題はクローン人間の問題へと発展し、大きな社会問題となっている。また、異種動物の遺伝子を導入したキメラ動物を作り出すことも可能になっている。	同　上	同　上
5	バイオ医薬品	組換えＤＮＡ技術を応用すると、われわれの体の中で重要な働きをしているペプチドやタンパク質などの医薬品を生産することが可能である。このようなバイオ医薬品のマーケットは急速に拡大している。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	先進医療	遺伝病は4000以上あると言われている。これらの遺伝病のうちの一部は遺伝子を補うことによって治療することができる。このような先進医療や組織再生など最近の医療におけるバイオテクノロジーの応用が広がっている。	軽部　征夫	軽部　征夫
7	再生組織工学	胚性幹細胞（ES細胞）の樹立に成功し、いろいろな細胞に分化する幹細胞が容易に入手可能となった。これらの幹細胞にＤＮＡや核を導入して種々の細胞に分化させる技術が開発されており、これらの技術を用いて将来、臓器再生が可能になると思われる。また、人工臓器の研究や医療用ロボットなどの研究が進展している。	同　上	同　上
8	生活に役立つバイオ	食品を効率的に製造したり食品の機能を高めたりすることがバイオテクノロジーの応用によって可能となった。また、化粧品分野でも遺伝子レベルから美白を実現したり、皮膚の老化を防ぐなどの革新的な化粧品が誕生している。	同　上	同　上
9	産業に応用されるバイオ	アミノ酸やアルコールの生産の効率を上げるために、組換えＤＮＡ技術を利用して改良した微生物が利用されている。また、バクテリア・リーチングと呼ばれ、銅などの精錬に微生物が応用されている。さらにバイオマスエネルギーも注目されている。	同　上	同　上
10	バイオとエレクトロニクスの融合	生物の機能をエレクトロニクス分野に応用しようとする研究がある。例えば、生物の分子識別機能を応用したバイオセンサーが開発され、医療計測や環境計測に応用され、注目されている。また、脳を指向したコンピュータなども研究されている。	同　上	同　上
11	新しい農業	遺伝子組換え作物が注目されている。除草剤に耐性の遺伝子などを導入することによって除草剤の効果を上げたり、収穫量を上げることが可能である。また、医薬品として有効な成分を作物に組み込むなどの研究も行なわれている。	同　上	同　上
12	海洋とバイオテクノロジー	海洋生物を対象とするバイオテクノロジーが注目されている。例えば、魚類の性をコントロールすることによって資源の復活を図ったり、海洋生物から新しい医薬品や工業原料を生産する研究が行なわれている。このような分野の研究はマリンバイオテクノロジーと呼ばれている。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	環境修復と保全	環境に負荷を与える物質を、生物の機能を利用して分解するバイオレメディエーションが注目されている。この技術により、タンカーなどの沈没で流出する重油や原油を分解することも可能である。また、砂漠の緑化を可能にするキメラ植物の作出なども行なわれている。	軽部　征夫	軽部　征夫
14	生命倫理	組換えＤＮＡ技術の安全性から始まり、胚などの操作やクローン人間の問題など生命倫理に関する議論が高まっている。また遺伝子治療や臓器の再生医療における倫理問題などもある。これらのバイオテクノロジーに関する生命倫理の問題について議論する。	同　上	同　上
15	新しいバイオテクノロジー	ナノテクノロジーの１つのモデルとして生物機能が考えられており、ナノバイオテクノロジーと呼ばれる分野の研究が盛んになってきた。一方、ロボットやエレクトロニクスの分野への生物機能の応用も進んでおり、この分野は「バイオニクス」と呼ばれている。	同　上	同　上

＝　情報技術と社会（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　大岩　　元(慶應義塾大学教授)　〕
〔主任講師：　辰己　丈夫(東京農工大学助教授)　〕

全体のねらい

情報技術(Information Technology)は、21世紀の社会を築く基盤となったが、その本質について必ずしも理解されているとは言いがたい。コンピュータと情報ネットワークを支えるデジタル技術について、ものごとの本質を見極める時に役立つ本質的な知識を選び出して、その理解と具体的な応用例を示す。さらに、これからの社会がどのように変って行くか予測して、それに対処するには人々が何をしなければならないかについて考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	情報技術と21世紀の社会	1940年代に姿を現わしたコンピュータは、50年代に商用化され、70年代以後は、その基盤となる半導体産業の劇的な発展をうながした。その結果、コンピュータの費用対効果は著しく増大してインターネットを生み出し、21世紀の社会の根底を支えるまでになった。その中心を担うコンピュータには、パソコンのように目に見える形のものと、ビデオやカメラ、自動車などに内蔵されている目に見えない形のものがある。	大岩　元（慶應義塾大学教授） 辰己　丈夫(東京農工大学助教授)	大岩　元(慶應義塾大学教授) 辰己　丈夫(東京農工大学助教授)
2	見える情報技術	世界最初のコンピュータの考えられているENIACは、1946年に米国のペンシルバニア大学で完成し、砲弾の軌道計算に使われた。どんな計算をするかを決めるプログラムを記述するのに、配線盤が使われたために、計算は砲弾の飛行より早かったが、配線に1週間もかかった所が問題であった。これを解決して、高速記憶装置にプログラムを書きこむようにしたのが、英国のケンブリッジ大学で開発されたEDSACである。ハードウェアとしてのコンピュータは、大型計算機からミニコン、ワークステーション、パソコンと大きさが小さくなると一方で、その能力は増大し、巨大なプログラムを必要とするようになった。プログラムを書くことは、予想以上に困難であり、現在の巨大なソフトウェア産業を生むことになった。	大岩　元 富樫　雅文(群馬大学非常勤講師)	大岩　元
3	見えない情報技術	コンピュータの開発当初は、人間が必要なデータを集めてコンピュータに入力し、さらに、コンピュータによる計算出力に従って機械を操作したり、命令を出していた。その後、自動的にデータを入力・収集する機器や、他の機器を制御する機器が開発されると、さまざまな機械・システムの制御が、人間の手を介さずにコンピュータで行なわれるようになってきた。例えば、小口の荷物に付けられたバーコードリーダは目の代わりをし、読み込まれたデータを入力としてコンピュータで計算された結果を元にベルトコンベアが制御され、荷物は、方向別にトラックやコンテナに収納される。このようなコンピュータを用いたシステムの導入が進んだことで、物流システムが変わり、さらに、工場立地や産業構造にまで影響が及んでいる。ここでは、さまざまな「見えないＩＴ」の仕組みを明らかにしながら、情報技術が社会に与えた影響について議論する。	辰己　丈夫	辰己　丈夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
4	コンピュータと電卓は何が違うのか	電卓はどのような仕組で計算を行なっているかと示す。算数では乗除算が加減算より優先されて計算されるように教えられるが、普通の電卓ではなぜそのように計算されないかを説明する。世界最初の電卓である HP 社の電卓を紹介し、括弧を使わずに複雑な計算が行なえるかを示し、日本語の語順との関連性を示す。コンピュータが計算する仕組みは電卓と同じであることを説明し、電卓では使用者の頭の中にある計算順序に従って計算が進んで行くのに対して、コンピュータの場合には計算順序をあらかじめプログラムとしてメモリに書きこんでおくことによって、超高速に計算が行なわれる。コンピュータによる情報処理は、本質的に電卓の計算と同じである。	大岩　元	大岩　元
5	デジタル技術とアナログ信号	デジタル技術はアナログ信号を用いて実現される。デジタル技術の基礎となる２進法の原理について説明したあと、アナログ情報をデジタル信号でどのように表現するのか、デジタル信号をアナログ信号にもどした時の精度の問題を雑音の存在と関連させて議論する。コンピュータへの性能要求に答えて半導体技術が発展し、これに支えられて、情報技術も発展をとげてきた。こうして発展したデジタル技術はコンピュータにとどまらず、CD や DVD のような民生機器にも応用され、応用の拡大にともなって使えるほとんど全ての場面で使われるようになってきた。なぜデジタル技術がアナログ技術に比べて有利なのか、デジタル化でどんな問題が生じるかを論じる。	大岩　元 富樫　雅文	大岩　元
6	人間と機械の情報処理(1)	その大きな脳によって高度な情報処理能力を有するようになった人間と、小さくて高速な電子的機構によって情報を処理する機械としてのコンピュータは、さまざまな面から共通点や異なるところを見ることができる。情報処理システムとしての人間という見方と記憶し判断するものとしてのコンピュータを考えることによって、生活と社会のなかにコンピュータをどのように組み込んでいったらよいのかについて議論する。そのために、情報の入力としての感覚器官のはたらきとコンピュータの入力装置、脳のはたらきとコンピュータの計算処理、また、情報出力としての運動とコンピュータの出力装置などを対比させながら、広い意味での情報処理がどのように行なわれていくのかを見る。また、人間が身体の延長として用いてきた道具と、脳の延長線上に位置付けられるコンピュータではその作りや使いかたにおのずから異なるところが出てくる。人間を中心に考えたとき、道具－機械－コンピュータという発達の流れのなかでこれらを使うための作法がどのように変化していくのかについて考察する。	大岩　元 (慶應義塾大学教授) 富樫　雅文 (群馬大学非常勤講師)	大岩　元 (慶應義塾大学教授)
7	人間と機械の情報処理(2)	生物そして動物としての人間は「もの」によって構成された世界のなかで生きており、「もの」の知覚や操作には長けている。一方、情報は「もの」とは異質な存在であって、体を使って直接に見たり触れたりすることができないために、コンピュータの中で行なわれる情報処理を実感することが困難である。コンピュータ本体に接続されるさまざまな周辺装置やソフトウェアの技術が、この情報と「もの」のあいだの距離をつめて人間による情報の操作を本来得意だった「もの」の操作に近づけるるために発達してきた。コンピュータにおける「ヒューマンインターフェース（Ｈｕｍａｎ　Ｉｎｔｅｒｆａｃｅ）」の知識と技術によって、情報をどのようにして「もの」に見立て、また、情報の操作をどのようにして「もの」の操作に置き換えていくのかについて見ていく。このことによってあらためて情報で構成される世界というものについて考えてみる。	大岩　元 富樫　雅文	大岩　元

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	情報ネットワーク	ドアを直接ノックする、糸電話をつかうというアナログ方式の通信と、送り手と受け手が0と1の違いをあらかじめ約束して情報を符号化して通信を行なうデジタル方式の通信の比較をしながら、通信技術の基礎について議論を行なう。次に、バス型と呼ばれるネットワーク通信の仕組みについて議論を行なう。そして、インターネット技術の基礎であるパケット通信、ポート番号、TCP、UDP、経路制御、名前空間について取り上げ、それらの応用である電子メール、WWW、IP 電話、ビデオチャットなどについて紹介をし、通信プロトコルの重要性について議論を行なう。	辰己　丈夫	辰己　丈夫
9	記号論から見た情報概念	情報技術が社会生活に与える影響として文化や生活様式の多様化が指摘される。特にコンピュータネットワークの普及による情報源の多数化やコミュニケーション機会の増大といった要因が、高度経済成長が達成された後の社会において、文化・生活様式の多様化の流れをさらに加速する力として作用している。このような文化的・社会的状況を生きるにあたっては、「情報の価値」の問題に対する敏感さが要求される。すなわち文化・生活様式が多様化した社会とは、他者の価値観や感受性のあり方が見えにくい社会である。そのような社会においては、いかなる情報にいかなる価値が見いだされるかという点についての自明性が成立しづらい。したがって、他者との不用意な摩擦を回避しよりポジティブな社会関係を構築するためには、日常生活の様々な場面で情報の価値に対する見方の相違について、常に慎重な判断を下すことが要求される。上記の問題意識をふまえ、情報の価値の問題を記号論の立場から考察する。記号論は「記号＝人間が意味や価値を見いだすあらゆるもの」を考察の対象とする学問である。特に今回は記号論の立場から情報の価値と個人の価値観の関係や、価値観の形成と共有を通した個人と社会集団の関係を論ずる。また、文化・生活様式が多様化した社会において求められる想像力と判断力について考察する。	斎藤　俊則(慶応義塾大学非常勤講師)	斎藤　俊則(慶応義塾大学非常勤講師)
10	メディアと情報による人間の心の操作	個人の価値観の形成とメディアの影響力について議論する。個人の価値観は社会的な過程によって形成されるが、各種メディアによってもたらされる情報はその際のより所として大きな影響力を持つ。そこから、メディアはしばしば、特定の価値観を集団的に内面化させるための道具として用いられる。このような例として最も典型的なのは政治権力によるマスメディアへの介入とプロパガンダの流布であるが、その他にも様々な例が存在する。たとえば企業による広告は、メディアを介してターゲットとなる個人の価値観に訴えかけることにより、広告主である企業の意図に基づいて各個人を集団的に動員するための装置であると見なすことができる。このような状況において個人が“個”としての自律性を尊重しながら生きるためには、メディアからの情報に対する批判的な距離を保つことが重要となる。ここでは、個人がメディアを通して特定の価値観を内面化するプロセスを考察するとともに、メディアに接しつつも批判的な距離を保つことの可能性を議論する。	同　上	同　上
11	情報技術とルール	現在は、大量の情報を容易に収集・複製・転送ができるようになった。「見えないＩＴ(情報技術)」の回で述べたように、我々の現代社会システムには、情報技術、特にコンピュータとインターネットの影響を受けたものが多い。しかし、著作物や個人情報を扱う場合には、それをどのように収集するか、どのように複製できるか、誰に転送をして良いかというルールの形成が必要となる。これらのルールに反すると、過失の場合は事故、故意の場合は犯罪となるが、法的な制裁を受けることになる。ここでは、情報に関連する法令や取り決め・ルールなどについて述べ、その存在意義について議論を行なう。	辰己　丈夫	辰己　丈夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	個人情報と情報危機管理	情報社会の発展にとっては、前回に述べた法的な抑止のみならず、技術的な抑止、あるいは制度・教育・人事・財産的な抑止も重要である。例えば、情報社会においても、一般社会と同様に、何らかの意図を持ってルールを意図的に破ろうとする犯罪者が存在する。セキュリティ技術とは、このような犯罪を防ぐ技術のことである。また、障害を未然にできるだけ防ぐ方法、障害が起こったときの対応、障害が起こったときのための準備、障害が起こった後の見直しといった危機管理の考え方も大切である。ここでは、情報社会における危機管理の一般的な手法について議論を行なう。	同上	同上
13	情報システムとモデル化	情報化社会における重要な道具であるコンピュータを使いこなすためには、コンピュータに適したものの見方や理解の仕方を身につけておかなければならない。コンピュータはソフトウェアとして与えるモデル（模式）に従って計算する機械にすぎない。最も単純なモデルは数式であり、数式を計算する道具として"コンピュータ"(計算するもの)が開発された。しかし、計算の手順を書いた"プログラム"の存在によって、コンピュータで計算できるモデルは数式以外のものに拡張されることになった。ここでは、より高度なモデルとして状態機械モデル、及び、オブジェクトモデルを取り上げる。コンピュータに適したモデルとはどのような性質を持つものかを理解することで、コンピュータに複雑な計算をさせるにはどうしたらよいかを学ぶ。これを踏まえ、コンピュータでできる計算の可能性と限界について考察する。	大岩　元 中鉢　欣秀(ニューメリック社社長)	大岩　元 中鉢　欣秀(ニューメリック社社長)
14	現実世界と形式世界	現実世界にある様々な問題をコンピュータで解決しようとすると、現実をどのようにモデル化するべきなのかという問題が常に発生する。コンピュータの世界は、モデル化された現実を記述した論理の世界であり、これを形式世界と呼ぶことにしよう。これに対して人間は、論理だけでは説明できない非形式的なことを含む世界に生きている。このため人が現実世界でコンピュータを活用するには、非形式的な世界の中から形式化できる部分をモデルとして取り出す作業を行わなければならない。さらに、その作業の結果は、コンピュータを利用する社会全体にとって恩恵をもたらすようにすべきである。ソフトウェア工学における要求分析を例に挙げて、その難しさをどのようにして克服する方法があるかを、具体的な作業手順とともに示す。	大岩　元 中鉢　欣秀(ニューメリック社社長)	大岩　元 中鉢　欣秀(ニューメリック社社長)
15	これからの情報社会	情報技術は、当初は半導体技術の発展に支えられてきた。しかし、半導体の微細化が物理学的限界に近づきつつある現在、情報社会は複雑なソフトウェア、完成されたシステム、人と組織の深化、社会における情報技術の普及と地位向上を必要とするようになった。ところが、プログラム作成者、システム設計者、プロジェクト管理者、情報教育に携わる教員は世界中で不足していて、これが情報化の進展を妨げる最大の要因となっている。特に日本では、このことが深刻な問題になっている。 今後の情報化の進展は、我々の社会をどのように変えていくのか、そのために社会は何をする必要があるのかを、情報社会のあり方を見据えて議論する。	大岩　元 辰己　丈夫	大岩　元 辰己　丈夫

＝　光電子技術とIT社会（‘０４）＝（TV)

〔主任講師：　西原　　浩（放送大学教授）〕

全体のねらい

２１世紀にはIT（情報通信技術）社会化がますます進むと考えられ、そのIT社会を支える重要な技術の一つが光電子技術である。その光電子技術は、通常光およびレーザ光を応用した電子技術である。本授業では、光電子技術の特徴と基本性質、情報処理技術の基本であるディジタル技術をまず学び、それらに基礎をおいた光デバイスであるディジタルカメラ、ディスプレイ、光ディスクシステム、光ファイバ通信システム、インターネット、ネットワークなどのしくみについて理解を深める。　この分野は
日本人の貢献が大きいことも合わせて学んでいただきたい。そして、来るべきIT社会の姿について考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	IT社会進展の背景	IT社会は、超高速大容量情報処理技術をベースとする社会であることを認識する。そのような技術は高速コンピュータと大規模ネットワークに支えられるが、それらを支えている重要な技術にレーザを中心とする光電子技術がある。IT社会と光電子技術との関連を述べ、１５回の授業の流れを説明する。	西原　浩（放送大学教授）	西原　浩（放送大学教授）
2	通常の光とレーザ光	光電子技術の中心である光について、いくつかの重要な性質をまとめる。光には、通常の光および人為的に作られたレーザ光があり、通常光は目に優しいのでIT機器の表示装置などに使用され、レーザ光は信号処理・伝送に使用される。両者を比較し、IT社会への応用の違いを認識する。　また、光は電磁波の一つであることを認識することの重要性を説明する。	同　上	同　上
3	レーザ光とは	レーザは、１９６０年に発明されて以来、種々の波長のレーザが開発され、実用化されるようになった。レーザ発振の原理を説明し、光通信、光ディスクなどで活躍している半導体レーザのしくみを学ぶ。また、いま関心の高い青色レーザの話題にも触れる。　そして、日本が世界に誇る半導体レーザの研究功績を紹介する。	同　上	同　上
4	情報処理技術の基本	多くの情報はアナログ情報であるが、情報処理の基本であるディジタル化、およびその応用であるA/D変換の基礎となる概念について学ぶ。また、情報処理システムの構成を学び、通常光とレーザ光の役割への理解を深める。	同　上	同　上
5	情報伝送	情報を伝送するための、搬送波に情報を乗せる変調技術の基礎を学ぶ。大容量情報を伝送・蓄積するために、近年進歩した圧縮技術の基礎を学び、それらがどのようにコンピュータや通信に応用されているかを説明する。また、大容量情報伝送のための多重化技術についてもふれる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	情報入力端末機器	情報をコンピュータに入力するための端末機器として、印刷物用のスキャナ、物体のためのディジタルカメラなどについて、内蔵されている固体撮像素子であるCCDの動作原理、解像度、転送速度などについて、基礎的事項を学びながら、データの圧縮技術について理解を深める。	西原　浩	西原　浩
7	情報の記録・再生	直径１２ｃｍの円盤の中に、CDでは６５０MB、DVDの両面で8GBのメモリ容量がある。それらの書き込み・消去の原理を学ぶ。 光ディスクに秘められている多くの工夫について理解を深めるとともに、レンズによる集光限界の意味を学びたい。そして、電子技術と機械技術とが巧みに利用されていることを理解する。	同　上	同　上
8	光ディスクのいろいろ	光ディスクの発展は目覚しく、再生専用型、追記型、書換え型、相変化型、光磁気型がある。それらの記録方式や動作原理を学ぶ。また、記録容量を増大させた次世代ブルーレイディスクに使われているナノ技術への理解を深める。これらディスクのIT社会での活躍を認識することが重要である。	同　上	同　上
9	情報表示機器 ―IT機器の“顔”―	すべてのIT機器には出力表示のためのディスプレイが備わっている。CRTにつづき、フラットパネルディスプレイとして、液晶型、プラズマ型など、高分解能なものが開発され、IT装置を格段に進歩させた。それらの動作原理を学ぶ。	同　上	同　上
10	光ファイバ通信	現在の電話回線の多くは光ファイバ通信で構成されている。そのしくみを学び、基本素子である半導体レーザ、受光素子および光ファイバの原理について理解を深める。そして光ファイバ通信の初期から最先端の光信号を直接増幅し伝送する方式までの進歩の跡をたどり、それらのインパクトについて考える。	小林　功郎（東京工業大学教授）	小林　功郎（東京工業大学教授）
11	超高速・大容量光ファイバ通信技術	インターネットなどのブロードバンドアクセスの普及により、超高速大容量情報の通信が要求されるようになった。これに対応するために、時分割多重化技術、波長分割多重化技術が進展し、４０Gb/s の伝送速度や、１本の光ファイバあたり１００波長のシステムが実用化されつつある。それらの技術の進展を学ぶとともに、その先の全光処理技術への展開についても概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	IT社会の通信網	国内幹線系・国際光ファイバネットワーク、メトロネットワーク、アクセスネットワークについて構成とそれを支える光通信技術を述べる。また、アクセスネットワークについては、FTTH のみならず移動通信、CATV、ADSL など、各種の伝送媒体についても述べる。また、最後に将来通信網とこれらがIT社会に及ぼす影響について触れる。	小牧　省三（大阪大学教授）	小牧　省三（大阪大学教授）
13	インターネットの進展	ネットワークの集合体であるインターネットがどのようにでき上がっているのか、また、その上で動くさまざまなアプリケーション，WWW などはどのような仕掛けになっているのか、などを解説する。 さらに、なぜインターネットはかくも発展したのか、その秘密を技術面から解き明かす。	下條　真司（大阪大学教授）	下條　真司（大阪大学教授）
14	ネットワークと IT 社会	IT社会とインテーネットなどのネットワーク技術のかかわりを学ぶ。IT 社会を動かしている典型的システムの例として、大学におけるネットワークの実態、それを動かしている人々、社会における大規模なシステムの例など、海外のものも含めて紹介する。 また、ネットワークで重要なセキュリティの問題についても触れる。	同　上	同　上
15	IT社会の将来	１４回の授業を振り返りながら、２１世紀にますます進むであろうIT社会化、およびそれを支えている重要な光電子技術の存在を再認識してもらう。 海外においても日本の光電子技術は高く評価されている。光電子技術の発展に基礎をおくIT社会の将来について考えたい。	西原　浩	西原　浩 小牧　省三 下條　真司

＝ 計 算 力 学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師： 矢 川　 元 基（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

我々が、自然界や"もの"の挙動を知るには、実験と理論とよばれる２つの方法が使われている。
しかし、最近では、実験や理論の代りに計算機シミュレーションが用いられることが多くなった。計算力学とは、構造解析や流体解析など力学解析のための計算機シミュレーションのことである。計算力学は、人工物の設計や自然の解明には、いまや欠くことのできない手法となっている。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	計算力学とは(1)：計算力学の役割	人工物を設計し、製造する場合には、つくられるであろう"物"の挙動を事前に知っておく必要がある。計算力学は、そのためのシュミュレーション手法である。また、台風や地震など、自然に関する現象の多くについても計算力学によるシミュレーション手法が用いられている。ここでは、人工物にしろ自然界にしろ、計算力学が現在世の中でどのように用いられているかについて議論する。	矢川　元基（東京大学名誉教授）	矢川　元基（東京大学名誉教授）
2	計算力学とは(2)：手法の全体像	計算力学でカバーする領域は極めて広範である。この手法が、いかなる内容と範囲を有しているかについての全体的な議論をここではしてみよう。 さらに、第３回以後の各内容がどのような意味で計算力学を構成する要素となっているかについて考えよう。	同　上	同　上
3	差分法(1)：微分方程式の差分近似	工学上の実用的な問題を解くためには、コンピュータによる計算的手法が用いられる。もっともよく用いられる解法のひとつが差分法である。ここでは、テーラー展開の考え方に基づいて、本来は連続系である導関数や微分方程式を、とびとびに分割した問題に置き換えること（離散化）でコンピュータの中に表現するという、差分法の基本的な考え方を理解しよう。	同　上	同　上
4	差分法(2)：差分方程式による求解	微分方程式で記述された連続体の問題は、差分近似によって、空間的にとびとびに定義された未知変数に関する連立一次方程式に帰着される。まず、この連立一次方程式の求解法（ソルバー）を学び、次に実際にポアソン方程式を解いてみることで、差分法の精度や収束性について議論しよう。	同　上	同　上
5	有限要素法(1)：基本的な考え方（重み付き残差法）	有限要素法は，差分法のように基礎方程式をそのまま近似するのではなく，ある意味で「平均的に」基礎方程式を満足するような近似解を計算する，重み付き残差法という手法に基づいている。ここでは，実際にいくつかの古典的手法を用いて例題を解くことによって，重み付き残差法の考え方を理解しよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	有限要素法(2)：理論の流れ（1次元ポアソン方程式）	有限要素法の最初の例題として，1次元ポアソン方程式を取り上げる。基礎方程式から，重み付き残差法の考え方を用いて，有限要素法の定式化を行う。基礎方程式からの式の変形，要素の作り方，連立一次方程式の組み立てまで，理論の流れを理解しよう。	矢川　元基	矢川　元基
7	有限要素法(3)：多次元への拡張（2次元ポアソン方程式）	ポアソン方程式は，熱伝導問題や，電磁場解析など多くの工学問題の基礎式となっているが，実用上，最低でも2次元解析が必要である。ここでは，2次元ポアソン方程式の有限要素法定式化を取り上げ，多次元問題への拡張法を身に付けよう。	同　上	同　上
8	有限要素法(4)：構造解析への拡張（2次元弾性問題）	有限要素法の重要な応用分野として構造解析（応力解析）がある。弾性問題はその基本となる問題であり，すべての学習者が理解すべき問題である。2次元弾性問題の有限要素法定式化をとおして，いろいろな基礎式に対しても定式化が行えるような応用力を付けよう。	同　上	同　上
9	粒子的手法(1)：物体を粒子の集まりとしてとらえる	差分法や有限要素法など格子や要素を用いる手法（格子法）に対して、物体を粒子の集まりとしてとらえ、個々の粒子の挙動に注目する解法を粒子的手法と呼ぶ。粒子的手法にはさまざまな解法があるが、それらの分類を通じて、前提となるモデル化の考え方、計算手法として優れた点、などについて理解しよう。	同　上	同　上
10	粒子的手法(2)：分子動力学法とＳＰＨ	粒子的手法の具体例として、分子動力学法とＳＰＨを紹介する。分子動力学法では、物体を本質的に原子・分子の集まりとしてモデル化し、これら個々の粒子の運動をニュートンの運動方程式で記述する。一方、ＳＰＨでは、連続体をあたかも粒子の集まりであるかの如く扱えるよう離散化を工夫する。	同　上	同　上
11	ソフトコンピューティング(1)：計算力学と知識工学との融合	ニューラルネットワーク、ファジィ、遺伝的アルゴリズムは、それぞれ、脳細胞、思考過程、生物進化をモデル化したもので、ソフトコンピューティングあるいは知識工学的手法と称される。これらを有効に利用することで、逆問題や最適化における問題解決能力の拡大、効率化を図ることができることを理解しよう	奥田　洋司（東京大学助教授）	奥田　洋司（東京大学助教授）
12	ソフトコンピューティング(2)：ニューラルネットワークを利用した逆問題解法	まず、ニューラルネットワークがどのようなメカニズムで類推や連想処理を行っているのかを理解しよう。そして、工学上の実際の局面で遭遇するさまざまな逆問題を解くにあたって、従来の計算力学の枠組みを越えて、ニューラルネットワークのパターン認識能力をどのように役立てることができるかについて考えてみよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	大規模解析(1)：並列計算の基礎	近年の計算機の発達により，以前では考えられなかったような大規模な解析が行われるようになってきた。しかし，一つの計算機だけで計算を行う場合の処理能力は限界に近付いており，現在，大規模解析というのは，複数の計算機を用いた並列計算のことを意味している。ここでは，並列計算の基礎概念を理解したい。	関東　康祐(豊橋技術科学大学助教授)	関東　康祐(豊橋技術科学大学助教授)
14	大規模解析(2)：並列計算の実際	先端的な大規模解析は，優れたハードウェアとソフトウェア技術の結合により実現されている。ここでは，世界のトップレベルの研究を知ることによって，大規模解析の将来像を把握しよう。また，身近な大規模解析の例として，PC クラスタによる計算例も紹介する。	同　上	同　上
15	計算力学の将来の可能性と課題	計算力学はこれからもますます発展することが確実である。しかし、並列計算機などのように計算機の多様化が進んでおり利用する立場としてもそれに対する新たな対応が必要である。また、計算力学はこれまで以上に複雑な問題に応用されつづけるであろう。これらの観点に立って将来を展望してみよう。	矢川　元基	矢川　元基

＝　人工物と設計（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　中島　尚正（放送大学副学長）〕

全体のねらい

私たちが日常生活で目にする人工物は、車にしても情報機器にしても家電製品にしても、つくられた後の姿である。人工物は自然界には存在しないものであるから、これが私達の生活の場に登場するまでには、ものつくりの様々なプロセスを経るが、その最上流に位置するのが設計である。人工物の特性や性能は設計によってほぼ決められる。知的活動である設計は研究活動とは似て非なるもので、その過程は案外知られていないし、その本質についてまだよく分かっていないところもある。本科目は設計技術者の養成を目的としているのではなく、人工物で満たされた人工環境で諸々の活動するためのリテラシー教育として設計を取り上げている。身近な事例に基づいて設計の過程や仕組みについて様々な観点から説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	人工物の誕生と設計	講義の第１回目として、人工物と自然物の比較を通じて人工物と設計の全体像を概観し、人工物のライフサイクル、設計の歴史や社会依存性に触れ、併せて講義の進め方についてオリエンテーションをおこなう。	中島　尚正（放送大学副学長）	中島　尚正（放送大学副学長）
2	設計のプロセス	あるものをつくりたいと思う構想や企画の段階から、具体的なモノが形作られる段階に至るまでの設計における思考のプロセスについて、数学の問題を解く場合との相違点、シャーロックホームズの推理との類似点も交えて概説する。	同　上	同　上
3	形と機能	設計は仮想と現実の両方の世界を往き来する知的活動であるともいえる。人工物の働きや性能である「機能」が発現されるように人工物の「形」に工夫を凝らす。しかし、現実になった「形」からは予期しない「機能」が発現することがしばしば起こる。	同　上	同　上
4	品質の評価と保証	限られた情報と知識を活用して現実の設計は進められる。このような制約下で人工物の破壊や故障を避け、品質や納期が保証されるために、どのような方法が考えられてきたか紹介する。	同　上	同　上
5	人工物とデザイン（1）	意匠デザインは車に代表されるファッション性の高い人工物だけに求められるものではない。どのような人工物であっても、人と関係を保つための普遍的なインターフェースである。	山中　俊治（デザイナー、東京大学非常勤講師）	山中　俊治（デザイナー、東京大学非常勤講師）
6	人工物とデザイン（2）	製品企画事例に基づいて意匠デザイナーと設計技術者のコラボレーションとそのあり方について紹介し解説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	設計事例－建築設計	意匠デザインと工学設計が融合した建築設計について、建築家のインタビューを交えて紹介し解説する。	草加　浩平（東京大学大学院助教授）	草加　浩平（東京大学大学院助教授）
8	設計事例－自動車の設計	自動車の設計事例について、メーカーの設計者のインタビューを交えて紹介し解説する。	同　上	同　上
9	設計と情報技術（1）	CAD（Computer Aided Design）について解説。	村上　存（東京大学大学院助教授）	村上　存（東京大学大学院助教授）
10	設計と情報技術（2）	CAM（Computer Aided Manufacturing)について解説。	同　上	同　上
11	設計と情報技術（3）	CAE（Computer Aided Engineering）について解説。	同　上	同　上
12	設計事例－情報機器の設計	情報機器の設計事例について、メーカーの設計者のインタビューを交えて紹介し解説する。	草加　浩平	草加　浩平
13	設計事例－家電製品の設計	家電製品の設計事例について、メーカーの設計者のインタビューを交えて紹介し解説する。	同　上	同　上
14	設計事例－マイクロマシンの設計	ミクロの決死圏を工学的に再現しようとするマイクロマシンは、ミクロの世界で卓越する物理現象に直面する。私たちの常識が通用しなくなるミクロの世界における設計について解説する。	中島　尚正	中島　尚正
15	人工環境と設計	講義の最終回として、循環型社会の形成推進を重視した新たな設計の取り組みについてインタビューを交えて紹介するとともに、これまでのまとめと今後の展望をおこなう。	同　上	同　上

＝人間活動の環境影響（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　鈴木　基之（放送大学教授）〕
〔主任講師：　原科　幸彦（東京工業大学大学院教授）〕

全体のねらい

人間と環境の相互の調和を図り、持続的な人間活動のあり方を考えていくためには、種々の人間活動が自然環境にどう影響を与えどれがどのように将来の人間生存に影響してくるのかを評価する必要がある。この講義においては多様な人間活動が与える環境へのインパクトの評価がどのように行われているのか、今後の持続的社会を構築する上でどのような考え方が必要かを理解する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	人間活動の環境への影響	人間活動の環境影響を考える上での背景、その必要性、その難しさなどを概観し、本講義の全体の流れについて解説を行う。	鈴木　基之（放送大学教授）	鈴木　基之（放送大学教授）
2	生態系アセスメント	人間による自然改変の影響は大きなものから小規模のものまでいろいろな面で散見される。ここでは米国のカリフォルニアにおける地域住民の小河川の自然回復の試みの実際に即して、自然生態系と人間生活のかかわりについて考えてみよう。	鈴木　基之	鈴木　基之 /Takashi Asano
3	世界水アセスメント	人間活動の増大の影響を受け、世界的に限られた水資源は量の不足、質の劣化の一途をたどり、健全な生態系を維持する上でも問題が生じている。水は乾燥地帯においては勿論、人口密集地域においても貴重な資源になりつつあるがその状況をどのように把握し、評価し、問題解決に役立てようとしているのかを示す。	鈴木　基之	鈴木　基之 /Andeas Szollosi-Nagy（UNESCO）
4	化学物質の生態系への影響－水生態系の現状を中心に	多くの化学物質が環境中に排出され、そこに生息する生物に影響を与えている。直ぐに環境中で光や微生物により分解するものもあるが、長期間環境中に残留するものもある。我が国の水生態系の現状を示すと同時に、環境中に流出した化学物質が生物にどのような影響を与えているかを水生態系を構成する動植物を例に論ずる。	若林　明子（淑徳大学教授）	若林　明子（淑徳大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	化学物質の生態系への影響－化学物質の影響をどう評価・管理するか	個別の生物への影響は、その生物が構成している地域の生態系のバランスを崩し、時には不可逆的な生態系変化を与えることがある。生態系への化学物質の影響をどのように評価するか、どのように化学物質の影響を制御していくかを示す。	若林　明子	若林　明子
6	産業活動の環境影響－ライフサイクルアセスメント（ＬＣＡ）の考え方とその方法	「ライフサイクルアセスメントの考え方」工業製品を設計・製造するに当たりその原料調達の段階から廃棄の段階までの環境に与える影響を評価するという目的でライフサイクルアセスメント（LCA)という考え方が導入された。この諸段階における環境影響をどのように評価しているか一般的な手法と企業での実施例を示す。	稲葉　敦（産業技術総合研究所LCA 研究センター長）	稲葉　敦（産業技術総合研究所LCA 研究センター長）
7	産業活動の環境影響－ＬＣＡの企業での活用	現在の環境影響の評価に用いているライフサイクルインパクト解析は如何に未熟で不完全であるかを考察しながら、なおこの方法の有用性を各企業などの活動に生かされている実例を紹介しながら示していく。	稲葉　敦	稲葉　敦
8	産業活動の環境影響－ＬＣＡにおける環境影響の統合化手法	ライフサイクルインパクト解析がより進んでいくと、産業活動から人間が受けるベネフィットと環境インパクトのバランスを考えることが可能となるであろう？その際に種々の環境へのインパクトをどのように統合的にアセスすることが可能なのか、多様性、異質性を含み、時間軸が異なる環境影響をＬＣＡではどのように統合評価しているかを解説し、その限界について述べる。	稲葉　敦	稲葉　敦
9	諸事業の環境インパクト評価－環境影響とその緩和	土木事業など、大規模な土地利用改変に伴う環境影響が過去においてどのような問題を引き起こすことになったか、大都市を事例に考察する。問題解決には人間活動の管理という考えが必要で、持続可能な発展のための主要手段が環境アセスメントであることを環境政策の変遷もたどりながら考えて行く。	原科　幸彦（東京工業大学大学院教授）	原科　幸彦（東京工業大学大学院教授）
10	諸事業の環境インパクト評価－環境アセスメントにおける科学的手法－システム分析－	現在の「環境アセスメント」という行政手法には科学性と民主性が必須条件であるが、まず科学性を満たすための方法論的基礎として、システム分析があることを学ぶ。目的の定式化、現状分析、代替案作成、予測、評価、解釈という６段階のステップがアセスではどのように進むかを理解する。	原科　幸彦	原科　幸彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	諸事業の環境インパクト評価－環境アセスメントにおける住民参加	民主性はシステム析を社会に開かれたものとして行うために必要である。このプロセスに住民がどのように参加していくことになるのが望ましいのか。現状から将来への展望と住民の価値観を如何に科学的な分析と整合化できるか、環境影響を住民の個別の要求とどのように整合させて行くことが必要か。	原科　幸彦	原科　幸彦
12	諸事業の環境インパクト評価－環境アセスメントにおける代替案評価	環境影響の評価と事業自体が生むと考えられる利便の両者を如何にしてバランスさせるか。マクロな観点で行われる長期的なコスト・ベネフィット・リスクの評価と管理、ミクロな視点との整合性をどのように考えて行くことが必要かに関する考え方を示す。	原科　幸彦	原科　幸彦
13	諸事業の環境インパクト評価－戦略的アセスメント	事業よりも上位の計画や政策段階での環境配慮の手段として注目されている「戦略的環境アセスメント（SEA）」とは何か、世界の事例を紹介し、今後の方向、そこにおける「人間活動の環境影響の評価方法」のあるべき形を考察する。SEAは国際協力の分野でも重要になっている。	原科　幸彦	原科　幸彦
14	環境影響の地球的つながり	ハンバーガーコネクションを例にとり、我々の日常的な生活がどのように世界的な環境問題につながっているのかを示す。	鈴木　基之	鈴木　基之 /Norman Myers
15	アセスメントの概念・まとめ	現在、地球全体における資産としての生態系の具体的な評価を試みようとの国連機関を中心とした活動がある。この評価の具体的な目標とその成果について紹介を行う。持続的な人間・環境系を設計する上での環境評価の重要性を再確認し、統合的なアセスメントの方法として今後どのようなことが考えられるべきかを纏める。	鈴木　基之	鈴木　基之 /Zakri Hamid

＝ギリシャ哲学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　天野　正幸（東京大学教授）〕

全体のねらい

哲学（philosophy）の濫觴は古代ギリシャの「知恵の愛求」（philosophia）であるが、古代ギリシャにおいて「知恵の愛求」はどのように生まれ、成長したのか。それを解き明かし、哲学をその原点に立ち帰って理解するための手懸りを提供すること、それが本講義の全体のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ソクラテスの「知恵」（『ソクラテスの弁明』）	プラトンの『ソクラテスの弁明』を手懸りにして、哲学者ソクラテスにとって「知恵の愛求」としての哲学とは、あるいは彼が愛求した「知恵」とは、どのようなものであったかについて考察する。	天野　正幸（東京大学教授）	天野　正幸（東京大学教授）
2	ソクラテスのエレンコス（プラトン初期対話篇）	プラトンの初期対話篇を手懸りにして、ソクラテスがおこなった「知恵の愛求」の活動としてのエレンコス（論駁）とはどのような議論であったかを具体的に紹介し、ソクラテスの「知恵の愛求」について考察する。	同　上	同　上
3	プラトンは超越的イデア論者か	プラトンのイデア論は、彼の弟子のアリストテレス以来、「超越的イデア論」と一般に理解されているが、このような理解には問題があり、むしろ「仮説的イデア論」と理解すべきである、ということを明らかにする。	同　上	同　上
4	仮説的イデア論（『パイドーン』）	『パイドーン』において初めて一個の理論として提示された「仮説的イデア論」について、それはどのような理論であるかを紹介し、その内容について詳しく考察し、プラトンのイデア論の実体を明らかにする。	同　上	同　上
5	善のイデア（『国家』）	『パイドーン』において確立された仮説的イデア論は『国家』において善のイデアの導入によって発展させられたが、その『国家』における仮説的イデア論について、「太陽」・「線分」・「洞窟」の譬喩を手懸りにして考察する。	同　上	同　上
6	イデア論の再検討（『パルメニデス』）	『パルメニデス』においてプラトン自身がおこなったイデア論の批判的再検討を紹介し、『パイドーン』において確立された仮説的イデア論の問題点を明らかにするとともに、プラトン自身の解決の方向について考察する。	同　上	同　上
7	「エピステーメー」概念の再検討Ⅰ（『テアイテートス』）	『テアイテートス』においてプラトンがおこなった「エピステーメー」概念の徹底的な再検討を２回にわたって取り上げる。今回は、感覚はエピステーメーではないということを示す議論の意義について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「エピステーメー」概念の再検討Ⅱ（『テアイテートス』）	前回に続き、『テアイテートス』における「エピステーメー」概念の再検討を取り上げる。今回は、ドクサにある限定を加えたものがエピステーメーだという考え方を批判する議論を紹介し、その意義について考察する。	天野　正幸	天野　正幸
9	分割法（『ソフィステース』『ポリーティコス』）	『ソフィステース』において新たに導入された「分割法」を紹介し、この方法について考察する。また、「分割法」は『ポリーティコス』、『ピレーボス』においてどのように評価されるようになったかについても考察する。	同　上	同　上
10	イデアのコイノーニアー（『ソフィステース』）	『ソフィステース』において、虚偽の言明がいかにして成立し得るかを説明するために導入された「イデアのコイノーニアー（結合あるいは分有）」という考え方を紹介し、その意義について考察する。	同　上	同　上
11	アリストテレスにとっての「哲学」（『形而上学』）	『形而上学』第１巻第１・２章における「知恵」の規定および第４巻第１・２章における哲学の規定を手懸りにして、アリストテレスにとって「知恵の愛求」としての哲学とはどのような学であったかを考察する。	同　上	同　上
12	「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」（『形而上学』）	アリストテレスの存在論の根本前提である「ト・オン・レゲタイ・ポラコース」（「あるもの」は多義的である）というテーゼについて、『形而上学』第５・６・７巻を手懸りにして、その意味と意義を解説する。	同　上	同　上
13	本質をめぐる議論Ⅰ（『形而上学』）	アリストテレスの形而上学の精髄とも言うべき『形而上学』第７・８・９巻について、２回に分けて講義する。今回は、実体の存在の原因としてのウーシアーを取り上げ、ウーシアーの候補である基体と本質について解説する。	同　上	同　上
14	本質をめぐる議論Ⅱ（『形而上学』）	前回の続きとして、本質の定義をめぐるアリストテレスの議論を紹介し、「定義は質料への言及を含むか」、「定義の対象はいかにして単一であるか」、「本質（形相）は普遍か個物か」、という問題について考察する。	同　上	同　上
15	論証理論（『分析論後書』）	本講義の締めくくりとして、アリストテレスにとっての厳密な意味での「知（エピステーメー）」の概念とその獲得法としての「論証」について、『分析論後書』に基づいて解説する。	同　上	同　上

＝ドイツ観念論への招待（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　久保　陽一(駒澤大学教授)〕

全体のねらい

「ドイツ観念論」は通常 18～19 世紀ドイツにおけるフィヒテ、シェリング、ヘーゲルの哲学をさすが、本講では、彼らの基盤をなしたカントから出発し、カントの形而上学的モチーフがいかにフィヒテやヘーゲルなどにおいて継承展開されたかを見る。現代ではとかく形而上学は否認されがちだが、彼らの哲学は尚意義をもちえている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ドイツ観念論とその評価	ドイツ観念論とはいかなる哲学を指し、いかなる思想的特徴をもっているのかを確認した上で、ドイツ観念論に対するこれまでの様々な批判を検討し、ドイツ観念論の根拠づけ的思索は現代でもなお意義をもつことを明らかにする。	久保　陽一（駒澤大学教授）	久保　陽一（駒澤大学教授）
2	カントの存在論	カントは単に伝統的形而上学を「独断論」として否認しただけではない。まず彼がいかに認識論において「自然」の「客観的実在性」を意識の立場から基礎づけ、そういう仕方で新たに存在論を企てたかを見ることにしよう。	同　上	同　上
3	カントの存在論の検証	カントの存在論においては、因果的必然的な対象としての自然の客観的実在性は論証され、その意味で「科学的実在論」が正当化された。しかし偶然的な対象の客観的実在性は捉えられていない。しかし、或る種の二元論（人間と自然との連関）や関係の存在論という特性は注目される。	同　上	同　上
4	カントの自由論	カントの全形而上学の軸の一つに「自由の実在性」の理論がある。自由が客観的実在的だというのは、我々は道徳的に自律的であることを強いられることを意味する。このカントの自由の思想の意義（義務倫理）と問題点（普遍主義、形式主義、心情倫理など）を検討する。	同　上	同　上
5	カントの美の哲学	カントの理論哲学と実践哲学でひそかに前提されていた人間と自然との連関が美の哲学で主題化される。それは、我々が自然の美や崇高を経験することによって道徳的な自覚をもつように促されることや、天才の製作活動における自然の働きに認められる。	同　上	同　上
6	ヤコービのカント批判とスピノザ論	ヤコービは「物自体」概念をめぐってカント哲学の自己矛盾を指摘した。このヤコービのカント批判は多分に誤解に基づいていたが、カントの限界に触れるものでもあった。ヤコービは同時に「直接知」の立場をスピノザ哲学の解釈と批判を通して示したが、そのスピノザ論は大きな影響を与えることになった。	同　上	同　上
7	ラインホルトの根元哲学とシュルツェのラインホルト批判	ラインホルトはカント哲学を擁護しつつ、カントには欠けていた「根元」を与えることによってカント哲学を形式的に整えようとした。しかしシュルツェはただちにラインホルトの根元哲学の原理である「意識律」を批判した。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	フィヒテの知識学の成立	ドイツ観念論で決定的な役割を果たしたフィヒテ哲学の成立を取り上げる。フィヒテはラインホルトの企てを擁護しつつ、ラインホルトに対するシュルツェの批判の妥当性をも認めた。そこでラインホルトの「意識」の代わりに「自我」という原理でもって新たに形而上学（「学の学」すなわち「知識学」）を企てるようになった。	久保　陽一	久保　陽一
9	『全知識学の基礎』（1）	フィヒテの代表作であり、最初の知識学の体系の試みである『全知識学の基礎』（1794－95）を概説する。フィヒテの知識学は、自我の自己関係と自我と非我の関係という二つの関係の関係において成り立つ。まずそれらの関係を表す諸命題（原則）が立てられ、次に理論的自我の成立条件が自己遡及的に解明されていく。	同　上	同　上
10	『全知識学の基礎』（2）	理論的自我の根底に認められる「構想力」をもとに様々な認識能力が、「表象の演繹」において導出される。更に、実践的自我の在り方が分析され、「努力」にいきつく。そこから「諸衝動の体系」が導出される。最後にフィヒテのこれらの思想の成果と問題点を検討する。	同　上	同　上
11	シェリングにおける主観的観念論から客観的観念論への転換	フィヒテの知識学から出発したシェリングはやがて、「自然哲学」されに「同一哲学」において、フィヒテ的な主観的観念論から客観的観念論に転換した。この転換が何故生じたのか、それはいかなる意味をもっているのかを、青年シェリングの「世界の現実存在の根拠づけ」をめぐる思想形成をたどりながら、解明する。	同　上	同　上
12	ヘルダー、シラー、ヘルダーリンにおける歴史と美の哲学	シェリングのフィヒテ批判の背景には近代啓蒙主義に対する批判、理性よりも感情を重視するロマン主義的風潮があった。その中でヘルダーの歴史哲学と共にシラーの「美的自由」の思想が重要であり、そこでは自由と自然が総合されていた。ヘルダーリンも美的カント・プラントン主義をもとにシラーの思想を展開した。	同　上	同　上
13	ヘルダーリンとヘーゲルの合一哲学	ヘルダーリンは断片『判断と存在』（1795）で初めてフィヒテの「自我」を批判する合一哲学を説いたが、やがて美的な合一よりも、没落に重点を置くようになった。初期ヘーゲルは当初民族宗教の構想をもち、カント的であったが、やがてヘルダーリンの影響のもと宗教論を通じて人間と自然との対話的連関の洞察を獲得した。	同　上	同　上
14	ヘーゲルの哲学体系の形成（1）	ヘーゲルは1801年にこの根源的洞察をシェリングの同一哲学の枠組みのなかで展開し、最初の体系構想を示した。その際、彼はシェリングには欠けていた「論理学と形而上学」という部門を企てたが、それはブーターベックやバルディリなどによる当時の様々な論理学の形而上学的根拠づけの試みを背景にしていた。	同　上	同　上
15	ヘーゲルの哲学体系の形成（2）	ヘーゲルはかの根源的洞察を歴史と社会にも適用し、最初の精神哲学において、人間の様々な態度が共同体の内で真に存在する所以を明らかにした。この連関は同時に論理学と形而上学の連関と照応するが、その点が1804－05年の論理学と形而上学で明らかになる。そこにヘーゲル独自の関係の存在論と弁証法が認められる。	同　上	同　上

＝ヘーゲルを読む（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　高山　守(東京大学教授)〕

全体のねらい

ヘーゲル哲学は、多くの人々がそれを一級の哲学であると認めるにもかかわらず、哲学的に評価されることがほとんどないという、奇妙な哲学である。しかし、本当はヘーゲル哲学には評価されるべき豊かな哲学的内実が隠されている。これを明るみに出し、できるだけ平易にお話する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヘーゲル哲学をどう読むか。	ヘーゲル哲学というと、ほとんどもっぱら非難論難の対象となるばかりで、哲学的に評価されることがない。しかし実はそこには、哲学的な豊かな内容が隠されていると思われる。まずは総じてそれがいかなるものであるのかを、見通す。	高山　守（東京大学教授）	高山　守（東京大学教授）
2	若きヘーゲルの思想Ⅰ（ベルン期まで）	この豊かな内実の萌芽はすでに、いまだ必ずしも哲学が主題化されていない大学卒業直後の草稿にも見て取ることができる。これを瞥見する。ヘーゲル哲学は、しばしば言われるように、きわめて堅牢で、賢固な首尾一貫性を保持しているのである。	同　上	同　上
3	若きヘーゲルの思想Ⅱ（フランクフルト期）	ヘーゲル哲学のこの若き時代の萌芽は、ヘーゲルのいわゆるフランクフルト期において、なお宗教論という形態をとりつつ、徐々に明確な形態をとるに至る。このプロセスおよびそこに展開される哲学的思索の内実をたどる。	同　上	同　上
4	『差異論文』を読むⅠ	1801 年に執筆されたいわゆる『差異論文』は、いうならばヘーゲルの哲学宣言である。ヘーゲルは、これまでの思索の蓄積を踏まえ、「いまこそ哲学」という哲学宣言を行い展開する。ここに蔵されたヘーゲル哲学の内実看取のための多くの示唆を読み取る。	同　上	同　上
5	『差異論文』を読むⅡ	引き続き『差異論文』により、ヘーゲル哲学の基本性格を明確にする。この著作は、後に展開されるヘーゲル哲学の形式（方法論）および内容を、非常に正確に素描している。これに立ち入るとともに、いわゆるヘーゲルの「弁証法」（矛盾の論理）に言及する。	同　上	同　上
6	『信仰と知』を読む	『差異論文』と同時期、これに続いて、『信仰と知』が執筆される。これを繙き、ヘーゲル哲学とカント哲学との関係を一瞥する。これによって、ヘーゲル哲学の基本性格とその一貫性がさらに明瞭となりうる。	同　上	同　上
7	「イェーナ実在哲学」を読む	ここでまずは、これまでの論議を踏まえ、ヘーゲル哲学を読み解く鍵となる概念が、「絶対無」であることを見て取る。この概念は、いわゆる「イェーナ実在哲学」において、特有の精神的境地として論じられ展開されるが、引き続き、その境地論に立ち入る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	『イェーナ形而上学』を読む	精神的境地論から、再び理論哲学へと立ち返り、イェーナ期の「形而上学」をたどる。この時期のヘーゲルにおいて「形而上学」とは、「絶対存在」の哲学と見なされがちなのだが、実はそれも「絶対無」の展開にほかならないことを確認する。	高山　守	高山　守
9	『精神現象学』を読むⅠ	ヘーゲルの主著のひとつ『精神現象学』を取り上げ、この著作にも、基本的に「絶対無」の思想が貫かれていることを見る。また同時にこの著作により、ヘーゲル哲学の「体系」なるものが、そもそもいかなる意味をもっていたのかを、たどる。	同　上	同　上
10	『精神現象学』を読むⅡ	『精神現象学』本文冒頭のいわゆる「意識」章を取り上げる。「感性的確信」、「知覚」、「悟性」と、論述を順次たどることにより、「絶対無」の思想が、どのように具体的に説かれるのかを、見る。	同　上	同　上
11	『精神現象学』を読むⅢ	『精神現象学』第五章「理性」章・第二節を取り上げ、ヘーゲルが、行為論的な見地から自らの哲学をいかに論じるかを見る。ここにおいてもその論議の核心は、特有の「無」――「運命」、「必然性」、「世の流れ」――なのである。	同　上	同　上
12	『精神現象学』から『論理学』へ	『精神現象学』の最終章「絶対知」と、ヘーゲルのもう一つの主著『論理学』冒頭のいわゆる有－無－成の弁証法とを取り上げる。「絶対知」とは、まさに「絶対無」の知であるが、そこにおいて、『論理学』が、したがって、有－無－成の弁証法が、展開される基盤が獲得されるのである。	同　上	同　上
13	『論理学』を読むⅠ	第二部「本質論」冒頭の「仮象」に論及する。「本質論」においては、「根拠」、「因果性」、「必然性」等の最重要カテゴリーが主題化されるが、これら諸カテゴリーの基本構造――いわば「無」の構造――が「仮象」論で呈示される。「反省」論にも若干立ち入る。	同　上	同　上
14	『論理学』を読むⅡ	引き続き第二部「本質論」における「現実性」論を取り上げる。ここにおいて、「可能性」、「現実性」、「必然性」、「偶然性」という、いわゆる様相のカテゴリーが詳論される。ここでの眼目は、「絶対的必然性」とは、実は「偶然性」にほかならない、という重要な論点である。これに立ち入る。	同　上	同　上
15	『論理学』を読むⅢ	第三部「概念論」冒頭の「概念一般」を主題化する。「普遍性」（「概念」）とは、「特殊性」および、「個別性」とは区別されつつも、これらと一体であるという。こうした「概念」とは実はかの特有の「無」の再論であることを見る。最後に、総じてヘーゲルの「無」の思想が、日本思想と密接に関連していることに触れつつ、ヘーゲル論を締めくくる。	同　上	同　上

＝現象学の基礎（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　千田　義光　（國學院大學文学部教授）　〕

全体のねらい

現象学は20世紀以来の哲学内外の思想を広くかつ深く規定する包括的な運動である。広義での現象学という名称はゆるやかな意味で用いられ，そのため影響力をもつわりにはその理解は困難である。本講義では，この運動の基礎となる思索を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現象学の拡がり	今日の現象学は20世紀初頭にフッサールによって創始された思想を源とする。その後，それはさまざまな分枝を繰り返し多くの分野に影響を与えたながら展開された。この章ではこれらの流れを概観して現象学運動全体の大まかな見取り図を画く。	千田　義光（國學院大學教授）	千田　義光（國學院大學教授）
2	現象学の理念	創始者が厳格な方法論に基づいて自説を展開したこともあって，現象学運動はたえず前説を継承しては徹底的な批判の上に展開されていった。そのように現象学を駆り立てる理念が何であったのかを考え合わせて，「自己の現象学」を考える手引きとしたい。	同　上	同　上
3	経験・生と知	出発点は，われわれ自身の経験や生を伝統・権威・慣習・先入見・誤謬・不注意などに囚われず，そのまま見て捉えることにある。「事象そのものへ」は現象学を特徴づけるモットーであるが，この自明で簡単なことと思われることがどのような意味をもつかを考える。	同　上	同　上
4	意味と実在	眼の前に実際にある物も，それだけでは単なる「物の塊」であろう。それがその特徴，性質，他との関連性の点で明らかとなり，どのような意味をもつかが知られたとき，初めて判ったこととなる。現象学が追究するのは，これらのことを意味として解明することだ。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	知と実践	現象学的知は，とりわけ創始者において西洋哲学の伝統に従って学問であることが強調された。「知る」ことは精神の活動で最も基本的であるが，その２典型が日常の実際的実践的な知と学問（科学）知であろう。知の全体的活動のなかで両者のもつ意義を考える。	千田　義光	千田　義光
6	方法論としての還元と解釈	フッサール現象学を特徴づけるのは，還元という独特の方法である。他方ハイデガーは現象学と解釈学を結びつけることで現象学を大きく転換させた。これらの方法がどのようなものであり，それによってどのような問題領域があらわれるのであろうか。	同　上	同　上
7	主観性と超越論性	デカルト以来の西洋哲学は人間の存在を主観・主体として捉えた。さらにカントによって超越論性という概念が導入された。フッサールは自己の哲学を「超越論的主観性の哲学」と解したが，現象学運動は主観性概念の批判と克服に向けての試みでもあった。	同　上	同　上
8	人間存在と時間性	時間と空間は，あらゆるものの存在がそこに位置づけられるべき枠組みである。しかし現象学的思考においては，とりわけ人間存在の時間的性格が直視され，さらにその歴史的特徴がとりだされた。どのような意味で人間の存在が時間的歴史的であるのか。	同　上	同　上
9	世界論	「世界」概念は，西洋において古代ギリシア以来何らかの意味において存在するものの総体として当然視されてきた。今日，そのような意味での自明な「世界」という考え方は揺らいでいる。「世界」という意味を改めて問う試みが現象学の「世界」論である。	同　上	同　上
10	生活世界論	一般に今日最も客観的と考えられるのは自然科学知であろう。「生活世界」という考えは，客観的科学知の基礎にあって，それからは看過され忘却された「相対的主観的な経験」のもつ意義を考察し，現代の科学批判の一焦点となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	身体性の意味	ニーチェが言う「大きな理性」としての身体のもつ意義は，これまで西洋哲学において見て捉えられることがなかった。現象学は人間の存在，人間の精神がいかにまた身体的なものであるかを明らかにして，身体的に生きられた経験の生き生きとした姿を解明する。	千田　義光	千田　義光
12	他者・相互主観性の意味	他者・他なるものの存在は，一方においては私と同様なものでありながら，他方においては私とはあくまでも異なる存在・私には同化されえない存在でもあるという逆説をもつ。他なるものの存在に曝されている今日，他者性を問題として提起し考える。	同　上	同　上
13	倫理的なものの現象学	現象学は先ず理論的に知の基礎づけの問題と関わってきた。しかし，フッサールの理性への信頼やハイデガーの実存概念にみられるように，もう一方では倫理的な実践との関わりを強くもっていた。倫理的なものをめぐる現象学の諸思想をみる。	同　上	同　上
14	歴史性・社会性の現象学	個の存在を問題とすることから出発した現象学は，他のどのような存在以上に時間的な存在である人間存在を時間性と関連づけてその存在の深層から明らかにしてきた。そこから展開してさらに歴史性・社会性をどのように問題提起するのか。	同　上	同　上
15	現象学的思考のもつ意義	今日，現象学的思考をはたしてどのような意義をもつのであろうか。それは２０世紀の代表的思想としてある歴史的意義をもつとしても，それ以上の生きた思想としての生命力をもつのであろうか。	同　上	同　上

＝自己を見つめる（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　渡邊　二郎 (放送大学名誉教授)〕

全体のねらい

人生の現実のなかに立って生きる自己自身を見つめてみたい。公共的な学問の世界では扱ってくれないが、しかし私たちが実際にこの世の中を生きていくときに深く実感する人生論的な諸問題を取り上げてみたい。哲学的な人間論のひとつの試みを行うのが狙いである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経験	人生の現実は、経験してみなければ分からない。ひとは、それぞれ、さまざまな人生経験をして生きる。経験するとは、いったい、どういうことなのであろうか。	渡邊　二郎（放送大学名誉教授）	渡邊　二郎（放送大学名誉教授）
2	時間	経験の蓄積は、時間のなかで行われる。起こった出来事を経験し、それを苦い思いとともに、記憶する。しかし、次に来るべき新しい未来に期待をつなぐ。こうした時間の流れのなかで人生を生きる。	同　上	同　上
3	境遇	そのとき、それぞれの人は、異なった境遇と環境のなかを生きる。生まれ育った境遇、それぞれのかけがえのない人生、それらはみな、変えようのない宿命を帯びた状況のなかにある。そのなかで、人生の営為は行われる。	同　上	同　上
4	遍歴	ひとは、みな、そうした境遇のなかで、それぞれなりの人生遍歴をする。そのなかで、ひとは磨かれ、また変貌する。長い旅路と遍歴のなかで、来し方と行く末を思うことが、生きることの実態をなす。	同　上	同　上
5	自己	そのようにして生きているのが、かけがえのない自己である。自己自身を見つめ、引き受け、そのなかで人生の充実を図ることが、生きるということである。	同　上	同　上
6	生き甲斐	ひとはみな、生き甲斐を求める。それなりに、生きる目標、役割、意味を見定めなくては、人生設計は成り立たない。しかし、たんに目的を設定しただけでは、生き甲斐は達成されない。ほんとうに生きた甲斐のあった人生が大切。	同　上	同　上
7	仕事	そのためには、仕事をしなければならない。人生は、仕事に尽きるとも言える。仕事と課題、任務と役割を果たすこと、これが、それぞれの持ち場での大切な使命となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	孤独	人生の途上で襲ってくる最も痛切な実感は、孤独ということであろう。むろん、誰もが共同社会のなかで生きている以上、まったくのひとりということはありえない。そうではなく、そうした共同存在のなかでの孤独の実感が人生の真実であろう。	渡邊　二郎	渡邊　二郎
9	愛	ひとは、愛を求める。愛する人を大切にしたい。また、みずからも愛の交わりを求めている。これが、人間の真実であろう。愛と人生は切り離しがたいものである。	同　上	同　上
10	他者	他者こそは、人生の謎である。不可解な、捉えがたい他者とともに、この人生を送らなければならないことほど、人を苦しめるものはない。自己と他者の問題こそは、人生の最大の難問である。	同　上	同　上
11	世間	世の中の動きは、見通しえないものをもつ。不特定の世間一般の動向が、個人の生き方を左右する力をもつようになった。日本では特に、世間や世の中の動きに注意し、それに順応して生きることが求められる。大勢順応と事大主義が、人生の前景をなす。	同　上	同　上
12	運命	ひとは、長い人生行路を生きるとき、やむをえない運命、変えることのできない宿命、そうした限界のある、非力な自分を自覚する。自己の人生の意識は、自己の運命の意識でもある。運命意識が、自己の根底に伏在する。	同　上	同　上
13	不幸	ひとが、人生の過程のなかで発する問いは、結局、自らの不運と不幸の宿命についての疑問であろう。ひとは、幸福と、幸多き人生、この世の至福を希求する。しかし、それは何を意味するのであろうか。	同　上	同　上
14	老い	人生の宿命は、老いの宿命でもある。年輪を加え、老成し、年老いてゆくのが、人間の宿命である。もはや、繰り返せぬ一回きりの人生は、こうして、成熟し、円熟し、やがて枯れてゆく運命を免れがたい。	同　上	同　上
15	死	老いの果てに見えるものは、死である。むろん、若い人も、突然、病に襲われて死ぬことがある。事故死もある。しかし、一般には老いとともに死が訪れる。この死によって人生は終わる。死こそは、人生の重大事件である。	同　上	同　上

＝　科学の哲学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：野家啓一（東北大学大学院教授）〕

全体のねらい

近代科学の成立は 16～17 世紀の「科学革命」にさかのぼる。まず科学的自然観や科学的方法がどのようにして形成されたのかを歴史的に振り返り、次に現代の代表的な科学論を哲学的視点から検討し、最後に科学と社会の関係を倫理的側面から考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	序論：「科学」という言葉	「サイエンス」という言葉の語源をたずね、その訳語である「科学」という日本語の成り立ちを考えながら、科学とはどのような知的活動であるのかを明らかにする。あわせて、講義全体の見取り図を提示する。	野家　啓一（東北大学大学院教授）	野家　啓一（東北大学大学院教授）
2	アリストテレス的自然観	科学革命以前の 2000 年間、ヨーロッパ人の物の見方を支配してきたのはアリストテレス的自然観であった。天と地の区別、地球中心説（天動説）、四元素説、目的論的説明などから成るその全体像を明らかにする。	同　上	同　上
3	科学革命（Ⅰ）：コスモスの崩壊	科学革命はコペルニクスによる太陽中心説（地動説）の提唱によって幕を開けた。それはギリシア的な「コスモス」の概念を崩壊させ、近代的な自然観の礎となった。そのプロセスを「コスモロジーの転換」という観点から振り返る。	同　上	同　上
4	科学革命（Ⅱ）：自然の数学化	近代科学の成功は、ガリレオによる「自然の数学化」に負うところが大きい。すなわち、「質」から「量」への視座の転換と数学的方法の導入である。ガリレオからニュートンに至る近代力学の形成過程をたどり、同時に「自然の数学化」の功罪について考える。	同　上	同　上
5	科学革命（Ⅲ）：機械論的自然観	科学革命の到達点は、物活論的世界観が否定され、宇宙を巨大な機械と見なす「機械論的自然観」が成立したことである。その背景にあるデカルトの「物心分離」の思想と、それが生み出した「心身問題」について考察する。	同　上	同　上
6	科学の方法	「演繹」と「帰納」のメリットとデメリットを考えながら、近代科学の方法的基盤である「仮説演繹法」の構造を明らかにする。あわせて、パースが提唱した「アブダクション（仮説形成）」の方法および「発見の論理」に触れる。	同　上	同　上
7	科学の制度化	19 世紀半ばに生じた「第二次科学革命」は科学の制度化をもたらした。具体的には高等教育機関による科学教育、学会の創設、企業内研究所の設立などである。社会システムの一部となって機能し始めた科学のあり方を考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	科学の危機	ニュートン力学をモデルに発展を続けてきた近代科学は19世紀末から20世紀初頭にかけて、数学における非ユークリッド幾何学の成立と集合論のパラドックスの発見、物理学における相対論と量子論の出現によって大きな転換期を迎える。これら「科学の危機」の内実とその克服について考察する。	野家　啓一	野家　啓一
9	論理実証主義と統一科学	狭義の科学哲学はウィーン学団による「論理実証主義」の提唱に始まる。彼らは「検証」の概念を基盤に科学の論理的基礎を確実なものとし、自然科学と社会科学を方法的に統一することを試みた。そのラディカルな構想が胚胎し、やがて挫折に至るまでをたどり直す。	同　上	同　上
10	批判的合理主義と反証可能性	ポパーは論理実証主義の「検証主義」を批判し、それに「反証主義」を対置した。科学と非科学の区別を「反証可能性」の有無に求め、「進化論的認識論」を提唱する彼の科学哲学の要点を説明し、その意義について考察する。	同　上	同　上
11	知識の全体論と決定実験	クワインは論理実証主義の基本前提をドグマと断じ、検証や反証の単位を個々の命題ではなく「科学の全体」とする全体論（ホーリズム）を提起した。特に「決定実験の不可能性」に焦点を合わせ、さらにプラグマティズムとの関係に触れる。	同　上	同　上
12	パラダイム論と通約不可能性	クーンは、これまでの「科学は連続的に進歩する」という科学観に対し、「科学理論はパラダイム交代を通じて断続的に転換する」と主張した。クーンのパラダイム論が与えた衝撃を明らかにし、それが引き起こしたパラダイム論争の経過を振り返る。	同　上	同　上
13	科学社会学の展開	クーンの問題提起を契機として、80年代以降の科学論は社会学的分析へと大きく傾斜する。科学技術社会論（STS）など主な潮流を概観するとともに、90年代に勃発した科学者と科学論者の間の「サイエンス・ウォーズ」の意味について考える。	同　上	同　上
14	科学の変貌と科学技術革命	科学論において科学社会学の隆盛をもたらした理由として、科学自体が20世紀後半に「アカデミズム科学」から「産業化科学」へと大きく変貌したことが挙げられる。それを二度の科学革命に続く「科学技術革命」として捉え直し、その社会的背景を探ることを試みる。	同　上	同　上
15	科学技術の倫理	現代の科学技術は、人間社会のそれまでの合意をはるかに超える速度で発展しており、その結果、生命倫理や環境倫理に関わるさまざまな問題を引き起こしている。科学技術というモンスターと人間とが「共生」しうる倫理的ルール作りについて考える。	同　上	同　上

＝朱子学と陽明学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　小島　　毅（東京大学大学院助教授）〕

全体のねらい

中国に生まれた儒教は、日本を含む東アジア各地の政治文化の枠組みとして機能してきた。なかでも、宋代に誕生した朱子学と明代に誕生した陽明学の二つの流派は、江戸時代以降の日本に多大な影響を及ぼしている。それぞれの思想内容を概観し、その歴史的意義・現代的意義について考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	朱子学・陽明学とは何か	現在、日本において朱子学と陽明学とがどのように理解・表象されているかを概観する。そして、その背景をなしている、明治時代以来の学術編制がかかえる問題点を指摘して、この講義の立場と目的を明らかにする。	小島　毅（東京大学大学院助教授）	小島　毅（東京大学大学院助教授）
2	士大夫の時代	朱子学・陽明学を支えたのは、士大夫と呼ばれる階層に属する人々だった。彼らは科挙制度を通じて中国の政治文化をにない、為政者として人民に臨んでいた。その中から新しい思潮が生み出された経緯を述べ、朱子学・陽明学の時代精神を明らかにする。	同　上	同　上
3	朱子と王陽明の生涯	朱熹（朱子、1130-1200）と王守仁（陽明、1476-1528）、この二人の開祖はどのような時代背景と家庭環境のもとで思想形成をしていったのか。彼らの生涯を紹介し、それぞれの問題意識を明らかにする。	同　上	同　上
4	中国における展開	朱熹の死後数十年にして朱子学は皇帝支配を支える体制教学となり、王守仁のあとを受け陽明学は大きな社会運動として拡がっていく。彼らの後継者たちの活躍と、それにともなう思想の変容を明らかにする。	同　上	同　上
5	日本における受容	中国から朱子学が伝わったのは鎌倉時代だったが、社会に浸透したのは江戸時代になってからであり、そのころ陽明学も知られるようになった。近代になってからその系譜があらためて整理される過程を述べ、それがはらむ問題を明らかにする。	同　上	同　上
6	性即理と心即理	朱子学と陽明学の相違を示す標語としてしばしば使われる性即理と心即理。しかし、これらの用法には、それぞれの学知の差異を反映する、質的な齟齬がひそんでいる。その所以と意味を明らかにする。	同　上	同　上
7	格物と親民	『大学』は朱子学がとりわけ重視した経典であり、陽明学もそれを継承したが、両者の相違点は格物と親民（新民）との解釈にある。その解釈の相違が何に由来しており、そのことがどういう意味を持つのかを明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	理と人欲	人には天から与えられた理が生まれつきそなわっている、しかしながら気に由来する人欲が理をおおってしまっているというのが、朱子学・陽明学に共通する人間観であった。その所説の論理構造と社会的効果を明らかにする。	小島　毅	小島　毅
9	礼教と風俗	朱子学・陽明学は個々人の生き方を規定するだけでなく、それにもとづいた政治秩序を説いているところに存在意義があった。現実をふまえてそれぞれが説く社会構想を明らかにする。	同　上	同　上
10	理と気	朱子学は理と気からなる宇宙論を説き、その基礎のうえに立って社会論・人間論を体系化した。ところが、陽明学では宇宙論は主要な関心事ではない。その相違が何に由来するかを論じ、両者の思想史的位相の差を明らかにする。	同　上	同　上
11	思想史における唐宋変革	中国史上の動乱期とされる唐末五代には、社会変革とともに人々の意識にも大きな変化が見られた。その変化が朱子学誕生の契機になった具体的経緯を明らかにする。	同　上	同　上
12	儒仏道三教の関連	朱子学・陽明学には、仏教・道教の影響が大きく看取される。儒教とこれら二つの宗教との歴史的関係をたどり、東アジアにおける宗教と道徳の問題を明らかにする。	同　上	同　上
13	経学史のなかで	清代になってから、性善説と気質変化論によって立つ朱子学・陽明学に対する批判的な思潮が強まる。彼らは実証的な経典読解を旨としていた。この思潮の思想史的意義を明らかにする。	同　上	同　上
14	東アジアにおける近世	ヨーロッパやイスラームの文化圏などと比較した場合、朱子学・陽明学はどのような位置づけを得るであろうか？　その時代をあえて近世と呼ぶことによって見えてくる、全人類的な文明史的課題を考察してみる。	同　上	同　上
15	朱子学・陽明学の未来	朱子学・陽明学は、すでに過去の遺物となりおわったのか？現代社会においてその再生をめざす思想動向を紹介し、人類がかかえる将来的課題に応えうるかを考察してみる。	同　上	同　上

＝　仏教の思想（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　木村　清孝（国際仏教学大学院大学教授）〕

全体のねらい

約２５００年に及ぶ歴史の中で、仏教は、思想的・文化的に多様化しながら、アジア地域を中心に世界各地に広まり、現在に至っている。本講では、その仏教の思想的変容のすがたとそれがもつ意味を明らかにしていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	仏教の成立	仏教は、約２５００年前に、北インド（現在のネパール）の釈迦族の王子として生まれたゴータマ・シッダッタがブッダ（悟った人）となって開いた教えである。ここでまず、そのブッダ出現の背景、ブッダの生涯、ブッダの立場、その教えの特徴などについて学ぼう。	木村清孝（国際仏教学大学院大学教授）	木村清孝（国際仏教学大学院大学教授）
2	部派仏教の展開	ブッダの死後１００年ないし２００年後のアショーカ王の時代に、仏教教団は大きく二派に分かれた。以後、さらに両派ともに細分化していったが、それらの諸部派ではそれぞれ独自にブッダの教えの究明が行われ、その中で多くの思想的成果が生み出された。ここでは、それらの諸点を明らかにしよう。	同　上	同　上
3	仏教の革新―大乗仏教―	ブッダの時代から３００～４００年を経た西暦紀元前後になると、「智慧」と「利他」を最大の眼目とする新しい仏教運動が起こってきた。大乗仏教である。ここでは、初期大乗仏典のいくつかを取り上げ、実際にその一部を読みながら大乗仏教の特徴を学んでいこう。	同　上	同　上
4	中観派とその思想	大乗仏教の発展に伴って、その哲学的な考察も次第に深まっていった。ここでは、大乗の「空」の思想の理論的基盤を築いたナーガールジュナ（龍樹）とその継承者たちの思想的営為や「空」の意味について考えよう。	同　上	同　上
5	瑜伽行派の形成と展開	「空」の思想は、知と存在の本質をあらわにしたが、現実の世界がなぜ成り立つのか、修行にはどういう意味があるのかといった問題に充分に答えることはできなかった。これらの点を解明し、世界を意識の所産とみなすのが瑜伽行派である。ここでは、この派の形成・展開とその思想の特徴を学ぼう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	大乗から密教へ	大乗仏教はやがて、凡夫と仏との一体性を強調する如来蔵思想を生み出した。さらにこのことが媒介となって、インド固有の思想・信仰と融合した、新大乗仏教ともいえる密教が誕生した。ここでは、この動きの背景と経緯を検討するとともに、密教の諸性格について考察しよう。	木村　清孝	木村　清孝
7	テーラヴァーダ仏教の伝統	かつてアショーカ王の頃に分裂した仏教教団のうちの保守派をテーラヴァーダ（上座部）という。この流れは、スリランカ・タイなどに伝わり、今もおおむねその伝統を維持している。ここでは、その伝統を概観するとともに、現代という時代にそれがもつ意義についても学んでいこう。	同　上	同　上
8	仏教東漸―中国仏教の形成―	仏教は、いわゆるシルクロードを通って西暦紀元前1世紀頃から中国に伝わっていたが、仏典の漢訳・紹介を伴って本格的に伝来するようになったのは、2世紀の後半からである。ここでは、仏教東漸の実際と、それに根ざして中国仏教が独特の性格を持ち始める状況について考えよう。	同　上	同　上
9	「新仏教」の展開	隋・唐代に至って中国仏教は、社会的には天台宗・華厳宗・禅宗などの学派・宗派に分立しつつ、総じて「新仏教」と呼ぶことができる一大勢力を形成するが、やがて諸宗融合、三教合一へと方向を逆転する。ここでの主題は、その間に生み出された思想的・文化的諸成果の分析・検討である。	同　上	同　上
10	韓国の仏教	韓半島（朝鮮半島）には4世紀の後半から仏教が伝わり始め、次第に独自の仏教を育て上げ、今日に至っている。とくに古代の日本仏教は、韓国仏教に負うところが大きい。ここでは、その韓国仏教を概観し、インド仏教などと比較しながら、それがもつ思想的特徴について学ぼう。	同　上	同　上
11	日本仏教の濫觴	日本に初めて仏教が伝来したのは、記録の上では6世紀の前半である。しかし、それから約半世紀、聖徳太子が現れるに及んで、仏教は政治の上でも大きな意味をもつものとなった。ここでは、聖徳太子と仏教との関わりを中心に、奈良時代までの日本仏教のすがたを明らかにしていこう。	同　上	同　上
12	平安仏教の形成と展開	平安時代に入ると、仏教界にもさまざまな新しい動きが生まれた。中でも、最澄・空海による天台・真言両宗の移入と定立は、大きな意味をもつ。また、中―後期に至り、無常感の深まりとともに浄土教が興隆してくることも重要である。ここでは、この平安仏教の動きについて考察しよう。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	「鎌倉新仏教」の出現	貴族社会から武家社会への変化に伴って、鎌倉時代には民衆の救済を眼目とする新しい仏教諸派が現れた。それらを総称して「鎌倉新仏教」という。他方、伝統仏教界にも革新の運動が芽吹いた。ここでは、いわゆる「鎌倉新仏教」とその周辺の諸問題を明らかにしよう。	木村　清孝	木村　清孝
14	近世・近代の日本仏教	近世から近代にかけて、仏教は極度に民衆化・世俗化が進み、本来の精神を失っていく。江戸時代には、檀家制度などによって全体として幕藩体制に組み込まれ、明治維新後には神仏分離令の洗礼も受けた。ここでは、現代の日本仏教のあり方を準備したともいえる時代の仏教を検証していこう。	同　上	同　上
15	仏教の現在と未来	現在、仏教は世界に広まり、その諸教団の国際活動もかなり盛んである。ユダヤ教・キリスト教とイスラム教との激しい対立の中で、仏教に期待する声も少なくない。ここでは締めくくりとして、現代の仏教を総括するとともに、仏教思想がもつ可能性を展望しよう。	同　上	同　上

＝自然と文化の記号論（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　池上 嘉彦 (昭和女子大学教授)〕

全体のねらい

私達の回りのさまざまなものの多くは、何らかの意味を持つものとして私達に関わってきます。つまり、私達は<記号>（何かを意味するもの）に満ち満ちた世界に住んでるわけで、このことは生命体一般とその環境世界にまで拡げて言えることです。人間の文化から自然の世界にかけてのさまざまな営みを記号現象として横断的に捉えてみる――現代の記号論の視点と可能性について考えてみます。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	〈ことば〉と〈ことばらしいもの〉	<記号>という用語から、どのようなものを思いつきますか。<記号論>でいう<記号>は、私たちが日常<記号>ということで思いつくより、遥かに柔軟な概念です。そのことを理解するために、<ことば>から出発して、私たちの回りに厳密な意味での<ことば>ではないけれども、<ことばらしいもの>がいかに満ち満ちているかを考える。	池上　嘉彦（昭和女子大学教授）	池上　嘉彦（昭和女子大学教授）
2	〈ことば〉の再認識	広く<ことばらしいもの>について考える際、<ことば>はその出発点となる理論的枠組を提供してくれる。<ことばらしいもの>の範囲を拡げていくにつれて、<ことば>のどういう特徴が薄れ、またどういう特徴が加ってくるか―<ことばらしいもの>がどこまで<ことば>らしいかを考える。	同　上	同　上
3	〈意味〉の意味	既に説明の中で何度も出てきた〈意味〉とは、一体どのようなものと考えればよいのか。〈意味を担うもの〉と〈担われる意味〉という二項関係でなく、それにその意味が関わる〈主体〉を加えた三項関係として考えてみる必要のあること、そのような主体にとって差異を生むような差異がその主体にとっての〈意味〉であると考える。	同　上	同　上
4	記号の諸相（１）	〈記号〉と呼ばれるものには〈記号表現〉と〈記号内容〉という二つの側面がある。この二つの側面の間にはどのような関係があるのか。〈有契〉と〈無契〉という概念、それに基いての〈記号〉の分類の試みについて考える。	同　上	同　上
5	記号の諸相（２）	〈記号〉の二つの側面としての〈記号表現〉と〈記号内容〉のそれぞれについて、〈二重分節〉、〈表示義〉と〈共示義〉、〈有徴〉と〈無徴〉、〈プロトタイプ〉など、考察に必要な基本的概念のいくつかを学ぶ。	同　上	同　上
6	記号の諸相（３）	いくつかの記号が集まって、〈メッセージ〉あるいは〈テクスト〉と呼ばれるまとまりが構成される。そのような、まとまりをなすということは、何によって達成され、保証されるのであろうか。	同　上	同　上
7	記号の諸相（４）	〈メッセージ〉あるいは〈テクスト〉の〈機能〉の諸相を考える。とりわけ、それらのコミュニケーションの手段としての実用的な働きとは際立った形で対立する〈美的機能〉と呼ばれる側面、および、〈機能〉が〈構造〉を規定するというテーゼに注目する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	記号現象としての文化（1）	〈文化〉を〈記号〉（ないしは〈記号現象〉）として捉える〈文化記号論〉の考え方と実践を学ぶ。まず、〈ことば〉の関与の大きい広義の〈文学〉と呼ばれるものへの記号論的アプローチを考える。	池上　嘉彦	池上　嘉彦
9	記号現象としての文化（2）	<ことば>よりも<イメージ>的なものが中心的に関与する広義での芸術的なジャンル（写真、絵画など）についての記号論的アプローチを考える。	同　上	同　上
10	記号現象としての文化（3）	人間の生活での衣食住に関わるさまざまな営みについて、記号論的に考えるということはどのようなことかを学ぶ。	同　上	同　上
11	記号現象としての文化（4）	現代の人間の日常の生活は、メディアを通してのあらゆる種類の記号の洪水の中で営まれている。広告、消費などといった生活の側面についての記号論的なアプローチを取りあげる。	同　上	同　上
12	記号現象としての生命（1）	生命の営みを〈記号現象〉として考えるまず最初の段階として、人間以外の動物や植物がその生きるという営みの中で〈ことばらしいもの〉とどのように関わっているか―＜動物記号論＞、＜植物記号論＞と呼ばれる分野を眺めてみる。	同　上	同　上
13	記号現象としての生命（2）	生物体にとっての〈環境世界〉と呼ばれる概念について検討する。生物体にとっては、外から入ってくる刺激に対して、自らの生存にとってそれが持つ意味に応じて適切に反応するという営みが欠かせない。どの生物体も、自らとの関連で意味づけされた世界を持っているのである。	同　上	同　上
14	記号現象としての生命（3）	さらに一歩踏み込んで、生命体の体内で生命維持のためになされているさまざまな営みにも、基本的には、関係する組織の間での意味の伝達、解読という記号過程が関わっている―こういう〈生命意味論〉の考え方を検討する。	同　上	同　上
15	記号の進化	人間が関わる記号の成立、進化ということについて、人間の身体性、人間の置かれている環境、そしてそこでの人間の経験といった要因が深く関与する。記号に刻印された人間らしさを確認する。	同　上	同　上

＝日本語の歴史（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　近藤　泰弘（青山学院大学教授）〕
〔主任講師：　月本　雅幸（東京大学大学院助教授）〕
〔主任講師：　杉浦　克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

古代から現在に到る日本語の変遷の実態を明らかにし、過去の日本語に対する基本的な知識と理解を与えることを目的とする。そして現在の日本語の諸問題や広く日本文化全体の理解にも資するように配慮する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	漢字の移入	上代の日本に漢字が伝わることによって、初めて日本語を文字によって記録することが可能になった。漢字移入の時期・実態・影響について実例を挙げながら述べ、併せて他の言語の文字を日本語に適用する際の問題点についても考える。	杉浦克己（放送大学助教授）	杉浦克己（放送大学助教授）
2	奈良時代の日本語　音韻・語彙・文体	奈良時代には中国の影響を受けて文化が発展し、『万葉集』所収の歌が詠まれ、また『古事記』『日本書紀』などの文献が編まれるようになる。これらの文献から奈良時代の日本語の姿を見ると、そこには後世と大きく異なった点があることが分かる。音韻などについてそれを考える。	同上	同上
3	奈良時代の日本語　文法	奈良時代の日本語の文法体系は平安時代のものとは大きく異なっており、形容詞の活用など、まだ十分に発達していないものもあった。実例と共にその実態を概観する。	同上	同上
4	平安時代の日本語　文字・音韻	平安時代に入ると次々に日本語の歴史にとって重要な変化が発生する。平仮名・片仮名の発生がその一つであり、また種々の音韻変化は表記の多様性をもたらして仮名遣いの問題が発生する。これらについて考える。	月本雅幸（東京大学大学院助教授）	月本雅幸（東京大学大学院助教授）
5	平安時代の日本語　語彙・文体	平安時代には奈良時代と比べると和語による表現が多彩になり、漢語も急速に浸透して行った。また、平仮名・片仮名による新しい文体が作り出され、多様な文体によって多くの文章が書かれるようになった。そのあり方を概観する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	平安時代の日本語　文法	平安時代には形容詞の活用の完成、助動詞の発達など文法上の重要な変化が起こった。長く後世から規範とされた平安時代語の文法の特徴を明らかにする。また、高度に発達した敬語についても考える。動詞のテンス・アスペクトの体系の特徴についても触れる。	近藤泰弘（青山学院大学教授）	近藤泰弘（青山学院大学教授）
7	鎌倉時代の日本語　文字・音韻・語彙・文体	鎌倉時代には貴族中心の時代から武士の時代となって、言葉の上でも大きな変化が生ずる。和漢混淆文が盛んに行われ、新しい語形の登場、漢字音の日本語化などが顕著であり、これについて見て行くことにする。	月本　雅幸	月本　雅幸
8	鎌倉時代の日本語　文法	文法事項においても鎌倉時代の言葉は平安時代のものから大きく変化しつつあった。終止形と連体形の合一化、係り結びの混乱などがそれである。また敬語においても「候ふ」の発達などが見られる。言語資料の多様化の問題と合わせこれらの変化を論ずる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
9	室町時代の日本語　文字・音韻・語彙・文体	室町時代には「抄物」や「キリシタン資料」と呼ばれる資料があり、当時の口頭語の姿をよく記録している。これらの資料を見ながら当時の発音の状況を初め、室町時代の日本語の実態を概観する。	久保田篤（成蹊大学教授）	久保田篤（成蹊大学教授）
10	室町時代の日本語　文法	室町時代語はますます中世語としての性格を強め、係り結びの衰退、可能動詞の発生、各種助動詞の消長など、重要な変化が次々に起こって江戸時代の言葉への橋渡しをしている。これらの変化の諸相について述べる。	近藤　泰弘	近藤　泰弘
11	江戸時代前期の日本語	江戸時代の日本語は、上方語と江戸語という方言差、武士と町人という階級差など、種々の対立によって特徴付けられる。江戸時代前期の文化の中心であった上方の言葉について、音韻・文法など種々の面から見て行く。	久保田　篤	久保田　篤
12	江戸時代後期の日本語	１８世紀も後半になると、文化の中心は江戸に移り、文学作品である「洒落本」「滑稽本」には江戸の言葉が生き生きと記録されている。ここに見られる江戸語のありさまを概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	明治時代以後の日本語　文字・音韻	明治時代になると、日本語を書き表すための文字についての議論が起こり、それはやがて漢字制限へと向かうこととなる。また、急速に入ってきた外国語の影響でそれまでの日本語にはなかった音節も使用されるようになった。これらについて論ずる。	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）	鈴木　英夫（白百合女子大学教授）
14	明治時代以後の日本語　語彙・文体	明治時代には西洋から大量の文物が流入し、それらの概念を日本語で表すための翻訳語（新漢語）が作られた。また、話し言葉を基本とした言文一致の口語体が成立した。このような大きな変化の跡をたどって行く。	鈴木　英夫	鈴木　英夫
15	明治時代以後の日本語　文法	明治時代以後の文法体系は基本的には前代のものを引き継いでいるが、それでも種々の面で変化が数多く見られ、それは現在の我々が明治の文章を読む際にも感じられることである。この変化を実例と共に概観する。	同　上	同　上

＝書誌学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　杉浦　克己（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本邦の、主に古文献資料類を対象とした書誌学として、書籍の形態を持つもののみでなく、広く古典籍類および史料類等の文献資料一般を扱う。これらを日本語の表記史の観点から整理した上で、取り扱い上の基本的な知識を概説すると共に、内容を読み解く上での困難の主因を、広い意味での書き表し方の多様性ととらえ、各々の資料の特色を理解することを基本に置き、資料上に現れた表記者の意図を的確に把握することを大きな手がかりとして、着眼点や分析の手法を実際の資料例に即して示し、古文献資料類に取り組むことの意義と基本的な姿勢を明らかにすることが本講義のねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	書誌学への扉	書籍さらには文字書写物一般の歴史の概略を振り返り、その多様性の端的な例を示すことで本講義の主なねらいを示すと共に、古文献資料を扱う書誌学の主項目やその意義を概説し、講義全体への導入とする。	杉浦　克己（放送大学助教授）	杉浦　克己（放送大学助教授）
2	書籍の形状と料紙	書籍の形状や書函などの付随物についての基本的な事項を実物例を示して概説する。また料紙の材料や製法とその変遷、装飾などについて各々の特色を実際例を挙げて概説する。	同　上	同　上
3	書籍の取り扱いと保存・修補	書籍の取扱いを様々な装丁や付属物について概説する。また保存方法や修補の実際例を紹介し、保存と利用の関係を考えることで閲覧の際の注意事項を併せて概説する。	同　上	同　上
4	平仮名の読み方（1）	平仮名の発生・発達を概説し、いわゆる異体仮名の読み方について、主に版本の平仮名文の実例を用いて、類型的な字形・字体の平仮名の読み方を概説する。	同　上	同　上
5	平仮名の読み方（2）	主に古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、字母漢字を考えながら読むことによって、いわゆる異体仮名をある程度読みこなす方法を概説する。	同　上	同　上
6	平仮名文の読み方	主に漢字仮名交じりの古筆和歌資料や散文古写本の実例を用いて、平仮名文・漢字仮名交じり文の表記方法としての特色を考え、文章の内容や前後関係等も考慮した上での平仮名文の読み方を概説する。	同　上	同　上
7	漢字の読み方（1）	主に行書の版本資料の実例を用いて、類型的な字形・字体を部首などによって整理して把握することで個々の文字を読みとるための参考とするための要点を概説する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢字の読み方（2）	主に行書の資料の実例を用いて、行・草書が毛筆ではむしろ一般的な書体であったことを示し、筆跡を辿りながら漢字を判読するための要点を概説する。	杉浦　克己	杉浦　克己
9	漢文の読み方	基本的な漢文の句法や助字などの働きを整理して示し、表記方法としての特色を考え、白文の資料についてもある程度基本的な文意を把握するための要点を、本邦独自のいわゆる記録体の性格にも留意しつつ概説する。	同　上	同　上
10	訓点資料と片仮名文	漢文訓読の歴史を辿り、漢文の訓読の仕方の変遷と基本的な訓点資料の読み方を概説すると共に、漢文訓読と共に発達してきた片仮名文の代表例を紹介する。	同　上	同　上
11	書状と文書	書状の代表的な様式を、仮名・漢文各々の実例を挙げて紹介すると共に、公式令に挙げられた基本的な文書の様式を、公文書の実例によって概説し、あらかじめ想定された間でのやりとりのための表記方法の特色を考える。	同　上	同　上
12	辞書の利用	古辞書の発達の歴史を、整理して概説すると共に、その性格を十分に考慮した上で古文献資料の読解に活かすことの重要性を、実例に即して示す。	同　上	同　上
13	書写の経緯	古文献資料の書写の経緯を、奥書や周辺資料から辿る実例を示すと共に、複数の本文を比較検討してあるべき本文を考える校合の基本的な方法を実例を挙げて概説し、資料の伝来を考える上での書写者の重要性を示す。	同　上	同　上
14	古筆	古筆資料の実際例を時代やジャンルで整理して挙げ、書風だけではなく文字や用字法の変遷という観点からも比較対照して、各々の特色を整理し概説する。	同　上	同　上
15	出版と書籍	近世頃から盛んになった印刷・出版の歴史を整理概説し、印刷によって出版業や書籍の流通経路が整備されていった跡を情報伝達の本質的な変化の観点から辿り、現代につながる実際例を紹介する。	同　上	同　上

＝日本の散文－古典編（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　三角　洋一(東京大学教授)〕
〔主任講師：　松尾　葦江(國學院大学教授)〕
〔主任講師：　島内　裕子(放送大学助教授)〕

全体のねらい

「日本の散文……古典編」と題して、ジャンル別という枠にとらわれず、散文の表記・文体に注目し、また作品の系譜を遠望するなど、新しい文学史の試みを提示する。時代としては中世に照準を合わせたが、上代・平安朝にさかのぼったり、近世に及ぶこともある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	平仮名文の散文文学世界	『無名抄』の「仮名序事」に導かれて、中世の文学者が和文(平仮名文)に四種の文体を識別していたことに注目し、文体と文学作品の関係を観察する。	三角　洋一（東京大学教授）	三角　洋一（東京大学教授）
2	片仮名文の散文作品	『愚管抄』に導かれて、片仮名文による文学作品や学問について展望する。	同上	同上
3	合戦記述の系譜	『日本書紀』『古事記』の合戦記事、平安中期の『将門記』、末期の『陸奥話記』及び武士説話を集めた『今昔物語集』巻25などをとりあげ、漢文体、漢文訓読体、変体漢文等による合戦記述の変遷をたどる。	松尾　葦江（國學院大学教授）	松尾　葦江（國學院大学教授）
4	和文日記と漢文日記	院政期から中世にかけての和文による日記文学作品と、変体漢文による日記・記録類について展望する。	三角　洋一	三角　洋一
5	住まいの文学の系譜	『方丈記』諸本の表記と文体に着目するとともに、平安時代の『池亭記』『書斎記』や、江戸時代の『幻住庵記』『巴人亭記』などをとりあげて、住まいや書斎のあり方が、生き方と密接に結びついていることを考察する。	島内　裕子（放送大学助教授）	島内　裕子（放送大学助教授）
6	随筆の展開	『枕草子』『徒然草』『花月双紙』などを中心に、各時代の代表的な随筆作品を通して、執筆者の個性と時代性が、それぞれの内容や文体にどのように現れているかを考察し、身辺雑記や考証など、幅広い内容を有する随筆の可能性を探る。	同上	同上
7	『平家物語』にみる和漢混淆文の諸相	軍記物語、殊に『平家物語』には膨大な諸本群があり、内容や分量が異なるだけでなく、文体や表記も異なる。平仮名交じり、片仮名交じり、宣命書き、変体漢文などいわゆる和漢混淆文の幅の広さを見ておきたい。	松尾　葦江	松尾　葦江

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「物語」「記」「論」と歴史文学	軍記物語は、物語の伝統に引きつけられる流れと、政治評論の色彩を強める流れとの 2 系統に分けられよう。同じ作品の諸本群の中でも同様である。『保元物語』『平治物語』『承久記』『太平記』などを見てゆく。	松尾　葦江	松尾　葦江
9	説話と法語の世界	説話や法語のさまざまな性格に着目しつつ、和歌や連歌の話を中心に中世の貴族社会を描く『今物語』、鎌倉時代の念仏者・遁世者の言葉を集めた『一言芳談抄』、教訓説話集の『十訓抄』などをとりあげ、巷談や談話の魅力を支える文体について考察する。	島内　裕子	島内　裕子
10	紀行文の時空	各地への空間移動と地誌としての記録性、および時間認識としての歌枕への感慨という観点から『東関紀行』『飛鳥井雅有日記』などを中心に紀行文を捉え、故事や名文・名句の摂取など散文表現の技法について考察する。	同　上	同　上
11	物語の伝統	物語の型式が中世の物語・小説においてどのように組成されているかに注目する。『増鏡』を始め、中世小説、『義経記』『曾我物語』などをとりあげ、先行作品の世界を型枠として利用する方法について考察する。	松尾　葦江	松尾　葦江
12	「声」と「ことば」	平曲、幸若、能をとりあげる。軍記物語を素材にしながら、それぞれの芸能がどのようなテーマを中心に据えたか、また語り、音曲、舞などの表現手段が詞章とどのように関わっているか、実際に語りを聞き比べて考える。	同　上	同　上
13	評論の視界	日本の古典文学における評論の諸相を、『井蛙抄』などの歌論や、『小夜の寝覚』などの政道論の中に探り、広義の評論として家訓書や注釈書の批評精神にも触れ、評論とは何かを考える。	島内　裕子	島内　裕子
14	女性の教養と幼学書	平安朝女性の趣味と教養について概観し、中世に及ぶ女流文学の流れとそれを支えた知識、思考について見ていく。 あわせて、女性のために編纂された書物や中国故事の宝庫である幼学書についても概観する。	三角　洋一	三角　洋一
15	学問と有職故実	平安朝貴族や中世知識人の精神的基盤となった学問と、和製の幼学書を概観し、有職故実書や教誡についても見ていく。	同　上	同　上

＝　日本の古典―古代編　（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　鈴木　日出男（成蹊大学教授）〕
〔主任講師：　多田　　一臣（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　藤原　　克己（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

言葉によって世界を把握する過程で、人々が文学の言葉の力を発見したその始原から、漢文学の受容も加わって和歌・物語・日記などの文芸が形成され、相互に交流しながら展開した様相を、特に言葉の働きに注目して明らかにする。古典の言葉のもつ力、その豊かさとこまやかさが忘れられかけているこんにち、改めて日本古代文学の「古典」としての意義を闡明したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	文学の発生とその展開	文学の発生に関して、ここでは特に言葉の働きに注目したい。たとえば、枕詞や神名がつくり出され、歌や伝承がゆたかに形成されていた。そのように、言葉との関連を通して、古代の文学のあり方を考えようとする。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
2	語りごとの世界―『古事記』とその周辺	内容：古来、語りの場で伝えられてきた聖なる詞章をフルコトと呼ぶ。古代の叙事文学は、このフルコトを基本にして成立している。『古事記』の書名も、訓読はフルコトブミである。ここでは、『古事記』を中心に、フルコトから展開した語りごとの世界を見渡してみたい。	多田　一臣（東京大学大学院教授）	多田　一臣（東京大学大学院教授）
3	『万葉集』（1）	『万葉集』は日本最古の宮廷歌集だが、そこに収められた歌は、どのような表現水準をもっているのか。歌謡から和歌への道筋をたどりながら、古代の和歌表現が達成した世界をながめてみたい。	同　上	同　上
4	『万葉集』（2）	『万葉集』の歌は、ほぼ一世紀半にも及ぶ長い時間の中で作られている。その表現の変化もまた著しい。ここでは、そうした変化の様相を具体的にたどることで、『万葉集』の世界を大きく見渡してみたい。	同　上	同　上
5	古代説話の誕生―『日本霊異記』の世界	内容：古代説話は仏教説話として誕生した。それは仏教が律令制度に見合う普遍性をもつ宗教だったからである。ここでは、わが国最古の説話集『日本霊異記』の世界をながめることで、そこに表現された人びとの生活意識について考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	古代前期の漢文学	今日では忘れられかけているが、明治初期まで、政治家・知識人の第一級の文芸は漢詩であった。そうした日本漢文学の開幕としての古代漢文学の意義を考える。『懐風藻』から菅原道真までを扱い、古今集歌風との関連も考える	藤原　克己(東京大学大学院教授)	藤原　克己(東京大学大学院教授)
7	『古今和歌集』	前章の古代漢文学との関連を見据えながら、規範的な四季の秩序と抒情の様式を樹立した『古今集』が勅撰されたことの日本文化史上の意義を考え、さらに恋歌や雑歌が平安朝の日記や物語の表現の基盤になってゆく様相を見通す。	同　上	同　上
8	物語の成立	『伊勢物語』『竹取物語』『落窪物語』『うつほ物語』を通して、物語における色好みと愛の主題や、反俗的精神の主題について考える。また『うつほ物語』の長編化によって、物語の描き出す人間関係にどのような深化が生まれたかについても考える。	同　上	同　上
9	女流文学の成立―日記・随筆	女流の和歌、また『蜻蛉日記』などの日記文学、さらに随筆文学とみられる『枕草子』をとりあげて、平安朝文学に特有の女流文学の本質を考える。いずれも、言葉を駆使しながら、自己の内面を見つめる文学である。	鈴木日出男	鈴木日出男
10	古代後期の漢文学	主として10世紀の源順、源為憲、菅原文時、慶滋保胤、そして紫式部の父藤原為時を扱い、『源氏物語』の世界形成にも深く関わった平安朝漢文学の意義を明らかにする。『うつほ物語』にも再度ここでふれる。また句題詩的美意識と和歌との関連や、平安後期の無題詩の世界にもふれる。	藤原　克己	藤原　克己
11	『源氏物語』(1)	『源氏物語』第一部を扱い、光源氏の理想性にいかに古代漢文学や初期物語の思想が息づいているか、この物語は時代社会をどのように写し取っているのか、といったことを考察し、この物語が達成した驚嘆すべき諸相を明らかにする。	同　上	同　上
12	『源氏物語』(2)	若菜巻以後、第一部とは対照的に人と人との共感の不成立という事態が深刻化する様相を明らかにし、物語の表現技法の先鋭化と思想の深化とが連関していることを分析する。平安後期物語についてもふれ、後期物語から失われていったものを考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	和泉式部―和歌史の変革	十一世紀はじめの和泉式部のきわめて主観的な表現の和歌は、斬新な抒情性をたたえていて、和歌史を画すことになった。その新風を契機として、以後の和歌がどのように変革されていくかを展望することになる。	鈴木日出男	鈴木日出男
14	王朝の光と闇―『大鏡』と『今昔物語集』	内容：王朝の栄光が薄れる中、しだいにその闇の部分が浮かび上がって来る。とくに、怪異の世界が迫り出してきた意味は大きい。その光と闇とを、『大鏡』と『今昔物語集』の世界を通じて明らかにしてみたい。	多田　一臣	多田　一臣
15	古代文学の研究	後世の人々には、古代の文学が日本古典の典型として受けとめられてきた。特に、そこに日本の純粋な精神を見出した近世の国学の考え方にふれながら、古代文学のあり方を振りかえり、それを本講義のまとめとする。	鈴木日出男	鈴木日出男

＝上代の日本文学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　多　田　一　臣（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

上代の日本文学の全体を概観することを目的とする。歌謡、和歌、漢詩文、神話（歴史）、地誌、説話など、上代文学のさまざまなジャンルの作品を具体的に取り上げつつ、その世界の豊穣さを味わってみたい。その際、文学史的な視点を大切にしながら、表現の流れをできるかぎり丹念にたどることを心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	文学の発生	文学は言葉の芸術だから、言葉の美を追求する。それは、表現の仕方としてあらわれる。世界的に、文学の発生が定型的な韻文であることが証拠である。日本語の場合、音数律の成立が文学の発生となる。	古橋　信孝（武蔵大学教授）	古橋　信孝（武蔵大学教授）
2	古代歌謡の世界	古代歌謡は万葉の和歌とどう違うのだろうか。うたわれた状況に閉じられている度合いが高いのが歌謡と考えるのがいい。では、なぜ歌う必要があったのか。そして、なぜ歌い継がれていくのか。	同　上	同　上
3	初期万葉の世界１	初期万葉とは『万葉集』の最初期の歌を指す。この時期の歌には、後代の歌にはない清新さをたたえたものが多い。ここでは、それらの中から、雄略天皇、舒明天皇、天智天皇、有間皇子の歌などを取り上げてみたい。	多田　一臣（東京大学大学院教授）	多田　一臣（東京大学大学院教授）
4	初期万葉の世界２	初期万葉最大の歌人は額田王である。額田王の歌には、次代に展開されていく表現の可能性を先取りするものが多く含まれている。それらを確認するとともに、あわせて初期万葉の残りの歌人の歌についても考えてみたい。	同　上	同　上
5	持統・文武朝の和歌１	持統・文武朝は古代和歌史の大きな転換点である。その最大の立役者は柿本人麻呂である。人麻呂の登場が和歌の表現に何をもたらしたのか。その謎の生涯にも触れつつ、人麻呂が和歌史に果たした役割について考える。	同　上	同　上
6	持統・文武朝の和歌２	持統・文武朝には、柿本人麻呂のみならず多くの宮廷歌人が活躍した。中でも、高市黒人、長意吉麻呂は、その個性的な詠みぶりが注目されている。ここでは、次代の山部赤人も含め、それら宮廷歌人の作について概観してみたい。	同　上	同　上
7	憶良と虫麻呂	山上憶良と高橋虫麻呂は、どちらも独自な世界を築いた歌人である。しかし、その独自さは、むしろ表現の行き詰まりの中から生み出されたともいえる。かれらがいかにして表現を革新しようとしたのか、和歌史の流れの中で検証してみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	大伴氏の歌人たち1	大伴旅人は、晩年、豊かな漢籍の教養に裏付けられた短歌を多く残している。また旅人の妹坂上郎女は、恋歌に独自の歌境を開いた。そして二人の歌業は、旅人の子家持によって受け継がれる。彼ら大伴氏佐保大納言家の人々の歌の展開をたどる。	鉄野　昌弘（東京女子大学教授）	鉄野　昌弘（東京女子大学教授）
9	大伴氏の歌人たち2	大伴家持は、万葉集の編者と目される。彼は、青年時代の笠女郎・紀女郎ら多くの女性たちとの恋歌を残す一方、末四巻の所謂「歌日誌」に、官人生活における哀歓をつづってゆく。編纂と作歌との関わりに注目しつつ家持の歌を考える。	同　上	同　上
10	東歌と防人歌	東国の衆庶の歌声を伝える東歌と防人歌は、もともと宮廷歌集である『万葉集』のなかでは異質の歌群といえる。なぜ、これらの歌は『万葉集』に収められなければならなかったのか。表現を読み解きながら、その問題を考えてみたい。	多田　一臣	多田　一臣
11	漢詩文の世界	漢詩文は、漢字文化圏の世界文学であった。日本でも、近江朝依頼の多くの詩が、奈良時代半ばの詩集、懐風藻に収められている。のみならず、詩文は和歌成立の基盤でもあった。和歌との関係を視野に入れながら、漢詩文の世界を探る。	鉄野　昌弘	鉄野　昌弘
12	歴史書の成立―記紀の世界1	8世紀初頭に成立した『古事記』と『日本書紀』は、大和朝廷とよばれる古代国家の確立期に編纂された歴史書であった。それはどうような課程を経て成立し、どのような内容をもつかということを確認し、歴史を記述することの意味について考えたい。あわせて、『古事記』と『日本書紀』との違いについてもふれる。	三浦　佑之（千葉大学教授）	三浦　佑之（千葉大学教授）
13	神と人の物語―記紀の世界2	『古事記』と『日本書紀』には、神々の物語と歴代天皇の事績や系譜が語られている。ここでは、具体的な伝承のいくつかを取り上げながら、神話や説話に描かれた世界がどのようなものであったのかということを考える。皆さんがよく知っている話も見つけられるはずである。	同　上	同　上
14	古代の民間伝承―風土記の世界	大和朝廷の命令を受けて、地方の国々がそれぞれの土地に伝えられた伝承をまとめたのが『風土記』である。その成立の経緯を確認した上で、現存する風土記の伝承のいくつかを紹介したい。私たちはそこに、古代の人々の間で語り継がれていた伝承世界の多様性を見出すことができるだろう。	同　上	同　上
15	説話文学の誕生	身近なレベルの話を書きとめるのが説話集なら、『日本霊異記』は珍しい話を集めている。日本最初の説話集はなぜ霊異な事件を対象にしたのだろうか。変動期である奈良末から平安初期の時代のなかで考えていく。	古橋　信孝（武蔵大学教授）	古橋　信孝（武蔵大学教授）

＝近世の日本文学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　長島　弘明（東京大学教授）〕
〔主任講師：　清登　典子（筑波大学教授）〕

全体のねらい

中世までの文学は、貴族や武家などの支配層によって作られ享受されていたが、近世（江戸時代）の文学は、被支配層である町人が作者・読者として大きな役割を果たすようになり、前代とは異なった様々なジャンルの作品が生まれた。その多様な近世文学の成立・展開の様相を、作家・作品に即して具体的に見てゆく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世文学の特徴	前代の文学と比較した時の近世文学の顕著な特徴を、出版文化の成立と大衆化、雅俗の並立・混淆の様相、滑稽と教訓の要素、上方と江戸の地域的な対比等々、様々な観点から考察する。	長島　弘明（東京大学教授）	長島　弘明（東京大学教授）
2	仮名草子から浮世草子へ	近世初期の小説である仮名草子の諸相に触れ、その特徴を明らかにする。また、仮名草子に代わる新しい小説形式である浮世草子の初作、井原西鶴の『好色一代男』の出現の意義について説明する。	同上	同上
3	西鶴の文学	西鶴の伝記を略述し、好色物・武家物・町人物等の西鶴浮世草子の各作品について、それぞれのテーマ的特色等を考察する。あわせて、八文字屋本等の西鶴以後の浮世草子について通覧し、浮世草子の展開の様を探る。	同上	同上
4	貞門・談林から蕉風俳諧へ	俳諧の源流から、近世俳諧の基礎を築いた貞門俳諧、新風としての談林俳諧、さらに芭蕉の登場までを扱う。主要俳人と作品について触れながら、各派の特色を説明する。芭蕉については、深川隠棲までの時期を対象とする。	清登　典子（筑波大学教授）	清登　典子（筑波大学教授）
5	芭蕉の文学	天和期以降の芭蕉の俳諧について考察する。俳風（連句・発句）の時期的な変遷、蕉風俳諧の理念と表現、俳文と紀行の意義等、多方面から考察する。必要があれば、門人についても適宜触れることにする。	同上	同上
6	浄瑠璃と近松門左衛門	浄瑠璃の歴史を、近松門左衛門を中心に概観する。浄瑠璃の成立、古浄瑠璃、近松の人と時代物・世話物の各作について、また海音・宗輔・出雲・半二、江戸浄瑠璃等、近松以後の浄瑠璃の展開について解説する。	池山　晃（大東文化大学助教授）	池山　晃（大東文化大学助教授）
7	国学と和歌	伝統的な歌学から国学への学問的革新と平行する形で、堂上派から古学派・江戸派、あるいは蘆庵・桂園派など、様々に展開して行った近世和歌の歴史を説明する。幕末の良寛・元義・言道・曙覧らにも触れる。	鈴木　健一（学習院大学教授）	鈴木　健一（学習院大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	漢学と漢詩文	朱子学・古義学・徂徠学の文学観をとりあげ、儒学各派の詩文に対する見解を押さえつつ、丈山・元政から古文辞派の擬古主義、反古文辞の江湖社、幕末の個性的な詩人たちまでの、漢詩文の変遷を解説する。文人の概念についても触れる。	鈴木　健一	鈴木　健一
9	前期読本と上田秋成	前期読本成立の背景に触れ、都賀庭鐘・建部綾足の読本、さらに上田秋成の文業を、『雨月物語』『春雨物語』を中心にして考察する。浮世草子との相違、また後期読本との相違等にも言及する。	長島　弘明	長島　弘明
10	中興期俳諧と蕪村	芭蕉没後の享保期俳諧から説き起こし、蕉風中興運動の経緯について概説し、この時期を代表する文人風の俳人である、与謝蕪村の人と作品について考察する。蕪村の俳論・俳詩等にも言及する。	清登　典子	清登　典子
11	一茶と雑俳・川柳	蕪村以後の俳諧大衆化時代の後期俳諧を、一茶調と呼ばれる個性的な句を多く残した小林一茶を中心に概観する。また、雑俳について略述し、特に川柳について、その庶民詩としての本質について解説する。	同　上	同　上
12	笑いと舌耕の文学	笑いを旨とした文学形式である狂歌・狂詩・咄本の流れをそれぞれ概説し、近世的な笑いの質について考える。また、仏教談義・講談と密接な関係を持つ、舌耕の小説ともいうべき仏教長編小説・実録体小説について略述する。	板坂　則子（専修大学教授）	板坂　則子（専修大学教授）
13	江戸の戯作（1）	文運東漸後、江戸で盛んになった小説類について概説する。本章では、江戸小説の草分けといってよい『当世下手談義』以下の談義本、遊里を舞台とする洒落本、画文が同等の比重を持つ黄表紙、洒落本の流れを引く滑稽本を取り上げる。	同　上	同　上
14	江戸の戯作（2）	江戸中心の小説の続き。後期読本の展開を、山東京伝・曲亭馬琴の作品を中心に概観する。また、市井の男女の恋愛を描いた人情本、黄表紙の後継ジャンルである合巻について解説し、それぞれの小説としての特徴を検証する。	同　上	同　上
15	歌舞伎と南北・黙阿弥	歌舞伎の歴史を、後期を中心に概観する。歌舞伎の成立、元禄歌舞伎、丸本物の時代、正三・五瓶・治助、特に鶴屋南北・河竹黙阿弥の作に比重をおいて解説する。歌舞伎役者についても、適宜言及する。	池山　晃	池山　晃

＝近代の日本文学（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：野山　嘉正（放送大学教授）〕
〔主任講師：安藤　　宏（東京大学大学院助教授）〕

全体のねらい

明治期から現代に至る近代の日本文学の全体像を描くのがねらいである。通常の文学史の枠に必ずしもとらわれることなく叙述し、主としてジャンル別に流れを辿り、さらに、相互の関連を意識しつつ考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	はじめに ―近代という時代	本講義の目的と方法について述べる。年代順に整理せずにジャンル別に構想したことの説明から始めて、全体の配置を紹介する。最後に近代文学とは何であったのかを考えるのが目的であることを明らかにする。	野山　嘉正（放送大学教授）	野山　嘉正（放送大学教授）
2	詩歌Ⅰ―詩歌の新時代・近代の始動	詩歌における旧時代から新時代への変化を叙述し、漢詩・和歌・俳諧が漢詩・新体詩・短歌・俳句へと姿を変える様相を描写する。こういう推移の過程から、日本の近代文学の方向が規定されることを論ずる。	同　上	同　上
3	詩歌Ⅱ―口語詩の確立と短歌・俳句	明治末期から大正期・昭和期戦前における、口語詩の確立と短歌・俳句の変貌を、それぞれのジャンルごとに素描しつつ、詩歌としての文学状況を把握する。	同　上	同　上
4	詩歌Ⅲ―戦後詩歌へ	昭和十年代の、いわゆる戦時下の詩歌のありかたから、敗戦による反省と回生をまず総括する。次いで第二芸術論による打撃からの短歌・俳句の立ち直りの過程を辿り、現代詩歌考察の手がかりを提示する。	同　上	同　上
5	小説Ⅰ―文明開化と「文学の変容」	西洋文明の移入、言文一致運動の動向、メディアや出版形態の変化などに留意しつつ、現在「小説」と名付けられているジャンルがどのように成立したのかについて考察する。明治の初頭から、二十年代の尾崎紅葉、幸田露伴までを中心に扱う。	安藤　宏（東京大学大学院助教授）	安藤　宏（東京大学大学院助教授）
6	小説Ⅱ―日清、日露戦争期の文学	日清、日露戦争期にあって、ナショナリズムの台頭、浪漫主義的な傾向、社会の現実を直視して行く傾向が、それぞれ小説にどのような形で表れてくるかを考察する。樋口一葉、国木田独歩、泉鏡花らを中心に、明治二十年代、三十年代を扱う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	小説Ⅲ－自然主義文学と漱石・鴎外	明治二十年代から四十年代にかけて、西洋の自然主義文学がそのような形で受容されたのを、島崎藤村、田山花袋を中心に考察する。これらに関連して、「写生文」の動向、大正初頭にかけての夏目漱石、森鴎外の活動状況について考察する。	安藤　宏	安藤　宏
8	小説Ⅳ－大正文壇の成立	明治の末期、反自然主義的な文学動向が表れ、それがどのように大正文壇を形成して行くかについて考察する。大逆事件の影響、永井荷風、谷崎潤一郎ら耽美派の動向、白樺派の活動、芥川龍之介のデビューなどを扱う。	同　上	同　上
9	小説Ⅴ－マルキシズムとモダニズム	大正後半から昭和初頭にかけての状況を、ソビエト文化とアメリカ文化の受容に注視しつつ考察する。心境小説の成立、関東大震災の影響、メディアの変容と大衆文学の成立、新感覚派の文学運動、プロレタリア文学の展開などを扱う。	同　上	同　上
10	小説Ⅵ－第二次世界大戦と文学	モダニズム文学の消長、転向文学、昭和十年前後の「文芸復興」などについて触れた上で、第二次世界大戦との関わりを、ナショナリズム、ファシズムの日本的な形態の特色、アジアの中の日本文学、といった観点から考察する。	同　上	同　上
11	小説Ⅶ－戦後文学の展開	昭和二十年代から三十年代にかけての文学状況を、「無頼派」の作家たち、第一次戦後派の動向、「第三の新人」たちの作風などについて叙述することから開始する。三十年代以後の展開も流れとして解明し、文学にとって「戦後」とは何であったのかを考える。	同　上	同　上
12	演劇Ⅰ－旧劇から新劇へ	近世演劇から近代演劇の発生への過程を辿り、大正期に至る多彩な演劇運動の特質を解明する。さまざまな層位の活動を、文学と演劇との関連をも包摂しつつ、近代における演劇全体の様態を展望する。	林　廣親（成蹊大学教授）	林　廣親（成蹊大学教授）
13	演劇Ⅱ－戦前から戦後へ	思想運動としての演劇が盛んであった、昭和期戦前から戦後にかけての、新劇の流れを辿り、さらに戦後社会の発展にともなう演劇状況全体の推移を描写し、文化論への展望をも開く。	同　上	同　上
14	近代批評の成立	西洋文化の移入と文学の内外についての自覚が深い関係にあることから説き起こし、坪内逍遙・森鴎外らの立場を中心に考察する。これが昭和初期に至る西洋文学研究の進展につれて変化していくさまを叙述する。	野山　嘉正	野山　嘉正
15	近代批評のゆくえ	小林秀雄の位置から戦後批評に至る流れを全体として把握し、その後の変質についても素描を試みる。昭和十年代の古典復興が文壇や学界を支配したさまや、その戦後への影響をも論じ、近代文学の全体像への基礎を提示する。	同　上	同　上

＝日本文学における住まい（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：島内　裕子（放送大学助教授）〕

全体のねらい

日本文学に描かれた住まいの諸相を、古典から近代まで辿り、どのような人生観や美意識が表現されているかという「住まいの文学史」を通観する。それによって、二つの文学の系譜、すなわち、方丈記の影響力の表れとしての「閑居記」の系譜と、王朝文学の影響力の表れとしての「廃園文学」の系譜とを浮かび上がらせたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	草庵・閑居・廃園の文学史	日本文学に描かれた住まいを概観し、住まいに着目することによって、文学史を新しい観点から眺望することの意味と意義について述べる。日本文学を貫く系譜に、二つの方向性があることを、最初に視界に入れる。	島内裕子（放送大学助教授）	島内裕子（放送大学助教授）
2	王朝貴族の住まいと庭園	王朝文学にみる住まいについて、伊勢物語や池亭記などを取り上げ、住まいの文学の原点を示すと共に、以後の章で取り上げることの比較的少ない漢詩文や和歌に詠まれた住まいにも触れる。	同上	同上
3	王朝女性たちの美しい住まい	枕草子と源氏物語を中心に取り上げ、王朝女性たちにとって、どのような住まいが理想的であったかを明らかにし、住まいとそこで展開される暮らしの美意識を考察する。	同上	同上
4	草庵記の誕生	方丈記を中心に、この作品の出現の文学史的意義を考える。方丈記は短い作品であるが、そこに含まれる二重性、すなわち、社会批判と閑居の楽しみについて述べる。	同上	同上
5	住居観と人間認識	徒然草を中心に、ここで描かれたさまざまな住まいのありさまを概観する。そのうえで、徒然草が「住居観と人間認識」を明示した作品であることを明らかにする。	同上	同上
6	中世文人の造園趣味	南北朝期から室町時代にかけての文学者を取り上げ、住まいとその周囲の庭を含めた空間を、どのように宰領しながら、自分たちの理想の住まいを作り上げたかを考察する。それらの住まいは草庵であっても、美的な要素も含まれている。	同上	同上
7	近世前期の住居記	近世前期の文人たちを取り上げ、彼らの住居記がいかに方丈記の影響の元にあるかを浮かび上がらせると共に、そこにも二つの系譜、すなわち、芭蕉に代表される「人生論的な住居記」と、季吟に代表されるような「風雅な閑居記」があることを述べる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	閑居記の成立	近世中期以後の文学者を取り上げ、住居記の多様性に触れる。この時期の住居記は、閑居の理想空間として、孤独な独居としての住まいであるよりも、むしろ交友を楽しむ場所としての機能も描かれるようになることに注目する。	島内　裕子	島内　裕子
9	豪奢と幻想の大名庭園	江戸の大名庭園を描く「お庭拝見記」をいくつか読みながら、大名庭園が王朝時代の大貴族の邸宅を描いた散文作品や和歌とどのように関連するか、その「豪奢と幻想のパノラマ」を文学史の中に位置づける。	同上	同上
10	廃屋と陋巷	明治時代の文学にみる住まいについて、主として樋口一葉と泉鏡花の作品の中から、荒廃した屋敷や陋巷の住まいがどのように描かれ、近代以前の文学とどのような連続性をもっているかを考察する。	同上	同上
11	市隠への憧憬	森鷗外と夏目漱石などの住居観を作品の中に探り、彼らの隠遁志向と近代人としての社会性がどのように関わっているかを考察し、中世の隠者文学との類同性にも着目する。	同上	同上
12	近代詩歌にみる廃園の美学	北原白秋や三木露風などの詩歌にみられる廃園趣味を取り上げ、王朝文学以来の文学伝統の中で近代詩歌に表れた「廃園の美学」を考える。	同上	同上
13	住まいをめぐる景観の喪失と再生	永井荷風の東京散策記や、西脇順三郎の武蔵野散策記を中心に考察する。それらを「住まいとその周縁の文学」として把握し、そこに近代以前の景観への喪失感が表れていること、および、彼らの作品によって喪われた景観が文学の中に再生することの意義を見出す。	島内　裕子	島内　裕子
14	現代文学にみる草庵記の継承	森茉莉の作品を中心に、方丈記に表れていた「社会批判と閑居の楽しみ」が、現代文学の中にも息づいていることを確認し、「方丈記の系譜」の現代性について考察する。	同上	同上
15	住まいの文学のゆくえ	吉田健一の作品を中心に、風雅と反俗の精神によって「住まいと風土」「住まいと人生」などがどのように認識され、表現されているかを捉え、日本文学における住まいに視点を置くことが、どのような新たな文学認識を生み出すかということについても述べたい。	同上	同上

＝考古学と歴史（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：白　石　太一郎（奈良大学教授）〕

全体のねらい

考古学は、人びとが生きるために大地に働きかけた跡である遺跡と、そこから発見されるさまざまなモノ、すなわち遺物から人間の歴史を明らかにする学問である。考古学の方法の概要を示すとともに、日本の考古学が先土器時代から中世に至る日本列島の歴史をどこまで明らかにしたかを紹介し、考古学の役割とその特質を理解させる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	考古学への招待	考古学が遺跡・遺物を資料として歴史を考える学問であり、文献による文献史学、伝承資料による民俗学ともに、広義の歴史学を構成することを解説する。考古学の新しい動向についてもふれる。	白石　太一郎（奈良大学教授）	白石　太一郎（奈良大学教授）
2	考古学の方法	発掘調査にはじまる考古学の研究方法を概説する。特に層位学・型式学など歴史学である以上欠かすことの出来ない独自の年代決定法や、分布論など考古資料の分析法などについて述べる。	同　上	同　上
3	自然科学と考古学	最近著しく進展している放射性炭素法、年輪年代法などの理学的年代決定法や、鉛同位体による資料の産地同定法など、自然科学と提携した新しい研究法とその問題点を解説する。	今村　峯雄（国立歴史民俗博物館教授）	今村　峯雄（国立歴史民俗博物館教授）
4	先土器時代から縄文時代へ	日本列島における先土器文化研究の特質と先土器文化から縄文文化への変遷過程やその意義について述べる。日本列島の先土器文化や草創期の縄文文化の世界史的な位置付けにもふれる。	今村　啓爾（東京大学大学院教授）	今村　啓爾（東京大学大学院教授）
5	縄文文化の実像	縄文文化の展開過程を概観するとともに、その特質を世界の先土器文化から新石器文化へ転換のあり方と比較し、縄文文化の世界史的位置づけを試みる。	同　上	同　上
6	弥生文化の成立	水田稲作に基礎を置く弥生文化の成立過程を、東アジア史的視点で考える。弥生人の成立や縄文人との相違にもふれる。日本列島の初期農耕文化の特質を明らかにする。	宇野　隆夫（国際日本文化研究センター教授）	宇野　隆夫（国際日本文化研究センター教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	弥生時代の社会と文化	最近の考古学的調査の成果にもとづき、激動の時代であった弥生時代の人びとの生活と文化の実像をわかりやすく示す。銅鐸など青銅製祭器から想定される弥生人の精神生活にもふれる。	宇野　隆夫	宇野　隆夫
8	弥生時代から古墳時代へ	弥生時代から古墳時代への転換を、特に大型墳丘墓の変化のあり方から考える。特に東アジアとかかわりをも踏まえて、政治的社会の形成と倭国の成立にもふれる。	白石　太一郎	白石　太一郎
9	古墳時代の社会と文化	最近の考古学的調査の成果を踏まえて、古墳時代の人びとの生活や精神文化の実像を示す。5 世紀初頭以降の東アジア文化の本格的な受容とその歴史的背景や文化史的意味にもふれる。	同　上	同　上
10	古墳時代から飛鳥時代へ	古墳の終末の課程、大規模な都宮の造営、仏教文化の発展などから、日本列島における中央集権的な古代国家と古典文化の形成過程を、東アジアとの関わりから考える。	同　上	同　上
11	律令時代の社会	日本の律令古代国家の構造や支配の仕組みを考古学の研究成果にもとづいて考える。律令国家の世界史的位置付けや、それがその後の日本の歴史に与えた影響についてもふれる。	宇野　隆夫（国際日本文化研究センター教授）	宇野　隆夫（国際日本文化研究センター教授）
12	律令社会の産業と文化	最近の考古学の成果にもとづき、律令時代におけるさまざまな生産活動や流通の仕組み、さらに生産に従事する人びとのあり方など、この時代の人びとの生活の実態や文化のあり方にふれる。	同　上	同　上
13	中世の人びとのくらし	考古学の調査・研究が、中世史の研究にも大きな役割を果たしていることを示す。各地の発掘の成果から明らかにされた、中世の人びとの暮らしや文化の実相を示す。	小野　正敏（国立歴史民俗博物館助教授）	小野　正敏（国立歴史民俗博物館助教授）
14	中世の社会	考古学の立場から、中世を特徴づける都市をめぐる問題、さらに東国と西国の相違などを具体的に示し、中世社会の特質を鮮明にする。また中世から近世への転換についてもふれる。	同　上	同　上
15	もう二つの日本文化	縄文時代以降、北海道と琉球列島は、本州・四国・九州とはまた異なった歴史を歩む。考古学が明らかにした北と南のもう二つの文化や、それらと中の文化の関わりについて述べる。	藤本　強（国學院大学教授）	藤本　強（国學院大学教授）

＝日本の古代（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　佐藤　信（東京大学大学院教授）　〕

全体のねらい

日本列島の古代史像は、様々な新資料の発見によって変わりつつある。活発に越境した国際関係、掘り起こされた各地域の歴史や古代都市の実像が明らかになり、多元的に古代史が見直されている。こうした研究動向をふまえ、東アジアの国際関係のもと史料と史跡に焦点をあてながら、あたらしい日本列島の古代史をたどりたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	史料と史跡が語る古代史	文献・出土文字史料や遺跡・遺物など古代史が対象とする多様な歴史資料を紹介し、考古学など学際的な視野の必要性を語る。また、国際関係、中央と地方の関係、古代都市像などをめぐり、一元的にとらえられない日本列島の古代史像の新動向を整理する。	佐藤　信（東京大学大学院教授）	佐藤　信（東京大学大学院教授）
2	邪馬台国の時代	『漢書』『後漢書』「魏志倭人伝」が伝える古代社会像と、集落・祭祀・戦いをめぐる弥生時代の新しい発掘調査成果とをつき合わせ、弥生時代の列島の社会像を提示する。「魏志倭人伝」・吉野ヶ里遺跡・加茂岩倉遺跡などの史料と史跡に焦点をあてる。	倉本一宏（駒沢女子大学教授）	倉本一宏（駒沢女子大学教授）
3	地方豪族と倭国の大王	古墳時代の鉄剣銘文や「宋書倭国伝」が語る列島世界を明らかにし、磐井の戦いにも焦点をあて、５～６世紀の地方豪族と大王の関係を、国際関係の中で複眼的に見直す。稲荷山古墳鉄剣・「宋書倭国伝」・大山古墳・三ツ寺遺跡などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
4	飛鳥の王権	７世紀前半の大王推古時代を中心に、隋・唐が成立する国際関係の中で、蘇我氏や厩戸王（聖徳太子）の政治像や、仏教受容（寺院の建立）などの文化動向を明らかにし、倭王権の支配構造を整理する。『隋書』・飛鳥寺などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
5	律令国家の形成	７世紀後半の緊張する国際関係下、「大化改新」、白村江の敗戦、壬申の乱を経て天武・持統天皇により藤原京・律令が作られ律令国家が形成される過程を、地方豪族の動向と併せたどる。『日本霊異記』・木簡・藤原京・寺町廃寺などの史料と史跡に焦点をあてる。	佐藤　信	佐藤　信

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	奈良時代の政治史	奈良時代の変乱があいつぐ政治史を、皇位継承を軸にしながら藤原氏や他氏族の動向をたどり、この時代が貴族たちにとって決して安穏な時代ではなかったことを明らかにする。『続日本紀』・恭仁京・紫香楽宮・難波宮などの史料と史跡に焦点をあてる。	佐藤　信	佐藤　信
7	古代の宮都と地方官衙	平城宮・平城京や長屋王邸宅の生活やその経済基盤を、木簡や発掘成果から明らかにし、国司による地方支配に注目しつつ、国府・郡家などの地方官衙と在地の社会との関係について整理する。長屋王家木簡や平城宮・国府・郡家などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
8	遣唐使と天平文化	遣唐使の困難な行程を吉備真備などの人物からたどり、彼らがもたらした政治・文化を位置づけ、中央の東大寺大仏・正倉院や地方寺院遺跡などの文物から文化的広がりを考える。『東大寺要録』・正倉院・大宰府跡・国分寺などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
9	平安王朝への道	奈良時代の天武系にかわる天智系の新しい皇統の登場、桓武天皇による対蝦夷戦争と新都造営、そして桓武晩年の徳政論争による両者の停止など、平安新王朝確立への歩みを概観する。『続日本紀』・多賀城・長岡京などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
10	平安京とその文化	嵯峨天皇による新たな政治・文化の展開と平安京の確立を整理し、都市平安京の成熟や平安新仏教やカナの展開など、その後の日本文化に影響を与えた平安初期の文化について明らかにする。『池亭記』・平安京・東寺などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
11	藤原北家の台頭	９世紀半ばからの藤原北家の台頭を、相次ぐ他氏排斥事件とともに整理する。天皇と「前期摂関」との関係を軸としつつ、宇多天皇時代の政権構造や菅原道真左遷事件など、摂関政治に至る政治過程を整理する。『伴大納言絵巻』などの史料と史跡に焦点をあてる。	同　上	同　上
12	摂関時代の政治と文化	摂関政治の構造を地方支配のあり方をふくめて概観し、摂関時代の貴族の政務や生活のあり方を紹介する。摂関と天皇との関係の実情や、国風文化の意義についても明らかにする。『小右記』・『源氏物語絵巻』・平等院（寝殿造り）などの史料と史跡に焦点をあてる。	佐々木恵介（聖心女子大学教授）	佐々木恵介（聖心女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	受領と地方社会	１０世紀から地方支配の要となった受領に焦点をあて、受領の任国支配、受領と地方豪族との関係などについて明らかにしつつ、承平天慶の乱など中央と地方との関係も概観する。尾張国郡司百姓等解・『時範記』・『将門記』・国府などの史料と史跡に焦点をあてる。	佐々木恵介	佐々木恵介
14	院政の時代	後三条天皇から院政に至る政治過程を整理し、院政期の院・天皇・摂関・受領たちの関係に焦点をあてて政治構造を明らかにするとともに、浄土教・平泉などこの時代の文化について考える。『今昔物語』・鳥羽・平泉などの史料と史跡に焦点をあてる。	同上	同上
15	日本列島の古代史	日本列島の古代史を律令国家一元論で見るのではなく、蝦夷・北海道の歴史や琉球における統一国家の形成を視野に入れた上でとらえ直す観点を提示する。そして、講義全体のまとめを行う。	佐藤　信	佐藤　信

＝中世日本の歴史（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　五味　文彦(東京大学教授)〕
〔主任講師：　本郷　和人(東京大学助教授)〕

全体のねらい

日本中世の歴史を新たな視点から探るとともに、中世社会が現代の社会といかに関わっているのかを考える。その際、中世社会を考察してゆくための材料となる史資料の類(文書、絵画資料、考古資料)の扱い方について特に考え、中世社会についての基本的な知見を提供する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	入門・中世日本	中世社会が日本の歴史上にどのような位置にあるのかを考え、その研究の意義について触れる。そのために時代の特質や時代区分の問題、さらに素材となる史資料の性格について考える。	五味　文彦(東京大学大学院教授)	五味　文彦(東京大学大学院教授)
2	中世の政治の枠組み	中世社会の枠組みがいかに形成されてきたのかを、院政時代から鎌倉時代にかけての政治の流れから考える。鎌倉幕府の成立にともなって日本社会の政治の仕組みは大きく変わったが、そのことの意義を探る。	同　上	同　上
3	武士の社会を探る	中世社会の新たな主役となった武士を軸にして、それをとりまく社会の在り方を武家政権の展開のなかで探る。	同　上	同　上
4	中世の文化と宗教	中世には新たな宗教活動が広がり、文化も違った様相を示すようになった。その動向を宗教者の活動や芸能者、歌人の動きから考察する。さらに文化の地域性にも目を配って、鎌倉時代の文化の特質や位置を探る。	同　上	同　上
5	対外関係と社会の転換	蒙古襲来により東アジア世界は流動化していった。中世において対外関係がどのような形で列島社会に影響をあたえたのか。政治的、文化的、そして経済的な側面についてそれぞれ探る。	同　上	同　上
6	南北朝の動乱	後醍醐天皇と足利尊氏の「謀叛」とによって、鎌倉幕府は瓦解する。建武政権も須臾にして潰え、足利幕府においては尊氏と直義の兄弟が全国を二分して相争う。大軍が東西に往き来したこの時代、人々が何を求めて戦ったのかを考える。	本郷　和人(東京大学助教授)	本郷　和人(東京大学助教授)
7	室町幕府と将軍権力	足利将軍家は京都に居を定め、新しい国家秩序の建設を試みた。それは専制よりも合議を、農業よりも商業を、東国よりも西国を重視した、新しい国のあり方であった。研究史のうすい室町幕府の構造について、鎌倉や江戸の幕府と比較しながら、考えていく。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	生活文化の誕生	室町文化は生活に根ざした文化であり、日本文化の源流であるといわれる。しかし、「わび・さび」に代表される枯淡世界の登場の前提には、舶来物崇拝があり、絢爛豪華への憧憬があった。和風文化誕生までの経緯を、社会の変動を参考にしながら追いかけてみよう。	本郷　和人	本郷　和人
9	中世の村落を訪ねて	村落での生活の実像は、史料の制約もあってなかなか把握できない。この回では、紀伊国にあった高野山領名手荘と、前関白九条政基が下向した和泉国日根野荘を素材として、在地の人々の生活の様子を復元してみたい。	同　上	同　上
10	下剋上の世へ	伝統や権威の衰退は実力あるものの台頭をうながし、「下ガ上ニ剋ツ」、下剋上の世が到来した。将軍は大名に倒され、大名は家臣に弑された。農民も武士の支配を拒否して蜂起した。応仁の乱が起こり、統一権力が崩壊する過程を整理してみよう。	同　上	同　上
11	古文書を読み解く	歴史学が科学であるために、歴史解釈はたえず原史料に立ち戻らねばならない。原史料の代表が古文書であり、この回では古文書の骨格を分かりやすく説明する。公家の文書の特徴とは何か、公家文書と武家文書の関係は如何なるものかを理解してほしい。	同　上	同　上
12	中世の貨幣と経済	中世には金属貨幣が初めて全国的かつ本格的に流通し、それを基盤に独特の信用経済が発達した。この時代の経済の実相を紹介しながら、その背景にある中世社会の特質についても考えてみたい。	中島　圭一（慶應塾大学助教授）	中島　圭一（慶應塾大学助教授）
13	戦国社会の開幕	応仁の乱後も、室町幕府は全国支配をあきらめたわけではなかった。支配再編を主導した細川政元や、彼と深く関わり合った伊勢宗瑞（北条早雲）の動向を中心に、全国政権の解体と地方公権の分立、そしてそれとともに進行した列島社会の変動を追う。	同　上	同　上
14	戦国大名の実像	一口に戦国大名と言っても、それぞれを取り巻く地理的環境や歴史的経緯により、多様な個性を持っている。武田と後北条という互いに隣接する大名を対比しつつ、戦国大名の実像に迫っていく。	同　上	同　上
15	中世社会と現代	はるか遠くの時代である中世の社会を学ぶことの意味を改めて考える。国家の姿が漠然としてあった時代、混沌と戦乱とが相次いだ時代だが、他方で民衆は活気に満ち溢れていた。自然との調和を考え、自らの生き方を懸命に模索した中世の人々の動きを改めて考え、今後の研究について考える。	五味　文彦	五味　文彦

＝近世日本の歴史（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　高木　昭作（放送大学教授）〕
〔主任講師：　杉森　哲也（放送大学助教授）〕

全体のねらい

30年、40年前に高校で習った近世史、また現在の常識としての近世史と、研究の最先端の近世史では、どこがどう違うか。近世史の全体像、対外関係、身分制度、農村、都市などの諸分野でわかりやすく説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	近世とは	(1) この講義15回全体のねらいと、分担者によるそれぞれ3回の講義の内容について簡単に説明する。 (2) 江戸時代の家族（とくに農村）について 現在のわれわれの家族に近い家族が成立し、農村の主流になったのは、16世紀後半から17世紀初頭のことである。それ以前のいわゆる複合大家族と、この、いわゆる単婚小家族との内容の差、前者から後者が成立する過程、などについて、第二次大戦後の学説史を紹介する形式で説明する。	高木　昭作（放送大学教授）	高木　昭作（放送大学教授）
2	将軍権力と天皇の権威	(1) 幕府の存立は、日本的華夷思想＝神国観を前提としており、その意味で天皇は幕府にとって不可欠の存在であったことを指摘する。 (2) 天海僧正作「東照大権現縁起」などを通じて神としての家康の性格、役割を考える。 (3) 近世を開幕させた「惣無事令」・太閤検地と天皇イデオロギーの関連について考える。	同　上	同　上
3	下克上から門閥へ	(1) 下克上から門閥へ：近世の入り口が下克上であり出口は門閥制度であったことを指摘する。なお、門閥制度と、第二次大戦後の「民主化=反封建運動」との関連についても言及する。 (2) 上記の変わり目が、家光治世の晩年であったことを指摘したのち、それ以前に頻発したいわゆる「初期御家騒動」について述べる。 (3) 家光による家康＝東照宮の神格化の推進と、門閥制度の成立との関連について考える。	同　上	同　上
4	統一政権の成立と対外関係	16世紀後半の日本列島を取りまく政治的・経済的状況を前提として確認した上で、豊臣秀吉と徳川家康の対外政策の、共通する面と異なる面を見て行く。	鶴田　啓（東京大学助教授）	鶴田　啓（東京大学助教授）
5	「鎖国」の意味	近世日本の対外関係を特徴づけるとされる「鎖国」とは何だったのか。(1)「鎖国」という言葉、(2)鎖国制研究の歴史、(3)「鎖国令」の内容とその意義、３つの面から考える。	同　上	同　上
6	近世日本の「四つの口」	近年の研究成果をふまえながら、長崎以外の場所（「口」）での外国や周辺地域との関わり、とくに朝鮮・琉球・アイヌ民族との関係について取り上げる。	同　上	同　上
7	身分的周縁と勧進の併存	①近世の身分制を「士農工商」と捉えるのでよいか？近年それを問い直す「身分的周縁」の視点からの研究が進展している状況を紹介。 ②以下の話の舞台となる都市大坂について簡単に紹介した上で、「身分的周縁」の視点から注目されている宗教的勧進者の併存している様子を願人坊主を中心に見ていく。	塚田　孝（大阪市立大学大学院教授）	塚田　孝（大阪市立大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	大坂の非人集団－その内部構造と社会的諸関係－	以下の２回では、勧進の併存の一端を構成する非人集団について、身分論と都市論の交錯するところで具体的に考えていく。 ①大坂の非人集団の存在形態（四ヶ所垣外／長吏－小頭－若き者、弟子） ②天王寺垣外の源右衛門が貸銀の返済を求めて、同垣外の金兵衛を訴えた一件から見えてくる垣外仲間の組織と生活状況、および外部との社会関係について見ていく。	塚田　孝	塚田　孝
9	大坂の非人集団の展開と由緒	天王寺垣外の集団は、聖徳太子と四天王寺に結びつけた自らの由緒をつくりだしていったが、それは彼らの集団の展開と密接につながっていた。 ①寛政８（1796）年の四ヶ所全体への由緒の拡張 ②寛文 10（1670）年の天王寺垣外の施行院建立と由緒の形成 ③由緒の社会的意味と機能	同　上	同　上
10	18 世紀の村をながめる	１８世紀後半の村絵図から、近世の村の要素を抽出し、まず近世の村の景観を想像的に復元する楽しさを知る。	久留島　浩（国立歴史民俗博物館教授）	久留島　浩（国立歴史民俗博物館教授）
11	近世の村の自画像	村指出明細帳から、近世の村人が描く自画像に迫り、前章の村絵図からの抽出とあわせて、近世の村の構成要素を読みとる。次に、近世社会で差別を受けてきた「かわた」身分の人たちの村で、政治的に自立するために、そうした要素を必要としていたことを示す。	同　上	同　上
12	近世の村の特徴	前２章で、村絵図・村差出明細帳から読みとった村の構成要素に、絵画資料（絵農書）のなかから、近世の村人の姿を加味することで得られた近世の村のイメージを、これまでの教科書から理解されてきた近世の村のイメージと比べる。中世の惣村との関わり、近世の村の「自治」についても考える。	同　上	同　上
13	城下町と三都	近年の近世都市史研究は多方面で大きく進展しているが、そうした研究動向の一つとして城下町研究の進展が挙げられる。本章では、城下町の問題を取り上げ、城下町をめぐる藩の存立構造について、①領国における城下町の位置、②幕府直轄の中央都市である三都との関係、という観点から検討することとしたい。具体的には、近世初期の秋田藩を事例として取り上げ、三都の中でもとりわけ京都との関係に絞って検討する。	杉森　哲也（放送大学助教授）	杉森　哲也（放送大学助教授）
14	近世京都の成立	京都は、延暦 13（794）年の平安京遷都以来、1200 年の歴史を有する都市である。しかし、現代の京都は、単純に平安京が継続し発展した都市ではない。現代の京都の基盤は近世の京都にあり、その基本的な骨格を形成したのが、16 世紀末に豊臣秀吉が行った「京都改造」と呼ばれる一連の都市政策である。本章では、前章で見た近年の城下町研究の成果を受け、この京都改造について検討する。	同　上	同　上
15	町の展開	本章では、これまで見てきた城下町の基本的な都市性＝都市的要素の中から町人地を取り上げ、それを構成する基礎的な単位である町について検討する。町は、城下町のみならず近世の都市における支配・自治の基礎単位であり、村と並んで近世社会における最も基本的な社会集団である。本章では、京都の冷泉町という個別の町を取り上げ、近世を通しての展開過程をやや詳しく検討する。	同　上	同　上

＝近代日本と国際社会（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：小　風　秀　雅（お茶の水女子大学教授）〕

全体のねらい

幕末の開国・開港によって開始される日本の近代化は、西洋化に止まらない国際化・世界化（グローバリゼーション）の過程であった。欧米・アジアとの国際関係の変化を通して日本の近代化を考えていく

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	欧米外圧の再考	近年欧米列強のアジア政策の実態の研究が進展するなかで、その歴史的現実とアジアの側のイメージとのギャップが明らかとなってきた。西洋とアジア双方の視点から、ウエスタン・インパクトの実態を考える。	小風　秀雅（お茶の水女子大学教授）	小風　秀雅（お茶の水女子大学教授）
2	天皇の外交儀礼	欧米との外交関係の締結は、維新後、君主としての天皇の外交儀礼を必要とした。欧米の外交官との謁見は、見える君主としての新たな天皇像の形成でもあった。外交儀礼を通じて、日本の国際意識の形成過程を考える。	ジョン　ブーリン（ロンドン大学助教授）	ジョン　ブーリン（ロンドン大学助教授）
3	交通革命と東アジア	国際社会との関係といっても、時期によってその実態は大きく異なる。欧米と日本との関係が急速に接近したのは１８６０年代以降、とくに１８７０年代に入ってからである。国際化の前提となる技術革新とそれにともなう社会的変化を明らかにする。	小風　秀雅	小風　秀雅
4	対日外交の担い手たち	ハリス、オールコック、ロッシュ、パークス、など、幕末・維新期の欧米外交官は個性的な人物が多かった。彼らが対日外交に果たした役割をその個性とともに考える。	吉良　芳恵（日本女子大学教授）	吉良　芳恵（日本女子大学教授）
5	自由貿易と国益	近代に成立した外交関係は何よりもまず経済・貿易関係を主としたものであった。横浜、長崎、函館などの開港場で展開された自由貿易が、日本経済に及ぼした影響について考える。	井川　克彦（日本女子大学教授）	井川　克彦（日本女子大学教授）
6	アジアの国際秩序と日本	アジアの伝統的国際秩序である中国を頂点とした攘夷秩序は、明治初期の日本外交にとって大きな壁となった。東アジアの国際関係の焦点となった朝鮮と琉球をめぐる日中関係について考える。	小風　秀雅	小風　秀雅
7	蚕糸業と世界市場	日本の輸出貿易を支えたのは生糸貿易であった。生糸は世界的に東アジアの特産物であり、その点で日本が優位を占めた輸出品であったが、それを拡大したのは生糸産地の貿易商たちであった。彼らの活動を通して日本と世界の関係を探る。	井川　克彦	井川　克彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	海外情報戦略の展開	海外情報に敏感であった日本は、在外公館や商社のどの情報収集活動により積極的に情報を収集していた。海外の経済活動を通じて世界と向き合おうとしていた日本社会について考える。	本宮　一男（横浜市立大学教授）	本宮　一男（横浜市立大学教授）
9	憲法発布と国際関係	日本の近代化は、政治（憲法体制の確立）、経済（産業革命）、社会（国民化―ナショナル・アイデンティティーの確立）の３つの柱によって達成される。第一と第三の柱における国民化の実態を、国民の形成の視点から考察する。	小風　秀雅	小風　秀雅
10	日本文化の国際化－ジャパノロジーの誕生－	幕末以来、ジャポニズムを筆頭とする日本への関心の高まりのなかで、日本研究が開始された。欧米が日本に寄せた関心のあり方を通じて、日本と西洋との係り方について考える。	吉良　芳恵	吉良　芳恵
11	日清戦争と20世紀の国際関係	日清・日露の戦争がアジアおよび世界に与えた影響を考える。とくにアジア世界の近代化に対して日清戦争が及ぼした影響は大きい。流動化するアジア情勢のなかで、日本がどのような位置を占めていたのかを考える。	小風　秀雅	小風　秀雅
12	大日本帝国の完成と第一次大戦	大国ロシアとの戦争に勝った日本は、極東アジアの盟主となり、幕末以来追い求めてきた帝国国家として完成した。さらに辛亥革命、第一次大戦は日本に一層の自由行動を許容した。しかし、この時こそ国際社会から日本の真価が問われることとなった。	季武　嘉也（創価大学教授）	季武　嘉也（創価大学教授）
13	ワシントン体制と日米対立の予感	日露戦後、いよいよビッグパワー・アメリカがアジアに進出すべく中国市場に参入してきた。その最大ライバルが日本である。加州移民、対中２１か条要求、シベリア出兵と対立を繰り返す日米間の将来像を巡って様々な意見が噴出する中、ワシントン体制が成立していく。	同　上	同　上
14	通商問題と経済外交	戦間期の日本は、中東やアフリカなどの新たな海外市場を開拓する。一方、通商自由化を求めて国際的な経済外交を展開していた。その後の経済摩擦の発生を見通しつつ、日本が抱えていた通商問題について考える。	本宮　一男	本宮　一男
15	両大戦間期の日中関係	近代の日中間の国際関係を集約した都市が、大連と上海である。大連は日本の満州経営の拠点、上海は欧米の中国進出の拠点であるとともに日本の経済進出の根拠地であった。この両都市との関係のあり方が日中関係に果たした役割について考える。	小風　秀雅	小風　秀雅

＝　韓国朝鮮の歴史と社会（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　吉田　光男（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

古代から近現代までの朝鮮半島の歴史を、政治・経済・社会・文化がもっている特色に焦点をあてて概観する。日本や中国など周辺諸地域との政治関係や文化交流に注目し、朝鮮半島の歴史が、他地域とは異なる特色をもっていることを明らかにするとともに、東アジア国際社会の中で他地域の歴史と相互に連関しあいながら展開されてきたことを考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	韓国朝鮮の歴史と社会を学ぶこと	朝鮮半島と日本とは古代から密接な関係をもっていた。日本において韓国朝鮮の歴史と社会を学ぶことの意味を現代的な視点でとらえ、本講座を学習するにあたっての入門とする。	吉田　光男（東京大学大学院教授）	吉田　光男（東京大学大学院教授）
2	古代国家の形成と展開	古朝鮮から新羅滅亡までの千年以上にわたる古代国家の形成と、その展開過程を論じる。日本列島や中国大陸の動向に留意しながら、朝鮮半島に展開した古代国家の特質に力点を置いて分析していく。	李　成市（早稲田大学教授）	李　成市（早稲田大学教授）
3	古代朝鮮の社会と文化	朝鮮半島における古代国家の形成過程で誕生した高句麗、百済、加耶、新羅などの諸国の社会と文化について、中国大陸や日本列島との相互関係に留意しながら検討する。	同　上	同　上
4	高麗の政治・社会・文化	10世紀に建国された高麗500年間の歴史を、政治過程・社会動向・文化的特色を中心として論じる。契丹など周辺勢力から圧迫を受け、13世紀にはモンゴル（元）の支配を受けることになるが、一方ではこの時代、高度な仏教文化が発達した。このような高麗の歴史社会的独自性を見てみる。	六反田　豊（東京大学大学院助教授）	六反田　豊（東京大学大学院助教授）
5	朝鮮王朝の建設・発展	14世紀末の李成桂による王朝の創設から15世紀までの朝鮮時代前期の歴史を、政治過程を中心として論じる。独特の文字ハングルを創制し、日本・中国など周辺地域とも安定した関係を築いた点などに焦点を当て、この時代の様相を概観する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	朝鮮時代後期の政治	16世紀末から19世紀半ばまでの朝鮮時代後期の歴史的特色を、政治過程を中心としてみていく。日本軍と女真（後金、清）軍の侵入によって危機に立たされた時期から、改革政策を実施する時期までを展望する。日本や清との外交関係にも留意して、東アジア国際秩序の中における韓国朝鮮の位置について考えている。	吉田　光男	吉田　光男
7	朝鮮時代後期の社会と文化	朝鮮時代後期には、韓国朝鮮は総体的に安定した時代をむかえる。朝鮮王朝時代後期の社会関係や文化がもっていた特色について論じる。経済変化が社会に与えた影響に着目しながら、人々が生活の中から作り出してきた社会文化を論じていく。	同　上	同　上
8	開国と開化の時代	1876年、朝鮮は日本との間で日朝修好条規を締結して「開国」した。この時代、開化政策によって朝鮮が変貌していく様相を、東アジア世界の近代的再編成という文脈の中で探っていく。時期としては、朝鮮半島をめぐる日本・清の対立が日清戦争として火を噴くころまでを見ていく。	月脚　達彦（東京外国語大学助教授）	月脚　達彦（東京外国語大学助教授）
9	近代化と民族運動	日清戦争から日露戦争までの時期を、近代国家の形成過程を中心として見ていく。上からの改革は挫折を余儀なくされ、地方では民衆反乱が頻発した不安定な時代となる。この時代を、近代化政策と民衆の動きを通して描いてみる。	同　上	同　上
10	植民地化と抵抗運動	1905年、第2次日韓協約によって保護国とされた朝鮮は、1910年、ついに日本の完全な植民地とされ、「武断統治」とよばれる日本の植民地支配下におかれるようになる。日露戦争から1919年の三・一運動までの時期について、日本の侵略・支配と、それに対する朝鮮側の反応に焦点を当てて見ていく。	同　上	同　上
11	植民地期の社会	1910年以降、「武断政治」として開始された日本の植民地支配は、三・一運動を経て、より巧妙な「文化政治」に転換する。異民族支配下で「近代」をむかえた朝鮮社会の動きについて、民族運動の展開と「近代性」の形成に留意しながら考えていく。	並木　真人（フェリス女子大学教授）	並木　真人（フェリス女子大学教授）
12	戦時体制下の朝鮮	満州事変後大きく動揺する朝鮮に対して、朝鮮総督府は「皇民化」政策を実施したが、結局敗戦により植民地支配は崩壊した。しかし、「解放」はもうひとつの戦争を招来した。戦争遂行のために変容した社会の実相を、民衆の対応を含めて明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	分断から現代へ	朝鮮戦争の終結により南北の分断が強化された朝鮮半島において、人々は新たな苦難に直面することになる。以後、南北二つの地域は独自の国家を建設し、社会の分裂は深まっていく。このような現代史の歩みを国際情勢の変化と合わせて論じていく。	並木　真人	並木　真人
14	韓国の民俗世界	韓国朝鮮は中華文明の周辺にありながら独自の文化を形成してきた。韓国朝鮮の多様な民俗文化について、大伝統と土着伝統とを対比しながら、年中行事・通過儀礼・宗教などの現代社会におけるあり方を論じていく。	秀村　研二（明星大学助教授）	秀村　研二（明星大学助教授）
15	現代韓国人の社会関係	現代韓国人たちは、儒教という伝統によって意味づけられた父系血縁関係を基盤の一つとして社会関係を結んでいる。一方で、彼らはそれ以外の様々な横の関係を結ぶことで社会活動の幅を広げている。このような現代韓国の社会関係について、家族・親族とのインフォーマルな関係を中心にして論じる。	同　上	同　上

＝東アジアの中の中国史（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　浜口　允子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　岸本　美緒（東京大学教授）〕

全体のねらい

現在の中国には漢民族のみでなく、モンゴル・チベットなど多くの民族が住んでいる。また中国の周辺には、韓国・日本など、中国文明の強い影響のもとで形成された国家が存在する。中国の歴史は、これらの様々な民族・国家が交流するなかで展開してきた。このような相互の交流に注目しつつ、中国史の流れを考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国とは何か	現在の中国は、世界で３番目の広さの領土をもち、55の少数民族を含み、世界第一の人口を擁する巨大な国である。このような中国の地理的・民族的な範囲はいつごろ定まったか、そもそも「中国」という言葉はいつごろ生まれたか。簡単に振り返ってみたい。	岸本　美緒（東京大学教授）	岸本　美緒（東京大学教授）
2	中国文明の形成	黄河や長江など大河の流域で農耕が始まり、小さな集落は都市国家へと発展し、さらに都市国家が連合して大きな国家が作られてゆく。政治的な統合とともに、自らを文明の中心とみなす「華夷思想」が形成されてくる。中国のこうした世界観の特色につき、考える。	同　上	同　上
3	農耕社会と遊牧社会	中国で秦・漢の大帝国が形成されるのとほぼ同時に、北方の匈奴も大きな国家を作り上げる。農耕を基礎とする中国の国家システムと遊牧国家のシステムとはどのように違うのか。秦・漢時代を中心として、農耕社会と遊牧社会との対立と交流について述べる。	同　上	同　上
4	分裂と多元化	漢の滅亡後、中国は分裂の時代に入るが、この分裂時代は、周辺民族との文化的融合や朝貢関係の形成によって、中華世界の新たな拡大が準備された時代でもある。日本や朝鮮の国家形成の背景をなしたこの時代の意味について考える。	同　上	同　上
5	隋唐帝国と東アジア	中国を再統一した隋・唐は、周辺諸国と広く国際関係を結び、朝鮮や日本など多くの国々が隋・唐に朝貢し、その進んだ制度を取り入れて国家体制を整備した。隋・唐を中心に政治的にも文化的にも強いまとまりを見せていたこの時期の東アジア世界の状況を解説する。	同　上	同　上
6	北方民族の台頭	唐の影響力が弱まるとともに周辺民族は自立への動きを見せ、北方民族の中国進出が始まった。遼・金の華北進出に続き、モンゴルは中国全土を支配下に入れてユーラシアを横断する大帝国を建設した。このような動きのなかで各地域の社会がどのような変容を見せたのか、様々な角度から考えてみたい。	同　上	同　上
7	元から明へ	ユーラシアに大帝国を築き上げたモンゴルの時代は、中国の歴史においてどのような意義をもったのか。元のあとに建国した明は、元朝支配のどのような点を受け継ぎ、どのような点を変化させていったのか。東アジア全体の動きに注意しながら、元から明への推移を考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	明末の東アジアと清朝の成立	16世紀は、国際商業の活発化に伴い、従来の秩序が大きく動揺した時期である。そのなかで、国際貿易に深くかかわる新しい軍事勢力が成長する。モンゴルの侵攻、倭寇の活動、日本の統一、満州政権の成長など、この時期の動きをお互いに関連づけて考えてみたい。	岸本　美緒	岸本　美緒
9	清朝の平和	清朝政権は、明の滅亡に乗じて中国を占領したのちも、内陸方面に領土を広げ、今日の中国の原型となる広大な領域を支配した。この時期、日本や朝鮮も独自の特色をもつ社会を発展させた。清朝を中心とした国際秩序の性格と、それぞれの国の特色について考える。	同　上	同　上
10	近世の世界と中国	明末から清代にかけての時代は、ヨーロッパでも激動の時代であり、戦争や革命のなかで、新しい国家や国際秩序がつくられていった。世界全体の動きと中国史・東アジア史の流れはどのようにかかわるのか。様々な説を紹介しながら、考えてみたい。	同　上	同　上
11	東アジアの近代	19世紀アヘン戦争を契機として新しい条約体制がしかれていくなか、東アジアの国際秩序ともいうべき朝貢関係はどのように変化したのか。その過程は国々の内政に如何なる影響を与えたのか。19世紀後半の歴史を辿りながら、東アジアの近代とは何かを考える。	浜口　允子（放送大学教授）	浜口　允子（放送大学教授）
12	近代中国のナショナリズム	王朝体制を倒し共和国をつくった後も、中国は一貫して清朝の版図を維持し続けてきた。それは、多民族の総合体である「中華民族」という考え方の創出と係わるとされる。民族問題ともあわせて、改めて近代中国のナショナリズムについて考えてみよう。	同　上	同　上
13	２０世紀の世界と中国Ⅰ	19世紀中国が蒙った一部主権の喪失や不平等条約の解消のために、中華民国の各政権は、国の統一と主権回復を求め、経済発展を目ざす政策をすすめた。これに対して日本や諸列強はどのように対応したのか。日中戦争と二度にわたる世界大戦を含む時代の中国と世界について考える。	同　上	同　上
14	２０世紀の世界と中国Ⅱ	1949年に建国した中華人民共和国は、世界的な冷戦構造の下で社会主義をめざし、国をあげてその体制への移行を急いだ。その独特の社会はどのようなものであったのか。またその後はどのように変貌したのか。我々の同時代史をふり返ってみよう。	同　上	同　上
15	現代中国の諸問題	21世紀はどのような時代となるのか。その世界で中国は如何なる位置を占め、東アジアでは日本、韓国朝鮮との間でどのような相互関係を築くのか。そうした問題を考えるためにも、尚、数多の問題をかかえている中国の現状を理解していきたい。	同　上	同　上

＝中央アジアの歴史・社会・文化（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　間野　英二（龍谷大学教授）〕
〔主任講師：　堀川　　徹（京都外国語大学教授）〕

全体のねらい

日本ではシルクロードなどの名で知られる中央アジアの歴史について、Ⅰ 中央アジアの歴史、Ⅱ 中央アジアの社会、Ⅲ 中央アジアの文化、という３つの大きな枠組みにそって概観し、中央アジア史の総合的な理解を深めたい。また最後に、Ⅳ 中央アジア史研究の課題について述べ、今後の研究の進むべき方向を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
Ⅰ 中央アジアの歴史		この放送の最初の５回は、中央アジアの歴史の大勢について概観する。		
1	中央アジアとは？	第１回は、この放送で取り上げる「歴史的中央アジア」の概念、その地理的特徴、民族、時代区分、研究方法などについて述べ、この放送全体への導論としたい。	間野　英二（龍谷大学教授）	間野　英二（龍谷大学教授）
2	アーリア時代（前イスラーム時代）の中央アジア	９世紀頃までの中央アジアでは、現在と異なりアーリア系の人々が活躍したので、この時代を「アーリア時代」とも呼ぶ。中央アジアの草原地帯における遊牧民の活動の開始、遊牧国家の誕生、農耕地帯におけるオアシス城郭都市国家の形成、ペルシア、中国など周辺諸勢力の進出などについて述べる。	同　上	同　上
3	テュルク・イスラーム時代の中央アジア テュルク化とイスラーム化	９世紀頃を境に、中央アジアは徐々に、主にテュルク人のイスラーム教徒が住む「テュルク・イスラーム世界」へと変貌して、そのまま現代を迎える。中央アジアに「テュルク・イスラーム時代」を出現させた「テュルク化」「イスラーム化」と呼ばれる現象について、天山ウイグル王国、カラ・ハーン朝の歴史、それに遊牧民の定住民化の問題とも関連づけて説明する。	同　上	同　上
4	中央アジアの隆盛 モンゴル帝国とティムール帝国	13 世紀にチンギス・ハーンに率いられたモンゴル遊牧民はモンゴル帝国を建国し、ユーラシア大陸の大半を支配した。また 14 世紀、テュルク化しイスラーム化したモンゴル人の子孫であるティムールは、東方イスラーム世界と北インド、南ロシアを支配した。これら２帝国およびその継承国家について述べ、このような強力な国家成立の要因と意義について考える。	堀川　徹（京都外国語大学教授）	堀川　徹（京都外国語大学教授）
5	「近代」への胎動 植民地（経験、革命、）（民族）	17-18 世紀以降停滞期を迎えた中央アジアは、やがて帝政ロシアおよび清朝の支配下に置かれることとなり、そのもとで「近代」に直面する。大国による中央アジア統治の実態とそれに対する中央アジアの人々の反応、大国の存在を前にして生じた民族的覚醒と社会的プロテスト、さらに 20 世紀のロシア革命がこの地域にもたらした影響、そして社会主義体制下における現在の民族と国家の原型の成立までを概説する。	帯谷・知可（国立民族学博物館助教授）	帯谷　知可（国立民族学博物館助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
Ⅱ	中央アジアの社会	この回から、5回にわたって中央アジアの社会について概観する。最初の3回では、中央アジアを特徴的づける草原の遊牧社会と砂漠のオアシス農耕社会、そして中央アジアにおける陸上交通路（シルクロード）の意義について述べる。		
6	遊牧社会	中央アジア北部の草原地帯に成立し、モンゴル帝国などの大帝国を建設して世界史上に大きな足跡を残した遊牧民の社会について解説する。遊牧という生活様式、部族制、遊牧国家の特徴などについて述べ、また口承文学など遊牧民独自の文化についても触れる。	堀川　徹	堀川　徹
7	オアシス農耕社会	中央アジア北部の草原地帯を本拠とした遊牧社会とは対照的に、南部の砂漠地帯には、オアシス（砂漠の中で水の得られる沃地）が造営され、そこでは定住民によって、農耕を中心に交易、産業が営まれた。ここでは、オアシスの種類、オアシスの住民、オアシス城郭都市の形態、オアシス国家の性格、遊牧社会との関係などについて述べる。	同　上	同　上
8	シルクロードと中央アジア	古来、中央アジアには「草原の道」「砂漠の道」などと呼ばれる陸上交通の幹線路（シルクロード）が存在し、東西文物の交流に大きな役割を果たした。これらの道の歴史的変遷と中央アジア社会との関わりについて、特にこの道を用いて旅を行ったのがどのような人々で、彼らが何を運んだのかという点に焦点をあてつつ検討する。	稲葉　穣（京都大学助教授）	稲葉　穣（京都大学助教授）
9	テュルク・イスラーム社会の成熟 ワクフ制度、タリーカ	9世紀頃から中央アジアは徐々にイスラーム世界に組み入れられた。そこではイスラーム法に基づいた生活が営まれ、その社会は、時代と共に、イスラーム的諸制度を成熟させてきた。本章では、王朝の交代に関わりなく、常に中央アジア・イスラーム社会の中で重要な位置を占め続けたワクフ制度（一種の寄進・喜捨の制度）とタリーカ（イスラーム神秘主義教団）を取り上げて説明する。	堀川　徹	堀川　徹
10	現代の中央アジア社会 社会主義時代からグローバル化時代へ	中央アジアにとって 20 世紀の社会主義時代とは何だったのか、その正負の遺産について検討する。そして、ソ連解体と中央アジア諸国の独立を経て、グローバル化の大きなうねりにもまれる中央アジアの市場経済化、そこに見られるイスラーム復興、新たなナショナリズムの高揚、カスピ海のエネルギー問題、環境問題など、重要な現代の諸問題について概観する。また9.11事件後の中央アジア情勢の変化にも言及する。	帯谷　知可	帯谷　知可
Ⅲ	中央アジアの文化	この回から、4回にわたって多彩な中央アジアの文化について述べる。		
11	アーリア時代中央アジアの文化 諸文化の伝播と融合	アーリア時代の中央アジアは、周辺文化圏の先進的文化を受け入れ、それらを融合し、さらにこの融合文化を周辺諸地域に伝える役割を果たした。仏教などの諸宗教、石窟寺院などの宗教芸術、製紙法などの科学技術などについて述べ、古代の中央アジアが東西文化交流の上で果たした重要な役割について考える。	稲葉　穣	稲葉　穣

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	テュルク・イスラーム文化	10世紀ころイスラームを受容した中央アジアのテュルク民族は、テュルク語とイスラームを核とする独自のテュルク・イスラーム文化を創出した。カラ・ハーン朝時代に出現したマフムード・アル・カーシュガリーによる世界最初のテュルク語・アラブ語辞典や大侍従ユースフによる君主のための道徳指南書を例に、この文化の成立について述べ、テュルク民族にとってのこの文化の意義について考える。	間野　英二	間野　英二
13	ティムール朝文化	中央アジアのイスラーム文化は、15世紀、ティムール帝国の2つの首都であるサマルカンド、ヘラートを中心に、中央アジア史上最高の水準に達した。建築、庭園、細密画、書道、製本技術、天文学などを例に、「ティムール朝文化」と呼ばれるその華麗な文化の諸相を探り、この文化の特徴と、この時代に何故このような高度の文化が誕生したかについて考える。	同　上	同　上
14	中央アジアの文学遺産 『バーブル・ナーマ』と『デデ・コルクトの書』	中央アジアの文学遺産の中から二つの代表的な作品について説明する。まず16世紀のバーブルが著した回想録『バーブル・ナーマ』を取り上げ、そこに見られる率直な記述や豊富な内容など、この書物の魅力について紹介する。次に遊牧民の間に語り伝えられた口承文学の一つである『デデ・コルクトの書』について紹介し、そこに反映された遊牧民の世界観や価値観などについて考える。	同　上	同　上
Ⅳ　中央アジア史研究の課題		この最終回では、中央アジア史研究の課題と今後の研究の進むべき方向について考えてみたい。		
15	中央アジア史研究の残された課題	以上、14回にわたって概観した中央アジアの歴史については、実はなお不明の点も多い。この放送でも紹介したイスラームの諸制度や現代の中央アジアに関する研究など、新しい研究も近年積み重ねられつつあるとはいえ、中央アジア社会史や文化史の面における研究の不足は否めない。このような中央アジア史研究の残された課題について考える。	堀川　徹	堀川　徹

＝東南アジアの歴史（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　桜井　由躬雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

経済的に強い関係をもちながら、東南アジアの歴史は高校世界史のなかでとりあげられることが少ない。その歴史、文化への知識をもつことなく、多くの日本人が、東南アジアに旅立っていく。本講では、東南アジアのもつ特殊な自然環境、地理環境が東南アジアに独自な地域性を与え、独自な歴史世界をつくっていく過程を論ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	東南アジア概念の成立	東南アジアという言葉は、戦後の国際関係の中で定着した政治的な用語であるが、東南アジアは自然的文化的にはまとまった一つの地域である。東南アジアの自然から生まれた文化が外の文明といかに邂逅し、いかに複合して新しい文化をつくっていくかを考える。	桜井由躬雄（東京大学教授）	桜井由躬雄（東京大学教授）
2	地域としての東南アジア	東南アジアは海の熱帯である。その海域は熱帯産物を生産し、南シナ海、東シナ海、インド洋の三つの世界の海を結合する。その陸域は山地、平原、デルタと火山島からなる。海域と陸域の上をモンスーンが吹きよせる世界でもっとも高温湿潤な自然をもつ。	同上	同上
3	古代の東南アジア	青銅器文明の到来と稲作社会が生んだドンソン文化の時代に、稲を基調とする東南アジアの基層的な文化が成立した。東西の古代都市文明の発展が、東南アジアの海を活性化し、東南アジアの沿岸に港市国家が生まれ、内陸域平原に河川に沿って都市国家が作られる。	同上	同上
4	中世の東南アジア	11 世紀以降、東南アジア大陸平原部に広域ネットワークが形成され、平原とデルタ、沿海部などことなる自然環境が結ばれ、島嶼部ではマジャパヒトが諸海域の統合を開始する。外文明と複合した地域ごとの独自な文化を創り出す。	同上	同上
5	近世前期（前期交易の時代）	14 世紀末から、アジアの交易活動が活発化し、「交易の時代」が始まる。東南アジアの陸域国家群は衰退し、交易を主催するマラッカ、シャムが東南アジアの中心的な勢力として浮上する。交易ネットワークに、華人、日本・メキシコの銀、西欧勢力が参加してくる。	同上	同上
6	近世後期（後期交易の時代）	オランダ東印会社、日本市場の参加を得て交易市場は過熱化する。ベトナム、シャム、カンボジアが華人のイニシアティヴの下に大陸産物の開発、集荷、輸出システムを創り出す。スンダ海峡が開通してヨーロッパが直接市場になり、オランダのジャワ海独占が進む。	同上	同上
7	植民地の開始	17 世紀の末に交易の時代は終焉を迎え、オランダはジャワの、スペインはフィリピンの領域的な植民化をすすめる。ベトナム、シャム、ビルマは国内支配力の強化と領域の拡大を開始し、回復した中国市場とリンクした華人が大陸東南アジアの交易主体となる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	東南アジアの植民地化	大陸部は中国市場に接近し、島嶼部はヨーロッパ市場と結びつけられる。19 世紀初めにイギリスがシンガポールを建設し、大陸部と島嶼部の交易活動を一つのシステムにまとめる。フランスの参加により、シャムをのぞく東南アジアのすべてが植民地化される。	桜井由躬雄	桜井由躬雄
9	二重構造の時代	植民地化によって、諸地域はそれぞれの植民地母国に経済的、文明的に結びつけられる。領域が決定され、中心都市が建設され、電信や鉄道によって地域の集約度がたかまる。世界市場の需要にのみ対応したモノカルチュア化が始まり、都市と農村の二重構造が深まる。	同　上	同　上
10	民族主義の時代	19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、西欧化された知識人の間に独立運動が開始され、民族の概念が模索される。20 年代以降、一方でコミンテルンと結びついた社会主義運動が勃興して運動が国際化するとともに、農村部に強力な民族主義運動が展開する。	同　上	同　上
11	第二次大戦	日本軍の東南アジア占領にともない、西欧勢力の威信が没落し、東南アジアの国際性は失われ、都市の経済構造は壊滅し、青年層や農民層が大衆的な反日、また親日的民族主義運動の主体になる。二重構造は解体するが、同時に孤立化した諸地域に経済危機が起こる。	同　上	同　上
12	バンドンの夢－民族主義国家	植民地エリートたちの妥協によって平和裡に独立を獲得したビルマ、フィリピン、マレーシアでは二重構造が解決できず、長期の農民や少数民族の反乱に苦しむ。長期の独立戦争を戦ったインドネシア、北ベトナムでは経済が孤立化し、東側陣営への接近が強まる。	同　上	同　上
13	第二次インドシナ戦争	二重構造、冷戦下のアメリカの軍事的経済的圧力、地域的分裂など戦後東南アジアの苦悩は第二次インドシナ戦争に集約される。ベトナムは経済社会の社会主義化、ソ連中国の大規模援助への依存、軍事的な統一でこの矛盾を解決しようとする。	同　上	同　上
14	流血の経済発展－開発独裁	独立のもたらした経済的政治的混乱の中から、60 年代にいたってシンガポール、フィリピン、インドネシア、タイで親米政権が樹立され、独裁政府の下に経済の国際化がすすめられる。ベトナム戦争の特需の結果、これらの国々は経済成長を開始する。	同　上	同　上
15	戦場から市場へ	80 年代の第三次インドシナ戦争の終結、ベトナム・ラオスのドイモイ政策、ビルマの開放政策の結果、すべての東南アジア諸国は経済市場化による経済発展をすすめる。しかし、経済発展のギャップは再び地域と社会の二重構造を深め、各地に矛盾が噴出している。	同　上	同　上

＝古代地中海世界の歴史（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　本村　凌二（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　中村　るい（大妻女子大学非常勤講師）〕

全体のねらい

イデオロギーの対立が終焉し、それとともに文明の衝突が予告されている。事の当否はともかくとして、キリスト教文明とイスラム文明を生み出した母胎として古代地中海世界があったことは忘れるべきではない。そこには、オリエント、ギリシア、ローマを中心としながらも、多種多様な人々が人類史上最初の試みと創作を行った舞台でもあった。その壮大な文明の歴史をふりかえることによって、現代文明の源流をさかのぼるだけではなく、２１世紀の展望を開く機会にしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	地中海世界の古層（前４－３千年紀）	農耕や牧畜が広がり、灌漑農業が営まれるなかで都市が生まれ、そこに文明が誕生したと言われる。メソポタミアとエジプトにおいて、宗教と王権はいかなる関わりをもっていたか、また、文字の発明は人間の社会にどんな影響をおよぼしたか、などについて考えてみたい。	本村　凌二（東京大学大学院教授）	本村　凌二（東京大学大学院教授）
2	地中海世界の激流（前２千年紀）	鉄器と戦車の使用は、人類の歴史に多大の影響をおよぼした。それまでゆったりと流れていた歴史は急速に動きだし、諸民族の興亡がめまぐるしくなった。古バビロニア王国は崩壊し、エジプトの諸王朝も大きな動揺をくりかえしている。そうしたなかでも新しい文化が創造されていることに注目したい。	同　上	同　上
3	諸民族の波動（前２千年期末・前１千年紀初）	前２千年紀末には東地中海世界で民族移動が激しくなり、「海の民」の出現で広い地域で混乱がおこった。さらには、フェニキア人、アラム人、ヘブライ人などが姿を現し、なかには西地中海や中央アジアにまで進出する勢力もいた。地中海沿岸地域における諸民族の混迷の諸相をたどっておきたい。	同　上	同　上
4	世界帝国の出現（前１千年紀前半）	前１千年紀初頭における騎馬遊牧民の脅威と騎乗技術の普及は強大な権力を出現させることになる。アッシリア帝国は初めてオリエント全土を統合し、やがてペルシア帝国は東地中海からインダス川流域におよぶ広大な覇権を築いた。これら世界帝国の成立をめぐって、その世界史的意義を考えてみたい。	同　上	同　上
5	オリエント世界の美術	５回、９回、１３回は古代地中海世界が生みだした美術を、主に人間表現の観点から考察する。まず、ギリシア美術以前のオリエント世界では、人間の身体はどのように表現されたのだろうか。メソポタミアやエジプトの美術がアルカイック期のギリシアにどのように影響したのか。そこに見られる美意識の違いを検討する。	中村　るい（大妻女子大学非常勤講師）	中村　るい（大妻女子大学非常勤講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	都市国家の成立 （前１千年紀前半）	前１千年紀初頭の混迷は地中海沿岸地域に定着しつつあった人々に都市国家という集団を形成させた。とりわけギリシア人は、王政、貴族政、僭主政を経るなかで、民主政の基盤を築いていく。それとともに、オリエント文化の影響のなかで独自の高度なギリシア文化が生まれていく様に注目したい。	本村　凌二	本村　凌二
7	古典期ギリシア （前５・４世紀）	ギリシア・ポリスでは成年男子の市民団内部において民主政が築かれている。それは世界史上で最初の民主政であったが、女性、外人、奴隷は差別され、抑圧されていた。このような矛盾をかかえながらも、類稀なる文化活動が営まれ、人類文化のひとつの規範が誕生した。その功罪の現代的意義を考えたい。	同　上	同　上
8	地中海世界とヘレニズム （前４―前１世紀）	アレクサンドロスの大帝国はギリシア風文化を普遍性のあるものとして普及した。このヘレニズム文化はその後の地中海世界の土台となり、人々の交流や物資の交易を通じて、地中海沿岸地域がひとつの世界として意識される潜在力をほのめかすものであった。ヘレニズム文化の可能性と限界を考えてみよう。	同　上	同　上
9	ギリシア世界の美術	ギリシア古典期の美術、とくにパルテノン時代に、西洋美術における人間表現の理想的な型が確立したとされる。彫刻家フェイディアスが指揮をとったパルテノン神殿の建築と彫刻、ほぼ同時期に彫刻家ポリュクレイトスが完成した理想的男性立像を中心に考察する。	中村　るい	中村　るい
10	ローマ共和政 （前５－前１世紀）	前500年ころ、先住民のエトルリア人の勢力を駆逐してラテン人の一派が共和政の都市国家を樹立した。ローマ人とよばれた国家はイタリア半島に覇権を築き、やがてカルタゴ人の勢力をも斥け、地中海に並ぶ者なき大帝国を築くことになる。なぜローマは強大になったのか、その秘密を探ってみたい。	本村　凌二	本村　凌二
11	地中海世界帝国の形成 （１世紀）	カエサルの覇権はアウグストゥスの治世に揺るぎなき皇帝権として確立する。帝国の各地に道路網が整備され、度量衡も統一されて、ローマは地中海を内海とする大帝国となった。それはひとつの海域世界の成立でもあり、近代世界の到来を予知するものであったが、同時に古代的限界をもっていた。	同　上	同　上
12	「ローマの平和」と地中海世界の融和 （２世紀）	かくも広大な地域に長期にわたって強大な帝国が君臨したために、「ローマの平和」とよばれる繁栄期が実現する。オリエント文化、ギリシア文化、ラテン文化は融合し、まさしく地中海文明の満開をもたらした。文明の融和がいかにして可能であったのか、その好例としても興味深いところである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	ヘレニズム・ローマ世界の美術	古代地中海世界の美術は、ヘレニズム期からローマ期にかけて、ギリシア古典期の文化を継承し、変容しながら、その後における西洋の視覚文化の基礎となった。ヘレニズム以降の美術の展開を理解するために、まず、ペロポネソス戦争期の美術様式を検討し、前四世紀のリアリズム、官能的な女神像の系譜、ポンペイの美術へと考察を進める。合わせて都内のブリヂストン美術館の古代美術の展示室を訪ね、地中海世界の人間像を考える一助としたい。	中村　るい	中村　るい
14	地中海世界の混迷と再編 （3－4世紀）	「ローマの平和」にも混迷が萌し、「3世紀の危機」が訪れる。政治・経済・社会の全般における混迷のなかから、やがて新たに強大化した帝権が成立した。このような不安な時代にオリエントに生まれたキリスト教が地中海世界の全土に普及する。ここでは専制君主政の文明史的意義を考えてみたい。	本村　凌二	本村　凌二
15	古代末期と地中海文明の変質 （5－7世紀）	かつて古典古代文明の没落期ととらえられていた古代末期も、新たな価値と文化を胎動する時代として見直されている。カトリック世界、ギリシア正教世界、イスラム教世界の土台は形成されつつあった。古代地中海世界の文明はいかにして三つの文明圏に分裂したのか、文明の衝突の根源に迫ってみる。	同　上	同　上

＝ヨーロッパの歴史（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：江川　温（大阪大学大学院教授）〕

全体のねらい

17 世紀までのヨーロッパ世界（西ヨーロッパ世界および正教世界）の歴史を講義する。総合的な概説としてヨーロッパ文化の基層への理解を深めることが第一の目標である。しかしこれと並んで、現在研究者が関心を寄せる問題を平明に解説し、西洋史学の持つ魅力を伝えることをもうひとつの目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ヨーロッパの風土と人々	まず地理的概念としてのヨーロッパを確認し、そこに見られる多様な風土を描く。ついでヨーロッパについて文化圏としてのまとまりと多様性を、都市景観、宗教、住民の身体的特徴、言語などから説明する。	江川　温（大阪大学大学院教授）	江川　温（大阪大学大学院教授）
2	ゲルマン民族大移動とローマ・カトリック圏の形成	まずローマ帝国全盛期のヨーロッパ地域の状況を説明し、ついで諸民族の大移動と建国、西ヨーロッパ文化圏形成期のヘゲモニーを握ったローマ教皇権の形成と、カトリック・キリスト教の西ヨーロッパ拡大について考える。	同　上	同　上
3	ビザンツ帝国の発展と正教世界の形成	7 世紀以降，ビザンツ帝国が西方カトリック教会とたもとを分かちつつ，周辺のスラブ諸族・諸国家に正教のキリスト教を広め，10 世紀末にかけてコンスタンティノープルを中心とした独自の世界を形成するプロセスをたどる。	中谷　功治（関西学院大学教授）	中谷　功治（関西学院大学教授）
4	フランク王国・外民族侵入・西欧諸国の誕生	ここでは西ヨーロッパにおける諸王国と王権の原型形成について考察する。最初に諸王国のモデルとなったフランク王国の盛衰について解説し、ついで外民族侵入時代を経て西ヨーロッパ諸国の原型が形成される過程を説明する。	江川　温	江川　温
5	西欧中世の社会（1）農民と領主	ここから３回は中世末期までを見通した中世社会の概観である。まず農民と領主を取り上げ、領主権力の発展、農業と村の発展、領主たちの種別と社会生活、中世末期における領主制の動揺と再編について説明する。	同　上	同　上
6	西欧中世の社会（2）都市と商工業	中世都市について今世紀に起きたパラダイム転換をふまえ、まず中世前期の都市と商工業について触れ、ついで中世盛期、末期について商工業の展開と都市発展を考察し、さらに都市社会の特質に触れる。	同　上	同　上
7	西欧中世の社会（3）カトリック教会と信徒	まずカトリック教会組織と一般信徒に対する管理体制を概観し、ついで中世人のキリスト教信仰の実態に迫る。民間信仰との関係、民衆の宗教運動と異端、中世末期の信仰のありかたなどが議論の焦点となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	西欧世界の拡大	中世盛期、末期の西ヨーロッパ世界の膨張を、聖地十字軍と東地中海での覇権、北方十字軍とバルト海沿岸地域への進出、レコンキスタなどに絡めて説明する。そして 14,15 世紀の西ユーラシアの動向の中に西ヨーロッパ世界を位置づける。	江川　温	江川　温
9	西欧諸国の成長と教皇権の動揺	まず中世盛期・末期における王国や領邦の統治システムの成長を考察する。各国の政治史の細かい説明は省き、原理に関わる問題を考察の中心とする。そしてこのような発展の中で、教皇庁の威信が低下していったことを説明する。	同　上	同　上
10	西欧中世文化とイタリア・ルネサンス	中世の文化をとりあげる。まず中世前期の学問、12 世紀ルネサンスと中世後期の学問、中世前期から末期までの文学と造形芸術を概観する。そして 14,15 世紀のイタリア・ルネサンスについて、中世文化との関係を基軸に考察する。	同　上	同　上
11	ビザンツ帝国の衰亡と正教世界の分断	11 世紀末以降におけるビザンツ帝国の衰退は，周辺の正教諸国には独自の繁栄の時代を招来させることになったが，15 世紀以後になるとオスマン帝国の急速な勢力拡大によって東方の正教世界は分裂の時代を迎えることになる。	中谷　功治	中谷　功治
12	西欧の宗教改革と宗派体制	１６世紀に勃発した宗教改革は、キリスト教世界の一体性を崩し、その後の政治・社会の秩序を左右する要素となった。ここでは、プロテスタントの諸勢力とそれに対抗したカトリック改革派の運動の流れを考察する。	阿河雄二郎（関西学院大学教授）	阿河雄二郎（関西学院大学教授）
13	西欧の近世国家と国家系	近世には、「世界帝国」が機能しなくなる反面、領邦という枠組を超えて、より大きなまとまりをもつ国家群が成立した。「国王と臣民」という支配関係をもとに構築された初期的な主権国家の発展過程を辿りたい。	同　上	同　上
14	大航海時代と世界経済	コロンブスによる新大陸の発見以後、ヨーロッパ諸国はアジア、アメリカに植民地を広げた。ウォーラーステインが提起する「世界システム」論をふまえ、世界の中核をめざす列強のヘゲモニー抗争のさまを概観する。	同　上	同　上
15	エリート文化と民衆文化	近世社会の展開とともに、知的で洗練された文化を求めるエリートと伝統的な文化に固執する民衆との間に亀裂が生じた。その過程を、両者の二項対立的な図式で捉えるミュシャンブレドの研究を通して検証する。	同　上	同　上

＝近代ヨーロッパ史（‘０５）＝（TV）

〔 主 任 講 師 ： 福井　憲彦（学習院大学教授） 〕

全体のねらい

近代とか近代化という言葉は、現代を生きる日本人にとって馴染み深いようでいて、じっくり考えてみると、果たしてどのような内容で捉えればよいのか、輪郭がいまひとつ明確にできない、そのような言葉ではないであろうか。近代的な政治体制、社会秩序、ものの考え方、あるいは学問研究や科学技術、これらを生み出したと見なされるヨーロッパの18・19世紀の歴史とは、いったいどのようなものとして捉えられるのか。その歴史は現在にいたるまで、どのような遺産を世界に伝えてきたのであろうか。地球世界の一体化という意味でのグローバリゼーションも、現代になって急に生じたわけではない。それは、すでに存在していた世界各地の地域的交易世界に、ヨーロッパが積極的に介入し始めたことによって、現代に向かう数世紀の展開を開始したのであった。近代ヨーロッパの歴史的展開を、世界史のなかでのヨーロッパの位置取りと役割とを見落とすことなく、その大きなポイントにおいて捉えてみようというのが、この講義の目標である。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ヨーロッパによる海外進出の開始	15世紀後半からのポルトガル、ついでスペインを先駆けとして、ヨーロッパ各国が東方の富を目指して海外へと進出し始めた。インド洋から東アジアにいたる海域を中心として、すでに豊かに存在していたアジア交易の世界に介入を目指すと同時に、ヨーロッパは、大西洋を越えた南北アメリカへの直接支配を開始した。17世紀にいたるヨーロッパの海外進出について、その歴史的な位置づけを捉えてみよう。	福井　憲彦（学習院大学教授）	福井　憲彦（学習院大学教授）
2	世界交易における覇権争い	17世紀から18世紀にかけて、大西洋世界とアジアのいずれにおいても、おもにオランダとイギリス、およびフランスのあいだで、交易と植民地支配をめぐる熾烈な経済覇権競争が、直接的な戦闘を含めて展開された。その顛末と、大英帝国による覇権確立への歩み、それらが非ヨーロッパ地域にもたらしたものを考えてみる。	同　上	同　上
3	18世紀における社会経済と政治	18世紀には、イギリスやオランダなど北西ヨーロッパから、農業革命といわれる食糧生産の改善や人口の継続的増加が始まり、社会経済全体の近代化への胎動が明確になる。他方、経済的には古い型の農業経営を中心にしていたプロイセンやオーストリア、あるいはロシアのような国家では、啓蒙専制による上からの近代化の模索が困難に遭遇する。ヨーロッパ内の状況を整理して捉えてみる。	同　上	同　上
4	「啓蒙の光」と近代思想の誕生	18世紀の啓蒙思想といわれる思想潮流からは、三権分立の制度理念や人権思想も生まれてくるが、しかしそれはまた同時代の君主政を必ずしも否定するものではなかった。啓蒙専制という表現があるように、君主たちも啓蒙思想には一定の関心を示した。では、啓蒙思想の主要な特徴とは何であり、どのような点で近代思想の先駆けと見なせるのであろうか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	人口増加の開始から「移動の世紀」へ	18世紀から北西ヨーロッパを先頭に、人口の継続的な増加の動きが始まる。人口学上の旧体制は終わりを告げる。それは農業生産の向上とも一致した展開であった。20世紀にかけての人口動態の趨勢をおさえて、19世紀のヨーロッパがそれまでにはない「移動の世紀」となり、アメリカ合衆国をはじめ世界各地への移民がおこった状況を捉えてみよう。	福井　憲彦	福井　憲彦
6	革命に揺れる大西洋世界	18世紀末近くになると、大西洋の両岸では、アメリカ独立とフランス革命を代表格として、さまざまな革命運動や独立運動が生じた。その運動の波は、19世紀はじめにはラテンアメリカ諸国の独立として現実化していった。それらの運動の動向と特徴とを、そしてまたそこに賭けられていた課題とを、時代のなかで理解してみよう。	同　上	同　上
7	ウィーン体制と48年諸革命	フランス革命とナポレオン戦争による混乱からの収拾を実現したウィーン体制は、反動的な側面と勢力均衡の維持による平和維持という側面とを併せもっている。同時代において政治的自由と進歩を追求した人々は、この体制にどのように向きあったのか。48年にヨーロッパ各地で同時多発的に生じた諸革命までの変革運動を理解するとともに、ヨーロッパがこの時期抱えていた問題を明確にしてみよう。	同　上	同　上
8	工業化と社会の変容	ヨーロッパ資本主義の発展は、18世紀後半からのイギリス産業革命の開始とともに語られることが多かった。しかし近年、産業革命という捉え方に対する疑義も出されている。では、ヨーロッパにおける工業化のプロセスは、どのように理解できるのであろうか。それにともなう社会の変容は、19世紀を通じてどのようなものだったのであろうか。	同　上	同　上
9	農村のヨーロッパと都市のヨーロッパ	一口にヨーロッパといっても、地域による差は大きい。東と西、南と北というだけでなく、一国内においてもまたそうである。工業化と都市化が、19世紀には明確な動力になって社会経済と生活文化の変化を促していくが、各地の農村はその動きのなかに組み込まれて、しかしまた独自の文化を維持していたところが多い。こうした地域間の相違、農村と都市との相違について、要点を概観してみよう。	同　上	同　上
10	科学技術の実用化と産業文明の成立	17世紀のいわゆる科学革命以降、ヨーロッパでは科学的な実験や発見・発明が積み重ねられていたが、19世紀、とくにその後半には、科学技術の進歩は実験室を出て現実の社会や経済に大きく実用化され、産業文明の成立を促した。どのような側面でそれらが見られたのであろうか。それは、人々の生活や意識をどのように変化させていったのであろうか。	同　上	同　上
11	国民国家とナショナリズム	フランス革命で明示された国民国家の原則は、19世紀ヨーロッパにおいて重要な政治的位置を占めた。では、現実の政治過程においては、どのように機能したのであろうか。また、21世紀になるまで多くの人がその呪縛のなかにあるナショナリズムとは、もともとどのような脈絡のなかで、どのような性格を帯びたものとして形成されたのであろうか。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	植民地帝国という野望の衝突	いわゆる大航海時代からすでに見られたヨーロッパによる植民地獲得の動きは、さらに19世紀に入って工業化が進展すると、原料の供給拡大や商品販売市場の拡大が求められ、いっそう激烈な様相を呈するようになった。19世紀後半にもなると、国民国家の体裁を整えた列強は、いずれも同時に国外では植民地帝国の形成を求めて衝突しだす。その展開と、それが世界にもたらしたものとを明確にしよう。	福井　憲彦	福井　憲彦
13	さまざまな帝国主義	帝国主義の定義はなかなか難しいが、ここでは19世紀後半から20世紀はじめにいたる時代における様相を、地政学的・軍事的な側面、経済的な側面、そして社会的・文化的な側面から、いくつかの事例を踏まえて考えてみる。同時にまた、同時代においてこうした帝国主義の諸側面に対する反対の動きがどのようにあったのか、それも考えてみよう。	同　上	同　上
14	第一次世界大戦という激震	20世紀はじめのヨーロッパは、科学技術の進歩や経済の発展をうけて物質的な豊かさを手にし、識字率の向上や教育の普及に示されるような社会的な制度の整備も確実に進みつつあった。だが、ヨーロッパが文明の先端にあるという確信を、大戦は長期にわたる総力戦の悲惨な現実でもって打ち砕いた。工業化以後の最初の本格的全面戦争であった大戦がもたらした結果を整理してみる。	同　上	同　上
15	歴史文化の継承と芸術的創造	国や社会によって時差はあるが、ヨーロッパの多くのところで19世紀からすでに、それぞれの歴史文化を学問的に解明し、歴史的遺産を保存し継承していこうとする動きが創られていく。多面にわたるそのあり方を捉えてみよう。また他方、いくつかの都市を中心にして各地で、豊かな芸術的創造の動きが更新されていった。その主要な特徴を整理して捉え、ヨーロッパの近代がきわめて複合的な性格をもって展開した点を理解したい。	同　上	同　上

＝　アメリカの歴史（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　油井　大三郎（東京大学大学院教授）　〕

全体のねらい

植民地時代から現在までの南北アメリカの歴史をほぼ時代順に概観し、ヨーロッパやアジアの歴史とは異なる、植民・移民起源の多人種・多民族社会の独自性に注目する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	南北アメリカ史への誘い	南北アメリカは西欧の植民によって開発された多人種・多民族社会という特徴を共有しながら、その後の発展の道はかなり異なってきた。その原因を探りながら、日本にとって南北アメリカの歴史を学ぶ意義を考えてみたい。	油井　大三郎（東京大学大学院教授）	油井　大三郎（東京大学大学院教授）
2	植民地時代の中南米地域	１７世紀までの中南米の歴史を扱う。高文明を築いたアステカ人やインカ人はスペインに征服され、広大なスペイン領植民地が成立する。他方、ブラジルとカリブ地域にはやや遅れて、黒人奴隷労働力を用いる砂糖植民地が建設される。	高橋　均（東京大学大学院教授）	高橋　均（東京大学大学院教授）
3	植民地時代の北アメリカ	１７世紀以降、北米大陸にもヨーロッパからの植民者が次々と渡ってくるようになった。先住インディアンとそれらの植民者、さらにアフリカから奴隷として連れてこられたアフリカ人の三者が出会いと衝突を繰り返しながら、植民地社会を築いていく、その具体的な姿を追ってみよう。	遠藤　泰生（東京大学大学院教授）	遠藤　泰生（東京大学大学院教授）
4	アメリカ合衆国の独立から大陸国家の成熟まで	英国から独立したアメリカ合衆国は、ヨーロッパからの新たな移民を迎えつつ、領土を西方に拡大し、広大な大陸国家へと成長していく。ただし、建国以来の懸案であった奴隷制の解消のためには南北戦争を戦わねばならなかった。	同　上	同　上
5	中南米諸国の独立	スペイン領植民地とブラジルは１９世紀初頭に独立をとげ、政情不安と経済不振に苦しみながらも国家形成を進め、世紀転換期には一次産品や鉱産物などの輸出経済の繁栄に支えられて相対的安定期を迎える。	高橋　均	高橋　均
6	もうひとつの北米国家ーカナダの歴史的展開ー	カナダはアメリカ合衆国の背後に隠れ、日本ではあまり理解されていないもうひとつの北米国家である。この講義では、カナダの歴史を理解する基本的なポイントを紹介し、ついでアメリカ合衆国やイギリスとの関連で歴史的な枠組みが形成されるユニークなプロセスをまとめてみたい。	加藤　普章（大東文化大学教授）	加藤　普章（大東文化大学教授）
7	アメリカ「帝国」への道	１９世紀末のアメリカ合衆国は、西部開拓を終え、都市化と飛躍的な工業発展の時代に突入した。新たな市場確保のために、海外へと目を向ける合衆国は米西戦争を戦い、「帝国」として立ち現れることになる。その過程を、国内の論争などを踏まえながら振り返ってみたい。	西崎　文子（成蹊大学教授）	西崎　文子（成蹊大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	革新主義と第一次世界大戦	２０世紀初頭のアメリカ合衆国は、二つの大問題に直面することになった。産業革命に伴うさまざまな社会・経済的矛盾の増大と、ヨーロッパでの大戦の勃発とである。世界大国となったアメリカがいかにこれらの問題に取り組んだかを検討していきたい。	西崎　文子	西崎　文子
9	消費文化と多様性の萌芽ー１９２０年代の合衆国ー	アメリカ合衆国の 1920 年代は、新しい中流層の台頭、不景気、禁酒法などを背景に、「変化」を求める力と「安定」を求める力が拮抗する時代である。そのエネルギーを感じながら、人々の生きざまに注目し、社会の明暗を明らかにしていこう。	樋口　映美（専修大学教授）	樋口　映美（専修大学教授）
10	恐慌下のアメリカ民主主義	1930 年代のアメリカ合衆国は、1929 年の株式暴落後の大恐慌期にあり、ローズヴェルト大統領によるニューディール政策で知られるが、この講義では 1930 年代に高揚した労働運動や、1920 年代から 1930 年代に発展した映画など大衆文化についても考えてみよう。	同　上	同　上
11	第二次世界大戦と米ソ対立	第二次世界大戦を通じてアメリカ合衆国は飛躍的な経済発展を遂げ、世界大の貿易自由化を主導する国家に変化していった。 しかし、戦後には米ソ対立が激化した結果、合衆国はアジアなどの局地紛争に巻き込まれてゆく。この過程を概観してみたい。	油井　大三郎	油井　大三郎
12	「豊かな社会」化と人種平等社会の模索	1950 年代から 60 年代のアメリカ合衆国ではオートメーションの進行などによってホワイト・カラー層が増大し、「豊かな社会」が訪れたが、同時にアフリカ系を中心とした公民権運動によって人種平等社会の模索が始まった。この過程を概観する。	同　上	同　上
13	キューバ革命と中南米諸国の変容	２０世紀の中南米諸国は民族主義の高揚期を迎え、国家主導の工業化をめざす。しかし、この政策はやがて行き詰まり、中南米諸国はキューバ革命の指し示す社会主義への道か、軍部の長期独裁かの岐路に立たされる。	高橋　均	高橋　均
14	近代国家としてのカナダ	20 世紀のカナダはイギリスの影響から離れ、自立した近代国家の道を歩みはじめた。他方では、隣国のアメリカ合衆国との関係の深まりも見られた。こうした中でケベック問題や多文化主義、憲法改正など多くの課題も出現してきた。このような実験の意義に注目する。	加藤　普章	加藤　普章
15	２１世紀の南北アメリカの展望	冷戦終結後の世界ではアメリカ合衆国への一極集中傾向が目立つとともに、北米自由貿易協定を中南米にも拡大する地域主義の傾向も強まっている。 果たして２１世紀の南北アメリカはどうなってゆくのであろうか。その趨勢を検討する。	油井　大三郎	油井　大三郎

＝芸術の理論と歴史（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　青山　昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

芸術は、人類の文明の深い意味での美的な結晶の一つですが、それは、一見すると天才的な芸術家が一人で生み出したように見えるものであっても、実は長大な文化的伝統と重層的な社会的諸関係のただなかで受胎し産み落とされたものにほかなりません。この講義では、芸術のこのような文化的・社会的な生成の構造に焦点を当てて、各時代の芸術理論を振り返り、各時代の芸術作品がいかにその時代の文化と社会に深く根ざしていたかを歴史的に考察するものです。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ペリクレスとギリシア美術	1. 全体への序論 2. ギリシア古典美術を代表するものとしてのアテネのパルテノン神殿 3. 芸術総監督フェイディアスの美的理念と民主派の政治家ペリクレスの政治思想 4. 建築芸術の政治的表象性	青山　昌文（放送大学助教授）	青山　昌文（放送大学助教授）
2	プラトンとギリシア文芸	1. ヨーロッパ美学の源流としてのプラトン美学 2. ギリシア文芸とりわけホメロスの叙事詩の政治的・社会的役割 3. 文学芸術の政治的表象性とプラトン美学	同　上	同　上
3	アリストテレスとギリシア演劇	1. ヨーロッパ芸術理論の源流としてのアリストテレス芸術学 2. ギリシア演劇とりわけ悲劇の構造と上演の政治的・社会的機能 3. 演劇芸術の政治的表象性とアリストテレス芸術学	同　上	同　上
4	修道院の神学者とロマネスク美術 －その１－	1. クレルヴォーのベルナールの美学 2. ロマネスク建築芸術のプラトン的超越性 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
5	修道院の神学者とロマネスク美術 －その２－	1. 民衆的世界観と異形なるもの 2. ロマネスク絵画と彫刻の光と影 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
6	サン・ドニのシュジェールとゴシック美術	1. サン・ドニのシュジェールの美学と哲学 2. ゴシック建築芸術のアリストテレス的内在性 3. 建築芸術の宗教性と社会性	同　上	同　上
7	ルネサンスの哲学とイタリア・ルネサンス美術	1. ルネサンスの新プラトン主義哲学 2. ボッティチェリとミケランジェロ 3. 絵画・彫刻芸術の哲学性と社会性	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ルネサンスの政治とイタリア・ルネサンス美術	1. フィレンツェの共和制とメディチ家 2. ドナテッロとミケランジェロ 3. 絵画・彫刻芸術の政治性と社会性	青山 昌文	青山 昌文
9	宗教改革と北方ルネサンス美術	1. ルターの宗教思想と芸術思想 2. デューラーとクラーナハ 3. 絵画芸術の宗教性と社会性	同 上	同 上
10	対抗宗教改革とバロック美術	1. トレント宗教会議の宗教思想と芸術思想 2. ベルニーニ 3. 絵画・彫刻芸術の宗教性と社会性	同 上	同 上
11	ディドロとロココ美術	1. ディドロの美学と芸術理論 2. グルーズとシャルダン 3. 絵画芸術の世俗性と社会性	同 上	同 上
12	革命の時代と19世紀美術	1. 産業革命と芸術の変貌 2. クールベとマネ 3. 絵画芸術の政治性と社会性	同 上	同 上
13	戦争の世紀と20世紀美術	1. 芸術の理論化と時代批判 2. ピカソとシャガール 3. 現代芸術の理論性と批判性	同 上	同 上
14	死の影と現代芸術	1. 現代社会批判としての現代芸術 2. ウォーホル 3. 現代芸術の現代性	同 上	同 上
15	環境芸術と現代社会	1. 環境破壊問題と芸術 2. スミッソン・タレル・ロング 3. クリスト	同 上	同 上

＝芸術・文化・社会（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：徳丸　吉彦（放送大学教授）〕
〔主任講師：青山　昌文（放送大学助教授）〕

全体のねらい

芸術を文化・社会的脈絡において考察する。また、芸術の範囲を拡大し、現在の社会に焦点を合わせる。個別的な芸術を扱う場合も、伝承、身体性、異文化の接触、グローバリゼーションといった大きな枠組みのもとで考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	文化・社会的脈絡における芸術	講義全体の導入。多様な芸術ジャンルと脈絡の多様なあり方を概観する。	徳丸　吉彦（放送大学教授） 青山　昌文（放送大学助教授）	徳丸　吉彦（放送大学教授） 青山　昌文（放送大学助教授）
2	出す行為と芸術	芸術と身体行動の関係を、歌も排泄行為だとするマレーシアの少数民族プナンの人々を例に考察する。	卜田　隆嗣（大阪教育大学助教授）	卜田　隆嗣（大阪教育大学助教授）
3	芸術における身体のまきこみ	芸術実践に不可欠な身体性の研究。とくに身体をまきこんだパフォーマンスの性格をライト・ダンスや祭、また科学技術をもちいた芸術の考察を通して明らかにする。[パフォーマンス・アーティストへのインタビヴュ、東京１回]	板倉　壽郎（江戸川大学教授）	板倉　壽郎（江戸川大学教授）
4	伝承のしかけ	伝承のしかけとしての家元制度の研究。家元へのインタビューを行う。[狂言の家元、東京１回、邦楽家元、東京１回]	徳丸　吉彦	徳丸　吉彦
5	諸感覚をつなぐものとヒエログリフ	芸術における通感覚（共感覚）の再評価。具体例として、ディドロの芸術論とスクリャービンの作品を扱う。[スクリャービンの交響作品に指定されている色彩のコンピュータ合成を含む。少なくとも２分間]	青山　昌文	青山　昌文
6	料理の芸術性	芸術研究において無視されがちな味覚と嗅覚に着目しながら、他の感覚にも配慮した上で、料理の芸術性を考察する。料理人、ソムリエ、日本酒の杜氏等へのインタビューを行う。[料理人等へのインタヴュー東京２回、熊本あるいは佐賀に１回]	青山　昌文	徳丸　吉彦 青山　昌文
7	道具と芸術経験	ものを食べる道具、飲む道具を手がかりに、芸術経験を拡大することを試みる。とくに料理芸術を享受する側から考察する。[料理人やソムリエ等へのインタヴュー東京２回]	青山　昌文	青山　昌文

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	装いの芸術	装うという芸術行動の研究。服飾、髪型、アクセサリー等の意義を考える。［ファッション美術館ロケ、神戸１回、東京１回］	板倉　壽郎	板倉　壽郎
9	文化を越える文学	異なる文化で生まれた文学の研究と受容の問題をあつかう。具体的には、日本における外国文学の受容を扱うので、雑種文化論以来この問題に関心を持ち続けて、また著書の「日本文学史序説」が外国語にも翻訳されている加藤周一氏へのインタビューを行う。［インタヴュー東京１回］	青山　昌文	青山　昌文
10	越境する音楽	異なる文化の中で受容・研究される音楽の問題をあつかう。具体的には、移民が中心になって普及させたハワイの日本音楽を扱う。	寺内直子（神戸大学助教授）	寺内直子（神戸大学助教授）
11	伝播のしかけ	異文化の芸術が伝播するしかけの研究。具体的には、演奏会、演奏の講習会、展覧会等を扱う。［東京、宮崎、ロケ各１回。東京は国立劇場における日韓宮中音楽の交流、宮崎は国際室内楽フェスティヴァルの演奏と講習の予定。また、学芸員にインタヴューする。］	徳丸　吉彦 青山　昌文	徳丸　吉彦 青山　昌文
12	音楽における文化触変	異文化の影響を受けた文化そのものが、新しい音楽様式を生み出す過程の研究。具体的には、西洋音楽の影響をうけた、日本の邦楽器による作品を扱う。箏や尺八の演奏家を招いて、具体的な技法の説明も行う。［三曲のグループ「新しい風」（５０代の中堅家元クラス）５人をスタジオに招く］	徳丸　吉彦	徳丸　吉彦
13	映画にみるグローバリゼーションと地域性	グローバリゼーションのあり方の例として映画を取り上げ、その中にいかに地域性があるのかを考える。［ロケ京都１回、京都映画祭責任者の中島貞夫監督へのインタヴューと施設のロケ］	加藤　厚子（お茶の水女子大学助手）	加藤　厚子（お茶の水女子大学助手）
14	音楽におけるグローバリゼーションと地域性	グローバリゼーションによって地域の音楽のあり方も大きく変化している。インドネシアの音楽を例にとり、現代において音楽の地域性をどのようにとらえることができるかを考える。	福岡　正太（国立民族学博物館助教授）	福岡　正太（国立民族学博物館助教授）
15	芸術・文化・社会の理解をめざして	講義のまとめ。	徳丸　吉彦 青山　昌文	徳丸　吉彦 青山　昌文

＝中世日本の物語と絵画（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　佐野　みどり（学習院大学教授）〕
〔主任講師：　並木　　誠士（京都工芸繊維大学教授）〕

全体のねらい

古来より物語はさまざまな形式、技法で造形化されてきた。物語はヴィジュアルなイメージとともにあることで、いっそう親しみをましたのである。そのような物語の造形を味わい、その表現の工夫や享受のあり方、制作の社会的意図などを、具体的に作品に則して考察していきたい。そもそも物語文学が美術という視覚テクストとして表わされる背景には、視覚テクストの＜物語る力＞への期待がおおいに作用していたに違いない。本講義では、とくに中世の絵巻を中心に、様式変遷を辿りつつ、主題の選択意志や物語る仕組み、その社会的機能なども取り上げ、視覚による＜物語る力＞を再考し、物語享受の諸相を眺めていきたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	物語と絵画	古代～中世に置いて、日本では物語がどのように享受されたのか、中でも物語を可視化する物語絵画に焦点をあて、物語絵画の様相（形態や主題）と享受の有り様を概括し、さらに平安時代の物語環境の具体的な様相を言説から探る。	佐野 みどり（学習院大学教授）	佐野 みどり（学習院大学教授）
2	絵巻の主題と形式	物語絵画の中心的メディアといえる絵巻物の形式を作品に則して分類考察し、絵巻がどのような構造特性をもっているのかを考える。 華厳縁起絵巻や伴大納言絵巻、信貴山縁起絵巻などを主たる例として、絵巻の時間表現の工夫を分析する。	同　上	同　上
3	絵巻の時間と空間～信貴山縁起絵巻と伴大納言絵巻～	信貴山縁起絵巻と伴大納言絵巻、それぞれの表現特性を解析し、物語の時間と空間をどのように可視化するかという画家の工夫を考える。	同　上	同　上
4	風俗表現の意味と機能	絵巻がいかに豊かに人間生活を活写しているかを作品に即して実感し、これら風俗表現が＜物語＞への共感のコードであること、そして慣用句とでもいうべき特定モチーフの用法が見られることを眺め、風俗表現に込められた時代のメッセージと絵画伝統を考える。	同　上	同　上
5	源氏物語絵巻と美麗の造形	源氏物語絵巻の表現特性を解析し、これが平家納経や西本願寺本三十六人集など、所謂＜美麗の造形＞と同様に、物合的な制作背景を持つことを取り上げ、院政期の文化戦略の一端としての絵巻制作を検証する。	同　上	同　上
6	和歌と絵画	絵画に描かれた情景を見て和歌を詠んだり、和歌を題材として絵画制作をすることは平安時代から広くおこなわれていた。和歌を題材とした絵画は、扇絵、絵巻、屏風絵などさまざまな形式をとり、江戸時代にいたるまで制作されている。このような和歌と絵画の関係について、さまざまな作例を紹介しながら考えてゆきたい。	並木　誠士（京都工芸繊維大学教授）	並木　誠士（京都工芸繊維大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	祖師の伝記	鎌倉時代に入ると、仏教の各宗派が祖師の伝記や高僧の生涯を描いた絵巻を制作するようになる。それらは、祖師の行状を顕彰し、また、それを広く宗派の人びとに知らせる目的で制作されたと考えられる。このような祖師伝絵巻を紹介しながら、その役割や機能、用い方について考えてみたい。	並木　誠士	並木　誠士
8	往生要集と地獄の絵画	『往生要集』や『地蔵十王経』などのテクストや山中他界信仰における宗教的景観との関連を念頭に置きつつ、長岳寺本六道十王図を中心に、古代から近世初頭に至る地獄絵・六道絵の系譜をたどる。	鷹巣　純（愛知教育大学助教授）	鷹巣　純（愛知教育大学助教授）
9	絵解きと物語絵画	物語絵画がどのように教戒テクストとして機能したか、また口承文芸と物語絵画がどのように接点を有しているのかを、現在なお行われている絵解きの紹介とともに再考する。	同　上	同　上
10	戦記文学と絵巻	鎌倉時代には、武士や合戦を題材とした絵巻が数多く制作された。元寇を扱った蒙古襲来絵詞のような記録性の強い絵巻もあるが、平治物語絵巻のように、合戦が一旦文学作品として成立した後に絵巻化される例もある。ここでは、武士を描く絵画が好まれた時代という背景を視野に入れて、戦記文学と絵巻の関係について考えてみたい。	並木　誠士	並木　誠士
11	室町時代の絵巻	室町時代にはいると、土佐派や狩野派という画家の流派が生まれ、絵巻制作に携わるようになる。彼らは伝統的な技法を基礎としながらも、新しい受容者のために新しい表現を試みていった。土佐光信、狩野元信といった画家を中心に、室町時代の絵巻制作を概観してみたい。また、室町時代から制作されるようになるお伽草子のような庶民的な絵巻についても触れてゆきたい。	同　上	同　上
12	信仰と美術	聖徳太子絵伝や善光寺如来絵伝といった大画面掛幅の物語絵画作例や、より庶民的な傾向を持つ参詣曼荼羅を検討し、その表現構造を捉えると同時に、その視覚イメージの成立について考察し、中世社会の信仰と美術・物語の交差を把握する。	鷹巣　純	鷹巣　純
13	絵巻と風俗	絵巻では、詞書に書かれていない内容や情景が絵の中に盛り込まれることが多く、それらは主題に対して添景として絵巻に彩りを添えている。そのような添景のなかに画家はみずからと同時代の風俗を取り込んでゆくことがある。しかも、室町時代にはいると、その風俗表現が次第に画面のなかでおおきな位置を占めるようになり、やがて近世初期の風俗画へと展開してゆく。そのような展開の道筋をたどってみたい。	並木　誠士	並木　誠士
14	小画面から大画面へ	平安時代から鎌倉時代にかけて、文学作品を題材とする絵画は、扇面や絵巻といった比較的小さい画面が中心であったが、室町時代の後半になると、屏風のような大きな画面にも文学主題の絵画が描かれるようになる。その場合には、大きな画面を分節化して小画面を複数組み合わせる例もあるが、小画面をさまざまなかたちで変容させて大画面化する場合もある。文学作品を題材にした絵画の表現方法の違いやその展開について考えてみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	詩画軸の世界～漢詩と絵画～	室町時代、禅宗社会を中心に漢詩を作り鑑賞することが流行したが、その漢詩もまた和歌と同様に絵画と相互に密接な関係を持っていた。漢詩と組み合わされたのは、やはり禅宗社会を中心に定着していた水墨画であった。ここでは、漢詩と水墨画を組み合わせた詩画軸と呼ばれる形式のさまざまな作例を紹介しながら、そのあり方について考えてみたい。	並木　誠士	並木　誠士

＝西洋音楽の諸問題（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　笠原　潔（放送大学助教授）〕

全体のねらい

西洋音楽史を彩る様々な作品を取り上げながら、現在の西洋音楽研究では何が起こっているのか、どのようなことが問題になっているのかを、視覚メディアを駆使しつつ、紹介し、西洋音楽研究の最先端の状況を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	西洋音楽の時代区分	全１５回の講義の総論として、西洋音楽の時代区分と時代様式の変遷を示し、第２回以降の講義で扱うテーマがどの時代に該当するものであるかを明らかにする。	笠原　潔（放送大学助教授）	笠原　潔（放送大学助教授）
2	「エロイカ」はなぜ壮大か？	ベートーヴェンの交響曲第３番《英雄（エロイカ）》を題材に取り上げ、当時の時代様式を駆使してベートーヴェンがどのように壮大な「英雄」像を音楽的に描き出すのに成功したか、楽曲の構造と楽曲の印象はどのように結びつくか、また、その場合の「英雄」像とはどのようなものか、を明らかにする。	同　上	同　上
3	マーラーの「表現」世界	表題音楽と絶対音楽、純粋器楽音楽と声楽音楽、厳密な楽曲構成と下意識的衝動の爆発との間を揺れ動き、２０世紀音楽への道を開いたマーラーの「表現」世界を取り上げ、彼はどのように自らのうちなる「自然」を表現したか、その場合の「自然」とはどのようなものか、を明らかにする。	同　上	同　上
4	真実のショパン演奏を求めて	ショパンのピアノ作品を題材に、自筆楽譜の問題、演奏様式の問題、演奏技法の問題、楽器の変遷、音楽に表現された民族性の問題と記譜法の問題など、西洋音楽の諸作品における様々な問題点を紹介する。	同　上	同　上
5	楽器の変遷	モーツァルト、ベートーヴェン、シューベルトらが用いたピアノは現在のピアノと大きく異なる。彼らは、どのような楽器を念頭に置いて作曲したかを、当時の楽器を紹介しながら、明らかにする。併せて、ペリー来航時に日本に持ち込まれた軍楽器を、それを描いた日本側絵図を通じて紹介する。	同　上	同　上
6	自筆楽譜をめぐる諸問題	自筆楽譜の研究は、資料研究の基礎となる作業である。そうした自筆楽譜の研究は、どのような成果をもたらすかを、日本でのメンデルスゾーンの自筆楽譜研究の第一人者である星野宏美とともに紹介する。	笠原　潔 星野　宏美（立教大学助教授）	笠原　潔 星野　宏美（立教大学助教授）
7	記譜法の問題	楽譜は、作品の形をそのまま表したものではなく、各時代の記譜習慣に基づいて書かれている。従って、時には、楽譜を読みかえるべき個所があるが、そうした読みかえは時に演奏解釈に大きな相違をもたらす。記譜法をめぐるそうした問題をバッハやシューベルトの作品を例に紹介する。	笠原　潔	笠原　潔

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	オペラの演技	オペラの舞台という虚構空間にリアルな作品世界を作り出すために、どのような表現が必要かを明らかにする。後半では、ヘンデル時代のオペラの表現様式の復原に取り組んでいる声楽家の原雅巳とともに、バロック時代のオペラの表現様式について学ぶ。	笠原　潔 原　雅巳（声楽家）	笠原　潔 原　雅巳（声楽家）
9	バッハ（1）―教会音楽の視点から―	バッハの音楽は、時代と国境を越えた真の宗教的メッセージを、今日に送り続けている。そのメッセージが一宗派の中から発せられながらもそれを超えた力を備えているのは、バッハがやわらかな宗教的感性の持ち主で、その教会音楽を、宗教的事柄を新たにとらえなおす場としていたからである。講義では、バッハが教会カンタータや受難曲を書き、演奏したプロセスをたどりながら、ドグマに偏らない、宗教的感性のやわらかさを発見したい	礒山　雅（国立音楽大学教授）	礒山　雅（国立音楽大学教授）
10	バッハ（2）―世俗音楽の視点から―	バッハの世俗音楽は教会音楽と対立するものではなく、むしろ同じ精神を共有していることが、最近の研究を通じて、ますます明らかになってきている。バッハのやわらかな宗教的感性は、世俗音楽にも、豊かに吹き込まれているのである。講義では、最近再評価されつつある世俗カンタータや器楽曲を例にとりながら、その中に蔵された世俗を超えるまなざしを探り、世俗曲の教会曲への転用（パロディ）の意味についても考えたいと思う	同　上	同　上
11	キリシタン時代の音楽	日本が初めて西洋音楽に接したのはキリシタン時代であったが、その実相はどのようなものであったか、当時の文献に基づいて紹介する。併せて、この時代に日本に紹介されたルネサンス時代後期の聖歌がかくれキリシタンたちの間で伝承されている様子を紹介する。	笠原　潔	笠原　潔
12	江戸の洋楽史	江戸時代になると、新たな西洋音楽の波が日本に流入してきた。その音楽とはどのようなものであったか、それに関する史料にはどのようなものがあるか、また、そうした史料は西洋音楽の実相を明らかにする上でどのような価値を持っているか、を紹介する。	同　上	同　上
13	漂流民が伝えた西洋音楽情報	江戸時代の日本に伝えられた西洋音楽・西洋音楽情報は、長崎・出島を通じてだけのものではない。漂流して、ロシアなどに流れ着いた漂流民たちも、貴重な情報を持ち帰った。その中には、大黒屋光太夫が持ち帰ったロシア歌曲や、当時のピアノに関する貴重な証言もある。ここでは、漂流民たちが持ち帰ったそうした情報について紹介する。	同　上	同　上
14	幕末洋楽史	幕末になると、西洋各国の軍楽隊が日本を訪れるようになった。そこでは、どのような音楽が演奏されたのか、それに関する史料にはどのようなものがあるかを、現地を訪れながら、紹介する。	同　上	同　上
15	音楽図像学	過去の音楽状況を探る上で、図像の研究は大きな効力を発揮する。しかし、そこには注意しなければならない問題もある。音楽図像学をめぐるそうした問題を、幕末の日本で描かれた西洋音楽関係の図を材料に検討する。	同　上	同　上

＝　応用音楽学と民族音楽学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　山口　修（大阪大学名誉教授）　〕

全体のねらい

「社会から学び社会へ貢献する」未来指向の応用音楽学、そして諸民族の相互に異なる価値観から生まれた音楽から普遍性を探る民族音楽学、という二つの次元で音楽知を駆使する方法を探る。あわせて世界の音楽を知る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	応用音楽学と民族音楽学	音楽と社会の関連を研究する応用音楽学、そして、諸民族の音楽文化に接近するための準拠枠としての民族音楽学を定義し、ミクロネシアの事例を用いて二つの領域の関連を考察する。応用音楽学と民族音楽学の枠組を提示する。	山口　修 (大阪大学名誉教授)	山口　修 (大阪大学名誉教授)
2	歴史を映す音楽	人間の歴史における音楽を上記二領域の観点から再構成する。とくに異文化接触の意義を強調し、主たる事例は多民族の多様な音楽様式がからみあった台湾に求め、植民地政策と音楽の関係を西洋音楽をも含めて振り返る。	同　上	山口　修 ゲスト 王櫻芬 〔WANG Yingfen〕 (國立臺灣大學準教授)
3	現在を映す音楽	日常的に使用されている南北アメリカの音楽および西洋芸術音楽の延長線上にある「現代音楽」を事例として、音楽におけるローカルなものとグローバルなものの関係を考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 上野　正章 (大阪大学大学院助手)
4	未来を映す音楽	未来の特徴の一つを「多民族が共生する社会」と捉え、その特徴をすでに強く具現しているアフリカやマレーシアの諸文化を事例として扱う。	同　上	山口　修 ゲスト CHAN Cheong Jan 〔陳重仁〕 (マレーシア・プトラ大学講師)
5	声の力と音楽	音としての音楽を基礎づける媒体としての声についての比較文化論。「つぶやき」から「叫び」、話し声から歌声を出発点とし、多様な表現と機能を考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 永原　惠三 (お茶の水女子大学教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	楽器と音楽	音としての音楽を豊かにする楽器の比較文化論。具体的には楽器の特性、社会的機能などを考察する。西洋音楽を導入した初期の日本を主たる事例とする。	山口　修	山口　修 ゲスト 奥中　康人 (名古屋芸術大学講師)
7	無踊・演劇と音楽	音としての音楽が聴覚以外の諸感覚と協同する様子を探る。総合芸術の一環をなす音楽、衣食住生活の一環をなす音楽を東南アジアや西洋のオペラを事例として考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 岡田　暁生 (京都大学助教授)
8	個人と家庭の音楽	すべての音楽体験が個人に端を発し、その個人の身近な周辺から遠い環境へと音楽知が広がってゆくことを、ジェンダーの視点をも取り入れながら、インドネシアやパプアニューギニアの事例で考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 山田　陽一 (京都市立芸術大学教授)
9	地域社会と学校の音楽	地域社会と学校を例にして、音楽の伝承過程での問題点を考察する。具体的には、沖縄県人とその県外・海外移住集団を主たる事例として扱う。	同　上	山口　修 ゲスト 井口　淳子 (大阪音楽大学助教授)
10	国際社会の音楽	現在における音楽実践は、国際化と産業化の影響ぬきには語れない。その具体的事例を東アジアにおける多様な文化交差に求めて考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 仲万　美子 (同志社女子大学教授)
11	理論としての音楽	さまざまな音楽がもっている理論を抽出することにより、人間が音楽を理解する過程や、社会的現象として音楽が正典化することを考察する。主たる事例は、ポピュラー音楽の多様なかたちに求める。	同　上	山口　修 ゲスト 卜田　隆嗣 (大阪教育大学助教授)
12	現場の音楽	音楽の現場を支える演奏行為の分析、およびその行為者と民族音楽学者・応用音楽学者とのあいだの相互作用を扱う。これを三味線音楽、ベトナムの雅楽（ニャーニャック）、少数民族の音楽に即して考察する。	同　上	山口　修 ゲスト 小塩　さとみ (宮城教育大学助教授)

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	変形される音楽	鳴り響く音楽は、文字・楽譜・身体動作・電子的情報などに変形され、保存・伝承に役立てられる。これらの変形行為の機能と問題点を能楽やフィリピン少数民族の音楽を事例にして考察する。	山口　修	山口　修 ゲスト 藤田　隆則 (大阪国際大学助教授)
14	変貌しつづける音楽	歴史と現在における音楽を変化という相（アスペクト）において捉えなおし、東西ヨーロッパの音楽と近世邦楽を例にして、その変化の多様なすがたを明らかにする。	同　上	山口　修 ゲスト 伊東　信宏 (大阪大学大学院助教授)
15	民族音楽学と応用音楽学	人間と音楽の関係を諸民族の事例に基づいて探究するときに倫理的な問題意識が必要となる。また、研究を未来の社会に役立てようとするとき、文化価値の領域に立ち入ることになる。	同　上	山口　修 ゲスト 増田　聡 (大妻女子短期大学講師)

＝現代における伝統演劇（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家）〕
〔主任講師：　渡辺　保（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本には「伝統演劇」と呼ばれる舞台芸術がある。これは、例えば西洋演劇における「古典」が、主としてテクストや譜面のみが伝えられて来たのとは異なり、舞台表現の総体が、数世紀にわたって人から人へと伝承され、現在もなお演じ続けられている。そのために、世界的にも貴重な＜舞台芸術の知＞として、日本以外の多くの演劇人や更には他の領域の芸術家から注目されて来た。その代表的なものとして、歴史的起源の古いものから、主として、能・狂言、人形浄瑠璃（文楽）、歌舞伎について、代表的な作品と理論的なテクストを取り上げ、これらの演劇伝統が、現代の日本及び世界の演劇文化にとって持ちうる意味を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	伝統演劇とは何か	日本の舞台芸術の伝統と伝承の特殊性。伝承されるものは何か。演技とテクスト。この科目の理論的フレーム。テーマの現代性と国際性。映像資料は、現代の若き狂言師野村萬斎演じる「三番叟」『ハムレット』『葵上―能ジャンクション』、舞楽は『陵王』、能は梅若六郎の『井筒』、狂言は茂山千作の『宗論』、文楽は桐竹紋十郎の『酒屋』、歌舞伎は尾上松緑菊五郎の『髪結新三』、そして梅蘭芳の京劇『貴妃酔酒』にジャワの宮廷舞踊、ジュネの『バルコン』など。問題の地平を映像的に示す。	渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家） 渡辺　保（放送大学教授）	渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家） 渡辺　保（放送大学教授）
2	能の地平	能の始原的な構造と作用を「翁」によって考察する。平成11年7月に開催された国際世阿弥シンポジウムにおける『翁』の特別上演（観世栄夫、野村萬斎、大倉源次郎出演）と、シンポジウムの討議を素材とする。	渡邊　守章 松岡　心平（東京大学助教授）	渡邊　守章 松岡　心平（東京大学助教授）
3	能あるいは記憶の劇場	能は14世紀に成立して、そのままの形で現代まで伝承されたのではないが、「記憶の劇場」としては世界にも類をみない完成を遂げた。記憶の能作術と舞台の典型を、系譜学の可能な『松風』（後藤得三）と、世阿弥作の複式夢幻能の典型である『井筒』（梅若六郎）と『融』（友枝昭世）によって分析する。	渡邊　守章	渡邊　守章
4	世阿弥の思考	能の大成者である世阿弥は、役者として一座の棟梁であったばかりではなく、能作者であり、現代風に言えば演出家、作曲家、振付家であり、更には、世界の舞台芸術のみならず芸術全般において、類稀な理論家であった。世阿弥の作業を、その伝書を通じて考察し、その現代的な意味を考える。	渡邊　守章 松岡　心平	渡邊　守章 松岡　心平
5	狂言の言葉と身体	能の「もどき」である狂言は、単に中世の笑劇ではない。その笑いの捉え方を始め、喜劇の根拠をなす呪術的な根を考えるには恰好のジャンルである。能との対比構造を世界の演劇の記憶のなかで位置づける。	渡邊　守章	渡邊　守章
6	人形浄瑠璃と劇の言説	現在「文楽」とよばれている人形浄瑠璃は劇作術においてもまた三人遣いによる人形の演技としても、世界に類のない舞台表現である。映像は、吉田簑助の解説、桐竹紋十郎の『艶容女舞衣』「酒屋の段」、簑助の『本朝廿四孝』「狐火の段」など人形遣いの技法と表現に焦点をあてて考える	渡辺　保	渡辺　保

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	人形浄瑠璃の＜世界＞	文楽の時代狂言は、同時代に起きた武士階級のドラマを主題としつつ、それらを例えば『太平記』の＜世界＞に起き直して表現する。こうした劇的虚構の生成は、町人階級の文化的創造力を測る上で鍵となるだろう。文楽の代表作『菅原伝授手習鑑』「丞相名残の段」（吉田玉男）、『摂州合邦辻』「合邦住家の段」（桐竹紋寿・吉田文雀）、『仮名手本忠臣蔵』「三段目」「四段目」「六段目」（吉田文雀、吉田作十郎他）の分析を通して、舞台が如何に文化を表象する＜装置＞として成立しているかを考える。	渡辺　保	渡辺　保
8	音曲と語り物	人形浄瑠璃は三味線音楽に支えられた＜語り物＞である。『恋飛脚大和往来』「新口村の段」（野澤喜左衛門）、『絵本太功記』「十段目」等を例に取り、人形浄瑠璃における三味線音楽と言葉の劇的・演劇的構造と作用を分析する。	同　上	同　上
9	歌舞伎と文楽	歌舞伎の丸本物は、人形浄瑠璃の作品を歌舞伎に移したものだが、それが歌舞伎の劇作術も演技も、極めて豊かなものにした。『菅原伝授手習鑑』の「車曳」、（文楽）と「車引」（歌舞伎）、『鬼一法眼三略記』の「菊畑」『絵本太功記』「十段目」の歌舞伎ヴァージョンと文楽ヴァージョンを比較しつつ、この二つの舞台表現の特性を考察する。	同　上	同　上
10	歌舞伎における舞踊	歌舞伎の重要な演目を構成する舞踊はどのような特性を持つのか。能の舞と比較しつつ、舞踊を考える上での基本的フレーム・ワークを行なう。映像は能『石橋』（宝生英照）と歌舞伎『鏡獅子』（中村富十郎）。	同　上	同　上
11	世話物の舞台	歌舞伎が同時代演劇として成立する上で重要な役割を演じたのは＜世話物＞と呼ばれる同時代の町民階級のドラマによってであった。その代表的な作品『お染久松色読販』（「お染の七役」『梅雨小袖昔八丈』（「髪結新三」）、『青砥稿花紅彩画』（「弁天小僧」）によって、劇的言語の変容を分析する。	同　上	同　上
12	伝統演劇とジェンダー	日本の伝統演劇を特徴付けるものの一つに男性が女性の役を演じるということがある。現代におけるその創造的意味を、アジアの伝統演劇（京劇やインドのヤクシャガーナ）と対比しつつ、現代演劇の側から分析する。日本の現代演劇で例に取るのは、ジュネ作渡邊守章訳・演出、篠井英介主演『バルコン―革命夜話幻想館』である。	渡邊　守章	渡邊　守章
13	伝統演劇の幻惑(1)―クローデルと日本の伝統演劇	日本と中国の伝統演劇に実際に触れ、その現代的意味を主張したのは、フランスの劇詩人ポール・クローデルである。この「先駆的な」劇詩人の視線とその変容を、京劇、舞楽、能、文楽、歌舞伎について分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	伝統演劇の幻惑(2) ーアルトー、ブレヒト、そして…	20 世紀の演劇に決定的な影響を及ぼした二人の演劇人、つまりアルトーとブレヒトは、それぞれの形で東洋の演劇に強い衝撃を受けている。現在では、「太陽劇団」を率いるアリアーヌ・ムヌーシュキンや、アメリカ出身でヨーロッパでの活躍のめざましいロバート・ウイルソンなど、20 世紀西洋演劇の先端的演出家が、東洋の伝統的演劇表象と切り結ぶ舞台を考察する。	渡邊　守章	渡邊　守章
15	世界化のなかの伝統演劇	みずからの独創性の根拠として、東洋の伝統演劇に負うところを主張する欧米の演劇人は少なくない。その意味では、日本の伝統演劇も、日本人とその文化の特殊性の内部に閉じこもってはいられず、創造的な外部の視線に晒されているはずだ。世界化の地平における伝統演劇の読み直しの作業はどのようなものか。2001 年９月にフランスで世界初演を行なったクローデルのテクストによる新作能『内濠十二景あるいは二重の影』（渡邊守章作・演出,観世栄夫作曲、主演）の製作を例に、幾つかの実験的な舞台を検証してみる。	渡邊　守章 渡辺　保	渡邊　守章 渡辺　保

＝　文化人類学（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　江渕　　一公（元放送大学教授）　〕
〔主任講師：　松園　万亀雄（国立民族学博物館館長）　〕

全体のねらい

文化人類学は、しばしば「未開社会」と呼ばれた非西洋社会の伝統文化を研究することを通して西洋的な知の体系に対する懐疑と批判を提示してきた。その意味では、既成の西洋科学に対する「批判知」の先駆けとして一定の役割を果たしてきたといえる。しかし今日、この学問が関わる社会文化的環境は劇的に変化しつつあり、新しい知の体系としての再構築が文化人類学には求められている。その１つの方向は、文化人類学を単に「批判知」の体系としてだけでなく、生活環境の変化の中で人間と社会が直面している課題を実践的に解決しようとする、人類共有の「実践知」の体系として再編することであろう。この授業では、そうした問題意識と視座から、人生の生き方、医療と生命倫理、開発と環境、越境と民族紛争、観光産業と文化の商品化の問題など、21世紀の現代的な諸問題を文化人類学がどのように把握し、またそれらの解決にどのように貢献できるのか、フィールドワークの現場からの報告を中心に検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	文化人類学はどこからきたのか～プロローグ～	19世紀の進化主義、伝播主義理論に始まり、構造・機能主義人類学を経て、構造主義人類学、象徴主義人類学など、新しいパラダイムの展開を経て、今日のポストモダン人類学に至る文化人類学の発展の歴史を振り返りながら、文化人類学のねらいと学問的特質、研究の視角と方法、応用人類学の諸分野、人類学と隣接科学の関係について概説するとともに、とくに今期の授業がめざす「実践知」の体系としての文化人類学の課題について述べる。	江渕　一公（元放送大学教授）	江渕　一公（元放送大学教授）
2	家族計画の普及と地域文化	ほとんどの発展途上国で、人口増加が大きな社会問題になっている。海外からの経済、医療援助を受けながら多くの国が家族計画の普及に取り組んでいる。けれども国内には多様な民族と文化が存在していて、避妊に対する態度も一様ではない。この章では、ケニアのひとつの農耕民族を事例にして、多産願望の文化的背景や、避妊の普及を妨げている地域特有の人間関係のありかたを明らかにし、現在の家族計画推進運動に対する改善策を考えたい。	松園　万亀雄（国立民族学博物館館長）	松園　万亀雄（国立民族学博物館館長）
3	人生儀礼の人類学　～人間の一生と文化～	人生には思春期の反抗、老齢化、死という大きな危機がある。人生をいくつかの明確な段階に分け、各段階に劇的に移行する通過儀礼によって人生の危機に対処する集合的な知恵を多くの共同体は備えていた。ケニアのキプシギスでは、若者の反抗は成年式の成り代わりの理論を媒介に社会建設の力に昇華される。また老人は、祖霊に近い存在として、体力の衰えに逆比例して霊的な力を増す。工業化社会では個々人が人生の危機に向き合っている。	小馬　徹（神奈川大学教授）	小馬　徹（神奈川大学教授）
4	加齢と老人の人類学　～自立した老後を生きる～	高齢者というと、疾病の治療や介護に係る社会的･経済的負担の問題が注目されがちだが、本章では、アメリカや日本の事例に基づいて、高齢者自らが生きがいを求めて、積極的に生きる姿と、そこに見られる文化的多様性を検討する。また、情報技術の発達、生涯教育の促進、「健康日本21」政策に見られるような、健康を増進し、疾病の発病を予防し、健康寿命の延伸する試みが、老後の生活にどのような変化をもたらしているのかを検討する。	藤田　真理子（広島大学教授）	藤田　真理子（広島大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	病いの人類学 ～やまい・治療・身体観～	古来、痛みや不調への対応は、身体の諸部分の治療に留まらず、環境や周囲の人々との関係性、心身の連関を調整する試みに満ちており、病の構造や身体観を表出する文化を構成してきた。本章では、タイ王国の民俗療法などを事例として、それがいかなる悩みに応えようとしているのかを検討する。社会関係、ライフサイクルの新たな問題に挑戦する民俗療法者の試みから、激動する時代の生活の質（quality of life）に関しても考察したい。	鈴木 七美（京都文教大学大学院助教授）	鈴木 七美（京都文教大学大学院助教授）
6	開発と環境の人類学 ～共生と持続性をめぐって～	開発により環境が大きく影響を受けるのは、日本では高度経済成長期以降であり、発展途上国では開発独裁体制下のことである。屋久島では世界遺産指定を契機に開発礼賛は影を潜めたが、新手の開発論が人々の言説に見られる。また、アブラヤシ栽培の拡大を熱帯林伐採と先進国での自然志向との関連で捉え、インドネシアのスハルト政権時代の開発移民政策、土地問題、煙害の問題点の関連性を検討し、自然との共生、持続的経済の可能性を考える。	中島 成久（法政大学教授）	中島 成久（法政大学教授）
7	国家と民族 ～多文化のなかの自己認識～	国家も民族(nation)も西欧が生み出した近代市民社会の理念である。だが、今や欧州はそれらをこえて統合されつつある。一方。アフリカ諸国はまだ国民(nation)統合を果たせずに苦しんでいる。従来アフリカでは、人は或る人間集団に属すと共に他の何者かでもあるという多重な自己意識を持っていた。植民地化がもたらした国家と民族の理念が、アフリカの人々の自己意識と自他関係に与えた複雑な亀裂とその影響を西ケニアを例に考える。	小馬 徹	小馬 徹
8	現代の民族紛争～新たなる戦争のかたち～	20世紀の末から21世紀初頭にかけての現代世界では、各地で民族紛争、宗教紛争、地域紛争、内戦などと呼ばれる武力紛争が頻発している。これらは、正規の軍隊同士が戦う国家対国家の戦争とは異なる「新たなる戦争」である。こうした戦争を理解するには、冷戦の終結、グローバル化、国民国家のゆらぎといった大状況を踏まえつつ、地域の特殊事情に注目し、民族や宗教を基盤にした紛争の主体が生成してくる過程を考察する作業が不可欠である。この作業は、文化人類学的な課題として「新たなる戦争」を考える試みである。	栗本 英世（大阪大学大学院教授）	栗本 英世（大阪大学大学院教授）
9	越境の人類学 ～難民の生活世界～	世界各地における武力紛争は、約5000万人という大量の難民を生み出している。その悲惨な姿はマスメディアで報道され、難民の保護は国際社会の課題となっている。しかし、難民キャンプとはいかなる空間なのか、そこで個々の難民がいかに生きているのかといった問題に関する私たちの理解はきわめて限られたものである。本章では、移民やディアスポラなどの現象と対比させつつ、コミュニティの再構築、文化の継承と断絶、援助機関との関係といった諸問題に注目して難民の生活世界を考察する。	同 上	同 上
10	先住民運動の人類学 ～エスニシティと近代国家～	コロニアリズム崩壊後、多くの新興独立国家が誕生したが、近代国家への編入と統合に困難を見出す先住民諸民族が少なくない。ここでは、カナダ、アメリカ、オーストラリアなどの多民族国家における近年の先住民運動展開の事例に基づいて、伝統文化の維持基盤としての自然・土地に対する権利の保障・回復を求める政治運動と独自文化を追求する文化運動の関係に焦点を合わせ、新段階を迎えた先住民族と国家の関係について考察する。	江渕 一公	江渕 一公

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	癒しの人類学 ～こころ・からだ・自然～	最近「癒し」という言葉が氾濫しているが、「癒し」の希求は自らの生に関する欠乏感や欲望(want)の表現でもあり、「癒し」文化は、生活様式（the way of life）の模索と選択に深く関連しているといえよう。本章では、多様な癒しの試みをとりあげ、「癒し」の文化的拡がり、社会的歴史的規定性とその変動に関し検討する。新医療技術に関する議論も参照しつつ、新たな選択肢が提示される時代の欲望の行方と問題点、およびその可能性について考察する。	鈴木　七美	鈴木　七美
12	表出的文化の人類学～芸術・祝祭・スポーツ～	用具的文化と対立する意味での表出的文化の諸側面（身体装飾や美術工芸などの視覚的芸術、神話・伝説・民話の語り、音楽・舞踊・演劇、祭礼、スポーツなどの上演芸術・競技芸術など）を文化人類学的視点から検討し、社会の諸制度と文化的諸価値の維持・強化・挑戦の表象装置としての表出的文化の構造的・機能的特質について考察するとともに、表出的文化が「民族の伝統」として伝達継承されるメカニズム及び伝統的文化から革新的文化が生成されるメカニズムを民俗・歴史・伝統・革新の４つのキーワードを用いて明らかにする。	江渕　一公	江渕　一公
13	地域開発と観光開発の人類学～もう一つのツーリズム～	北米（アメリカ・カナダ）やオーストラリアの先住民社会の事例から出発し、主に日本の都市・農村の事例に基づいて、地域の景観や森林の保全、伝統産業、祭礼やふるさと民俗、フォーク・アートやエスニック・アートなどの「地域文化の掘り起こし」と観光開発との関係を、とくに「もう一つのツーリズム」に焦点を当てて検討し、観光資源開発を通しての地域活性化及び「文化の商品化」現象をめぐる諸問題を中心に、開発人類学・環境人類学・観光人類学の交接領域における現代文化人類学の課題について考察する。	同　上	同　上
14	民族誌展示の現在 ～「実践知」としての博物館人類学の可能性～	今、民族誌展示に従事する博物館にあらためて熱い視線が注がれている。これまで展示の対象となってきた非西洋の諸民族による、自己の文化や歴史の再評価の動きのなかで、博物館の存在が、西洋と非西洋との関係性の証として、また文化的アイデンティティーの形成の装置として、注目されてきたからである。そうした流れをうけて、博物館のあいだでは、現在、さまざまな試みが展開されつつある。本章では、民族誌展示をめぐる近年の取り組みを検討し、博物館の新たな可能性を探る。	吉田　憲司 （国立民族学博物館教授）	吉田　憲司 （国立民族学博物館教授）
15	文化人類学はどこへ行くのか ～エピローグ～	文化人類学の主要な方法とはなにか。文化人類学者の多くが、まちがいなく「フィールドワークだ」と答えるだろう。しかし、「フィールドワーク」のやりかたはこの数十年間で随分と変わってきた。グローバリゼーションのために異文化との距離が大幅に短縮化され、女性研究者が激増し、現地の社会が予想を上回るスピードで激変している。文化人類学が「実践知」の体系として再出発するにはどうすればよのか。フィールドワークをキーワードにして、文化人類学の将来像を描いてみたい。	松園　万亀雄	松園　万亀雄

＝博物館概論（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　石森　秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、多様な博物館のあり方を紹介することによって、博物館に関する基礎的知識を概説することにある。とくに、現代社会における博物館の多様な展開を具体的に取り上げることによって、博物館が担う現代的役割を多面的に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	博物館入門	現代世界において、博物館の多様化が急速に進みつつある。各種資料の収集・保管・展示・調査研究のあり方、生涯学習や文化創造の拠点としての博物館の役割などを入門的に明らかにする。また、博物館関係法規や博物館倫理の問題についても概説する。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の歴史	近代博物館の原型は17世紀のヨーロッパでエリートによって形づくられた。米国では、18世紀に大衆教育のために博物館づくりが進展した。日本では欧米博物館の影響を受けつつ、独自の発展を遂げてきた。博物館の歴史を通して、その役割の変遷を明らかにする。	同　上	同　上
3	自然と生態の博物館	地球の多様な自然と生態をテーマにした博物館は数多くある。自然界における動植物の生態などの展示を通して、自然との共生の重要性を学ぶことができる。具体的事例を通して、自然生態系博物館の多様な役割を明らかにする。	同　上	同　上
4	科学と技術の博物館	人類がうみだした科学技術をテーマにした博物館は数多くある。科学技術系の博物館では、科学技術の歴史の展示だけでなく、現代世界における科学技術を遊びながら学べる工夫もなされている。具体的事例を通して、科学技術系博物館の役割を明らかにする。	同　上	同　上
5	芸術の博物館	芸術をテーマにした博物館は多様である。美術館は代表的な芸術系博物館の一つであるが、そのほか演劇やファッションなどをテーマにした芸術系博物館もある。さらに、科学技術と芸術文化を融合させたテクノロジーアートやメディアアートを扱う博物館なども紹介する。	同　上	同　上
6	歴史の博物館	近年、日本では、歴史遺産の重要性がとみに高まっている。世界遺産の登録が相次ぐとともに、新しい歴史遺産の発掘が行われている。歴史をテーマにする博物館の役割を多面的に取り上げるとともに、歴史的体験の場を提供する具体的事例を紹介する。	同　上	同　上
7	民族の博物館	欧米諸国では、世界の諸民族文化をテーマにした博物館が重要な役割を果たしてきた。日本における民族博物館の歴史は浅いが、民族問題がグローバルな課題になる中で、その重要性が増している。具体的事例を通して、民族博物館の役割を明らかにする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	戦争と平和の博物館	戦争と平和をテーマにした博物館は世界各地で重要な役割を果たしている。開発途上国では建国の歴史とのかかわりで戦争博物館が設立されており、先進諸国では平和をテーマにする博物館が多い。具体的事例を通して、戦争と平和の博物館の役割を明らかにする。	石森　秀三	石森　秀三
9	企業と大学の博物館	企業はその利益を社会に還元するために、博物館や資料館を設立して文化的貢献を果たしている。同様に、大学も各種の附属博物館を通して社会的・文化的貢献をなしている。具体的な事例を通して、企業と大学の博物館が果たす多様な社会的役割を明らかにする。	同　上	同　上
10	途上国の博物館	近年、世界の数多くの開発途上国で博物館づくりが進められている。国家の歴史や諸民族の伝統文化を学ぶための教育施設だけでなく、新しい文化創造拠点としての役割も担っている。多様な役割を担う開発途上国の博物館の現状を紹介する。	同　上	同　上
11	エコ・ミュージアム	欧米諸国では、1960 年代からエコ・ミュージアム（生活環境博物館）という新しいタイプの博物館づくりが展開されてきた。１つの地域における人間と生活環境の関わりを一体的に表現する博物館をめざす「エコ・ミュージアム」の役割を具体的に紹介する。	同　上	同　上
12	博物館と地域社会	日本では近年、地域社会の活性化を図るために、博物館の役割が見直されている。博物館は、地域文化の活性化だけでなく、観光客誘致による地域経済の活性化にも貢献している。具体的事例を通して、地域社会における博物館の役割を明らかにする。	同　上	同　上
13	生涯学習と博物館	欧米諸国では、博物館が生涯学習の場として機能している。子どものための博物館や美術館などにおける具体的事例を通して、生涯学習拠点としての博物館の役割を明らかにするとともに、日本における問題点を多面的に検討する。	同　上	同　上
14	文化創造と博物館	博物館は、各種資料の収集・保管・展示・調査研究だけを目的にした施設ではなく、新しい文化の創造拠点としても重要な役割を果たしている。国内外における具体的事例を通して、文化創造拠点としての博物館の役割を紹介する。	同　上	同　上
15	博物館の未来	情報通信やマルチメディアの高度な発展によって、世界的に博物館のあり方が大きく変貌しつつある。デジタル・ミュージアムなどの新しい博物館の動きとともに、「フォーラムとしての博物館」の重要性などを取り上げることによって、博物館の未来を展望する。	同　上	同　上

＝博物館資料論（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：石　森　秀　三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本における具体的な事例にもとづいて、博物館資料の収集、整理・保管、展示、調査・研究などに関する理論や方法を多面的に紹介することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	博物館資料の意義	博物館は、資料を収集・保管し、展示して教育的配慮のもとに市民の利用に供し、あわせて資料に関する調査・研究を行う機関である。そのような博物館の根幹をなす「資料」の意義について概説を行う。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	自然系資料の事例	各種の博物館資料のうち、天地万物に関する自然系資料について、世界と日本の自然と生態の博物館における具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
3	理工系資料の事例	各種の博物館資料のうち、科学と技術に関する資料や産業遺産について、世界と日本の理工系博物館における具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
4	人文系資料の事例	各種の博物館資料のうち、考古、歴史、民俗、芸術などの諸資料について、世界各地の美術館や歴史博物館などにおける具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
5	民族資料の事例	各種の博物館資料のうち、世界の諸民族に関する資料について、世界と日本の民族博物館における具体的な事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
6	マルチメディア資料の事例	各種の博物館資料のうち、マルチメディアに関する資料について、世界と日本の博物館や美術館などにおける具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
7	博物館資料の整理と保管	博物館は、展示による普及・教育、文化財の保存・保護、学術研究などのために資料の収集を行う。収集された資料は、分類・整理されてから保管される。資料収集の方法や資料保管の方法などについて概説する。	宇野　文男（福井大学教授）	宇野　文男（福井大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	博物館資料の情報化	博物館は、各種の資料を収集・保管するとともに、それらの資料を有効に活用するために情報化を行っている。具体的事例の紹介をとおして、博物館資料の情報化に関連する諸問題について概説する。	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）
9	博物館資料の保存	博物館資料にはさまざまな種類のものがあるために、資料の性質により保存の方法が異なる。博物館資料損壊の原因とその対応のあり方、資料保存の実際などについて、具体的事例にもとづいて紹介する。	園田　直子（国立民族学博物館助教授）	園田　直子（国立民族学博物館助教授）
10	博物館資料の修復	博物館資料は古い時代から伝わるものが多いために、修復を必要としている。資料の修復の目的や方法などについて、具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
11	博物館における調査・研究	博物館は、資料の収集、整理・保管、展示などとともに、資料の調査・研究という機能を有している。具体的事例の紹介をとおして、博物館における調査・研究活動の重要性を概説する。	石森　秀三	石森　秀三
12	博物館における展示の形態と種類	博物館の多様化が進むなかで、博物館における展示の重要性が以前にも増して、問われるようになっている。博物館における展示の形態と種類について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）
13	博物館における展示計画	博物館における展示の実施にあたっては、周到な計画を必要としている。展示基本構想の策定から基本計画の策定、実施設計にいたるまでのプロセスについて、具体的事例にもとづいて概説する。	同　上	同　上
14	博物館における展示技術	博物館における展示の実施にあたっては、各種の展示技術を必要としている。展示の配置計画、動線計画、空間構成、展示のデザイン、展示備品など、博物館における展示技術の諸相を具体的事例にもとづいて紹介する。	同　上	同　上
15	博物館資料の未来	博物館の多様化が地球的な規模で進展するなかで、博物館資料についても、その収集、保管、展示、調査・研究のあり方が大きく問われる時代になっている。博物館資料の未来について多面的に検討を行う。	石森　秀三	石森　秀三

＝博物館経営・情報論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：石森秀三（国立民族学博物館教授）〕

全体のねらい

この講義のねらいは、世界と日本の博物館における具体的な事例にもとづいて、博物館経営、博物館における教育普及活動、博物館における情報の意義とその利用方法などについて概説することにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ミュージアム・マネジメント入門	博物館の多様化が進展するなかで、博物館の財政制度、組織、人材配置、施設管理などについて、博物館経営の改革が求められている。博物館利用者に満足や感動を与えるための経営手法であるミュージアム・マネジメントについて概説を行う。	石森　秀三（国立民族学博物館教授）	石森　秀三（国立民族学博物館教授）
2	博物館の組織と職員	博物館は単なる建物を指す施設ではなく、組織としての主体性をもって活動する機関である。博物館における諸活動を円滑に進めるための組織のあり方、学芸員の役割などについて概説を行う。	同　上	同　上
3	博物館人材の養成	博物館は、館長を中心にして学芸員や事務系職員などからなるが、さらにミュージアム・プロデューサーやミュージアム・エデュケーターなどを必要としている。博物館における人材養成について多面的に概説を行う。	同　上	同　上
4	博物館の行財政制度	博物館経営で最も重要なのは、博物館に関わる行財政制度である。博物館に関わる行政の役割、博物館の財政・予算、各種の事業資金などについて、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	同　上	同　上
5	生涯学習と博物館教育	近年、生涯学習への関心が急速に高まっている。学校教育や社会教育などとの関連にもとづいて、博物館における生涯学習のあり方や博物館教育の意義について、具体的事例にもとづいて概説を行う。	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）	宇治谷　恵（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	博物館における教育プログラム	博物館は、生涯学習や学校教育の面で重要な役割を果たしている。博物館が実施している各種の教育プログラムを具体的事例にもとづいて紹介するとともに、博物館ボランティアの役割についても概説を行う。	宇治谷　恵	宇治谷　恵
7	博物館におけるサービス	博物館は、資料の収集、整理保管、展示、調査研究を行う機関であるが、それらに関して各種サービスを利用者に提供している。博物館サービスの諸相について、具体的事例にもとづいて紹介する。	石森　秀三 宇治谷　恵	石森　秀三
8	ミュージアム・マーケティング	博物館は従来、公的性格が強かったためにマーケティングを行うことがほとんどなかった。近年、博物館においても運営の効率化が求められており、マーケティング手法の導入が図られている。具体的事例にもとづいて、ミュージアム・マーケティングを紹介する。	石森　秀三	同　上
9	博物館における評価	近年、日本では、環境評価や行政評価などが重要になるとともに、博物館においても各種の評価が重要な役割を果たすようになっている。具体的事例にもとづいて、博物館評価のあり方について概説する。	同　上	同　上
10	博物館施設の運営と管理	博物館は、展示場だけではなく、収蔵庫、研究室、図書室、ミュージアムショップ、ホールなど、さまざまな施設から成っている。危機管理の問題も含めて、博物館諸施設の運営・管理について、概説を行う。	宇野　文男（福井大学教授）	宇野　文男（福井大学教授）
11	博物館における情報の意義	博物館は、市民の知性を刺激し、人間精神を挑発することによって、未来創造に向かわしめるための「刺激と挑発の装置」である。博物館における情報の意義について、具体的な事例にもとづいて概説を行う。	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）	鈴村　明（国立民族学博物館情報管理施設課長補佐）
12	博物館活動の情報化	博物館にはさまざまな情報が存在する。各種の博物館情報はコンピュータに入力されてシステム管理される。博物館における各種の情報化のシステムについて、具体的事例にもとづいて紹介を行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	情報の展示と情報サービス	博物館は、各種の情報を有している。それらの博物館情報はシステム化されて管理され、展示やサービスに供される。博物館における情報の展示や各種の情報サービスのあり方について、具体的事例にもとづいて紹介を行う。	鈴村　明	鈴村　明
14	博物館の連携と国際協力	国際化の進展に伴って、博物館においても各種の国際協力や連携を図ることが求められている。国立民族学博物館における具体的事例にもとづいて博物館の国際協力・連携について概説を行う。	石森　秀三	石森　秀三
15	ミュージアム・マネジメントの未来	社会のニーズの多様化に伴って、博物館はさまざまな革新を行う必要に迫られている。博物館経営論および博物館情報論の成果をふまえつつ、今後のミュージアム・マネジメントの望ましいあり方を概説する。	同　上	同　上

＝イギリス文学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：山内久明（放送大学教授）〕
〔主任講師：高田康成（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：高橋和久（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

イギリス文学は、中世から現代までにいたるおよそ1500年の長く豊かな歴史を持つ。異なる段階で融合した複数の民族と言語の諸要素とともに、ヨーロッパの共有財産である古典古代の文学伝統を受け継ぐ複合的性格を持ち、ジャンルも多岐にわたる。それぞれの時代の文化と社会との関連性を視野に入れながら、イギリス文学を多角的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	(1)はじめに－イギリス文学を語る (2)アングロ・サクソン時代	西欧世界全体で「中世」と呼ばれる時代が始まった5世紀頃から1066年までの期間を扱う。叙事詩「ベーオウルフ」の北欧的異教世界、キリスト教以降のベーダ、そしてアルフレッド大王の改革などを概観する。	山内　久明（放送大学教授） 高田　康成（東京大学大学院教授）	山内　久明（放送大学教授） 高田　康成（東京大学大学院教授）
2	中世－ノルマン征服以後	1066年から13世紀までの時期は、征服者のノルマン文化と被征服者のアングロ・サクソン文化との混成状態が続く。これを大陸との関係で見たあと、チョーサー、ラングランド、ガウェイン・ポエトなどで華やかな14世紀の「英文学」を概観する。	高田　康成（東京大学大学院教授）	高田　康成（東京大学大学院教授）
3	ルネッサンス時代	16世紀初頭に始まるイギリスのルネサンスをヨーロッパ大陸のルネサンスとの関連で見ることにする。詩ではソネット形式と叙事詩の輸入、そして英国版の創造をスペンサーを例にとって論ずる。演劇はセネカ風悲劇の受容と変容として触れることになる。	小林　宜子（東京大学大学院助教授）	小林　宜子（東京大学大学院助教授）
4	シェイクスピアならびに同時代の劇作家	シェイクスピアをその作品世界の総体として捕らえるという試みをしてみるつもり。また同時代の、マーロウ、ジョンソン、ミドルトン、トマス・ヘイウッドといった彼に劣らない劇作家たちにも触れる。	河合　洋一郎（東京大学大学院助教授）	河合　洋一郎（東京大学大学院助教授）
5	17世紀	17世紀はさまざまな意味で近代へいたる転換期にあたる。そのような激動と変化に富む時代を背景におきながら、詩における「形而上詩人」、西欧最後の叙事詩人とも言うべきミルトン、そして多彩で旺盛な活動を繰り広げたドライデンを扱う。	高田　康成（東京大学大学院教授）	高田　康成（東京大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	散文精神の開拓	「小説」がジャンルとして確立されたのはイギリスでは18世紀のことである。その黎明期を彩る冒険譚や書簡書体小説から、超自然の恐怖を前景化したゴシック・ロマンスを経て、リアリズム小説を完成させたジェイン・オースティンまでを概観する。	高橋　和久（東京大学大学院大学）	高橋　和久（東京大学大学院大学）
7	古典主義の成熟と変貌	17世紀後半に遡る、古典古代を規範とする新古典主義の伝統は、アレグザンダー・ポープをはじめとする18世紀の詩人に受け継がれて文学の主流となる。サミュエル・ジョンソンの君臨する世紀の半ばを経て、古典的規範からの離脱とともに、周縁的なものに対する関心や感受性の開拓がみられるに到る。	山内　久明 アルヴィなほ子（東京大学大学院助教授）	山内　久明 アルヴィなほ子（東京大学大学院助教授
8	ロマン主義時代	産業革命、フランス革命、ナポレオン戦争はイギリスに社会的激変をもたらした。それに巻き込まれた同時代の詩人は、外界に敏感に反応すると同時に、内面の世界を限りなく掘り下げる想像的言語を創造した。第一世代のブレイク、ワーズワス、コールリッジ、第二世代のバイロン、シェリー、キーツなどのほか、女性詩人にも注目する。	同　上	同　上
9	ヴィクトリア朝の詩と批評	テニスンとブラウニングにはじまるヴィクトリア時代の詩は、ロマン主義の詩の延長上にあり、それを深化させたかどうかは別として、より洗練化させた。産業革命の完成に伴う機械化と画一化、宗教的対立と階級分化が顕在化した状況に対する社会的発言と同時に、美意識の追求に殉じた批評がある。	同　上	同　上
10	ヴィクトリア朝小説－大英帝国の影のもとに－	産業革命を他国に先駆けてなしとげた英国が繁栄を享受したヴィクトリア女王（在位 1837-1901）の時代は、同時に小説の時代でもあった。大都会ロンドンを、荒涼たるヨークシャーを、ストーンヘンジを擁するウェセックス、そしてインドやアフリカを舞台に、小説はジャンルとしての豊かさを誇示する。	高橋　和久 中井亜佐子（一橋大学助教授）	高橋　和久 中井亜佐子（一橋大学助教授）
11	イギリスの演劇－近代から現代まで－	17世紀の王政復古期から現代まで、イギリスの演劇は3世紀以上にわたりその姿を変貌させていった。宮廷演劇からブルジョワ演劇へ、そして19世紀メロドラマ演劇を経て、再び演劇が知的文化に編入されていく過程を、特に劇場運営に着目して考察する。	野田　学（明治大学助教授）	野田　学（明治大学助教授）
12	モダニズムの時代－20世紀前半の詩－	20世紀初頭のイギリス詩壇を席巻したのは、モダニズムという国際的な芸術運動であった。急激な都市化や第一次世界大戦などのかつて経験したことのない環境の変化を背景として、言語、主題、あるいは詩人と読者のありようにも及んだ大きな変革のうねりを検証する。	中尾　まさみ（東京大学大学院助教授）	中尾　まさみ（東京大学大学院助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	小説の実験から政治の季節へ	20世紀にはいると、19世紀末の美意識を引きずりながら、それまでにない革新的な手法を駆使した小説が生まれる。1920年代に花開いた人間の「意識の流れ」に注目するモダニズム小説は、しかし、30年代以降には、反ナチズムという政治性の強い作品群にとって代わられる。	高橋　和久	高橋　和久
14	さまざまな声－第二次世界大戦後の詩－	20世紀後半の英詩は、「イギリスの詩」から旧植民地を視野に入れた「英語圏の詩」へと姿を変え、多様な「声」を獲得した。ムーブメント派、北アイルランド文芸復興、火星人派、ポストコロニアル詩人など、新しい詩の流れを紹介する。	中尾　まさみ（東京大学大学院助教授）	中尾　まさみ（東京大学大学院助教授）
15	(1) 変化する小説・多国籍化する作家 (2) まとめ	戦後の英国は世界の最強国の地位をアメリカに譲り、福祉国家としての道を歩み出す。社会システムの変化は小説にも反映される。1950年代以降にデビューした作家たちの描いた軌跡をたどりつつ、非アングロ＝サクソン系作家が活躍する現代の「英国」小説の特質を探る。	中井亜佐子（一橋大学助教授） 高橋　和久	中井亜佐子（一橋大学助教授） 高橋　和久

＝ドイツ文学（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　保坂　一夫(日本大学教授)〕

全体のねらい

文学は言語メディアによって想像・定着させられた現実世界である。この別次元の世界においても、それに同調したり反逆したりする動きが現れてくる。そうした美的主体が、詩、散文、演劇、大衆文化などにおいていかに出現し受容されてきたか、その点を中心に、ドイツ文学の歴史を掘り返してみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	ドイツ文学の流れ	序論として、ドイツ民族や国家、ドイツ言語世界の成立など基本的問題を概観し、併せて、啓蒙主義文学までのドイツ文学の歴史を紹介する。それによって今後の14講の基本テーマを設定する。	保坂　一夫(日本大学教授)	保坂　一夫(日本大学教授)
2	新しい抒情の誕生	18世紀中葉にドイツに出現した新しい抒情性について、クロプシュトック、ゲーテらを取り上げながら、その特色を探る。	鍛治　哲郎(東京大学教授)	鍛治　哲郎(東京大学教授)
3	シュトゥルム・ウント・ドラングと時代精神	シュトゥルム・ウント・ドラングといわれる文学運動のロマン主義的精神を紹介し、その世界苦から、古典主義を含めたドイツ文学の特色と問題点を掘りおこす。	保坂　一夫	保坂　一夫
4	演劇的文化世界の拡大	18世紀末のドイツでは、演劇や音楽が市民社会との接点を拡大していった。1780年代のウィーンで活躍したモーツァルトのドイツ語オペラを通して、啓蒙主義的な市民文化の特徴をさぐる。	田辺　秀樹(一橋大学教授)	田辺　秀樹(一橋大学教授)
5	文学に託された夢と可能性	ロマン主義の時代の文学において、文学への期待がどのように高まり、また表現の可能性がどのように切り開かれたかを探る。	鍛治　哲郎	鍛治　哲郎
6	社会批判とリアリズム文学	ハイネ、フォルスターなどの批判的文学から19世紀後半のリアリズム文学まで、19世紀散文の流れを考える。ケラー、シュトルム、フォンターネなどにも言及する。	井上　修一(プール大学教授)	井上　修一(プール大学教授)
7	世紀末前後の詩人たち	世紀末から20世紀前半にかけてドイツにはさまざまな主張をかかげた文学運動が出現した。ホフマンスタール、リルケ、ゲオルゲなど日本にもよく知られている詩人を取り上げ、この時代の詩的表現の特色を明らかにする。表現主義やタダにも言及する。	鍛治　哲郎	鍛治　哲郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	世紀末前後の散文世界	20 世紀文学を切り拓いたといわれるホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』を中心にして、その問題点を示しつつ、世紀末前後の散文の豊かな展開を紹介する。	井上　修一	井上　修一
9	世紀末前後の演劇と大衆文化	19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、ドイツの演劇文化はどのような変貌をとげたのか？自然主義演劇、カバレット、オペレッタ等に焦点をあてながら、演劇文化における現代の始まりを、大衆文化も視野に入れながら検討する。	田辺　秀樹	田辺　秀樹
10	ワイマル時代の文学	自由精神とファシズム、新たな共同体への憧憬など、政治的世界の動向に揺れつづけた文学の叫びとその行方を探る。カフカとトーマス・マン、亡命文学における理論対立にも触れる。	保坂　一夫	保坂　一夫
11	20 世紀の演劇と大衆文化	2 つの世界大戦、ナチズム、東西分裂など、20 世紀のドイツは激動の時代だった。そうした中で、広い意味での演劇的文化は、どのような展開をみせただろうか。ブレヒトの演劇、戦前、戦中の映画、戦後の演劇等、20 世紀の演劇的世界の多様性を紹介する。	田辺　秀樹	田辺　秀樹
12	戦後ドイツの詩的世界	ファシズムから解放された抒情精神の喜びとその過去とのかかわり、アドルノの批判とそれに抵抗する動き、詩と社会との関わりなど、20 世紀後半の詩人たちの動向を具体的に探ってみる。	鍛治　哲郎	鍛治　哲郎
13	東西対立の中のドイツ散文	ドイツ文学はファシズムという過去の重荷だけでなく、東西対立のイデオロギーによる亀裂にも苦しまなければならなかった。ドイツ散文のその闘いを明らかにする。	保坂　一夫	保坂　一夫
14	20 世紀後半のオーストリア・スイス文学	ドイツが過去の重圧に苦しんでいる中で、オーストリアやスイスの文学は何をしていたのか、フリッシュ、ベルンハルトなどに具体的に触れつつ、そこにひそむ可能性と不可能性を探る。	井上　修一	井上　修一
15	ドイツ統一から 21 世紀へ	ドイツ統一は、作者の側においても読者の側においても、新しく眼を開かせるものであった。新しく出現してきた若々しい文学精神の特色を紹介し、21 世紀に入った文学に残された表現の可能性について考え、この講義の結びとする。	保坂　一夫	保坂　一夫

＝フランス文学（’０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家）〕
〔主任講師：　柏倉　康夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　石井　洋二郎（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

国民文学としてのフランス文学の成立は、１７世紀絶対王政の成立と密接に結びついているが、中世・ルネッサンス時期の文学も決して軽視はできない。この基礎の上にフランス国民文学が生まれてきたのであり、それはフランス人と話す場合の基本的な教養となっている。講義では、フランス文学が基層を成す中世・ルネッサンス期から国民文学としてのフランス文学、現代までを取り上げ、その代表的な作家と作品を考察する。作品の背後にあるフランスの歴史の基本的な様相と局面にも気を配り、総合的に作品を理解する手だてとする。印刷教材は、基本的に翻訳のあるものを主とするが、韻文の場合は原文による朗読も随時使用する予定。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	フランス語の文学とは？――つの見取図	「フランス語の文学」の結節点をめぐって、「古典主義」の時代から近代性の時代へ、さらに 20 世紀から 21 世紀へと至る大きな流れを展望し、一つの見取図を描き出す。	渡邊　守章 柏倉　康夫 石井　洋二郎	渡邊　守章 柏倉　康夫 石井　洋二郎
2	中世の文学ーフランス語文学の成立と展開　アーサー王伝説	ファンタジーの源流ランスロ（ランスロット）、ゴーヴァン（ガウェイン）、ペルスヴァル（パルツィファル）、彼らアーサー王伝説の登場人物たちは、いかにして中世ヨーロッパ文学の共有財産となったか、１２世紀頃に成立した「ロマン」というジャンルを中心に考察する。	篠田　勝英（白百合女子大学教授）	篠田　勝英（白百合女子大学教授）
3	ルネッサンスと文芸	フランソワ・ラブレー、ルイーズ・ラベ、ミシェル・ド・モンテーニュなどの作品を通して、ルネッサンス期の文学の緒特徴について考察する。	宮下　志朗（東京大学大学院教授）	宮下　志朗（東京大学大学院教授）
4	古典主義の時代の文学（1）	古典主義とその対部。制度と新しい作家群（法曹貴族）。雄弁術の系譜（教会・大学・裁判所そして劇場）。リシュリューとアカデミー・フランセーズ（文学言語の洗練と厳密化。規則論議）。「劇場国家」と「踊る王」。ピエール・コルネイユの演劇的世界（「英雄」の君臨とその地平）。モリエール喜劇と同時代演劇（「道化」変容。人間の「弱さ」という仕掛け）。ボシュエと演劇批判。	渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家）	渡邊　守章（放送大学名誉教授・演出家）
5	古典主義の時代の文学（2）	ジャン・ラシーヌと古典主義悲劇。「情念」と悲劇の言語。ラシーヌの同時代人（詩人としてのボワロー）。「新旧論争」。古典主義の聖別化（コメディ＝フランセーズ創設）とその対部（縁日芝居の隆盛）。ヴォルテールあるいは古典主義美学の意識化。マリヴォーとイタリア喜劇（言語と仮面、感情と身体）。ルソーとラモー――「道化論争」。ディドロと市民劇の理念。演劇についての言説。ボーマルシェの状況。	同　上	同　上
6	古典主義時代の文学（3） 小説とモラリスト	１７世紀の散文文学は、小説としては『クレーヴの奥方』以外に見るべきものが少ないが、その一方で「モラリスト」と呼ばれる一群の人間観察者たちを生んだ。断片形式で書かれた彼らの文章を読みながら、古典主義時代の思考の特質を探る。	石井　洋二郎（東京大学大学院教授）	石井　洋二郎（東京大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	啓蒙主義と文学（1）	「光の世紀」の文学ルイ１４世の死からフランス革命に至る１８世紀は、自然、社会、人間から神まで、それまで自明とされていたことがらが根本的に問い直された時代である。 様々な思想的文学的試みに触れつつ、文学の可能性について考えてみたい。	吉岡　知哉（立教大学教授）	吉岡　知哉（立教大学教授）
8	啓蒙思想と文学（2） 知の変容と文学	ルイ 14 世の死に先立つ 17 世紀末から哲学や文学の分野で新たな知の変容がはじまっていた。そしてこの時代の文学を理解するには哲学思想を関連づける必要がある。18 世紀はじめに起こった「新旧論争」をはじめ、ヴォルテール、モンテスキュー、百科全書を中心に啓蒙思想を検討する。	柏倉　康夫（放送大学教授）	柏倉　康夫（放送大学教授）
9	近代性の文学（1） 詩の近代	ロマン主義から象徴主義へ―文学史的にはこの図式によって整理されることが多い１９世紀の詩の変容を、何人かの主要な詩人の作品に触れながら、「近代」の概念をめぐる彼らの意識そのものの変容と関連づけながら跡付ける。	石井　洋二郎	石井　洋二郎
10	近代性の文学（2） 小説の時代	１９世紀はいわゆる「近代小説」誕生の世紀として位置付けられる。今日でも読み継がれているいくつかの作品を、登場人物、描写、語りの技法、文体、社会的背景など、さまざまな観点から分析し、その時代的特質と普遍性を明らかにする。	同　上	同　上
11	近代性の文学（3） 詩と批評の栄光	１９世紀半ば以後に台頭した象徴主義はすぐれた純粋詩を生み出したが、その背景には文学そのものの意味を問う批評精神が息づいていた。マラルメの「批評詩」は、こうした詩と批評を一体化させるこころみであった。この回では当時数多く創刊された前衛雑誌を取り上げ詩と評論を論じる。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
12	近代性の文学(4)――文学と劇場	革命と劇場――ロマン主義の徴のもとに。「犯罪大通り」から「『エルナニ』の戦い」へ。新しい時空と舞台芸術。『ロレンザッチョ』症候群から「呪われた詩人」へ。「近代性」ということ（芸術と制度の乖離、あるいは書斎と劇場の隔絶）。『タンホイザー』パリ初演。第二帝政下の劇場。「芝居の楽しみ」と劇場における近代（同時代風俗劇とオペレッタ）。万国博覧会の流行（近代固有の表象装置としての）。世紀末の文学戯曲（自然主義と象徴派）。マラルメによる「未来の群衆的祝祭演劇」のパラダイム。『シラノ』対『ユビュ王』。クローデルの出現。	渡邊　守章	渡邊　守章
13	二十世紀の文学（1） 詩と批評	二十世紀の幕開けとなった第一次大戦で人類はかつてない悲惨を経験し、十九世紀の価値観は崩壊した。そのなかから生まれた文学的潮流が「ダダ」や「シュルレアリスム」の運動である。そしてこれらは二十世紀の文学や絵画などの新たな芸術活動の源泉となる。	柏倉　康夫	柏倉　康夫

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	二十世紀の文学（2）小説の変貌	さまざまな前衛運動の波に洗われて、フランス小説は根底から問い直され、危機を体験しつつ、なお新たな可能性を切り開いていった。プルーストからヌーヴォー・ロマンまで、さらには現在活躍する作家たちをも視野に入れて、その変貌を跡づけてみる。	野崎　歓（東京大学大学院助教授）	野崎　歓（東京大学大学院助教授）
15	２０世紀の文学（3）――「演出家の世紀」における劇文学	「演出家の世紀」の意味と主要な力線。ジャック・コポーのヴィユー＝コロンビエ座から、ジューヴェ、デュラン、ピトエフ、バティの「カルテル四人組」を経て、第二次大戦後のバローとヴィラール、そしてプランション、シェロー、ヴィテーズ、ムヌーシュキンなど、２０世紀フランス演劇の節目となる変革とその系譜。演出家と劇作の出会い。演出家による「古典の読み直し」。劇場の事件としての劇作。クローデルの世界大演劇。ジロドゥーの言語と幻想。「状況の演劇」の主張。アルトーの「叫び」。５０年代不条理劇（ベケットとイヨネスコ）。ジュネの「演劇の上に立てられた演劇」。アラバルと祝祭。「集団制作」の冒険と成果。コルテスあるいは言語の強度。フランス語による劇言語の地平。	渡邊　守章	渡邊　守章

＝　20世紀の中国文学（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　藤井　省三（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

中国文学は中国における近代的国民国家建設と歩を同じくして誕生した。上海・北京の南北二都を手がかりに近代中国および20世紀中国文学を読み解いてみよう。その際、キーワードはメディア＝知の媒体と都市の社会学である。中国本土だけではなく、広く中国語圏を視野に入れて、香港・台湾でのアイデンティティ形成と文学との関わりや、明治・大正・昭和の日本や現代東アジアにとっての中国文学についても考えてみたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代中国文学を学ぶ、ということ	3500年の歴史を持つ中国の文学を、温泉饅頭に喩えてみよう。饅頭のあんこに当たるのは詩文、つまり唐詩や『史記』など文語文の古典で、その外側の小麦粉の皮が古典俗文学、主に宋代12世紀以後の講談や演劇の台本として発展した。そしていちばん外側のつるっとした薄皮が現代文学なのである。近代史は約1世紀にすぎないが、「国民〔ルビ:ネーション〕」としての「中国」、それを人々に想像させる「文学」という2つの概念を焼き付けた薄皮が本体を覆ってこそはじめて、美味しい温泉まんじゅう、すなわち国民文学としての中国文学が成立するのである。	藤井　省三（東京大学大学院教授）	藤井　省三（東京大学大学院教授）
2	租界都市上海の誕生とジャーナリズムの出現	上海・北京を手がかりに近代中国およびその文学を読み解いていく際、キーワードはメディア＝知の媒体と都市の社会学である。すなわち新聞・雑誌などのマスメディア、学校・留学などの教育制度と、このメディアを構築するとともに作家や編集者、評論家そしてほかならぬ読者を培養した都市の諸制度に注目したい。	同　上	同　上
3	上海の変法運動から東京の革命運動へ――梁啓超の『新小説』と魯迅・蘇曼殊のロマン主義文学	上海ジャーナリズムは1890年代には清朝改革派のメディアに成長した。戊戌政変（1898）後に維新派のリーダー梁啓超は東京に亡命して明治日本の影響を受け、一国の民を新たにするには一国の小説を新たにすべし、と論じた。それまでは暇つぶしのための読み物と見なされてきた小説が、世紀の転換期に改革・革命のための社会的・政治的効用という視点から再評価されたのだ。やがて魯迅の欧州ロマン派詩論などを経て、内面と自我が発見されていく。	同　上	同　上
4	“文化城”北京と文学革命	辛亥〔ルビ:しんがい〕革命（1911）後に成立した中華民国は混迷を続ける。かつて皇帝の都として全国に君臨した北京は、“文化城”に変身して全土の青年の前に姿を現わし、この文化城の頂点に立ったのが北京大学であった。アメリカ留学中に恋愛と文学とを身を以て体験してきた胡適がこの北京大学に教授として着任し、中国の文学革命が始まるのである。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	5・4 時期の新興知識階級	1917 年の文学革命から 20 年代後半の国民革命までを、反日反軍閥の国民的政治運動である 5・4 運動（1919）にちなんで 5・4 時期と称す。新文化運動の中心的役割を果たした『新青年』雑誌およびブルジョワ派の新月社、魯迅ら辛亥革命世代の語絲派、民国初期の日本留学生による創造社という 3 大サロンを通じて、5・4 文学における恋愛と革命というテーマを考えてみたい。	藤井　省三	藤井　省三
6	国民革命と狂熱の 30 年代上海	中華民国では辛亥革命後も袁世凱の帝政復活、軍閥割拠などの混乱が続いていたが、20 年代半ばには国民革命の上げ潮に乗って国民党が北伐戦争（1926～28）により中国統一に成功する。同党指導者の蒋介石は南京に遷都し、一党独裁体制下で経済建設を押し進めたため、新聞雑誌の発行量が激増し、文芸を愛好する知識層・市民層が増大、職業作家、職業批評家が続々と登場して、上海が北京を遥かに凌ぐ出版文化の中心となった。映画もまたサイレントからトーキーへと変身して上海映画の黄金時代を迎えている。	同　上	同　上
7	30 年代文学の爛熟――京派、新感覚派、東北エミグラント文学から中国の『風と共に去りぬ』まで	30 年代文学を考えるとき、政治経済から強い影響を受ける上海文化界と異なり、5・4 時期以来の“文化城”の伝統を持つ北京の文壇も忘れてはならない。また雲南や東北地方（旧満州）など、辺境を舞台にしたローカル・カラー文学が上海文壇に登場したのも特徴的である。	同　上	同　上
8	共和国の興亡と文学成熟期の 40 年代文学	中国ナショナリズム勃興による既得権益喪失を恐れた日本は、満州事変（1931）を経て 37 年にはついに中国への全面侵略を開始する。これにより 30 年代中華民国の繁栄の夢は打ち砕かれ、中国は国民党支配の“大後方”（だいこうほう）、共産党支配の“解放区”そして日本占領下の“淪陥区”（りんかんく）の 3 つに分かれ、戦時下ながらも大後方と淪陥区では 30 年代の繁栄を受けて文学が成熟していく。その淪陥区上海に彗星のように現れた女性作家が張愛玲であった。	同　上	同　上
9	毛沢東時代と文化大革命	日本の敗戦（1945）、国共内戦を経て 1949 年に共産党が大陸を統一し中華人民共和国を建国、暗黒の 30 年が始まる。独裁党である共産党のそのまた独裁者であった毛沢東は、反右派闘争（1957）から文化大革命（1966～76）まで次々と政治キャンペーンを発動し、文学・芸術には毛沢東賛美を任務として与えたのである。	同　上	同　上
10	鄧小平時代の文芸復興	文革が終息し 80 年代の鄧小平体制下で改革・開放政策が本格化するにつれ、文学・芸術は再生し、世界的レベルを回復していく。最初に登場したのが北島ら『今天（チンティエン）』派の若き詩人たちであり、80 年代半ばには文革世代の若い作家たちが一斉に「ルーツ探求の文学」を唱え始め、莫言のような中国の魔術的リアリズムが出現している。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	6・4「血の日曜日」事件からオルターナティヴ作家まで	1989年にはあの悲惨な「血の日曜日」事件が勃発、鄭義ら大量の作家が海外に亡命し、世界各地で中国エミグラント文学が出現している。そのいっぽうで、鄧小平の大号令で90年代に再び改革・開放政策が推進され高度経済成長が実現されると、旧来の共産党統制下の“単位”社会は崩壊し始め「新富（ニューリッチ）」階級が台頭し、インターネットを駆使する衛慧らオルターナティヴ作家が続々と登場している。	藤井　省三	藤井　省三
12	香港文学史概説	アヘン戦争以来イギリスの植民地であった香港では、中国返還（1997）が現実化し始める80年代から、香港アイデンティティが急速に形成され、李碧華の恋愛歴史小説、也斯のポスト・コロニアルな詩と小説などを中核として香港文学が形成されている。香港映画との関わりも重視すべきであろう。	同　上	同　上
13	台湾文学史概説	台湾は日本統治期（1895～1945）と国民党統治期（1945～90頃）という2つの外来政権の支配を体験したため、戦前は日本語、戦後は北京語という2つの「国語」を、統治者に対し抵抗しつつ主体的に受容してきた。北京語文学のばあい、美麗島事件（1979）を契機に“台湾意識”を全面に押し出した作品が多くなったが、その中でも政治とエスニシティとセックスとをテーマに描き続けている李昂ら女性作家の活躍は、日本や欧米でも注目を集めている。	同　上	同　上
14	日本人はいかにして現代中国を読んできたのか――20世紀の中国文学読書史	中国・香港・台湾という中国語圏の文学を、日本人はどのように受容してきたのだろうか。5・4新文学から40年代文学までを同時代文学として紹介した東京外語グループと中国文学研究会、あるいは日本占領下の上海で張愛玲を翻訳していた室伏クララ、同時期に東京・仙台で魯迅の伝記を書いていた太宰治らにスポットを当ててみたい。	同　上	同　上
15	村上春樹と中国語圏――日本文学が国境を越える時	20世紀東アジアの3大作家といえば、魯迅（1881～1936）・張愛玲（1920～95）・村上春樹（1949～）を挙げられよう。台湾では『ノルウェイの森』（1987）が大流行して「村上春樹現象」が生じ、やがて「村上現象」は90年代初頭の香港、90年代末の上海・北京へと伝播した。上海の衛慧、台湾の絵本作家幾米（ジミー）らは中国の「村上チルドレン」といえよう。都市と農村という視点からこの3大作家を考察し、中国語圏文学における村上春樹の受容のされかたを考えてみたい。	同　上	同　上

＝ドイツの言語文化（‘０２）＝（Ｒ）

－ 読んで、聴いて、感じて、考える －

〔主任講師：　久保　哲司（一橋大学教授）〕

全体のねらい

ドイツ語で書かれた文学作品や思想的著作を読み、そこに表れている自然観・歴史観・人生観・恋愛観などについて考えてみたいと思います。取り上げるテクストは、おおよそ時代順になっています。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	自然と人間	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテの詩「旅人の夜の歌」「魔王」に見られる自然観について考察します。	久保　哲司（一橋大学教授）	久保　哲司（一橋大学教授）
2	愛と死と再生	ゲーテの詩「五月の歌」「至福の憧れ」を取り上げ、そこに表現された愛のありようについて考えてみます。	同　上	同　上
3	友愛	ベートーヴェンの第九交響曲終楽章でおなじみのフリードリヒ・シラーの詩「喜びに寄す」を読み、そこに込められたメッセージを、そして表現形式の特質を探ります。	同　上	同　上
4	人生の秋	フリードリヒ・ヘルダーリンの詩「生の半ば」その他を読み、人生の諸段階について考えてみたいと思います。	同　上	同　上
5	幸福な晩年	ロマン派の作家ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフの詩「夕映えの中で」に歌われている老年と死について考えます。リヒャルト・シュトラウスがこの詩に作曲したまことに美しい音楽も鑑賞します。	同　上	同　上
6	穏やかな美	写実主義に属する作家アーダルベルト・シュティフターの作品を読み、＜外面の美しさと内面の美しさ＞＜荒々しい自然と穏やかな自然＞といったテーマについて考えてみます。	同　上	同　上
7	芸術の本質	思想家フリードリヒ・ニーチェの『悲劇の誕生』における有名な＜ディオニュソス的なもの＞＜アポロ的なもの＞という対概念について考察します。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近代文化の運命	社会学者マックス・ヴェーバーの主著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の一節を読み、ヴェーバーの文化観について考えます。	久保　哲司	久保　哲司
9	庭園	詩人シュテファン・ゲオルゲの作品を読み、十九世紀末から二十世紀初頭に至る時期の美意識や、＜自然の美と人工の美＞といった問題を掘り起こしてみたいと思います。	同　上	同　上
10	大都市の恐怖	ライナー・マリーア・リルケの特異な小説『マルテの手記』に描かれた、二十世紀初頭のパリにおける大都市経験を分析してみます。	同　上	同　上
11	親の苦労	フランツ・カフカの物語「家父長の気がかり」その他を読み、この作家の作りだす不思議な世界について考察します。	同　上	同　上
12	子供の幸福	ヴァルター・ベンヤミンのきわめて美しい散文作品『1900年頃のベルリンの幼年時代』から、子供の行なう＜真似＞ということを扱った章を味読します。	同　上	同　上
13	文化と野蛮	哲学者マックス・ホルクハイマーとテーオドーア・W・アドルノの共著『啓蒙の弁証法』の一節を読み、現代の文化産業の問題について考えます。	同　上	同　上
14	二十世紀の証言	第二次世界大戦後のドイツ語文学における最も優れた詩人パウル・ツェラーンの作品を読み、個人の経験と歴史、記憶と文学といったことについて考えをめぐらします。	同　上	同　上
15	コンピューター社会の未来	現代ドイツ文学を代表する作家のひとりハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーのエッセイを手がかりに、コンピューターをはじめとするニュー・メディアの文化史的意味について考えてみたいと思います。	同　上	同　上

＝フランスの言語文化（‘０２）＝（Ｒ）

－ フランス語の文化誌 －

〔主 任 講 師：　田村　毅（東京大学教授）〕
〔主 任 講 師：　月村　辰雄（東京大学教授）〕

全体のねらい

フランス人は自国の文化を支えるフランス語にこだわり、日常生活や思想表現の現場で言語の性能に磨きをかけてきた。だから、世界を覆いつくそうとする英語にあらがい、フランスで、またアフリカ諸国やカナダで、フランス語は今なお活発に文化を発信し続けている。そんなフランス語のことばとしての魅力と性能を多様な角度からとらえ、言語と文化のつながりの不思議を考えてみよう。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	日常生活のフランス語――街角で輝くことば	フランスの知性は、日常なにげなく取り交わされる会話の中に輝く。古い歴史を背負ったことばが一瞬の機転にきらめく街角に、フランス文化の洗練の現在を尋ねる。	田村　毅（東京大学教授）	田村　毅（東京大学教授）
2	レストランのフランス語――ことばを味わう	料理のレシピやレストランのメニューはどう読む？　料理のフランス語は、料理の味わいと同じくらい繊細で奥が深い。その表現に込められたエスプリをかみしめてみよう。	塚本　昌則（東京大学助教授）	塚本　昌則（東京大学助教授）
3	音楽会のフランス語――ことばの響き	優美な音楽の流れるホールの片隅で、聴衆のひそかなささやきが音楽を語る。プログラムや音楽批評のフランス語に耳を傾け、そのリズムと旋律を聞いてみよう。	中地　義和（東京大学教授）	中地　義和（東京大学教授）
4	オペラのフランス語――ことばは歌う	日本でもよく知られたビゼーのオペラ『カルメン』。その台本が、メリメの原作をどのように手直しすることによって生まれたのか、具体的表現に即して見てみよう。	同　上	同　上
5	エッセーのフランス語――自分を語ることば	自分の内面を見つめるきわめて個人的なことばが、深い考察に支えられて人間一般に対する洞察に至る。エッセーというジャンルにフランス語の柔軟な息づかいを読みとってみよう。	塚本　昌則	塚本　昌則
6	恋愛論のフランス語――ことばの魅惑	このうえなく皮肉でありながら、とめどもなく甘美なフランス語の恋のことば。ことばが感情を演出するフランス風の恋愛を、作家たちの恋愛論から読み解いてみよう。	月村　辰雄（東京大学教授）	月村　辰雄（東京大学教授）
7	詩のフランス語――ことばの錬金術	日常生活に用いられる無味乾燥なことばが、どうして、うるおいに満ちた濃密な空間を作り出すのか。フランス近代詩を読みながら、ことばの変貌の不思議にせまる。	中地　義和	中地　義和

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	小説のフランス語――鏡としてのことば	近代社会は、おのれの肖像画家として小説という新しいジャンルを求めた。１９世紀小説史をたどりながら、社会の現実を映し出すフランス語の描写能力の展開を考える。	月村　辰雄	月村　辰雄
9	シャンソンのフランス語――ことばと生活	世相への憤りであり、生活の慰めであり、また心のときめきでもあるシャンソン。１９世紀最大の歌謡作家であったベランジェの作詞に、そんなシャンソンの魅力の秘密をさぐる。	田村　毅	田村　毅
10	モラリストのフランス語――ことばによる分析	モラリストは、人間の行動と社会風俗の鋭い観察を通じて、人間とはなにか、その本性を分析する。人間に対して辛辣であると同時に慈愛にも満ちたモラリストのことばを考える。	塩川　徹也（東京大学教授）	塩川　徹也（東京大学教授）
11	演説のフランス語――ことばは訴える	論敵をふるえ上がらせたサン＝ジュストの演説。レジスタンスを奮い立たせたド・ゴールのラジオ放送。聴衆にはたらきかけるフランス語の雄弁のメカニズムを明らかにする。	月村　辰雄	月村　辰雄
12	聖書のフランス語――初めにことばがあった	ギリシア・ローマの古典と並んで、ヨーロッパ精神の屋台骨をなすキリスト教の聖書。それが、さまざまな翻訳や翻案を通じて、どのようにフランス語に浸透しているかを探る。	塩川　徹也	塩川　徹也
13	辞書のフランス語――ことばを定義する	明確な定義と豊富な用例こそ、辞書の命。アカデミー・フランセーズの辞書に始まる辞書作りの職人芸のこまやかな工夫を通して、フランス人の国語辞書へのこだわりをさぐる。	田村　毅	田村　毅
14	法律のフランス語――ことばの厳密性	かつて国際条約は、このんでフランス語で起草された。いささかの曖昧さも残さないことばとして評価されたからである。その言語としての厳密性の仕組みを明らかにする。	月村　辰雄	月村　辰雄
15	世界の中のフランス語	世界を覆いつくそうとする英語にあらがい、アフリカや新大陸など、フランスの外でも、母語として、また文化語として、今なお健闘を続けるフランス語の活躍を考える。	田村　毅 恒川　邦夫（一ツ橋大学教授）	田村　毅 恒川　邦夫（一ツ橋大学教授）

＝中国の言語文化（‘０２）＝（Ｒ）

－魯迅と荘子－

〔主任講師：　丸尾　常喜（大東文化大学教授）〕
〔主任講師：　蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）〕

全体のねらい

中国語を読みながら中国人のものの考え方、感じ方を理解し、考察してみたい。前半は、魯迅の作品二編を読み、彼の文学の思想的、文学的特色の理解をはかる。後半は、『荘子』の現代語訳を読んで、荘子の思想の本質を把握したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「『吶喊』自序」（１）	４回にわたって魯迅の第一短編小説集『吶喊』につけられた「自序」を中心に取り上げ、魯迅の文学の出発点と彼の文学の全体的特徴について考える。 「『吶喊』自序」の第一部分を読む。 ＜解説＞魯迅の人と文学	丸尾　常喜（大東文化大学教授）	丸尾　常喜（大東文化大学教授）
2	「『吶喊』自序」(2)	「『吶喊』自序」の第二部分を読む。 ＜解説＞留学期魯迅の思想―「人」と「人の国」	同　上	同　上
3	「『吶喊』自序」(3)	「『吶喊』自序」の第三部分を読む。 ＜解説＞文学革命	同　上	同　上
4	「『吶喊』自序」(4)	「『吶喊』自序」の最終部分を読む。 ＜解説＞「狂人日記」	同　上	同　上
5	「孔乙己」（１）	『吶喊』の「狂人日記」に続く「孔乙己」を四つに分け、第一部分を読む。 ＜解説＞科挙と読書人	同　上	同　上
6	「孔乙己」（２）	「孔乙己」の第二部分を読む。 ＜解説＞漢字と文言	同　上	同　上
7	「孔乙己」（３）	「孔乙己」の第三部分を読む。 ＜解説＞孔乙己の寂寞	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	「孔乙己」（3）	「孔乙己」の第四部分を読む。 ＜解説＞「阿Q正伝」	丸尾　常喜（大東文化大学教授）	丸尾　常喜（大東文化大学教授）
9	影子的困惑	『莊子』斉物論篇に見える、罔両つまり影の回りにできる薄い影と、影自体との問答を通して、存在する者の主体性について考えます。	蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）	蜂屋　邦夫（大東文化大学教授）
10	解開生死的縄結	『莊子』養生主篇に見える、秦失が老子の葬式に出かけた話を通して、人の生死についての受け止め方と死者への弔問に対する考え方を分析します。	同　上	同　上
11	恵施下令捉拿莊子	『莊子』秋水篇に見える、梁の宰相としての恵施が、訪ねてきた親友の莊子を恐れて逮捕させようとした話を通して、権力について考えます。	同　上	同　上
12	恵莊辯論魚是否快楽	『莊子』秋水篇に見える、恵子と莊子が水辺を散歩しながら魚の楽しみについて問答した話を通して、認識の問題について考えます。	同　上	同　上
13	要讓百姓自願捐銭	『莊子』山木篇に見える、北宮奢が人民に自発的に献金させて編鐘を作った話を通して、為政者と税金の問題について考えます。	同　上	同　上
14	真儒少、仮儒多	『莊子』田子方篇に見える、莊子が魯には儒者が多いように見えて実は少ないと言ったという話を通して、人の外面と内実の問題について考えます。	同　上	同　上
15	従九方面考核官員	『莊子』列御寇篇に見える、孔子が人の本性を見抜くのは難しいと言ったという話を通して、人物評価の問題について考えます。7回の題材を見渡すことによって、『莊子』に見えるさまざまな問題の面白さの一端が分かると思います。	同　上	同　上

＝多変数の微積分（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　熊原　啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

現実の事象は複数の要因に起因する。それゆえ変数が複数の多変数関数が重要である。偏微分、重積分の基本事項を解説し、それを極値問題、求積問題に応用する。変数をベクトルで書きなおすことによってベクトル解析の初歩と積分定理を解説し、応用についても触れる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	点集合と多変数関数	点と座標、点集合、ベクトル、近傍、開集合、閉集合、境界、収束、多変数関数、連続関数	熊原　啓作（放送大学教授）	熊原　啓作（放送大学教授）
2	偏導関数	偏微分係数、全微分、方向微分、連鎖法則、微分形式	同　上	同　上
3	高階偏導関数とテイラーの定理	高階偏導関数、テイラーの定理、マクローリン展開、偏微分方程式、波動方程式、ラプラスの方程式、熱方程式	同　上	同　上
4	陰関数の定理・逆写像の定理	陰関数、関数の枝、陰関数の定理、逆関数の定理、逆写像の定理	同　上	同　上
5	極値問題	極大値、極小値、ヘッシアン、ラグランジュの乗数方	同　上	同　上
6	平面曲線	曲線の追跡、特異点、結節点、孤立線、尖点、漸近線、デカルトの正葉形	同　上	同　上
7	重積分　1	重積分、面積確定、面積、異次積分、積分順序の変更	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	重積分2	重積分の変数変換、単調近似例、広義積分、ガンマ関数とベータ関数	熊原　啓作	熊原　啓作
9	多重積分と重積分の応用	三重積分、多重積分、体積、重心、慣性モーメント	同上	同上
10	ベクトル積とベクトル値関数	ベクトル積、行列式、3重積、ベクトル値関数 角運動量の保存	同上	同上
11	空間曲線	空間曲線、曲率、接線ベクトル、主法線ベクトル、従法線ベクトル、捩率、フルネ・セレーの公式、法平面	同上	同上
12	曲面	曲面、面積要素、曲面積、第一基本量	同上	同上
13	ベクトル解析	ベクトル場、勾配ベクトル場、発散、回転、ナブラ作業用	同上	同上
14	線積分と面積分	線積分、平面におけるグリーンの定理、外微分形式、完全微分、面積分	同上	同上
15	積分定理	ガウスの定理、ストークスの定理、グリーンの定理、完全微分と閉微分形式	同上	同上

＝　複素数と関数（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　熊原　啓作（放送大学教授）〕

全体のねらい

実数に虚数を付け加えて複素数とすることによって数の体系はある意味では完結する。数の体系の代数的位相的構造から始めて、複素数の幾何への応用、複素変数関数論を解説する。中心は正則関数と有理型関数である。留数計算による定積分の計算、写像としての複素関数として１次分数変換および等角写像、単位円におけるディリクレ問題とそれに関連したフーリエ級数、さらにフーリエ変換とラプラス変換の簡単な性質についても論ずる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数の体系	自然数から複素数へ、３次方程式の解法、環と体、体の拡大、代数的閉体、四元数	熊原　啓作（放送大学教授）	熊原　啓作（放送大学教授）
2	複素数と複素平面	実数の順序と連続性、複素数の導入、複素数平面、実軸、虚軸、偏角、絶対値、共役複素数、極分解、極限、収束、コーシーの収束判定条件、ド・モアブルの定理	同　上	同　上
3	複素数と平面幾何	リーマン球面、立体射影、無限遠点、コンパクト化、平行移動と回転、合同変換、直線と円、平面幾何と複素数、正多角形	同　上	同　上
4	複素関数、複素級数	領域、境界、近傍、開集合、極限値、連続、級数、絶対収束、一様収束、整級数、収束半径、収束円、コーシー・アダマールの定理	同　上	同　上
5	複素微分	微分可能、導関数、正則関数、コーシー・リーマンの方程式、整級数展開、解析関数	同　上	同　上
6	初等関数	指数関数、対数関数、三角関数、双曲線関数、主値、リーマン面、オイラーの公式	同　上	同　上
7	１次分数変換	１次分数変換、円円対応、非調和比、鏡像の原理、１次分数変換群、等質空間、ケーリー変換	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	複素積分	線積分、ジョルダン曲線、曲線の向き、原始関数、不定積分、グリーンの公式	熊原　啓作	熊原　啓作
9	コーシーの積分定理	コーシーの積分定理、積分路の変形原理、コーシーの積分公式、代数学の基本定理、回転数、	同　上	同　上
10	正則関数	テイラー級数展開、一致の定理、最大値の原理、シュヴァルツの補題、正則関数列、項別微分	同　上	同　上
11	等角写像	曲線のなす角、等角写像、臨界点、単葉関数、ジューコフスキー変換	同　上	同　上
12	有理型関数	ローラン展開、主要部、孤立特異点、極、リーマンの定理、真性特異点、ワイエルシュトラスの定理、有理型関数、有理型関数列	同　上	同　上
13	留数定理	留数定理、偏角の原理、定積分の計算、フレネル積分	同　上	同　上
14	フーリエ級数と調和関数	フーリエ級数、フーリエ係数、調和関数、ポアソン積分、ディリクレ問題	同　上	同　上
15	フーリエ変換とラプラス変換	フーリエ変換、フーリエ逆変換、留数定理を利用してフーリエ変換の計算、ラプラス変換、常微分方程式への応用	同　上	同　上

＝　線型代数学（‘０４）＝（TV）

〔 主 任 講 師 :　長岡　亮介（放送大学教授）　〕

全体のねらい

線型代数は数理諸科学はもちろん、いまや経済金融や統計の理論的な記述をはじめ、ほとんどすべてのシミュレーションの分野で不可欠の道具となっている。 そしてますます開拓されて行く広範な応用を支えるのは、結果の利用ではなく、理論の確実な理解である。本科目は、線型代数(行列と行列式)の入門的部分についての知識を前提として、その知識の背後に潜む数学的諸原理を、その応用を視野において講ずるものである。多様な関心をもって本科目にアプローチしてくる学生諸君がそれぞれの分野での自在な応用ができるように、思想として広く、技法として確実な線型代数の理解を目標とする。また、国際化時代の学習環境を意識して放送講義では、一部に英語を取り入れる。数学は蓄積的な学問であるので、共通科目「線型代数入門」「初等微分積分学」を先に履修するのが好ましい。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	抽象代数系の諸概念(1)	現代数学においてもっとも重要な枠組みの一つである‘構造’(structure)の理解に向かい、もっとも基本的な‘代数構造’として‘群’(group)を取り上げ、その基礎構造、とりわけ、剰余類、商群のような初心者に馴染みにくい概念の確実な理解を目指す。‘構造’を語る上で本質的な‘同型性’の概念を歴史的な概念を引用して確実な理解を目指す。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授）
2	抽象代数系の諸概念(2)	前章で論じた抽象的な論述を肉付けするため、具体的な群の構造を紹介する。 有限群の基本である巡回群をはじめ、変換群や２面体群など、動的な映像を通じてでないと理解しにくい諸概念を紹介する。	同　上	同　上
3	抽象代数系の諸概念(3)	群より複雑な代数構造として、環と体について学ぶ。抽象的な構造だけでなく、いわゆる数体(実数体、複素数体, 円分体)について、特に、その基礎にある複素数体について、その数学的合理化を含め、やや詳しく紹介する。	同　上	同　上
4	抽象線型空間	群、環、体の概念の入り交じる総合的な代数構造として線型空間を導入する。 「方向と長さをもった量」といった素朴なベクトルの概念の限界が克服されることがわかるはずである。同時に、「方向」や「大きさ」を論ずるために基礎的枠組みとして「計量」の数学的定義に進む。	同　上	同　上
5	線型写像の基本概念	抽象的な線型空間から抽象的な線型空間への抽象的な線型写像(線型変換)の概念を定義し、それが行列という具体的な表現をもつことを示す。その際、線型空間の基底の選び方がその表現に本質的に関わって来ることを理解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	線型写像の表現の単純化	前章での理解を踏まえ、基底の選び方を変更すると、それが線型写像の表現にどのように関わってくるかのメカニズムを理論的に理解する。「基底の取り替え行列」と呼ばれる簡単そうで意外に難しい概念の確実な理解を目指す。	長岡　亮介	長岡　亮介
7	不変部分空間から固有ベクトルへ	線型代数においてもっとも重要な三角化の話題に入るためのもっとも重要な理論的な準備を行なう。すなわち、線型変換は、それに関して‘不変’な部分空間をもつときには、形の良い行列で表現できる、という定理の紹介である。	同　上	同　上
8	固有値と固有ベクトルと行列の対角化	前章の最後に論じる「不変部分空間の直和への分解」の究極の形として、固有空間(固有ベクトル)、固有値の概念が自然に登場することを示す。 さらに、具体的な変換について、固有値、固有ベクトルの計算方法を示す。	同　上	同　上
9	複素行列の世界	「想像上の数」を成分にもつ行列(複素行列)の世界でこそ、対角化についての議論が美しく単純に叙述できることを示す。エルミート行列、ユニタリ行列と呼ばれる有名な行列の重要性が納得できよう。	同　上	同　上
10	線型代数の応用(1) --- 2次形式	前章で達成した「実対称行列は直交行列を用いて対角化できる」という定理を踏まえ、いわゆる2次形式の分類を紹介する。これにより、一般的な2次曲線、2次曲面が、係数で作られる行列の計算だけで判定できることが実感されることになろう。	同　上	同　上
11	線型代数の応用(2) --- 微分方程式	同じく、応用として線型常微分方程式(ODE)の解法を取り上げる。線型常微分方程式は、17世紀にその開拓が始まった数理科学の華ともいうべき強力な問題解決の方法である。これを統一的に論ずる方法は線型代数の応用として取り上げられる。	同　上	同　上
12	ジョルダンの標準形(1)	すべての行列に「対角化」を望むことは理想的すぎる。「三角化」で甘んじることは消極的すぎる。両者の中間にあるのが、ジョルダンの標準形である。しかし、ここにたどり着くための「理論の山道」が険しすぎるため、最近では講義から避けられてしまうことも少なくない。 本講義では、険しい道を迂回する方法で、ジョルダンの標準形に向かう。	同　上	同　上
13	ジョルダンの標準形(2)	前回を受けて、ジョルダンの標準形の計算方法を具体的に講ずる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
14	線型代数の応用(3) --- ジョルダンの標準形と微分方程式	ジョルダンの標準形を利用することによって、解くことのできる線型常微分方程式の世界が拡大することを学ぶ。	長岡　亮介	長岡　亮介
15	線型の世界，非線型の世界	線型代数の方法で世界を解析することの方法を総体的な視点から反省し、また、近年話題とされることの多い非線型の世界にはこの方法からの類推が通用しないことを様々な視点から考察する。さらに線型代数の新しい潮流にも触れる。	同　上	同　上

＝数学基礎論（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：隈　部　正　博（放送大学助教授）〕

全体のねらい

論理学の基礎を数学的立場から解説する。目標はゲーテルの不完全性定理の解説である。予備知識は特に要求しない。自然の理解専攻以外の学生向けでもある。数学的論理学の基礎ならびに概要を理解するのがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	準備	この本を読むに当たって必要な予備知識について述べる。	隈部　正博（放送大学助教授）	隈部　正博（放送大学助教授）
2	命題論理	命題論理とは何かについて述べる。そして論理式の定義をし、その真偽値について考える。	同上	同上
3	トートロジー	論理式の真偽値についてさらに考察し、命題論理におけるトートロジーの概念について述べる。	同上	同上
4	論理記号について	論理記号の完全性について述べる。	同上	同上
5	コンパクト性定理	命題論理のコンパクト性定理の証明をする。	同上	同上
6	述語論理	述語論理の定義をする。そして対象式と論理式を定義する。	同上	同上
7	構造	構造を定義し、述語論理における論理式の真偽について考える。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	ロジカルな満足性と演繹計算	述語論理におけるロジカルな満足性について述べる。その後、演繹計算とはどういうものか簡単に述べる。あわせてゲーデルの不完全性定理の持つ意味について述べる。	隈部　正博	隈部　正博
9	論理公理	論理公理について述べる。	同　上	同　上
10	演繹計算についてのいくつかの定理	演繹計算についてのいくつかの定理を述べる。	同　上	同　上
11	自然数論	自然数論について述べる。	同　上	同　上
12	表現可能性と計算可能性	関数や関係の自然数論における表現可能性と計算可能性について述べる。	同　上	同　上
13	ゲーデル数と証明の算術化	ゲーデル数とはどういうものかについて述べ、それを使って証明の算術化について考える。	同　上	同　上
14	不完全性定理その1	ゲーデルの第一不完全性定理の証明をする。	同　上	同　上
15	不完全性定理その2	第一不完全性定理を再考し、さらに第二不完全性定理について証明を考える。	同　上	同　上

＝　幾何入門（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　砂田　利一　（明治大学教授）〕

全体のねらい

古代ギリシャに源を持つ幾何学は、2500年におよぶ数学の歴史の中で常に中心的位置を占めてきた。一方では、平面や空間の中の図形が持つ「調和的性質」を発見する学問として、他方では、我々を取り巻く「空間」そのものを探求する科学として発展してきたのである。本講義では、このような幾何学の歴史に目を向けつつ、比較的新しい分野である位相幾何学について、平面上の閉曲線の理論を例としながら詳しく解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	証明とは何か	本講義では、15回にわたって幾何学の理念とその歴史について、平面図形、特に曲線の微分幾何学的および位相幾何学的性質の探求に促しながら解説する。このため、まず講義全体に渡る概観を説明し、目標を設定する。さらに、数学における「証明」の役割について初等的な例を挙げながら説明する。	砂田　利一（明治大学教授）	砂田　利一（明治大学教授）
2	幾何学の歴史（古代ギリシャからアラビアへ）	ターレス、プラトン、アリストテレス、ユークリッドたち、幾何学の発祥の地である古代ギリシャの数学者と哲学者たちが、何を考え何を創造したかを解説する。そして、どのようにしてルネサンスのヨーロッパに古代の数学が伝えられたかについて述べる。	同　上	同　上
3	数学的論理	証明の中で重要な方法である背理法と帰納法について、その歴史とともに具体的な例を用いながら解説し、さらに帰納法、一般化、類似追及などの数学的真理の発見方法について述べる。	同　上	同　上
4	オイラーの一筆書き定理	位置の幾何学（位相幾何学）の発祥であるオイラーの定理について、その歴史的背景とグラフを使った証明について解説する。証明の中で、背理法や帰納法が活用される様を見ることになる。	同　上	同　上
5	地図の彩色問題	地図の塗り分けに関する問題、特に2色塗り分け可能な地図の特徴付けについて、オイラーの定理との関係の下で解説する。さらに有名な4色問題についての歴史を述べ、すべての地図が5色塗り分け可能であることを証明する。	同　上	同　上
6	閉曲線の巻数	直観的方法により、与えられた点の周りを閉じた曲線が回る回数である「巻数」の概念を導入し、その性質について述べる。さらに巻数の計算方法と性質を解説し、2色塗り分け問題に対する別証を与える。ホモトピーやホモロジーの概念への入門でもある。	同　上	同　上
7	巻数の解析的定義	閉曲線の巻数の直観的定義から厳密な定義への移行を行う。その過程で、「数学をする」とはどういうことなのか見ることになる。巻数の厳密な定義を与えるために、解析幾何学と三角関数についての解説を行う。一般角の概念が重要となる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	巻数の応用 I	閉曲線の巻数の性質を使って、代数学の基本定理、不動点定理などへの応用を解説する。このため、複素数の概念について詳しく述べる。	砂田　利一	砂田　利一
9	巻数の応用 II	代数学の基本定理の応用として、フェルマーの定理の有理関数体類似を証明する。	同　上	同　上
10	微分積分学（無限小解析）の歴史	古代ギリシャのユードクソスを祖とし、ニュートン、ライプニッツにより発展させられた無限小解析についての歴史を述べる。特に、「無限小、無限大」とは何かについて、数学者がどのように考えてきたかを解説する。	同　上	同　上
11	巻数の性質の解析的証明	微分積分学の基本定理の応用として、閉曲線の巻数の性質の別証明を与える。	同　上	同　上
12	曲線の微分幾何学と回転数	滑らかな閉じた曲線の「回転数」を定義し、その微分幾何学的表示を与える。このため、曲線の曲率の概念を導入する。	同　上	同　上
13	回転数と閉曲線の正則ホモトピー	2つの滑らかな閉曲線が、互いに連続変形可能であるための条件を、回転数を用いて与える。 その類似として、「球面の裏返し」について解説する。	同　上	同　上
14	曲面の位相幾何学	曲面の位相的性質、特にその分類理論について解説する。特に、「裏表」のない曲面について、その不思議な性質を述べる。	同　上	同　上
15	曲面上の地図	曲面上の地図が 2 色塗り分け可能であるための条件について考察する。	同　上	同　上

＝現象の数理（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　岡本　久（京都大学教授）〕

全体のねらい

応用数学には実に様々な課題があり、汲めどもつきない問題が人々を魅了している。その中でも、非線形力学の諸問題は数学・物理学・工学の融合する場であり、数学の応用には格好の材料である。本講義では非線形力学に現れる現象を数学の立場から解説し、その面白さを理解することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	応用数学の学び方	応用数学は数学と他分野の両方にまたがる研究分野であり、多くの異なる専門分野からなる。それらのうち非線形力学のいくつかの話題を１５回に分けて紹介してゆくが、第１回は全体の概観である。本書の内容に統一的な目標がある訳ではない。様々な物理現象の中から日常観測できるものに関連した題材を選び、その背景を数学の言葉で説明したものである。言うならば、理論の紹介ではなく、問題の紹介である。	岡本　久（京都大学教授）	岡本　久（京都大学教授）
2	曲線、曲面、そして曲率	曲線や曲面の曲率に関する基本をおさらいすることを目的とし、次章において表面張力現象を学ぶための準備とする。特に、曲面の平均曲率についてその直感的な意味を説明する。	同　上	同　上
3	表面張力	液体には表面が伴うのが普通である。特に、水と空気の境界面はどこでも見かけることができる。一般に、液体と気体の境界は表面、液体と別種類の液体との境界面を界面と呼ぶ。表面あるいは界面に伴う現象を数学的に少し深く考察する。	同　上	同　上
4	表面張力に関連した数学の問題	前回に引き続いて表面張力に関連した話題、特に、等周不等式とプラトー問題について説明する。	同　上	同　上
5	変分問題への準備	変分問題(calculus of variation)は解析学の極めて重要な分野をなす。ここでは懸垂線やサイクロイドといった曲線の性質を調べ、第６、７回で説明する変分問題への導入としたい。	同　上	同　上
6	最速降下線---変分法の出発点	変分法の歴史上最も重要な概念である最速降下線の正体を探ることによって変分法の基本的アイデアを学ぶ。	同　上	同　上
7	変分問題---その一般的枠組み	本章では前章であつかった問題を変分問題(calculus of variation)の立場からもう少し一般的に考え直し、より応用の多い理論として理解することを目標とする。今回の内容はかなり抽象的であるので具体的な意味がつかみにくいかも知れないが、章末の演習問題を自分で解きながら意味を確かめるようにして欲しい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	数学者としてのマクスウェルの業績	マクスウェル19世紀に活躍し、不朽の業績を残した物理学者である。彼の偉大な業績を最も雄弁に語るものは、彼がうちたてた電磁気学の理論であるが、それ以外にも理論物理学に大きな足跡を残した人物である。そのマクスウェルが14歳の時に書いた最初の論文に関する幾何工学のお話をする。	岡本　久	岡本　久
9	グリーンの公式と静電磁気学	大学に入学して数学あるいは物理学を習う人が必ず遭遇するもののひとつにグリーンの公式がある。この公式の周辺のお話をし、グリーンという数学者が如何に時代を超えたアイデアを持っていたのかを説明する。	同上	同上
10	非圧縮非粘性流体の基礎理論	非圧縮非粘性流体を記述するオイラー方程式がどのようなものであるかを説明する。基本的ないくつかの定義を行ない、基礎方程式を導く。また、オイラーの業績についてもふれる。	同上	同上
11	オイラー方程式の解	オイラー方程式の解の性質を調べることが今回の目標である。オイラー方程式の解と言えども非常に多くの解が知られており、その全容を記すにはそれだけで1冊の本が必要になるくらいであるので、本章では代表的なものだけを取り扱う。可視化しやすいものだけを集めたので大半は2次元の流れになっている。	同上	同上
12	天体の形状	第3回で表面張力を学んだとき、コペルニクスを引用した。その中で彼は天体が丸いことを説いているが、そうなる理由は述べていない。今回は、自転していない天体が丸いこと、また、自転しているときには楕円体になることの背景を説明する。	同上	同上
13	渦糸のなす力学系	オイラー方程式から2次元の渦糸系と呼ばれる常微分方程式系を導き、その力学的性質を調べる。多くの流れでは渦が局在する。つまり、ある小さな領域だけで渦度の絶対値が大きく、他の場所では著しく小さいという場合が多い。竜巻などはその典型的な例である。こうした流れを近似的に表すものが渦糸である。	同上	同上
14	流体中を過ぎる円柱による粒子の運動	流れの中に置かれた微少粒子の運動を理解することは大変重要である。流れに浮遊するゴミの動きや、赤潮がどう流されてゆくかを予測することなどは環境問題において基本的な働きをする。本章ではそうした問題のうち最も単純と思われる例を考察する。	同上	同上
15	非圧縮粘性流体の方程式	本章では、粘性を考慮に入れた場合の運動方程式を導き、その解の性質を調べる。この方程式はナビエ・ストークス方程式と呼ばれ、現在の流体物理学や非線形偏微分方程式論などで最も注目されているもののひとつである。	同上	同上

＝　数理モデルとカオス（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　丹羽　敏雄（津田塾大学教授）〕
〔主任講師：　長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

数理的概念や方法を用いて、自然や社会などに見られる現象を理想化して得られるモデルを数理モデルという。本講座のねらいは、
（１）この数理モデルの考え方の基礎を歴史的な展開も考慮しつつ調べること、及び
（２）そのモデルを数学的方法やコンピュータなどを用いて解析すること、及び
（３）数理モデルの有用性とその限界を理解することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	数理モデルとは何か	数理モデルは、主として自然界の対象の数理的な側面を数学その他の数理的言語によってその本質を捉えモデル化する。ここでは、歴史的にも最も古く完成された数理モデルであるプトレマイオス・モデルを例に取り、数理モデルとは何かを考える。	丹羽　敏雄（津田塾大学教授） 長岡　亮介（放送大学教授）	丹羽　敏雄（津田塾大学教授）
2	プトレマイオスの天体運行モデル	数理モデルの典型でもあるプトレマイオスの惑星運行モデルは、離心円や周転円とその上の一様な回転という幾何学的な装置によって、複雑な惑星の運行をモデル化する。その基礎には三角関数の理論がある。ここでは、それらを簡単に紹介する。	同　上	丹羽　敏雄 長岡　亮介（放送大学教授）
3	運動の力学モデル	近代の数理モデルの主力は微分積分を用いる解析学的なモデルである。ここでは、こうしたモデルの出発点にもなった、ガリレイの落体運動のモデルと、ニュートン力学を基礎にする振動現象を取り上げる。	同　上	長岡　亮介
4	万有引力の法則と２体問題	ニュートンによる万有引力の法則と運動方程式の発見と、それによる惑星の運動に対するケプラーの法則の証明は、近代の機械的な自然観を確立に大きく寄与した。ここでは、力学的モデルの例として２体問題を取り上げ、そのエッセンスを紹介する。	同　上	同　上
5	多体問題とカオス	ニュートン力学の範囲内においても、惑星の運動を完全に調べようとすると大きな困難にぶつかる。３体問題がその典型である。ポアンカレに始まる現代の惑星運行理論はそこにカオスが内在することを発見した。ここでは、そのあらましを紹介する。	同　上	丹羽　敏雄 長岡　亮介

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	数理モデルと力学系	現代の数理モデルの中で最も強力な方法は力学系の方法である。ここでは、その基本的な概念と、その解析に最も有効な不動点の概念とその周りの線形化について紹介する。	丹羽　敏雄 長岡　亮介	丹羽　敏雄 長岡　亮介
7	分岐現象	モデルの力学系に、そのモデルの「環境」を表すパラメータが存在するとき、そのパラメータの変化に伴って、分岐現象という極めて興味深い現象が現れる。ここでは、この分岐現象の最も基礎的な事柄について解説する。	同　上	同　上
8	ローレンツモデルとカオス	現代の数理モデルにとってコンピュータは欠くことのできない道具である。ローレンツは気象現象をモデル化したローレンツモデルを、コンピュータを用いて研究する中で、一種の「予測不能性」を意味するカオスに遭遇した。ここでは、そのエッセンスを紹介する。これは分岐現象の１つでもある。	同　上	同　上
9	エルゴード問題と確率論的モデル	原子論をもとにマクロ世界の現象を調べようとするものに、統計物理学がある。 その数学的な基礎付けは今に至るも未解決の問題を含んでいる。その典型がエルゴード仮説の「証明」である。それに対する数学の努力の最高峰の１つがシナイのビリヤードモデルである。ここでは、そのモデルと、関連するパイコネ変換を中心に紹介する。	同　上	長岡　亮介
10	ランダムウォークと拡散モデル	様々な現象に対する確率論的なモデルの基礎になるのがランダムウォークの概念である。ここでは、その概念と、それに関わる確率論の中心的な定理でもある中心極限定理と拡散について説明する。	同　上	同　上
11	人口動態モデル	人口動態を初めてモデル化したのはマルサスである。ここでは、そのモデルの改良であるロジスティックモデルと害虫の大発生をモデル化したものを中心に、生態学における基礎的なモデルを説明する。	同　上	丹羽　敏雄 長岡　亮介
12	ヴォルテラとメイの数理生態学モデル	数理生態学の出発点にもなった、ヴォルテラの捕食者?被捕食者モデルと競争モデル、および、離散的なモデルであるメイのモデルを中心に紹介する。後者はカオス理論の隆盛のきっかけとなった理論である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	チューリングモデル	「生命」は機械的プロセスとして理解可能かを問うたのがチューリングである。ここでは、そのチューリングモデルと、そこから発展した反応拡散モデルを中心に紹介する。後者は生物の体表模様など、より複雑な現象を数理化しようとする際の基礎となっている。	丹羽　敏雄 長岡　亮介	丹羽　敏雄 長岡　亮介
14	生命の形態と射影幾何学	巻貝の数学的な構造はよく知られているが、それを含み、卵の形も非常に厳密に、射影幾何学を通して理解することが可能であることをローレンス・エドワードは明らかにした。ここでは、こうした非常にユニークな幾何学的アプローチを紹介する。	同　上	同　上
15	数理モデルとコンピュータ	ここでは、最後のまとめとして、数理モデルの性格について考察を加えると共に、その解析に不可欠なコンピュータ使用にまつわる問題について考える。また、セル・オートマトンなど、これまで触れられなかった新しい概念についても調べる。	同　上	同　上

＝数学とコンピュータ（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　森本　光生（国際基督教大学教授）〕
〔主任講師：　長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

PC （パーソナル・コンピュータ） の能力は、つい一昔前の大型計算機の能力を超えるほど発展し、他方、価格の低下は限度を知らぬ勢いで進行し、それによって人々の間に爆発的に普及してきている。しかしこのようなPC の‘電子文房具’化や‘情報家電’化の進行とは逆に、“電子計算機の高速計算能力”が、十分に利用されなくなるという逆説も生まれている。

本講義では、身近になった PC の高速計算性能を活用することで拡がる数学の世界を入門的かつ包括的に講義する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属･職名）	放送担当講師名（所属･職名）
1	講義の概要と学生諸君の準備	本講の目標と趣旨、本講の中で利用されるツールについて、その入手方法、使い方、設定方法などについて簡単に紹介する。	森本　光生（国際基督教大学教授） 長岡　亮介（放送大学教授）	森本　光生（国際基督教大学教授） 長岡　亮介（放送大学教授）
2	ビジュアリゼーション （1）	グラフを描くことは数学的な理解の基本的手法の一つである。フリーのグラフ作成ツールを利用して「正確なグラフ」を描くことで見えてくる様々な話題（重ね合わせ、極限値、曲線軌跡）を取り上げる。	平尾　純一（大東文化大学助教授） 長岡　亮	平尾　純一（大東文化大学助教授） 長岡　亮介
3	ビジュアリゼーション （2）	グラフィクス、特にいわゆる 3D のそれの基本概念について実践的に講ずる。（二変数関数、格子、等高線、正射影 など）	平尾　純一	平尾　純一
4	ビジュアリゼーション （3）	実験データの整理において必須の基本的な手法であるフィッティング（fitting）について、背景となる数学と実践的な利用法、限界について論ずる。	同　上	同　上
5	プログラミングの概念	数学の複雑な計算を行うとき、プログラミングはしばしば不可欠である。BASIC、C 、C++、Perl などいくつかの機械言語によるプログラミングの簡単で実際的な例を紹介する。	森本　光生 長岡　亮介	森本　光生 長岡　亮介
6	BASIC によるプログラミング （1）	フリーの BASIC である UBASIC を利用して入門的なプログラミングの実践的な解説を行う。	森本　光生	森本　光生
7	BASIC によるプログラミング （2）	UBASIC をより高度に利用することで理解が拡大する数学的な例として、線型微分方程式を取り上げる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	BASIC によるプログラミング（3）	UBASIC をより高度に利用することで理解が拡大する数学的な例として、級数（べき級数、Fourier 級数）を取り上げる。	森本　光生	森本　光生
9	CAS （1）	一昔前まで「数式処理」と呼ばれてきた機能を実現する Computer Algebra System についてその基本機能を入門的に解説する。双子素数、素数分布などもっとも基本的な初等整数論の話題に触れる。	長岡　亮介	長岡　亮介
10	CAS （2）	CAS を高級電卓として利用するだけで、煩雑な計算処理を要する数学の問題（微積分や行列の計算）が簡単に処理できることを示す。	同　上	同　上
11	CAS （3）	CAS の提供する言語を利用することで、プログラミングの効率があげられることを学ぶ。平方剰余など、初等整数論のやや進んだ話題を取り上げる。	同　上	同　上
12	TEX （1）	数学における文書作成の実際上の世界標準である TEX 、及び LATEX についてその基礎概念と基本的な利用法を紹介する。	長岡　亮介 奥村　晴彦（松阪大学教授）	長岡　亮介 奥村　晴彦（松阪大学教授）
13	TEX （2）	LATEX を利用する上で必須の LATEX のマクロ機能の概念を実践的に理解する。	奥村　晴彦	奥村　晴彦
14	TEX （3）	LATEX での表、図版の利用、その他について述べる。	同　上	同　上
15	数学研究にとってのコンピュータ	数学の研究においてコンピュータがどのように活用されているか、具体的な例を示す。	森本　光生 長岡　亮介	森本　光生 長岡　亮介

＝ 統計学とその応用（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　田栗　正章（千葉大学教授）〕

全体のねらい

統計学における重要な理論・手法や、それらの現実問題への種々の応用例を学ぶことにより、統計的なものの考え方・推論方法を習得することをねらいとする。さらに実際の場においてデータが与えられたとき、知りたい情報を抽出するための統計的データ解析が行えるようになることを目標とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	統計学の概要	統計学を学ぶにあたって、まずその歴史を概観する。次に統計学の体系における標本抽出法、記述統計学、確率論、確率分布論、標本分布論、推測統計学等の位置付けについて、具体例に基づいて説明する。また統計の効用と限界等についても触れる。	田栗　正章（千葉大学教授）	田栗　正章（千葉大学教授）
2	標本データとその記述	まず、データの種類について説明する。次にデータから有効な情報を抽出するために用いられる、データ要約の方法である数値的記述法（標本平均，標本分散等）、および図的記述法（度数分布等）について解説する。さらに分類されたデータの具体的解析を行う。	田栗　正章 汪　金芳（千葉大学助教授）	同　上
3	データ解析の考え方	２次元データの解析例として、相関分析および単回帰分析について解説する。また、種々のデータ解析問題の例を与え、問題に応じた適切な統計モデルの設定、データの変換、はずれ値の除去等が必要であることを説明する。最後にデータ解析の手順をまとめる。	同　上	同　上
4	確率と確率分布	確率論について、確率の公理、加法定理、条件付き確率等について簡潔に説明した後、ベイズの定理とその応用例についての計算を行う。次に、離散型・連続型確率分布の一般論（確率密度関数、分布関数、期待値、積率母関数等）について解説する。	田栗　正章	同　上
5	主な確率分布とその応用	代表的な確率分布の例として、２項分布、ポアソン分布、超幾何分布、正規分布等を取り上げ、その性質と適用例（視聴率調査、抜き取り検査、偏差値の計算等）について解説する。また２項分布の正規近似や、中心極限定理を用いた正規乱数の生成法等についても説明を行う。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	母集団からの標本抽出	まず、統計量の例やその標本分布の概念について解説する。次に正規母集団からの標本抽出を考え、代表的な統計量である標本平均や標本分散の分布、２つの標本分散の比の分布として、カイ２乗分布、t分布、F分布が導出されることを説明する。	田栗　正章	田栗　正章
7	点推定論	まず点推定量の構成方法を考え、モーメント法と最尤法について説明する。次に点推定量の良さについて考え、平均２乗誤差、不偏性、有効性、一致性、十分性等について解説を行う。フィッシャー情報量や種々の重要な定理についても触れる。	同　上	同　上
8	区間推定論	まず、ピボッタル量とその分布から区間推定を行う一般的方法について説明する。次に具体的な信頼区間の構成法の例として、母分散が既知／未知の場合の母平均の推定、母集団割合の推定、母分散の推定、平均と分散の同時推定、相関係数の推定について解説する。	同　上	同　上
9	仮説検定論	仮説検定の考え方と用語の定義を与えた後、最強力検定や尤度比検定等の一般的方法について解説する。次に具体的な検定の例として、母分散が既知／未知の場合の母平均の検定、母分散の検定、２つの平均の差の検定、２つの分散の比の検定等について説明を行う。	同　上	同　上
10	ノンパラメトリック検定法	分布形に依存しない検定の例として、分割表に関連する適合度検定、独立性の検定、一様性の検定について説明する。また、位置の検定や散らばりの検定、２つの分布関数の同等性の検定についても解説を行い、分布のあてはめや乱数の検定問題への適用例を与える。	同　上	同　上
11	生存時間解析	生存時間（寿命）データの解析の問題を取り上げ、生存関数の確率モデル、ハザード関数、生存関数の推定法等について、種々の実際例を用いて説明を行う。また、対数線形モデルやコックスの比例ハザードモデル等についても解説する。	同　上	同　上
12	主成分分析	各種の多変量解析に際して必要となる、多次元データを把握する１つの方法として、主成分分析を取り上げる。主成分の推定方法、主成分や寄与率の意味等について、実際例を用いて説明を行う。またそれらの幾何学的解釈についても解説する。	田栗　正章 汪　　金芳	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	重回帰分析	最もよく使われるデータ解析の手法である重回帰分析を取り上げ、そのモデルや仮定について解説する。次に回帰係数の推定や検定、回帰の有意性の検定等の方法について、実際例を用いて説明を行う。またそれらの幾何学的解釈についても解説する。	田栗　正章 汪　金芳	田栗　正章
14	判別分析	与えられたデータから、いくつかの群を判別する手法である判別分析を取り上げ、そのモデルや仮定について解説する。次に線形判別関数や２次の判別関数、判別関数の推定や検定の方法、誤判別率の推定等について、実際例を用いて説明を行う。	同　上	同　上
15	計算統計学	代表的な計算機指向型手法として、ブートストラップ法を取り上げる。ブートストラップ法による分散や偏りの推定、各種の信頼区間の構成や検定等のアルゴリズムについて、実際例を用いて説明を行う。またそれらの理論的裏付けについても簡単に解説する。	同　上	同　上

＝　運動と力（‘０５）＝（TV）

〔 主 任 講 師：兵頭俊夫（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

物体の運動と力の関係をニュートンの３法則に従って解析する方法を学び，それを身近な力学現象の理解に応用する。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	力のつりあい	・力とベクトル ・２力のつりあい ・３力のつりあい ・ベクトルのスカラー積 ・座標 ・地表付近の重力と万有引力	兵頭　俊夫（東京大学大学院教授）	兵頭　俊夫（東京大学大学院教授）
2	運動の法則	・ニュートンの３法則 ・微分 ・速度と加速度 ・近似式 ・積分 ・定積分と不定積分 ・ニュートンの第１法則，第２法則と慣性系 ・慣性質量 ・等速度運動 ・等加速度運動	同　上	同　上
3	放物運動	・重力質量と慣性質量 ・地表付近での物体の運動 ・重力とつりあう力を加えたときの運動 ・物理量の次元 ・物理量の単位	同　上	同　上
4	種々の力と運動	・弾性力 ・束縛力（張力・抗力） ・摩擦力 ・流体中を運動する物体が受ける力 ・単振動 ・作用と反作用	同　上	同　上
5	運動量と力積，運動エネルギーと仕事	・運動量 ・力積 ・仕事 ・合力がする仕事と一部の力がする仕事 ・運動エネルギー ・運動エネルギーと運動量	同　上	同　上
6	保存力とポテンシャル・エネルギー	・重力場 ・保存力 ・ポテンシャル・エネルギー（位置エネルギー） ・保存力の例 ・力学的エネルギー保存の法則 ・保存力以外の力がある場合 ・保存力とポテンシャル・エネルギーの微分関係 ・万有引力のポテンシャル	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	極座標による運動の記述	・角の単位ラジアン ・2次元極座標 ・等速円運動 ・2次元ベクトルの極座標成分 ・単振り子	兵頭　俊夫	兵頭　俊夫
8	角運動量	・ベクトルの外積（ベクトル積） ・角運動量 ・中心力と面積速度一定の法則 ・力のモーメントのつりあい ・てこの原理	同　上	同　上
9	座標系の相対運動	・座標系とその相対運動 ・慣性系に対して等速直線運動をしている座標系 ・運動の軌跡 ・慣性系に対して加速度運動をする座標系 ・慣性力 ・重力の不思議 ・角速度を表すベクトルとベクトルの回転 ・慣性系に対して回転している座標系 ・遠心力 ・コリオリ力 ・日常語の遠心力	同　上	同　上
10	2体の相互作用	・相互作用 ・全質量と質量中心 ・換算質量と相対位置ベクトル ・バネで互いにつながれたおもりの運動 ・実験室系と重心系 ・弾性衝突 ・非弾性衝突	同　上	同　上
11	質点系の運動	・質点系に対する運動方程式 ・質量中心 ・質点系の全運動量 ・質点系の全角運動量 ・質量中心のまわりの角運動量の和 ・質量中心のまわりの重力のモーメント ・質点系の全運動エネルギー	同　上	同　上
12	剛体の運動	・剛体の密度・体積・質量 ・連続体剛体の扱い方 ・剛体の運動の自由度 ・剛体のつりあい ・偶力のモーメント ・固定軸を持つ剛体の運動と慣性モーメント	同　上	同　上
13	剛体の慣性モーメント	・密度と質量 ・慣性モーメントに関する定理 ・慣性モーメントの計算例	同　上	同　上
14	物体の運動の例	・実体振り子 ・メトロノーム ・斜面を転がる円柱（円筒）の運動 ・打撃中心	同　上	同　上
15	さまざまな運動	・静止している物体 ・バットを振る ・人が歩いたり走ったりする運動 ・回転体の運動 ・変形する物体の運動	同　上	同　上

＝光と電磁場（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：中山　正敏（放送大学教授）〕
〔主任講師：櫻井　捷海（東京大学名誉教授）〕

全体のねらい

現代文明は、光、電波、電流、磁気などによって支えられている。光は実は電気と磁気の波、すなわち電磁波の一種である。本講義では、光や電磁気現象を電場と磁場という２種類の場と、その基本法則によって理解することを目指す。身近な例から出発して電磁場のイメージを作り、さまざまな現象や応用例を体系的に説明する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代社会と電磁気学	現代の豊かな高度情報化社会は、電磁気学と物性物理学の成果である電機技術・電子技術・コンピューター技術の上に成り立っている、と言っても過言ではないであろう。動力・輸送機関と情報・通信の発達史の視点から電磁気学の歴史をひも解いてみよう。この章では、電磁力、電気エネルギー、電波、光がわれわれの生活を支えていることを学ぶ。	櫻井　捷海（東京大学名誉教授）	櫻井　捷海（東京大学名誉教授）
2	波の性質	光や電波などを波として捉える準備として、波の一般的な性質を学ぶ。水面波を例として、波と振動の関係、位相、正弦波を説明する。波の重ね合わせの原理、干渉、回折格子について述べる。波の伝播についてのホイヘンスの原理を紹介する。	中山　正敏（放送大学教授）	中山　正敏（放送大学教授）
3	光の波	ＣＤが色づいて見えることから、光が波であることを理解する。回折格子により、光の色と波長の関係を知る。光の伝播について、光線の意味を知り、光線の直進、反射、屈折の諸法則をホイヘンスの原理によって説明する。レンズの原理と簡単な応用について述べる。	同　上	同　上
4	電波と光	はじめに電気振動を持続的に発生させる発振器について考える。アンテナを流れる振動電流からどのように電波が放射されるかについて定性的に説明する。原子のエネルギー準位ついて簡単に説明した後、原子からの発光やレーザーについても初歩的な説明を行う。	櫻井　捷海	櫻井　捷海
5	電荷と電場	静電気現象の基本概念を説明する。電荷間のクーロン力と、それを媒介する電場について述べる。電場を電気力線で表わし、それがガウスの法則にしたがうことを示す。ガウスの法則から、対称性のよい場合の電場を計算する。	中山　正敏	波田野　彰（東京大学元教授）
6	電位と電気エネルギー	静電気現象を、エネルギーの観点から考える。電気力のなす仕事は、電位を用いて表わされる。電位と電場の関係を説明する。応用として、導体の静電誘導、コンデンサーについて述べる。静電気エネルギーが、電場によって担われていることを示す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	誘電体と電場	不導体である誘電体と電気現象の関係を述べる。微視的な電気双極子の集まりによる巨視的な電場が、分極電荷を用いて表わされることを説明する。電気分極の場、電束密度の場を導入し、それを用いて誘電体がある場合のガウスの法則を表わす。	中山　正敏	波田野　彰
8	電流	電流は電荷粒子の流れであることを説明する。オームの法則について述べる。ジュール熱、電池の起電力を、エネルギーの転換過程として説明する。空間に分布している電流を、電流密度の場で表わす。電荷の保存則から、電流密度の場の形が決まる場合があることを示す。	同　上	同　上
9	磁石と磁場	磁石による静磁気現象について述べる。磁石は単独の磁荷に分けられず、磁気双極子が要素となる。磁気のクーロンの法則、ガウスの法則が成立ち、誘電体の場合と平行した記述ができる。磁束線は源を持たず、閉曲線としてのみ存在することを示す。	同　上	同　上
10	電流と磁場	運動している荷電粒子は磁場から力（ローレンツの磁気力）を受けることから電流に働く力を導く。磁気力を用いた機械・器機について説明する。電流と磁場とを結ぶ「ビオ・サバールの法則」、「アンペールの法則」を導く。	櫻井　捷海	櫻井　捷海
11	電磁誘導	コイルを貫く磁束が時間的に変化すると、電磁誘導によりコイルに起電力が生ずる。このファラデーの電磁誘導の法則を数学的に表現する。電磁誘導を用いた器機・機械について説明する。コイルの自己インダクタンス、コイル流れる電流が蓄えるエネルギーや磁場のエネルギーについても触れる。	同　上	同　上
12	ベクトル解析と静電磁場の法則の微分形	はじめにベクトル解析について説明する。これまでに電磁場の法則を積分形式で説明してきた。同じ法則を各点での場の微分量の関係として記述できると、接近作用の立場からより理解が深まる。手始めとして、静電磁場の場合を考える。	同　上	同　上
13	マクスウェル方程式の導出	ポアソン方程式を解く。また、ベクトルポテンシャルを導入し、それについて考えてみる。変位電流の導入により拡張されたアンペールの法則の微分形式を説明し、これまで述べてきた電磁場の法則をマクスウェル方程式としてまとめる。	同　上	同　上
14	マクスウェル方程式と電磁場	波が伝わる様を記述した波動方程式について調べたあとで、マクスウェル方程式から電磁波の波動方程式を導く。導かれた波動方程式を解くとき必要な境界条件や電磁波の反射、屈折などにも触れる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	電磁波の発生と検出	電磁場のエネルギーの流れを表すポインティングベクトルを導入する。時間変化のある電流や電荷が波源となって電磁場が発生・伝搬することをマクスウェル方程式から波源のある波動方程式とその遅延ポテンシャルの解を導き出すことによって示す。電磁波の伝搬やケーブル中の電気信号の伝搬についても考える。	櫻井　捷海	櫻井　捷海

＝エネルギーと熱（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　岡部　　豊（東京都立大学教授）〕
〔主任講師：　堂寺　知成（京都大学大学院助教授）〕

全体のねらい

私たちの暮しの中で、熱を仕事に変える機械としてのエンジンを利用し、一方限りあるエネルギー資源の問題を論じている。この講義は、このようなエネルギーと熱の本性を物理学の立場から理解することを目的とする。身近な現象をとりあげ、熱力学・統計力学的に考える。また、コンピュータ・グラフィックスを有効に利用して理解を深める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	各種のエネルギーとエネルギー変換	エネルギーという言葉は日常的にもよく使われる。物理学におけるエネルギーの概念、各種のエネルギーの変換、エネルギー保存則などについて学ぶ。また、現象をマクロにとらえる見方とミクロにとらえる見方の関連を理解する。	岡部　豊（東京都立大学教授） 堂寺　知成（京都大学大学院助教授）	岡部　豊（東京都立大学教授） 堂寺　知成（京都大学大学院助教授）
2	温度と熱	温度と熱は日常的に用いる物理概念である。最高気温、熱いお茶、風邪で熱があるなどという。この章では、温度、熱量などの物理用語を学び、日常的使用法と物理学での使用法の違いを明確にする。	堂寺　知成	堂寺　知成
3	熱力学第一法則	エネルギー問題の解決が容易でない第一の理由は、何もないところからエネルギーを生みだすのが不可能なことである。本章では、このことの背後にある熱力学第一法則（広義のエネルギー保存則）を学ぶ。気体の膨張や圧縮と、温度や熱との関係も正しく理解したい。	同　上	同　上
4	熱機関	熱を仕事に変える機械が熱機関、すなわちエンジンである。この章では、どれだけの熱を仕事に変換できるかを考察するために、カルノーという天才が考案したエンジンの理論を詳しく学ぶ。また、クーラー、冷蔵庫などに見られる冷却の仕組みを学ぶ。	同　上	同　上
5	熱力学第二法則	熱いお茶は冷め、煙突の煙は拡がってゆくことを、日常生活で経験している。しかし、この逆の現象は、自然には起こらない。このような現象を不可逆現象という。本章では、不可逆現象を説明する熱力学第二法則（エントロピー増大則）を学ぶ。	同　上	同　上
6	熱伝導	断熱材の有無で冷暖房費が大きく異なり、寒冷地などでは衣服の耐寒性が問題となってくる。このように熱伝導の問題は生活に関わりが深い。この章では、熱伝導、対流、放射など熱の伝わる仕組みと法則を学ぶ。	同　上	同　上
7	統計的な扱いとランダムウォーク	前章までエネルギーと熱をマクロな観点から調べてきた。物質を非常に多くの原子・分子から成る集団としてとらえる際には、統計的な扱いが必要になる。酔っ払いの歩き方に似た、でたらめな方向に進むランダムウォークを例に、統計的な考え方を学習する。	岡部　豊	岡部　豊

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	分子の熱運動とマクスウェルの速度分布	気体を構成する分子は絶え間なく運動している。その分子の熱運動と温度との関係を学ぶ。個々の分子はいろいろな速度で運動している、すなわち分子の速度は分布する。分子の速度分布関数について学習する。	岡部　豊 堂寺　知成	岡部　豊 堂寺　知成
9	統計力学の基本的な考え方	多数の粒子から成る体系の熱的な性質をミクロな粒子の力学法則から出発して理解する統計力学の基本的な考え方を学ぶ。等確率の原理に基き、エネルギー配分の確率について学習する。	岡部　豊	岡部　豊
10	マクスウェル－ボルツマン分布と応用	前章で導いた統計力学の基本法則に基いて、いくつかの系の統計力学的な性質を調べる。個々の粒子が２つのエネルギー値だけをとる２準位系、多数の調和振動子から成る系などを取り上げる。	同　上	同　上
11	熱とエントロピー	第４，５章で学んだエントロピーの熱力学的な見方、第９章で学んだ統計力学的な見方を整理する。混合、拡散などの具体的な現象を例に、エントロピーの概念の理解を深める。	同　上	同　上
12	相転移の熱統計力学	水が固体、液体、気体の三態をとるような状態の変化を相転移という。相転移を熱力学的に理解すると共に、多数のミクロな粒子の相互作用がもたらす協力現象として統計力学的にとらえる。具体的にイジング模型とよばれる磁性の相転移を調べる簡単なモデルを学ぶ。	同　上	同　上
13	複雑系の相転移	世の中には、あるパラメータが変化すると系の性質が大きく変わる「相転移」を示す現象は広く存在する。必ずしも熱的な現象とは限らない。浸透問題などに見られる相転移現象をとりあげ、主にコンピュータ・シミュレーションにより理解する。	同　上	同　上
14	量子統計力学入門	電子や陽子などの同種の素粒子の集りを量子力学で考える場合には、粒子が区別できないことによる素粒子の統計性を考慮する必要がある。粒子の波動関数の座標の入れかえに関する対称性からボース粒子とフェルミ粒子に区別されるが、それぞれの統計的性質を学ぶ。	同　上	同　上
15	理想フェルミ気体と理想ボース気体	相互作用のないフェルミ粒子あるいはボース粒子から成る体系をそれぞれ理想フェルミ気体あるいは理想ボース気体という。理想フェルミ気体の例として金属の自由電子模型を考え、低温における比熱を調べる。また、理想ボース気体が低温で示すボース凝縮を学ぶ。	同　上	同　上

＝　相対論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　岡村　浩　（工学院大学教授）　〕

全体のねらい

相対性理論（特殊相対論、一般相対論）を解説する。物理学の他の分野とのかかわりも示す。
平易を旨とする。日本での研究の紹介、将来の展望なども心がけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	はじめに：相対論って何ですか	1．相対論の魅力 2．お話を始める前に 3．ガリレイの相対性原理（1） 4．座標系 5．ガリレイの相対性原理（2） 6．ニュートン力学の基礎 7．アインシュタイン小伝	岡村　浩（工学院大学教授）	岡村　浩（工学院大学教授）
2	光の速さと時間	1．少年アインシュタイン 2．７回半まわる 3．クイズ 4．光の速さが定義されている理由 5．同時刻とは？ 6．相対論の鍵を受け取っていただくための二つのお願い 7．光とは何か 8．エーテル、マイケルソン・モーリーの実験 9．神は老獪にして・・・ 10．奇跡の年１９０５年	同　上	同　上
3	ローレンツ変換のやさしい導き方	1．二つのお願い 2．相対論の鍵 3．同じことをもう１回 ：アインシュタインの「やさしい」証明 4．標準的証明 5．標準的証明（続）	同　上	同　上
4	伸びたり縮んだり	1．ローレンツ収縮 2．見かけの寿命の伸び 3．光の速さを超えられない！ 4．第４の次元：ミンコフスキー空間 5．ローレンツ変換を図で表すこと 6．ローレンツ変換の合成 7．ドップラー効果	同　上	同　上
5	ウラシマ効果	1．はじめに 2．ウラシマ効果 3．特殊相対論だけの説明 4．赤方偏移による説明 5．ドップラー効果による説明 6．補足：ローレンツ短縮を図で表すこと	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	相対論と力学: $E=mc^2$	1．$E=mc^2$ 2．原子爆弾 3．$E=mc^2/\sqrt{1-v^2/c^2}$ 4．核分裂・核融合 5．ニュートン力学での運動エネルギー 6．相対論的力学 7．エネルギーと運動量の関係 8．具体的な運動方程式 9．変分原理 10．星の光	岡村　浩	岡村　浩
7	相対論と電磁気学	1．はじめに 2．今日の問題：電荷を持った粒子が受ける力と座標系 3．今日の問題の答：電場と磁場のローレンツ変換 4．電磁場とローレンツ変換 5．一様な磁場と一様な電場がある時の荷電粒子の運動 6．直線電流による磁場 7．特殊相対論ができるまで	同　上	同　上
8	相対論と量子力学	1．ボーアの水素原子模型：相対論の効果は小さい。 2．微細構造 3．コンプトン効果 4．ド・ブロイの電子波と相対論 5．操作的な考え方　アインシュタインとハイゼンベルクの会話 6．シュレーディンガー 7．ディラックの電子論　スピン　反粒子 8．ボーアとアインシュタインの論争と一般相対論 9．原子核、核力、中間子の力の範囲と中間子の質量の関係 10．場の量子論：量子電磁力学と繰り込み理論 11．加速器と相対論 12．コンプトン効果の計算	同　上	同　上
9	第2部一般相対論 一般相対論とは何でしょう	1．一般相対論のできるまで 2．一般相対論と特殊相対論 3．一般相対論の特徴 4．重力の理論であること 5．等価原理 6．ニュートンの重力理論 7．空間が曲がっていること 8．測地線の方程 9．重力場の方程式のアルゴリズム 10．計量テンソル 11．重力場の方程式までの道筋	同　上	同　上
10	曲がった空間の例：球面	1．球面は曲がっている 2．計量テンソル 3．クリストッフェルの記号。 4．曲率テンソル 5．リッチ・テンソル 6．平行移動 7．平行移動と測地線の方程式 8．曲率テンソルの性質：平行移動の順序変更による違い 9．ビアンキの恒等式 10．アインシュタイン・テンソル 11．リーマン・クリストッフェル・テンソルの性質 12.曲率テンソルの一つの表現	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	4つのテスト	1．突然有名になったアインシュタイン 2．光の屈折 3．水星の近日点の移動 4．赤方偏移 5．ハーフィール・キーティングの実験 6．ＧＰＳ 7．重力場のニュートン近似	岡村　浩	岡村　浩
12	重力波	1．はじめに 2．重力波 3．初期の実験研究 4．重力波の間接的証拠：連星パルサー 5．重力波の観測 6．ＬＩＧＯ 7．宇宙での重力波観測：中村先生の夢 8．重力波の理論	同　上	同　上
13	ブラックホール	1．ラプラスの議論　－　ブラックホールと重力 2．シュバルツシルトの解 3．シュバルツシルトの解の求め方 4．特異点定理　カーの解　一意性定理 5．ブラックホールの証拠　白鳥座Ｘ－1 6．銀河系の中心のブラックホール	同　上	同　上
14	宇宙論	1．宇宙と重力 2．一般相対論とフリードマンの解 3．ハブルの法則 4．膨張宇宙の痕跡 5．宇宙の進化 6．ＷＭＡＰ	同　上	同　上
15	むすび:相対論と現代物理	1．ニュートリノ物理学と等価原理 2．量子論と一般相対論 3．２０世紀の物理学 4．一般相対論とマッハ原理 5．まとめ	同　上	同　上

＝　量子力学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　市村　宗武（法政大学教授）〕
〔主任講師：　大西　直毅（東京国際大学教授）〕

全体のねらい

自然現象や物質の性質の理解，あるいは，ナノテクノロジーでの開発などには，量子力学は必須のものになっている。量子力学はミクロの世界を司る法則で，原子構造の解明とともに確立された。光は波動と考えられてきたが，粒子性を示す実験などで，二重性が明らとなり，電子も同じ二重性をもつことが判明し，量子力学が完成される。その歴史を追いながら量子力学の理論体系を理解することがねらいである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	量子論は光から	ホイヘンスの光の波動説に対しニュートンは光が直進することから光の粒子説を唱えた。１９世紀の初頭，波動説が復活し，電気と磁気が統一的に理解され，光の電磁波説が提唱され，実験的も確認された。スペクトルの中に暗線と輝線が発見され，それらの色と波長の関係が明確となった。	大西　直毅（東京国際大学教授）	大西　直毅（東京国際大学教授）
2	量子の登場	輝線が暗線に反転する現象から，光の吸収率と放射率の比はその波長と温度のみで決まるとする定理が示され，その関数を決めることの重要性が指摘された。それにプランクが答えたことから量子論が生まれた。光電効果が光量子の概念で説明され，光の粒子性が示唆された。	大西 直毅	大西 直毅
3	原子の構造がわかった。	ドルトンの原子論はアボガドロの分子論へと進み，既知の元素の数が増え，周期表が提唱された。陰極線などで電荷と質量の比が測定され電子の存在と性質が明らかになった。放射能の一つのアルファ線の散乱で原子の中心に原子核が発見され，原子の構造が明らかとなった。	大西 直毅	大西 直毅
4	量子力学への端緒	ボーアは定常状態と振動数条件を導入し，水素原子のスペクトルを見事に説明した。古典量子化の条件が定式化され，電子の状態の量子数が明らかになった。古典力学との対応原理を頼りに物理量の非可換性が提唱され，行列力学として定式化された。	大西 直毅	大西 直毅
5	光が粒子，電子も波動	コンプトン散乱の実験で光の粒子性は確実なものになった。光が波動と粒子の二重性をもつように電子もまた粒子性と波動性を持つことが提唱された。この考えを基に電子の波動方程式（シュレーディンガー方程式）が導かれ，水素原子のエネルギー準位が波動力学で再現された。	大西 直毅	大西 直毅

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	量子力学へ到達	定常状態をベクトルとし座標や運動量などの物理量がベクトルを変える演算子と考え，行列力学と波動力学を統一的に記述する量子力学が完成された。波動関数は実在するのではなく光や電子の存在確率を表すに過ぎないとする確率解釈が提唱され，学会は賛否両論に分かれることになる。	大西 直毅	大西 直毅
7	粒子の不思議な振舞い	基本的な調和振動の問題を，交換関係を使って代数的に解き，波動関数を求める。ついで，井戸型ポテンシャルの問題を波動方程式を解いて束縛状態を考える。また，散乱状態を取扱いからトンネル効果を考える。アルファ崩壊はトンネル効果とし，放射性元素の寿命が理解できるようになった。	大西 直毅	大西 直毅
8	粒子の波動像と不確定性関係	電子など通常粒子として考えているものを量子力学では確率の波で表現する。古典的粒子像が波動における波束の概念で理解できることを説明する。この視点から不確定性関係を理解するとともに，演算子の交換関係に基づく量子力学の枠組みからも不確定性関係を導く。	市村　宗武（法政大学教授）	市村　宗武（法政大学教授）
9	３次元問題と角運動量	クーロン力のように力が球対称な場合を考えるる。このとき角運動量が保存し，極座標を用いると動径と角度の部分に変数分離できて解法が容易となる。角度部分の波動関数は球面調和関数で表せる。このような３次元の典型的問題の解法の一般論を学ぶ。	市村　宗武	市村　宗武
10	水素原子	水素原子の構造をシュレーディンガー方程式に基づいて解く。エネルギー準位と波動関数を求めて，その結果とボーア模型との対応を考察する。多電子の原子の理解にも有用な，電子の量子状態を指定する方法を説明する。	市村　宗武	市村　宗武
11	スピンおよび多粒子系	電子はスピンという自転に擬せられる半整数の角運動量を持ち，磁石になっている。このような古典力学には現れない自由度の概念を学ぶ。ついで，複数の同じ種類の粒子は互いに区別できず，相互の置き換えに対して波動関数が対称か反対称という統計性を持つことを学び，統計性とスピンの関係を見る。これは排他原理を導き周期表の説明などに重要な役割を果たす。	市村　宗武	市村　宗武
12	原子・分子の構造	複数の粒子からなる系の取扱いの基本例としてまず２電子を持つヘリウム原子を考察する。つぎに周期表の理解を中心に球対称な平均場近似を用いて原子の構造を定性的に考察する。終りに分子を形成する機構の１つとして水素分子イオンを考察する。取り扱う方法として変分法という近似法を学ぶ。	市村　宗武	市村　宗武

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	遷移過程	電子が散乱されたり，原子が光を放出・吸収したり，系の状態が変化する現象(遷移過程)を量子力学で取り扱う。その手法として時間に依存する摂動論を説明し，黄金律と呼ばれる現象の理解にも，実用にも極めて有用な公式を導く。	市村　宗武	市村　宗武
14	原子より小さい世界	現在，物質は原子→原子核→陽子・中性子→クォーク・電子という階層構造を成していると考えられている。このような考えにいたった発見の歴史を踏まえながら，原子核，陽子，中性子の世界の基本的性質を学ぶ。それをもとに核分裂や核融合について理解する。	市村　宗武	市村　宗武
15	素粒子と統一理論を求めて	クォーク発見への道をたどるとともに，物質を構成する究極の基本粒子は何かを探る。基本粒子間を結ぶ力はどんなものであろうか。宇宙の歴史が教えてくれる素粒子世界の統一理論など現代物理学の最先端の研究を垣間見ることとする。	市村　宗武	市村　宗武

＝　物性物理学入門（‘０４）＝（TV）

〔主 任 講 師：　藤原　毅夫　（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

多様な物質のミクロな構造やマクロな諸性質を物理学の立場から理解し、物理的な物の見方を身に付けるとともにそれらを支配する物理法則を理解する。現代の日常生活のすみずみにまでいき渡っている物性物理学の、技術としての一端も理解されるように努める。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物性物理とは	物性物理学は力学、電磁気学とは違い開いた体系である。このような側面を説明し、さらに物性物理学が自然科学の最先端および最先端技術をリードしている様子を概観する。	藤原　毅夫（東京大学大学院教授）	藤原　毅夫（東京大学大学院教授）
2	物質の構造・結合	固体のミクロな構造が原子の周期的な配列であることを知り、原子配列と固体結合のメカニズムとの関係を理解する。さらに結晶構造を記述するいくつかの概念を説明する。	同　上	同　上
3	物質の構造とX線・粒子線構造学	物質の構造やその乱れを観察する手段であるX線・粒子線構造学について述べる。物質の構造の乱れの概念を把握し実際に観察する。	同　上	同　上
4	固体の弾塑性	物質の力学的性質について学ぶ。弾性、塑性、破断という過程を理解し、フックの法則を考える。固体の変形、歪み、応力の概念を理解し、結晶の対称性と歪みテンソルの関係を学ぶ。	同　上	同　上
5	固体の動力学と格子振動	物質の動力学的性質を原子論的立場から理解する。特に原子間相互作用を調和振動として取り扱い、音波の伝搬について理解し、また熱膨張と原子間相互作用の非調和性との関連、格子比熱とフォノンについても学ぶ。	同　上	同　上
6	結晶中の電子の振る舞い１．量子力学	固体中の電子性質を理解するための準備として、量子力学の復習を行う。シュレディンガー方程式、球対称ポテンシャルの場合の解（s,p,d,f....）、スピン、電子とフェルミ統計、交換相互作用、パウリの原理、電子相関など。	同　上	同　上
7	結晶中の電子の振る舞い２．電子のエネルギーバンド	固体中の電子の性質を周期ポテンシャルとの関連で理解する。ブリルアンゾーンと結合・反結合軌道について知り、電子のエネルギーバンドの概念を理解する。バンドギャップについて学び、金属と絶縁体の区別を明確にする。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	固体の光学的性質	光物性の基本について学ぶ。物質の色（金属、絶縁体、宝石の色）がどのように現れるかの問題意識を実際の物質に即して理解し、ローレンツモデル、ドルーデモデルおよびエキシトンについて学ぶ。	藤原　毅夫（東京大学大学院教授）	藤原　毅夫（東京大学大学院教授）
9	金属と電子輸送	金属の物性について電子論の立場から学ぶ。特に弾塑性と金属結合、バンド構造、フェルミ面の概念を理解する。フェルミ、ディラック分布から電子比熱を理解する。さらにドルーデモデル、電気伝導、熱伝導、金属の帯磁率にも触れる。	同　上	同　上
10	半導体	半導体の物性について電子論の立場から学ぶ。特に構造と共有結合、バンド構造、電子とホール（キャリア）および真性半導体と不純物半導体、キャリアドーピングの概念を理解する。半導体伝導、簡単な p-n 接合、トランジスタについても述べる。	同　上	同　上
11	磁性	物質の磁気的性質についてミクロな立場から学ぶ。反磁性と常磁性の区別、スピン、スピン間相互作用を電子的な立場から説明する。協力現象（強磁性、反強磁性）の概念と磁化、磁化率について学ぶ。	同　上	同　上
12	相転移	強磁性を例に相転移の現象論を学ぶ。物質の相、自由エネルギー、平均場近似の取り扱い、1 次転移と 2 次転移、オーダーパラメター、ランダウの相転移理論について述べる。	同　上	同　上
13	超伝導	超伝導とは何か、現象の理解とその熱力学を説明し電子間相互作用とフェルミ面の不安定性について学ぶ。電子波動関数の位相の重要性とジョセフソン効果についても触れる。	同　上	同　上
14	ソフトマターの構造	新しい材料として注目されているソフトマターについて、構造の階層性、高次構造、共重合とマクロ相分離、体積排除効果を学び、その多様性を理解する。	同　上	同　上
15	ソフトマターの物性	ソフトマターの物性の基礎である分子鎖の形態、ゴム弾性、ゲルを学び、粘弾性（レオロジー）などの物性を概観する。	同　上	同　上

＝物質の科学・量子化学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　平尾　公彦（東京大学教授）〕
〔主任講師：　濱田　嘉昭（放送大学教授）〕

全体のねらい

原子が結合して分子ができる。分子がさらに集合して、私たちが目にするマクロの物体となる。したがって、物質の性質や反応性を理解するには、分子の成り立ちをミクロの視点にたって理解することが必要である。本講義は、化学結合の起原を量子力学に基づいて解説する。理論の解説では、基本的な考え方をわかりやすく述べることを念頭に置き、ＣＧなど視覚的な理解ができるように努める。また、分子の持つ性質を実験的に調べる手段として、主に分光法をとりあげ、理論的理解と実験的解釈が一致していることを示す。実験の解説では、実際の研究現場とその応用をロケ取材により積極的に取り上げることにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質の世界	われわれをとりまく物質世界と物質進化について概観する。また、ミクロの世界を理解するうえでの量子化学の重要性について解説する。原子、分子の基本となる物理量、電子の質量、電荷、プランク定数、光の速度などが実験的にどのように決められたのかを振り返る。	平尾　公彦（東京大学教授）	濱田　嘉昭（放送大学教授） 平尾　公彦（東京大学教授）
2	ミクロの世界	水素原子のスペクトルを中心に量子論が誕生するまでの歴史を振り返る。ボーア模型を解説し、同時に半古典的なボーア模型の限界を指摘する。	平尾　公彦	平尾　公彦
3	水素原子の構造 - 量子力学の基礎 -	量子力学、波動方程式の基本的な考え方を解説する。まず正確な解の得られる一次元の箱の中の粒子に適用し、ミクロな世界を概観する。また、正確な解が得られる水素原子に適用し、その電子構造や軌道関数を明らかにする。	同　上	同　上
4	多電子原子の構造	水素原子の波動関数を参考にしつつ、Pauli の原理の基づいて一般の原子の電子構造を解説する。原子がどのようにして成り立っているのか、元素のもつさまざまな性質や元素の示す周期律が電子の構造からどのように導き出されるのかを説明する。	同　上	同　上
5	二原子分子の結合と電子構造	厳密解の得られる水素分子イオンの電子構造を解説し、分子の成り立ちについて解説する。また、二原子分子の電子構造を明らかにし、化学結合、共有結合やイオン結合についても解説する。	同　上	同　上
6	多原子分子の結合と電子構造	原子価、混成軌道の概念を導入し、一般の分子の成り立ちを解説する。また、分子の形がどのようにして決まるかを解説する。	同　上	同　上
7	π電子系の電子構造 - ヒュッケル分子軌道法 -	簡単な分子軌道法である Hückel 法を解説し、π共役分子の電子構造を明らかにする。また、吸収スペクトル、化学反応性、芳香性などについて説明する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ミクロの世界の性質	ミクロの分子は、私たちが通常目にする物体の運動と類似の運動とともに、異なった様相の運動をしている。量子論に基づく分子運動の性質を説明し、それがマクロの物体の運動や性質とどのように関係しているかを解説する。	濱田　嘉昭（放送大学教授）	濱田　嘉昭
9	ミクロの世界の観測	分子の構造や運動あるいは性質を実験によって調べる方法の一つが電磁波と分子の相互作用を利用する分光法である。分子の運動の種類と電磁波の種類との関係、分光法の原理と測定によって得られるスペクトルの解析について説明する。	同　上	同　上
10	レーザー分光法－電子励起状態の構造とダイナミクス－	分子の詳細な情報を得るには、スペクトルのエネルギー分解能を高める必要がある。そのためには電磁波をより精密に分解して測定するか、レーザーなどのエネルギー幅の十分狭い光源を用いる方法がある。レーザーの原理と高分解能分光によって得られる分子の姿を解説する。	馬場　正昭（京都大学教授）	馬場　正昭（京都大学教授）
11	高エネルギー分光法－X線と物質－	エネルギーの大きい電磁波、すなわちX線を物質に当てると、イオン化や内殻電子の励起がおこり、また蛍光など二次的な電磁波を放出する。こうした現象の利用により物質のナノ構造から星雲の構造まで観測することが可能である。	宇田川康夫（東北大学教授）	宇田川康夫（東北大学教授）
12	高速分光法　－分子の動的構造－	分子はピコ秒，さらにはフェムト秒の時間スケール様々な運動をしている。これらの化学過程を調べる測定法の工夫、それらの測定から得られる分子の動的な姿について解説する。	濱口　宏夫（東京大学大学院教授）	濱口　宏夫（東京大学大学院教授）
13	高分解分光法　－分子の動的構造－	分子は決して固い棒のようなもので結ばれているのではない。分子のフレキシブルな運動を知る方法、いくつかの分子が相互作用して大きな集団を作っていく様子について、主に高分解分光法の立場から解説する。	遠藤　泰樹（東京大学大学院教授）	遠藤　泰樹（東京大学大学院教授）
14	磁気共鳴分光法－磁場と分子－	核スピンや電子スピンは磁場の中に置かれると，エネルギーの分裂を起こす。このエネルギー差をマイクロ波の吸収によって測定する方法が磁気共鳴法である。磁気共鳴法の原理と応用について解説する。	手老　省三（東北大学教授）	手老　省三（東北大学教授）
15	量子化学の最前線	最近の話題を取り上げ、量子化学、計算化学の最前線と量子化学の役割、将来の可能性について解説する。	平尾　公彦	平尾　公彦

＝物質の科学・反応と物性（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：岩　村　　秀（放送大学教授）〕
〔主任講師：梶　本　興　亜（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

この講義では、物質の示す様々な状態・性質と化学変化を、熱力学と反応速度論という２つの方法論によって探求する。方法論の原則を実験的事実を通して理解しやすく解説するとともに、これらの原則がどのように現代の先端的な問題に関連しているのかを解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	序論：物質探求の方法論	本講義の目標と背景、概要を説明する。物質の科学は、物質の持つ様々な性質を原子・分子のレベルで理解し、応用への基礎を固める学問である。この講義では、主として熱力学と反応速度論に基づいて物質の物性と反応を解き明かすが、この章では、気体を用いて、その方法を簡単に例示する。	梶本　興亜（京都大学大学院教授） 岩村　秀	梶本　興亜（京都大学大学院教授） 岩村　秀
2	物質の持つエネルギー	物質はそれを構成する原子分子の運動による固有のエネルギーを持っている。エネルギーの大きさを規定しているのは温度であり、また、エネルギーの変化は熱や仕事として認識される。この章では、物質のエネルギーの根源とその変化について学ぶ。	梶本　興亜（京都大学教授）	梶本　興亜（京都大学教授）
3	熱化学	物質の化学変化に伴ってエネルギーの吸収や放出がある。これは化学変化が原子間の結合の組み替えを伴うためである。この章では、物質の標準状態エネルギーを定義することによって、結合エネルギーを含めたエネルギー変化を系統的に取り扱えることを示す。	同　上	同　上
4	物質のエントロピー	物質の状態を規定するにはエネルギー以外にエントロピーという物質固有の物理量を必要とする。この章では、エントロピーの物理的な意味と、それが何故物質の状態や変化を支配するかを説明する。	同　上	同　上
5	化学平衡	物質の化学変化や状態変化は、最終的には平衡状態となる。平衡状態は、エンタルピーとエントロピーを用いて定義されるギブスの自由エネルギーが最小になる状態である。本章では、ギブスの自由エネルギーの中身を理解し、化学平衡や状態変化への応用を考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	相平衡	物質は主として気体・液体・固体の三つの存在形態（相）をとる。ある温度・圧力において物質がどのような形態をとるかは、「ギブスの自由エネルギーが最小になる」という条件で決まる。この章では、純物質の存在形態をギブスの自由エネルギーから考える。	梶本　興亜（京都大学大学院教授）	梶本　興亜（京都大学大学院教授）
7	溶液	この章では、二成分が共存する物質系の相平衡を考える。二成分が溶液や固溶体のような均一な状態になるか、あるいは二相に分離して存在するかは、相平衡の条件によってきまる。分留、凝固点降下、浸透圧などの現象は二成分系における相平衡の応用問題である。	同　上	同　上
8	相転移	物質の気体、液体、固体の3つの状態間の相の変化の他に、結晶や液体状態で様々な相変化（相転移）をする物質が数多く存在する。相転移がなぜ起こるのかを、エネルギーとエントロピーの立場から、いくつかの例で解説する。	徂徠　道夫（大阪大学名誉教授）	徂徠　道夫（大阪大学名誉教授）
9	高分子の物性	高分子物質は通常の低分子量物質の分子に相当する構成単位が鎖状に連結した分子で出来ている。分子が細長いこと、分子の形がいろいろ変わりうることから、結晶化や溶解性は特異であり、ゴム弾性や粘弾性のような低分子では見られない現象が生じる。高分子のこのような性質を、分子間相互作用、エントロピー、熱運動などの基本的な考え方に基づいて理解することを試みる。	尾崎　邦宏（京都大学名誉教授）	尾崎　邦宏（京都大学名誉教授）
10	生体物質系への熱力学の応用	生命体の神秘を解き明かすために、生体物質の働きを「化学」から捉える試みが盛んになっている。本講義では、化学反応における熱力学の基本的な概念を説明し、核酸構造やタンパク質構造に関する熱力学の知見がバイオテクノロジーに利用されていることを学ぶ。	杉本　直己（甲南大学教授）	杉本　直己（甲南大学教授）
11	化学反応の仕組み－基礎	物質の化学変化、つまり、反応の速度をどう表現するのか、その速度を支配している因子は何かなど、反応速度の基本を学ぶ。本章では、原子分子の衝突を基本として起こる素反応をとりあげて、反応の仕組みを考える。	梶本　興亜（京都大学大学院教授）	梶本　興亜（京都大学大学院教授）
12	化学反応の仕組み－応用	一般の化学反応は、素反応が組み合わされて起こる複合反応であることが多い。燃焼や酵素反応を例にとって、反応が組合わさって変化が推進される機構を考える。溶液反応を支配する要因についても概観する。	梶本　興亜（京都大学大学院教授） 岩村　秀	梶本　興亜（京都大学大学院教授） 岩村　秀

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	光反応と大気の化学	この章では、光のエネルギーで反応が進む「光化学反応」についてそのあらましを述べ、太陽光エネルギーが降り注ぐ地球の大気の中で起こる光化学反応が、オゾン層の生成や光化学スモッグを引き起こす機構について考える。	梶本　興亜（京都大学大学院教授）	梶本　興亜（京都大学大学院教授）
14	エネルギー変換の化学	エネルギーは光、電気、熱、力学エネルギーなどの様々な形で存在する。それを利用する際には、貯蔵や輸送に便利で利用しやすい形に変換される。中でも、電気エネルギーは利用しやすいので、これに一度変換して使われることが多い。この章では、化学的なエネルギーの変換の方法とその原理について学ぶ。	小久見善八（京都大学教授）	小久見善八（京都大学教授）
15	触媒の化学	われわれの生活は、さまざまな有用な合成物質に支えられている。それらの大部分は、触媒という特定の化学反応を媒介する機能物質によって合成される。この章では、触媒のもつ反応メカニズムを学び、その多様な可能性を探る。	御園生　誠（工学院大学教授）	御園生　誠（工学院大学教授）

＝物質の科学・有機高分子（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　西　　敏夫（東京工業大学大学院教授）〕
〔主任講師：　讃井　浩平（上智大学教授）〕
〔主任講師：　平川　暁子（放送大学名誉教授）〕

全体のねらい

有機高分子は、私たちの生命・生活に密接に関係し今後もその重要性は増すであろう。本科目では高分子とは何かから始め、有機化学の基礎として有機物質の構造・反応を述べ、重合による高分子の生成について説明する。さらに高分子の構造・物性・加工・社会との係わりなど将来への展望を含めて有機高分子物質の総合的な把握を目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	高分子とは何か	高分子とは何かについて、天然高分子（植物・動物）を例にとり説明すると共に、日常生活にかかせない合成高分子についても具体的に紹介する。高分子の概念、合成高分子の開発、生体高分子を概観したあと、本科目の講義の構成を説明する。	西　敏夫（東京工業大学大学院教授）	西　敏夫（東京工業大学大学院教授）
2	有機化合物の構造	多様な有機化合物は、炭素－炭素間の結合が骨格を作り、それに各種の官能基が結合している。この回では、炭素間の結合の特徴・炭素間結合と官能基の種類による化合物の分類・分子の立体構造など、有機化合物を学ぶ際の基本的な事項を説明する。	平川　暁子（放送大学名誉教授）	平川　暁子（放送大学名誉教授）
3	有機化合物の反応(1)　置換反応	多様な有機化合物の構造と反応性の関係を統一的に理解するには、反応機構にもとづいて整理するとよい。この回では置換反応について、脂肪族炭素上およびカルボニル炭素上の求核置換、芳香族の求電子置換、アルカンのラジカル置換などについて説明する。	井上　祥平（東京大学名誉教授）	井上　祥平（東京大学名誉教授）
4	有機化合物の反応(2)　付加反応と脱離反応	付加反応と脱離反応を、反応機構にもとづいて整理して説明する。アルケンへの求電子付加、カルボニル化合物への求核付加、アルケンへのラジカル付加、脱離反応によるアルケンなどの生成について述べる。付加・脱離反応と置換反応の関係についても触れる。	同　上	同　上
5	有機化合物をつくる	有機化合物は一般に基本的な反応を組み合わせた多段階のプロセスでつくる。ここでは日常生活に関係の深い合成繊維の原料や染料・医薬品など、有機化学製品の例をいくつかあげ、それらがどんな反応を使って合成されるかを、前回までを復習しながら説明する。	同　上	同　上
6	高分子生成反応	高分子生成反応を有機合成反応の延長としてとらえ、高分子量体を得るための注意を述べる。次に高分子生成反応を逐次反応と連鎖反応に大別し、それらの特徴をわかり易く解説する。両反応における分子量・分子量分布の経時変化の違いなどを例に説明する。	讃井　浩平（上智大学教授）	讃井　浩平（上智大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	重縮合・重付加	重縮合を例に逐次重合の動力学について説明する。次に重縮合の特徴をナイロン・ポリエステル等の代表的な高分子の合成を例に解説し、界面重合によるナイロン 610 の合成を紹介する。また重付加についても、ポリウレタン・ポリ尿素の合成反応やフェノール樹脂などの熱硬化性樹脂の反応を示して、その特徴を解説する。	讃井　浩平	讃井　浩平
8	ラジカル重合・イオン重合	活性種が二重結合を攻撃して新たにσ結合が生成すると、炭素－炭素結合が伸びていく重合が連鎖的に起こり、短時間で高分子量のポリマーができることを、わかり易く解説する。それぞれの活性種とモノマーとの反応性や重合の特徴を、実験も含めて解説する。	同　上	讃井　浩平 ゲスト： 澤本　光男（京都大学大学院教授）
9	配位重合・開環重合	配位重合では、立体規則性の優れたポリマーが得られ、とくに Ziegler－Natta　触媒による立体特異性重合の機構を、分子模型を用いて解説する。また、開環重合のモノマーの反応性を各活性種について説明する。最後に、リビング重合についても簡単に触れる。	同　上	同　上
10	酵素・微生物による高分子の合成と分解	酵素・微生物を用いた立体規則性の高分子の合成および分解反応について、例を示しながらわかり易く説明する。得られた高分子の構造と生分解性などの特徴についても紹介する。　さらに、これらの重合で得られた高分子、特にバイオポリエステルの応用についても触れる。	讃井　浩平 土肥　義治（東京工業大学大学院教授）	讃井　浩平 土肥　義治（東京工業大学大学院教授）
11	高分子の構造	高分子の構造について、原子分子オーダーから巨視的なオーダーまで（構造単位の立体化学、一次構造、二次構造、結晶・非晶・液晶・球晶・ミクロ相分離などの高次構造）を、構造形成機構を含めて、CG を多用して、わかりやすく説明する。　特に、結晶化、相分離について重点を置いた。	西　敏夫（東京工業大学大学院教授）	西　敏夫（東京工業大学大学院教授） ゲスト： 奥居　徳昌（東京工業大学大学院教授） 橋本　竹治（京都大学大学院教授）
12	高分子の力学的性質	高分子の力学的性質の発現(ゴム・繊維・フィルムなど）には高分子の構造の何がポイントかについて、有機分子の内部回転と物性・ゴム弾性・ゲルの物性・超延伸などを例にとって説明する。弾性率・強度・伸び・衝撃強度などと高分子の構造がどう関係するかも示す。　特に、ゲルについて重点を置いた。	同　上	西　敏夫 ゲスト： 長田　義仁（北海道大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	高分子の分子運動と物性	有機分子の分子運動と緩和現象・粘弾性・ガラス転移・結晶化と物性などについて、ＣＧ・実験を含めて、わかりやすく説明する。またシミュレーションのロケも取り入れながら解説する（具体的な例としては免震ゴムの性質など）	西　敏夫	西　敏夫 ゲスト： 土井　正男（名古屋大学大学院教授）
14	高分子の応用	前回までの講義内容の応用として、高分子の成型加工・機能性高分子・導電性高分子・強誘電性高分子・生体適合性高分子・プラスチック光ファイバーなどについて、原理の説明、研究室・研究所のロケを行い、生活に密着している高分子の全体像を示す。　特に、プラスチック光ファイバーについて詳しく説明する。	西　敏夫	西　敏夫 ゲスト： 小池　康博（慶應大学教授）
15	高分子と地球環境	高分子と社会とのかかわり、リサイクル、グリーンケミストリーなど、大きな枠組みでとらえたとき、我々は今後高分子をどう利用していくべきかを考えるように講義を締めくくる。生分解性ポリマー・生物を利用した高分子の生産などの現状と意味についてもふれる。	西　敏夫 佐伯　康治（元・新第一塩ビ（株）社長）	西　敏夫 佐伯　康治（元・新第一塩ビ（株）社長）

＝物質の科学・有機構造解析（‘０３）＝（TV）
—有機化合物の構造とその解析法—

〔主任講師：　岩村　　秀（放送大学教授）〕
〔主任講師：　山口健太郎（徳島文理大学教授）〕

全体のねらい

有機化合物は，生体を構成し生物が作る重要な物質であるばかりでなく，21 世紀の材料科学でも重要な位置を占めている．この講義では，そのような有機化合物を構成する分子構造の特徴を理解し，その構造を原子・分子レベルで解明するための大型分析機器を使った解析法について，質量分析，NMR（核磁気共鳴），X線解析を中心に体系的に学ぶ．

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	化学と物質の構造	分子の形を探る化学の発展と，有機化合物の代表的な構造について述べる．有機構造解析法における分析化学や分子構造解析の役割と歴史を概観し，古典的分析手法から先端エレクトロニクスに支えられる物理機器分析へと発展する道筋をたどる．	岩村　秀（放送大学教授） 山口　健太郎（徳島文理大学教授）	岩村　秀（放送大学教授） 山口　健太郎（徳島文理大学教授）
2	さまざまな構造解析の手法	機器分析手法を分類し，対象や目的別に整理して構造解析の概要を把握する．本講義で詳細に解説する三つの主要物理分析手法以外の大型分析機器について触れ，さらに分子立体構造解析を目的とした計算化学的手法との連携による構造解明について概説する．	同　上	同　上
3	天然物中の有効成分	代表的な天然有機化合物の抽出，単離，精製の一連の操作について解説し，有用な生物活性物質の獲得について理解を深める．有機分子の基本的性質を理解し，これに基づいて分離・精製を重ねる過程を通し，精密分子構造決定に供する試料の調製法について学ぶ．	石川　勉（千葉大学教授）	石川　勉（千葉大学教授）
4	元素分析と質量分析	燃焼法による元素分析では，燃焼により生成した二酸化炭素，水などを定量することにより，成分元素とその量を決める．真空の装置の中で原子・分子のイオンを作り，質量の差を利用して分離し，それぞれの量を決める質量分析法の誕生と原理について解説する。	岩村　秀	岩村　秀
5	質量分析（1） イオン化と質量分析	有機質量分析に於いて重要なイオン生成についての理解を深める．種々のイオン化手法を紹介し，現在までに解明されているこれらのイオン化機構について考察することにより物質（有機化合物）の性質の理解に質量分析がどのように関わってきたかを解説する．	山口　健太郎	山口　健太郎
6	質量分析（2） 質量分析の実際	実際の質量分析装置を見ながら具体的操作法の概要を学ぶ．装置の調整や試料の導入法，さらに測定条件の設定や調整，及び測定データの出力法を中心に分析手順を理解する．同時に装置の原理，動作や問題点について実際の装置を見ながら解説する．	同　上	同　上
7	質量分析（3） 質量分析の応用	精密質量測定による組成決定や微量定量法，さらに生体分子を含む難揮発性高分子の分析等の応用について述べる．また金属錯体など比較的不安定な試料のマイルドなイオン化法のいくつかを紹介する．特に溶液試料に用いられるスプレーの応用について詳述する．	同　上	同　上
8	NMR（1） NMRとは何か	NMR 分光法について概説し，原理および特性を理解することにより有機化合物の構造解析への適用につて考察する．装置開発の経緯をはじめ，有機化合物の構造に関してどのような情報が得られるかを中心に，基礎的な事項を解説する．	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	NMR（2） NMR装置	パルスFT-NMR分光法について概説し，原理および特性を理解することにより有機化合物の構造解析への適用につて考察する．特にパルスやFID（自由減衰振動），そしてフーリエ変換などの関係について説明する．さらに実際のFT-NMR装置を用いた測定を見ることにより理解を深める．	山口　健太郎	山口　健太郎
10	NMRの応用	多次元NMRをはじめとするパルスFT-NMRの応用について解説する．パルス系列やこれによる新しい測定法について学ぶ．物性の評価からイメージング技術を基にした医療分野への応用などNMRの幅広い適用性について論ずる．	同　上	同　上
11	X線解析（1） X線解析入門	粉末X線回折や蛍光X線分析そして単結晶X線解析法を概観する．レントゲンによるX線の発見からラウエ像の撮影，さらにブラッグ則の導入を通してX線解析が発展してきた歴史的背景につにて解説し，化学構造と結晶構造のX線による解析の本質を学ぶ．	同　上	同　上
12	X線解析（2） 回折と結晶化学	X線の発生法や装置，そしてX線の性質から始まりブラッグ則を中心とする回折理論および測定法について解説し，さらに結晶化学に関する一般事項に触れる．特にX線解析にとって重要な結晶の対称性や対称操作，そしてこれらに基づく分類法に関し言及する．	同　上	同　上
13	X線解析（3） 結晶解析の実際	実際のX線回折装置を見ながら構造解析の流れを理解する．単結晶の選び方やマウント，センタリングから測定パラメータの設定に続き回折測定を観察し，さらにデータ処理および解析手順を学ぶ．実際の低分子有機結晶を例に解析過程を理解する．	同　上	同　上
14	X線解析（4） 解析結果の応用	X線解析による結晶構造および分子構造の解析結果の整理やこれらの評価について解説する．X線解析の特性を生かした解析事例を紹介し，さらにNMRや質量分析等，他の手法との連携による有機構造解析の重要性を理解することにより，機器分析の融合に基づく多角的な構造解析法の概念を学ぶ．	同　上	同　上
15	構造解析の最先端と未来	ポストゲノム科学，ナノテクノロジーなど最先端の領域では，質量分析，NMR，X線解析及び関連機器分析を駆使して研究が進められている．これら先端構造解析研究を紹介し，さらに大型物理分析装置の開発の現状や将来への展望について述べる．	岩村　秀 山口　健太郎	岩村　秀 山口　健太郎

＝　生命と金属の世界（‘０５）＝（Ｒ）

〔　主　任　講　師：　原口　紘烋（名古屋大学大学院教授）　〕

全体のねらい

私たち人間の身体も、また動物、植物、微生物などすべての生物も元素から構成された化学物質でできている。生物の特徴は、生体を構成するアミノ酸、タンパク質、核酸、脂質、糖類などの生体有機物を含む約100兆個の細胞が、生命機能を維持するために生体物質の合成と分解を繰り返し、代謝を行っていることである。このような生体物質の構成成分としては有機物質がほとんどであるが、生命活動の維持には従来「ミネラル」と呼ばれた無機物質も欠かすことができない。最近の微量分析法の進歩によって、ミネラル成分の多くは金属元素であり、生体中には微量であるがほとんどの金属元素が含まれていることが明らかになってきた。そして、その多くはタンパク質と結合した金属酵素として、生体物質の合成と代謝に関与していることも分ってきた。本講義では、生命活動に関与する金属の役割について解説するとともに、私たちの健康と病気、食生活、さらには環境問題との関連について考えてみたい。

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
1	序論 - 人間と金属のかかわり	人間は生活の中で様々な金属を利用してきた。石器文明のあとに鉄器文明、青銅器文明と呼ばれる金属を利用する文明が誕生し、武器や農耕器具、生活用品に利用した。金、銀、銅は装飾品に古くから用いられた。現代社会でも、多くの種類の金属が使われ、私達の生活を支えている。本章では、このような人間生活と金属のかかわりについて概説する。	原口　紘烋 （名古屋大学大学院教授）	原口　紘烋 （名古屋大学大学院教授）
2	生体中の金属 - 必須性と有害性	私達の身体も化学的に見れば元素で構成されていて、元素からつくられる化合物から成り立っている。多くの生物と同様に、人体も基本的には水と有機物から構成されているが、人体中には微量だが金属元素も含まれている。従来は「ミネラル」と総称されていた微量の金属元素が、人体中で重要な役割を果たしていることが分かってきた。本章では、人体中の微量金属の種類と、元素の必須性と有害性について説明する。	同　上	同　上
3	元素の化学的性質	現在は110種類を越える元素が知られている。本章では、元素の発見史とともに、元素（原子）の構造と化学的性質の関係について概説する。化学では物質の基本構成要素として元素（element）を定義するが、これは物理における原子（atom）と同じである。元素の化学的性質は原子核周囲の電子の種類と数によって周期的に変化することから、元素の周期表としてまとめられている。ここでは、元素の化学的性質の周期性とともに、金属元素の特徴について説明する。	同　上	同　上
4	地球における元素の分布	地球は半径約6400 kmの太陽系惑星の一つで、表面に豊富な海水が貯えられているので「水の惑星」とも呼ばれる。ここでは、地球の構造と元素の組成（分布）について学ぶ。地球の表層部分は「地殻」と呼ばれ、地殻の元素分布は「クラーク数」として有名である。地球全体及び地殻の元素分布と「元素の地球化学的分類」から、元素の化学的性質と地球の構造の関係について考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
5	海洋における元素の循環	地球の表層約70％は海洋で、その平均深さは約4000 mにもなる。この海洋で約38億年前に原子生命が誕生し、進化してきた。また、現在でも海洋には多種多様な生物が生息し、人間にとっても食糧となる海洋生物資源として重要である。さらに、海洋の存在とその変化は、地球環境の保全にも大きな影響を与える。海洋における元素の分布とその循環が、生物の存在を可能にしていることを、「元素の海洋化学的分類」から考えてみる。	原口　紘炁	原口　紘炁
6	生体物質の種類と役割	人体の約70％は水であるが、そのほかにアミノ酸、タンパク質、核酸、脂質などの様々な生体物質が存在し、合成と代謝（排泄）を繰り返して生命を維持している。ここでは、タンパク質を構成する20種類のアミノ酸、生体機能を支えるタンパク質、タンパク質合成の遺伝情報をもつ核酸、細胞膜を構成する脂質の種類と構造、および生体における役割について解説する。	同　上	同　上
7	金属と生体物質の結合－金属錯体の生成	金属は生体物質であるアミノ酸やタンパク質と結合して、血液や細胞中に存在している。このように、金属がアミノ酸やタンパク質と結合した化合物は「金属錯体」と呼ばれ、様々な生体機能の発現に重要な役割を果す。ここでは、金属錯体を生成する錯形成平衡の概念とともに、金属錯体の基本構造について考察する。また、光合成を行うクロロフィル、造血作用に関与するビタミン B_{12} など、タンパク質以外の生体物質における金属結合についても言及する。	同　上	同　上
8	金属とタンパク質	前節で述べたように、様々な金属イオンはタンパク質と結合して生体中に存在している。このような金属イオンと結合したタンパク質は「金属タンパク質」と呼ばれる。その代表的なものが鉄を含むタンパク質であるヘモグロビンである。ここでは、様々な金属イオンが関与する金属タンパク質の種類と構造、またそれらの生理機能発現について学ぶ。その中でとくに、鉄タンパク質であるフェリチンによる鉄の貯蔵、トランスフェリンによる鉄の運搬、カタラーゼによる抗酸化作用について解説する。	同　上	同　上
9	金属酵素の働き	金属タンパク質の中で酵素（enzyme）として機能をもつものは「金属酵素」と呼ばれる。金属酵素は、タンパク質合成、遺伝子合成、生体物質の代謝などの重要な役割を果し、生命維持に欠かせないものである。ここでは、生体触媒である金属酵素の種類と働きについて解説する。その中でとくに、亜鉛を含む亜鉛酵素は、生体機能の維持に重要な数多くの生体物質の合成と代謝、機能維持に関与しているので、詳しく説明する。さらに、セレン、銅、マンガン、ニッケルなどを含む金属酵素の働きについても、生理機能との関連で考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
10	核酸と金属	核酸であるDNA、RNAは生体の遺伝情報が塩基配列として保持され、遺伝情報の伝達、タンパク質の合成を行う生体物質である。核酸と金属の相互作用については、未解明なことが多いが、マグネシウムイオンが核酸の3次元構造の保持に必要なこと、金属イオンと核酸構成成分である塩基、ヌクレオシド、ヌクレオチドとの結合については詳しく研究されている。ここでは、このような核酸及び核酸構成成分と金属イオンの相互作用について説明する。さらに、核酸と結合する制がん剤であるシスプラチン（白金化合物）の制がん機構についても解説する。	原口　紘炁	原口　紘炁
11	生体中の微量金属を測る	生体中の微量金属を測る（定量）には、金属イオン濃度が1 ppt (1×10^{-12} g/ml)~ 1 ppb (1×10^{-9} g/ml)の検出ができる分析装置が必要である。このような超微量レベルの金属を測定する分析法として利用されているICP-AES（誘導結合プラズマ発光分析法）、ICP-MS（誘導結合プラズマ質量分析法）の測定の原理について説明するとともに、ヒト血液、毛髪、尿、植物、海洋生物中の微量金属のデータについても示す。分析法の進歩は、生体中のほとんどすべての元素の測定を可能にし、「生命と金属の世界」の進歩に大きな貢献をしている。	同　上	同　上
12	金属が係わる環境問題	わが国はメチル水銀による水俣病、カドミウムによるイタイイタイ病を悲惨な公害問題として経験してきた。このほかにも、鉛中毒やヒ素中毒、有機スズ化合物の海洋汚染、6価クロムによる土壌汚染など、重金属が関与する環境問題がある。その結果、現在では人体および環境に被害を及ぼす恐れのある物質については、環境基準値や排水基準値等が決められ、生命および自然環境の保護が行われている。ここでは、金属が係わる環境問題について、実例を交えて解説する。	同　上	同　上
13	食物と金属	食品中の金属成分は従来「ミネラル」として表示され、ミネラルの摂取も大事であると言われてきた。ミネラルとは、食品を燃やした後の灰分のことである。ミネラルとしては、血液成分である鉄、骨の成分であるカルシウムの重要性が強調されてきたが、分析技術の進歩により食物中のほとんどの元素の測定が可能になり、多くの元素が生理作用や生命の維持に必要なことが分ってきた。そこで、植物性食品を中心に、元素とその健康維持・増進への効果について考えてみる。	同　上	同　上
14	健康と病気	私達は「健康でありたい、病気になりたくない」と常に考えている。このような健康状態や病気の診断や治療を行うために、「多元素相関病態診断法」が少しずつ進歩しつつある。病気になるのは、元素の立場からすると、過剰症または欠乏症の問題である。最近では、亜鉛欠乏症による味覚障害、アルミニウムの脳蓄積によるアルツハイマー病などがマスコミでも取り上げられている。血液（血清）の多元素分析による病態解析の現状を中心に、健康と病気について考えてみる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当 講師名 (所属・職名)	放送担当 講師名 (所属・職名)
15	メタロミクスの世界	これまで説明してきた「生命と金属の世界」を著者は「メタロミクス（Metallomics)」として新学問領域の構築を提唱している。メタロミクスでは、金属含有生体物質のことは「メタローム（Metallome)」と呼ぶ。ヒトの全遺伝子塩基配列解読がほぼ終ったとされているが、この遺伝子の世界はゲノミクス（Genomice)、遺伝子群は「ゲノム（Genome)」と呼ばれる。ゲノムはタンパク質のアミノ酸配列を決定することから、ポストゲノムとして「プロテオミクス（Proteomics)」、タンパク質群である「プロテオーム（Proteome)」の研究の重要性が注目されている。しかし、これまで述べてきたように、遺伝子もタンパク質も金属イオンの関与なしでは合成されない。ここでは、講義のまとめとして、「金属支援機能化学」としてのメタロミクスの現状と将来の発展について考えてみる。	原口　紘炁	原口　紘炁

＝ 植物の生理('04)＝(TV)

〔主任講師：庄野　邦彦（日本女子大学教授)〕
〔主任講師：菊山　宗弘（新潟大学教授)〕

全体のねらい

生き物の世界を構成する主役の一つが植物である。植物なくしては人類のみならず全動物の生存はあり得ない。この科目では植物の生存・生活の機構を解説することにより、植物に対する理解を深めることを目指す。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	植物の特徴	全ての生物に共通する姿の上に植物の特徴が上乗せされている。その共通の姿とは何か、植物の特徴とは何か、それらの研究手段にはどのようなものがあるか。これらのことを概説し、さらにこの授業の目標などを紹介する。	庄野　邦彦（日本女子大学教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）	庄野　邦彦（日本女子大学教授） 菊山　宗弘（新潟大学教授）
2	植物の細胞と体制	植物の体制を個体レベル、細胞レベルなどで説明すると共に、植物の特徴を指摘する。構成要素である細胞に注目し、細胞の機能をその構造との関係から概説する。	西村　いくこ（京都大学教授）	西村　いくこ（京都大学教授）
3	植物のいとなみ(1) 物理・化学的な基礎	生命現象とは物理的反応や化学的反応の複雑な組み合わせの結果である。そこで、酵素反応の機構を簡単に解説する。また、次の章の物質輸送の基礎として、物理化学の法則と物質移動の原理を概説する。	菊山　宗弘	菊山　宗弘
4	植物のいとなみ(2) 物質輸送	細胞レベルでの物質輸送機構を解説する。膜輸送(受動輸送、能動輸送)、膨圧の発生、膜電位の発生、および細胞内での能動的な物質輸送としての原形質流動を取り上げる。	同　上	同　上
5	植物のいとなみ(3) 光合成	植物の特徴の最たるものの一つが「独立栄養」を営むことである。独立栄養の実体である光合成は、光化学反応およびその関連反応と、それに続く生化学反応とからなる。 この章では、光化学反応とその関連反応について解説する。	中村　保典（秋田県立大学教授）	中村　保典（秋田県立大学教授）
6	植物のいとなみ(4) 光合成と関連代謝	光合成の生化学反応過程であるカルビン・ベンソン回路を解説する。植物の代謝全体における光合成の意義をまとめる。その中では特に糖および脂質代謝について解説する。また、遺伝子とはどういうものかの説明と、光合成関連遺伝子とその機能を解説する。	同　上	同　上
7	植物のいとなみ(5) アミノ酸合成と二次代謝系	タンパク質は 20 種類のアミノ酸から出来ている。独立栄養を営む植物はこのアミノ酸をすべて合成する。しかしヒトを含む動物はアミノ酸のいくつかは体内で合成できないため，植物が合成したアミノ酸を捕食により取り入れている。そこで，この植物におけるアミノ酸合成系について解説するとともに，そのアミノ酸などから植物の薬用成分や色素を合成する植物特有の二次代謝系について概説する。	菊山　宗弘	菊山　宗弘 ゲスト 小関　良宏（東京農工大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	植物の生育(1) 生活環とホルモン調節	植物の生活環は発芽、栄養成長、生殖成長、老化の各期から構成される。また、その進行は数種の植物ホルモンによって制御されている。植物ホルモンの種類、構造、代謝、機能、並びに作用機構を、生活環の制御と関係づけて解説する。	保尊　隆享(大阪市立大学教授)	保尊　隆享(大阪市立大学教授)
9	植物の生育(2) 生活環と環境要因	植物の生活環は、光、重力、温度などの環境要因によって調節される。生活環を構成する発芽、栄養成長、生殖成長、老化の各期が、これらの環境要因によってどのようなしくみで調節されるかを概説する。	同　上	同　上
10	植物の形作り(1) 細胞形成	細胞の成長の機構を解説する。その必然の帰着として、細胞・組織・器間の形態形成がどのようにして起こるのかを解説する。細胞の分化とそれにおよぼす環境要因についても簡単に説明する。	柴岡　弘郎(大阪大学名誉教授)	柴岡　弘郎(大阪大学名誉教授)
11	植物の形作り(2) 器官形成	形や機能の分化には、遺伝情報が書き込まれていることと、その書き込まれている情報がしかるべきときにしかるべく発現することが必要である。遺伝子とはどのようなものであり、どのように発現が調整され、どのように器官の機能・形態が決まるかを解説する。	岡田　清孝(京都大学教授)	岡田　清孝(京都大学教授)
12	植物の形作り(3) 個体形成・分化全能性	体のどの部分も同じ遺伝情報を持っているので、植物はどの部分からも体全体を再構成できる(分化全能性)。言い換えれば個体の形成過程とは、全遺伝子のうち特定のものが発現することによって各組織、器官へと分化することである。個体の形成過程を遺伝子発現の視点から解説する。	同　上	同　上
13	生態系の中の植物(1) 植物の防御と共生	独立栄養を営みはするが、植物は「独立」に生活するのではなく、多数の「環境要因」との相互作用のものに生活をしている。この章では微生物との相互作用に注目し、病原性とその対応、共生関係について解説する。併せて、微生物との関係が遺伝子操作にもつながることを紹介する。	庄野　邦彦(日本女子大学教授)	庄野　邦彦(日本女子大学教授)
14	生態系の中の植物(2) 植物と環境の関わり	植物の環境への適応について概説する。また，光，水，窒素栄養などの環境要因がどのように植物の生活に関わるのかを，細胞から生態系のレベルにまでスケールアップしながら考察する。	寺島　一郎(大阪大学教授)	寺島　一郎(大阪大学教授)
15	植物生理学の展望	植物生理学の発展の過程を、特に研究方法の発展と、その著しい成果を取り上げつつ、簡単に振り返る。これをふまえ、植物生理学の将来の展望を述べる。また、昨今の生命工学等の発達とその成果に接するに当たっての植物生理学学習の意義について考える。	菊山　宗弘	菊山　宗弘

＝　分子生物学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　石川　統　（放送大学教授）〕

全体のねらい：

分子生物学のおもな目的は，さまざまな生物たちが共通に示す現象を，核酸とタンパク質という分子の挙動を通じて理解することである．本講義では，分子生物学のエキスパートがそれぞれの分野の基礎をわかりやすく説明する．

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	分子生物学とは何か	分子生物学の起源と歴史，生物科学全体に及ぼす分子生物学の影響，分子生物学の変貌，分子生物学は発展的に解消しつつあるという見解等々をテーマに，分子生物学全体を概観する	石川　統（放送大学教授）	石川　統（放送大学教授）
2	核酸とタンパク質の構造	生命現象は、さまざまな分子の働きによって営まれているが，分子生物学の対象として最も重要なのは，遺伝情報を担う核酸と，遺伝情報が翻訳された機能的分子のタンパク質である．核酸とタンパク質の構造と機能の全体像を概説する	藤原　晴彦（東京大学大学院教授）	藤原　晴彦（東京大学大学院教授）
3	遺伝と遺伝情報	メンデルの遺伝の法則を説明し，それらの法則性の基礎となっている分子生物学について説明する．さらに，その説明を通じて，遺伝情報とは何であるかを考察する	石川　統	石川　統
4	遺伝子と染色体	遺伝子はDNAでできているが，すべてのDNAが遺伝子ではないこと，遺伝子の座である染色体の構造，染色体を通じて遺伝子が子孫に伝えられるしくみなどを説明する	石川　統	石川　統
5	DNAの複製	生物が親から子に，種としての遺伝情報をつたえる分子機構を概観する．原核生物での理解をもとに真核生物での遺伝子複製もみる．複製反応とならび、校正反応についてものべる	渡辺雄一郎（東京大学大学院助教授）	渡辺雄一郎（東京大学大学院助教授）
6	遺伝情報の発現１．転写	遺伝情報が生体で利用されるためには，核内でDNAがいったんRNAにコピーされる必要がある．この過程は転写と呼ばれ，遺伝情報の発現量や発現時期を調節する重要なステップである．転写機構，転写に関わる酵素，転写を調節する因子などについて述べる	藤原　晴彦	藤原　晴彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
7	遺伝情報の発現 2．プロセシング	真核細胞では，転写されたRNAがそのまま働くことは少なく，核の中で様々な修飾・加工（プロセシング）を受ける．スプライシングやキャッピングなどの真核細胞のmRNAに特有なプロセシング，さらにrRNAやtRNAのプロセシングのしくみについて解説する	藤原　晴彦	藤原　晴彦
8	遺伝情報の発現 3．翻訳と翻訳後修飾	遺伝情報がタンパク質に変換される最後の過程が翻訳である。mRNAを鋳型にして正しくタンパク質が作られるしくみを学ぶ．またその後，翻訳されたタンパク質が機能を持つように修飾される機構や，翻訳を阻害することによって働く抗生物質の働きも付け加える	石浦　章一（東京大学大学院教授）	石浦　章一（東京大学大学院教授）
9	ゲノムとプロテオーム	多くの生物の遺伝子情報があきらかとなってきた．ゲノムとはなにか．そこから何がわかるか．プロテオームとはなにか．そこから何がわかるかについて解説する	渡辺雄一郎（東京大学大学院助教授）	渡辺雄一郎（東京大学大学院助教授）
10	タンパク質の機能 1．酵素と膜タンパク質	生体内触媒である酵素反応のしくみを学ぶ．また，酵素阻害のメカニズムを調べ，阻害反応の実際の応用例としての薬剤の働きを検討する．さらに，生体膜に埋め込まれたタンパク質の特殊な機能（受容体，チャネル等）についてもまとめる	石浦　章一	石浦　章一
11	タンパク質の機能 2．免疫のしくみ	哺乳類で高度に発達している，自己と非自己を識別するしくみについて説明し，そのしくみの基礎にある抗体の多様性を生みだす機構を考察する．また，液性免疫と細胞性免疫の間の役割分担についてのべる．	石川　統	石川　統
12	突然変異と分子進化	個々の個体に生じた突然変異が集団全体に広まること，これが進化である．分子生物学の発展により，分子レベルで進化を理解できるようになった．ここでは，分子レベルの進化のしくみとその特徴について解説する	二河　成男（放送大学助教授）	二河　成男（放送大学助教授）
13	RNAの多様な機能	RNAは，単に遺伝情報の仲介物質と思われがちである．しかし，現在では，触媒や制御因子といった多様な活性をもつ機能性高分子であることが明らかになってきた．これらの機能性RNAの構造と反応のしくみについて解説する	二河　成男	二河　成男
14	遺伝子操作	遺伝子操作とはどのような技術か．可能になった実例，将来の可能性を紹介し，研究を行うための法律的な基準についても紹介する．	渡辺雄一郎	渡辺雄一郎

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
15	今後の社会と分子生物学	21世紀は生命科学の時代であり，分子生物学はその基礎として重要性を増すにいたっている．ここでは，ゲノムから明らかになった生命のしくみ，病気の治療法の開発，遺伝子改変食品，など私たちのまわりの問題と，それにまつわる生命倫理について講義する	石浦　章一	石浦　章一

＝多様性の生物学（‘０３）＝（TV）

〔主 任 講 師： 岩槻 邦男（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物多様性とは何か、なぜ生物は多様なのか、どれくらい生物は多様であるか。今生きて演出している生命現象だけでなく、３０数億年の進化の歴史を経て作り上げる生命の実体を総体として追究する。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物の進化と多様性	生物には、DNA に担われた遺伝情報が、細胞のうちに閉じ込められ、一貫して引き継がれ、生命現象の制御を行なう普遍的な特性と、膨大な数の種に分化して地球上に共存している多様性が並存している。進化の視点でこの生命現象の二面性を考える。	岩槻 邦男（放送大学教授）	岩槻 邦男（放送大学教授）
2	分子進化の機構	進化とは、遺伝的な繋がりを持つ個体の集まり（集団）にみられる現象である。ここでは、分子レベルの変異生成の機構と変異が世代を超えて伝達するときに働く集団レベルの機構について概観する。	高畑 尚之（総合研究大学院大学理事）	高畑 尚之（総合研究大学院大学理事）
3	分子進化の特徴と中立説	DNA、遺伝子、あるいはタンパク質の進化には、形態形質の進化にはみられない特徴がある。ここでは、こうした特徴とそれを説明するための分子進化の中立仮説について紹介する。	同 上	同 上
4	ゲノムとその進化	ゲノムは生命を営む脚本であると同時に、その生物の歴史を刻む図書館でもある。ここでは、ゲノムレベルで明らかになりつつある進化学的な側面と生物の同胞性や関係性について概観する。	同 上	同 上
5	原核生物の多様性	生物は原核性の細胞の姿で地球上に現れ、進化の歴史の半分以上はその姿を保っていた。現在まで原核性を維持してきた現生の原核生物を手がかりに、原核性の生物の生物の進化と多様性に関わる知見を紹介する。	岩槻 邦男	岩槻 邦男
6	真核生物の起原と原生生物	真核細胞の進化は地球上で生物が多様化する重要なきっかけだった。真核生物はどのように進化して来たか、現生の原生生物の多様性を手がかりに追究する。	伊藤 元巳（東京大学助教授）	伊藤 元巳（東京大学助教授）
7	多細胞体と有性生殖の進化	真核生物が進化してから、生物はそれまで生活していた単細胞体から、多細胞体で生きる生物を進化させ、また有性生殖という特殊な生殖法を進化させて２倍体の生物をつくり出した。これらの進化の意味を探る。	岩槻 邦男	岩槻 邦男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	藻類の多様性と植物	真核生物のうち、酸素発生型光合成を行うのは藻類と（陸上）植物である。シアノバクテリアを含め、独立栄養の生物の進化をあと付ける。植物の進化はまた、生物の陸上への進出のさきがけとなり陸上生物相の繁栄をもたらした。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
9	動物の起源と進化	多様に分化している後生動物はどのような単細胞生物から由来し、現生の動物の門のあいだの系統関係について学習する。特に哺乳動物について、その多様性と進化について詳しく検討する。	長谷川　政美（統計数理研究所教授）	長谷川　政美（統計数理研究所教授）
10	菌類の多様性と進化	かつては植物の一部とみなされていた菌類の類縁と系統が少しずつ解き明かされている。植物でも動物でもない菌類という生物の真の姿は何かを追究し、生物界の多様化の総体を概観する。生物界の分解者とされる菌類は系統としてどこまで独立であるのか。	岩槻　邦男	岩槻　邦男
11	化石が語る系統	生物の系統を明らかにするうえで、化石は欠かすことのできない情報源である。化石が保存しているさまざまな情報をどのように引き出し、系統関係が明らかにされるのかを学ぶ。	西田　治文（中央大学教授）	西田　治文（中央大学教授）
12	生物界の系統樹	生物の系統は、系統樹として表現できる。系統は可能な限り多くの情報を総合して推定される仮説でもあり、時代とともに検証され、改善されてきた。現代の系統樹はどのようなものだろうか。	同　上	同　上
13	遺伝子多様性と種多様性	生物の種多様性は遺伝子の多様性によって表現される。遺伝子多様性とはどういうことか、それが種の多様性とどのように関わるのか、遺伝子の進化と多様性について解説する。	伊藤　元巳	伊藤　元巳
14	種形成	遺伝子に多様性が見られても、すぐに種が多様化するとは限らない。種の分化はどのような機作で実現するものか、具体的な例を示しながら生物の種の進化の実体を追究する。	同　上	同　上
15	生物多様性と人	膨大な数の種に分化した生物のうち、ヒトと呼ぶ１種の生物は他の生物に見ない特殊化を果たし、文化をもつようになった。この特殊化に焦点を当て、人の進化が地球に何をもたらしているかを考察する。	岩槻　邦男	岩槻　邦男

＝動物の行動と生態（‘０４）＝（TV）

〔主任講師：　長谷川眞理子（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

本講義では、動物が見せるさまざまな行動が、その動物の暮らす生態環境との関係においてどのようにして進化してきたかを探る、行動生態学、動物行動学のおもな研究成果を紹介し、動物の行動の機能とその進化について考察する。動物の生理学的、生化学的な仕組みの細部ではなく、個体としての動物が環境との関係を通してどのように行動するか、マクロな生物学のおもしろさを伝えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	動物の行動と生態：研究の目的と歴史	動物は、採食、捕食の回避、配偶、子育てなど、さまざまな行動を行なって生きている。動物がある行動をとるのは「なぜ」なのだろうか？　この疑問には、４つの答え方、アプローチの仕方が存在する。初回は、その４つの「なぜ」の問い方を説明するとともに、動物行動研究の歴史をたどる。	長谷川眞理子（早稲田大学教授）	長谷川眞理子（早稲田大学教授）
2	自然淘汰と適応：理論的枠組み	行動の研究で中心となる概念は適応である。生物がその生態環境との関係において、生存と繁殖に役立つ形質を備えていることを適応と呼ぶ。適応が生じるプロセスを説明するのが自然淘汰の理論である。動物行動の進化を分析する重要な理論的枠組みである自然淘汰について、実例をあげて説明する。	同　上	同　上
3	行動と進化	行動は、生物のなんらかの欲求を満たすという点で利益をもたらすとともに、なんらかのコストも伴うものである。行動生態学では、そのような行動のコストと利益を多角的に分析する。ある一つの行動パターンが最適な解をもたらす場合、行動は自然淘汰によって最適化される。その過程を、おもに採食行動を例にあげて説明する。	同　上	同　上
4	社会行動とゲーム理論	前回は、最適化について説明したが、行動によっては、最適な行動が一つに決まらない場合も生じる。とくに、互いに相手の出方によってこちらが何をしたらよいかが変化するような社会行動においてはそうであることが多く、そのような場合にどのような行動が進化するかは、ゲーム理論を用いて分析されている。その過程を、主に闘争行動を例にあげて説明する。	同　上	同　上
5	血縁淘汰と包括適応度	第２回目の講義で、自然淘汰は個体の最適度を最大化するように働くと述べた。それでは、いわゆる利己的行動のみが進化し、利他的行動は進化しえないのだろうか？そんなことはない。その一つの過程が、血縁淘汰と呼ばれるものである。それは、自分と同じ遺伝子を共有する個体に対しては、その血縁度に応じて利他的な行動が進化することを説明する理論である。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	互恵的利他行動と相互扶助	前回は、血縁者間に生じる利他行動の進化を扱った。では、非血縁者間では、利他行動は進化するのだろうか？それには、互恵的利他行動と相互扶助の２つのシナリオが考えられる。それぞれの例を紹介するとともに、非血縁者間の利他行動の進化研究のこれまでの成果を振り返る。	長谷川眞理子	長谷川眞理子
7	親による子の世話	親による子の世話の形態は、まったく世話をしないもの、両親そろって世話するもの、雌親だけが世話するもの、雄親だけが世話するもの、両親以外の個体も参加して世話するものと、実にさまざまである。昆虫から哺乳類まで、さまざまな親の世話の形態を紹介するとともに、なぜこのような変異が存在するのか、理論的な分析を試みる。	同　上	同　上
8	性淘汰と配偶の機会をめぐる競争	雄と雌はとは、さまざまな形質において異なることが多い。このような性差が存在する理由は、自然淘汰の理論では十分に説明できない。それは、たとえ同じ種に属していても、雄と雌では、繁殖の機会をめぐる競争のあり方が異なるために生じる。それを説明するのが性淘汰の理論である。さまざまな動物における性差と配偶をめぐる競争の関係を紹介する。	同　上	同　上
9	配偶者選択	多くの場合、配偶者の獲得をめぐる同性間の競争は、雌どうしよりも雄どうしにおいて強いため、雌は配偶者選択をすることができる。その結果、雄の美しい飾り羽根やさえずり声などが進化したと考えられる。では、雌は、なにを目安にして配偶者選択をしているのだろうか？さまざまな動物における配偶者選択の実例を紹介するとともに、配偶者の進化を分析する理論を説明する。	同　上	同　上
10	配偶者防衛と雌雄の対立	性淘汰はこれまで、配偶者の獲得をめぐる同性間の競争と、配偶者選択をめぐる異性間のやりとりとの２本柱で論じられてきた。しかし、雄にとって有利な行動と雌にとって有利な行動とが一致するとは限らず、雌雄の対立がさまざまな場面で見られる。雄が、自分の配偶相手として獲得した雌を他の雄にとられないように雌の行動を制限する配偶者防衛も、そのような現れの一つである。	同　上	同　上
11	鳥のさえずりの進化をめぐって	美しい鳥のさえずりは、配偶者選択の結果として進化してきた。今回は、ジュウシマツのさえずりをめぐって、さえずりの生成をつかさどっている脳の働きやさえずりの学習のメカニズム、さえずりと配偶者選択、さえずりの系統進化と、さえずりについて「４つのなぜ」のすべての面を取り上げてみたい。	同　上	長谷川眞理子 岡ノ谷　一夫（千葉大学助教授）
12	配偶システム	一夫一妻、一夫多妻など、配偶システムを表す呼び名はたくさんある。しかし、動物の配偶システムは、その種に固有のものとして備わっているのではなく、雄の配偶戦略と雌の配偶戦略の妥協点として生じると考える方が真実に近い。どんなときにどのような配偶システムが生じるのか、いくつかの動物群について解説するとともに、配偶システムが、生態環境の変化に応じてどのように変化するかも検討する。	同　上	長谷川眞理子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	鳥類と哺乳類の配偶システムをめぐって	前回は、配偶システムの進化について述べたが、哺乳類と鳥類とでは、生理学的な特徴の違いから、配偶システムに関して、いくつかの大きな違いが見られる。それが何であるか、鳥類に固有の条件、哺乳類に固有の条件について、そして両者に共通する点について、論じてみたい。	長谷川眞理子	長谷川眞理子 上田　恵介（立教大学教授）
14	共進化と進化的軍拡競争	動物は、他種の動物や植物とさまざまな関係を持ちながら暮らしている。他の種は、捕食者であったり、餌であったり、競争者であったりする。それらに対して、ある種が行動を進化させると、相手の種は、それに応じて自らの適応度を上げるように、自分たちも行動や形態を変化させる。こうして、密接な関係を持っている種どうしは、互いに影響を及ぼしあいながら共進化していく。その様子を解説する。	同　上	長谷川眞理子
15	保全生態学に向けて	これまで、動物の行動と生態の関係を、さまざまな点から概観してきた。しかし、近年、地球環境の破壊によって、多くの生物が絶滅の危機に瀕しており、それらの保全のための緊急策が講じられている。行動生態学は、生物の保全の問題にどのように貢献できるのだろうか？これまでの成果とこれからの展望を考えてみよう。	同　上	同　上

＝細胞生物学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　永田　和宏（京　都　大　学　教　授）〕
〔主任講師：　森　　正敬（熊　本　大　学　教　授）〕
〔主任講師：　河野　憲二（奈良先端科学技術大学院大学教授）〕

全体のねらい

生命の基本単位である細胞は、それ自体ひとつのミクロコスモスである。おどろくべき巧妙な仕組みで、生命維持に必要なすべての装置を備えている。細胞の内部のさまざまの装置と、それらがいかに連絡しながら細胞社会を形成し、一個の個体を作っているか。また、細胞は分裂し、移動し、分化し、さらにがん化したり、細胞死さえプログラムされている。そのようなダイナミックな細胞の世界を分子のレベルで覗いてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	細胞とは何か	細胞には大きくわけて、原核細胞、真核細胞の区別がある。また、我々人間には、200 種類以上の細胞がそれぞれの組織や器官を形作っている。植物にはまた植物特有の細胞が存在する。それら細胞はどのように進化してきたのか。主として、細胞の種類と構造、そして進化について講義する。	永田　和宏（京都大学教授）	永田　和宏（京都大学教授）
2	細胞内部の構築	真核細胞の内部にはオルガネラと呼ばれる細胞小器官が発達し、それぞれ役割分担が決まっている。それらはどのようにして作られたと考えられているか、また個々のオルガネラの働きは何か。どの装置が欠けても細胞は生きていけないが、お互いにどのように助け合いながら、細胞としての生命を維持しているかについて講義する。	森　正敬（熊本大学教授）	森　正敬（熊本大学教授）
3	細胞で働く分子たち	細胞内では、高分子から低分子までさまざまな分子がそれぞれの役割を果たしている。核酸、脂質、炭水化物、ATP などの低分子、種々の金属イオン、アミノ酸やタンパク質など、個々の分子の構造と細胞内での役割について講義する。	同　上	同　上
4	タンパク質の合成	生命活動の基本はタンパク質である。遺伝子に組み込まれたタンパク質の情報が、いかに読み出されてタンパク質が作られるのか。DNA⇒（転写）⇒RNA⇒（翻訳）⇒ポリペプチドという、タンパク質の誕生までの過程を、細胞という場の中でリアルに体験できるよう講義をする。	永田　和宏	永田　和宏
5	タンパク質の機能と品質管理	タンパク質は、遺伝情報に従って、ポリペプチドに翻訳されただけでは機能を持つことができない。ポリペプチドは、正しく折り畳まれて正しい構造をとる、そして正しい場に運ばれて初めて、本来の機能を発揮する。細胞は、もしタンパク質が正しい構造をとりえなかった場合に、それらを処分したり、再生するような品質管理の機構を備えていることが明らかになってきた。	同　上	同　上
6	膜の構造と膜透過	細胞は膜によって囲われることによって、一個の生命を維持しているが、細胞内部においても、さまざまのオルガネラは、互いに膜によって区画されている。タンパク質をはじめとする種々の物質は、膜を通っていろいろのオルガネラに運ばれる。膜の構造、またダイナミックな膜の動きなどを学ぶ。	森　正敬	森　正敬

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	タンパク質の細胞内輸送と局在	タンパク質は作られた場から、それが機能する場へと輸送されなければならない。輸送には荷物の運搬と同じく、タンパク質にタグが付けられて輸送先が指定される。また、どこかのオルガネラにとどめるためにも、専用のタグが付けられてとどまる場所を指定される。このようなタンパク質の輸送と、輸送に働いているメカニズムを考える。	河野　憲二（奈良先端科学技術大学院大学教授）	河野　憲二（奈良先端科学技術大学院大学教授）
8	エネルギー変換とミトコンドリア	真核細胞においてエネルギーの供給は、ミトコンドリアにおいてなされる。ミトコンドリアのエネルギー供給に関する役割と、エネルギー物質であるATPが作られるまでの反応をわかりやすく解説する。また、ミトコンドリアDNAの構造とはたらきについて学ぶ。	森　正敬	森　正敬
9	細胞骨格	細胞内には複雑な繊維状骨格のネットワークが張りめぐらされている。これを細胞骨格と呼ぶ。細胞には3種類の太さの異なる繊維があり、微細繊維、中間径繊維、微小管と呼ばれている。これらは細胞の形を維持するだけでなく、細胞同士の接着や、細胞の移動や貪食、また、筋肉細胞においては筋収縮などを行っている。	永田　和宏	永田　和宏
10	細胞のシグナル伝達	細胞は、増殖、分化、がん化、細胞死などを誘導するさまざまのシグナルを受けとり、それに応答する。シグナルは、何段階ものカスケードを経て、最終的には遺伝子の発現を制御する。これらのシグナル伝達においては、分子のリン酸化が大きな役割を果たしている。このシグナル伝達のプロセスについて講義する。	河野　憲二	河野　憲二
11	細胞周期	生体中の細胞には、絶えず分裂を繰り返している細胞と、分裂は行わず休止している細胞がある。分裂細胞では、DNA合成と細胞分裂が繰り返され、その周期は厳密に調節されている。細胞周期の調節機構には、それに関わる分子のリン酸化や分解がきわめて巧妙に制御されているが、その調節機構について勉強する。	同　上	同　上
12	細胞分裂	細胞分裂は、染色体の凝縮から、その分配、そして二つの娘細胞へわかれるという過程を経てなされるが、染色体の分配には、微小管が、細胞分裂にはアクチンを主成分とする微細繊維がそれぞれ主役を演じている。それら細胞骨格タンパク質の機能を制御する機構が明らかになってきた。	同　上	同　上
13	細胞間のコミュニケーション	細胞は生体の中で、一個だけが孤立して存在しているのではない。細胞同士は互いに接着し、また細胞外マトリクスと呼ばれる微小環境と接している。これら細胞接着、細胞外マトリクスとの相互作用によって、互いに情報のやり取りをしている。細胞接着の方法と、その情報交換の機構について解説する。	高橋　淑子（奈良先端科学技術大学院大学助教授・理化学研究所チームリーダー）	高橋　淑子（奈良先端科学技術大学院大学助教授・理化学研究所チームリーダー）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	発生と分化	生体中のすべての細胞は、一個の受精卵から発生してきたものである。最初は、一個の細胞であったものが、分裂と分化を繰り返しながら、次第に性質を異にしたさまざまの細胞を作り、組織、そして器官を形成する。時間的・空間的に厳密にプログラムされた、発生・分化という複雑な現象のアウトラインを解説する。	高橋　淑子	高橋　淑子
15	がんと細胞死	細胞の増殖・分化の制御機構に乱れが生じ、細胞が異常な分裂を示すようになったものががんである。いっぽう、細胞はその役割を終えたとき、またある種の刺激が加わったとき、自らを殺す機構をも持っている。あるいは、発生の途中で不要になった細胞は死ぬようにあらかじめプログラムされ、アポトーシスと呼ばれる。がんと細胞死という細胞の生死に関わるふたつの側面について講義する。	永田　和宏 森　正敬	永田　和宏 森　正敬

＝進化する宇宙（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：　吉岡　一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

宇宙とその進化について、最新の知見に重点をおきながら論じる専門科目。宇宙がどのようにして始まり、進化して現在の多様性に富む宇宙になったかについて、その概要は共通科目の「宇宙とその歴史('04)」で述べられている。そこでは、そのような事柄を研究し解明することの意味と意義に重点がおかれているのに対し、この専門科目では宇宙の進化過程に現われるいろいろな天文現象についてその本性を解明すること、そこで起こっている物理過程を考慮しながら進化のドラマを構成することに重点をおく。そのため、全体の構成を星、銀河、宇宙の３つの階層に分け、それぞれの最先端における研究者が分担して講義する。天文現象を観測してそこから情報を読み取ることについては、これと並行して開設される「宇宙からの情報('05)」で詳しく議論される。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	進化する宇宙	宇宙がどのように始まり、進化してきたかを時間経過に沿って考える。それは宇宙に天体の階層構造が形成されてくる過程である。それをとおして、宇宙の構成について描像をつくり、それぞれの過程において何が問題になるかを述べ、この講義全体のための導入とする。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本　大一郎（放送大学教授）
2	宇宙の進化を論ずるための基礎法則	宇宙の進化を論ずるための基礎的な法則のうち、放射とミクロの世界に関する法則、運動に関わる法則等を解説する。また観測結果の整理によく使われる図表についても解説する。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
3	星の誕生と主系列星	恒星はどのようにして誕生するのか。また、太陽系のような惑星系や２つの星からなる連星系がどのようにして生まれるのかを解説し、恒星の光り輝く原因が水素の核融合反応によることを示す。見えない恒星の内部をどのようにして理解することができるかについても触れる。	蜂巣　泉（東京大学大学院助教授）	蜂巣　泉（東京大学大学院助教授）
4	恒星の進化と終末	恒星は時間が経つにつれてどのように進化するのか、その基礎を解説する。とくに、質量の比較的小さい中小質量星が赤色巨星へと進化し、ガスの一部を放出し、最終的に白色わい星になることが、散開星団や球状星団などの観測によって検証されることを示す。赤色巨星や白色わい星がどのような構造を持つかについても解説する。	同　上	同　上
5	超新星爆発と元素の進化	質量の大きい大質量星の進化とその最終段階としての超新星爆発について解説する。恒星の進化の過程をとおして恒星内部で合成された重元素が、超新星爆発をとおして宇宙空間に供給される。それが新しい星に取り込まれて現在の地球などで見られる元素組成になった。このような元素の化学進化について解説する。	同　上	同　上
6	連星の進化と終末	連星系は、その進化の途中で相手の星へガスを供給したり、また、相手の星からガスを受け取ったりすることで、単独星とは異なる進化の道を歩む。連星系における質量の交換を説明し、それが連星系の進化にどのような影響を及ぼすかを解説する。その結果、活動的な天体の多くが、ガスをやりとりする連星系であるとして説明可能なことを示す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	銀河系	私たちの住んでいる天の川銀河がどのような天体なのかをまず理解する。天の川銀河に存在する星やガス星雲、星団などの性質をあわせて理解する。銀河系の中心部に何があるかについても考える。天の川銀河の近傍の銀河についても紹介する。	谷口　義明（東北大学大学院助教授）	谷口　義明（東北大学大学院助教授）
8	銀河	色々な形態を持つ銀河の世界を探訪し、宇宙に存在する多様な銀河の存在を理解する。銀河の力学的性質を理解し、銀河の構造のバラエティについて理解する。宇宙の歴史の中で、銀河がどのように進化してきたかを理解する。集団としての銀河の性質は９章で述べるが、この章で銀河相互作用の重要性についてふれる。	同上	同上
9	銀河団	銀河が集団で存在している様子を調べる。銀河群、銀河団などを例にとり、銀河の集団としての特性について理解する。また、銀河はその存在している環境によって、どのような影響を受けるかについて考える。さらに、宇宙における銀河の空間分布の様子を一般的に調べ、宇宙における階層構造について考える。	同上	同上
10	活動銀河	銀河の中で発生する高エネルギー現象の現場を調べる。大質量星がバースト的に発生している銀河を調べ、それが銀河の進化に与える影響について考える。銀河中心核に巨大ブラックホールの存在によって、中心核から膨大なエネルギーが放出される現象がある。これらは活動銀河中心核と呼ばれるが、そのエネルギー放射のメカニズムについて考える。宇宙にはいろいろな種類の活動銀河中心核があるが、それらを統一的に理解する枠組みについても考える。	同上	同上
11	膨張宇宙	1915 年の一般相対性理論の誕生によって、宇宙全体の進化を数式によって記述することが初めて可能になった。一般相対性理論に基づくフリードマン宇宙モデルについて解説し、その進化が宇宙の物質の量などによって、どのように異なることになるかを見る。併せて、膨張宇宙の特徴である赤方偏移やハッブルの法則などについても述べ、宇宙膨張の観測的証拠についても紹介する。	杉山　直（国立天文台教授）	杉山　直（国立天文台教授）
12	ビッグバン	膨張宇宙を逆に辿っていくと、非常に高密度な初期宇宙であったことが想像される。ガモフによって考え出された高温、高密度であった宇宙初期の状態こそビッグバンである。ビッグバンとその観測的証拠である宇宙マイクロ波背景放射について解説し、宇宙の辿ってきた熱史を紹介する。	同上	同上
13	宇宙の階層構造	現在の宇宙は、惑星、星、銀河、銀河群、銀河団、そして宇宙の大規模構造と、非常に多様かつ階層的な構造を示している。ここでは、銀河より大きいスケールの構造がいつ、どのように膨張宇宙の中で形成されてきたかについて、数値シミュレーションの結果も交えて解説する。それらを、最新の観測成果と比較する。	同上	同上
14	宇宙の進化と運命	膨張宇宙の進化を決定づける物質密度、空間曲率、宇宙項などがどのように決められてきたかを解説する。とくに、宇宙マイクロ波背景放射の温度揺らぎや、遠方の超新星の探査などについて述べる。その結果、私たちの宇宙が今後どのような運命をたどるのかについて、見ていく。	同上	同上

回	テ　ー　マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	宇宙はなぜ進化する	これまでの講義では、宇宙がどのように進化し、現在の宇宙にどのような階層構造と多様性が実現されているかを見てきた。いっぽう物理学の一般的な理論によると、閉じたシステムのエントロピーは増大し、構造や多様性は消失する、すなわち物事は「進化」とは逆の方向に進むことになる。それにも関わらず宇宙が進化してきたのは何故であろうか、そこでどういうメカニズムが役割を果たしているのであろうか。このことに関する反省をとおして、非線形・非平衡の世界観に至る。	杉本大一郎	杉本大一郎

＝宇宙からの情報（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　吉岡　一男（放送大学助教授）〕
〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

宇宙に関する科学は実証科学であるから、現実世界としての宇宙を対象とする。そのためには、宇宙と天体から微弱なシグナルとしてもたらされる情報を、観測をとおして読み取らなければならない。それには広く物理系分野にわたる高度な技術と科学が用いられる。情報を担ってくる電磁波や粒子は、最近ではあらゆる波長帯や特性にわたって観測され、それぞれに固有な側面に対応して、広くかつ深く情報が取得される。この講義ではそれらに関する最新の手段と方法、それによって得られた知見について、それぞれの最先端における研究者に論じてもらう。ここで取り上げられる天体現象が宇宙の進化という文脈において持つ位置と意味については、これと並行して開設される「進化する宇宙('05)」の講義を参照されたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	宇宙の観測	宇宙を観測する際に、どのように広い物理パラメターの範囲と広いアスペクトから情報を得ようとしているか、また得られているかについて概観する。またそれらの特質について実験室科学の方法とも対比しながら論じ、この講義全体への導入とする。	杉本大一郎（放送大学教授）	杉本大一郎（放送大学教授）
2	観測のエネルギーバンド	宇宙からの情報を得るために、可視光だけではなく、電波からＸ線・ガンマ線に至る広範囲の電磁波が観測される。それは異なる波長が異なるエネルギーの光子に対応し、宇宙の異なる側面を示しているからである。ここでは、それぞれの波長の観測が宇宙のどのような側面について情報をもたらすかを、黒体放射の場合について解説する。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
3	観測の分解能	宇宙の観測は、空間・時間・波長等のいろいろな分解能のもとで行なわれる。本章では、それぞれの分解能がどのような意味をもち、また、観測装置のどのような性能によって決定されるかを解説する。さらに、分解能とＳＮ比等との関係についても述べる。	同上	同上
4	光と赤外線で宇宙を見る	可視光から赤外線で宇宙から情報を得るために必要な基本的概念として、望遠鏡の原理や光学系、シーイングなど説明する。赤外線について説明し、赤外線天文学の発展を概観する。眼視から写真へ、さらに２次元半導体検出器へとたどる光の検出器の発展を振り返り、半導体による光検出の原理を説明する。現在の大型光学望遠鏡で使用されている最先端技術について、すばる望遠鏡の例をふんだんに取り入れて解説する。	林　正彦（国立天文台教授）	林　正彦（国立天文台教授）
5	天体物理学の発展	星の色とスペクトル線など分光学的性質を述べ、スペクトル分類、ＨＲ図などを解説する。また、星間物質について簡単に触れる。続いて銀河の説明に入り、銀河の分類、活動する銀河などについて、すばる望遠鏡での観測例をもとに、基本的事項を解説する。それぞれの説明で、新しい観測技術が果たす役割を強調する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	星と惑星系	星の質量分布と褐色矮星について解説し、観測の視点から重要となるパラメータについて検討する。星と惑星系の形成に関するさまざまな現象について、すばる望遠鏡の観測データを中心に紹介する。最後に太陽系外惑星の探査に触れる。	林　正彦	林　正彦
7	宇宙の構造	ハーシェルの銀河系宇宙モデルから、銀河が遠方の星の集団だと認識され、宇宙の大規模構造の発見に至るまでの、人類の宇宙認識の発展について、すばる望遠鏡の成果を交えて解説する。その際、それぞれの段階で新しい観測と観測技術がもたらした役割を強調する。ハッブルによる宇宙膨張の発見と、ビッグバン宇宙論への発展について解説し、最近の新しい技術による超遠方銀河の探索から分かってきた成果を紹介する。	同上	同上
8	電波を見る宇宙	電波による宇宙の観測が始まってから70年が経過した。この間の電波の観測によって数多くの発見がなされ、宇宙の新たな描像が明らかになり、認識が格段に深まった。この歴史を振り返りながら、電波による観測の特長や、観測の原理について解説する。	川辺　良平（国立天文台教授）	川辺　良平（国立天文台教授）
9	電波で探る宇宙の爆発・活動現象	電波の観測により、宇宙におけるさまざまな爆発現象、活動的な現象が明らかにされ、ダイナミックな宇宙の姿が解明されてきた。ビッグバン宇宙の証拠となる宇宙背景放射や、巨大ブラックホールの電波観測や、電波銀河、超新星残骸、さらには、太陽活動などについて解説する。	同上	同上
10	電波で探る星間物質	星間物質の中でも低温ガス雲の構造や進化について概観する。とくに、星や惑星の材料となる、塵や分子ガスからなる低温の分子雲やその化学的な性質、分子雲の銀河系内部での分布などについて得られている知見を述べる。このような知見は高分解能による電波スペクトルの観測をとおして得られたものであることを強調する。	同上	同上
11	電波で探る天体の形成史	最近の電波観測により、星・惑星系の形成領域の観測や原始銀河の観測が飛躍的に発展してきた。ここでは、電波観測によって得られた天体形成の描像について解説する。このように比較的密度の高いガス雲の内部までの観測は同位元素を含む分子の電波スペクトル観測によって可能になった。	同上	同上
12	X線天文学～熱い宇宙の探査Ⅰ～	可視光の千分の1以下の波長のX線は、高いエネルギーを持った粒子や1千万度を超える高温の領域から放射される。X線は地球大気に遮られるため、ロケットが使えるようになった1960年代初めてX線天体が発見された。これらは中性子星／ブラックホールを持つX線連星であり、そこへ落ちていくガスの重力エネルギーが、X線で光り輝くことが分かってきた。初期の観測技術と、ブラックホールの発見に至る研究の流れを述べる。	國枝　秀世（宇宙科学研究所教授）	國枝　秀世（宇宙科学研究所教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	X線天文学～熱い宇宙の探査Ⅱ～	1980年頃からX線望遠鏡の導入で、新たにX線の像が得られるようになり、天体の情報が格段に広がった。この望遠鏡の特徴の説明と、これによる超新星残骸や銀河団と言う、高温ガスを抱えた天体について分かってきたことをまず示す。次に望遠鏡の高い感度で見えて来た、遠方の銀河中心核の巨大ブラックホールの観測結果から、ブラックホールの強い重力場の証拠を示す。また、こうしたブラックホールの進化の流れも説明する。	國枝 秀世	國枝 秀世
14	硬X線・ガンマ線天文学	熱い宇宙の放射する軟X線（<10keV）よりも高いエネルギーの硬X線、MeV,GeVのガンマ線は、宇宙の高エネルギー粒子のシンクロトロン放射や原子核の相互作用を反映する。まず硬X線・ガンマ線と物質の相互作用についてまとめ、その発生と検出の原理を説明する。そして、新しい望遠鏡の試みなど衛星搭載機器や、TeVを越えるガンマ線の大気中の発光を地上で捉える観測システムの説明を行う。天体としては通常のガンマ線天体の他に特に、最近進展のあった、ガンマ線バーストを取り上げる。	同上	同上
15	電磁波以外による宇宙からの情報	宇宙を探る窓は全ての波長の電磁波に及んだ。その他には、銀河系の磁場などに曲げられない、超高エネルギーの宇宙線や、物質と相互作用しにくいニュートリノ、重力波が、宇宙の情報を直接もたらす。ここでは、宇宙線が大気と相互作用で作る荷電粒子のシャワーを検出する装置や、ニュートリノが大きな水槽の中で作る発光をとらえる装置、重力波によるわずかな場のゆがみを検出する装置などの原理と現在の到達点を示す。	同上	同上

＝天体物理学入門（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　吉岡　一男（放送大学助教授）〕

全体のねらい

本科目では、天体についての知見が観測から理論を介して求められる具体的な過程の理解を目ざしている。そのために、主として恒星の可視域の観測を例にとり、その運動や半径・質量や温度・圧力あるいは化学組成等が求められる過程を、演習を交えて解説する。これらの知識は、他の天文現象の理解の基礎にもなっている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	天球座標と年周視差	まず、15 回の講義の流れについて概観する。ついで、天球の概念と天球上での天体の位置を表す天球座標について学ぶ。最後に、恒星の直接的な距離を与える年周視差について学ぶ。	吉岡　一男（放送大学助教授）	吉岡　一男（放送大学助教授）
2	固有運動と視線速度	まず、天球上での天体の動きを調べ、その要因として年周視差以外に固有運動等があることを学ぶ。ついで、天体の視線上の動きを表す視線速度とその測定法について学ぶ。さらに、恒星の宇宙空間内での運動を概観し、最後に太陽の運動を学ぶ。	同　上	同　上
3	永年視差と統計視差	年周視差とともに幾何学的関係を利用して直接的に恒星の距離を測定する方法を学ぶ。これらの方法は恒星の集団に対して適用され、太陽運動を利用したり、恒星の集団の系統的な運動を利用する。	同　上	同　上
4	等級と色指数	天体の明るさは等級で表される。ここでは、等級の定義とその測定方法について学ぶ。等級には見かけの等級と絶対等級の区別があることや、測定される波長域による区別もあることを学ぶ。さらに、色指数についても学ぶ。	同　上	同　上
5	連星とその種類	連星は、２個の恒星が互いの重力で互いのまわりを公転している天体である。多くの恒星が連星の形で存在している。連星は、質量をはじめとして恒星のさまざまな物理量の情報源となっている。ここでは主に連星の公転運動やその種類について学ぶ。	同　上	同　上
6	実視連星と分光連星の解析	ここでは、天球上に投影された動きに基づく実視連星の解析と視線速度曲線に基づく分光連星の解析方法について学ぶ。これらの天体の解析により、公転軌道や質量に関する情報が得られる。これらの情報は、視線速度曲線の得られる実視連星の場合にはさらに豊富になる。	同　上	同　上
7	食連星の解析	ここでは、連星の解析の続きとして光度曲線に基づく食連星の解析方法について学ぶ。食連星の解析により、星の表面輝度や半径等、他の種類の連星では得られない情報も得ることができる。視線速度曲線の解析も合わせるとさらに豊富な情報が得られる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	恒星のスペクトルと表面温度	恒星はそのスペクトルの特徴をもとにスペクトル型に分類されている。また、恒星の表面温度はその放射エネルギー分布をもとに求められる。ここではそれらについて学ぶとともに、スペクトル型と表面温度の関係や表面温度と色指数との関係についても学ぶ。	吉岡　一男	吉岡　一男
9	HR図と恒星の分類	横軸に表面温度を目盛り、縦軸に等級を目盛ったHR図は、恒星の研究に重要な役割を演じてきた。ここでは、HRが導かれた歴史も交えてHR図に基づく恒星の分類について学び、その有用性を示す。	同　上	同　上
10	太陽の年齢とそのエネルギー源	太陽は46億年もの間、現在とほぼ同じ明るさで輝いてきた。この太陽のエネルギー源が水素の核融合のエネルギーであることを、太陽の年齢が推定されてきた過程とともに学ぶ。	同　上	同　上
11	恒星の内部構造の決定	現在、恒星の内部構造についてかなりのことが知られている。ここでは、恒星の内部構造がどのようにして求められているかを、主系列星を例にとって学ぶ。また、恒星の中心部の物理量の概算を試みる。	同　上	同　上
12	恒星の表層構造と化学組成の決定	われわれが直接に受け取る恒星からの放射は、恒星の表層から来たものである。ここでは、恒星の表層構造がどのようにして求められるかを、主系列星を例にとって学ぶ。また、恒星のスペクトルの観測から表層の物理量や化学組成の情報がどのようにして得られるかも学ぶ。	同　上	同　上
13	恒星の進化とその特質	恒星では、原始星が主系列星となり、さらに主系列星が巨星・超巨星に進化していく。それ以降は誕生時の質量により白色矮星や超新星として最後をとげる。ここでは恒星の進化を順を追って学び、なぜそのような進化をするかについても考察する。	同　上	同　上
14	天体の諸量の決定	ここでは、恒星やそれ以外の天体の距離や半径等の幾何学的量や温度等の物理量の求め方について学ぶ。その中にはすでに学んだ方法も含まれるが、ここではそれらを含めて系統的に整理しておく。	同　上	同　上
15	恒星以外の天体の特徴とその解析	最後にここで星間物質等、恒星以外の天体の特徴とその解析方法を恒星の場合と対比させて学ぶ。本章を学ぶことにより、天体一般について、知見が得られる過程についてある程度のイメージが得られるであろう。	同　上	同　上

＝日本列島の地球科学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長）〕
〔主任講師：　福田　正己（北海道大学教授）〕

全体のねらい

日本列島の形質は、地球の歴史の中で育てられてきた。しかも地殻の激動の場からの産物である。赤道直下に近い熱帯サンゴ礁地帯であった部分が、プレート・テクトニクスによって北上し、アジア大陸の東縁と衝突して誕生した結果であることを、周辺の海域を含めた幅広い地球科学の眼でたどってみる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	列島の特徴	日本列島とその周辺の、海水をとり去った結果の大地形を概観し、プレート・テクトニクスによる変動帯として成長してきた諸々の特徴を、グローバルな構造論の立場を通して理解する。	濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長） 福田　正己（北海道大学教授）	濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長） 福田　正己（北海道大学教授）
2	列島の地質構造	日本列島は、複雑な地殻変動の重なりとして形成されたので、現在見られる地質構造も複雑である。プレート衝突場の特徴として、変成帯と非変成帯とが繰り返し配列していたり、火山が帯状に連なるなど、豊かな歴史を反映したものであることを理解する。	濱田　隆士	濱田　隆士
3	列島の気象	現在の日本列島は、北半球中緯度で西に日本海を隔ててアジア大陸に向かい合い、ほぼ南北に細長くのび黒潮・親潮という二大海流に囲まれ、さらに東は太平洋に面しながら、北半球の偏西風帯に位置する。この配置が季節毎に特徴的な気象をもたらすことを理解する。	同　上	同　上
4	列島をめぐる海	日本は、海洋国・臨海国家と呼ばれるのに相応しい。海洋とは、ただ単に水をたたえた広大な低地というだけはない。地球の自転運動により、太平洋の西縁に当たる日本列島近辺の海水は特異な運動をとるようになっていることを理解する。	同　上	同　上
5	島弧プレート運動	日本列島は、グローバル・テクトニクスとしてのプレート運動によってでき上がった。地球表層部にはプレートがどのように配置され、どのような動きをしてきたのか、列島形成の原動力になった地殻運動のモデルを検証する。	同　上	同　上
6	列島周辺の海底	海の歴史は、海底の地形と地質、そしてその形成年代が語ってくれる。海底の歴史は、プレートのどの位置を占めるかで大きく異なる。列島地形や地質構造との調和のとれた配列が、海底の相対的な動きを示していることを理解する。	同　上	同　上
7	地震活動	変動帯に位置する日本列島には、過去・現在そして未来を通じ、地震・断層運動が激しい。地震とそれによって起こされる地震災害は、日本列島のもつ宿命であることを理解し、地震対策の現況をも併せ理解する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	火山活動	伊豆大島や雲仙普賢岳だけが火山ではない。日本列島は、プレートの接し合う場として、地震帯と火山帯とが併存しているので、地質時代から現在に至るまで、多数の火山活動が起こって現在の地形・地質を形成していることを理解する。	濱田　隆士	濱田　隆士
9	地史（1）古生代	日本列島の基礎をつくり上げた古生代やそれ以前の地層が語る歴史はまさにグローバルで、アジア大陸の要素と、今は消え去った南海のパシフィカ大陸要素との出会いにある。化石の語る古生代地理を考え、ダイナミックな列島形成史前半を理解する。	同　上	同　上
10	地史（2）中生代	日本列島形成史に占める中生代の位置は特別である。かつては古生代のものと思われてきた秩父帯のかなりの部分が中生代前半の形成によることが明らかとなり、列島史は大きく塗りかえられてきている。恐竜化石の産出は、大陸とのつながりを示すものと理解できる。	同　上	同　上
11	地史（3）新生代	日本列島がほぼ現在の姿になる、いわば仕上げの時代であり、火山活動、隆起・沈降運動も激しかった。したがって侵食力も強く、堆積作用も大きかったので、山脈・半島・平野の形成期となり、海流系も安定化してきた時代であることを理解する。	同　上	同　上
12	地下資源	小さな島国の日本は、多種大量の資源を外国に依存している。そのような中で、日本の地史を反映した鉱化作用・地下資源鉱床の形成もあった。石灰岩やヨードなどのみが完全自給型地下資源であることを理解し、エネルギー資源には乏しい実情をみつめる。	同　上	同　上
13	多島海型自然環境	日本は島国といわれるが、それはただ列島をなしているということだけでなく、大小様々の島々を抱えた多島海的自然環境下にある、ということに他ならない。わが国の気候・風土・産業・文化へもその影響が大きいことを理解する。	同　上	同　上
14	日本の地球科学の進展	日本列島の歴史が複雑な分、その研究史も多彩である。輸入文化として始まった系統的な日本の地球科学を認識し、それが時と共に消化・吸収され、今では日本からならではの地球科学が、世界に向けて発信される時代となった発展の経緯を概観する。	同　上	同　上
15	人と暮らし	日本列島の歴史の主役が大陸系と南方系であったことに似て、日本列島での人類発展史・生活型にも、南方型と大陸型とがある。自然環境に見合った風土が形づくられてきた縄文・弥生時代以降、次第にグローバル化も混じ、現在ではヒトと自然の接点が変容を遂げた。	濱田　隆士 福田　正己	濱田　隆士 福田　正己

＝流体的地球像（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：福田　正己（北海道大学教授）〕
〔主任講師：濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長）〕

全体のねらい

今新しい地球観が生まれつつあります。　最新の地球科学の研究成果は、揺るがぬ大地という固体的な地球から、流れる地球として捉え直しています。　ダイナミックに変動する地球の、流体的な性質に着目しながら、新しい地球観を多面的に紹介します。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	有為転変の地球観 －流体的地球－	地球は絶えず変動し続けています。　一見動くことのないと思われる大地も、長い地球の歴史をひもとくと、それが流れるように変化し続けていることに気がつきます。　地球を包む大気から陸水・海洋そして地球内部まで、その流れの特質と相互作用について、流体的地球を探ってみます。	福田　正己（北海道大学教授） 濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長）	福田　正己（北海道大学教授） 濱田　隆士（(財)日本科学協会理事長）
2	大気の脈動 －大気大循環－	地球を取り巻く大気は、高度ごとにその流れの性質が異なっています。　宇宙空間から地球を眺めると、大きく脈動するように循環する大気の流れが見えます。　地球上の様々な気候を生みだし、また地球表面に影響を与える大気の流れを階層分けしながら俯瞰します。	福田　正己	福田　正己
3	大気の息づかい －対流圏と成層圏－	流れる雲は、どのように成長しまた消滅するのでしょうか。噴き上がった火山灰はどこにながれてゆくのでしょうか。極地で拡大しつつあるオゾンホールはなぜ形成されるのでしょうか。　大気圏での異なる規模の渦や流れ、そして大気の運ぶ物質について可視化しながら学習します。	同　上	同　上
4	海は流れる －海洋大循環－	遠い南の島からの便りが、海辺にうち寄せられます。　それは椰子の実であったり、貝殻であったり様々です。　また海の流れは表面だけでなく、海底下でも地球を循環しているのです。　こうした流れは地球の多様な気候をも生み出します。	同　上	同　上
5	海は語る －古海洋学－	海底に堆積した貝殻やプランクトンなどを取りだし、詳しくその組成を調べてゆくと、海がどのように変化してきたかを解読することが出来ます。それはちょうど磁気記録されたカセットテープやビデオテープを再生するように、過去の海の環境変化を再現するのです。	同　上	同　上
6	大地を刻む －河川の働き－	数 100ｍも切り立った崖は、河川が大地を荒々しく削り取った結果です。　河川はたえず大地を刻んできました。また河川は土砂を運搬し、扇状地や段丘を造り、あるいはデルタ地形を海へ広げます。 また水の循環の重要なパイプとしても働いています。	同　上	同　上
7	碧い湖と見えない河川 －湖沼と地下水－	地球のいたるところに貯留された水が分布します。そこは特異な生態系とまた豊かな自然環境が成立しています。　また水資源として重要な役割を担う地下水に、着目しながらその働きと特徴を捉えなおして見ます。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	流れる氷 －氷河と氷床－	硬い氷は予想を超えた速度で流動します。　山岳から流れ下る氷河は、大地を削り取り、特異な地形を造り出します。また白い大陸（南極）は、巨大な氷床で長い間覆われてきました。　深くまで掘削して得られた氷には、太古の空気が閉じこめられています。最新の氷の分析結果は、どのような過去の気候変動を示してくれるのでしょうか。	福田　正己	福田　正己
9	凍てついた大地 －永久凍土－	地球の陸地の約15%は、年間を通じて凍結したままになっています。この永久凍土には、過去に生息していたマンモスが凍結保存されています。　また永久凍土地域は、世界最大の森林（タイガ）が形成されています。　そこでの変動は、地球温暖化に大きな影響を与えつつあります。	同　上	同　上
10	地球の鼓動 －地球内部ダイナミックス－	地球内部は沸騰する水のように、灼熱状態に保たれています。それは大陸を移動させ、また高熱が地上に露出して火山活動を引き起こします。　地中深くで発信されたシグナルから、地球内部の動きを推定してみます。	同　上	同　上
11	噴き上がる地球の息吹 －火山活動－	日本列島は、火山列島でもあります。　地球内部の動きに起因して、火山は活発化し、やがて噴火します。繰り返される火山噴火とそれが人々の暮らしに与えた影響について、北海道有珠火山を例に挙げ、火山との共生への道を探る様子を報告します。	同　上	同　上
12	裂ける大地・揺れる大地 －断層と地震－	地下に蓄えられたエネルギーは、突然大地を引き裂きそして大きく揺らします。　日本列島に暮らす我々にとって、宿命的な断層と地震について、その観測最前線をレポートします。	同　上	同　上
13	極北の旅人 －先史モンゴロイドの移住・拡散－	我々日本人の祖先はいつどこから来たのでしょうか。遙か極地シベリアに活躍した先史モンゴロイドの寒さへの適応戦略が、あのマンモスを滅ぼしたのです。　その壮大な旅を辿ってみます。	同　上	同　上
14	だれが地球を熱くしたのか －地球温暖化－	膨張する人類の生産活動は、地球を温暖化させています。極地ではその温暖化の兆候が真っ先に表れてきます。　このまま温暖化が進行すると、海面はどれだけ上昇するのか。温暖化予測についての、最新の研究を紹介します。	同　上	同　上
15	新しい地球観 －流体的地球－	地球を他の惑星と比較し、その違いを一言で表現するなら、それは「流れること」にあります。　大気から陸面・海洋そして地球内部まで、地球は絶えず流動しているのです。　この講義のまとめとしてもう一度各階層毎に「流れる」地球を俯瞰してみます。	福田　正己 濱田　隆士	福田　正己 濱田　隆士

＝　学校経営と学校図書館（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　渡辺　信　一（同志社大学大学院教授）〕
〔主任講師：　天道　佐津子（（社）全国学校図書館協議会理事）〕

全体のねらい

学校図書館にかかわる基本的な事柄について理解をはかる。司書教諭の資格取得に資する科目、５科目のうちで最初に履修すべき、入門的で幅広い内容をめざす。すなわち、学校図書館のもつ理念を明らかにし、その沿革の流れの中で学校図書館法の制定と改正の意義を取り上げ、さらに教育行政と学校図書館、管理と運営、図書館活動、学校図書館メディアとその選択・提供、施設・設備と備品、そして学校図書館経営の責任者としての司書教諭の任務と役割、養成と研修などについて概観し、全般的な理解を深める。また、倫理綱領や知的自由、学校司書、公共図書館との連携協力やネットワーク、学校図書館とコンピュータ、評価と改善などにも言及する。同時に今日的な課題にも触れ、将来への展望から発展へと導きたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	学校図書館の理念と教育的意義	学校教育における学校図書館の果たす役割を明らかにし、学校図書館の教育的意義と理念など、学校図書館に関する基本的な理解を深める。	渡辺　信一（同志社大学大学院教授）	渡辺　信一（同志社大学大学院教授）
2	わが国の学校図書館：その歴史的経緯	わが国の学校図書館について、その沿革と歴史的経緯について述べる。特に戦後における学校図書館法について、その成立と改正に言及する。	同　上	同　上
3	教育行政と学校図書館	学校教育法と学校図書館法、社会教育法・図書館法と学校図書館、教育サービスとしての学校図書館施策（国・地方自治体）など、学校経営と学校図書館を取り巻く行政上、法制上のかかわりや仕組みについて、またその基本的な理念や法解釈、そして現実の課題もとりあげて論じる。	大場　滋（日本体育大学講師）	大場　滋（日本体育大学講師）
4	学校図書館の経営	校内組織の中の学校図書館の位置づけ、学校図書館経営のための組織及び方針、経営計画の立案と実施、学校図書館担当の教職員、予算、施設と設備、メディアサービス、学校図書館環境の設備、情報ネットワークの中の学校図書館経営などについて論じる。	天道佐津子（（社）全国学校図書館協議会理事）	天道佐津子（（社）全国学校図書館協議会理事）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	学校図書館の施設、設備および備品	施設、設備、備品の重要性について述べる。児童・生徒にとって学校図書館が快適に学べる環境であるよう、基本的理念の裏打ちと利用する立場からの視点を重視して、楽しく読書し、心地よく効果的な学習スペースを取り上げる。	岩崎　れい（京都ノートルダム女子大学専任講師）	岩崎　れい（京都ノートルダム女子大学専任講師）
6	学校図書館メディアの選択と管理、提供（1）	学校図書館におけるメディアとは何か、をまず取り上げ、学校図書館メディアの教育的意義、学校図書館メディアの内容と構成、学校図書館メディアの選択と収集、学校図書館メディアの管理と提供など、学校図書館の経営的視点からも論じる。なお、ここでは印刷メディアを中心に論じる。	天道佐津子	天道佐津子
7	学校図書館メディアの選択と管理、提供（2）	上記（1）に加えて、ここでは非印刷メディアを中心に論じる。	天道佐津子 戸田久美子（同志社国際中学・高等学校コミュニケーション・センター司書）	天道佐津子 戸田久美子（同志社国際中学・高等学校コミュニケーション・センター司書）
8	司書教諭の任務と役割	司書教諭は、メディアの専門家、学校図書館活動の推進者、学校図書館経営の中核としての活動が求められる。そのための司書教諭の任務と役割について、広い視野から論じる。	天道佐津子	天道佐津子
9	司書教諭の養成と研修	学校図書館においては、とりわけ人とその栄養が大切な基盤となる。そのような観点で養成と研修、その現状と課題、そして学校図書館事務職員の使命とその倫理について論じる。	渡辺　信一	渡辺　信一
10	学校図書館の活動	学校図書館活動は教職員、児童・生徒を主な対象とする。ここでは教育計画と学校図書館、学校図書館活動の内容と方法、学校図書館活動の拡大などを論じる。併せて学校図書館の地域開放や著作権問題にも触れる。	天道佐津子	天道佐津子
11	司書教諭／図書館担当職員の活動（小学校）	学校図書館スタッフの構成と分担、学習指導的な活動、読書指導的な活動、図書館が学校全体に働きかける活動、読書指導的な活動、図書館が学校全体に働きかける活動、調べ学習、ストーリーテリング・絵本の読み聞かせ・ブックトークなどのほか、小学校特有の活動や課題について論じる。	天道佐津子 林　容子（浜松市立上島小学校司書教諭）	天道佐津子 林　容子（浜松市立上島小学校司書教諭）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	司書教諭／図書館担当職員の活動（中学校・高等学校）	学校図書館の授業に対する支援を中心に中学・高等学校における学校図書館活動を紹介する。問題解決学習の導入により学校図書館が重要性を増す課程をたどり、司書教諭の役割や司書教諭によって行われる活動内容の変容を中心に論じる。	渡辺　信一 家城　清美（同志社女子中学・高等学校司書教諭）	渡辺　信一
13	図書館協力とネットワーク	高度情報通信社会においては、情報ネットワークを組んだ図書館間の相互協力による資料や情報の提供が重視される。図書館相互協力／ネットワークの理念と学校図書館；情報ネットワークの形成とリソースシェアリングの重要性、そして学校図書館と公共図書館との連携・協力について論じる。	柴田　正美（帝塚山大学教授）	柴田　正美（帝塚山大学教授）
14	学校図書館の評価と改善	学校図書館の評価の意義とその方法、経営・活動・管理・調査・統計などの評価の実際、および改善計画など、学校図書館経営全般の評価と改善について論じる。	天道佐津子	天道佐津子
15	研究および課題と展望	学校図書館の研究の領域や方法、そして、専門職として社会的評価につながるという観点からも不断の研修や研究の必要性、そして課題と展望、研究に必要な基本的文献についても言及する。	渡辺　信一	渡辺　信一

＝学校図書館メディアの構成（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　高鷲　忠美（八洲学園大学教授）〕
〔主任講師：　志保田　務（桃山学院大学大学教授）〕
〔主任講師：　北　　克一（大阪市立大学教授）〕

全体のねらい

学校図書館の「読書センター」機能、「学習情報センター」機能を十分に発揮するためには、図書を初めとする印刷メディア、CD,ビデオなどの視聴覚メディア、電子メディアなどが十分に備えられ、検索可能な状況であることが不可欠である。このために、世の中に存在するメディアの中から学校図書館活動にとって必要なものを選択、収集し、これらを有効・適切に利用者（児童生徒、教職員）に利用してもらうための資料・メディア組織の活動を行う。本科目では、この活動をなるべく具体的に述べる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	学校図書館メディアの構成：資料の選択・収集・組織化	学校図書館の活動が十分に行われるためには、十分な数の質の良いメディアの存在が不可欠である。構築のための様々な作業や、メディアを生かすメディア組織化の業務を図書館活動全体の視点から概説する。	高鷲　忠美（八洲学園大学教授） 志保田　務（桃山学院大学教授	高鷲　忠美（八洲学園大学教授） 志保田　務（桃山学院大学教授）
2	学校図書館メディアの種類と特性	学校図書館メディアの種類と、それぞれの特性およびそれらを学習にどう生かすかを述べる。	平井　尊士（兵庫大学情報科学センター専任講師） 志保田　務	平井　尊士（兵庫大学情報科学センター専任講師） 志保田　務
3	学校図書館メディアの選択と収集	学校図書館メディアの選択と選択のための情報源の種別とその活用について述べる。続けて、学校図書館における学校図書館メディアの収集方針と選択方針について述べる。	志保田　務 高鷲　忠美	志保田　務 高鷲　忠美
4	メディアの配列１：書架（配架）への案内	図書館入り口には館内閲コーナーへの案内が掲示される。また、書架ごとに、配架されているメディアの分野などが表示される。各メディアには保管されている書架などを示す記号（所在記号）をラベルなどを添付して表示する。学校図書館でのサイン計画や所在記号や別置記号の役割と実際を取り上げる。	志保田　務	志保田　務

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	メディアの配列2：主題別配架：分類配架	通常の図書に対して採用の主題別配架、分類別配架の意義を考え、図書分類表の各種について概観する。その上で現在日本の分類作業で標準的に使用されている『日本十進分類法』（NDC新訂9版、1995年）についてやや詳しく説明する。	志保田　務	志保田　務
6	メディアの配列3：日本十進分類法	NDC新訂9版における第一次区分（類）、第二次区分（綱）の全部と第三次区分（目）の一部を示し、簡略な分類演習を行う。学校図書館での分類の精粗についても考える。	志保田　務	志保田　務
7	メディアの配列4：所在記号の表示から配架作業へ	分類記号、図書記号などから構成される所在記号の決定と資料・メディアおよび目録記入への表示の実際を説明し、利用しやすい配架作業の実際を述べる。	志保田　務	志保田　務
8	目録の意義・種類と機能	学校図書館活動において「目録」がどのような意義を有しているのか、また物理的形態、アクセス・ポイントからみた目録の種類を説明する。されに、現在図書館の多くは、目録作業に使用するデータを図書館外の機関に依存している。外部機関の活動の種類と役割について概説する。	高鷲　忠美	高鷲　忠美
9	目録規則と記述、アクセス・ポイントの実際	目録作業の基礎となる目録規則の歴史などを簡略に説明し、日本の代表的な目録規則である『日本目録規則1987年版改訂2版』(NCR1987R)による記述の作成、アクセス・ポイント（標目）の選択について説明する。また、目録の配列の原則を簡単に説明する。	高鷲　忠美	高鷲　忠美
10	コンピュータ目録1：書誌レコードの作成	コンピュータ目録における書誌レコード(目録記入)の内容とその実際を取り上げる。併せて、書誌レコードから用意される検索用索引について取り上げる。併せて、コンピュータ目録に特有の索引についても触れる。	志保田　務 北　克一(大阪市立大学教授)	志保田　務 北　克一(大阪市立大学教授)
11	コンピュータ目録2:コンピュータ目録の検索	コンピュータ目録検索の仕組みについて、解説をする。一般のコンピュータ目録が提供している「簡易検索」と「詳細検索」の相違を述べる。併せて、検索結果の表示方法や結果の加工などの便利な機能についても述べる。	志保田　務 北　克一	志保田　務 北　克一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	主題からの目録検索１：分類目録	主題からメディアを検索することの意義を説明し、分類記号からの検索の特徴と限界を述べる。	北　克一	北　克一
13	主題からの目録検索２：件名目録	主題を言葉から検索する手段としての件名目録の意義、特性を「調べ学習」などと関連づけて概説する。件名作業には『基本件名標目表』(BSH 第４版、１９９９年)を用いるので、この特徴、使い方を述べる。	北　克一	北　克一
14	コンピュータ目録と地域の図書館の連携	図書館業務全般にコンピュータが使用されるようになってきた。メディア組織化の分野でもコンピュータ目録が定着してきた。さらに公共図書館と学校図書館の連携による地域総合目録の構築や資料の物流体制も整ってきた。現状と将来のあり方を展望し、学校図書館におけるコンピュータ使用について考える。	北　克一	北　克一
15	学校図書館の機能を支えるメディア組織化の役割	現在の学校図書館の学校図書館メディアおよびメディア組織化の現状を考える。その上で、学校教育に活用されるメディアの選択・収集・組織化について考える。	高鷲　忠美 志保田　務 北　克一	高鷲　忠美 志保田　務 北　克一

＝学習指導と学校図書館（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　高橋　元夫　（慶應義塾大学非常勤講師）〕
〔主任講師：　堀川　照代　（島根県立島根女子短期大学教授）〕
〔主任講師：　平久江　祐司（筑　波　大　学　助　教　授）〕

全体のねらい

教育課程の展開に寄与し、児童生徒が学ぶ力を育むことが学校図書館の重要な目的であることを認識し、そのために学校図書館が実施しなければならないことを具体的に把握する。

本科目では、まず、教育課程と学校図書館のかかわりを縦覧し、図書館活用教育のあるべき姿を検証する。次に、図書館と図書館メディア活用能力育成の意義を知り、指導内容、指導方法を学習する。

さらに、総合的な学習、および、特別支援教育における学校図書館メディアの活用や、教授・学習活動を支援する情報サービスについて、多くの事例を通して理解を深める。

回	テーマ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育課程と学校図書館	学校図書館の意義、目的を確認し、学校図書館の教育課程の編成へのかかわり、学校指導の展開に寄与する姿を明らかにする。また、学校図書館メディアの選択に際し留意すべきことを検討する。	高鷲　忠美（八洲学園大学非常勤講師）	高鷲　忠美（八洲学園大学非常勤講師）
2	図書館活用教育と学校図書館	主体的な学習者を育てるためには、図書館活用教育が必要である。では、図書館活用教育はどのように実施されるのか。そのありようを検証し、学校図書館の果たす役割を把握する。	同　上	同　上
3	学校図書館メディア活用能力の育成	図書館活用教育の核となるのは、メディア活用能力の育成である。では、メディア活用能力とは何か。その育成はどのように行われるのか。実践を踏まえてメディア活用能力の育成過程を検証する。	平久江　祐司（筑波大学助教授）	平久江　祐司（筑波大学助教授）
4	学校図書館メディア活用能力の育成計画	学校図書館メディア活用能力の育成は、学校の教育目標に基づいて計画的に進められる。その計画は、学校全体の計画として作成され実行される。ここでは計画立案の具体的過程を学習する。	同　上	同　上
5	学校図書館メディア活用能力育成計画の実施	できあがった計画案は、どのように実施されるか。ここでは実施の機会、時間のとり方、指導方法や手段、などについて学習する。また実施にあたっては、多くの人々の協力が必要である。その協働のようすも見てもらう。	高橋　元夫（慶應義塾大学非常勤講師）	高橋　元夫（慶應義塾大学非常勤講師）
6	図書館および図書館メディアの使い方の指導	児童生徒には図書館になれてもらうとともに、図書館のしくみや使い方を指導することになる。そこで、図書館や図書館メディアを上手に使ってもらうために指導すべきこととその方法を学習する。	同　上	同　上
7	情報・資料の探索・収集	情報・資料を効率よく探索するためには、テーマの絞込みやキーワードの設定の仕方を学ぶことが必要である。ここでは、それらの指導方法に触れ、情報・資料を探すためのいろいろな道具（書誌や索引）について学ぶ。	堀川　照代（島根県立島根女子短期大学教授）	堀川　照代（島根県立島根女子短期大学教授）

回	テーマ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	情報・資料の利用	入手した情報・資料のなかから、必要な情報を取り出す方法（要約、抜き書き、引用）の指導について考え、辞書、事典、図鑑、年鑑などの参考図書の使い方、インタビューの仕方やインターネットの利用法について学ぶ。	堀川　照代	堀川　照代
9	情報・資料のまとめ・伝達・評価	取り出した情報を整理・分析して組み合わせ、自分の考えを加えて新たな情報として発信するという、情報活用の最終段階について考える。さらに、情報活用のプロセスとその成果を評価することを学ぶ。	同　上	同　上
10	学習指導における学校図書館の活用	実際の学習指導の中での学校図書館の活用法を学習する。まず、図書館メディアと学習指導のかかわりを検証する。そのあとで、学習指導における支援活動を紹介する。	平久江　祐司	平久江　祐司
11	小学校における総合的な学習と学校図書館	小学校における総合的な学習と学校図書館のかかわりを検証する。学校図書館は総合的な学習の展開に欠くことのできないサービス機関である。一方学校図書館メディア活用能力育成指導の立場からしても、学校図書館は重要な役割を果たす場となる。低学年の場合は、生活科として取り上げる。	高橋　元夫	高橋　元夫
12	中学・高等学校における総合的な学習と学校図書館	中学校と高等学校における総合的な学習と学校図書館のかかわりを検証する。	同　上	同　上
13	特別支援教育と学校図書館	特別な支援を必要とする児童生徒への学習支援も学校図書館の重要な役割である。ここでは、特別支援教育における学校図書館の役割、意義を把握する。そして、優れた実践例を検証し、その全体像を理解できるようにする。	野口　武悟（川村学園女子大学非常勤講師） 平久江　祐司	平久江　祐司
14	教授・学習活動を支援する情報サービス	学校図書館は、児童生徒の学習活動に対しても、教職員の教育活動に対しても、必要な情報を提供している。レファレンスサービスをはじめ、どのような情報サービスが行なわれているかを検証し、児童生徒に対する情報提供で留意すべき点について考える。	堀川　照代	堀川　照代
15	図書館活用教育の課題と展望	印刷教材では、14 回の講義を振り返り、学習指導と学校図書館にかかわる課題をとり出してみることにする。 放送教材では、本講義にかかわった 4 人の教員でそれらの課題について映像資料を見ながら話し合うことにする。	高橋　元夫	高橋　元夫 堀川　照代 平久江　祐司 高鷲　忠美

＝読書と豊かな人間性（‘０４）＝（TV)

〔主任講師：　増田　信一（京都女子大学教授）〕
〔主任講師：　朝比奈　大作（横浜市立大学教授）〕
〔主任講師：　米谷　茂則（明治大学非常勤講師）〕

全体のねらい

学校図書館法の改正に伴い、司書教諭の配置が制度化されたのに対応して、司書教諭の職務内容について解説し指導して、司書教諭の資格を与えるために設定された五つの科目の一つ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	読書活動の意義と目的	読書活動が豊かな人間性を形成する上で重要な意義を持つということを前提に、読書指導の本質を考察する。教科教育と読書指導との違いを意識しながら、適書に出会う機会を作ること、良好な読書環境を作ることなど、具体的な読書指導を行うために必要な学校図書館のあり方を解説する。	朝比奈大作（横浜市立大学教授）	朝比奈大作（横浜市立大学教授）
2	読書能力の発達	読書能力とは言葉（書かれた言葉）から具体的なイメージを喚起する想像力のことで、一定の段階を追って発達していくと考えられる。膨大な統計調査から得られたデータを元に、具体的な読書能力の発達段階について解説し、その発達を刺激しうる指導のあり方を考察する。	同上	同上
3	読書興味の発達	読書能力の発達と相関しながら、読書興味もまた段階を追って発達していく。子どもの読書興味はある年齢までは共通性が高いことも知られている。読書指導の中心が、子どもの読書興味の発達に応じて、読書への動機付けをすることにあるということを前提に、この読書興味の発達段階について解説する。	同上	同上
4	読書の導入的な指導	健全な読書活動を始めさせるために、学校図書館を中心とした読書環境を整え、読書活動の効果的な指導法を考えて、読書することを楽しめるように指導していく具体策を解説する。	米谷　茂則（明治大学非常勤講師）	米谷　茂則（明治大学非常勤講師）
5	読書の展開的な指導	各教科や総合的な学習での調べ学習は、学校図書館における学習の中心的な活動である。児童生徒の自主的な活動を支援するための指導技術の具体的な方法を解説する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	読書の発展的な指導	主体的な読書活動を展開するためには、児童生徒自身の読書目標や読書計画が育っていくことが必要になる。読書によって考える習慣を養う具体的な方法について解説する。	米谷　茂則	米谷　茂則
7	読書の治療的な指導－個人読書を中心に	読書主体である個人に対する適切な指導はどうあればよいのだろうか。特に、不読者や不適応な態度を示す者に対して、それぞれの問題点がどこにあるのか明らかにし、望ましい読書活動を営ませるにはどのようにすればよいのか考察する。	増田　信一（京都女子大学教授）	増田　信一（京都女子大学教授）
8	集団読書と個人別読書	集団読書の方法を身につけ、集団で読書し、集団で思考力を高めていくことによって、各個人が読書することに興味を増し、自分から進んで読書しようとする態度を養い、目的をもって読書に励んでいこうとする習慣を身につける。	増田　信一	増田　信一
9	読書資料の多様化と活用	読書活動の本質は想像力を駆使して感動を求めるというところにあるのだが、現代においてはさまざまなメディアが発達し、子どもたちが感動を求める手だてもさまざまに多様化している。日本人の読書観を再検討し、新しい時代における読書文化の形成について考察する。	朝比奈大作	朝比奈大作
10	図書資料の選択	司書教諭の重要な職務の一つは、読書資料の選択収集である。出版界の実情や問題点を十分に把握し、地域の実態や児童生徒の要望をも踏まえた選択・収集について解説する。	米谷　茂則	米谷　茂則
11	読書体験の表現	読書して感動したことや考えたことをそのままにしておかないで、「自分自身の読み聞かせ」、「読書感想画作り」「ブックディベート」「読書発表会」などをすることによって、読書意欲を高めることによって、読書に対する積極性が高まっていく。	増田　信一	増田　信一
12	読書体験の交流	読書活動を活発にするためには、各種の読書体験の交流の機会を多くして、お互いの発表を認め合うことが大切である。「読書週間」「読書集会」「読書クラブ」「調べ学習の発表」などの発表の機会を、全校的な視野に立って計画的に実施する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	家庭読書との連携	児童生徒の読書活動を発展させ、豊かな人間形成を図っていくためには、家庭や地域との連携が欠かせない。日頃から積極的・継続的な協力関係を築いていく具体的な方法について解説する。	米谷　茂則	米谷　茂則
14	公共図書館などの活用	子どもの読書活動を学校の中だけで豊かにすることはできない。学校外の社会教育施設である公共図書館との連携を図り、卒業後も豊かな読書活動を継続させていく、いわゆる生涯学習活動をも視野に入れて、学校図書館における読書指導のあり方を社会教育との統合という視点で考察する。	朝比奈大作	朝比奈大作
15	環境としての司書教諭	教師主導型の学校教育を、学習者の学習意欲を最優先する教育に変えていくためには、環境としての司書教諭の役割が重要である。物的・人的両面の読書環境面の整備に努め、読書指導や読書相談に取り組まなくてはならない。	増田　信一	増田　信一

＝　情報メディアの活用（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　山本　順一（筑波大学教授）〕
〔主任講師：　村山　　功（静岡大学教授）〕
〔主任講師：　岸田　和明（駿河台大学教授）〕

全体のねらい

学校図書館は、主体的に学習する児童生徒に対して、伝統的な紙媒体資料からデジタル・コンテンツにいたるまで、多種多様な情報メディアに関して、その歴史を踏まえたうえで、それぞれのメディアの特性を認識し、一定の自律的ルールに則り、効果的に利用する技法を身につけさせなければならない。本講義のねらいは、まさにそのような知識と技術の基礎を与えようとするところにある。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	現代生活と情報メディア	わたしたちは、デジカメ機能まで付加されたケータイ（携帯電話）がなければ一日として生きていけないかのような錯覚を持たされている。ケータイが開く情報環境はサイバー・スペースにつながり、生活構造全体が従来とはまったく異なるものに変貌しつつあるとの強迫観念にとりつかれている。	山本　順一(筑波大学教授)	山本　順一(筑波大学教授)
2	情報メディアの歴史	人類社会は言葉と文字を作り出し、様々なコミュニケーション手段を編み出し、科学技術の進展を通じ多様な記録媒体を活用し、情報知識の伝達、共有の仕組みを整備してきた。古代から21世紀の現代にいたるまでの情報メディアの歴史を振り返り、またデジタル情報が飛び交う近未来を展望したい。	山本　順一	山本　順一
3	伝統的情報メディアとデジタルメディア	伝統的情報メディアである書籍は、利便性の向上のために、目次・索引・脚注など、様々な仕組みを作り上げてきた。しかし、デジタルメディアは、それらの工夫を越える利便性を持っている。情報の利用という観点から、伝統的情報メディアとデジタルメディアについて考える。	村山　功（静岡大学教授）	村山　功（静岡大学教授）
4	学習メディアとしての利点と選択	これまでの学校教育では、教科書とわずかな資料を除いて、メディアはあまり利用されてこなかった。しかし、様々なメディアを適切に利用することで、よりよい学習を実現することができる。学習メディアを選択するために必要な、メディアの特性とその利用方法、指導方法について考える。	村山　功	村山　功
5	インターネットのしくみと活用	1990年代に急速に普及したインターネットは、情報資源の検索・利用に欠かせない存在となっている。学校図書館においても、インターネットを活用した、情報の収集・提供が重要である。このようなインターネットの発達の歴史や基本的なしくみ、図書館における活用法について学ぶ。	岸田　和明（駿河台大学教授）	岸田　和明（駿河台大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	データベースの検索と利用	現在、さまざまなデータベースが開発・作成されており、そこから有用な情報を検索・入手することができる。データベースの種類とそれぞれの特徴について整理する。また、データベースを検索するための基本的な原理としくみ、および、検索のプロセスや評価方法を学ぶ。	岸田　和明	岸田　和明
7	ソフトウェアとその利用	コンピュータ上でプログラムやソフトウェアが動作するしくみについて学ぶ。また、学校図書館の場面でよく活用される、ワープロ、表計算、データベース管理、プレゼンテーションのための各ソフトウェアについて、基本的な特徴・使い方を、具体例を交えて説明する。	岸田　和明	岸田　和明
8	自立的学習のための教育用ソフトウェア ↓ 個別学習のための教育用ソフトウェア	学習情報センターとしての学校図書館は、児童・生徒一人一人の学習進度に応じた個別学習の場でもある。個別学習のための教育用ソフトウェアとして、ドリル、チュートリアル、インタラクティブな学習環境を取り上げ、それがどのような学習を支援するかを示し、その効果的な利用方法を論じる。	村山　功	村山　功
9	問題解決学習のための情報探索	いわゆる「調べ学習」のような、児童・生徒が自ら課題を設定・解決していくタイプの学習においては、学校図書館やインターネット等を駆使して、必要な情報を探索することが重要である。そのための方法や、児童・生徒の情報探索行動の性質についての理解を深める。	岸田　和明	岸田　和明
10	インターラクティブ学習環境 ↓ 学びの共同体と協調学習支援環境	個人がメディアから知識を獲得するのは、学習の一つの側面にすぎない。人は仲間との情報交換や討論を繰り返しつつ、自分たちの理解を作り上げていく。このような学習共同体を作り、よりよい学習を支援していくための、協調学習支援環境について紹介する。	村山　功	村山　功
11	校内における学校図書館メディアの選択と構成	学習者を取り巻くメディア環境と比較して、学校図書館にはデジタル・メディアが十分に整備されているとは言えない。これまでの講義で紹介されてきた学習とメディアの関係を踏まえて、これからの社会を生きる児童・生徒にふさわしい学校図書館メディアの選択と構成について考える。	村山　功	村山　功
12	学校図書館と情報技術	情報化社会の進展に伴って、コンピュータおよびそのネットワークを経由して入手可能な情報の種類と量はますます増加することが予想される。このような状況において、学校図書館が情報技術をいかに取り込んで、高度化していくべきかを、情報技術の発展動向を踏まえて考えてみる。	岸田　和明	岸田　和明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	知的財産権と著作権制度の概要	モノの生産が中進国、発展途上国にシフトし、先進諸国は付加価値の源泉である知的財産権に依存する産業構造の高度化に向かう。学校教育においても、知的財産権ルールに対する意識を啓発することが期待され、情報資料とのかかわりでとくに著作権制度の基本的構造について理解する必要がある。	山本　順一	山本　順一
14	デジタル・コピー社会の陥穽	高度情報通信社会は、デジタル・コンテンツのコピーが地球規模で拡散増殖する社会にほかならない。匿名性を備えた非接触型のサイバー・コミュニティには様々な反社会的行為が蔓延し、しかも拡大の様相を呈している。児童生徒はサイバー・スペースにおける人権の意義を認識しなければならない。	山本　順一	山本　順一
15	まとめ：現代学校教育と情報メディア	伝統的メディア、デジタルメディアと拡散する多種多様な情報メディアを一定の自律的なルールに則り、効果的に利用する技法を小学校低学年・中学年・高学年、中学校、高等学校の学習の場でどのように身につけ活用し生かしていくか、その指導体系を考察し、情報の的確な取り扱い方について検討する。	渡部　満彦（大妻女子大学短期大学部教授）	渡部　満彦（大妻女子大学短期大学部教授）

＝成人看護学（‘０５）＝（Ｒ）

〔主任講師：　佐藤　禮子（放送大学教授）〕

全体のねらい

青年期以降およそ50年間に渡る成人期にある人々の、特徴的な健康障害や突発的な危機をもたらす状況についての理解を深め、成人の健康回復・維持の具体的方法ならびに人生途上の死に直面して人生の終末段階を生きる人々への看護について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	成人期の特徴と生じやすい健康問題	人の生涯発達過程における成人期は、思春期から向老期に至る、特徴的な各期から成る。個々に営む生活は、成人期に特有の健康問題と密接に関係している。これらを充分踏まえた上で、成人個別の援助を行うことが重要であり、成人看護の役割・機能や目的にわたって説明する。	佐藤　禮子（放送大学教授）	佐藤　禮子（放送大学教授）
2	手術を受ける患者の治療過程と生活過程での援助	手術療法を受ける患者は、その選択までの意思決定、術前の心身の準備や術後の侵襲からの回復、さらには家庭や社会への復帰、術後の自己管理や定期受診など、治療や生活の過程で多くの課題に直面する。それぞれの時期や患者の状態に応じた援助の内容と方法は多岐にわたるが、これらについて説明する。	井上　智子（東京医科歯科大学教授）	井上　智子（東京医科歯科大学教授）
3	慢性的な経過をたどる健康障害とセルフケア	成人期に発症する病気や受傷による健康障害は、多くの場合慢性に経過する。慢性疾患や障害を受けた患者は、自分で生命の危機を予防したり、療養法を身につけたり、社会資源を求めたり、生活上の調整をしながら病気に対処している。そこで、障害受容、社会復帰、自己管理などのセルフケアについて説明する。	野並　葉子（兵庫県立大学教授）	野並　葉子（兵庫県立大学教授）
4	呼吸機能障害とセルフケア	呼吸機能障害を引き起こす要因および日常生活に及ぼす影響について説明する。また、呼吸機能の検査や呼吸機能障害の治療に伴う看護援助および機能障害によって生じる症状と援助について説明する。さらに、呼吸機能障害が現れる疾患をもつ患者の看護問題と、セルフケアについて説明する。	林　優子（岡山大学教授）	林　優子（岡山大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	循環機能障害に伴う成人への援助	循環機能障害は、生命の危機的状態から日常生活における生活調整の必要性といった様々な健康問題に影響を及ぼす。そこで、循環機能障害に伴う症状や検査・治療に関連する健康問題と合併症の予防のための生活調整に向けた援助について説明する。	野澤　明子（浜松医科大学教授）	野澤　明子（浜松医科大学教授）
6	栄養摂取障害に伴う成人への援助	消化器疾患に伴う栄養摂取障害は、身体の諸機能や心理的側面に影響をもたらし、また「食べる」という生活の営みにも大きな影響を与える。そこで、栄養摂取障害によって生じる症状、必要とされる検査について説明し、さらに消化器外科治療を受ける成人に特有の看護問題とアセスメント方法および患者の取り組みを支援する方法を説明する。	眞嶋　朋子（千葉大学教授）	眞嶋　朋子（千葉大学教授）
7	生体防御機能障害に伴う成人への援助	生体防御機能は、免疫応答に関わる機能と感染・炎症に関わる機能の 2 つに分かれる。この機能障害として、免疫機能低下と感染症に伴う成人への援助を説明する。免疫機能低下に伴う成人への援助では、造血幹細胞移植術時の看護とその倫理的配慮、膠原病などの生活指導を述べる。また、感染症に伴う成人への援助では、疾患と治療の特性を踏まえた感染防御を説明する。	稲吉　光子（北里大学教授）	稲吉　光子（北里大学教授）
8	感覚機能障害に伴う成人への援助	感覚機能の障害は、人間の身体面、心理面に大きな影響をもたらす。また、感覚機能の障害は一見して他者からはわかりにくく、このため様々な心理社会的問題を引き起こす。感覚機能障害がもたらす様々な影響を概説し、機能障害を抱える人々に対するアセスメント方法を説明する。さらに、治療に取り組む人々を援助する方法、および、機能障害と共存する人々を支援する方法を説明する。	佐藤まゆみ（千葉大学助教授）	佐藤まゆみ（千葉大学助教授）
9	糖・脂質代謝障害に伴う成人への療養支援	糖・脂質代謝障害は、生活習慣に起因する疾患の発症や糖尿病や心疾患などの増悪・合併症の出現に大きく関連している。そこで、食生活、喫煙、飲酒、運動、休息といった生活習慣の変容を支援するための生活指導やインスリン自己注射や血糖測定法など療養支援技術について説明する。	野並　葉子（兵庫県立大学教授）	野並　葉子（兵庫県立大学教授）
10	内部環境調節障害に伴う成人への援助	水・電解質の調整やホルモンの分泌調節など内部環境調節障害を引き起こす要因および日常生活に及ぼす影響について説明する。また、水・電解質の調整や調節障害の治療に伴う援助および調節障害によって生じる症状と援助について説明する。さらに内部環境調節障害が現れる疾患を持つ患者の看護問題とセルフケアについて説明する。	林　優子（岡山大学教授）	林　優子（岡山大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
11	認知機能・コミュニケーション障害患者に伴う成人への援助	認知機能やコミュニケーション障害は、日常生活上の困難性や、意欲の低下ならびに社会生活における不安や孤立といった影響をもたらす。そこで、機能障害の原因、機能や能力の評価方法、心理社会的特徴、ならびに患者の能力を最大限に生かす援助について説明する。	野澤　明子（浜松医科大学教授）	野澤　明子（浜松医科大学教授）
12	運動機能障害に伴う成人への援助	運動機能障害は、骨折や先天性異常など様々な原因から発症し、人の「活動と休息」に影響を与える。人の活動性が低下すると心肺機能の低下をはじめ、身体の諸機能に悪影響をもたらす、そこで運動機能障害を抱える人の検査、治療、日常生活上の問題について述べ、これらの人々への援助方法について説明する。	眞嶋　朋子（千葉大学教授）	眞嶋　朋子（千葉大学教授）
13	排便機能障害に伴う成人への援助	日常生活行動としての排便に焦点を当て、消化器疾患、脳卒中、脊髄損傷による排便機能障害に伴う成人への援助について説明する。大腸ファイバースコープによる検査・治療時の援助、人工肛門造設術後の合併症予防と生活指導、および脳卒中や脊髄損傷による排便機能への対応について述べる。また、機能障害の原因となるイレウスの予防と改善についても説明する。	稲吉　光子（北里大学教授）	稲吉　光子（北里大学教授）
14	生殖器疾患と性機能障害に伴う成人への援助	前立腺や精巣、子宮・卵巣などの生殖器の疾患を持つ人々は、その治療過程のみならず治療終了後にも様々な心身の苦痛や生活上の困難に遭遇する。特に生殖器は性行動・性機能を司る重要な機能を有し、その障害はセクシュアリティの障害として広く人々の生活や人生に影響を及ぼす。そこでこれらの人々への援助について説明する。	井上　智子（東京医科歯科大学教授）	井上　智子（東京医科歯科大学教授）
15	がん罹患及び人生の終末期を生きる人への援助	がんに罹患した人は、発生部位や種類などによって異なるが、概ね病名と予後の告知、がん治療、癌と共に生きるといった問題を抱え、援助を必要とする。また、人生途上で死に直面し、終末段階を生きる人には、家族を含んで特別な援助を行う必要がある。以上について説明する。	佐藤　禮子（放送大学教授）	佐藤　禮子（放送大学教授）

＝　老年看護学　（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　正木　治恵（千葉大学教授）〕

全体のねらい

人は老年期までの長い人生を生き抜くものであること、老化により体力、気力が衰えてなお、人間的に豊かに暮らすことができること、看護はそれにいかに応えることができるか、という視点に立ち、高齢者の生命と健康生活を支える看護を実践していくための基本的知識・技術を習得することをねらいとする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	老年期を生きる人々の特徴と老年看護の目標	社会の変化の中で高齢者を捉え、看護する立場から、老年期を生きる人々とその生活を理解する方法について解説する。また、老年看護における対象の特性、ならびに老年看護の目標と基本姿勢について述べる。	正木治恵（千葉大学教授）	正木治恵（千葉大学教授）
2	高齢者保健施策と高齢者ケア施設	高齢者ケアを方向付ける法規として老人福祉法、老人保健法、ゴールドプランを概説する。高齢者ケアを支える諸施設および職種とその役割について述べる。また、高齢者をとりまく社会の変化とそれに対応した看護師の役割を考察する。	勝野とわ子（東京都立保健科学大学教授）	勝野とわ子（東京都立保健科学大学教授）
3	加齢に伴う諸機能の変化と健康生活への支援	高齢者の身体的機能、精神的機能、社会的機能について、加齢に伴う変化の特徴を概説する。高齢者看護の目標とそれを達成するためのヘルスアセスメント方法の原則とポイントを述べる。また、高齢者への効果的なコミュニケーション技術と感覚器（聴覚、視覚など）のアセスメントの重要性について解説する。	同　上	同　上
4	健康生活維持のためのマネジメント	高齢者の健康生活を維持するために必要な事項として、活動と休息のバランス、運動の取り入れ方、高齢者の睡眠の特徴と支援などについて述べる。さらに引きこもりの誘引と弊害、転居の高齢者に及ぼす影響、また、事故を予防する生活環境の調整について説明する。高齢者が安全に生きがいをもって日常生活を営むための支援について説明する。	同　上	同　上
5	生命維持のためのマネジメント１－呼吸・感染管理	高齢者の呼吸機能はどのように低下していくのか、その影響要因は何かについて解説し、呼吸機能のアセスメント方法について述べる。また、高齢者に起こりやすい呼吸障害や感染症、ならびに予防のための方法について述べる。	正木治恵（千葉大学教授）	正木治恵（千葉大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	生命維持のためのマネジメント２－摂食・栄養管理	高齢者の食事摂取がどのように障害されていくか、その影響要因は何かについて解説し、栄養状態、摂食のアセスメント方法について述べる。嚥下障害等障害に応じた栄養摂取と食にまつわる心理・社会的側面を考慮した援助方法について述べる。	清水安子（千葉大学講師）	清水安子（千葉大学講師）
7	生命維持のためのマネジメント３－排泄・皮膚管理	高齢者の排泄（排便・排尿）能力がどのように障害されていくか、その影響要因は何かについて解説し、アセスメント方法と薬物管理を含めた援助方法について述べる。また、高齢者の皮膚とその特徴について解説し、スキンケア、褥瘡対策の方法について述べる。	同上	同上
8	老年期の疾病・治療とリハビリテーション１－身体運動機能	老年期に生じがちな身体運動機能の障害について説明する。またその影響として現れる行動範囲の縮小および、活動性の低下、廃用性変化、転倒・骨折の危険性等に関するアセスメントと看護、および予防について説明する。	酒井郁子（千葉大学大学院助教授）	酒井郁子（千葉大学大学院助教授）
9	老年期の疾病・治療とリハビリテーション２－ADL（日常生活動作）	老年期における ADL と生活意欲の捉え方について述べる。次にいきいきとリハビリテーション取り組むために必要な看護の方法について説明する。	同上	同上
10	老年期の疾病・治療とリハビリテーション３－周手術期	手術を受ける高齢者に特有の、痛みや睡眠障害、せん妄状態などの身体的、精神的課題、ならびにアセスメント方法を説明する。また手術に伴う苦痛を軽減し周手術期を高齢者が乗り越えるための看護の方法について述べる。	同上	同上
11	痴呆性高齢者の理解とケアの変遷	痴呆性高齢者のケアの変遷を説明し、痴呆性高齢者が急増する時代の中で看護師が果たす役割とあるべきケアの方向性を確認する。痴呆性高齢者の全人的ケアを展開していくための基礎として、当事者体験をベースにしながら複合的な障害と潜在力の理解、それらを活かした先進的なケアの実例を紹介する。	永田久美子（高齢者痴呆介護研究研修東京センター主任研究主幹）	永田久美子（高齢者痴呆介護研究研修東京センター主任研究主幹）
12	痴呆性高齢者のケア実践とチームアプローチ	痴呆性高齢者のケアの基盤となる環境作りとコミュニケーション、日常生活支援に関する考え方と技術を説明しながら、現場で遭遇する痴呆性高齢者の課題への取り組み方を示す。あわせて痴呆性高齢者のケアで不可欠なチームアプローチを説明し看護師の活躍例を紹介する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	要介護高齢者と家族の生活支援	要介護高齢者と家族の生活や心情について概説する。そして高齢者と家族を理解することの難しさと重要性を知り、他機関、他職種と協働しながら支援していく援助方法について述べる。	上野まり（神奈川県立保健福祉大学講師）	上野まり（神奈川県立保健福祉大学講師）
14	終末期を迎える高齢者と家族への支援	人生の最終段階を生きる高齢者と看とる家族のQOLや、個々の高齢者やその家族が人生をより豊かに終えることを支援する方法について述べる。また、事例を通して、「老いて死ぬこと」を身近に感じることの意味についても考察する。	同上	同上
15	老年看護学の課題	保健医療制度の変革の中にある高齢者ケアについて、看護師の果たす役割の変化をとらえ、倫理的課題を含む老年看護学の今後の展望について考察する。	正木治恵（千葉大学教授）	正木治恵（千葉大学教授）

＝　小児看護学（‘０５）＝（TV）

〔主 任 講 師：筒井　真優美(日本赤十字看護大学教授) 〕

全体のねらい

近年の子どもと家族を取り巻く社会環境の変化は子どもの心身の健康状態に影響を及ぼし、また医療技術の進歩は多くの子どもの命を救うこととなったが、一方で入院している子ども達の病気は重症化している。

こうした状況の中で、21 世紀をになう子ども達が最善の利益を守られ、健やかに成長発達することができるようにそれぞれの健康レベルに応じた援助について学び、さらに、子どもと家族に対する今後の課題や私達の役割について考える。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	小児看護の動向と看護の役割	子どもと家族が置かれている状況を、社会環境と医療環境から考える。子どもと家族の最善の利益を守るための、小児看護における看護の役割を説明する。	筒井真優美（日本赤十字看護大学教授）	筒井真優美（日本赤十字看護大学教授）
2	乳児と家族	乳児は生理的適応過程にあり、身体機能が著しく成長発達しながら栄養・睡眠・排泄リズムや言語を獲得し、基本的信頼関係を築く過程でもある。この成長発達を育む家族の役割、子どもと家族への支援について説明する。	江本リナ（日本赤十字看護大学講師）	江本リナ（日本赤十字看護大学講師）
3	幼児と家族	幼児期は心身の発達が著しく、基本的生活習慣を習得していくプロセスでもある。運動機能の発達により行動範囲が広がり、認知や言語の発達によりコミュニケーション能力が向上する。この発達プロセスと子どもを育むための家族の役割、子どもと家族への支援について説明する。	筒井真優美	筒井真優美
4	学童・思春期の子どもと家族	学童期は学校生活を中心として友達との関わりの中で達成感や有能感を獲得していく時期である。また、思春期は身体の劇的な成長や性的な変化を体験し、精神的な動揺の大きい時期であるが、その中で自我同一性を模索し、獲得していく。こうした子どもの成長発達の特徴と家族関係の変化について述べる。	飯村直子（日本赤十字看護大学助教授）	飯村直子（日本赤十字看護大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
5	病気や入院が子どもと家族に与える影響とその看護	病気や入院が子どもと家族に与える影響は大きく、様々な因子によって変化する。子どもの発達段階別、入院形態別などによる援助、および面会や付き添いについて説明する。	筒井真優美	筒井真優美
6	急性期にある子どもと家族 その①	急性期疾患を抱える子どもの場合、症状の悪化を防ぎ、安定した状態になることを目指す。そこで、発熱・脱水・呼吸困難・けいれんなど急性期の主な症状とその病態、観察ポイント、症状緩和に対する援助、家族への支援について説明する。また、乳幼児に多くみられる乳幼児突然死症候群についても触れる。	江本　リナ	江本　リナ
7	急性期にある子どもと家族 その②	小児期に発症する主な感染症の特徴、観察ポイント、発症と伝播を防ぐ予防接種について説明し、感染症の子どもと家族への援助について述べる。また、緊急度の把握、受診時の子どもと家族の緊張と不安の軽減に対する援助についても説明する。	江本　リナ	江本　リナ
8	慢性期にある子どもと家族／外来	現在、小児特定慢性疾患治療研究事業の対象となっている疾患は10疾患ある。慢性疾患を抱えながら学校や幼稚園・保育園に通い、地域で生活している子どもの家族に対して必要とされる継続的な援助について説明する。さらに、外来の3つの役割(日常的な疾患への対応、継続的なケアを必要とする子どもへの援助、健康増進活動)について述べる。	飯村　直子	飯村　直子
9	子どもへの説明	子どもが医療を受ける際、説明を受けることで自ら取り組むことが出来るようになる。そのためには、子ども自身が納得して同意すること（ｲﾝﾌｫｰﾑﾄﾞ・ｱｾﾝﾄ）が重要である。ｲﾝﾌｫｰﾑﾄﾞ・ｱｾﾝﾄに必要な子どもの能力、ｱｾﾝﾄの要素、家族や医療者の役割について、説明する。	筒井真優美	筒井真優美
10	先天性の疾患を持つ子どもと家族	子どもの先天性の疾患は、その発生機序にしたがって遺伝子病、染色体異常、胎芽病、胎児病に分けられる。それぞれの代表的な疾患を挙げ、その治療、予後、また、子どもと家族への援助について述べる。	飯村　直子	飯村　直子
11	子どもの手術	子どもの手術の特徴と手術を受ける子どもと家族への援助について述べる。また、近年増加している日帰り手術について説明する。	飯村　直子	飯村　直子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	子どもの事故と救急	不慮の事故は常に乳幼児死亡の原因の上位を占めている。発達段階別に子どもの事故の特徴を概観し、その予防策について述べる。また、気管内異物、誤飲、溺水、熱傷などの際の救急法について説明する。	飯村　直子	飯村　直子
13	障害を持つ子どもと家族／在宅ケア	障害児のなかでも特に、医療的ケアを必要とする長期入院児とその家族が置かれている状況を考え、生活場所の意思決定、在宅に移行するための準備など、退院に向けた支援について説明する。さらに、子どもが成長発達に応じた普通の生活をするために、在宅ケアにおける看護師の役割を説明する。	鈴木真知子（日本赤十字広島看護大学教授）	鈴木真知子（日本赤十字広島看護大学教授）
14	隔離・活動制限／痛み	子ども自身や周囲の人を感染から防ぐために隔離が必要な場合や、治療・検査のために一時的に体動が制限される場合の子どもへの影響と、子どもと家族への支援について説明する。また、子どもが体験する痛み、影響する要因、痛みの客観的評価、痛みの緩和への援助について説明する。	江本　リナ	江本　リナ
15	子どもの死と家族への看護	死にゆく子どもとその子どもを看取る家族にどのような援助が必要かを考える。死に対する子どもの反応や、他人の死を子どもにどのように伝えるかなど、死をめぐる課題を説明する。	筒井真優美	筒井真優美

＝　母性看護学（‘０５）＝（TV）

〔主任講師：　小松　美穂子（茨城県立医療大学副学長）〕

全体のねらい

女性の健康について思春期から老年期までの身体的、心理・社会的変化プロセスからとり上げ、それらの変化にスムーズに適応するための支援について理解を深める。さらに焦点を子どもを生み、育てる時期にある女性と男性・家族に置き、かれらが安全で満足する生活をおくるための健康支援について学ぶ。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	母性看護学の基本的概念	母性看護学を支える主なる概念として母性（女性）の健康観、関連する諸理論を説明し、母性看護の役割とこれからの方向性について考える。具体的にはリプロダクテイブ・ヘルス／ライツ、セクシュアリテイ、セルフケア、家族発達などが主要概念となる。また女性ライフサイクルからみた健康問題や母子の健康上のニーズについて統計指標から説明し、現状の課題について考える。	小松　美穂子（茨城県立医療大学副学長）	小松　美穂子（茨城県立医療大学副学長）
2	女性の健康と保健医療システム	ウィメンズヘルスという概念がどのような経緯で生まれてきたのか、さらにジェンダー概念の導入で、性差医療がクローズアップされようしているが、その中で女性の健康をどのように考えていくべきかを学習する。さらに現在の保健医療システムが女性の健康をカバーするものになっているかを検証しながら、今後の女性特有の保健医療システムあり方を考察する。	吉沢　豊予子（東北大学大学院教授）	吉沢　豊予子（東北大学大学院教授）
3	女性の健康に関する意思決定	インフォームドコンセント等の普及で様々な健康にかかわる場面で、女性たちは意思決定が迫られている。 最初に女性たちの意思決定の特徴について解説する。次に女性たちはどのような場面で意思決定をするのかについて、例えば、子どもを産む、産まないの選択、どのような避妊方法を用いるのかの選択、治療の選択など多々ある。これらを取り上げ女性の意思決定の方法とそれを看護者はどのように支えるか、さらに自ら意思決定する重要性について説明する。	吉沢　豊予子	吉沢　豊予子
4	性と生殖のメカニズム	「性とは何か？」と問われれば、返答に苦慮するほどの意味が含まれているだろう。今回はその「性」に含まれる意味や、ヒトの発生、さらには妊娠成立の前提となる卵子と精子の成熟（いわゆる性周期とホルモン動態）、並びに受胎のメカニズムについて説明する。	佐藤　喜根子（東北大学大学院教授）	佐藤　喜根子（東北大学大学院教授）
5	妊娠期の看護　Ⅰ　妊婦と家族のアセスメント	妊娠は、生理的かつ健康的な現象であるが、妊娠により生じる様々な変化への適応がうまくいかない場合には心身の異常や生活障害、あるいは家族の危機を引き起こす可能性がある。いわば「半健康状態」と捉えられる。妊娠経過は順調か、快適な日常生活を過ごせているか、新たに子どもを迎える家族としての準備は進んでいるか等、妊婦とその家族を理解する上で必要な身体的・社会的アセスメントの視点と具体的方法について説明する。	坂間　伊津美（茨城キリスト教大学助教授） 小松　美穂子	坂間　伊津美（茨城キリスト教大学助教授） 小松　美穂子

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	妊娠期の看護 II 妊婦と家族のケア	妊娠期には、妊婦の多くが家庭で生活している。したがって、外来での健康診査や健康教育は、看護職が妊婦や家族に出会える重要な機会であり、そこでなされる看護は妊婦の健康を方向付けるという意味合いをもつ。「セルフケア」「主体性」をキーワードとしながら、母子と家族が、安全に快適に妊娠期を過ごし、分娩・育児に向けての準備を行えるための看護ケアについて説明する。	坂間　伊津美 小松　美穂子	坂間　伊津美 小松　美穂子
7	出産期の看護 産婦と家族のアセスメントとケア	現在の出産を取り巻く環境は、非常に多岐にわたり、それゆえに出産する産婦のみならず家族の出産に対するニーズも多様化している。出産場所も病院のみならず助産所や自宅へと拡大している。また、高度医療化に伴う分娩管理も行われている。今回は、このような日本の出産事情について広く理解を深めながら、産婦と家族が自分の分娩に満足しながら新しい家族を迎えていくための分娩期の看護について説明する。	跡上　富美 （東北大学大学院助教授）	跡上　富美 （東北大学大学院助教授）
8	産褥期の看護 I 産褥早期（入院中）の褥婦と家族のアセスメントとそのケア	産褥早期の褥婦は、妊娠・出産の経過からの回復過程にあると同時に、新生児に慣れ授乳など育児の方法を獲得するなど多くの項目を学習する過程にある。初産・経産の別や妊娠・出産の経過などの相違から産褥期の褥婦の状況は個々に大きく異なっており、産褥早期の褥婦のケアにあたってはこのような個人差を踏まえた丁寧なアセスメントが必要である。本章では、このような産褥早期の褥婦のアセスメントとケアについて説明する。	成田　伸 （自治医科大学教授）	成田　伸 （自治医科大学教授）
9	産褥期の看護 II 褥婦と家族のケア　家庭での褥婦と家族のアセスメントとそのケア	出産で入院していた施設から退院した子どもと共に退院した褥婦は、家族の協力を得ながら、子どもの育児を自力で行うまでに自立していく。家庭での褥婦と家族のアセスメントにあたっては、褥婦と家族のセルフケア能力を十分アセスメントし、必要なケア計画を立てていく必要がある。また家族の関係性をアセスメントし、母子が家族に十分サポートされているかどうか判断することが必要となる。本章では、このような家庭での褥婦と家族のアセスメントとケアについて説明する。	成田　伸	成田　伸
10	新生児期の看護 I 新生児のアセスメント	新生児は、出生直後から子宮外生活への適応に向けた複雑な過程を開始する。新生児のアセスメントは、看護の重要な機能である。アセスメントの目的は、①健康状態に関する出生前の影響を明らかにし、リスク状態を確認すること、②新生児の基本情報を提供すること、③異常や現在の健康問題または潜在的健康問題を明らかにすること、④新生児への適切な看護ケアを立案し、両親の教育ニーズを明確にすることである。また、アセスメントには、母親の既往歴や妊娠・分娩歴、身体的・行動学的評価が含まれる。ここでは、アセスメントの視点について説明する。	近藤　好枝 （慶應義塾大学助教授）	近藤　好枝 （慶應義塾大学助教授）
11	新生児期の看護 II 新生児のケア	正常新生児のケアの目標は、①子宮内生活から子宮外生活への生理学的適応を支援する、②感染を避けることによって安全な環境を提供する、③両親とのアタッチメントを促進するための機会を提供する、④両親が知識や技術を修得し、新生児のケアに自信がもてるように支援することなどである。ここではそれに加えて、新生児の健康を維持促進するための介入および低出生体重児のケアについても概説する。	近藤　好枝	近藤　好枝

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
12	健康障害のある妊産婦へのケア	かつては母体管理を第一に考え、如何に無事に妊産褥期を過ごさせるかが優先された。しかし最近の医療現場は、超音波診断技術等の進歩により、母体の安全を確保しつつ、胎児に生存のチャンスと可能な限りのQuality of Lifeを与えようと日々努力している。 今回は妊娠期に健康障害として多い切迫流早産を中心に、その他の合併疾患も交えつつ、妊娠初期・中期・末期それぞれに健康障害としてチェックすべき観察ポイントを挙げながら、いかに看護ケアを実施していけばよいかを、具体的に症例を示しながら展開していく。	佐藤　喜根子	佐藤　喜根子
13	不妊と看護	「不妊」は、リプロダクティブヘルスの問題であり、女性だけの問題ではない。しかし、女性は不妊であることや不妊治療に伴い、身体的・心理社会的に多くのストレスを受けているとされる。不妊症の原因、不妊治療の種類を概観し、不妊治療を受ける夫婦の心理および看護の役割について、生殖をめぐる倫理も含め説明する。	森　恵美（千葉大学教授）	森　恵美（千葉大学教授）
14	女性のライフサイクルと健康　I 1）思春期の健康 2）成熟期の健康	14回、15回では一生涯を通じた女性の健康について、各ライフステージにある女性たちの身体的、心理社会的、そして文化的背景を考慮した健康のあり方を考える。思春期は初経から始まり、月経に関する健康問題、栄養に関する健康問題、性に関する健康問題、メンタルな健康問題について、成熟期では月経にまつわるPMS、女性特有の生殖器系の健康問題、性感染症、DVに関する問題、さらに健康問題に女性たちはどのように取り組み、セルフケア力をつけていくのか、看護職はそれをどのように援助するかについて説明する。	吉沢　豊予子	吉沢　豊予子
15	女性のライフサイクルと健康　II 1）更年期の健康 2）老年期の健康	更年期にある女性は身体的に閉経という体験をする。これに伴い今後どのような身体的健康問題を抱えるようになるのか、心理社会的にどのような変化が出てくるのかを学習する。また、それに対し女性たちはどのように対処すべきであるのか、看護職はどのように援助するかについても学習する。次に老年期にある女性の特徴を身体的、心理社会的な側面から学習する。さらに中高年女性の特徴的な健康問題として、骨粗鬆症、尿失禁、生殖系の健康問題、乳がん、メンタルな健康問題についても説明する。	吉沢　豊予子	吉沢　豊予子

＝精神看護学（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　羽山由美子　（大阪府立看護大学教授）〕

全体のねらい

精神看護学とは、対人関係技術を用いて精神を病む人への看護を提供し、また、人々の精神健康の保持増進にかかわる実践分野の学問である。
人々の生活が複雑になるにつれ、精神の病み方も多様な現われをするが、各疾患に共通した看護のあり方を主に理解する。また、精神科医療・保健・福祉の分野は、歴史的な変遷と社会のありように大きく左右される分野であり、最近の動向を踏まえて看護のあり方を探求し、実践能力の向上をはかる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
1	精神看護学の基本概念	精神看護の実践に際して、患者の回復・成長発達にとって人と人との関係性が持つ意味を理解する。 対人関係技術としての観察、コミュニケーション、治療的自己活用、自己概念、防衛／適応機制にについて理解する。	羽山　由美子（大阪府立看護大学教授）	羽山　由美子（大阪府立看護大学教授）
2	精神科医療の歴史と現在の状況	精神科医療・保健・福祉の現状を理解するにあたり、その歴史的変遷を踏まえて、現在の特徴を知る。 看護は、そうした社会状況の中にあって実践されており、患者（障害者）が直面する偏見・スティグマ・苦難への共感とともに、それらの改善を目指す必要性を理解する。	同　上	同　上
3	精神保健福祉法と患者人権擁護	精神科医療・保健・福祉の実践は精神保健福祉法に基づいていることを理解する。法の理念と、それによって医療・看護の提供がどのようになされるのかを学ぶ。とくに、患者の人権保障の精神について理解を深め、看護がはたす人権擁護の役割を学ぶ。	大西　香代子（弘前大学講師）	大西　香代子（弘前大学講師）
4	統合失調症を病む患者の看護	統合失調症の病理と治療について概観し、病いの経過に応じた各時期の看護ケアについて学ぶ。入院時の看護ケアの特徴を理解するとともに、インフォームド・コンセントのあり方も含む。	羽山　由美子	羽山　由美子
5	精神科急性期状態にある患者の看護の特徴	統合失調症を中心に、精神症状が活発な時期の看護ケアについて、ケアプランの各過程の特徴と関わり方、および服薬心理教育と薬物治療の意味について学ぶ。 また、人格障害・神経症性障害についても学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
6	慢性期精神障害者のリハビリテーション看護の特徴	長期入院者（6-7割が統合失調症）の退院・社会復帰にむけての看護支援のあり方について、社会参加、自己決定やノーマライゼーションの概念を手がかりに、病院から地域へのケアを考える。SSTをはじめ、リハビリテーション看護を含む。	上野　恭子（筑波大学講師）	上野　恭子（筑波大学講師）
7	気分障害を病む患者の看護	喪失体験やストレスが重なり、職場や学校でうつ状態が続く人への支援について、また、状態が悪化しうつ病を発症して入院した患者への看護について、とくに薬物治療を支えるうつ病の看護について学ぶ。また、躁うつ病についても含む。	同　上	同　上
8	事例検討による看護ケアの振り返り	事例検討をとおして病棟での看護を振り返り、患者とのどのような関わりが、患者の成長につながるか、また、どのような医療チームの組み方が有効かを考える。（看護職の支えあい方についてを含む。）	伊藤　ひろ子（宮城大学教授）	伊藤　ひろ子（宮城大学教授）
9	エスノグラフィーを通してみた看護の実践	入院患者と看護者との日々の実践におけるかかわりを、エスノグラフィーによる記述をとおして描出し、それによって得られた精神看護の特徴を理解する。	松澤　和正（国際医療福祉大学助教授） 羽山由美子	松澤　和正（国際医療福祉大学助教授） 羽山由美子
10	精神障害者当事者活動と看護のかかわり方	精神障害者の社会復帰と地域ケアにおいて、当事者活動を理解することは支援のまずは第一歩である。1960年代より家族会をはじめとする家族当事者活動、そして80年代後半以降の障害者自身による当事者活動が発展してきた経緯を学び、看護者は当事者とどのようにかかわることが求められているかを学ぶ。	羽山　由美子	羽山　由美子 ｹﾞｽﾄ: 小金沢　正治（東京都精神障害者連合会）
11	地域ケアの場における看護者と当事者の向き合い方	地域の社会復帰施設で,看護者はどのような役割を担っているか、とくに当事者との向き合い方の実践例をとおして、看護が担う地域ケアの特徴を理解する。 生活支援センター、クラブハウスなどでの看護の役割についてを含む。	伊藤　ひろ子	伊藤　ひろ子
12	地域ケアのあり方と精神科訪問看護	保健所からの訪問、退院後アフターケアとしての病院からの訪問看護、また看護職・介護職が提供する訪問活動など、さまざまな精神科訪問看護のあり方を理解し、その実践例について学ぶ。	羽山由美子	羽山　由美子 ｹﾞｽﾄ: 千葉　信子（訪問介護ｽﾃｰｼｮﾝたんぽぽ所長）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
13	精神看護の新たなる分野:リエゾン精神看護	精神看護の知識・技術を応用して、総合病院に入院する患者のさまざまな心理的問題を扱うリエゾン精神看護の役割について学ぶ。また、がんなどの慢性疾患およびターミナル期の患者へのケアについても含む。	羽山　由美子	羽山　由美子
14	精神看護の新たなる分野:司法精神看護	2003年度に法案が成立し、いよいよわが国でも本格的に司法精神医療が実践の緒に就く。専門病棟の看護管理と看護ケア、退院にむけての準備や退院後のフォローアップなど,欧米での知見を活用しながら日本での実践のあり方について学ぶ。	同　上	同　上
15	諸外国の精神看護事情と最近の研究動向	英米を中心に、北欧やその他アジアの国々の精神科医療と看護を概観し、日本における今後の課題について考える。精神看護学の理論・研究動向について含む。	同　上	同　上

この冊子に掲載した平成17年度新規開設科目の講義内容は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。

なお、放送大学ホームページに掲載されている講義内容については、最新の内容にリアルタイムで更新しております。

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています